

八 幡 山 遺 跡  
八 幡 山 南 遺 跡  
八 幡 山 円 明 寺 跡  
尾 崎 遺 跡  
中 町 B 遺 跡  
穴 が 盗 遺 跡  
穴 が 盗 古 墳 跡  
今 岡 D 遺 跡  
今 岡 中 山 遺 跡  
今 岡 古 墳 群 跡  
高 岡 遺 跡

中国横断自動車道姫路鳥取線  
(鳥取自動車道)建設に伴う発掘調査

(第1分冊)

2008

国土交通省岡山国道事務所  
岡山県教育委員会



調査地遠景（南上空から）（1区・2区の写真を合成）



1 竪穴住居5 炭化材検出状況（南から）



C 8

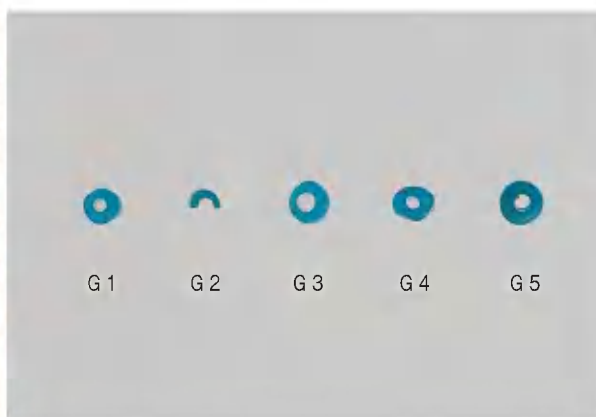
2 竪穴住居5 出土焼土塊



3 竪穴住居5 中央穴検出状況（西から）



4 竪穴住居5 中央穴断面（南から）



5 ガラス小玉



1 製鉄関連遺構（東から）



2 製鉄関連遺構（南から）



3 製鉄関連遺物



S 24

1 神子柴型石斧



2 土器棺



1 焼塩土器



2 丹塗り土師器



3 陰刻宝相華文緑釉陶器



4 石帯



道路遺構（南から）



1 調査地遠景（南上空から）



2 道路遺構（北から）





1 波板状凹凸面（北西から）



2 竪穴住居出土弥生土器



1 調査地遠景（北西上空から）



2 調査地全景（上空から、上が北）



1 竪穴住居5 炭化材検出状況（西から）



2 竪穴住居5 炭化植物検出状況（西から）



3 竪穴住居5 炭化材除去後（西から）



4 竪穴住居5 土器出土状況（南西から）



5 竪穴住居5 中央穴断面（西から）



1 B群出土生駒西麓産弥生土器



2 B群出土管玉



3 竪穴住居5出土弥生土器



4 土壙2 (南から)



5 土壙2出土弥生土器



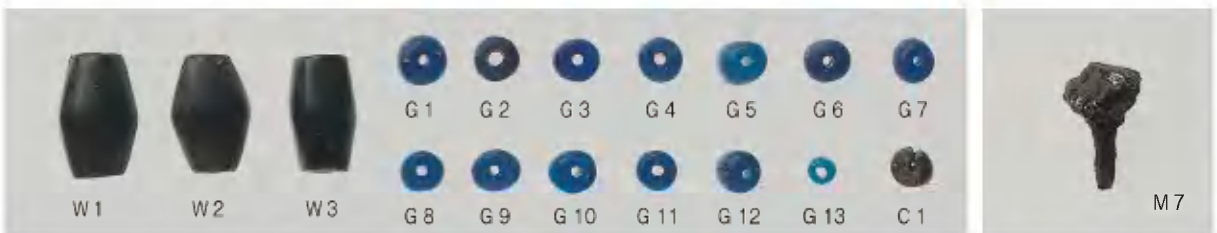
穴が途古墳と眼下を南流する吉野川（北東から）



1 銀装円頭大刀出土状況（南から）



2 銀装円頭大刀



3 装身具

4 銀被鉄鉞



1 段状遺構 5 弥生土器出土状況



2 段状遺構 5 出土弥生土器

# 序

兵庫県姫路市を起点とし、鳥取県鳥取市に至る高速自動車国道、中国横断自動車道姫路鳥取線は、山陽と山陰を繋ぐのみならず、中国山地沿いの地域を山陽自動車道、中国自動車道と連結しながら一体的に結ぶ重要な路線の1つと言えます。その目的は輸送時間の短縮や沿線地域の産業、経済、生活、文化の発展を図ることにあります。

高速道路が経由する岡山県北東部には多くの文化財が存在しており、工事予定の路線内もその例外ではなく、岡山県教育委員会と協議を重ねた結果、建設により破壊を免れない遺跡が存在することが分かりました。そのため建設の影響を受ける遺跡部分について、発掘調査を委託したところです。

この度の発掘調査によって、弥生時代の集落跡や古墳、古代の道路遺構や中世の集落跡、近世の寺院跡など、各時代の生活の痕跡、そして貴重な遺物が数多く発見されました。

発掘調査の貴重な記録である本書が、埋蔵文化財に対する認識と理解を深める一助となり、また、学術・文化等のために広く活用されることを心から期待いたします。

最後に、発掘調査ならびに本書の作成、編集にあられた岡山県教育委員会をはじめとする関係各位のご尽力に対し、深甚なる謝意を表します。

平成20年3月

国土交通省中国地方整備局岡山国道事務所  
所 長 長 谷 川 朋 弘



# 序

本報告書には、美作市（旧大原町）古町に所在する八幡山遺跡・八幡山南遺跡・八幡山円明寺跡・尾崎遺跡、同市中町に所在する中町B遺跡、同市今岡に所在する穴が辻遺跡・穴が辻古墳・今岡D遺跡・今岡中山遺跡・今岡古墳群、同市宮本に所在する高岡遺跡の発掘調査結果を収載しました。

この調査は、兵庫県姫路市と鳥取県鳥取市とを結ぶ高速自動車国道中国横断自動車道姫路鳥取線建設工事に伴い、平成16年度から3年間にわたって実施いたしました。岡山県教育委員会では、平成5年度から計画路線内の埋蔵文化財の取り扱いについて、日本道路公団中国支社津山工事事務所と調整・協議を重ねてまいりましたが、設計の変更などが困難なところについては、やむなく記録保存のための発掘調査を行うことになりました。

美作市古町・中町・今岡の各町は、いずれも岡山県の北東部、岡山県三大河川の一つである吉井川に、南流して合流する吉野川流域に位置し、旧大原町の中心部に所在します。

この地は、岡山市からは80kmとやや離れていますが、兵庫県播磨地域の中心都市である姫路市や鳥取県鳥取市までは、それぞれ40～50kmの近い距離にあり、古来から山陽と山陰を結ぶ交通の要衝となっております。

本書に掲載した中町B遺跡では、古代の官道である因幡道の遺構が初めて発見されました。また、八幡山遺跡、尾崎遺跡、穴が辻遺跡、今岡D遺跡、今岡中山遺跡、高岡遺跡などで、弥生時代の集落跡の調査を実施しました。穴が辻古墳や今岡古墳群では、5世紀から7世紀まで断続的に営まれた古墳の調査を実施し、穴が辻古墳からは銀装大刀が見つかるなど多くの成果を挙げることができました。尾崎遺跡では古代の公的施設の可能性が考えられる建物群を検出し、中町B遺跡の古代道路遺構との関連が注目されます。

この報告書が学術研究に寄与できるばかりでなく、文化財の保護・保存のために活用され、また地域の歴史研究の資料として広く役立つならば幸いと存じます。

最後に、発掘調査ならびに報告書の作成にあたり、日本道路公団中国支社津山工事事務所、国土交通省岡山国道事務所、旧大原町教育委員会、美作市教育委員会をはじめ、関係各位ならびに地元の方々から賜りました多大な御指導と御協力に対し厚くお礼申し上げます。

平成20年3月

岡山県古代吉備文化財センター  
所長 高畑 知功

# 例 言

- 1 本書は、岡山県教育委員会が中国横断自動車道姫路鳥取線（鳥取自動車道）建設に伴い、日本道路公団と岡山県の委託契約に基づき実施した、八幡山遺跡・八幡山南遺跡・八幡山円明寺跡・尾崎遺跡・中町B遺跡・穴が辻遺跡・穴が辻古墳・今岡D遺跡・今岡中山遺跡・今岡古墳群・高岡遺跡の発掘調査の報告書である。契約事項は県教育委員会文化財課が行い、発掘調査および報告書作成は岡山県古代吉備文化財センターが実施した。なお、調査の時点で「八幡山南遺跡・北地区」、「八幡山南遺跡・南地区」、「八幡B遺跡」と称した遺跡は、報告書の作成に際して実状に沿う形にそれぞれ「八幡山遺跡」、「八幡山南遺跡」、「八幡山円明寺跡」と遺跡名を変更した。また、今岡D遺跡、今岡中山遺跡で検出した古墳は、周知されていた今岡古墳群の範囲内に収まることから「今岡古墳群」として報告した。
- 2 八幡山遺跡・八幡山南遺跡・八幡山円明寺跡・尾崎遺跡は岡山県美作市古町（旧英田郡大原町古町）に、中町B遺跡は美作市中町（旧英田郡大原町中町）に、穴が辻遺跡・穴が辻古墳・今岡D遺跡・今岡中山遺跡・今岡古墳群は美作市今岡（旧英田郡大原町今岡）に、高岡遺跡は美作市宮本（旧英田郡大原町宮本）に所在する。
- 3 確認調査は平成15年度に行い、本発掘調査は平成16～18年度に行った。確認調査の担当は大橋雅也・小林利晴の2名で、本調査の担当は福田正継・井上弘・浅倉秀昭・岡本寛久・内藤善史・弘田和司・澤山孝之・氏平昭則・物部茂樹・岡本泰典・小嶋善邦・重根弘和・米田克彦・上梶武・石田爲成・山崎孝盛・上西高登の17名で、調査面積は24,115㎡である。
- 4 発掘調査および報告書作成にあたっては、岡山県文化財保護審議会委員の高橋護、狩野久の両先生より有益な御指導と御助言をいただいた。記して深く感謝の意を表する次第である。
- 5 発掘調査にあたっては、専門研究者から有益な御指導と御助言をいただいた。記して深く感謝の意を表する次第である。

中町B遺跡の道路遺構	高橋美久二（滋賀県立大学）
	木本雅康（長崎外国語大学）
穴が辻古墳	新納 泉（岡山大学）

- 6 報告書の作成作業は、岡山県古代吉備文化財センターにて実施した。担当者は以下の通り。  
平成16年度：福田・内藤・岡本泰・米田・石田・山崎  
平成17年度：福田・浅倉・井上・弘田・澤山・重根・上梶・石田  
平成18年度：福田・岡本寛・浅倉・氏平・物部・小嶋・上梶・上西  
平成19年度：福田・上梶
- 7 特殊な遺物および自然科学分野における鑑定、同定、分析などについては、下記の諸氏・機関に依頼し、有益な教示を得るとともに一部成果については報告文を掲載させていただいた。  
鉄滓分析 大澤 正己・鈴木瑞穂（(株)九州テクノリサーチ・TACセンター）  
火葬人骨鑑定 松下 孝幸（土井ヶ浜遺跡・人類学ミュージアム）  
土器の胎土分析 白石 純（岡山理科大学自然科学研究所）

破鏡鑑定	田崎 博之 (愛媛大学)
焼塩土器鑑定	大久保徹也 (徳島文理大学)
西播磨産須恵器鑑定	森内 秀造 (兵庫県立考古博物館)
石製品・石材鑑定	鈴木 茂之 (岡山大学)
土壌分析	(株) パリノ・サーヴェイ
放射性炭素年代測定	(株) パリノ・サーヴェイ
樹種鑑定	(株) パリノ・サーヴェイ

8 本書の執筆は、福田・浅倉・岡本寛・内藤・弘田・澤山・氏平・物部・岡本泰・小嶋・重根・米田・上梶・石田・山崎・上西が行い、文末に文責を記した。なお、各章の編集担当は以下の通りである。

第1章 地理的・歴史的環境	福田
第2章 調査の経緯と経過	上梶
第3章 八幡山遺跡	物部
第4章 八幡山南遺跡	米田
第5章 八幡山円明寺跡	米田
第6章 尾崎遺跡	上梶
第7章 中町B遺跡	岡本泰・石田
第8章 穴が谷遺跡	物部
第9章 穴が谷古墳	上梶
第10章 今岡D遺跡	弘田・上梶
第11章 今岡中山遺跡	米田
第12章 今岡古墳群	弘田・上梶
第13章 高岡遺跡	福田
第14章 まとめ	上梶

全体編集は上梶が行った。

9 遺物の写真撮影については、江尻泰幸氏の協力と援助を得た。

10 出土遺物および図面、写真等は、岡山県古代吉備文化財センター（岡山市西花尻1325-3）に保管している。

# 凡 例

- 1 本報告書に用いた高度値は海拔高である。
- 2 各遺跡のグリッドは、国土座標に準拠し、各遺構図における方位は平面直角座標系Vである。平成17年度以降調査の遺跡については、世界測地系の座標を用いている。
- 3 本報告書収載の遺構および遺物の縮尺は、次のとおり統一しているが、例外については挿図に縮尺率を図示または明記している。

## 遺構

竪穴住居 1/60 段状遺構 1/60 掘立柱建物 1/60・1/100 土壇 1/30  
柱穴列 1/60 溝断面図 1/30 火葬墓 1/20 土器棺 1/20  
墳丘測量図 1/150 墳丘断面図 1/60 石室 1/60 主体部 1/30

## 遺物

土器 1/4 陶磁器 1/4 瓦 1/4 埴輪 1/4 土製品 1/2・1/3  
石器 1/2・1/3 金属器 1/2・1/3 玉類 1/1

- 4 本報告書の挿図番号、表番号、図版番号は連続番号であるが、遺構番号、遺物番号は遺跡ごとの連番である。
- 5 遺構配置図などにおける遺構名は、次のとおり省略している。

竪穴住居：「住」 段状遺構：「段」 掘立柱建物：「建」 柱穴列：「列」 土壇：「土」  
土器溜まり：「溜」 土壇墓：「墓」 火葬墓：「火」 土器棺：「棺」 焼土面：「焼」  
炭溜まり：「炭」 集石：「集」 石組：「組」 近世墓：「近」

- 6 遺物番号には、材質を示すため、土器以外のものについては略号を番号の前に付した。

石器：S 土製品：C 金属器：M ガラス製品：G 木製品：W

- 7 土器実測図のうち、中軸線の左右に白抜きのあるものは、復元口径の不確実なものである。
- 8 本報告書の挿図中の被熱範囲等に付したトーンなどは、基本的に次のとおりに統一している。



- 9 土層断面図などに使用した土色は、各調査員の記述に従った。
- 10 本報告書第2図は、国土地理院発行の1/25,000地形図「古町」・「佐用」を、第4図は同じく1/50,000地形図「坂根」・「佐用」を複製・加筆して縮小したものである。
- 11 図版のうち遺物写真に付した番号は、挿図の遺物番号と一致する。
- 12 本報告書に用いた時代、時期区分は統一していない。一般的な政治史区分に準拠し、それを補うために世紀などを併用している。また、弥生時代後期の時期区分には、「百間川原尾島遺跡1」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』39 の土器編年に基づいている。

# 目 次

(第1分冊)

巻頭図版

序

例 言

凡 例

目 次

第1章 地理的・歴史的環境	1
第2章 調査の経緯と経過	7
第1節 発掘調査に至る経緯	7
第2節 発掘調査の経過	8
第3節 報告書の作成	11
第3章 八幡山遺跡	15
第1節 調査の概要	15
第2節 弥生時代以前の遺構	17
1 概要	17
2 土壌	17
第3節 弥生時代から古墳時代初頭の遺構・遺物	19
1 概要	19
2 円形竪穴住居	21
3 方形竪穴住居・段状遺構・土壌など	32
4 遺構に伴わない遺物	66
第4節 古代以降の遺構・遺物	71
1 概要	71
2 火葬墓	71
3 土壌	72
4 溝	73
5 平坦面	75
6 谷	76
7 遺構に伴わない遺物	76
第5節 小結	77
第4章 八幡山南遺跡	79
第1節 遺跡の概要	79
第2節 弥生時代の遺構・遺物	80
1 概要	80

2	段状遺構	80
3	土壌	83
4	遺構に伴わない遺物	83
第3節	古代以降の遺構・遺物	84
1	概要	84
2	製鉄関連遺構	84
3	掘立柱建物	86
4	遺構に伴わない遺物	87
第4節	小結	88
第5章	八幡山円明寺跡	89
第1節	遺跡の概要	89
第2節	中世の遺構・遺物	91
1	概要	91
2	土壌	91
第3節	近世（八幡山円明寺跡）の遺構・遺物	92
1	概要	92
2	掘立柱建物	92
3	土壌	93
4	池状遺構	94
5	溝	95
6	集石	97
7	柱穴出土遺物	97
8	遺構に伴わない遺物	97
第4節	小結	99
第6章	尾崎遺跡	105
第1節	調査の方法	105
第2節	縄文時代の遺物	107
1	概要	107
2	遺構に伴わない遺物	111
第3節	弥生時代の遺構・遺物	119
1	概要	119
2	竪穴住居	123
3	土壌	126
4	溝	128
5	下がり	128
6	遺構に伴わない遺物	129
第4節	古墳時代の遺構・遺物	132
1	概要	132

2	豎穴住居	135
3	土壇	139
4	土器溜まり	139
5	古墳	140
6	遺構に伴わない遺物	140
第5節	古代の遺構・遺物	141
1	概要	141
2	掘立柱建物	146
3	柱穴列	165
4	火葬墓	167
5	土器棺	167
6	土壇	170
7	炉	172
8	焼土面	173
9	炭溜まり	174
10	溝	174
11	たわみ	175
12	集石	176
13	その他の遺構出土遺物	176
14	遺構に伴わない遺物	178
第6節	中世の遺構・遺物	188
1	概要	188
2	掘立柱建物	193
3	柱穴列	209
4	土壇墓	215
5	土壇	216
6	溝	217
7	石組	218
8	柱穴出土遺物	219
9	遺構に伴わない遺物	219
第7節	小結	226
第7章	中町B遺跡	227
第1節	遺跡の概要	227
第2節	古墳時代以前の遺構・遺物	231
1	概要	231
2	豎穴住居	232
3	土壇	237
4	溝	237

5	その他の遺構・遺物	238
6	遺構に伴わない遺物	241
第3節	古代の遺構・遺物	243
1	概要	243
2	道路遺構	246
3	溝	252
4	遺構に伴わない遺物	252
第4節	中・近世の遺構・遺物	253
1	概要	253
2	掘立柱建物	256
3	土壌	257
4	遺構に伴わない遺物	259
第5節	小結	268
第8章	穴が途遺跡	269
第1節	遺跡の概要	269
第2節	弥生時代の遺構・遺物	271
1	概要	271
2	円形竪穴住居	272
3	方形竪穴住居・掘立柱建物・段状遺構	279
4	土壌	300
5	遺構に伴わない遺物	302
第3節	その他の時期の遺構・遺物	303
1	概要	303
2	土壌	303
3	遺構に伴わない遺物	304
第4節	小結	306
第9章	穴が途古墳	307
第1節	遺跡の概要	307
第2節	墳丘	309
1	墳丘	309
2	石列	313
第3節	主体部	314
1	掘り方	314
2	閉塞施設	314
3	横穴式石室	316
4	遺物出土状況	318
第4節	古墳出土遺物	320
1	須恵器	320



2	装身具	320
3	銀装円頭大刀	322
4	鉄刀・刀子・馬具	325
5	鉄鍬	326
第5節	土壙墓	327
第6節	遺構に伴わない遺物	327
第7節	小結	328
第10章	今岡D遺跡	331
第1節	遺跡の概要	331
第2節	弥生時代の遺構・遺物	331
1	概要	331
2	竪穴住居	331
3	段状遺構	341
4	掘立柱建物	346
5	柱穴列	347
6	土壙	348
7	遺構に伴わない遺物	349
第3節	古墳時代以降の遺構・遺物	350
1	概要	350
2	土壙	350
3	溝	353
4	遺構に伴わない遺物	353
第4節	その他の時期の遺構	354
1	土壙	354
第5節	小結	355
第11章	今岡中山遺跡	356
第1節	遺跡の概要	356
第2節	弥生時代の遺構・遺物	358
1	概要	358
2	竪穴住居	358
3	段状遺構	363
4	土壙	376
第3節	古代以降の遺構・遺物	377
1	竪穴住居	377
2	その他の遺構	378
3	遺構に伴わない遺物	380
第4節	小結	381
第12章	今岡古墳群	382

第1節	遺跡の概要	382
第2節	確認調査（今岡中山丘陵）	383
1	今岡2号墳	383
2	今岡5号墳	384
第3節	今岡中山丘陵	385
1	概要	385
2	今岡7号墳	385
3	今岡8号墳	389
第4節	今岡D丘陵	390
1	概要	390
2	今岡9号墳	391
3	今岡10号墳	392
4	今岡11号墳	396
5	今岡12号墳	400
6	土壙墓	405
第5節	小結	407
第13章	高岡遺跡	408
第1節	遺跡の概要	408
第2節	弥生時代の遺構・遺物	409
1	竪穴住居	409
2	段状遺構	415
3	土壙	420
第3節	小結	426
(第2分冊)		
第14章	まとめ	427
第1節	大原地区の縄文時代	427
第2節	弥生時代の集落	431
第3節	大原地区の弥生土器について	434
第4節	今岡中山遺跡の器台について	437
第5節	尾崎遺跡出土の破鏡	441
第6節	穴が谷古墳出土銀装円頭大刀の構造的特質	443
第7節	穴が谷古墳構築過程の復元	448
第8節	大原地区の古代	455
第9節	中町B遺跡で検出された道路遺構について	459
第10節	古代の焼塩関連遺構・遺物について	463
遺構一覧表・遺物観察表・遺構新旧対照表		467
付載	自然科学的分析	517
1	八幡山遺跡出土鉄滓の金属学的調査	大澤正己・鈴木瑞穂 517

2	八幡山南遺跡出土鉄滓の金属学的調査	大澤正己・鈴木瑞穂 …	523
3	岡山県美作市八幡山遺跡出土の平安時代火葬骨	松下孝幸 ……………	529
4	中国横断自動車道姫路鳥取線関連遺跡出土土器の胎土分析	白石 純 ……………	535

写真図版

報告書抄録

## 挿 図 目 次

第1章 地理的・歴史的環境		第27図 段状遺構2・3 (1/60)	
第1図 遺跡位置図 (1/1,500,000) ……………	1	・段状遺構3出土遺物 (1/4・1/2) ……………	33
第2図 周辺遺跡分布図 (1/50,000) ……………	2	第28図 P1出土遺物 (1/2) ……………	33
第3図 中町C遺跡出土遺物 (1/4) ……………	4	第29図 B群遺構配置図 (1/150) ……………	34
第2章 調査の経緯と経過		第30図 段状遺構4～6 (1/60)・出土遺物 (1/4) ……………	35
第4図 鳥取自動車道予定路線図 (1/50,000) ……………	7	第31図 段状遺構7 (1/60)・出土遺物 (1/4) ……………	36
第3章 八幡山遺跡		第32図 段状遺構8・9 (1/60)・P3出土遺物 (1/4) ……	36
第5図 調査区位置図 (1/2,000) ……………	15	第33図 段状遺構10～14 (1/60)	
第6図 遺構全体図 (1/500) ……………	16	・段状遺構10出土遺物 (1/4) ……………	37
第7図 弥生時代以前の遺構配置図 (1/600) ……………	17	第34図 C群遺構配置図 (1/150) ……………	37
第8図 土壌1 (1/30) ……………	18	第35図 段状遺構15 (1/60)・出土遺物 (1/2) ……………	38
第9図 土壌2 (1/30) ……………	18	第36図 段状遺構16 (1/60) ……………	38
第10図 土壌3 (1/30) ……………	18	第37図 土壌4 (1/40) ……………	39
第11図 弥生時代遺構群分け図 (1/600) ……………	19	第38図 D群遺構配置図 (1/150) ……………	39
第12図 弥生時代遺構配置図 (1/400) ……………	20	第39図 D群前後関係 (1/300) ……………	40
第13図 竪穴住居1 (1/60) ……………	21	第40図 段状遺構18・21出土遺物 (1/4・1/2) ……………	40
第14図 竪穴住居1出土遺物 (1/4・1/3・1/2) ……………	22	第41図 段状遺構17～22 (1/60) ……………	41
第15図 竪穴住居2 (1/60) ……………	22	第42図 段状遺構23・24 (1/60)・出土遺物 (1/4・1/2) ……	42
第16図 竪穴住居3 (1/60) ……………	23	第43図 E群遺構配置図 (1/150) ……………	43
第17図 竪穴住居3断面 (1/60)・出土遺物 (1/4・1/3) ……	24	第44図 段状遺構25～27 (1/60)・出土遺物 (1/4・1/3) ……	44
第18図 竪穴住居3出土遺物 (1/3・1/2) ……………	25	第45図 柱穴群1・段状遺構28～30 (1/60)	
第19図 竪穴住居4 (1/60・1/30) ……………	26	・段状遺構30出土遺物 (1/4) ……………	45
第20図 竪穴住居4出土遺物 (1/10・1/4・1/3・1/1) ……	27	第46図 段状遺構31・32 (1/60) ……………	46
第21図 竪穴住居5 (1/60・1/30)・出土遺物 (1/4・1/3・1/2) ……	28	第47図 段状遺構33～35 (1/60) ……………	46
第22図 竪穴住居6 (1/60)・P1・3 (1/30) ……………	29	第48図 F群遺構配置図 (1/150) ……………	47
第23図 竪穴住居6出土遺物 (1/4・1/3) ……………	30	第49図 段状遺構36～38 (1/60)・出土遺物 (1/4) ……………	47
第24図 竪穴住居7 (1/60・1/30)・出土遺物 (1/4) ……………	31	第50図 竪穴住居8 (1/60)・出土遺物 (1/4・1/3・1/2) ……	48
第25図 A群遺構配置図 (1/150) ……………	32	第51図 段状遺構39・40 (1/60)・出土遺物 (1/4) ……………	49
第26図 段状遺構1 (1/60)・出土遺物 (1/4) ……………	32	第52図 段状遺構41 (1/60)・出土遺物 (1/4) ……………	49

第53図	G群遺構配置図 (1/150) ……………	50	第88図	遺構に伴わない遺物③ (1/4) ……………	69
第54図	竪穴住居9 (1/60) ……………	50	第89図	遺構に伴わない遺物④ (1/4・1/3・1/2) ……………	70
第55図	竪穴住居10 (1/60) ……………	51	第90図	古代以降遺構配置図 (1/500) ……………	71
第56図	竪穴住居11 (1/60) ……………	51	第91図	火葬墓 (1/20)・出土遺物 (1/4) ……………	72
第57図	竪穴住居12 (1/60) ……………	52	第92図	土壇11 (1/30) ……………	72
第58図	竪穴住居13 (1/60) ……………	52	第93図	土壇12 (1/40) ……………	72
第59図	竪穴住居13出土遺物 (1/4) ……………	53	第94図	溝1～6 (1/30)・出土遺物 (1/4) ……………	73
第60図	竪穴住居14 (1/60)・出土遺物 (1/4) ……………	53	第95図	溝1出土遺物 (1/3) ……………	73
第61図	杭列 (1/60)・出土遺物 (1/2) ……………	53	第96図	溝7 (1/30)・出土遺物 (1/3) ……………	74
第62図	段状遺構42・43 (1/60)・土壇5 (1/30) ・出土遺物 (1/10・1/4) ……………	54	第97図	平坦面1～3・溝7 (1/200) ……………	74
第63図	段状遺構44 (1/60) ……………	55	第98図	谷堆積土層 (1/100) ……………	75
第64図	段状遺構45～47 (1/60)・土壇6断面 (1/30) ・段状遺構46出土遺物 (1/4) ……………	56	第99図	遺構に伴わない遺物 (1/4・1/3・1/2・1/1) ……………	76
第65図	段状遺構48・49 (1/60) ……………	56	第100図	八幡山遺跡変遷図 (1/800) ……………	77
第66図	H群遺構配置図 (1/150) ……………	57	第101図	安山岩剥片 (1/4) ……………	78
第67図	段状遺構50 (1/60) ……………	57	<b>第4章 八幡山南遺跡</b>		
第68図	段状遺構51 (1/60)・出土遺物 (1/4) ……………	57	第102図	調査地位置図 (1/1,500) ……………	79
第69図	土壇7 (1/30)・出土遺物 (1/4) ……………	57	第103図	遺構全体図 (1/250) ……………	79
第70図	段状遺構52・53・柱穴列 (1/60) ……………	58	第104図	土層断面図① (1/80) ……………	80
第71図	柱穴列出土遺物 (1/4・1/1) ……………	59	第105図	土層断面図② (1/80) ……………	80
第72図	I群遺構配置図 (1/150) ……………	59	第106図	段状遺構1～5 (1/80) ……………	81
第73図	段状遺構54 (1/60)・出土遺物 (1/4) ……………	59	第107図	段状遺構4出土遺物 (1/4) ……………	81
第74図	段状遺構55 (1/60)・出土遺物 (1/4) ……………	60	第108図	段状遺構5 (1/80)・遺物出土状況 (1/30) ・出土遺物 (1/4・1/3) ……………	82
第75図	段状遺構56 (1/60) ……………	60	第109図	土壇1 (1/30)・出土遺物 (1/4) ……………	82
第76図	J群遺構配置図 (1/150) ……………	60	第110図	土壇2～4 (1/30)・出土遺物 (1/4) ……………	83
第77図	柱穴群2 (1/60) ……………	61	第111図	遺構に伴わない遺物 (1/4) ……………	83
第78図	段状遺構57・58 (1/60) ・段状遺構57出土遺物 (1/4) ……………	62	第112図	製鉄関連遺構・掘立柱建物1・2 (1/80) ・出土遺物 (1/4) ……………	84
第79図	土壇8～10 (1/30) ……………	62	第113図	製鉄関連遺構 (1/30) ……………	85
第80図	K群遺構配置図 (1/150)・P7出土遺物 (1/4) ……………	63	第114図	製鉄関連遺構出土遺物 (1/3) ……………	85
第81図	段状遺構59 (1/60)・出土遺物 (1/4) ……………	64	第115図	掘立柱建物1 (1/60) ……………	86
第82図	段状遺構60 (1/60)・出土遺物 (1/4) ……………	64	第116図	掘立柱建物2 (1/60) ……………	87
第83図	段状遺構61 (1/60)・出土遺物 (1/4) ……………	65	第117図	遺構に伴わない遺物 (1/4) ……………	87
第84図	段状遺構62 (1/60) ……………	66	<b>第5章 八幡山円明寺跡</b>		
第85図	段状遺構63 (1/60)・出土遺物 (1/4・1/2) ……………	66	第118図	調査地位置図 (1/2,000) ……………	89
第86図	遺構に伴わない遺物① (1/4) ……………	67	第119図	遺構全体図 (1/250) ……………	89
第87図	遺構に伴わない遺物② (1/4) ……………	68	第120図	土層断面図① (1/60) ……………	90
			第121図	土層断面図② (1/60) ……………	90

第122図	中世遺構配置図 (1/400) ……………	91	第158図	竪穴住居 3 (1/60)・出土遺物 (1/4・1/3) ……	126
第123図	土壌 1・2 (1/30)・出土遺物 (1/4・1/3・1/2) ・P 1 出土遺物 (1/4) ……………	91	第159図	土壌 1 (1/60) ……………	126
第124図	近世 (円明寺関連) 遺構配置図 (1/150) ……	92	第160図	土壌 1 出土遺物 (1/4) ……………	127
第125図	掘立柱建物 (1/60)・出土遺物 (1/3) ……	93	第161図	溝 1 (1/30)・出土遺物 (1/4) ……	128
第126図	土壌 3・4 (1/30)・土壌 4 出土遺物 (1/4) ……	93	第162図	溝 2 (1/30)・出土遺物 (1/4) ……	128
第127図	土壌 5 (1/30)・出土遺物 (1/4) ……	94	第163図	下がり 1 (1/60)・出土遺物 (1/4) ……	128
第128図	池状遺構 (1/30)・出土遺物 (1/4) ……	95	第164図	下がり 2 (1/30)・出土遺物 (1/4) ……	129
第129図	溝 1～4 (1/40) ……	95	第165図	遺構に伴わない遺物 (A～D区) (1/4・1/3・1/2) ……	129
第130図	溝 5 (1/80)・出土遺物 (1/4) ……	96	第166図	遺構に伴わない遺物 (F・G区) (1/4・1/2・1/1) ……	130
第131図	溝 5 南端石積み (1/30) ……	97	第167図	遺構に伴わない遺物 (S 2～5区) (1/4・1/2) ……	131
第132図	集石 (1/30) ……	97	第168図	古墳時代主要遺構部分配置図① (1/400) ……	133
第133図	柱穴出土遺物 (1/4・1/3) ……	97	第169図	古墳時代主要遺構部分配置図② (1/400) ……	134
第134図	遺構に伴わない遺物 (1/4・1/3・1/2) ……	98	第170図	古墳時代主要遺構部分配置図③ (1/400) ……	134
第135図	八幡山円明寺の寺域推定図 (1/500) ……	100	第171図	竪穴住居 4 (1/60)・出土遺物 (1/4) ……	135
第136図	八幡山円明寺の絵図：大原町史編纂室提供 ……	100	第172図	竪穴住居 5 (1/60) ……	136
第137図	八幡山円明寺の平面図：大原町史編纂室提供 ……	101	第173図	竪穴住居 6 (1/60)・出土遺物 (1/3) ……	137
第138図	五輪塔 (1/8) ……	103	第174図	竪穴住居 6 出土遺物 (1/4) ……	138
<b>第 6 章 尾崎遺跡</b>					
第139図	調査地位置図 (1/10,000) ……	105	第175図	竪穴住居 7 (1/60)・出土遺物 (1/4) ……	138
第140図	調査区配置図 (1/3,000) ……	106	第176図	土壌 2 (1/30)・出土遺物 (1/4) ……	139
第141図	土層柱状図 (縦1/200・横1/400) ……	106	第177図	土器溜まり (1/30)・出土遺物 (1/4) ……	139
第142図	遺構全体図 (1/1,500) ……	106	第178図	古墳 (1/60) ……	139
第143図	地形測量図・遺物出土位置図① (1/500) ……	108	第179図	遺構に伴わない遺物 (1/4) ……	140
第144図	地形測量図・遺物出土位置図② (1/500) ……	109	第180図	古代主要遺構部分配置図① (1/400) ……	142
第145図	地形測量図 (1/500) ……	110	第181図	古代主要遺構部分配置図② (1/400) ……	143
第146図	遺構に伴わない遺物 (側道調査区) (1/4) ……	112	第182図	古代主要遺構部分配置図③ (1/400) ……	144
第147図	遺構に伴わない遺物 (本線調査区) (1/4) ……	113	第183図	古代主要遺構部分配置図④ (1/400) ……	145
第148図	遺構に伴わない遺物① (1/2) ……	115	第184図	掘立柱建物 1 (1/60)・出土遺物 (1/4) ……	146
第149図	遺構に伴わない遺物② (1/3) ……	116	第185図	掘立柱建物 2 (1/60)・出土遺物 (1/4) ……	147
第150図	遺構に伴わない遺物③ (2/3) ……	117	第186図	掘立柱建物 3 (1/60) ……	148
第151図	遺構に伴わない遺物④ (2/3) ……	118	第187図	掘立柱建物 3 出土遺物 (1/4・1/3) ……	149
第152図	弥生時代主要遺構部分配置図① (1/400) ……	120	第188図	掘立柱建物 4 (1/60)・出土遺物 (1/4) ……	150
第153図	弥生時代主要遺構部分配置図② (1/400) ……	121	第189図	掘立柱建物 5 (1/60)・出土遺物 (1/4・1/3) ……	151
第154図	弥生時代主要遺構部分配置図③ (1/400) ……	122	第190図	掘立柱建物 6 (1/60)・出土遺物 (1/4) ……	152
第155図	竪穴住居 1 (1/60)・出土遺物 (1/4・1/2) ……	123	第191図	掘立柱建物 7 (1/60) ……	152
第156図	竪穴住居 2 (1/60)・出土遺物 (1/3・1/2) ……	124	第192図	掘立柱建物 8 (1/60)・出土遺物 (1/4) ……	153
第157図	竪穴住居 2 出土遺物 (1/4) ……	125	第193図	掘立柱建物 9 (1/60) ……	154

第194図	掘立柱建物10 (1/60)・出土遺物 (1/4)	154	第232図	焼土面4 (1/30)	173
第195図	掘立柱建物11 (1/60)・出土遺物 (1/4)	155	第233図	焼土面5 (1/30)	173
第196図	掘立柱建物12 (1/60)・出土遺物 (1/4)	156	第234図	炭溜まり1 (1/60)	174
第197図	掘立柱建物13 (1/60)	157	第235図	炭溜まり2 (1/60)・出土遺物 (1/4)	174
第198図	掘立柱建物14 (1/60)・出土遺物 (1/4)	158	第236図	炭溜まり3 (1/30)	174
第199図	掘立柱建物15 (1/60)・出土遺物 (1/4)	159	第237図	溝3 (1/60)	174
第200図	掘立柱建物16 (1/60)	159	第238図	溝4 (1/60)・出土遺物 (1/4)	174
第201図	掘立柱建物17 (1/60)・出土遺物 (1/4)	160	第239図	溝5 (1/30)・出土遺物 (1/4)	175
第202図	掘立柱建物18 (1/60)・出土遺物 (1/4)	161	第240図	たわみ (1/60)・出土遺物 (1/4)	175
第203図	掘立柱建物19 (1/60)・出土遺物 (1/4)	162	第241図	集石1 (1/30)・出土遺物 (1/4)	175
第204図	掘立柱建物20 (1/60)	163	第242図	集石2 出土遺物 (1/4)	176
第205図	掘立柱建物21 (1/60)	163	第243図	その他の遺構出土遺物 (1/4・1/2)	177
第206図	掘立柱建物22 (1/60)	164	第244図	遺構に伴わない遺物 (F・G区) ① (1/4)	178
第207図	掘立柱建物23 (1/60)	165	第245図	遺構に伴わない遺物 (F・G区) ② (1/4)	179
第208図	掘立柱建物24 (1/60)	165	第246図	遺構に伴わない遺物 (F・G区) ③ (1/4)	180
第209図	掘立柱建物25 (1/60)	166	第247図	遺構に伴わない遺物 (F・G区) ④ (1/4)	181
第210図	柱穴列1 (1/60)・出土遺物 (1/4)	166	第248図	遺構に伴わない遺物 (F・G区) ⑤ (1/4)	182
第211図	柱穴列2 (1/60)	167	第249図	遺構に伴わない遺物 (F・G区) ⑥ (1/4)	183
第212図	柱穴列3 (1/60)	167	第250図	遺構に伴わない遺物 (D・E区) (1/4)	184
第213図	火葬墓 (1/20)・出土遺物 (1/4)	167	第251図	遺構に伴わない遺物 (B区) (1/4)	184
第214図	土器棺1 (1/20)・出土遺物 (1/4)	168	第252図	遺構に伴わない遺物 (側道調査区) (1/4)	185
第215図	土器棺2 (1/20)・出土遺物 (1/4)	168	第253図	遺構に伴わない遺物① (1/4)	186
第216図	土器棺3 (1/20)・出土遺物 (1/4)	169	第254図	遺構に伴わない遺物② (1/4・1/3)	187
第217図	土壌3 (1/30)・出土遺物 (1/4)	170	第255図	中世主要遺構部分配置図① (1/400)	189
第218図	土壌4 (1/30)・出土遺物 (1/4)	170	第256図	中世主要遺構部分配置図② (1/400)	190
第219図	土壌5 (1/30)	171	第257図	中世主要遺構部分配置図③ (1/400)	191
第220図	土壌6 (1/30)・出土遺物 (1/4)	171	第258図	中世主要遺構部分配置図④ (1/400)	192
第221図	土壌7 (1/30)	171	第259図	掘立柱建物26 (1/60)	193
第222図	土壌8 (1/30)・出土遺物 (1/4)	171	第260図	掘立柱建物27 (1/60)・出土遺物 (1/4)	194
第223図	土壌9 (1/30)	171	第261図	掘立柱建物28 (1/60)・出土遺物 (1/4)	194
第224図	炉1 (1/30)・出土遺物 (1/4)	172	第262図	掘立柱建物29 (1/100)・出土遺物 (1/4)	195
第225図	炉2 (1/30)	172	第263図	掘立柱建物30 (1/60)	195
第226図	炉3 (1/30)	172	第264図	掘立柱建物31 (1/60)・出土遺物 (1/2)	196
第227図	炉4 (1/30)	172	第265図	掘立柱建物32 (1/60)	197
第228図	炉5 (1/30)	172	第266図	掘立柱建物33 (1/100)	198
第229図	焼土面1 (1/30)・出土遺物 (1/4)	173	第267図	掘立柱建物34 (1/100)・出土遺物 (1/4)	199
第230図	焼土面2 (1/30)・出土遺物 (1/4)	173	第268図	掘立柱建物35 (1/100)・出土遺物 (1/4)	200
第231図	焼土面3 (1/30)	173	第269図	掘立柱建物36 (1/100)・出土遺物 (1/4)	201

第270図	掘立柱建物37 (1/100) ……………	202
第271図	掘立柱建物38 (1/100)・出土遺物 (1/4) ……………	202
第272図	掘立柱建物39 (1/100) ……………	203
第273図	掘立柱建物39出土遺物 (1/4・1/3) ……………	204
第274図	掘立柱建物40 (1/100)・出土遺物 (1/4) ……………	205
第275図	掘立柱建物41 (1/100) ……………	206
第276図	掘立柱建物42 (1/100)・出土遺物 (1/4) ……………	206
第277図	掘立柱建物43 (1/100) ……………	207
第278図	掘立柱建物44 (1/60)・出土遺物 (1/4) ……………	208
第279図	柱穴列 4 (1/60) ……………	209
第280図	柱穴列 5 (1/60) ……………	209
第281図	柱穴列 6 (1/60) ……………	209
第282図	柱穴列 7 (1/60) ……………	209
第283図	柱穴列 8 (1/100)・P 1・8 (1/30) ……………	210
第284図	柱穴列 8 出土遺物 (1/8) ……………	211
第285図	柱穴列 9 (1/60) ……………	213
第286図	柱穴列10 (1/60) ……………	213
第287図	柱穴列11 (1/60) ……………	213
第288図	柱穴列12 (1/60) ……………	213
第289図	柱穴列13 (1/60) ……………	214
第290図	柱穴列14 (1/60) ……………	214
第291図	柱穴列15 (1/60) ……………	214
第292図	柱穴列16 (1/60) ……………	214
第293図	柱穴列17 (1/60) ……………	215
第294図	柱穴列18 (1/60)・出土遺物 (1/4) ……………	215
第295図	土壇墓 (1/30)・出土遺物 (1/4・1/3) ……………	215
第296図	土壇10 (1/30) ……………	216
第297図	土壇11 (1/30)・出土遺物 (1/4) ……………	216
第298図	溝 6 (1/60)・出土遺物 (1/4・1/3) ……………	217
第299図	溝 7 (1/60)・出土遺物 (1/4) ……………	217
第300図	溝 8 (1/30) ……………	218
第301図	溝 9 (1/30)・出土遺物 (1/4) ……………	218
第302図	溝10 (1/30) ……………	218
第303図	溝11 (1/30)・出土遺物 (1/4) ……………	218
第304図	石組 1 (1/30) ……………	218
第305図	石組 2 (1/30) ……………	219
第306図	柱穴出土遺物 (1/4・1/3・1/2) ……………	219
第307図	遺構に伴わない遺物 (F・G区) (1/4) ……………	220

第308図	遺構に伴わない遺物 (D～F区) (1/4・1/3) ……………	221
第309図	遺構に伴わない遺物 (A～C区) (1/4) ……………	222
第310図	遺構に伴わない遺物 (側道調査区) ① (1/4) ……	223
第311図	遺構に伴わない遺物 (側道調査区) ② (1/4) ……	224
第312図	遺構に伴わない遺物 (側道調査区) ③ (1/3) ……	225

## 第 7 章 中町 B 遺跡

第313図	調査地位置図 (1/4,000) ……………	227
第314図	調査区配置図 (1/2,500) ……………	228
第315図	遺構全体図 (1/800) ……………	228
第316図	調査区土層断面図 (1/80) ・地形模式図 (1/1,000) ……………	229
第317図	調査区土層断面図 (1/100) ……………	230
第318図	縄文・弥生時代遺構全体図 (1/1,000) ……………	231
第319図	縄文・弥生時代主要遺構部分配置図 (1/400) ……	232
第320図	竪穴住居 (1/40) ……………	233
第321図	竪穴住居出土遺物① (1/4) ……………	234
第322図	竪穴住居出土遺物② (1/4) ……………	235
第323図	竪穴住居出土遺物③ (1/4) ……………	236
第324図	竪穴住居出土遺物④ (1/4・1/3) ……………	237
第325図	土壇 1 (1/30)・出土遺物 (1/4) ……………	237
第326図	溝 1 (1/30) ……………	237
第327図	たわみ 1・2、縄文土器散布地 (1/150) ……………	238
第328図	たわみ 1 出土遺物 (1/4・1/2) ……………	239
第329図	縄文土器散布地出土遺物① (1/4) ……………	239
第330図	縄文土器散布地出土遺物② (1/5・1/3・1/2) ……	240
第331図	遺構に伴わない遺物 (1/4・1/2) ……………	242
第332図	古代遺構全体図 (1/1,000) ……………	243
第333図	古代主要遺構部分配置図① (1/400) ……………	244
第334図	古代主要遺構部分配置図② (1/400) ……………	245
第335図	道路遺構断面① (1/60) ……………	247
第336図	道路遺構断面② (1/60) ……………	248
第337図	側溝 1・2 出土遺物 (1/4・1/2) ……………	248
第338図	道路遺構エレベーション (1/60) ……………	249
第339図	側溝 3 (1/80)・出土遺物 (1/4) ……………	250
第340図	波板状凹凸面 (1/100・1/60) ……………	251
第341図	溝 2 (1/120・1/30) ……………	252
第342図	遺構に伴わない遺物 (1/4) ……………	252

第343図	中・近世遺構全体図 (1/1,000) ……………	253	第379図	竪穴住居 8 (1/60) ……………	287
第344図	中・近世主要遺構部分配置図① (1/400) ……………	254	第380図	竪穴住居 9 (1/60) ……………	287
第345図	中・近世主要遺構部分配置図② (1/400) ……………	255	第381図	竪穴住居10 (1/60) ……………	288
第346図	掘立柱建物 (1/60) ……………	256	第382図	竪穴住居11 (1/60) ……………	288
第347図	掘立柱建物出土遺物 (1/4) ……………	257	第383図	竪穴住居12 (1/60) ……………	288
第348図	土壌 2 (1/30)・出土遺物 (1/4) ……………	257	第384図	竪穴住居13 (1/60) ……………	289
第349図	土壌 3 (1/30) ……………	257	第385図	竪穴住居14 (1/60) ……………	289
第350図	土壌 4 (1/30)・出土遺物 (1/4) ……………	258	第386図	竪穴住居15 (1/60) ……………	289
第351図	土壌 5 (1/30)・出土遺物 (1/4) ……………	258	第387図	段状遺構 1～5 (1/80)	
第352図	遺構に伴わない遺物① (1/4) ……………	260		・段状遺構 2 出土遺物 (1/4) ……………	290
第353図	遺構に伴わない遺物② (1/4) ……………	261	第388図	段状遺構 6～8 (1/80)	
第354図	遺構に伴わない遺物③ (1/4) ……………	262		・段状遺構 7 出土遺物 (1/4) ……………	291
第355図	遺構に伴わない遺物④ (1/4) ……………	264	第389図	段状遺構 9 (1/80)・出土遺物 (1/4) ……………	292
第356図	遺構に伴わない遺物⑤ (1/4) ……………	265	第390図	D 群 (1/150) ……………	293
第357図	遺構に伴わない遺物⑥ (1/4・1/3・1/2) ……………	267	第391図	掘立柱建物 (1/60)・出土遺物 (1/4) ……………	294
<b>第 8 章 穴が途遺跡</b>					
第358図	調査区位置図 (1/2,000) ……………	269	第392図	段状遺構10～13 (1/80) ……………	295
第359図	遺構全体図 (1/300) ……………	270	第393図	段状遺構11出土遺物 (1/4) ……………	295
第360図	弥生時代遺構群分け図 (1/600) ……………	271	第394図	段状遺構12出土遺物 (1/4) ……………	295
第361図	竪穴住居 1 (1/60) ……………	272	第395図	段状遺構14～18 (1/80) ……………	296
第362図	竪穴住居 1 出土遺物 (1/4・1/2) ……………	273	第396図	段状遺構16出土遺物 (1/4) ……………	297
第363図	竪穴住居 2 (1/80) ……………	274	第397図	段状遺構17出土遺物 (1/4) ……………	297
第364図	竪穴住居 2 柱穴出土遺物 (1/4・1/3) ……………	275	第398図	段状遺構18～20 (1/80) ……………	298
第365図	竪穴住居 2 埋土出土遺物 (1/4・1/3) ……………	276	第399図	段状遺構18出土遺物 (1/4) ……………	299
第366図	竪穴住居 3 (1/60)・出土遺物 (1/4) ……………	277	第400図	段状遺構19出土遺物 (1/4) ……………	299
第367図	竪穴住居 4 (1/60)・出土遺物 (1/4・1/3) ……………	278	第401図	土壌 1 (1/30)・出土遺物 (1/4) ……………	300
第368図	A 群 (1/60) ……………	279	第402図	土壌 2 (1/30)・出土遺物 (1/4) ……………	300
第369図	A 群出土遺物 (1/4・1/2) ……………	280	第403図	土壌 2 出土遺物 (1/6) ……………	301
第370図	B 群 (1/100) ……………	281	第404図	遺構に伴わない遺物 (1/4) ……………	302
第371図	B 群床面・埋土下層出土遺物 (1/4・1/3) ……………	282	第405図	その他の時期の遺構配置図 (1/600) ……………	303
第372図	B 群埋土上層出土遺物 (1/4・1/3・1/2・1/1) ……………	283	第406図	土壌 3 (1/30) ……………	303
第373図	C 群 (1/150) ……………	284	第407図	土壌 4 (1/30) ……………	303
第374図	竪穴住居配置図 (1/80) ……………	284	第408図	瓦出土位置図 (1/2,000) ……………	304
第375図	竪穴住居 5 (1/60・1/30) ……………	285	第409図	その他の時期の遺物① (1/4) ……………	304
第376図	竪穴住居 5 出土遺物 (1/4) ……………	286	第410図	その他の時期の遺物② (1/4) ……………	305
第377図	竪穴住居 6 (1/60) ……………	287	第411図	穴が途遺跡変遷図 (1/800) ……………	306
第378図	竪穴住居 7 (1/60) ……………	287	<b>第 9 章 穴が途古墳</b>		
			第412図	穴が途古墳位置図 (1/4,000) ……………	307
			第413図	調査前地形測量図 (1/200) ……………	309



第414図	墳丘測量図 (1/150) ……………	310	第451図	段状遺構5～8 (1/80)……………	344
第415図	墳丘・石室断面図 (1/80)……………	311	第452図	段状遺構5 (1/60)・出土遺物 (1/4) ……	344
第416図	西側石列 (1/60)……………	312	第453図	段状遺構6 (1/60)……………	345
第417図	東側石列 (1/60)……………	313	第454図	段状遺構7 (1/60)……………	345
第418図	石室上面・掘り方 (1/60)……………	315	第455図	段状遺構8 (1/60)……………	345
第419図	掘り方掘削道具痕跡 (1/60)……………	315	第456図	段状遺構9 (1/60)……………	346
第420図	閉塞石 (1/40)……………	315	第457図	段状遺構10 (1/60)・出土遺物 (1/4) ……	346
第421図	横穴式石室 (1/60)……………	317	第458図	掘立柱建物 (1/60)……………	346
第422図	遺物出土状況 (1/30)……………	319	第459図	柱穴列1 (1/60)……………	346
第423図	銀装円頭大刀 (M1) 出土状況 (1/3) ……	319	第460図	柱穴列2 (1/60)……………	346
第424図	古墳出土遺物① (1/4) ……………	321	第461図	土壌1 (1/30)……………	347
第425図	古墳出土遺物② (1/2) ……………	321	第462図	土壌2 (1/80)……………	347
第426図	古墳出土遺物③ (1/4) ……………	323	第463図	土壌3 (1/30)・出土遺物 (1/4) ……	347
第427図	M1目釘孔の位置(網かけは茎部) (1/2) ……	323	第464図	土壌4 (1/30)・出土遺物 (1/4) ……	348
第428図	M1破片 (1/1) ……………	323	第465図	土壌5 (1/30)……………	348
第429図	M1柄頭・貴金具 (1/2) ……………	324	第466図	遺構に伴わない遺物 (1/4・1/2) ……	349
第430図	M1柄頭構造復元図 ……………	324	第467図	土壌6 (1/30)……………	350
第431図	古墳出土遺物④ (1/3・1/2) ……………	325	第468図	土壌7 (1/30)……………	350
第432図	古墳出土遺物⑤ (1/3) ……………	326	第469図	土壌8 (1/30)……………	351
第433図	土壌墓 (1/30)・出土遺物 (1/4) ……	327	第470図	土壌9 (1/30)……………	351
第434図	遺構に伴わない遺物 (1/4・1/3) ……	327	第471図	土壌10 (1/30)……………	351
第435図	埋葬位置推定図 (1/60)……………	329	第472図	土壌11 (1/30)……………	351
<b>第10章 今岡D遺跡</b>					
第436図	遺構全体図 (1/400) ……………	332	第473図	土壌12 (1/30)……………	352
第437図	弥生時代遺構全体図 (1/400) ……	333	第474図	土壌13 (1/30)・出土遺物 (1/3) ……	352
第438図	竪穴住居1 (1/60)……………	334	第475図	土壌14 (1/30)・出土遺物 (1/4) ……	352
第439図	竪穴住居1出土遺物 (1/4・1/3) ……	335	第476図	土壌15 (1/30)……………	352
第440図	竪穴住居2 (1/60)・出土遺物 (1/4) ……	336	第477図	溝断面 (1/30)……………	353
第441図	竪穴住居3 (1/60)・出土遺物 (1/2) ……	337	第478図	遺構に伴わない遺物 (1/4) ……	353
第442図	竪穴住居4 (1/60)・出土遺物 (1/2) ……	338	第479図	土壌16 (1/30)……………	354
第443図	竪穴住居5 (1/60)……………	339	第480図	土壌17 (1/30)……………	354
第444図	竪穴住居6 (1/60)……………	339	第481図	土壌18 (1/30)……………	354
第445図	竪穴住居7 (1/60)・出土遺物 (1/4) ……	340	第482図	土壌19 (1/30)……………	354
第446図	段状遺構1・2・土壌4 (1/60) ……	341	<b>第11章 今岡中山遺跡</b>		
第447図	段状遺構1 (1/60)・出土遺物 (1/4) ……	342	第483図	調査地位置図 (1/2,000) ……	356
第448図	段状遺構2 (1/60)・出土遺物 (1/4) ……	342	第484図	遺構全体図 (1/300)・断面図 (1/200) ……	357
第449図	段状遺構3 (1/60)……………	343	第485図	弥生時代遺構配置図 (1/200) ……	358
第450図	段状遺構4 (1/60)……………	343	第486図	竪穴住居1・2 (1/60)……………	359
			第487図	竪穴住居1 (1/60)……………	360

第488図	竪穴住居 2 (1/60) ……………	361
第489図	竪穴住居 2 出土遺物 (1/8・1/4・1/2) ……………	362
第490図	段状遺構 1～5 (1/80) ……………	363
第491図	段状遺構 1 (1/80)・出土遺物 (1/2) ……………	364
第492図	段状遺構 2 (1/80) ……………	364
第493図	段状遺構 2 出土遺物 (1/4・1/3・1/2) ……………	365
第494図	段状遺構 3 (1/80) ……………	366
第495図	段状遺構 4 (1/80)・出土遺物 (1/4) ……………	366
第496図	段状遺構 5 (1/80) ……………	367
第497図	段状遺構 5 中央部遺物出土状況 (1/50) ……………	368
第498図	段状遺構 5 出土遺物① (1/4) ……………	369
第499図	段状遺構 5 出土遺物② (1/4) ……………	370
第500図	段状遺構 5 出土遺物③ (1/4) ……………	371
第501図	段状遺構 5 出土遺物④ (1/4) ……………	372
第502図	段状遺構 5 出土遺物⑤ (1/4) ……………	373
第503図	段状遺構 5 出土遺物⑥ (1/4) ……………	375
第504図	段状遺構 5 出土遺物⑦ (1/3・1/2) ……………	375
第505図	段状遺構 6 (1/80) ……………	375
第506図	土壇 1 (1/30) ……………	376
第507図	土壇 2 (1/30) ……………	376
第508図	竪穴住居 3・4 (1/60) ……………	377
第509図	竪穴住居 3・4 出土遺物 (1/4) ……………	378
第510図	土壇 3 (1/30) ……………	379
第511図	溝 1・2 (1/80) ……………	379
第512図	石積み (1/40) ……………	379
第513図	近世墓 1・3 出土遺物 (1/3・1/2) ……………	380
第514図	遺構に伴わない遺物 (1/4・1/3・1/2) ……………	380
<b>第12章 今岡古墳群</b>		
第515図	今岡古墳群・穴が透古墳分布図 (1/6,000) ……………	382
第516図	今岡古墳群分布図 (1/4,000) ……………	383
第517図	今岡 2 号墳墳丘測量図 (1/400) ・ T 1 平断面図 (1/100)・出土遺物 (1/4) ……………	383
第518図	T 2～4 (今岡 5 号墳) 断面図 (1/100) ・ 出土遺物 (1/4・1/1) ……………	384
第519図	今岡中山丘陵古墳時代以降遺構配置図 (1/400) ……………	385
第520図	今岡 7 号墳・8 号墳配置図 (1/200) ……………	385
第521図	今岡 7 号墳 (1/80) ……………	386
第522図	今岡 7 号墳石室 (1/40) ……………	387

第523図	今岡 7 号墳石室断面 (1/40) ……………	388
第524図	今岡 7 号墳石室基底 (1/40) ……………	388
第525図	今岡 7 号墳出土遺物 (1/4・1/3) ……………	388
第526図	今岡 8 号墳 (1/80) ……………	389
第527図	今岡 D 丘陵古墳時代全体図 (1/400) ……………	390
第528図	今岡 9 号墳 (1/100) ……………	391
第529図	今岡 9 号墳主体部・周溝断面 (1/30) ……………	392
第530図	今岡 10 号墳墳丘 (1/150)・周溝断面 (1/30) ……………	393
第531図	今岡 10 号墳主体部 (1/30)・出土遺物① (1/4) ……………	394
第532図	今岡 10 号墳出土遺物② (1/3) ……………	395
第533図	今岡 11 号墳調査前地形測量図 (1/150) ……………	396
第534図	今岡 11 号墳 (1/150) ……………	396
第535図	今岡 11 号墳墳丘・周溝断面 (1/80) ……………	397
第536図	今岡 11 号墳石室 (1/40) ……………	398
第537図	今岡 11 号墳遺物出土状況 (1/40) ・ 出土遺物 (1/4・1/3) ……………	399
第538図	今岡 12 号墳周辺地形測量図 (1/150) ……………	400
第539図	今岡 12 号墳石室 (1/40) ……………	401
第540図	今岡 12 号墳石室土層断面 (1/40) ……………	402
第541図	今岡 12 号墳遺物出土状況 (1/40) ・ 出土遺物① (1/4) ……………	403
第542図	今岡 12 号墳出土遺物② (1/3) ……………	404
第543図	土壇墓 1 (1/30)・出土遺物 (1/4) ……………	405
第544図	土壇墓 2 (1/30)・出土遺物 (1/3) ……………	406
第545図	土壇墓 3 (1/30)・出土遺物 (1/3) ……………	406

### 第13章 高岡遺跡

第546図	遺構全体図 (1/400) ……………	408
第547図	竪穴住居 1 (1/80)・出土遺物 (1/3) ……………	409
第548図	竪穴住居 1 断面 (1/80)・埋土出土遺物 (1/4) ……………	410
第549図	竪穴住居 1 床面出土遺物 (1/4) ……………	411
第550図	竪穴住居 2 (1/60)・出土遺物 (1/4) ……………	412
第551図	竪穴住居 3 (1/60) ……………	413
第552図	竪穴住居 3 出土遺物 (1/4・1/3・1/1) ……………	414
第553図	段状遺構 1 (1/60) ……………	415
第554図	段状遺構 1 出土遺物 (1/4・1/3)・土壇 (1/30) ……………	416
第555図	段状遺構 2 (1/100) ……………	417
第556図	段状遺構 2 出土遺物 (1/4) ……………	418
第557図	段状遺構 2 土壇 1 (1/30) ……………	418

第558図	段状遺構 2 土壇 2 (1/30)・出土遺物 (1/4) …419	第574図	今岡中山遺跡の壺・器台のセット関係例(1/10) …437
第559図	段状遺構 3 (1/60)・出土遺物 (1/4) …419	第575図	吉備周辺における弥生時代後期の器台出土遺跡分布 (1/2,500,000) …438
第560図	土壇 1・2 (1/30) …420	第576図	吉備周辺における弥生時代後期の器台(1/15) …439
第561図	土壇 1・2 断面 (1/30)・出土遺物 (1/4) …421	第577図	M 1 復元図 (1/2) …443
第562図	土壇 3 (1/30)・出土遺物 (1/4) …422	第578図	島根県上塩冶築山古墳出土土壇大刀 (1/4) …444
第563図	土壇 4 (1/30) …422	第579図	韓国金鈴塚古墳出土土壇刀子 (1/2) …445
第564図	土壇 5・6 (1/30)・土壇 5 出土遺物 (1/4) …423	第580図	岡山市西山 3 号墳出土土刀装具 (1/2) …446
第565図	土壇 7 (1/30)・出土遺物 (1/4・1/3) …424	第581図	地形改変 (1/800) …448
第566図	土壇 8 (1/30) …425	第582図	穴が盗古墳構築過程復元図 (1/80・1/120) …451
第567図	土壇 9 (1/30) …425	第583図	今岡廃寺の寺域と伽藍配置 (1/3,000) …455
<b>第14章 まとめ</b>			
第568図	大原地区縄文時代遺跡分布図 (1/100,000) …428	第584図	ナイゲ窯跡平側面図 (1/60) …455
第569図	尾崎遺跡出土縄文時代後期彦崎 K II 式土器 器種分類図 (1/6) …429	第585図	側溝間の心々距離の変遷 …459
第570図	弥生時代段状遺構の種類 …431	第586図	古代因幡道の位置 …460
第571図	大原地区の土器様相 (1/12) …435	第587図	尾崎遺跡 F・G 区焼塩関連遺構分布図(1/300) …463
第572図	搬入された外来系土器 (1/8) …436	第588図	尾崎遺跡出土焼塩土器型式分類および周辺地域出土 焼塩土器 (1/6) …465
第573図	在地化した外来系土器 (1/8) …436		

## 表 目 次

<b>第 2 章 調査の経緯と経過</b>		<b>第 9 章 穴が盗古墳</b>	
表 1	確認調査・一次調査の成果 …… 8	表 6	埋木製品出土古墳 (中国地方) …… 329
表 2	調査担当者・期間一覧 …… 9	<b>第14章 まとめ</b>	
表 3	現地説明会・刊行物 …… 9	表 7	大原地区縄文時代遺跡消長表 …… 427
表 4	文化財保護法に基づく提出書類一覧 …… 12	表 8	大原地区の弥生遺跡 …… 434
<b>第 3 章 八幡山遺跡</b>		表 9	岡山県内の古代官道遺跡 …… 461
表 5	竪穴住居出土石器・剥片・原石一覧 …… 78	表 10	尾崎遺跡 G 区遺構別焼塩土器出土土量比率一覧表 …464

## 写 真 目 次

<b>第 1 章 地理的・歴史的環境</b>		<b>第 3 章 八幡山遺跡</b>	
写真 1	中町 C 遺跡出土遺物 …… 4	写真 4	穴が盗古墳現地指導 …… 10
<b>第 2 章 調査の経緯と経過</b>		写真 5	穴が盗古墳現地説明会 …… 10
写真 2	中町 B 遺跡現地指導 …… 10	<b>第 3 章 八幡山遺跡</b>	
写真 3	今岡中山遺跡現地説明会 …… 10	写真 6	サヌカイト剥片 …… 22
		写真 7	サヌカイト剥片 …… 25

写真8	安山岩剥片	25
写真9	粘板岩状緑色岩剥片	27
写真10	サヌカイト剥片	28
写真11	サヌカイト剥片	30
写真12	安山岩剥片	30
第5章 八幡山円明寺跡		
写真13	八幡山円明寺跡近景(東から)	99
写真14	八幡山円明寺跡の位牌堂跡地(南から)	102
写真15	八幡山円明寺関連石造物群(南から)	103
第6章 尾崎遺跡		
写真16	竪穴住居2調査風景(南西から)	119
写真17	土壌1調査風景(北から)	119
写真18	竪穴住居5調査風景(東から)	132
写真19	古墳調査風景(北東から)	132
写真20	土器棺2埋葬状況復元	168
写真21	土器棺3埋葬状況復元	169
写真22	たわみ須臾器出土状況(東から)	175
写真23	F区柱穴焼塩土器出土状況(東から)	177
写真24	掘立柱建物31 P2硯出土状況(南東から)	196
写真25	掘立柱建物34と竹山城跡(北東から)	198
写真26	側道調査区中世建物群(南西から)	204
写真27	掘立柱建物44 P6土師器出土状況(北から)	208
写真28	柱穴列8 P8(北西から)	211

### 第7章 中町B遺跡

写真29	竪穴住居調査風景(西から)	231
写真30	道路遺構調査風景(南から)	243
写真31	側溝2検出風景(南から)	246
写真32	掘立柱建物調査風景(南西から)	253

### 第8章 穴が辻遺跡

写真33	竪穴住居2壁体溝群(南西から)	276
写真34	A群 P1石包丁出土状況(北東から)	279
写真35	B群(北東から)	283
写真36	土器172把手部(内側から)	301

### 第9章 穴が辻古墳

写真37	掘り方掘削道具痕跡(西から)	315
写真38	鉄鏃東出土状況(北東から)	319
写真39	M1金属線装束状況(X線)	323

### 第13章 今岡古墳群

写真40	今岡7号墳調査風景(南から)	389
写真41	今岡7号墳調査風景(南西から)	389

### 第14章 まとめ

写真42	破鏡(M1)の研磨痕	441
写真43	刀装具文様アップ (左 穴が辻古墳・右 西山3号墳)	446
写真44	東①1根固め石(北から)	449
写真45	石室南東隅部角欠き状況(北西から)	452
写真46	石室北東隅部角欠き状況(南西から)	452

## 写真図版目次

### 八幡山遺跡

巻頭図版1	調査地遠景(南上空から) (1区・2区の写真を合成)
巻頭図版2-1	竪穴住居5 炭化材検出状況(南から)
2-2	竪穴住居5 出土焼土塊
2-3	竪穴住居5 中央穴検出状況(西から)
2-4	竪穴住居5 中央穴断面(南から)
2-5	ガラス小玉

### 八幡山南遺跡

巻頭図版3-1	製鉄関連遺構(東から)
---------	-------------

3-2	製鉄関連遺構(南から)
-----	-------------

3-3	製鉄関連遺物
-----	--------

### 尾崎遺跡

巻頭図版4-1	神子柴型石斧
4-2	土器棺
巻頭図版5-1	焼塩土器
5-2	丹塗り土師器
5-3	陰刻宝相華文緑釉陶器
5-4	石帯

### 中町B遺跡

- 巻頭図版6 道路遺構 (南から)
- 巻頭図版7-1 調査地遠景 (南上空から)
- 7-2 道路遺構 (北から)
- 巻頭図版8-1 波板状凹凸面 (北西から)
- 8-2 竪穴住居出土弥生土器
- 穴が途遺跡
- 巻頭図版9-1 調査地遠景 (北西上空から)
- 9-2 調査地全景 (上空から、上が北)
- 巻頭図版10-1 竪穴住居5 炭化材検出状況 (西から)
- 10-2 竪穴住居5 炭化植物検出状況 (西から)
- 10-3 竪穴住居5 炭化材除去後 (西から)
- 10-4 竪穴住居5 土器出土状況 (南西から)
- 10-5 竪穴住居5 中央穴断面 (西から)
- 巻頭図版11-1 B群出土生駒西麓産弥生土器
- 11-2 B群出土管玉
- 11-3 竪穴住居5出土弥生土器
- 11-4 土壌2 (南から)
- 11-5 土壌2出土弥生土器
- 穴が途古墳
- 巻頭図版12 穴が途古墳と眼下を南流する吉野川 (北東から)
- 巻頭図版13-1 銀装円頭大刀出土状況 (南から)
- 13-2 銀装円頭大刀
- 13-3 装身具
- 13-4 銀被鉄鏃
- 今岡中山遺跡
- 巻頭図版14-1 段状遺構5 弥生土器出土状況
- 14-2 段状遺構5出土弥生土器
- 八幡山遺跡
- 図版1 調査地全景 (上空から、上が北)  
(1区・2区の写真を合成)
- 図版2-1 遺跡遠景 (北東上空から)
- 2-2 北半部の遺構 (南から)
- 図版3-1 竪穴住居1 (南西から)
- 3-2 竪穴住居3 (南西から)
- 図版4-1 竪穴住居3 埋土断面 (南東から)
- 4-2 竪穴住居3 サヌカイト剥片出土状況 (南西から)
- 4-3 竪穴住居4 (南西から)
- 4-4 竪穴住居4 全体検出状況 (南から)
- 4-5 竪穴住居4 土器出土状況 (南西から)
- 図版5-1 竪穴住居5 (南から)
- 5-2 竪穴住居6 (南東から)
- 図版6-1 竪穴住居6 中央穴断面 (西から)
- 6-2 竪穴住居6 柱穴 (南から)
- 6-3 竪穴住居8 (南から)
- 6-4 竪穴住居8 断面 (南東から)
- 6-5 調査区西半 (北から)
- 図版7-1 D~H群 (南東から)
- 7-2 D~F群 (南から)
- 図版8-1 H~J群 (北から)
- 8-2 K群 (南西から)
- 図版9-1 B・C群 (東から)
- 9-2 竪穴住居13 (北から)
- 9-3 柱穴群1 (南から)
- 9-4 柱穴列 (南から)
- 9-5 段状遺構2 (南東から)
- 図版10-1 段状遺構25  
環状石斧 S29・30出土状況 (南東から)
- 10-2 土壌5 (南東から)
- 10-3 火葬墓 (西から)
- 10-4 土壌3 (南西から)
- 10-5 谷堆積土断面 (南東から)
- 図版11 弥生土器・土師器 (壺・甕)
- 図版12 弥生土器・土師器 (高杯・鉢・蓋)
- 図版13-1 弥生土器・土師器 (器台)
- 13-2 土製品
- 13-3 石鏃
- 図版14 石斧・石錐
- 図版15-1 磨製石包丁・未製品
- 15-2 砥石
- 15-3 石鎌・黒曜石剥片
- 15-4 原石?
- 図版16-1 安山岩剥片
- 16-2 鉄斧
- 16-3 焼土塊
- 16-4 須恵器

- 16-5 鉛玉
- 八幡山南遺跡
- 図版17-1 北側調査区調査前景 (南西から)
- 17-2 南側調査区全景 (北西から)
- 17-3 段状遺構1~5・製鉄関連遺構 (西から)
- 図版18-1 段状遺構1~5 (南東から)
- 18-2 段状遺構5 遺物出土状況 (南東から)
- 図版19-1 製鉄関連遺構 (南東から)
- 19-2 製鉄関連遺構 (南西から)
- 19-3 被熱箇所・炉壁、鉄滓集積箇所 (東から)
- 図版20-1 炉壁、鉄滓集積箇所検出状況 (東から)
- 20-2 炉壁、鉄滓集積箇所G-H断面 (東から)
- 20-3 鉄滓集積箇所 (南西から)
- 図版21-1 段状遺構5出土遺物
- 21-2 P3出土遺物
- 21-3 製鉄関連遺物 (炉壁・鉄滓)
- 八幡山円明寺跡
- 図版22-1 調査地遠景 (南から:竹山城跡より)
- 22-2 調査地近景 (南東から)
- 22-3 調査区南半全景 (南東から)
- 図版23-1 調査区南半全景 (北から)
- 23-2 調査区北半全景 (北から)
- 図版24-1 土壌1 (東から)
- 24-2 土壌3 (南から)
- 24-3 土壌4 (南から)
- 24-4 池状遺構 (南東から)
- 24-5 溝5南端 (北東から)
- 24-6 集石 (西から)
- 24-7 瓦出土状況 (北西から)
- 24-8 鉄鎌 (M13) 出土状況 (北西から)
- 図版25-1 土壌1出土遺物
- 25-2 土壌4出土遺物
- 25-3 遺構に伴わない遺物
- 尾崎遺跡
- 図版26-1 調査地遠景 (南西から:竹山城跡より)
- 26-2 調査地近景 (南から)
- 図版27-1 竪穴住居1 (G区) (南から)
- 27-2 竪穴住居2 (S3区) (西から)
- 図版28-1 土壌1 (F区) (北から)
- 28-2 土壌1 弥生土器出土状況 (南から)
- 28-3 竪穴住居6 (N1区) (南から)
- 28-4 土器溜まり (E区) (南から)
- 28-5 古墳 (G区) (東から)
- 図版29-1 古代・中世建物群 (G区) (東から)
- 29-2 掘立柱建物4 (G区) (南から)
- 29-3 掘立柱建物5 (G区) (南から)
- 29-4 掘立柱建物8・10・11 (E区) (南から)
- 29-5 掘立柱建物11・12 (E区) (南から)
- 図版30-1 古代建物群 (D・E区) (西上空から)
- 30-2 古代建物群 (D区) (北から)
- 図版31-1 掘立柱建物13 (D区) (西から)
- 31-2 掘立柱建物17 (D区) (北から)
- 31-3 掘立柱建物18 (D区) (北から)
- 31-4 掘立柱建物25 (A区) (北東から)
- 31-5 火葬墓 (F区) (東から)
- 31-6 土器棺1 (F区) (南東から)
- 31-7 土器棺2 (F区) (南西から)
- 31-8 土器棺3 (F区) (南から)
- 図版32-1 掘立柱建物26~29 (G区) (東から)
- 32-2 掘立柱建物34 (C区) (北東から)
- 図版33-1 掘立柱建物36~41・土壌墓 (S3区) (南から)
- 33-2 土壌墓 (S3区) (南から)
- 図版34 縄文土器 (側道調査区)
- 図版35 縄文土器 (本線調査区)
- 図版36 弥生土器 (壺・甕)
- 図版37 須恵器 (杯蓋・杯身・壺)
- 図版38 土師器 (甕)・緑釉陶器 (椀)
- 図版39-1 焼塩土器
- 39-2 西播磨産須恵器
- 図版40-1 円面硯
- 40-2 線刻須恵器
- 40-3 転用硯
- 40-4 平瓦
- 40-5 勝間田焼・土師器・青磁 (椀・小皿)
- 40-6 金属器 (破鏡・鉈・鉄斧・鉄鋸)
- 図版41-1 石鏃・石錐

- 41-2 スクレイパー
- 41-3 石包丁
- 41-4 石錘
- 図版42 石斧
- 図版43-1 石鍬
- 43-2 石帯
- 43-3 硯
- 43-4 砥石
- 図版44-1 紡錘車・土錘
- 44-2 支脚
- 44-3 柱材

### 中町 B 遺跡

- 図版45-1 調査地遠景 (南から)
- 45-2 調査地遠景 (北から)
- 図版46-1 竪穴住居検出状況 (南から)
- 46-2 竪穴住居土器出土状況 (北から)
- 46-3 竪穴住居断面 (南から)
- 図版47-1 竪穴住居 (北から)
- 47-2 土壌 1 (南西から)
- 47-3 たわみ 1 (南西から)
- 図版48-1 道路遺構全景 (上空から、上が西)
- 48-2 道路遺構全景 (南から)
- 図版49-1 道路遺構 I-J 断面 (南西および南から)
- 49-2 道路遺構 K-L 断面 (南西および南から)
- 図版50-1 波板状凹凸面 (上空から、上が北)
- 50-2 波板状凹凸面 断面 (西から)
- 図版51-1 側溝 3 (北西から)
- 51-2 側溝 3 柱穴検出状況 (北から)
- 51-3 側溝 3 遺物出土状況 (南から)
- 51-4 溝 2 (北西から)
- 図版52-1 掘立柱建物 (南西から)
- 52-2 土壌 3 (南から)
- 52-3 土壌 5 (東から)
- 図版53 散布地出土縄文土器
- 図版54 竪穴住居出土弥生土器 (壺)
- 図版55 竪穴住居出土弥生土器 (壺)
- 図版56 竪穴住居出土弥生土器 (甕)
- 図版57 竪穴住居出土弥生土器 (甕・鉢)

- 図版58-1 勝間田焼・土師器 (小皿)
- 58-2 包含層出土遺物
- 図版59-1 石鏃・石錐
- 59-2 石斧
- 59-3 石鍬
- 59-4 石錘
- 59-5 石匙
- 59-6 スクレイパー
- 59-7 管玉
- 59-8 石皿
- 59-9 石皿と磨石

### 穴が谷遺跡

- 図版60 遺跡遠景 (北東上空から)
- 図版61-1 竪穴住居 1・2 (北東から)
- 61-2 竪穴住居 1 中央穴 (南から)
- 61-3 竪穴住居 2 (南から)
- 61-4 竪穴住居 2 埋土断面 (北西から)
- 61-5 竪穴住居 3 (南から)
- 図版62-1 竪穴住居 4 (西から)
- 62-2 竪穴住居 5 (西から)
- 62-3 A・B 群 (北から)
- 62-4 B 群 埋土断面 (西から)
- 62-5 B 群 土器出土状況 (北から)
- 図版63-1 C・D 群 (南から)
- 63-2 竪穴住居 3・4・C・D 群 (上空から、上が東)
- 図版64-1 竪穴住居 13 (西から)
- 64-2 竪穴住居 15 (西から)
- 64-3 段状遺構 1~3 (南西から)
- 64-4 段状遺構 19 埋土断面 (南から)
- 64-5 段状遺構 19 炭化材出土状況 (西から)
- 64-6 土壌 1 (南から)
- 64-7 土壌 2 (南東から)
- 64-8 土壌 3 (西から)
- 図版65-1 竪穴住居 5 出土弥生土器
- 65-2 土壌 2 出土弥生土器
- 図版66 弥生土器 (壺・甕・高杯)
- 図版67-1 弥生土器 (高杯・鉢・器台)
- 67-2 瓦

- 図版68-1 瓦  
 68-2 土製品  
 68-3 石器(鎌・石包丁・砥石)  
 68-4 鉄器
- 穴が辻古墳
- 図版69-1 調査地全景(北上空から)  
 69-2 古墳全景(南東から)
- 図版70-1 墳丘内石列(南西から)  
 70-2 東側石列(南東から)
- 図版71-1 西側石垣状石列(北西から)  
 71-2 西側基礎石列(北西から)
- 図版72 石室調査過程(北東から)
- 図版73-1 石室床面検出状況(西から)  
 73-2 東側壁持ち送り状況(南から)  
 73-3 東側壁持ち送り状況(北から)
- 図版74-1 遺物出土状況(西から)  
 74-2 奥壁側遺物出土状況(西から)  
 74-3 遺物出土状況(西から)
- 図版75-1 北東角遺物出土状況(南西から)  
 75-2 袖部遺物出土状況(北西から)
- 図版76-1 閉塞施設(南から)  
 76-2 閉塞施設(北から)
- 図版77-1 羨道部(南から)  
 77-2 羨道部(北から)
- 図版78 須恵器(杯身・杯蓋)
- 図版79 須恵器(広口壺・短頸壺・高杯)
- 図版80 鉄器(大刀・刀子・釧・鉾・馬具)
- 図版81-1 銀装円頭大刀柄部  
 81-2 銀装円頭大刀柄部
- 図版82-1 鉄鎌  
 82-2 装身具
- 今岡D遺跡
- 図版83-1 調査地遠景(南東上空から)  
 83-2 調査地全景(上空から、上が北)
- 図版84-1 竪穴住居1(西から)  
 84-2 竪穴住居2(西から)
- 図版85-1 竪穴住居3(南から)  
 85-2 竪穴住居7(南から)

- 図版86-1 竪穴住居4・5・段状遺構4・土壌5(南から)  
 86-2 竪穴住居5(南から)
- 図版87-1 竪穴住居7・段状遺構6~8  
 ・掘立柱建物(西から)  
 87-2 段状遺構1・2(西から)
- 図版88-1 弥生土器・土師器・須恵器  
 88-2 鉄鎌  
 88-3 石器(鎌・台石・石包丁)
- 今岡中山遺跡
- 図版89-1 調査地全景(北西から:竹山城跡より)  
 89-2 調査地近景(南東から)
- 図版90-1 調査区全景(南から)  
 90-2 調査区南半全景(北から)
- 図版91-1 竪穴住居1・2(南西から)  
 91-2 竪穴住居1 中央穴I-J断面(南東から)  
 91-3 竪穴住居2 P1断面(東から)  
 91-4 竪穴住居2 遺物出土状況(北西から)  
 91-5 竪穴住居2 鉄鎌出土状況(南東から)
- 図版92-1 段状遺構1(南西から)  
 92-2 段状遺構2・3(南西から)
- 図版93-1 段状遺構2~5(北から)  
 93-2 段状遺構1・2・5 E-F断面(北から)
- 図版94-1 段状遺構5 遺物出土状況(南西から)  
 94-2 段状遺構5 遺物出土状況(北西から)
- 図版95-1 段状遺構5 中央部遺物出土状況(西から)  
 95-2 段状遺構5 北端部遺物出土状況(北西から)
- 図版96-1 竪穴住居3・4(南西から)  
 96-2 竪穴住居4(南西から)  
 96-3 竪穴住居4 遺物出土状況(南東から)  
 96-4 竪穴住居4(南西から)  
 96-5 石積み(南東から)
- 図版97-1 土壌1(西から)  
 97-2 土壌2(西から)  
 97-3 土壌3(西から)
- 図版98-1 竪穴住居2出土遺物(弥生土器)  
 98-2 段状遺構2出土遺物(弥生土器)  
 98-3 段状遺構4出土遺物(弥生土器)  
 98-4 段状遺構5出土遺物①(弥生土器)



- 図版99 段状遺構5出土遺物②(弥生土器)
- 図版100 段状遺構5出土遺物③(弥生土器)
- 図版101 段状遺構5出土遺物④(弥生土器)
- 図版102 段状遺構5出土遺物⑤(弥生土器)
- 図版103-1 打製石器(鎌・錐)
- 103-2 磨製石器(石包丁・斧)
- 103-3 砥石
- 103-4 鉄鎌
- 図版104-1 竪穴住居3・4出土遺物(土師器・須恵器)
- 104-2 近世墓出土遺物(簪・錢貨・鉄釘)

### 今岡古墳群

- 図版105-1 今岡7号墳(西から)
- 105-2 今岡7号墳(北西から)
- 図版106-1 今岡7号墳 石室基底部(西から)
- 106-2 今岡7号墳 周溝内遺物出土状況(南東から)
- 106-3 今岡8号墳 周溝(西から)
- 図版107-1 今岡9号墳(東から)
- 107-2 今岡9号墳 主体部(北から)
- 107-3 今岡10号墳(西から)
- 図版108-1 今岡10号墳 主体部(東から)
- 108-2 今岡10号墳 遺物出土状況(東から)
- 108-3 今岡10号墳 鉄鎌出土状況(西から)
- 図版109-1 今岡11・12号墳(南西から)
- 109-2 今岡11号墳(南から)
- 図版110-1 今岡11号墳(南から)

- 110-2 今岡11号墳(西から)
- 図版111-1 今岡12号墳(南から)
- 111-2 今岡12号墳(南から)
- 図版112 今岡12号墳 調査過程(南から)
- 図版113-1 土壙墓1(西から)
- 113-2 土壙墓2(南東から)
- 113-3 土壙墓3(東から)
- 図版114 今岡10号墳出土遺物(鉄剣・鉄刀・鉄鎌・鉄斧)
- 図版115-1 今岡11号墳出土遺物(須恵器・鉄鎌)
- 115-2 今岡12号墳出土遺物(須恵器・鉄釘)
- 図版116 今岡7号墳・土壙墓1～3出土遺物  
(須恵器・管玉・鉄鋤先・鉄刀)

### 高岡遺跡

- 図版117-1 調査地遠景(南上空から)
- 117-2 竪穴住居1(北から)
- 117-3 竪穴住居2(北西から)
- 図版118-1 竪穴住居1(南から)
- 118-2 竪穴住居3(南から)
- 図版119-1 段状遺構1(北東から)
- 119-2 段状遺構2(北西から)
- 119-3 土壙1・2(南から)
- 119-4 土壙7(南東から)
- 図版120-1 弥生土器(壺・甕・鉢)
- 120-2 鉄器(鉈)・ガラス小玉

## 第1章 地理的・歴史的環境

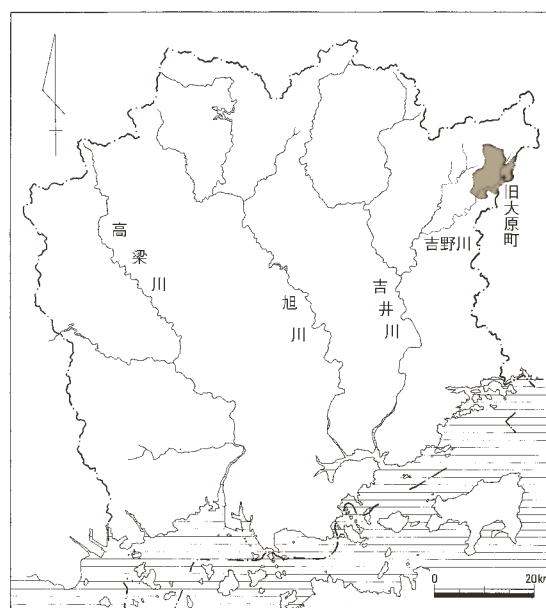
中国横断自動車道姫路鳥取線（鳥取自動車道）の関連遺跡が所在する岡山県美作市の旧大原町は剣聖宮本武蔵の生誕地として知られる緑豊かで風光明媚な山間の町である。岡山県の北東端部に位置しており、東は県境を挟んで兵庫県佐用郡佐用町に接し、北接する英田郡西粟倉村を介して鳥取県境にも近い。また、中国山地脊梁部の南に位置することから、旧大原町域には標高724.2mのツズラ山、標高583.6mの瀧山、標高545.7mの大空山以下300～500m級の山々が連なり、面積約55万㎡のうち実に75%が山林によって占められている。この山塊を東西に分断するように吉野川が南流する。吉野川は吉井川水系の北東部を構成する最大の支流である。西粟倉村大茅の若杉峠に源を発し、美作市内を南南西に流れて赤磐市周匝で吉井川に合流する。樹枝状に展開する谷間から、黒谷川、後山川、宮本川、川上川、大滝川などの小河川が奔流し、吉野川へと注ぎ込んでいる。

旧大原町の平野部は、これらの中小河川沿いに形成された谷底平野を主体とする。地形に制約されて狭長なものが多い中で、吉野川流域には胃袋状を呈するやや広い平野が散在的に認められる。特に中心部の古町から中町にかけての地域と、今岡から下庄町の地域には、吉野川を挟んでそれぞれ長さ1,000m、幅500mほどの平野が形成されており、吉野川流域の中でも比較的まとまった小盆地状の地形をなしている。下流域の立石から壬生を経て川戸に至る地域にも、吉井川沿いに細長い平野が展開するが、急峻な山塊が近くにせまり、吉野川流域だけの狭長な平野となっている。

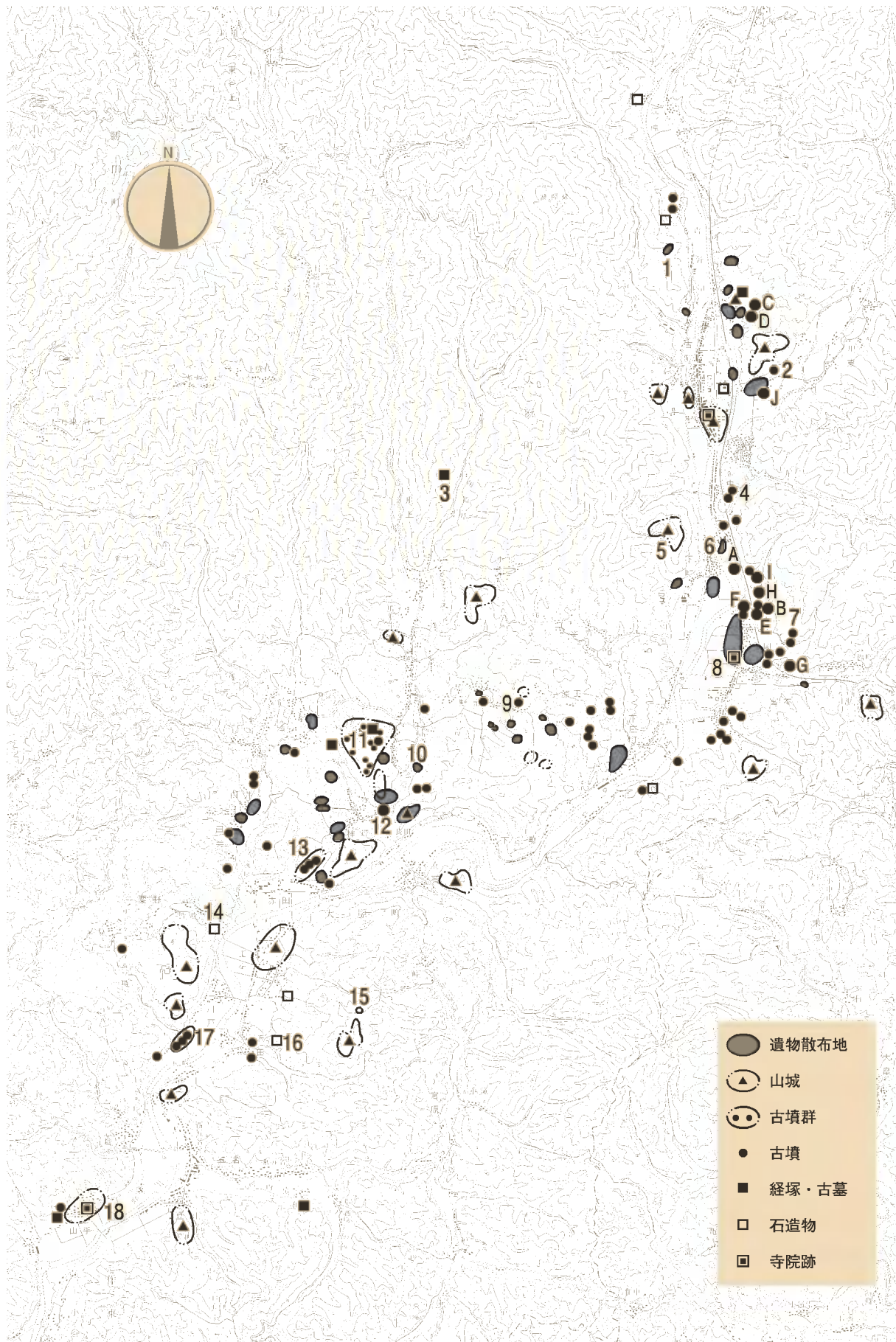
第2図は、中国横断自動車道姫路鳥取線（鳥取自動車道）の関連遺跡が所在する地域の遺跡分布を図示したものであるが、吉野川流域に遺跡が集中している状況を看取することができる。以下、旧大原町の歴史と遺跡について、時代順にまとめることとする。

今後には発見されると予想されるが、旧石器時代の遺構や遺物は確認されていない。本事業より以前に確認されていた最も古い時期の遺物は、縄文時代晩期である。晩期の遺物は、川戸古墳群〔宇垣1995〕や今岡廃寺〔佐藤2002〕から数片の突帯文土器が出土しているが、遺構は何も検出されていない。そのため、当該期の状況について概説することは困難である。そこで周辺地域の状況を見て、予察としたい。

近年になって旧大原町に近接した中国山地の谷底平野から、縄文時代の大規模な集落が発見された。鳥取県八頭郡智頭町大字智頭字枕田ほかに所在する智頭枕田遺跡〔木田・酒井2004〕は、町立病院の建て替え工事に伴って発掘調査が実施されたもので、12軒の竪穴住居によって構成された中期末～後期初頭の集落遺跡として著名である。立地条件や環境など非常に近似した周辺地域の状況から考えると、旧大原町内からも縄文時代の竪穴住居などの遺構が発見される可能性は、きわめて高いと考えられる。



第1図 遺跡位置図 (1/1,500,000)



第2図 周辺遺跡分布図 (1/50,000)

弥生時代については、旧大原町内で20数か所の遺物散布地が確認されている。現在のところ前期の遺構や遺物は発見されていないが、中期から後期になると、集落が増大または拡散していくようで、吉野川右岸沿いの丘陵縁辺部と、平野部との比高差が50～90mを測る野形、桂坪、赤田一帯の丘陵頂部に集中するとともに、吉野川左岸沿いの古町、中町、今岡一帯の河岸段丘や丘陵頂部にも集落が形成される。発掘調査が実施された川戸古墳群〔宇垣1995〕では、弥生時代中期の土器に加え、石斧未成品や銅鐸形土製品などの注目すべき遺物が出土しているため、近接した地点に集落が存在するのは確実である。また古町所在の池が平遺跡〔佐藤2005a〕では、開墾に伴って後期の土器が大量に採集されているが、遺構がまったく確認されていないため、遺跡の実態を把握することはできない。

古墳時代の集落は現在のところ不明である。ただ、下町地区における龍道寺遺跡の確認調査により吉野川左岸域で古墳時代初頭および古墳時代後期の遺物が出土しており、当該期集落の存在が推測される〔柴田2006〕。古墳は旧大原町内の分布調査により約80基が発見されているが、その分布状況は弥生時代の集落と同じように、吉野川流域の丘陵縁辺部と山頂に集中している。前～中期古墳としては、箱式石棺を埋葬施設とする山の後2号墳〔栗野・福田1978〕、山頂に立地して墳丘が低平な赤田古墳群、桂坪古墳群などがある。桂坪12号墳は、全長32mを測る旧大原町域唯一の前方後円墳で、当該期の首長墳と考えられる〔佐藤2005b〕。横穴式石室を埋葬施設とする後期古墳は、約40基が確認されており、その多くは直径10mほどの小規模な円墳である。そのうち特筆されるものが、発掘調査が実施された川戸古墳群である〔宇垣1995〕。特に2号墳は6世紀末～7世紀初頭に築造された全長12.3mの横穴式石室の大形方墳で、金銅装馬具一式や銀象嵌鏢の大刀などの秀逸な副葬品が出土している。また、発掘調査は行われていないが、才の礼古墳〔佐藤2005c〕では横穴式石室墳の測量が行われている。遺物は採集されていないが、立地や石室の特徴から7世紀前半の築造と推定されている。さらに、美作地域の後期古墳の特色として陶棺の使用があるが、野形2号墳から出土した7世紀前葉の陶棺が東京国立博物館に所蔵されている〔佐藤2005d〕。旧大原地域の後期古墳の特徴に絞ってみると、播磨の影響を受けたと考えられる組合式石棺の存在が挙げられ、釜の口1号墳<sup>(1)</sup>や築出し古墳〔岡田1985、平井1989〕で確認されている。

7世紀後半の白鳳時代に吉備は分割され、後の英田郡の前身となる英多郡(評)が成立する<sup>(2)</sup>。この時期の英多郡には北から今岡廃寺、大海廃寺、檜原廃寺、江見廃寺、竹田廃寺、土井廃寺が次々に建立される。地方において一郡に6寺が建立される例は全国的にも珍しく、この地域が畿内中央政権と密接なつながりを有していたことの証左となっている。このうち今岡廃寺を除く5寺では、川原寺式軒丸瓦の系譜を引く複弁七弁蓮華文軒丸瓦が採用され、建立氏族間の有機的な関係が認められるのに対し、今岡廃寺では、法隆寺式軒丸瓦の系譜を引く複弁八弁蓮華文軒丸瓦が採用されており、一定の独自性をうかがわせる。今岡廃寺から吉野川沿いに9kmほど南下した地点に、旧作東町山手所在の大海廃寺〔正岡・岡本1978、岡本1979〕がある。発掘調査の結果、法起寺式伽藍配置の主要伽藍に南北130m、東西108mの寺域が確認され、出土した創建瓦が古新羅系の素弁瓦で、朝鮮半島から

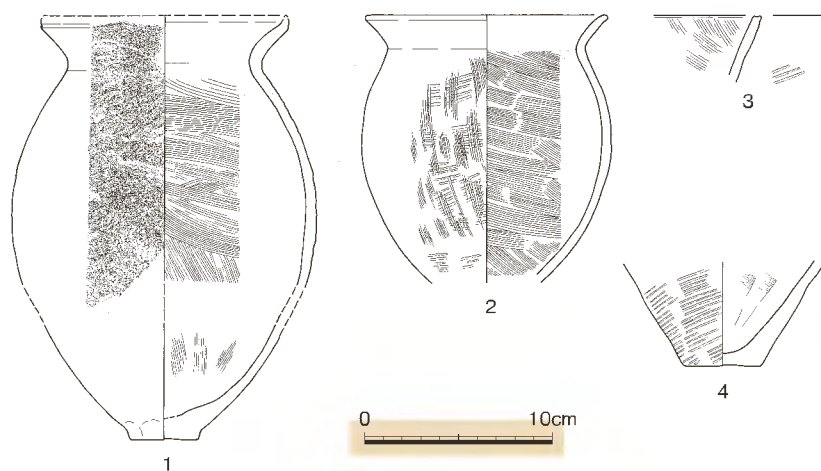
- |                 |          |           |            |            |
|-----------------|----------|-----------|------------|------------|
| A. 中町B遺跡        | G. 高岡遺跡  | 1. 池が平遺跡  | 7. 釜の口1号墳  | 13. 赤田古墳群  |
| B. 今岡中山遺跡       | H. 今岡D遺跡 | 2. 築出し古墳  | 8. 今岡廃寺    | 14. 栗野宝篋印塔 |
| C. 八幡山遺跡・八幡山南遺跡 | I. 穴が途遺跡 | 3. 真船遺跡   | 9. 野形2号墳   | 15. ナイゲ窯跡  |
| D. 八幡山円明寺跡      | 穴が途古墳    | 4. 山の後2号墳 | 10. 美上路遺跡  | 16. 沢田宝篋印塔 |
| E. 今岡2号墳        | J. 尾崎遺跡  | 5. 竹山城跡   | 11. 桂坪古墳群  | 17. 川戸古墳群  |
| F. 今岡5号墳        |          | 6. 中町遺跡   | 12. 桂坪12号墳 | 18. 大海廃寺   |

の渡来工人が直接関与した可能性が強いことから、7世紀後半に創建された英多郡最古の寺院であることが判明している。

奈良時代初頭の和銅6（713）年には、備前国から英多郡ほか6郡が割かれて美作国が新しく誕生する。旧大原町域は、北から英多郡大原郷、讃甘郷、大野郷、吉野郷、粟井郷に比定される。圃場整備事業に伴って発掘調査が実施された今岡廃寺では、奈良～平安時代にかけての遺構や遺物が大量に確認され、今岡廃寺一帯が英多郡における拠点の1つであることが明らかになった〔佐藤2002〕。また注目すべき遺物として、8個体の蔵骨器がこの地域から発見された<sup>(3)</sup>。旧作東町八名から林道工事中に出土した3個体とともに、地方における新たな葬制受容の様相をうかがわせる資料である。

この地域の経済基盤を考える上で欠かせないものに鉄生産がある。特に古代美作国は、調鉄の貢納国であり、平城宮跡からは「英多里鉞」〔奈良国立文化財研究所1978〕、「美作国英多郡大野里鉄一連」〔奈良国立文化財研究所1989〕の木簡が出土している。このうち後者に記された大野里は、旧大原町川上に比定されている。また、『日本霊異記』には、孝謙天皇の代（749～758年）に英多郡の官営鉄山で起きた落盤事故で生き埋めになった役夫が、仏教信仰により奇跡的に救出されたとする説話が記されている。旧大原町内では、現在のところ製鉄遺跡は明確ではないが、先述の大野里に比定される野形地区で、須恵器片とともに鉄滓が採取されている。発掘調査によるものでは、川戸2号墳から総重量6.9kgの製錬滓や羽口が出土し〔宇垣1995〕、付近に製鉄、鍛冶遺跡の存在を示唆する。また壬生所在のナイゲ遺跡〔亀山1994〕は、小形の横口付炭窯が検出されている。この種の炭窯は製鉄遺跡に伴うことが知られているから、近接地に製鉄遺跡が所在している可能性が高い。さらに英多郡衙に比定されている旧作東町高本遺跡〔二宮ほか1985〕では、奈良～平安時代の製鉄炉跡が検出されていることや、旧大原町に近い旧作東町の五名には鉦という地名も認められるから、今後の調査によって、英多郡における鉄生産の実態が明らかになるとと思われる。

旧大原町の地域は、山陰と山陽を結ぶ交通路として重要な位置を占めており、古代には播磨と因幡を結ぶ因幡道が整備される。因幡道は現在の兵庫県佐用郡佐用町から釜坂峠を越えて美作市宮本に入り、今岡廃寺の近くを通過後、吉野川に沿ってそのまま北上し、志戸坂峠を越えて鳥取県に至るルートが想定されている。この因幡道に相当すると考えられる遺構が中町B遺跡で検出されている<sup>(4)</sup>〔小



第3図 中町C遺跡出土遺物（1/4）



写真1 中町C遺跡出土遺物

嶋編2007a]。承德3(1099)年に因幡守の平時範は、この因幡道を通って任国に赴き、都への帰途の際、美作国佐奈保で一泊している。この「佐奈保」は英多郡讃甘郷のことであり、時範は今岡廃寺の近くで宿泊したものと考えられる。

平安時代末から鎌倉時代には、前代の郷名を引き継いで大原保、讃甘荘、大野荘、吉野保が成立した。南北朝動乱期には、美作国で播磨の赤松氏と伯耆の山名氏が覇権争いを繰り広げ、旧大原町域は赤松氏が支配権を握った。戦国期には在地武士の新免氏が台頭して、北の尼子氏、西の毛利氏と攻防を繰り返した。こうした動乱の時代を物語る山城が旧大原町内の10数か所で確認されている。赤松氏が拠点とした小原山王山城、新免氏が拠点とした竹山城などの大規模な城郭のほか、中小の城郭が吉野川流域沿いに点在するが、これらの城郭が築かれた背景には、戦国期にもこの地域が中国山地の山間部における交通の要衝であった事情がある。

中世遺跡で発掘調査が実施されたものとして、川上所在の美土路遺跡〔山磨1987〕がある。圃場整備事業に伴う調査で溝、土壌、柱穴を検出し、勝間田焼、備前焼、東播系須恵器、土師器、瓦質土器とともに青白磁の合子を含む中国産磁器が多く出土した。川戸古墳群の調査でも、墳丘周辺の包含層から勝間田焼、備前焼、東播系須恵器などに混在して青白磁の合子や青磁碗の中国産磁器を確認した〔宇垣1995〕。この地域では中世遺跡の調査例が少ないので詳細は不明であるが、出土遺物に中国産磁器が比較的多く含まれるようである。川上所在の真船遺跡<sup>(5)</sup>〔佐藤2005e〕では、砂防工事中に五鈷杵、五鈷鈴、火舎、花瓶、六器、飯食器、二器、打鳴器の法具一式が計22点も出土した。室町初期のものと思われるこれら密教法具は、自然界を対象とする修法で使用し、その後、埋納供養されたものと考えられる。このような密教法具の一括埋納は全国的にも珍しい。また、正平4(1349)年造立の沢田宝篋印塔、正平11(1356)年造立の粟野宝篋印塔のような石塔の優品が現存している。

近世に入り、旧大原町域は津山藩領を経て幕府領となるが、18世紀後半以降には幕府領や土佐藩、佐倉藩、津山藩、明石藩などの飛地領として分割され、さらにその飛地領の支配藩が変わるなど錯綜した状況で明治維新を迎えた。当地域は因幡鳥取藩主の参勤交代路として因幡街道が整備され、古町地区には小原宿が設けられた。現在も本陣、脇本陣を中心に伝統的な町並みが保存されて、往時の賑わいを今に伝える。享保18(1733)年には古町の大火により古町代官所が焼失し、それを機に代官所は下町に移された。この下町陣屋跡の発掘調査が一般国道429号の道路改築に伴い実施されている〔小嶋編2007b〕。調査では、国道に面した石垣や石組の雨落ち溝などが明らかになった。また、報告書中には、「陣屋の井戸」と伝えられる井戸から出土した金属器や井戸所有者宅に伝わる「放火禁止定高札」も紹介されている。この下町の地区は、古町から幕府の陣屋が移されて以来、幕府や各藩の陣屋が置かれ、明治維新に至るまでこの地域の政治の中心地であった。

このように旧大原町は、古来より山陽と山陰を結ぶ交通の要衝として重要な役割を果たしてきた。現代も兵庫県と鳥取県を結ぶ智頭急行線が敷設され、中国横断自動車道姫路鳥取線(鳥取自動車道)が建設されるようになって、その歴史的役割を担い続けていく。

なお、第3図に掲載している遺物は、中町B遺跡の北西方向に位置する中町C遺跡〔尾上2004〕の土壌から出土した弥生土器で、鳥取自動車道関連遺跡の発掘調査に着手する以前に知ることのできた、数少ない貴重な資料である。(福田)

## 第1章 地理的・歴史的環境

\*本文は〔佐藤2002〕掲載の「第2章 地理的歴史的環境」および〔小嶋編2007a・b〕掲載の「第2章 遺跡をとりまく環境」に加筆修正したものである。

### 註

- (1)〔宇垣1995〕に実測図が掲載されている。
- (2)旧大原町が所在した英田郡は、古代は英多郡、中世以降は英田郡と表記される。本書では、古代の行政域を示す場合だけに英多郡を使い、それ以外は英田郡とする。
- (3)美作市教育委員会で保管。すべて薬壺形の須恵器で、8～9世紀代のものと考えられる。
- (4)中町B遺跡については、〔小嶋編2007a〕の隣接地の調査成果を本書第11章において報告する。
- (5)発見当初は新畑遺跡とされていた〔三輪1977〕。

### 参考文献

- ・宇垣匡雅『川戸古墳群発掘調査報告書』岡山県大原町教育委員会 1995
- ・岡田 博「築出し古墳」『岡山県埋蔵文化財報告』15 岡山県教育委員会 1985
- ・岡本寛久「大海廃寺緊急発掘調査報告書Ⅱ」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』33 岡山県教育委員会 1979
- ・尾上元規「大原町中町C遺跡における土木工事」『岡山県埋蔵文化財報告』34 岡山県教育委員会 2004
- ・亀山行雄「壬生・ナイゲ窯跡」『岡山県埋蔵文化財報告』24 岡山県教育委員会 1994
- ・木田 真・酒井雅代「鳥取県智頭枕田遺跡」『考古学研究』第51巻第3号 考古学研究会 2004
- ・栗野克己・福田正継「山の後2号墳発掘調査報告」『岡山県埋蔵文化財報告』8 岡山県教育委員会 1978
- ・小嶋善邦編「中町B遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』204 岡山県教育委員会 2007a
- ・小嶋善邦編「下町陣屋跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』205 岡山県教育委員会 2007b
- ・佐藤寛介「今岡廃寺」『大原町埋蔵文化財発掘調査報告』2 岡山県大原町教育委員会 2002
- ・佐藤寛介「池が平遺跡」『大原町史』史料編(上)考古 大原町史編纂委員会 2005a
- ・佐藤寛介「桂坪十二号墳」『大原町史』史料編(上)考古 大原町史編纂委員会 2005b
- ・佐藤寛介「才の礼古墳」『大原町史』史料編(上)考古 大原町史編纂委員会 2005c
- ・佐藤寛介「野形二号墳」『大原町史』史料編(上)考古 大原町史編纂委員会 2005d
- ・佐藤寛介「真船遺跡」『大原町史』史料編(上)考古 大原町史編纂委員会 2005e
- ・柴田英樹「農地等高度利用促進事業(下町地区)に伴う確認調査」『岡山県埋蔵文化財報告』36 岡山県教育委員会 2006
- ・奈良国立文化財研究所『平城宮発掘調査出土木簡概報』12 奈良国立文化財研究所 1978
- ・奈良国立文化財研究所『平城宮発掘調査出土木簡概報』21 奈良国立文化財研究所 1989
- ・二宮治夫ほか「高本遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』61 岡山県教育委員会 1985
- ・平井 勝「岡山県大原町築出し古墳の小形石棺」『古代吉備』第11集 古代吉備研究会 1989
- ・正岡睦夫・岡本寛久「大海廃寺緊急発掘調査報告書」『岡山県埋蔵文化財報告』26 岡山県教育委員会 1978
- ・三輪嘉六「新畑遺跡出土密教法具の研究」『MUSEUM(東京国立博物館美術誌)』311 東京国立博物館 1977
- ・山磨康平「美土路遺跡ほか」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』64 岡山県教育委員会 1987

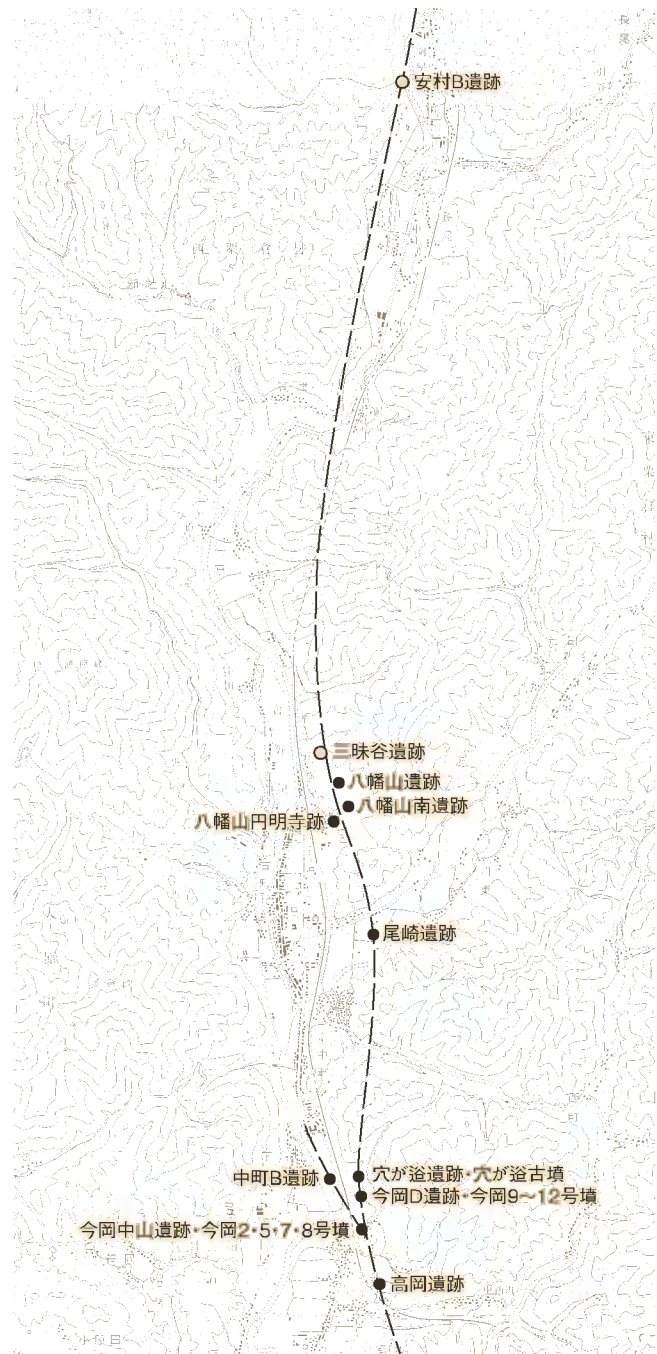
## 第2章 調査の経緯と経過

### 第1節 発掘調査に至る経緯

中国横断自動車道姫路鳥取線（鳥取自動車道）建設に伴う岡山県内の埋蔵文化財の取り扱いについて、岡山県教育委員会は路線がほぼ決定した段階から事業者である日本道路公団（当時）と協議を行い、平成5年には旧大原町と西粟倉村の路線内について詳細遺跡分布調査を実施した。その結果、中町B遺跡、今岡古墳群、尾崎遺跡、八幡山南遺跡、三味谷遺跡、安村B遺跡などの所在が明らかとなった。

その後、事業の進捗状況に合わせて継続的に協議を進めていたが、平成15年度になって、用地買収などの条件整備が整った中町B遺跡について岡山県教育委員会が確認調査を実施した結果、中世の集落跡の存在とその範囲を確認し、本調査を実施することで合意した。そして平成16年度からは中町B遺跡とともに調査範囲の確定している穴が辻古墳から本調査を開始することとなった。さらに、工事工程と発掘調査計画との調整を諮るため平成16・17年度には、本調査と並行して遺跡の内容や範囲を調べるための一次調査も実施し、その結果に基づいて順次本調査を実施することとなった。発掘調査事業について関係機関は計画的に協議を行い、対象とした遺跡の調査は平成18年度までにほぼ終了した。

ただし、条件整備が整わなかった高岡遺跡の一部と西粟倉村内に所在する製鉄関連遺跡については平成19年度末までに終了しなかった。  
(平井)



●本調査実施の遺跡 ○一次調査のみ実施の遺跡

第4図 鳥取自動車道予定路線図 (1/50,000)



## 第2節 発掘調査の経過

## 平成15年度

平成15年11～12月に、条件整備が整った中町B遺跡の確認調査を実施した。道路建設予定地内にトレンチを8か所設定して調査を行った結果、縄文土器や弥生土器のほかに土壌や溝、柱穴を検出し、出土遺物から鎌倉から室町時代の集落が路線内に存在していることが明らかになり、その範囲についても確認することができた。(平井)

## 平成16年度

平成16年4月から調査員6名により、平成15年度の確認調査で遺跡の内容と範囲を確認した中町B遺跡を担当する班と、条件整備が整っていた穴が盗古墳を担当する班との2班体制で調査を開始した。

調査を開始してまもなく、今後の調査計画協議のために路線内に周知されている遺跡の内容や範囲を把握することが必要と判断されたため、穴が盗古墳の調査を担当した班は墳丘面の清掃が終了した段階で調査を中断し、条件整備の整った遺跡から順次一次調査を実施することとなった。

一次調査は5月上旬に八幡山円明寺跡と八幡山南遺跡から開始し、八幡山円明寺跡では幕末期に焼失した寺院遺構の一部や中世の土壌を、また八幡山南遺跡では弥生時代後期の包含層を確認した。尾崎遺跡では丘陵の裾部から南へ約250mの範囲に弥生時代から中世の集落跡の存在を確認した。今岡古墳群では2号墳の周溝のほかに弥生時代の集落跡の存在が明らかとなり、今岡中山遺跡と命名した。今岡D遺跡では弥生時代の集落を確認し、安村B遺跡では路線内には遺跡が広がっていないことが判明した。新たに土器の散布が明らかとなった高岡遺跡では、弥生時代から古墳時代にかけての集落跡を確認し、8月に一次調査は終了した。

一次調査の結果を受けて関係機関が協議した結果、一次調査を担当した班は工事用道路建設予定地にあたる今岡中山遺跡と八幡山円明寺跡、八幡山南遺跡の調査を優先的に実施することとなった。今岡中山遺跡の調査は9・10月に実施し、古墳のほかに弥生時代、古墳時代の竪穴住居などの存在が明らかとなった。11月から開始した八幡山円明寺跡と八幡山南遺跡の調査では、それぞれ弥生時代の集落跡や江戸時代の寺院跡が判明し、12月末に調査を終了した。4月から開始した中町B遺跡の調査は12月に終了したが、縄文時代後期の土器や弥生時代後期の竪穴住居、中世の土壌、柱穴のほかに、古代以降の因幡道と想定される道路遺構が発見され大きな注目を集めた。

なお、11月3日には「中町B遺跡・今岡中山遺跡現地説明会」を開催し、約150名の参加があった。

(平井・内藤)

表1 確認調査・一次調査の成果

年度	遺跡名	調査成果	
		遺構	遺物
平成15年度	中町B遺跡	土壌・溝・柱穴	縄文土器・弥生土器・土師器・須恵器・陶磁器
平成16年度	八幡山南遺跡	溝・たわみ	弥生土器・土師器・陶磁器・瓦
	八幡山円明寺跡	土壌・溝・配石遺構・焼土面・柱穴	土師器・須恵器・陶磁器
	尾崎遺跡	土壌・溝・たわみ・焼土面・柱穴	縄文土器・弥生土器・土師器・須恵器・陶磁器
	今岡5号墳ほか	竪穴住居・土壌・溝・柱穴・今岡2号墳墳丘	弥生土器・須恵器・埴輪・管玉
	今岡D遺跡	竪穴住居・土壌・溝・柱穴	弥生土器・須恵器・鉄鏃
	安村B遺跡	—	—
平成17年度	高岡遺跡	竪穴住居・段状遺構・土壌・柱穴	弥生土器・土師器
	三味谷遺跡	—	—
	八幡山遺跡	竪穴住居・段状遺構・溝・柱穴	弥生土器・須恵器・灰壁・鉄滓

## 平成17年度

平成17年4月から調査員6名により、穴が辻古墳と今岡D遺跡を担当する1班と、三味谷遺跡および八幡山遺跡の一次調査ののち尾崎遺跡側道調査区を担当する2班の体制で開始した。

一次調査の結果、三味谷遺跡では路線内に遺跡は掘がっていなかったが、八幡山遺跡では弥生時代の竪穴住居の存在や弥生土器、古代の鉄滓の出土が判明し、本調査を必要とする遺跡の範囲についても確認することができた。

5月になって、今後の調査工程について関係機関が協議した結果、当初計画には入っていなかった高岡遺跡の発掘調査が最優先となったため、急遽6月から今岡D遺跡の調査を中断して、1班の2名と2班の1名で高岡遺跡の調査を実施することとした。高岡遺跡では弥生時代後期の集落跡を検出し、8月末に終了した。

穴が辻古墳では横穴式石室を調査し、銀装円頭大刀が出土するなど大きな注目を集めた。7月23日には現地説明会を開催し、約250名の参加があった。

尾崎遺跡側道調査区の調査では弥生時代や古代、中世の集落跡を検出し、9月末で終了した。

10月からは調査員2名が増員となり、1班5名で今岡D遺跡を、2班3名で穴が辻古墳および下層の穴が辻遺跡の調査を実施した。今岡D遺跡では新たに横穴式石室を持つ古墳が2基発見され、弥生時代集落とともに12月末に調査を終了した。穴が辻古墳の調査は10月中旬に終了した。継続して調査を実施した穴が辻遺跡では弥生時代後期の集落を検出し、12月末で終了した。(平井・弘田)

表2 調査担当者・期間一覧

年度	遺跡名	所在地	面積(m <sup>2</sup> )	調査期間	担当者
平成15年度	中町B遺跡(確認調査)	英田郡大原町中町57-1ほか	900	11.4~12.11	大橋雅也・小林利晴
平成16年度	中町B遺跡	英田郡大原町中町24ほか	6,100	4.1~12.31	福田正継・岡本泰典・石田為成
	八幡山南遺跡(一次調査)	英田郡大原町古町1290ほか	-	5.14~6.10	内藤善史・米田克彦・山崎孝盛
	八幡山円明寺跡(一次調査)	英田郡大原町古町1306-6ほか	-	6.2~6.14	内藤善史・米田克彦・山崎孝盛
	尾崎遺跡(一次調査)	英田郡大原町古町1929-1ほか	185	6.10~6.29 8.24~8.27	内藤善史・米田克彦・山崎孝盛
	今岡5号墳ほか(一次調査)	英田郡大原町今岡413-2ほか	147	7.1~8.4	内藤善史・米田克彦・山崎孝盛
	今岡D遺跡(一次調査)	英田郡大原町今岡619-1ほか	136	7.15~7.23	内藤善史・米田克彦・山崎孝盛
	安村B遺跡(一次調査)	英田郡西栗倉村影石安村	80	7.26~7.27	内藤善史・米田克彦・山崎孝盛
	高岡遺跡(一次調査)	英田郡大原町宮本288ほか	32	8.4~8.24	内藤善史・米田克彦・山崎孝盛
	今岡中山遺跡	英田郡大原町今岡413-2ほか	1,080	9.11~10.31	内藤善史・米田克彦・山崎孝盛
平成17年度	八幡山南遺跡	英田郡大原町古町1290ほか	375	11.1~12.31	内藤善史・米田克彦・山崎孝盛
	八幡山円明寺跡	英田郡大原町古町1306-6ほか	400	11.1~12.31	内藤善史・米田克彦・山崎孝盛
	今岡D遺跡	美作市今岡619-1ほか	2,860	4.7~12.27	福田正継・井上 弘・弘田和司 澤山孝之・上村 武・石田為成
	穴が辻古墳	美作市今岡685-1ほか	610	4.18~10.14	福田正継・弘田和司・上村 武
	尾崎遺跡	美作市古町1932-2ほか	1,580	4.18~9.30	浅倉秀昭・重根弘和・石田為成
	八幡山遺跡(一次調査)	美作市古町1269ほか	170	4.8~4.27	浅倉秀昭・重根弘和・石田為成
	三味谷遺跡(一次調査)	美作市古町1184-1ほか	160	4.11~5.9	浅倉秀昭・重根弘和・石田為成
	高岡遺跡	美作市宮本288ほか	1,000	6.1~8.31	福田正継・弘田和司・重根弘和
	穴が辻遺跡	美作市今岡685-1ほか	1,200	10.1~12.27	浅倉秀昭・重根弘和・上村 武
平成18年度	八幡山遺跡	英田郡大原町古町1290ほか	2,000	7.1~11.30	福田正継・物部茂樹
	尾崎遺跡	美作市古町1932-2ほか	4,300	4.1~12.27	福田正継・岡本寛久・浅倉秀昭 氏平昭則・物部茂樹・小嶋善邦 上村 武・上西高登
	穴が辻遺跡	美作市今岡685-1ほか	800	4.7~5.31	福田正継・物部茂樹

表3 現地説明会・刊行物

年度	現地説明会・報告会			刊行物等	
	内容	開催日	参加者	内容	刊行日
平成16年度	中町B遺跡・今岡中山遺跡現地説明会	11.3	150名		
平成17年度	穴が辻古墳現地説明会	7.23	250名	美作大原昔絵巻	3.31
平成18年度	美作・大原昔絵巻 一鳥取自動車道遺跡発掘調査報告会	11.11~11.12	350名	発掘調査ニュース 第1号	6.20
				発掘調査ニュース 第2号	10.20
				発掘調査ニュース 第3号	12.27

### 平成18年度

平成18年4月から調査員8名による3班体制で開始した。

穴が辻遺跡の継続調査から開始した1班2名は弥生時代後期の竪穴住居や段状遺構を多数検出した。遺構からは弥生土器や石器、ガラス玉などが出土した。穴が辻遺跡の調査は5月末に終了し、6月からは八幡山遺跡の調査に着手。八幡山遺跡では弥生時代後期の集落と奈良時代の火葬墓などを検出した。弥生時代の竪穴住居では石器製作を示唆する剥片が多く出土している。調査は11月末で終了。

尾崎遺跡の本線調査区の調査から開始した2・3班は南から順次調査を進め、9月末までには国道429号までのA～E調査区を終了させた。これらの調査区では弥生時代中期の竪穴住居や古墳時代、古代、中世の掘立柱建物を確認した。また、縄文時代の土器や石器も少量ではあるが出土した。その後、国道429号より北側のF・G区の調査に着手したが、この調査区では弥生時代や中世の遺構、遺物のほかに古代の掘立柱建物、火葬墓、土器棺などの遺構や破鏡、焼塩土器、緑釉陶器、灰釉陶器、円面硯などの遺物が多数出土した。12月には八幡山遺跡の調査を終了させた1班も調査に加わり、3班体制で尾崎遺跡の発掘調査を実施し、12月末に終了することとなった。

また、11月11・12日には旧大原町総合センターにおいて、平成15から18年度の発掘調査成果を紹介する講演と遺物・写真パネルの展示会「美作・大原昔絵巻ー鳥取自動車道遺跡発掘調査報告会ー」を開催し、約350名の参加があった。(平井・上榎)



写真2 中町B遺跡現地指導



写真3 今岡中山遺跡現地説明会



写真4 穴が辻古墳現地指導



写真5 穴が辻古墳現地説明会

## 第3節 報告書の作成

### 平成16年度

現場終了後の平成17年1月から3月までの3か月間、発掘調査担当者6名が岡山県古代吉備文化財センターにおいて報告書の作成作業を実施した。整理対象とした遺跡は、中町B遺跡、今岡中山遺跡、八幡山円明寺跡、八幡山南遺跡である。

出土遺物の洗浄および注記は現場事務所で行っていたが、一部はセンターでも実施した。その後、土器の復元、実測、写真撮影を行った。土器の復元は抽出、選定して行ったが、丘陵部の遺跡は胎土の風化が進み、復元作業には時間を要することとなった。

遺物の実測作業は、調査員の指示のもと補助員、整理作業員がおもに行ったが、一部については調査員が行い、浄書はすべて調査員が実施した。

また、遺構の図面整理と下図の作成は調査員が行い、浄書は、整理作業員と調査員が行った。遺構、遺物の説明は、発掘担当者が分担して執筆した。(内藤)

### 平成17年度

現場終了後の平成18年1月から3月にかけての3か月間、発掘担当者8名が岡山県古代吉備文化財センターにおいて報告書作成を実施した。整理対象とした遺跡は、穴が辻古墳、今岡D遺跡、尾崎遺跡、高岡遺跡、穴が辻遺跡である。

遺物の洗浄および注記作業の大半は現場事務所で終了しており、遺物の復元作業と実測作業は並行して進めることになった。また、図面の点検整理から製図、写真撮影と割付、原稿執筆を実施した。なお、尾崎遺跡、穴が辻遺跡、高岡遺跡については、平成18年度以降に調査が継続されることから報告書の割付作業において不確定要素を含むこととなった。さらに、平成16・17年度の調査成果をまとめたパンフレット『美作・大原昔絵巻』を作成した。(弘田)

### 平成18年度

現場終了後の平成18年1月から3月にかけての3か月間、発掘担当者8名が岡山県古代吉備文化財センターにおいて整理作業を実施した。整理対象となった遺跡は、八幡山遺跡、尾崎遺跡、穴が辻遺跡である。遺物の洗浄および注記作業の大半は現場事務所で終了しており、遺物の復元作業と実測作業を並行して進めた。また、図面の点検整理から製図、写真撮影と割付、原稿執筆作業を実施した。なお、尾崎遺跡、穴が辻遺跡については、平成18年度の調査成果を受けて昨年度に作成した割付に対して一部手直しを行った。(上楯)

### 平成19年度

平成19年6月から1名が、8月以降はもう1名が加わり平成20年3月まで、平成16から18年度に実施した報告書作成作業の成果を編集し、1冊の報告書としてまとめるための点検、訂正、補充や体裁統一、全体割付、原稿執筆などの作業を、岡山県古代吉備文化財センターにおいて行った。なお、今岡中山遺跡および今岡D遺跡で調査した古墳については、今岡古墳群として抽出し、新たに章立てを行った。また、高岡遺跡は一部条件整備が整わなかったため、条件整備が整った地点のみの調査を平成17年度に実施しており、本報告には現時点の調査成果を収載した。(上楯)

表4 文化財保護法に基づく提出書類一覧

埋蔵文化財確認調査の報告

文書番号 日付	周知・ 周知外	種類および名称	所在地	面積 (㎡)	原因	包蔵地 の有無	報告者	担当者	期間
岡吉調 第325号 H15.12.24	周知	集落跡 中町B遺跡	英田郡大原町中町 57-1ほか	900	道路	有	岡山県古代吉備 文化財センター 所長	大橋雅也 小林利晴	H15.11.4～ H15.12.10

埋蔵文化財発掘の通知（第94条/旧第57条の3）

岡山県文書 番号 日付	種類及び名称	所在地	面積 (㎡)	目的	届出者	期間	主な指示 事項
教文理 第177号 H16.5.11	散布地ほか 中町B遺跡ほか	大原町中町字人町30-1ほか	7,000	道路	日本道路公団中国支社 支社長 大下中夫	調査完了後～ 未定	発掘調査

埋蔵文化財発掘調査の報告（第99条/旧第58条の2）

文書番号 日付	種類及び名称	所在地	面積 (㎡)	原因	報告者	担当者	期間
岡吉調 第27号 H16.4.9	集落跡・古墳 中町B遺跡 穴が透古墳	英田郡大原町中町24ほか	7,560	道路	岡山県古代吉備文化財 センター所長	福田正継・内藤善史 岡本泰典・米田克彦 石田為成・山崎孝盛	H16.4.7～ H16.12.31
岡吉調 第41号 H17.4.7	集落跡・古墳 今岡D遺跡、穴 が透古墳・尾崎 遺跡	美作市今岡619-1ほか	6,470	道路	岡山県古代吉備文化財 センター所長	福田正継・浅倉秀昭 弘田和司・重根弘和 上椋武・石田為成	H17.4.7～ H17.12.31
岡吉調 第222号 H17.6.1	集落跡 高岡遺跡	美作市宮木288ほか	1,000	道路	岡山県古代吉備文化財 センター所長	福田正継・弘田和司 重根弘和	H17.6.1～ H17.8.31
岡吉調 第2004号 H18.4.10	集落跡・製鉄関係 尾崎遺跡・穴が 透遺跡・八幡山 南遺跡	美作市今岡685-1ほか	7,100	道路	岡山県古代吉備文化財 センター所長	福田正継・浅倉秀昭 岡本寛久・氏平昭則 物部茂樹・小嶋善邦 上椋武・上西高登	H18.4.7～ H19.3.31

遺物発見通知（第100条/旧第59条）

岡山県文書 番号 日付	物件名	出土地	出上年月 日	発見者	土地保有者	現保管場所
教文理 第907号 H15.12.12	弥生土器・土師器・須恵器ほか 2箱	英田郡大原町中町57-1ほか 中町B遺跡	H15.11.5～ H15.12.8	岡山県教育委員会 教育長 宮野正司	日本道路公団	岡山県古代吉備文化 財センター
教文理 第1105号 H16.12.28	縄文土器・弥生土器・土師器・須 恵器・備前焼・勝間田焼・青磁・ 白磁・石製品 30箱	英田郡大原町中町 中町B遺跡	H16.4.8～ H16.12.24	岡山県教育委員会 教育長 宮野正司	日本道路公団	岡山県古代吉備文化 財センター
	弥生土器・土師器・須恵器・埴 輪・備前焼・勝間田焼・石製品・ 金属製品 23箱	英田郡大原町今岡 今岡中山遺跡・今岡古墳群				
	弥生土器・土師器・須恵器・備前 焼・勝間田焼・金属製品・鉄滓 5箱	英田郡大原町古町 八幡山南遺跡				
教文理 第610号 H17.9.6	土師器・須恵器・備前焼・勝間田 焼・青磁・瓦・金属製品 3箱	英田郡大原町古町 八幡山南遺跡				
教文理 第750号 H17.10.7	土師器・須恵器・備前焼・勝間田 焼・青磁・瓦・金属製品 9箱	美作市宮木288ほか 高岡遺跡	H17.6.1～ H17.8.31	岡山県教育委員会 教育長 宮野正司	日本道路公団	岡山県古代吉備文化 財センター
教文理 第772号 H17.10.18	縄文土器・弥生土器・土師器・須 恵器・陶磁器・石器・金属製品 15箱	美作市古町1932-2ほか 尾崎遺跡	H17.4.18～ H17.9.30			
教文理 第1024号 H17.12.28	弥生土器・須恵器・石器・金属製 品・玉製品 4箱	美作市今岡685-1ほか 穴が透遺跡	H17.4.18～ H17.10.14			
教文理 第1025号 H17.12.28	弥生土器・須恵器・石器・金属製 品・玉製品 13箱	美作市今岡685-1ほか 穴が透遺跡	H17.10.1～ H17.12.27	岡山県教育委員会 教育長 宮野正司	西日本高速道 路株式会社	岡山県古代吉備文化 財センター
教文理 第305号 H18.6.2	弥生土器 8箱	美作市今岡619-1ほか 今岡D遺跡	H17.4.7～ H17.12.27			
教文理 第983号 H18.12.4	弥生土器 8箱	美作市今岡685-1ほか 穴が透遺跡	H18.4.7～ H18.5.31			
教文理 第1065号 H18.12.28	弥生土器・石器・金属製品・玉製 品・骨片 35箱	美作市古町1269ほか 八幡山南遺跡	H18.7.1～ H18.11.30	岡山県教育委員会 教育長 門野八洲雄	国土交通省	岡山県古代吉備文化 財センター
教文理 第1106号 H18.12.28	縄文土器・弥生土器・土師器・須 恵器・備前焼・勝間田焼・青磁・ 白磁・緑釉陶器・石器・土製品・ 金属製品・木製品 129箱	美作市古町1928-1ほか 尾崎遺跡	H18.4.1～ H18.12.27			

## 発掘調査および報告書作成の体制

## 平成15年度

## 岡山県教育委員会

教育長	宮野 正司
-----	-------

## 岡山県教育庁

教育次長	三浦 一男
------	-------

## 文化財課

課長	西山 猛
----	------

課長代理	田村 啓介
------	-------

課長補佐（埋蔵文化財係長）	平井 泰男
---------------	-------

文化財保護主任	尾上 元規
---------	-------

主事	浜原 浩司
----	-------

## 岡山県古代吉備文化財センター

所長	正岡 睦夫
----	-------

次長	藤川 洋二
----	-------

文化財保護参事	松本 和男
---------	-------

## 〈総務課〉

課長	中田 哲雄
----	-------

課長補佐（総務係長）	笈本 弘忠
------------	-------

主任	小坂 文男
----	-------

## 〈調査第一課〉

課長	岡田 博
----	------

課長補佐（第一係長）	光永 真一
------------	-------

文化財保護主査	大橋 雅也（調査担当）
---------	-------------

文化財保護主事	小林 利晴（調査担当）
---------	-------------

## 平成16年度

## 岡山県教育委員会

教育長	宮野 正司
-----	-------

## 岡山県教育庁

教育次長	釜瀬 司
------	------

## 文化財課

課長	芦田 和正
----	-------

参事	田村 啓介
----	-------

総括副参事（埋蔵文化財班長）	平井 泰男
----------------	-------

主任	小林 利晴
----	-------

主事	秋山 良樹
----	-------

## 岡山県古代吉備文化財センター

所長	正岡 睦夫
----	-------

次長（総務課長）	内田 猛
----------	------

参事	松本 和男
----	-------

参事	伊藤 晃
----	------

## 〈総務課〉

総括副参事（総務班長）	笈本 弘忠
-------------	-------

主任	小坂 文男
----	-------

主任	小川 紀久
----	-------

## 〈調査第三課〉

課長	柳瀬 昭彦
----	-------

## 総括副参事

（第二班長）	福田 正継（調査・報告担当）
--------	----------------

副参事	内藤 善史（調査・報告担当）
-----	----------------

主任	岡本 泰典（調査・報告担当）
----	----------------

主事	米田 克彦（調査・報告担当）
----	----------------

主事	石田 爲成（調査・報告担当）
----	----------------

主事	山崎 孝盛（調査・報告担当）
----	----------------

## 平成17年度

## 岡山県教育委員会

教育長	宮野 正司
-----	-------

## 岡山県教育庁

教育次長	釜瀬 司
------	------

## 文化財課

課長	芦田 和正
----	-------

参事	小林 勝
----	------

参事	田村 啓介
----	-------

総括副参事（埋蔵文化財班長）	平井 泰男
----------------	-------

主任	小林 利晴
----	-------

主事	金出地敬一
----	-------

## 岡山県古代吉備文化財センター

所長	松本 和男
----	-------

次長（総務課長）	内田 猛
----------	------

参事	平松 郁男
----	-------

参事	高畑 知功
----	-------

〈総務課〉	
総括副参事（総括班長）	若林 一憲
主 任	小川 紀久
〈調査第三課〉	
課 長	中野 雅美
総括副参事	
（第一班長）	福田 正継（調査・報告担当）
副 参 事	浅倉 秀昭（調査・報告担当）
副 参 事	井上 弘（調査・報告担当）
主 査	弘田 和司（調査・報告担当）
主 査	澤山 孝之（調査・報告担当）
主 事	重根 弘和（調査・報告担当）
主 事	上楯 武（調査・報告担当）
主 事	石田 爲成（調査・報告担当）
平成18年度	
岡山県教育委員会	
教 育 長	門野八洲雄
岡山県教育庁	
教 育 次 長	神田 益穂
文化財課	
課 長	高畑 知功
参 事	小林 勝
参 事	田村 啓介
総括副参事（埋蔵文化財班長）	光永 真一
主 任	小林 利晴
主 任	金出地敬一
岡山県古代吉備文化財センター	
所 長	松本 和男
次 長（総務課長）	安西 正則
参 事	岡田 博
副 参 事	中島 謙次
〈総務課〉	
総括副参事（総務班長）	若林 一憲
主 任	小川 紀久
〈調査第三課〉	

課 長	平井 泰男
総括副参事	
（第二班長）	福田 正継（調査・報告担当）
副 参 事	浅倉 秀昭（調査・報告担当）
副 参 事	岡本 寛久（調査・報告担当）
主 任	氏平 昭則（調査・報告担当）
主 任	物部 茂樹（調査・報告担当）
主 任	小嶋 善邦（調査・報告担当）
主 事	上楯 武（調査・報告担当）
主 事	上西 高登（調査・報告担当）
平成19年度	
岡山県教育委員会	
教 育 長	門野八洲雄
岡山県教育庁	
教 育 次 長	神田 益穂
文化財課	
課 長	藤井 守雄
参 事	木山 潤郎
参 事	田村 啓介
総括副参事（埋蔵文化財班長）	光永 真一
主 任	小嶋 善邦
主 任	金出地敬一
岡山県古代吉備文化財センター	
所 長	高畑 知功
次 長（総務課長）	小林 勝
参 事	岡田 博
副 参 事	中島 謙次
〈総務課〉	
総括副参事（総務班長）	若林 一憲
主 任	福池 光修
〈調査第二課〉	
課 長	島崎 東
総括副参事（第二班長）	江見 正己
副 参 事	福田 正継（報告担当）
主 事	上楯 武（報告担当）

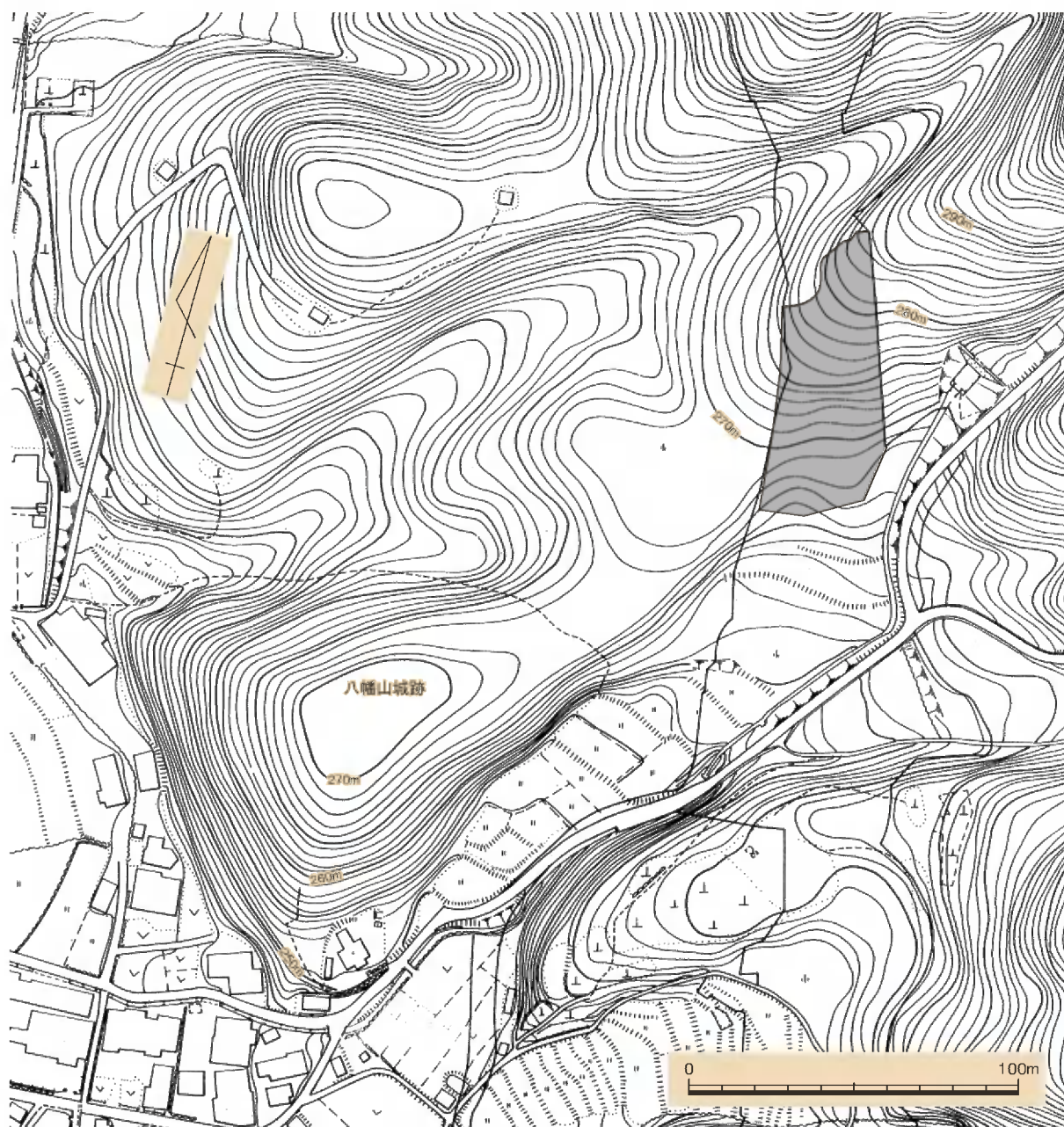
調査・報告書作成協力者

明石 務・大平 茂・岡田章一・甲斐昭光・角田徳幸・河野一隆・木田 真・北野 重・木下 良・酒井雅代・坂本豊治・積山 洋・高畑富子・田中総一・茶谷 満・中村剛彰・新谷俊典・橋本英将・長谷川眞・花谷 浩・原田倫子・日野尚志・藤木 透・藤原 隆・本田光子・松尾充晶・松岡千寿・村上恭通・柳澤清一・山路直充

## 第3章 八幡山遺跡

### 第1節 調査の概要

八幡山遺跡の一次調査は、この遺跡の南側に所在する八幡山南遺跡の一次調査と並行して、平成16年4月に実施したのが最初である。トレンチは、吉野川に向かって流れる小川が存在する谷部の1か所だけで、北側の丘陵の尾根や斜面には、保安林の解除が行われていなかったため、設定することができなかった。このトレンチでは、遺構はないが弥生土器や備前焼の破片が出土したことから、地形



第5図 調査区位置図 (1/2,000)



の高い北側の丘陵に遺構が存在する可能性が考えられた。

保安林の解除が行われ、森林の伐採作業が終了したので、平成17年4月に北側に位置する三味谷遺跡と並行して、八幡山遺跡の本格的な一次調査を実施した。現地へ行って驚いたのは、遺跡の中央に森林伐採後の搬出用道路が敷設され、約5mの幅で直線的に大きく削平されていたことである。

この道路による削平は地山岩盤にまで達しており、平面的に遺構を確認することができなかった。削平された壁面を清掃したところ、弥生時代の竪穴住居（竪穴住居4）と段状遺構が検出された。竪穴住居の柱穴には、完形品の壺（11）が入れられていた。丘陵南斜面の北裾に設定したトレンチでは、遺構は確認できなかったが、堆積土中から弥生土器、須恵器、炉壁が出土した。丘陵尾根上の長いト

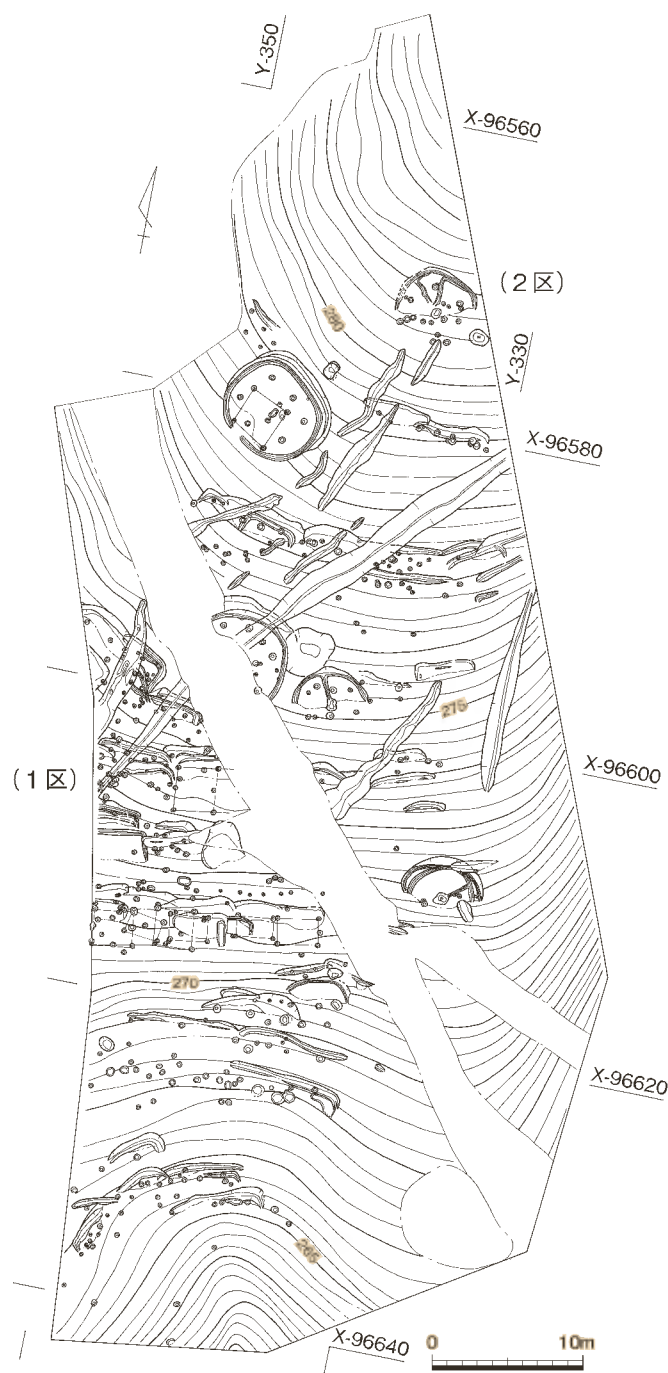
レンチでは、明瞭な遺構は存在せず、わずかに弥生土器片が出土した。路線用地西側の境界付近に位置する、緩やかな丘陵の南斜面のトレンチでは、弥生時代の段状遺構や古代の溝が検出され、古代の溝中から鉄滓が出土した。

このような一次調査の結果から、調査範囲は丘陵の南斜面部で、調査対象面積は2,000㎡となり、弥生時代の集落と古代の製鉄関連遺構が存在する可能性が推定された。

二次調査である全面調査では、調査範囲を削平された道によって東西に分け、西側を1区、東側を2区として、1区から着手した。

1区の調査では、道の敷設によって削平された土砂の中に、弥生土器片を多く含んでいたため、その土器片採集から始めた。南端部では深い谷地形が検出されたから、少人数の作業員では対応できなくなり、他の班の応援を求めた。

2区の調査では、尾根の近くに2軒の竪穴住居を確認し、未調査の北側斜面で数片の弥生土器片を採集したので、遺構の存在する範囲が尾根の北側斜面まで続くと考えられた。それで現地協議を開催し、調査範囲を約300㎡拡張しても期限内に調査を終了させるという条件で作業を行い、平成17年11月末日にすべての発掘調査が終了した。（福田）



第6図 遺構全体図 (1/500)

## 第2節 弥生時代以前の遺構

### 1 概要

弥生時代以前の遺構は土壇が3基ある。これらの土壇の埋土は弥生時代中期中葉以降の集落に伴う遺構埋土とは明瞭に区別できるもので、形態から落とし穴と推定される。いずれも南西方向へ舌状に延びる尾根の稜線付近に立地する。(物部)

### 2 土壇

#### 土壇1 (第7・8図)

土壇1は、調査区の北部、調査区東境に位置し、尾根の稜線からわずかに東へ回り込んだ斜面に立



第7図 弥生時代以前の遺構配置図 (1/600)

地する。標高は281.0m付近である。検出面での平面形は長軸約120cm、短軸103cmの不整楕円形を呈するが、底面は70×50cmの隅丸長形状を呈する。検出面からの深さは約80cmを測り、底面中央に直径約13cm、深さ約45cmの小穴がある。埋土は地山と類似しており、黒ボクは見られない。

出土遺物はなく、時期を決めがたいが、埋土が、弥生時代中期以降の黒っぽい遺構埋土とは明瞭に違うことや土壌の形状から弥生時代前半以前、縄文時代にかけての落とし穴と推定される。(物部)

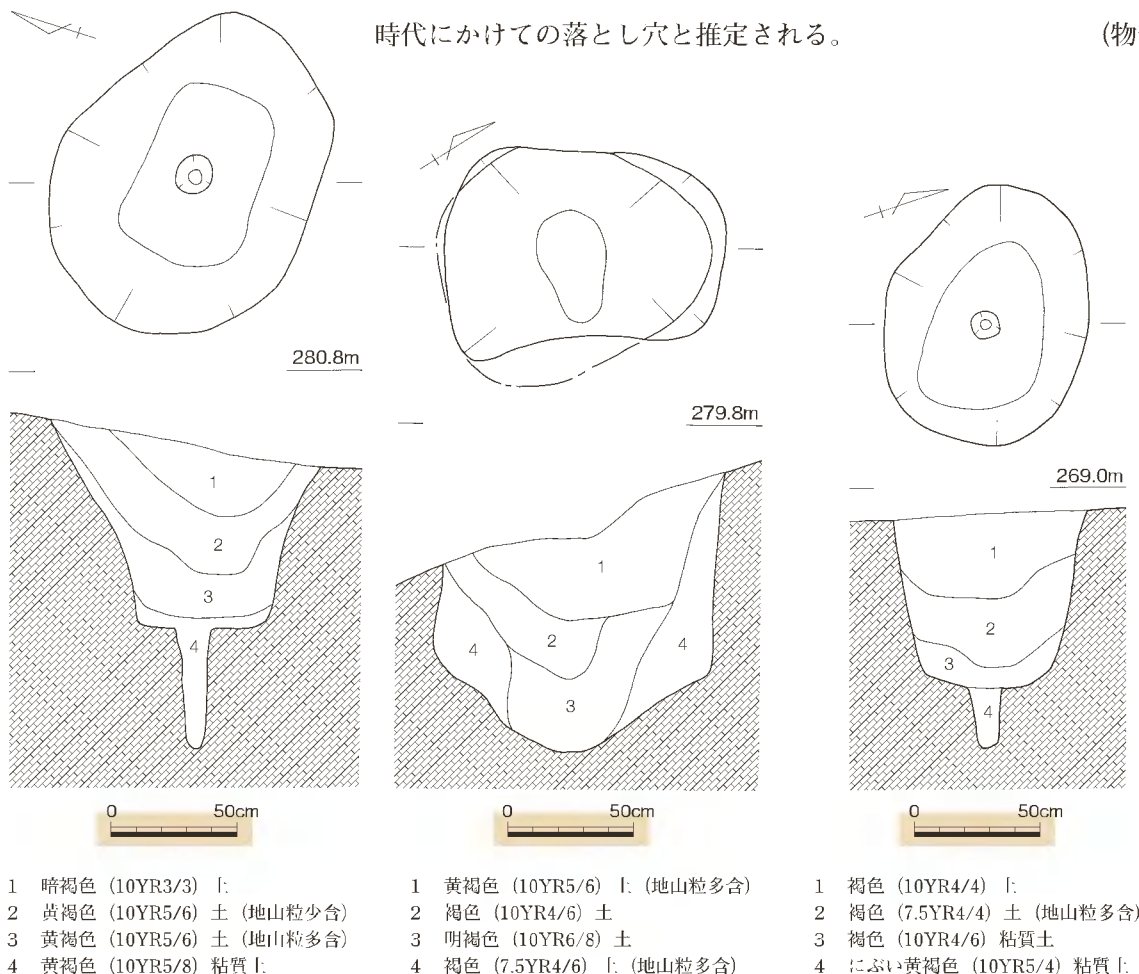
**土壌2 (第7・9図)**

土壌2は、調査区の北部、土壌1の西約10mに位置し、尾根の稜線上に立地する。標高は280.0m付近である。検出面での平面形は長軸111cm、短軸73cmの不整長方形を呈し、検出面からの深さは約110cmを測る。壁面が少しオーバーハングしており、壁が崩れていると推定される。埋土に黒ボクは見られない。出土遺物はない。埋土は土壌1の埋土と似ており、底面に小穴はないが、落とし穴の一種と考えられる。時期は弥生時代前半以前、縄文時代にかけてと思われる。(物部)

**土壌3 (第7・10図、図版10-4)**

土壌3は、調査区の南部、調査区西境に位置し、尾根の稜線からわずかに東へ回り込んだ斜面に立地する。すぐ東側に小さな谷があり、その谷頭付近ともいえる。検出面での平面形は長軸約100cm、短軸78cmの楕円形を呈し、検出面からの深さは約70cmを測る。底面中央に直径約10cmの小穴がある。

埋土は地山と類似しており、黒ボクは見られない。出土遺物はない。土壌1と同様に、埋土や土壌の形状から、弥生時代前半以前、縄文時代にかけての落とし穴と推定される。(物部)



第8図 土壌1 (1/30)

第9図 土壌2 (1/30)

第10図 土壌3 (1/30)

## 第3節 弥生時代から古墳時代初頭の遺構・遺物

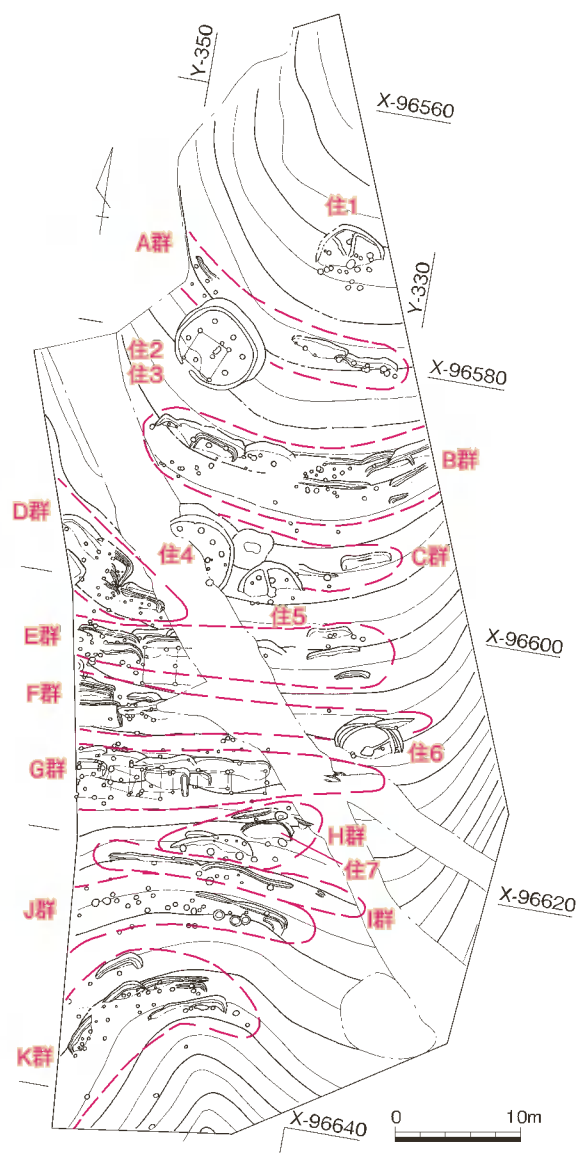
## 1 概要

弥生時代中期後半から古墳時代初頭にかけての集落を確認した。遺構は調査区全体にわたって検出され、竪穴住居14軒、段状遺構63面、土壇10基を数え、掘立柱建物の可能性のあるものもいくつかある。この集落は尾根の先端部から200mほど奥に入った位置にあり、先端で高まった尾根が一度鞍部をつくり、再び昇っていく、ちょうどその昇っていく部分の尾根筋から南斜面にかけて立地している。集落は調査区を越えて広がっている。調査区東側へは一部の段状遺構が続くが、あまり伸びていないと考えられる。一方、調査区西側へは尾根の鞍部まで緩斜面が続いており、さらに多くの遺構が所在していると推定される。このことから、今回調査した範囲は集落全体の2分の1程度と思われる。尾根先端部西側の平地と集落との比高差は25～35mである。

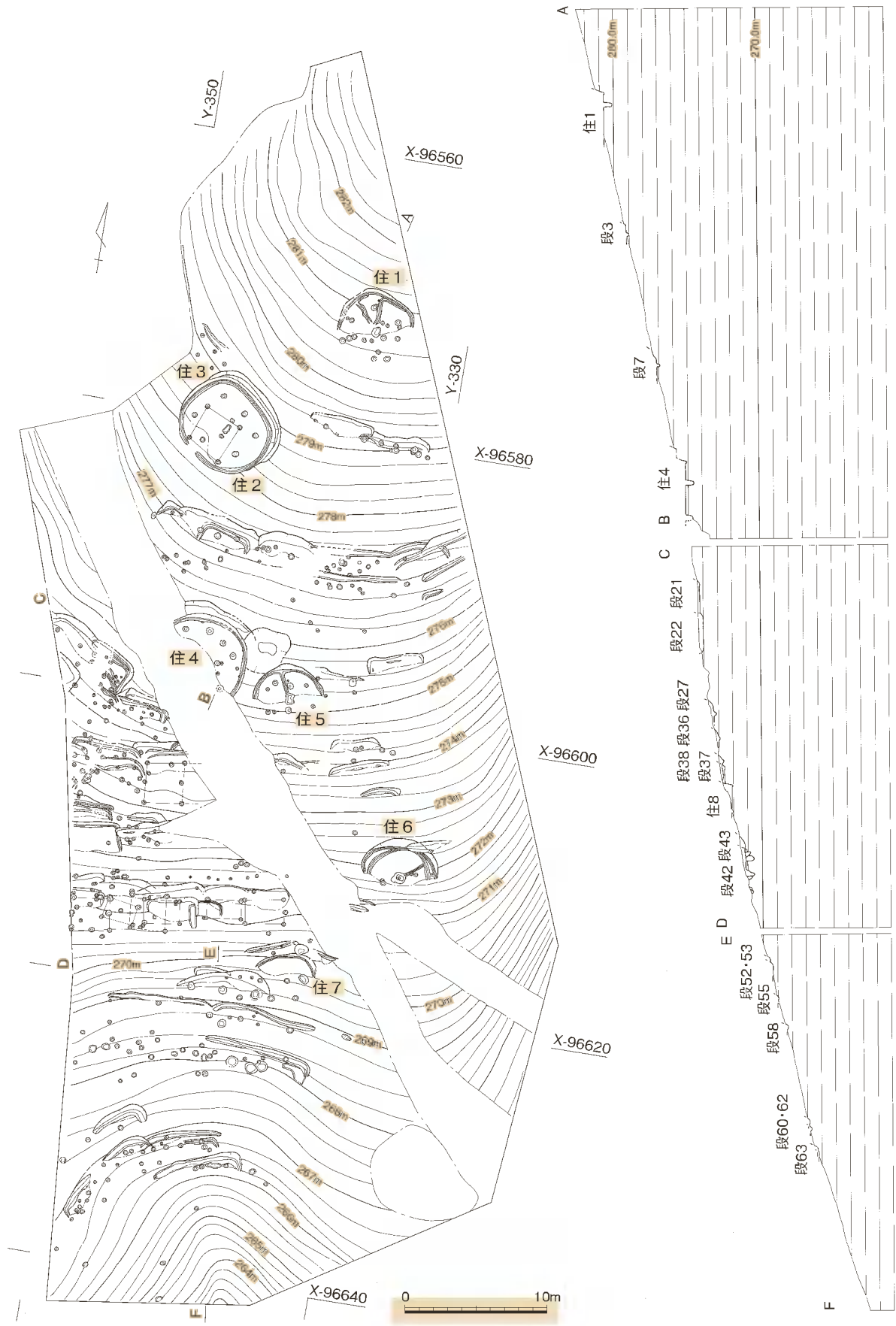
検出された段状遺構は、同じ高さで横方向に連なっている状況がみられた。これらのまとまりは比高差13mの間に10段が認識でき、便宜上、第11図のようにA～Kの群に分ける。竪穴住居のうち、円形と推定される7軒は、尾根筋周辺や南斜面でも、調査区南端部で検出された谷部によってできた小さな尾根状地形の部分に立地していることから、A～K群とは別に取り扱う。その他の竪穴住居は段状遺構群の中に混在する状況がみられることから、A～K群中で説明する。

調査時や整理作業において、A～K群の時期や個々の遺構の時期をできるだけ特定しようと努めたが、なかなか難しく、結局、時期不明となってしまった遺構も多い。しかしながら、A～K群には、まったく別々の時期の遺構がたまたま集まったものもあるが、多くは近い時期の遺構が連続して群を構成している状況がみられる。

出土遺物は土器のほかに、紡錘車や分銅形土製品、石斧、石包丁、石鎌、石錐などの石器、鑄造鉄斧と考えられる鉄器、ガラス小玉などがある。また、石包丁や環状石斧の未製品、サヌカイトや安山岩の剥片も多く検出され、石器を製作していたと推定される。焼失住居である竪穴住居5から茅材と推定される圧痕が付いた焼土塊が検出され、屋根に土を乗せていたと推定される。(物部)



第11図 弥生時代遺構群分け図 (1/600)

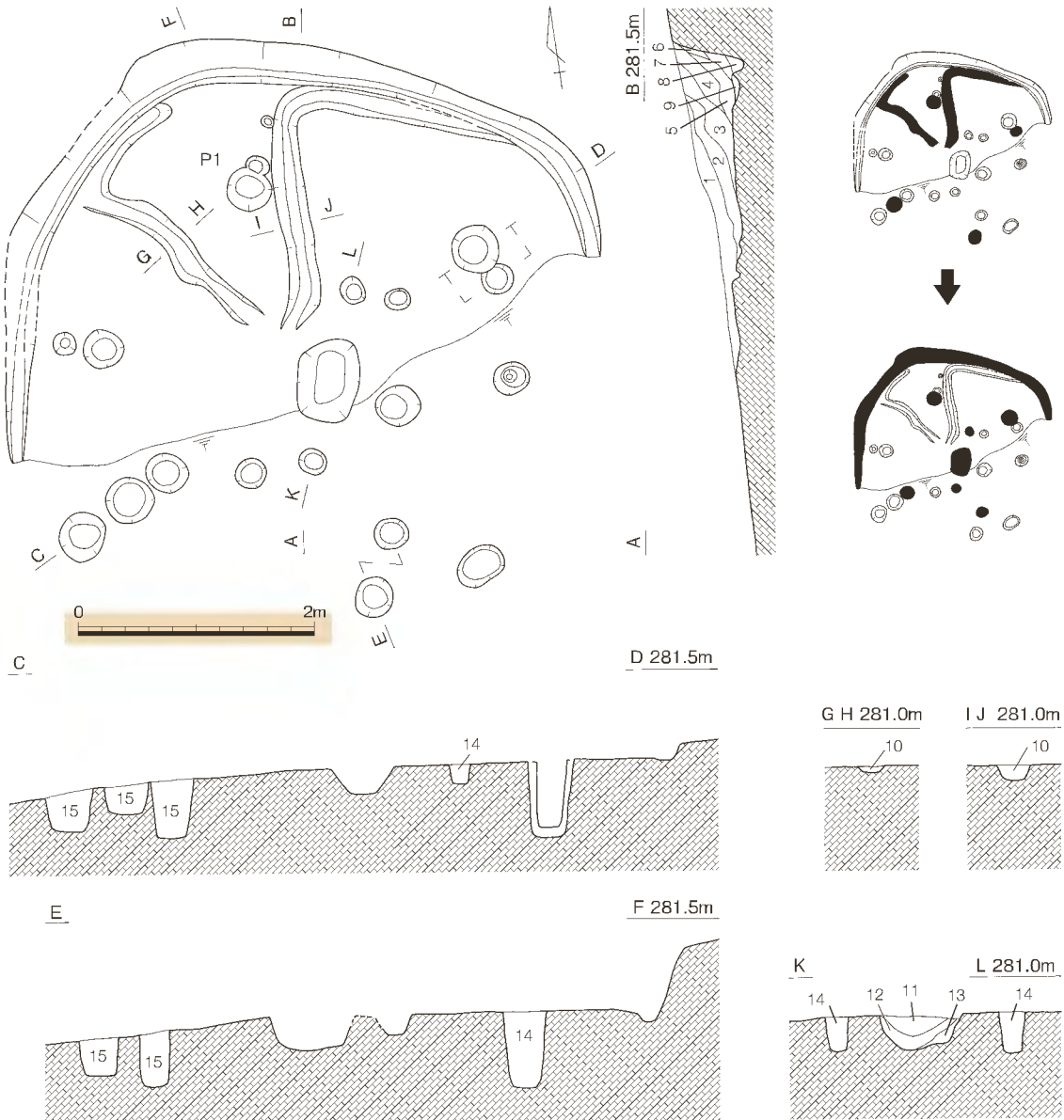


第12図 弥生時代遺構配置図 (1/400)

## 2 円形竪穴住居

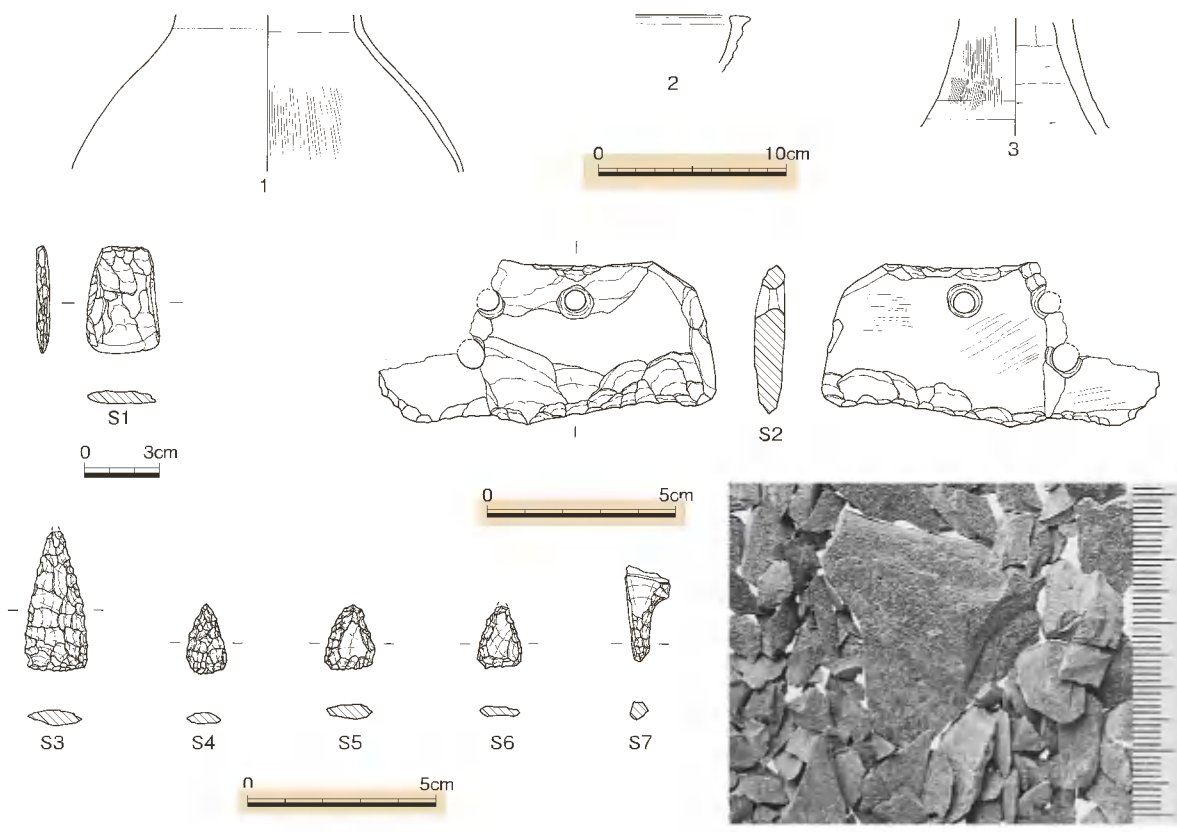
### 竪穴住居1（第11～14図、写真6、図版3-1）

竪穴住居1は確認された遺構の中で最高所に位置し、尾根の稜線上に立地する。壁体溝や柱穴から同規模の建て替えが少なくとも1回行われている。最終段階の竪穴住居は、直径500cm前後の隅丸方形気味の平面形と推定される。支柱は4本で、長方形の中央穴の長軸線上に小穴が2個配置されている。前段階の竪穴住居の支柱は明確ではないが4本と推定され、2条の溝が壁際から屈曲して床面中央へ延びる。埋土中から土器が少量出土しているが、その特徴から、竪穴住居1最終段階の時期は弥



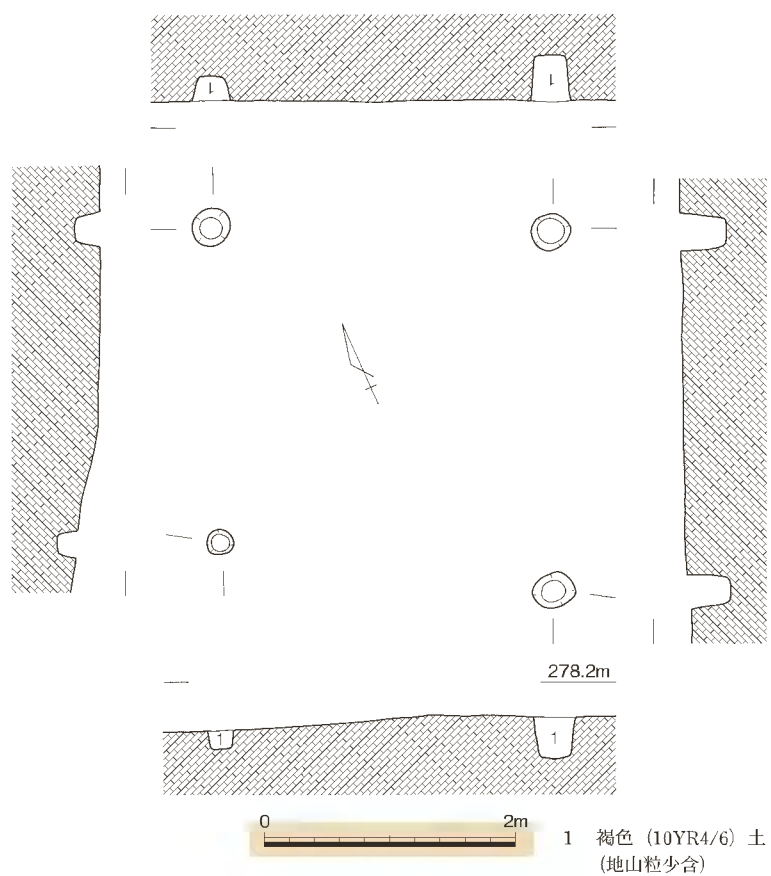
- |                             |                           |                              |
|-----------------------------|---------------------------|------------------------------|
| 1 褐色 (7.5YR4/6) 土           | 6 褐色 (7.5YR4/6) 土         | 11 黄褐色 (10YR5/6) 土           |
| 2 褐色 (10YR4/6) 土 (地山粒含)     | 7 褐色 (10YR4/6) 土          | 12 褐色 (10YR4/6) 土 (焼土粒・炭粒含)  |
| 3 褐色 (7.5YR4/6) 土 (焼土粒・炭粒含) | 8 褐色 (7.5YR4/6) 土         | 13 褐色 (10YR4/6) 土 (焼土粒・炭粒多含) |
| 4 褐色 (7.5YR4/4) 土           | 9 明褐色 (7.5YR5/8) 土        | 14 褐色 (7.5YR4/6) 土           |
| 5 褐色 (7.5YR4/4) 土 (炭粒含)     | 10 褐色 (7.5YR4/6) 土 (焼土粒含) | 15 黄褐色 (10YR5/6) 土           |

第13図 竪穴住居1 (1/60)



第14図 竪穴住居1 出土遺物 (1/4・1/3・1/2)

写真6 サヌカイト剥片



第15図 竪穴住居2 (1/60)

1 褐色 (10YR4/6) 土  
(地山粒少含)

生時代中期後半と推定できる。石器が多く出土している。扁平片刃石斧S 1は、柱穴P 1の底面で検出された。S 2の磨製石包丁は穿孔の部分で割れ、大きい方の破片が約10mほど斜面下方に流出していた。S 3～6は石鏃、S 7は石錐で埋土中から出土した。また、床面および埋土下層から460点、40gのサヌカイト剥片が検出された。3～5mm大が9割を占め、サヌカイト製石器の製作が行われたと推定される。また、安山石の剥片が1点検出されたが、わずかであるため何とも言えない。

(物部)

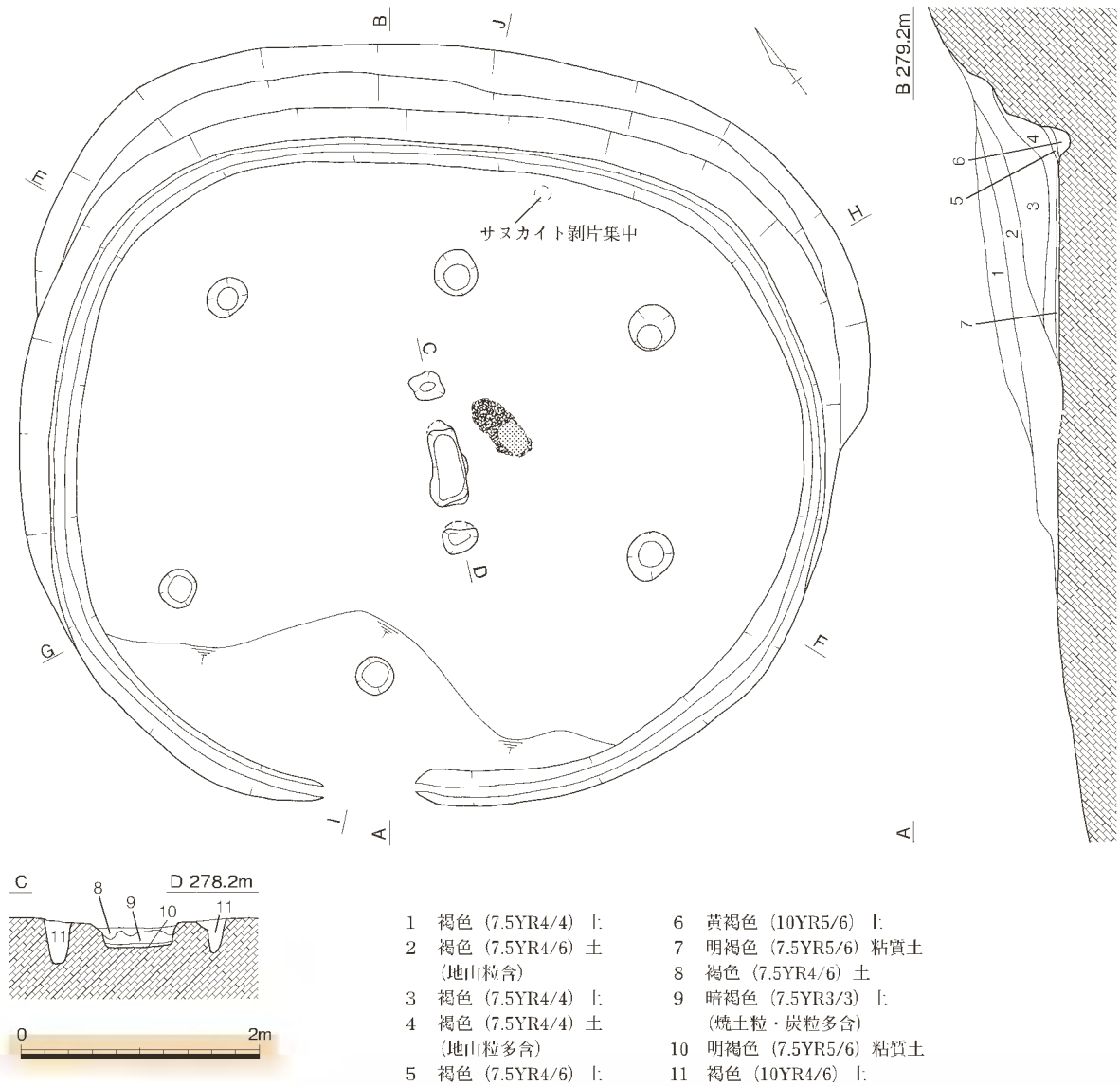
竪穴住居2 (第11・12・15図)

竪穴住居2は尾根稜線上に立地する。竪穴住居3によって全体を

削平されている。竪穴住居3の床面で4個の支柱穴を検出した。柱穴の深さは20~30cmと浅く、竪穴住居3の柱穴が深さ50~70cmあることからすると、竪穴住居2の床面は深さ20~40cm削平されている可能性がある。竪穴住居2は、柱穴から壁体溝までの距離を1m程度と仮定すると、直径あるいは一辺が約500~600cm規模の竪穴住居と推定され、時期は竪穴住居3の時期以前である。(物部)

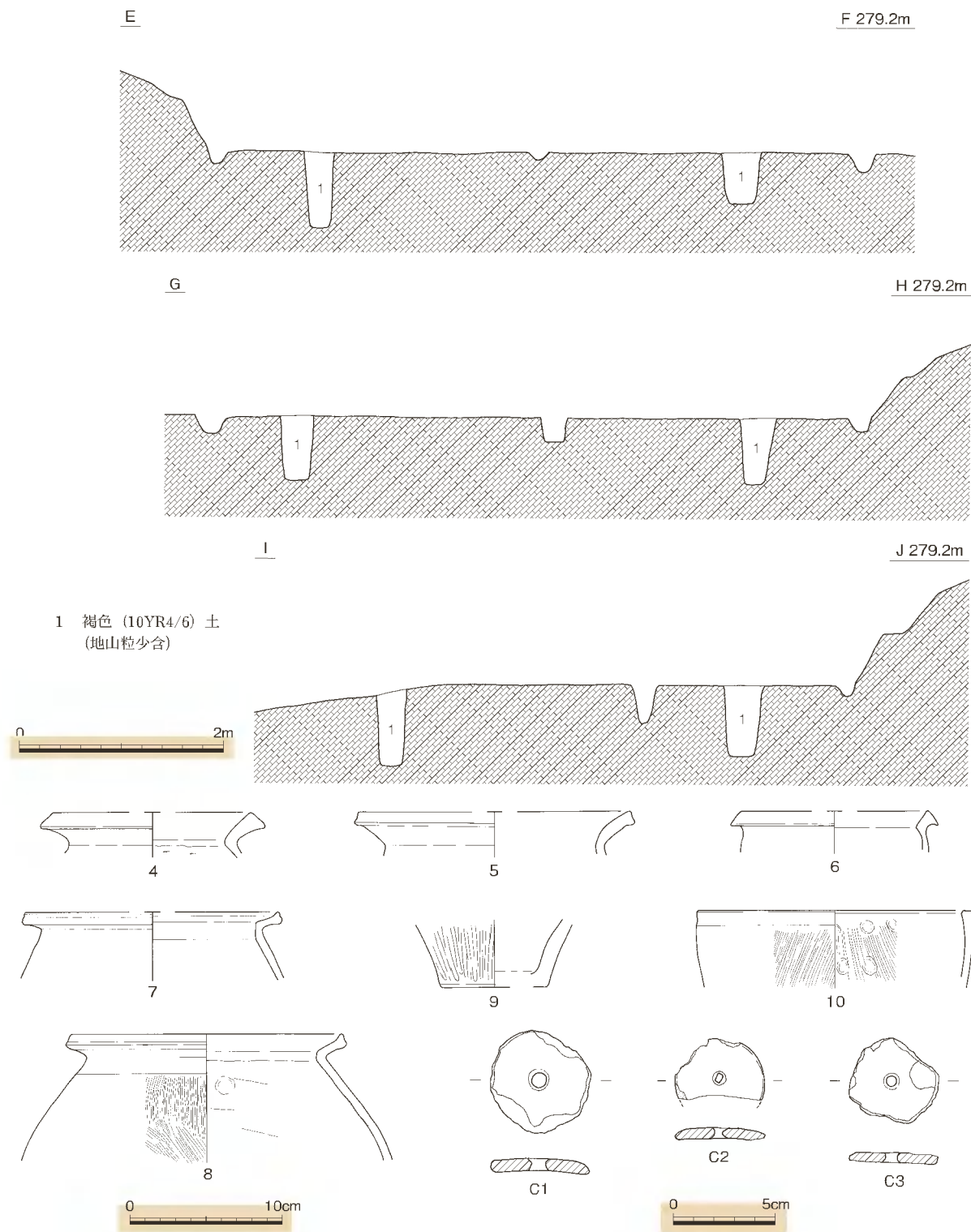
**竪穴住居3** (第11・12・16~18図、写真7・8、図版3-2・4-1・2)

竪穴住居3は竪穴住居1の南西約7mに位置し、尾根稜線上に位置する。平面形は円形を呈するが、山側の北東方向の壁は直線状をなす。規模は長軸約650cm、短軸約550cmを測る。検出面からの深さは、山側で約70cmを測るが、床面から高さ45cmの所に幅の狭い段をもつ。支柱穴は6個で、その配置は住居の平面形にあわせて、山側の1個が内側に入っている。中央穴は長方形で、内部には炭粒、焼土粒を多く含む土が堆積している。また、中央穴の長軸方向両側に1個ずつ小穴がある。支柱穴と異なり、小規模で先細りする。出土遺物には土器と土製品、石器がある。土器片は小片が多く、4~6・9の甕は埋土上半、甕8と鉢10は埋土下層から出土したものである。下層出土のほかの土器小片を見ても弥生時代中期後半の時期に限定できそうなので、竪穴住居3はその時期と考えられる。埋土上



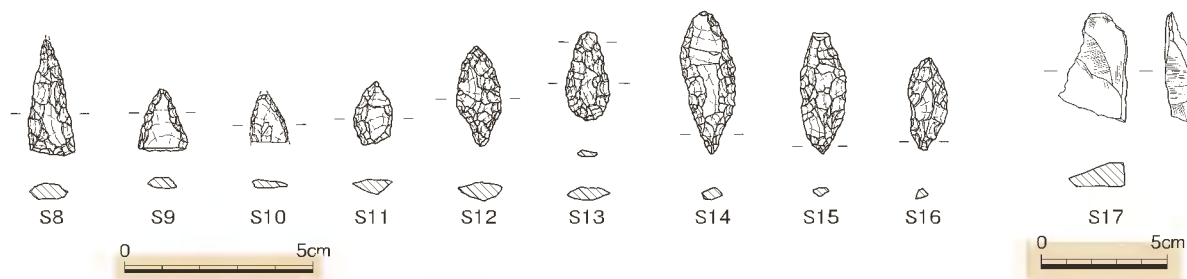
第16図 竪穴住居3 (1/60)





第17図 竪穴住居3断面 (1/60)・出土遺物 (1/4・1/3)

半に混入する後期の土器は竪穴住居3の上方に位置するA群段状遺構1から流出したものと推定される。土製品C1～3は紡錘車と考えられる。サヌカイト製石鏃、石錐の9点は埋土下層あるいは床面から検出された。S12は有茎の石鏃、S11・13は凸基式の石鏃と考えられるが、S13などは基部端部を両面からきれいに調整しており、使用痕がないので何とも言いえないが、あるいは錐かもしれない。S17は砥石の破片である。また、床面や埋土下層にサヌカイト剥片が多く、全部で179片が検出できた。



第18図 竪穴住居3出土遺物 (1/3・1/2)

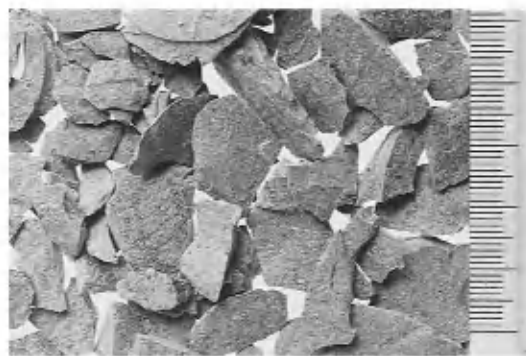


写真7 サヌカイト剥片

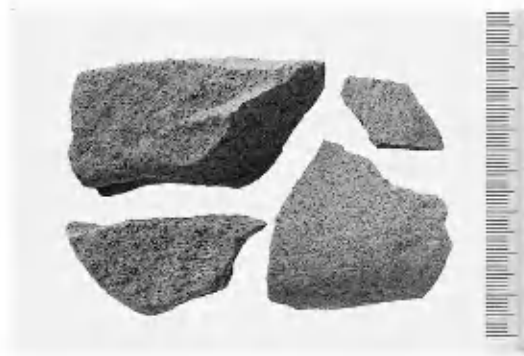
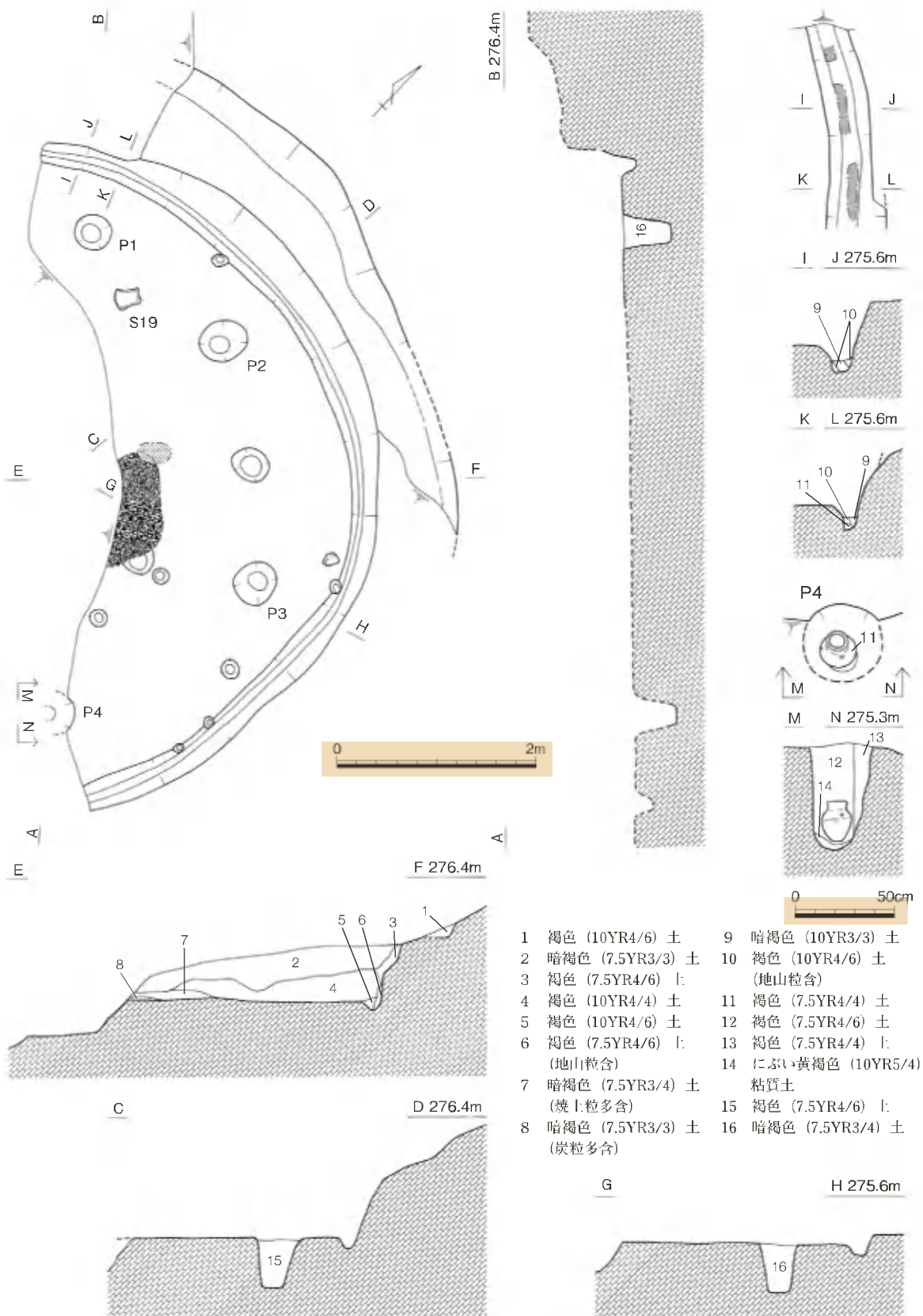


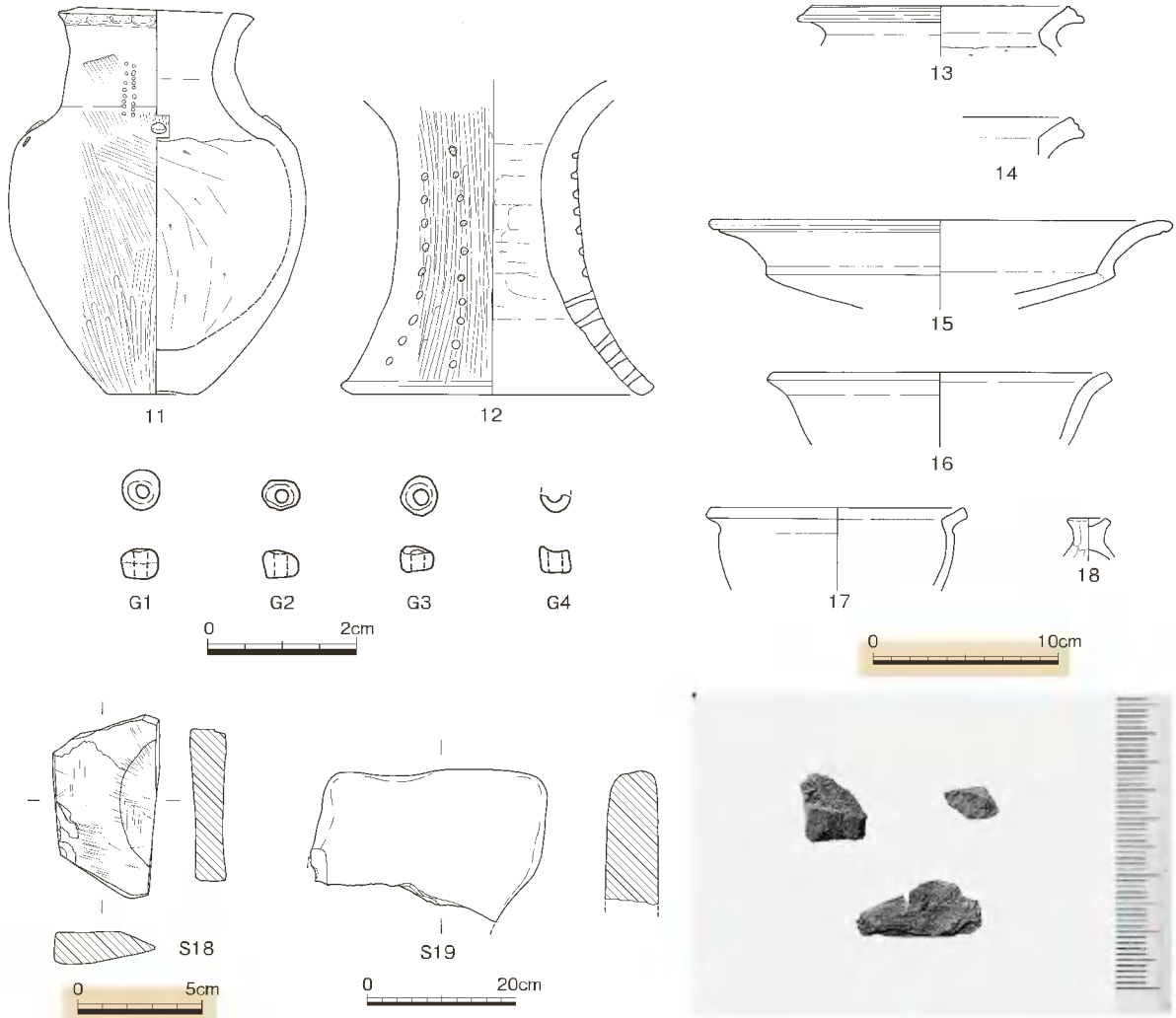
写真8 安山岩剥片

3～10mm大が多く、北東壁際床面上に集中する。サヌカイト以外に安山岩の剥片が6点、粘板岩状緑色岩の剥片が4点見られたが、少量なので積極的に石器製作とは言えないが、可能性は高い。(物部) 竪穴住居4 (第11・12・19・20図、写真9、図版4-3～5)

竪穴住居4は竪穴住居3の南下方約10mに位置し、尾根稜線から少し南に回った斜面に立地する。この竪穴住居は一次調査において道路壁面で確認されていたもので、削平から免れたのは竪穴住居の約2分の1であった。平面形は直径約650cmの円形を呈すると推定され、山側の壁面には床面から60cmの高さに幅50cm前後の段を設けている。支柱穴は6個と推定され、そのうち4個が残っていた。道路壁面に見えていたP4の内部には完形の広口壺11があり、おそらく、柱を抜いた後、納められたものと考えられる。道の掘削土を精査したが、このような完形の土器あるいはそれに近い土器の破片は見られなかったため、土器を納めたのは、6個の柱穴のうちP4だけである可能性が高い。中央穴は削平されていたが、その付近の床面上には炭と焼土粒の集中や、被熱し赤変した範囲も確認された。壁際には細く深い壁体溝が巡るが、その北西部で壁体の痕跡と考えられる暗褐色土を検出した。平面形は長さ25～30cm、幅約5cmの長方形を呈し、10～15cm間隔を空けている。壁体溝のほかの部分も精査したが検出されたのはこの部分だけであった。遺物には土器、石器、ガラス小玉などがある。器台12はP2東側の壁際、埋土下層から出土したもので、口縁部と脚端部を一部欠損する。赤みがかった色調と大きめの白色砂粒を含む胎土は、壺11と非常に類似している。壺11頸部の列点文は2列1単位で5単位あるが、4単位が近接し、1単位が離れている。竹管状の原体である。12の文様は先細りする串状の原体で刺突したもので、4列あるが、2列が近接する。高杯15、鉢16は埋土上層から、他の土器は埋土下層から出土している。G1～4は水色を呈するガラス小玉で埋土下半から検出された。S18は流紋岩製の砥石である。S19は床面で検出した扁平な安山岩で、使用痕は見られないが、石器原石の可能性もある。石材の剥片では、サヌカイトが1点、粘板岩状緑色岩が3点検出され、サヌカイト剥片は混入と思われるが、粘板岩状緑色岩剥片はわずかながら認められるので、石器製作の



第19図 竪穴住居4 (1/60 · 1/30)



第20図 竪穴住居4出土遺物 (1/10・1/4・1/3・1/1)

写真9 粘板岩状緑色岩剝片

可能性があると考えられる。竪穴住居4の時期は土器の特徴から弥生時代後期前葉から中葉と推定される。また、柱穴への土器埋納やガラス小玉の出土から、引っ越しの際に祭祀を行った可能性もある。(物部) 竪穴住居5 (第11・12・21図、写真10、図版5-1)

竪穴住居5は竪穴住居4の東側に隣接し、尾根稜線から少し南に回った斜面に立地する。南半部は流出しているが、直径約500cmの円形を呈する竪穴住居と推定できる。埋土中には炭や焼土粒が多く混じり、焼失住居と推定される。ただ、上屋を構成する木材の炭化物はあまり残っていなかった。床面で柱穴をいくつか検出したが、埋土に炭粒や焼土粒を含むものと、全く含まないものがあり、後者はこの竪穴住居4と重複する段状遺構などの別の遺構に伴う可能性もある。支柱は2本で、長方形を呈する中央穴を挟むように配置されている。この2個の支柱穴を結ぶ線つまり屋根の棟方向は、等高線と直交し、次に説明する竪穴住居6と異なる。壁体溝と中央穴を結ぶ溝が検出された。中央穴から南へ延びていくかどうかは床面が流出しているため解らない。留意されるのは、壁体溝と中央穴、それらを繋ぐ溝の埋土が竪穴住居の埋土と同様に炭や焼土粒を多く含んでいたことで、焼失直前にこれらが開放状態であったと考えることができる。これは穴が盗遺跡の竪穴住居5と同じ状況である。出土土器は少ない。甕19は中央穴の底面に貼り付いた状態で、甕20底部は埋土中から検出された。石鏃S20は埋土中、磨製の扁平片刃石斧S21は壁際の床面付近で出土した。この石斧は被熱し、表面

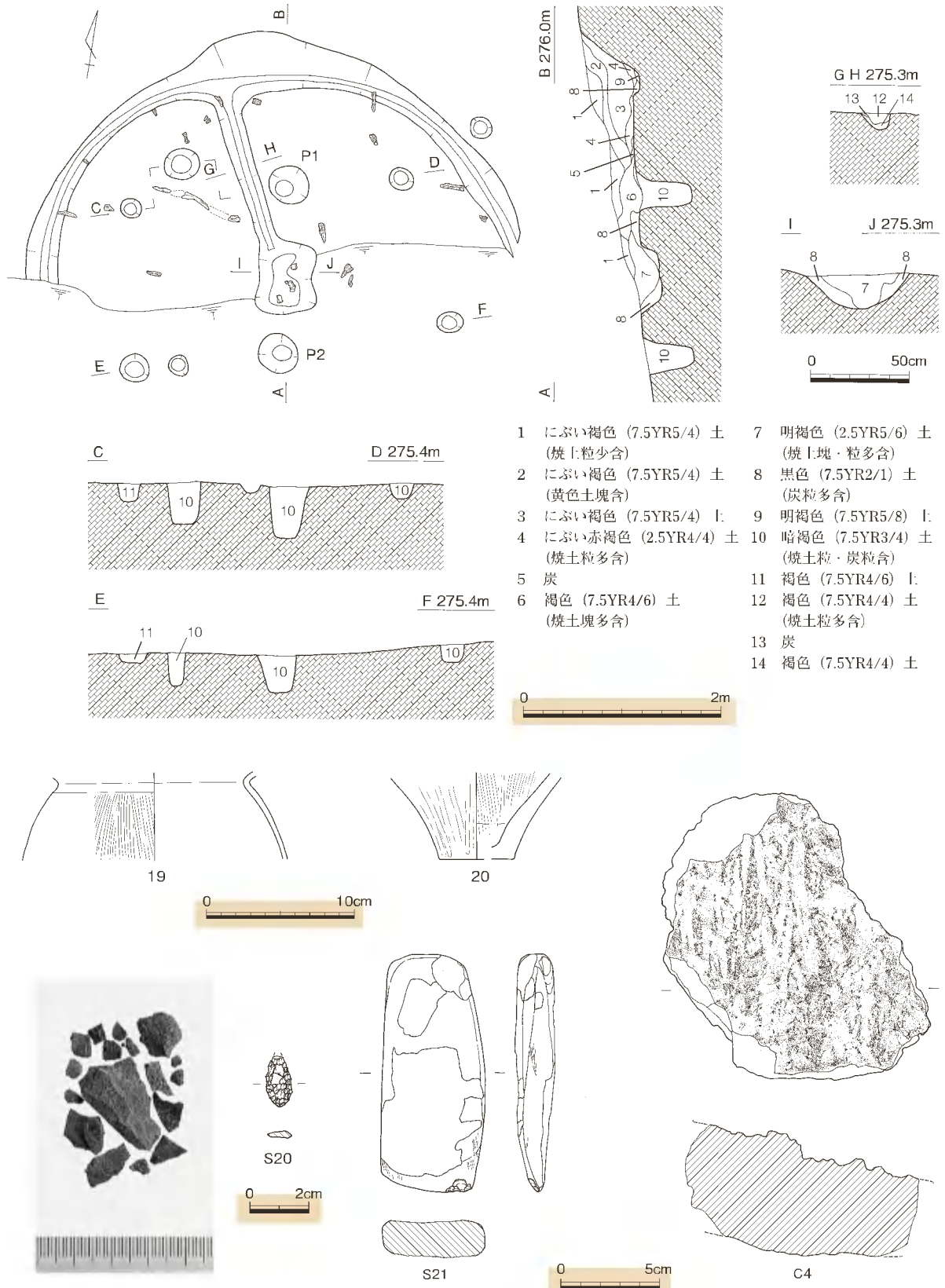
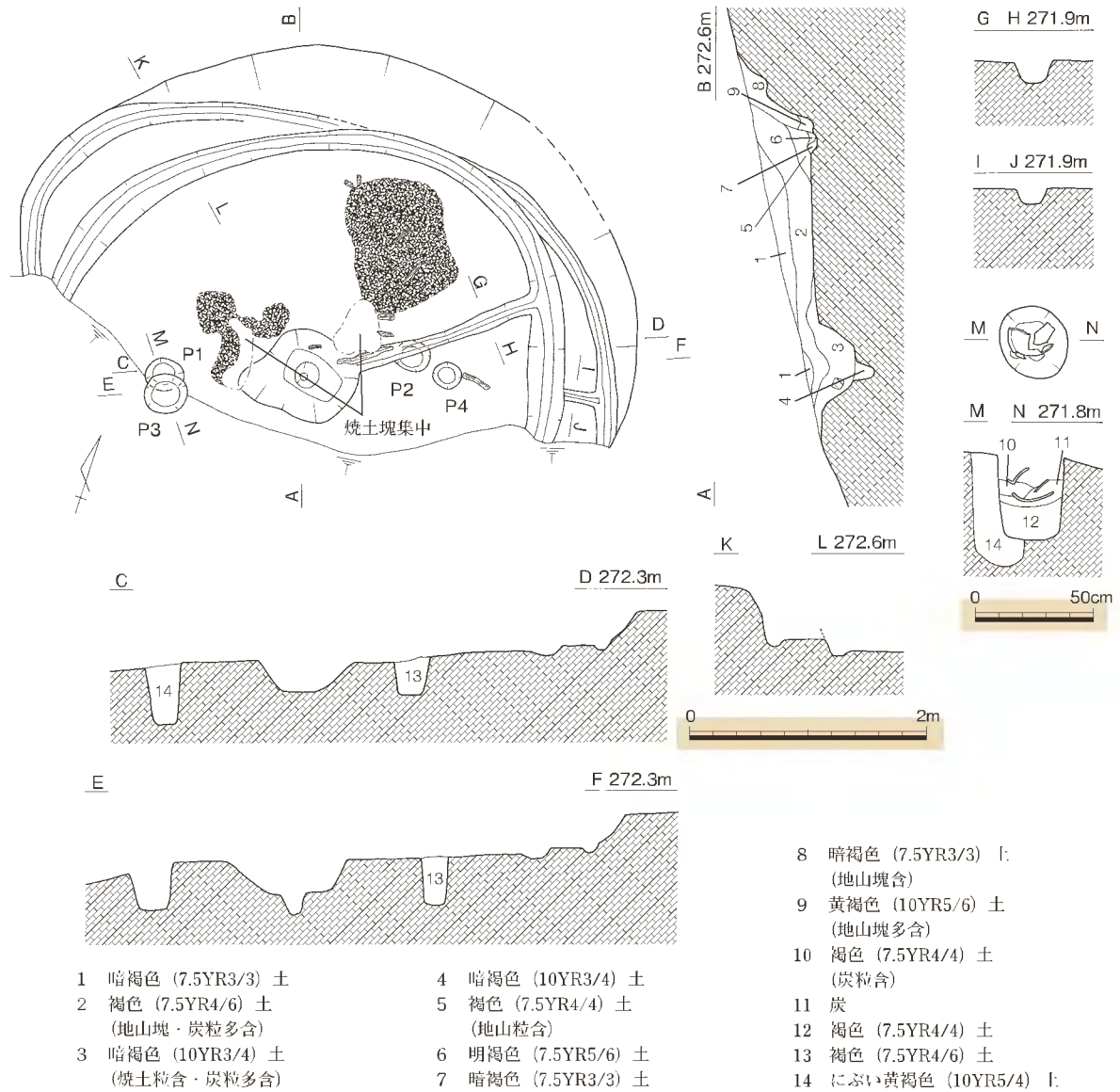


写真10 サヌカイト剥片 第21図 竪穴住居5 (1/60・1/30)・出土遺物 (1/4・1/3・1/2)

が薄く剥離している。また、床面上や埋土下層からサヌカイト剥片が13点検出され、サヌカイト製品の製作が行われていたと推定される。安山岩の剥片は2点見つかったが、これについては何とも言えない。その他で特筆されるのは、中央穴内部に混入したC4の焼土塊である。中央穴内外には5~10cm大の

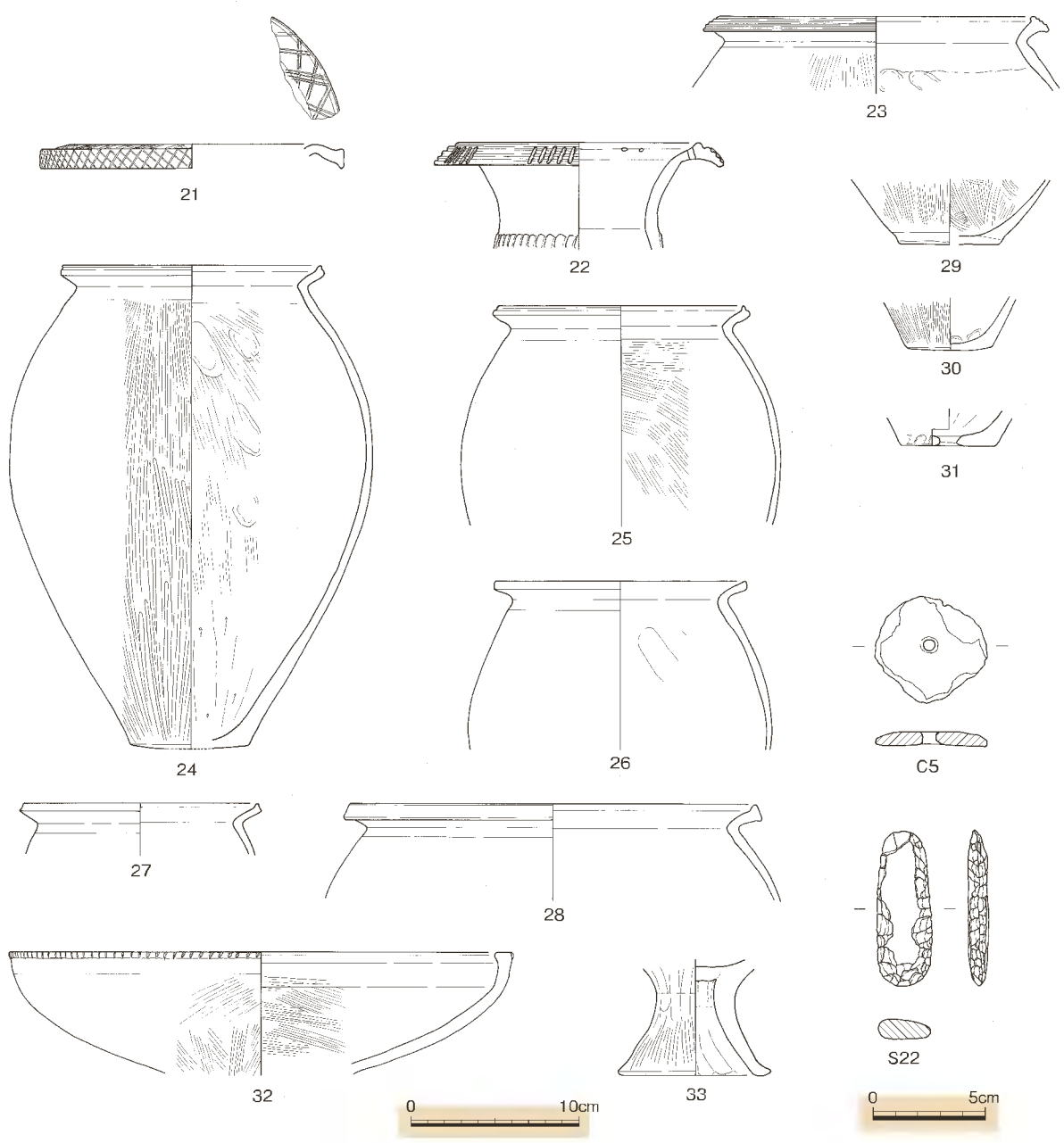


第22図 竪穴住居6 (1/60)・P1・3 (1/30)

焼土塊が多く認められ、比較的堅く焼き締まっているもの8点を採集した。そのうちの1つに同方向に並ぶ植物の茎のような圧痕を確認。鳥取県古市宮ノ谷山遺跡の竪穴住居では草本類の圧痕の見られる焼土塊が多量に発見されており、土葺き屋根の土と推定されている。本例も同様に考えて差し支えないと思われる。竪穴住居5の時期は土器の特徴から弥生時代中期後半と推定される。炭化材の放射性炭素年代測定ではcalBC349-116、樹種同定ではコナラ属コナラ節という結果を得た。(物部)

**竪穴住居6** (第11・12・22・23図、写真11・12、図版5-2・6-1・2)

竪穴住居6は竪穴住居5の下方約10mに位置する。調査区南端に位置する谷のために等高線が回り込み、谷の東側に小さな尾根を形成している。竪穴住居6はこの尾根に立地するとみられる。建て替えが1回あり、当初のものは長径約550cmの楕円形を呈し、P1とP2の2個が支柱穴であり、中央穴を挟むように配置されている。また、壁体溝から中央穴方向へ伸びる溝の一部が検出された。建て替えられた竪穴住居は一回り小さくなり、直径約450cmの円形である。2個の支柱穴P3・4が中央穴を挟むように配置され、壁体溝から溝が中央穴へと繋がっている。埋土中に炭粒や焼土粒が多く見



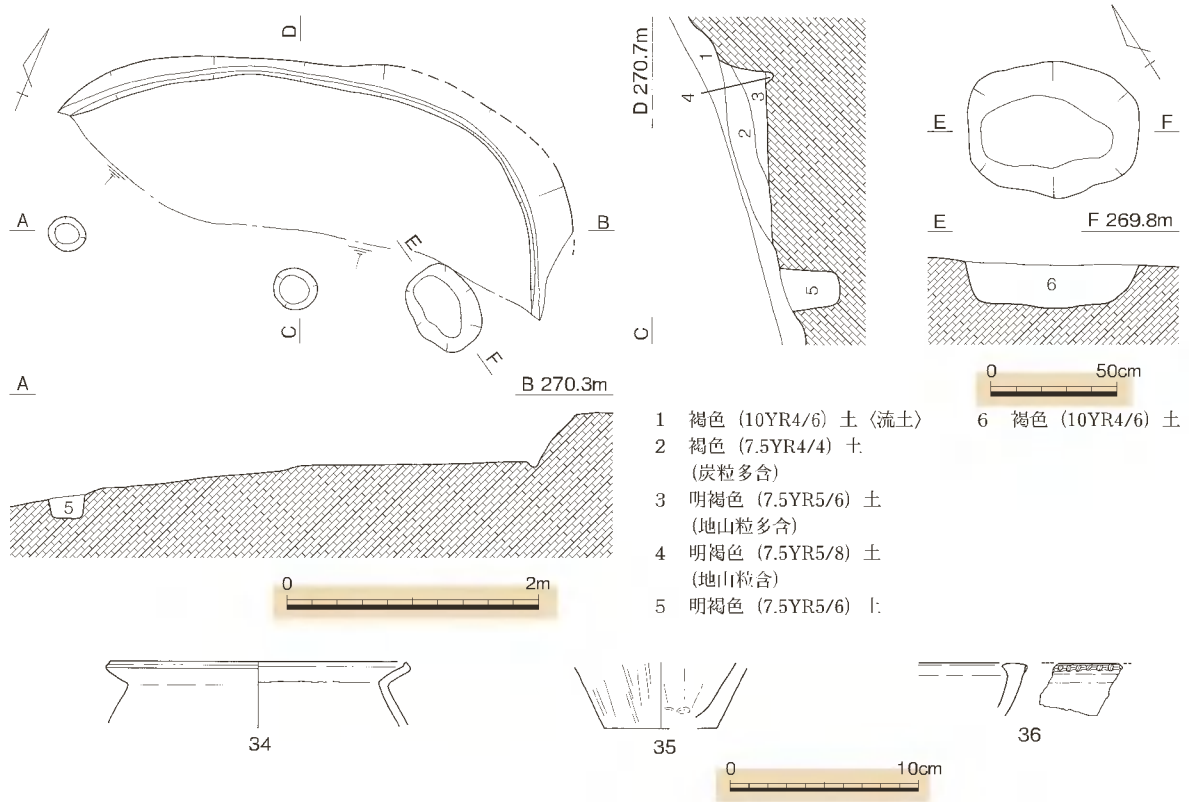
第23図 竪穴住居6出土遺物 (1/4・1/3)



写真11 サヌカイト剥片



写真12 安山岩剥片



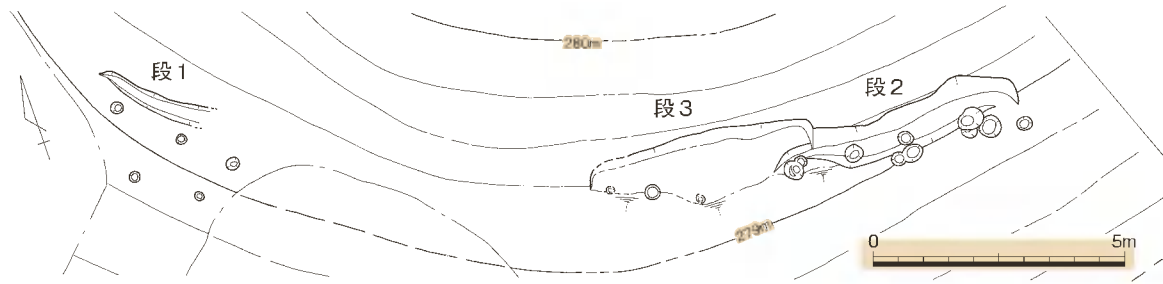
第24図 竪穴住居7 (1/60・1/30)・出土遺物 (1/4)

られ、焼失住居と推定される。炭化材の残りは良くなかった。中央穴内には竪穴住居の埋土が落ち込んでおり、焼失直前は開放状態であったと思われるが、壁体溝や中央穴へ繋がる溝の埋土には炭粒や焼土粒が見られず、解放していたかどうかは不明である。また、竪穴住居埋土中には焼土塊が多く見られ、比較的堅く焼けた3～7cm大のもの13点を採集し観察したが、焼けが弱く、草本類の圧痕は確認できなかった。ただ、この住居の埋土には地山塊と思われる土の塊を多く含んでおり、焼土塊やこのような土塊が屋根材の上に葺いていた土である可能性は高いと考える。土器は比較的多く出土した。甕24は建て替え後の竪穴住居の主柱穴P3から出土した。留意されるのは、この甕の内部や上下に炭が多量に認められることで、竪穴住居が焼失した後、焼け残った柱を抜き、甕24を納めたものと推定される。また、甕24は元々そのような状態で使用していたのか、あるいは意図的に打ち欠いたのか判断できないが、復元するとちょうど真ん中で縦割りにしたように縦半分がなかった。土製紡錘車C5は埋土上層から出土した。S22は周縁を加工している粘版岩製の石器である。両短辺には刃を付けているようで扁平片刃石斧の一種であろうか。また、P3周辺に集中して埋土下層や床面上からサヌカイト剥片が97点検出された。安山岩剥片13点も検出され、サヌカイト、安山岩製の石器を製作していたと考えられる。竪穴住居6の時期は土器の特徴から弥生時代中期後半と推定される。炭化材の放射性炭素年代測定ではcalBC356-201、炭化材3点の樹種同定ではすべてクリという結果を得た。(物部) 竪穴住居7 (第11・12・24図)

谷部東側の小さな尾根を西に回り込んだ斜面に立地する。当初は段状遺構と考えたが、壁体溝が細くしっかりしているので不整円形の竪穴住居とした。主柱穴、中央穴は不明で、土壌が床面東部にある。石器や石材剥片は検出していない。時期は出土土器の形態から弥生時代中期後半である。(物部)



3 方形竪穴住居・段状遺構・土壌など



第25図 A群遺構配置図 (1/150)

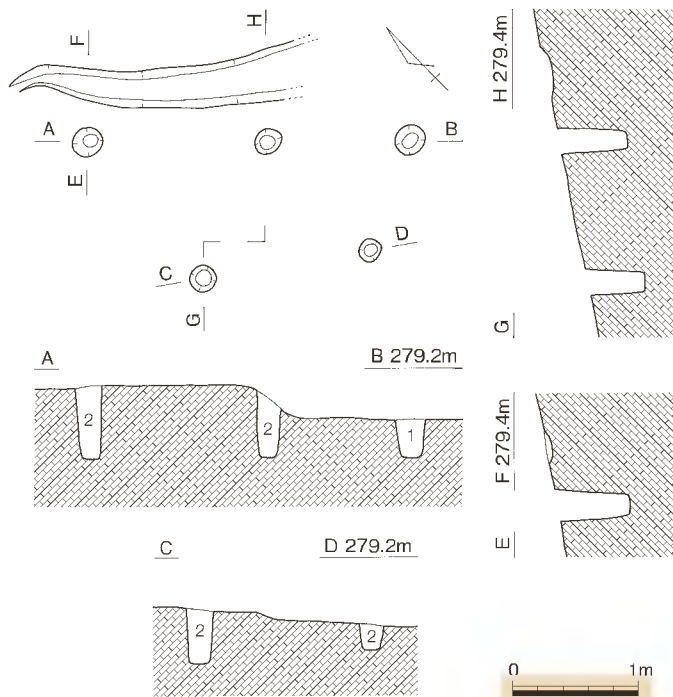
(1) A群 (第11・25図)

A群は標高279.0m付近に位置する遺構群で、南斜面から尾根稜線を越えて西側斜面にかけて立地している。段状遺構1～3が検出されたが、段状遺構1の西側や段状遺構2の東側は遺構が連続せずに途切れることから、段状遺構3面で構成されているようである。しかし、道の削平や調査区の境が近いことから東西にさらに遺構が延びる可能性はある。段状遺構1と段状遺構3の間は約7mの空間が空く。A群の時期は弥生時代後期前葉から中葉にかけてと推定される。(物部)

段状遺構1 (第25・26図)

A群の西部に位置し、尾根稜線付近に立地する。溝と柱穴を検出した。溝は幅が広く浅いもので、東端部は斜面下方に曲がるようである。柱穴は3個が直線状に並び、深さが一定であることから掘立柱建物の可能性もあるが、下方の柱穴は直線的に並ばない。溝の埋土から蓋37が出土した。また、

竪穴住居3埋土上層出土の4～6の土器は、位置関係からこの段状遺構1から流出した可能性が高い。このことから段状遺構1の時期は弥生時代後期前葉～中葉頃に比定される。(物部)



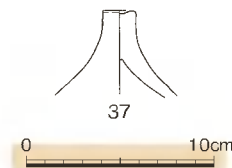
1 にぶい黄褐色 (10YR5/4) 土 2 暗褐色 (7.5YR3/4) 土

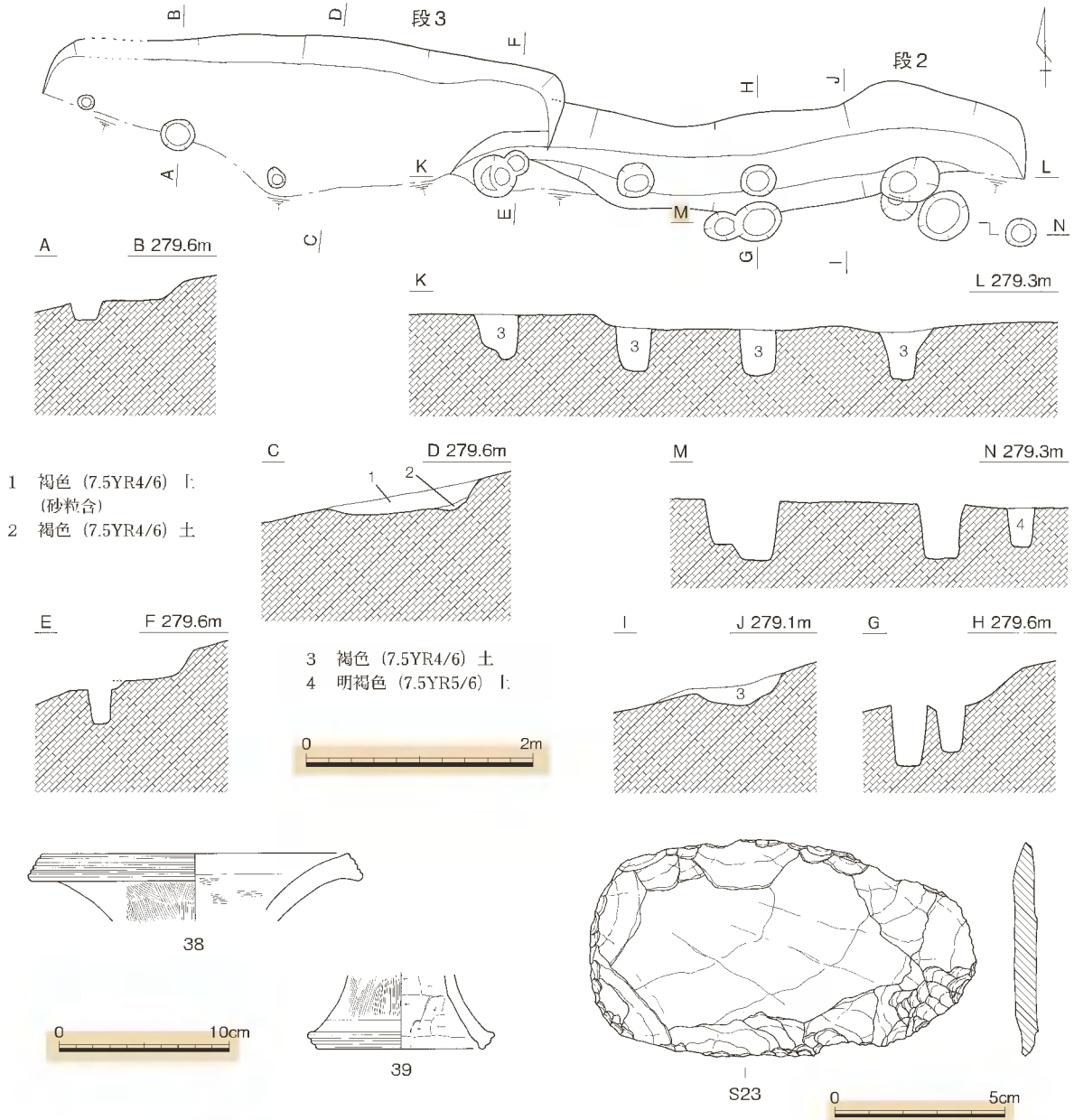
第26図 段状遺構1 (1/60)・出土遺物 (1/4)

段状遺構2 (第25・27図、図版9-5)

A群の東部に位置し、段状遺構3に切られている。壁際には幅の広い溝があり、両端は斜面下方に曲がる。その溝と重複して4個の柱穴が120cm前後の間隔で直線状に並び、掘立柱建物の

可能性があるが、対になる柱穴は検出されなかった。遺物はなく、時期は遺構の切り合いから弥生時代後期前葉以前。(物部)





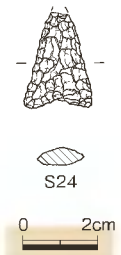
第27図 段状遺構2・3 (1/60)・段状遺構3出土遺物 (1/4・1/2)

段状遺構3 (第25・27図)

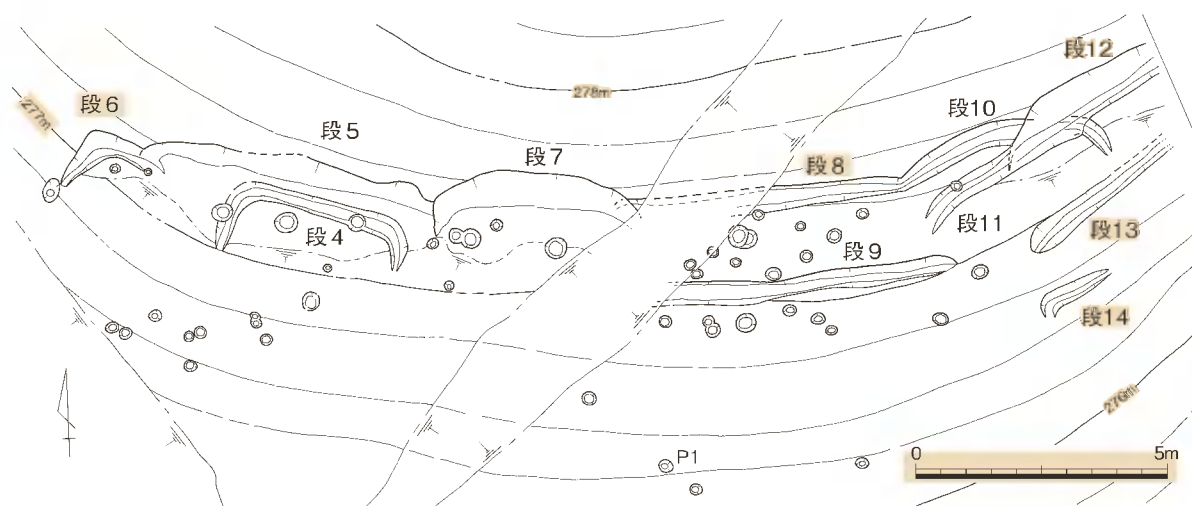
段状遺構3は段状遺構2の西端部を切っている。幅約450cmの方形と推定される段と平坦面を確認した。溝やはっきりした柱穴もない。遺物は埋土中から器台38と高杯39、粘板岩状緑色岩製石包丁の未製品S23が出土した。段状遺構3の時期は土器の特徴から弥生時代後期前葉と考えられる。(物部)

(2) B群 (第11・28・29図、図版9-1)

B群は標高277.0m付近に位置し、尾根稜線付近から南斜面にかけて約25mにわたって連なる遺構群である。その東端部は調査区外に延びている。11面の段状遺構が検出された。B群東半部の段状遺構は西半部に比べ流出がいちじるしく、残りは良くない。B群の時期は、出土した土器が弥生時代後期後葉から古墳時代初頭にかけての特徴を持つものが多いことから、段状遺構の大半はこの時期に属



第28図 P1 出土遺物 (1/2)



第29図 B群遺構配置図 (1/150)

するものと推定されるが、柱穴の中には弥生時代中期後半と推定されるものもあり、古い段階の段状遺構が混在している可能性がある。なお、柱穴P 1からサヌカイト製石鏃(S24)が出土した。(物部)  
**段状遺構4** (第29・30図)

段状遺構4はB群西半に位置し、段状遺構5に切られている。深さ約15cmのしっかりした「コ」の字状の溝が検出された。竪穴住居の可能性もあるが、円形の竪穴住居の壁体溝と比べ、この溝は幅が広く深い点異なる。この段状遺構4に伴うと考えられる柱穴P 2から二重口縁の壺40が出土したことから、段状遺構4の時期は弥生時代後期後葉から古墳時代初頭と推定される。(物部)

**段状遺構5** (第29・30図)

段状遺構5はB群西半に位置し、段状遺構4を削平して造成されている。西の段状遺構6を切っている。東の段状遺構7との切り合い関係は明らかにできなかった。壁際に溝を持たず、柱穴も少ない。斜面下方に小規模な柱穴が散在しているが、これとの関係も不明である。遺物は埋土中から甕41～43が出土している。段状遺構5の時期は弥生時代後期後葉から古墳時代初頭と推定される。(物部)

**段状遺構6** (第29・30図)

段状遺構6はB群西端に位置し、これより西には遺構は見られない。出土遺物はないが、段状遺構5に切られていることから、弥生時代後期後葉から古墳時代初頭以前とされる。(物部)

**段状遺構7** (第29・31図)

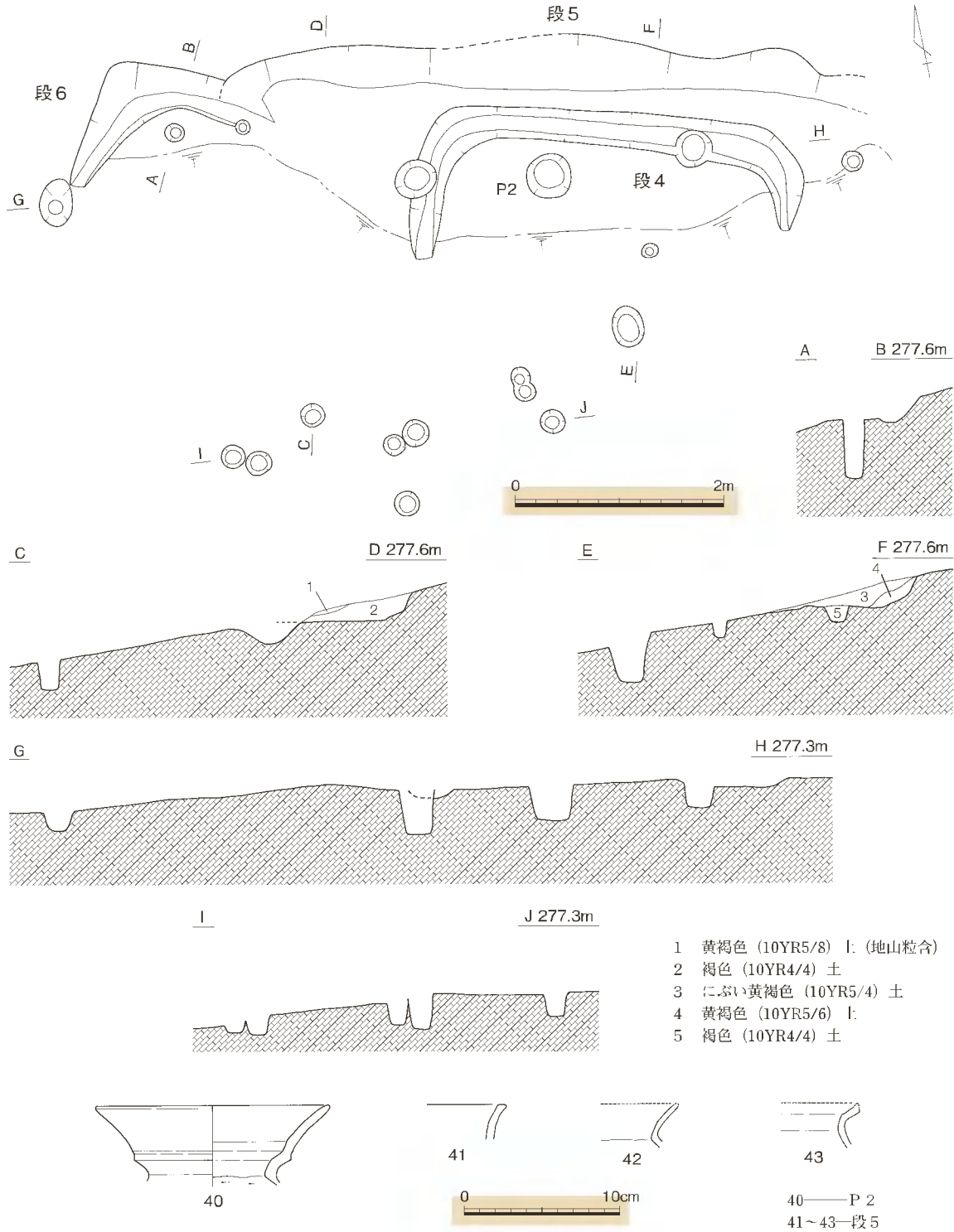
段状遺構7はB群中央部に位置し、段状遺構8を切っているが、段状遺構5との切り合い関係は不明である。東西幅400cmほどの平坦面を造成している。壁際に溝はなく、柱穴はあるが組み合わせは不明である。時期は甕45の口縁部の形態から、弥生時代後期後葉以降と考えられる。(物部)

**段状遺構8** (第29・32図)

段状遺構8はB群中央部に位置し、段状遺構7に切られている。残存長約600cm、幅30～40cmの溝と散在する柱穴が確認された。柱穴の中には柱を抜き取った後に円礫を3個入れているものが見られる。時期は遺構の切り合いから、弥生時代後期後葉以前と推定される。(物部)

**段状遺構9** (第29・32図)

段状遺構9は、段状遺構8の下方約1.5mに位置する。溝と柱穴が検出された。P 3は深さが約60

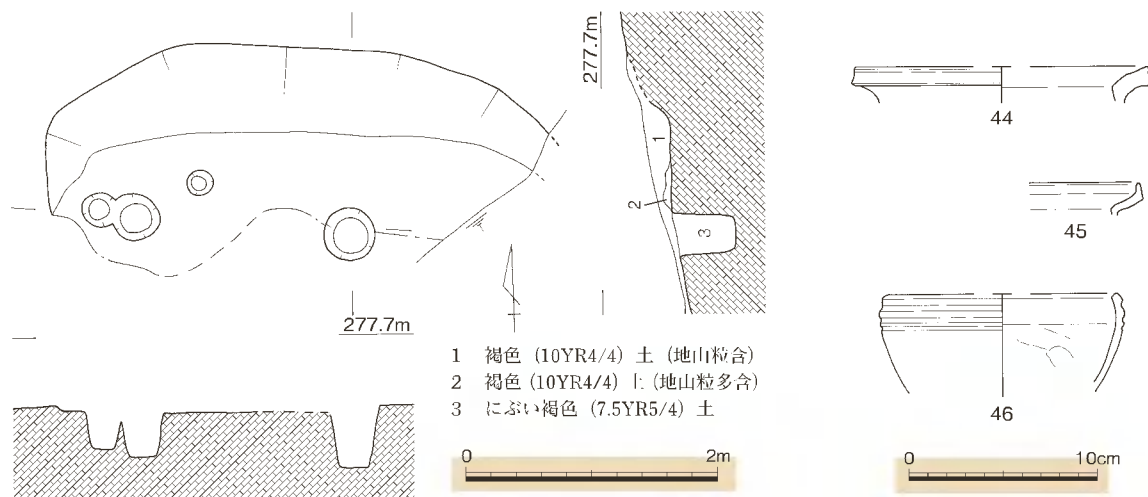


第30図 段状遺構4～6 (1/60)・出土遺物 (1/4)

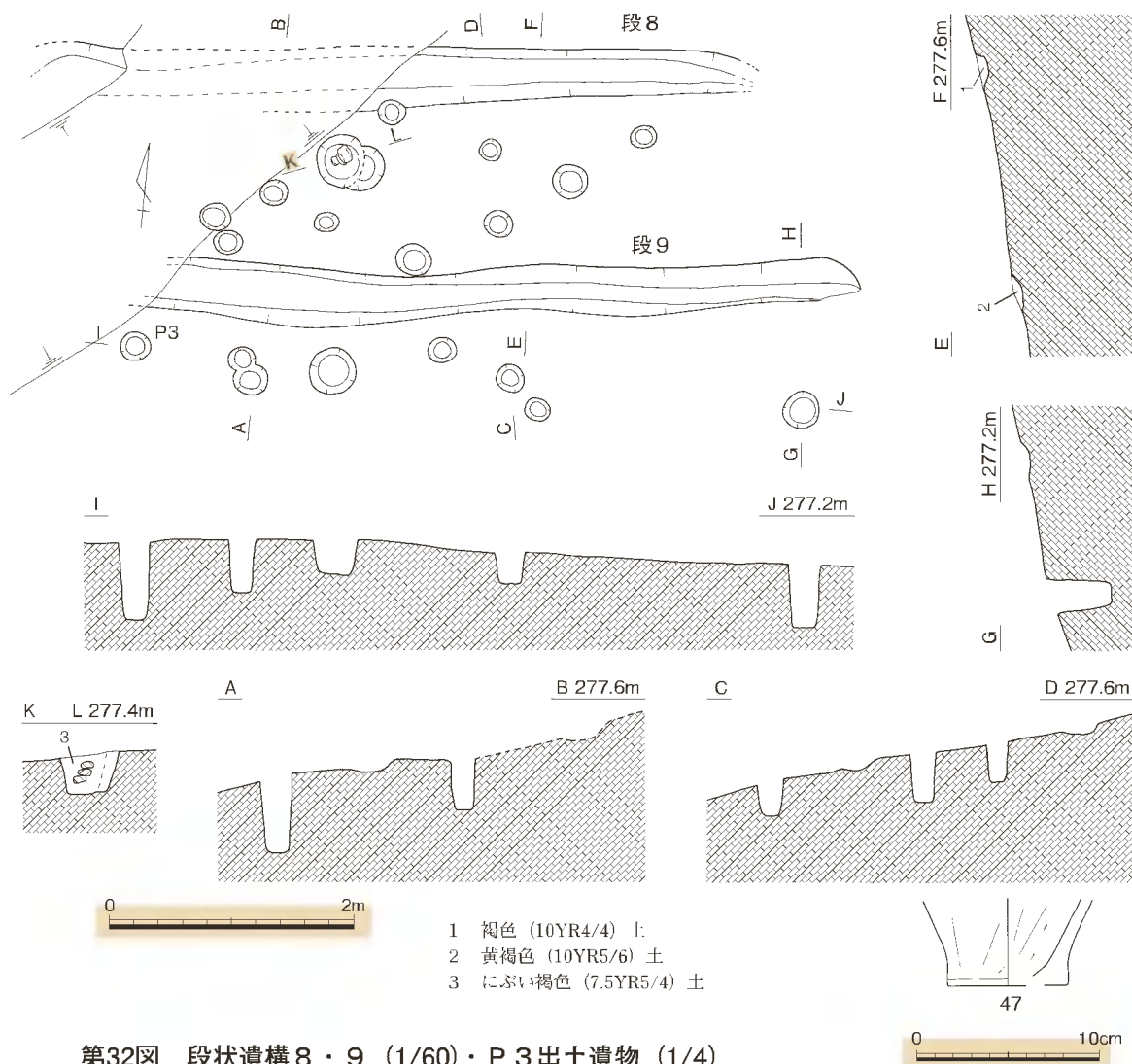
cmあるので、段状遺構9に伴う柱穴と推定されるが、甕47の底部が1点だけ埋土中に混入していることから、段状遺構9の時期は弥生時代中期後半以降とされる。(物部)

段状遺構10 (第29・33図)

段状遺構10はB群東部に位置する。段状遺構12との切り合い関係は明らかにできなかった。柱穴は小さいが深いもの1個だけが検出された。遺物は溝埋土中から甕片48が1点出土した。時期はこの土器から弥生時代後期後葉以降と推定される。(物部)



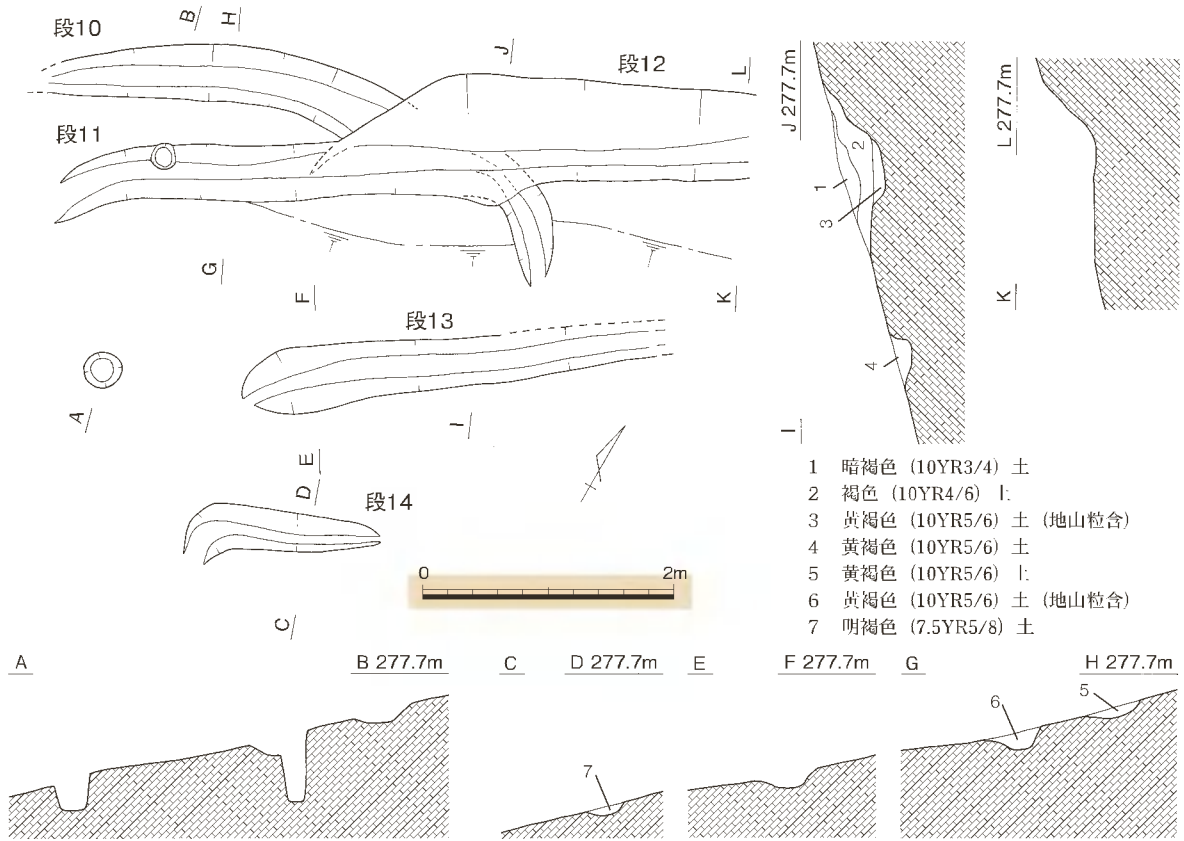
第31図 段状遺構7 (1/60)・出土遺物 (1/4)



第32図 段状遺構8・9 (1/60)・P3出土遺物 (1/4)

段状遺構11 (第29・33図)

両端が斜面下方へ湾曲する溝と、わずかな平坦面が検出された。東側に位置する段状遺構12に切られていることが断面で確認された。遺物はなく、時期は弥生時代中期後半以降である。(物部)



第33図 段状遺構10～14 (1/60)・段状遺構10出土遺物 (1/4)

段状遺構12 (第29・33図)

西端部が斜面下方に湾曲する壁と浅い溝、わずかな平坦面を検出した。東部は調査区外へ延びる。段状遺構11を切る。遺物はなく、時期は弥生時代中期後半以降である。(物部)

段状遺構13 (第29・33図)

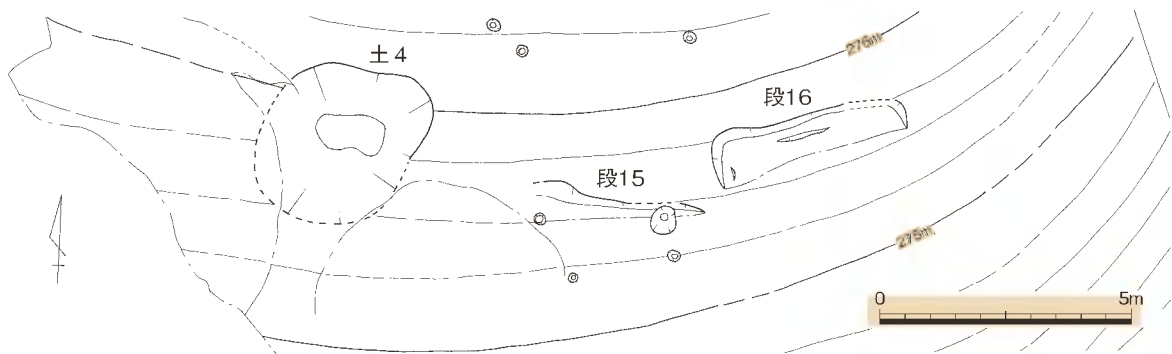
段状遺構11・12の1 mほど下方に位置する。遺物はなく、時期は弥生時代中期後半以降。(物部)

段状遺構14 (第29・33図)

段状遺構13の1 mほど下方に位置する。遺物はなく、時期は弥生時代中期後半以降である。(物部)

(3) C群 (第11・34図、図版9-1)

C群は標高275.0～276.0mの南斜面に位置する遺構群である。段状遺構が2面と大形の土壇が1基検出された。この東側では遺構は確認されず、段状遺構16が東端と考えられるが、西側は道の削平が



第34図 C群遺構配置図 (1/150)

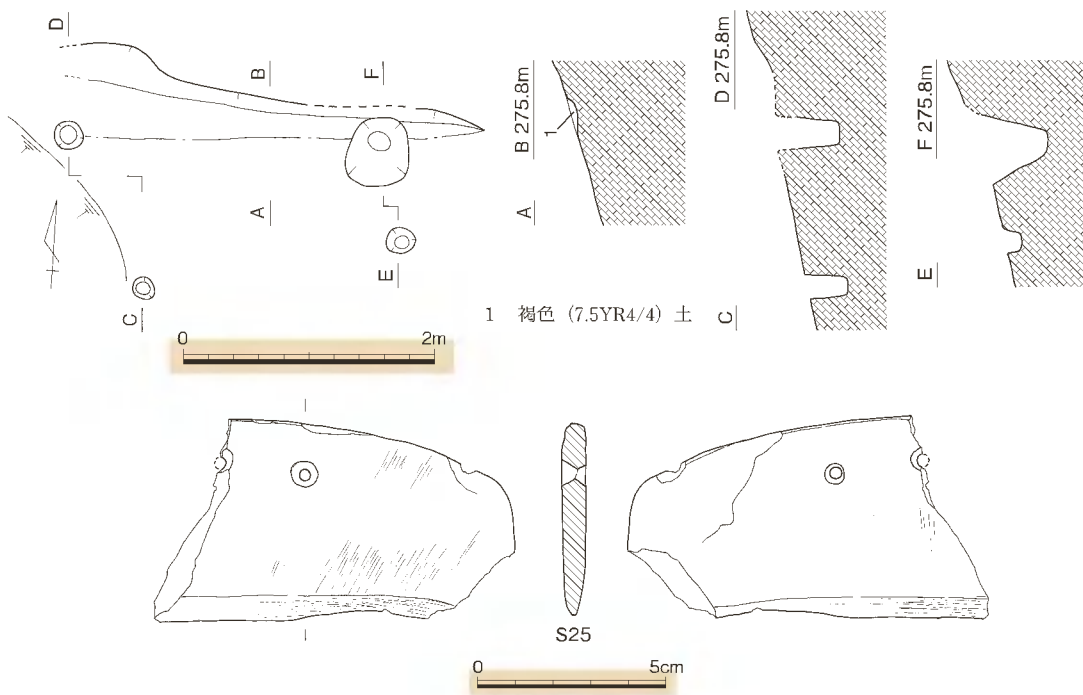
あり、この部分にさらに遺構が存在したかどうかは不明である。また、C群は竪穴住居4・5と重なる部分が多く、特に段状遺構15の東側に位置する竪穴住居5床面にはいくつか小形の柱穴が確認されており、ここも段状遺構があった可能性がある。時期は、出土土器が少なく特定できない。(物部)

**段状遺構15 (第34・35図)**

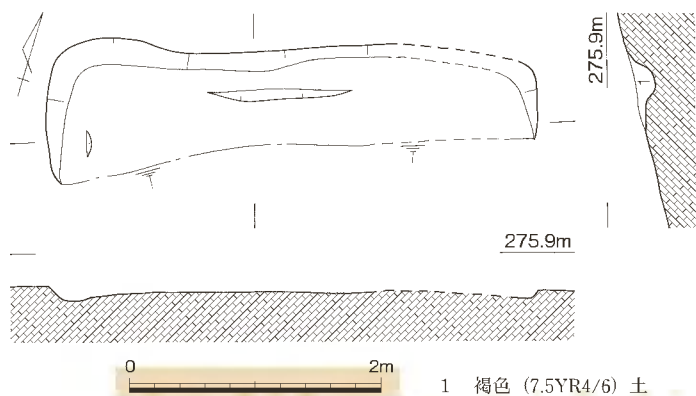
段状遺構15は直線的に斜面を掘削して平坦面を造っているが、その規模は不明である。壁際に溝は見られない。竪穴住居5と重複するが、竪穴住居5の輪郭は段状遺構15の平坦面より下がった高さで検出できたことから、おそらく段状遺構15が竪穴住居5を切っていると考えられる。埋土中より粘板岩状緑色岩製の磨製石包丁S25が出土した。時期は切り合いから弥生時代中期後半以降と考える。(物部)

**段状遺構16 (第34・36図)**

段状遺構15の東やや上方に位置する。東西約350cmの方形の平坦面を造成している。壁際に溝が巡っていたと推定される。出土した土器細片から時期は弥生時代後期以降と推定される。(物部)



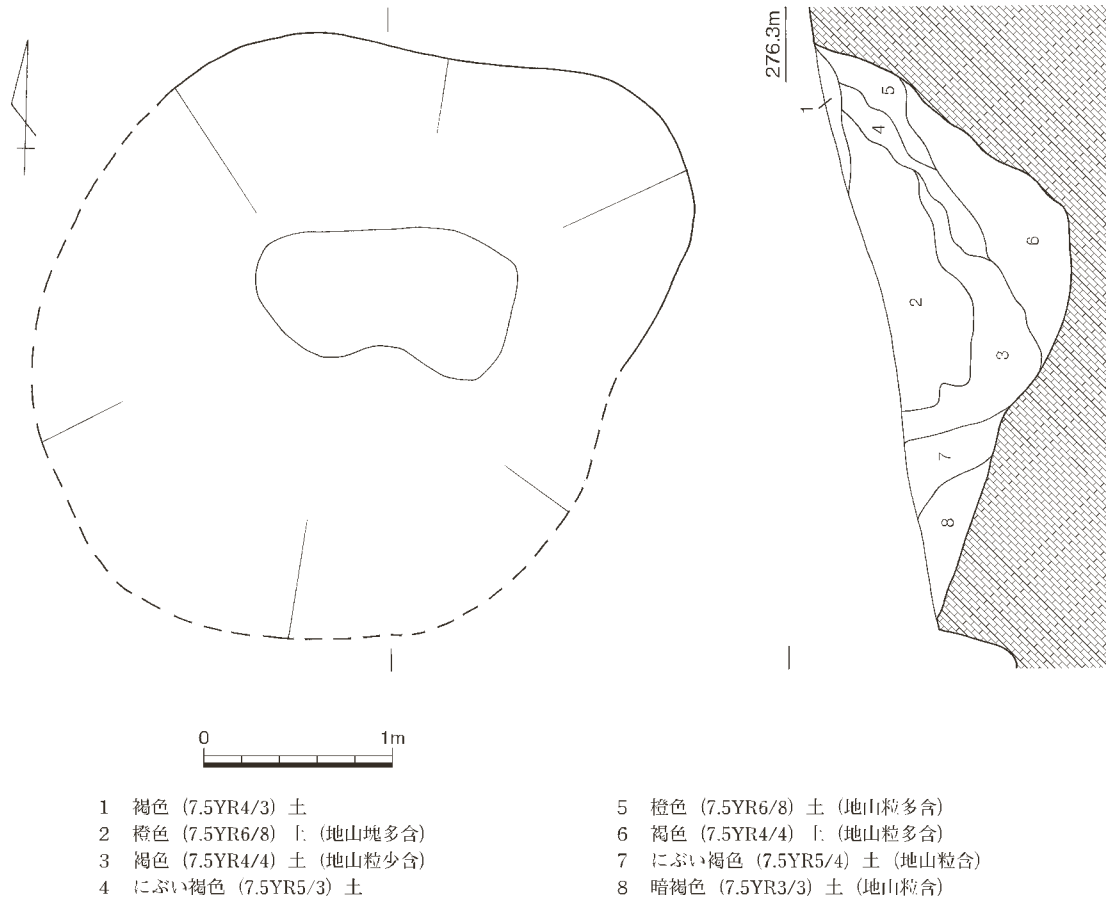
第35図 段状遺構15 (1/60)・出土遺物 (1/2)



第36図 段状遺構16 (1/60)

**土壙4 (第34・37図)**

土壙4は竪穴住居4・5の間に位置し、両住居に切られている。平面形は不整形で、検出面での大きさは約300cm、深さは最大132cmを測る。埋土には地山塊・粒が多く混じっており、壁がかなり崩れているものと推定される。貯蔵穴とも考えられるが定かではない。遺物は上層から弥生土器細片がわずかに出土した。時



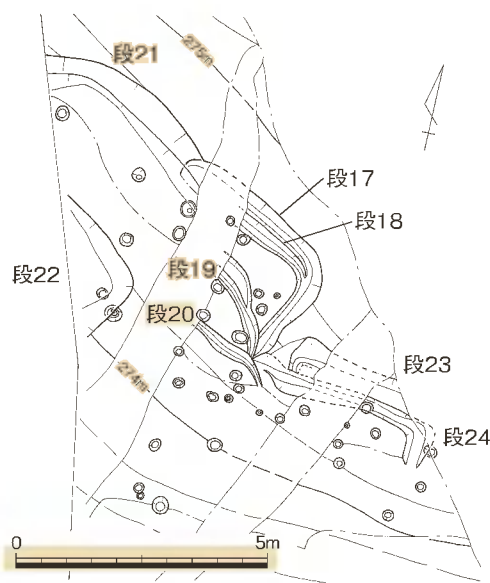
第37図 土壌4 (1/40)

期は切り合いから弥生時代中期後半以前である。

(物部)

(4) D群 (第11・38・39図、図版7)

D群は標高274.0~275.0mに位置し、尾根の稜線付近に立地する遺構群である。東部は道によって削平を被っているが、道を越えて東へは続いていかない。西部は調査区を越えてさらに延びていく。8

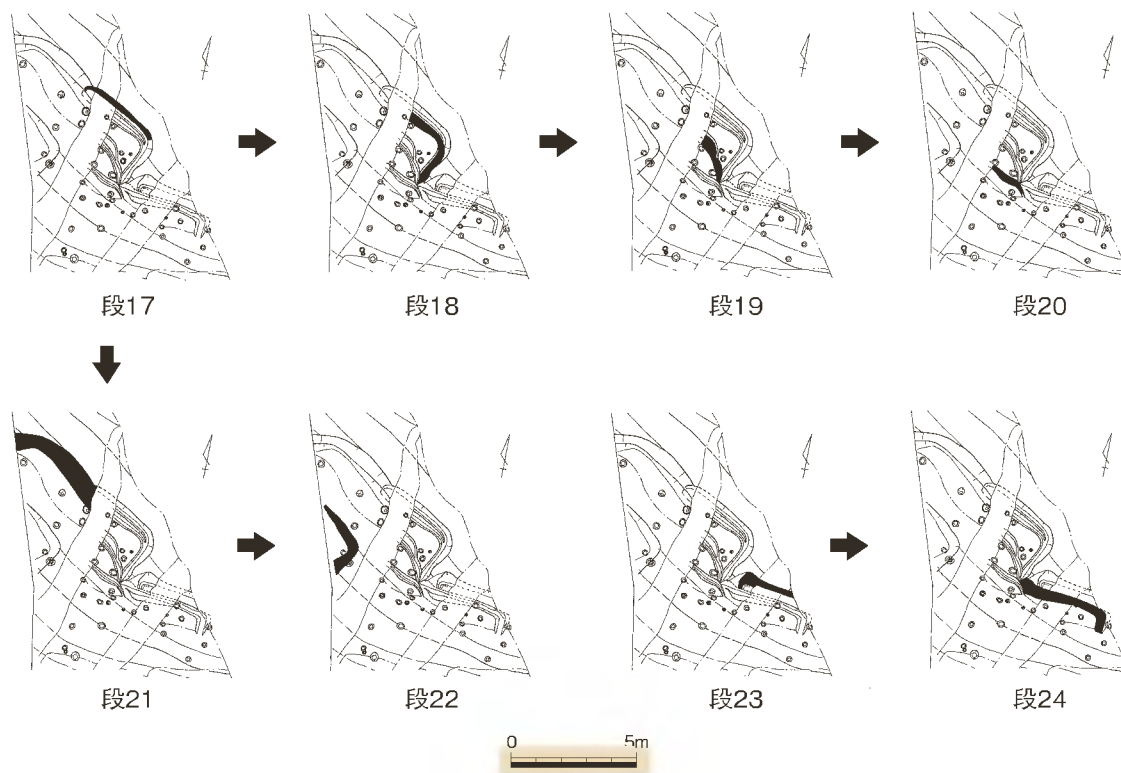


第38図 D群遺構配置図 (1/150)

面の段状遺構が密集して検出された。段状遺構24は掘立柱建物の可能性があるが、柱穴がそろわないので、ここでは段状遺構として扱った。平面や断面の観察で明らかにできた切り合い関係を第39図にまとめた。一番古いのは段状遺構17か段状遺構23である。段状遺構18と21の切り合いは不明であるが、出土遺物からすると段状遺構18よりも21の方が新しいと考えられる。また、段状遺構24は西側に重複する段状遺構17~20との切り合い関係を明らかにできなかった。大きく見ると、横方向の関係は不明な点が多いが、縦方向では、段状遺構が斜面下方へ徐々に造り替えられている状況がうかがえる。D群の時期は、出土遺物からすると、弥生時代中期後半が主体となっており、一部、弥生時代後期中葉以降の段状遺構が入っているようである。

(物部)





第39図 D群前後関係 (1/300)

段状遺構17 (第38・41図)

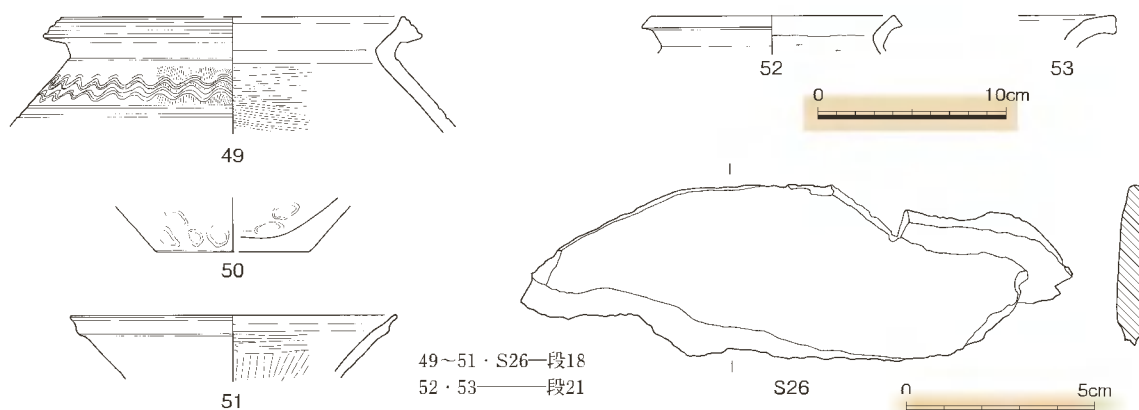
段状遺構17はD群の中で最も古く考えられるものの1つである。段状遺構18と21に切られている。一辺約330cmの方形を呈する。壁体溝状の溝が巡り、支柱穴は不明だが、小形の竪穴住居の可能性はある。時期は、段状遺構18との切り合いから、弥生時代中期後半以前である。(物部)

段状遺構18 (第38・40・41図)

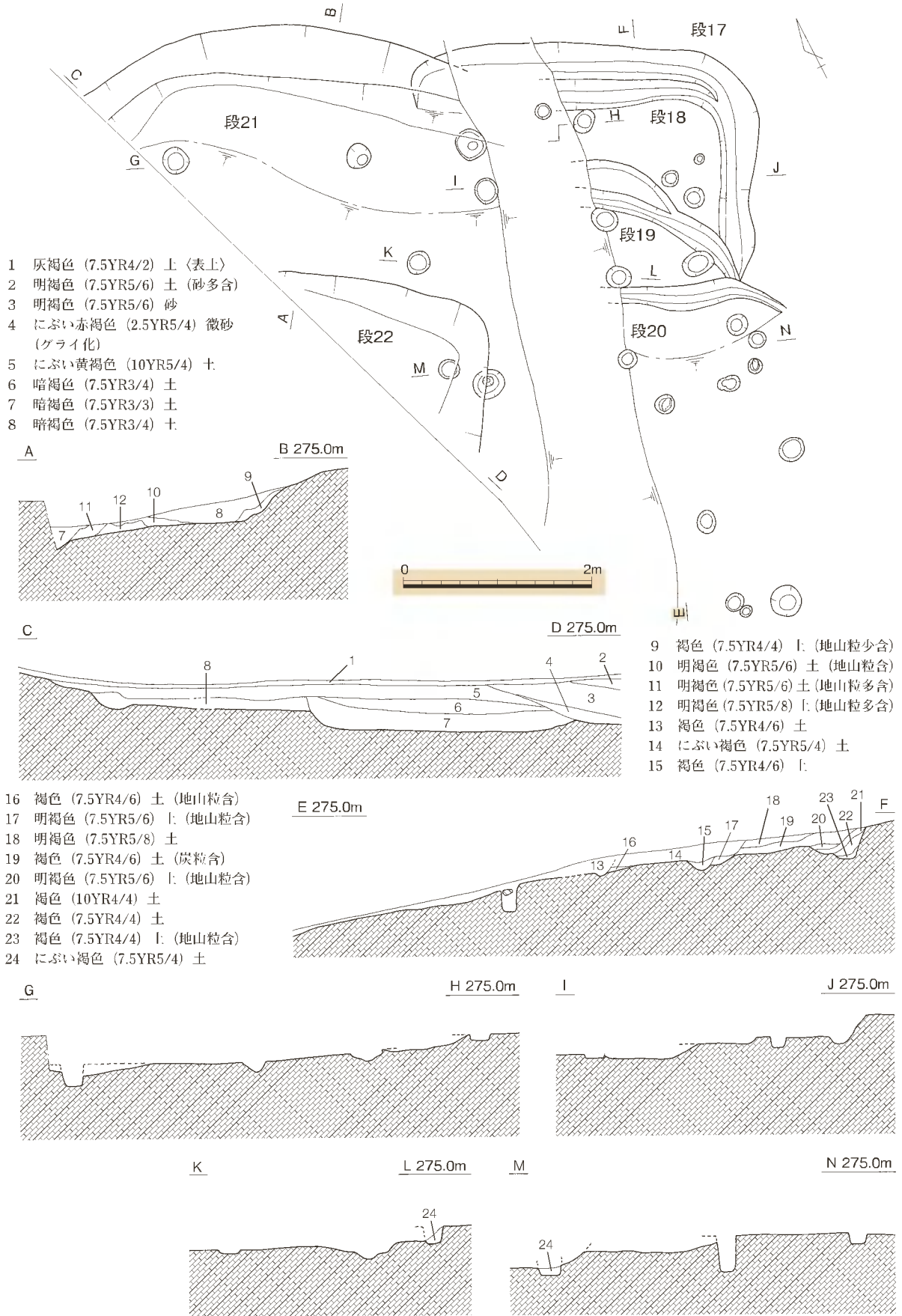
段状遺構18は、段状遺構17とほぼ同じ形状、規模なので、段状遺構17の造り替えである可能性が高い。床面近くから甕49・50が出土した。51は器台と思われるが埋土上層出土で混入と考える。S26は石包丁未製品と推定できる。時期は土器の特徴から弥生時代中期後半と推定される。(物部)

段状遺構19 (第38・41図)

段状遺構18を切る。緩く湾曲する壁体溝状の溝が検出された。その北側に段があることからもう1つ



第40図 段状遺構18・21出土遺物 (1/4・1/2)



第41図 段状遺構17~22 (1/60)

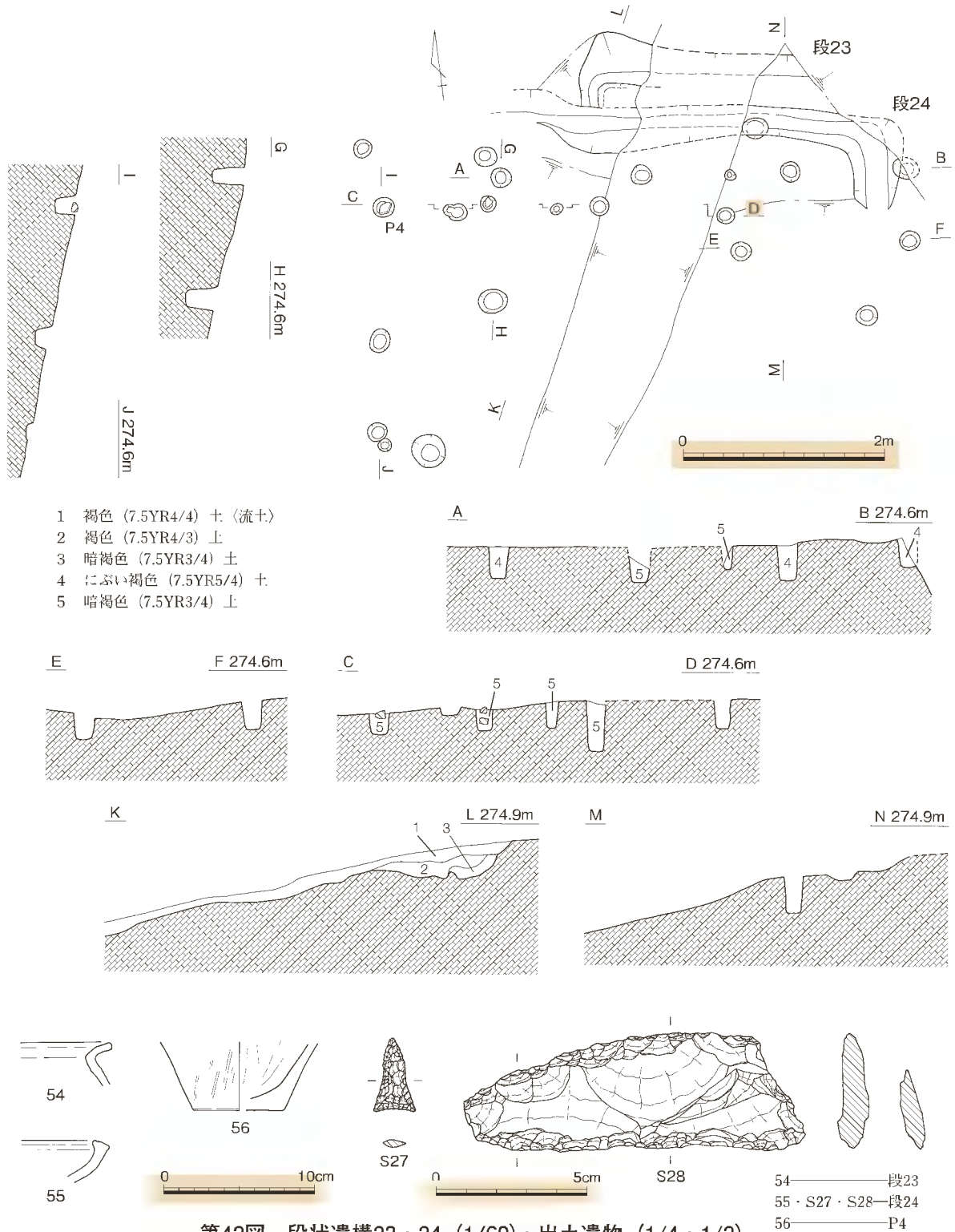
段状遺構が切り合っている可能性がある。時期は切り合いから弥生時代中期後半以降である。(物部)

段状遺構20 (第38・41図)

段状遺構19を切る。壁体溝状の溝が170cmほど検出された。時期は弥生時代中期後半以降。(物部)

段状遺構21 (第38・40・41図)

古代以降の溝1による削平で、東部の形状が解らないが、およそ方形の平坦面である。壁際に溝は見られない。埋土中から甕片52・53が出土し、時期は弥生時代後期中葉以降と推定する。(物部)



第42図 段状遺構23・24 (1/60)・出土遺物 (1/4・1/2)

**段状遺構22** (第38・41図)

段状遺構21の埋土を切り込む。時期は、切り合い関係から弥生時代後期中葉以降と推定する。(物部)

**段状遺構23** (第38・42図)

西部が屈曲する段と溝を検出した。段状遺構24に切られている。東部は道の掘削で消失している。埋土中から甕54が出土したことから、段状遺構23の時期は弥生時代中期後半以降と推定する。(物部)

**段状遺構24** (第38・42図)

東部が屈曲する溝と平坦面が残る。散在する小形の柱穴の中に、第42図A-Bで3~4個が並び、C-Dで2~4個が並ぶようである。ただ、斜面下方に対になりそうな柱穴はそれぞれ1個しか検出されない。掘立柱建物の可能性がある。埋土中から高杯55と石鏃S27、サヌカイト製石鎌S28が出土した。段状遺構24の時期は、出土土器から弥生時代中期後半以降と推定される。(物部)

**(5) E群** (第11・43図、図版7)

E群は、標高273.5m前後に長さ22mにわたり連なる遺構群である。段状遺構が11面検出された。西



第43図 E群遺構配置図 (1/150)

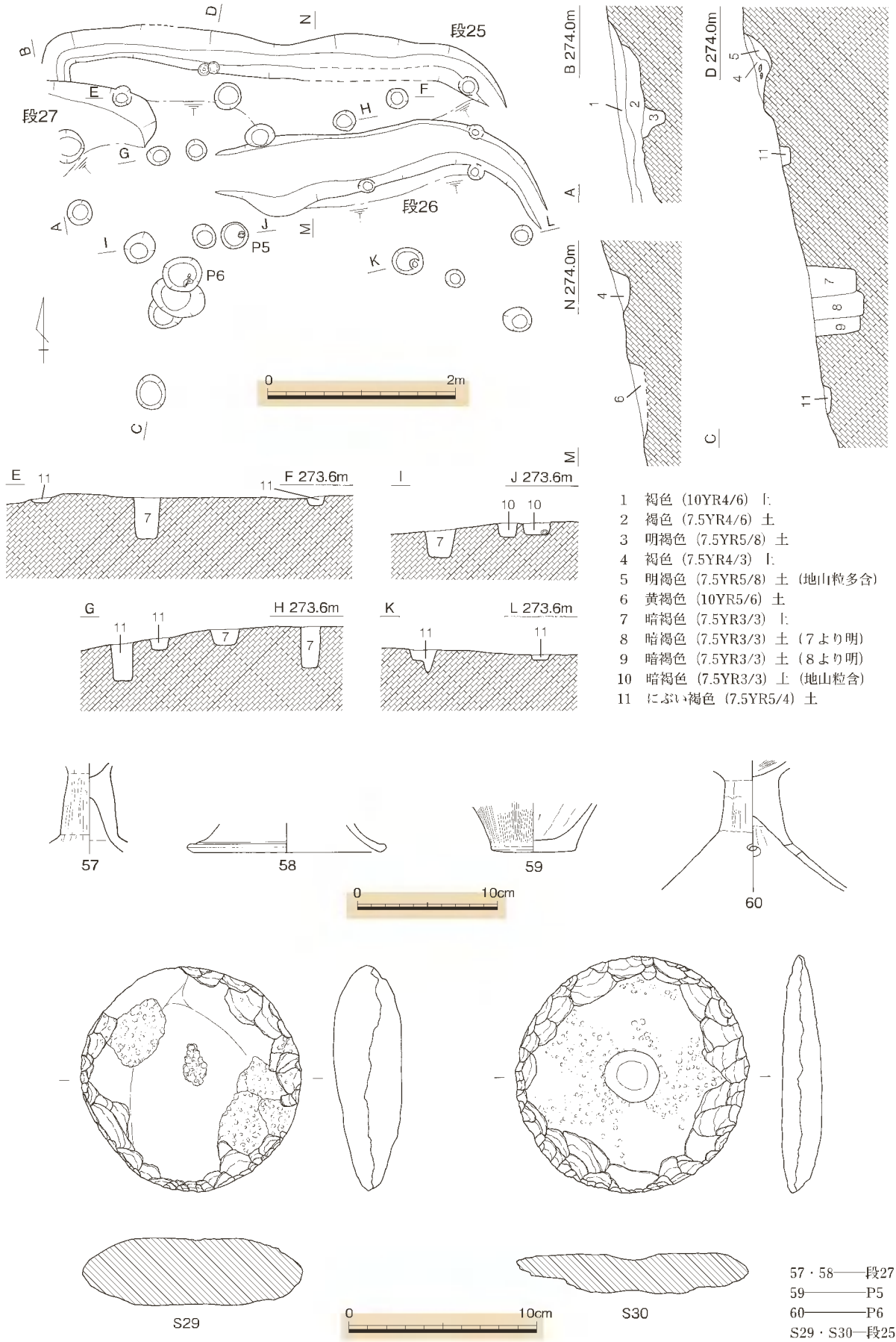
は調査区外へさらに延びていき、東は段状遺構33~35で途切れる。E群の時期は、出土土器が少なく、大きく捕らえることも困難な状況であった。柱穴に弥生時代中期後半の時期のものがあることから、その時期の段状遺構が存在するだろうし、段状遺構27は後期中葉以降であり、段状遺構30は弥生時代後期後葉から古墳時代初頭であるので、いろんな時期の段状遺構が混在しているものと推定される。なお、段状遺構25からは安山岩製の環状石斧未製品が2点出土し注目される。(物部)

**段状遺構25** (第43・44図、図版10-1)

E群の西部に位置し、段状遺構27に切られている。両端が斜面下方に向けて屈曲する溝が検出され、東西約450cmの方形状の平坦面を造成している。壁際から環状石斧未製品S29とS30が重なるようにして出土した。床面からわずかに浮いた状態であった。S29・30とも安山岩製である。土器の出土はなく、段状遺構27との切り合いから、時期は弥生時代後期中葉以前と考えられる。(物部)

**段状遺構26** (第43・44図)

段状遺構25の下方に位置する。幅の広い溝が東部で南に湾曲する。出土遺物はなかった。ただ、溝の南側斜面部で検出された柱穴のうち、P5の底から中期後半の甕底部59が出土し、P6からは後期後葉以降の高杯60が出土した。段状遺構の推定平坦面の高さから考えると、P6は別の遺構と推定され、P5がこの段状遺構26、または段状遺構25に伴う可能性が高い。断定はもちろんできないが、段状遺構26または25の時期は弥生時代中期後半に遡る可能性があると考えられる。(物部)



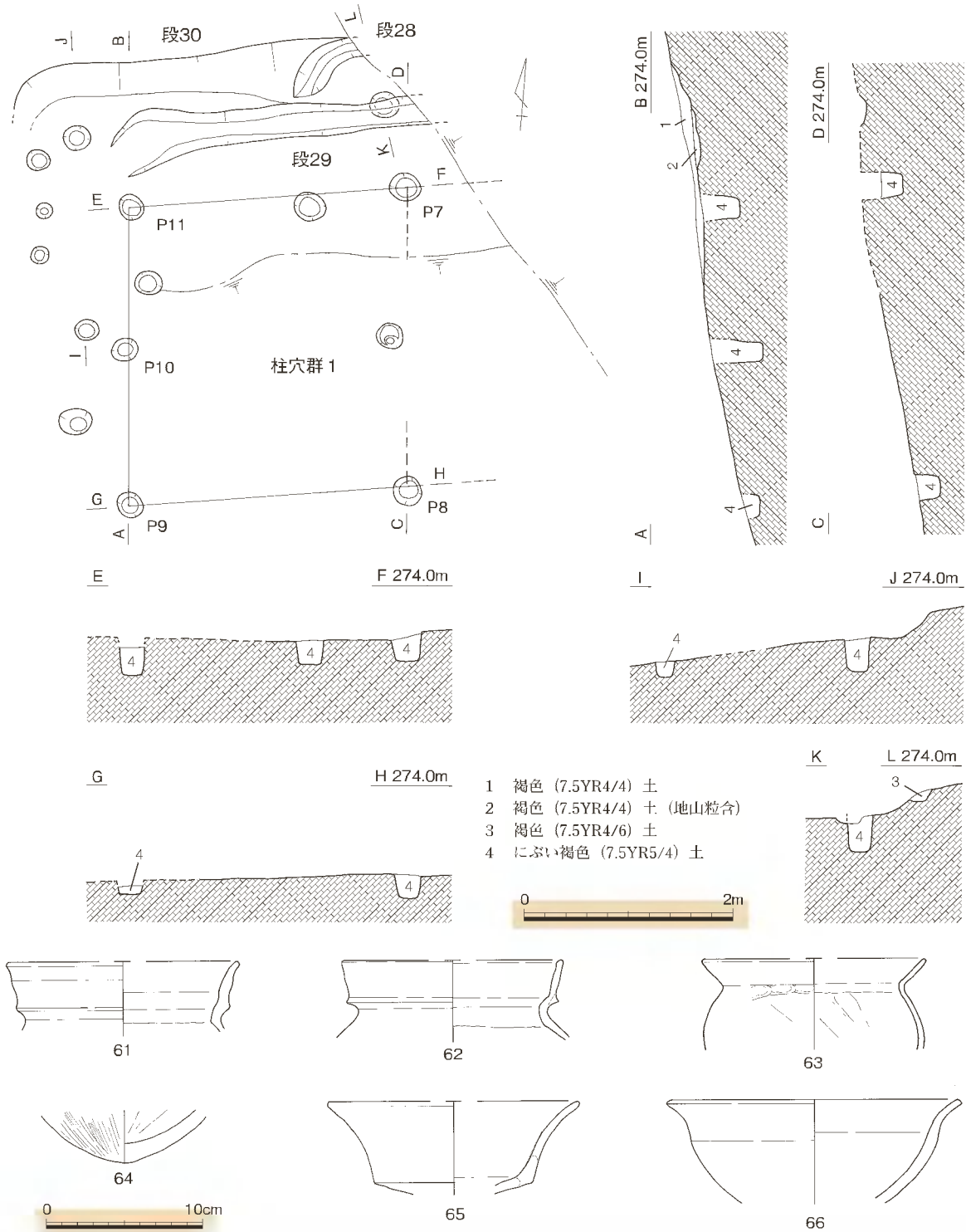
第44図 段状遺構25~27 (1/60)・出土遺物 (1/4・1/3)

段状遺構27 (第43・44図)

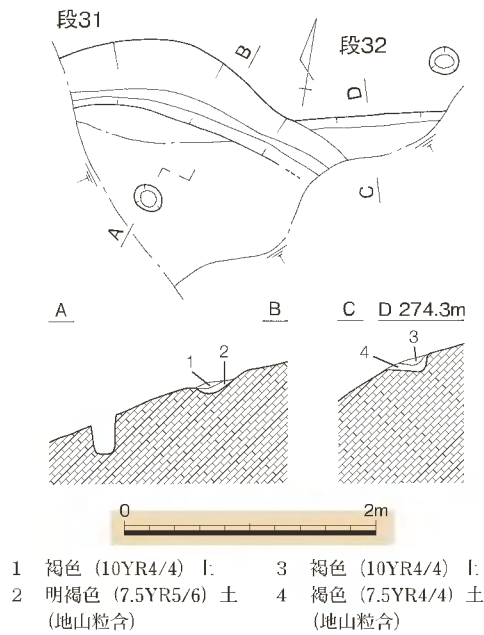
調査区境で検出し、段状遺構の東端部を確認した。段状遺構25を切っている。埋土中から高杯57・58が出土し、段状遺構27の時期は土器の特徴から弥生時代後期後葉以降と推定される。(物部)

段状遺構28 (第43・45図)

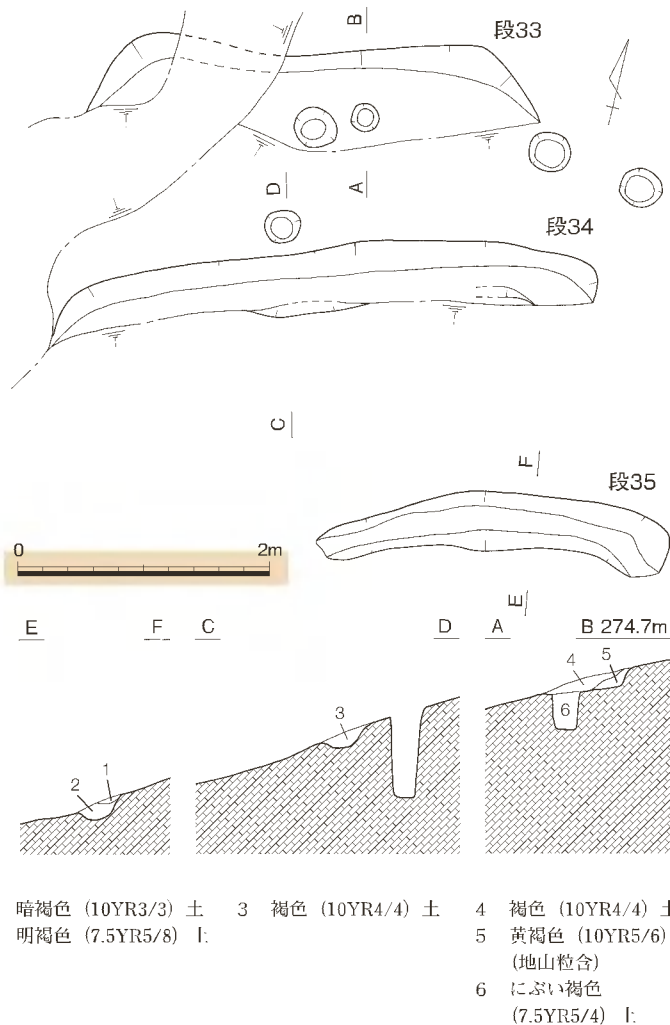
道による削平を受け、溝の西端部がわずかに残っていた。第45図断面のK-Lに示す柱穴が伴っていると考えられる。検出状況から段状遺構30より古いと推定される。(物部)



第45図 柱穴群1・段状遺構28~30 (1/60)・段状遺構30出土遺物 (1/4)



第46図 段状遺構31・32 (1/60)



第47図 段状遺構33～35 (1/60)

段状遺構29 (第43・45図)

幅30cm前後で、西端部が南に曲がる溝が検出された。東部は道で削平されている。段状遺構30に切られている。時期は段状遺構30以前である。(物部)

段状遺構30 (第43・45図)

東西250cm以上の段で、西端部は南に曲がり、東部は段状遺構28を切っていると推定される。埋土中から出土した甕61～64、高杯65、鉢66の特徴から、段状遺構30の時期は弥生時代後期後葉から古墳時代初頭である。(物部)

柱穴群1 (第43・45図、図版9-3)

段状遺構29・30の南側平坦面と緩斜面に柱穴のまとまりが見られた。P7～9とP11の配置は260～280cmのほぼ正方形を呈する。P10もしっかりした柱穴なので、伴っているかもしれない。調査時には道で削平されている東側にさらに延びて2×1間または2×2間の掘立柱建物を想定した。

P7～9・11の配置は、竪穴住居2の主柱穴の配置とほぼ同じであることから、4本柱の竪穴住居である可能性も否定しきれず、掘立柱建物と竪穴住居両者の可能性がある。柱穴群1は段状遺構29か30に伴っていると考えられ、時期は弥生時代後期後葉から古墳時代初頭か、それ以前である。(物部)

段状遺構31 (第43・46図)

道と古代以降の溝5に削平されている。時期は不明である。(物部)

段状遺構32 (第43・46図)

段状遺構31に切られている。詳細は解らない。(物部)

段状遺構33 (第43・47図)

東西約330cmの平坦面と段である。遺物はなく、時期不明である。(物部)

段状遺構34 (第43・47図)

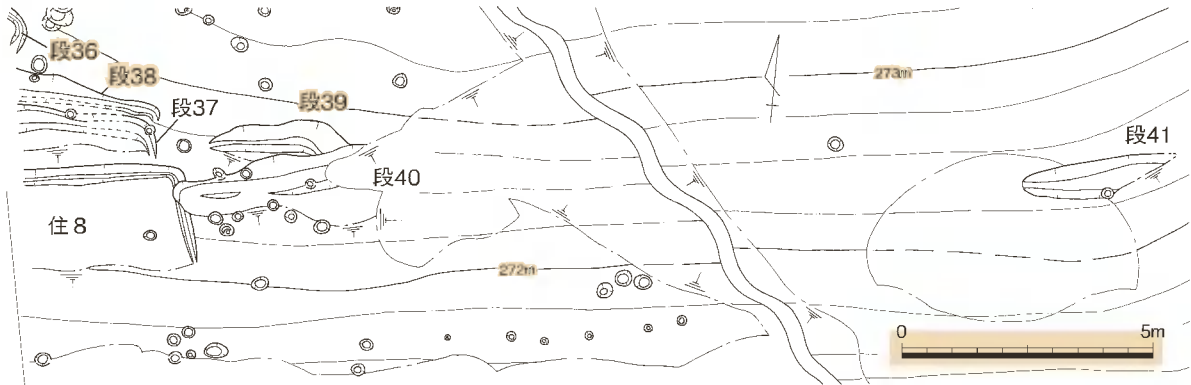
東西400cmの平坦面で、壁際に溝が巡る。遺物はなく、時期不明。(物部)

段状遺構35 (第43・47図)

東西250cm以上の平坦面と考えられ、壁際に溝が巡る。時期不明。(物部)

(6) F群 (第11・48図、図版7)

F群は標高272.5m前後に位置する遺構群である。竪穴住居が1軒と段状遺構が6面確認された。西側は調査区外へ延びていく。段状遺構40の東側約10mは後世の攪乱があり遺構の有無は不明である。



第48図 F群遺構配置図 (1/150)

また、その攪乱から段状遺構41までの6mほどは柱穴がほとんど検出されなかったことから、段状遺構41は単独で所在するようである。時期は、弥生時代中期後半、弥生時代後期、古墳時代初頭の遺構が混在している状況である。 (物部)

段状遺構36 (第48・49図)

調査区境で溝の屈曲部が検出された。遺物はなく、時期は不明である。 (物部)

段状遺構37 (第48・49図)

幅約40cmの溝が検出された。溝の西部は調査区外へ延び、東部は南方向に屈曲している。上方に位置

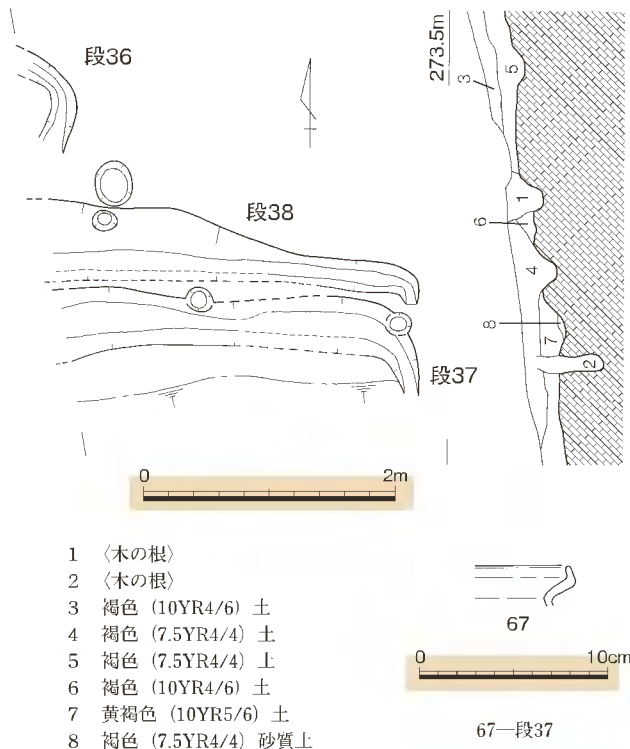
する段状遺構38と下方に位置する竪穴住居8に切られている。埋土中から甕の口縁部67が出土したが、段状遺構37の時期は、竪穴住居8との切り合い関係から弥生時代中期後半以前と推定される。 (物部)

段状遺構38 (第48・49図)

段状遺構37を切っている。溝の東部は南方向に屈曲している。段状遺構17を北の山側へ60cmほど平行移動したような位置、形態であるので、造り替えあるいは建て替えの可能性がある。段状遺構17に近い時期が推定される。 (物部)

竪穴住居8 (第48・50図、図版6-3・4)

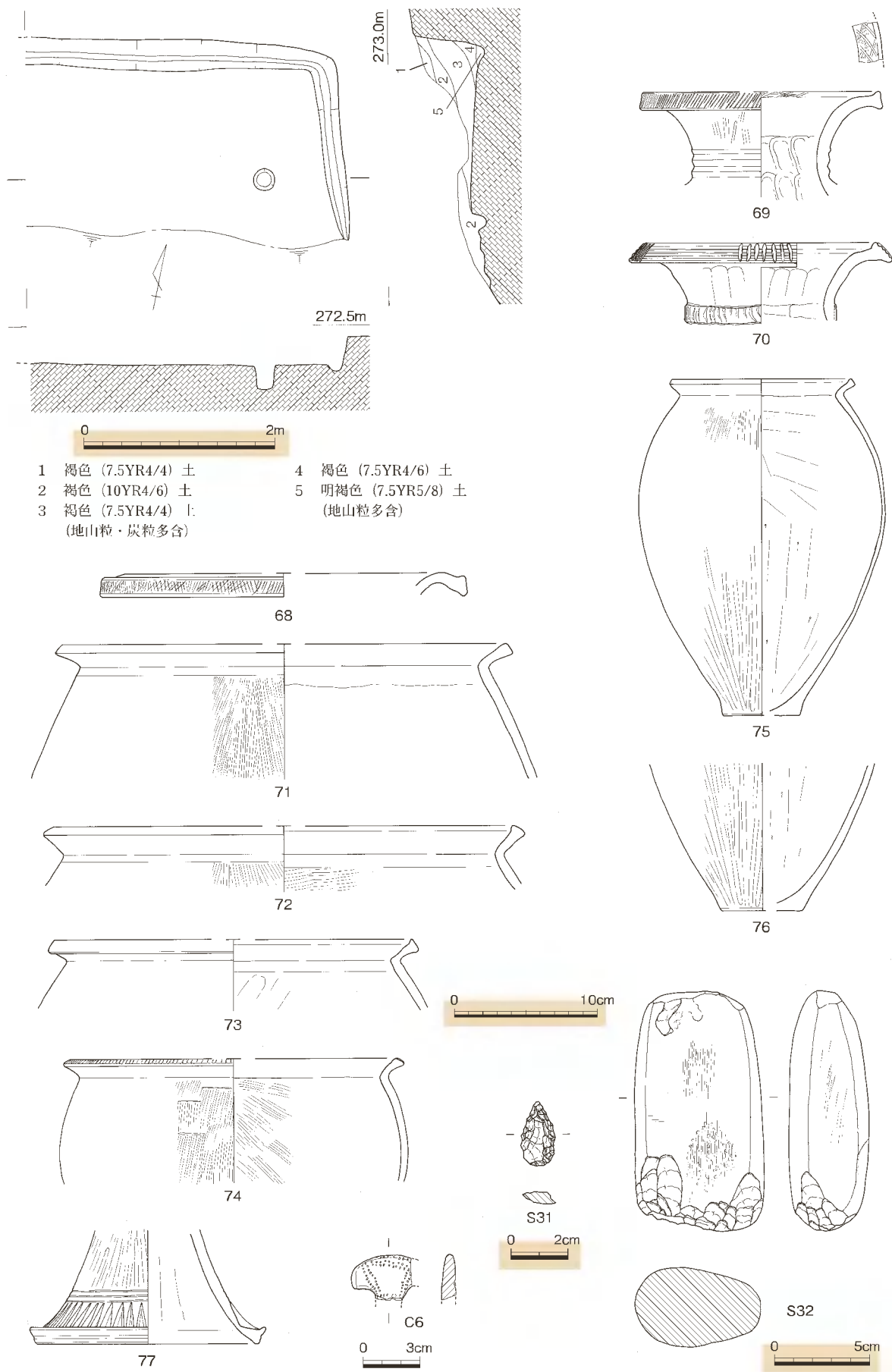
西側調査区境で検出された方形の竪穴住居で、南斜面に立地する。竪穴住居の西壁は調査区外になるので、全体の大きさは不明である。壁は垂直に近く、床面から最大で60cmの高さがある。柱穴は1個あるが、



- 1 〈木の根〉
- 2 〈木の根〉
- 3 褐色 (10YR4/6) 土
- 4 褐色 (7.5YR4/4) 土
- 5 褐色 (7.5YR4/4) 土
- 6 褐色 (10YR4/6) 土
- 7 黄褐色 (10YR5/6) 土
- 8 褐色 (7.5YR4/4) 砂質土

第49図 段状遺構36～38 (1/60)・出土遺物 (1/4)





第50図 竪穴住居 8 (1/60)・出土遺物 (1/4・1/3・1/2)

浅いので支柱穴とするには躊躇する。出土遺物は多い。土器には壺68~70、甕71~76、高杯77がある。このうち、壺70は床面に接地していた。C 6は小形の分銅形土製品で、埋土中から出土した。S31はサヌカイト製石鏃で壁体溝埋土中で検出した。S32は玄武岩製の大型蛤刃石斧で、刃部が欠損した後、剝離調整を加えているものと推定される。また、サヌカイトの剥片が、埋土中や壁体溝埋土中から5片検出されており、サヌカイト製石器の製作を行っていたものと考えられる。時期は出土土器の特徴から弥生時代中期後半。(物部)

段状遺構39 (第48・51図)

段状遺構37の東に位置する段と溝で、その東部は南へ湾曲している。段状遺構40との前後関係は断面の高さが低く明瞭に判別できなかったが、段状遺構40が39を切っているように観察された。埋土中から多くの土器片が検出されたが、ほとんどは弥生時代中期後半の時期のもので、上方からの流入と考えられる。

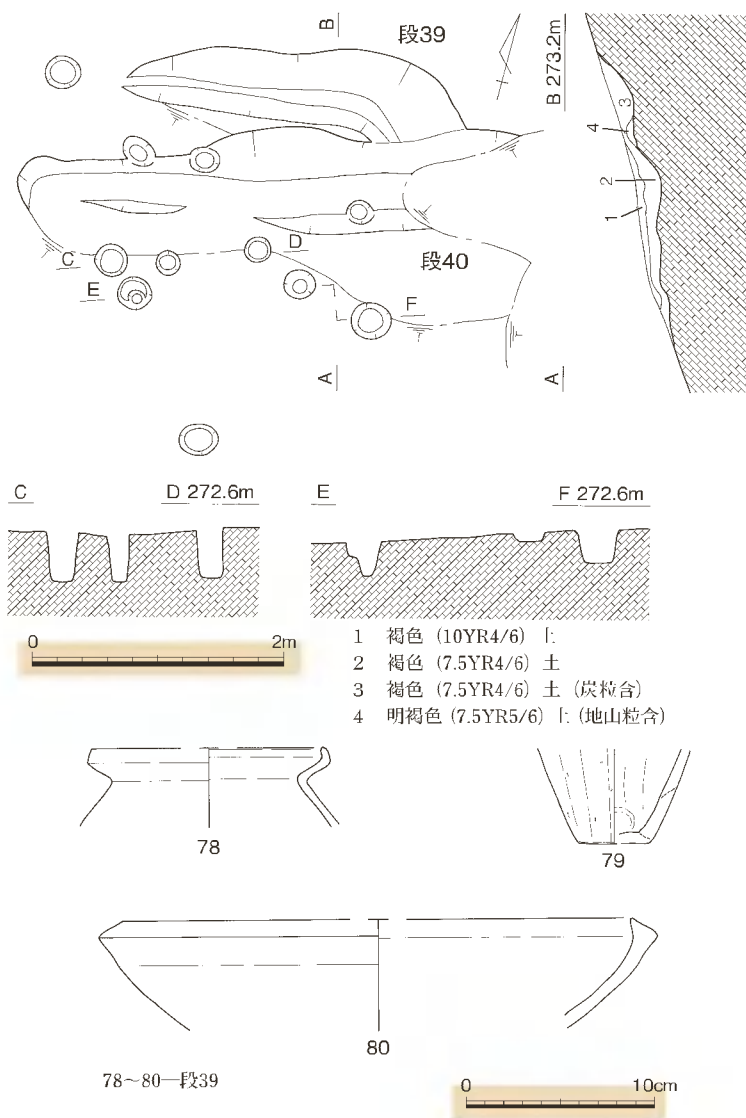
位置から推定すると、E群段状遺構25・26・29に伴っていた可能性がある。段状遺構39の時期は甕78・79から弥生時代後期後葉以降と推定。(物部)

段状遺構40 (第48・51図)

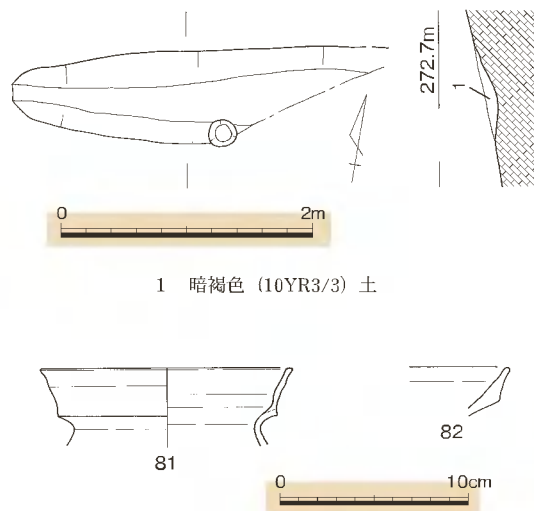
段状遺構39の南に位置し、幅の広い溝を持つ。その西端部は南に屈曲する。竪穴住居8を切っている。柱穴はまとまらない。時期は切り合い関係から、弥生時代後期後葉以降と考える。(物部)

段状遺構41 (第48・52図)

F群の東端に位置し、竪穴住居6を切っている。時期は、出土した二重口縁の甕81から古墳時代初頭と推定される。(物部)

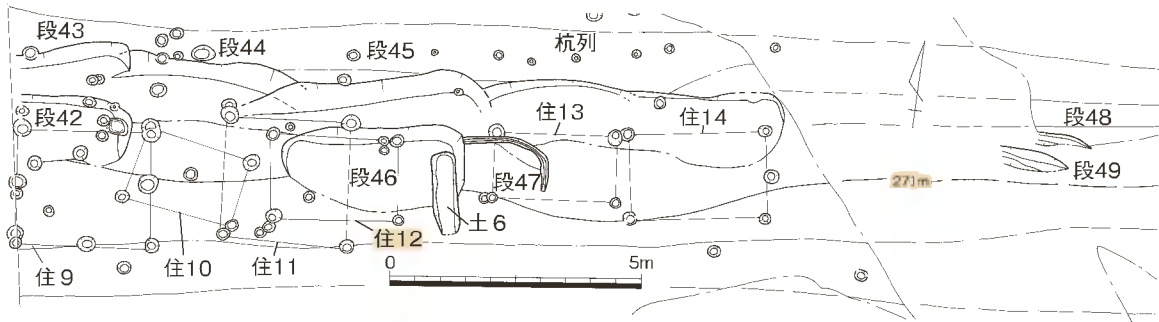


第51図 段状遺構39・40 (1/60)・出土遺物 (1/4)



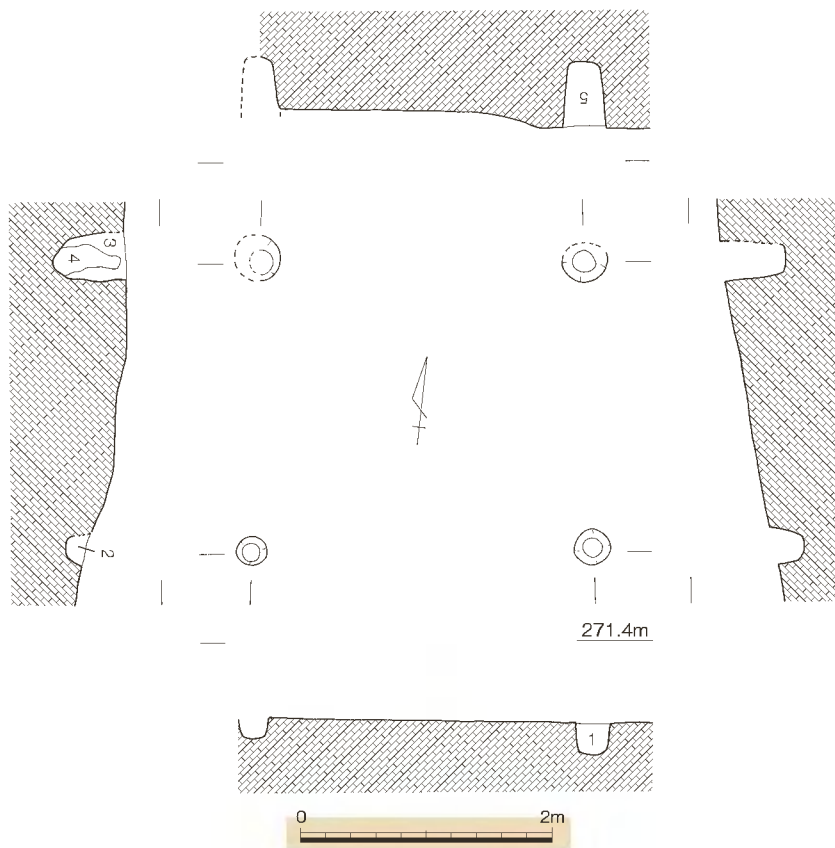
(物部) 第52図 段状遺構41 (1/60)・出土遺物 (1/4)

(7) G群 (第11・53図、図版7-1)



第53図 G群遺構配置図 (1/150)

G群は標高271.0m前後に約20mにわたって連なる遺構群である。竪穴住居が6軒、段状遺構が8面、土壇が2基、杭列が1列確認された。ただし、竪穴住居に伴う段状遺構であったり、段状遺構に伴う土壇であったりするものもあると思うが、そうでない可能性も考えられることから、個別に番号を付けた。竪穴住居とした6軒は、4個の柱穴のまとまりとして認識されたもので、壁体溝や中央穴といったものは検出されていない。段状遺構などの削平を受けているとも考えられるが、もともとない可能性もあり、一般的な竪穴住居とは異なる建物であるかもしれない。また、竪穴住居には、4個



- |                           |                             |
|---------------------------|-----------------------------|
| 1 暗褐色 (7.5YR3/3) 土 (地山粒含) | 4 にふい褐色 (7.5YR5/4) 土 (地山粒含) |
| 2 暗褐色 (7.5YR3/4) 土        | 5 黒褐色 (7.5YR3/2) 土          |
| 3 褐色 (7.5YR4/4) 土 (炭粒含)   |                             |

第54図 竪穴住居9 (1/60)

の柱穴を結んだ形が正方形になるものと、長方形になるものがあり、正方形のほうは柱穴間距離が竪穴住居2と類似している。G群は時期の特定できる遺構が少ないが、段状遺構43と竪穴住居13は出土遺物より弥生時代後期後葉から古墳時代初頭と考えられることから、同様の高さに平坦面を持つ段状遺構や、同規模の竪穴住居など遺構の多くは弥生時代後期後葉から古墳時代初頭にかけてと推定される。また、段状遺構46は弥生時代中期後半と考えられ、平坦面が同様に一段低い段状遺構42もこの時期の可能性もある。(物部)

**竪穴住居9 (第53・54図)**

竪穴住居9はG群西端部に位置する4個の柱穴のまとまりである。柱間距離は東西250~270cm、南北230cmを測り、正方形に近い配置である。出土遺物はない。段状遺構42の埋土を切って柱穴が掘られていることから、段状遺構42より新しい。(物部)

**竪穴住居10 (第53・55図)**

竪穴住居9の東に位置する4個の柱穴のまとまりである。柱間距離は東西220cm前後、南北135~150cmを測り、長方形の配置である。出土遺物はなく時期は不明であるが、柱穴が同じように長方形に配置される竪穴住居13が弥生時代後期後葉から古墳時代初頭であることから、竪穴住居10も近い時期ではないだろうか。(物部)

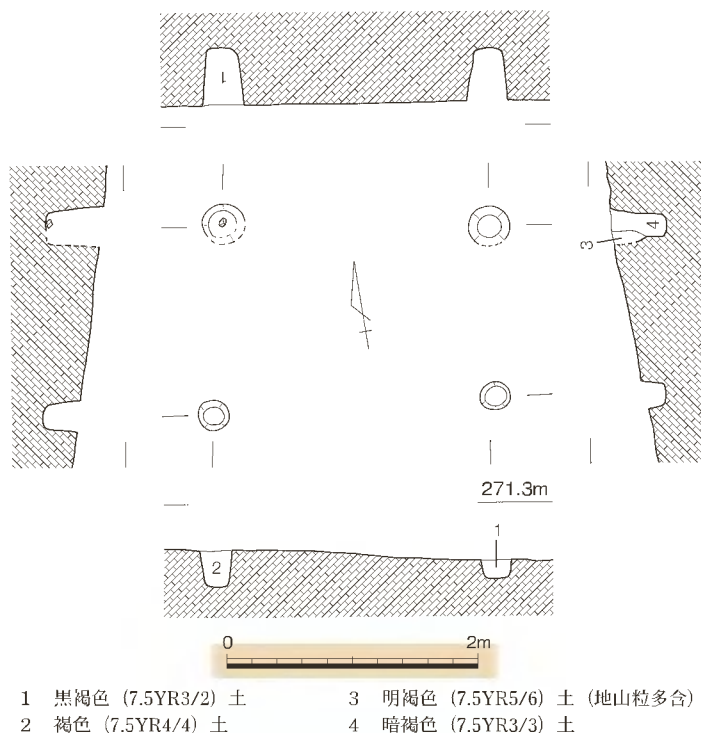
**竪穴住居11 (第53・56図)**

竪穴住居10の東に位置する4個の柱穴のまとまりである。柱間の距離は東西250cm前後、南北240~250cmを測り、正方形の配置である。出土遺物はなく時期は不明である。(物部)

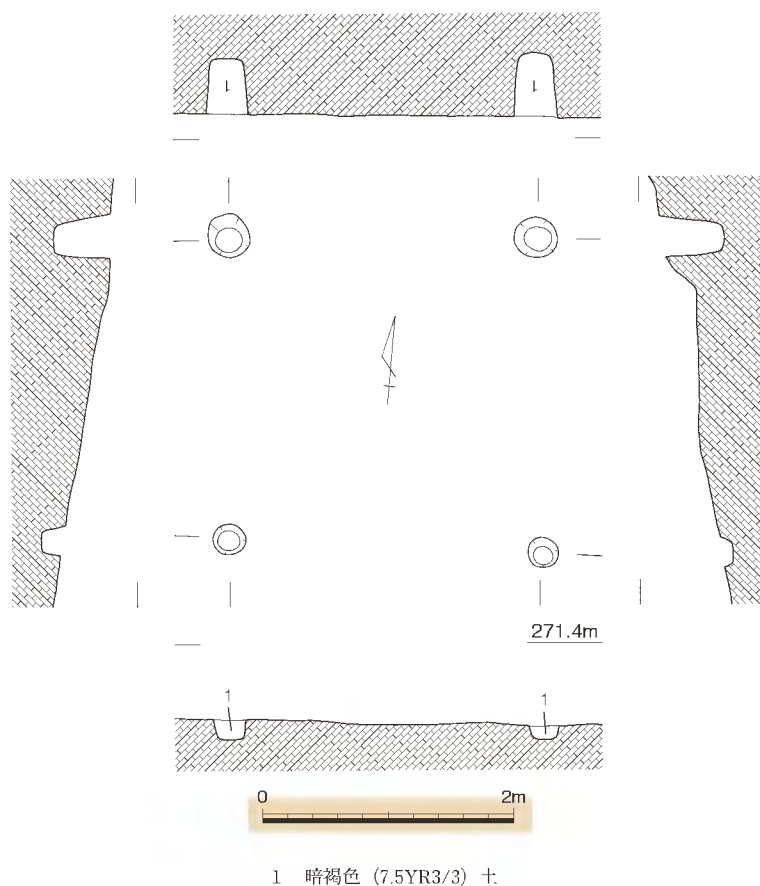
**竪穴住居12 (第53・57図)**

竪穴住居11と重複する4個の柱穴のまとまりである。柱間距離は東西250cm前後、南北160~170cmを測り、長方形の配置である。出土遺物はなく時期は不明であるが、柱穴が同じように長方形に配置される竪穴住居13が弥生時代後期後葉から古墳時代初頭であることから、竪穴住居12も近い時期と推定。(物部)

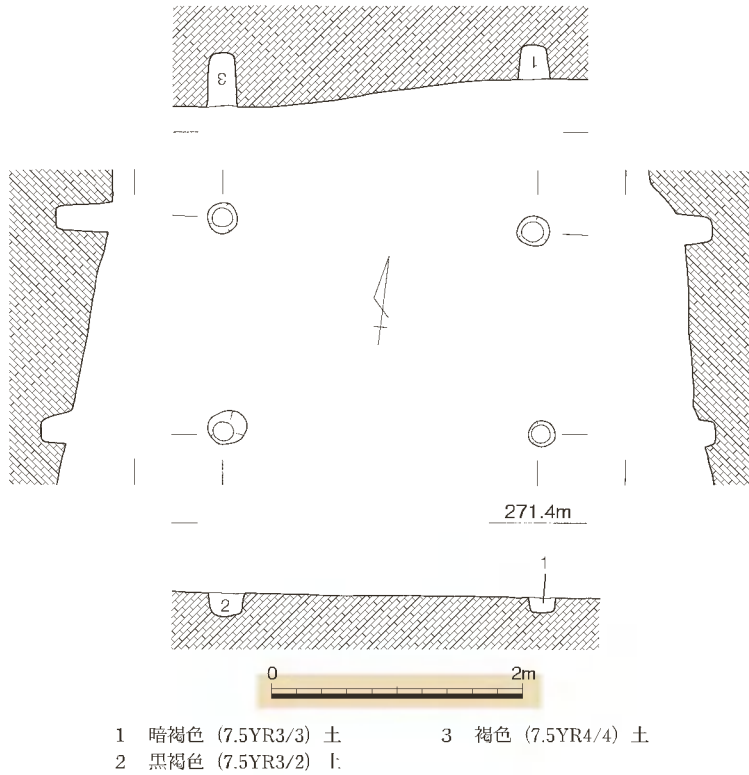
**竪穴住居13 (第53・58・59図、  
図版9-2)**



第55図 竪穴住居10 (1/60)

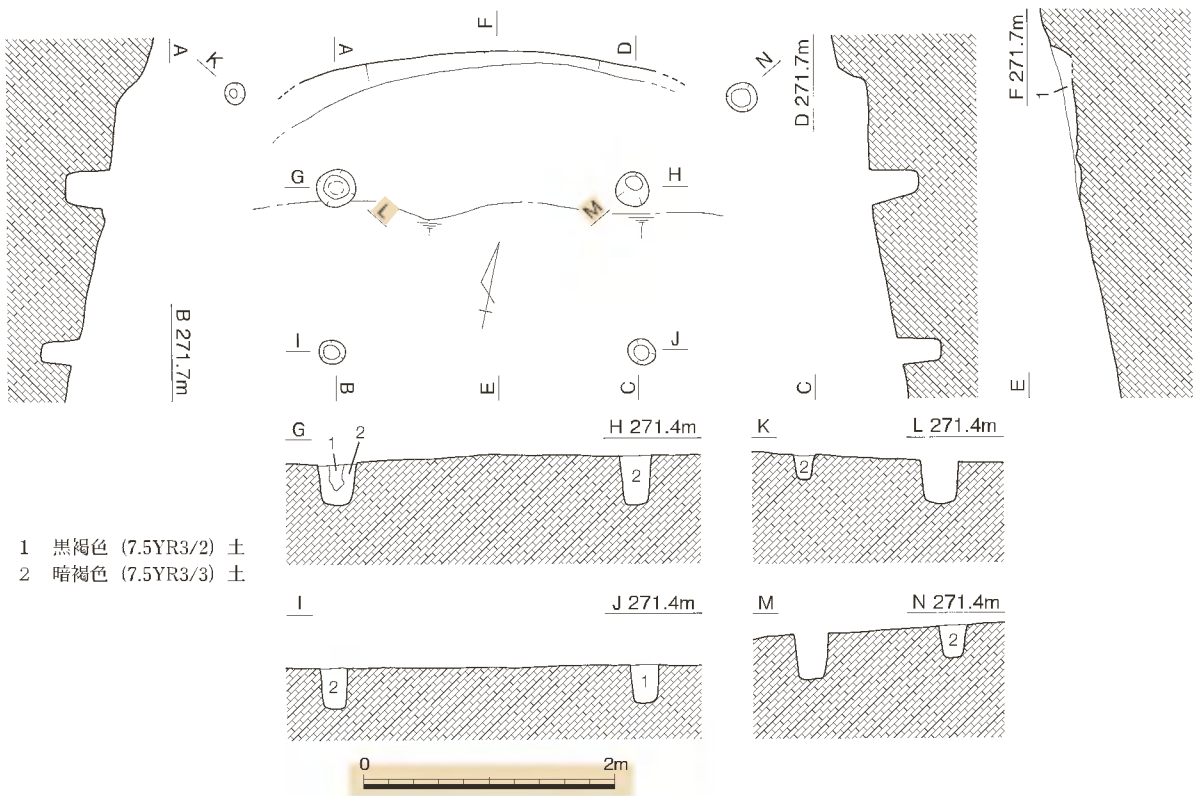


第56図 竪穴住居11 (1/60)

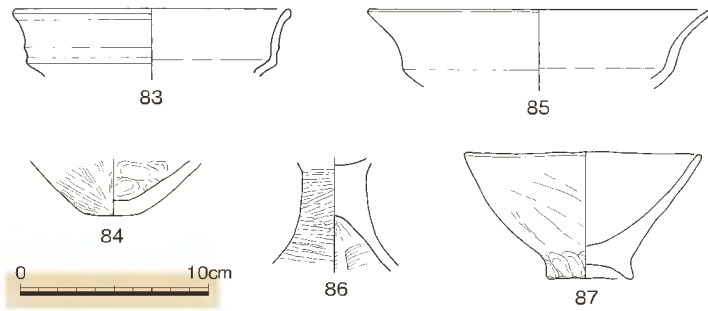


第57図 竪穴住居12 (1/60)

4個の柱穴のまとまりと緩く弧を描く段が見られる。柱間距離は東西240cm前後、南北130cm前後を測り、長方形の配置である。段の南側平坦面や斜面には竪穴住居13の4個の柱穴しかないことから、段と柱穴が一連の遺構と考える。壁体溝は検出されなかったが、平面形が楕円形を呈する竪穴住居の可能性もある。また、段のわずかに外側に小振りで浅い柱穴が2個検出された。ちょうど4個の支柱穴の対角線の延長線上に位置し、支柱穴から等しく110cmの距離にあることから、この竪穴住居に伴う可能性がある。土器は段埋土から出土した。竪穴住居13の時期は甕83などから弥生時代後期後葉から古墳時代初頭と推定。(物部)



第58図 竪穴住居13 (1/60)



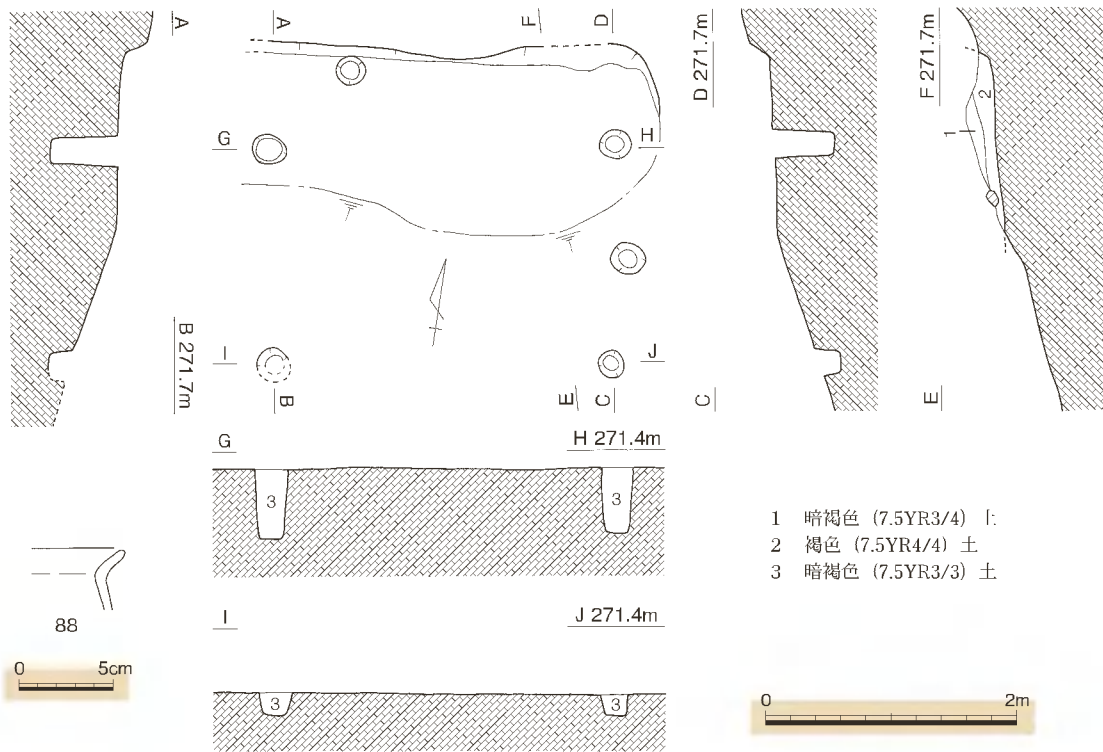
第59図 竪穴住居13出土遺物 (1/4)

竪穴住居14 (第53・60図)

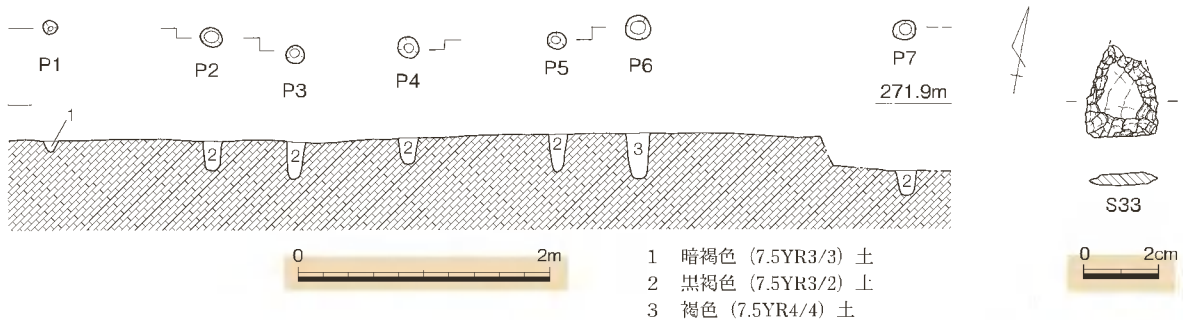
4個の柱穴のまとまりと直線的な段が見られる。段の東部は屈曲し、西部は竪穴住居13に切られている。柱間距離は東西270cm前後、南北170cm前後を測り、長方形の配置である。甕88が埋土中から出土した。時期は竪穴住居に切られていることから弥

生時代後期後葉から古墳時代初頭以前と推定されるが、それほど時期差はないものとする。(物部) 杭列 (第53・61図)

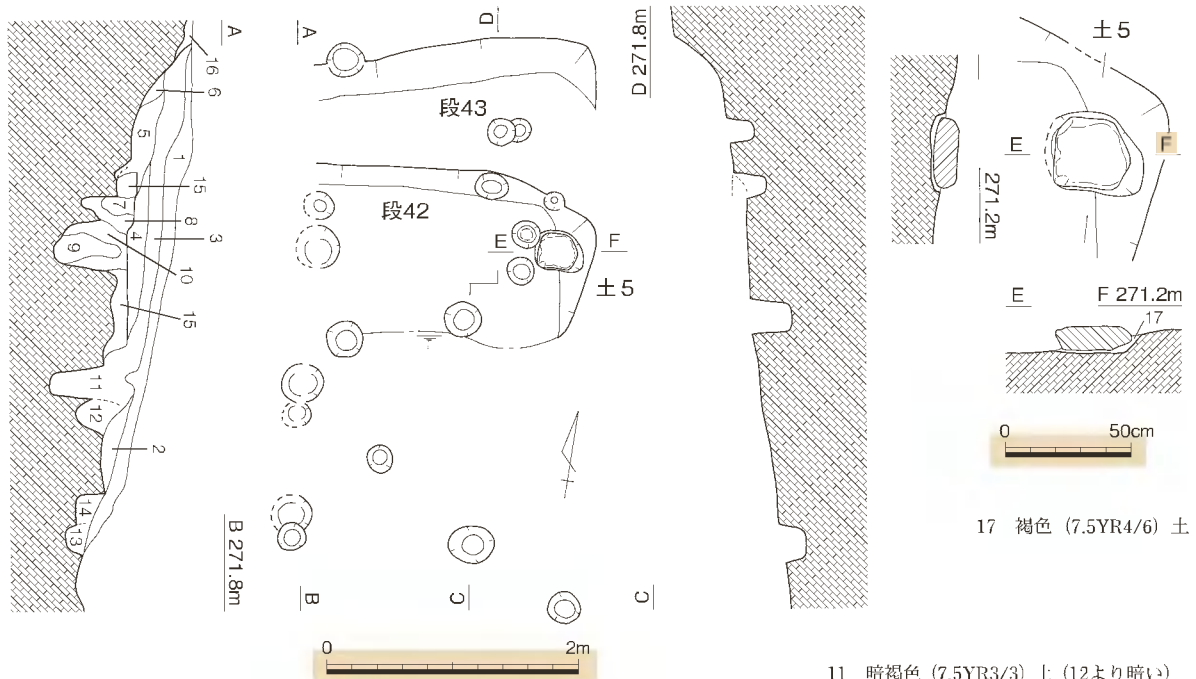
竪穴住居13・14の北側に杭の跡と考えられる小穴が約7mにわたって7個検出された。小穴は正確に直線上に位置せず、間隔もまちまちであるが、位置関係から竪穴住居13・14に伴う柵あるいは垂木



第60図 竪穴住居14 (1/60)・出土遺物 (1/4)



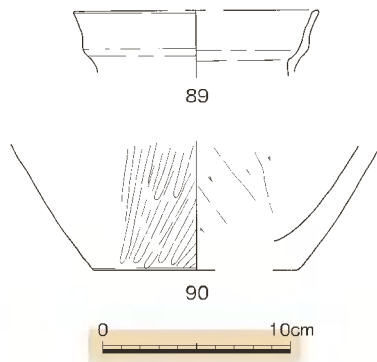
第61図 杭列 (1/60)・出土遺物 (1/2)



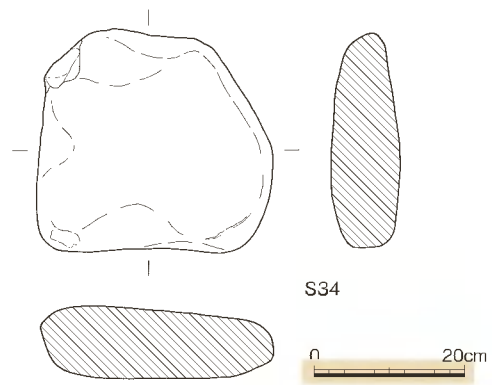
- 1 黄褐色 (10YR5/6) 上 (流上)
- 2 褐色 (10YR4/6) 土
- 3 暗褐色 (7.5YR3/4) 土
- 4 褐色 (7.5YR4/3) 上
- 5 褐色 (7.5YR4/4) 土

- 6 褐色 (10YR4/6) 上 (地山粒含)
- 7 暗褐色 (7.5YR3/4) 土
- 8 褐色 (7.5YR4/6) 土
- 9 にぶい褐色 (7.5YR5/4) 上 (地山粒含)
- 10 褐色 (7.5YR4/4) 土 (炭粒含)

- 11 暗褐色 (7.5YR3/3) 上 (12より暗い)
- 12 暗褐色 (7.5YR3/3) 土
- 13 暗褐色 (7.5YR3/4) 土 (14より暗い)
- 14 暗褐色 (7.5YR3/4) 上
- 15 明褐色 (7.5YR5/6) 土
- 16 黄褐色 (10YR5/6) 土



89・90—段43  
S34—土5



第62図 段状遺構42・43 (1/60)・土壌5 (1/30)・出土遺物 (1/10・1/4)

の支えなどの可能性が考えられる。

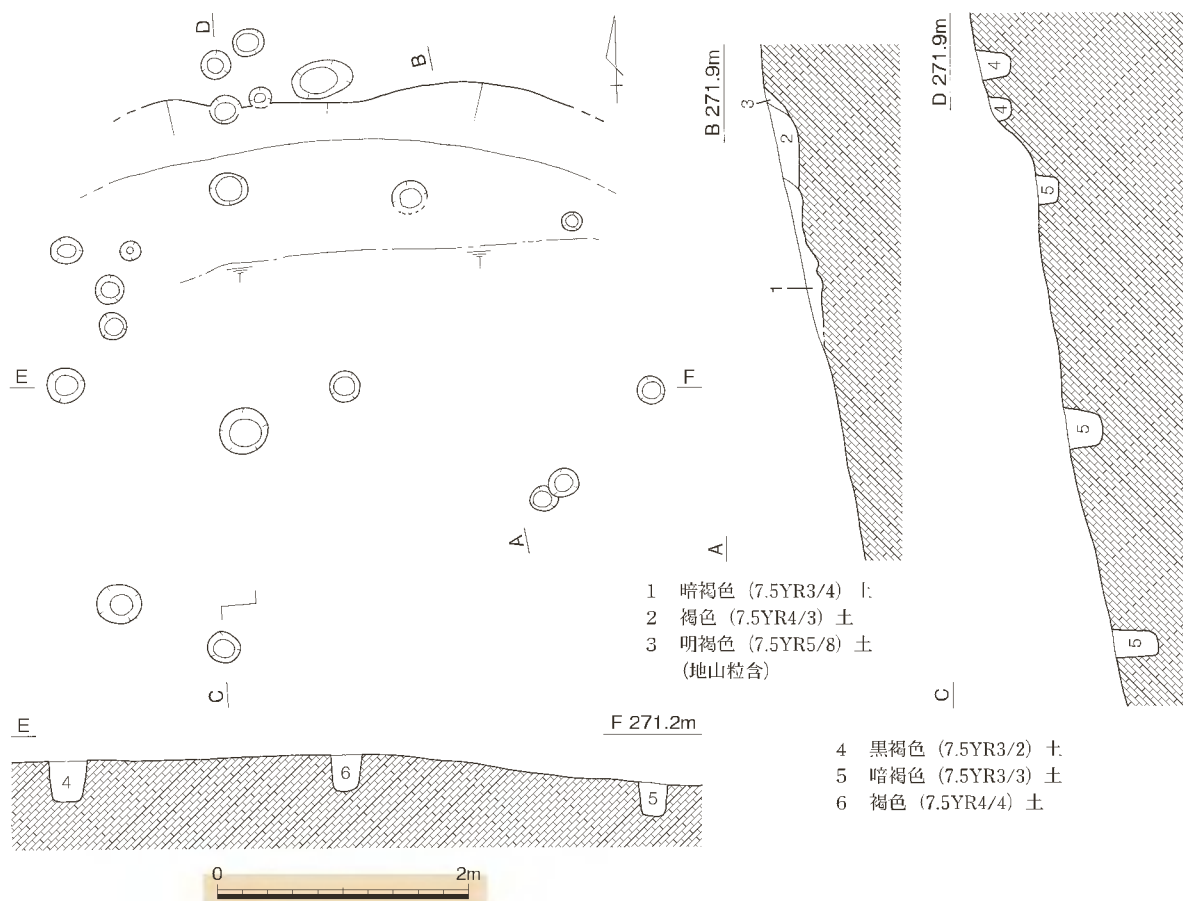
(物部)

段状遺構42 (第53・62図)

段状遺構42は西側調査区境に位置する。屈曲する段が検出され、方形の平坦面を造成している。西部が調査区外になることから全体の規模は分からない。柱穴も多いが判別できない。断面から段状遺構43に切られている。東壁部にそれを掘り込むように土壌5が位置している。遺物はなく、段状遺構42の時期は切り合い関係から弥生時代後期後葉から古墳時代初頭以前と推定されるが、段状遺構46と形状や平坦面の高さが近いことから、弥生時代中期後半まで遡る可能性が考えられる。(物部)

段状遺構43 (第53・62図)

段状遺構42の上方に位置し、段状遺構42を切っている。段の東部が屈曲しており方形の平坦面を造成している。埋土中から甕口縁89が出土し、段状遺構43の時期は弥生時代後期後葉から古墳時代初頭と推定される。甕底部90は混入だろう。なお、土壌5はこの段状遺構43に伴う可能性もある。(物部)



**土壌5** (第53・62図、図版10-2)

土壌5は段状遺構42の東壁部に位置することから、この段状遺構42に伴う可能性が高いが、上方の段状遺構43の平坦面から掘り込まれている可能性も否定しきれない。内部に30cm大の扁平な安山岩が納められていた。この石は使用痕がないことから作業台ではなく、石器の原石として保管されていた可能性がある。(物部)

**段状遺構44** (第53・63図)

段状遺構44は西部を段状遺構43に、東部を段状遺構45によって切られている。緩やかな弧状を描く段である。平坦面や斜面に柱穴が多くあるが、まとまらない。時期は段状遺構43に切られていることから弥生時代後期後葉から古墳時代初頭以前である。(物部)

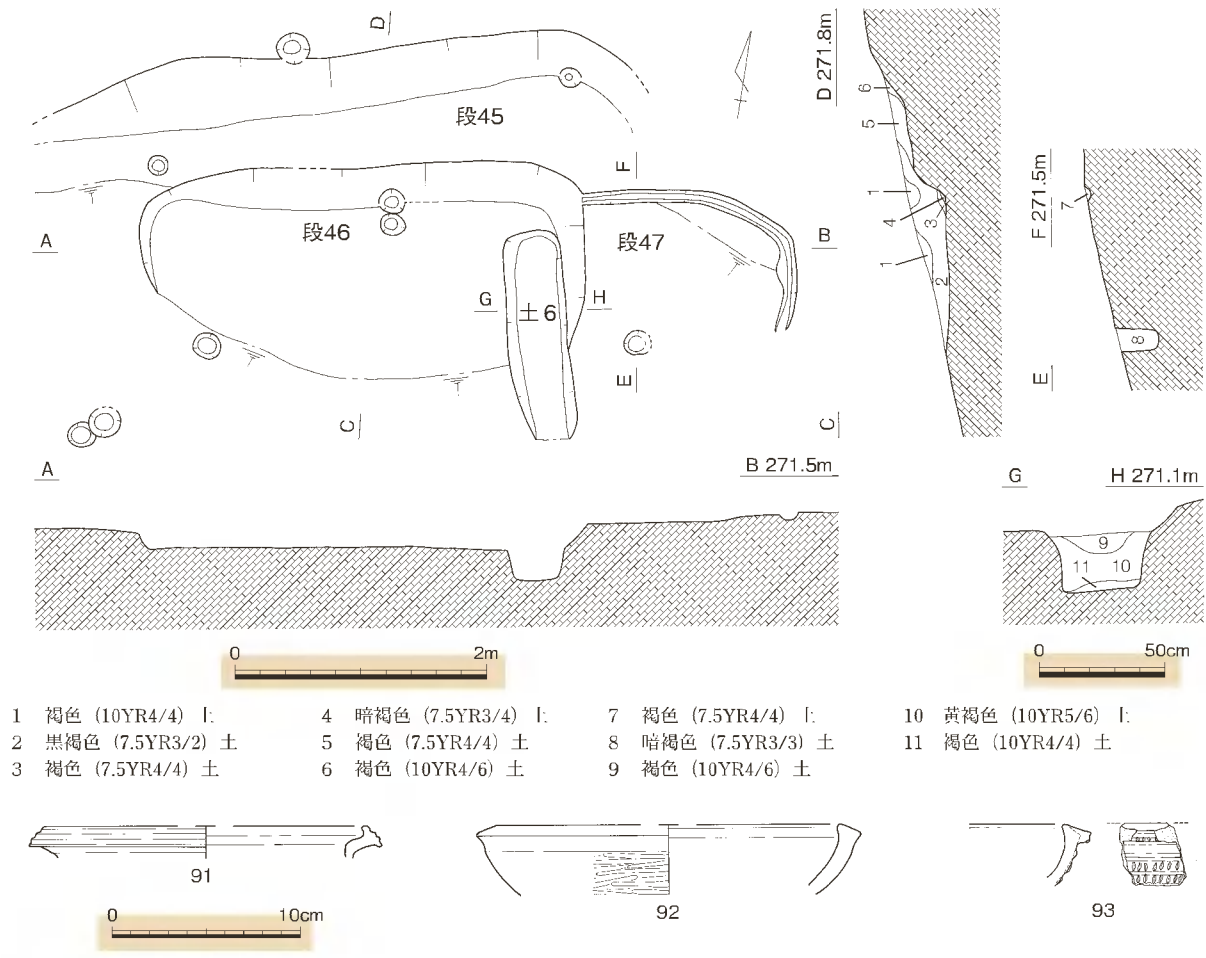
**段状遺構45** (第53・64図)

段状遺構45は西部で段状遺構44を、東部で竪穴住居13を切っている。直線的に400cm以上の段を造っており、東端部は南に湾曲する。この段自体が1つの段状遺構である可能性もあるし、竪穴住居11・12に伴う掘削の連続である可能性、またその両方の可能性もある。時期は、切り合い関係から弥生時代後期後葉から古墳時代初頭と推定される。(物部)

**段状遺構46** (第53・64図)

段状遺構46は段状遺構45の南に位置し、東西約320cmの方形を呈する平坦面を造成している。東部には土壌6が位置し、壁にきれいに沿っていることから段状遺構46に伴っている可能性が高い。埋土中から91~93の甕や高杯片が出土し、段状遺構46は弥生時代中期後半と推定される。(物部)





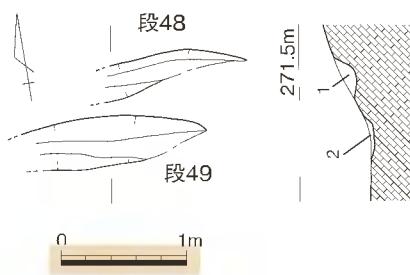
第64図 段状遺構45~47 (1/60)・土壌6断面 (1/30)・段状遺構46出土遺物 (1/4)

段状遺構47 (第53・64図)

段状遺構47は段状遺構46の東に位置する。東部が南に湾曲する壁体溝状の細い溝が検出された。竪穴住居13の柱穴を切っていることから、段状遺構47の時期は弥生時代後期後葉から古墳時代初頭以後と推定される。(物部)

土壌6 (第53・64図)

土壌6は段状遺構46の東壁に沿って検出された土壌で、位置関係から段状遺構46に伴う可能性が高い。南北長160cm以上、東西幅約45cm、深さ約25cmの長方形を呈する土壌と推定される。埋土は地山と類似した土で強く締まっていたことから、埋め戻された可能性がある。遺物はないが、段状遺構46に近い時期が推定される。(物部)



- 1 褐色 (7.5YR4/4) 土  
2 明褐色 (7.5YR5/8) 土

第65図 段状遺構48・49 (1/60)

段状遺構48 (第53・65図)

道など後世の攪乱によって大部分が削平されている。幅の広い溝がわずかに残っている。時期は不明である。(物部)

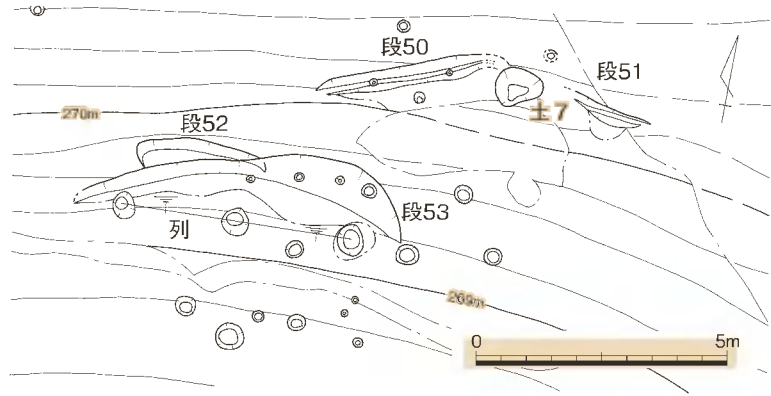
段状遺構49 (第53・65図)

道など後世の攪乱によって大部分が削平されている。幅の広い溝がわずかに残っている。時期は不明である。

これら段状遺構48・49より東へ遺構は続いていかないようである。(物部)

(8) H群 (第11・66図、  
図版7-1・8-1)

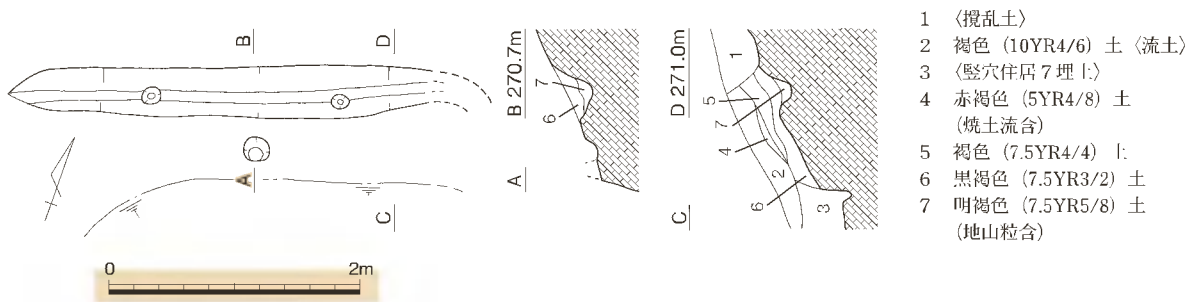
H群は標高269.0~270.5mの南斜面に立地する。段状遺構4面と柱穴列1列が確認された。やや高低差があり、上方の段状遺構50・51と下方の段状遺構52・53、柱穴列の2つのまとまりがある。いずれも横方向へ遺構が延びていかない。竪穴住居



第66図 H群遺構配置図 (1/150)

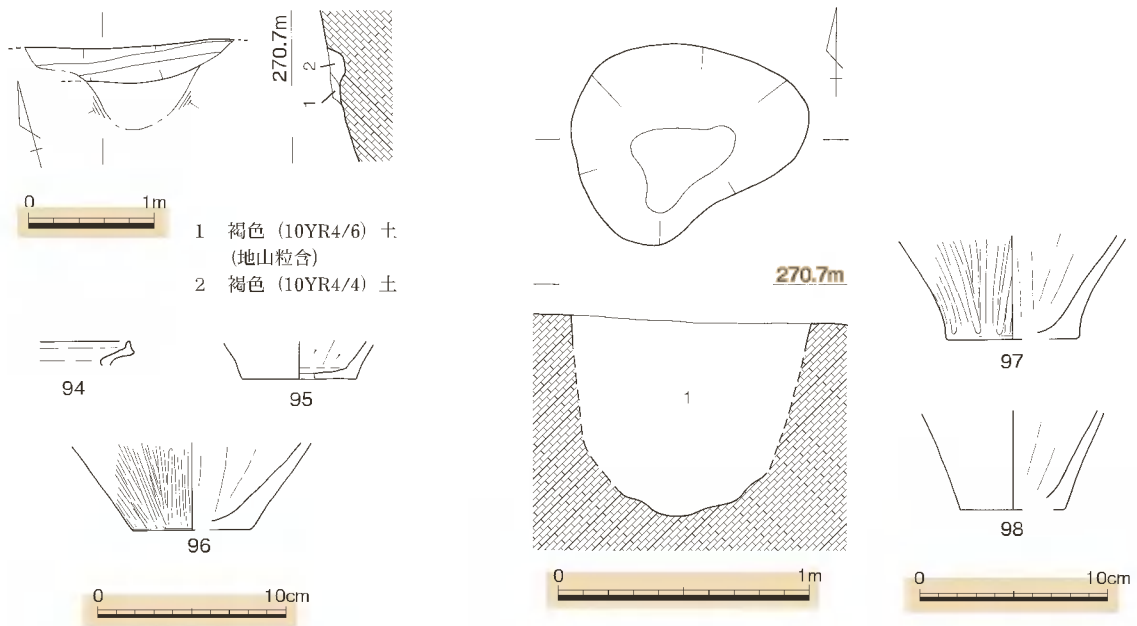
7は上方と下方のまとまりの中間に位置する。H群の時期は弥生時代中期後半と推定される。(物部)  
段状遺構50 (第66・67図)

東西約330cmほど直線的に延び、東部が南に曲がる溝を検出した。出土遺物はない。土壌7との切り合い関係は明らかにすることができなかったが、断面の土層から竪穴住居7よりも古いと判断され



- 1 (攪乱土)
- 2 褐色 (10YR4/6) 土 (流土)
- 3 (竪穴住居7埋土)
- 4 赤褐色 (5YR4/8) 土 (焼土流合)
- 5 褐色 (7.5YR4/4) 土
- 6 黒褐色 (7.5YR3/2) 土
- 7 明褐色 (7.5YR5/8) 土 (地山粒合)

第67図 段状遺構50 (1/60)



- 1 褐色 (10YR4/6) 土 (地山粒合)
- 2 褐色 (10YR4/4) 土

- 1 黒褐色 (7.5YR3/2) 土

第68図 段状遺構51 (1/60)  
・出土遺物 (1/4)

第69図 土壌7 (1/30)・出土遺物 (1/4)

ることから、段状遺構50の時期は弥生時代中期後半以前と推定される。(物部)

**段状遺構51 (第66・68図)**

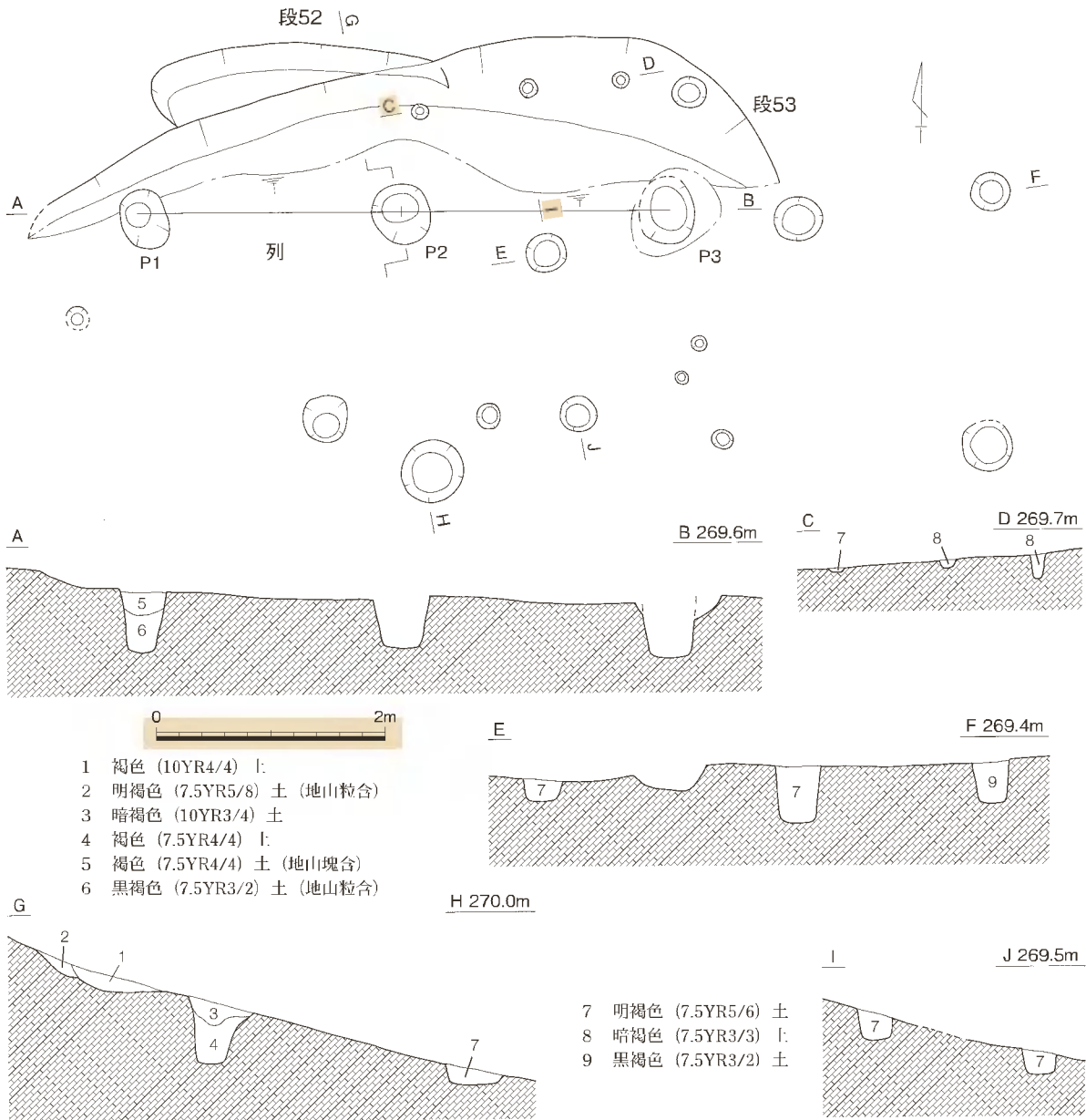
道の削平を受け、溝と平坦面がわずかに検出された。溝埋土中から甕片94～96が出土しており、この土器の特徴から段状遺構51の時期は弥生時代中期後半と推定される。(物部)

**土壇7 (第66・69図)**

土壇7は段状遺構50と51の中間に位置する。平面形は直径約90cmの不整円形を呈し、検出面からの深さは約80cmを測る。埋土は黒っぽい土で、下層から97・98の甕底部が出土した。周囲の遺構との切り合いは明らかにできなかった。出土土器の特徴から時期は弥生時代中期後半と推定される。(物部)

**段状遺構52 (第66・70図)**

段状遺構52は段状遺構53に切られており、西部が南に曲がる段とわずかな平坦面を確認した。時期は、段状遺構53が弥生時代中期後半と推定されることから、それ以前である。(物部)



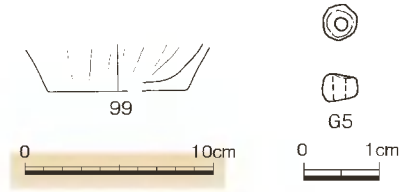
第70図 段状遺構52・53・柱穴列 (1/60)

段状遺構53 (第66・70図)

緩やかに湾曲する段と平坦面である。その平坦面に柱穴列がちょうど収まり、柱穴列とは一連の遺構である可能性が高い。ただし、別の柱穴もあることから断定はできない。(物部)

柱穴列 (第66・70・71図、図版9-4)

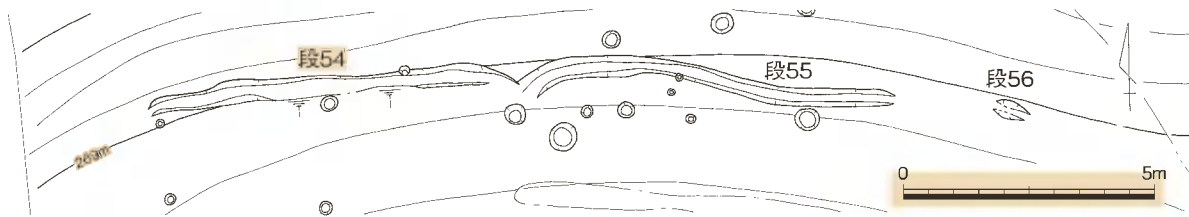
柱穴列は段状遺構53の南側平坦面に位置し、一連の遺構である可能性がある。柱穴3個が直線上に並ぶ。柱穴直径は約50cmを測る。八幡山遺跡で検出されたとの柱穴より大きく、しっかりしていることから、掘立柱建物である可能性が高い。遺物はP1埋土中から甕底部99が、P3埋土下層からガラス小玉G5が出土した。時期は弥生時代中期後半と推定される。(物部)



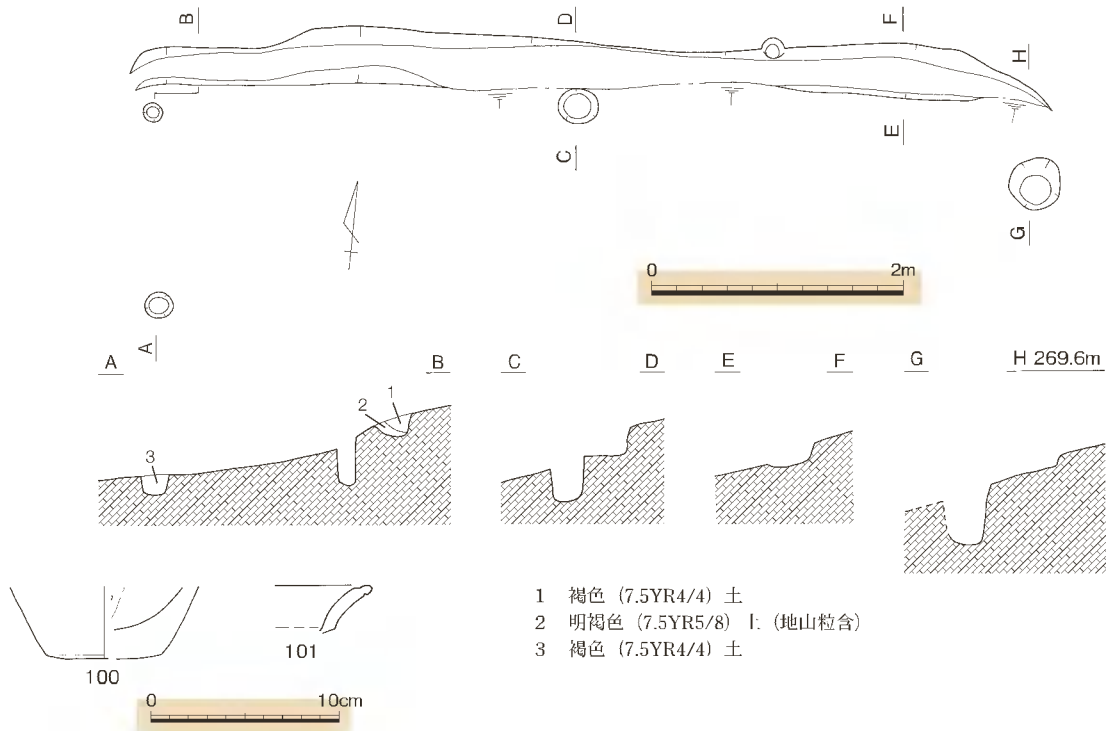
第71図 柱穴列出土遺物 (1/4・1/1)

(9) I群 (第11・72図、図版8-1)

I群は標高269.0m付近に位置する遺構群で、段状遺構が3面識別できる。段状遺構54・55は検出時、1条の溝のように見えたが、精査すると中央で分割することが分かり、2面の段状遺構と認識した。I群の時期は出土遺物から弥生時代後期中葉頃と推定できる。(物部)

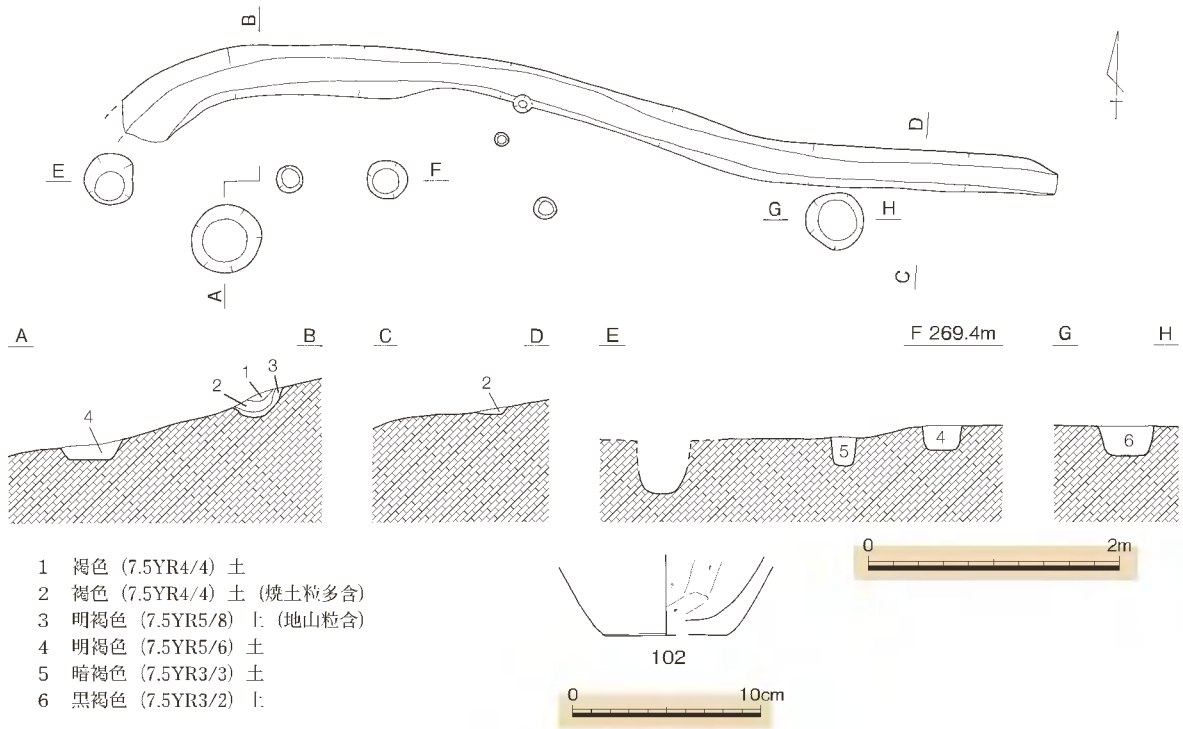


第72図 I群遺構配置図 (1/150)

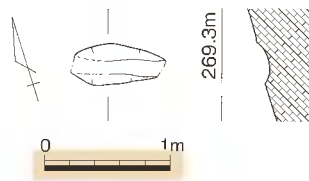


- 1 褐色 (7.5YR4/4) 土
- 2 明褐色 (7.5YR5/8) 土 (地山粒含)
- 3 褐色 (7.5YR4/4) 土

第73図 段状遺構54 (1/60)・出土遺物 (1/4)



第74図 段状遺構55 (1/60)・出土遺物 (1/4)



第75図 段状遺構56 (1/60)

段状遺構54 (第72・73図)

段状遺構54はI群の西半に位置する。約700cmにわたって直線的に伸び、両端部は南に曲がる。溝の北壁は垂直に近く立ち上がる。柱穴は少ない。時期は溝埋土中から出土した甕あるいは壺100と高杯101から弥生時代後期中葉頃と推定される。(物部)

段状遺構55 (第72・74図)

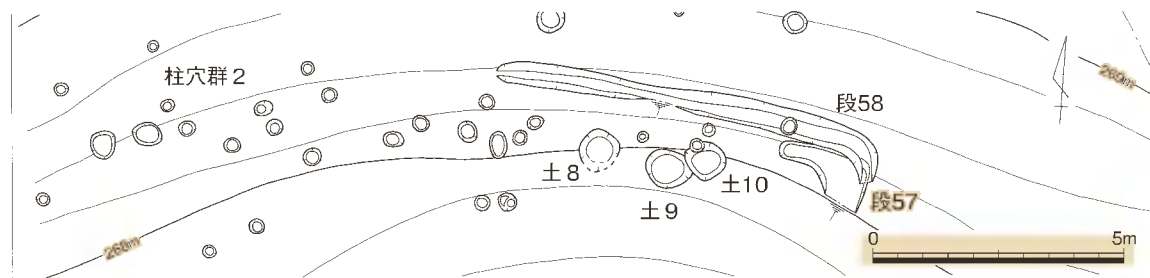
段状遺構54と同様に約700cmにわたって伸びる溝であるが、わずかに蛇行しているので東西で別々の段状遺構に分かれる可能性もある。時期は出土土器の特徴から弥生時代後期中葉頃と推定。(物部)

段状遺構56 (第72・75図)

段状遺構56は段状遺構54の東約2m離れた位置にある。流出が著しく、長さ70cmほどの溝が残るだけであった。出土遺物はなく、時期は不明である。(物部)

(10) J群 (第11・76図、図版8-1)

J群は268.5m付近に位置する遺構群である。段状遺構2面と柱穴群、土壙3基を検出した。J群の



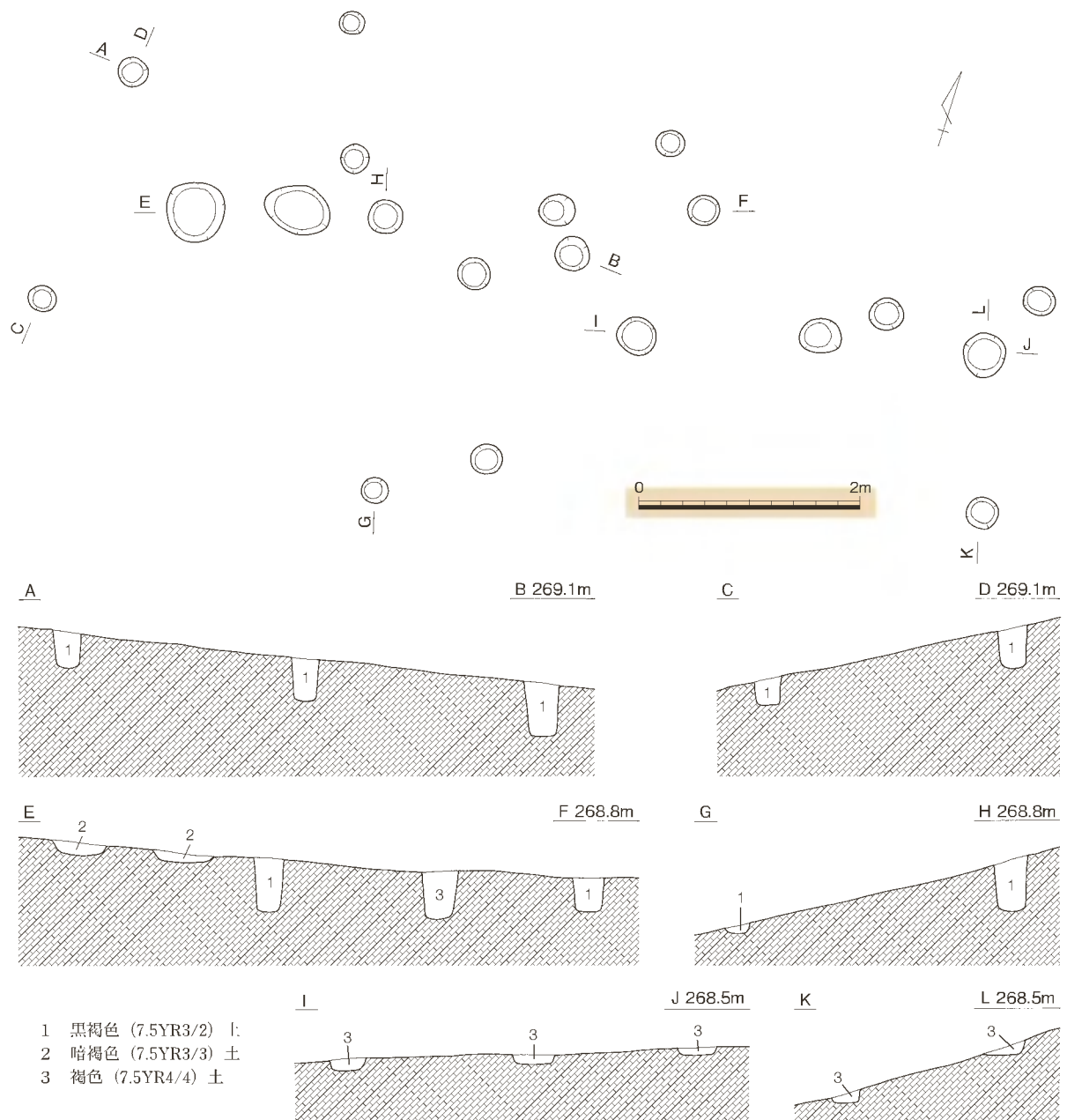
第76図 J群遺構配置図 (1/150)

時期は段状遺構57が弥生時代中期後半と推定されるだけで、その他の遺構の時期は不明である。(物部)  
**柱穴群2 (第76・77図)**

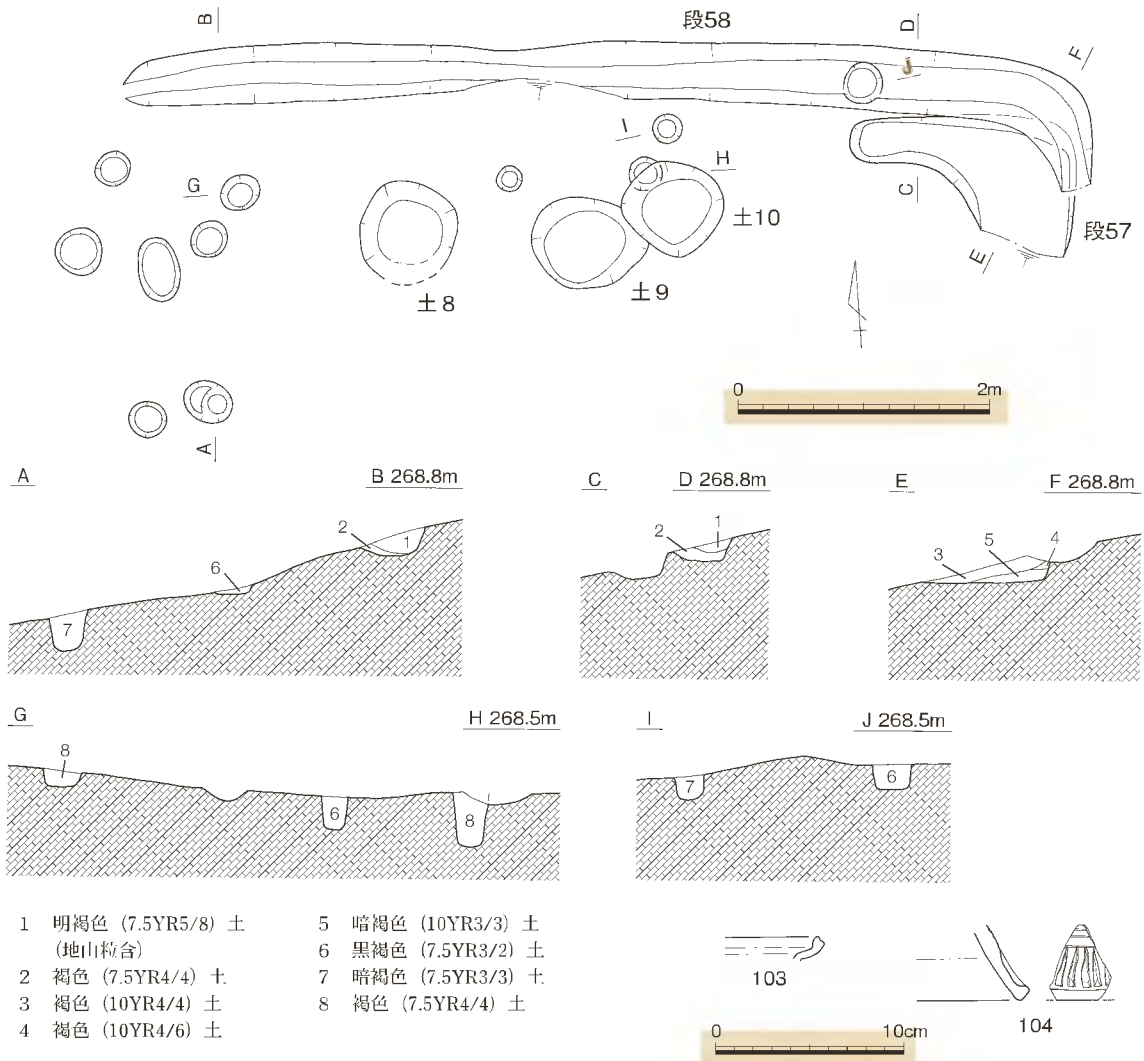
J群の西半に位置し、18個の柱穴が検出された。柱穴は散在しており、西側調査区外に広がっている可能性が強い。断面E-Fで示した深い柱穴3個と、断面I-Jで示した柱穴3個は深さや柱間距離がほぼ等しく、まとまる可能性がある。埋土は黒褐色、暗褐色、褐色の3種類が見られる。流出もあり柱穴がそろわないが、掘立柱建物がいくつかあると思われる。時期は出土遺物がなく、不明と言わざるを得ない。(物部)

**段状遺構57 (第76・78図)**

鍵形に曲がる幅の広い溝で、段状遺構と推定する。上方に位置する段状遺構58の削平を受けている。埋土中から甕103、高杯104が出土し、段状遺構57の時期は弥生時代中期後半と推定される。(物部)



第77図 柱穴群2 (1/60)

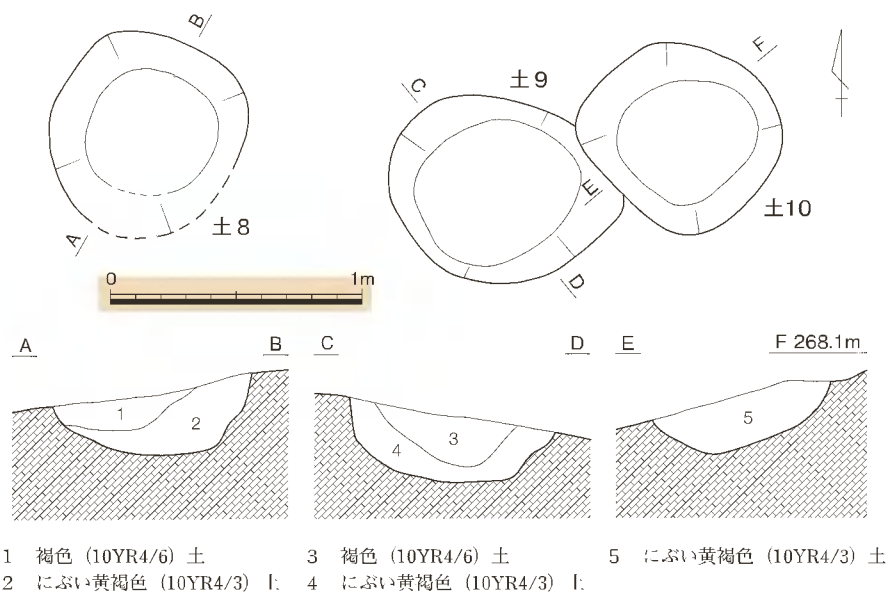


第78図 段状遺構57・58 (1/60)・段状遺構57出土遺物 (1/4)

段状遺構58

(第76・78図)

700cmほど直線的に延びる溝を検出した。東端部は南に湾曲している。柱穴はまとまらない。出土遺物はなく、時期を限定できないが、段状遺構57を切っており、同じ位置で南に曲がることから弥生時代中期後半以後で、それに近い時期が推定される。(物部)



第79図 土壌8~10 (1/30)

**土壌8** (第76・79図)

土壌8は段状遺構58の南斜面に位置する。平面形は直径約80cmの円形を呈し、検出面からの深さは約30cmを測る。遺物はなく、時期、性格とも不明である。 (物部)

**土壌9** (第76・79図)

土壌9は段状遺構58の南斜面に位置する。土壌10に切られている。平面形は直径約80cmの円形を呈し、検出面からの深さは約30cmを測る。遺物はなく、時期、性格とも不明である。 (物部)

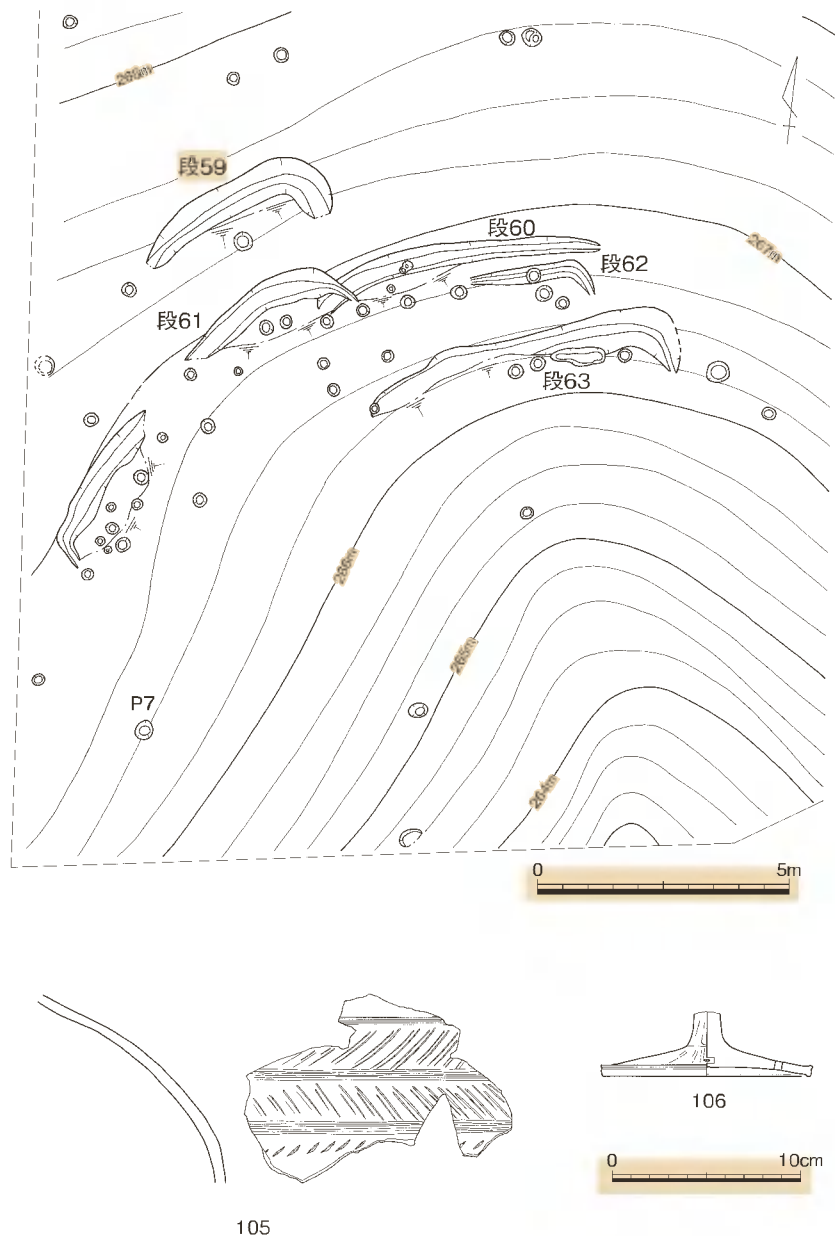
**土壌10** (第76・79図)

土壌10は段状遺構58の南斜面に位置する。土壌9を切っている。平面形は直径約80cmの円形を呈し、検出面からの深さは約30cmを測る。遺物はなく、時期、性格とも不明である。 (物部)

**(11) K群** (第11・80図、図版8-2)

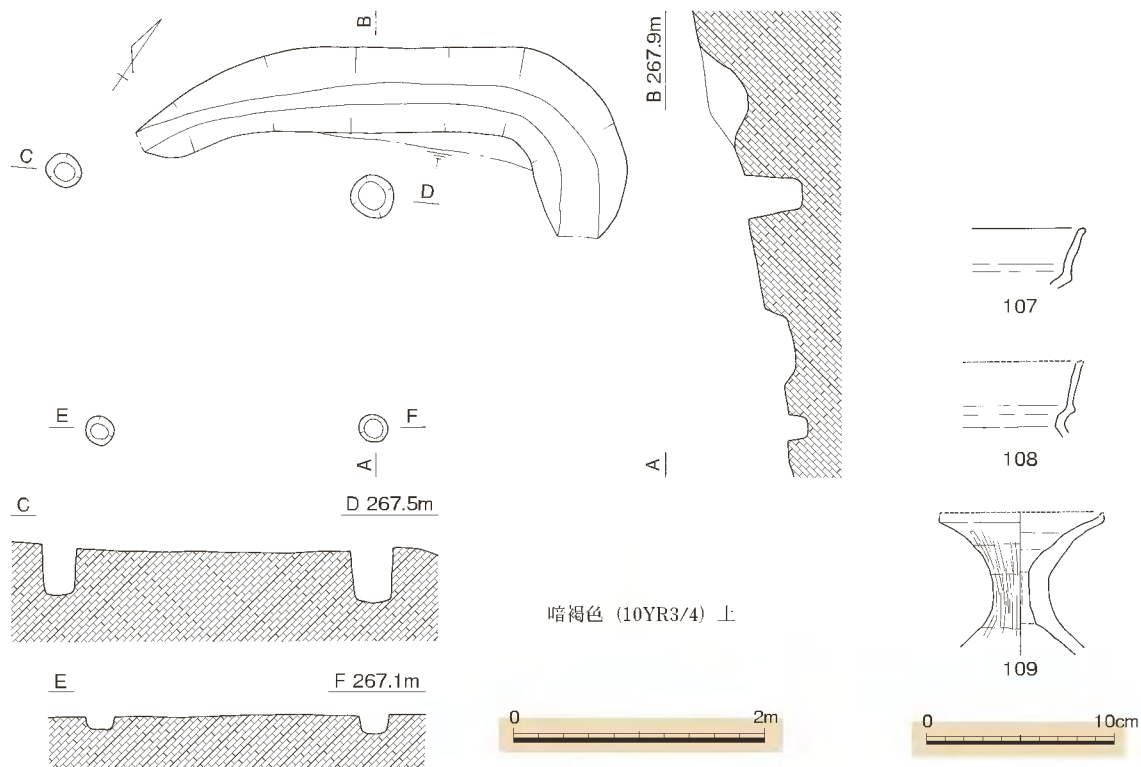
K群は調査区内ではっきりと確認された遺構の中で最も低い位置にある遺構群で、標高は267.0m前後である。ここより下は小さい谷地形になっており、傾斜も急になっている。K群はこの谷地形に合わせて谷を囲むように弧状に延びており、南西部は調査区外へ続いていくと推定される。確認された遺構は、段状遺構が5面である。時期は弥生時代中期後半が主である。K群の南西端部に位置する柱穴P7埋土からは壺105や蓋106が出土し、これらの土器も同期の特徴を持っているので、標高266.0～267.0mに所在する遺構はすべて中期後半に属するものと考えられる。ただし、これらの上方にある段状遺構59だけは弥生時代後期後葉から古墳時代初頭と推定される。

また、K群より下方の谷部の急斜面にもわずかであるが柱穴が検出されることから何らかの遺構が存在した可能性がある。 (物部)

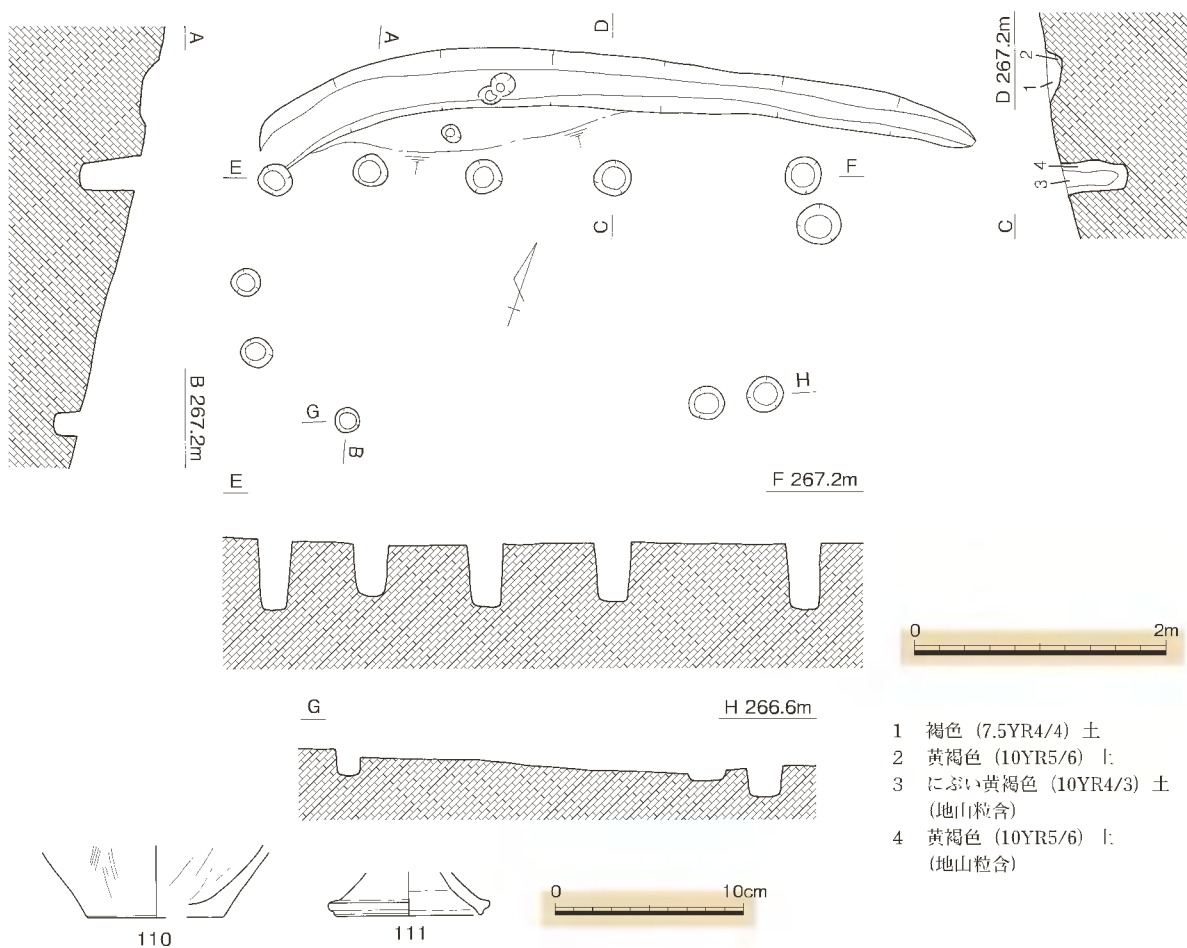


第80図 K群遺構配置図 (1/150)・P7出土遺物 (1/4)





第81図 段状遺構59 (1/60)・出土遺物 (1/4)



第82図 段状遺構60 (1/60)・出土遺物 (1/4)

段状遺構59 (第80・81図)

段状遺構59はK群の他の段状遺構より高い位置にある。幅の広い溝が検出された。段状遺構に伴うと推定される柱穴は4個あり、それらの配置はおよそ正方形を呈するが、西隅の柱穴は少し外へ出ており、溝と重なる位置にあたるので、あるいは、段状遺構と別の遺構かもしれない。溝埋土中から甕107・108や器台109が出土したことから、段状遺構59の時期は古墳時代初頭と推定される。(物部)

段状遺構60 (第80・82図)

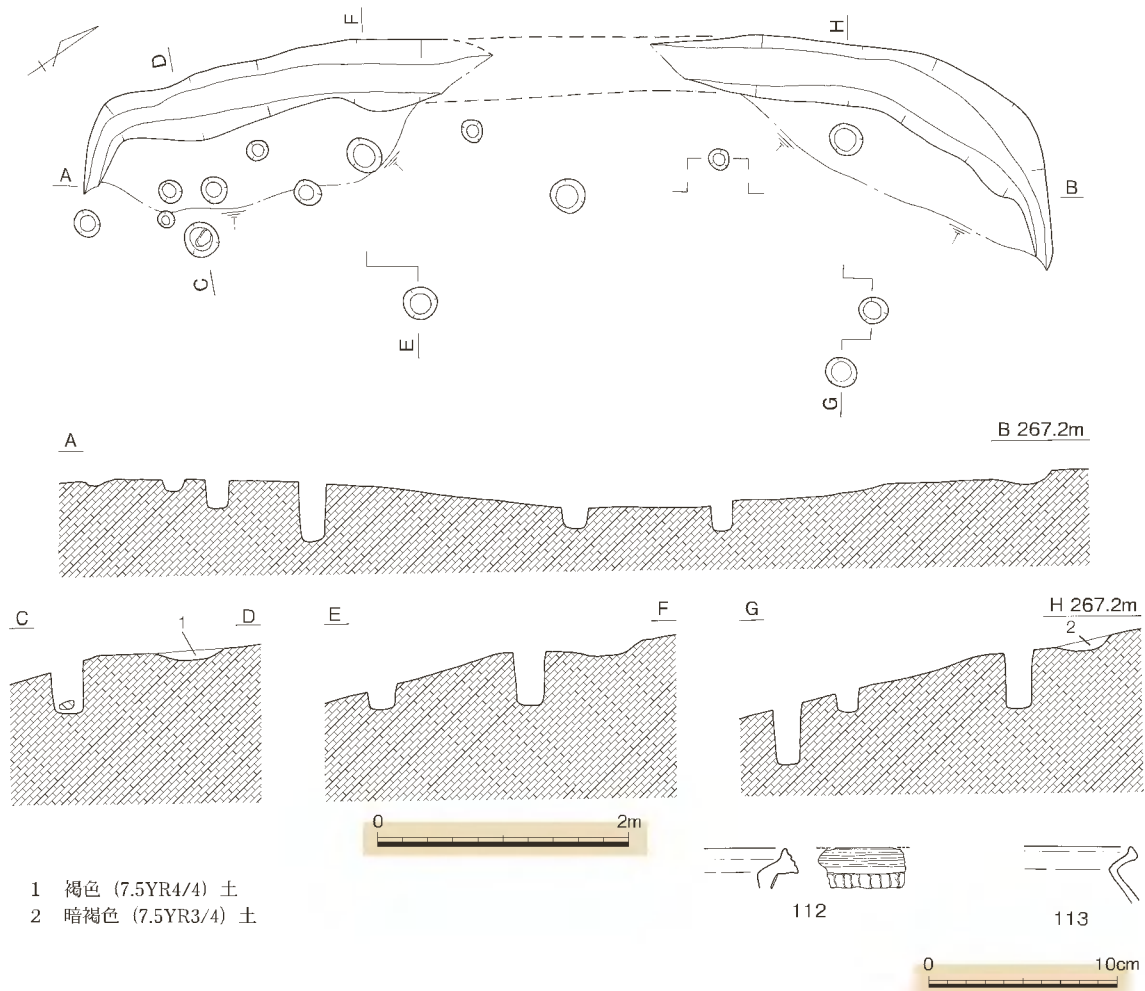
検出長約550cmの溝とわずかな平坦面、柱穴を検出した。段状遺構61に切られている。断面E-Fで示したように直線上に並ぶ5個の柱穴がある。深さもあり、しっかりした柱穴なので掘立柱建物と考えたいが、斜面下方に対になる柱穴が検出されない。遺物は溝埋土中から甕110と高杯111が出土した。段状遺構60の時期は土器の特徴から弥生時代中期後半と推定される。(物部)

段状遺構61 (第80・83図)

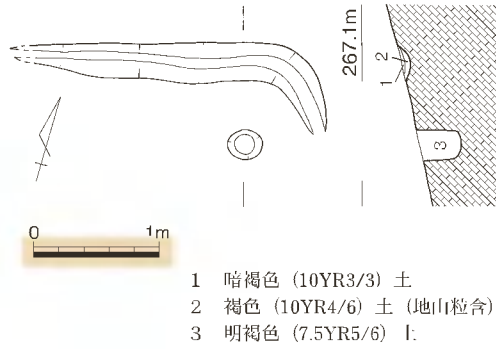
検出された幅の広い溝は、南西端部では屈曲して、北東端部では湾曲して斜面下方へ曲がる。その幅は約700cmを測る。平坦面や斜面に大小の柱穴が確認されたがまとまらない。段状遺構61の時期は溝埋土中から出土した甕112・113の形態から弥生時代中期後半と推定される。(物部)

段状遺構62 (第80・84図)

段状遺構62は段状遺構60の下方に位置し、段状遺構60に伴う柱穴に切られている。時期は切り合い



第83図 段状遺構61 (1/60)・出土遺物 (1/4)



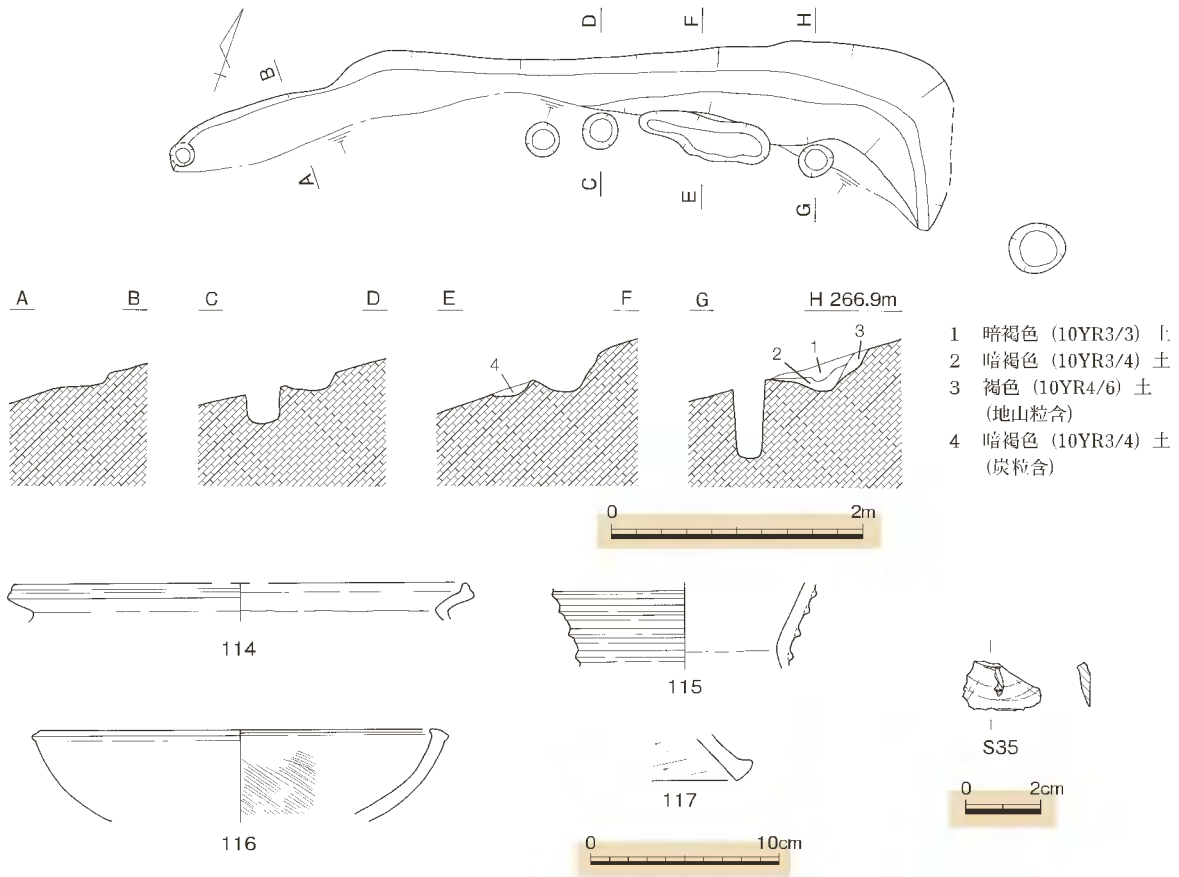
第84図 段状遺構62 (1/60)

- 1 暗褐色 (10YR3/3) 土
- 2 褐色 (10YR4/6) 土 (地山粒含)
- 3 明褐色 (7.5YR5/6) 土

関係から弥生時代中期後半と推定される。(物部)

段状遺構63 (第80・85図)

段状遺構63は谷部を目前に望む位置にある。検出された幅の広い溝は、東西両端で斜面下方へ曲がっている。その間の平坦面の幅は約600cmと推定できる。柱穴は少ない。溝埋土中から甕114、壺115、高杯116・117が出土した。また、S35は黒曜石の剥片である。段状遺構63の時期は土器の特徴から弥生時代中期後半と考えられる。(物部)



第85図 段状遺構63 (1/60)・出土遺物 (1/4・1/2)

4 遺構に伴わない遺物 (第86～89図)

ここに掲載する遺物は、調査区南端部で検出された谷の堆積土から出土したもので、上方に位置する遺構群から土砂とともに流れ下ったものと推定される。土器の総量は50×30×15cmのコンテナ箱に8箱である。

118～124は弥生時代中期後半の壺である。口縁端部があまり拡張しないものと、上下に拡張され凹線の施されるもの122・123がある。125は弥生時代後期前半の壺と考えられる。126は弥生時代後期後葉の二重口縁の壺である。127は細頸壺、128は直口壺と推定される。

129～171は甕である。129～145は弥生時代中期後半、146～151は後期前葉から中葉、152～158

は後期後葉から古墳時代初頭と推定される。中期後半の甕には口縁端部が断ち切るように終わるもの129・130や、端部が上方にのみわずかに立ち上がるもの131～136、端部が肥厚して端面に凹線や文様を施すもの137～139、上下にわずかに拡張するもの140～145がある。159～171は壺か甕の底部で、168までは中期後半と推定されるが、169～171の底の厚いものは竪穴住居4の柱穴から出土した壺11と似ていることから、後期前葉～中葉の壺かもしれない。

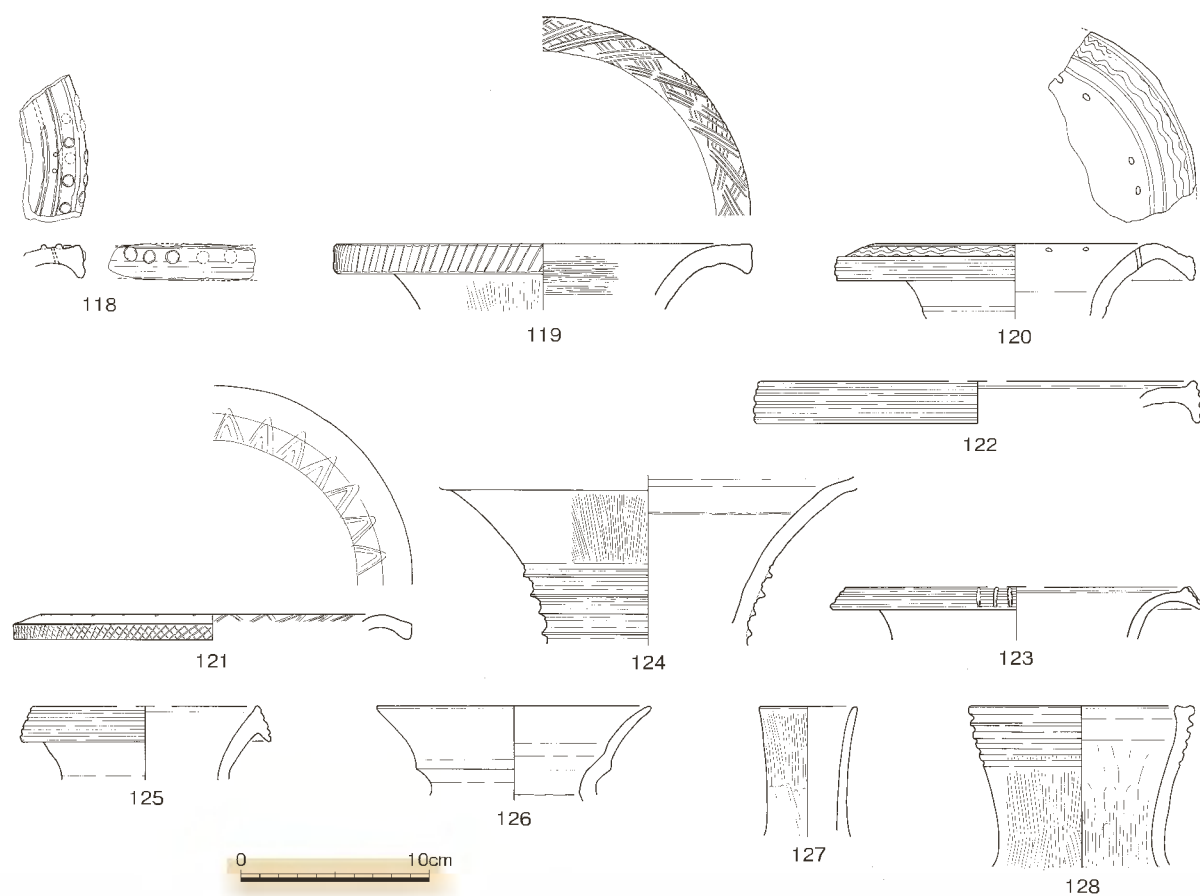
172～186は高杯である。中期後半のものでは、口縁端部が水平に外方へ拡張するもの173・174としないもの172がある。岡山県南部で中期末によく見られる口縁部が屈曲して垂直に立ち上がるものがまったくない。脚裾部は端部が外方へ拡張するもの176～178と、拡張しないもの179～181がある。186の脚柱部は中空で古墳時代に下るものと推定される。

187～193は鉢である。187は胎土や色調から中期後半と考えられる。

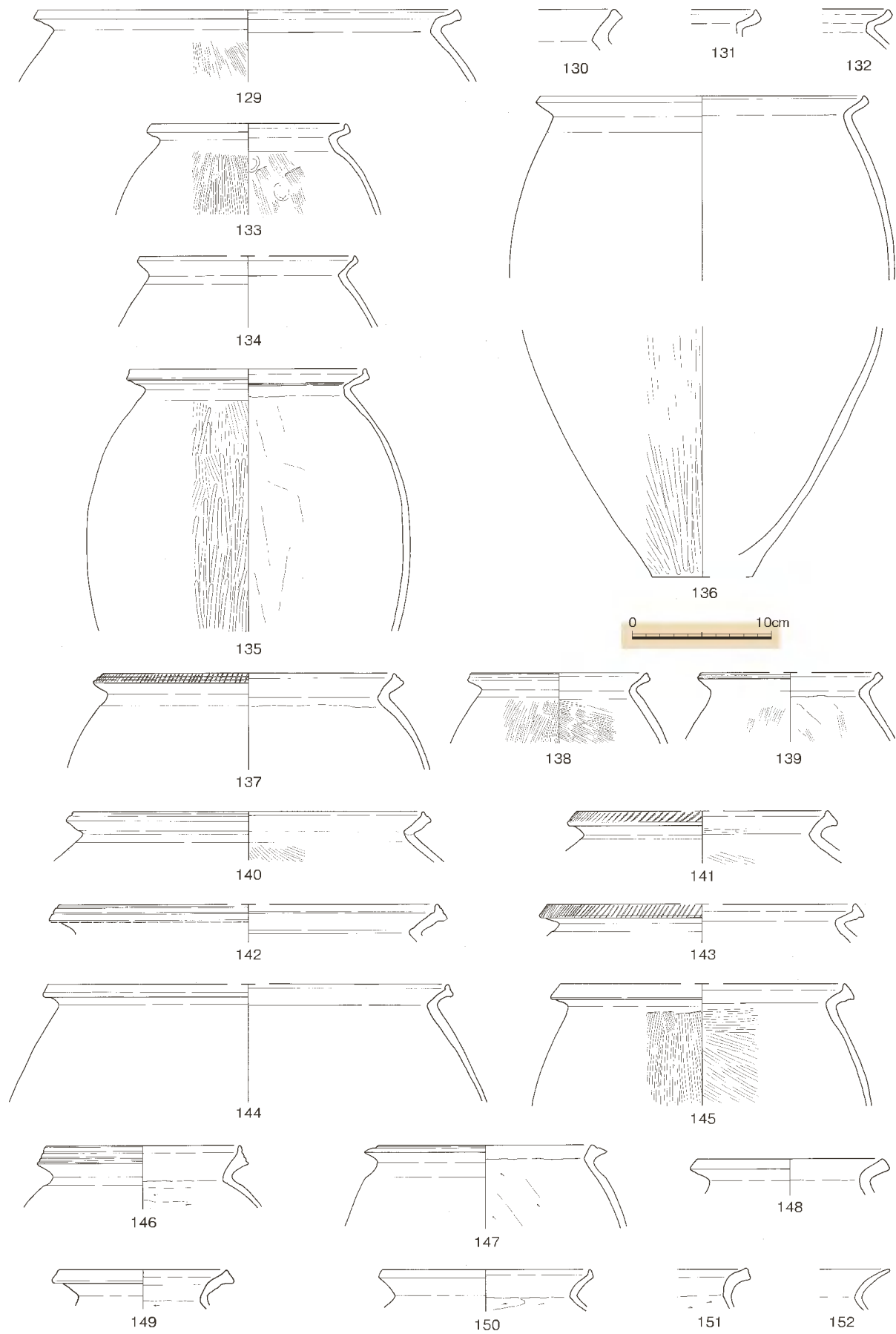
194～196は器台である。194は悩ましいもので棒状浮文と円形の透かしを持つ。口縁部なのか脚部なのか判断できなかった。195・196は小形の器台で、弥生時代後期後葉から古墳時代初頭頃と推定される。197は蓋、198は手捏ね土器である。

C7・8は壺や甕を転用した土製円盤である。

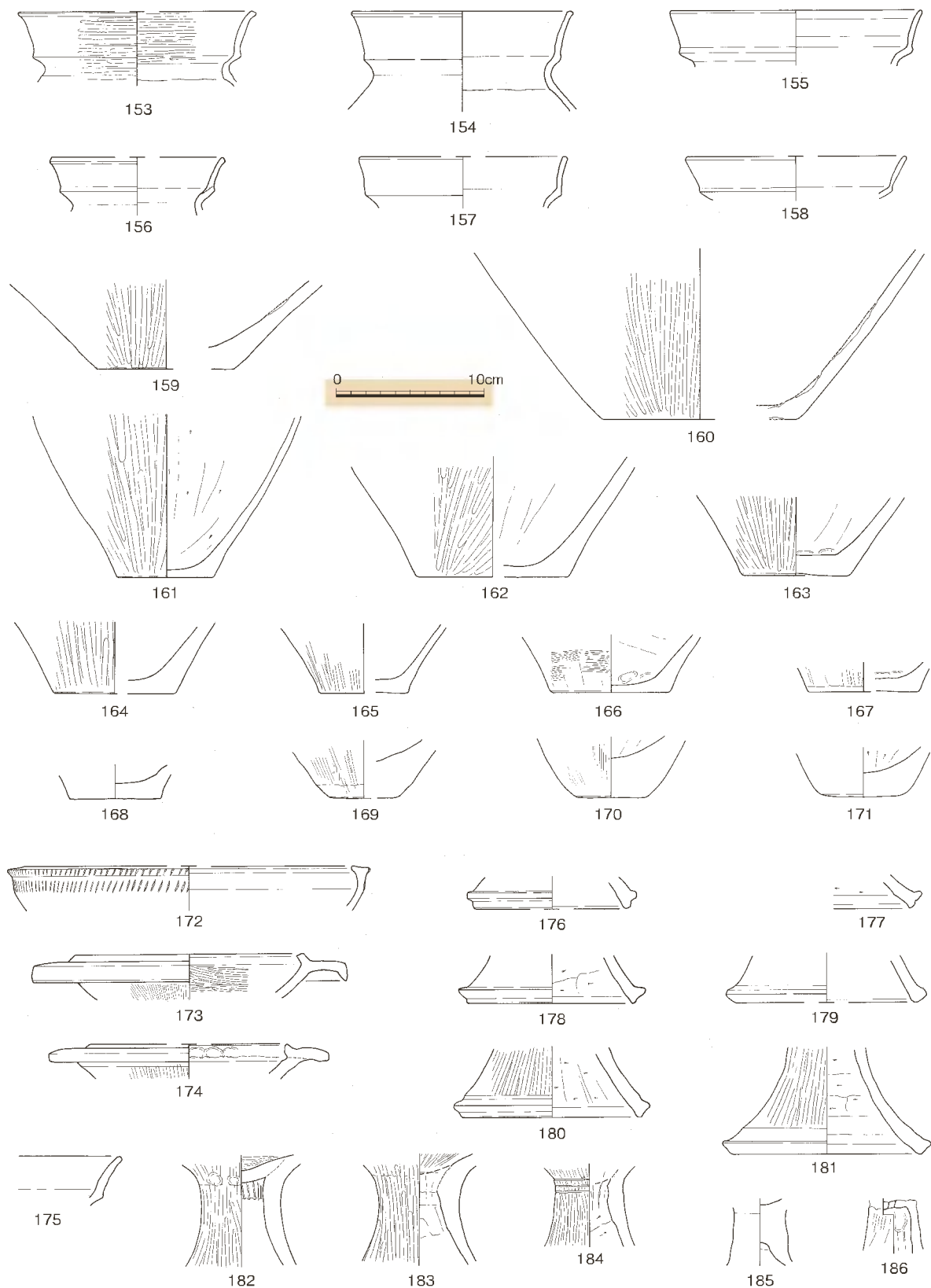
石器には石鏃、石錐、石包丁、石斧、砥石がある。S36～44はサヌカイト製の石鏃で、凹基、平基、凸基の3種類がある。S45・46はサヌカイト製石錐である。S47～49は磨製石包丁で、S47は片麻岩製、S48は粘板岩状緑色岩製、S49は流紋岩製である。S50は粘板岩製の砥石、S51は安山岩製太型蛤刃石斧の欠損品に少し調整を加えたものと推定される。S52は安山岩製の環状石斧で、研磨工程前



第86図 遺構に伴わない遺物① (1/4)



第87図 遺構に伴わない遺物② (1/4)



第88図 遺構に伴わない遺物③ (1/4)

に欠損したものであろう。S53は扁平片刃石斧に似ているが、砂岩の自然石に刃部だけ付けたものである。S54は黒曜石の剥片である。M1は鑄造鉄斧の再加工品と考えられ、この時期の鉄器の出土はこれ1点だけであった。

(物部)



第89図 遺構に伴わない遺物④ (1/4・1/3・1/2)

## 第4節 古代以降の遺構・遺物

### 1 概要

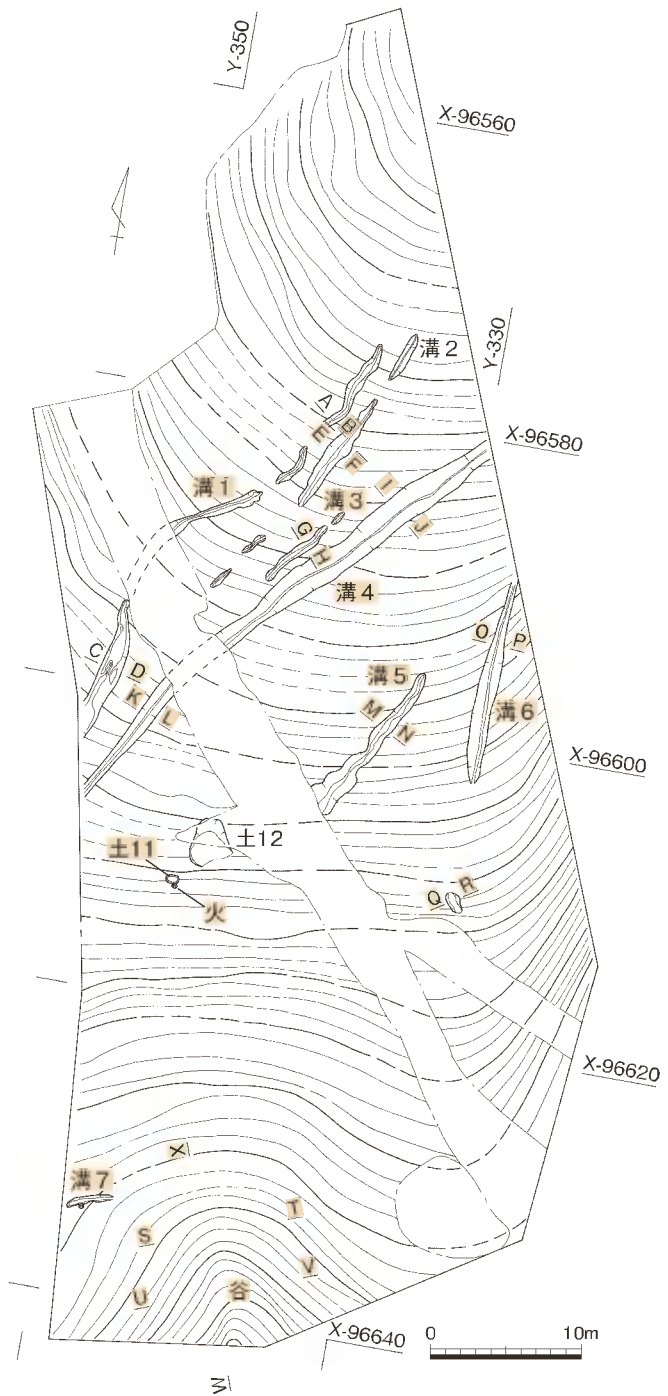
古代以降の遺構として確認されたのは、溝7条と土壇2基、そして、火葬墓1基である。溝の多くは尾根筋から南斜面にかけて立地し、直線的にあるいは蛇行しながら、等高線に斜行して調査区を越えて延びている。山道の痕跡かもしれない。溝7はこれらの溝とは立地を異にし、埋土中から鉄滓が出土した。火葬墓は南斜面に立地し、蔵骨器として須恵器の蓋と長頸壺が使われていた。内部に骨片が残存する。火葬墓の周囲に土壇が見られるが、埋土が異なり、時期が違くと推定される。遺物は古代から近世までであるが少ない。その大半は、調査区南端に位置する谷の堆積土中から出土したものである。ただ、古代の須恵器片は調査区の各所から点々と出土したので、火葬墓がもう1基存在した可能性はある。 (物部)

### 2 火葬墓

**火葬墓** (第90・91図、図版10-3)

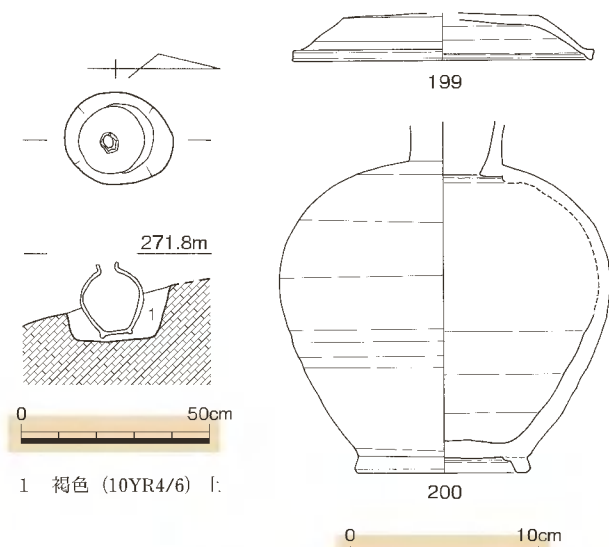
火葬墓は尾根筋から南に少し回った南斜面に立地する。蔵骨器として使用した須恵器長頸壺は首の細いもので、口縁部を打ち欠いている。この壺が入る程度の穴を掘り、その中に納めている。流土掘り下げ中に発見されたため、蓋が遊離してしまっただが、伴っていたことはまず間違いない。つまみの部分が欠損している。時期は、須恵器の形状から8世紀終わり頃から9世紀前半と推定される。

長頸壺内部に焼けた骨片が、体部の底からおよそ2分の1程度に充満していた。首が細いため、層位的に取り出すことができなかった。骨片の鑑定を山口県土井ヶ浜遺跡・人類学ミュージアムの松下孝幸氏に依頼した結果、被葬者は熟年



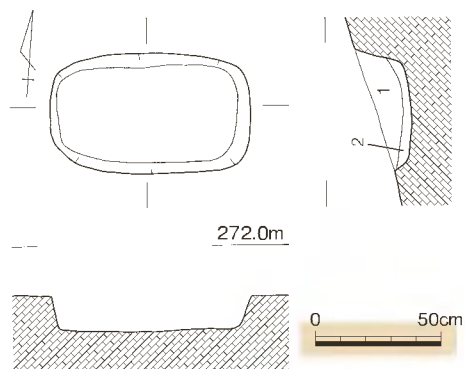
第90図 古代以降遺構配置図 (1/500)





1 褐色 (10YR4/6) 土

第91図 火葬墓 (1/20)・出土遺物 (1/4)



1 褐色 (10YR4/6) 土  
2 明褐色 (7.5YR5/8) 土

第92図 土壇11 (1/30)

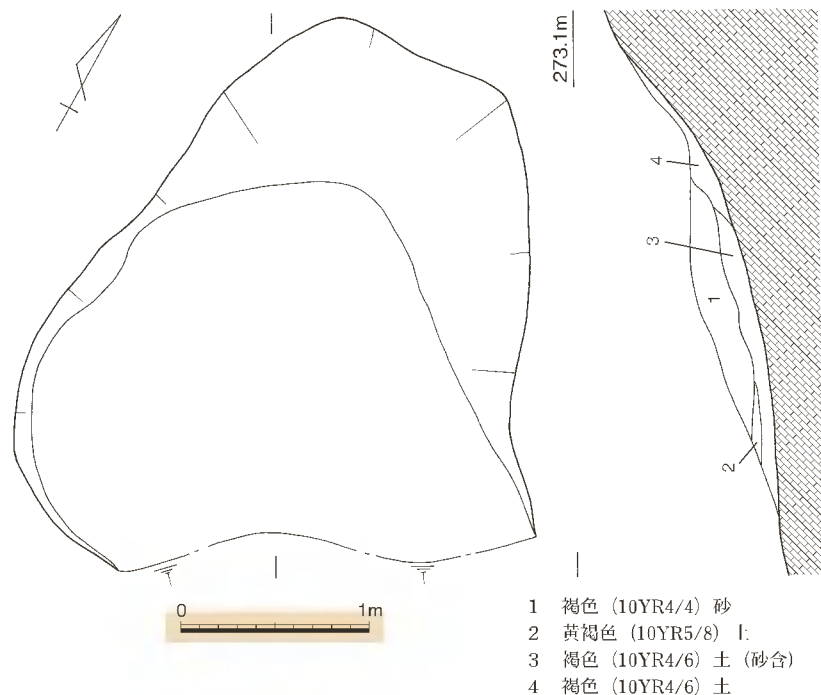
女性 (49~50歳) と推定された。また、「のどぼとけ」と俗称される第二頸椎が意識的に埋納された可能性を指摘された (付載第3節参照)。(物部)

### 3 土壇

#### 土壇11 (第90・92図)

土壇11は火葬墓の北に隣接する。平面形は長軸約80cm、短軸約50cmの隅丸長方形を呈し、検出面からの深さは約20cmを測る。遺物は出土しなかった。位置関係から火葬墓との関係が想定されたが、埋土は砂の混ざった砂質土で火葬墓とは異なることから、時期も異なると考えられ、むしろ尾根筋から南斜面にかけて見られる溝群の埋土に類似しているため、溝の時期に近いと推定されるが、古代以降

までしか言えない。(物部)



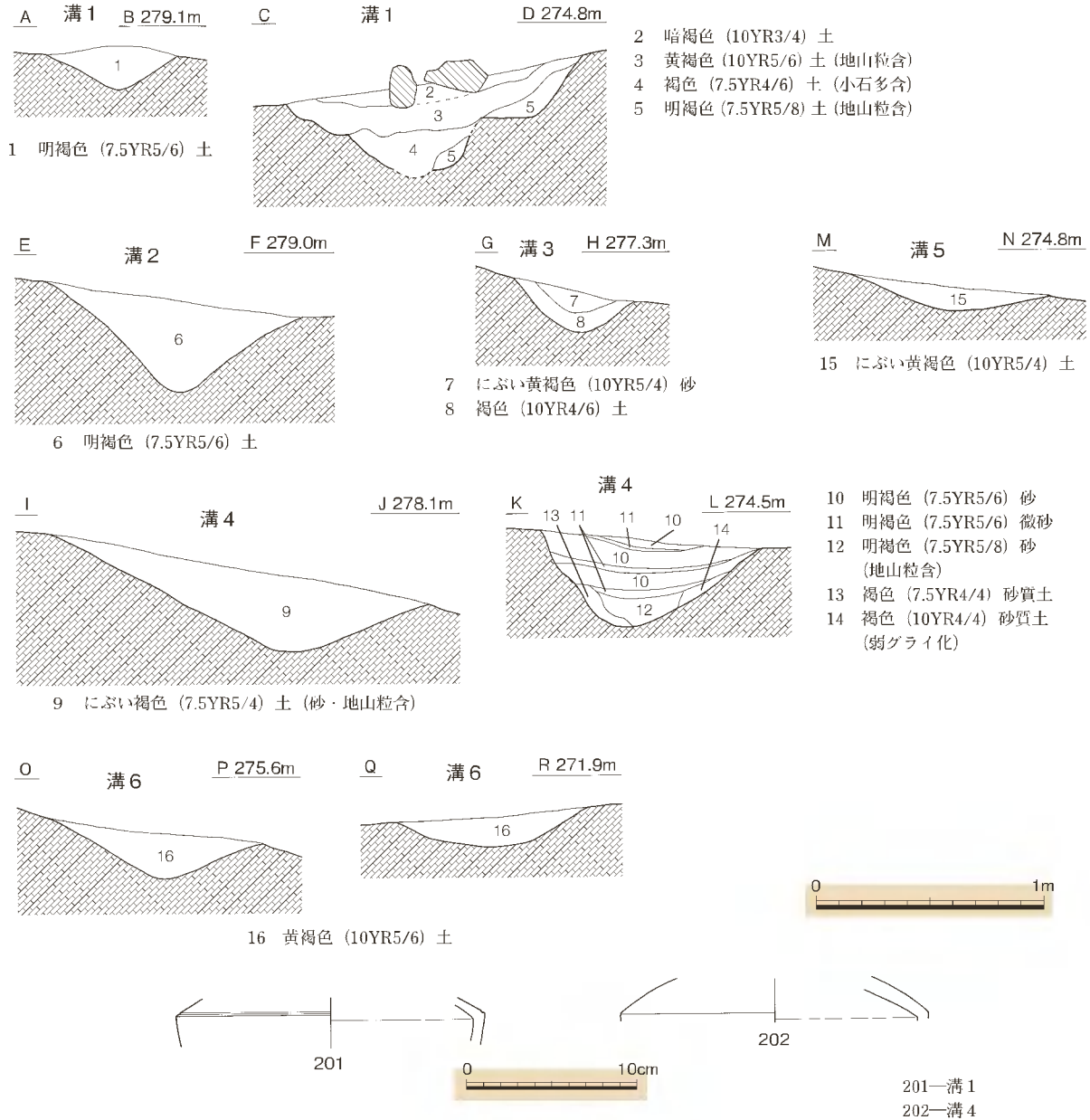
1 褐色 (10YR4/4) 砂  
2 黄褐色 (10YR5/8) 土  
3 褐色 (10YR4/6) 土 (砂含)  
4 褐色 (10YR4/6) 土

#### 土壇12 (第90・93図)

土壇12は土壇11の北東上方に位置する大形の土壇である。斜面下方が流失しているため、断定はできないが、南に開いた平坦面あるいは加工段のような造成かもしれない。遺物の出土はなかった。埋土は砂を多く含み、土壇11や溝群の埋土に類似することから、古代以降と推定される。

(物部)

第93図 土壇12 (1/40)



第94図 溝1～6 (1/30)・出土遺物 (1/4)

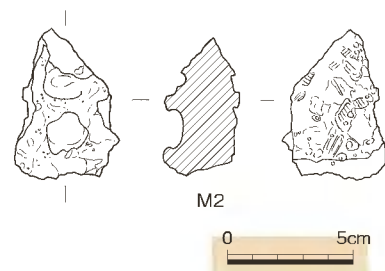
## 4 溝

### 溝1 (第90・94・95図)

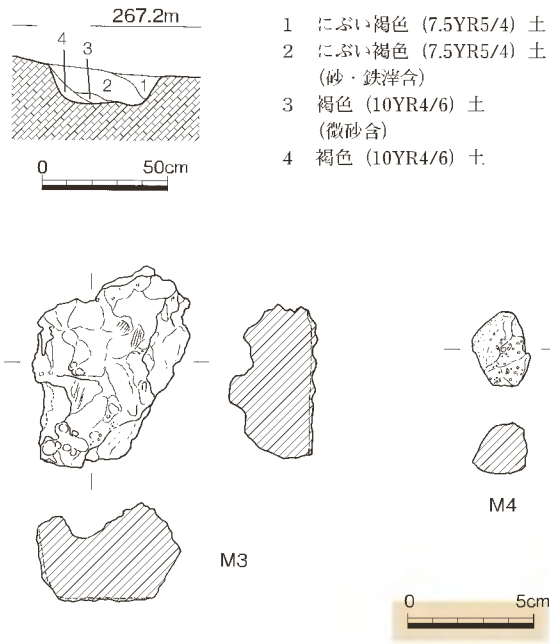
尾根筋付近を蛇行して延びる溝である。当初は雨水による自然流路と思われたが、断面形はきれいな鈍角の逆三角形状を呈することから、人為的な掘削の可能性はある。埋土下層は小石を多く含み水が流れたものと考えられる。埋土中から201の須恵器長頸壺片1点と鉄滓1点が出土したことから古代以降と推定される。鉄滓は鍛冶滓である。(物部)

### 溝2 (第90・94図)

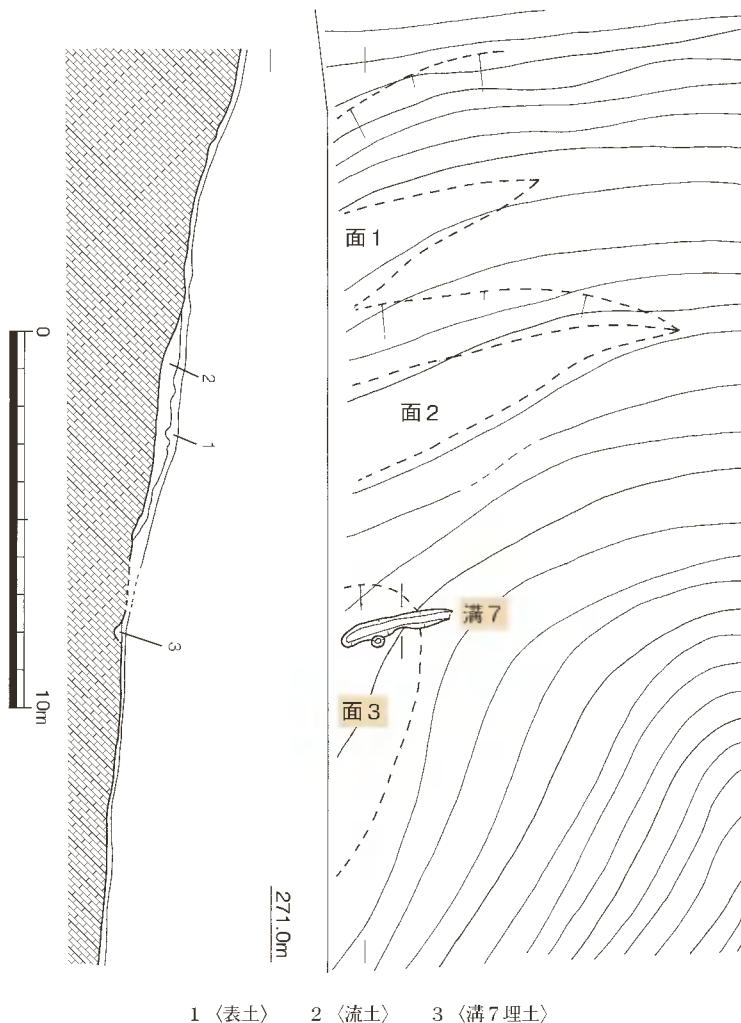
溝2は溝1に隣接し、直線的に延びる溝である。断面形が



第95図 溝1出土遺物 (1/3)



第96図 溝7 (1/30)・出土遺物 (1/3)



第97図 平坦面1～3・溝7 (1/200)

きれいな鈍角の逆三角形状を呈することから、人為的な掘削である可能性が高い。遺物はなく、形状から古代以降と推定される。(物部)

溝3 (第90・94図)

溝3は比較的直線的に延びる溝である。埋土は砂を多く含む。遺物はなく、形状から古代以降と推定される。(物部)

溝4 (第90・94図)

溝4は一番残りの良い溝である。直線的に延び、断面はきれいな鈍角の逆三角形状を呈することから、人為的な掘削である可能性が高い。砂で埋まっており、溝の下方は特に砂と微砂が互層に堆積し、何度か水が流れたことによって埋没していった状況が観察される。またこの砂は西側調査区境周辺で溝から溢れ、周囲10mの

範囲に厚いところで100cm近く堆積している状況が見られた。傾斜地でこのような堆積が起こることは考え難く、現状では確認できないが、下方に堤防のような堰でも築いていたのだろうか。埋土中から須恵器の長頸壺202が1点だけ出土したことから時期は古代以降と推定される。なお、調査区外において現状でも溝の痕跡が追えることからかなり新しい時期の可能性もある。(物部)

溝5 (第90・94図)

直線的に延びるが底は小さく蛇行する。断面は鈍角の逆三角形状であり、時期は古代以降と推定される。(物部)

溝6 (第90・94図)

かなり急な傾斜の溝である。断面は鈍角の逆三角形状を呈しており、時期は古代以降と推定される。(物部)

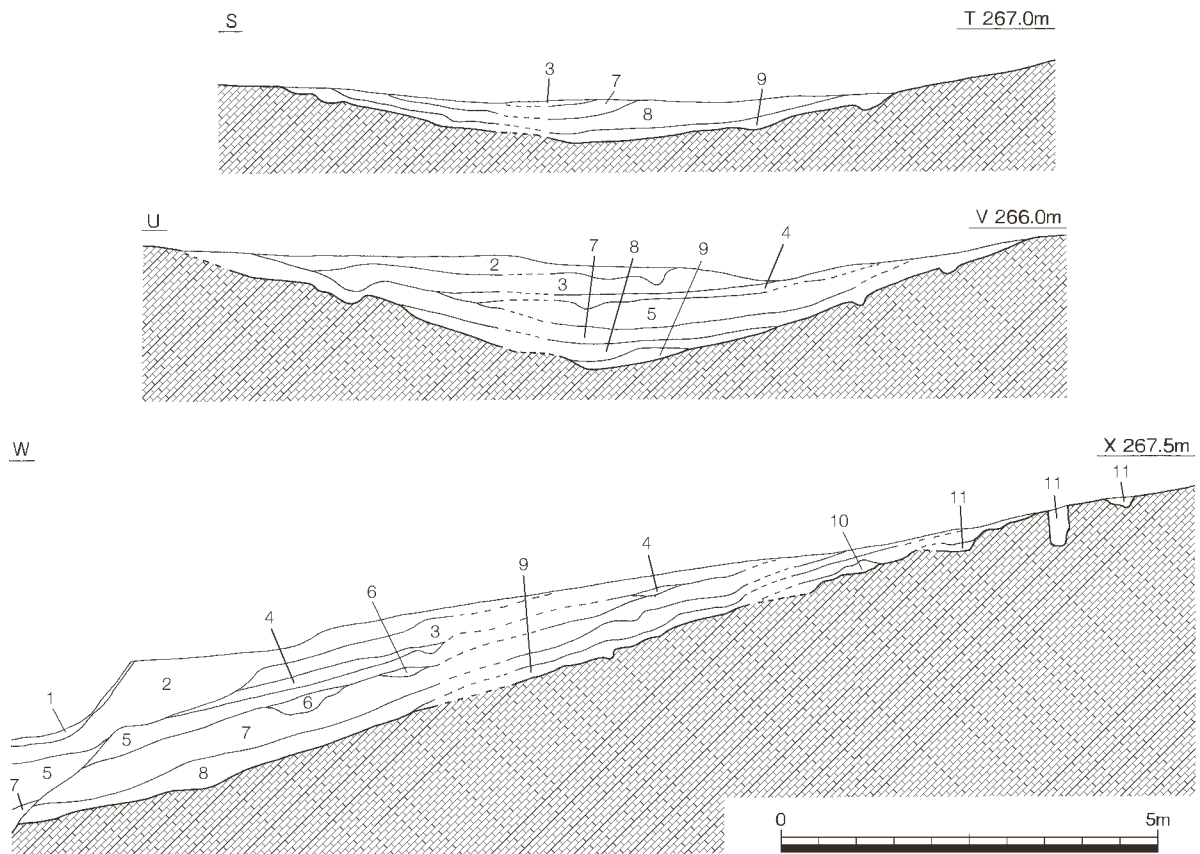
溝7 (第90・96・97図)

溝7は調査区南西部の調査区西壁沿いで検出された。深さ15cm程度の浅い溝で、埋土中から鉄滓が出土した。出土した鉄滓は、重いもので163g、軽いもので0.2gで、合計約700g、57点あった。これらの鉄滓はボロボロと埋土と混ざった状態で出土したことから、周囲から流入したものと推定される。溝自体の性格は不明であるが、平坦面3の北端部に位置することから排水溝かもしれない。製鉄関連の遺構本体は西側の調査区外に存在すると考えられる。土器は出土しなかった。周辺から出土する遺物の状況から、7世紀後半から9世紀にかけての時期を想定したいが、中世の遺物もあり、また、尾根の先端部に位置する中世末期の山城「八幡山城跡」との関係も考慮され、時期を特定するのは難しい。鉄滓2点の化学分析を依頼し、いずれも砂鉄製錬滓という結果を得た(付載第1節参照)。(物部)

5 平坦面

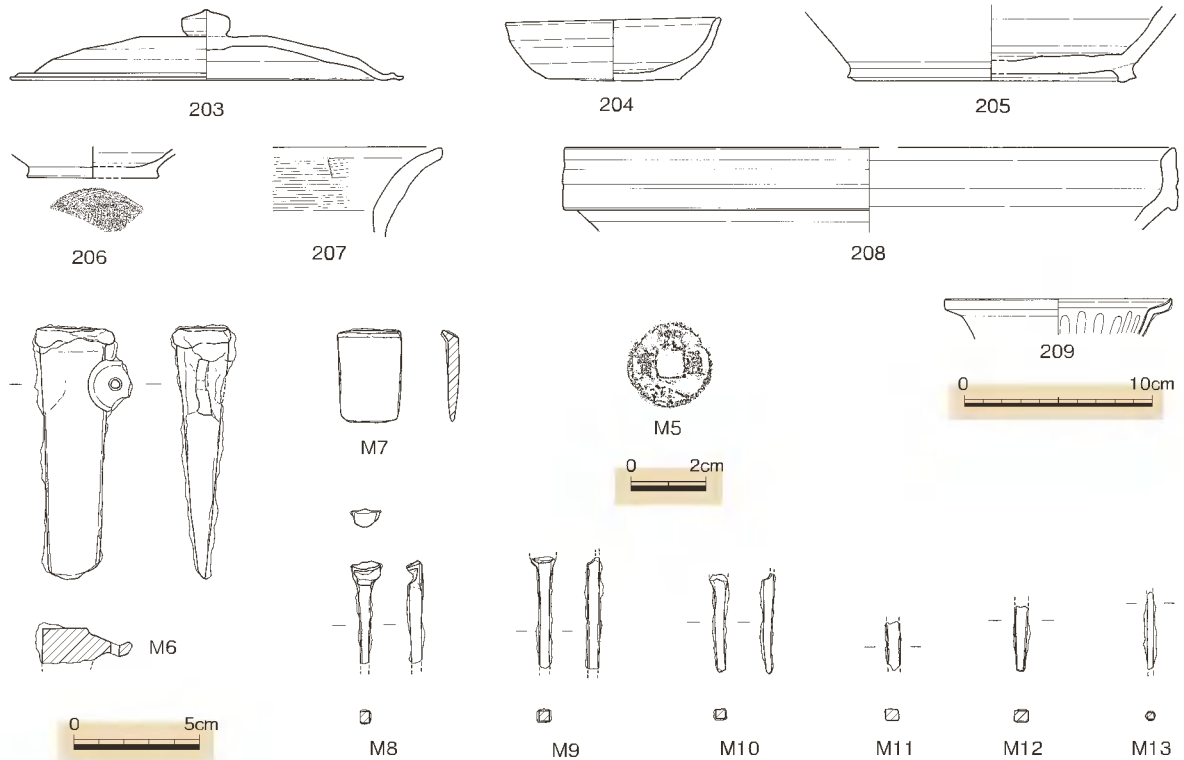
平坦面1～3 (第97図)

平坦面1～3は調査区の南西隅に位置する。谷の西側斜面に階段状に立地している。平坦面と称したが、実は少し傾斜をもっており、人為的なものか、自然にできたものか、明確に識別する根拠はない。しかしながら、鉄滓の出土した溝7が平坦面3の排水溝である可能性があることや、平坦面が広



- |                          |                          |                       |
|--------------------------|--------------------------|-----------------------|
| 1 <腐葉土>                  | 5 暗褐色 (10YR3/4) 土 (地山粒含) | 9 黒褐色 (10YR3/1) 土     |
| 2 褐色 (10YR4/4) 土         | 6 黄褐色 (10YR5/6) 土 (地山粒含) | 10 にぶい黄褐色 (10YR4/3) 土 |
| 3 暗褐色 (10YR3/3) 土 (地山粒含) | 7 黒褐色 (10YR2/3) 土 (地山粒含) | 11 <弥生時代遺構埋土>         |
| 4 黒褐色 (10YR2/2) 土 (地山粒含) | 8 暗褐色 (10YR3/4) 土 (地山粒含) |                       |

第98図 谷堆積土層 (1/100)



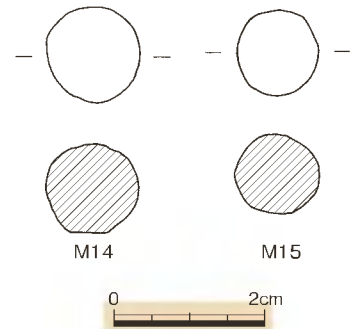
第99図 遺構に伴わない遺物 (1/4・1/3・1/2・1/1)

がる西側の調査区外に製鉄関連の遺構が想定できることから、それとの関係を考えたい。(物部)

## 6 谷

谷 (第90・98図、図版10-5)

谷は調査区の南端に位置し、調査前には傾斜は緩やかでそれほどしっかりした谷であるとは想定できなかった。掘り下げていくと、堆積が厚いところでは200cm近くあった。調査区南境のすぐ南側は農地の造成により大きく掘削されており、調査区南西隅では高さ4～5mの崖になっている。谷の部分でも谷底の地山にまで掘削が及んでいた。堆積土の最下層(第9・10層)は弥生時代の純粋な包含層であるが、そのすぐ上の層には中世の遺物が、堆積土上層には近世以降の遺物が弥生土器の中に混在している状況が見られた。これら古代以降の遺物は多くなく、数える程度である。また、鉄滓の出土はほとんどなく、谷の西側に想定される製鉄関連遺構からの鉄滓の排出はこの谷へは行われていなかったと推定される。(物部)



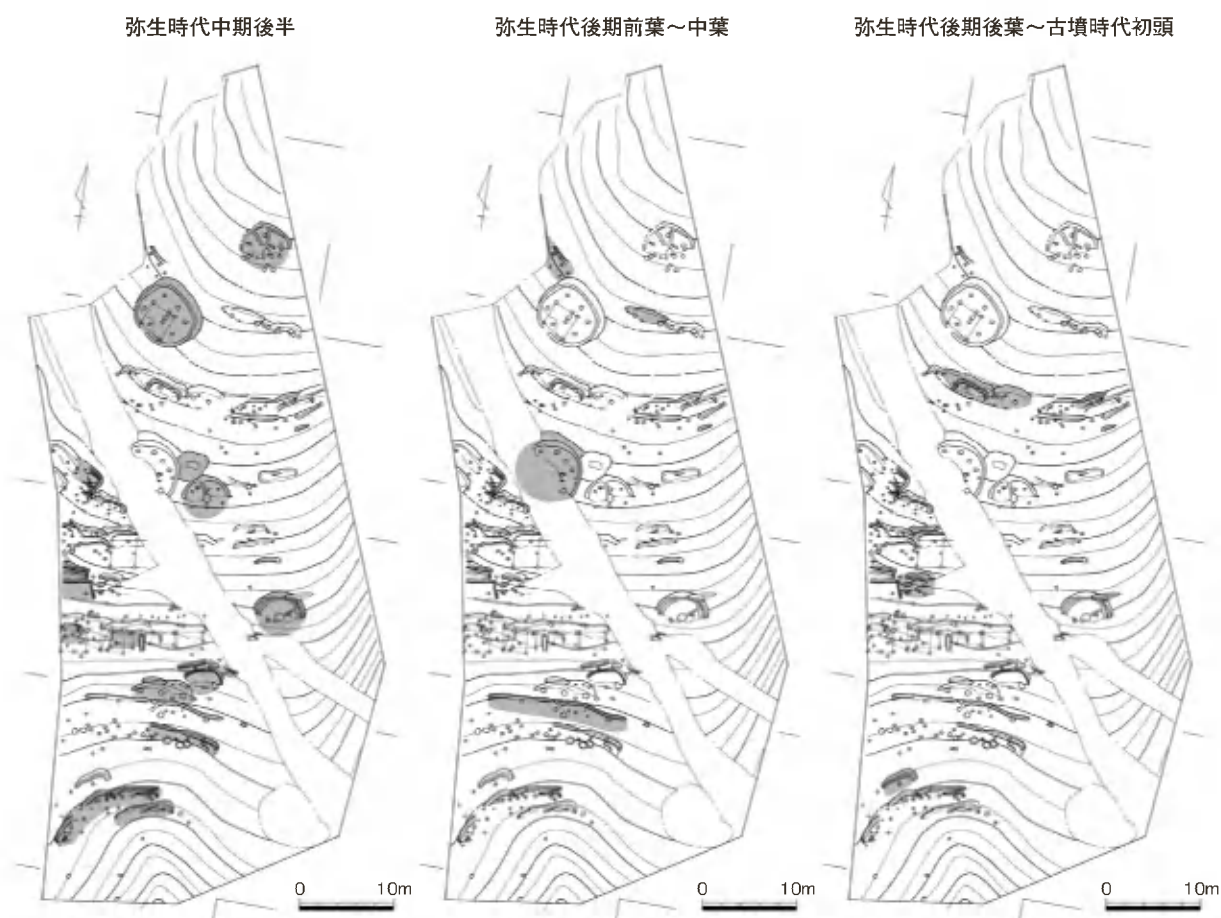
## 7 遺構に伴わない遺物 (第99図)

古代以降の遺物は少なく、30点前後で、そのうちの半数は須恵器の細片である。第99図で掲載した遺物は、多くは谷部から出土したもので、一部表土層から出土したものを含む。203の須恵器蓋は調査区北端部で出土した。須恵器杯204は標高269.0m付近で検出され、7世紀後半と推定される。205は須恵器壺か。206は底部糸切りの須恵器碗、207は土師器鍋、208は15世紀末から16世紀の備前焼播鉢、209は13世紀中頃から14世紀初頭にかけての龍泉窯系の青磁杯である。M5は寛永通寶、M6は紐通しが付いた塹、M7は楔、M8～13は釘、M14・15は鉄砲の鉛玉と考えられる。(物部)

## 第5節 小 結

八幡山遺跡は、丘陵尾根上に立地する弥生時代中期後半から古墳時代初頭にかけての集落遺跡であり、鳥取自動車道関連で調査した弥生集落の中では、最も時期幅の長い集落と言える。集落の中心となる時期は、弥生時代中期後半と弥生時代後期後葉から古墳時代初頭にかけてである。八幡山遺跡の南約130mに所在する八幡山南遺跡では、弥生時代後期中葉の段状遺構群が検出されており、あるいはこの時期に集落の移動があった可能性もある。

時期の推定できた遺構について、おおまかに示したのが第100図である。弥生時代中期後半では、円形竪穴住居6軒と、方形竪穴住居や段状遺構6～7面が、尾根筋から南斜面全体にかけて点在する状況が見られる。弥生時代後期前葉～中葉では、円形の竪穴住居1軒とその上下方はかなり離れた位置に段状遺構2面がある。弥生時代後期後葉から古墳時代初頭では南斜面全体にわたって4～5か所に段状遺構が見られるが、円形の竪穴住居は調査区内では検出されなかった。今回の調査した範囲は、地形から推定される集落域の2分の1程度、集落の東半部と考えられるので、集落全体の様相は不明な点が多い。段状遺構については、横幅300cmのものから700cmのものまでである。いずれも斜面を「コ」の字状に掘削し、方形の平坦面を造成したものと考えられるが、壁際に溝があるものとなないものが見られ、溝にも幅の狭い壁体溝状の溝と、幅が広く浅い排水溝と考えられる溝の2種類がある。柱穴が



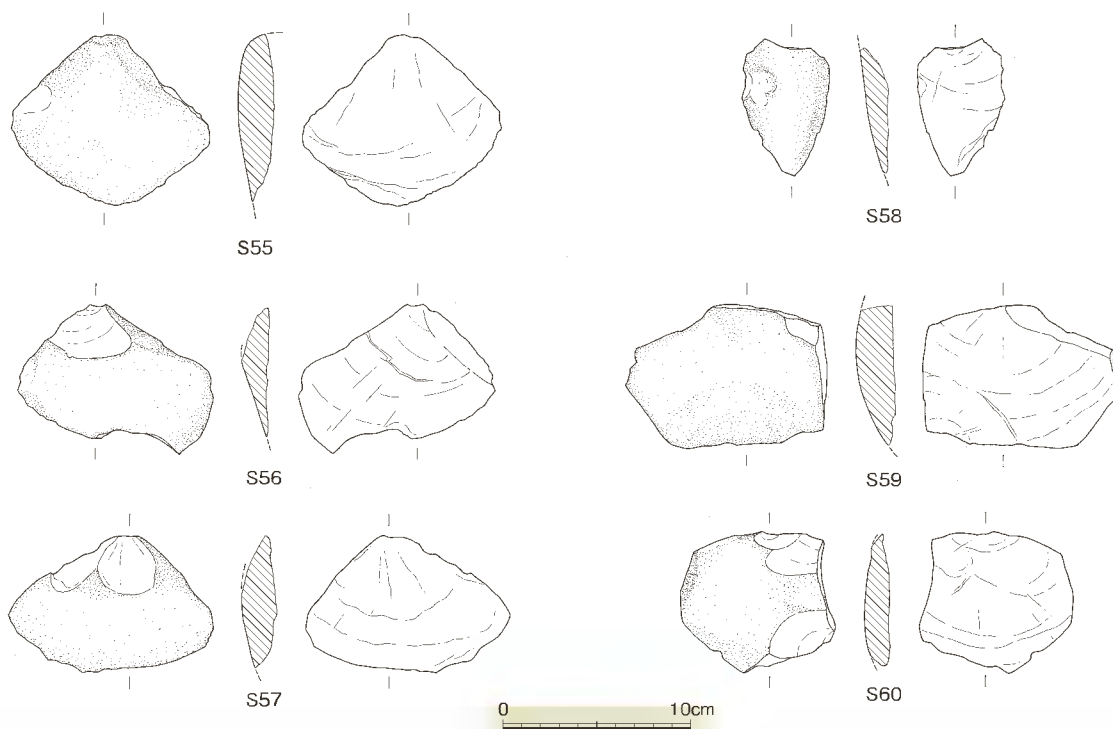
第100図 八幡山遺跡変遷図 (1/800)

並び、掘立柱建物と推定できるものもあるが、小さな柱穴が不規則に見られるものが多く、柱穴のないものもある。これらの違いが時期的なものか、機能的なものか、あるいはその両方か、その答えを見つけることはできなかった。G群で見られた4個の柱穴のまとまりが、重複しながら同じ高さに連続する状況は穴が途遺跡でも確認され、段状遺構群の1つの形態として捉えることができると思う。

出土遺物の中でも石器が多く検出され、その大半は弥生時代中期後半に属すると考えられる。特に竪穴住居から出土した剥片に注目すると、表5のように中期後半の竪穴住居7軒のうち5軒でサヌカイト剥片が一定量出土していることから、各竪穴住居単位で、言い換えると家族単位でサヌカイト製石器の加工を行っていたと推定される。この状況は、岡山市百間川兼基遺跡の中期後葉の集落でも確認されており、留意される。また、サヌカイト以外に安山岩や粘板岩状緑色岩の剥片も見られ、これらを石材とした石器の加工も考えられる。安山岩の剥片については、斜面の流土中や谷部の堆積土中から81点を検出できた。総重量は約2.5kgを測る。その中に、第101図に示したような原石へ最初の打撃で生じたと推定される剥片が多くあった。また、弥生時代中期後半の焼失住居（竪穴住居5）から出土した焼土塊は、茅材と推定される圧痕が付いており、土葺き屋根の痕跡と考えられて注目される。鳥取県米子市の古市宮ノ谷山遺跡の焼失住居でも、同様のものが多数報告されている。（物部）

表5 竪穴住居出土石器・剥片・原石一覧

遺構名	時期	石器:数字は出土点数 ( )内は石材名						剥片:数字は出土点数			原石
		太形蛤刃石斧	扁平片刃石斧	磨製石包丁	石鎌	石錐	砥石	サヌカイト	安山岩	凝灰岩	
竪穴住居1	弥生時代中期後半		1 (粘板岩状緑色岩)	1 (粘板岩状緑色岩)	4 (サヌカイト)	1 (サヌカイト)		460	1		
竪穴住居2	弥生時代中期後半				6 (サヌカイト)	3 (サヌカイト)	1 (流紋岩)	179	6	4	
竪穴住居3	弥生時代中期後半						1 (流紋岩)	1		3	1 (安山岩)
竪穴住居4	弥生時代後期前～中葉										
竪穴住居5	弥生時代中期後半		1 (流紋岩)		1 (サヌカイト)			17	2		
竪穴住居6	弥生時代中期後半							97	13		
竪穴住居7	弥生時代中期後半										
竪穴住居8	弥生時代中期後半	1 (玄武岩)			1 (サヌカイト)			5	2		

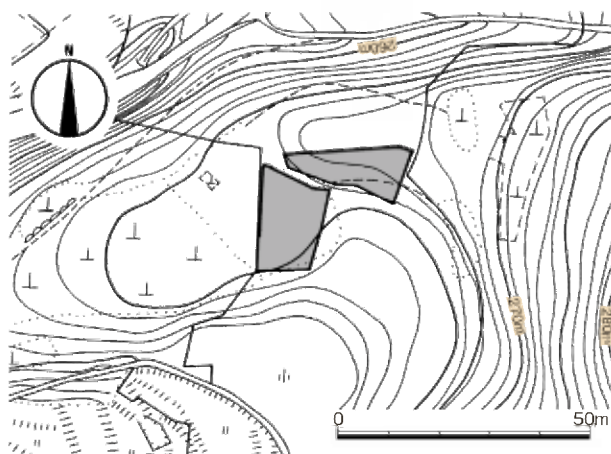


第101図 安山岩剥片 (1/4)

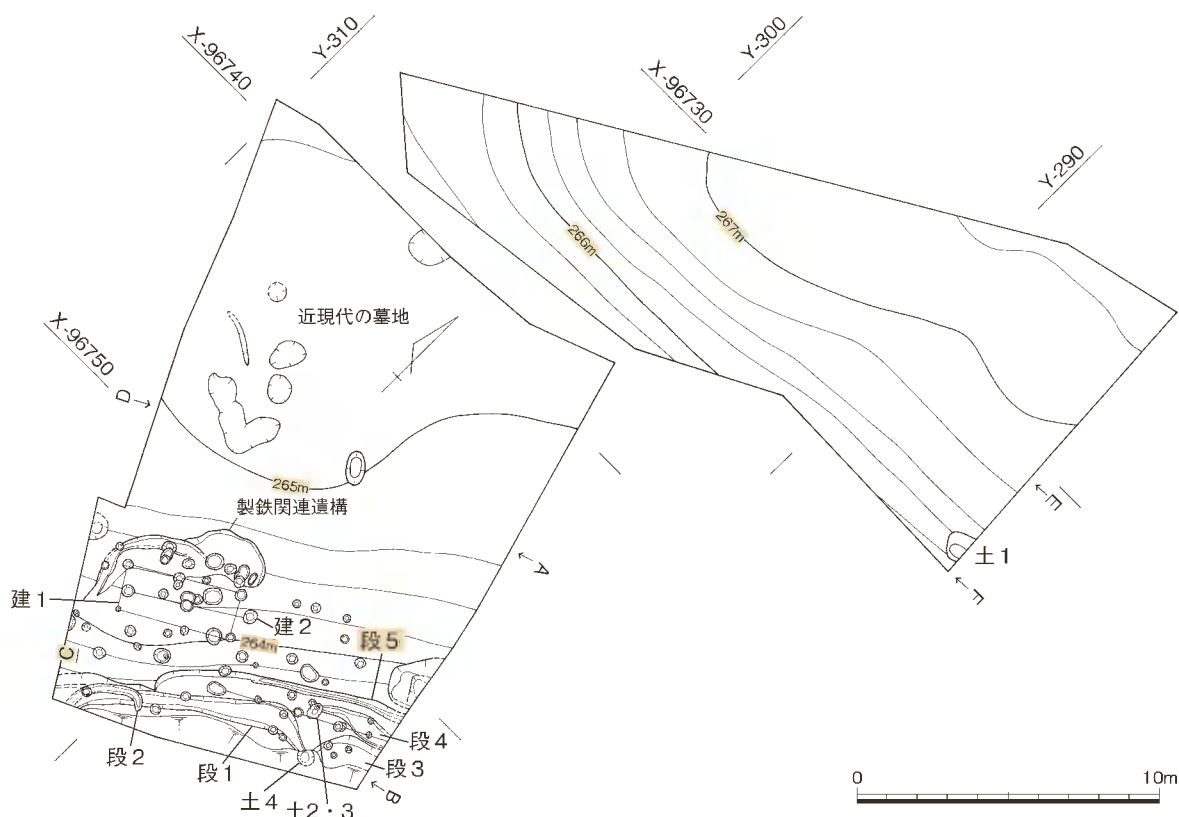
## 第4章 八幡山南遺跡

### 第1節 遺跡の概要

本遺跡は美作市古町に位置し、西に延びる海拔高265.0m前後の低丘陵尾根上にある。かつて周辺で鉄滓が採集されたことで遺跡として周知されるに至ったが、丘陵尾根上は開墾して畑地に利用した後、調査直前まで墓地として利用されていたため、調査前まで製鉄関連遺跡の面影はすでに失われていた。しかしながら、一次調査の結果を受け、遺構や包含層が確認された丘陵南斜面を中心に発掘調査をすることとなった。調査の結果、北側調査区の丘陵尾根上では遺構面の削平が著しく、調査区の南東隅部で弥生時代後期の土壇1基を検出したに過ぎない。また、南側調査区の北半では近現代の墓地による攪乱や削平が著しかったが、南半の南斜面では弥生時代後期の段状遺構5面、

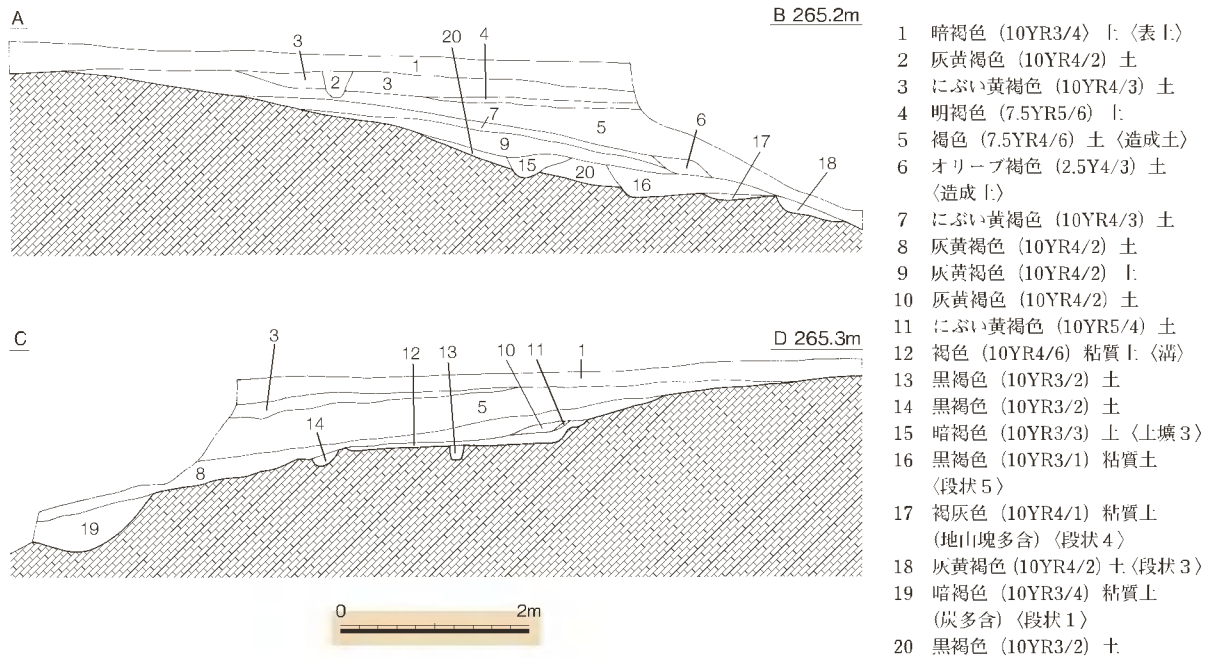


第102図 調査地位置図 (1/1,500)

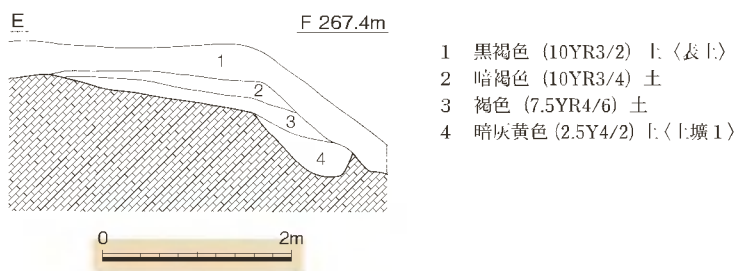


第103図 遺構全体図 (1/250)





第104図 土層断面図① (1/80)



第105図 土層断面図② (1/80)

土壌3基、古代の製鉄関連遺構や掘立柱建物、中世の包含層を確認した。

基本層序は第104・105図に示した。南側調査区のA-B断面とC-D断面の第5層は同一層で、中世の造成土と理解される(出土遺物は第117図)。当該期に南向きの緩斜面が造成され、地形が大幅に改変されたと考える。

北側調査区の頂部は表土直下で岩盤が認められ、削平が著しい。E-F断面は北側調査区の南斜面部の土層断面で、第3層からは弥生土器片が出土した。(米田)

## 第2節 弥生時代の遺構・遺物

### 1 概要

弥生時代の遺構は、北側調査区の南東隅部で土壌1基、南側調査区の南斜面で弥生時代後期の段状遺構5面、土壌3基を確認した。いずれも斜面下方に位置しているが、これは遺構の残存状況に大きく起因していると考えられる。丘陵尾根上や斜面上方は後世の地形改変、削平が著しいため、弥生時代の遺構は確認できなかったが、本来は丘陵全体に広がっていた可能性は十分に考えられる。(米田)

### 2 段状遺構

南側調査区の南緩斜面では、海拔高263.0m前後で段状遺構1～5を確認した。切り合い関係は層位的に段状遺構1→2→5、4→5の順で構築されたと考えられる。いずれも弥生時代後期の範疇であ

り、最新段階の段状遺構5は弥生時代後期中葉に比定される。(米田)

**段状遺構1** (第103・106図、

図版17-3・18-1)

南側調査区の南緩斜面下方の西半に位置し、段状遺構2・5に切られる。規模は長辺780cm以上を測り、西端は調査区外へ延びる。壁際には最大幅96cm、深さ12cmの溝が巡っており、東端は鈍角に曲がる。平坦面は大半が削平されている。遺物は皆無であるが、埋土から弥生時代後期の範疇と推測される。(米田)

**段状遺構2** (第103・106図、

図版17-3・18-1)

南側調査区の南緩斜面下方の西端に位置し、段状遺構1を切る。長辺は約200cmほど残存し、西側は調査区外へ続く。短辺は約150cm以上を測り、平坦面は25cm残存する。壁面には幅28cm、深さ4cmの溝が巡り、東端はほぼ直角に屈曲する。遺物は皆無であるが、埋土から弥生時代後期に比定される。(米田)

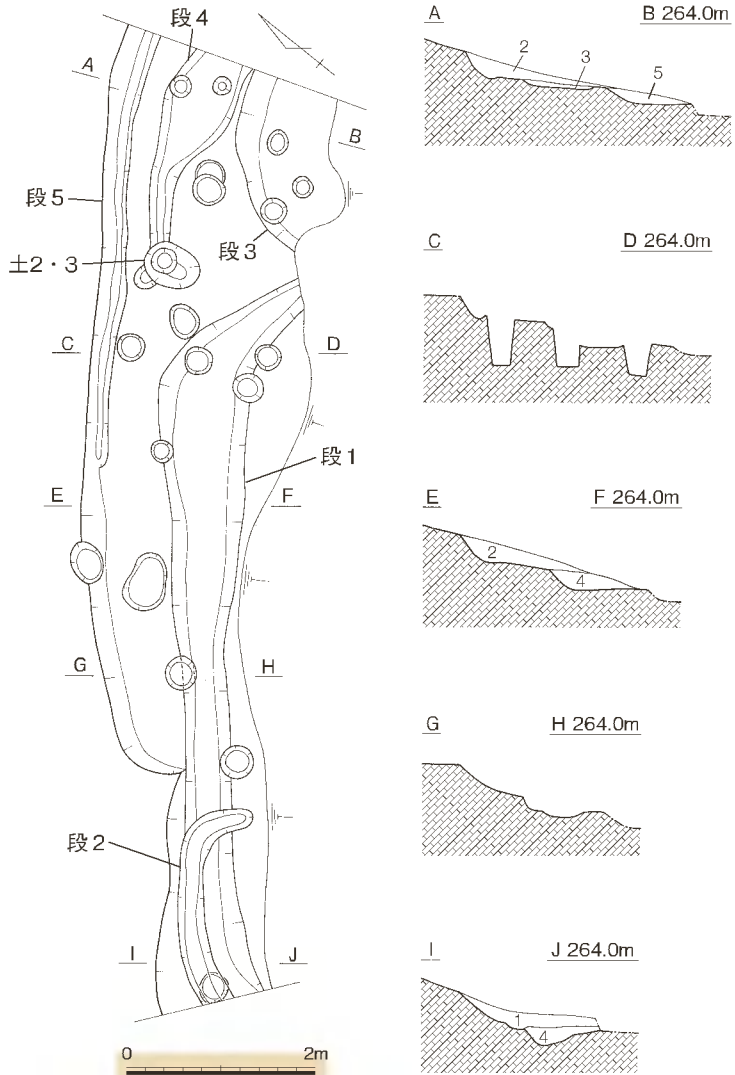
**段状遺構3** (第103・106図、

図版17-3・18-1)

南側調査区の南緩斜面下方の東端に位置する。長辺は170cm以上で、東端は調査区外へ続く。平坦面は約72cmほど残存する。段状遺構4・5とは切り合わないが、本遺跡では古い段状遺構が斜面下方に位置し、新しくなるにつれて斜面上方に位置する傾向にあることから、段状遺構4・5より古い可能性がある。遺物は皆無だが、埋土から弥生時代後期の範疇と推測できる。(米田)

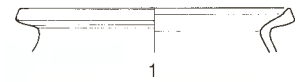
**段状遺構4** (第103・106・107図、図版17-3・18-1)

南側調査区の南緩斜面下方の東端に位置し、段状遺構5や土壌3・4に切られる。長辺は210cm以上で、東端は調査区外へ続く。壁面には最大幅72cm、深さ4cmの歪な形状の溝が巡る。遺物は溝の覆土から弥生土器の甕1が出土した。時期は、出土遺物や埋土、切り合い関係から弥生時代後期の範疇で捉えられ、段状遺構5や土壌3・4より古い。(米田)



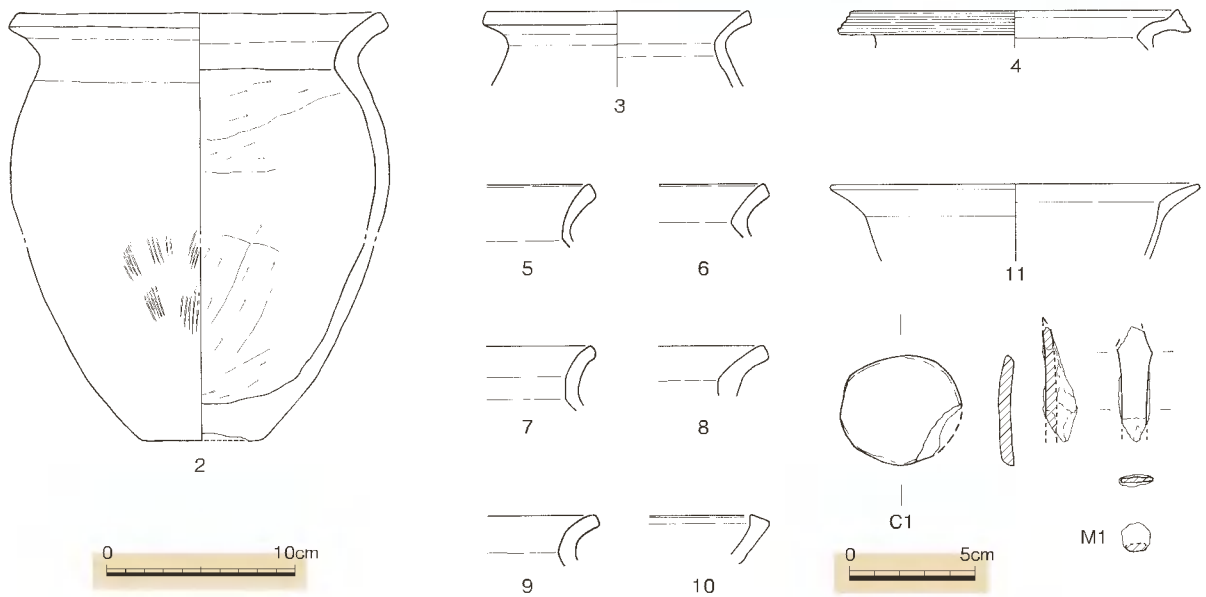
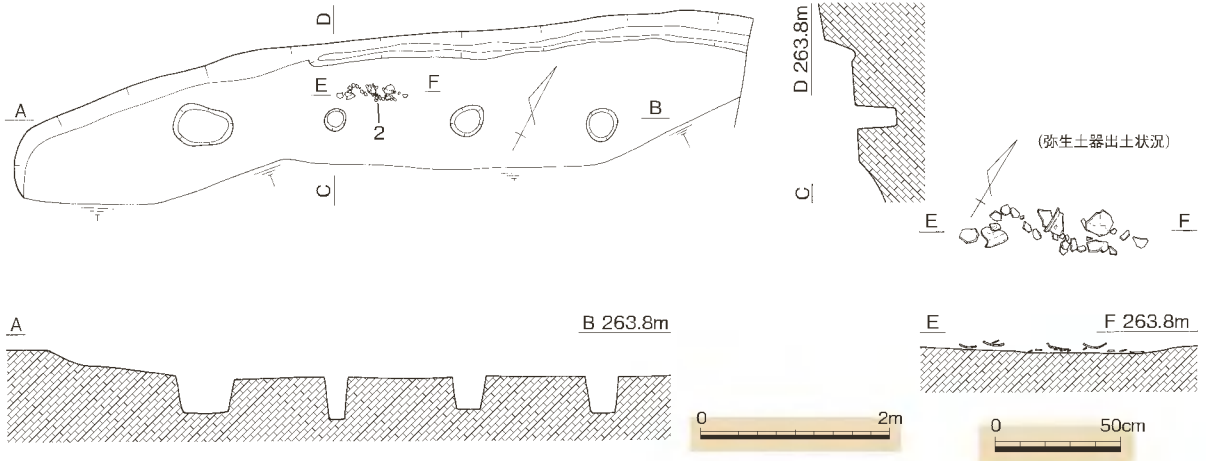
- 1 褐色 (10YR4/6) 土 (遺物少ない) (段状2)
- 2 黒褐色 (10YR3/1) 粘質土 (段状5)
- 3 褐灰色 (10YR4/1) 粘質土 (段状4、地山塊多含)
- 4 褐色 (7.5YR4/3) 粘質土 (段状1)
- 5 灰黄褐色 (10YR4/2) 土 (段状3)

第106図 段状遺構1～5 (1/80)

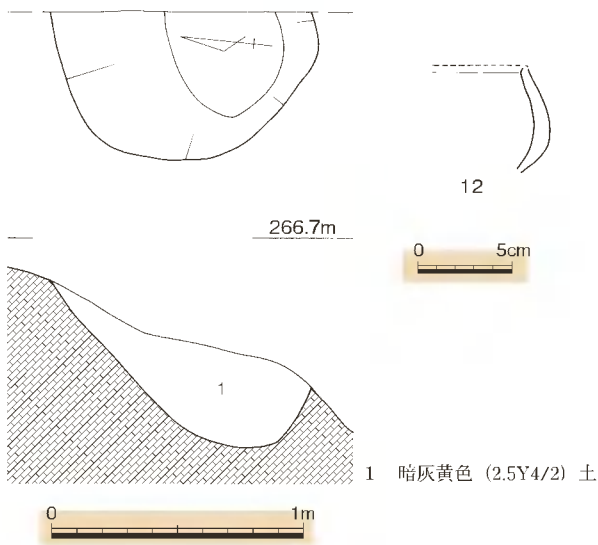


0 10cm

第107図 段状遺構4 出土遺物 (1/4)



第108図 段状遺構5 (1/80)・遺物出土状況 (1/30)・出土遺物 (1/4・1/3)



第109図 土壌1 (1/30)・出土遺物 (1/4)

段状遺構5 (第103・106・108図、

図版17-3・18・21-1)

南側調査区の南緩斜面に位置し、段状遺構1・4を切り、段状遺構1～5の中で最も新しい。長辺790cmを測る。東側の壁面には幅約32cm、深さ4cmの溝が巡っているが、西側には続かない。平坦面は約150cmほど残存し、ピットを4個検出した。ピットの径はまちまちであるが、柱間距離は約140cm前後で直線的に配置され、深さは32～42cmとほぼ統一性があるため、これらのピットは掘立柱建物を構成していた可能性がある。また平坦面の中央部壁寄りでは弥生土器の甕2が破碎した状態で出土した。また、覆土から弥生土器3～11、

土器円盤C 1、鉄器の鉈M 1が出土した。高杯10は弥生時代中期後半に属するが、他の土器は弥生時代後期中葉に比定されることから、本遺構の時期は弥生時代後期中葉に比定することができる。(米田)

### 3 土壌

#### 土壌 1 (第103・109図)

北側調査区の南東隅部、南斜面に位置する。平面形は径104cmの円形を呈し、深さは約66cmを測る。埋土からは弥生土器の鉢12が出土している。時期は弥生時代後期の範疇と考えられる。(米田)

#### 土壌 2・3 (第103・110図)

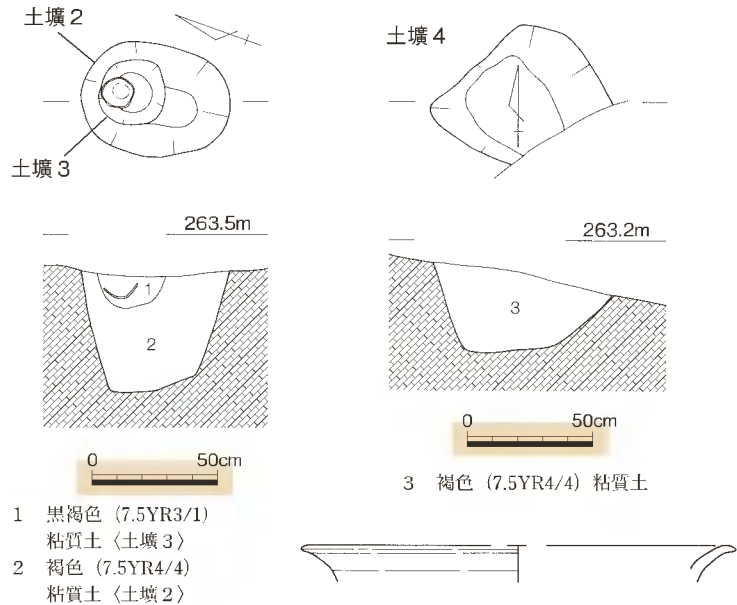
南側調査区の南斜面に位置し、両土壌ともに段状遺構4を切り、段状遺構5の平坦面上で検出した。土壌2は長軸59cm、短軸44cmの楕円形を呈し、深さは46cmを測る。一方、土壌3の平面形は径28cmの円形で、深さは13cmでピット状を呈する。埋土からは弥生土器の小形壺の胴下半部13が出土した。両土壌は重複しており、土壌2は土壌3に切られる。検出状況から両土壌ともに段状遺構5に伴う可能性も否定できない。時期は弥生時代後期中葉。(米田)

#### 土壌 4 (第103・110図)

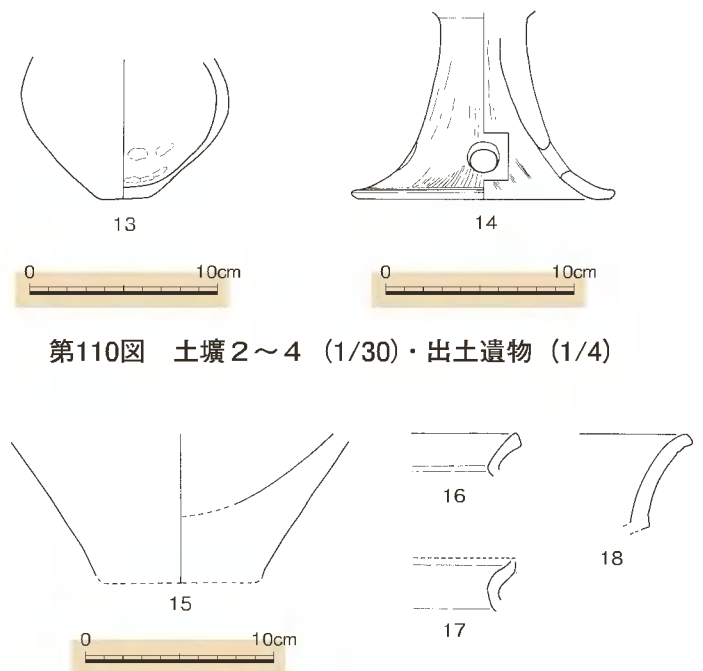
南側調査区の南斜面下方に位置し、段状遺構1・3を切る。平面形は不整形で一辺約60cmを測る。深さは34cmである。埋土からは弥生土器の高杯14が出土しており、口縁部と脚部は復元で接合できなかったが、胎土や形態から同一個体と考えられる。時期は弥生時代後期中葉で、段状遺構1・3より層位的に新しい。(米田)

### 4 遺構に伴わない遺物 (第111図)

弥生時代の遺構検出や中世包含層の掘り下げ中に出土した弥生時代の遺物を次にまとめる。15~17は後期の弥生土器であり、15は壺の底部、16・17は甕の口縁部、18は高杯の口縁部である。(米田)



第110図 土壌 2～4 (1/30)・出土遺物 (1/4)



第111図 遺構に伴わない遺物 (1/4)

### 第3節 古代以降の遺構・遺物

#### 1 概要

古代以降の遺構は、南側調査区の南斜面上方に位置する製鉄関連遺構と、それと重複する掘立柱建物2棟がある。また南側調査区の頂部では、近世～近代の墓を少なくとも8基ほど確認したが、第103図にその配置を提示するにとどめる。本調査区では中世以降の造成や近・現代の地形改変が著しく行われたため、古代以降の遺構は以上のほかに確認できなかったが、本来は弥生時代の遺構と同様に丘陵全体に広がっていた可能性は十分に考えられる。(米田)

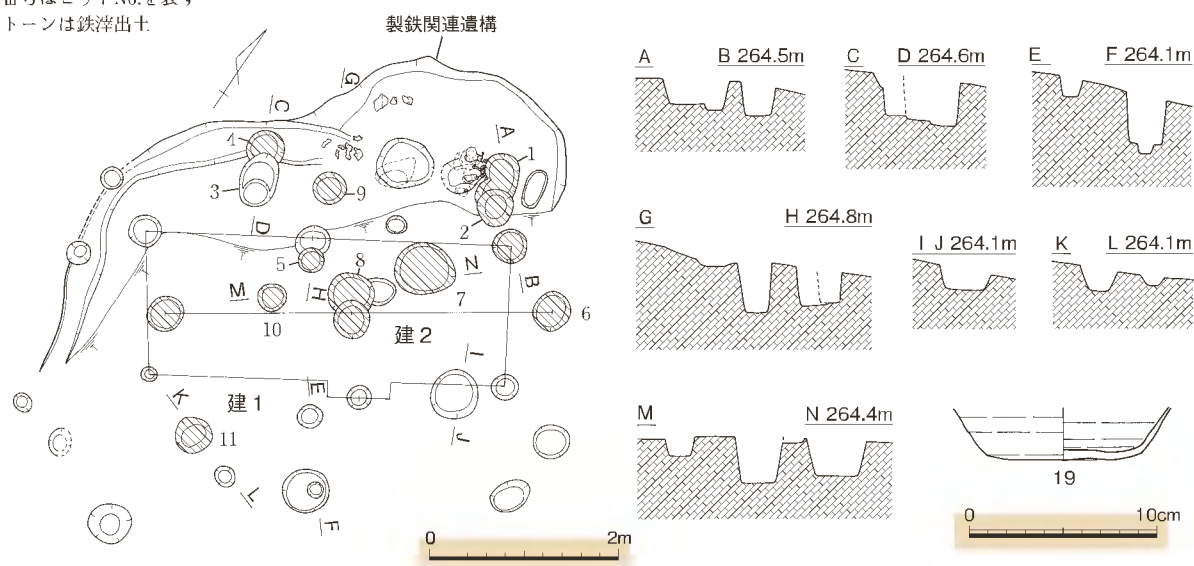
#### 2 製鉄関連遺構

**製鉄関連遺構** (第103・112～114図、図版17-3・19・20・21-3)

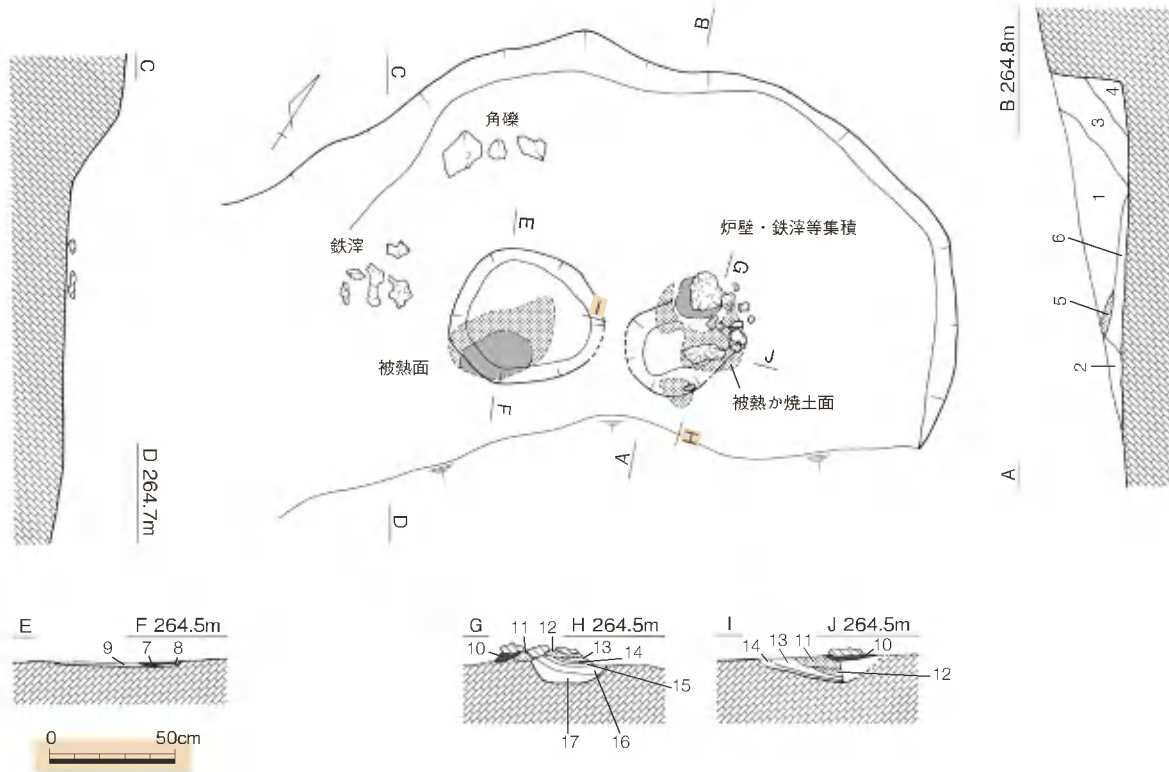
南側調査区の南斜面傾斜変換点に位置する。ここで製鉄関連遺構と報告するものは、第113図に示したとおり、段状遺構とそれに付随する被熱面、炉壁と鉄滓等集積箇所である。段状遺構の規模は長辺約294cm、残存幅は約140cmを測る。深さは28cmで、埋土は斜堆積しており、上層は自然に堆積したものと考えられる。第6層は床面直上に堆積しており、硬く締まっていることから貼り床であった可能性がある。

平坦面中央部では、長軸60cm、短軸53cm、深さ2cmの不整形円形を呈する土壌があり、埋土から鉄滓9.21gが出土した。その土壌掘り方の上面では41×26cmの範囲に被熱面が認められた。被熱箇所の南半は強い被熱を受けており、硬化していた。また床面の西側には鉄滓散布箇所(788.77g)、北壁中央付近では10cm前後の角礫3点が認められ、いずれも床面直上で出土した。また床面の中央東寄りでは、40×36cmの不整形を呈する土壌があり、土壌内には焼土(第11・12層)や炭を多く含む土層(第13層)が堆積している。その上面には炉壁片C2や焼土塊が約4cmの厚さで堆積し、その直上には鉄滓

番号はビットNo.を表す  
トーンは鉄滓出土



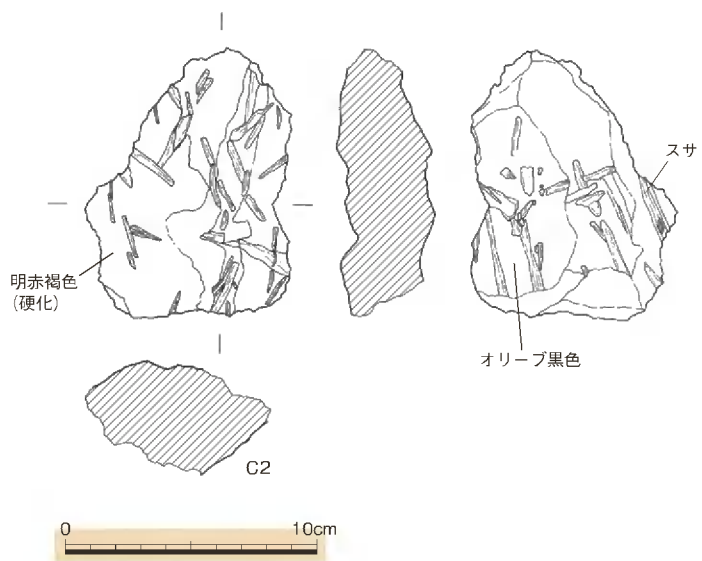
第112図 製鉄関連遺構・掘立柱建物1・2 (1/80)・出土遺物 (1/4)



- |                                 |                               |
|---------------------------------|-------------------------------|
| 1 褐色 (10YR4/4) 粘質土              | 10 褐色 (10YR4/4) 粘質土 (同くしまる)   |
| 2 褐色 (10YR4/4) 粘質土              | 11 赤褐色 (2.5YR4/6) 焼土          |
| 3 黄褐色 (10YR5/6) 土 (やや粘性あり)      | 12 赤褐色 (2.5YR4/8) 焼土          |
| 4 黄褐色 (10YR5/8) 土 (同くしまる、地山塊多含) | 13 褐色 (7.5YR4/6) 土 (炭多含)      |
| 5 赤褐色 (2.5YR4/6) 焼土塊 (硬化していない)  | 14 明褐色 (7.5YR5/8) 土           |
| 6 黄褐色 (10YR5/6) 土 (固くしまる)       | 15 黄褐色 (10YR5/6) 土            |
| 7 暗赤褐色 (2.5YR3/6) 焼土 (やや硬化貼り床か) | 16 明褐色 (7.5YR5/8) 粘質土 (地山塊多含) |
| 8 灰黄褐色 (10YR4/2) 粘質土 (焼土粒・炭多含)  | 17 褐色 (7.5YR4/6) 土 (固くしまる、炭含) |
| 9 褐色 (7.5YR4/6) 粘質土             |                               |

第113図 製鉄関連遺構 (1/30)

が230.14 gほど散在していた。一見すると、これらの炉壁や鉄滓等が集積された土壌は製鉄炉残痕の可能性も指摘されよう。しかしながら、炉壁や鉄滓が塊状に散在していること、本遺構に伴う鉄滓は総重量1,638.06 gと極端に少ないことから、この炉壁や鉄滓集積箇所は炉の本体ではなく、二次的に廃棄された蓋然性が高いと考える。また後述する掘立柱建物1の南西隅部に配置されている屈曲する溝は、製鉄関連遺構の段状遺構の西端と重複しており、段状遺構



第114図 製鉄関連遺構出土遺物 (1/3)

の床面と溝の底面と大差ない。また埋土も互いに酷似して、溝の埋土からも鉄滓が出土している。配置状況から、溝は掘立柱建物1に伴う可能性が高いと判断しているが、製鉄関連遺構に伴う排滓溝で

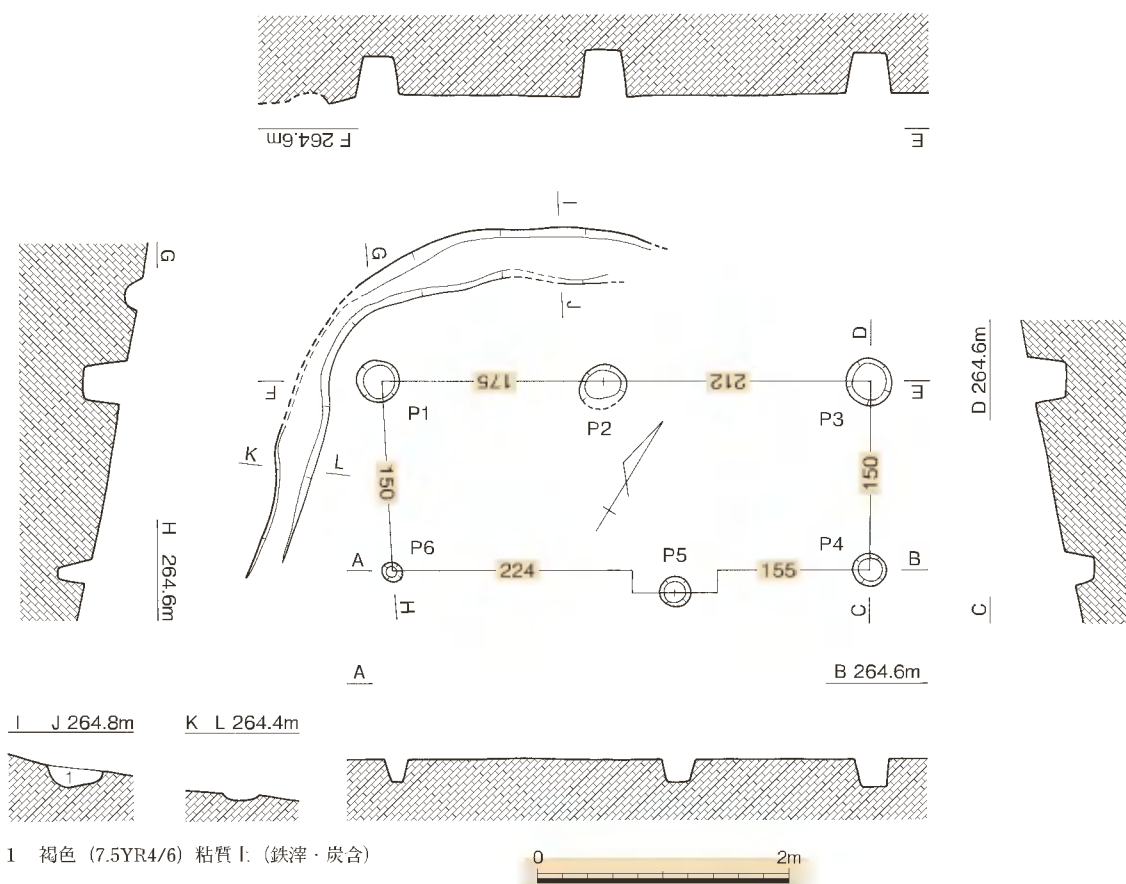
ある可能性も完全には否定できない。ちなみに本遺構は第104図の第12層にあたり、中世の造成土（第5層）より下層に堆積する。

遺物はスサを多く含む炉壁片C2のほか、鉄滓が出土している。鉄滓2点を分析した結果、いずれも砂鉄製錬滓と判明した（付載第2節参照）。直接的に時期を示す遺物は出土していないが、第112図のC-D断面のP3から須恵器の杯19が出土している。19は焼成不良で、底部はヘラ起こしによる。P3は段状遺構や溝と重複しているが、埋土が酷似していることから新旧関係を厳密に明らかにすることはできなかった。製鉄関連遺構の周辺にはピットが散在しており、そのうちP1～11からは鉄滓が計11,474.76gも出土している。ただ、これらのピットが製鉄関連遺構と直接的に関連しているかどうかは慎重に判断する必要がある。また製鉄関連遺構と直接関わるかは不明であるが、周辺のP10から鉄滓とともに炭化材（コナラ属コナラ亜属クヌギ節）が出土している。このP10出土炭化材の放射性炭素年代測定を行ったところ、補正年代値1,400±40BPを示し、暦年校正年代cal AD 616-658年との結果を得ることができた。9世紀代ごろの須恵器19とともにこの分析結果も本遺構の推定時期を示すうえで有益と言える。（米田）

### 3 掘立柱建物

#### 掘立柱建物1（第103・112・115図、図版19-1・2）

南側調査区の南斜面上方に位置し、製鉄関連遺構や掘立柱建物2と重複する。2×1間の掘立柱建物であり、主軸はN-60°-Eを指す。第115図に示した柱穴配置は確定的なものではなく、柱穴の底面

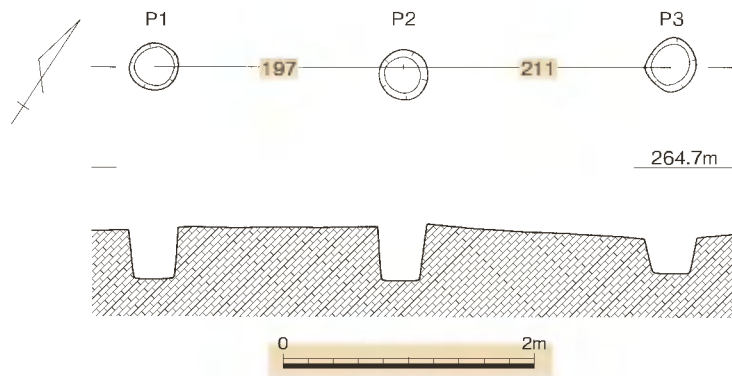


第115図 掘立柱建物1 (1/60)

高や建物の主軸、溝との関連性、周辺の柱穴などを踏まえて検討した結果、他の柱穴配置よりも可能性が高い掘立柱建物を示したものである。北側の桁である柱穴（P1～3）は約40cmと径が大きく、深さも30～40cmと比較的深い。それに対し、南側の桁にあたる柱穴（P4～6）は16～27cmとバラツキがある。桁行は379・387cm、柱間距離は155～224cmを測る。梁間は東西ともに150cmである。建物の北側から西側にかけては、建物北西隅角部の外側を湾曲するように、幅約45cm、深さ約15cmの溝が流走している。溝の底面をみると、I-J断面とK-L断面との高低差は約12cmで、K-L断面の方が低く、北側から南側にかけて流走していたものと考えられる。この溝からは鉄滓が100.88gほど出土しており、前述したように製鉄関連の排滓溝の可能性も考えられようが、その配置状況から掘立柱建物1に伴う排水溝の可能性も考慮に入れておく必要がある。掘立柱建物1・2および周辺の柱穴は製鉄関連遺構に伴う可能性も示唆されるが、その想定される炉の位置と掘立柱建物や柱穴の配置状況を考えると、これらが共伴するとは考えにくい。遺物はP3から鉄滓48.9g、P6から弥生土器もしくは土師器細片が出土した。本遺構の時期は、掘立柱建物1・2や周辺の柱穴が製鉄関連遺構より斜面下方にすべて配置されているため、これらの遺構は製鉄関連遺構が廃絶した後、それほど時間が経過しない時期にあたる9世紀代以降に構築されたものとする。（米田）

**掘立柱建物2**（第103・112・116図、図版19-1・2）

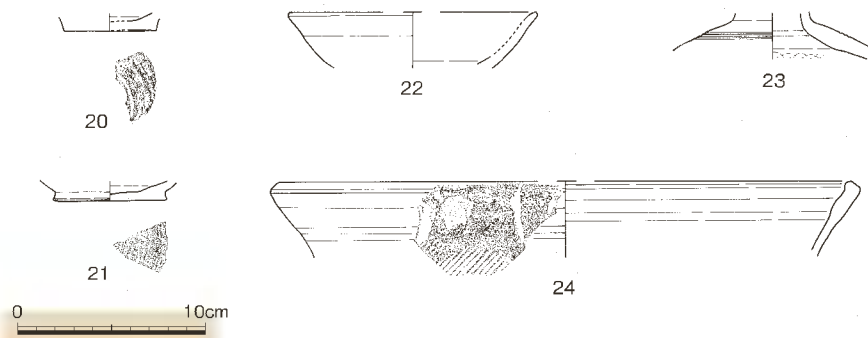
南側調査区の南斜面上方に位置し、製鉄関連遺構、掘立柱建物1と重複する。梁間は不明で、桁行は2間以上である。主軸はN-57°-Eを指す。桁行は408cm以上で、柱間距離は197・211cmを測る。各柱穴の深さは30～45cmで底面高はほぼ揃う。出土遺物はP1～3から鉄滓が計411.28g出土している。時期は掘立柱建物1と同様に古代の範疇と理解する。（米田）



第116図 掘立柱建物2 (1/60)

**4 遺構に伴わない遺物**（第117図）

20は土師器の皿で、底部には回転糸切りの痕跡が残る。21は勝間田焼の椀である。22は土師器の杯で、焼成はあまり良くない。23は青磁壺である。24は土師器鍋であり、外面に煤が付着する。また遺構に伴わないが、第104図C-Dの第5～7層から鉄滓が907.69gほど出土している。（米田）



第117図 遺構に伴わない遺物 (1/4)



## 第4節 小結

以上の成果により、本遺跡は弥生時代の集落跡、古代の製鉄関連遺跡であることが明らかとなった。ただし調査地は遺構面の削平が著しく、南側調査区の南斜面下方を中心に遺構が辛うじて残存していたに過ぎないため、調査成果は遺跡の一端を示しているに過ぎないことを断っておく。

**弥生時代** 当該期の遺構は段状遺構5面、土壇3基であり、その大半が南側調査区の南斜面下方で検出された。遺構の配置は残存状況に大きく起因しており、集落の実態に迫れるものではない。ただ段状遺構は南斜面に集中して確認され、等高線に平行するように連続して構築されていることから、段状遺構の配置に意図的な配慮が見てとれる。時期はいずれも弥生時代後期中葉であるが、段状遺構が5面重複していることから、若干の時間幅が確認できる。また本遺跡で出土した弥生土器も後期中葉の範疇におさまるため、弥生集落の存続期間は極めて短期間であったと理解できる。

**古代以降** 南側調査区の南斜面では古代の製鉄関連遺構1基、掘立柱建物2棟を確認した<sup>(1)</sup>。製鉄関連遺構は段状遺構の床面に炉壁、鉄滓、焼土塊、炭化物が二次的に集積されていた状況を示す。また床面では被熱面を1か所確認したが、遺跡内では総計815.15gの炉壁と総計3,891.94gの鉄滓<sup>(2)</sup>が出土しているに過ぎず、その出土量から製鉄炉と積極的に評価するには至っていない。しかしながら、本遺跡で製鉄関連遺物が確認されたことで、調査地周辺に鉄製錬に関わる遺構の存在が明白となった。

古代の製鉄関連遺跡の調査例は英田郡吉野川流域では少なく、高本遺跡や福本たたら遺跡で認められるに過ぎない〔光永1992〕。兵庫県佐用郡では平安時代以前の製鉄関連遺跡が7か所ほど確認されており、本遺跡の隣接地域として軽視できない〔山陰考古学研究集会2004〕。ただ本遺跡では製鉄炉そのものの実態は具体的には明らかでないため、考古学的な比較検討は困難である。その一方で平安時代初期の仏教説話集である『日本霊異記』には、8世紀後半の美作国英多郡<sup>(3)</sup>に官営の鉄山があったことが記載されており、文献史料から製鉄が盛んな地域であったことが窺える。この鉄山について、湊哲夫氏は美作国の鉄貢納に関する文献史料から英多郡大野里内で鉄の精錬や採鉱が行われたことを推測し、旧大原町川上周辺をその推定地の1つとして評価している〔湊2000〕。湊氏の扱った文献史料によると吉井川流域の英田郡は古来から鉄生産が盛んな地域であり、なかでも旧大原町川上はその中核をなしていた可能性がある。以上のような背景や実情からみても、本遺跡における製鉄関連遺物の確認は、鉄生産が盛んであったとされる旧英田郡大原町内における製鉄関連遺跡の希少かつ重要な調査例として評価することができる。また地域や時期的にみても、本遺跡における鉄生産が『日本霊異記』記載の官営鉄山に関連した鉄生産の一端を示している可能性は十分にあると考える。 (米田)

### 註

- (1) 製鉄関連遺物の整理に際しては光永真一氏、上楯武氏に御指導いただき、多大な御教示を賜った。
- (2) 製鉄関連遺物の総計を次にまとめる。炉壁は817.15g(うち滓付きは331.99g)で、通風孔が付くものは確認していない。炉内滓は40.76gで、うちメタル度H(○)は30.11g、銹化(△)は10.76gを計る。単位流動滓は5.84g、流出溝滓は1,366.75g、流動滓は2,478.59g(うちガラス質は1,527.24g)である。
- (3) 現在の美作市(旧美作町、英田町、勝田町、作束町、大原町、東栗倉村)、西栗倉村にあたる。

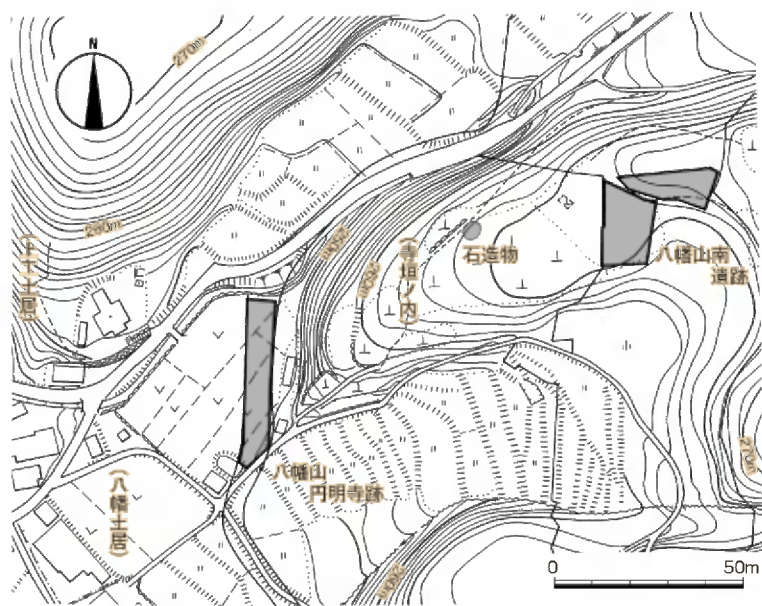
### 参考文献

- ・山陰考古学研究集会『中国山地の中世製鉄遺跡』第32回山陰考古学研究集会資料集 2004
- ・光永真一「製鉄と鉄鍛冶」『古備の考古学的研究』(下)山陽新聞社 1992
- ・湊 哲夫「美作国英多郡の鉄山について」『津山郷土博物館たより』25 津山郷土博物館 2000

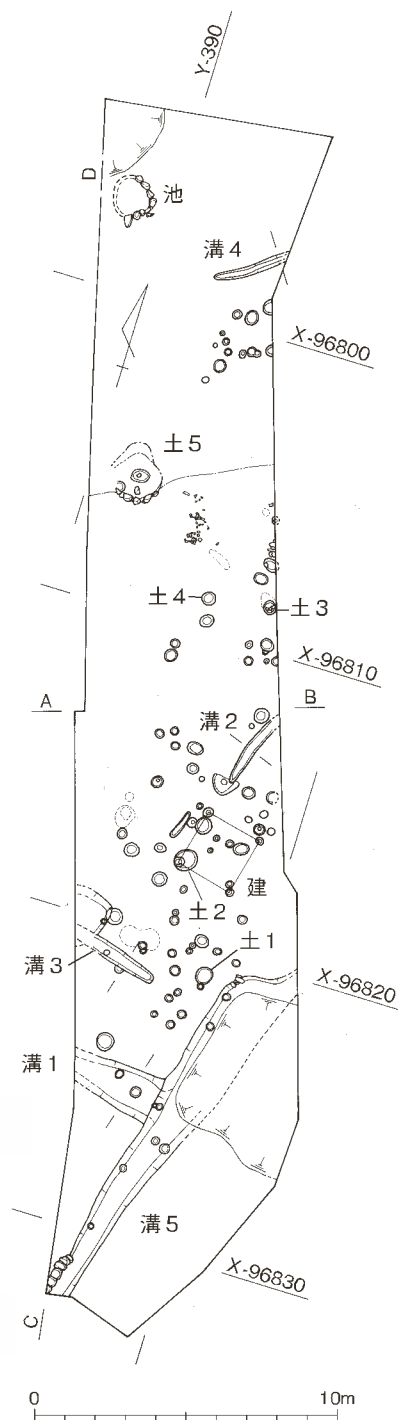
## 第5章 八幡山円明寺跡

### 第1節 遺跡の概要

八幡山円明寺跡は美作市古町1306-3番地ほかに所在する。調査地は東から延びる丘陵の裾部にあたり、八幡神社に南接する。伝承や絵図等によると、調査地周辺には江戸時代末に焼失したと伝えられる八幡山円明寺が建立されていたとされていたため、調査ではまず路線予定地内にトレンチを2本設定して一次調査を行い、中世～近世の遺構や遺物を確認した。これを受けて平成17年11月1日から12月27日まで発掘調査を実施した。その結果、中世の土壇2基、ピット、近世の掘立柱建物1棟、土壇3基、池状遺構1、溝5条、集石1、ピットなどを確認した。近世の遺構や遺物から八幡山円明寺と直接的に関連づける物的根拠は十分に得られていないものの、近世以降に丘陵裾部から調査区の西側にかけて大規模な造成を行っていることや、近世遺構面で焼土面や炭面が散在して焼失の状況を呈していることから、近世の遺構や遺物は八幡山円明寺に関連する可能性が高いと考える。第121図で基本層序をみると、表土直下は近世遺構面で、第10～76層は近世造成土である。中世以前の地形は第120図の第7層下面のように、東側の丘陵から西側にかけて急峻な傾斜を有している。(米田)

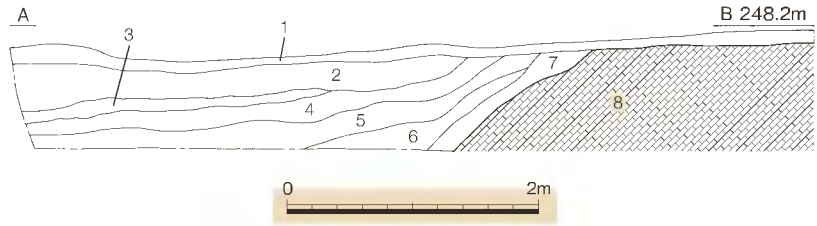


第118図 調査地位置図 (1/2,000)

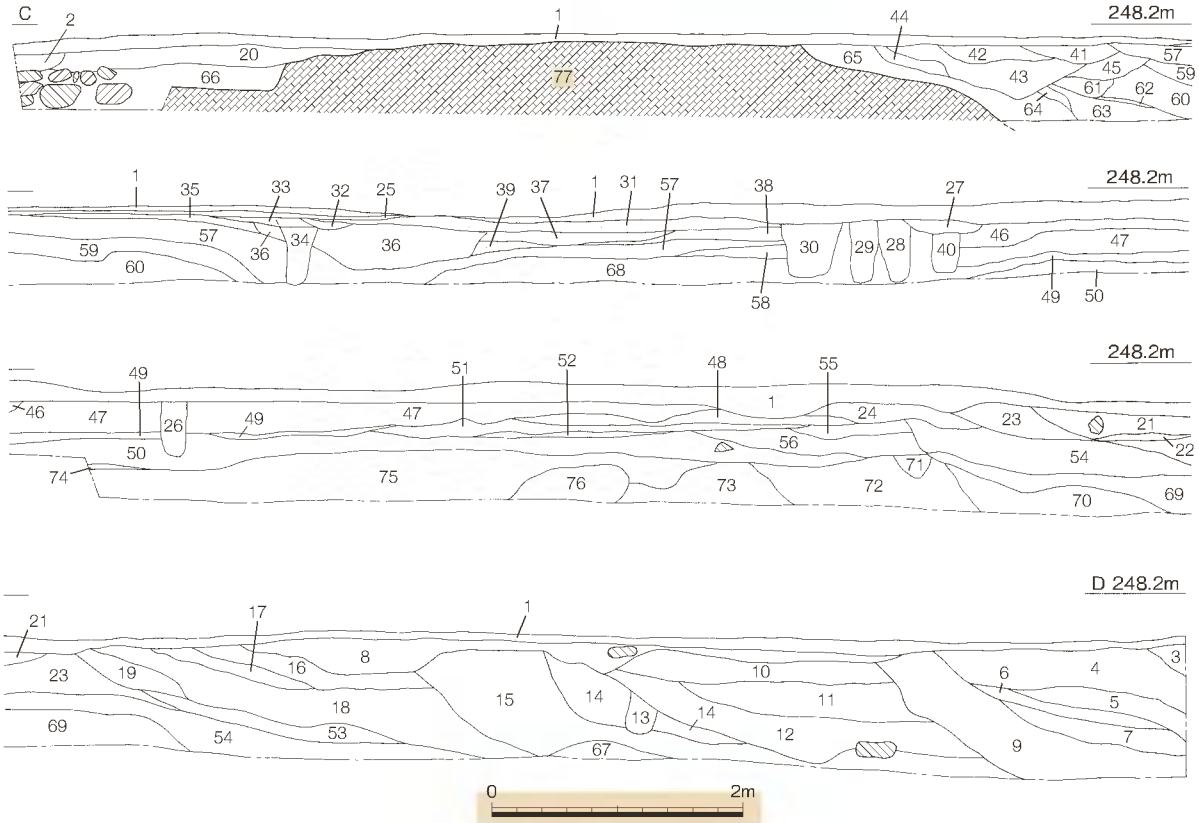


第119図 遺構全体図 (1/250)

- 1 黒褐色土 (表土)
- 2 暗オリーブ褐色土
- 3 黒色土+礫
- 4 褐色粘性粗砂
- 5 にぶい黄褐色粗砂
- 6 黄褐色粘性粗砂
- 7 黒褐色粘質土
- 8 褐色土 (地山)



第120図 土層断面図① (1/60)



- |                         |                             |                            |
|-------------------------|-----------------------------|----------------------------|
| 1 黒褐色土 (表土)             | 27 黄灰色粘質土 (礫多含)             | 53 褐色土                     |
| 2 黒褐色土 (近現代の溝)          | 28 黒褐色土                     | 54 暗オリーブ褐色土                |
| 3 黒色土 (近現代の攪乱土)         | 29 黒褐色粘質土 (礫多含)             | 55 褐色土                     |
| 4 暗オリーブ褐色土 (2cm以下の礫多含)  | 30 灰黄褐色粘質土 (炭・焼土粒多含)        | 56 暗オリーブ褐色土                |
| 5 にぶい黄褐色土               | 31 褐灰色砂礫 (1cm以下の礫多含)        | 57 黄褐色粘質土                  |
| 6 オリーブ褐色粘性粗砂            | 32 黄褐色土 (2cm以下の礫多含) (溝2)    | 58 褐色粗砂                    |
| 7 褐色粘質土                 | 33 明黄褐色粘質土                  | 59 黒褐色粘質土                  |
| 8 黒褐色土                  | 34 暗褐色粘質土 (炭多含)             | 60 黄褐色粘質土                  |
| 9 黒褐色土 (3cm以下の礫多含)      | 35 黄灰色粘質土 (1cm以下の礫多含)       | 61 灰黄褐色粘質土                 |
| 10 にぶい黄褐色土              | 36 黒褐色土 (2cm以下礫多含)          | 62 黄褐色粘質土                  |
| 11 黄灰色粘質土               | 37 灰黄褐色粗砂 (1cm以下の礫多含)       | 63 にぶい褐色粘質土                |
| 12 黄灰色土 (5cm以下の礫多含)     | 38 褐色細砂 (地山塊多含)             | 64 褐灰色粘質土                  |
| 13 にぶい黄褐色土              | 39 にぶい黄褐色粘質土                | 65 黒褐色粘質土                  |
| 14 明褐色粘質土               | 40 黒褐色砂礫                    | 66 褐灰色砂礫 (地山ブロック含) (溝5)    |
| 15 暗オリーブ褐色土 (5cm以下の礫多含) | 41 にぶい黄褐色土 (溝1)             | 67 褐色粘質土                   |
| 16 暗褐色土                 | 42 黄褐色土 (溝1)                | 68 暗灰黄色砂礫 (2cm以下の礫多含)      |
| 17 黄褐色土 (1cm以下礫多含)      | 43 黒褐色粘質土 (炭多含) (溝1)        | 69 暗オリーブ褐色粘質土 (粘性強く、固くしまる) |
| 18 暗オリーブ褐色土 (2cm以下の礫多含) | 44 明赤褐色粘質土 (溝1)             | 70 暗オリーブ褐色土 (2cm以下の礫多含)    |
| 19 にぶい黄褐色土              | 45 黒褐色粘質土 (10cm以下の礫多含) (溝1) | 71 オリーブ褐色粘質土               |
| 20 暗灰黄色土                | 46 にぶい黄褐色粘質土 (粗砂含)          | 72 暗灰黄色土 (1cm以下の礫多含)       |
| 21 暗オリーブ褐色土             | 47 暗オリーブ褐色土 (5cm以下の礫多含)     | 73 オリーブ褐色土 (3cm以下の礫多含)     |
| 22 オリーブ褐色土              | 48 黒褐色土 (1cm以下の礫多含)         | 74 褐色粗砂                    |
| 23 暗褐色土                 | 49 オリーブ褐色粗砂                 | 75 にぶい黄褐色粗砂 (10cm以下の礫多含)   |
| 24 黒褐色土                 | 50 黒色砂礫                     | 76 黄褐色粘質土                  |
| 25 赤褐色焼土 (焼失時遺構面)       | 51 暗褐色粘性粗砂                  | 77 にぶい黄色岩盤                 |
| 26 暗褐色土 (1cm以下の礫多含)     | 52 褐色粘質土                    |                            |

第121図 土層断面図② (1/60)

## 第2節 中世の遺構・遺物

### 1. 概要

中世の遺構、遺物は調査区の南半において、土壇（墓）2基、ピット2個を確認した。またP1からは備前焼の播鉢6が出土している。確認した中世の遺構、遺物から当該期の遺跡の性格を把握することは困難だが、土壇1の状況から八幡山円明寺建立以前は墓域としての利用が想定される。（米田）

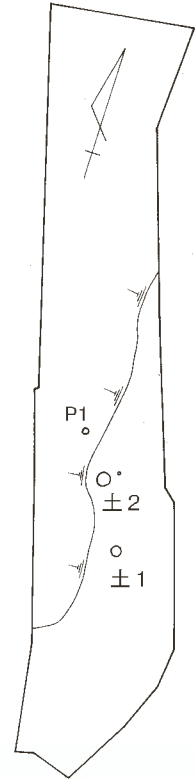
### 2. 土壇

**土壇1**（第122・123図、図版24-1・25-1）

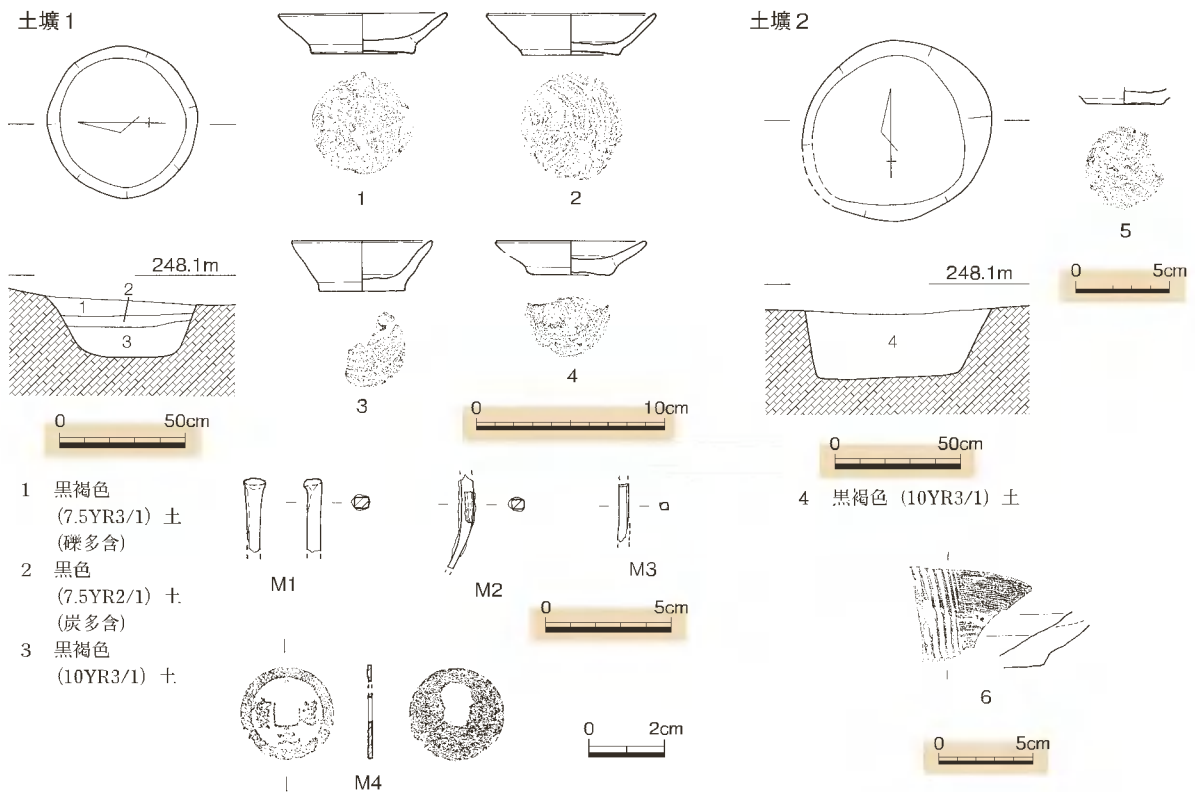
調査区の南側中央部に位置する。平面形は正円形を呈し、規模は径59cm、深さ23cmを測る。覆土からは、破碎された土師器皿1～4、鉄釘M1～3、銅銭「至道元寶」M4が出土した。これらの遺物から本土壇は棺を要した墓の可能性はある。時期はM4から10世紀末以降に比定される。（米田）

**土壇2**（第122・123図）

調査区中央部南寄りに位置する。平面形は径74cmの円形を呈する。断面形は逆台形を呈し、深さは26cmを測る。覆土から土師器皿の底部5が出土した。時期は中世ごろと考えられる。（米田）



第122図 中世遺構配置図 (1/400)



第123図 土壇1・2 (1/30)・出土遺物 (1/4・1/3・1/2)・P1出土遺物 (1/4)

### 第3節 近世（八幡山円明寺跡関連）の遺構・遺物

#### 1 概要

近世の遺構や遺物は調査区の全体で確認しており、掘立柱建物1棟、土壇3基、池状遺構1、溝5条、集石1、ピットを確認した。近世遺構面は表土直下にあたり、調査区北側は遺構面が削平されていた。遺構面が残存していた範囲では被熱面や炭面が散在しており、これらは八幡山円明寺が焼失した痕跡と捉えられる。また調査区の東半は削平された丘陵の岩盤が遺構面となり、西半は造成によって形成された平坦面が遺構面となる。 (米田)

#### 2 掘立柱建物

##### 掘立柱建物

(第124・125図)

調査区中央部に位置する1×1間の掘立柱建物である。主軸はN-14°-Eで、溝1に直交、溝5に平行しており、寺域の軸に沿う。柱間は190～202cmであり、ほぼ一定である。柱穴の深さは20～40cmを測り、P2・4の底面には根石が置かれている。

遺物としてはP4から鉄釘M5が出土した。時期は検出状況、埋土から近世と考える。

第136図の絵図、第137図の平面図が八幡山円明寺の焼失前の伽藍配置を忠実に描いたものであるとすれば、本建物付近は「上ユトノ」「フロバ」に相当するため、掘立柱建物は「湯殿」の上屋であることも想定されよう。 (米田)



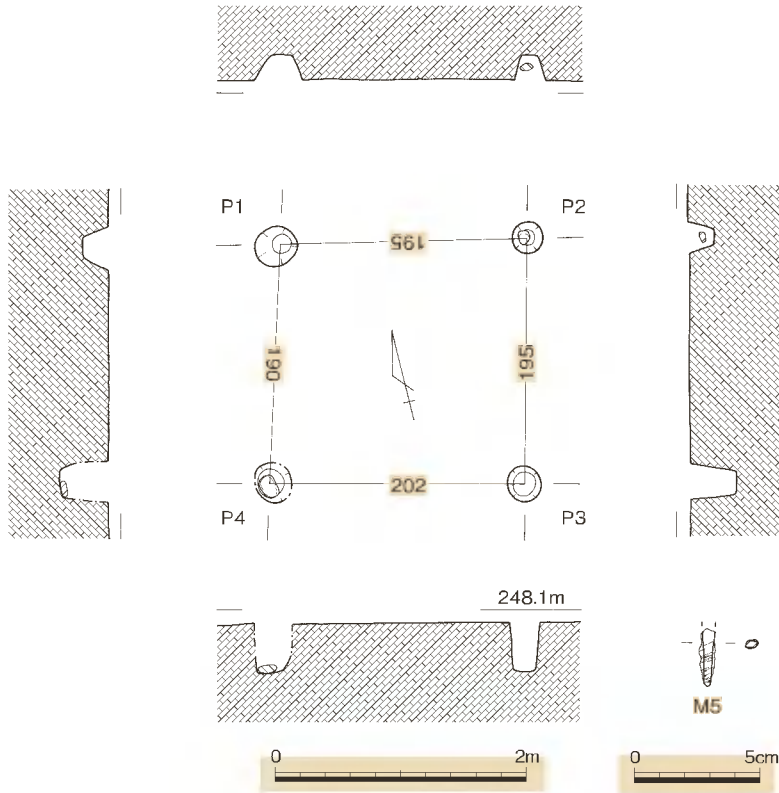
第124図 近世（円明寺関連）遺構配置図 (1/150)

### 3 土壌

#### 土壌3（第124・126図、 図版24-2）

調査区の東壁中央部に位置する。平面形は長軸39cm、短軸36cmの楕円形を呈し、深さは約10cmを測り、規模からするとピット状と言える。土壌の南半には15cm前後の石5個が充填されていた。中央の石は他の石より5cm程度窪むように配されており、柱が置かれた可能性もある。本土壌周辺は被熱面や炭面が顕著で、埋土は炭化物を多く含んでいたが、土壌内の石は被熱していない。時期は近世と

（米田）

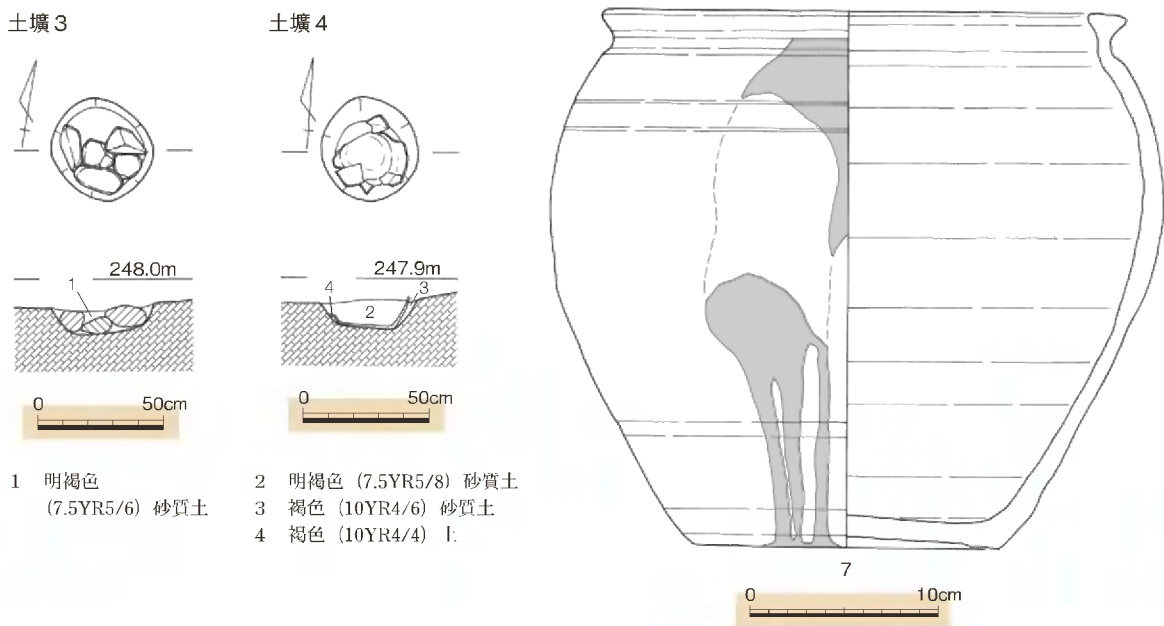


第125図 掘立柱建物（1/60）・出土遺物（1/3）

考えられ、寺院焼失時まで機能していたと考えられる。

#### 土壌4（第124・126図、図版24-3・25-2）

調査区中央部に位置し、集石に南接する。平面形は径41cmの円形を呈し、断面形は逆台形で、深さは11cmを測る。土壌内には掘り方全体に丹波焼の甕7の底部が正位置で据えられていた。同一の甕片

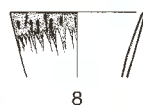
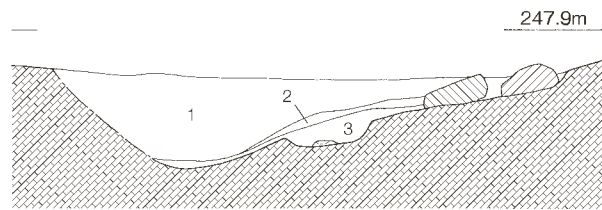
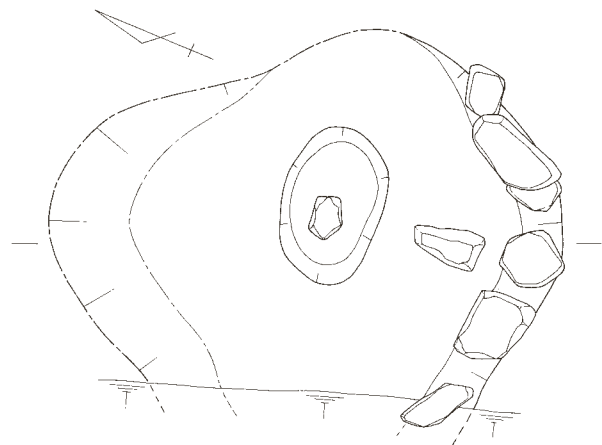


第126図 土壌3・4（1/30）・土壌4出土遺物（1/4）

は本土壌に北接する集石周辺にも散在していた。甕内部の埋土はすべて焼土化していたため、寺院焼失直前まで本土壌が機能していたことは確実であり、また焼失時には甕内が空いた状態であったことが想定される。甕7は丹波焼の赤土部灰釉甕であり、口縁端部が「T」字状を呈し、頸部は短く直立、胴部はやや張り、寸胴な形態をもつ。口径24.5cm、胴部径32.9cm、底径16.2cm、器高28.3cmを測る。また肩部には沈線が1条巡る。素地は赤褐色で、外面には赤土部がほぼ全面に塗られ、外面の肩部から胴部上半にかけては3方向に灰オリーブ色の流し釉（飛び掛け）が確認できる。内面全体には灰釉がかけられており、灰オリーブ色、黄褐色に変色している。以上の特徴から、甕7は長谷川眞氏によるⅣA2c類（長谷川眞「甕類にみる近世丹波焼」『関西近世考古学研究』XⅡ 関西近世考古学研究会 2004）に属し、製作時期は17世紀後葉から18世紀前半に設定される。八幡山円明寺焼失が1867年と伝えられているため、製作時期の下限を見積もっても、甕7は少なくとも100年以上も使用されていた可能性がある。（米田）

#### 土壌5（第124・127図）

調査区の中央部のやや北西寄りに位置する。平面形は長軸203cm、短軸143cm以上の不整形円形を呈する。断面または土壌南半には不整形円形の掘り方に沿うように約20～30cmの石が縁辺部に配されており、本来は北半にも巡っていた可能性がある。底面中央部には長軸62cm、短軸40cmの楕円形の小土壌があり、その底面中央には約16cmの石が存在していた。土層断面を見る限り、第3層が外側の掘り方底面にも浅く堆積していることから、両掘り方はほぼ同時に機能し、廃絶していると理解する。第2層は焼土を含み、焼失時に堆積したものと考えられる。土壌の規模、配石状況から池状遺構の可能性もある。遺物は覆土から磁器の小杯8が出土している。時期は近世に比定することができる。（米田）



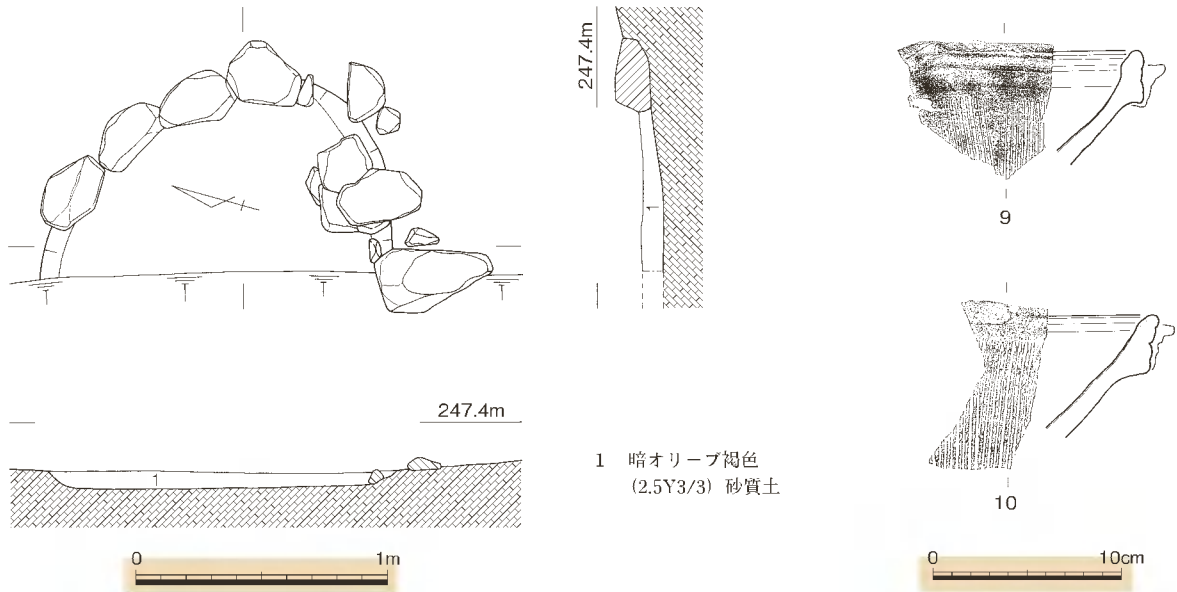
- 1 暗褐色（10YR3/4）砂質土
- 2 明褐色（7.5YR5/8）砂質土（焼土含）
- 3 灰褐色（7.5YR4/2）砂質土

#### 4 池状遺構

##### 池状遺構（第124・128図、図版24-4）

調査区北側に単独で位置する。平面形は径139cmの円形、断面形は皿状を呈する。深さは7cmと浅い。また掘り方の際には、30cm前後の石（角礫、円礫）が全周するように整然と配されている。底面には配石、砂利敷き等は認められなかった。土壌内から遺物は出土していないが、遺構の検出までに周辺から備前焼の播鉢9・10が出土した。時期は近世の範疇と理解する。本遺構

第127図 土壌5（1/30）・出土遺物（1/4）



第128図 池状遺構 (1/30)・出土遺物 (1/4)

の配置、規模、配石状況から池状遺構の可能性がある。

(米田)

## 5 溝

### 溝1 (第124・129図)

調査区の南側に位置し、現状では溝5に直行して連結する。溝の主軸はN-81°-Wで、直線的に流走する。規模は幅150cm、深さ14cmを測る。出土遺物は認められなかった。本溝は第136・137図の絵図、平面図には表現されておらず、円明寺焼失後に掘削された可能性がある。検出位置や流走方向を考えると、本堂と薬師堂の境界線にあたる。

(米田)

### 溝2 (第124・129図)

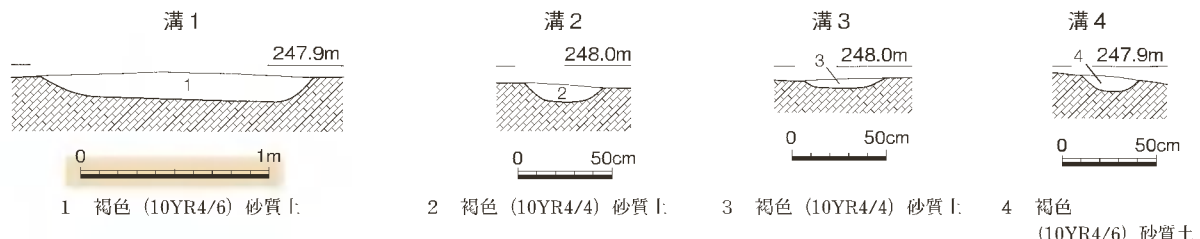
調査区東壁中央部に位置する。主軸はN-77°-Eで、溝1に直交、溝5に平行する。幅は41cmで、深さは9cmを測る。全長は約280cmほど確認し、北側は調査区外へ続く。溝の南端は掘立柱建物の北側140cmで収まる。埋土には焼土粒、炭化物を含む。遺物は認められなかった。時期は近世に比定される。

(米田)

### 溝3 (第124・129図)

調査区南側に位置する。主軸はN-85°-Eで、溝1にほぼ平行する。幅は42cmで、深さは5cmを測る。全長は約300cmほど確認し、東端は調査区内で収まる。遺物は皆無であるが、時期は近世と考えられる。位置的に「ユトノ」「フロバ」の西縁側の雨落ち溝の可能性はある。

(米田)



第129図 溝1～4 (1/40)



溝4 (第124・129図)

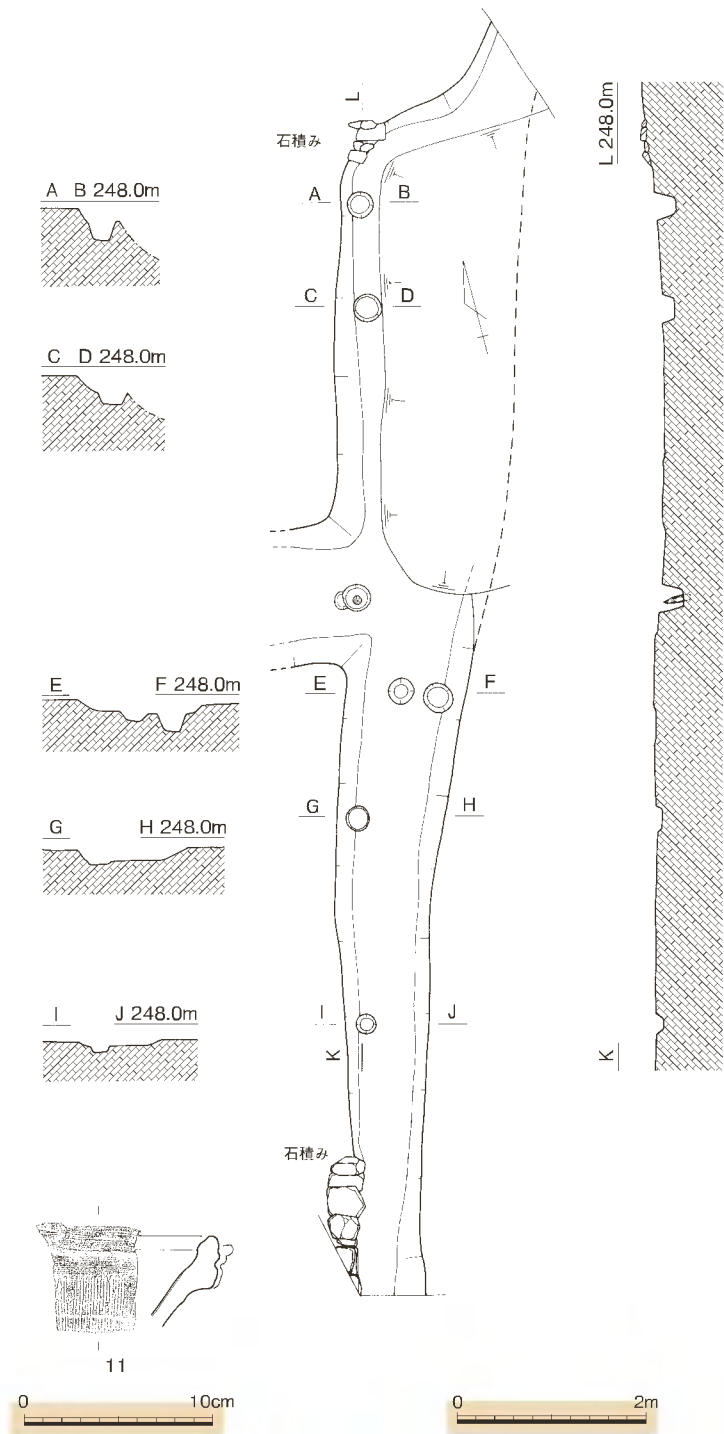
調査区北側に位置する。主軸はN-58°-Eを指す。幅は30cmで、深さは7cmを測る。全長は約260cmほど確認し、東側は調査区外へ続く。溝の西端は調査区内で収まる。遺物は出土していない。時期は埋土から近世に比定される。(米田)

溝5 (第124・130・131図、図版24-5)

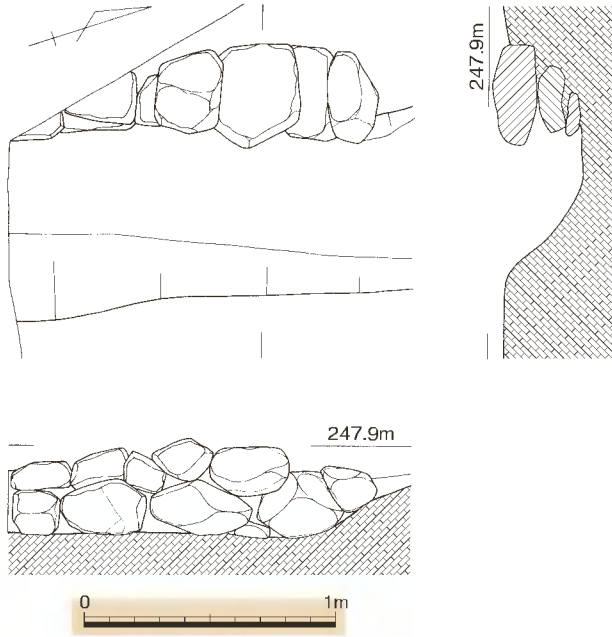
調査区南側に位置する。主軸はN-81°-Wを指し、溝2にほぼ平行する。本溝は調査直前まで機能、踏襲されており、山側にあたる溝の北端では湧水が著しい。調査区境の溝北端ではやや西へ屈曲しながら幅広になり、南へ直線的に延びる。幅は北端で約190cm、中央(E-F断面)で126cm、南端で74cmを測る。深さは7cmと浅い。調査区内では全長約670cmほど確認し、調査区の南北へそれぞれ続く。

溝の北側には緑灰色粘質土が堆積しており、調査当初は、本溝は攪乱と誤認していたが、溝の南端西肩では、第131図のように約20~40cm程度の円礫がほぼ垂直に2~3段ほど積み重なっていたため、遺構と判断するに至った。また溝の西肩には柱穴5個を確認し、そのうちの1個の柱穴には柱根が残存していた。これらの柱穴列は柵か塀に想定され、「チフツ」の南を区画していた可能性がある。

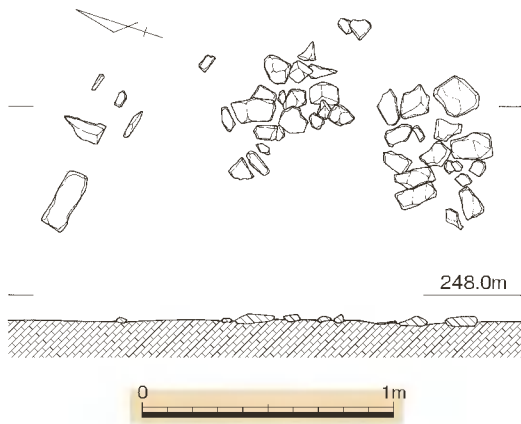
本溝は検出状況や平面図(第137図)から「ヤクシ本堂」の北側を流走する「泉スイ」に相当すると考えられる。調査によって確認した溝の北端屈曲部分まで第137図の平面図は忠実に表現されており、考古学的事実が史料と合致した事例として評価できる。出土遺物は近世から現代までの遺物や瓦礫が混在していたが、なかには備前焼の播鉢11がある。(米田)



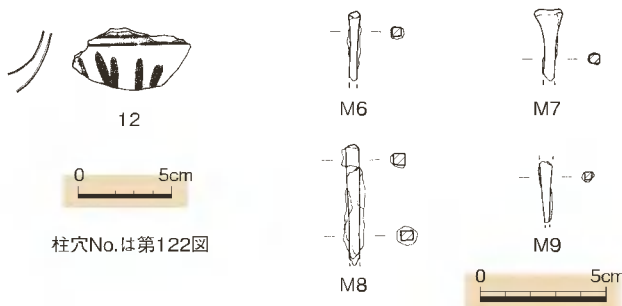
第130図 溝5 (1/80)・出土遺物 (1/4)



第131図 溝5南端石積み (1/30)



第132図 集石 (1/30)



第133図 柱穴出土遺物 (1/4・1/3)

## 6 集石

集石 (第124・132図、図版24-6)

調査区北側中央に位置し、土壌4に北接する。180×90cmの範囲に石が集中している箇所を確認した。石は20cm前後の角礫が多く、遺構面一面に広がり、部分的に被熱していた。集石の間からは丹波焼の甕7の上半部が破片で散在しており、土壌4からの混入と考えられる。この集石の性格は不明であるが、意図的に集積されていると考える。時期は近世で、焼失時に機能していたと判断される。(米田)

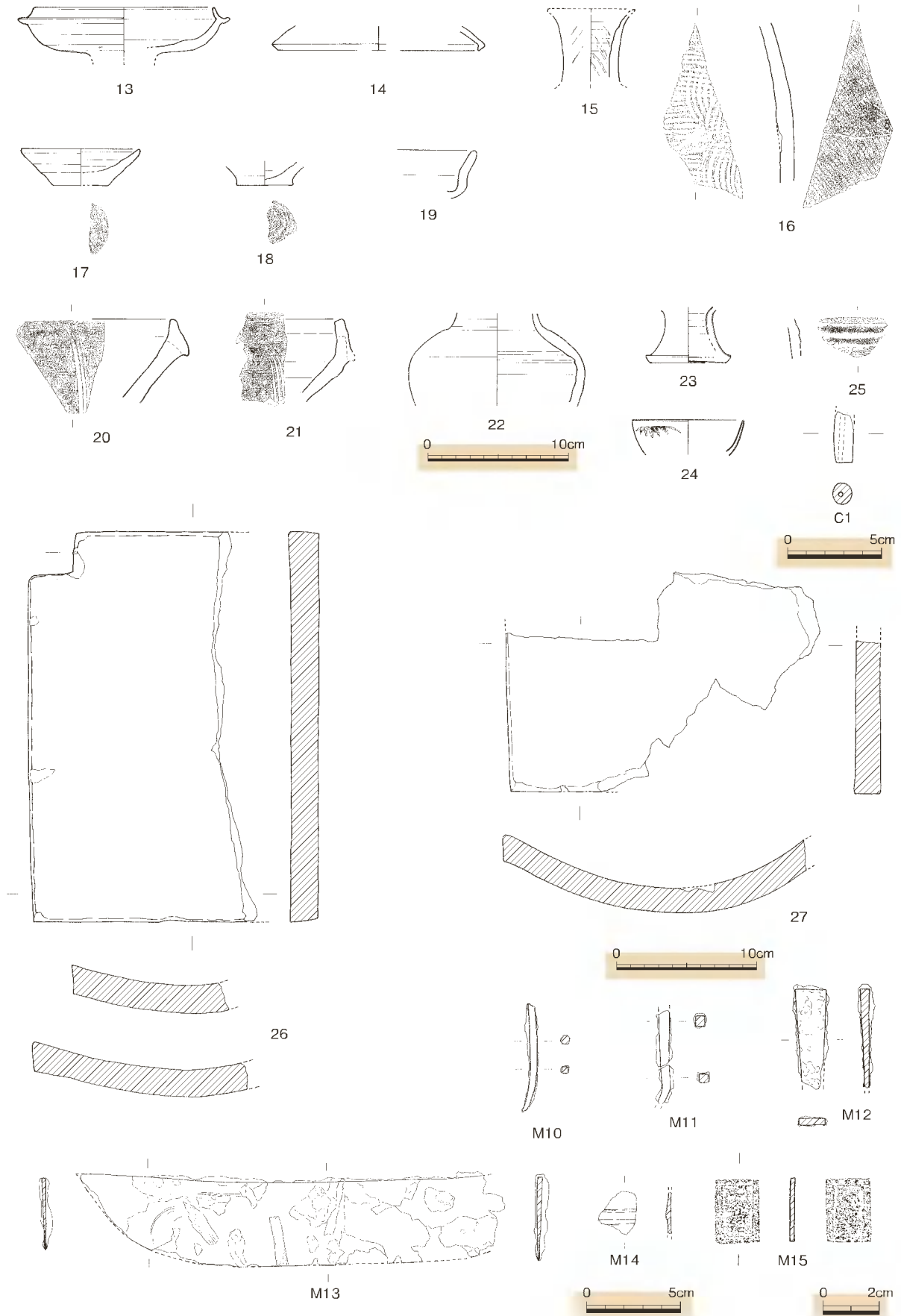
## 7 柱穴出土遺物 (第133図)

柱穴から出土した遺物は青磁碗12、鉄釘M6～9である。青磁碗12はP2、釘M6はP3、M7はP4、M8・9はP5から出土した。いずれも近世に比定することができる。(米田)

## 8 遺構に伴わない遺物 (第134図)

調査区西半の円明寺造営に伴う近世の造成土や遺構面での遺構検出の際に出土した遺物を次にまとめる。13～16は須恵器で、13は高杯、14は杯蓋、15は壺、16は甕である。17・18は中世の土師器皿で、底部は回転糸切りである。19は土師器の杯である。20・21は備前焼の挿鉢である。22は陶器の壺である。23は燈台か、24は磁器の杯である。25は火鉢の破片で、2条の凹線文のほか、亀甲の押型文が施されている。26・27は調査区東壁中央部分、集石の東側で遺構面直上から出土した平瓦である。C1は管状土錘である。M10・11は鉄釘、M12は器

種不明で鉄製品の基部にあたる。M13は鉄鎌で建物の西側の被熱面付近から出土した。M14は青銅器の破片で、外面に突線を有する。器種は不明だが、左右に丸みを帯びており、筒状を呈するものと考えられる。M15は一分判銀を銅で模鑄しており、「小桜花」は不明瞭で新古は定かでない。(米田)



第134図 遺構に伴わない遺物 (1/4・1/3・1/2)

## 第4節 小 結

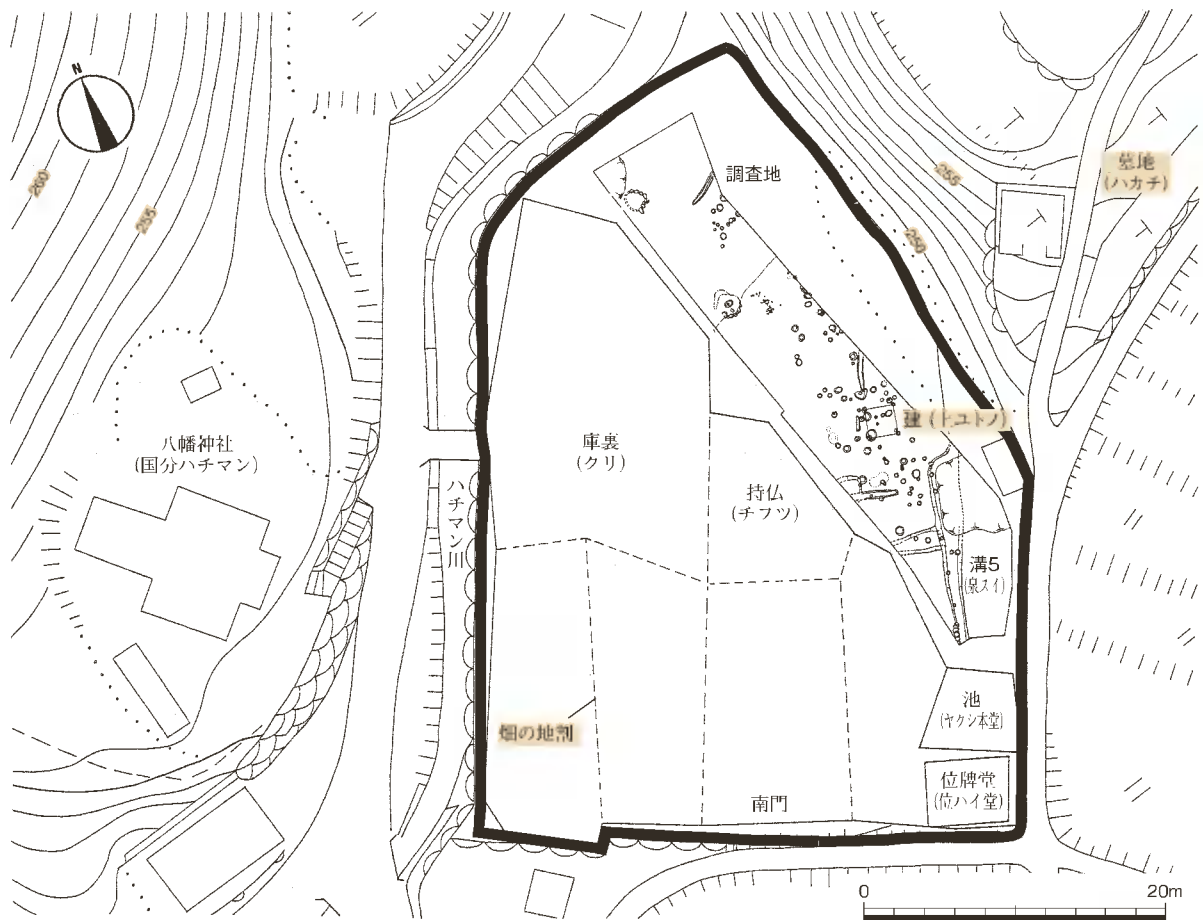
本調査では、中世の土壇2基、ピット、近世の掘立柱建物1棟、土壇3基、池状遺構1、溝5条、集石1、ピットなどを確認した。調査地は幕末に焼失したと伝えられる八幡山円明寺が建立されていた地点に想定されており、今回確認した近世の遺構に関しては、遺構の検出状況が絵図や平面図（第136・137図）の描写に合致する点が多く、円明寺関連の遺構である可能性が極めて高い。ここでは調査成果の大半を占め、円明寺に関連すると考えられる近世の遺構や遺物をもとに、円明寺関連資料（絵図、平面図、石造物）を補足しながら、その実像についてまとめてみたい。

**八幡山円明寺について** 寺伝によると、940年に八幡神社を勧請した際、隣接地に八幡山神宮寺を創立したことに端を発する。そして1480年に小原城主宇野家貞が山王宮の社殿と鳥居を造営して大原保の大社とするとともに、神宮寺を復興し、六坊を建立した。そしてその菩提寺として八幡山円明寺と改称した。しかし八幡山円明寺は1867年に火災を受け、堂宇はもとより本尊、寺宝や什器、旧記の大部分を焼失したようである。現在、美作市（旧大原町）古町の吉野川右岸に位置する仏頂山円明寺は、1880年にかつて現地にあった慈眼寺と合併したものである。ちなみに現在の仏頂山円明寺の宗派は真言宗古義である。以上の経緯は『大原町史（地区誌編）』に詳述されている。

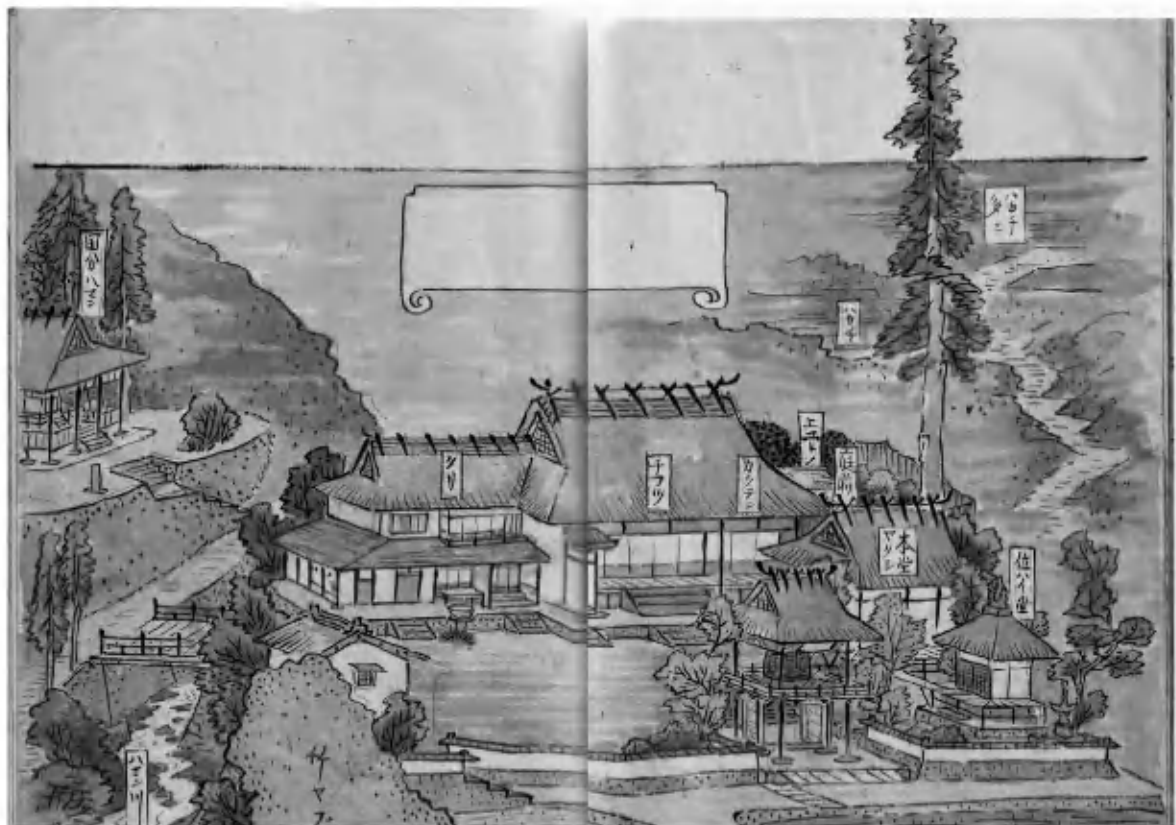
**立地** 円明寺は八幡集落の北側最奥に位置し、現状では南に集落が広がる。また八幡神社に南接する。八幡山南遺跡から南へ緩やかにのびる丘陵尾根の南側裾部には南北約36m、東西約50mの畑地があり、その範囲が寺域と推定される。想定される寺域の規模は約1,231㎡である。



写真13 八幡山円明寺跡近景（東から）



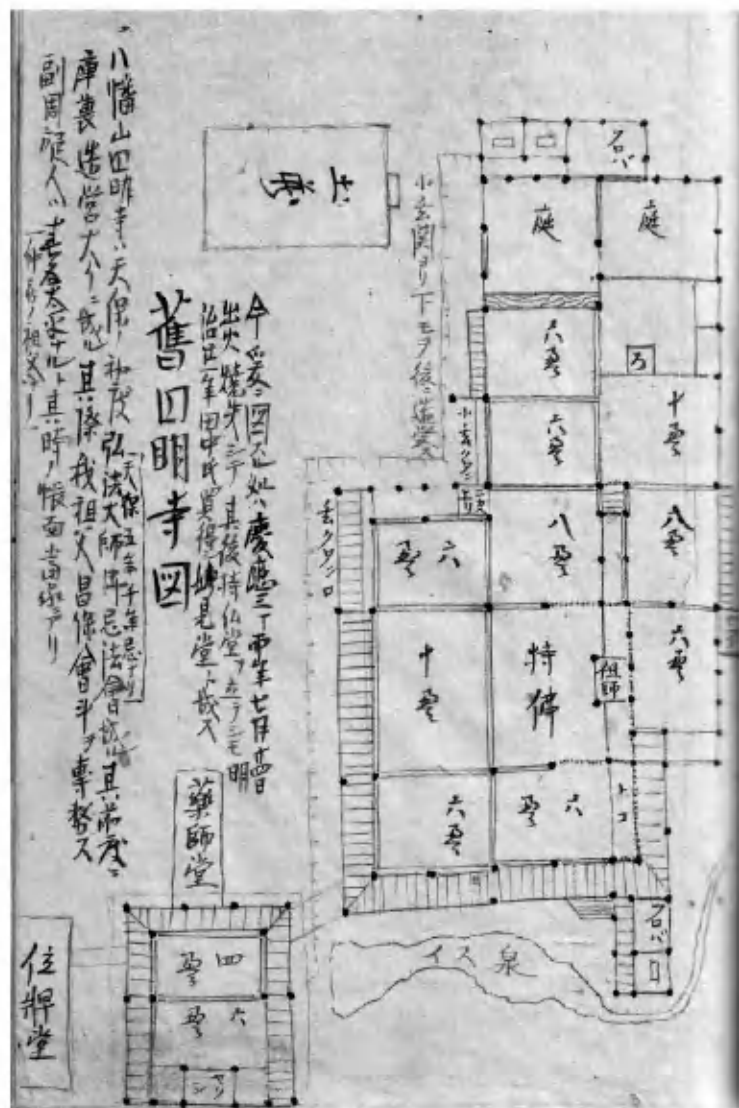
第135図 八幡山円明寺の寺域推定図 (1/500)



第136図 八幡山円明寺の絵図：大原町史編纂室提供

絵図について 第136図の絵図は明治2年以降に難波昌芳<sup>(1)</sup>によって円明寺が描かれたものであり、このたびの発掘調査中にこの絵図が現存していることを知った。絵図左上の「国分ハチマン（八幡神社）」や「ハチマン川」から察して、円明寺を南西から鳥瞰した伽藍が描かれていると理解する（以下、絵図の奥を北、手前を南、左を西、右を東とする）。門は南にあり、二階は鐘楼である。門の東にあたる伽藍の南東隅には「位ハイ堂」、その北隣には「ヤクシ本堂」がある。伽藍中央には東西に「チフツ」「クリ」が軒を連ねる。また「チフツ」の東奥には「庭前」があることから「チフツ」の裏には庭があることが想定される。「庭前」奥には「上ユトノ（フロバ）」がある。各建物は茅葺きを主体として描かれており、瓦葺きは庇付近のみであろうか。さらに堂宇の北東側奥には丘と山道が描かれており、「ハカチ」「ハカチ多シ」とあることから円明寺の墓地が北側丘陵に密集していたことが分かる。この絵図は厳密には未完成であるものの、伽藍配置、建物の大きさや間取り、周辺の風景まで細部にわたって具体的に描写されており、円明寺伽藍や当時の環境を復元する上で重要な史料と言える。絵図は明治2～35年の間に描かれたと伝えられるが、円明寺焼失は1867（慶應3）年であり、単純に考えると焼失後に描かれたことになる。しかしながら、これだけの描写は「記憶」だけで描かれたとは考えにくく、焼失前に下絵のようなものが描かれていたのではないかと推察する。

平面図について 第137図の平面図は絵図と共に大原町史編纂室にて保管されていたものであり、調査終了後にその存在を知った。これは円明寺伽藍が俯瞰されており、間取りが平面図として描かれている。また余白には「今爰ニ図スル処ハ慶應三丁卯年七月廿四日出火焼失シテ〜」という円明寺焼失に関する記載がある。平面図には建物の間取り、柱の位置などが描かれており、絵図では表現できない建物の規模や構造を知る上で貴重である。平面図の伽藍配置は絵図と齟齬はない。また「祖師」が安置されている持仏堂の南（第137図では下）には「泉スイ」が描かれており、この泉が調査で確認した溝5にあたると考えられる。また掘立柱建物は溝5との位置関係から見て、南側の「フロバ（上ユトノ）」周辺である可能性が高い。ちなみに「フロバ」と厠は「持佛（チフツ）」の南東隅、「クリ」の北



第137図 八幡山円明寺の平面図：大原町史編纂室提供



写真14 八幡山円明寺跡の位牌堂跡地（南から）

端にそれぞれ設けられていることが平面図から分かる。

**伽藍配置** 八幡神社の南側、調査地周辺には八幡川に沿うように石垣が築かれ、現存する位牌堂跡（写真14）から北にかけても石垣が存在する。すなわち石垣は寺域の西辺と南辺に築かれていたことになる。石垣は人頭大の円礫が多用されており、石材の風化状況や積み方から察して近世から踏襲されていると考える。南辺の石垣は約三段ほど

積まれており、その中央部分は現状で勾配が付けられている部分が幅170cmで確認でき、円明寺の南門に想定される。また地形や絵図などから寺域の東辺は位牌堂まで、北辺は丘陵裾までと捉えられる。次に具体的な伽藍配置を見る。寺域南東隅角部には現在もお堂があり、この地点は位牌堂を想定する。現存するお堂の建物自体は焼失後に再建された可能性が高いが、基壇は焼失前のものを踏襲している可能性がある。また絵図では「位牌堂」と「チフツ」の間に「ヤクシ本堂」が描かれているが、溝5の検出状況や位置関係から見て、現在の池の部分に「ヤクシ本堂」があったことが想定される。また推定される寺域内の現在の畑地の地割り（第135図）をみると、南半は南北方向に地割りをして四分割されているのに対し、中央部の東西方向の地割りを境として北半は東西に大きく二分されている。この中央部に東西方向に走る境界は溝1とつながる可能性があり、「チフツ」「クリ」の南辺に相当するのではないかと考える。以上の地割りは円明寺の伽藍配置を少なからず反映しているものと考えられる。

**墓地・石造物** 現状では調査地の北東側丘陵（八幡山南遺跡）に墓地が点在する。第136図の絵図においても伽藍の東側に「ハカチ」「ハカチ多シ」とある。調査地北東側の丘陵斜面中腹には石造物群があり、五輪塔1基、無縫塔5基、座像2基、石塔4基の計12基が西向きに整然と並列している（写真15）。これらの石造物にはすべて銘文（103頁下）が刻まれており、このうち釈読できるものを見ると、南から4番目の石造物には「享保三戊戌年 當寺一代住海法印」（1718年）とあり、最古にあたる。最新は南端の無縫塔で「弘化四丁未」（1847年）とある。座像の石造物は2基あり、南から3番目には「寛政八辰年 宥賢上人」、南から10番目には「文化三寅年 宥澄上人」の銘文が確認できる。第138図の五輪塔は空風輪から地輪までの各部位が揃う。各部位には4方に梵字が刻まれる。また各部の接合部分にエグリはない。地輪に「宝曆二壬申年 □法」の銘がある。地輪の下は宝篋印塔の基壇と考えられ、混在の可能性が高い。これらの石造物は円明寺の歴代住職の墓地と想定されるが、北端の無縫塔には「円福寺一代」<sup>(2)</sup>の銘が残る。

**出土遺物** 円明寺関連遺物として瓦や青銅器片などがある。瓦の出土は少なく、平瓦3点および破片が出土しているに過ぎない。絵図をみても建物のほとんどが茅葺きを主体とし、軒先のみが瓦葺きである。瓦の出土量が少ないことから絵図の信憑性が窺える。円明寺の仏具として明確な遺物は皆無に近いが、経筒のような青銅器片M14がその候補としてあげられる。また特異な遺物として一分銀を

銅で模鑄した錢貨M15がある。さらに円明寺の焼失時を示す遺物として土壙4出土の丹波焼の甕7がある。甕7<sup>(3)</sup>の生産年代は17世紀後葉から18世紀前半に設定されている(長谷川2004)が、焼土が充填されるように埋没していたため、円明寺焼失時に甕内部が開放に近い状態であったことは疑いない。円明寺の焼失が第137図の史料の記述のとおり1867年であるならば、甕7の使用期間も窺える。また器形の全体が分かる丹波焼の出土は岡山県下では管見に触れないので、本資料が好例と言える。本遺跡から出土した備前焼は摺鉢が多く、壺や甕は皆無である。その意味でも丹波焼甕の出土は近世陶磁器のあり方、流通や消費を考える上でも興味深い事例と言える。

**時期** 円明寺の存続期間を示す考古資料として土壙4出土の丹波焼甕7があり、この製作時期は17世紀後葉から18世紀前半を示す。

このほか、石造物のうち最古の紀年銘を持つものは、前述したとおり「享保三戊戌年」(1718年)の円明寺一代住職の石造物であり、これは円明寺創建を示す可能性がある。また平面図(第137図)によると円明寺の焼失は1867年と記載されているほか、庫裏が天保5(1834)年の弘法大師没後千年物忌法会に合わせてその前年に造営されたのである。これらから円明寺の創



写真15 八幡山円明寺関連石造物群(南から)

**構築順序**

※ ④ ↓ ⑤ ⑥ ⑦ ⑧ ? ↓ ⑨ ↓ ③ ↓ ⑩ ↓ ② ↓ ① ↓ ⑪ ↓ ⑫

※ ⑤ ↓ ⑧、⑪ ⑫は配列から推定

**石造物群の銘文**

- ① 無縫塔(右) 弘化四丁未日生四月四日
- ② 無縫塔(正) 大阿闍梨法印永學不生位  
(裏) 文化十四年十一月十二日
- ③ 座像 (正) 寛政八辰歳宥賢上人 九月初十日寂
- ④ 石塔 (正) 享保三戊戌年當寺一代住海法印 十月二十六日  
(銘文あり、解読不可)
- ⑤ 無縫塔 (正) 元保八乙亥年 爲権大僧
- ⑥ 石塔 (正) □永四□亥 法印良恵 □□□七日
- ⑦ 石塔 (正) 阿闍梨思信不生位
- ⑧ 石塔 (正) 宝曆二壬年 □法 三月十四日
- ⑨ 五輪塔 (正) 文化三寅年 宥澄上人 四月□四日
- ⑩ 座像 (正) 無縫塔(正) 権大僧都宥海
- ⑪ 無縫塔(正) 降禮上人建之  
(左) 降禮上人□子 円福寺一代  
(裏) 降禮上人□子 円福寺一代  
(左) 宇恵深□
- ⑫ 無縫塔(正) 阿闍梨隆仙法印

※ 番号は南からの配置順、カッコ内は側面の方向(正||西)、□は解読不明の文字を表す。

第138図 五輪塔(1/8)



建は1718年以前、廃絶は1867年とされ、約150年存続したと考えられる。

**まとめ** 以上の調査成果、円明寺関連の絵図や平面図、石造物から、円明寺の実像に迫った。掘立柱建物や溝5は絵図や平面図の描写と合致する点が多く、これらは史料として信憑性が高いことが窺えた。また平面図史料の記述や石造物の銘文から、円明寺の創建は1718年以前で焼失したと伝えられる1867年まで続いたと推定される。本調査では焼失時期を特定できる考古資料は得られなかったが、土壌4や遺構面で被熱面や焼土が確認されたことで近世の遺構(円明寺関連遺構)が焼失によって廃絶したことは疑いない。今回は調査地が狭小であり、遺構や遺物ともに円明寺と直結する資料は少なかったが、円明寺関連史料を併せることで、円明寺の具体像の一端を垣間見ることができた。(米田)

#### 註

- (1) 作者の雅号は難波昌芳(本名:難波謙治)である。天保3年か4年(1833年)生まれで、両才があり、北条県(旧美作国)より吉野郡内58か村の地図作りを依頼され、その任にあたる。現存保管されている複数の絵図は明治2~35年に描かれたものであるとされる。明治4、5年から10数年までの絵図は抜けており、その間は地図作りに没頭していたものと思われる。以上の事項は明石務氏よりご教示いただいた。
- (2) 現在の円福寺は兵庫県佐用郡佐用町(旧上月町)に所在する。
- (3) 丹波焼の甕7については兵庫県立陶磁美術館の長谷川眞・松岡千寿の両氏に鑑定していただき、製作技術や時期について貴重なご教示を賜った。また次の文献を参照した。  
長谷川眞「甕類にみる近世丹波焼」『関西近世考古学研究』XII 関西近世考古学研究会 2004  
兵庫陶芸美術館『やきもののふるさと丹波』兵庫陶芸美術館開館記念特別展図録 2005

#### 参考文献

- ・大原町史編纂委員会『大原町史』地区誌編 大原町 2001

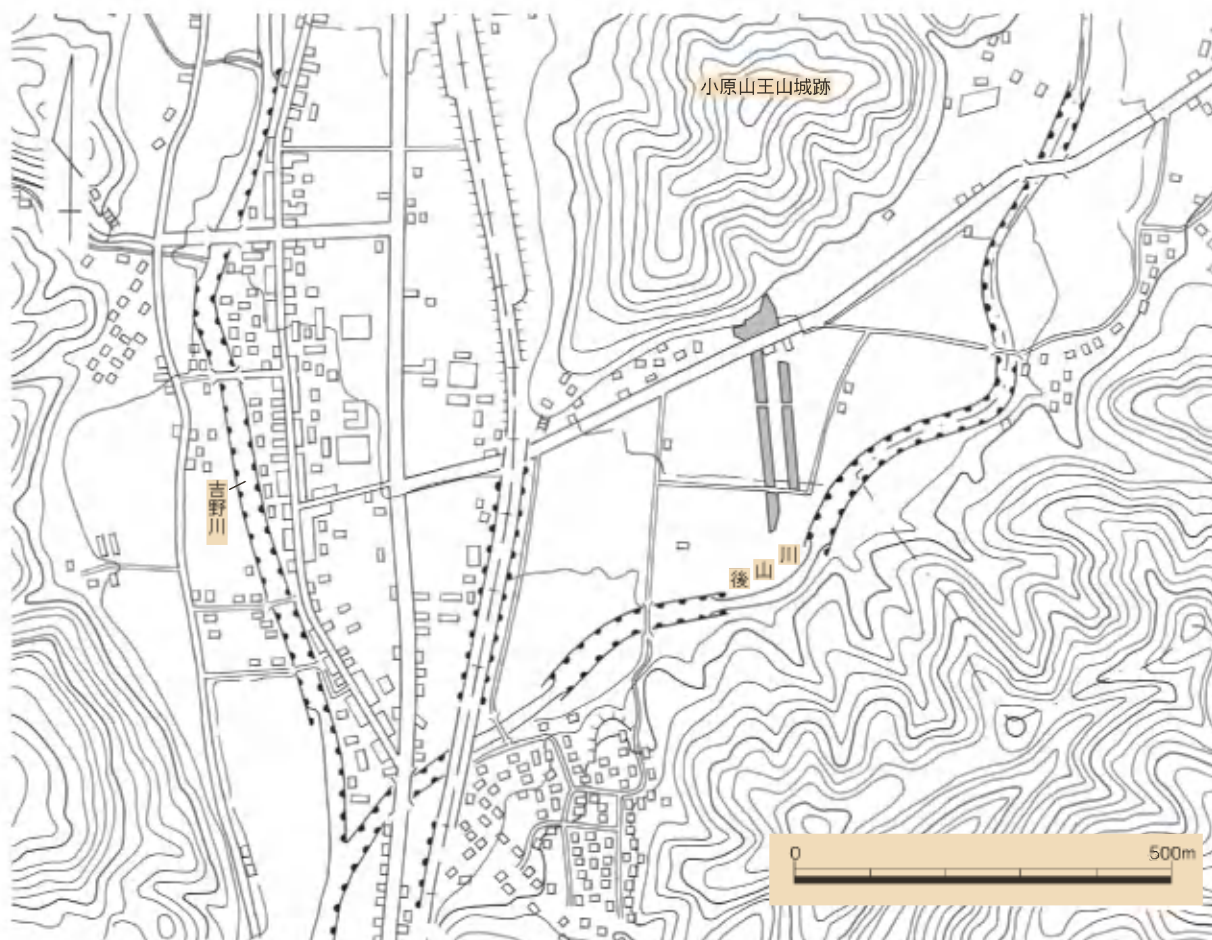
## 第6章 尾崎遺跡

### 第1節 調査の方法

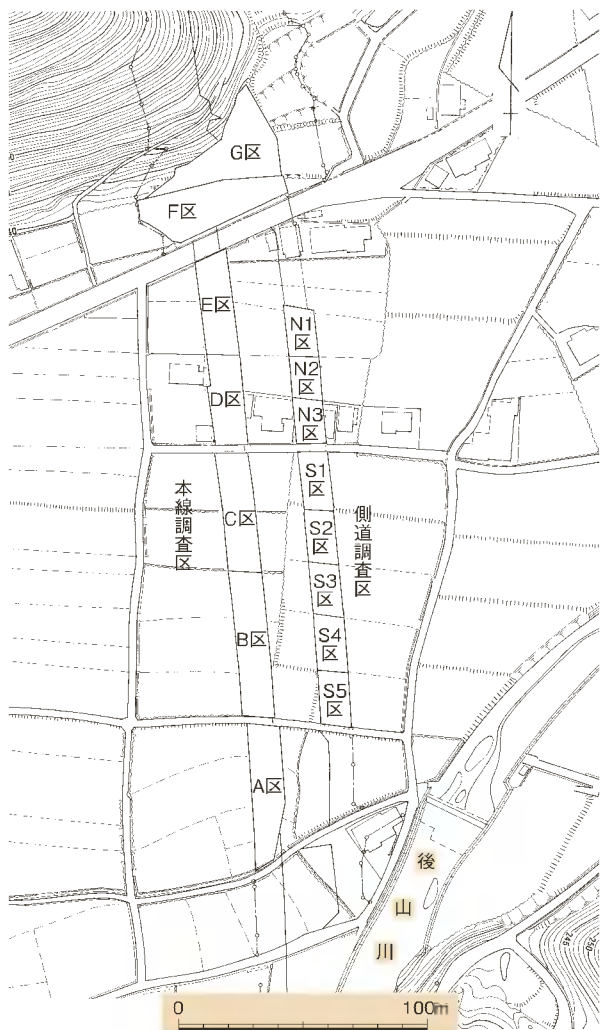
一次調査は、平成16年6・8月に実施している。トレンチは、各水田に1か所の割合で、合計18か所を設定して調査を行った。その調査結果と地形から遺跡の範囲を決めたが、後に本線調査区範囲の拡張を余儀なくされた。

側道調査区は平成17年5月から9月までに調査した。旧大原町道の南側から開始し、1区画ずつ南下して、100m南の町道までは上層（中世）遺構の調査が終了した（S1～5区）。その後、町道北調査区（N1～3区）に移動した。最後に南調査区下層遺構の調査をした。なお、N3区の北側は、工事移転家屋の生活道路のため、町道直下と現在使用中の用排水路直下についても調査はしていない。

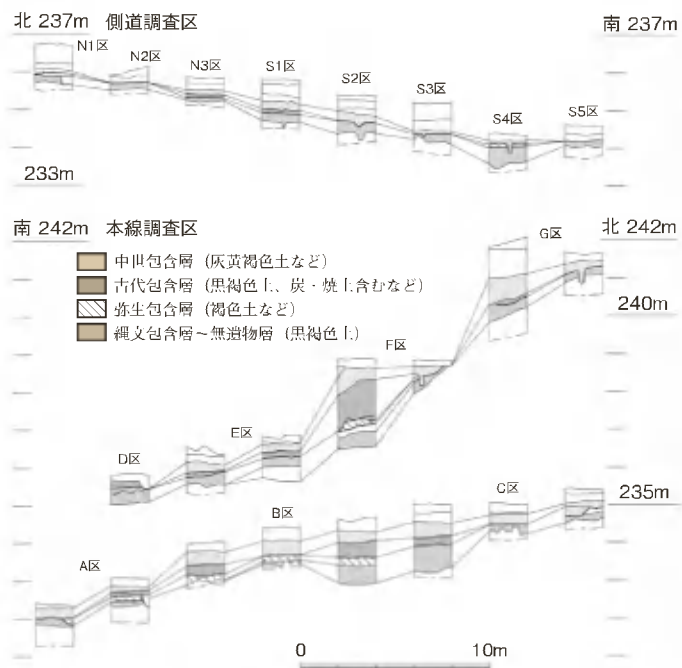
本線調査区（A～G区）は2車線部分と左岸排水路を含めた範囲で、平成18年度2班体制で調査した。この調査ではA区の調査中に確認調査の結果とは異なる遺構の広がりが発見されたため、急遽西日本高速道路株式会社および県教委文化財課と協議し、約400mの調査区拡張を行っている。（浅倉）



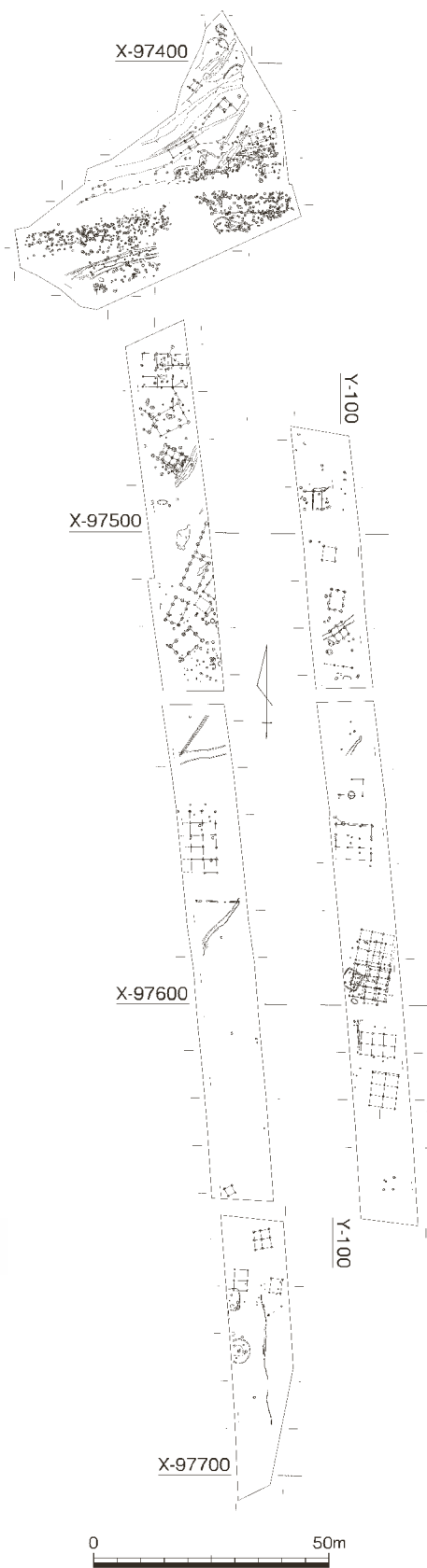
第139図 調査地位置図 (1/10,000)



第140図 調査区配置図 (1/3,000)



第141図 土層柱状図 (縦1/200・横1/400)



第142図 遺構全体図 (1/1,500)

## 第2節 縄文時代の遺物

### 1 概要

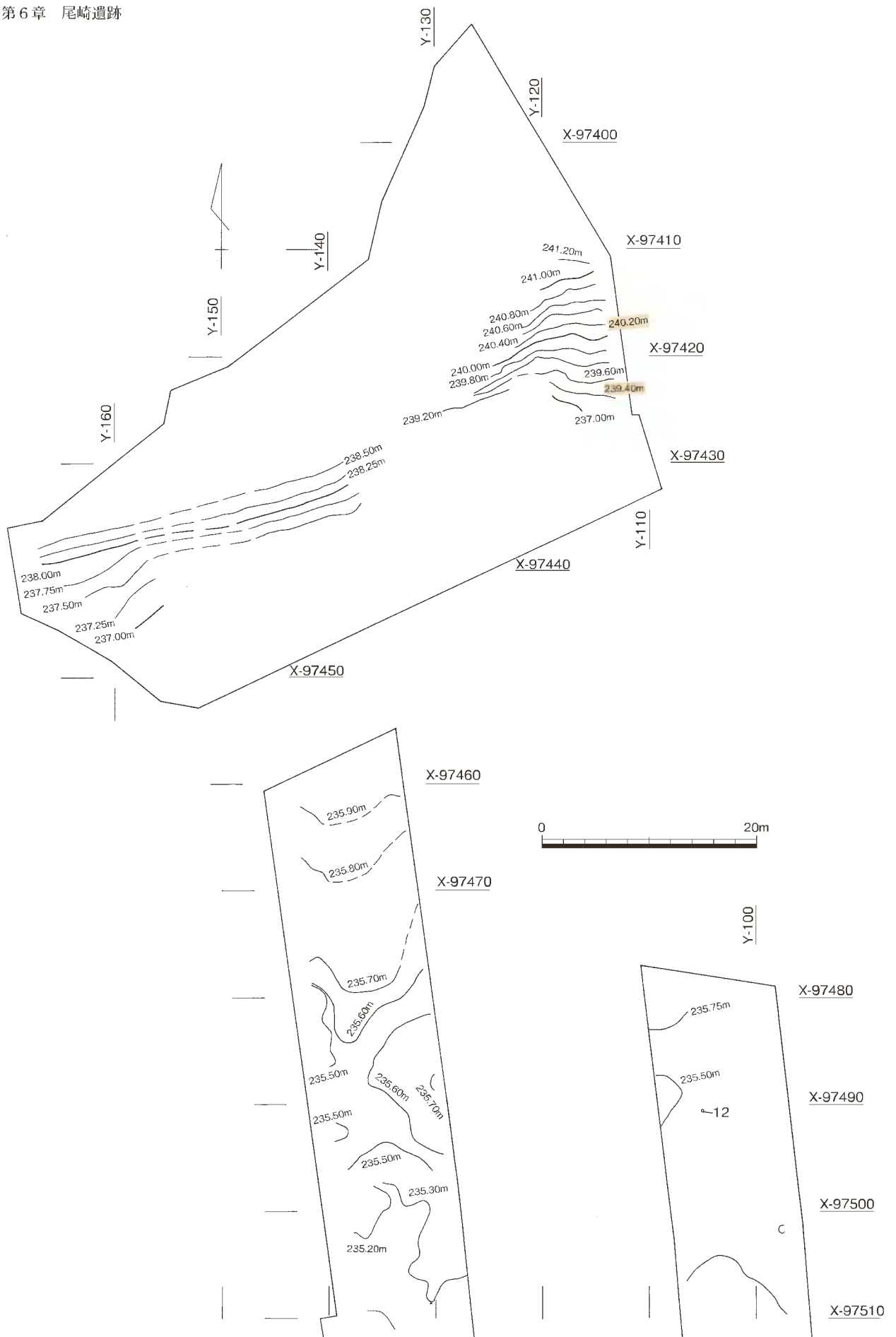
尾崎遺跡では人々の生活痕跡が縄文時代から明瞭となる。竪穴住居のような人為的な掘削痕跡は見つからなかったが、縄文時代の遺物包含層が一部に形成され、また、後の時代の遺物包含層からも縄文時代の遺物が相伴してかなり出土している。おもに、地山直上の黒色土からの出土が多い。

縄文時代の地形は基本的には現在と変わらず、北に山王山の丘陵、南には後山川が流れ、北から南へなだらかに傾斜する地形をなしていたと考える。しかし、第143～145図に示したように、流水路とみられる窪地が所々にみられ、小さな凹凸はあったようである。とくに、側道調査区のS1区から本線調査区のC区にかけての地区と側道調査区のS5区から本線調査区のA区北部分にかけての地区は高まりをみせている。この2か所の高まりの頂部から水路側への傾斜面にかかる部分で縄文時代の遺物の多くが出土している。前者の地区では、地山の黄色粘質土の上面で木根痕とみられる穴が多数存在し、埋土の黒色粘質土からは縄文土器片が点々と出土した。第146図1・2・18～34、第147図45・46・49・52・54～57・62が前者出土で、後期中葉の彦崎KⅡ式土器が大半を占める。後者からは第147図58・69・70・76・77が出土し、58以外は晚期中葉から後葉の土器である。

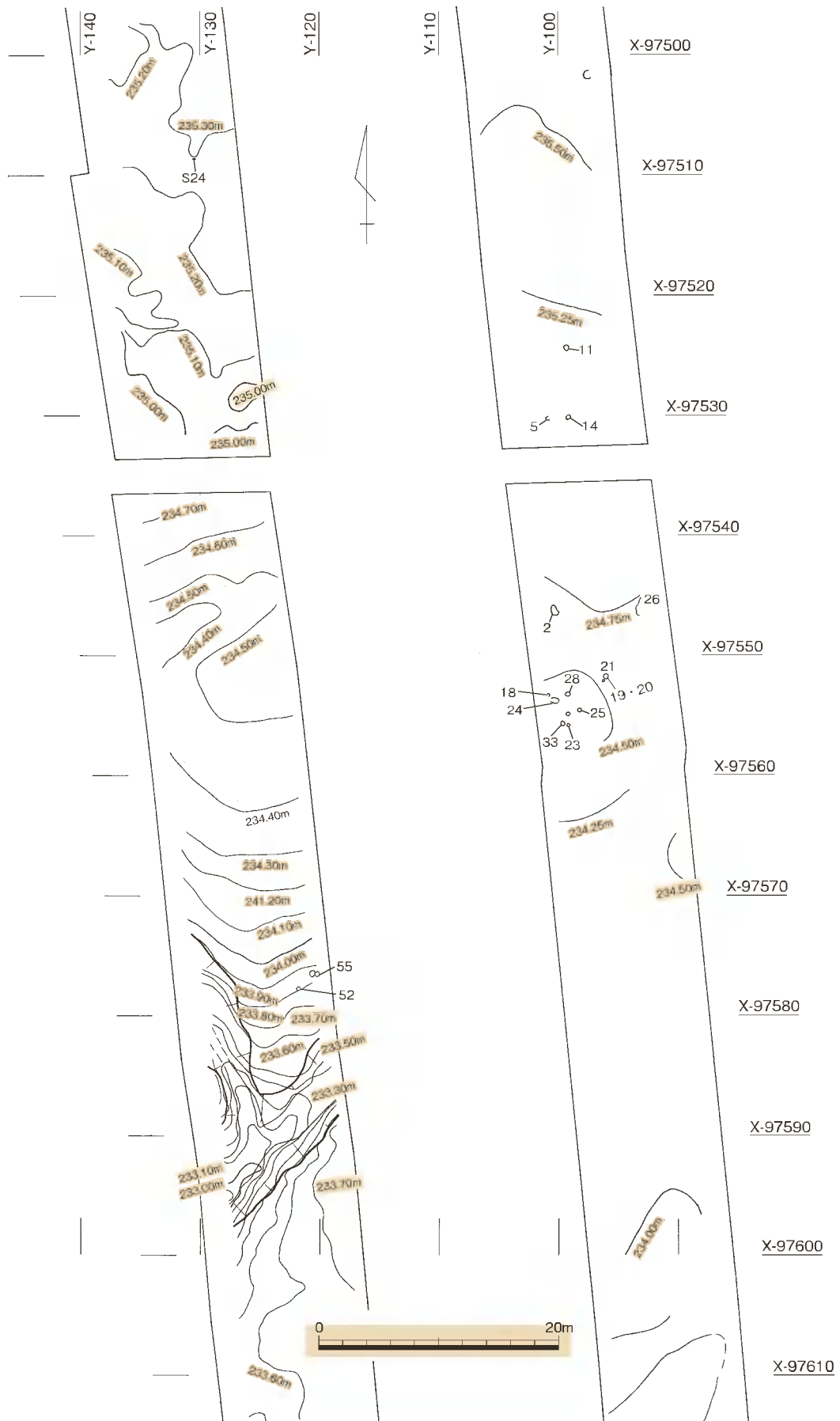
2地区以外にも縄文土器の出土はあったが、かなり散在するような状況だった。地形的には山王山の丘陵下端斜面と丘陵裾平坦面に分かれる。前者は本線調査区のF・G区で、後者は側道調査区のN1～3区と本線調査区のD・E区にあたる。前者のG区では晩期の包含層が確認され、第147図72などの土器片が出土した。前者ではほかに第147図65・73～75が出土し、時期は後期後葉から晚期中葉にかかる。後者の地区から出土した土器は第146図4・5・7～12・14～17・35～39と第147図40～44・50・51・59～61・63・66～68・71で、前期から晩期までの各時期のものが含まれている。点数からすれば後期のものが多いが、中葉のものと後葉のものを含む。草創期の第150図S24の「神子柴型」石斧が後者の地区から出土したが、前者のF区からも同期の「神子柴系」石斧が2点出土した。

このように、尾崎遺跡の全域から縄文時代の遺物が出土しているが、年代別の分布状況をみると一様ではなく、人々の活動に変化のあったことが考えられる。草創期から前期までの遺物の出土は少なく、しかも、各時期の前葉から後葉までの全期間のものが出土しているのではない。このことは、前期までの尾崎遺跡における人々の活動が短時間のものであったことを示していると考えられる。

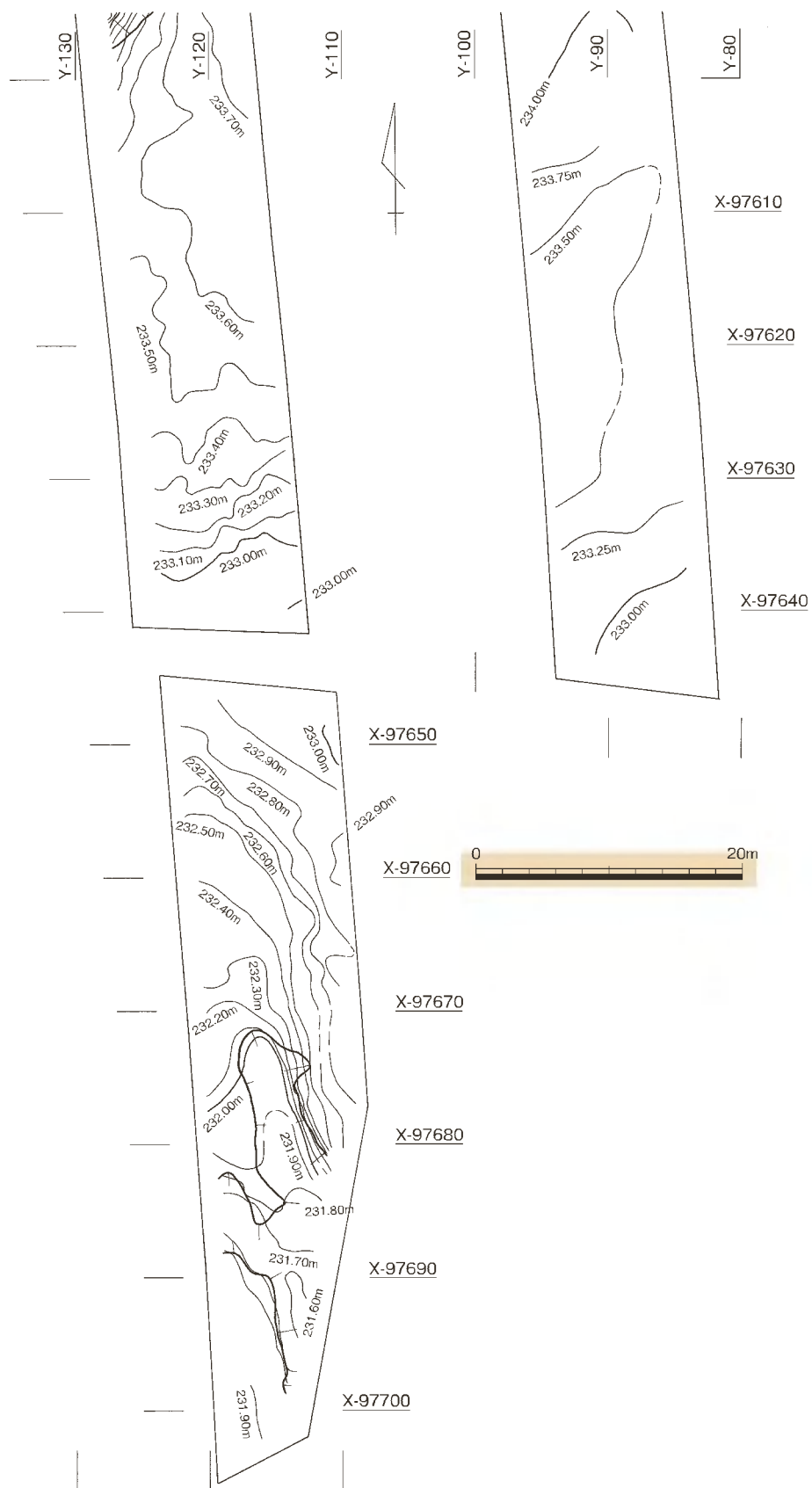
後期前葉まではこの状況が続いたものとみられるが、中葉になると大きく変化する。後期中葉の土器は山王山の丘陵下端斜面を除く全域から出土し、側道調査区のS1区から本線部分のC区にかけての地区に集中するようになる。住居や炉跡は見つからなかったが、器種の多様性や大形土器片の出土などから、定住集落が形成されたものと推測される。後期後葉の土器片は減少するが、晩期になると土器の出土量はふたたび増加し、集落が継続していたか、あるいは再建されたとみられる。ただ、後期中葉の集落中心部と考えられる地区からは晩期の土器片はほとんど出土せず、山王山の丘陵下端斜面から裾平坦面にかけての地区と本線部分のA区の2地区に分かれて出土がみられる。出土量や同期包含層の形成から、丘陵裾部に集落の中心があったものと判断されるが、後山川に近接するA区については、晩期後葉の突帯文土器の出土などから初期水田農耕との関係も看過できない。(岡本寛)



第143図 地形測量図・遺物出土位置図① (1/500)



第144図 地形測量図・遺物出土位置図② (1/500)



第145図 地形測量図 (1/500)

## 2 遺構に伴わない遺物 (第146～151図)

第146図、図版34は東側の側道部分の調査区から出土した縄文土器である。

1は外面に3列、「C」字形の爪形文を近接して刺突している。内面はナデによって調整される。前期中葉、磯の森式の深鉢と考える。2は深鉢の底部とみられる。やや丸みをもった平底のようであるが、時期は不明である。後期後葉の底部とは考えにくい。

3～17は、S1区以外から出土したり、出土地点不明の土器である。残存部位からは時期を判断することが困難なものも多いが、おおむね後期中葉、彦崎KⅡ式のものとして推測している。

3～6は有文の深鉢である。3・4は口縁部が屈折気味で、外面に磨消縄文を飾る。上端の文様帯には縄文が明瞭である。4は波状口縁の可能性もある。5は内湾した口縁部の外面に、円文を置き、さらにそれを沈線で縁取っている。外面の下半には縄文が認められ、磨消縄文かと思われる。6の外面にはきわめて不明瞭ながら縄文が施されているようで、そこに裏「J」字文が刻まれている。

7～9は口縁部が外反する深鉢で、外面は無文である。7・8は波状口縁をなすようで、内面はミガキが施されている。9の内面口縁部下端には沈線が引かれ、線端には刺突がなされている。

10～14は深鉢の頸部下端から胴部にかけての破片である。10・11には沈線による界線が引かれる。11以外は単節縄文を施すが、11は二枚貝による条痕調整の後に沈線を施し、時期は不明である。

15・16は浅鉢の口縁部と考える。ともに内面はヘラミガキされる。15は外面に縄文帯を施し、そこに3条の沈線を巡らせる。16は外面に磨消縄文を飾り、口縁端面にも縄文を施す。

17は頸部を無文とする鉢であろう。頸部下端に浅い沈線を巡らせ、胴部には縄文を施す。

18～34はS1区から出土したものである。文様をみると、結節縄文や沈線内刺突文など共通するものが見られ、型的な一括性が認められそうである。後期中葉、彦崎KⅡ式の新相段階のものと考えたい。18の深鉢はその典型である。大きく外反した頸部から内湾する口縁部に続き、口縁部は波状を呈する。口縁部文様帯は、上端と下端にそれぞれ2条の沈線を巡らせ、その間を縄文で埋める。上端の下と下端の上の沈線内には刺突を連続して施している。上端の下の沈線は波頂部で途切れるようで、波頂下にはなにか文様の飾られた可能性がある。下端の下の沈線もわずかに途切れるようで、その部分の線端には刺突がみられる。頸部と胴部の境にも沈線が巡らせられ、やはりヘラ先による刺突が連続して施されている。胴部外面には結節縄文を飾る。頸部の内外面は巻貝による条痕調整である。

19～25も有文深鉢で、外反する頸部と内湾する口縁部をもつ。19～21は同一個体の可能性が高い。口縁部には縄文地に結節縄文を上端に飾る。胴部はやはり縄文地で、上端に結節縄文を認める。頸部外面と内面はミガキ調整である。22は波状口縁をなすようで、外面の口縁上端は縄文、沈線から下は無文である。23は口縁部から頸部にかけての破片で、口縁部下端に沈線を巡らせ、頸部外面は巻貝条痕を認める。18と類似する器形か。24は波状口縁で、波頂部には円形刺突文を入れた円形浮文のような飾りを置く。内外面ミガキ調整である。25とともに元住吉山Ⅰ式に類似するか。

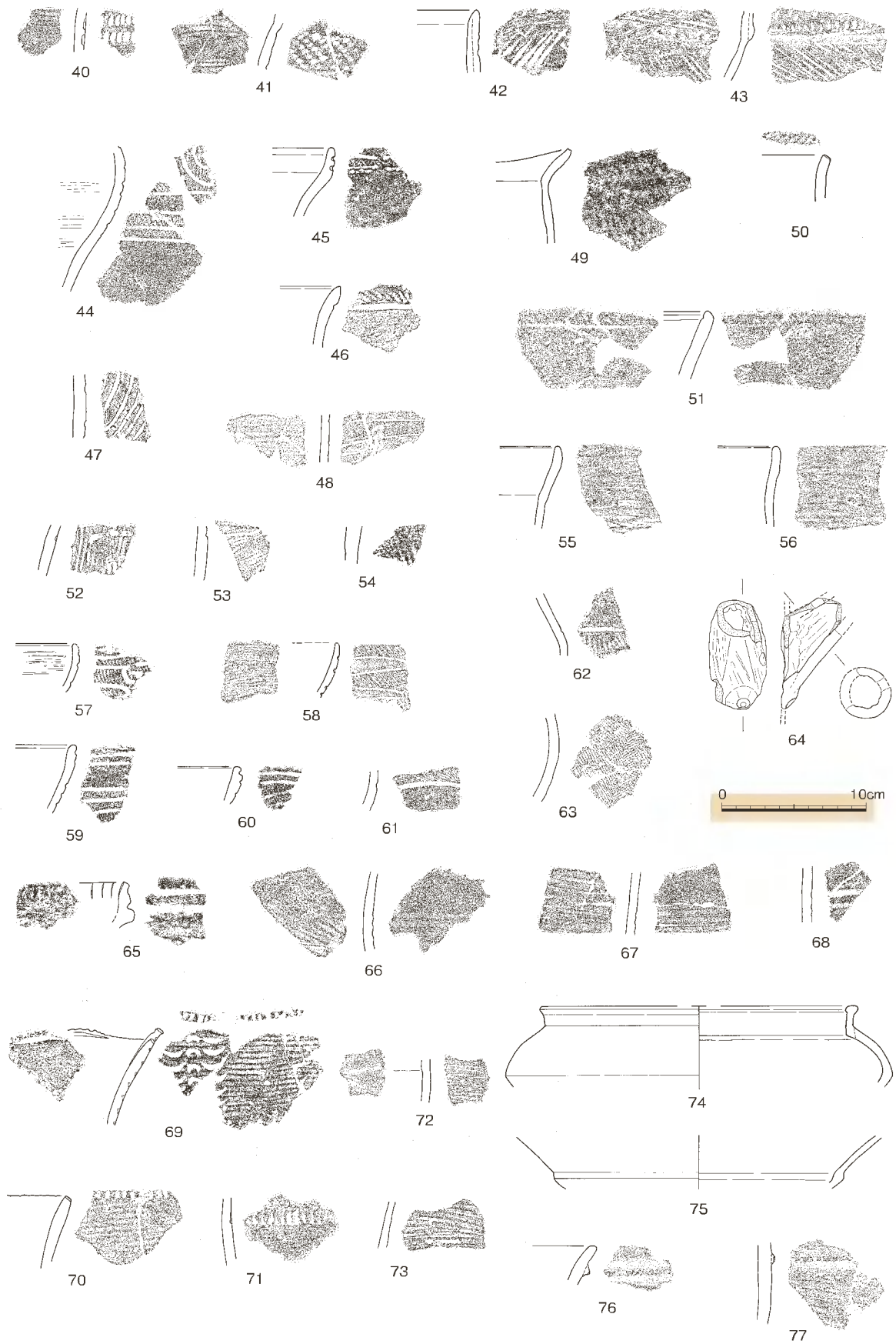
26～28は無文の深鉢である。26は内外面ミガキ調整で、外面に煤が付着している。27・28は外面に巻貝条痕を残し、内面はナデ調整である。

29～33は有文浅鉢とみられる。口縁部は内湾するが、31・32は先端が外反気味になる。29・30は横走る沈線を主体にした磨消縄文を飾る。31は口縁部に結節縄文を巡らせ、体部には単節縄文を施す。32は結節縄文を地文とし、沈線で文様を描く。沈線の端には刺突がなされている。





第146図 遺構に伴わない遺物（側道調査区）（1/4）



第147図 遺構に伴わない遺物（本線調査区）（1/4）

34は注口土器である。注口部は胴体の穿孔周縁に突帯を作り、筒状の口部を貼り付けている。

35～39は晩期の深鉢とみられる。35は口縁端面に工具による刻目が施されている。外面は同じ工具によるナデ調整がなされ、晩期中葉の谷尻式のものと考えられる。36の外面も工具ナデだが、内面は丁寧ミガキがかけられ、浅鉢の可能性もある。37～39の外面は二枚貝条痕が外面にみられる。

第147図、図版35の縄文土器は西側の本線調査区から出土したものである。

40・41は外面に刺突文、内面には条痕が認められる。いずれも前期前葉の羽島下層式の深鉢と考える。40は小さな爪形文を横方向に連続させ、41は斜め方向に押し引き状に刺突がなされている。41の下端には沈線が引かれているようで、羽島下層式のものとしては異質である。

42は口縁部外面に右上がりの押し引き沈線を数条並べ、その隣に鋸歯状になるように右下がりの押し引き沈線を並べていたようである。43は口縁部下端に貝殻刺突文を横に連続させ、その上方にも貝殻刺突文を斜行させるようである。ともに口縁部を粘土帯の貼り付けによって肥厚させている。43の内外面には二枚貝による条痕が顕著である。前期初頭の西川津式A類の深鉢と考える。

44～56は後期中葉の深鉢で、49～51・55・56は無文とみられる。44は口縁部外面に広い文様帯がある。波頂部の破片とみられ、渦文と横走る縄文帯が飾られる。45は狭い口縁部に結節縄文を地文として沈線文が施される。沈線内には刺突文を連続させる。46は頸部を無文とし、口縁部と胴部に縄文を施す深鉢であろう。47の外面には細かい条痕地に垂下する沈線が数条描かれる。48の外面には無文帯を挟み、細かい縄文の文様帯が走る。内面は条痕のようである。49の外面は工具ナデのようだが、煤が多く付着する。50の口縁端部には刻目がある。51の口縁部内面には沈線が1条引かれる。52～54は縄文地で、52には刺突、53には沈線がみられる。55・56の外面は巻貝条痕のようで、内面はナデである。47は彦崎K I式に属するかもしれないが、それ以外は彦崎K II式の新相と判断される。

57～61は浅鉢で、彦崎K II式に属するものであろう。57は裏「J」字文を描くようにみえるが、一筆ではなく、渦文の可能性もある。58の内面は巻貝条痕である。59は沈線のみで縄文は施さない。60は波状口縁の可能性もある。沈線端に刺突がみられる。無文帯と縄文帯を交互に配する。

62・63は鉢であろう。62は頸部下端に沈線を巡らせ、体部には単節縄文を施す。63は縄文の施文方向を変化させ、羽状縄文を表現している。ともに内面はミガキ調整である。

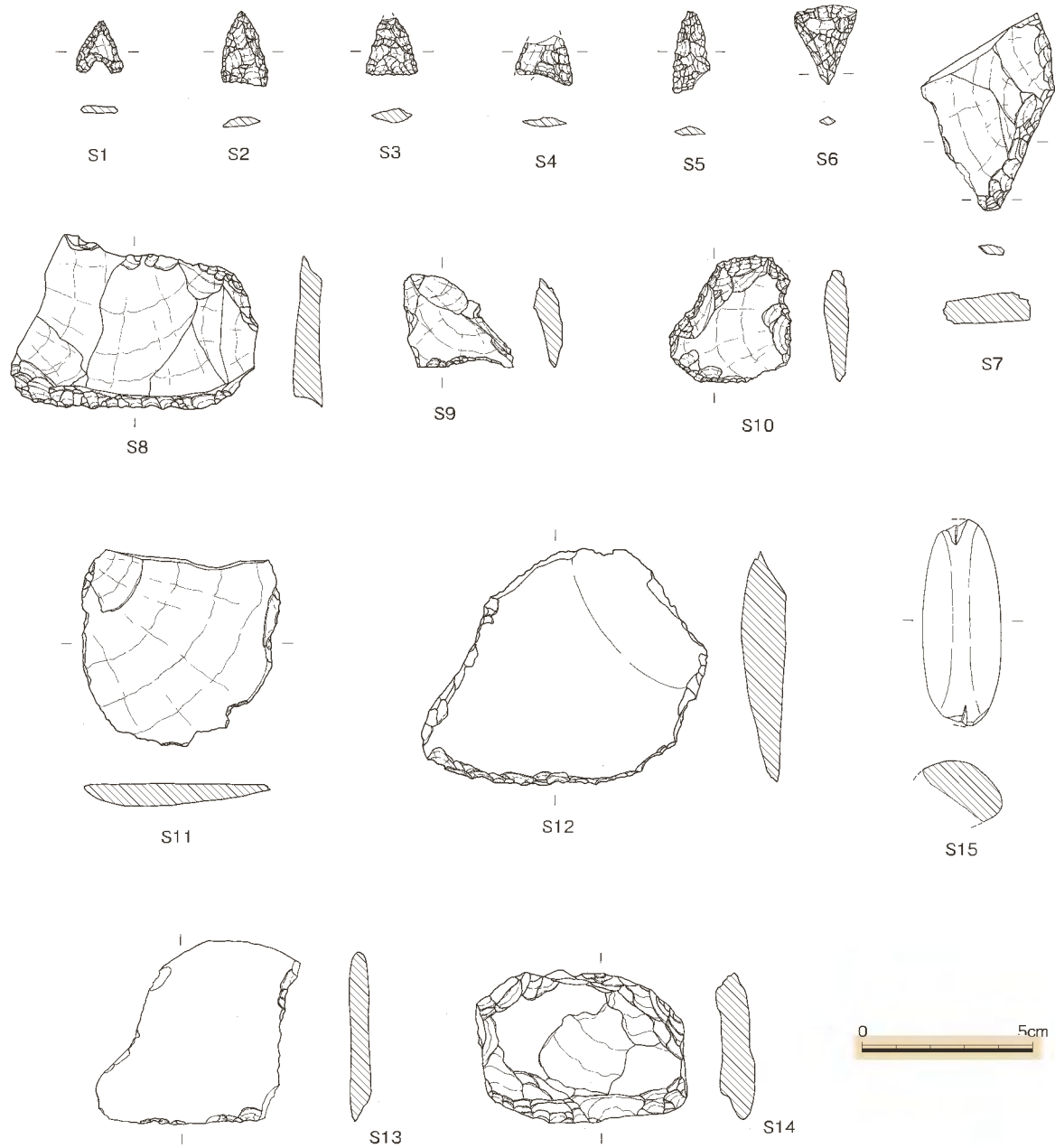
64は注口土器の注口部である。注口部の下端、胴部との接合部に山形の突起があり、中央を窪ませている。注口の先端は細くなるようである。鉢とともに彦崎K II式に属するか。

65～68は後期後葉の福田K III式に属する深鉢とみられる。65は口縁部で、外面には太い2条の凹線が巡る。内面の口縁端部には刻目を施すようである。66～68は胴部の破片で、巻貝によるとみられる浅い凹線が3～4条引かれる。66・67の内面には条痕が認められる。

69～77は晩期の土器で、69～75は中葉の谷尻式、76・77は後葉の沢田式に属すると考える。

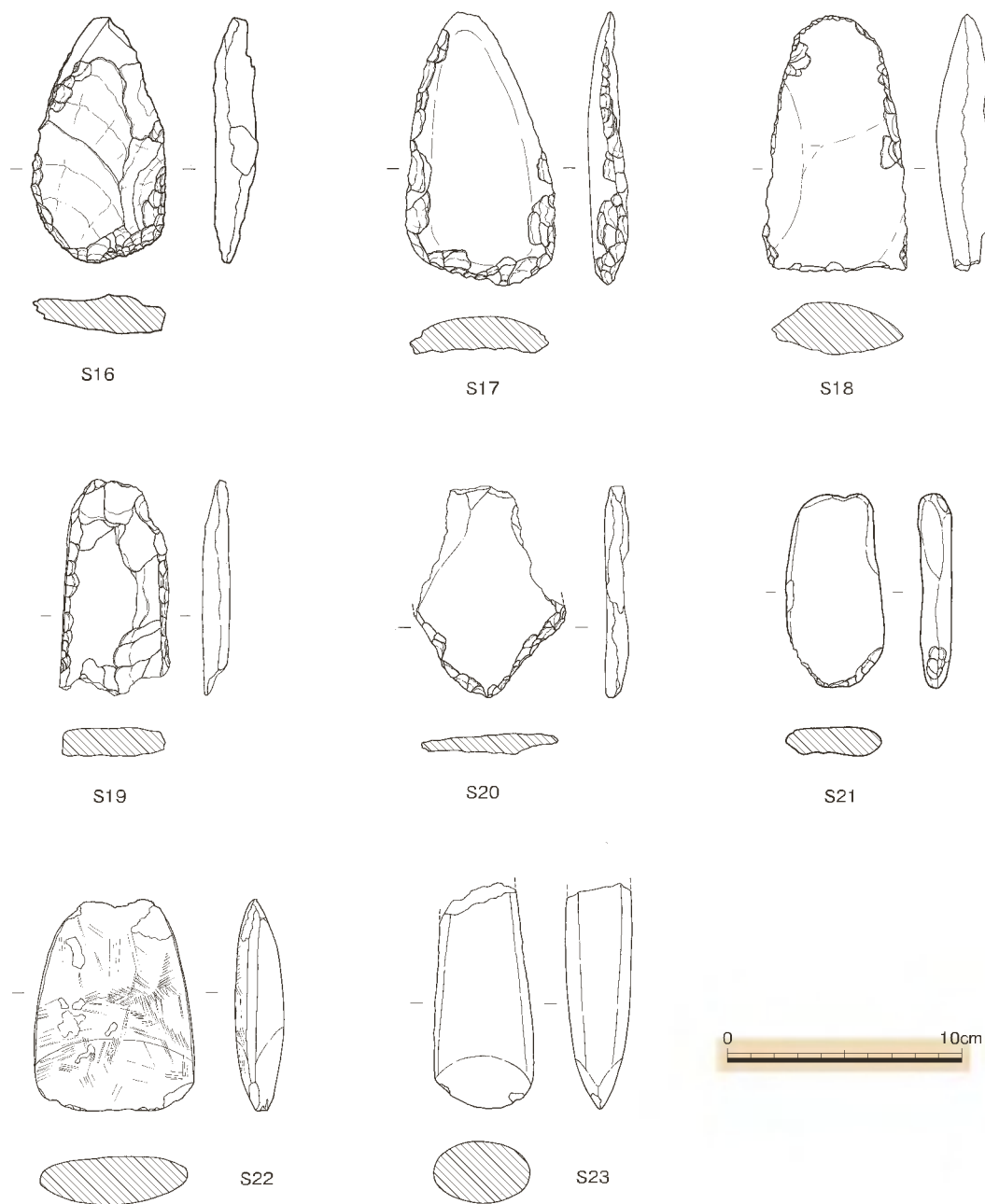
69～73は深鉢である。69は波状口縁の波頂部にあたり、連続させた爪形刺突文が3列垂下する。口縁端面には刻目を施し、波頂部の内面には短沈線を入れる。外面は二枚貝条痕、内面はナデである。71は頸部下端に爪形の刺突文を連続して巡らせ、胴部外面はヘラケズリしている。70～73の外面も条痕で、70の口縁端面には刻目が施される。74・75は浅鉢である。74は体部上半を内湾させ、口縁部を垂直に立ち上げて端部を肥厚させる。器面はミガキ調整である。75は口縁部が大きく外反する。

76・77は深鉢で、同一個体の可能性がある。76では口縁端部の少し下、77では胴部の上端に刻目を施した断面三角形の突帯を貼り付けている。二重突帯深鉢であろう。(岡本寛)



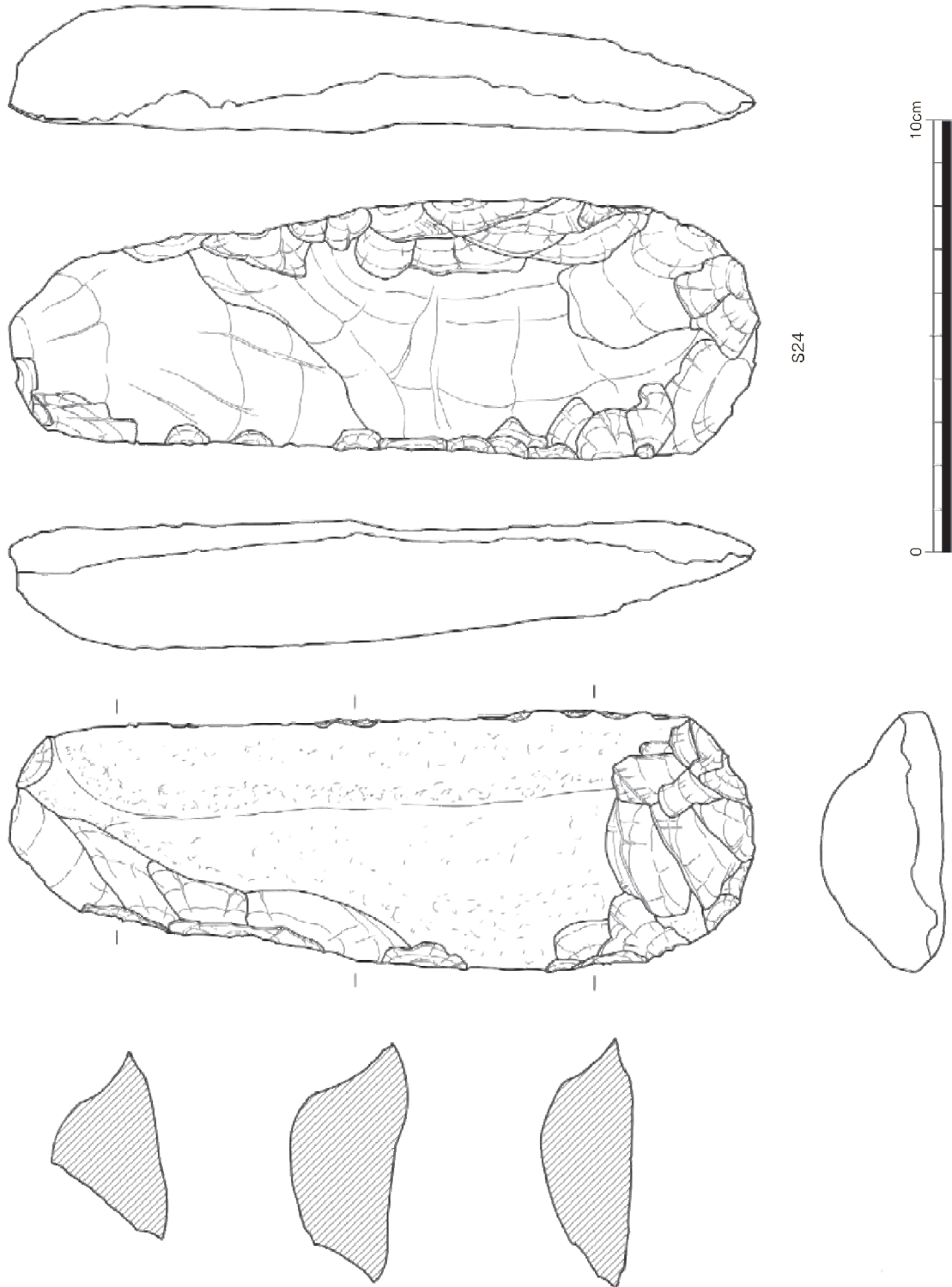
第148図 遺構に伴わない遺物① (1/2)

S1～5はサヌカイト製の石鏃である。S1は基部に深い抉りを持ち、中央部に素材剥離面が残存している。S2・3・5は平基式の範疇に入るもので、平面形態は二等辺三角形を呈する。S6も形態は石鏃と考えられたが、基部の厚さおよび先端部の側縁等が若干摩滅していることから石錐と判断した。S8～14まではスクレイパー類である。サヌカイト製はS8～10であり、S8の裏面には使用による摩滅が認められる。また、裏面には原礫面が一部残存している。S11～14はいわゆる在地石材を素材とし、素材剥片の縁辺に調整加工を施している。いずれも原礫面が残存しており、特にS12・13は表面が礫面で覆われている。S15は平面形態長楕円形の礫の長軸両端に切目を施した流紋岩製の切目石錘である。短軸には切目を施していないものの、擦痕らしき痕跡が認められる。S16～21は打製石斧（石鏃）である。いずれも在地石材から製作されている。平面形態は、撥形を呈するもの（S

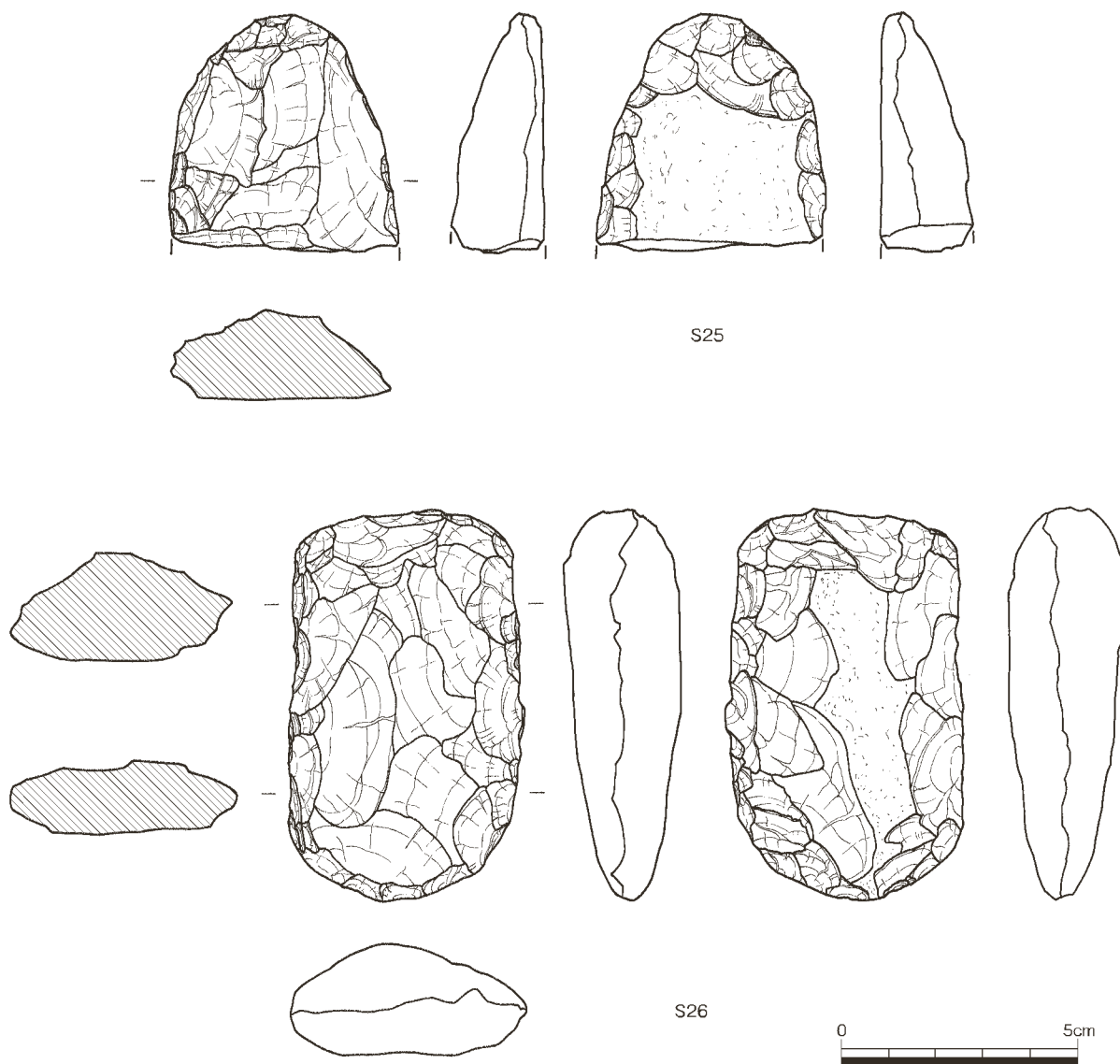


第149図 遺構に伴わない遺物② (1/3)

16・17) と短冊形を呈するもの (S18・19・21) の二者が認められる。S16は基部および右側中央部に原礫面を残しているもので、横長剝片を素材としている。S17は両側縁に調整を若干施したのみであり、表面には礫面が、裏面には主要剥離面が広く残存している。S18は刃部が欠損しているものの、基部の表裏面に摩滅痕跡が認められ、着柄の状況を考える上で示唆的である。表面は礫面で覆われているが、裏面には入念な調整が施されている。S20は刃部が剣先形を呈している。S22・23は磨製石斧である。特にS22は器体全面に入念な研磨が施されている。S23は刃部には入念に研磨が施されているものの、胴部には敲打痕が若干残存している。S24は玄武岩製の打製石斧である。D区の古代包含層中から単独で出土した。表裏両面とも研磨痕は認められない。平面形は刃部に向けてやや広がり、横断面形は基部側がいびつな三角形、器体中央から刃部にかけては扁平な「D」字状を呈する。



第150図 遺構に伴わない遺物③ (2/3)



第151図 遺構に伴わない遺物④ (2/3)

素材剥片は、垂角礫ないしは垂円礫の稜線を取りこむように剥離された縦長剥片であり、表面には広く原礫面が残存している。表面の調整は、左側縁上半部に粗く施されている。裏面は、右側縁から厚さを減ずるためと思われる調整を一度施したのち、両側縁からやや細かい調整を行っている。刃部の剥離は、使用によるものなのか判然としなかった。S25・26は安山岩製の打製石斧である。両者ともF区中央のいわゆる「黒ボク」と想定している、地山直上の黒褐色土から出土している。S25は、石斧の基部で、裏面には平坦な原礫面が広く残存する。断面形は「D」字状をなす。表面は両側縁から調整が施されており、特に右側縁は大きな剥離面が認められる。裏面は両側縁から細かい剥離が施されている。S26は表裏両面に調整が施されているが、裏面の中央部には原礫面が残存している。平面形は両側縁が平行した形態であり、横断面形は基部側が扁平な「D」字状、刃部側が扁平なレンズ状を呈する。側面観は楔形を呈し、両側縁の稜線が中心を走っている。さて、S25・26は接合しないものの、本来は同一個体であったと考えられ、何らかの理由で割れたのち、大きく残った刃部側を新たに成形し直し、S26の石斧を製作したものであろう。(小嶋)

## 第3節 弥生時代の遺構・遺物

### 1. 概要

弥生時代の遺構としては、竪穴住居3軒、土壇1基、溝2条、下がり2か所を検出した。遺構は南北に長い調査区内に散在的に検出しており、明確なまとまりは確認できず、集落の実態は捉えられなかった。遺構の時期は中期中葉、後期前葉に大別できる。ただ、包含層出土遺物には中期後葉の土器も多い。

中期中葉の遺構は、北端近くの本線調査区F区で土壇1を、中央付近の側道調査区S3区で竪穴住居2を、南端の本線調査区A区で竪穴住居3をそれぞれ検出した。また、溝1・2も中期の範疇に入る。下がり1からも中期の土器が出土している。これら遺構の相互関係は追求できず、また南北に細長いという調査区の制約もあって、集落全体の形態は不明である。

2軒検出した中期の竪穴住居は、それぞれ構造が異なっていた。竪穴住居2は平面形が方形で、中央穴とそれを挟むような支柱穴、そしてコーナー付近で検出した4個1組の柱穴から構成される構造であった。内部には壁体溝が巡る。竪穴住居3は平面形円形で中央穴と5個の柱穴から構成されると考える。内部には壁体溝が全周しており、そこに重なるよう、もしくは沿うような状況で杭が打ち込まれていた。また、中央穴の周囲は硬く締まるという特徴も示す。

土壇1は底部が平坦であることから住居の可能性も考えたが、規模が小さいことと柱穴などの住居内施設がまったく認められなかったことから、土壇として扱った。

後期前葉の遺構としては竪穴住居1と下がり1・2を検出した。竪穴住居1是最北端の調査区であるG区で検出している。G区は斜面地形であり、古代、中世に掘立柱建物などを建てるため、また現代の耕作地造成のために著しく削平を受けていた。そのため、竪穴住居1は、大半が消失した状態で検出することとなった。竪穴住居1では3点の石器が出土しているが、それ以外にもサヌカイトのチップが出土しており、石器製作を行っていたことが判明した。

遺物としては弥生土器のほかに石器（石鏃、石錐、スクレイパー、磨製石包丁など）、土製品（紡錘車）が出土した。また、F区では破鏡M1が出土している。鑄上がりは非常に良好で、破断面は研磨していた。鏡の復元直径は8.5cm程度である。 (上柩)

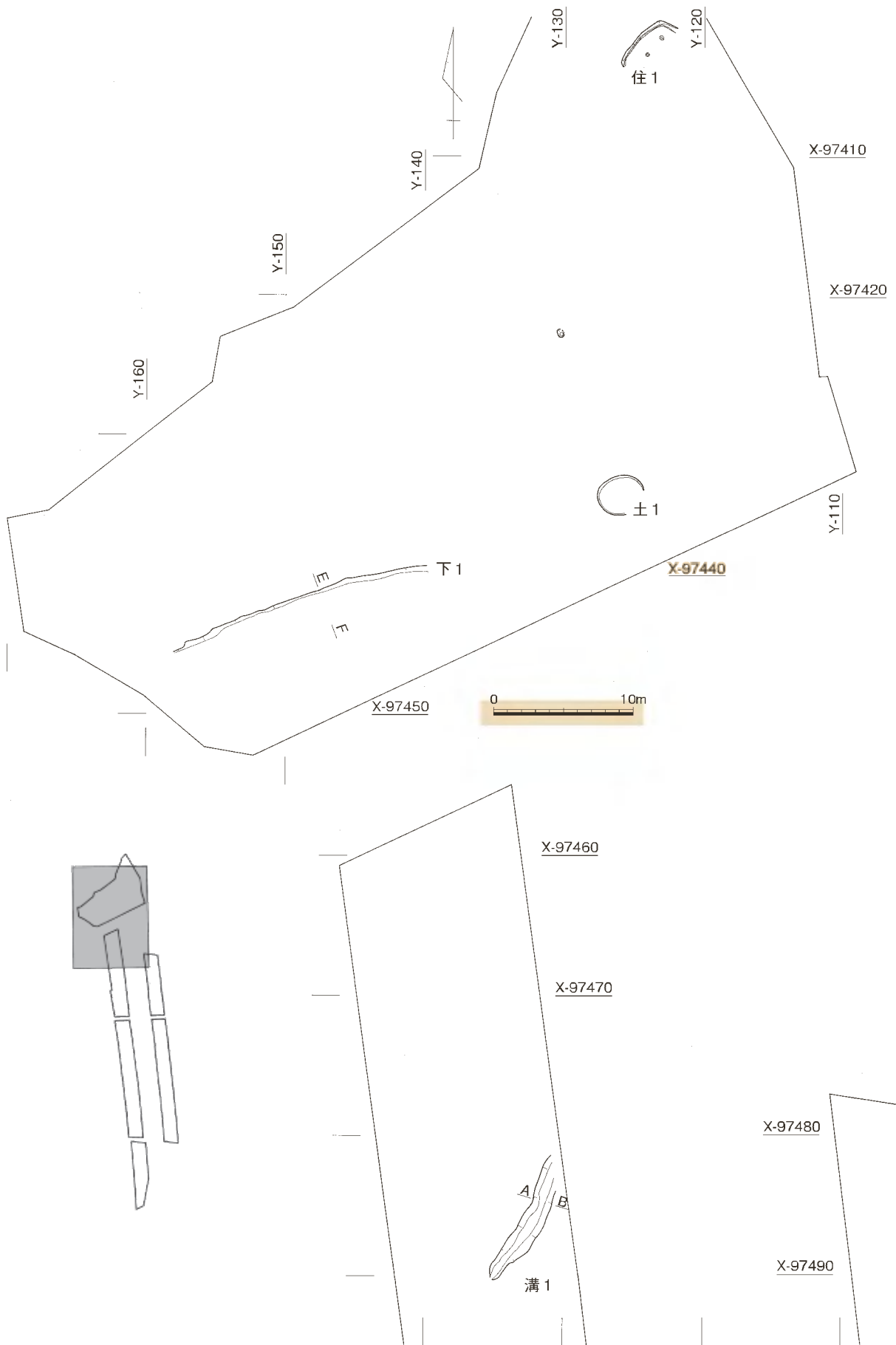


写真16 竪穴住居2調査風景（南西から）

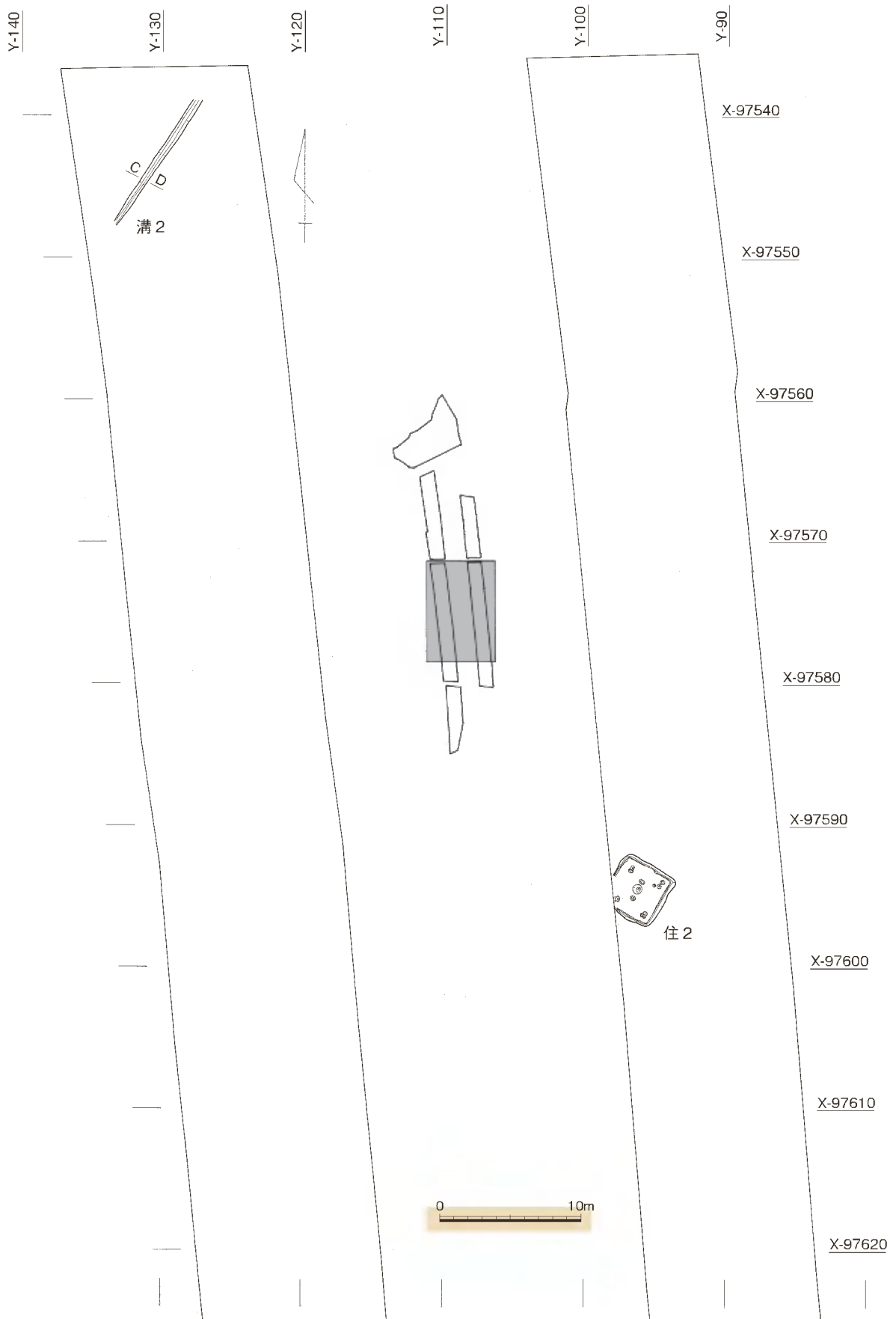


写真17 土壇1調査風景（北から）

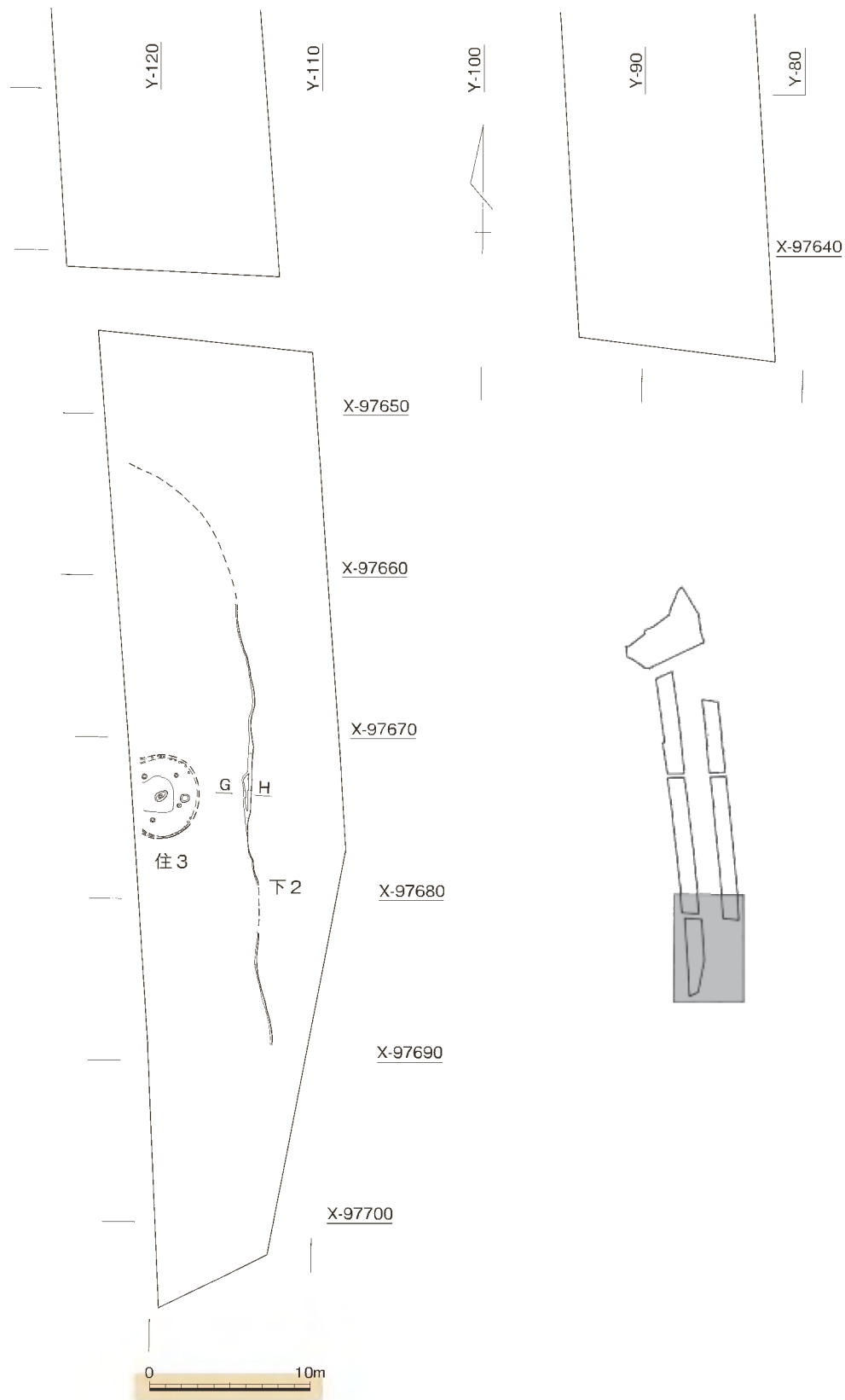




第152図 弥生時代主要遺構部分配置図① (1/400)



第153図 弥生時代主要遺構部分配置図② (1/400)



第154図 弥生時代主要遺構部分配置図③ (1/400)

## 2. 竪穴住居

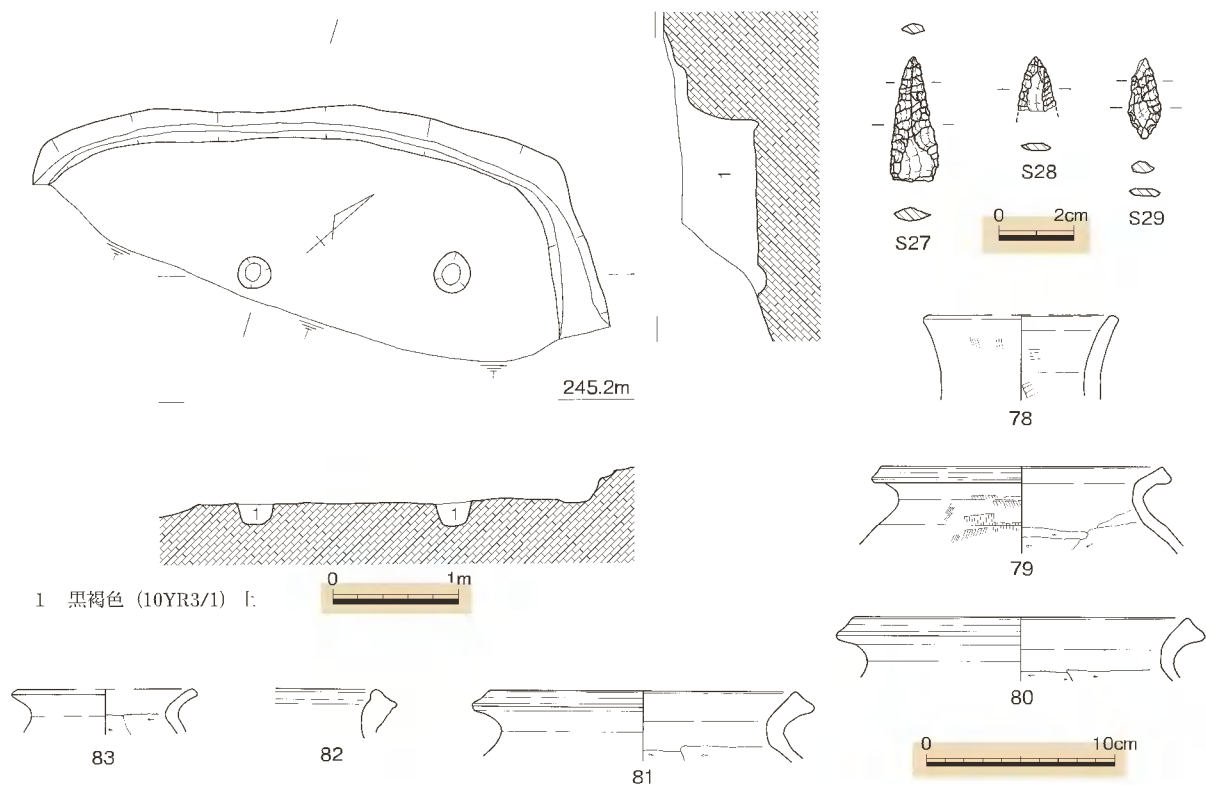
### 竪穴住居 1 (第152・155図、図版27-1)

G区北端に位置する。斜面に立地するため、住居の下側は流失している。上方北東側は、近世以降の開墾で削られている。土層は分層できなかった。土色と土質は古代の包含層に似ている。また、明瞭な貼り床は認められなかった。この住居の掘り方の上方には、平坦な加工面が存在する可能性がある。住居の北西部側で加工面と思われる傾斜の緩い部分が帯状に存在し、断面図でも表現できている。土器は中層部で集中した出土を見た。78が直口壺、79~83は甕である。掘り方底面付近からはサヌカイト製のチップと剥片、S27~29の石鏃が出土した。S27は住居東側、S28は西側出土である。土器から、この住居は弥生時代後期前葉に埋没したといえよう。(氏平)

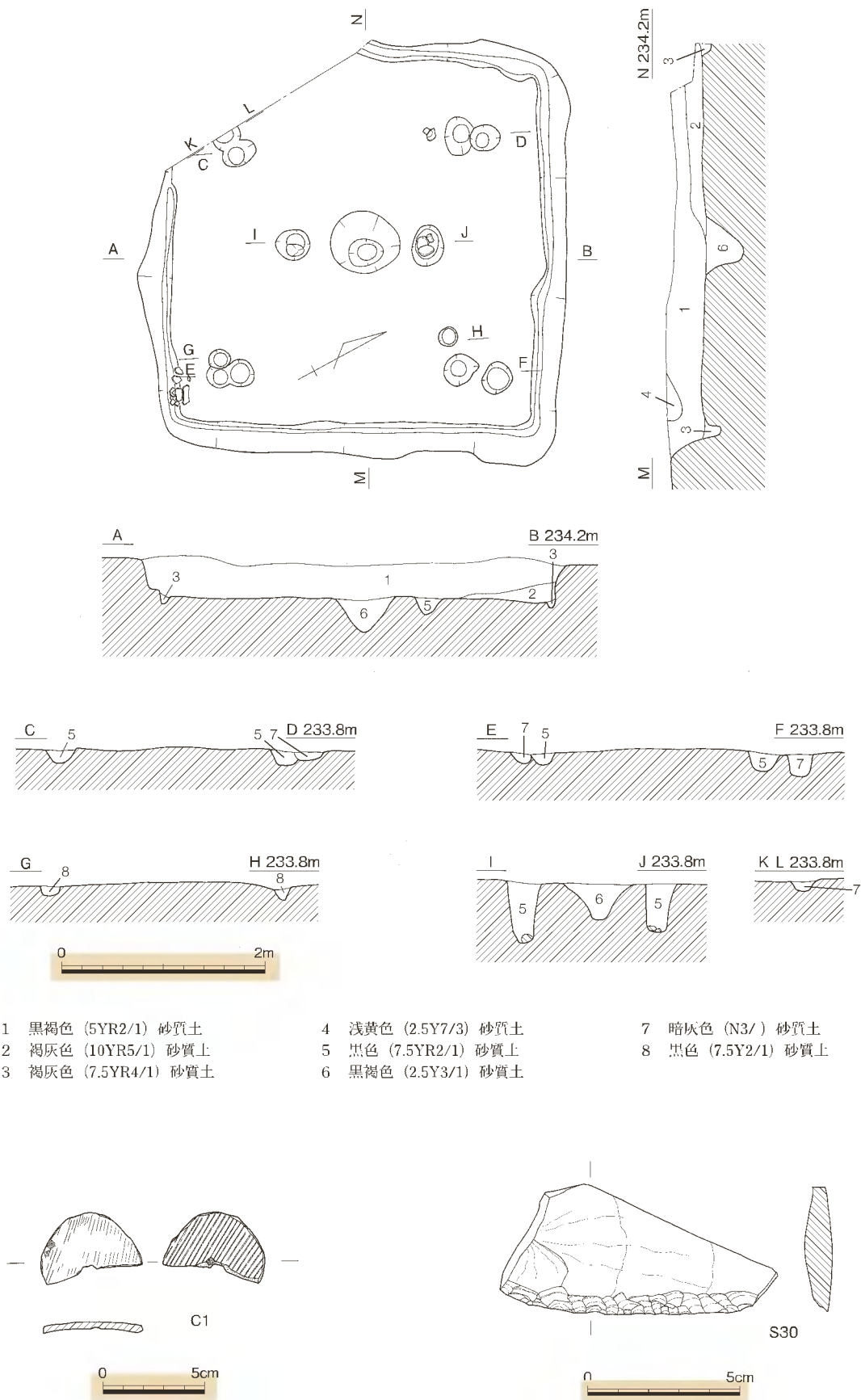
### 竪穴住居 2 (第153・156・157図、写真16、図版27-2)

側道調査区のS3区で検出した正方形の平面形を呈する竪穴住居である。規模は長軸425cm、短軸400cm、深さ35cmである。壁体溝は東のコーナー部分が検出できていないので、やや不明確ではあるがほぼ全周しているようである。壁体溝は床面から約10cmほど掘り込まれている。杭痕跡は見られない。支柱穴は2個であり、四隅の支柱穴は2か所で3個が重複しており、ほかは2個重複もしくは隣接することから、1回ないし2回は柱穴を掘り直しており、住居の改修が行われていた可能性がある。なお、これらの支柱穴はいずれも浅く、床面からの深さは10cmほどである。中央穴は楕円形で長軸77cm、短軸62cm、深さ52cmある。その脇に2個の深い柱穴が検出できた。深さは50~60cmもあり、他の柱穴に比べ掘り方もしっかりしていたもので、底部で根石も確認している。

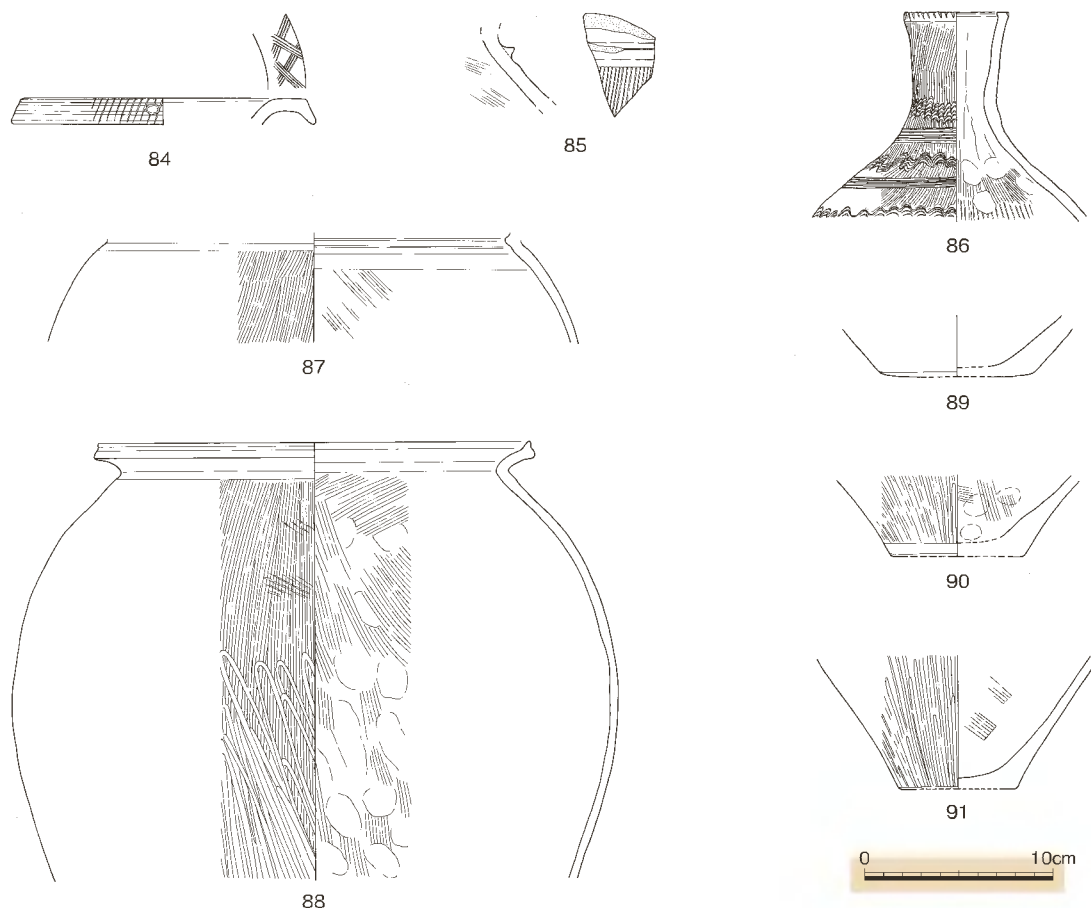
遺物は、住居の南東隅で集中して出土した。84は壺の口縁部細片で上面に格子文、垂れた外面に凹



第155図 竪穴住居 1 (1/60)・出土遺物 (1/4・1/2)



第156図 竪穴住居2 (1/60)・出土遺物 (1/3・1/2)



第157図 竪穴住居2出土遺物 (1/4)

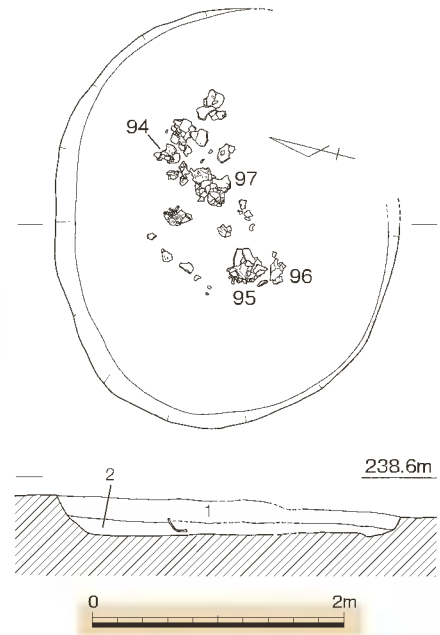
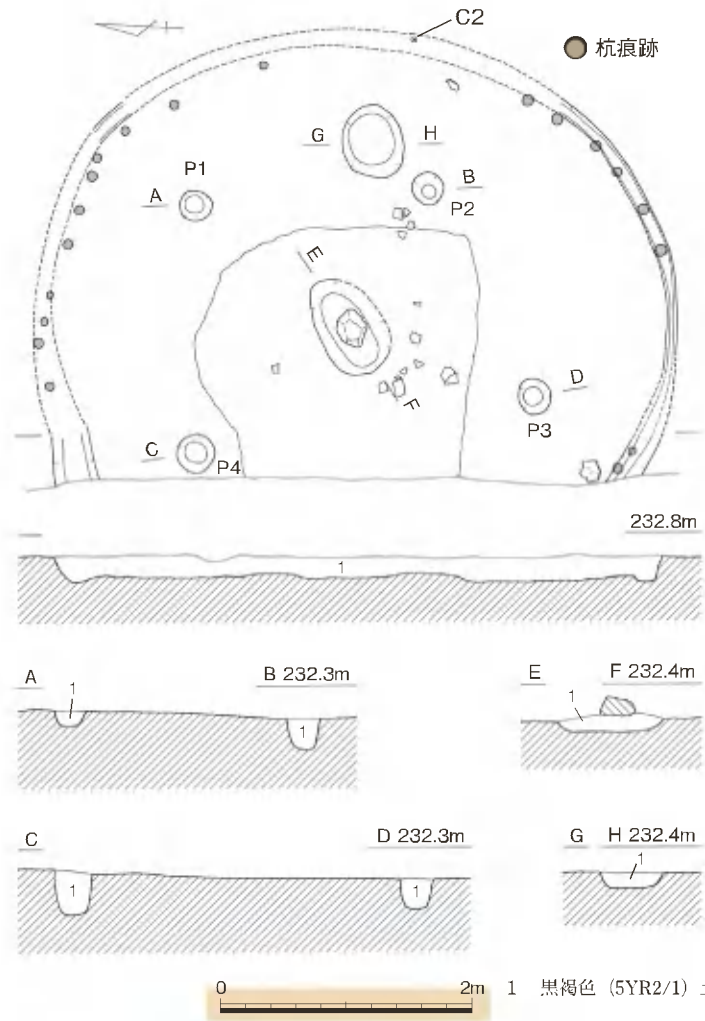
線文や斜線と円形浮文で飾る。85は壺のくびれ部で、断面三角形の突帯を貼り付けている。86は長頸壺で、肩を櫛描きの平行線文と波状文で飾る。87は甕の体部破片、88の甕はかなり大きな破片で、口径22cmある。89～91は甕の底部破片である。C1は甕の体部破片を再利用した紡錘車で、直径5cm、厚さ3mmを測る。S30はサヌカイト製のスクレイパーである。

遺構の時期は、遺物観察から弥生時代中期中葉としたい。(浅倉)

### 竪穴住居3 (第154・158図)

本線調査区の最南端になるA区の中央付近で検出した竪穴住居である。A区は湧水が著しい調査区であり、竪穴住居3の柱穴からも途切れることなく水が湧きあがってきた。そのため、検出は非常に困難であり、壁体溝は断続的にしか確認することができなかった。平面形が円形で、規模は長軸505cm、短軸は計測可能な範囲で350cmを測る。なお、西側は調査区外となるため、調査は行っていない。前述のように壁体溝は断続的に検出した。壁体溝内およびそれに沿うような状況で杭の痕跡が認められた。杭痕跡は10～30cmの間隔で、杭の直径は約5cmを測る。湧水が著しく、壁体溝が判別できなかった地点では、杭痕跡も見つけられなかったが、本来は壁体溝とともに全周していたと考える。柱穴は4個検出したが、200cmという相互間隔から5本柱の住居と考える。中央穴は楕円形で、長軸80cm、短軸60cm、深さ15cmである。床面は、中央穴周辺が踏み固まって堅くなっており、その直上には92・93の土器が潰れた状態で散在していた。C2の紡錘車は東壁体溝上面で出土した。

時期は弥生時代中期中葉と考える。(浅倉)



第159図 土壌 1 (1/60)

### 3. 土壌

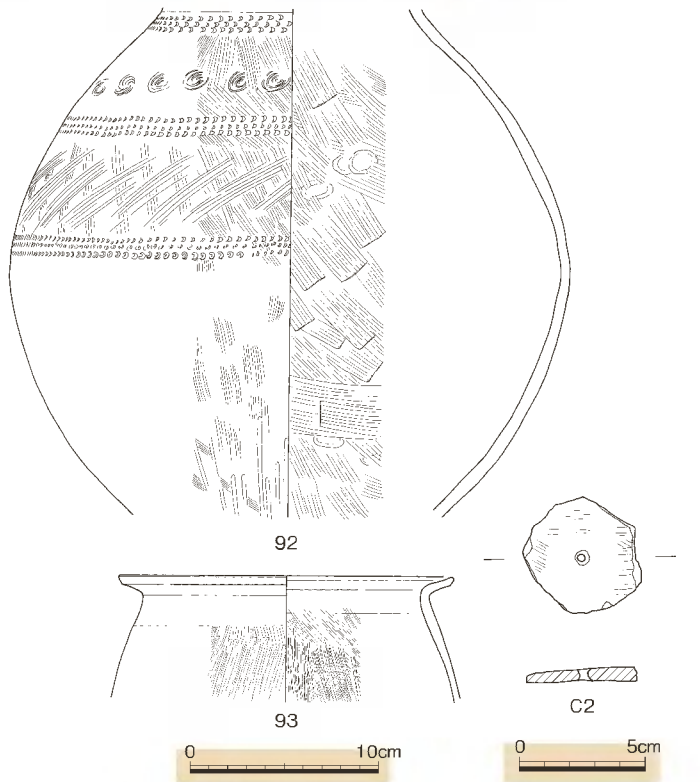
土壌 1 (第152・159・160図、

写真17、図版28-1、2)

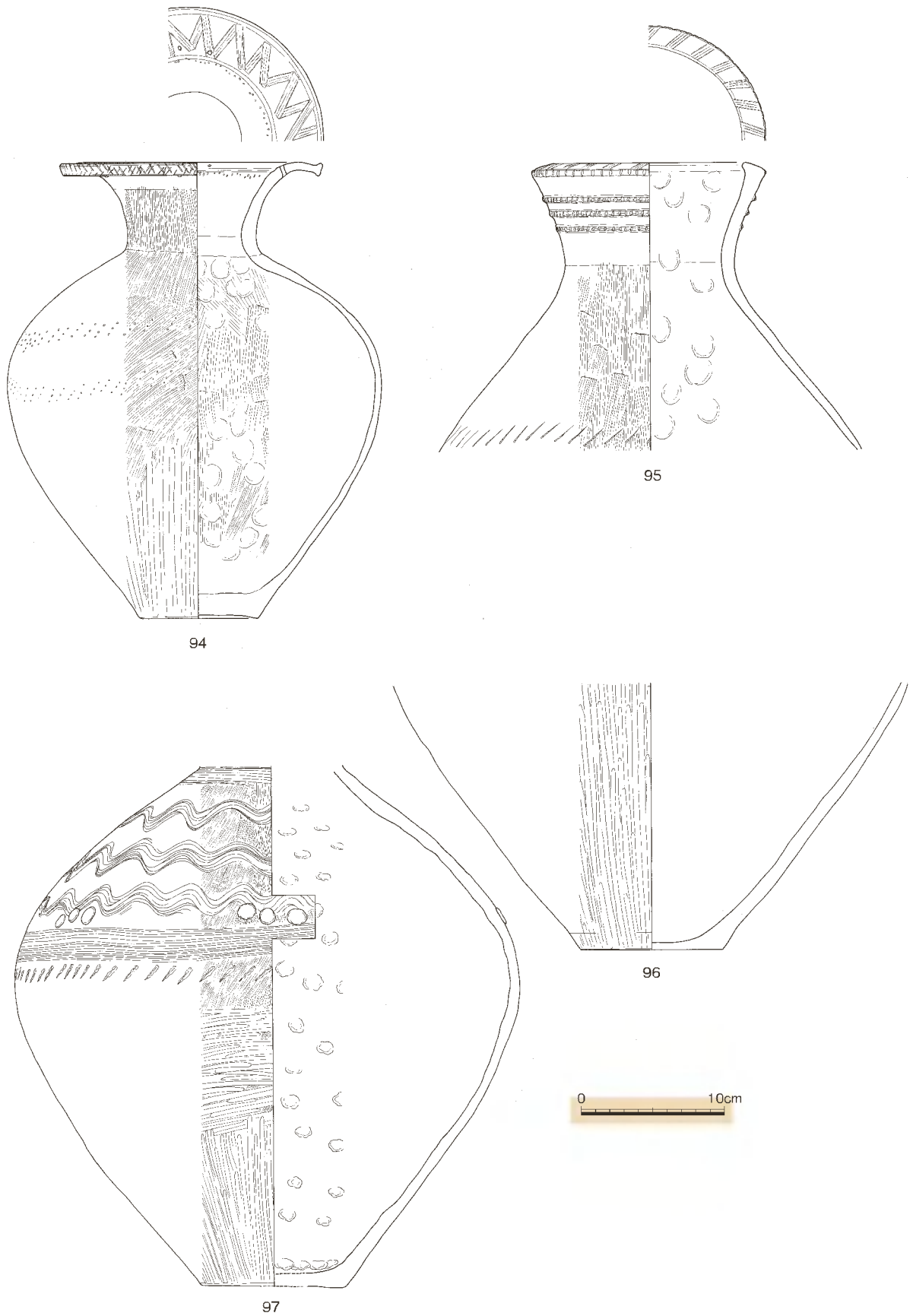
F区中央部で検出した、楕円形を呈する床面の平らな大形土壌である。小形の竪穴住居あるいは貯蔵穴の可能性も考えられる。ただし、壁体溝や柱穴、焼土面などは認められなかった。規模は、長軸328cm、短軸264cm、深さ32cmを測り、床面の海拔高は234.4mである。

土層は、第1層が黒褐色土で、ほとんど無遺物であり、第2層が黒色土で砂利を多く含む。第159図の土器の出土状況は、第2層で確認したものである。土器は床面直上で出土している。3個体を図示したが、それ以外の個体の小破片も出土した。土器は一括して廃棄されたような出土状況であり、また出土土器の大半が壺であるという特徴が認められる。

時期は弥生時代中期中葉である。(浅倉)

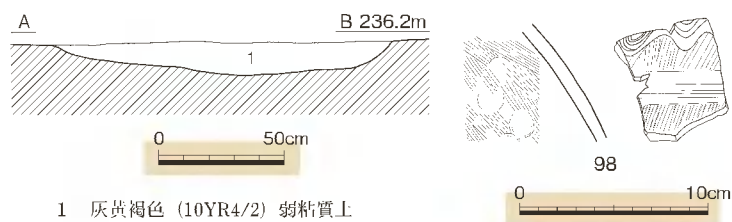


第158図 竪穴住居 3 (1/60)・出土遺物 (1/4・1/3)



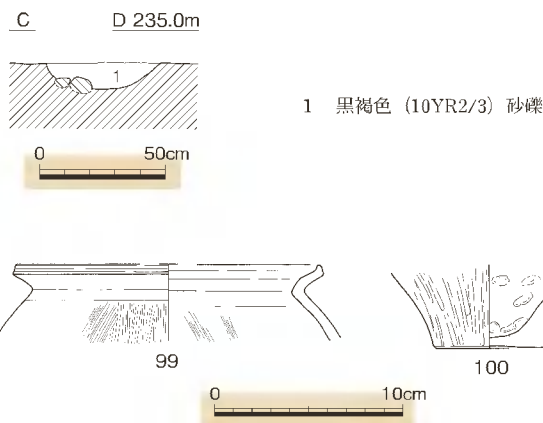
第160図 土壙1出土遺物 (1/4)





1 灰黄褐色 (10YR4/2) 弱粘質土

第161図 溝1 (1/30)・出土遺物 (1/4)



1 黒褐色 (10YR2/3) 砂礫

第162図 溝2 (1/30)・出土遺物 (1/4)

#### 4 溝

##### 溝1 (第152・161図)

E区東端に位置し、北東から南西に弓状に流れるが調査区内で消失する。底面は皿状で埋土は溝基盤と類似の砂質土である。遺物は少量で、図示できたのは波状文を施す壺の破片である。98より溝は弥生時代中期後葉に埋没したといえる。(氏平)

##### 溝2 (第153・162図)

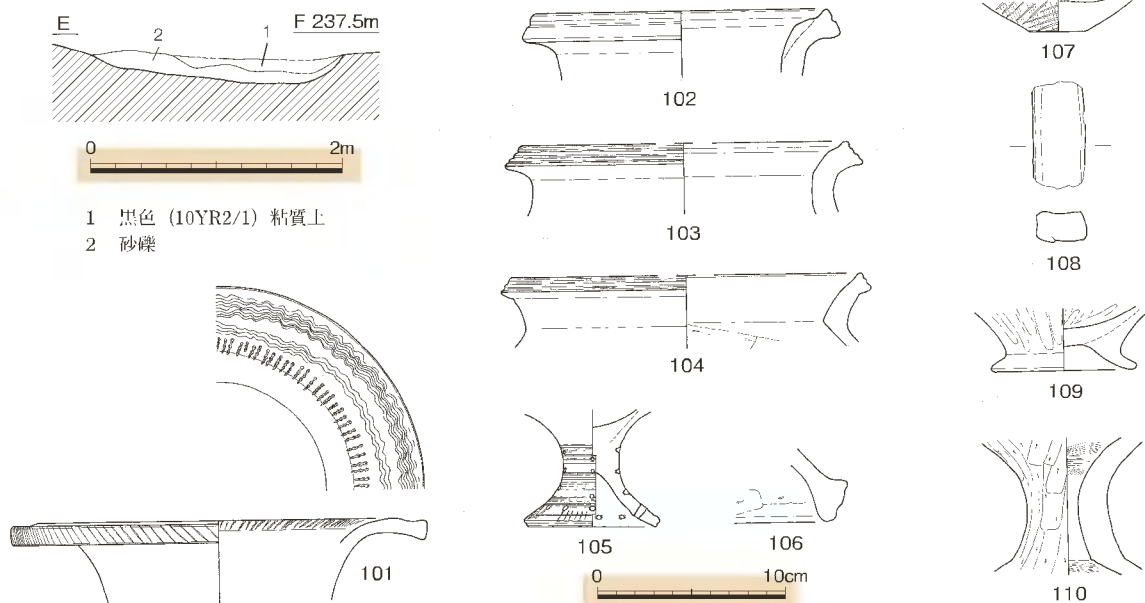
C区北端で検出した、北西から南東方向に流れる溝である。長さ10.5m、幅43cm、深さ16cmを測り、断面形は皿状を呈する。埋土は砂利を多く含む黒褐色土である。

出土した弥生土器から、時期は弥生時代中期中葉と考える。(浅倉)

#### 5 下がり

##### 下がり1 (第152・163図)

F区の西側で検出した、東西に延びる下がりである。一部は、断面形が溝状もしくは段状を呈していた。検出長は20mを越えるが、両端部は調査区外に延びるため本来の長さは不明である。幅は最大



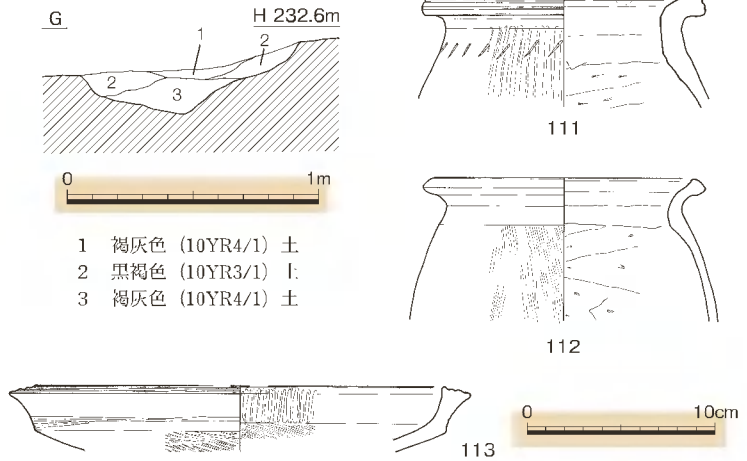
第163図 下がり1 (1/60)・出土遺物 (1/4)

250cm、深さは最大20cmを測る。

遺物は弥生土器のみで、時期は弥生時代中期～後期と幅がある。(浅倉)

下がり2 (第154・164図)

A区で検出した、一部溝状を呈する下がりである。調査区の北北西から調査区中央へカーブしながら南下し、調査区の南南東へ延びていく。検出長は43mで、幅は最大140cmを測った。深さは、最大で18cmである。埋没時期は弥生時代後期前葉と考える。(浅倉)

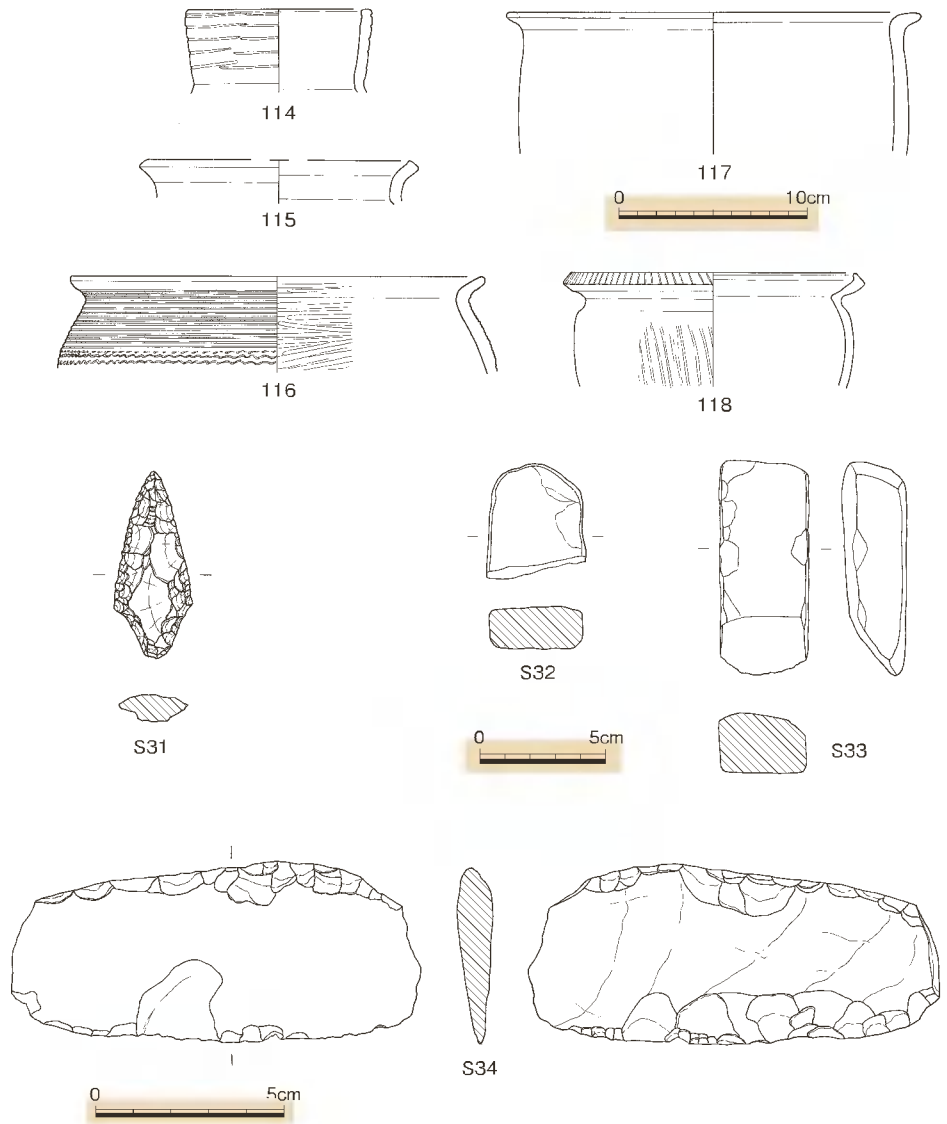


第164図 下がり2 (1/30)・出土遺物 (1/4)

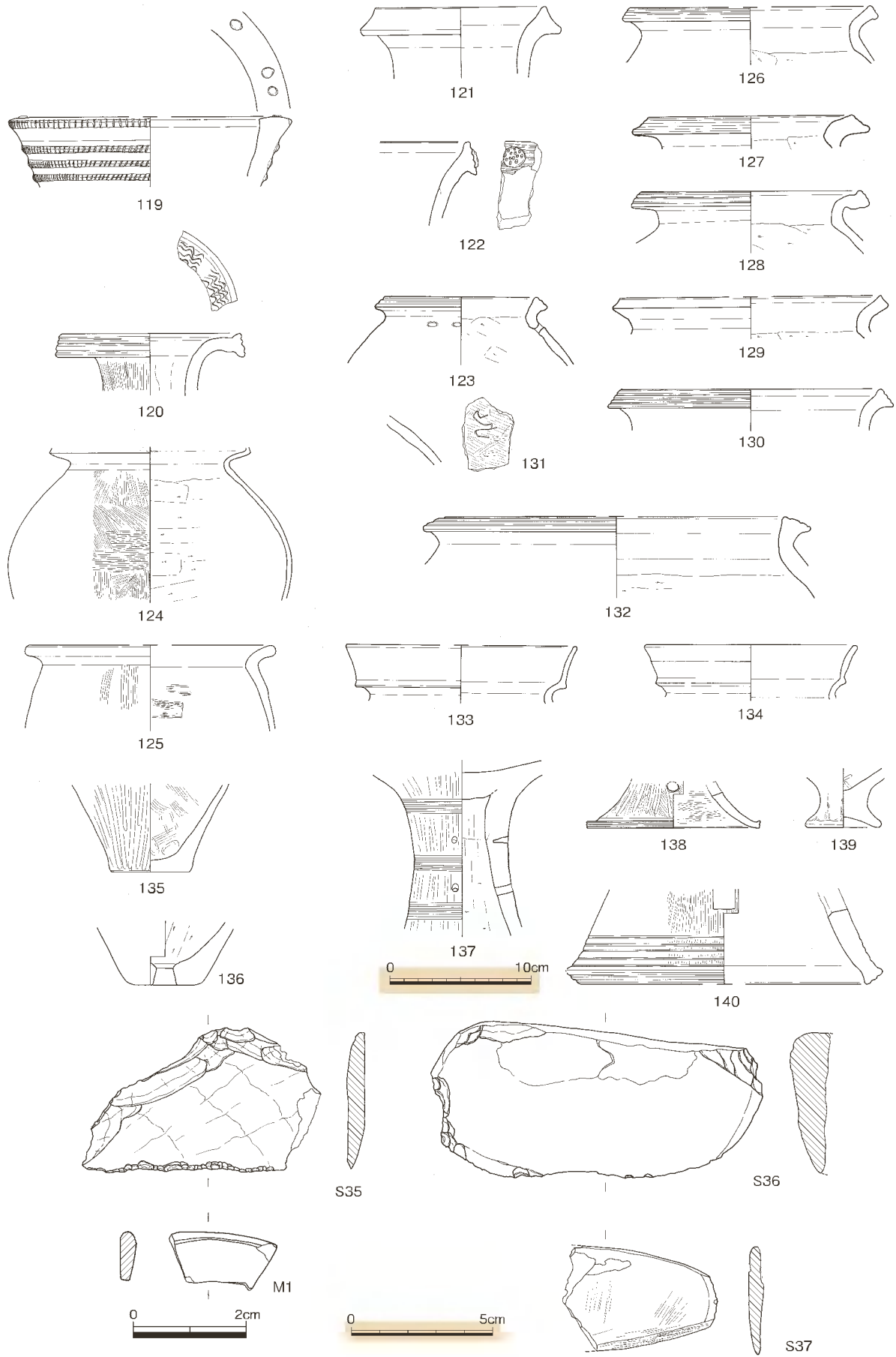
6 遺構に伴わない遺物 (第165～167図)

遺構に伴わない遺物として、弥生時代中期前葉から後期後葉に属する土器が出土している。

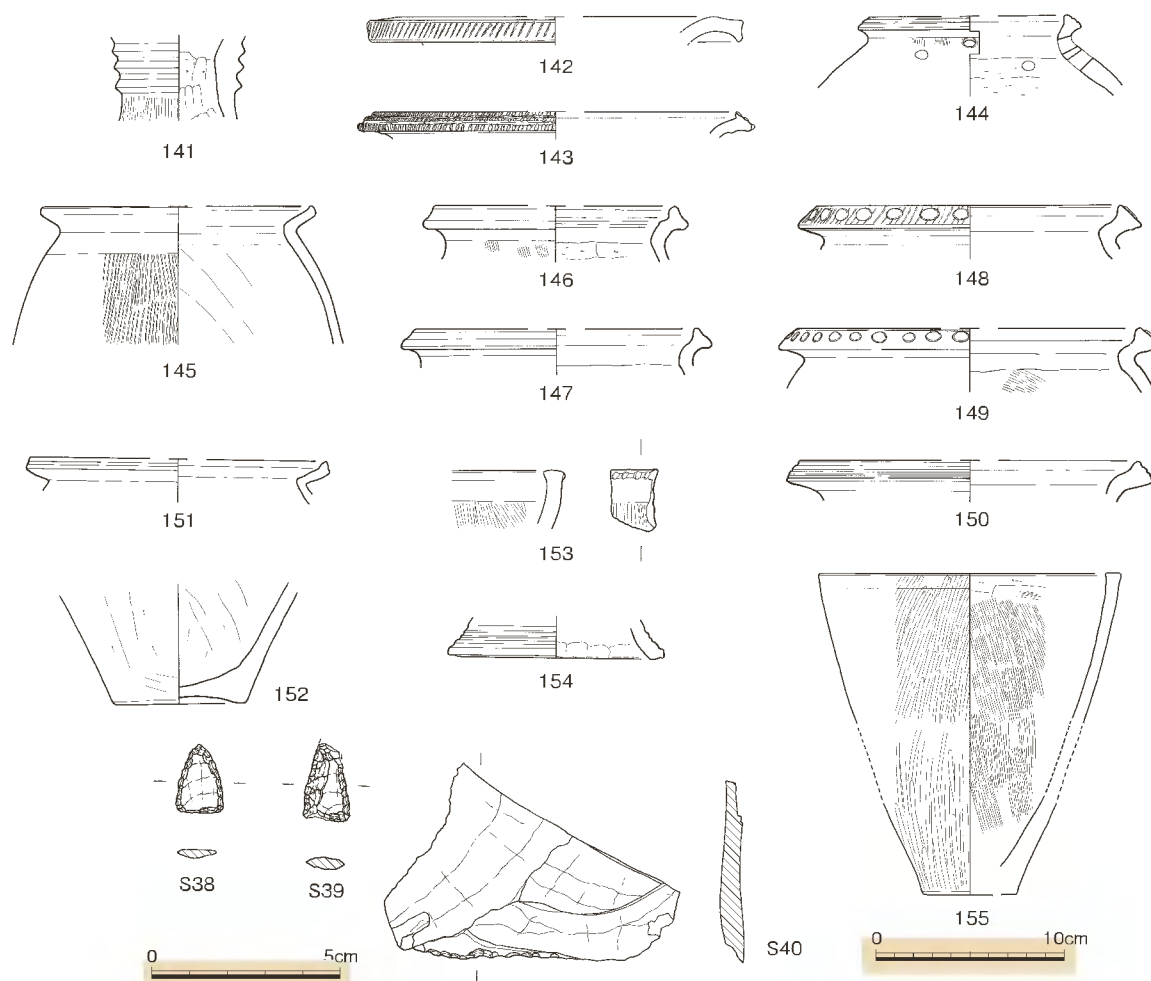
弥生時代中期前葉の時期と考えられるものは116と117の2点だけで、口縁部が逆「L」字状に折れ曲がっている。116の外側の胴部上位には、多条の沈線と波状文が認められ、内面は横方向のヘラミガキを行っている。中期中葉のものは、壺の口縁部119と甕の底部135がある。前者は、外面に刻目を施した断面形が三角形の突帯を貼り付け、口縁端部の上面には円形浮文が存在する。後者は、外面



第165図 遺構に伴わない遺物 (A～D区) (1/4・1/3・1/2)



第166図 遺構に伴わない遺物 (F・G区) (1/4・1/2・1/1)



第167図 遺構に伴わない遺物 (S2~5区) (1/4・1/2)

に縦方向のヘラミガキを行って、内面には指頭圧痕の上面に斜め方向のハケメが認められる。中期後葉になると、土器の個体数が増加している。壺や甕の口縁端部に刻目118・142・143・148、波状文120、円形浮文148・149などの装飾を施し、内面のヘラケズリは頸部まで達していない。「く」字状に外反する口縁部を有する甕125・145・151や壺141、高杯153・154と、外面に縦方向のヘラミガキを行って内面に縦方向のハケメが認められるジョッキ形の鉢155や甕の底部152も、中期後葉の時期になるであろう。後期前葉の壺や甕115・121・126~130・132には口縁端部の装飾がなくなり、内面の頸部までヘラケズリを行っている。外面に沈線がある直口壺114、高杯の脚部137・138、鉢の台139、器台の脚部140や刺突された円形浮文を有する壺122も、形態的な特徴から後期前葉のものとする。次の段階の後期中葉のものは、なぜか1点も存在しない。胴部の外面にハケメを施して内面に横方向のヘラケズリを行っている器壁の薄い甕124と2点の二重口縁の甕133・134は、後期末葉の時期のものである。後者の二重口縁の甕は山陰地方でよく見かけるもので、この尾崎遺跡の所在地が近接した位置だから出土したと思われる。なお131の外面には、線刻された絵が描かれている。

土器以外の遺物として、鏡片と石製品がある。鏡片M1は極めて小さな舶載鏡の破片である。石製品には、サヌカイト製の鍬S31・38・39、サヌカイト製のスクレイパーS35・40、石斧の基部S32、柱状片刃石斧S33、石包丁の未製品S34・36、磨製石包丁S37がある。(福田)

## 第4節 古墳時代の遺構・遺物

### 1. 概要

尾崎遺跡は、吉野川左岸の沖積平野に展開する旧大原町の市街地中心部から、旧東栗倉村に通じる国道429号を約1km入った、後山川によって形成された河岸段丘に所在する。古墳時代の遺構の有無については、本調査を実施するまでは不明であった。本調査を実施する前に、調査範囲の数か所にトレンチを設定して一次調査を行ったが、古代や中世に属する柱穴や土壇などは存在したものの、古墳時代の遺構や遺物は検出できなかった。

旧大原町内に所在する古墳は、不確実なものやすでに消滅したものも含め、80基が確認されているが、その分布状況は、今岡から桂坪にかけての吉野川流域の丘陵縁辺部となだらかな丘陵上に集中している。尾崎遺跡の周辺には古墳が極めて少なく、庄田1・2号墳、八幡山古墳、築出し古墳の4基の古墳が知られているだけである。

庄田1・2号墳は、吉野川右岸の丘陵端部に所在する横穴式石室の古墳で、河原石を積み上げており、須恵器が出土している。八幡山古墳は、現存する八幡神社の上部に位置し、埋葬施設の横穴式石室は完全に破壊され、天井石が神社の踏み石に使われている。築出し古墳は、丘陵南斜面の裾部に所在した古墳で、尾崎遺跡の東方向約100mの地点に石碑がある。農道改良工事中に発見されたので、全容は明らかではないが、横穴式石室に入れられていたと思われる小形の組合せ式石棺が現地に残されていて、須恵器の長頸壺1点と銅芯金箔貼りの耳環1点が出土した。出土した遺物から、7世紀後半の時期と考えられている。こうした小形の石棺が比較的多く分布する地域として、兵庫県南西部の播磨地域がある。旧大原町は、播磨と因幡を結ぶ交通の要衝に位置することから、各時代を通じて播磨地域の影響が認められる。築出し古墳の石棺も、こうした播磨地域との結びつきを示唆するものとして重要である。

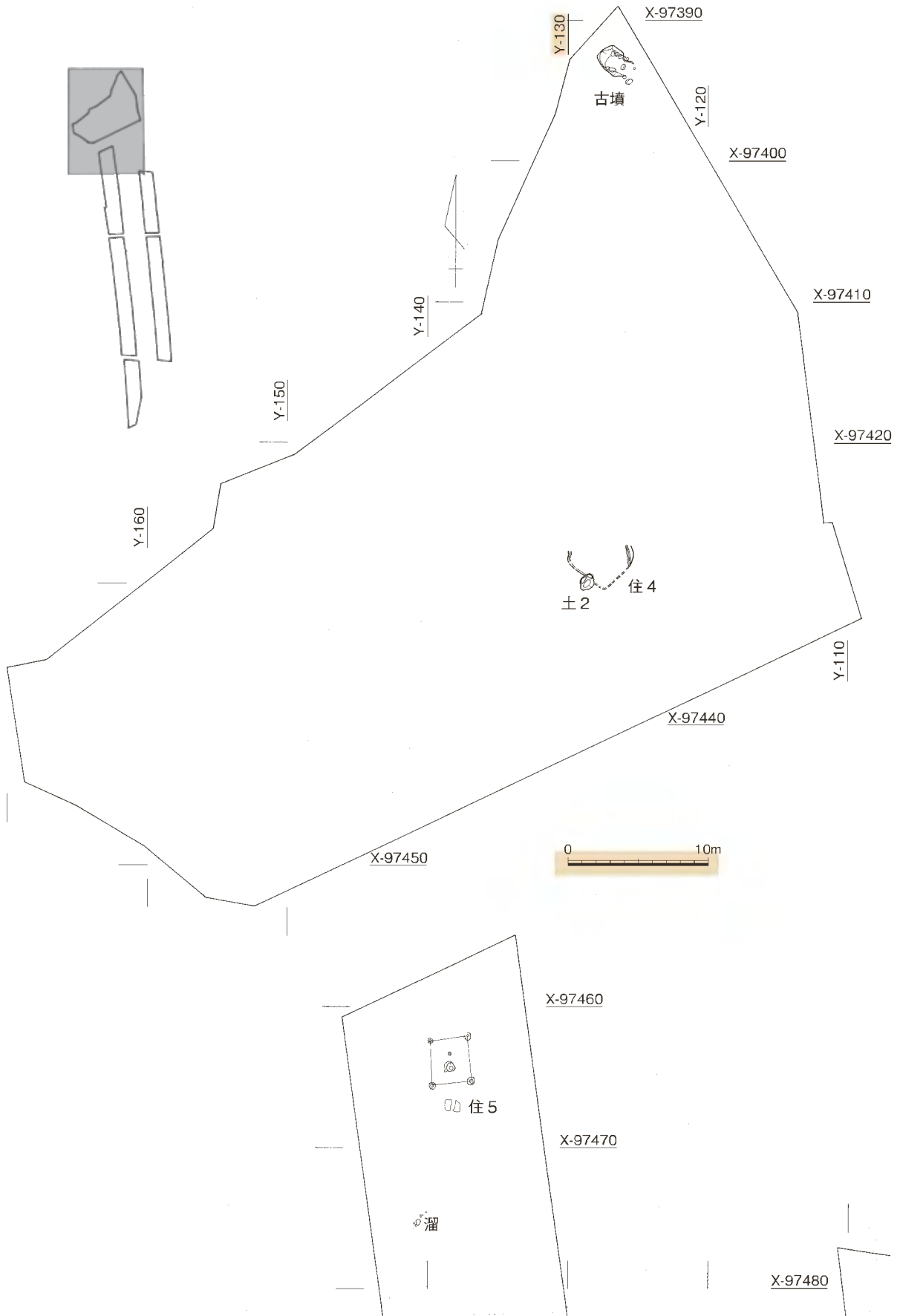
このような状況で、近接した地点に7世紀後半の築出し古墳が発見されていたので、尾崎遺跡にも古墳時代の遺構が存在する可能性は十分に考えられた。発掘調査の結果、4軒の竪穴住居、土壇1基、土器溜まり1か所が検出され、須恵器や土師器、鉄器などが出土した。また、古墳の痕跡と考えられる遺構も1基検出している。(福田)



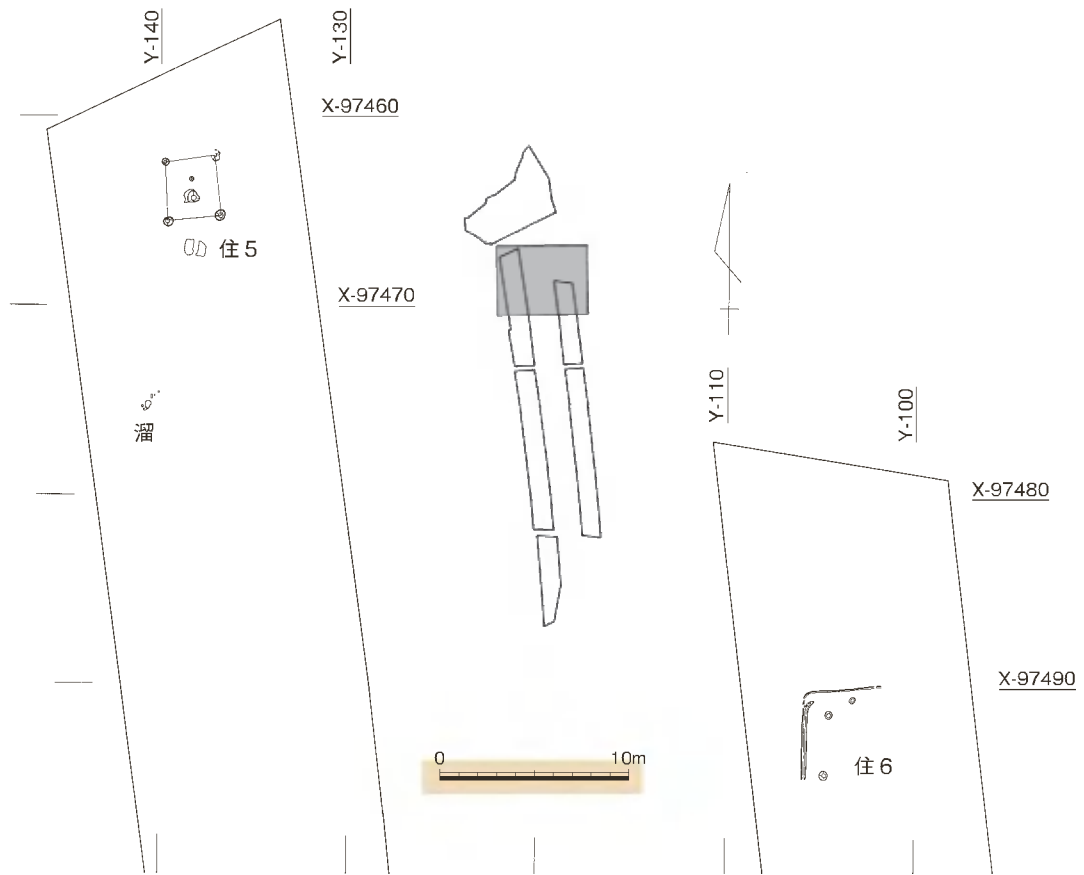
写真18 竪穴住居5調査風景（東から）



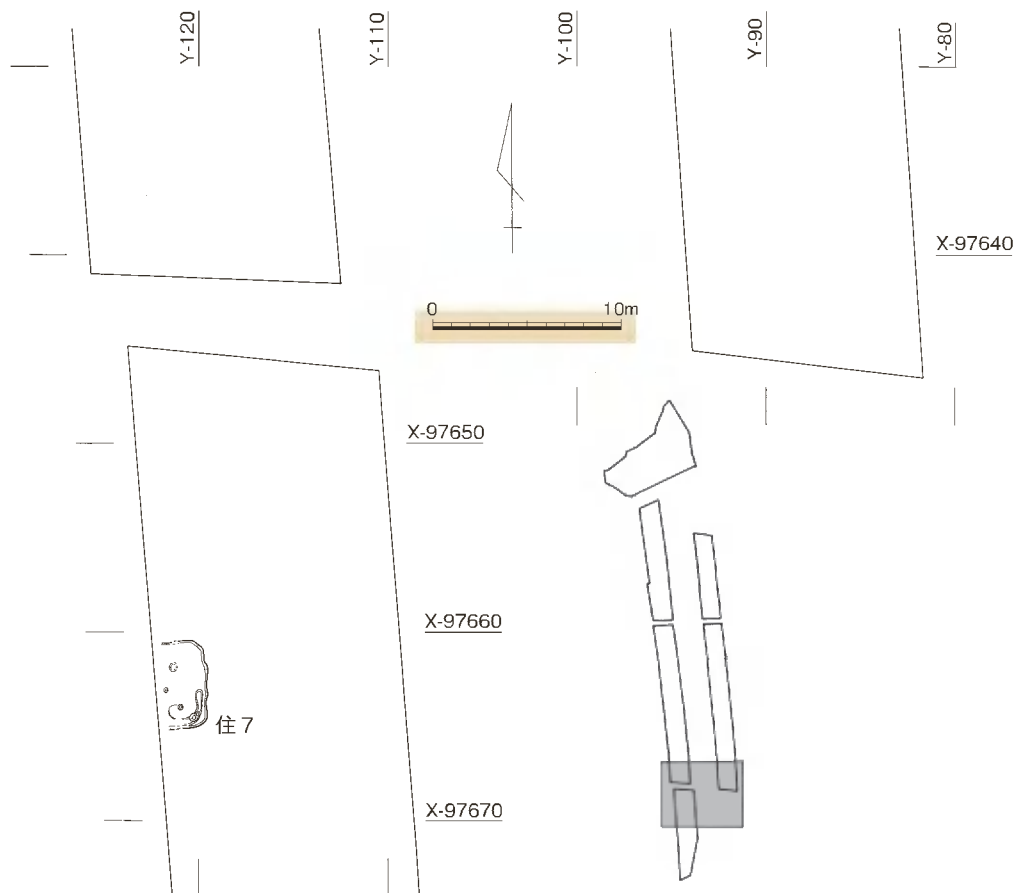
写真19 古墳調査風景（北東から）



第168図 古墳時代主要遺構部分配置図① (1/400)

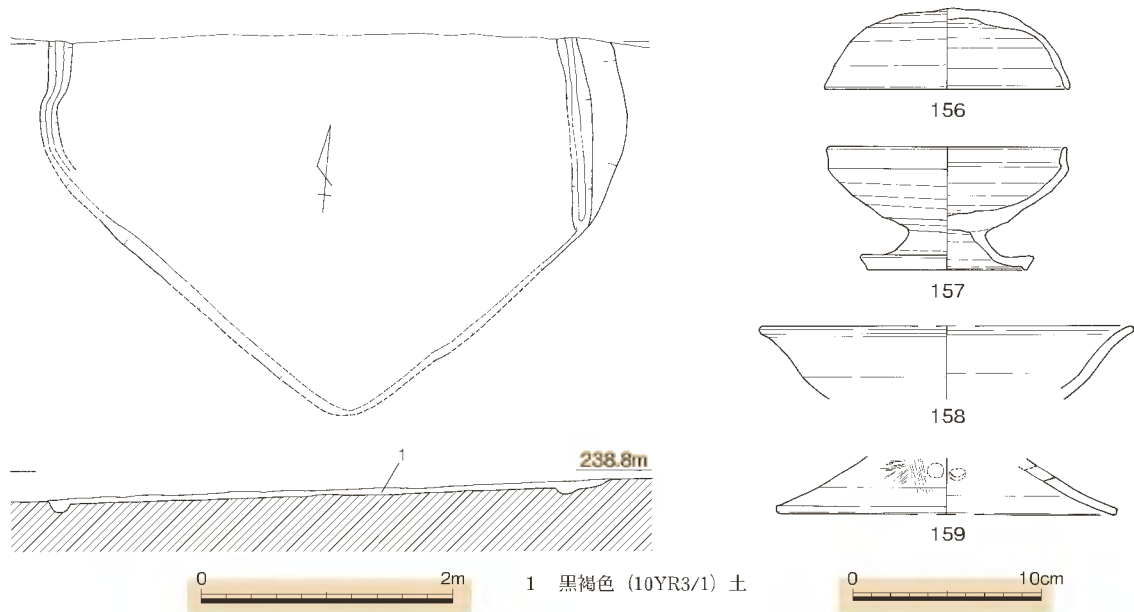


第169図 古墳時代主要遺構部分配置図② (1/400)



第170図 古墳時代主要遺構部分配置図③ (1/400)

## 2 竪穴住居



第171図 竪穴住居4 (1/60)・出土遺物 (1/4)

## 竪穴住居4 (第168・171図)

F区の中央北西寄りに位置する竪穴住居である。土器片が集中して出土したことから、精査を繰り返した結果、溝2条を検出した。溝に挟まれる位置で土器の出土が集中することから、溝は竪穴住居の壁体溝の可能性を考えた。ただ、遺構の位置する場所は湧水が著しく、平面の検出は非常に困難であり、住居の平面を明確に検出できなかったわけではない。図の波線部分は溝の延長からの推測である。なお、遺構の北側は、調査開始時に設置した側溝により削平した部分である。推測した住居の平面形は、略方形状である。溝の間はおおよそ標高238.7mを測り、平坦になっていた。床面と考えられる。ただ、この部分では、柱穴などの住居内施設は一切認められなかった。なお、図示した遺物は床面直上の出土である。

遺構の時期は、出土した須恵器から7世紀前葉と考えたい。

(浅倉)

## 竪穴住居5 (第168・169・172図、写真18)

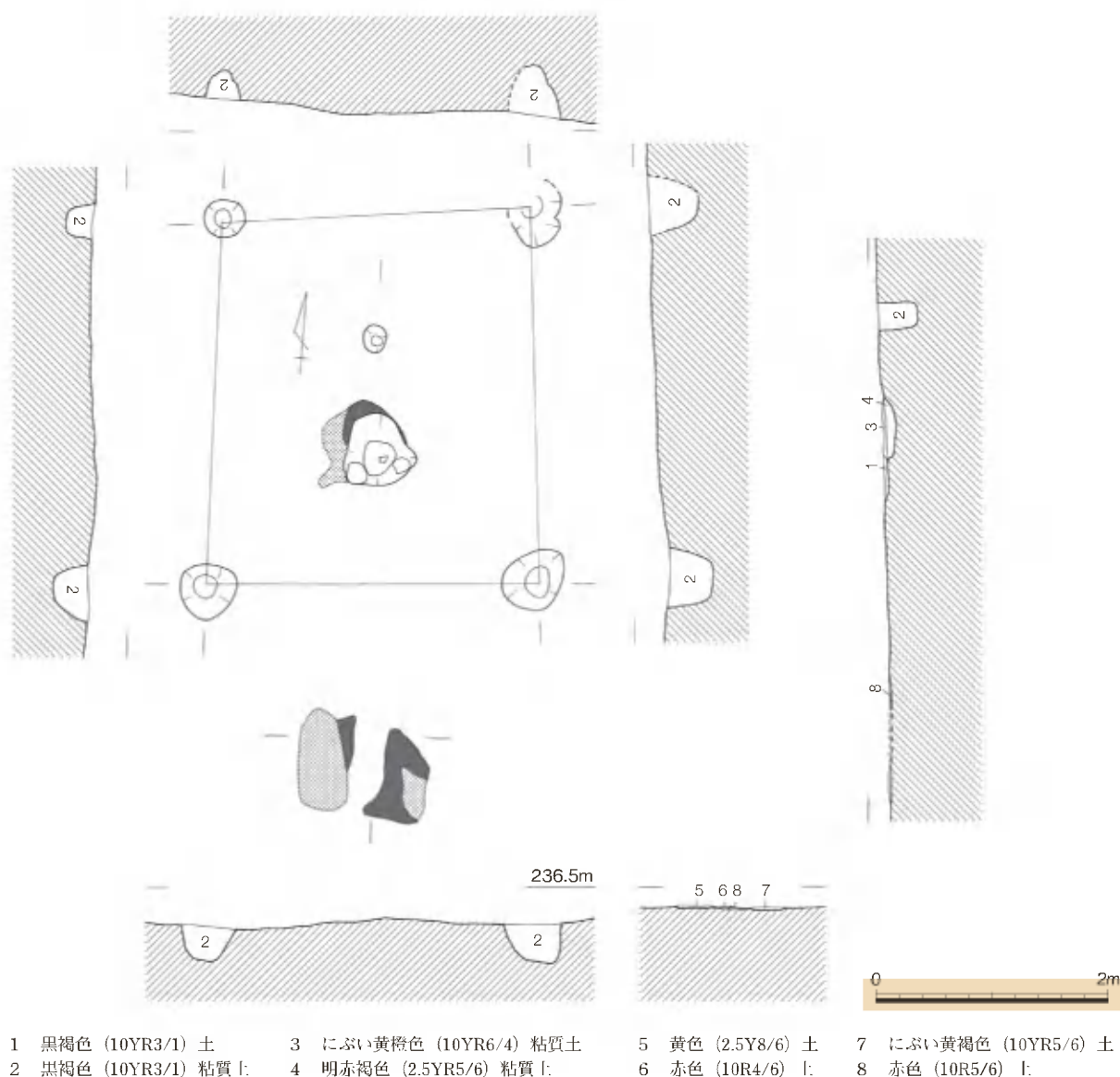
E区北側に位置する。当初2か所の別々の焼土面と考えていたが、後に掘り下げていく過程で柱穴5個を検出し、結果として中央および南側に焼土面のある竪穴住居と認識した。壁体溝などその他の痕跡は検出できなかった。

柱穴は、主柱穴4個と中央に1個がある。主柱穴は大きさが検出面で35~55cm、深さ25~40cmで、底面の標高は235.82~235.98mである。中央穴は他より小規模で断面形状も異なる。埋土はいずれも古代の柱穴の埋土と似る。主柱穴のうち北西の1個は検出に困難を要した。

中央の焼土面は中央部が窪んでおり、その部分を中心に外側へ向かって被熱が弱くなる。断面図第3層中から土師器片が出土している。甕の頸部片であるが、図示できなかった。南側の焼土面は、中央部に空白地帯があり、それを挟んで東西に帯状の被熱が認められる。いずれも中央から外へ被熱が弱くなる。遺物は少量であるが、古墳時代後期の竪穴住居の可能性が高い。

(氏平)





第172図 竪穴住居5 (1/60)

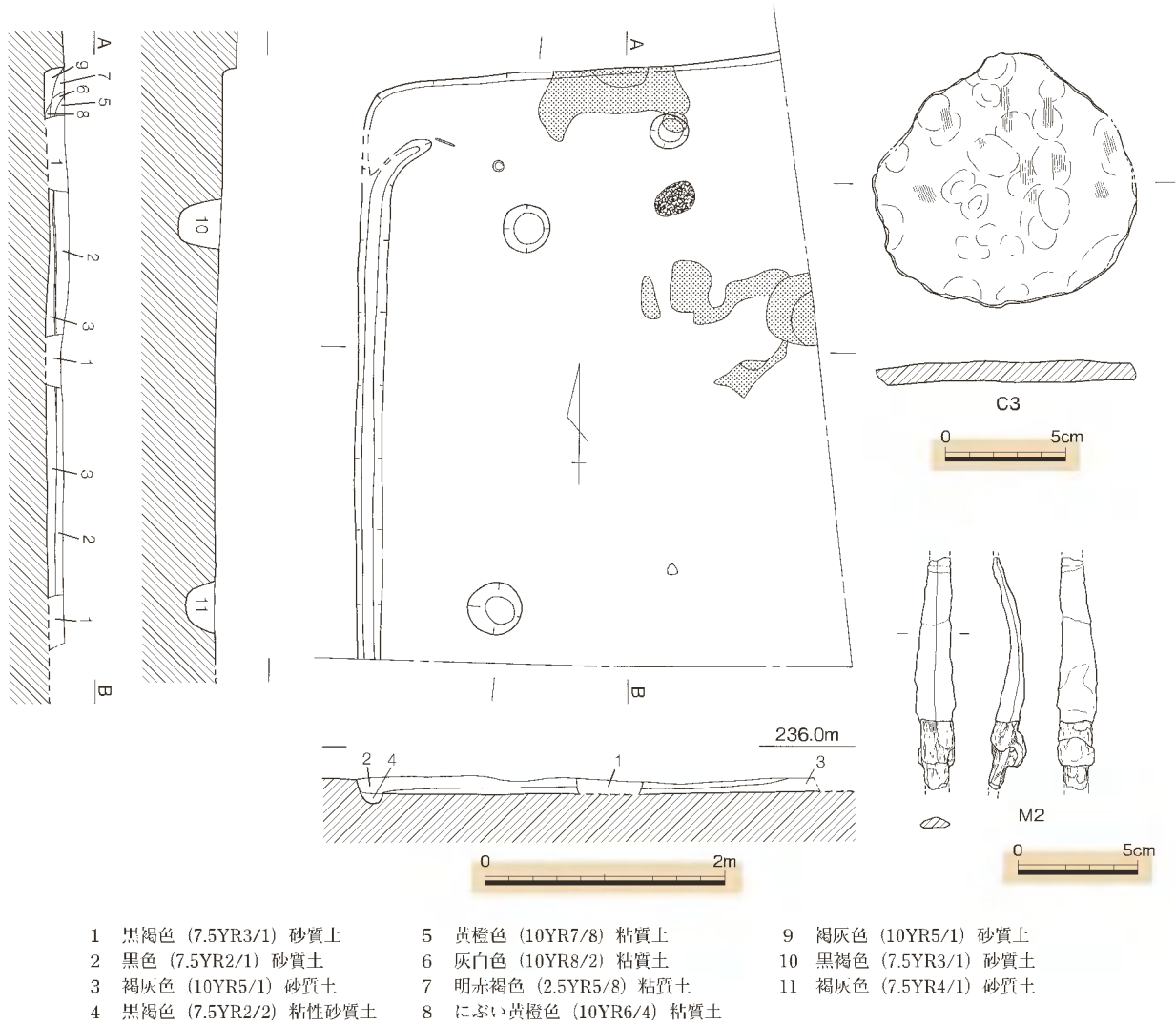
竪穴住居6 (第169・173・174図、図版28-3)

側道調査区のN1区で検出した竪穴住居である。調査区外に延びるため、住居の東側、南側の一部の調査はできなかった。

平面形は方形である。壁体溝は住居の西壁に沿って「L」字状に検出でき、北辺中央部には竈に見間違えるほどに木炭片や焼土が多量に出土した。また、東側調査区境でも被熱面を確認した。両被熱面の間では木炭の集中も検出している。柱穴は2個検出したが、その位置や住居の検出範囲などを考えると4本柱の竪穴住居の可能性が高い。

住居の計測値は、南北500cm、東西400cm、検出面からの深さ15cm、床面の海拔高235.6mを測る。柱穴の計測値は、直径35~45cm、深さ25~35cmである。

遺物は木炭片、焼土が多い東北部からまとまって出土した。160は須恵器の杯蓋である。口径は11cmを測る。161~163は須恵器杯身である。161は口径9.6cmであった。164~170は土師器の甕である。171は土師器の甌の破片である。C3は土製円盤である。穴は開けられておらず、有孔円盤の未製品



第173図 竪穴住居6 (1/60)・出土遺物 (1/3)

と考えたい。M2は鉞と考えられる鉄器である。長さ10.0cm、幅1.5cm、厚さ0.5cmを測る。基部には木質が残る。

以上の出土遺物から、この竪穴住居の廃棄された時期は7世紀中葉に比定したい。(浅倉)

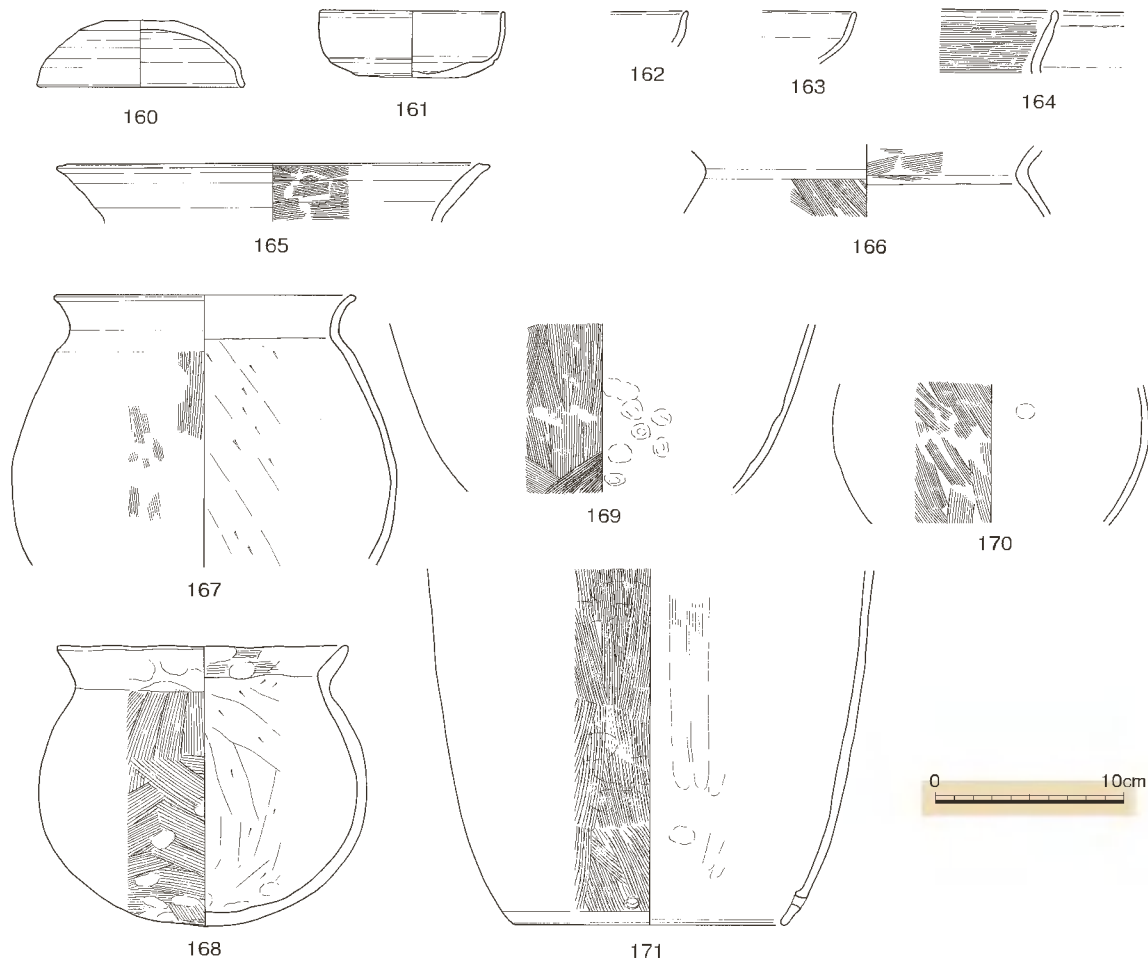
#### 竪穴住居7 (第170・175図)

A区の北西部で検出した、やや隅丸の方形に近い形態の竪穴住居である。西側半分は調査区範囲外であり、調査できなかった。

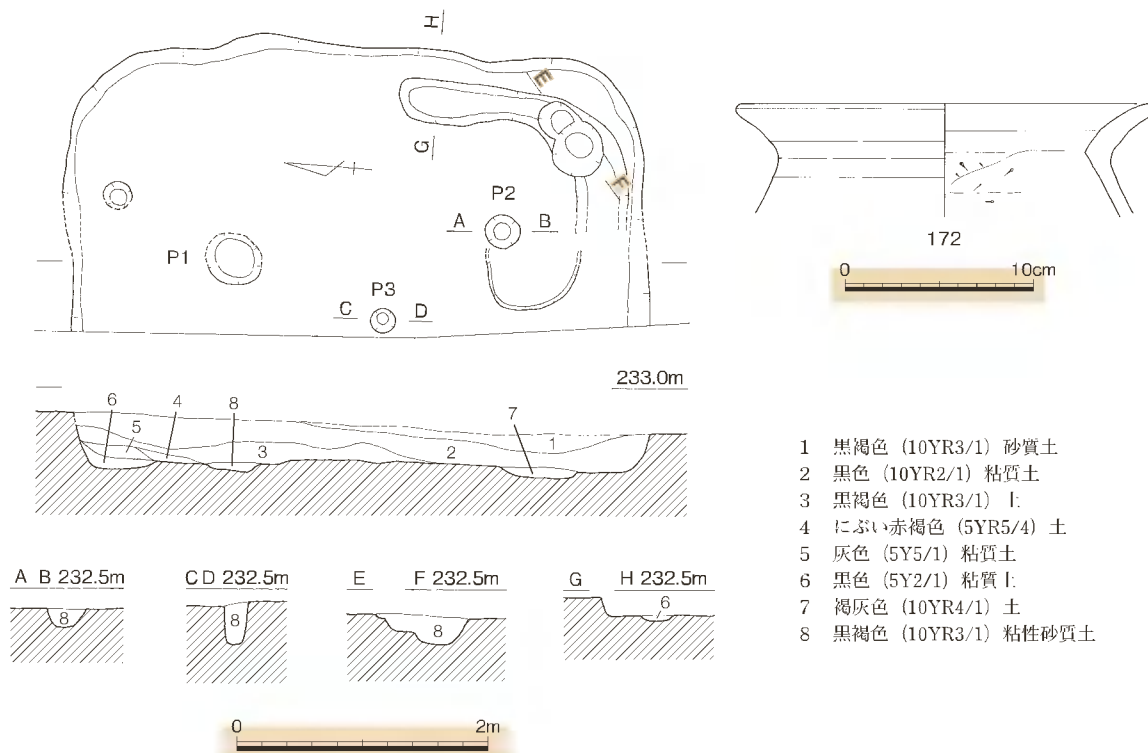
住居の東辺の方位は、ほぼ南北を指し、長さは450cmを測る。なお、検出できた東西幅は232cmである。住居の残存した深さは35cmと浅い。壁体溝は幅広く、南東部コーナーで「L」字形に残存している。柱穴は2個検出することができた。柱穴の位置や住居の検出範囲から考えると、4本柱の竪穴住居と考えた方が妥当であろう。

遺物は172の土師器甕が、埋土第2層から出土している。172は、口径21.6cmで、色調は灰黄褐色を呈し、胎土中には2mm以下の砂粒を含んでいる。

この竪穴住居の時期は、古墳時代後期と考える。(浅倉)



第174図 竪穴住居6出土遺物 (1/4)



- 1 黒褐色 (10YR3/1) 砂質土
- 2 黒色 (10YR2/1) 粘質土
- 3 黒褐色 (10YR3/1) I:
- 4 にぶい赤褐色 (5YR5/4) 土
- 5 灰色 (5Y5/1) 粘質土
- 6 黒色 (5Y2/1) 粘質土
- 7 褐灰色 (10YR4/1) 土
- 8 黒褐色 (10YR3/1) 粘性砂質土

第175図 竪穴住居7 (1/60)・出土遺物 (1/4)

### 3 土壙

#### 土壙2 (第168・176図)

F区で検出した竪穴住居4の南で検出した不整形土壙である。長軸の方向はN-20°-Eで、長さ121cm、幅96cm、深さ21cmを測る。掘り方は2段掘りであるが、掘り直した結果の形態と考えたい。

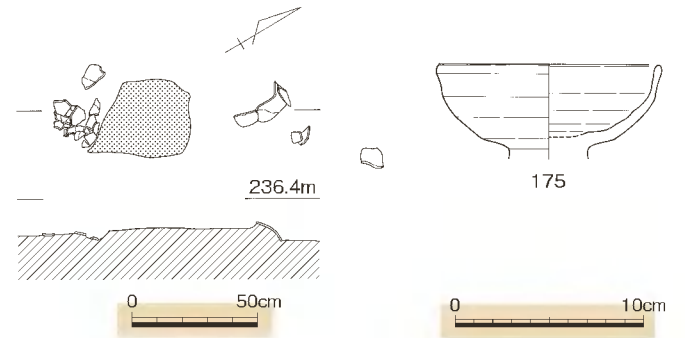
時期は173・174の土器から古墳時代後期とする。 (浅倉)

### 4 土器溜まり

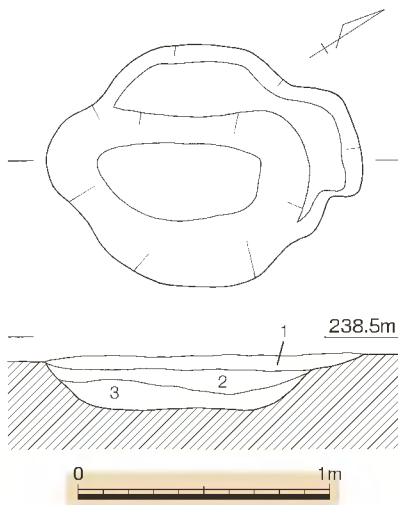
#### 土器溜まり (第169・177図、図版28-4)

E区北側で遺構の検出中、被熱の弱い焼土面と土器の集中を発見した。周辺を精査したが、柱穴などは認められなかった。175はこの土器溜まりの上部から出土したもので、出土状況で示した土器のほとんどは接合して176になる。

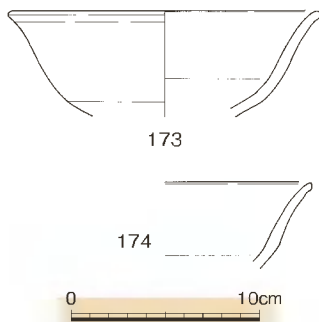
時期は7世紀前半であろう。 (氏平)



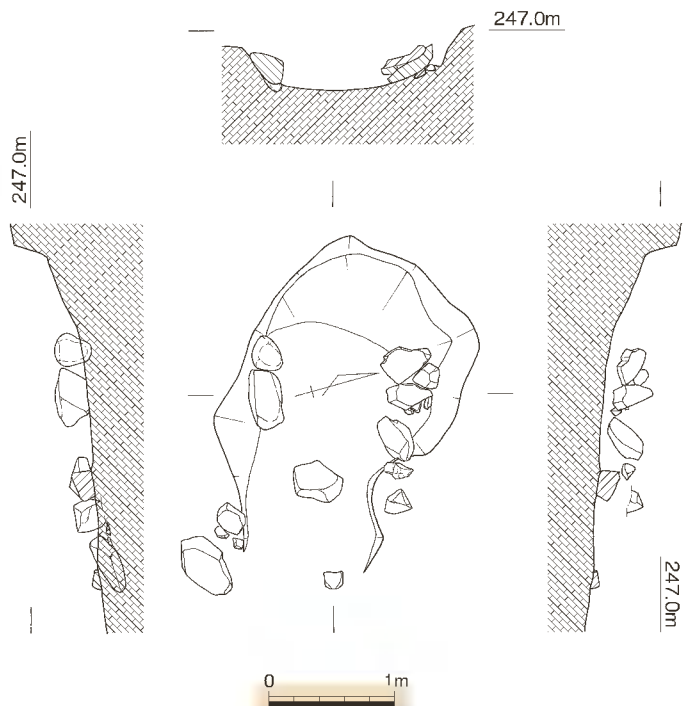
第177図 土器溜まり (1/30)・出土遺物 (1/4)



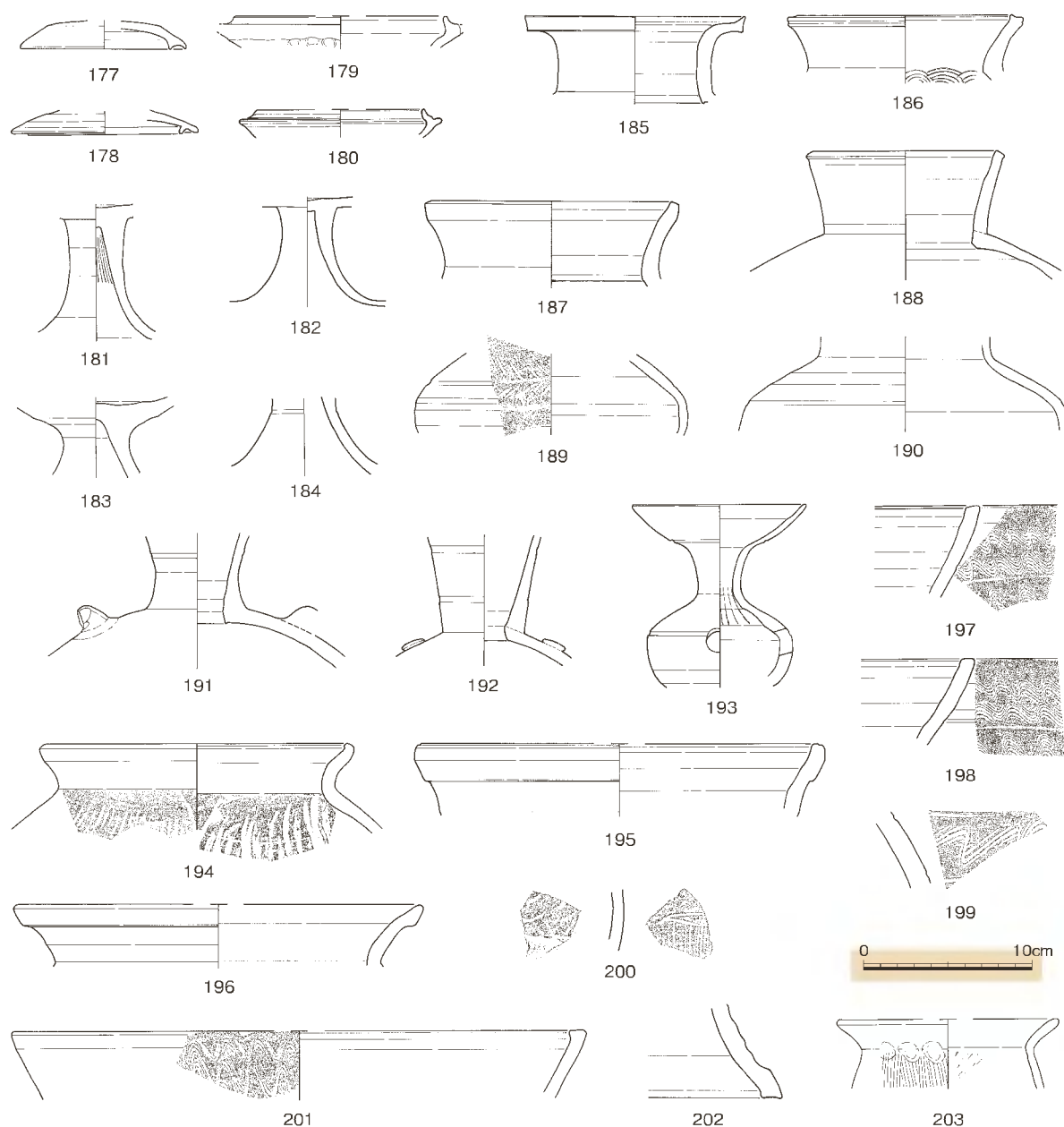
- 1 黒褐色 (10YR2/2) 粘質土
- 2 黒色 (10YR2/1) 粘質土
- 3 黄灰色 (2.5Y4/1) 粘質土



第176図 土壙2 (1/30)・出土遺物 (1/4)



第178図 古墳 (1/60)



第179図 遺構に伴わない遺物 (1/4)

## 5 古墳

古墳 (第168・178図、写真19、図版28-5)

G区北端で検出した、横穴式石室の残骸と考えた遺構である。近世造成土で埋まっていた。規模は、掘り方が最大で長さ520cm、幅370cm、深さ50cmである。側壁に使用された礫は20~95cm大の角礫で、図示した礫も原位置を保たないものがいくつかある。礫は近世造成土にも10個程度が見られたが、天井石に相当する規模の礫は認められなかった。遺物は出土していない。(氏平)

## 6 遺構に伴わない遺物 (第179図)

尾崎遺跡では全調査区で古墳時代の遺物が出土している。本線調査区のD区以北がやや多いという傾向はあるが、明確な偏りは認められない。器種が認識できた須恵器を中心に図示した。(上梅)

## 第5節 古代の遺構・遺物

### 1 概要

尾崎遺跡の全面調査は、側道部分と本線部分だけでなく国道北側部分もあって調査面積が広がったため、平成17年度と平成18年度の2か年にわたって実施した。

平成17年度の側道調査区では、鎌倉時代や室町時代の中世に属する掘立柱建物の柱穴とは明らかに違った、全体の規模がやや大きくて埋土が異質なものを検出した。これらの柱穴の配置を精査したところ、小規模な掘立柱建物や柱穴列であることが判明した。ところが、この側道調査区では、国道429号に近い北側の地点だけに遺構が存在し、南側には何も確認できなかった。

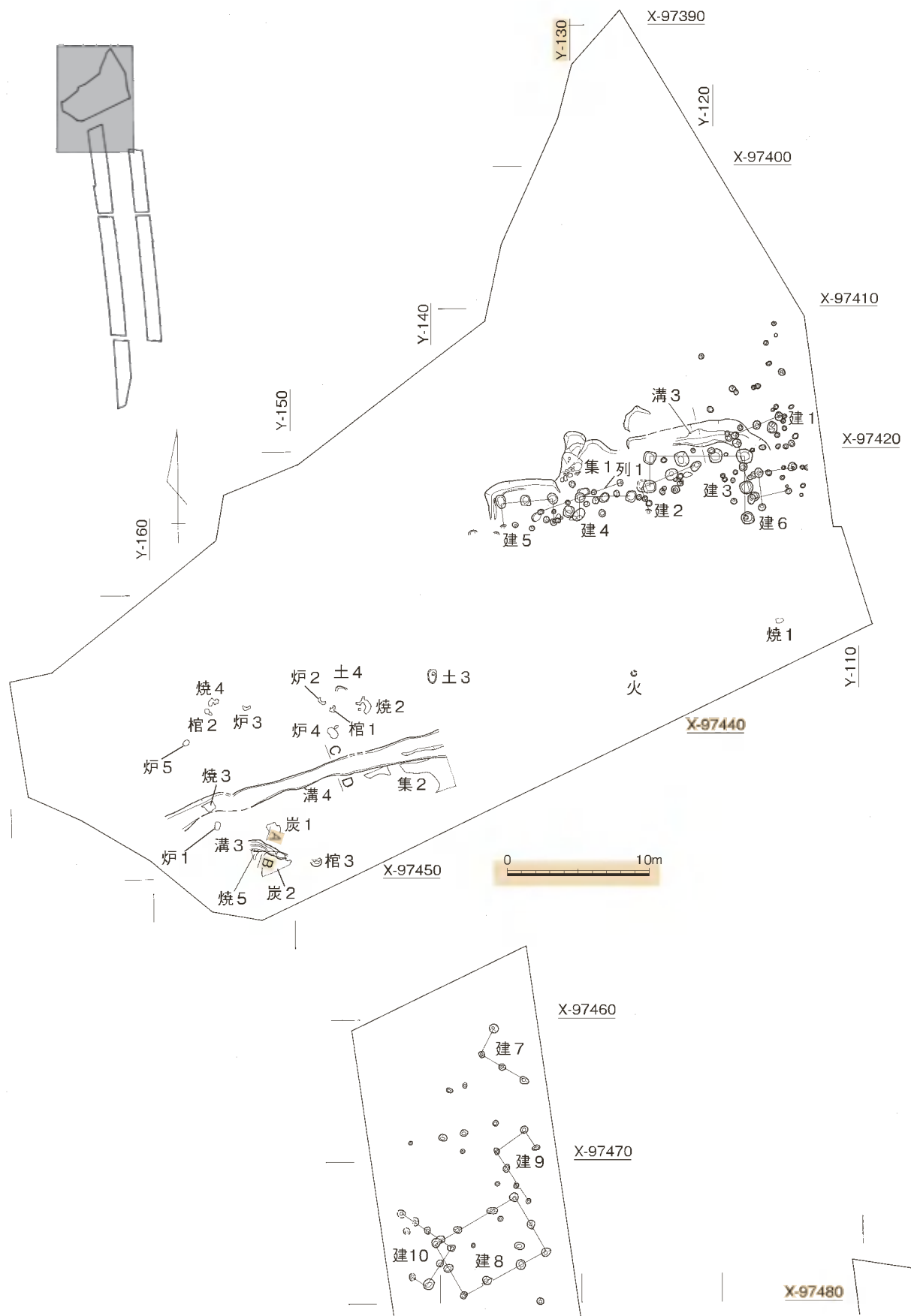
平成18年度の発掘調査は、前年度に実施した側道部分の調査結果を参考にして、本線部分は南側から北側に向かって調査を進め、本線部分の調査が終了してから国道北側部分の調査を行った。本線部分では側道部分とは異なり、南側の地点にも3棟の小規模な掘立柱建物や土壇などを検出した（A・B区）。国道に面した北側の地点（D・E区）には、12棟もの掘立柱建物が比較的密集した状態で存在し、それらの掘立柱建物の数棟は、「L」字状を呈して規則的に並んでいることが判明した。出土した遺物には、比較的多くの須恵器や土師器だけでなく、丹塗り土器や円面硯の破片も認められた。

国道の北側部分（F・G区）では、調査区の中央で東側へ寄った斜面に、6棟の掘立柱建物が存在した。これらの建物は、いずれも斜面の下位に位置する部分が削平されて、柱穴を検出することができなかった。掘立柱建物2と掘立柱建物4では、柱穴内から須恵器や土師器に混在して焼塩土器が出土した。この焼塩土器はいずれも二次焼成を受けており、焼塩の生産用として使用したと推定している。調査区の南西部に位置する掘立柱建物が確認できなかった地点の炉跡や焼土面が、焼塩が行われた痕跡と考える。これらの土器はいずれも小破片になって出土するが、全体の形態は把手のない丸底のマグカップに似た形を呈し、胎土中には粗い砂粒を多く含み、外面には指頭圧痕が顕著に認められる。内面の調整痕跡では、指頭圧痕や指頭による粗いヨコナデが存在するものと、全体に布目が認められるものがある。また、この調査区では3基の土器棺を検出した。そのうち2基では、2個の甕の口縁部を合わせた状態で出土した。小児用の棺として使われたのであろう。さらに、台付きの直口壺が単独で確認している。内部に人骨はなかったが、火葬墓と考えている。

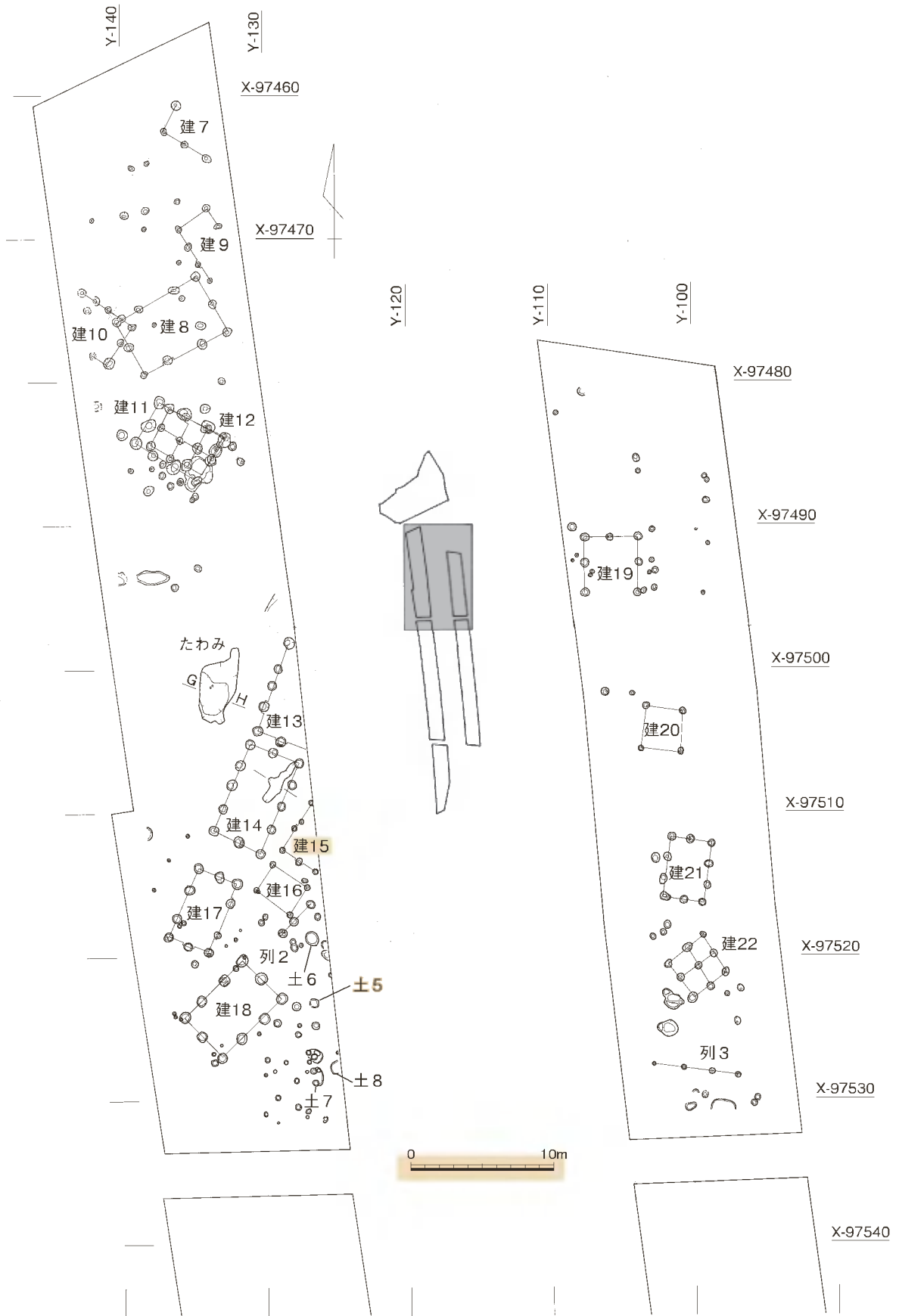
遺構に伴わない遺物として、国道北側の調査区（F・G区）を中心として須恵器の椀が出土している。一見したところ、外面の底部に糸切り痕跡が存在するので中世の勝間田焼の椀に酷似するが、調整手法が異なっている。外面の体部下半に沈線が存在するものや、断面形が台形または三角形の突帯が認められるものがあり、高台の側面はヘラ状工具で削って調整しているから、側面が内側に切れ込んで高台の断面形が台形を呈するものが多い。この須恵器の椀は、西播磨地方で生産されたもので、9世紀から10世紀にかけての時期になる。また、陰刻の花弁宝相華文を描いた緑釉陶器の稜椀や柱穴出土の石帯、面取りをした特殊な器の支脚は、一般的な遺跡から出土する遺物ではない。

このように尾崎遺跡では、「L」字状になって規則的に並ぶ掘立柱建物群が検出され、円面硯や石帯の破片だけでなく、珍しい緑釉陶器や焼塩に使われた焼塩土器も出土しているから、官衙的な性格をもつ遺跡であると思われる。

(福田)

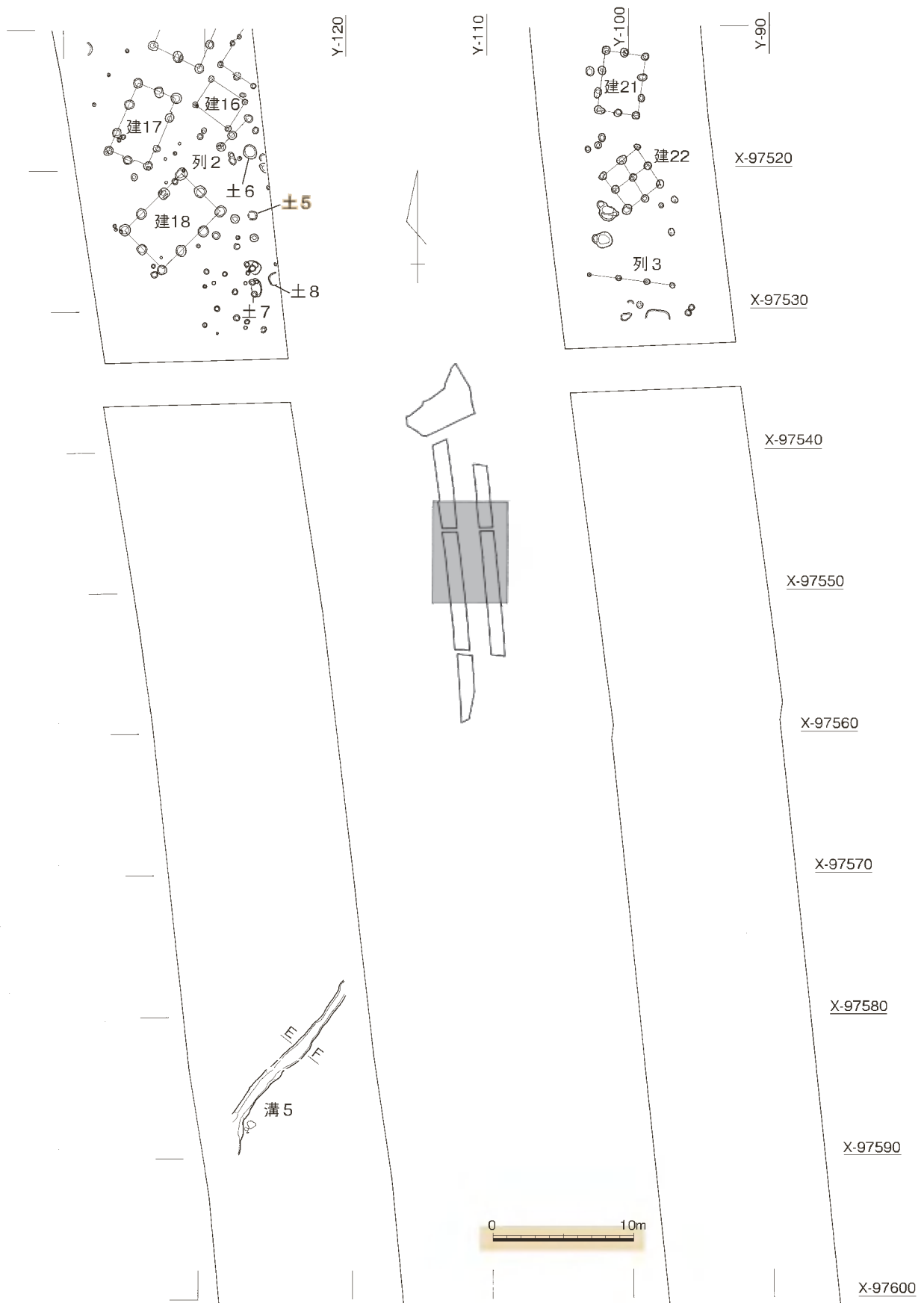


第180図 古代主要遺構部分配置図① (1/400)



第181図 古代主要遺構部分配置図② (1/400)





第182図 古代主要遺構部分配置図③ (1/400)

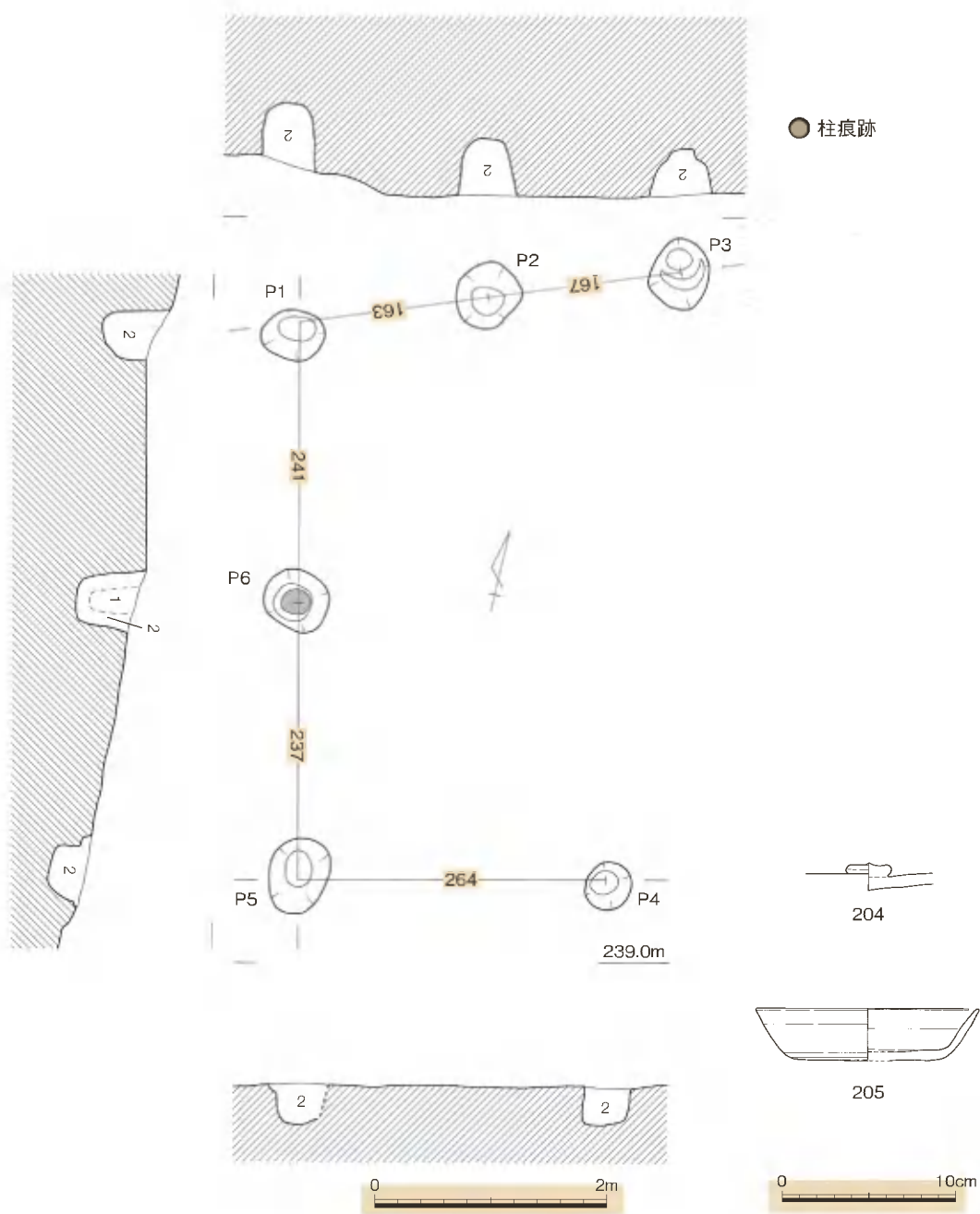


第183図 古代主要遺構部分配置図④ (1/400)

## 2 掘立柱建物

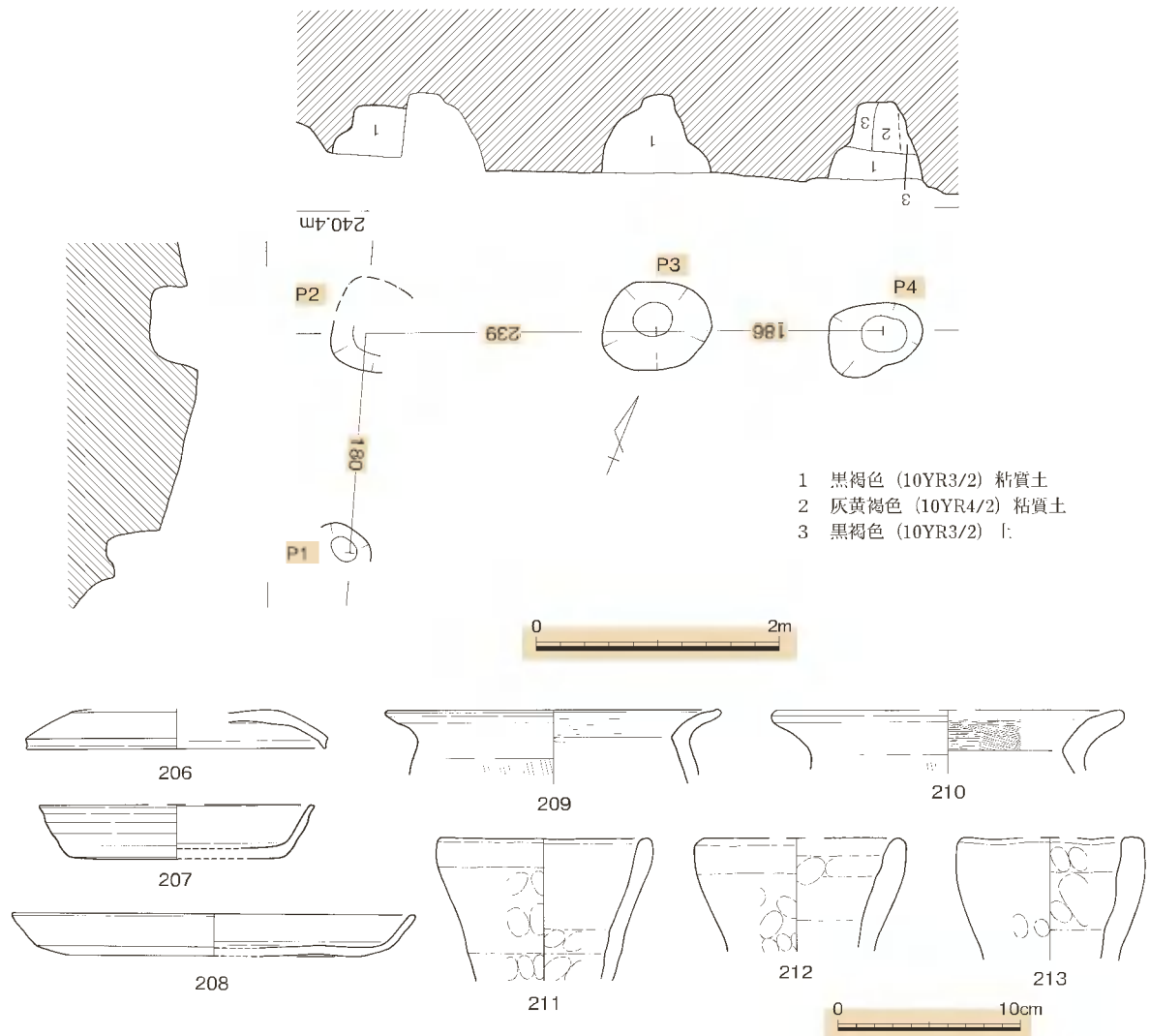
### 掘立柱建物1 (第180・184図)

G区の南東部、山王山の丘陵裾緩斜面で検出された。現状で2×2間以上の規模をもつ。北辺と西辺のなす角度は98°で、P4の直径が小さく、P5との柱間が広いことから、掘立柱建物とすることに不安もある。柱穴は円形で、直径が42~67cm、P6では直径25cmの柱痕を認めた。棟方向は不明だが、西辺の方向はN-12°-Wを測る。204はP5、205はP2出土。8世紀前半の建物か。(岡本寛)



- 1 黒褐色 (10YR3/2) 土
- 2 黒褐色 (10YR3/2) 粘質土

第184図 掘立柱建物1 (1/60)・出土遺物 (1/4)



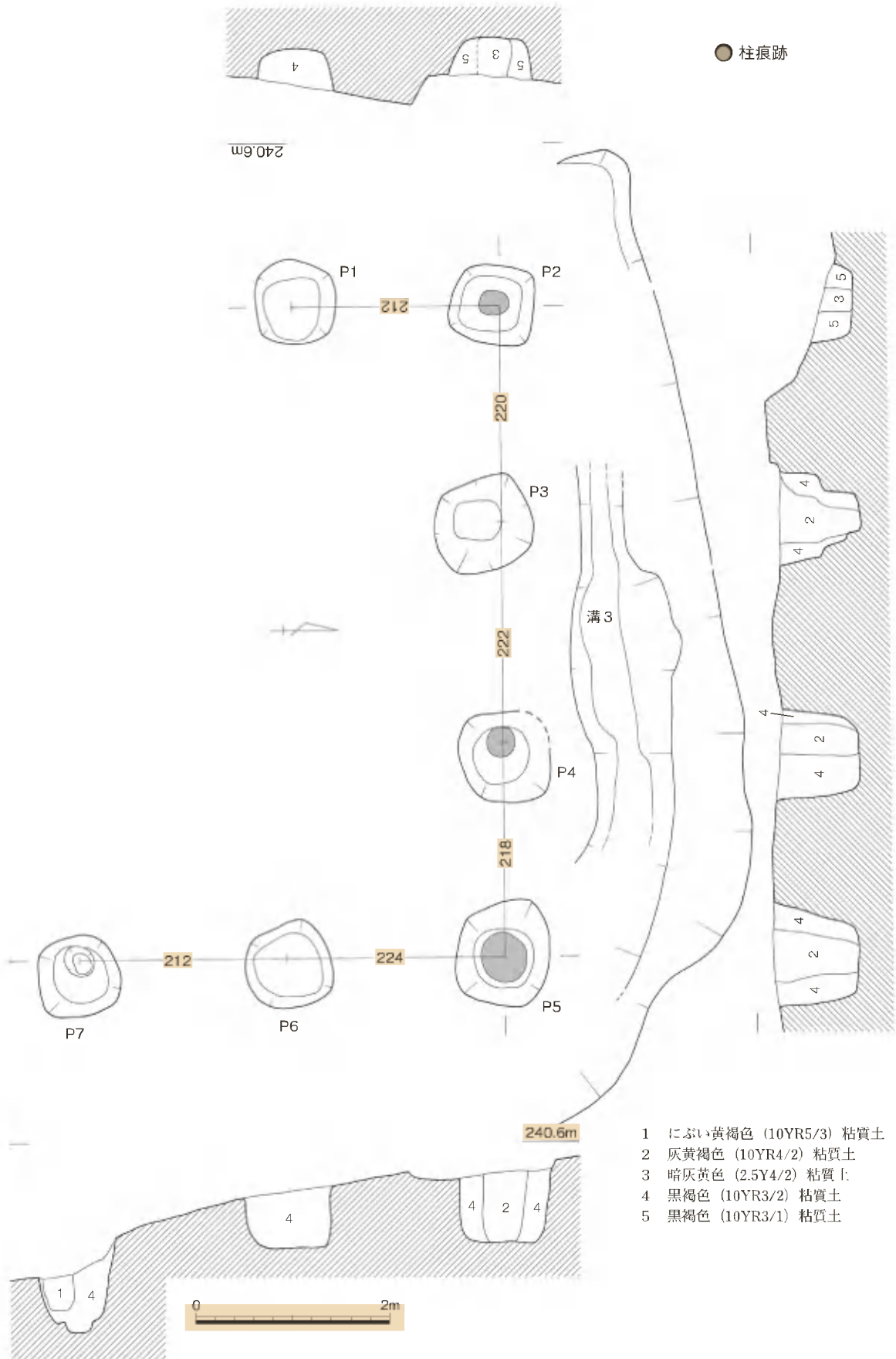
第185図 掘立柱建物2 (1/60)・出土遺物 (1/4)

掘立柱建物2 (第180・185図)

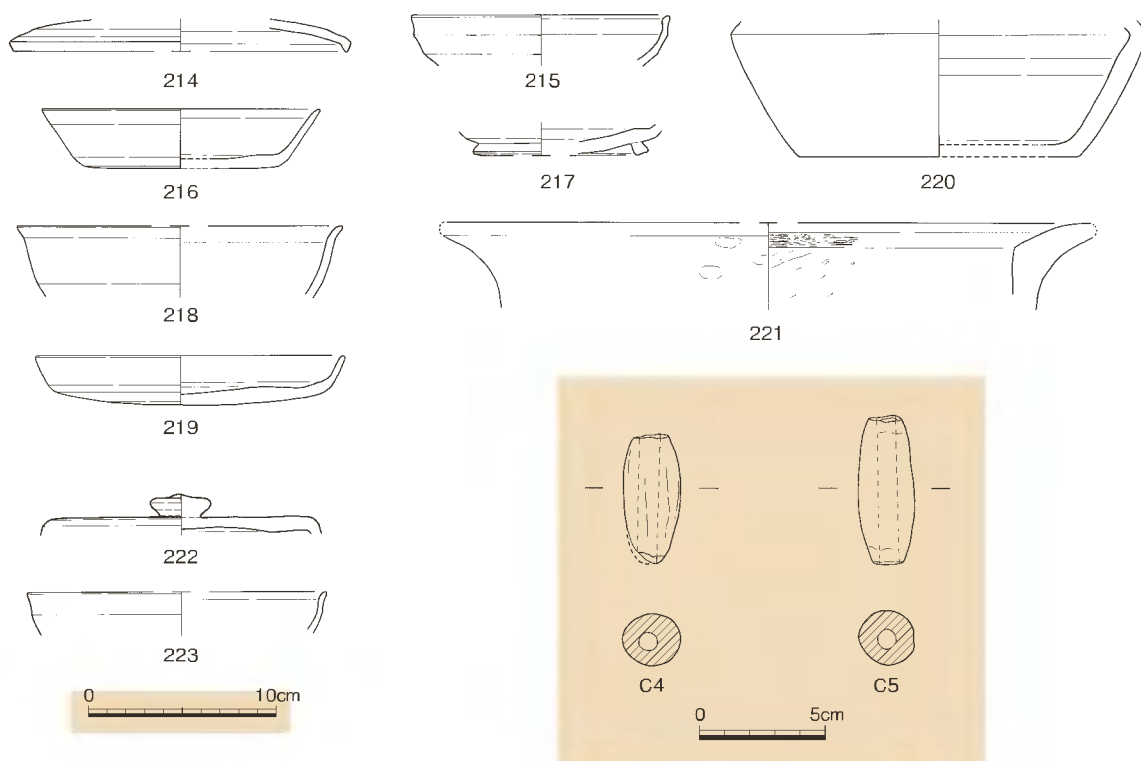
G区の南東部、掘立柱建物1の西3mに位置する。建物の南東部には電柱があり、一部調査できなかったが、北辺は2間と考える。P1は後世の削平を大きく受け、この建物の柱穴が確実ではない。また、P2は重複する掘立柱建物3の柱穴によって壊されている。P3は直径91cm、深さ65cmを測り、P4断面の柱痕幅は23cmである。北辺の方向はN-68°-Eを測る。柱穴P2～4からは大量の土器片が出土し、焼塩土器が多くを占めていた。土器の年代から8世紀前半の建物と考える。(岡本寛)

掘立柱建物3 (第180・186・187図)

G区の南東部にあり、掘立柱建物2と重なる。柱穴の切り合い関係から、建物3が建物2より新しいと判断される。丘陵裾の緩斜面を削り込んで平坦面を造成して、そこに建物を建てている。建物の中央部に未掘部分を残すが、桁行3間、梁間2間の側柱建物と想定され、桁行全長660cm、梁間全長436cm、床面積は28.8㎡と推測される。棟方向はN-89°-Eで、ほぼ真東西に置く。柱穴の形状はやや不整形なものが多いが、隅丸方形を意図したと思われる、長軸が85～110cm、深さは最大で89cmを測る。柱痕跡が桁行の柱穴で確認され、その直径は31～51cmであった。北東角と南東角の柱穴の底面高度に57cmの差がみられたが、これは柱を安定させるために地山まで深く掘り下げたため、建築前の地形



第186図 掘立柱建物3 (1/60)



第187図 掘立柱建物3出土遺物 (1/4・1/3)

の傾斜を示していると考え。この考えからすると、梁行の中央柱穴は浅すぎることになる。

建物の北側には削平によってできた深さ20cm程度の段があり、そこに建物の雨落ち溝と考えられる溝3が掘られていた。また、柱穴P3から50～100cm南で長径68cmと47cmの2か所の被熱面が認められたが、建物との関係は不明である。

柱穴から遺物がかかり出土したが、焼塩土器はほとんど含まれなかった。222・223は溝3、土錘C4・5はP6出土である。遺物などで8世紀前半から中頃にかけての建物と考える。(岡本寛)

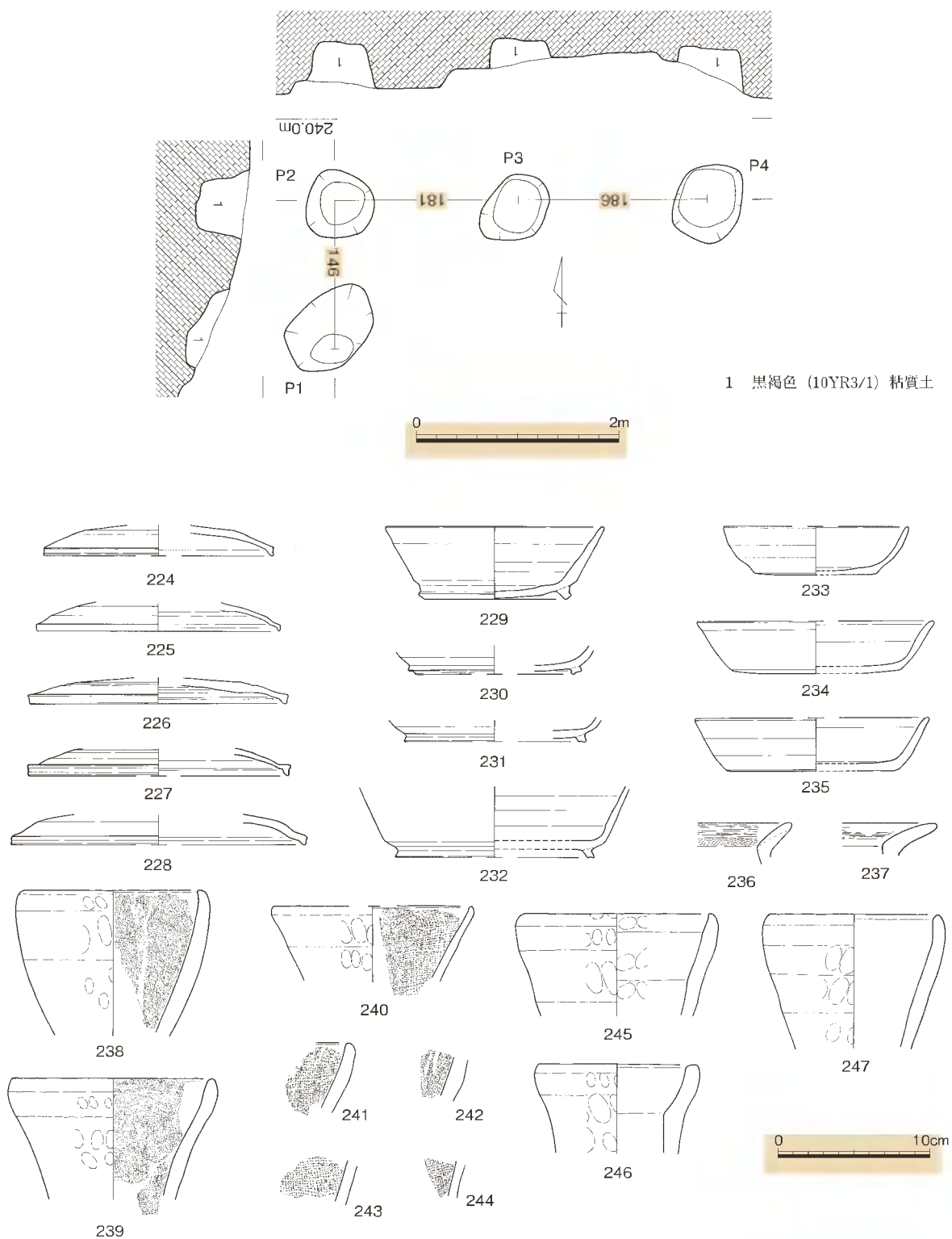
#### 掘立柱建物4 (第180・188図、図版29-2)

G区の南東部にあり、掘立柱建物3と掘立柱建物5に挟まれている。建物3との間隔は1mほどで、同時存在は困難であろう。近世以降の石垣の基礎工事でかなり破壊を受けていたが、北辺は2間と考えられる。P1については、規模や位置関係からこの建物の柱穴としたが、確実とはいえない。柱穴は不整形な楕円形だが、柱の抜き取りによって方形が変形したと考えられなくもない。P2～4は長径70～83cm、深さ30～51cmを測る。北辺の方位はN-90°-Eで、建物3の棟方向とほぼ平行する。

柱穴P2～4からは多量の土器片が出土し、焼塩土器片が半分以上を占めた。掘立柱建物2と同様に、柱を抜き取り、土器を投棄した可能性が高い。この建物の年代は8世紀前半と考える。(岡本寛)

#### 掘立柱建物5 (第180・189図、図版29-3)

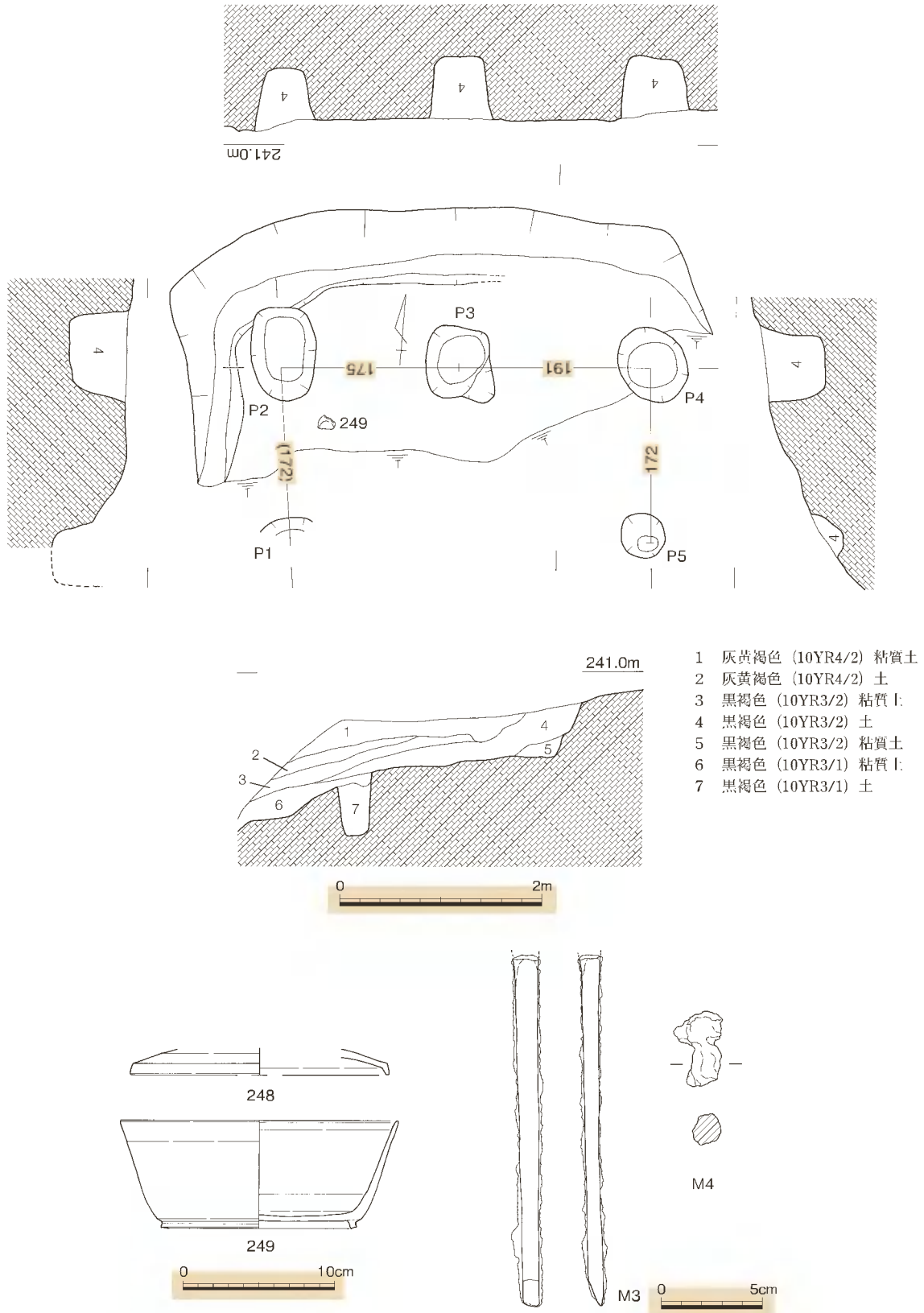
G区の南端中央付近、掘立柱建物4から2m西に位置し、南半部は近世以降に大きく破壊される。掘立柱建物3と同じように丘陵斜面を削り込み、幅500cmほどの平坦面を造成して建てられていた。丘陵側の段差は90cmに達する。平坦面の西辺から北辺にかけては雨落ち溝とみられる窪みが検出され、その幅は40cm前後である。北辺は2間で、全長は366cmになる。P1・5がこの建物の柱穴かは確実でない。P2～4は長径76～93cm、深さ60～63cmを測る。P2やP3をみると、柱の抜き取りによっ



第188図 掘立柱建物4 (1/60)・出土遺物 (1/4)

て方形が変形した可能性もある。北辺の方位はN-85° -Eで、掘立柱建物4とはやや異なる。

柱穴からは遺物が少し出土し、焼塩土器もみられた。M4の鉄塊はP2から出土した。249は削平面の直上から出土した。M3の鉄鑿は削平面の上部に堆積した埋土中から出土したが、出土位置が確



第189図 掘立柱建物5 (1/60)・出土遺物 (1/4・1/3)

定できなかった。断面土層図の第1・2層出土なら中世の可能性はあるが、ここではより下層の古代包含層出土としておく。遺物などから掘立柱建物5の年代は8世紀後半とみられる。(岡本寛)

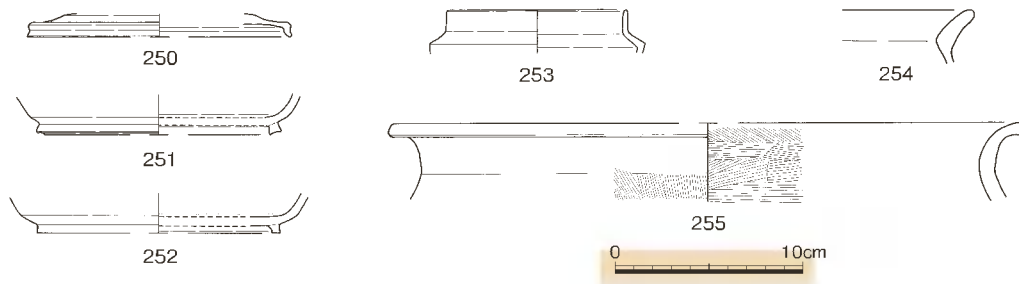
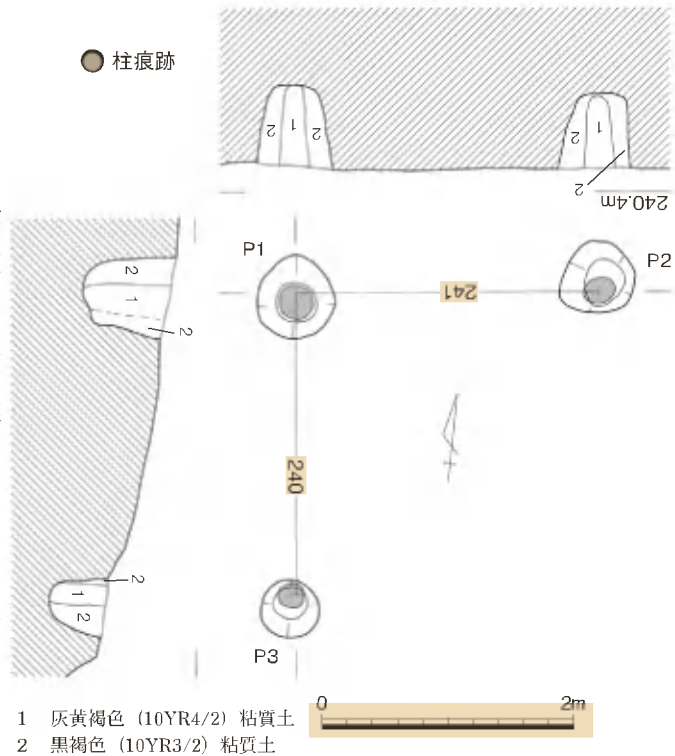


掘立柱建物6 (第180・190図)

G区の南東角にある。東西1間、南北1間が確認され、南東角で柱穴が見つからなかったため、桁行・梁行ともに東・南へさらに延びると考える。柱穴は円形で、長径が47~67cm、深さは46~85cmあり、各柱穴で柱痕を確認した。柱痕の幅は18~27cmを測る。掘立柱建物4・5と比べると、柱穴が小さく柱間は長いため、性格の異なる建物と判断できる。北辺の方向はN-84°-Eを測り、掘立柱建物5とほぼ平行する。

柱穴からはかなり多くの土器片が出土し、鉄滓も1点出土したが、明瞭な焼塩土器は見あたらなかった。遺物の年代は8世紀前半を示す。

(岡本寛)

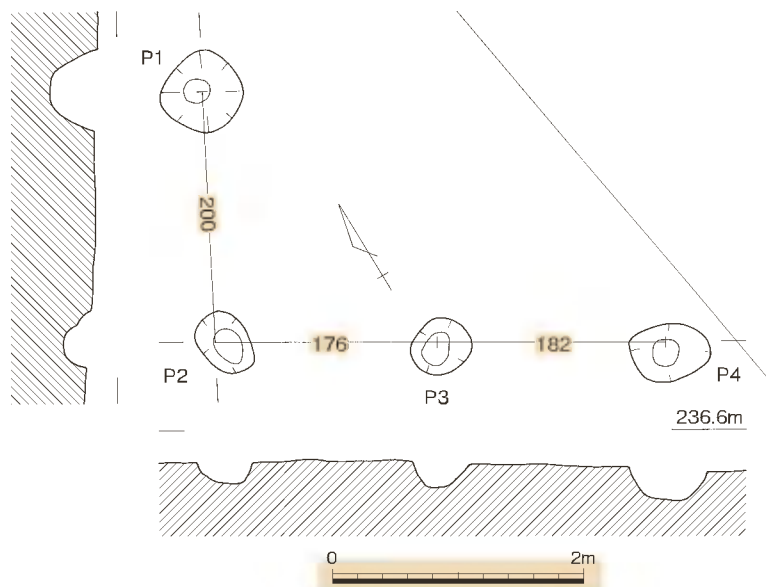


第190図 掘立柱建物6 (1/60)・出土遺物 (1/4)

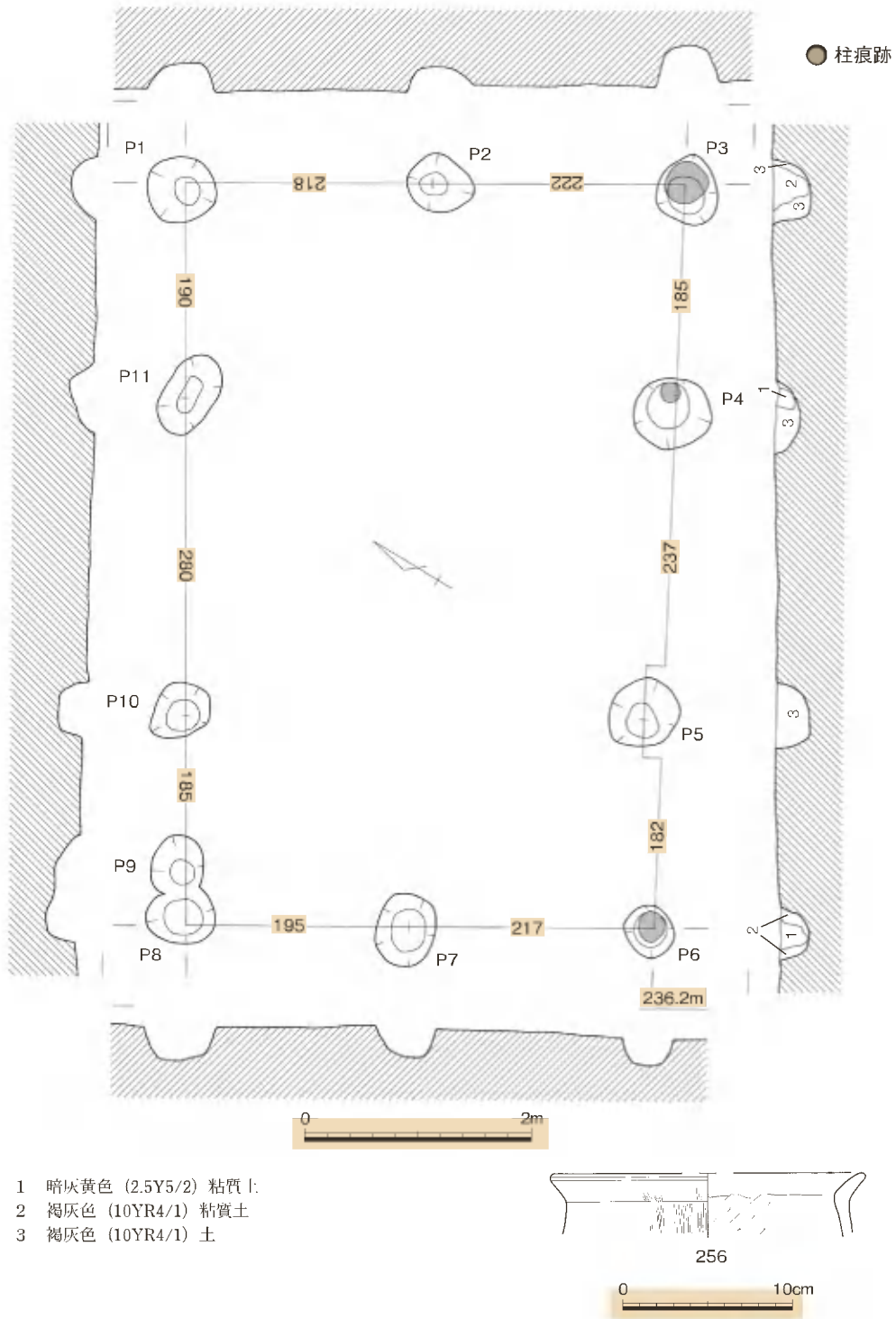
掘立柱建物7 (第181・191図)

E区の北東端で南西辺2間と北西辺1間を検出した。南西辺の柱間が北西辺の柱間より狭いため、棟方向は南東-北西方向と想定され、南西辺でN-58°-Wを測る。柱穴は不整円形で、長径が49~65cm、深さは21~37cmであった。柱穴埋土は褐灰色弱粘質土で、炭粒や焼土を含む。遺物は土師器1片で、埋土から古代の建物と判断した。

(岡本寛)



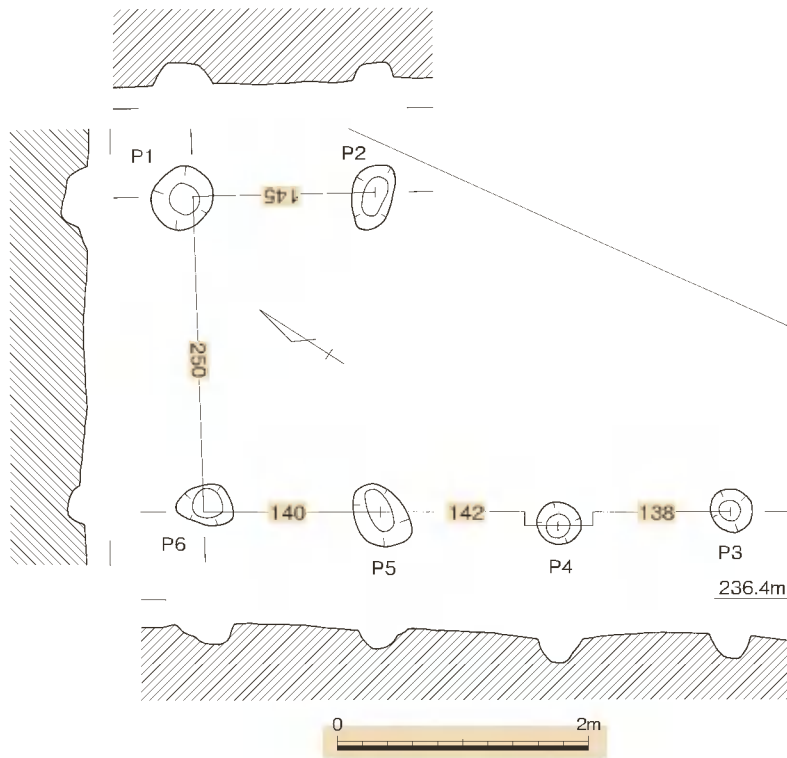
第191図 掘立柱建物7 (1/60)



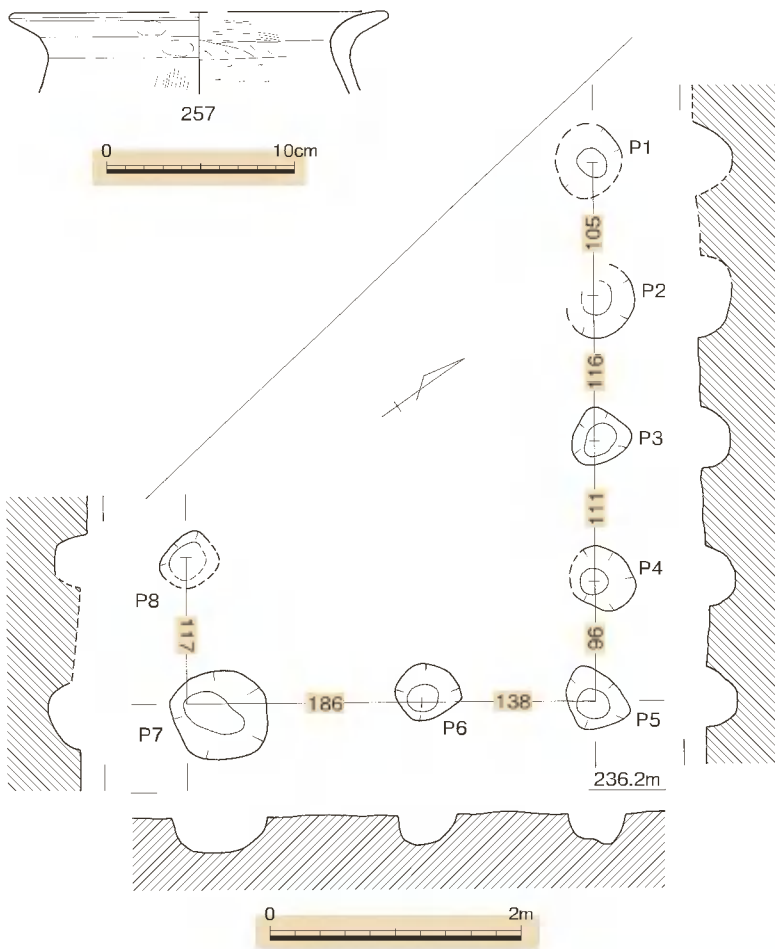
第192図 掘立柱建物8 (1/60)・出土遺物 (1/4)

掘立柱建物8 (第180・181・192図、図版29-4)

E区の北半にあり、掘立柱建物9と近接し、掘立柱建物10と重なる。桁行3間、梁間2間の規模で、棟方向は北東-南西方向をとり、N-56°-Eである。桁行全長655cm、梁間全長440cm、床面積は28.0㎡を測る。桁行の中央の柱間が両脇より広い。柱穴の形状は不整形な円形で長径が46~75cm、深さは22~35cmである。柱痕の認められる柱穴があり、直径15~20cmの柱が推定される。柱穴からは土師器、須恵器がいくらか出土し、その年代は7世紀とみられる。256はP3から出土した。(岡本寛)



第193図 掘立柱建物9 (1/60)



第194図 掘立柱建物10 (1/60)・出土遺物 (1/4)

掘立柱建物9 (第181・193図)

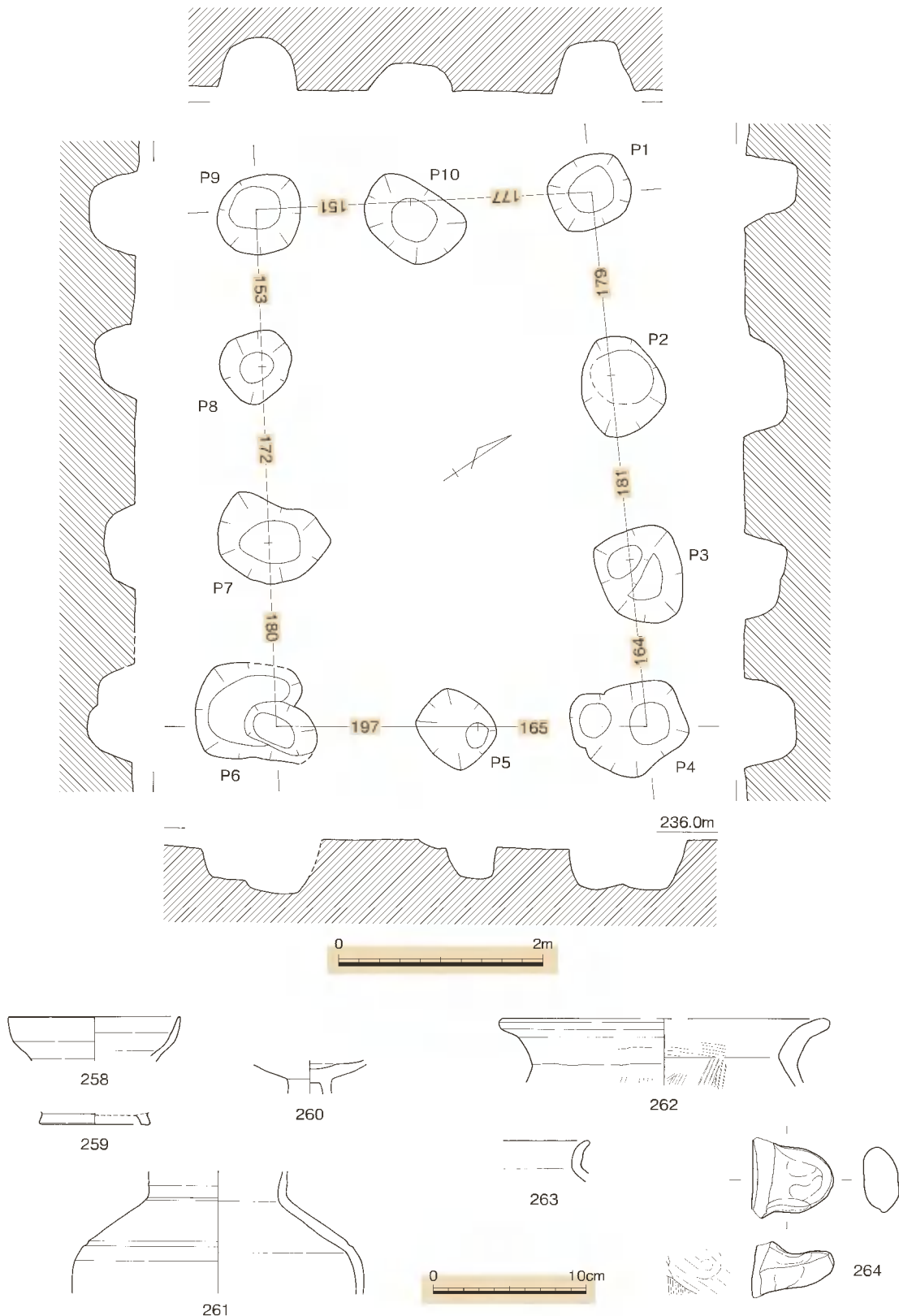
E区の北半、掘立柱建物8の東に近接する。桁行3間、梁間1間で、棟方向は南西桁行でN-29°-Wを測る。桁行の柱間は均等で、桁行全長が420cm、床面積は推測で10.5㎡となる。柱穴は円形で長径は36~56cm。遺物はなく、黒褐色粘質土の埋土から古代とした。(岡本寛)

掘立柱建物10 (第181・194図、  
図版29-4)

E区の北半、掘立柱建物8の西にある。梁間は2間で、桁行は4間分を検出したものの全形は確定できない。現状で床面積は13.9㎡と推測される。柱穴は不整円形で、長径が46~81cm、深さは24~29cm、北東辺の方向はN-55°-Wを測る。柱穴からは須恵器、土師器片が少量出土し、257はP4出土である。(岡本寛)

掘立柱建物11 (第181・195図、  
図版29-4・5)

E区の中央部で検出された。掘立柱建物12と重複し、建物11から建物12に建て替えられたと考える。棟方向の類似した掘立柱建物10からは4m東に位置する。桁行3間、梁間2間で、桁行全長524cm、梁間全長362cm、床面積は18.9㎡を測る。棟の方向はN-58°-W。柱穴は大形で深く、不整形だが、四隅の柱穴などは隅丸方形に見えなくもない。柱穴の長径は75~110cm、深さ29~51cmである。柱穴の埋土は黒褐色粘質土で、焼土

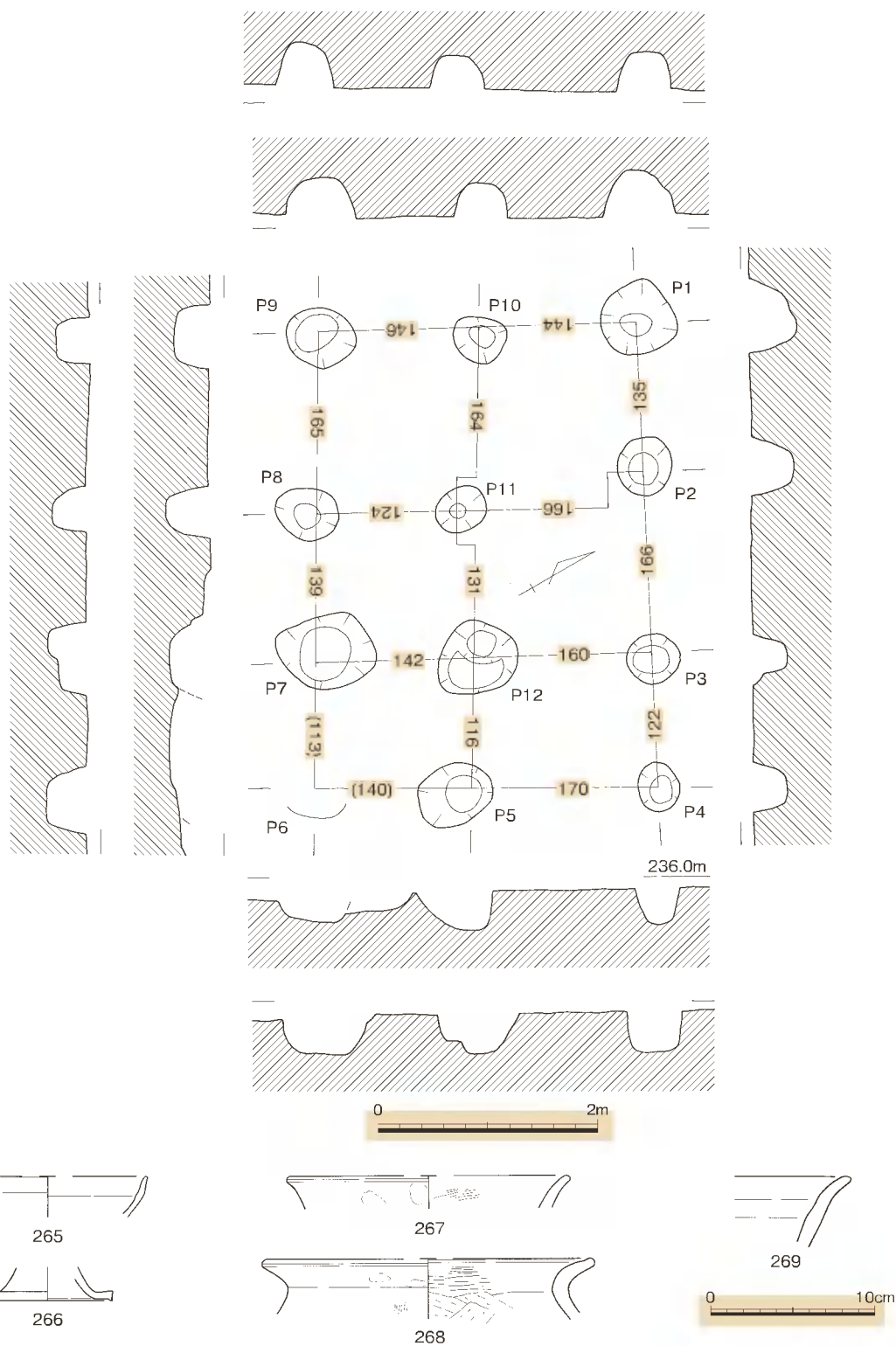


第195図 掘立柱建物11 (1/60)・出土遺物 (1/4)

や炭を多く含む。全柱穴から須恵器、土師器が出土し、7世紀後半とみられる。 (岡本寛)

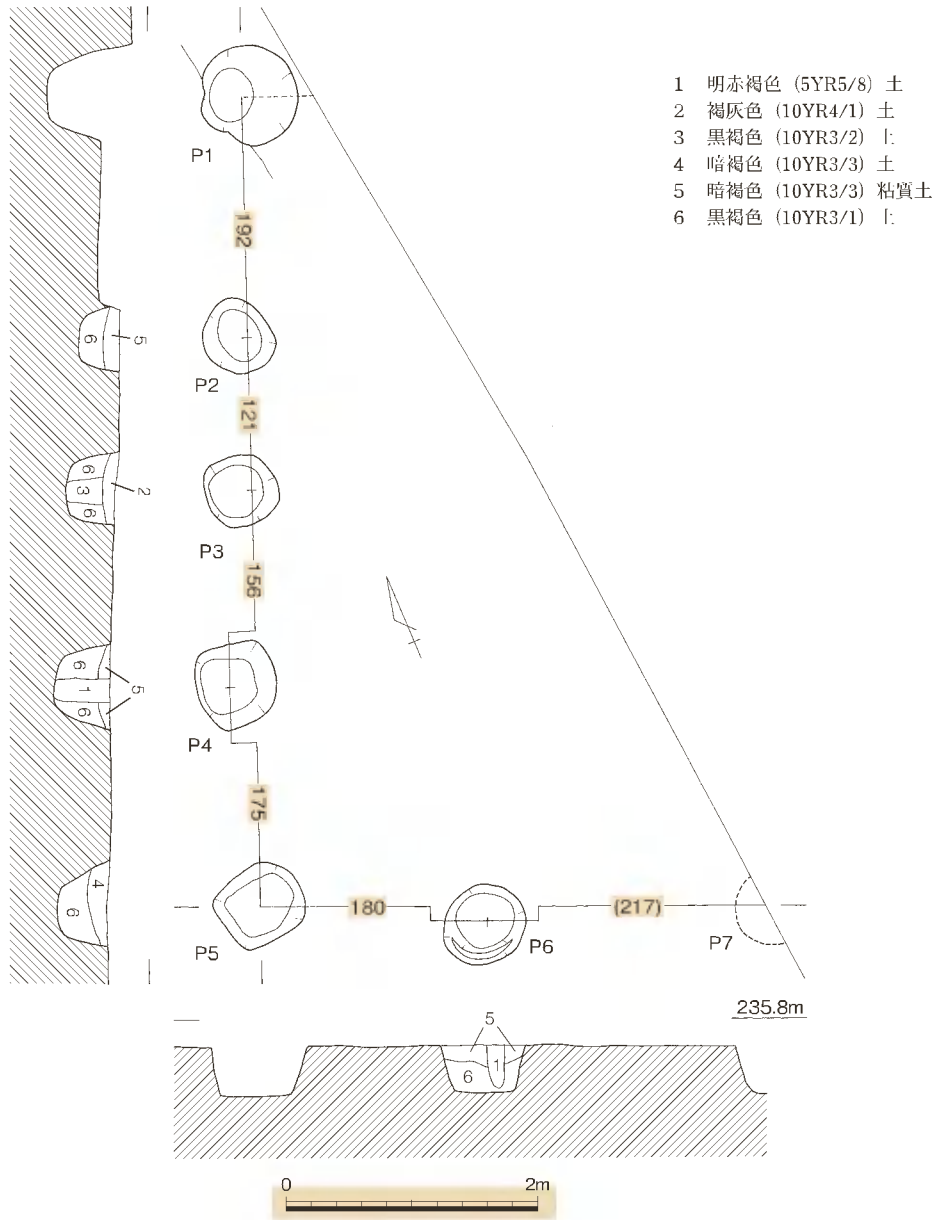
掘立柱建物12 (第181・196図、図版29-5)

E区の中央部にある。掘立柱建物11を建て替えたもので、一部の柱穴は建物11の柱穴と同じ位置に



第196図 掘立柱建物12 (1/60)・出土遺物 (1/4)

掘り直されている。建物の規模は桁行3間、梁間2間と同じであるが、建物11が側柱建物であったのに、建物12は建物内に東柱をもつ総柱建物となっている。桁行全長が423cm、梁間全長は312cm、床面積は12.7㎡を測り、建物11よりは小さくなっている。棟の方向はN-59°-Wである。柱穴は不整円形で、長径が45~93cm、深さは30~48cmとやはり建物11より小さい。柱穴の埋土は黒褐色粘質土で、焼土・炭を多く含み、白色粘土の見られるものもあった。7世紀代の土器が出土した。(岡本寛)



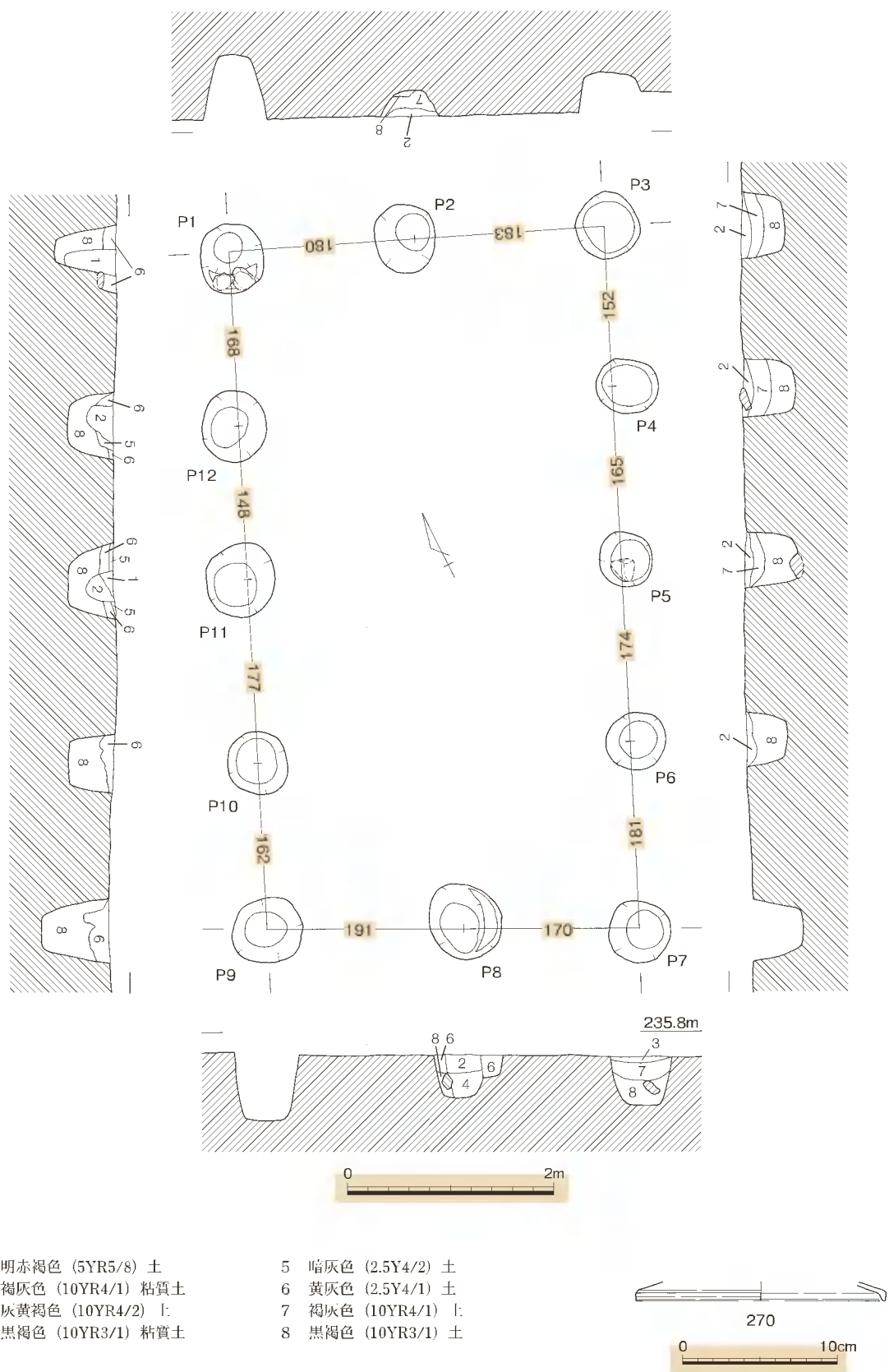
第197図 掘立柱建物13 (1/60)

**掘立柱建物13** (第181・197図、図版30-2・31-1)

D区北東地点で検出した建物で、東側は調査区外に延びる。柱の間隔は一定ではないが、4×2間と考えている。柱穴の平面形は一定せず、略方形のもの、円形、楕円形のものなどが認められる。掘立柱建物17と主軸がほぼ等しく、掘立柱建物11・12とおおよそ直交することから、一連の建物群と考えたい。ただ、掘立柱建物14とは距離の近さから同時並存の可能性は低いと考える。(上村)

**掘立柱建物14** (第181・198図、図版30-2)

D区で掘立柱建物13の南50cmに位置する4×2間の建物である。掘立柱建物13と主軸がほぼ揃うものの、近過ぎる位置関係から同時並存の可能性は低いと判断する。掘立柱建物11・12とほぼ直交する主軸方向であり、それらが重複した位置関係にあることから、掘立柱建物11・12と掘立柱建物13・14の1棟ずつが関連をもって建築された可能性も考えられる。P1では柱の抜き取り痕が確認できたが、そこから判断できる柱は円形で、直径は25cmを測った。(上村)



第198図 掘立柱建物14 (1/60)・出土遺物 (1/4)

掘立柱建物15 (第181・199図、  
図版30-2)

D区で掘立柱建物14の東1mに位置する建物である。東側は調査区外に延びるため、建物規模は不明である。南側には掘立柱建物16が近接する。柱穴の直径は30~50cmを測る。

柱穴からは土器片が出土しているが、P2出土の271のみ図示し得た。(上枠)

掘立柱建物16 (第181・200図、  
図版30-2)

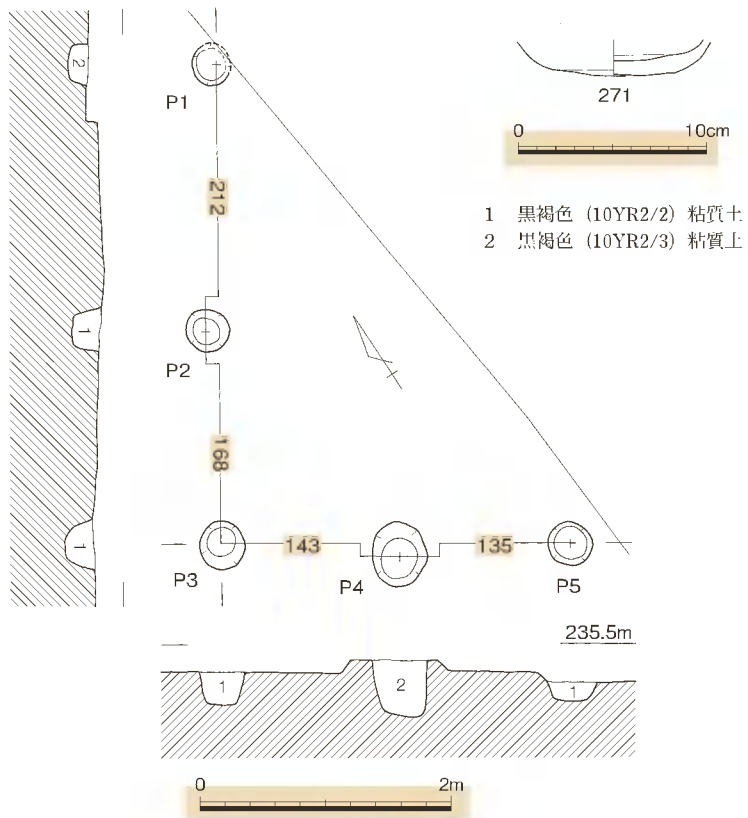
D区で掘立柱建物15の南1.5mの位置で検出した建物である。掘立柱建物15と主軸がほぼ等しく、西側柱穴は掘立柱建物15のそれと並ぶ。建物規模は1×1間であるが、調査区外に延びる可能性がまったくないわけではない。柱穴は30~40cmである。(上枠)

掘立柱建物17 (第181・201図、  
図版30-2・31-2)

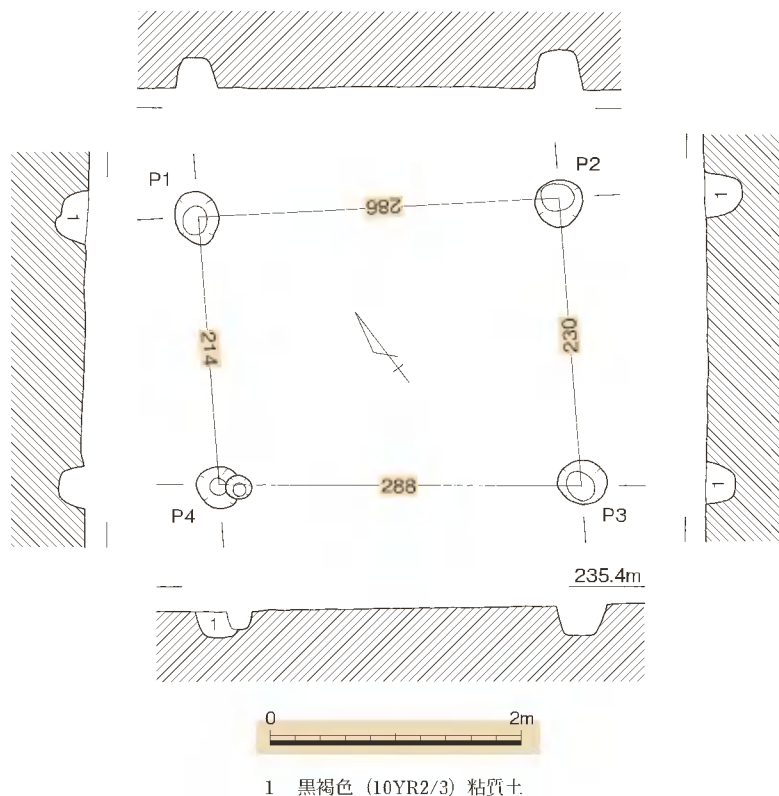
D区で掘立柱建物14の南2.5mの位置で検出した3×2間の建物である。柱穴の平面形は、略方形のものも認められるが、基本は円形であり、規模は50~70cmを測った。主軸は掘立柱建物13・14とおおよそ一致することから関連性が考えられるが、規模は一回り小さい。

272はP10出土の土師器である。内外面ともに丁寧に磨いて丹塗りを施していた。内面には渦巻き状の暗文が認められる。

土器から建物の時期は8世紀前半と考える。(上枠)

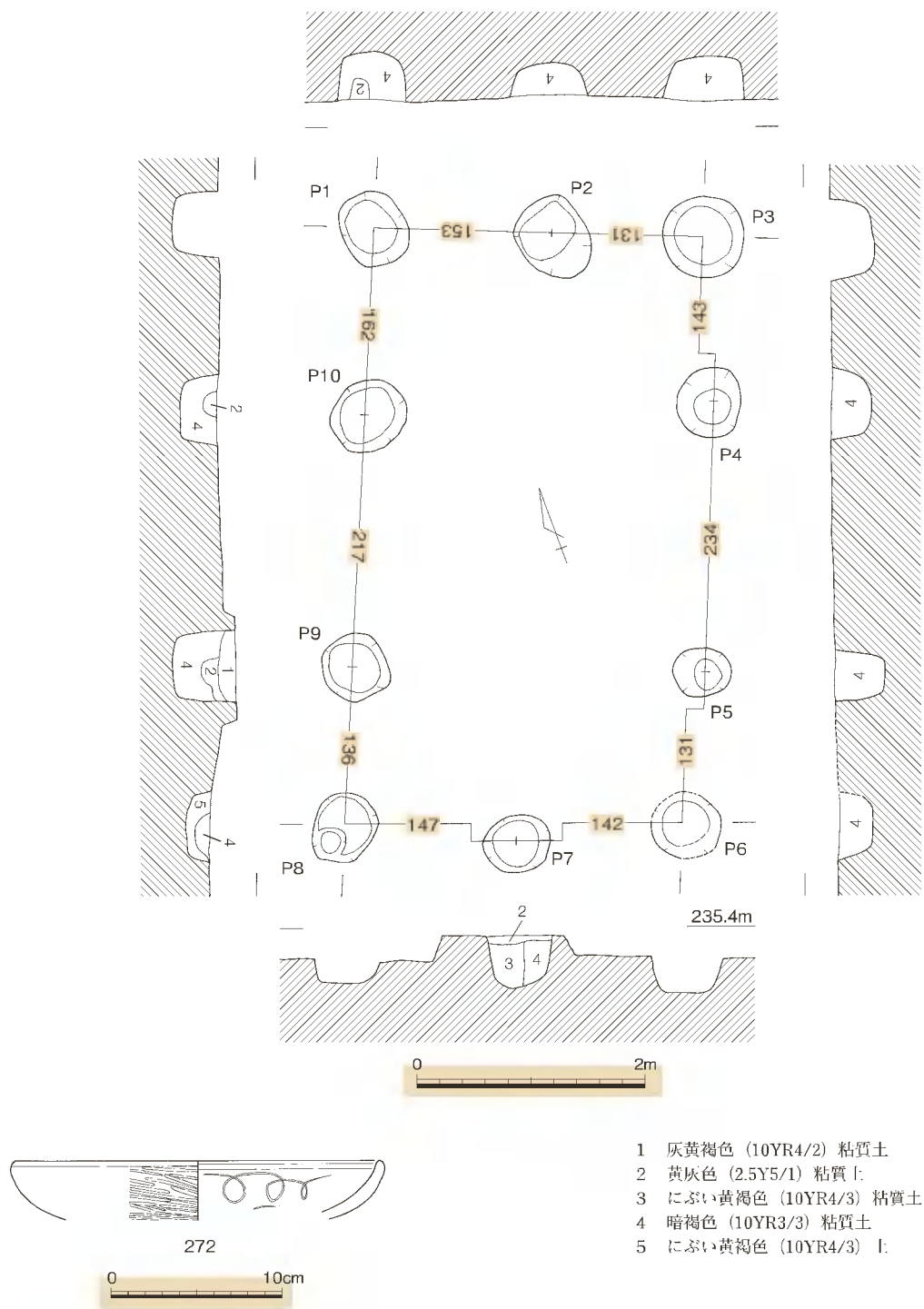


第199図 掘立柱建物15 (1/60)・出土遺物 (1/4)



第200図 掘立柱建物16 (1/60)

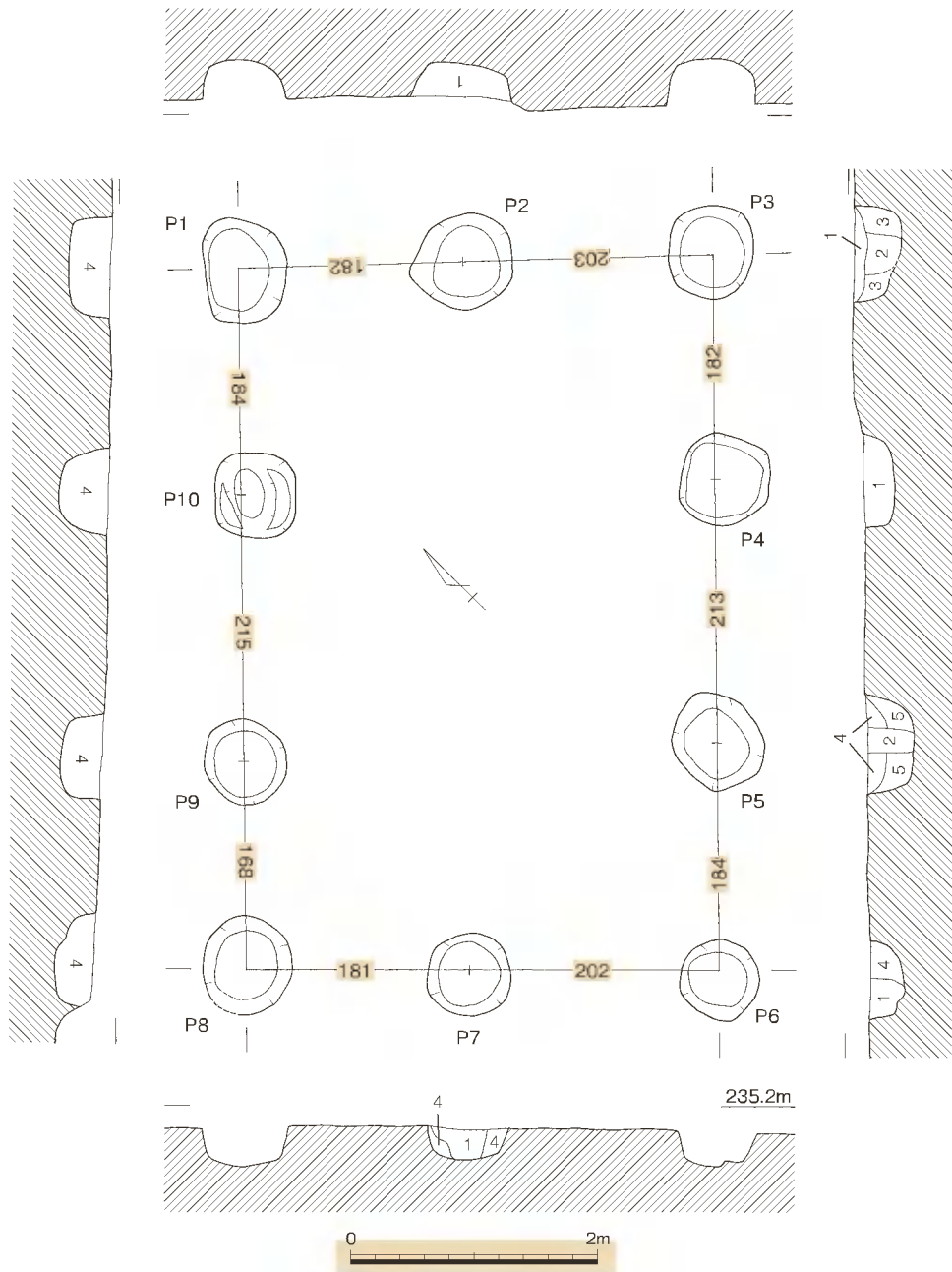




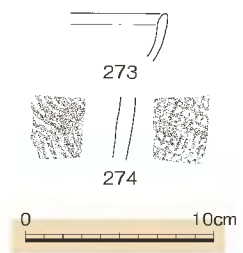
第201図 掘立柱建物17 (1/60)・出土遺物 (1/4)

掘立柱建物18 (第181・202図、図版30-2・31-3)

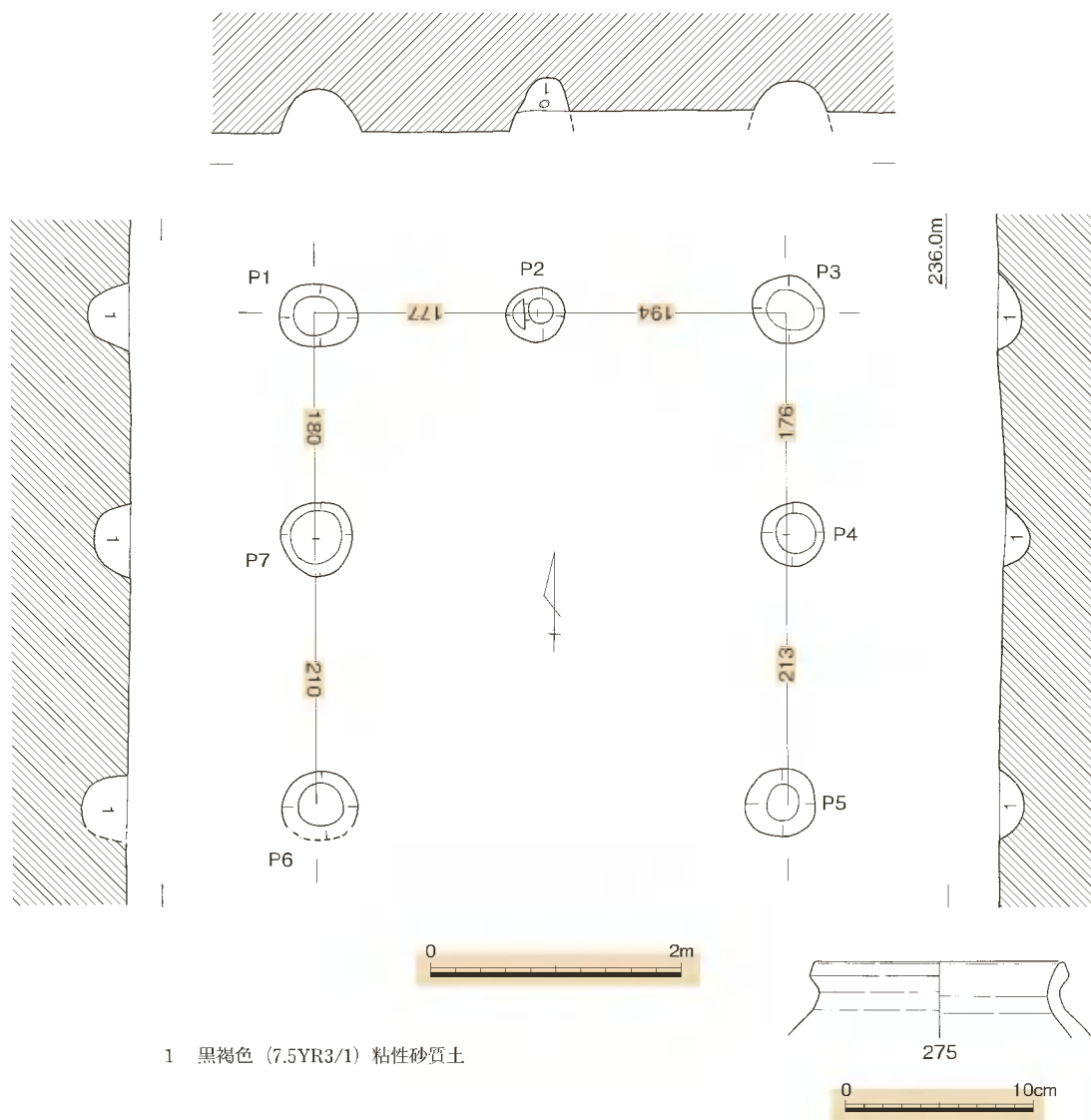
D区で掘立柱建物17の南東2mの位置で検出した3×2間の掘立柱建物である。後述する柱穴列2とほぼ等しい主軸を示す。柱穴は略方形のものも認められるが、基本は円形であり、規模は50~70cmである。P5では柱の抜き取り痕が認められたが、そこから判明した柱は円形で、直径は20~32cmを測った。柱穴からは土器片が出土しており、273・274のみを図示し得た。いずれもP1から出土したものである。時期は古代の範疇に入る。 (上梅)



- 1 褐灰色 (10YR5/1) 粘質土
- 2 黄灰色 (2.5Y5/1) 粘質土
- 3 黒褐色 (10YR3/1) 粘質土
- 4 褐灰色 (10YR4/1) 粘質土
- 5 にぶい黄色 (2.5Y6/3) 粘質土



第202図 掘立柱建物18 (1/60)・出土遺物 (1/4)



第203図 掘立柱建物19 (1/60)・出土遺物 (1/4)

**掘立柱建物19 (第181・203図)**

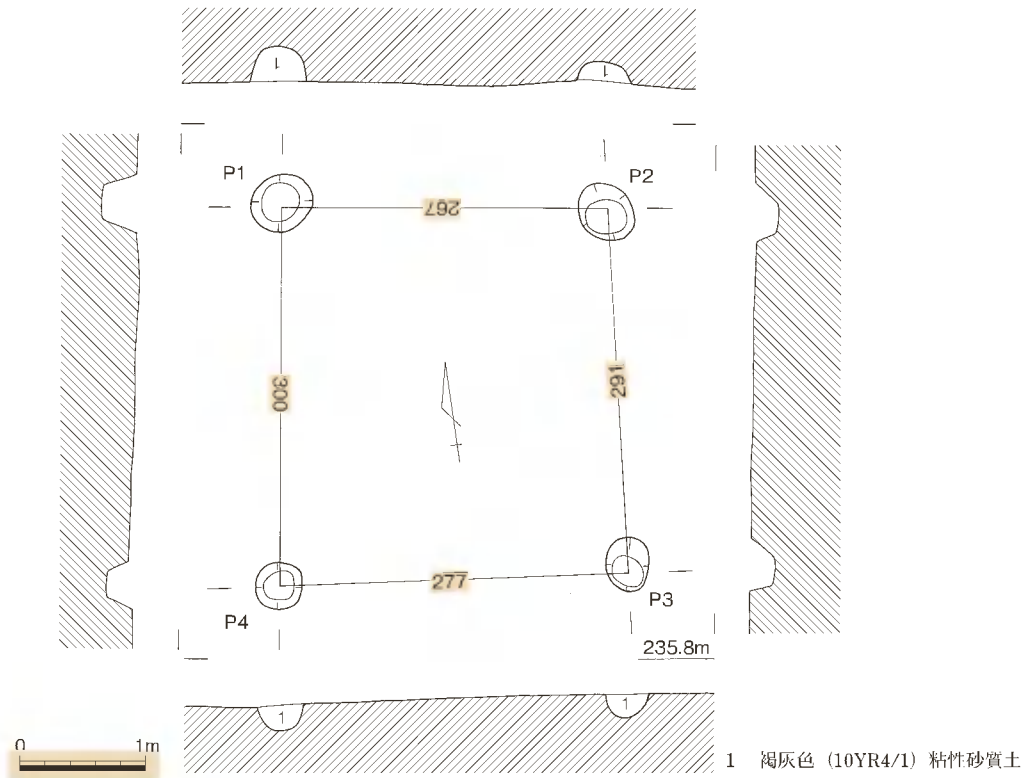
側道調査区のN1区で検出した掘立柱建物である。調査区の西端に位置するため、調査区外に延びる可能性がある。現状では2×2間の規模で、床面積は14.47㎡を測る。主軸はおおよそ南北に向く。275は須恵器の壺で、P1から出土した。275の特徴と柱穴埋土の色調から古代の範疇に収まると考えられる。(浅倉)

**掘立柱建物20 (第181・204図)**

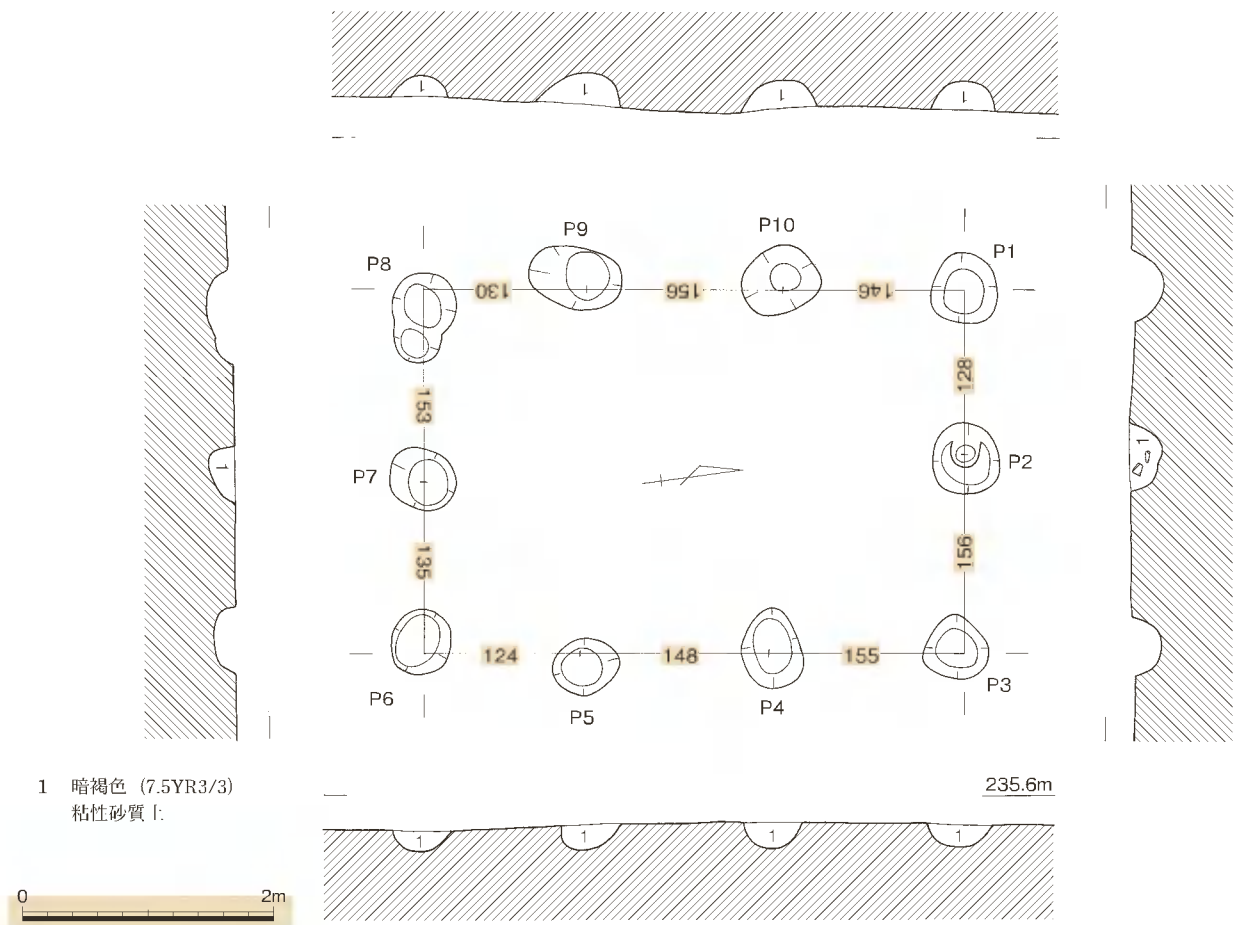
掘立柱建物19の南10mの地点に位置する。1×1間の規模であるが、柱穴は直径40～50cmと大形である。深さは30cmほどであるが、検出面からの計測値である。遺物は出土していないが、埋土の色調などから古代の建物と考えられる。(浅倉)

**掘立柱建物21 (第181・205図)**

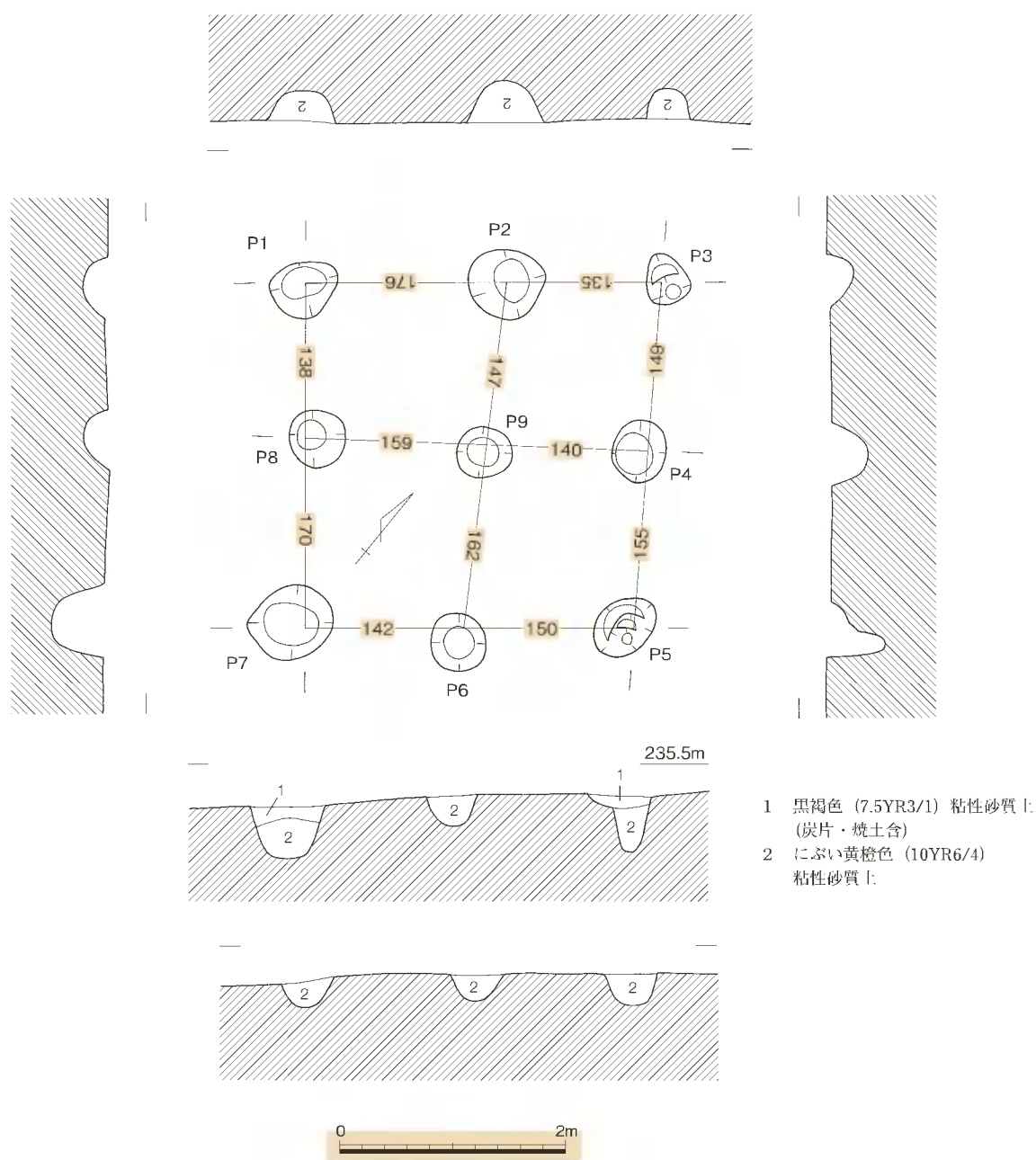
掘立柱建物20の6mほど南の地点に位置する、3×2間の側柱建物である。床面積は12.44㎡を測った。柱穴の直径は45～60cmと大形である。遺物は出土していないが、埋土の色調などから古代の建物と考えられる。(浅倉)



第204図 掘立柱建物20 (1/60)



第205図 掘立柱建物21 (1/60)



第206図 掘立柱建物22 (1/60)

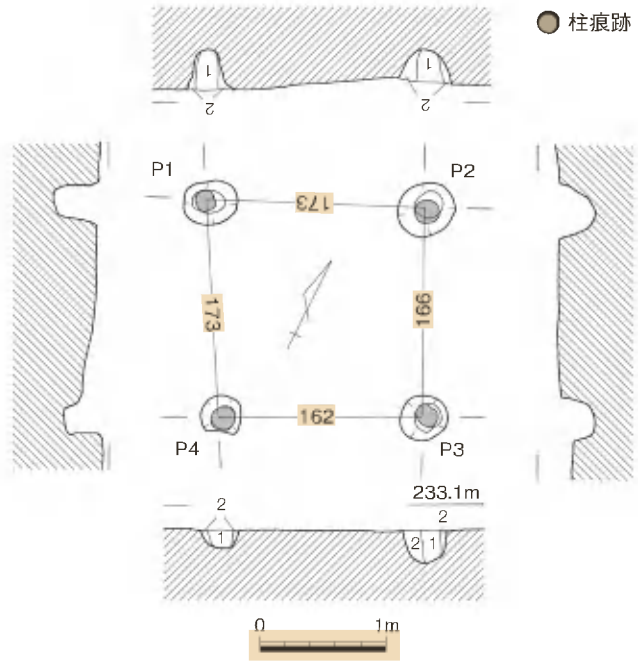
掘立柱建物22 (第181・206図)

掘立柱建物21の南3mの地点に位置する掘立柱建物である。2×2間の総柱建物である。柱穴は45～70cmと大きく、深さは25～50cmと一定しない。桁行309cm、梁間311cmとほぼ正方形の建物と考える。なお、主軸はN-33°-Wである。尾崎遺跡で検出した古代の総柱建物は3棟のみである。後述する掘立柱建物25は桁行383cm、梁間350cmで、主軸はN-7°-Wであり、2棟の建物の特徴は異なっているが、性格はいずれも倉庫と考えたい。

遺物はまったく出土していないが、埋土の特徴などから古代の範疇で考えておく。(浅倉)

掘立柱建物23 (第183・207図)

B区の南端にあり、1×1間の規模である。竪穴住居の可能性も考えたが、周辺の土層観察から掘立柱建物とした。床面積は2.99㎡、棟方向はN-29°-Wを測る。柱穴は円形で、長径が35~46cm、幅15~20cmの柱痕を確認した。P2から土師器の小片が出土したが、埋土から古代とした。(岡本寛)



1 黒褐色 (10YR3/1) 土 2 黒褐色 (10YR3/1) 粘質土

掘立柱建物24 (第183・208図)

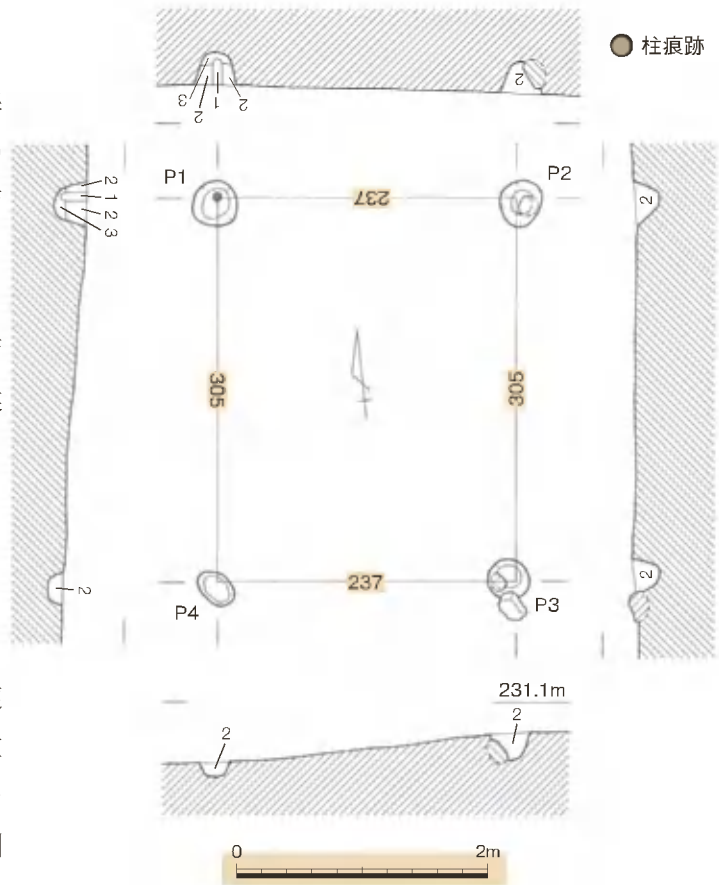
A区の北側東端で検出した建物である。1×1間の規模であるが、東側に延びる可能性はある。柱穴は円形もしくは楕円形で、25~35cmの大きさであった。P1では柱痕が明瞭に認められ、そこから判断できる柱の直径は8cmである。(上村)

第207図 掘立柱建物23 (1/60)

掘立柱建物25 (第183・209図、

図版31-4)

A区の北端部中央で検出した建物である。2×2間の総柱建物。柱穴は黒色基調の包含層に掘り込んでいたが、柱穴の埋土も黒色基調であるため、包含層上面での検出は困難であった。P3以外は、包含層の掘削後に砂層で検出し、P3は、他の柱穴の並びを考慮して、包含層上面で精査を繰り返して検出した。掘立柱建物24の柱穴は、P3とほぼ同様の深さと判断するべきである。(上村)



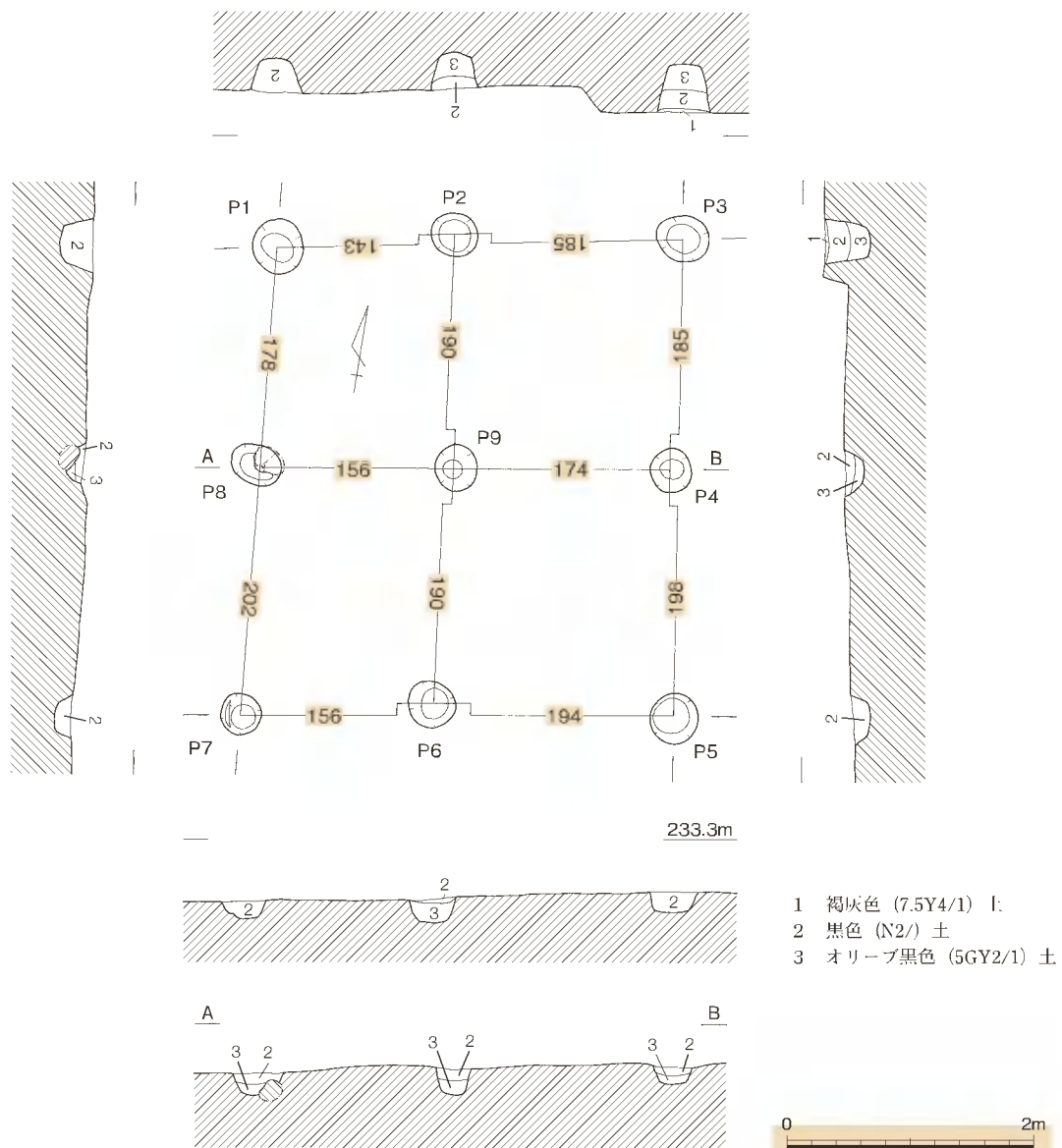
1 黒色 (2.5Y2/1) 土 2 黒褐色 (10YR3/1) 土 3 黒色 (2.5Y2/1) 土

第208図 掘立柱建物24 (1/60)

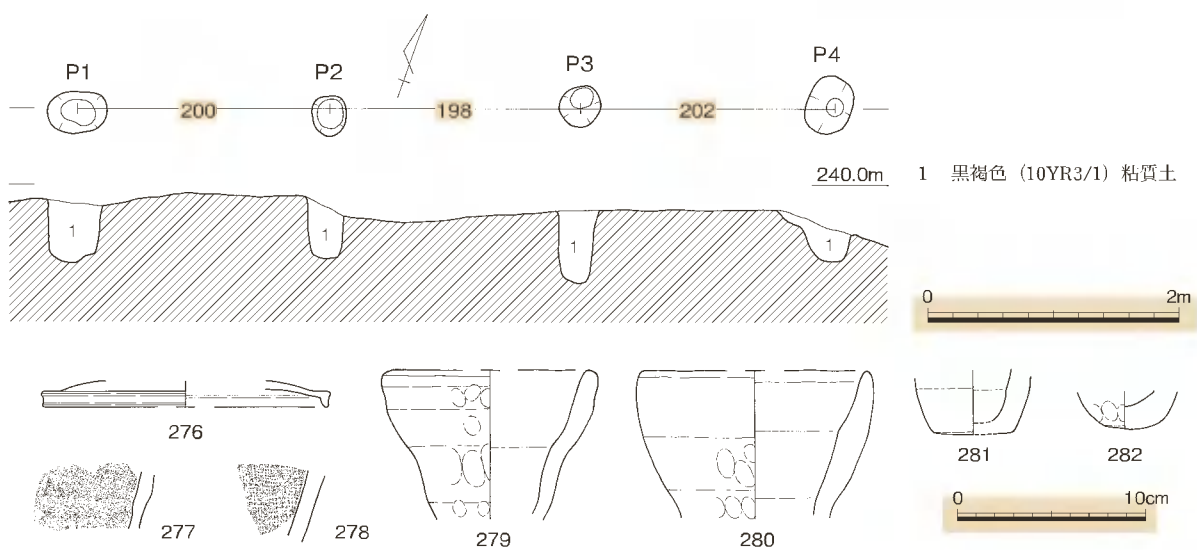
3 柱穴列

柱穴列1 (第180・210図)

G区の南端で掘立柱建物4・5と重複する。3間で、全長は600cmである。柱穴は円形で、長径が32~48cm、深さは41~58cmである。列の方向はN-60°-Eを測る。P3からは奈良時代の土器片が大量に出土し、多くは焼塩土器(277~282)であった。(岡本寛)



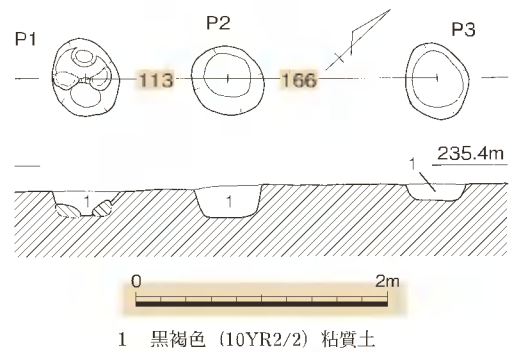
第209図 掘立柱建物25 (1/60)



第210図 柱穴列1 (1/60)・出土遺物 (1/4)

柱穴列2 (第181・211図)

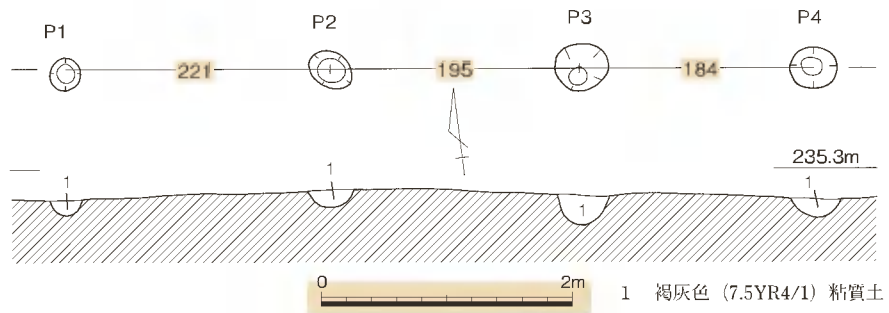
D区で掘立柱建物16の東側に接するように検出した柱穴列である。3個の柱穴の並びであるが、東側に延びる可能性はある。掘立柱建物18と主軸がほぼ揃うという特徴を示す。P1の底部には、柱固定のための円礫が2個据えられていた。(上柵)



第211図 柱穴列2 (1/60)

柱穴列3 (第181・212図)

側道調査区N3区南側で検出した、柱穴が4個一列に並ぶ柱穴列である。ほぼ東西方向で、柱間距離は、東から184・195・221cmと次第に広がっていた。柱穴の直径は25～40cmで、深さは15～25cmを測った。遺物は出土していないが、埋土の色調などから、古代に属するものと考えられる。(浅倉)

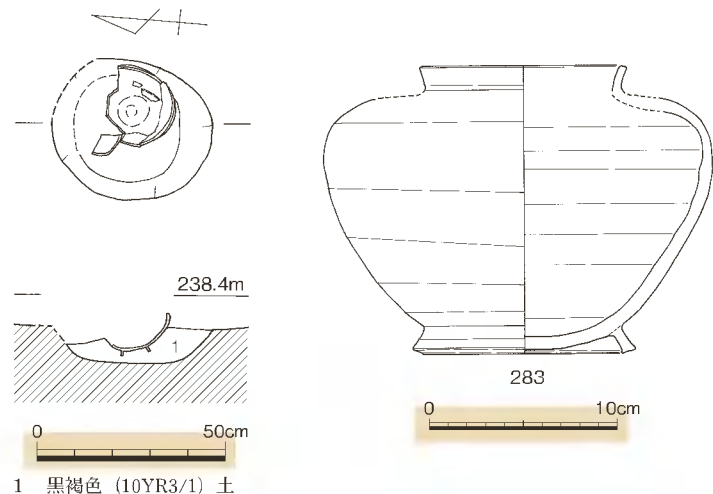


第212図 柱穴列3 (1/60)

4 火葬墓

火葬墓 (第180・213図、図版31-5)

F区東寄りで検出した遺構である。283は中世以降のピットにより胴部1/3が打ち壊され、中世以降の造成により肩部から上が壊されていた。ただ、頸部破片が内側に貼り付くように残っており、短頸壺であると確認できた。283は、土壌を掘ってそこに埋納されていた。人骨は遺存していないが、283の器種と埋納状況から火葬墓と判断した。(上柵)



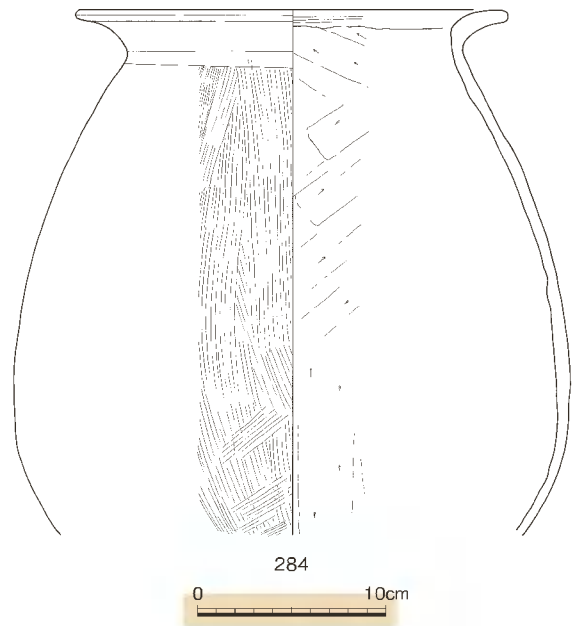
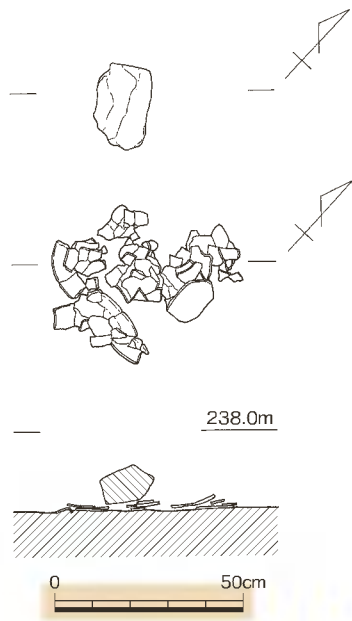
第213図 火葬墓 (1/20)・出土遺物 (1/4)

5 土器棺

土器棺1 (第180・214図、図版31-6)

F区中央付近から検出された遺構である。後述する土器棺2より東側に9m、土器棺3より北側に11m離れた地点に位置する。包含層と認識していた層の掘り下げ中に検出したため、掘り方は確認できなかった。土器棺は土圧により潰れてしまっていたが、その検出状況から横位に据えられ、南側に口縁部を配した状態であったと想定したい。また土器棺の上には、支石と考えられる大きき20×15cm、





第214図 土器棺 1 (1/20)・出土遺物 (1/4)

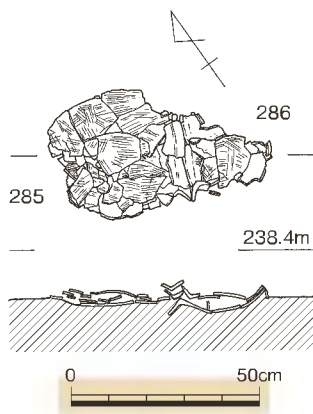
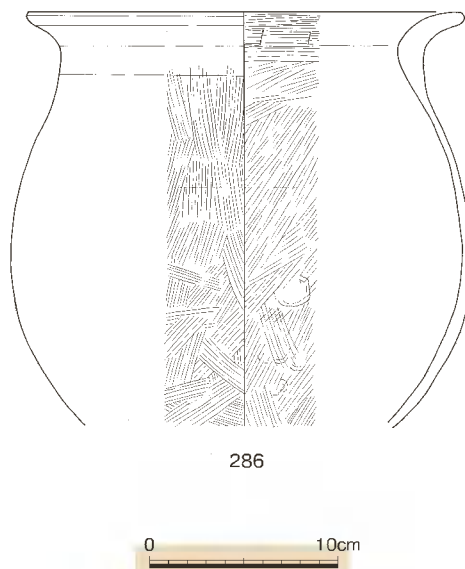
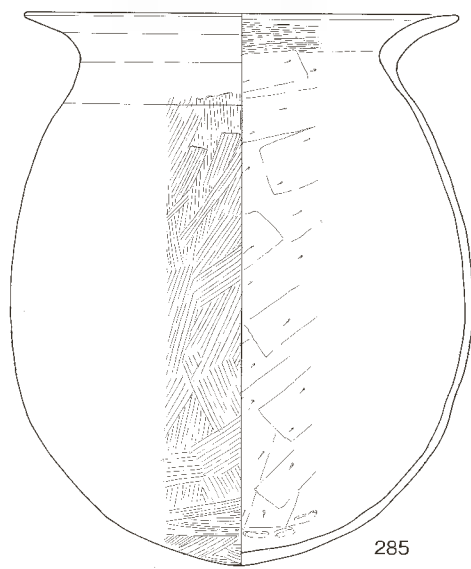
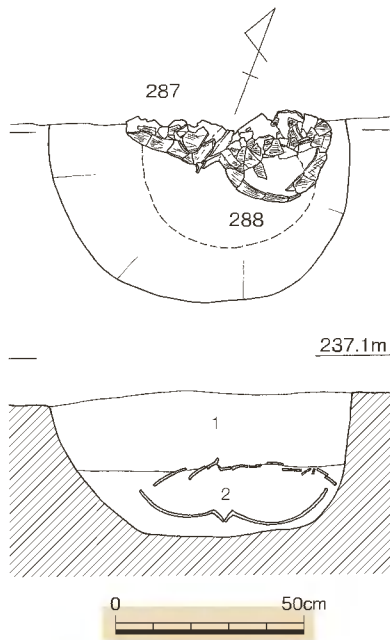


写真20 土器棺 2 埋葬状況復元



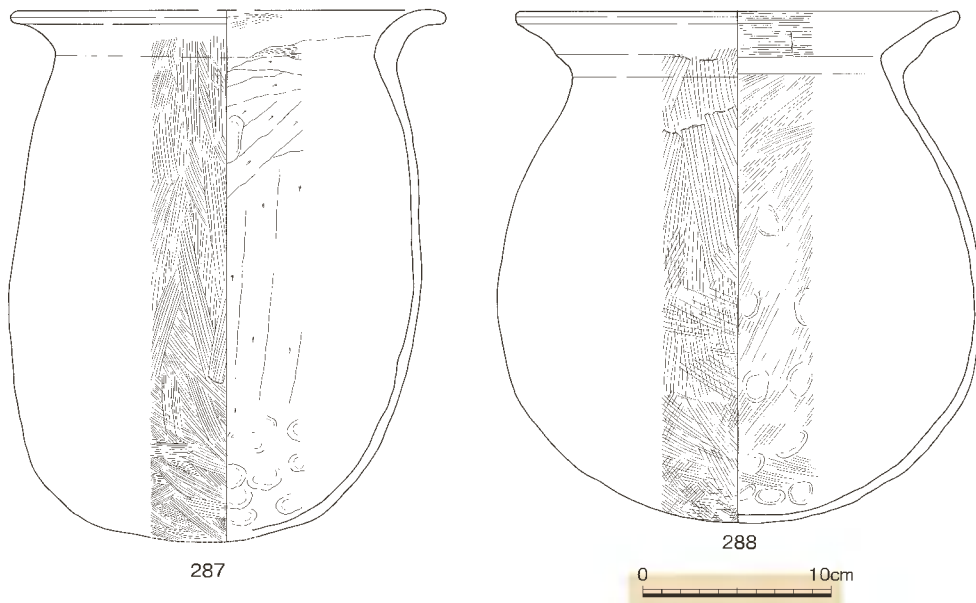
第215図 土器棺 2 (1/20)・出土遺物 (1/4)



- 1 褐灰色 (10YR4/1) 粘質土
- 2 灰黄褐色 (10YR4/2) 粘質土



写真21 土器棺3埋葬状況復元



第216図 土器棺3 (1/20)・出土遺物 (1/4)

厚さ10cmを測る、遺跡北側の山を起源と想定される角礫が据えられていた。土器棺の内容物に関しては、「潰れた」状態であったため確認できていない。土器棺2・3は甕を2个体用いて合わせ口にしたものであったが、この土器棺については身部の一個体しか確認できなかった。先述したように包含層掘り下げ中に確認したため、蓋となる土器を削平してしまった可能性も捨てきれないが、検出状況から蓋は存在していなかったと考えたい。

使用されている甕284は、口縁部が「く」字状に外反し、胴部下半部が最大径になる形態である。底部に関しては検出中に失われたようであり、底部を打ち欠いて棺としたとは考えられない。

時期は、土器棺2・3と同様に古代である。

(小嶋)

**土器棺 2** (第180・215図、写真20、図版31-7)

F区中央付近、土器棺1より西に9mほどの地点で検出した。掘り方は確認できなかったが、当初は掘り方に埋納していたと考える。耕作土を除去した後すぐに土器が検出できたことから、耕地造成段階で上部は削平された可能性が高い。2つの長胴甕を合わせ口にしており、その主軸は等高線におおよそ直交する。286の方が残存状況が悪かったが、それは286の方が標高が高い方に位置しており、耕地造成の削平の影響を強く受けたためと判断できる。(上柩)

**土器棺 3** (第180・216図、写真21、図版31-8)

F区西南部において検出した遺構で、土器棺1の南11mの地点に位置する。F区の調査開始時に設定した側溝の掘削で北側半分を損壊してしまった。ただ、側溝壁面で掘り方断面が把握でき、それをもとに平面形の検出に努めた。掘り方の平面形は円形で、底部付近に合わせ口にした長胴甕を納めていた。土器棺の主軸はおおよそ等高線に平行しており、土器棺2とは異なる。287と288はほぼ水平になるように納めており、この点では土器棺2と共通した特徴を示す。時期は古代の範疇には入るもので、土器棺2と大きな時期差はないと考える。(上柩)

**6 土壙**

**土壙 3** (第180・217図)

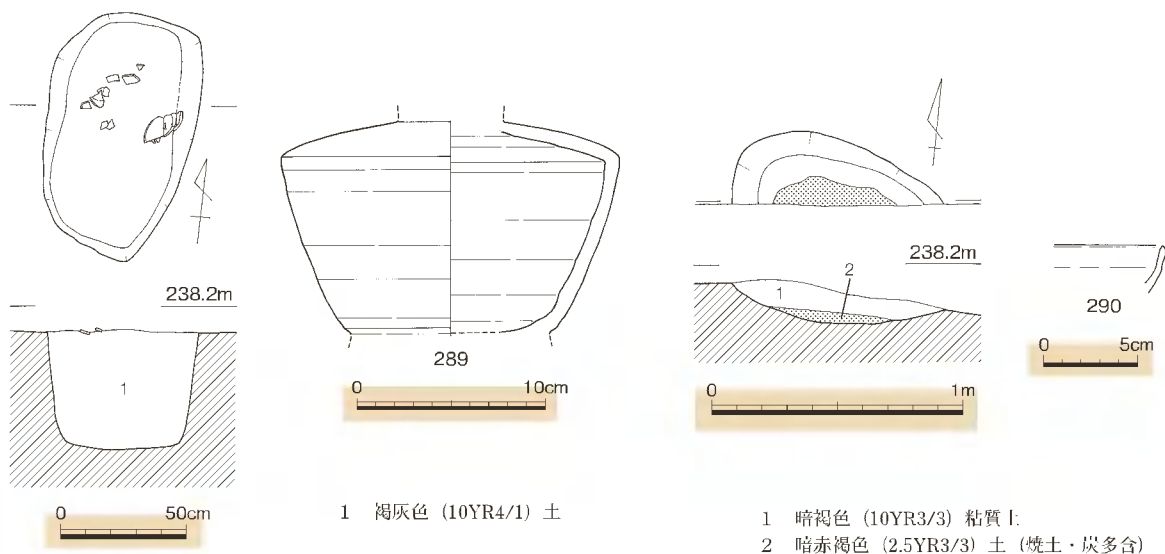
F区中央付近で検出した土壙である。平面形は略長形状で、壁体はほぼ垂直に立ち上がり、断面形は箱形を呈する。289は上面で出土しており、土壙3との関連性は低い。(上柩)

**土壙 4** (第180・218図)

F区中央付近、土壙3の西側7mの地点で検出した土壙である。底面は被熱しており、埋土第2層も炭片を多く含む焼土であり、土壙内での熱作業が想定できる。古代と考える。(上柩)

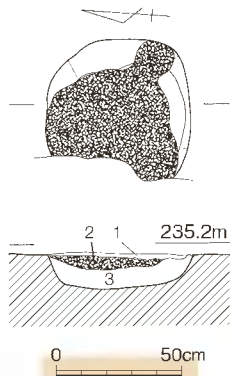
**土壙 5** (第181・219図)

D区南側で検出した土壙である。第2層目は焼土片が含まれる木炭層である。土壙5では被熱痕跡が認められず、炭は他所から持ち込んだものと判断する。検出状況から古代と考える。(上柩)



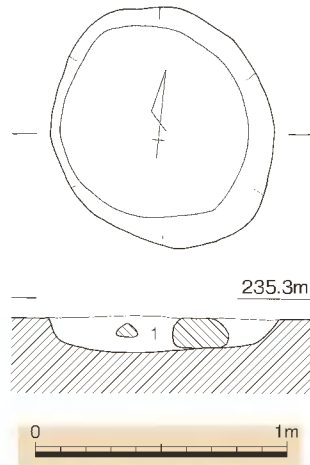
第217図 土壙 3 (1/30)・出土遺物 (1/4)

第218図 土壙 4 (1/30)・出土遺物 (1/4)

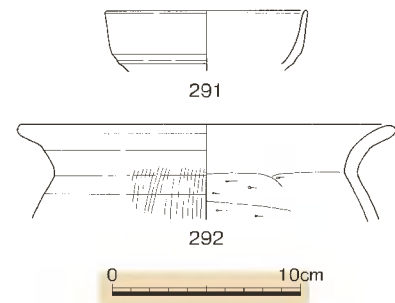


- 1 黒褐色 (10YR2/3) 土
- 2 炭
- 3 黒褐色 (10YR3/1) 粘質土

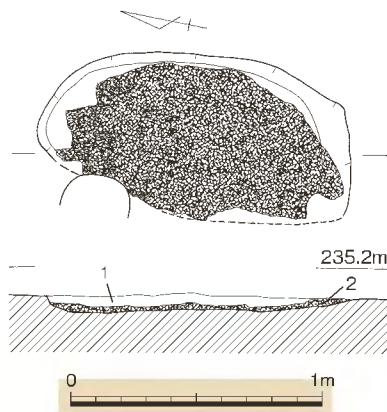
第219図 土壌 5 (1/30)



第220図 土壌 6 (1/30)・出土遺物 (1/4)

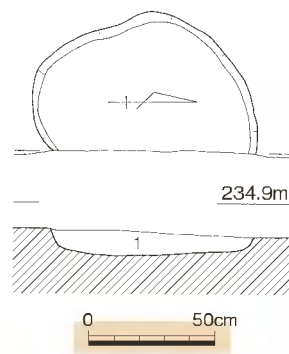


- 1 暗褐色 (10YR3/3) 土



- 1 褐灰色 (5YR4/1) 砂質土
- 2 炭

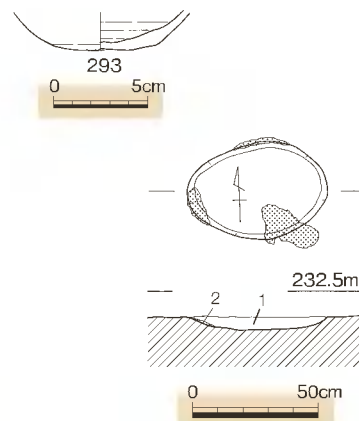
第221図 土壌 7 (1/30)



- 1 黒褐色 (10YR3/1) 土

第222図 土壌 8 (1/30)

・出土遺物 (1/4)



- 1 炭
- 2 明赤褐色 (2.5YR5/6) 土

第223図 土壌 9 (1/30)

土壌 6 (第181・220図)

D区南側、土壌5の北5mの地点に位置する土壌である。平面形は略円形であり、内部には円礫が放り込まれていた。出土遺物から古代の土壌と考える。(上榎)

土壌 7 (第181・221図)

D区南端部、土壌5の南6mの地点に位置する、略長形状の土壌である。底部には炭が敷かれたような状況で見つかり、土壌壁体には被熱痕跡が認められた。検出状況から古代と考える。(上榎)

土壌 8 (第181・222図)

D区南端部、土壌7の東1mの地点に位置する土壌である。平面形は不整形であるが、掘り方は比較的しっかりとしていた。須恵器が出土しており、古代の土壌と考える。(上榎)

土壌 9 (第183・223図)

A区中央付近で検出した土壌である。壁体は部分的に被熱していた。焼土粒や木炭片が周辺に散乱しており、熱作業を行ったことは確実に考える。(上榎)

7 炉

炉1 (第180・224図)

後述する焼土面と比較すると、被熱の度合いが著しく、底部が硬化しているものを炉として報告する。炉1はF区西端部で検出した。粘土を貼り、そこが赤変硬化するほど焼き締めていた。実測図を掲載した須恵器は検出時に出土したもので、それ自体には二次的な被熱は認められない。(上榊)

炉2 (第180・225図)

F区中央西寄り、炉1の北東12mの地点に位置する。中世段階のピットにより大きく削平されていた。中央付近は粘土貼りで、硬化が著しく、外側に向かって徐々に色調が変化していた。(上榊)

炉3 (第180・226図)

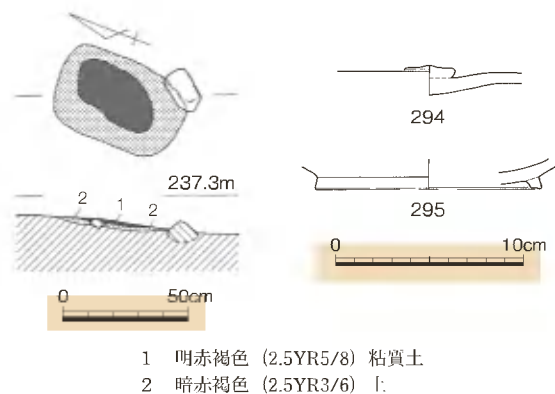
炉2の西側5mの地点に位置する。中世のピットにより大半が削平されていた。炉3は2基の炉が重なったものである。上部の第2層は赤変ただけのものであるが、下層の4・5は赤変硬化しており、被熱度合いの差は歴然としていた。なお、第3層は間層である。(上榊)

炉4 (第180・227図)

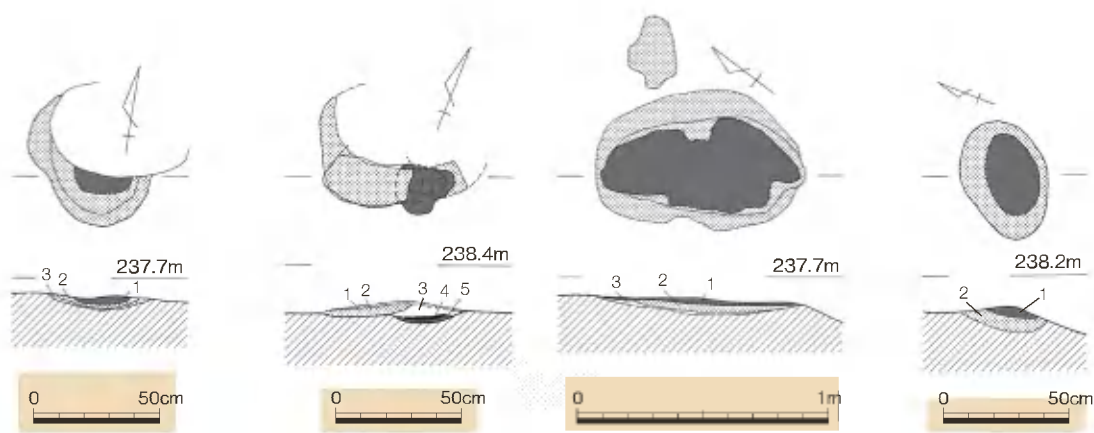
炉2の南2mの地点に位置する、略長形状を呈する炉である。長楕円形状に粘土を貼ったと考えられ、その部分の硬化が著しかった。尾崎遺跡で検出した炉では最も大形であるが、被熱の状況は他の炉と共通する。(上榊)

炉5 (第180・228図)

炉1の北側5mの地点に位置する炉である。中央部の被熱度合いが高く、赤変硬化していた。周囲は色調がやや暗く、硬化していない。(上榊)



第224図 炉1 (1/30)・出土遺物 (1/4)



- |                     |                     |                       |                       |
|---------------------|---------------------|-----------------------|-----------------------|
| 1 赤色 (10R4/8) 粘質土   | 1 赤橙色 (10R6/8) 土    | 1 明赤褐色 (2.5YR5/8) 粘質土 | 1 明赤褐色 (2.5YR5/8) 粘質土 |
| 2 暗赤色 (10R3/6) 土    | 2 赤色 (7.5R4/6) 土    | 2 赤褐色 (2.5YR4/8) 土    | 2 暗赤褐色 (2.5YR3/6) 上   |
| 3 暗赤褐色 (2.5YR3/6) 上 | 3 褐灰色 (10YR4/1) 上   | 3 暗赤褐色 (2.5YR3/6) 上   |                       |
|                     | 4 明赤褐色 (5YR5/8) 粘質土 |                       |                       |
|                     | 5 赤色 (7.5R4/6) 粘質土  |                       |                       |

第225図 炉2 (1/30) 第226図 炉3 (1/30) 第227図 炉4 (1/30) 第228図 炉5 (1/30)

## 8 焼土面

### 焼土面 1 (第180・229図)

焼土面は炉と比較すると被熱度合いが著しく弱く、明確な差があった。そこで、焼土面としてここで報告する。焼土面 1 の周辺からは焼塩土器が出土しており、浅い碗形の 2 点のみを図示した。(上柁)

### 焼土面 2 (第180・230図)

F 区中央付近の炉 4 から東北東 3 m に位置する。平面形は不整形であるが、境界線は不鮮明である。周囲には焼土粒や木炭片が散在し、炉 3 までおおそ繋がるような状況であった。(上柁)

### 焼土面 3 (第180・231図)

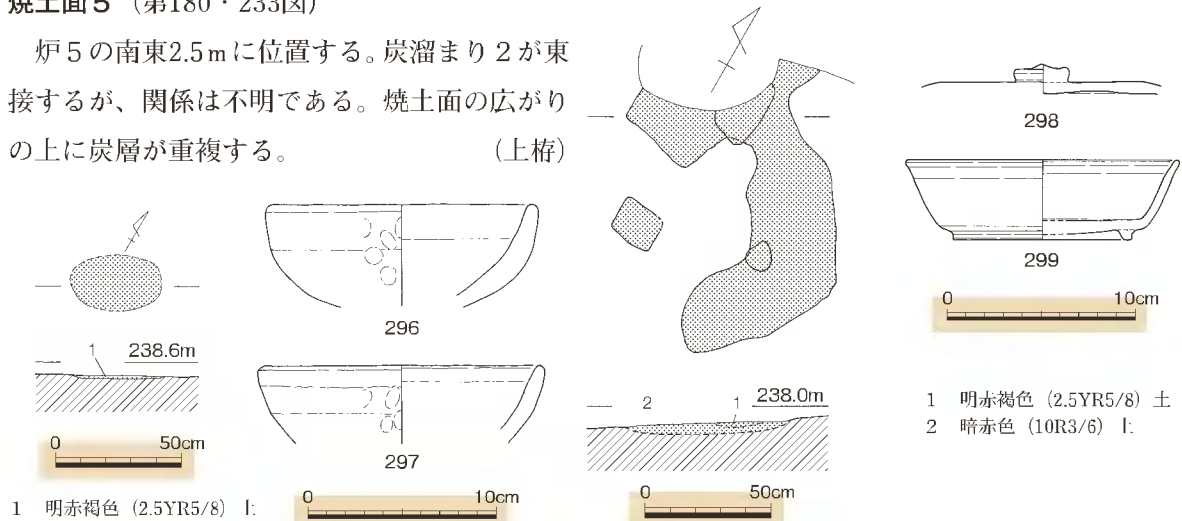
炉 1 の北側 1.5 m の地点、後述する溝 4 の埋土上面で検出した焼土面である。他の焼土面と同様に炉のような強い被熱は示さず、境界が不明瞭な弱い被熱の広がりである。(上柁)

### 焼土面 4 (第180・232図)

炉の西北西 3 m の地点に位置する焼土面である。炉のように、色調から分層できるが、中央部分は硬化しておらず、炉とは異なるものとして判断した。(上柁)

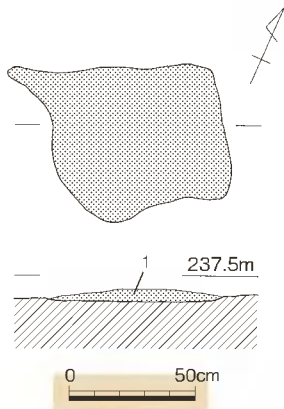
### 焼土面 5 (第180・233図)

炉 5 の南東 2.5 m に位置する。炭溜まり 2 が東接するが、関係は不明である。焼土面の広がりの上に炭層が重複する。(上柁)



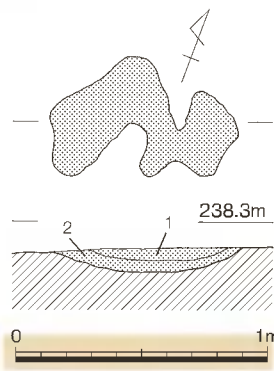
第229図 焼土面 1 (1/30)・出土遺物 (1/4)

第230図 焼土面 2 (1/30)・出土遺物 (1/4)



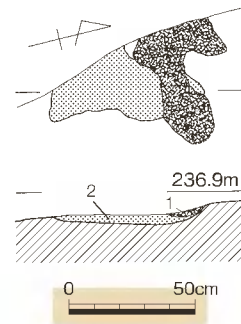
1 明赤褐色 (2.5YR5/8) 土

第231図 焼土面 3 (1/30)



1 赤褐色 (10R4/4) 土  
2 暗赤褐色 (10R3/3) 土

第232図 焼土面 4 (1/30)



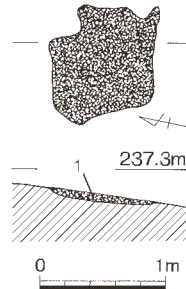
1 炭  
2 赤褐色 (10R4/4) 土

第233図 焼土面 5 (1/30)

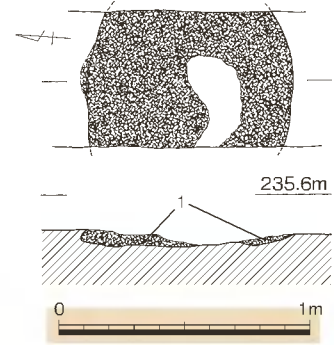
## 9 炭溜まり

### 炭溜まり1 (第180・234図)

炭溜まり1はF区の南西側で検出した。明確な掘り方は認められず、粉炭が集中する状況で、境界線は不明瞭である。遺物はないが、周囲の状況から古代とした。(上楯)



1 炭 (焼土粒含)



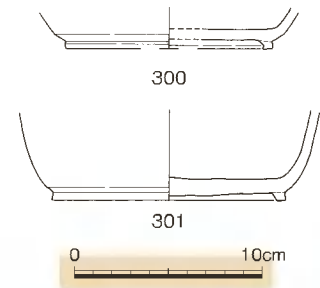
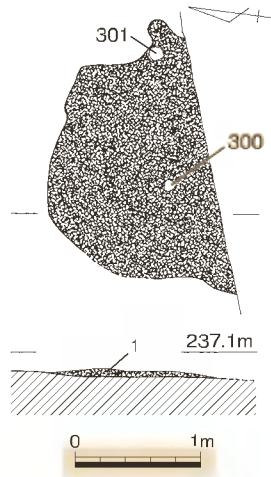
1 炭 (焼土粒含)

第234図 炭溜まり1 (1/60)

第236図 炭溜まり3 (1/30)

### 炭溜まり2 (第180・235図)

炭溜まり1の南2mに位置する。南側は調査区外に伸びる。境界線は不明瞭である。粉炭を少しずつ剥がしていくと、粉炭の間から須恵器が出土した。古代の遺構である。(上楯)



1 暗褐色 (10YR3/3) 土 (炭多含)

第235図 炭溜まり2 (1/60)・出土遺物 (1/4)

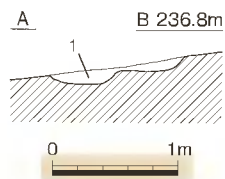
### 炭溜まり3 (第183・236図)

A区西端で検出した遺構である。西側は調査開始時に設定した側溝により削平した。粉炭の集中で、わずかに焼土粒を含む。境界は不明瞭。状況から古代と考える。(上楯)

## 10 溝

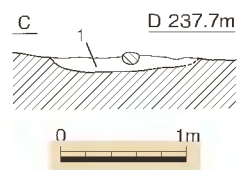
### 溝3 (第180・187・237図)

掘立柱建物3のある平坦面の山側の段裾を巡っている。建物3の北側桁から70cmの位置にあり、建物の雨落ち溝と考える。最大幅115cm、深さ20cmを測る。222・223が出土。(岡本寛)

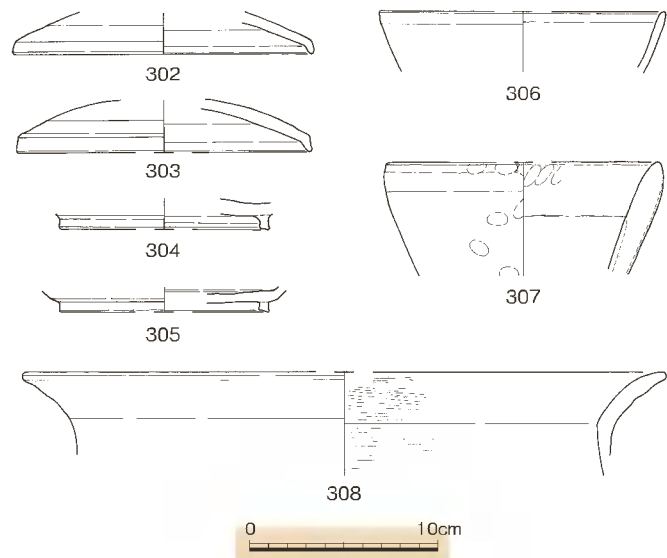


1 褐灰色 (7.5YR6/1) 土

第237図 溝3 (1/60)



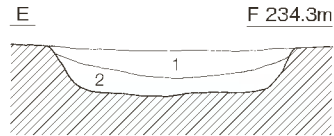
1 黒褐色 (10YR3/1) 土



第238図 溝4 (1/60)・出土遺物 (1/4)

溝4 (第180・238図)

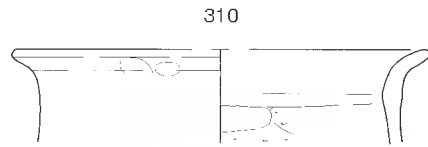
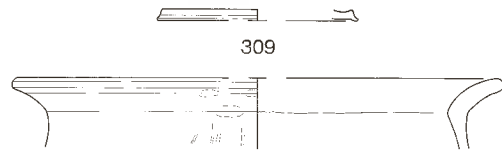
F区中央部を等高線と平行するように東西方向へ貫流する溝である。直下には弥生時代の下がり1が重複し、弥生土器の出土も見られたが、遺物の出土状況などから古代の溝と判断した。東西端部は調査区外や後世の造成地区まで延びる。南東部には集石2が平行して検出できたが、相互の関わりは不明である。307は焼塩土器である。溝4の北側上方では炉や焼土面を多く検出しており、そこからの混入と考える。(上村)



- 1 黒褐色 (10YR3/1) 土
- 2 砂礫

溝5 (第182・239図)

C区からB区にかけて直線的に延びる溝である。北東から南西へ流れ、溝の方向はN-41°-Eを測る。幅は100cm前後、深さは10~20cmである。埋土は上下2層に分かれ、上層は黒褐色粘質土、下層は暗灰黄色粗砂で小礫を多く含んでいた。常時に流水があったものとみられる。309・310は溝内、311は検出面直上から出土した。7世紀後半のものか。(岡本寛)

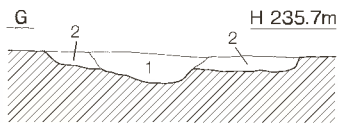


第239図 溝5 (1/30)・出土遺物 (1/4)

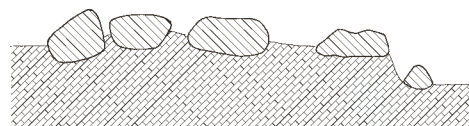
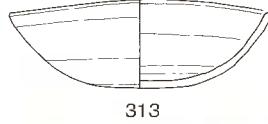
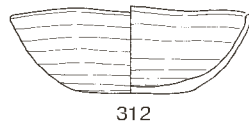
11 たわみ

たわみ (第181・240図、写真22)

D区の北側で検出したたわみである。平面形は南北にやや長い不整形を呈する。底部直上で312・313が出土した。312は伏せられて、一抱えはある川原石が乗った状態で出土した。7世紀中葉と考える。(上村)



- 1 褐灰色 (10YR4/1) 粘質土
- 2 灰黄褐色 (10YR4/2) 上



第240図 たわみ (1/60)・出土遺物 (1/4)

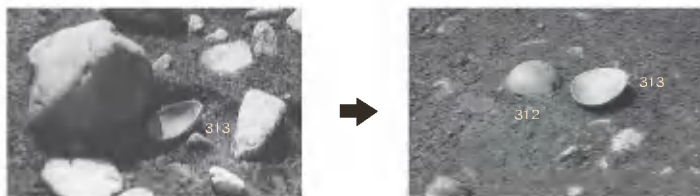
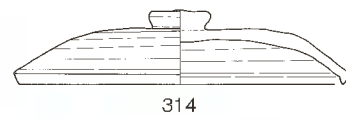
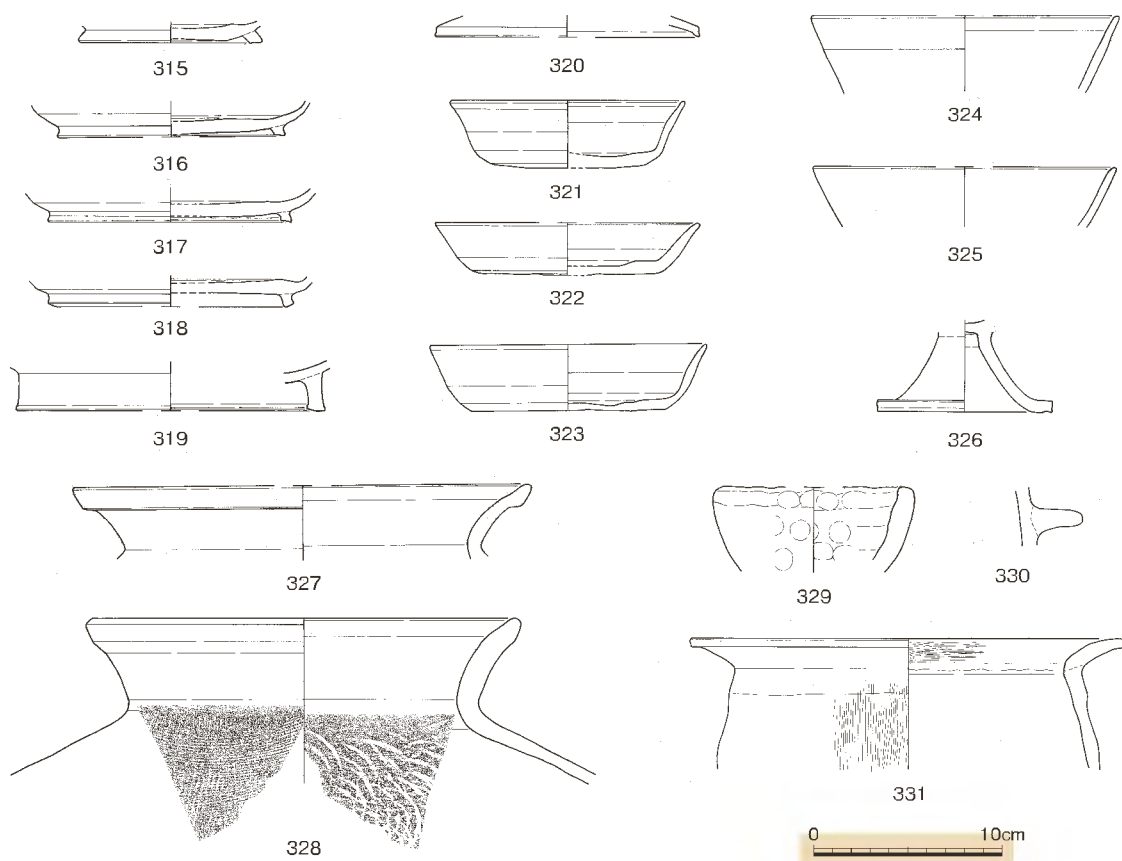


写真22 たわみ須恵器出土状況 (東から)



第241図 集石1 (1/30)・出土遺物 (1/4)





第242図 集石2出土遺物 (1/4)

## 12 集石

### 集石1 (第180・241図)

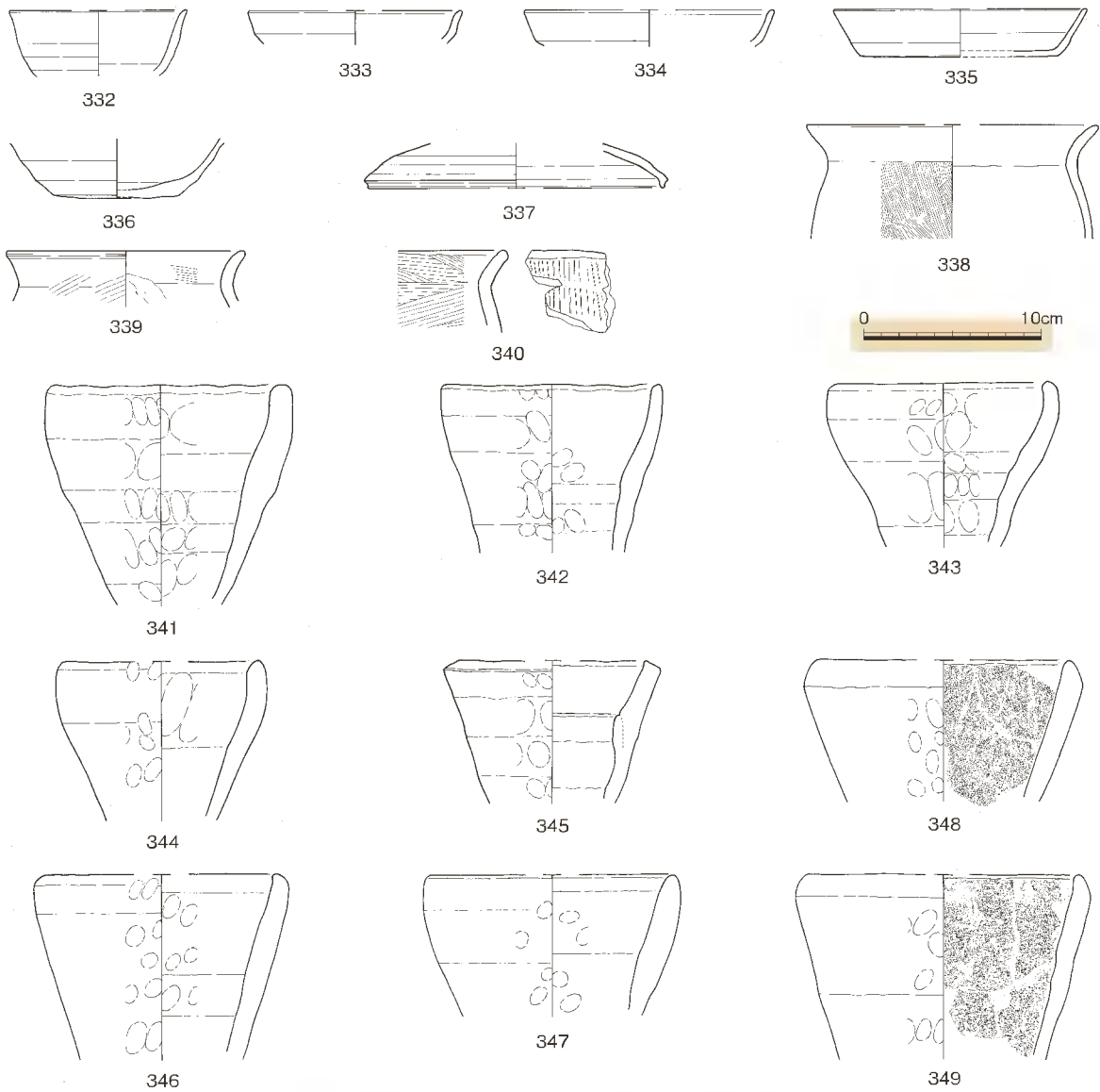
G区の南部、掘立柱建物5の北東角から山側に向かって半円状の抉れが3段続いていた。幅は150cmあり、段差は上から40cm、30cm、55cmを測った。最下段の南辺で、埋土中から長径30~38cmの河原石が並んで検出され、さらに20cm離れて完形の須恵器の蓋が内面を上にして出土した。蓋の周辺にも埋土中で20cm前後の河原石が散乱していた。奈良時代とみられるが、遺構の性格は不明。(岡本寛)

### 集石2 (第180・242図)

F区中央付近で検出した集石である。溝4の南側に沿うような状況で石の集まりが認められた。石の集中に人為的な配置などは認められなかったが、石の間から土器が多く出土したことから遺構として取り扱った。なお、西端は調査区外や後世の造成地に延びていたため、確認できなかった。遺物は須恵器、土師器、焼塩土器がある。焼塩土器は溝4でも出土したが、北側に広がる炉や焼土面からの転入の可能性が高い。遺物は石を除去すると破片が見つかるといった出土状況であった。(上楯)

## 13 その他の遺構出土遺物 (第243図、写真23)

第243図に示した遺物は、建物や柱穴列として把握できなかった柱穴から出土したり、密集して一塊の土器溜まり状になって出土した古代の土器である。332~337は須恵器、338~340は土師器、341



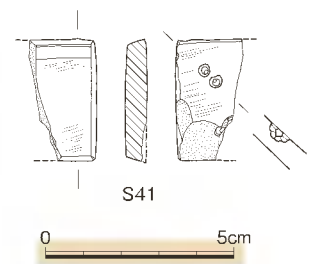
～349は焼塩土器で焼塩壺と考えられる。

332～334・339・340はE区、335・336・347～349はF区、その他はG区出土である。このうち、336・338・344は同じ柱穴、337・345は別の同じ柱穴、347～349は写真23に示した柱穴の出土品である。



写真23 F区柱穴  
焼塩土器出土状況（東から）

また、341～343は掘立柱建物3の削平面上の包含層中から土器溜まり状に一括出土した。



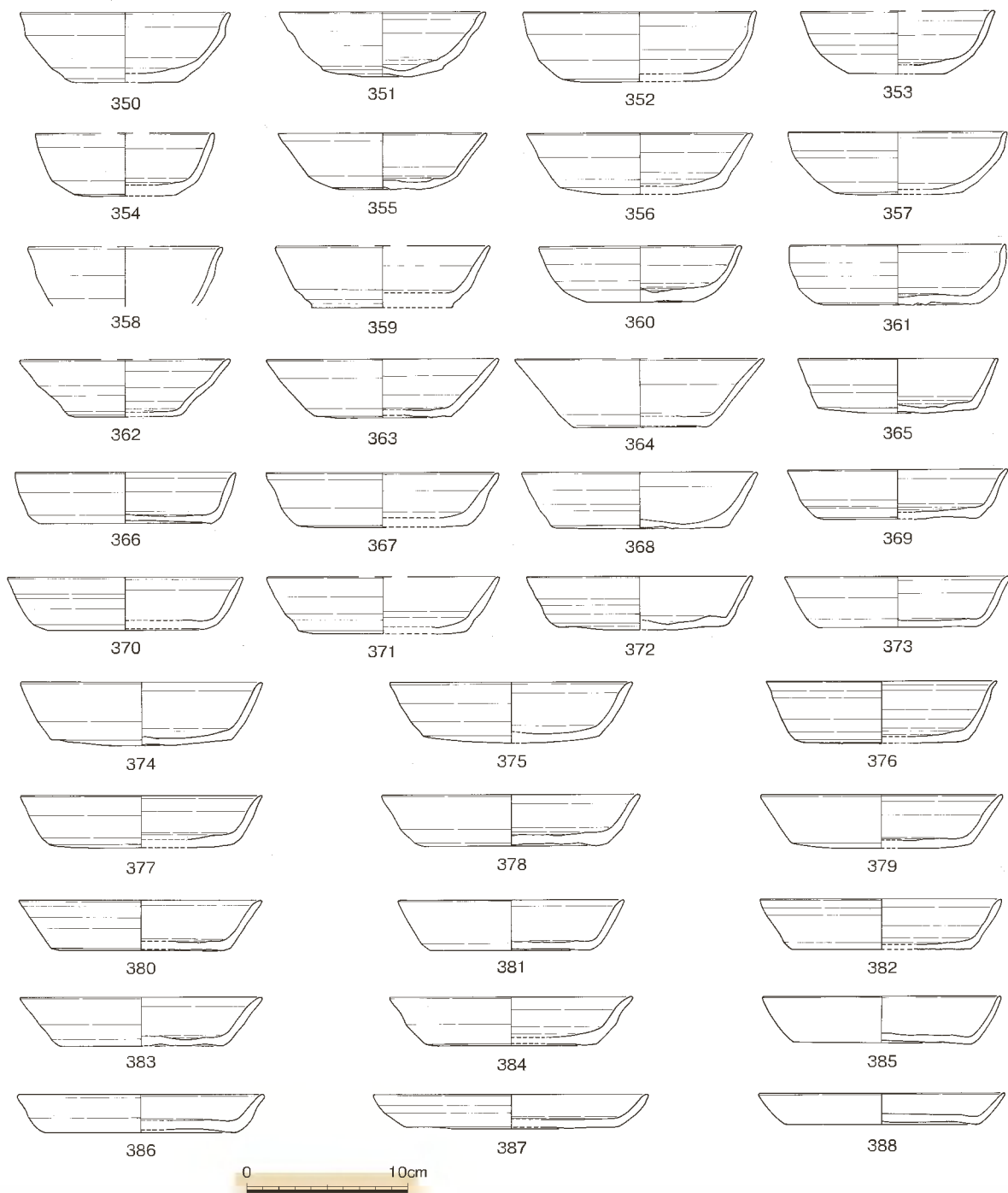
第243図 その他の遺構  
出土遺物（1/4・1/2）

S41は粘板岩製の石帯で、G区南東部の中世の柱穴から出土した。方形の巡方で、内外面ともに丁寧に研磨されている。表面の上方に細線が認められるが、意図的なものか判然としない。断面形は台形になる。裏面の四隅に2個1対の綴じ穴があり、貫通している。黒色を呈している。（岡本寛）

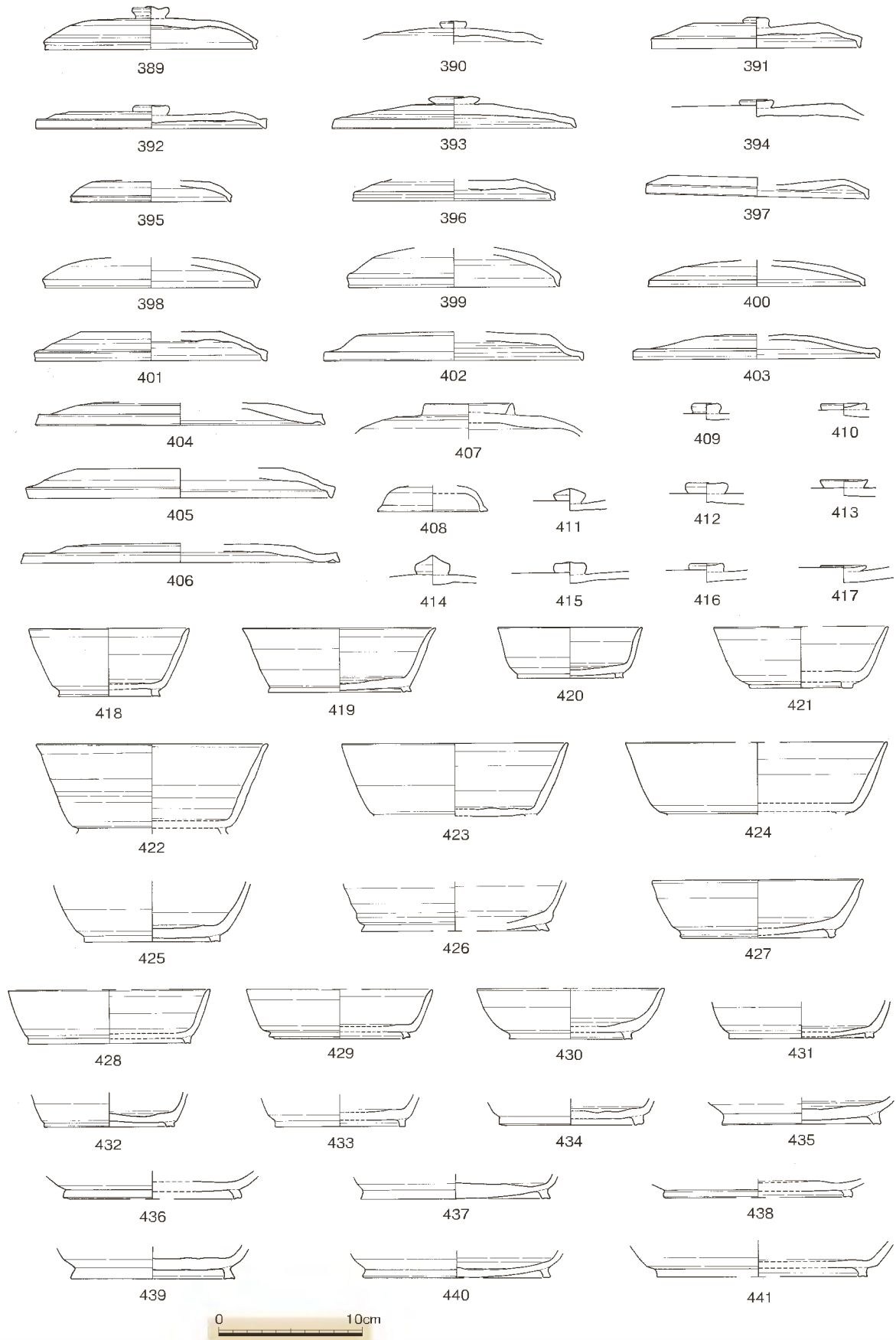
14 遺構に伴わない遺物 (第244~254図)

第244図は、須恵器の高台を有しない杯身と皿である。

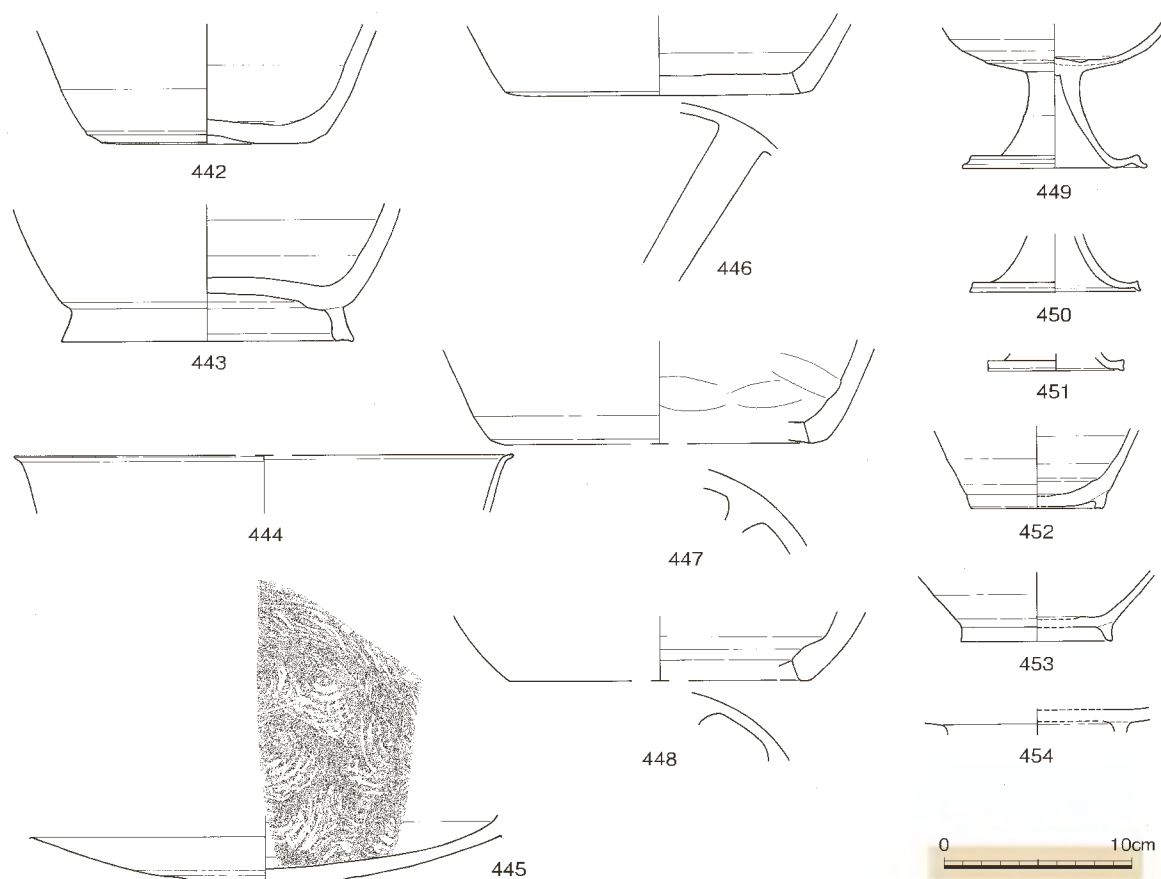
体部から口縁部にかけて、内湾または直線的に斜め上方へ立ち上がった器表面には、凹凸が認められるものと平滑になっているものがある。口縁端部はいずれも丸く仕上げているが、短く外反するものも存在する。底部は平坦に仕上げて安定したものが多いが、器壁が厚くなって外側へわずかに張り出すものや上げ底を呈するものもある。体部と口縁部は、内外面ともロクロの回転を利用したナデを



第244図 遺構に伴わない遺物 (F・G区) ① (1/4)



第245図 遺構に伴わない遺物 (F・G区) ② (1/4)



第246図 遺構に伴わない遺物 (F・G区) ③ (1/4)

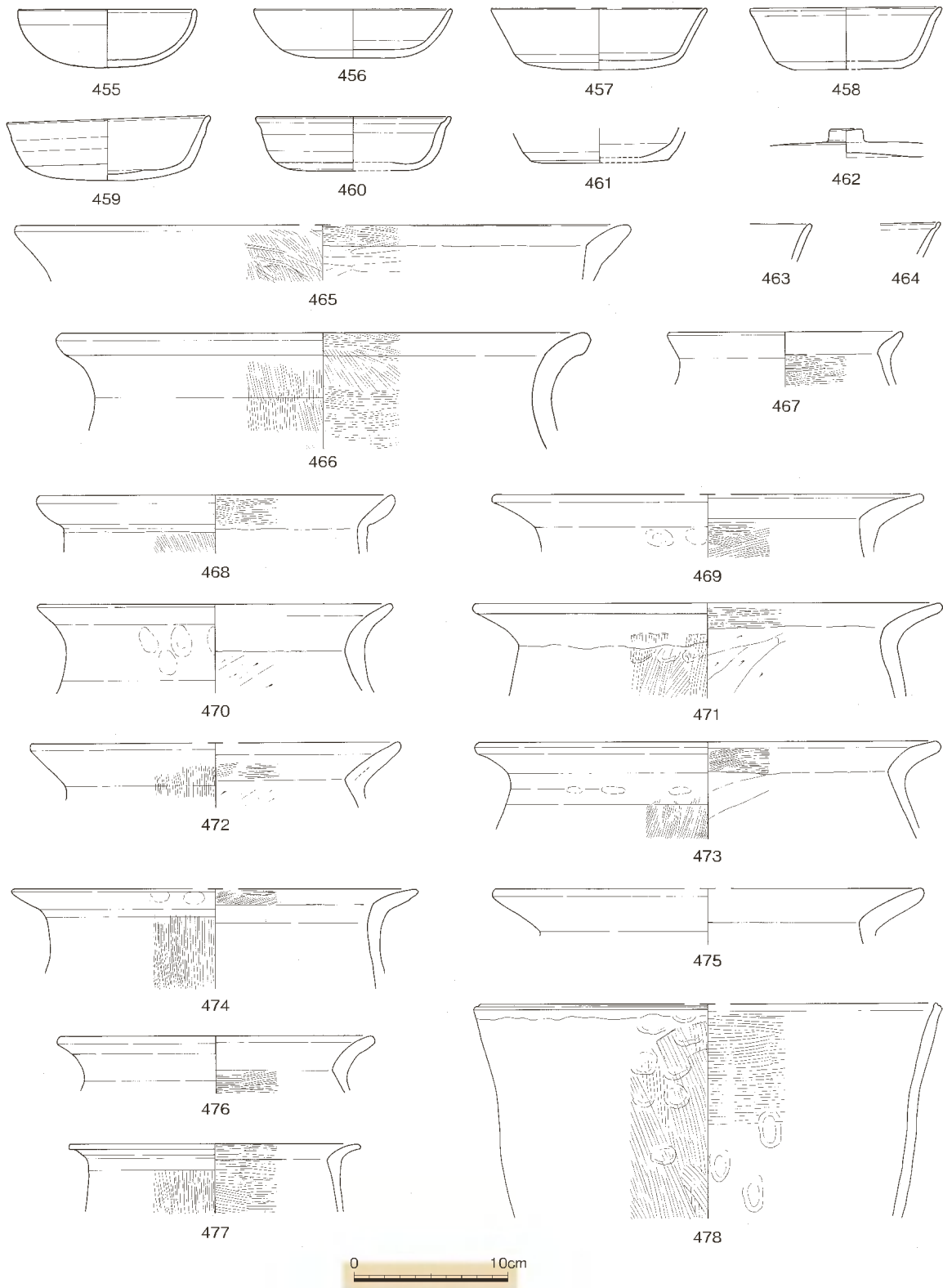
行っている。内面の底部は、ナデだけのものと直線的な仕上げナデを加えているものがある。外面の底部は、ヘラケズリだけで何も施さないものとヘラケズリの上面に不定方向のナデを行っているものがある。胎土中には微砂を含み、焼成はいずれも良好で、灰色または灰白色を呈している。

第245図は、須恵器の高台を有する杯身とその蓋が大多数を占める。

上位に図示した蓋は、いずれも天井部の中央につまみが存在して、口縁端部は下方へ短く折り曲げている。つまみの形態は、宝珠に似たもの、上位が球状を呈するもの、扁平で基石に酷似したもの、中央部が浅く窪んでいるもの、環状のものがある。天井部から口縁部にかけて、緩やかに内湾して丸く仕上げられているものが多いが、天井部と口縁部の境界が屈曲して明瞭な稜線が存在するものや、全体が扁平で器高が低いものもある。外面の天井部はヘラケズリを行い、外面の口縁部はナデを施している。内面は全体にナデを行っているが、仕上げナデを加えているものもある。

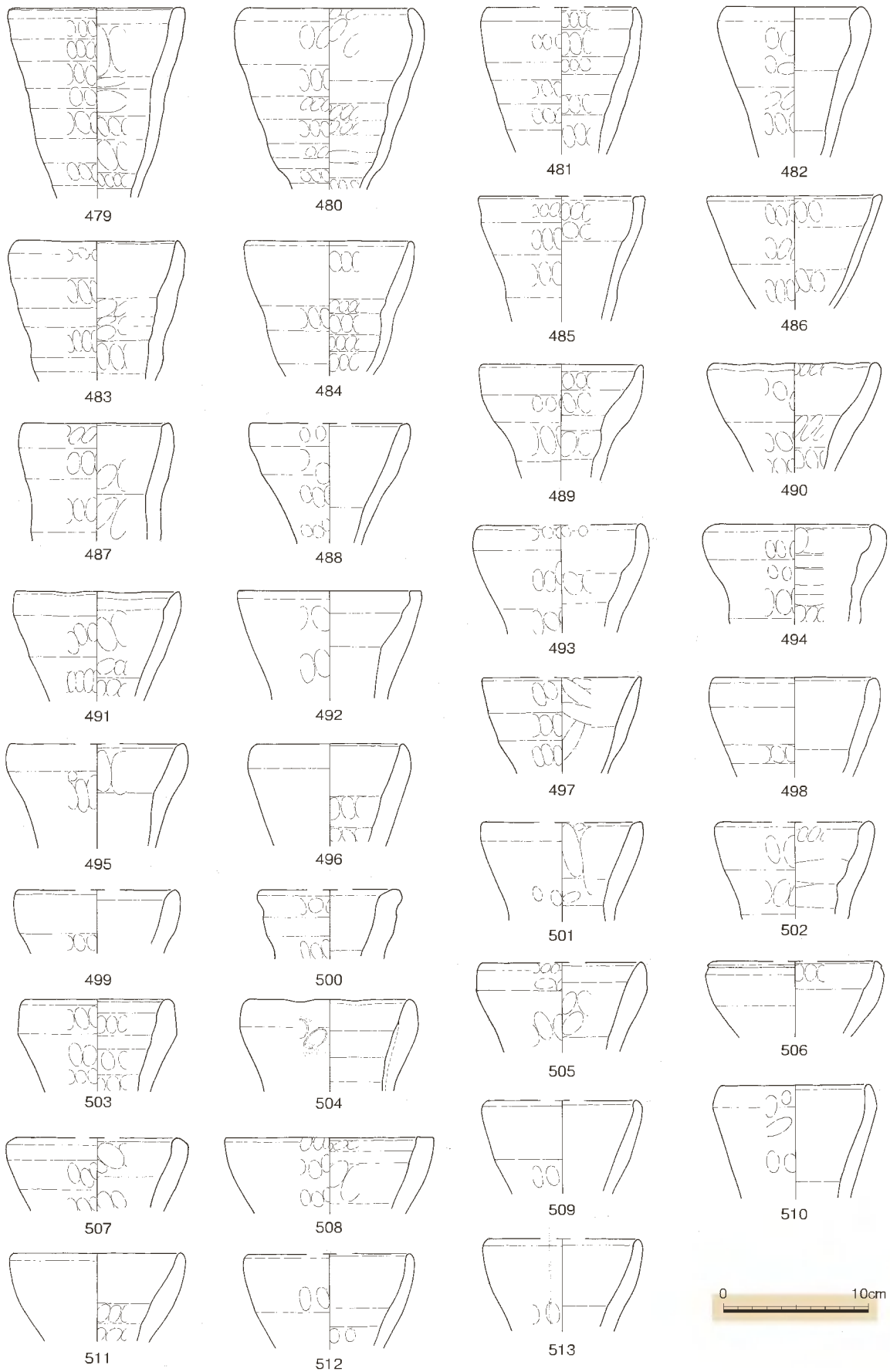
408の小形の蓋は短頸壺に伴うもので、本来は天井部の中央につまみがあると考えられる。内湾して斜め下方へ張り出した口縁端部は、外方向に拡張して下位に中央がわずかに窪んだ面が認められる。外面の天井部はヘラケズリを行い、内面全体と外面の体部から口縁部にかけては、ロクロの回転を利用したナデを施している。胎土中には微砂を含み、焼成は良好で灰白色を呈している。

下位に図示した高台を有する杯身は、口縁部が斜め上方へ直線的に張り出すものが多いが、わずかに内湾しているものや口縁端部が外反するものもある。底部の器壁は体部や口縁部よりも厚くなっているが、水平なものや内面に盛り上がるものは少なく、緩やかに湾曲して外面に張り出すものが多い。

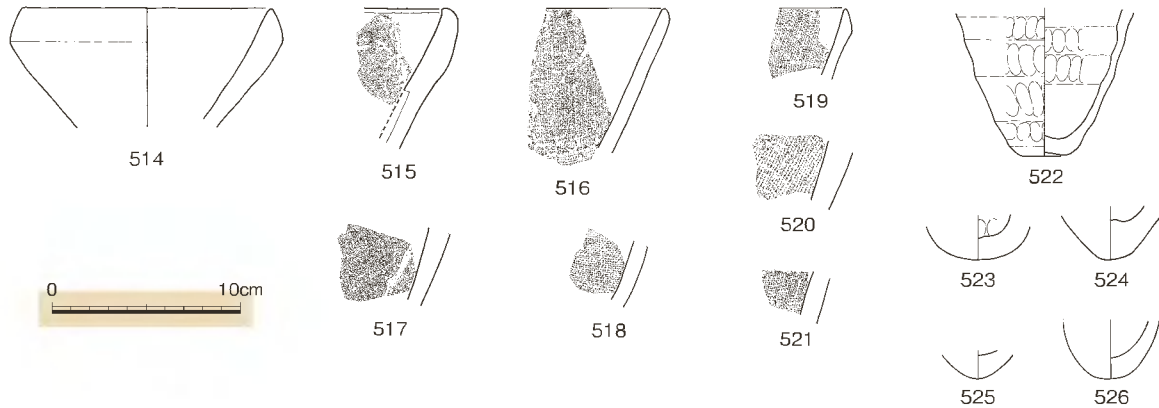


第247図 遺構に伴わない遺物 (F・G区) ④ (1/4)

高台はいずれも貼り付けで、断面形が台形または長方形を呈し、接地部分はわずかに浅く窪んでいる。体部と口縁部は内外面ともナデを施し、つまみと高台の接合部分はナデ仕上げを行っている。内面の底部は、ナデだけのものとナデの上面に不定方向の仕上げナデを加えているものがある。外面の底部



第248図 遺構に伴わない遺物 (F・G区) ⑤ (1/4)



第249図 遺構に伴わない遺物 (F・G区) ⑥ (1/4)

は、ヘラケズリを行っただけのものと上面に仕上げナデ痕跡が存在するものがある。

以上に説明した須恵器の高台を有する杯身とその蓋は、胎土中に微砂を含み、焼成はいずれも良好で、灰色または灰白色を呈するものが多く、少数ではあるが黄灰色のものも認められる。

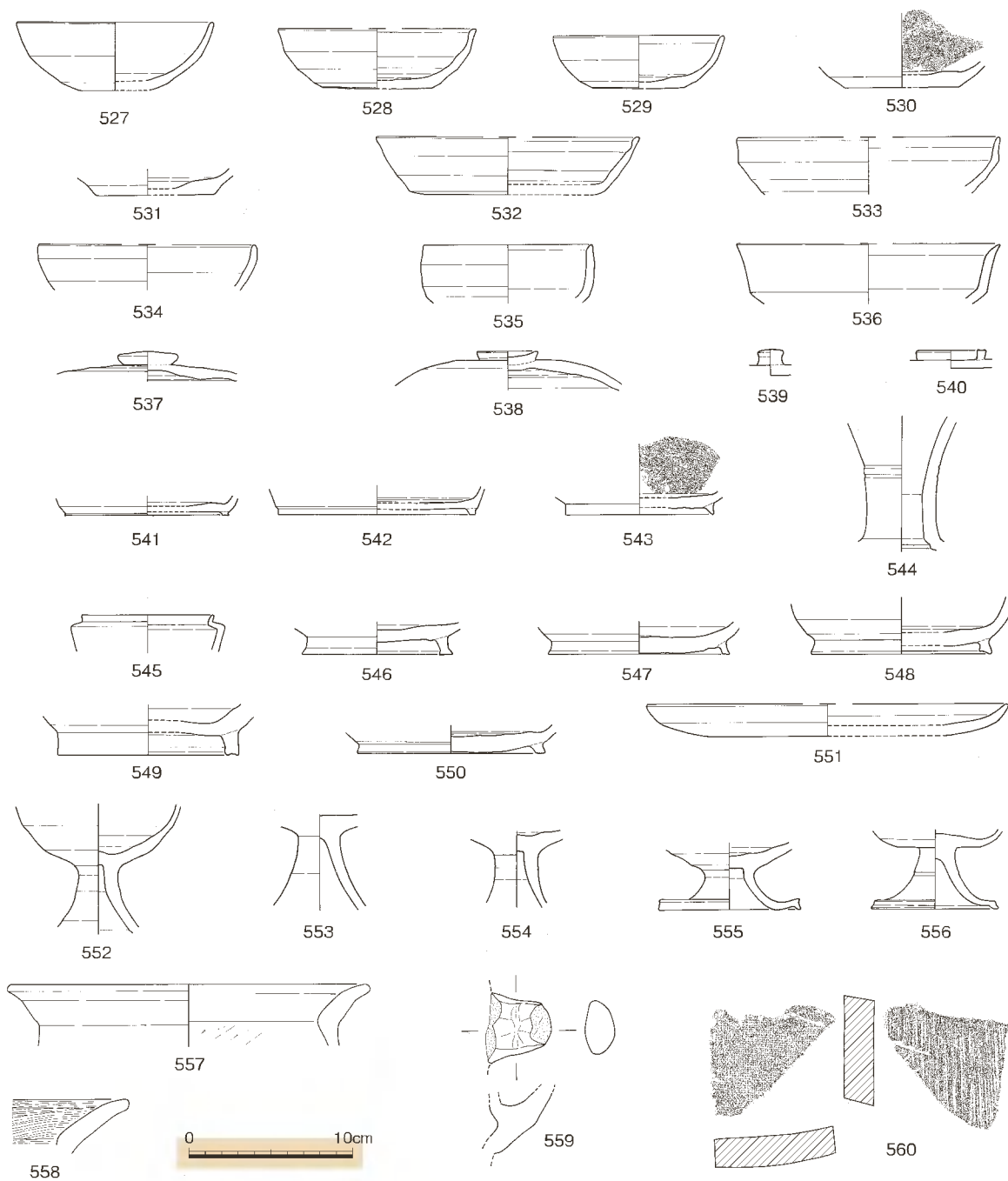
第246図はいずれも須恵器である。442は高台を有しない壺の底部で、上げ底になっている。443は高く安定した高台をもつ壺である。444は器壁が薄くて口径の大きい盤と考える。445は須恵器の破片を利用した硯で、内面の青海波タタキが潰れて表面が滑らかになっている。446～448は甌の底部破片で、いずれも形の異なる孔が認められる。449～451は高杯の破片で、脚端部は下方へ短く折り曲げている。452と453は高台をもつ杯身であるが、全体の形態から推定して前述の須恵器よりも新しい時期に属するであろう。454の小破片は、体部が横方向に張り出すので盤になるのかもしれない。

第247図は土師器である。上位に図示した椀、高台を有しない杯、杯の蓋では、赤色顔料を塗布したものとしないものがあるが、暗文はいずれも認められない。455の椀は底部から口縁部にかけて緩やかに内湾して立ち上がるが、杯の口縁部は斜め上方へ直線的に立ち上がるものと端部が短く屈曲するものがある。465～477は甕の口縁部である。外湾または「く」字状に外反した口縁の端部は、いずれも丸く仕上げている。外面には縦方向のハケメや指頭圧痕が存在し、内面には横または斜め方向のハケメが認められる。これらの甕の胎土中には細砂や小礫を比較的多く含み、焼成は良好でにぶい橙色または明褐色を呈している。478は甌の上部破片で、把手は不明である。外面は指頭圧痕の上面に縦または斜め方向のハケメを施し、内面の上位には横方向のハケメが認められる。口縁端部と内面の下位は、ヨコナデを行っている。胎土中には細砂を含み、焼成は良好で橙色を呈している。

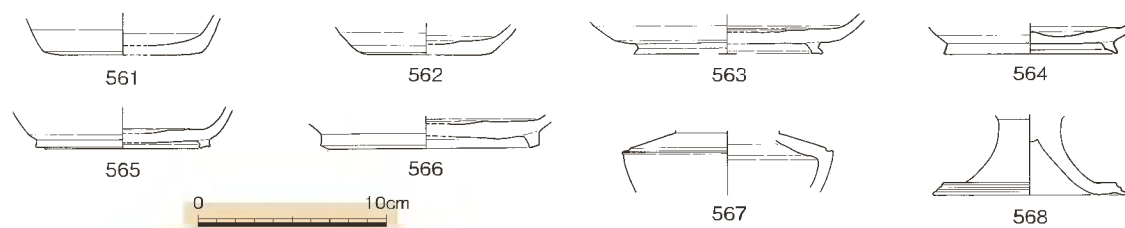
第248図と第249図は焼塩土器である。いずれも二次焼成を受けているので、焼塩生産に使用されたと考えている。これらの土器は、国道429号の北側に位置するF区とG区から出土した。

第248図は体部から口縁部にかけての破片であるが、底部は第249図の522～526のような形態を呈すると思われ、全体が把手のない丸底のマグカップのようになり、手捏ねで作られている。内湾して斜め上方へ立ち上がった口縁の端部は、丸く仕上げているものが多いが、上位に面を有するものも存在する。外面には指頭圧痕が顕著に認められ、横または縦方向のナデを加えている。内面にも指頭圧痕が多く存在し、指頭による横方向のナデ痕跡を有するものもある。胎土中には砂粒を多く含み、二次焼成を受けていることもあっていずれも焼成は良好で、橙色、赤褐色、浅黄橙、にぶい黄橙色を呈するものが多い。514のように浅い鉢形のものも少数ながら存在する。浅黄橙色を呈し、胎土や焼成は前述の土器と同じである。515～521は内面に布目を有する土器である。器形は前述の大多数のもの

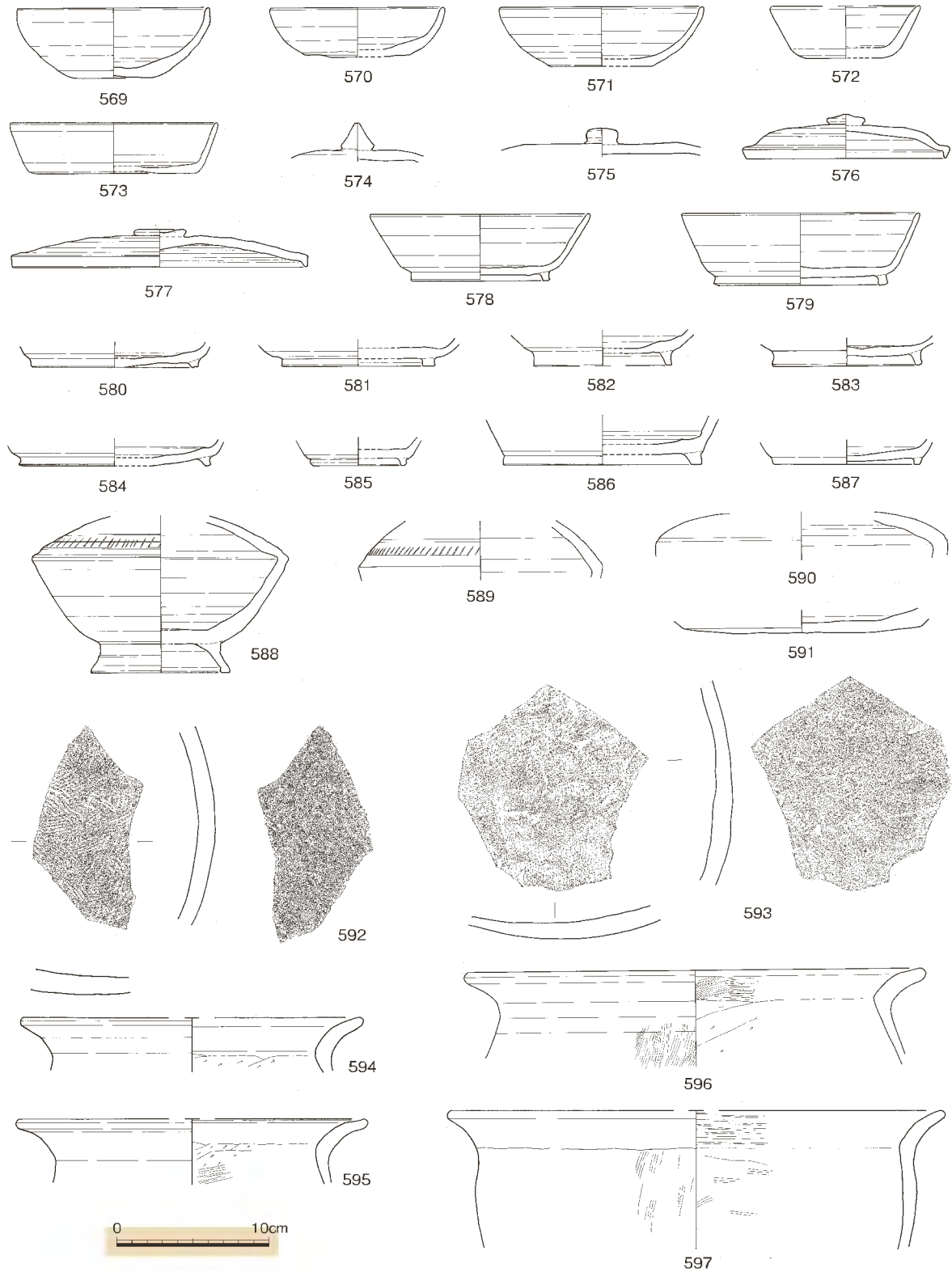




第250図 遺構に伴わない遺物 (D・E区) (1/4)



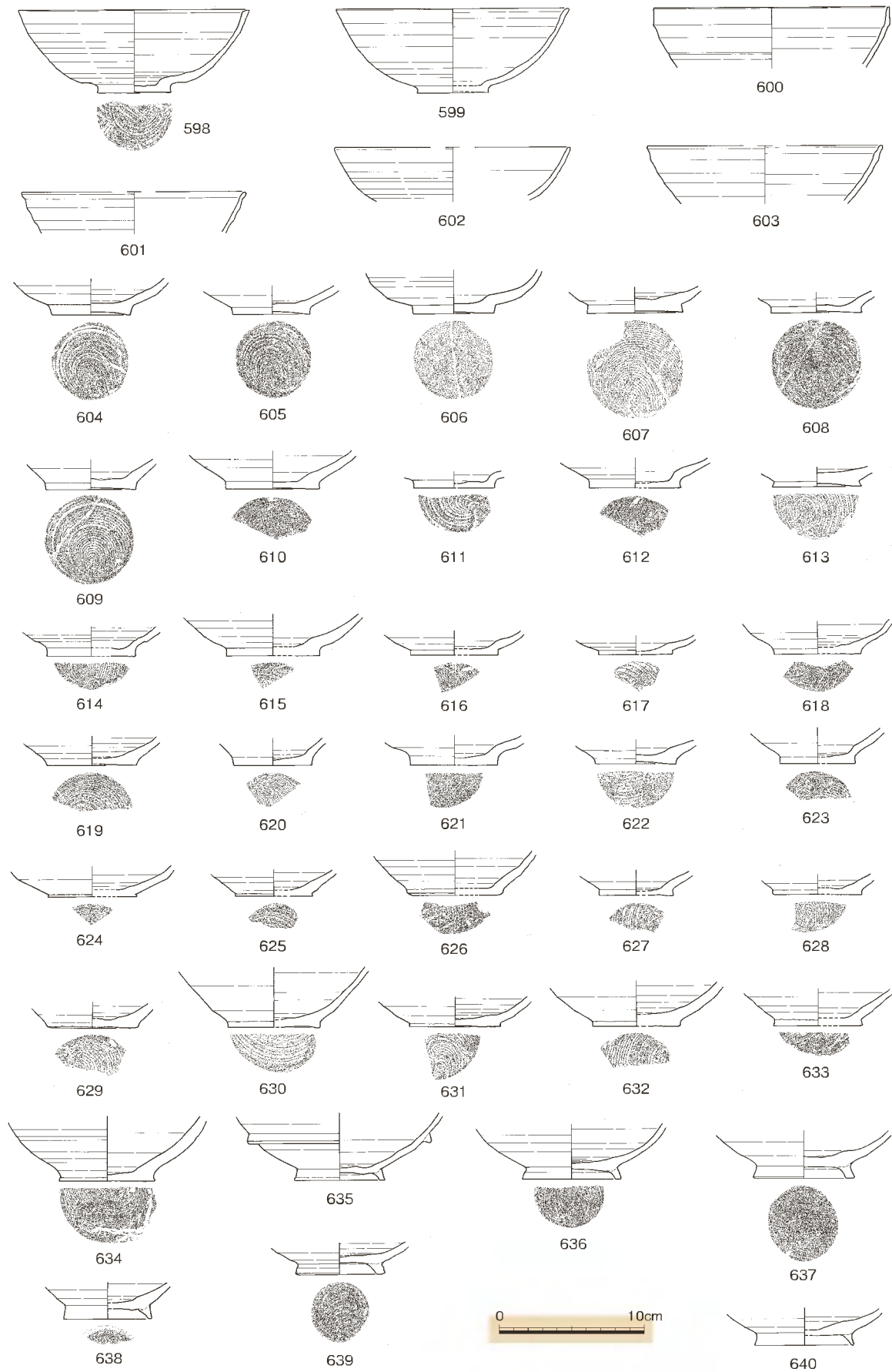
第251図 遺構に伴わない遺物 (B区) (1/4)



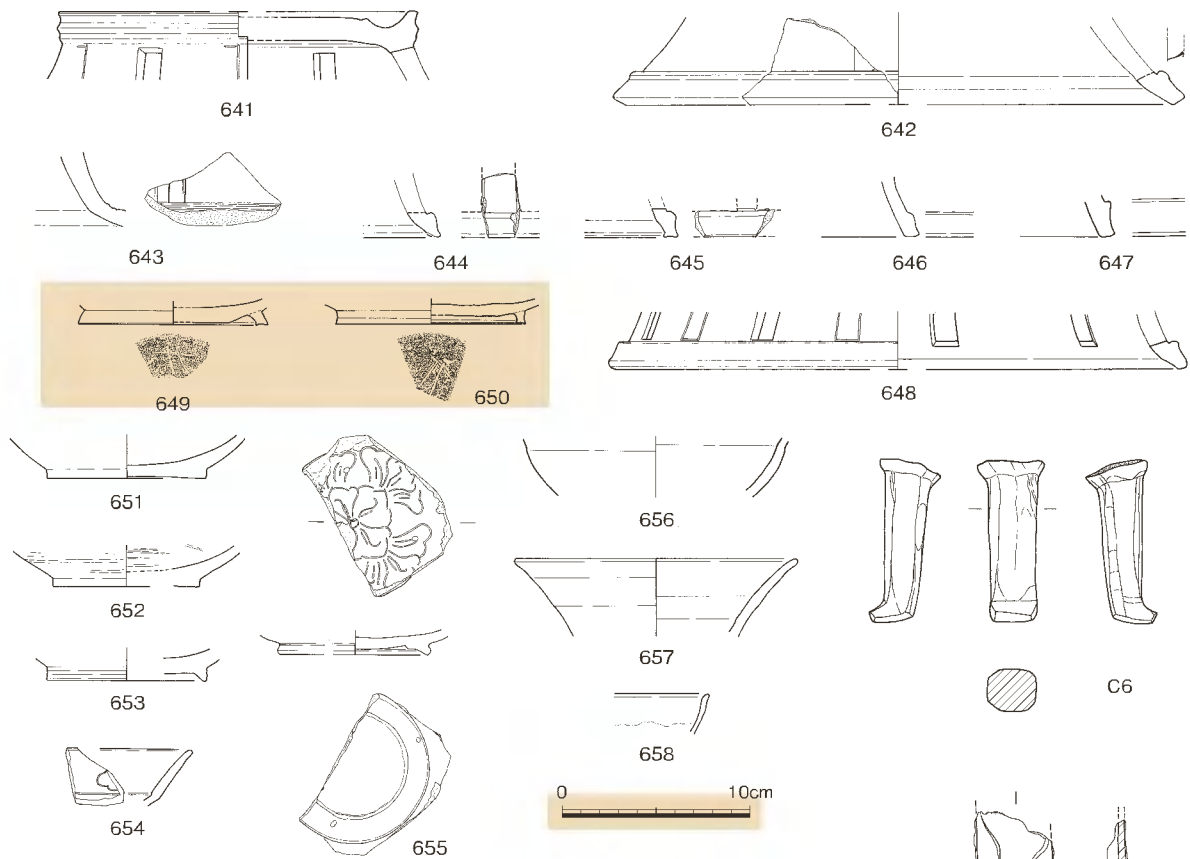
第252図 遺構に伴わない遺物（側道調査区）（1/4）

と同じであるが、胎土中に大きな砂粒は少ない。

第250図の545は蓋が伴う須恵器の短頸壺で、尾崎遺跡では比較的特殊な器形である。560の平瓦は、外面に平行タタキ痕跡、内面には布目が認められる。図示できた瓦はこの1点だけであるから、尾崎遺跡で検出した掘立柱建物に瓦葺きのものはないと考えている。



第253図 遺構に伴わない遺物① (1/4)



第254図 遺構に伴わない遺物② (1/4・1/3)

第252図の592と593は、須恵器の破片を利用した硯で、内面のタタキ痕跡が潰れて表面が滑らかになっている。タタキ痕跡の内部には、どちらも黒い墨が残存している。

第253図は、兵庫県たつの市大陣原窯跡や相生市緑ヶ丘窯跡などの西播磨地方の窯で生産された須恵器の椀である。これらの土器も国道429号の北側に位置するF区とG区から出土した。底部は、回転糸切りの平高台を有するものと、糸切り底に輪状高台を貼り付けたものがある。平高台の底部は側面をへら状工具で削って整形したものが多く、断面形が台形になっている。底部と体部の境目は、円盤状の底部の外側上面に体部の粘土を貼り付けているから、見込み部分に段が認められるものが多い。体部から口縁部にかけては内湾して立ち上がり、体部の外面に1条の凹線が存在するものや、台形や三角形の突帯をもつものがある。胎土中には微砂を含み、焼成は良好で灰色または灰白色を呈するものが多い。これらの須恵器の椀は9世紀から10世紀に属すると考える。

第254図の641～648は、円面碗の破片である。上位の陸と海の形態が明らかなのは641だけで、残る7点はいずれも脚端部の小破片である。脚部には長方形の透かしと線描きの長方形区画が、交互に配されている。胎土は須恵器の杯身や杯蓋と同様で、灰色を呈したものが多い。

651～656は緑釉陶器の破片で、いずれも椀の形態になると考える。654と655はオリブ灰色を呈する釉薬を施した猿投窯で生産されたもので、654の内面には陰刻の花弁文が、655の内面には陰刻花文が描かれている。特に655の稜椀形態になる緑釉陶器は出土例が少なく、9世紀後半の時期を代表する珍しい出土品である。657と658は灰釉陶器の破片である。

(福田)

## 第6節 中世の遺構・遺物

### 1 概要

尾崎遺跡の北側に位置する丘陵上には、旧大原町指定の重要文化財である小原山王山城跡が所在している。この山城は、建武2（1335）年に足利氏方の赤松の武将である小原孫次郎入道信明が築城したが、康安元（1361）年に山陰の山名時氏が兵3000を率いて美作に侵攻し、近くの小幡や大野の諸城とともに滅ぼした。その後康正2（1456）年になって、今度は赤松方の武将宇野家貞が播磨高田から入って城を修理した。この宇野家貞は、新免長重に嫁した妹の子を養子にしたのであるが、これが宇野貞重で後に新免伊賀守貞重と改めた。貞重が明応2（1493）年に近接地である旧大原町下町の竹山城に移ると、山王山城は廃城になったという。このような築城から廃城に至る歴史をもつ小原山王山城であるが、城跡に登ると眼下に尾崎遺跡が展開し、旧大原町の町並みが一望できる。

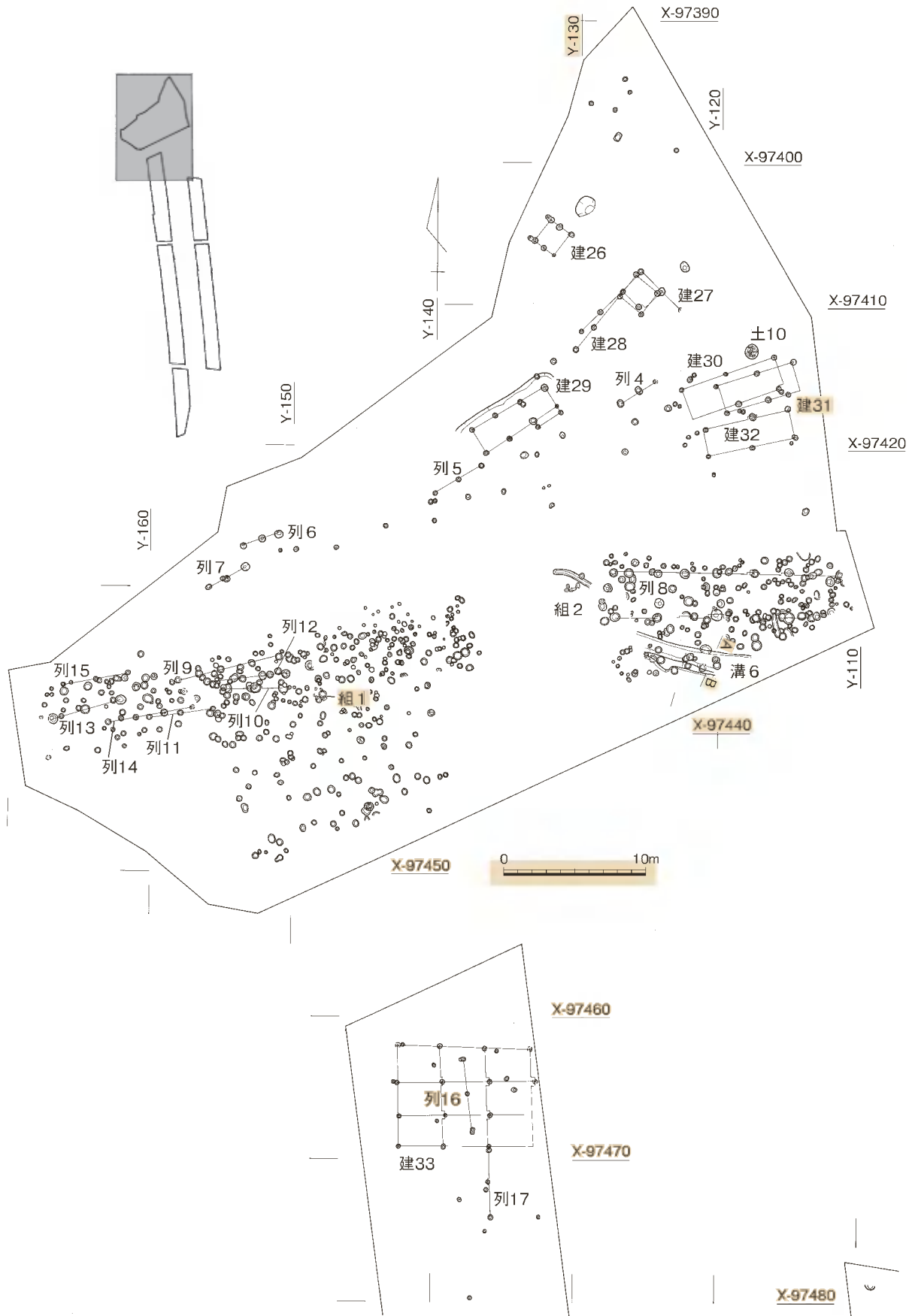
尾崎遺跡は、小原山王山城跡が所在する丘陵の眼下に展開した河岸段丘上の遺跡であるから、戦いのない平時に日常生活を営んでいた人々の集落が存在すると思われた。その時期は、城の歴史から推定して、14世紀前半から15世紀末になるのではないかと、調査に着手する以前には考えられた。

尾崎遺跡の全面調査は、平成17年度に側道部分、平成18年度に本線部分と国道北部分を行った。

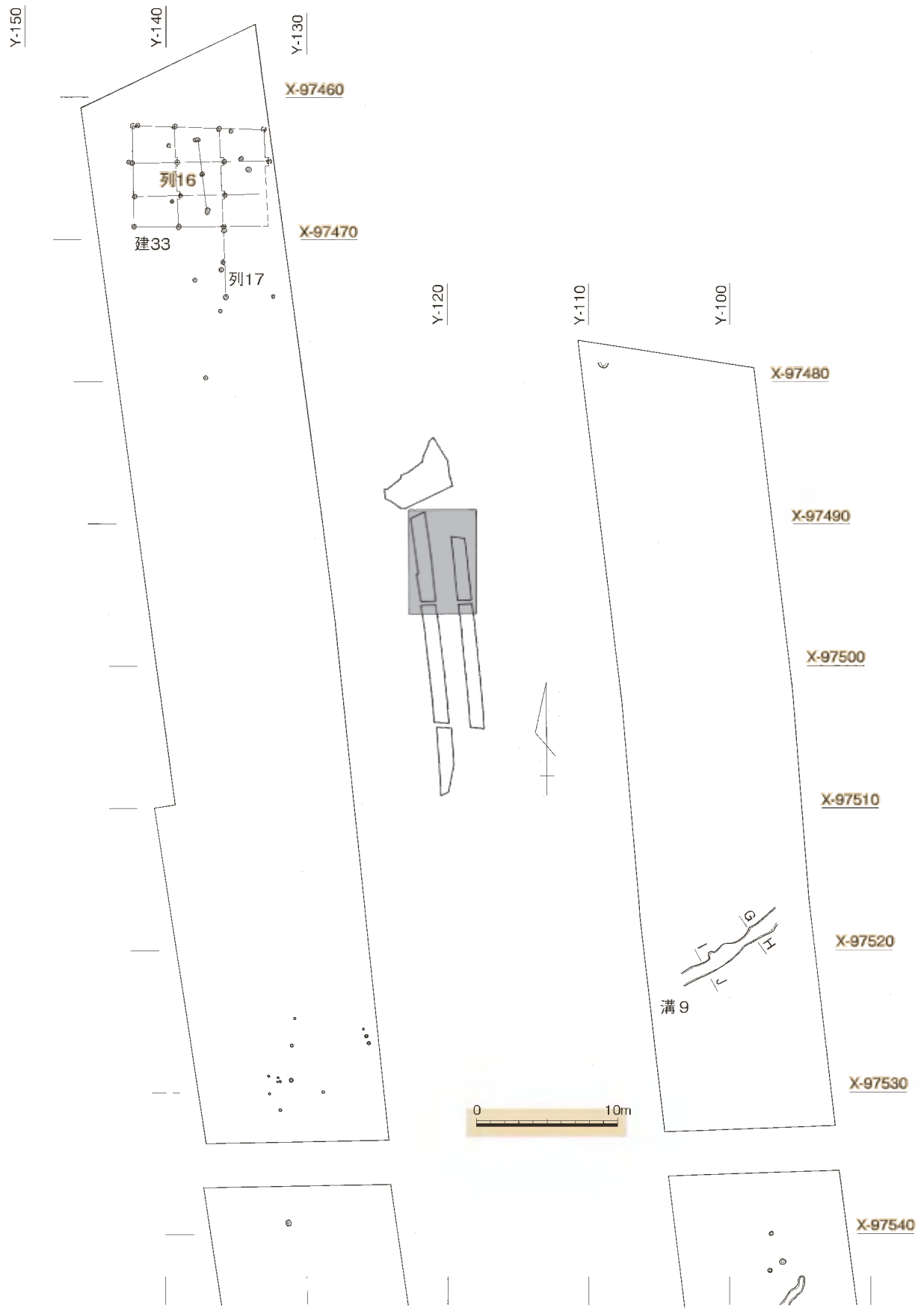
側道調査区の発掘調査では、国道429号に近接した小原山王山城跡が所在する丘陵に近い地点には、精査したにもかかわらず遺構が検出できなかった。河岸段丘の中位に位置する調査区では、5棟の掘立柱建物が存在した。5棟の建物のうち4棟が総柱の掘立柱建物で、同時期に存在したとは考えられない状況を呈して、狭い場所に重なりあっていた。この地点では、掘立柱建物に近接して土壇墓も検出された。さらに南側の調査区では、2棟の総柱の掘立柱建物が棟方向を違えて確認された。

平成17年度に実施した側道調査区で明らかになったことは、国道429号に面した北側の地点には、小原山王山城跡が所在する丘陵に近いにもかかわらず、遺構が存在しなかった。遺構が検出されたのは河岸段丘の中位付近で、掘立柱建物が多かった。掘立柱建物の棟方向は、北から南に向かって下がる地形の方向か、それにほぼ直行するようになっていた。細くて浅い2条の溝を確認したが、掘立柱建物を取り囲む屋敷地の区画溝ではないと考えられた。掘立柱建物の柱穴内から出土した遺物として、勝間田焼の椀や小皿と土師器の杯や小皿などがあるが、これらの土器は小原山王山城が使われていた時期より古いもので、側道部分の調査で検出した掘立柱建物は、城が造られる以前のもものと推定された。城が機能していた時期の遺物には、包含層から出土した瓦質土器の鍋や羽釜、備前焼の播鉢や甕、播丹型土師器の甕などがあるが、出土量は極めて少ない状況である。

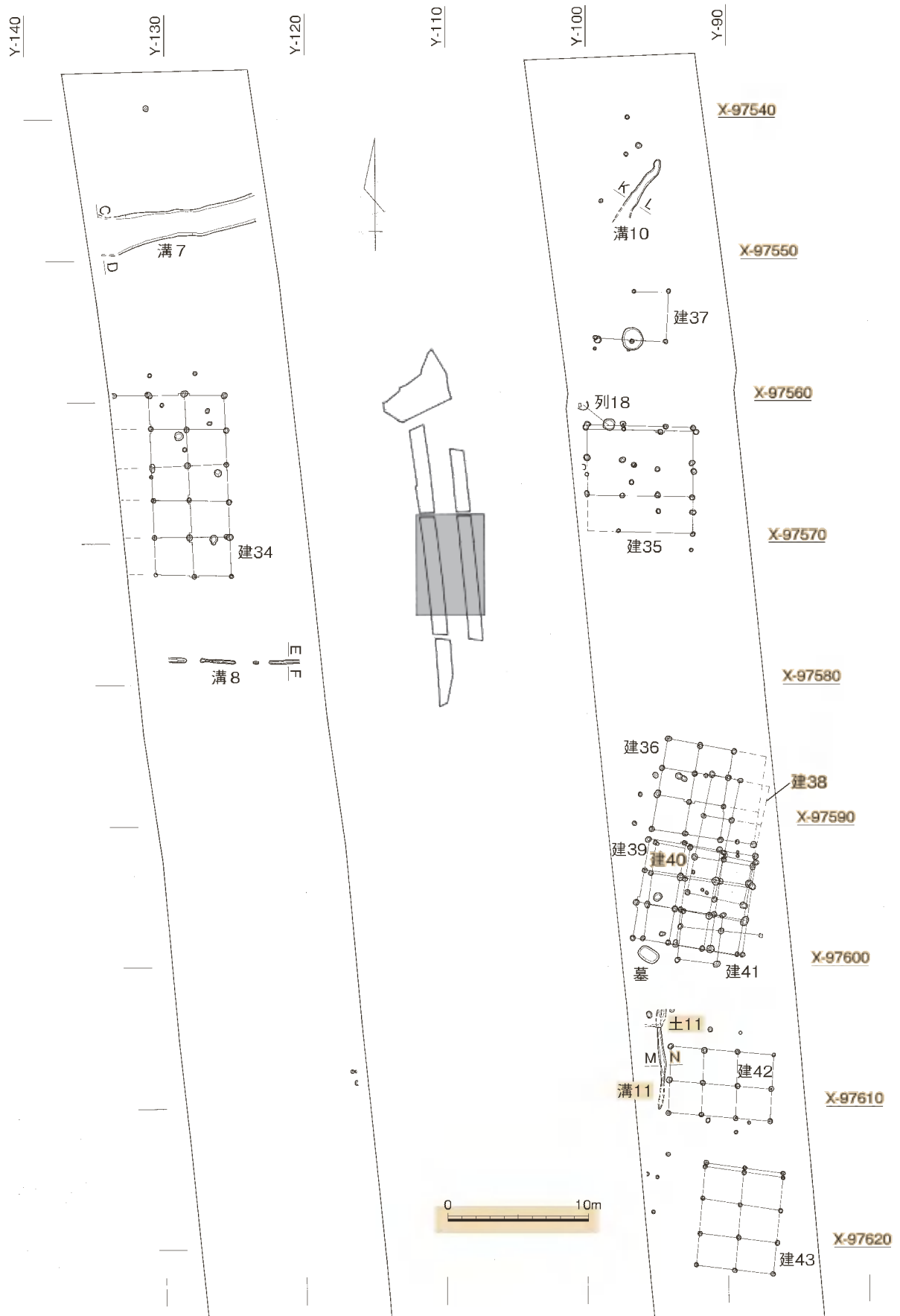
平成18年度には、前年度に発掘調査を実施した側道部分の調査結果を参考にして、本線部分と国道北部分の調査を行った。本線調査区の調査は南側から北側に向かって進めたが、南端の地点で1棟の小規模な掘立柱建物を検出したものの、側道部分で多くの掘立柱建物を確認した中位には、遺構が存在しなかった。本線部分の中位は、人頭大から拳大の石が多く散在したので、遺構を構築するのが難しいと思われた。中位よりやや北側の地点では、大規模な総柱の掘立柱建物を検出した。建物は調査範囲よりもさらに西側へ延びると推定され、北側と南側の離れた位置には溝が存在した。この大形で総柱の掘立柱建物には勝間田焼の椀が伴うので、城よりも古い時期のものと考えられる。本線調査区



第255図 中世主要遺構部分配置図① (1/400)

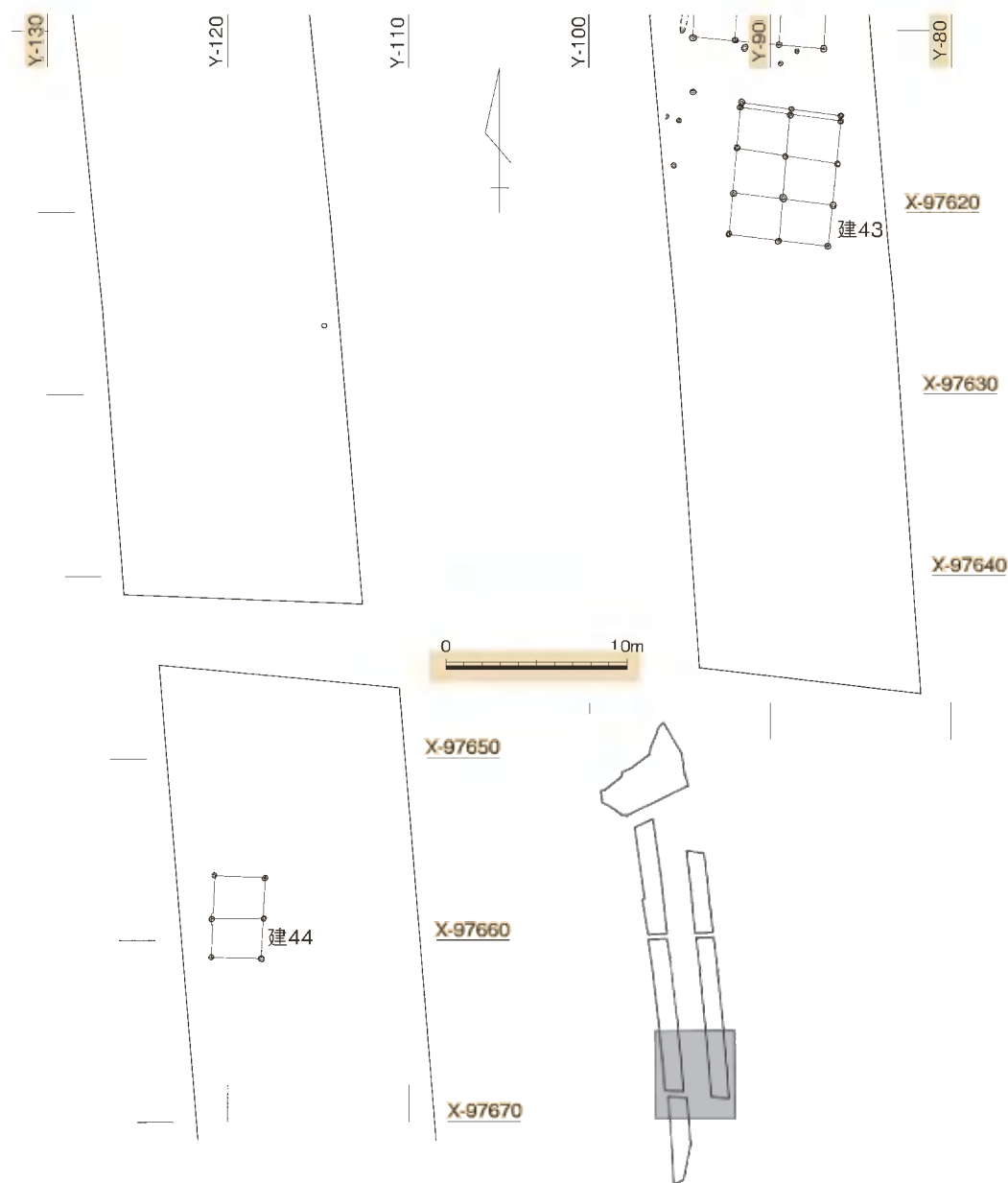


第256図 中世主要遺構部分配置図② (1/400)



第257図 中世主要遺構部分配置図③ (1/400)





第258図 中世主要遺構部分配置図④ (1/400)

では、国道429号に近い地点にも掘立柱建物や柱穴列を検出したから、側道調査区では遺構がなかったものの、国道北部分の調査区には中世の遺構が存在する可能性が考えられた。

本線調査区の調査が終わってから国道北部分の調査を実施したが、この調査区の南側には土砂が厚く堆積し、遺構面が北から南に向かって傾斜していたので、発掘作業は困難であった。北側に位置する丘陵の斜面に掘立柱建物や柱穴列を検出したが、地形の低い部分が削平されていた。南東方向の地点に2列の柱穴列が存在したが、柱穴内に石に囲まれた柱根が据えられたままの状態出土した。南西側には柱穴列や数多くの柱穴を確認したが、建物になるものはなかった。

尾崎遺跡は、小原山王山城跡が所在する丘陵の眼下に展開する遺跡であるから、その城に関係した遺構が存在する可能性が考えられたが、側道部分や本線部分の調査区で検出した掘立柱建物は、築城される以前の古い時代のもので、城が機能していた時期の遺構は少ないと思われた。(福田)

## 2 掘立柱建物

### 掘立柱建物26 (第255・259図、図版32-1)

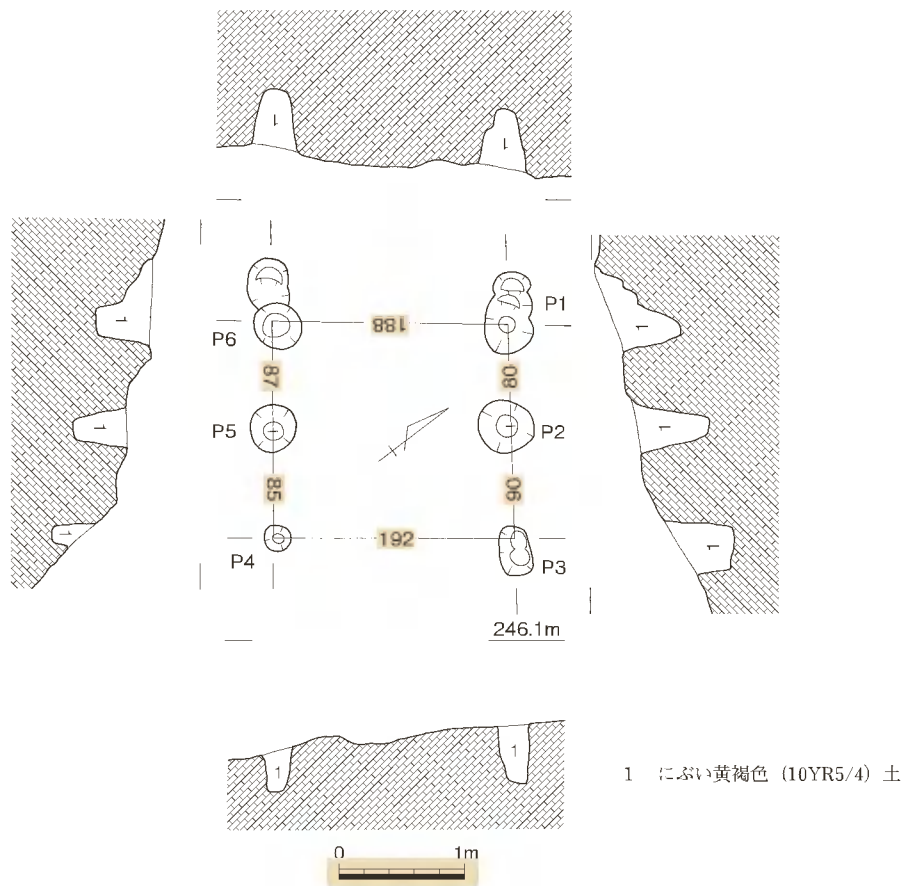
G区北部、建物27~29より1つ上の段に位置する。現状で2×1間の掘立柱建物であるが、北東側は近世以降の開墾で削られている。棟方向はN-55°-Wで、床面積は3.3㎡である。包含層を除去して岩盤面で検出した。埋土には岩盤の破片を多く含む。遺物は出土しなかった。斜面最上位の柱穴は、上側が階段状に掘られている。建物の時期は、建物27~29と同じ中世である。 (氏平)

### 掘立柱建物27 (第255・260図、図版32-1)

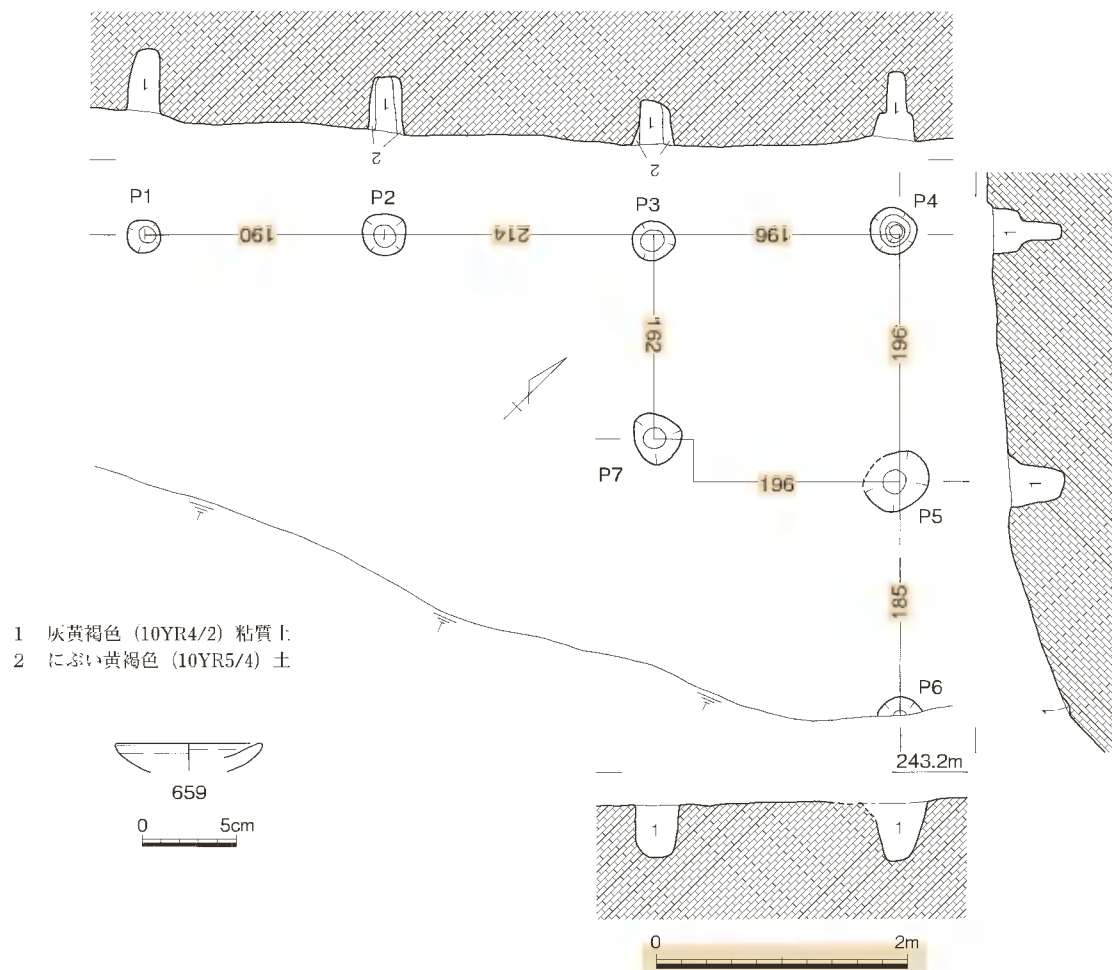
G区北部で建物26より1つ下段に位置する。建物28と切り合い関係があり、建物28より古い。現状3×2間で側柱建物であろうか。棟方向はN-43°-Eである。この建物のある平坦面はもともと建物に伴うもので、その後開墾され南側が削られているようだ。埋土は2層に分かれ柱痕跡が認められる。遺物は北隅の柱穴(P4)から土師器皿が1点出土し、建物の時期は中世と考える。 (氏平)

### 掘立柱建物28 (第255・261図、図版32-1)

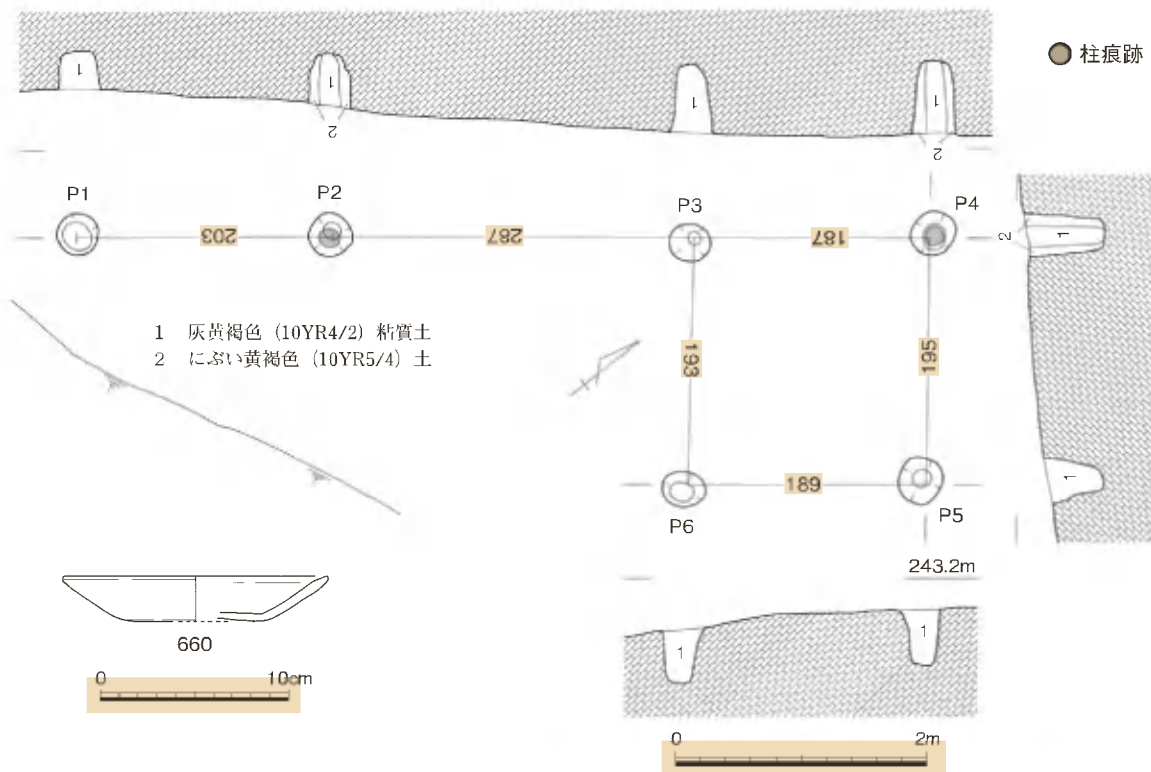
G区北部で建物27・28と同じ段に位置する。建物27と切り合い関係で、建物27の建て替えが建物28であろう。現状3×1間の側柱建物だが建物27と同様3×2間と想定できよう。棟方向はN-34°-Eである。埋土は2層に分かれ柱痕跡が認められる。遺物はP2から660の土師器皿、P5から15世紀代の備前焼甕片が出土し、これにより建物の時期は中世である。 (氏平)



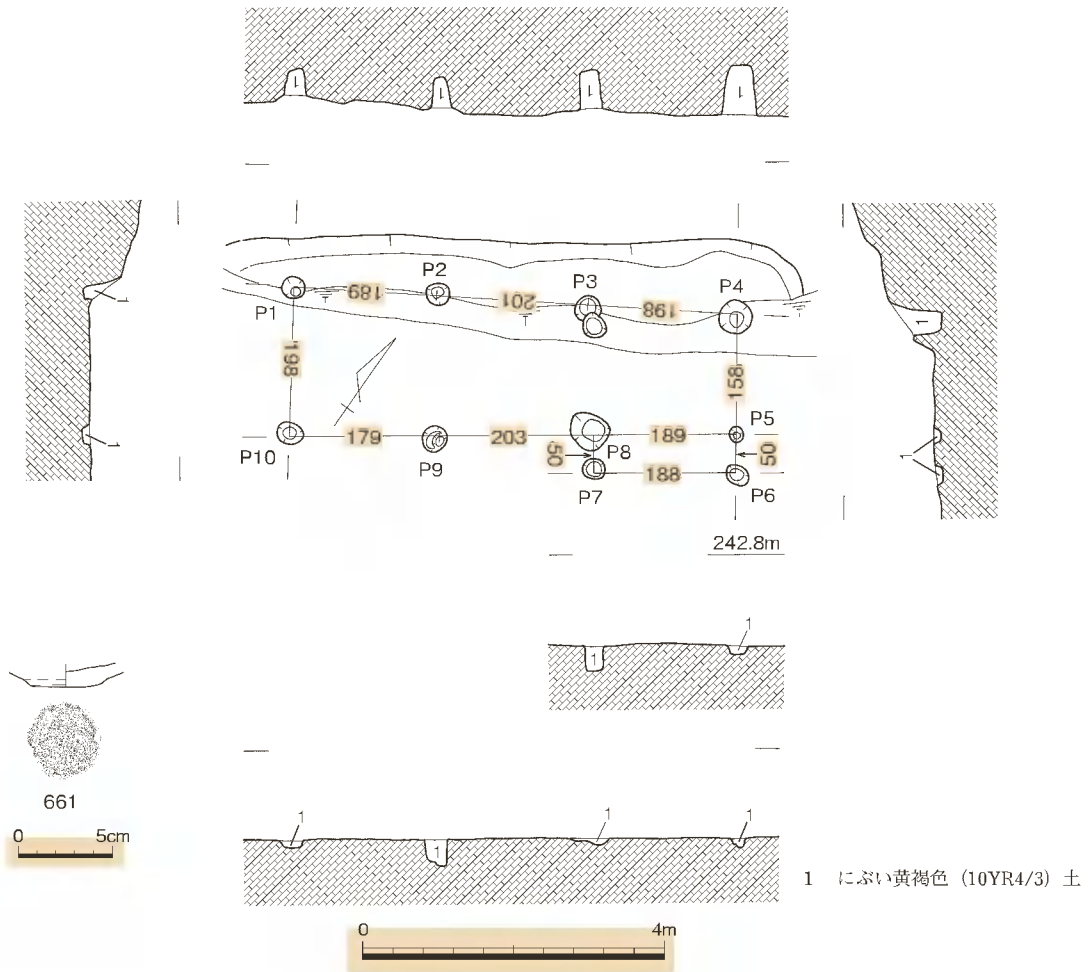
第259図 掘立柱建物26 (1/60)



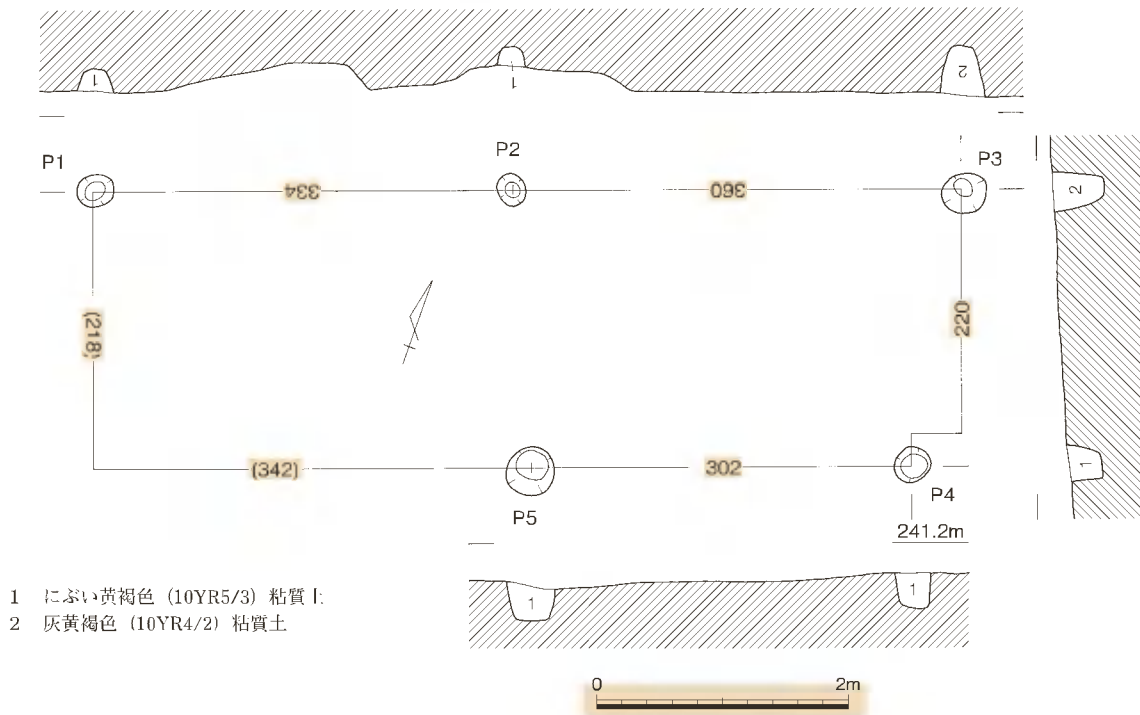
第260図 掘立柱建物27 (1/60)・出土遺物 (1/4)



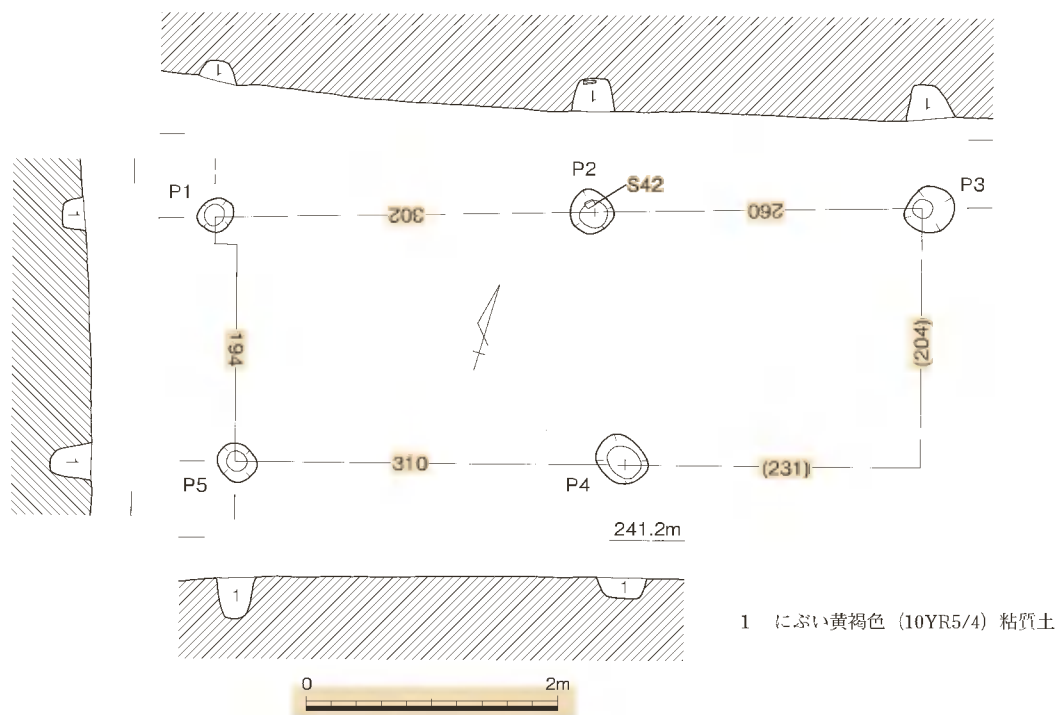
第261図 掘立柱建物28 (1/60)・出土遺物 (1/4)



第262図 掘立柱建物29 (1/100)・出土遺物 (1/4)



第263図 掘立柱建物30 (1/60)



1 にぶい黄褐色 (10YR5/4) 粘質土

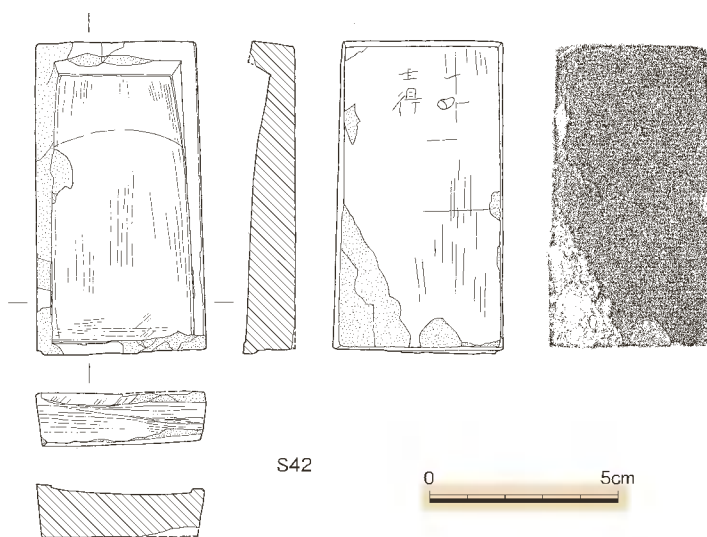


写真24 掘立柱建物31  
P2視出土状況 (南東から)

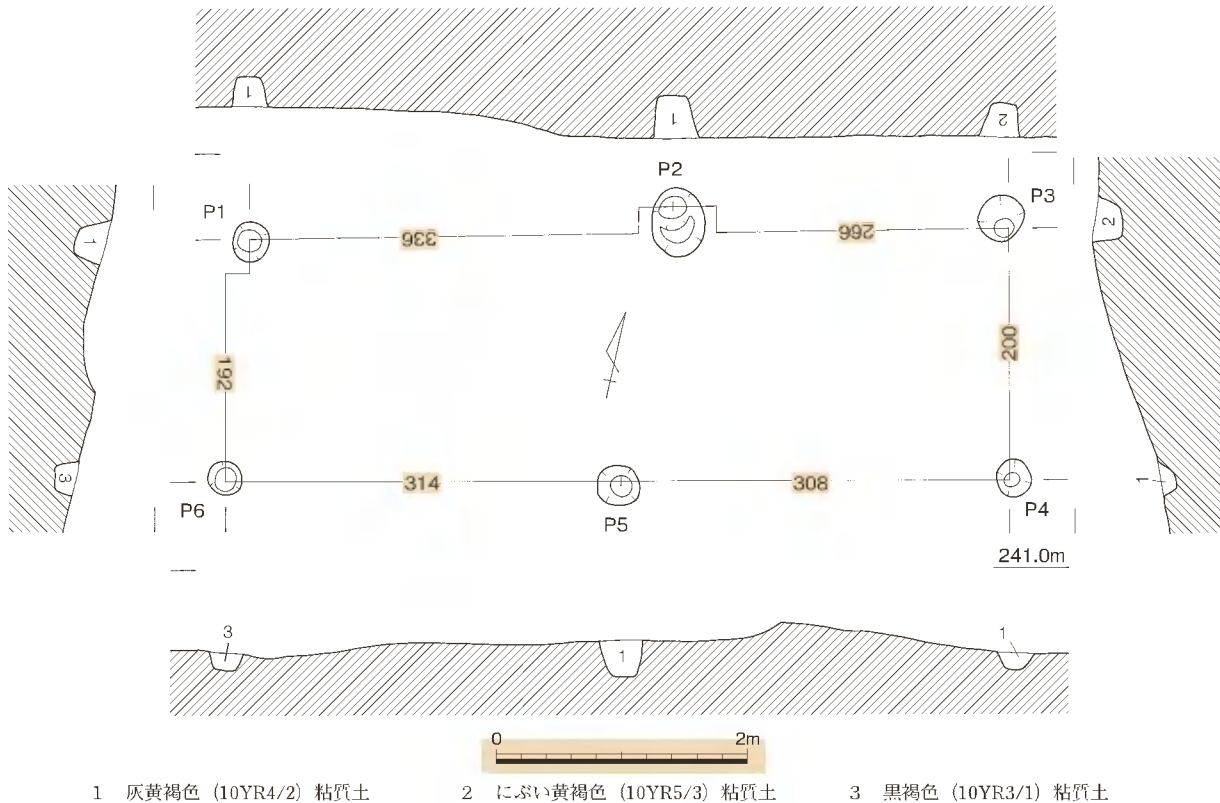
第264図 掘立柱建物31 (1/60)・出土遺物 (1/2)

**掘立柱建物29** (第255・262図、図版32-1)

G区中央で建物27と同じ段に位置する。現状3×1間の側柱建物で、北側に加工段を伴う。棟方向はN-54°-Eである。北側の柱穴列から南側が近世以降の開墾で削平される。P5・8は残存状態が悪かったせい、やや不明瞭である。埋土は1層で均質な土であった。遺物は661の土師器皿がP10から出土しており、これと周辺の建物との関係より、建物の時期は中世と言えるだろう。(氏平)

**掘立柱建物30** (第255・263図)

G区東側に位置し、建物31と重なる2×1間の建物である。棟方向はN-70°-Eで、床面積は8.7㎡である。柱穴のうち、P3のみが焼土、炭を含む埋土である。いずれも埋土は単層で均質な土であった。遺物は出土していない。周辺の建物との関係より、建物の時期は中世の可能性が高い。(氏平)



1 灰黄褐色 (10YR4/2) 粘質土      2 にぶい黄褐色 (10YR5/3) 粘質土      3 黒褐色 (10YR3/1) 粘質土

第265図 掘立柱建物32 (1/60)

#### 掘立柱建物31 (第255・264図、写真24)

G区東側で建物32の北に位置する2×1間の掘立柱建物。棟方向はN-74°-Eで、床面積は10.9㎡である。出土遺物はP3の瓦質土器などとP2の硯S42である。建物の時期は中世と言えるだろう。

S42の石材は下関周辺産の赤間石で上質である。硯の頭側は内形の掘り込みが丁寧であるが、尻側は荒く縁も線を引いたようにいい加減である。尻側が破損し作り直された可能性がある。背面文字は「得」1文字が解読できる。 (氏平)

#### 掘立柱建物32 (第255・265図)

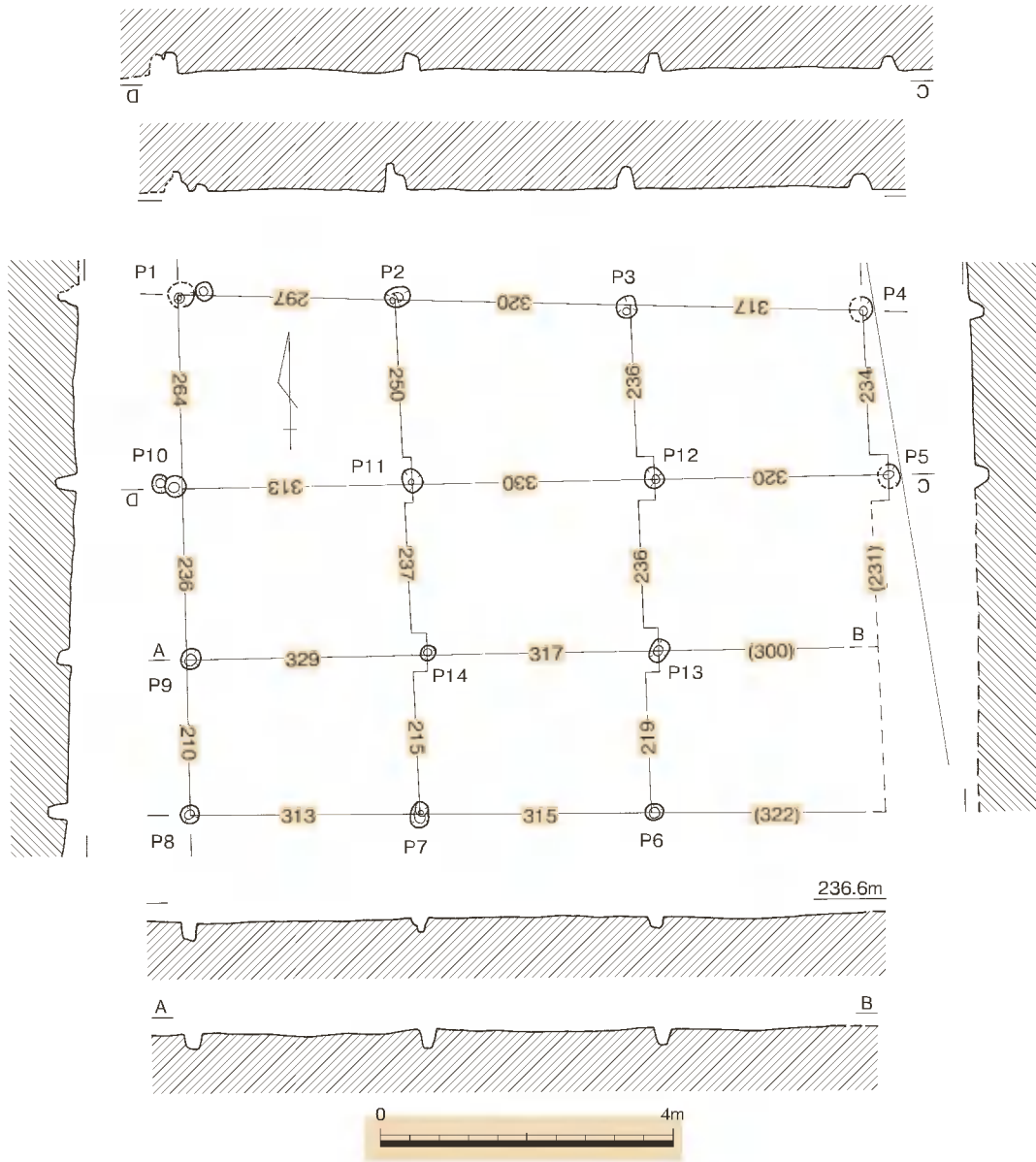
G区東側、建物30・31の南に位置する2×1間の掘立柱建物である。棟方向はN-78°-Eで、床面積は12.4㎡である。出土遺物はP1・3・5・6から小片の土師器、須恵器がある。埋土はいずれも単層だが土色が異なる。建物の時期は中世であろう。 (氏平)

#### 掘立柱建物33 (第255・256・266図)

E区北側に位置する3×3間の総柱建物である。東西方向はさらに延びる可能性がある。棟方向はN-88°-Wで、床面積は現状68.37㎡である。柱穴の直径は25～35cm、検出面からの深さは10～40cmである。埋土は灰黄褐色粘性砂質土で、容易に検出できた。出土遺物はP2・4～6・10・12から小片の土師器、勝間田焼がある。建物の時期は出土遺物から鎌倉時代であろう。 (氏平)

#### 掘立柱建物34 (第257・267図、写真25、図版32-2)

C区の中央西寄りで検出した掘立柱建物である。P1は調査範囲内に辛うじて入っていたが、その南側に列状に続く柱穴は調査区の外になる。柱穴はP1の西側にも延びる可能性があるが、確認はできない。P9・13・16・18では柱穴内に礫が積まれた状況を確認したが、柱の抜き取り穴に詰め込んだと考える。P12は縦長の礫を柱抜き取り穴に詰めていた。柱材の再利用が窺える。 (上梅)



第266図 掘立柱建物33 (1/100)



写真25 掘立柱建物34と竹山城跡 (北東から)

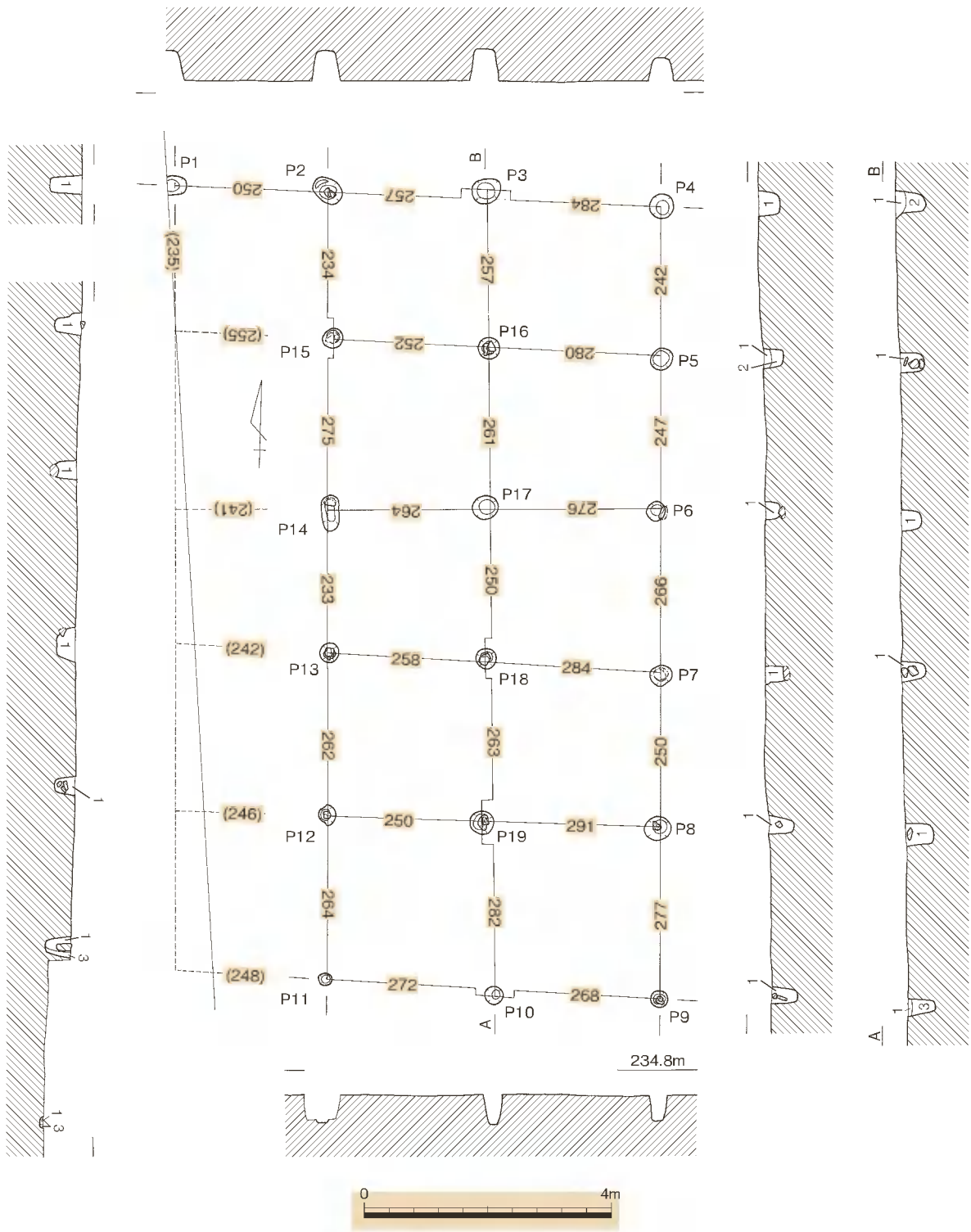
**掘立柱建物35 (第257・268図)**

S 2区北部で検出した、主軸をほぼ南北に向ける3×3間以上の掘立柱建物である。床面積は53.48㎡を測った。柱穴の直径は20～30cm、深さは17～35cmである。出土遺物と柱穴の埋土の特徴から、中世の範疇に推定したい。(浅倉)

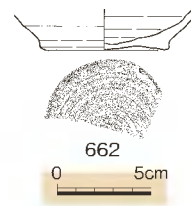
**掘立柱建物36 (第257・269図、図版33-1)**

S 3区北部で検出した3×3間以上の掘立柱建物である。床面積は48.5㎡を測った。柱穴の直径は30～40cmで、検出面からの深さは25～40cmである。柱穴からは勝間田焼椀や土師器小皿などの遺物が出土した。これらの遺物や埋土の特徴か

(浅倉)

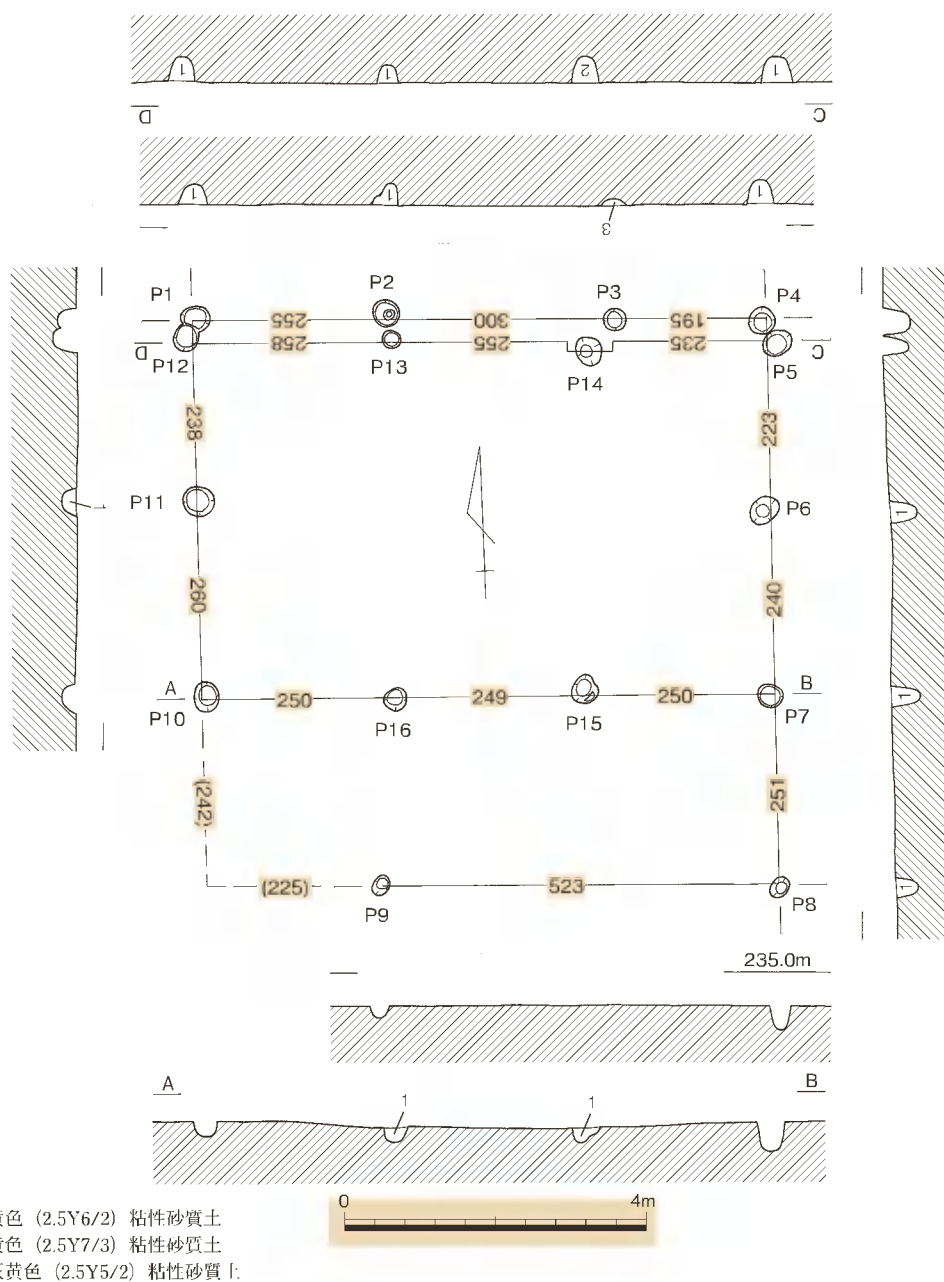


- 1 黄灰色 (2.5Y6/1) 砂質土
- 2 黄灰色 (2.5Y5/1) 砂質土
- 3 褐灰色 (10YR4/1) 砂質土



第267図 掘立柱建物34 (1/100)・出土遺物 (1/4)

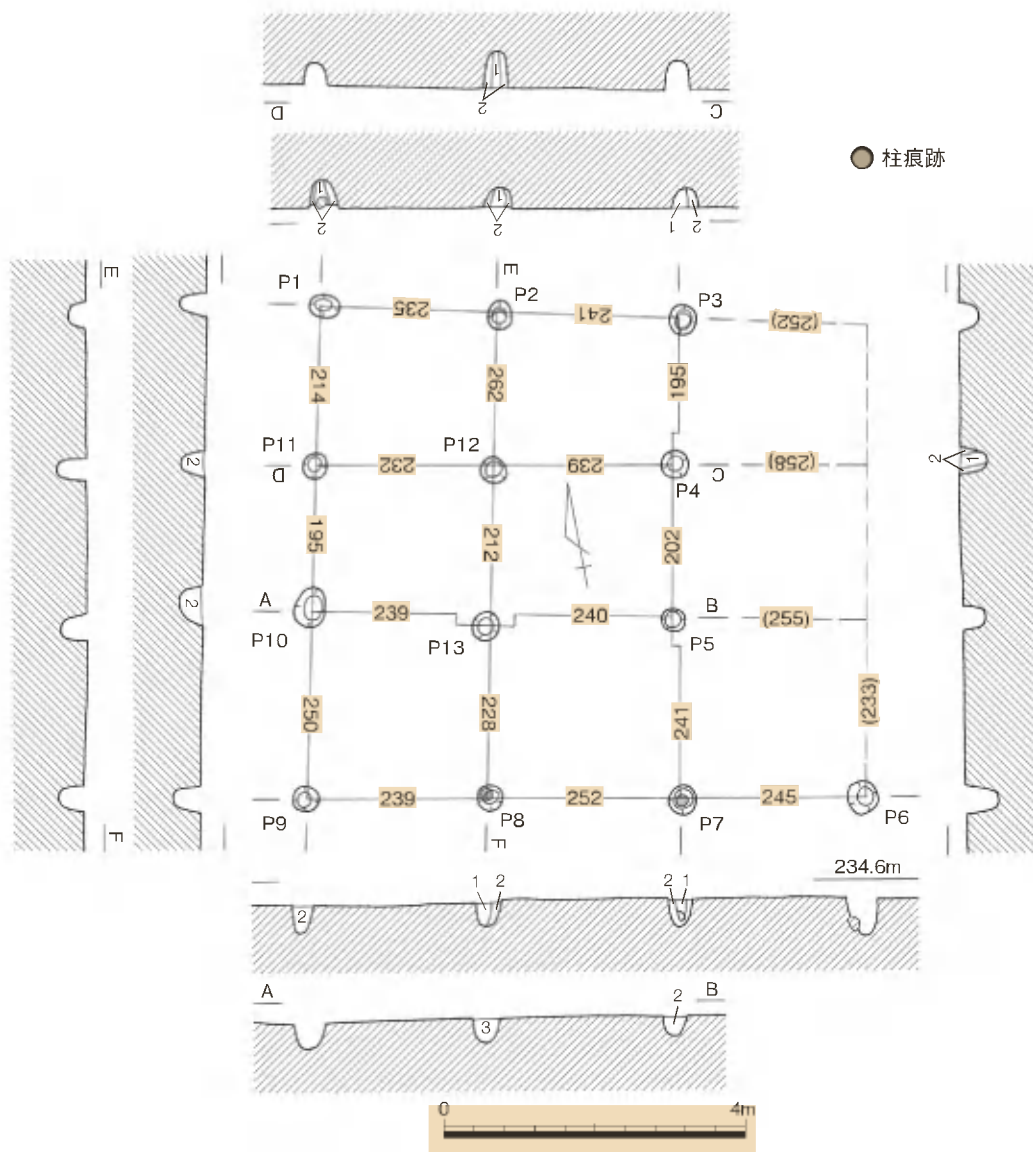




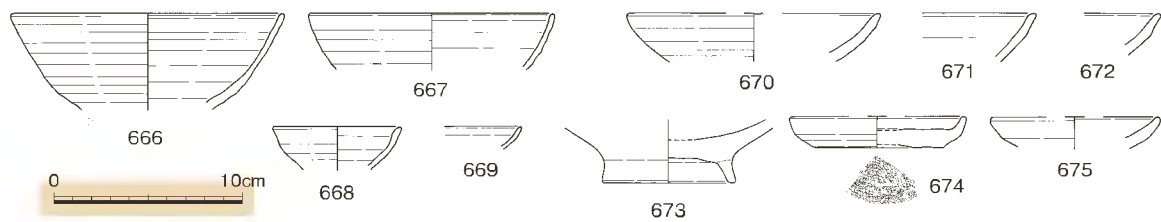
第268図 掘立柱建物35 (1/100)・出土遺物 (1/4)

掘立柱建物37 (第257・270図、図版33-1)

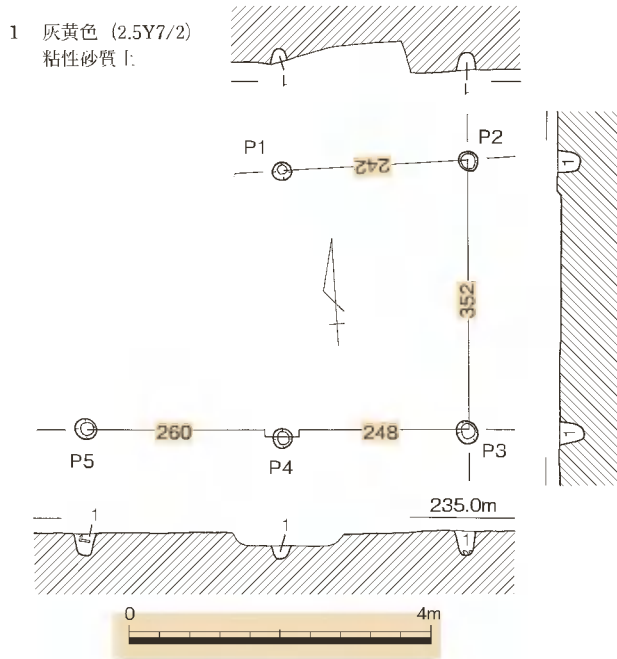
S 1区南側で検出した、主軸をほぼ東西に向ける2×1間の掘立柱建物である。床面積は17.88㎡を測る。柱穴の直径は20~30cmで、検出面からの深さは25~30cmである。遺物は出土していないが、柱穴埋土の状況から中世の範疇に推定したい。(浅倉)



1 暗褐色 (10YR3/3) 粘性砂質土      2 灰黄褐色 (10YR5/2) 粘性砂質土      3 褐灰色 (10YR4/1) 粘性砂質土



第269図 掘立柱建物36 (1/100)・出土遺物 (1/4)



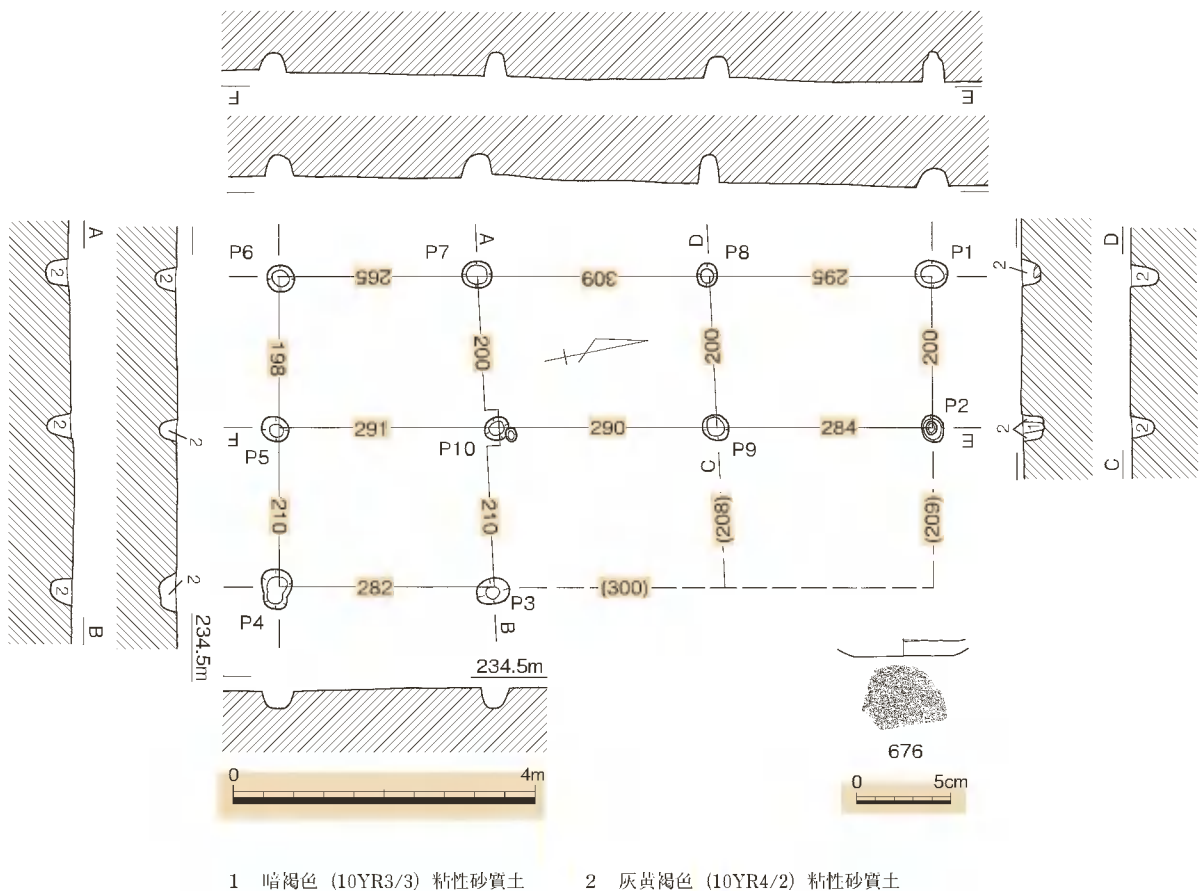
第270図 掘立柱建物37 (1/100)

掘立柱建物38 (第257・271図、図版33-1)

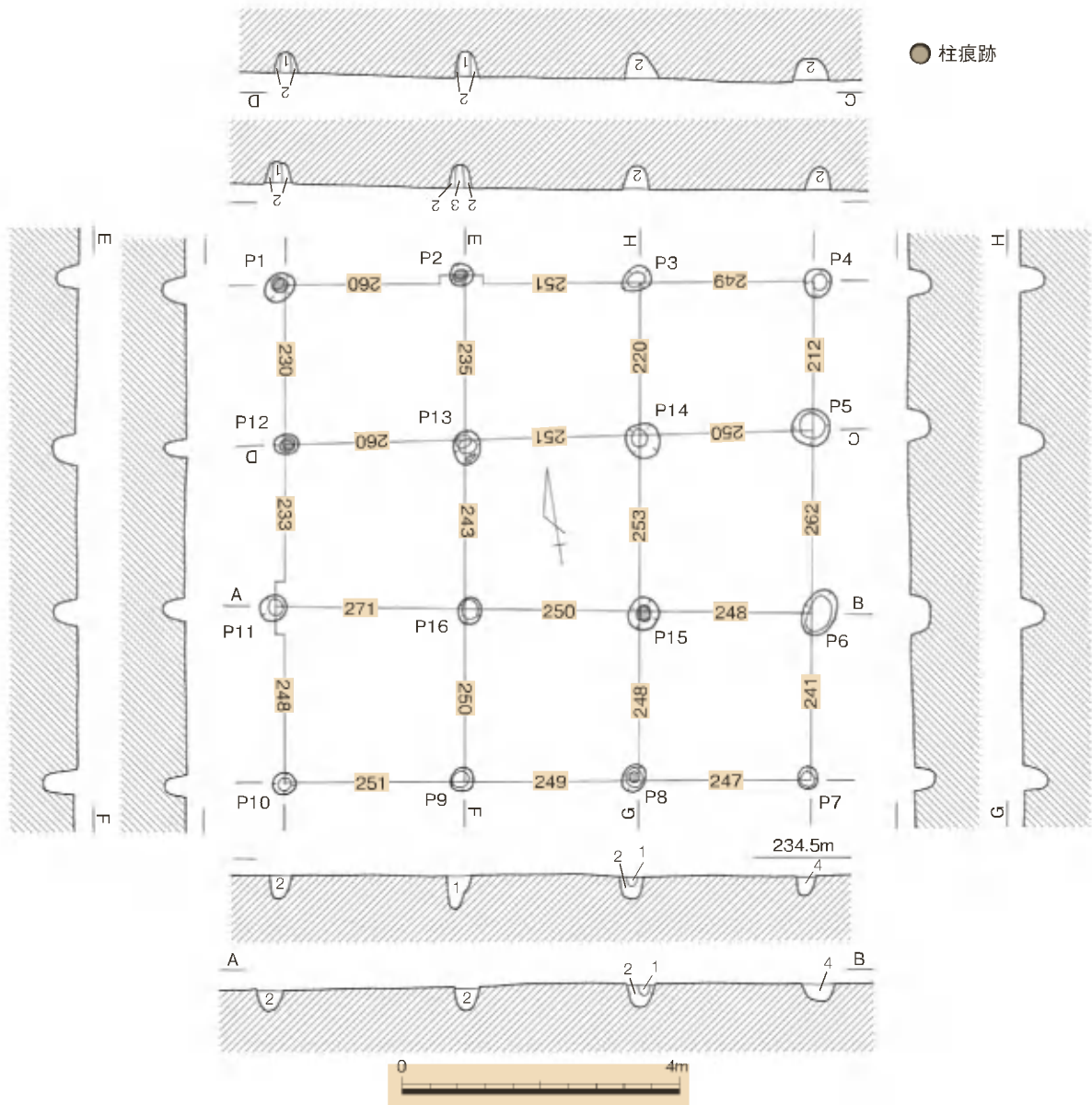
S3区北部で検出した3×2間以上の掘立柱建物である。掘立柱建物36と完全に重複して建てられている。柱穴は直径25~40cm、深さ20~45cmであった。床面積は35.63㎡を測る。中世の建物と考える。(浅倉)

掘立柱建物39 (第257・272・273図、図版33-1)

S3区南部で検出した3×3間以上の掘立柱建物である。床面積は55.98㎡を測る。掘立柱建物36の南に軒を接するようにほぼ並行に建てられている。柱穴は直径30~50cm、深さ30~50cmである。柱穴からは勝間田焼碗や土師器小皿、土錘が出土した。土錘は中央が膨らむものと、円柱状のものがみられた。遺物や柱穴埋土の特徴から、時期は中世の範囲に推定したい。(浅倉)



第271図 掘立柱建物38 (1/100)・出土遺物 (1/4)



- |                               |                                  |
|-------------------------------|----------------------------------|
| 1 褐灰色 (10YR5/1) 粘性砂質土 (炭・焼土含) | 3 黒褐色 (10YR3/1) 粘性砂質土 (炭多含)      |
| 2 灰黄褐色 (10YR4/2) 粘性砂質土        | 4 にぶい黄褐色 (10YR4/3) 粘性砂質土 (炭・焼土含) |

第272図 掘立柱建物39 (1/100)

掘立柱建物40 (第257・274図、図版33-1)

S3区南部で検出した3×3間以上の掘立柱建物である。床面積は50.97㎡を測る。北側には掘立柱建物36が並行に隣接する。また、掘立柱建物39・41と重複している。さらに、北東角の南側では土壇墓を検出した。近隣に掘立柱建物が密集することから、建て替えを繰り返した屋敷地の存在が示唆される。土壇墓は屋敷墓となるのであろう。柱穴は直径30~70cm、検出面からの深さ20~45cmである。柱穴からは勝間田焼椀や土師器小皿が出土している。椀も小皿も底部は回転糸切りされている。遺物や柱穴埋土の特徴から中世に属するものと判断できる。(浅倉)

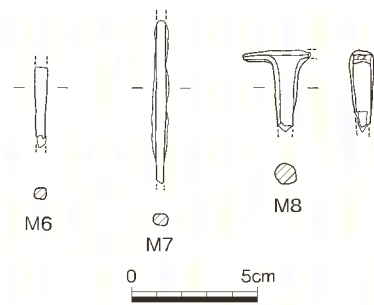
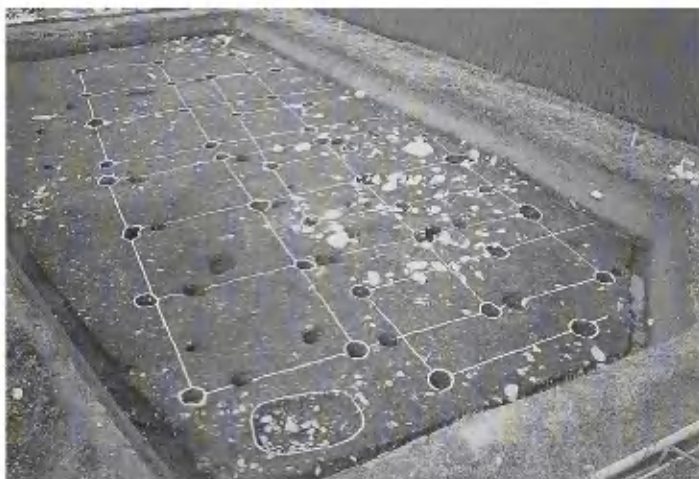
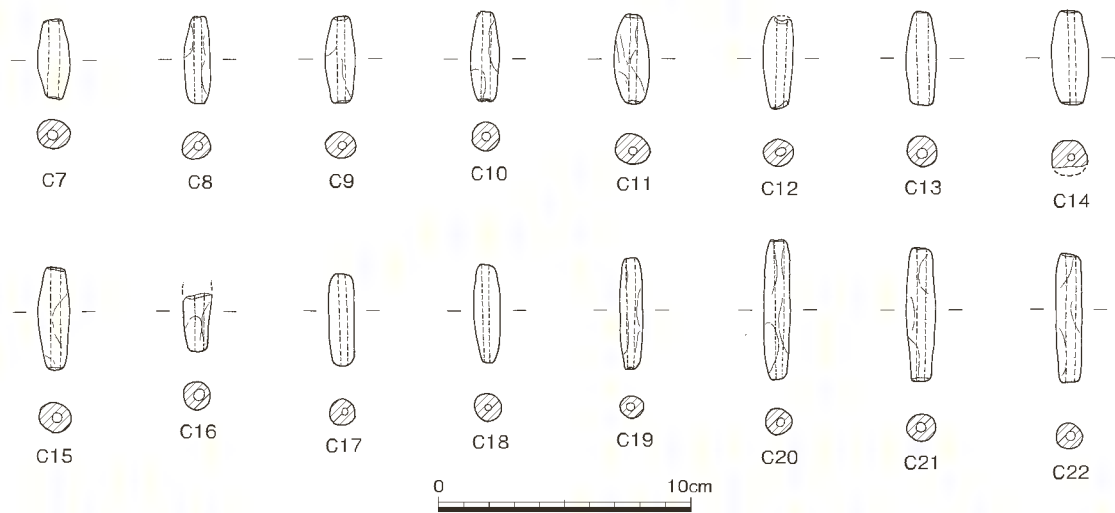
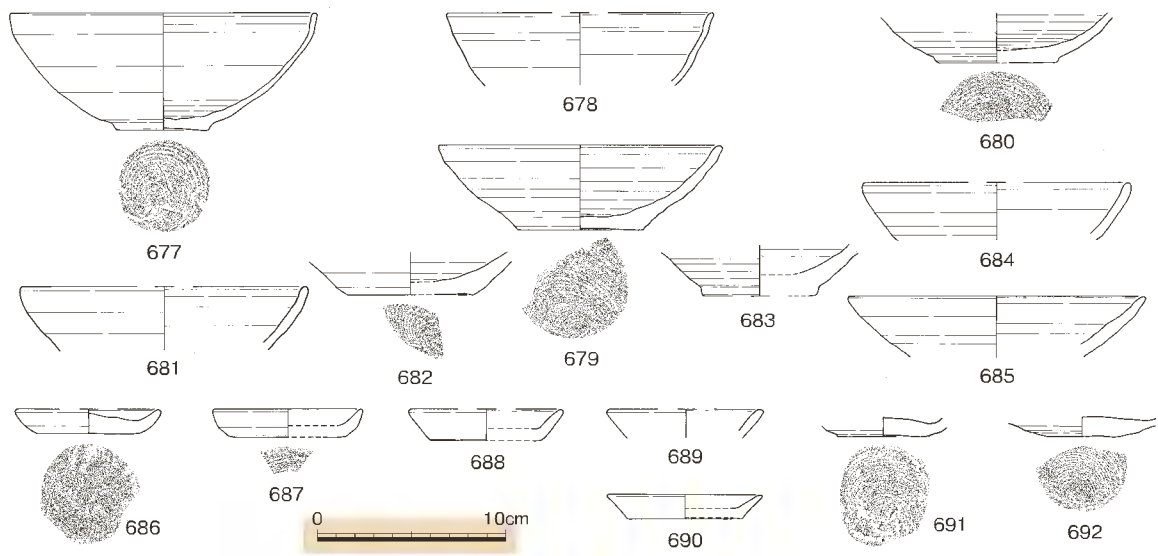
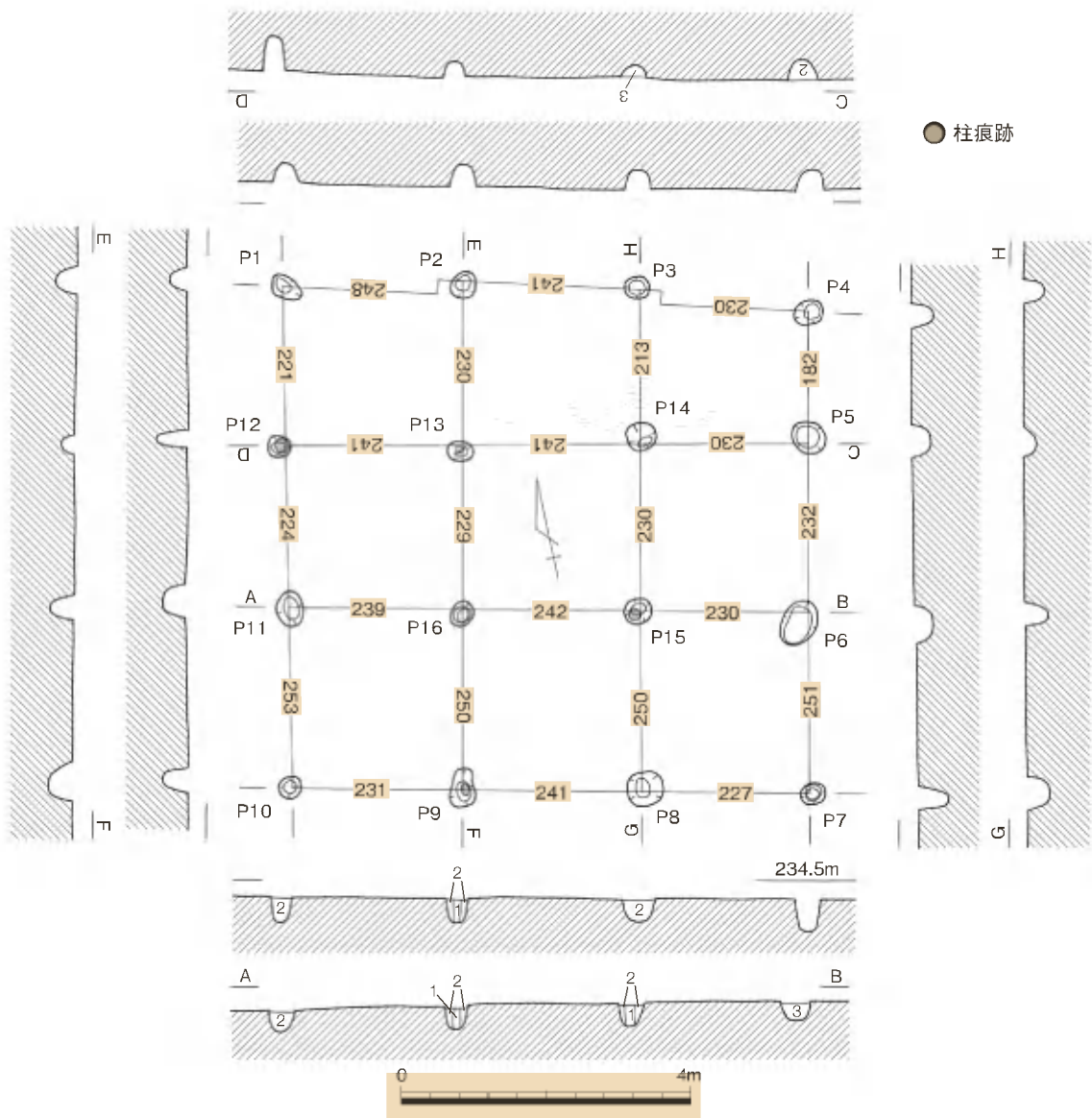
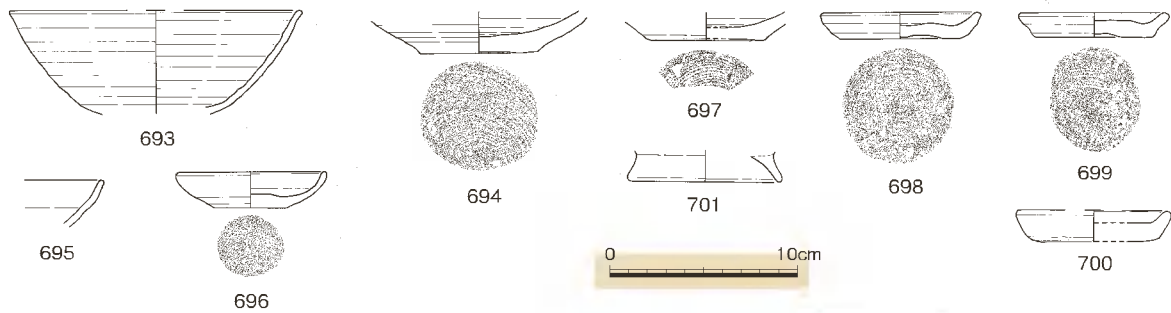


写真26 側道調査区中世建物群 (南西から)

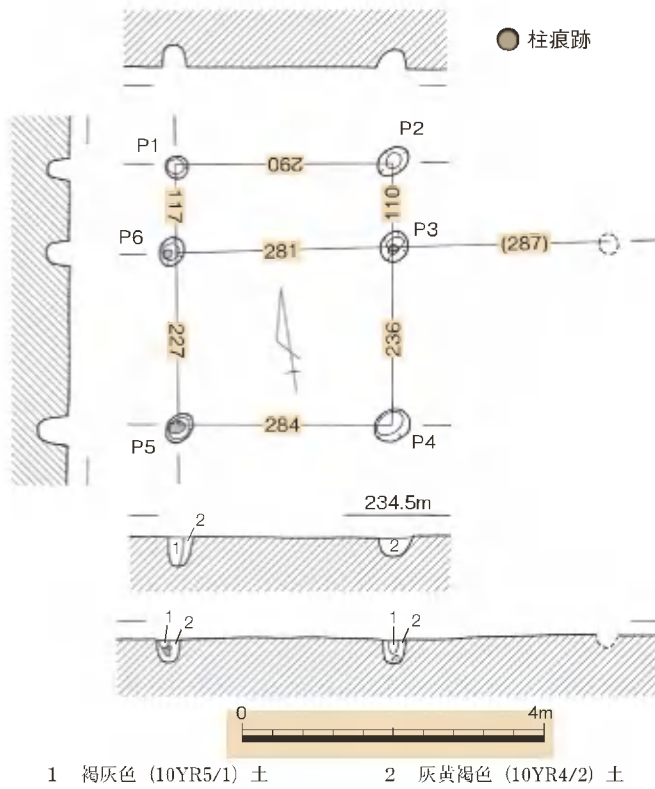
第273図 掘立柱建物39  
出土遺物 (1/4・1/3)



1 褐灰色 (10YR5/1) 粘性砂質土    2 灰黄褐色 (10YR4/2) 粘性砂質土    3 にぶい黄褐色 (10YR4/3) 粘性砂質土



第274図 掘立柱建物40 (1/100)・出土遺物 (1/4)



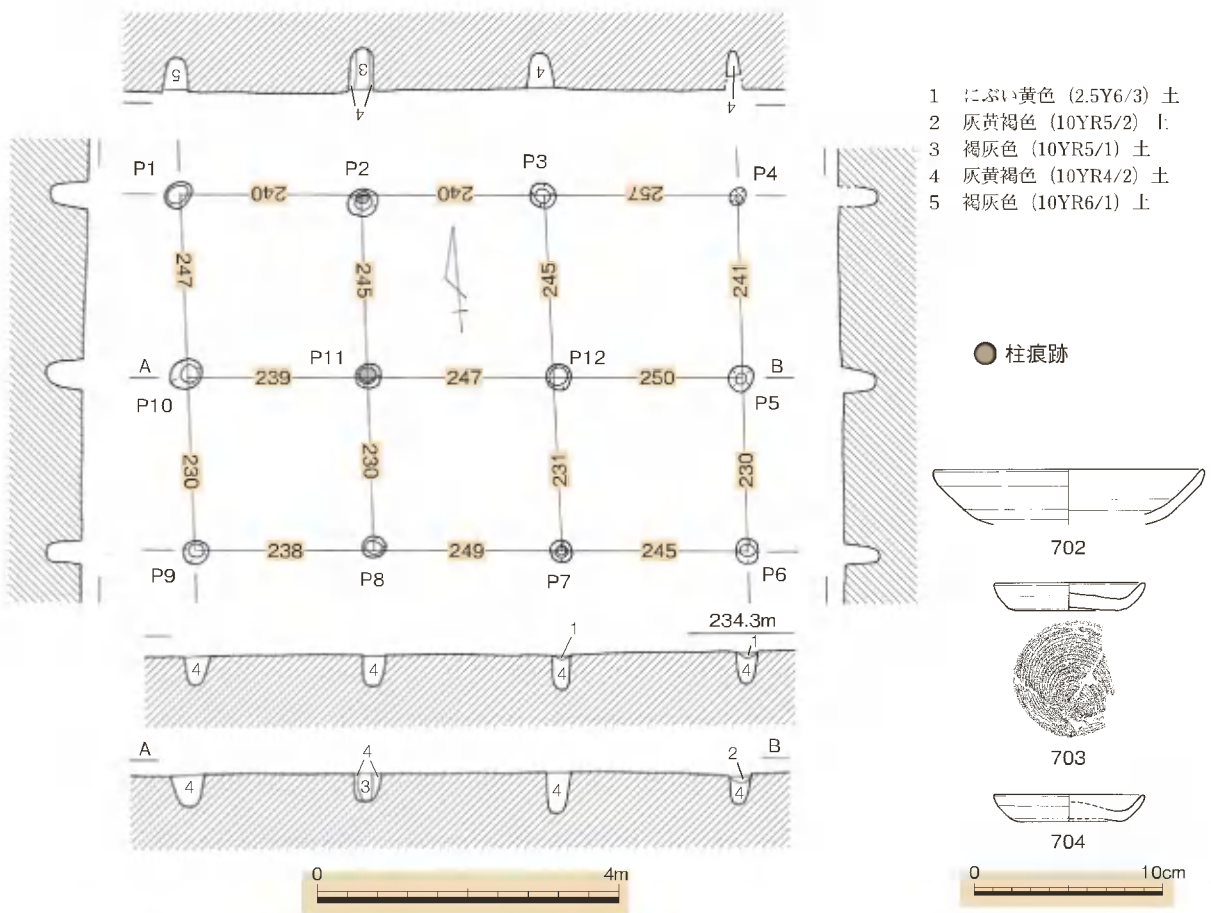
掘立柱建物41 (第257・275図、  
図版33-1)

S3区南端部で検出した2×2間以上の掘立柱建物である。掘立柱建物39・40と重複する位置で検出した。時期をずらして建て替えたものであるが、切り合いは認められなかった。柱穴は直径20~40cm、深さ20~40cmを測る。(浅倉)

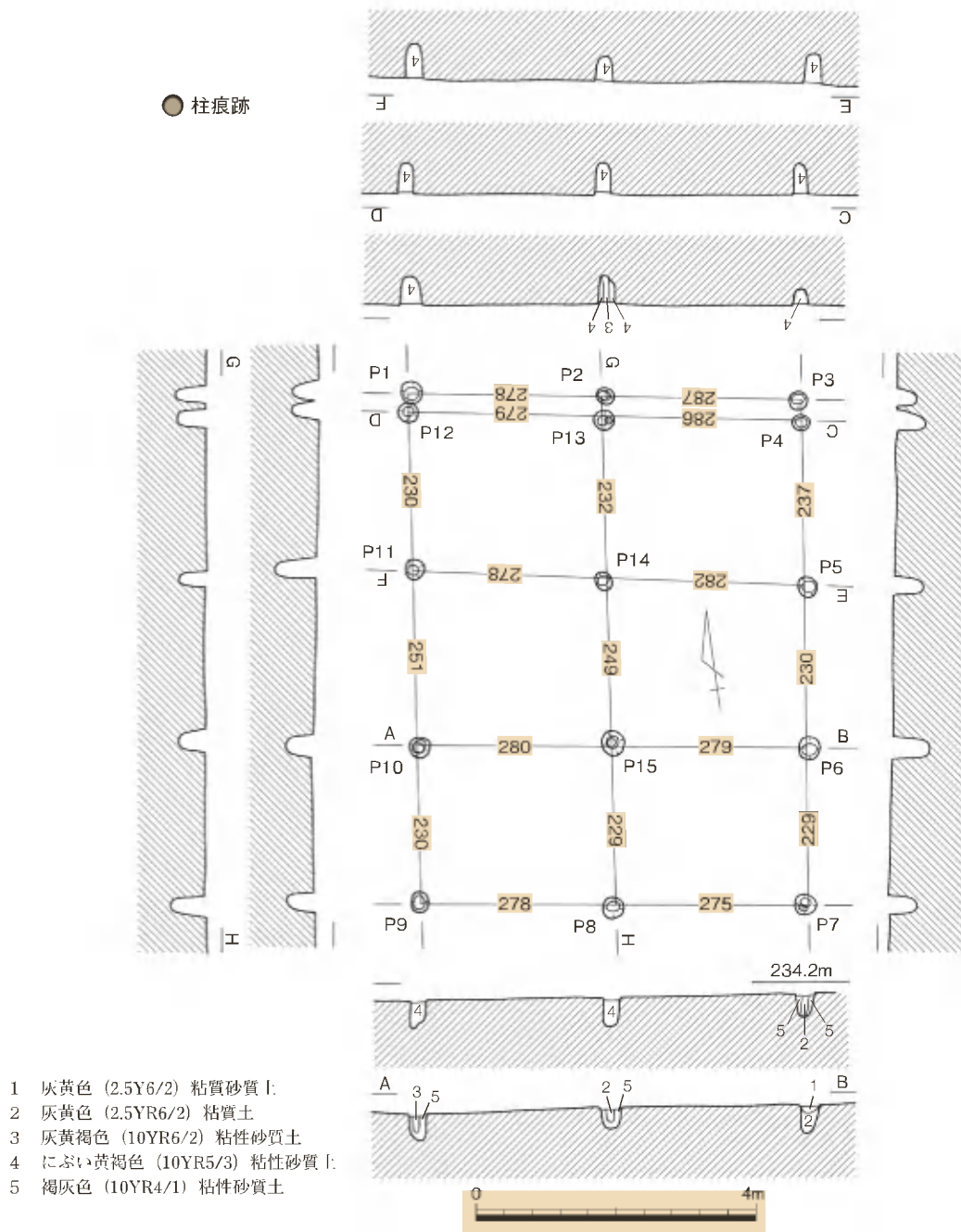
掘立柱建物42 (第257・276図)

S4区北部で検出した3×2間の掘立柱建物である。床面積は35.15㎡を測る。主軸は掘立柱建物41とほぼ平行に向いていた。柱穴の直径は20~35cmで、検出面からの深さは40~50cmを測る。柱穴からは勝間田焼椀と土師器小皿が出土した。出土遺物から、建物の廃棄時期は中世の範疇に入ると考えられる。(浅倉)

第275図 掘立柱建物41 (1/100)



第276図 掘立柱建物42 (1/100)・出土遺物 (1/4)



第277図 掘立柱建物43 (1/100)

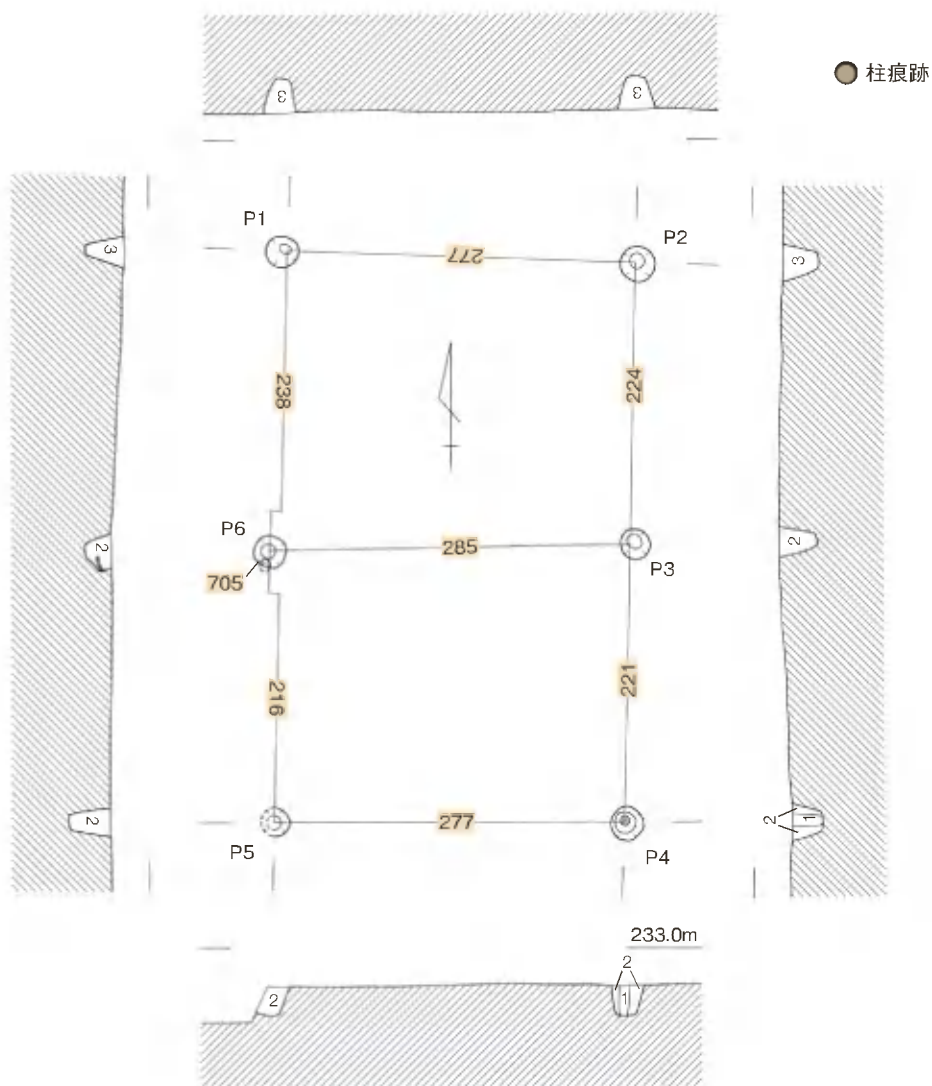
掘立柱建物43 (第257・258・277図)

S 4区北部で検出した3×2間以上の掘立柱建物である。床面積は41.8㎡を測る。掘立柱建物42とほぼ直交する向きに建てられている。柱穴は直径20～35cm、深さは40～50cmである。北側には平行して柱穴列が検出できたが、底と考えることも可能である。遺物は出土していないが、柱穴埋土から中世の範疇に属するものと考えられる。(浅倉)

掘立柱建物44 (第258・278図、写真27)

A区北側の西端部で検出した掘立柱建物である。2×1間の規模であるが、西側の調査区外に延びる可能性はある。P 4では柱痕跡が認められたが、柱の直径は8cmと非常に細い。また、P 6からは





- 1 灰黄色 (2.5Y7/2) 粘質土
- 2 黄灰色 (2.5Y4/1) 土
- 3 灰色 (5Y5/1) 土



705



写真27 掘立柱建物44  
P6土師器出土状況（北から）

第278図 掘立柱建物44 (1/60)・出土遺物 (1/4)

705が出土した。P6は南側を扶えるように拡張しており、705はそこに置かれたような状況での出土である。建築の際に地鎮を行った可能性も考えられる。 (上梅)

### 3 柱穴列

#### 柱穴列4 (第255・279図)

G区中央に位置する。東側は近世以降の開墾で削平されている。棟方向はN-59°-Eで、建物29と類似する。柱穴の直径は25~35cm、検出面からの深さは10~40cmである。埋土は黒褐色土で、古代の柱穴埋土に近い。出土遺物は見られなかった。遺構の時期は中世であろうか。(氏平)

#### 柱穴列5 (第255・280図)

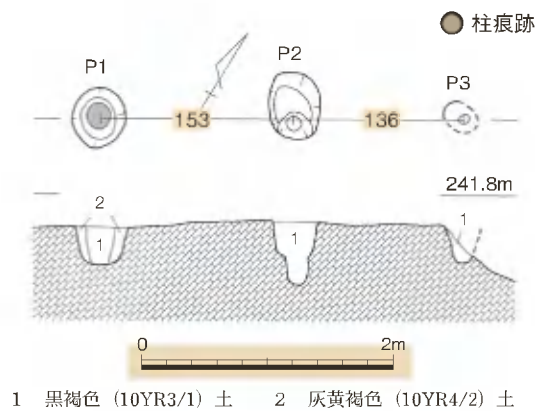
G区中央、建物29の西に位置する。西側は近世以降の開墾で削平されている。棟方向はN-62°-Eで、建物29と類似する。柱穴の直径は25~35cm、底面の標高は241.2~241.3mである。埋土は近隣の中世遺構埋土に近い。出土遺物は見られなかった。遺構の時期は中世であろう。(氏平)

#### 柱穴列6 (第255・281図)

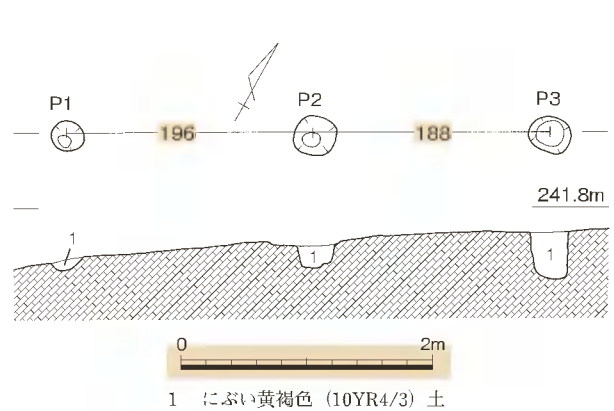
G区西端で、中世包含層下の斜面部で検出した。棟方向はN-72°-Eで、斜面に平行する。柱穴の直径は40~55cm、底面の標高は240.5~240.68mである。埋土は柱穴列7の埋土に近い。出土遺物は数片の土師器、須恵器がある。遺構の時期は中世であろうか。(氏平)

#### 柱穴列7 (第255・282図)

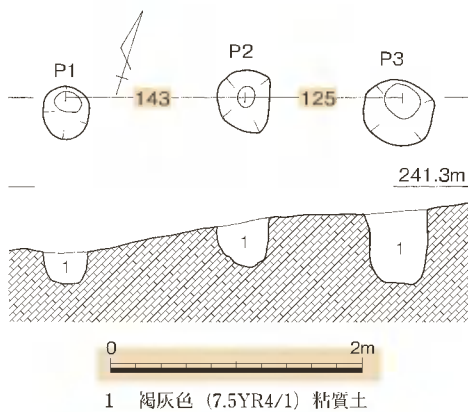
G区西端に位置する。斜面の中世包含層下で検出した。棟方向はN-59°-Eである。柱穴の直径は30~60cm、検出面からの深さは10~40cm、底面の標高は239.75~239.88mである。出土遺物は2片の土師器がある。遺構の時期は中世であろうか。(氏平)



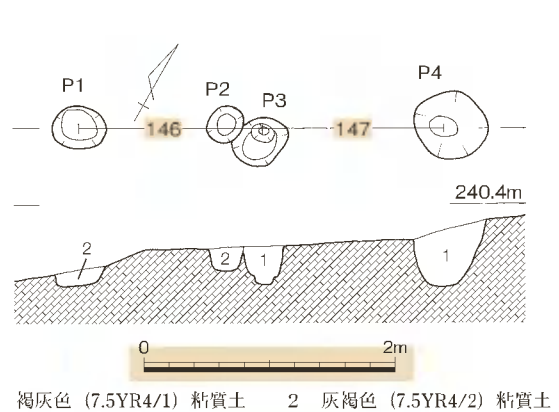
第279図 柱穴列4 (1/60)



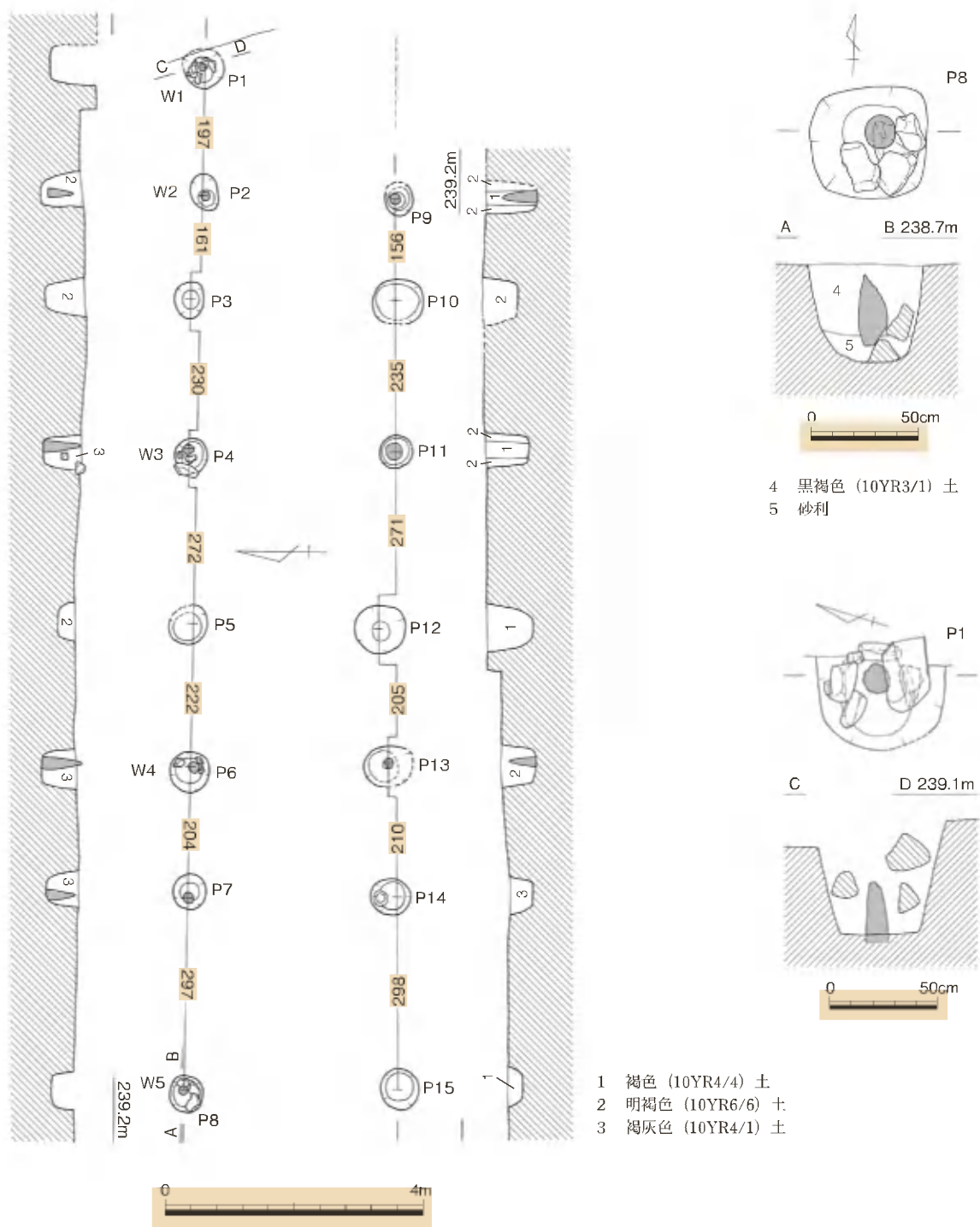
第280図 柱穴列5 (1/60)



第281図 柱穴列6 (1/60)



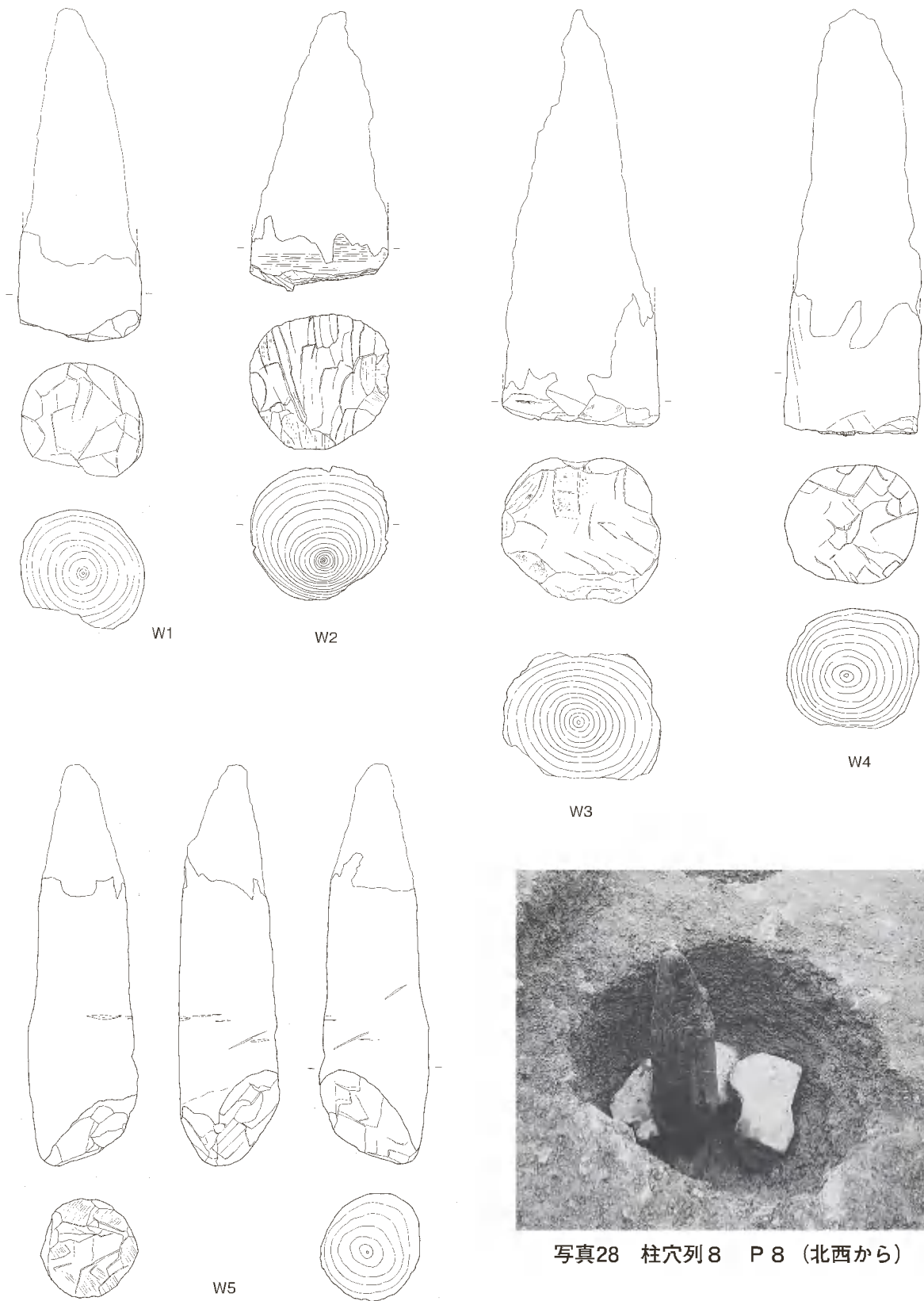
第282図 柱穴列7 (1/60)



第283図 柱穴列8 (1/100)・P1・8 (1/30)

柱穴列8 (第255・283・284図、写真28)

F区東端で検出した柱穴列群である。北側列の両端柱穴のW1・5のみが底部を「V」字状にカットし、その形状に合わせて礫を敷いていることから別遺構の可能性も考えられた。W1～5の柱材はクリである。柱相互の間隔がバラバラであるが、東西で対となる柱穴とは並んでいるため、建物の可能性も考えられた。建物の場合、1棟とは限らず2棟が並ぶ可能性もある。W1～5を対象とした放射性炭素年代測定によると、柱材はいずれも暦年代補正值でおおよそ16～17世紀であった。(上梅)



第284図 柱穴列8出土遺物 (1/8)

### 柱穴列9～15 (第255・285～291図)

F区の西半では柱穴が多数検出されたが、並びと規模、形状の共通性から7列の柱穴列を抽出した。F区の北側に位置する朝霧山の山頂付近には、室町時代の山城とされる小原山王山城跡が周知されている。現状でも深い堀切や塹壕などを確認することができ、堅牢な防御体制が窺える。F区で検出した柱穴列9～15は、いずれも等高線におおよそ平行するように並んでおり、小原山王山城跡の防御施設の可能性を考えたい。

柱穴列9は、5個の柱穴からなる柱穴列である。主軸はN-74°-Eを示す。柱穴の直径は40～48cmを測る。P5には柱材が残存していた。柱材は直径18cmで、円柱である。

柱穴列10は、3個の柱穴からなる柱穴列である。主軸はN-87°-Wとほぼ東西方向を示す。P2のみ2段掘りになっていた。柱穴の直径は58～76cmを測る。

柱穴列11は、3個の柱穴からなる柱穴列である。主軸はN-78°-Eである。柱穴の直径は30cm前後で、柱穴列10・13の半分ほどの規模である。

柱穴列12は、4個の柱穴からなる柱穴列で、P4のみ2段掘りであった。主軸はN-83°-Eであり、おおよそ東西方向を示す。柱穴は略方形で、一辺43～58cmの規模である。

柱穴列13は、3個の柱穴からなる柱穴列で、柱穴の直径は57～70cmを測る。主軸はN-73°-Eを示す。P1の検出面で平たい河原石が検出された。

柱穴列14は、4個の柱穴からなる柱穴列である。主軸はN-80°-Eを示す。P3の内部には礫が入れられていた。柱穴の大きさは33～48cmを測る。

柱穴列15は、3個の柱穴からなる柱穴列で、主軸はN-81°-Eを示す。柱穴の直径は30～35cmである。

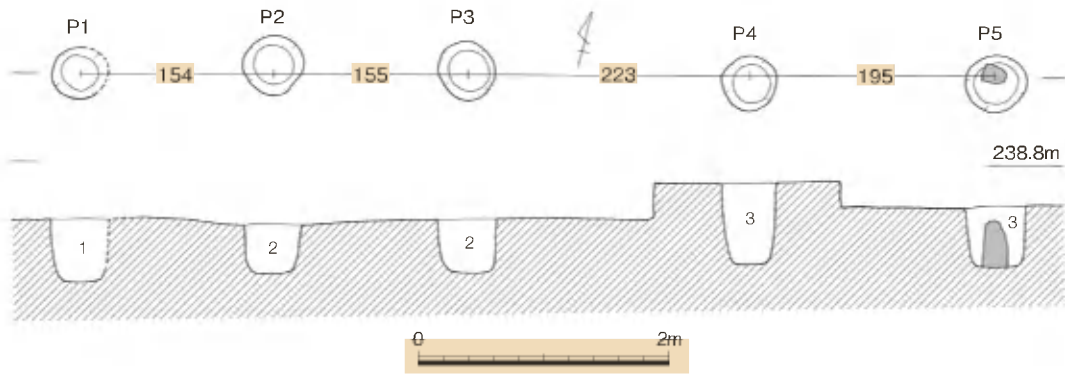
以上の特徴を見ると、主軸や柱穴の規模で分別が可能である。ただし、主軸に関しては地形との兼ね合いがあるため、分別しても無意味な場合も考えられる。例えば、柱穴列11と14は重複する関係にあるため、同時並存とは考えられないが、主軸はおおよそN-80°-Eを示している。これは地形と関係すると考えるのが妥当であろう。分別の基準として重要な要素は、柱穴の規模と考える。柱穴の規模は30～35cm (柱穴列11・15)、40～50cm (柱穴列9・12・14)、55cm以上 (柱穴列10・13) という3大別が可能で、おおよそ3回の建て替えを行ったと推測する。その際、列の主軸は地形に左右され、おおよそ等高線に平行するように柱を並べたと考えられる。 (上村)

### 柱穴列16・17 (第255・256・292・293図)

E区北部に位置する。柱穴列16は掘立柱建物33と重複し、柱穴列17も建物33の柱穴P6に近接している。柱穴列16は棟方向がN-7°-W、柱穴直径は25～30cm、検出面からの深さは10～30cm、底面の標高は236.75～239.86mである。柱穴列17は棟方向がN-2°-W、柱穴直径は25～30cm、検出面からの深さは25～35cm、底面の標高は235.95～236.12mである。柱穴埋土はいずれも掘立柱建物33と同じである。出土遺物は柱穴列17P1から1片の土師器片があるが、時期はよくわからない。遺構の時期は、柱穴埋土から判断して、建物33と近い時期であろう。 (氏平)

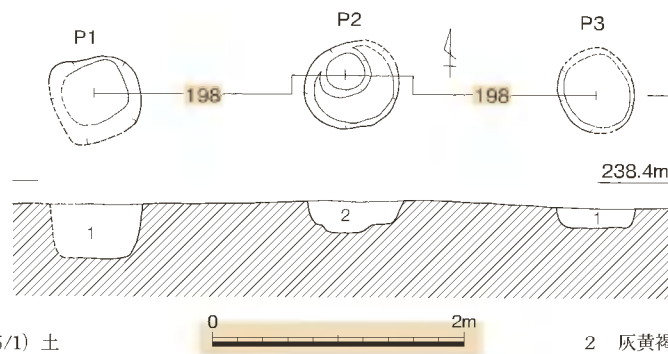
### 柱穴列18 (第257・294図)

S2区北西端で検出した2個の柱穴からなる柱穴列で、調査区外に続く可能性がある。柱穴の平面形は多角形で、最大径は75cmを測る。検出面からの深さは7cmと浅い。遺物や柱穴埋土から中世の範疇に推定できる。 (浅倉)



1 灰白色 (10YR7/1) 粘質土 2 褐灰色 (10YR5/1) 土 3 灰黄褐色 (10YR4/2) 土

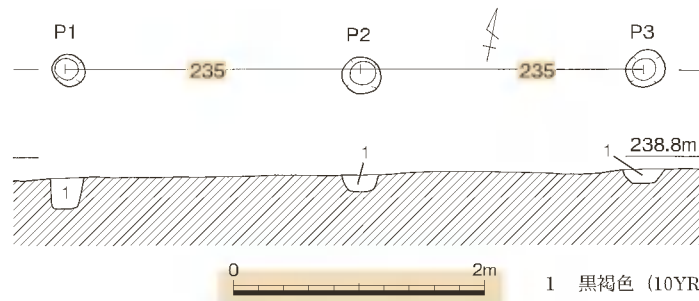
第285図 柱穴列9 (1/60)



1 褐灰色 (10YR5/1) 土

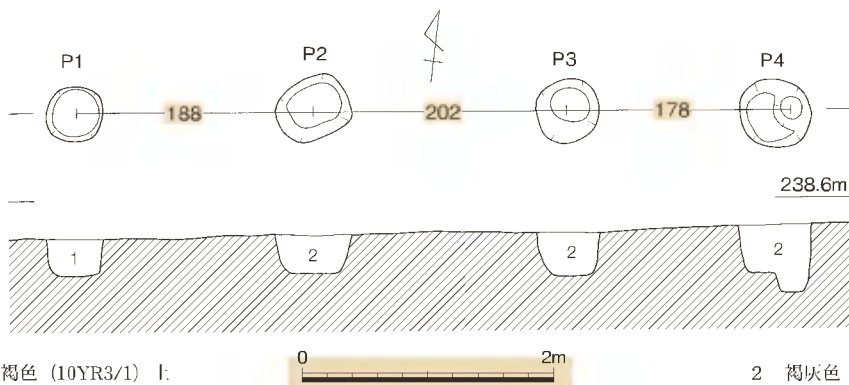
2 灰黄褐色 (10YR4/2) 土

第286図 柱穴列10 (1/60)



1 黒褐色 (10YR3/1) 土

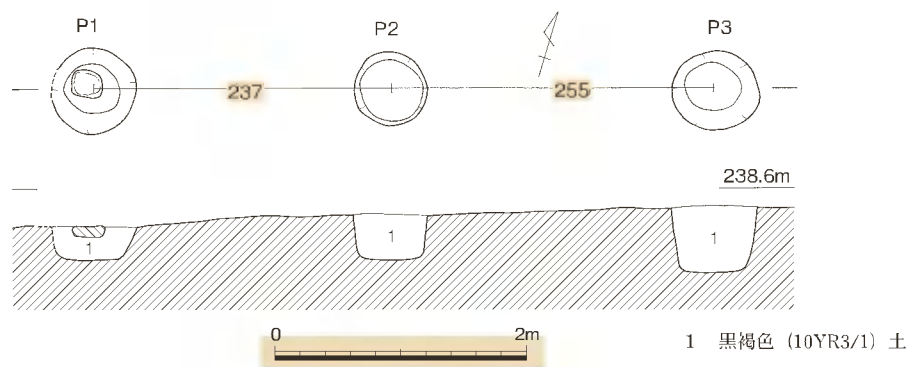
第287図 柱穴列11 (1/60)



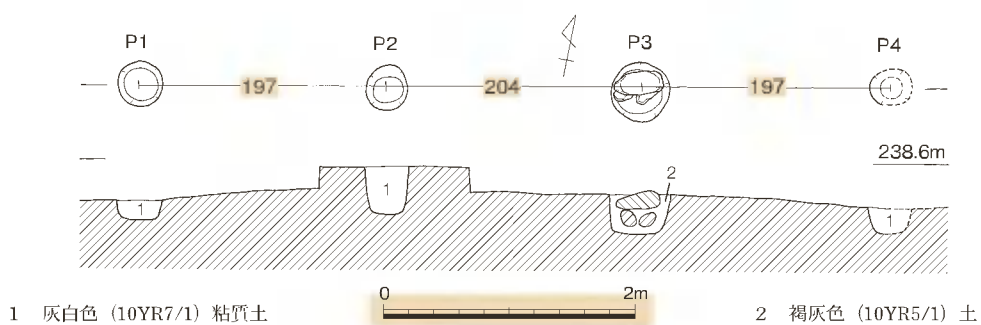
1 黒褐色 (10YR3/1) 土

2 褐灰色 (10YR5/1) 土

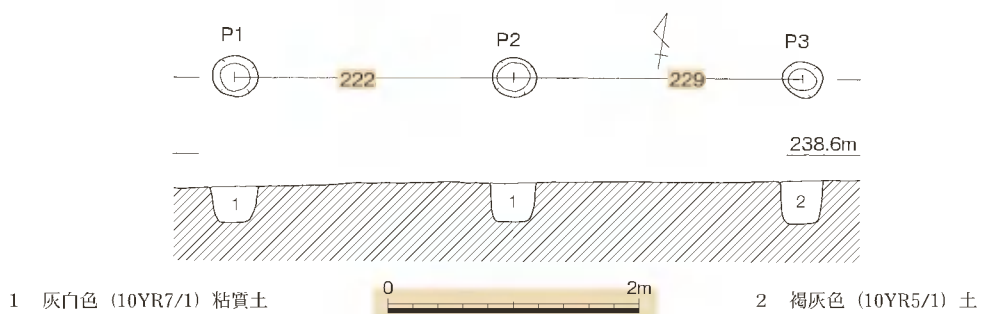
第288図 柱穴列12 (1/60)



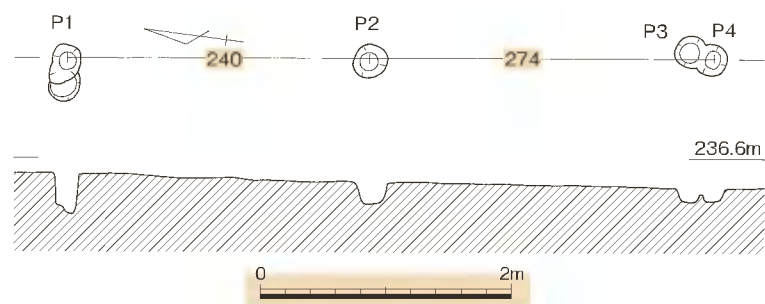
第289図 柱穴列13 (1/60)



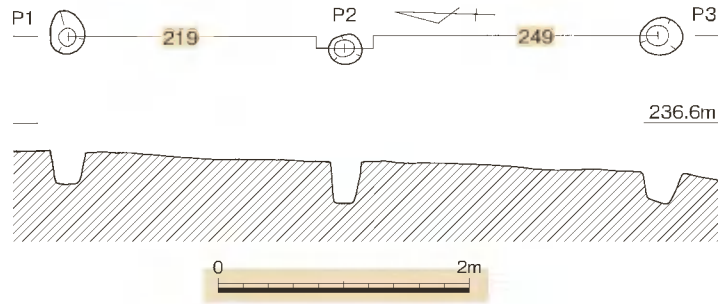
第290図 柱穴列14 (1/60)



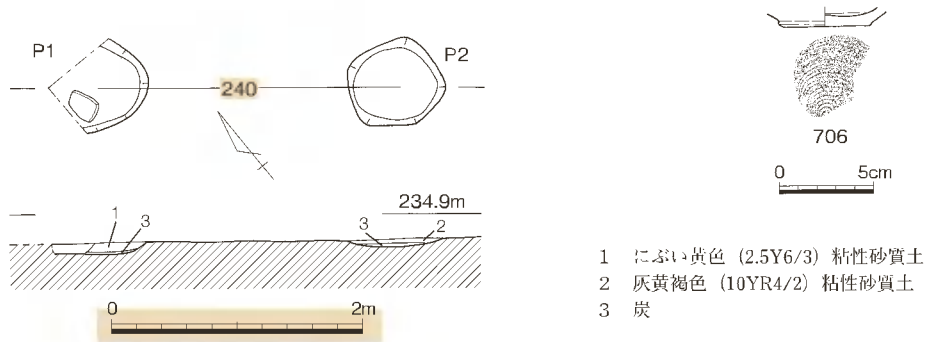
第291図 柱穴列15 (1/60)



第292図 柱穴列16 (1/60)



第293図 柱穴列17 (1/60)

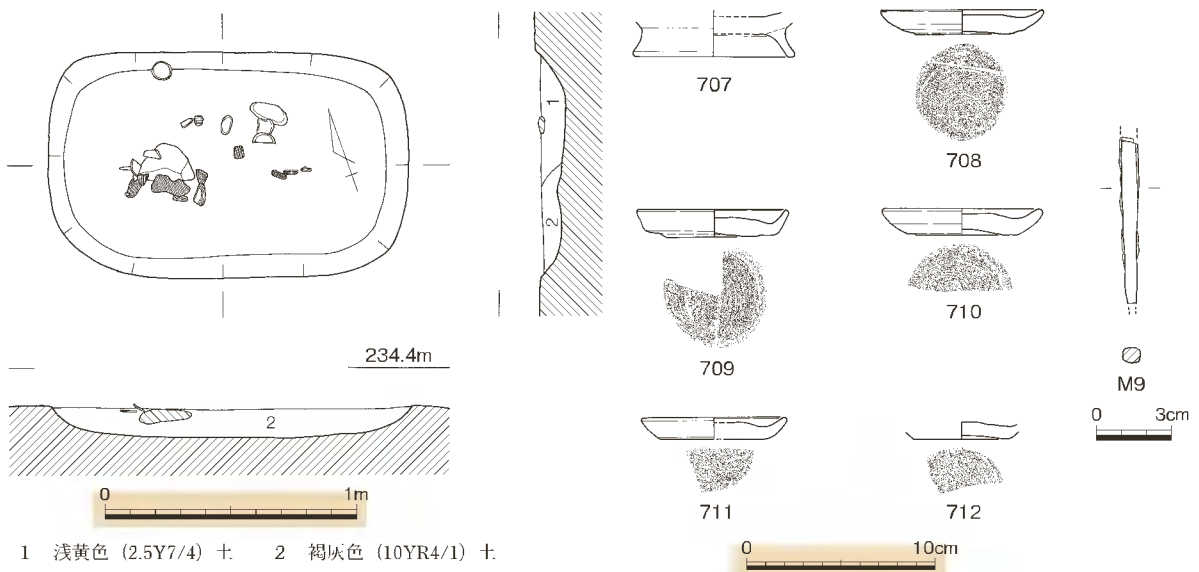


第294図 柱穴列18 (1/60)・出土遺物 (1/4)

#### 4 土墳墓

##### 土墳墓 (第257・295図、図版33)

S3区南西部で検出した隅丸長方形の平面形をもつ浅い土墳墓である。掘立柱建物39・40に南接する位置で検出しており、屋敷墓の可能性もある。長さ142cm、幅89cm、深さ11cmを測る。埋土中に拳大の円礫を数個含んでいるが、規則的に配置された様子は認められない。また、少量の木炭片も含んでいる。遺物は土師器小皿5点、土師器碗の破片、釘1点である。出土遺物から中世の範囲に属するものと考えられる。(浅倉)



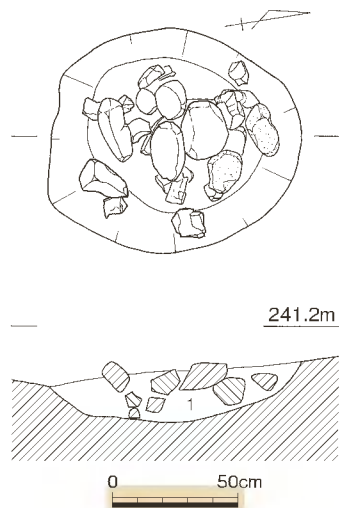
第295図 土墳墓 (1/30)・出土遺物 (1/4・1/3)



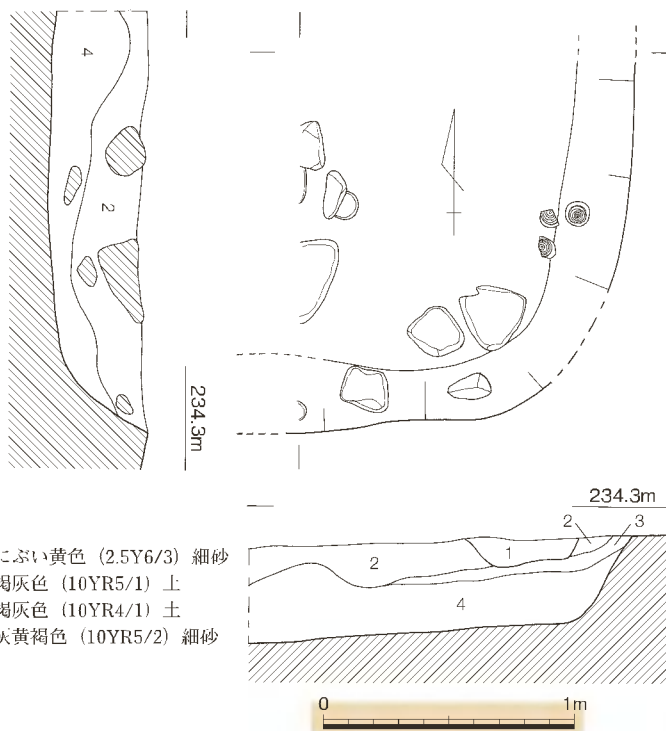
5 土壌

土壌10 (第255・296図)

G区東側、建物30の北で検出した土壌である。埋土は1層のみを確認した。埋

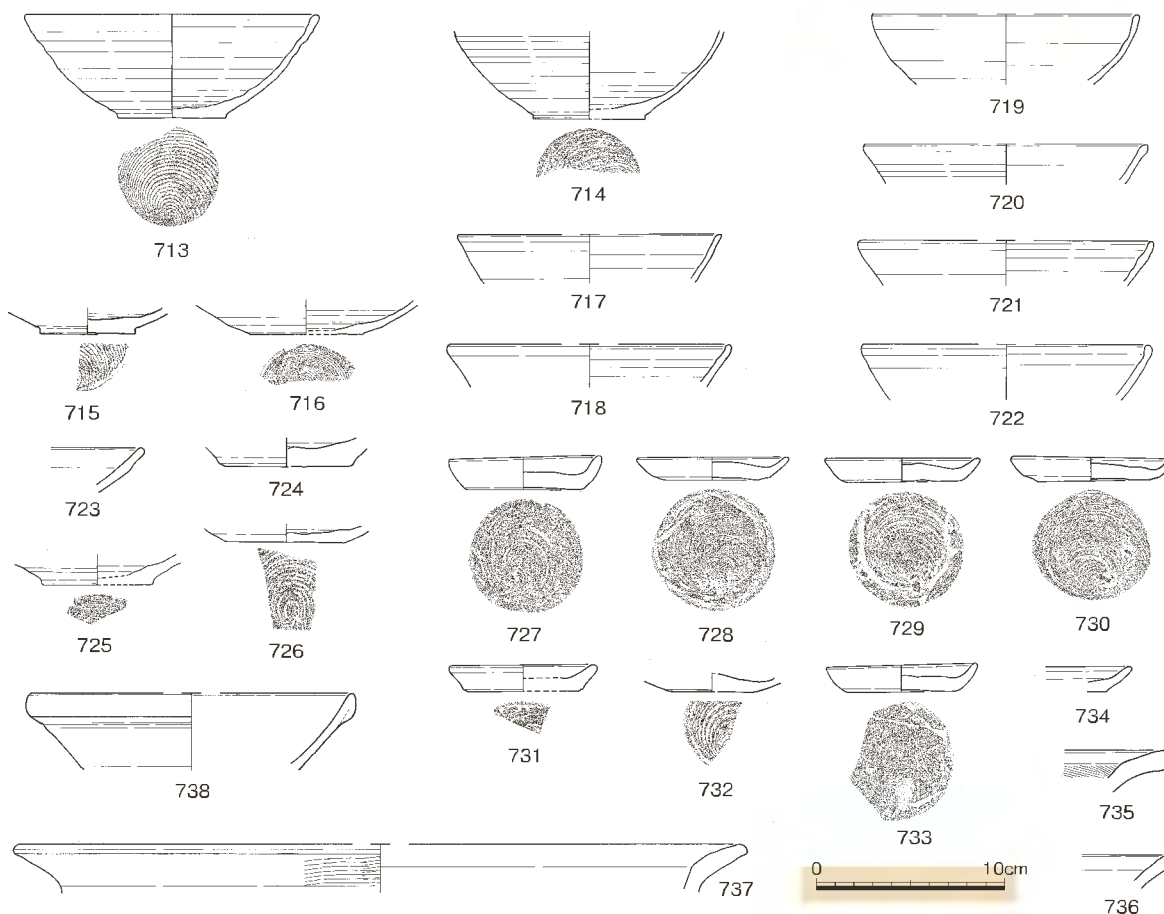


1 にぶい黄褐色 (10YR5/3) 粘性砂質土



1 にぶい黄色 (2.5Y6/3) 細砂  
2 褐灰色 (10YR5/1) 土  
3 褐灰色 (10YR4/1) 土  
4 灰黄褐色 (10YR5/2) 細砂

第296図 土壌10 (1/30)



第297図 土壌11 (1/30)・出土遺物 (1/4)

土中には10～25cm大の角・円礫が見つかった。礫は土壌内に組んだ状態ではなく、放り込んだ様な状況であった。遺物は出土していないが、埋土の様子から中世の遺構と考える。(氏平)

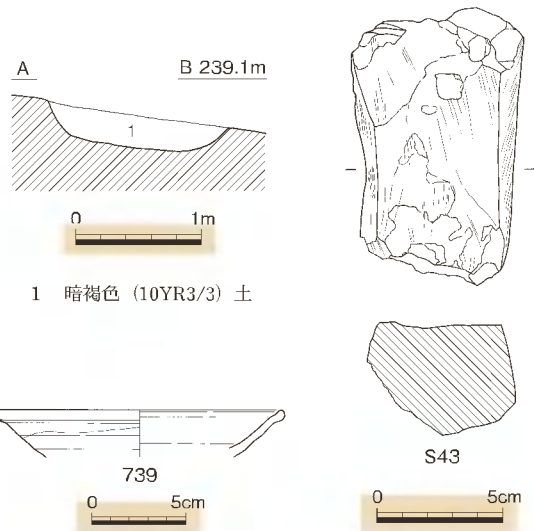
**土壌11 (第257・297図)**

S4区北西端部で検出した、隅丸方形の平面形をもつ土壌である。一部が溝11に切られており、また調査区の端部に位置しているため、全体を調査することはできなかった。最大検出長152cm、最大検出幅134cm、検出面からの深さ37cmを測る。ほぼ全体的に細砂で埋まっており、洪水などで一気に埋まった可能性が考えられる。遺物は勝間田焼碗や土師器甕、土師器小皿、白磁が出土している。出土遺物から中世の遺構と考えている。(浅倉)

**6 溝**

**溝6 (第255・298図)**

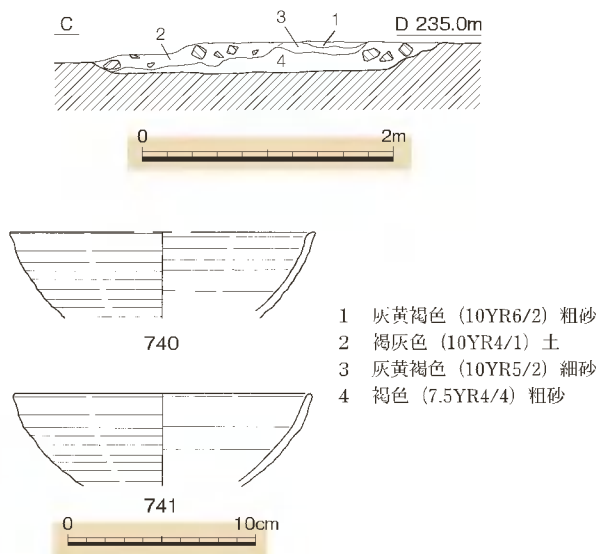
溝6はF区東寄りで見出した。東側は調査区外に延びていき、西側は後世の宅地造成により削平されていた。等高線におおよそ平行するように掘られている。出土遺物から近世の遺構と考えられる。(上柁)



第298図 溝6 (1/60)・出土遺物 (1/4・1/3)

**溝7 (第257・299図)**

溝7はD区の北側をおおよそ東西方向に流れる溝である。埋土は砂や礫を主体としており、流れにより埋まったという印象が強い。740・741のように勝間田焼が出土していることから、中世の遺構と考える。(上柁)



第299図 溝7 (1/60)・出土遺物 (1/4)

**溝8 (第257・300図)**

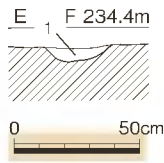
C区の中央付近で見出した溝で、おおよそ東西方向に流れる。4分割の状態で見出したが、上部の削平によるもので、掘削当時は繋がっていたと考える。掘立柱建物34の梁行方向と平行するが、相関性については断定できない。(上柁)

**溝9 (第256・301図)**

N3区の中央で見出した東北東から西南西に延びる溝である。内部は砂礫で充填されていた。検出した長さは850cmで、最大幅75cmを測る。深さは7cmと浅い。(浅倉)

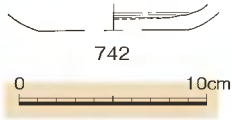
**溝10 (第257・302図)**

S1区の中央部で見出した溝である。北東から南西に次第に幅広くなっていた。断面は立ち上がり緩やかな皿状を呈する。検出した長さは550cm、最大幅103cmで、最深部で12cmの深さを測る。(浅倉)

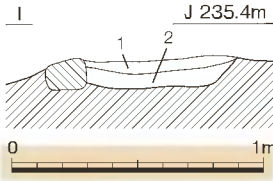
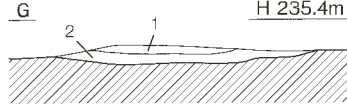
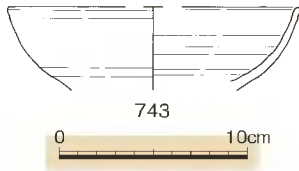


1 灰色 (7.5Y6/1) 粘質土

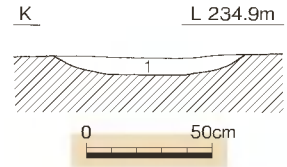
第300図 溝8 (1/30)



第301図 溝9 (1/30)・出土遺物 (1/4)

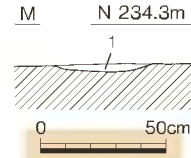


1 褐灰色 (10YR6/1) 砂礫  
2 灰色 (5Y5/1) 細砂



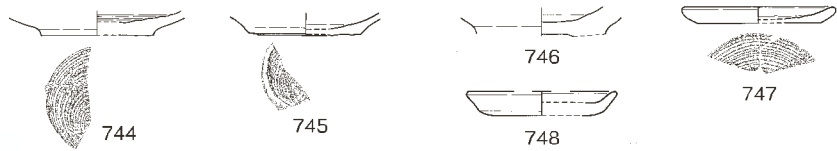
1 黒褐色 (7.5YR3/1) 粘性砂質土

第302図 溝10 (1/30)



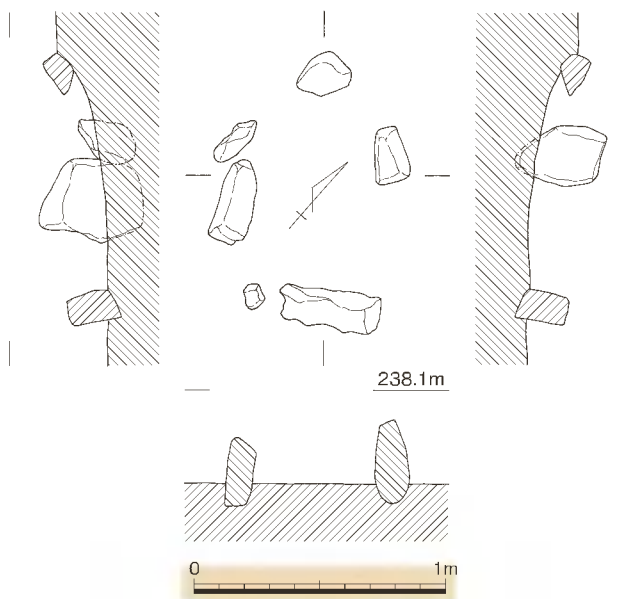
1 にぶい黄色 (2.5Y6/3) 細砂

第303図 溝11 (1/30)・出土遺物 (1/4)



溝11 (第257・303図)

S 4 区の北西部で検出した溝である。南北方向に延びていた。検出した長さは580cmで、最大幅38cm、深さ3cmを計測する。埋土は砂礫である。掘立柱建物42に西接していることから、雨落ち溝の可能性が高い。(浅倉)



第304図 石組1 (1/30)

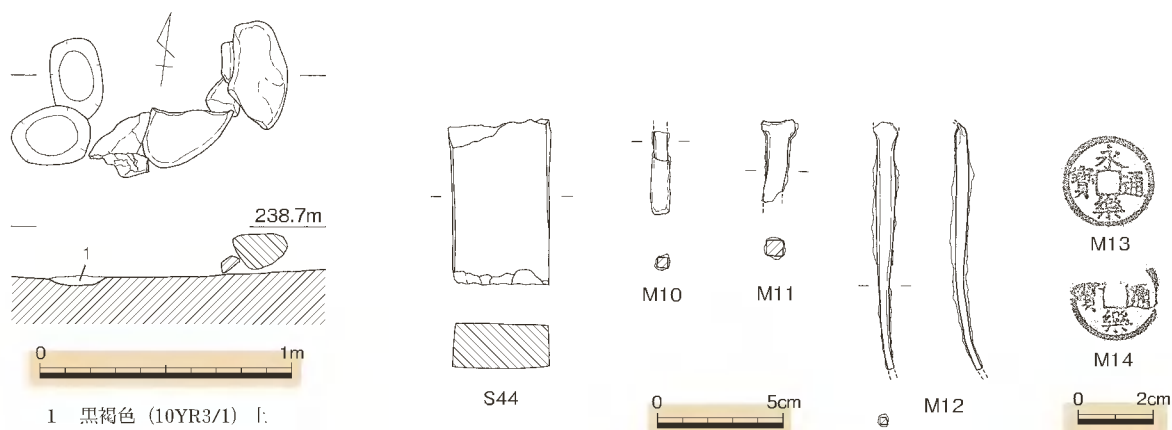
7 石組

石組1 (第255・304図)

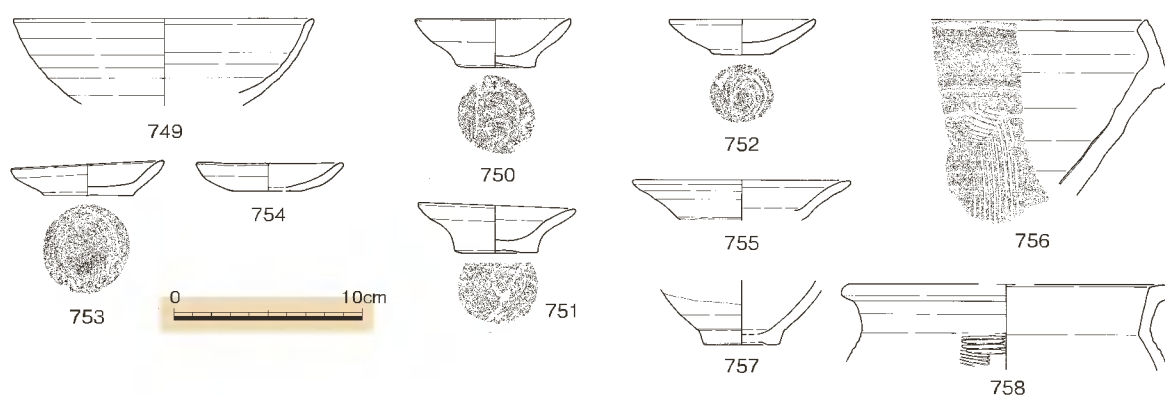
F区中央付近で検出した石組である。明確な掘り方は検出できなかったが、土壇内に河原石を立てた施設と考える。中央部で古代の炉2を検出したが、河原石が一切被熱していないことから、両者の関連性は否定できる。石組1の性格は不明である。(上榎)

石組2 (第255・305図)

F区中央東寄りで検出した石組である。上面が平らになるように河原石を並べていたが、性格は不明。2か所は石が抜き取られており、痕跡のみ検出した。(上榎)



第305図 石組2 (1/30)



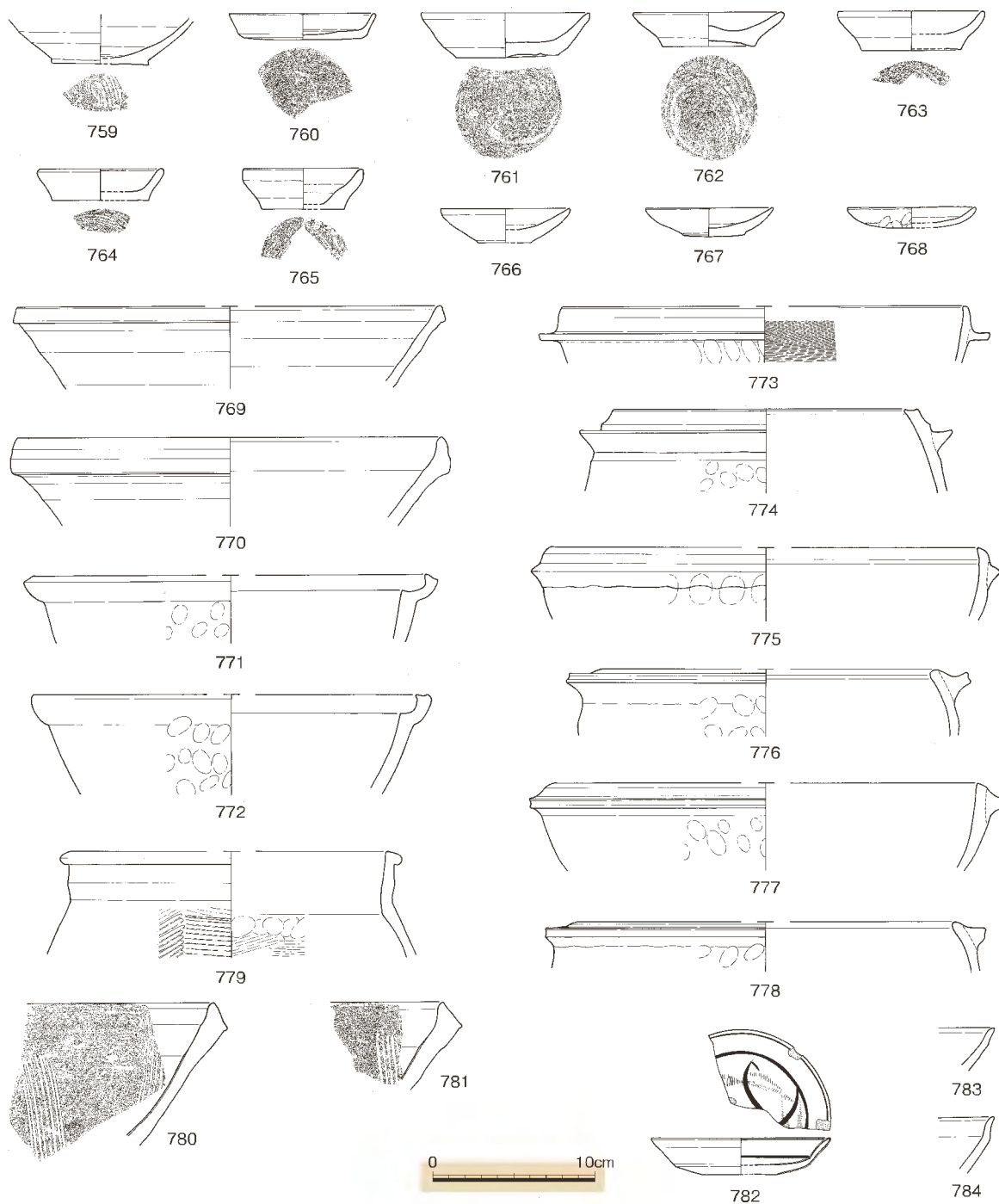
第306図 柱穴出土遺物 (1/4・1/3・1/2)

## 8 柱穴出土遺物 (第306図)

749は勝間田焼の椀である。750と751は土師器の杯、752～754は土師器の小皿である。750～753の底部には糸切り痕跡が存在するが、754は手捏ねで底部に指頭圧痕が残存している。755は釉薬を施した皿である。756は備前焼の播鉢である。757は黒釉磁(天目)碗の下半部である。758は播丹型の甕で、タタキ痕跡を有する。外面には煤が付着している。土器や陶磁器以外の遺物として、砥石S44、釘M10～12、永楽通寶M13・14が出土している。M13・14は柱穴底部に重なった状態で出土した。(福田)

## 9 遺構に伴わない遺物 (第307～312図)

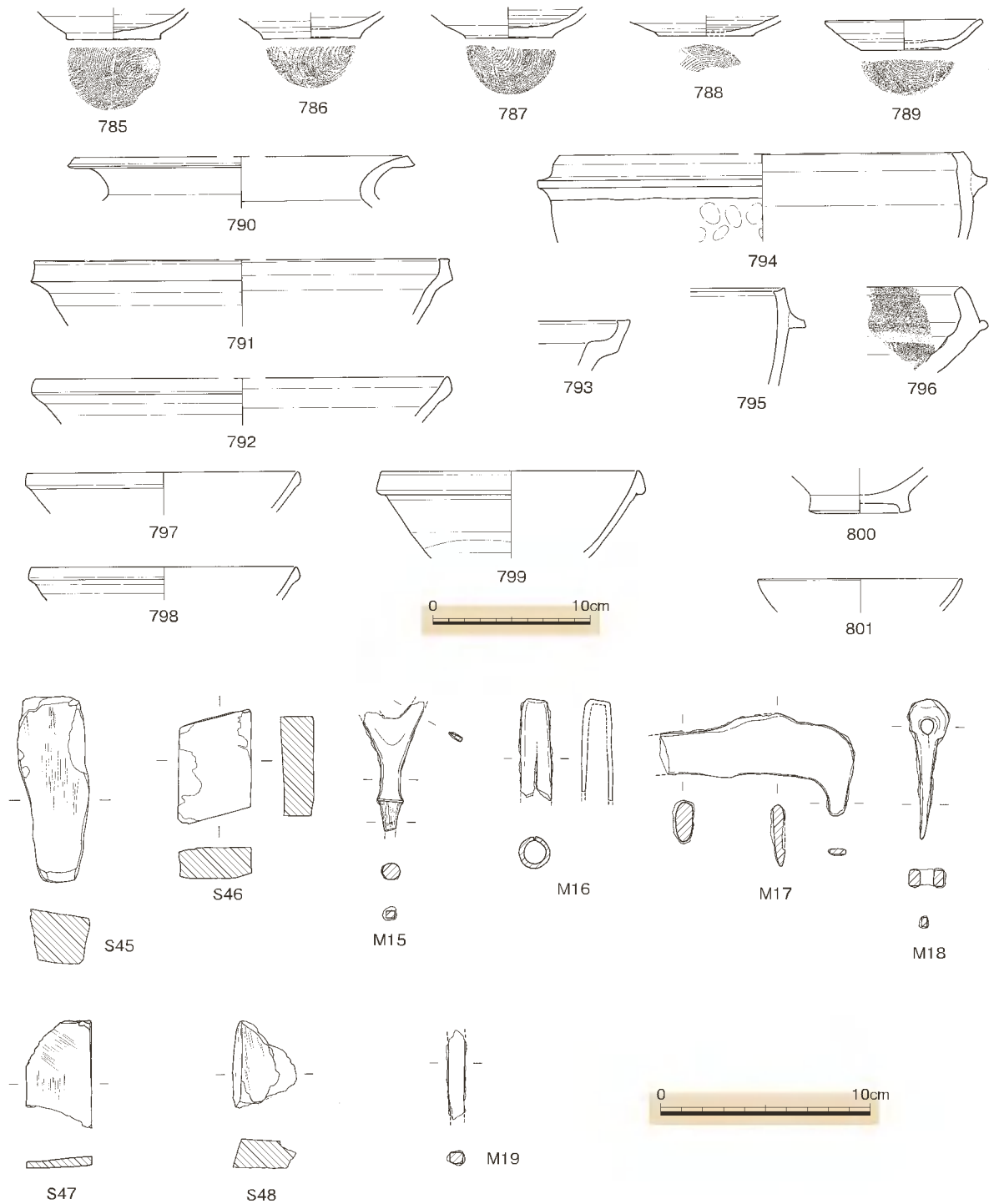
第307図の759は勝間田焼の椀である。外面の底部には糸切り痕跡が認められる。760～768は土師器の杯と皿である。斜め上方へ立ち上がった口縁の端部は、いずれも丸く仕上げている。760～765の外面底部には糸切り痕跡が存在する。766と767の底部は径が小さく、外面の糸切り痕跡はナデによって消されている。768の小皿は手捏ねによって作られたもので、外面の底部に指頭圧痕が残存している。769と770は東播系須恵器の捏鉢である。771と772は瓦質土器の鍋である。口縁端部は屈曲して立ち上がり、外面の体部には指頭圧痕が認められる。773～778は瓦質土器の羽釜である。耳の位置が口縁端部に近いものと口縁直下のものがあり、断面形は長方形、台形、三角形となっている。口縁端部と貼り付けた耳は全体にヨコナデを施し、耳の下位には指頭圧痕が残存している。779は播丹型甕の破片で、口縁部は内外面ともヨコナデを行っている。外面の体部にはタタキ痕跡が存在し、内面には指



第307図 遺構に伴わない遺物（F・G区）（1/4）

頭圧痕とハケメが認められる。780と781は備前焼の播鉢で、口縁端部の断面形はどちらも三角形を呈している。782は同安窯系青磁皿である。内面の見込みと体部の境に段を有し、内面の口縁直下に沈線を施している。内面の見込み部分には、ヘラ状工具による略化した花文と櫛の先端で押したジグザグ状の点描文が認められる。783と784は黒釉磁（天目）碗の口縁部破片で、端部は屈曲して斜め上方へ立ち上がり、丸く仕上げている。

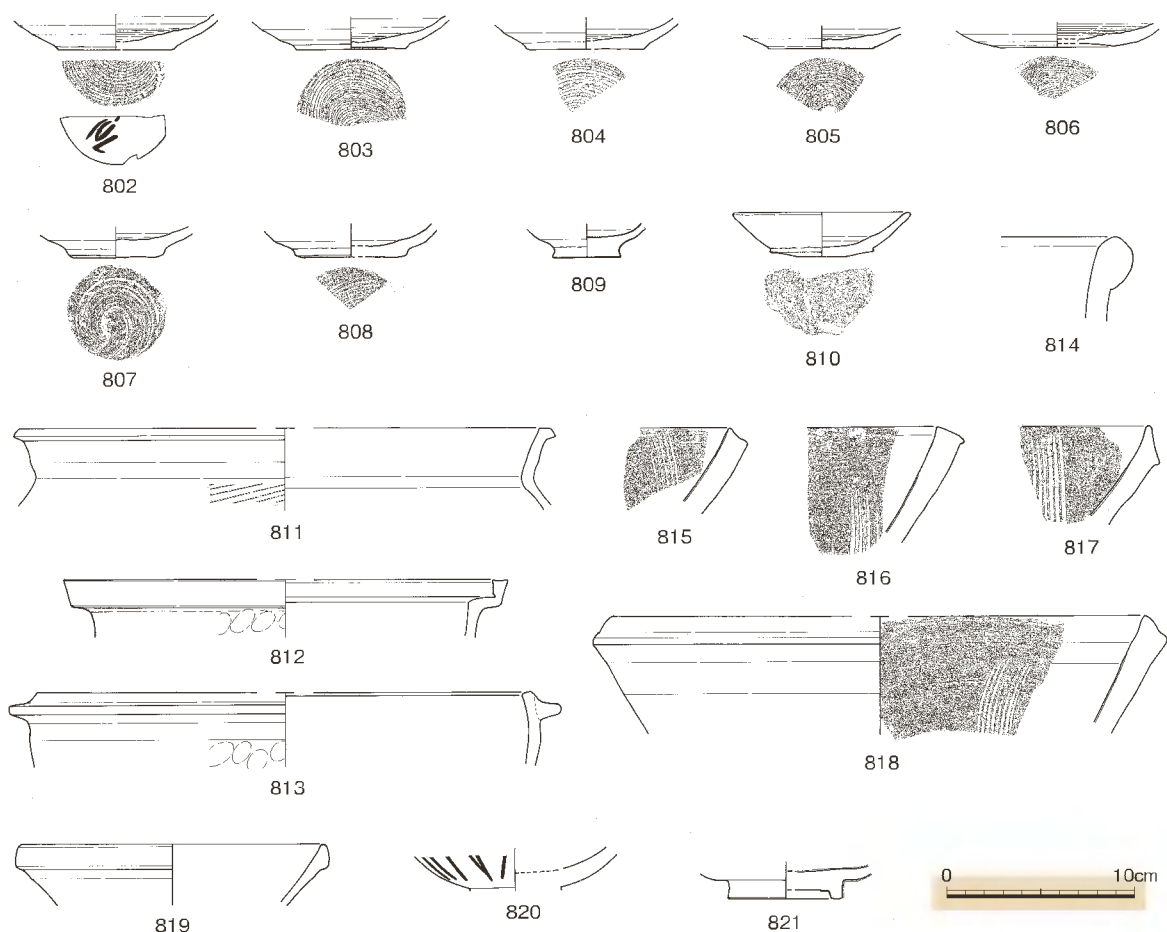
第308図の785～788は勝間田焼の椀、789は勝間田焼の小皿である。いずれも外面底部に、糸切り痕跡が認められる。790と791は須恵質土器の甕と捏鉢であるが、生産地が不明である。792は東播系



第308図 遺構に伴わない遺物（D～F区）（1/4・1/3）

須恵器の捏鉢である。793～795は瓦質土器の鍋と羽釜である。796は備前焼の播鉢で、口縁部が著しく内傾している。797～800は白磁の碗で、口縁端部の玉縁が小さいものと大きいものがある。内面には、全体に釉薬を施しているが、外面の体部下位から底部にかけては釉薬が認められない。801は白磁の皿の口縁部破片である。

D区とE区からは、土器や陶磁器以外に石製品や鉄製品が出土している。石製品S45～48は砥石である。鉄製品のうちM15は、雁股形式の鋏である。M16は木製品の先端を包むものである。M17は鉈

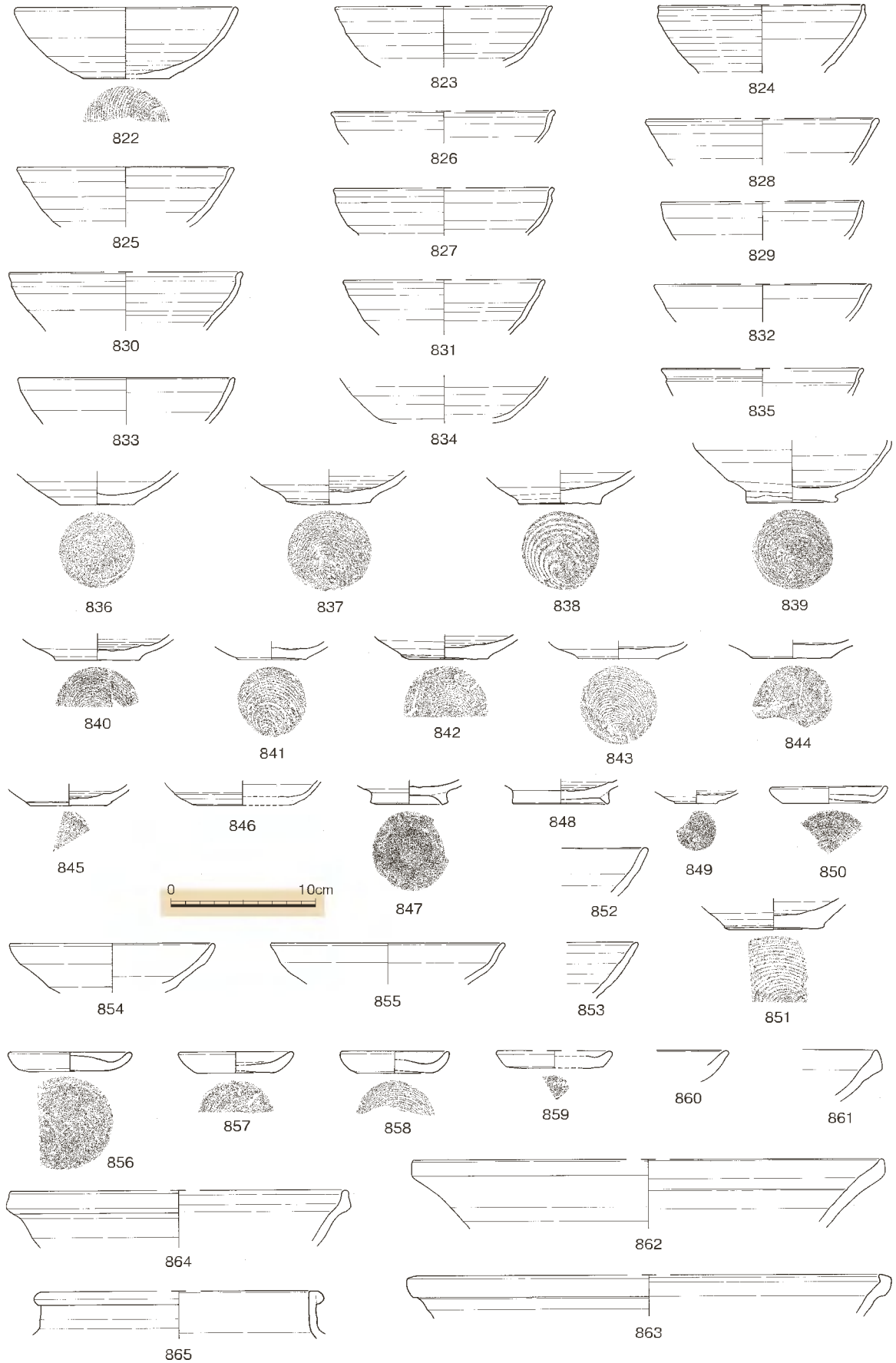


第309図 遺構に伴わない遺物（A～C区）（1/4）

であろうか。M18は煽り止めの金具と考える。M19は鍬の茎か釘であろう。

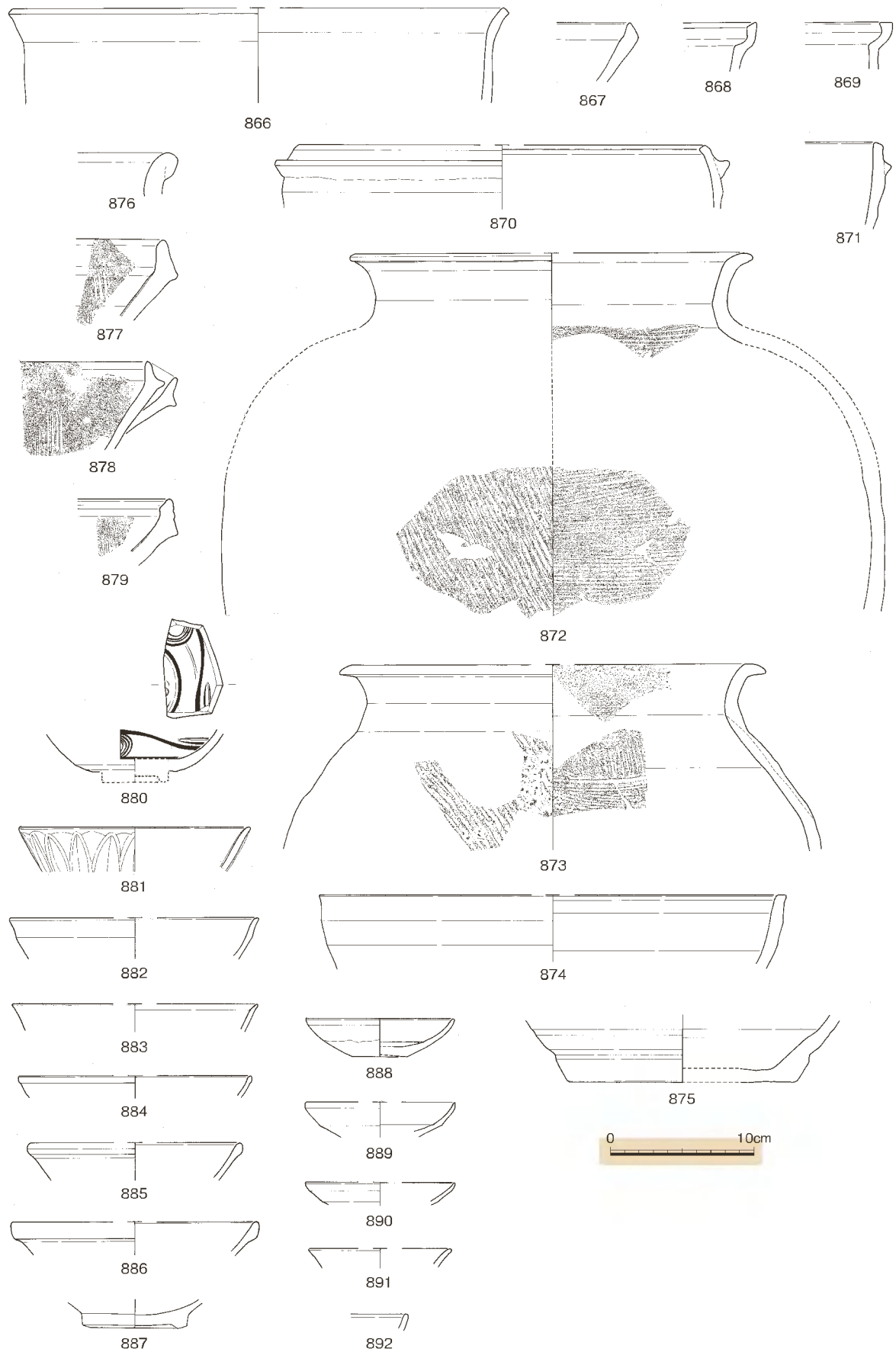
第309図の802～808は勝間田焼の碗の底部破片で、802の底部には墨書が認められる。809は勝間田焼の小形碗で、底部の器壁が厚くなっている。810は土師器の小形杯で、外面の底部には糸切り痕跡が存在する。外面の底部と体部の境目には稜が認められ、底部は湾曲して外側へ張り出している。内面全体と外面の体部から口縁部にかけては、ヨコナデを施している。811は播丹型の甕で、外面の頸部直下には斜め方向のタタキ痕跡が存在する。812と813は、瓦質土器の鍋と羽釜である。外面の体部には、指頭圧痕が残存している。814は備前焼の甕で、口縁端部は玉縁状になっている。815～818は備前焼の播鉢である。内面にはいずれも条線が認められる。819は白磁の碗で、口縁端部が玉縁になって肥厚している。820は龍泉窯系青磁碗の体部下位の破片である。外面には蓮弁文を描いているが、鎊は存在しない。821も龍泉窯系青磁碗の底部である。内面は全体に釉薬を施して無文で、外面は高台内部に釉薬が認められない。

第310図の822～848は勝間田焼の碗であるが、貼り付けの高台を有するもの847・848もある。外面の底部には、いずれも糸切り痕跡が認められる。体部から口縁部にかけては、緩やかに内湾しながら斜め上方へ立ち上がり、口縁端部は丸く仕上げている。口縁端部の形態では、直線的に立ち上がるものや短く外反するものなどがある。体部から口縁部にかけては回転によるナデを行っているから、内外面とも器表面に凹凸が認められる。849は勝間田焼の小形碗である。850は勝間田焼の小皿の破片で

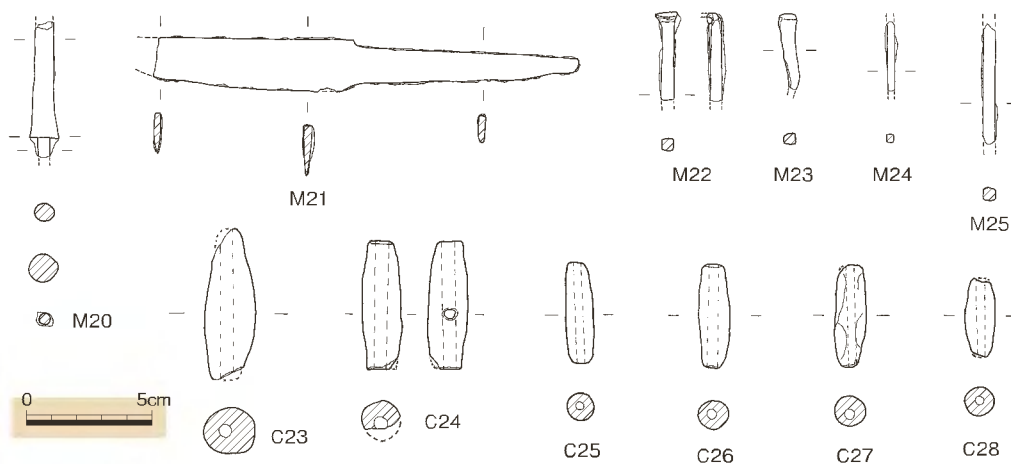


第310図 遺構に伴わない遺物 (側道調査区) ① (1/4)





第311図 遺構に伴わない遺物（側道調査区）②（1/4）



第312図 遺構に伴わない遺物（側道調査区）③（1/3）

ある。851～855は土師器の杯である。これらの杯もロクロを使用して整形を行っているから、外面の底部には糸切り痕跡が存在する。わずかに内湾して斜め上方へ立ち上がった口縁の端部は、いずれも丸く仕上げている。内面全体と外面の体部から口縁部にかけては、回転によるナデを施しているの、器表面に凹凸が認められる。856～860は土師器の小皿である。この小皿もロクロを使用して整形しているから、外面の底部には糸切り痕跡が存在する。底部の器壁は厚くて安定したものが多いが、薄くなったもの857もある。短く斜め上方へ立ち上がった口縁の端部は、いずれも丸く仕上げている。外面の体部から口縁部にかけてと内面全体は、いずれも回転によるナデ仕上げを行っている。胎土中には微砂や細砂を含んでおり、黄灰色またはにぶい橙色を呈するものが多い。861～864は東播系須恵器の捏鉢であり、大形のもの和小形のものがある。865は播丹型の甕で、口縁端部は玉縁状に肥厚している。866は土師器の鍋であるが、体部の器壁はほぼ垂直に立ち上がる。867は瓦質土器の鉢で、斜め上方へ立ち上がった口縁端部は、断面形が三角形になって肥厚している。内外面とも全体にヨコナデを施しているが、胎土中には微砂を含み、焼成は良好で灰白色を呈している。868と869は瓦質土器の鍋の口縁部破片である。870と871は瓦質土器の羽釜。口縁端部の下位に耳が存在する。872と873は勝間田焼の甕である。頸部から外湾して斜め上方へ立ち上がった口縁の端部は、横方向に張り出して端部を丸く仕上げている。外面の体部には斜め方向の平行タタキ痕跡が認められ、内面の体部には横方向の粗いクシメが存在する。874と875は勝間田焼の鉢の口縁部と底部である。口縁端部の上位には面が認められ、内外面とも全体にナデていた。876は備前焼の甕の口縁部である。877～879は備前焼の播鉢である。878は片口部分の破片である。880は龍泉窯系青磁の碗で、内面に飛雲文または花文を描いている。881も龍泉窯系青磁の碗で、外面には弁の中心線が稜をなす鎬蓮弁文を描いている。882～887は白磁の碗である。888～891は白磁の小皿である。888は無文であるが、内面の下位に段を有し、口縁部は直線的に斜め上方へ立ち上がる。外面の体部中位から底部にかけて、釉薬が施されていない。892は黒釉磁（天目）の小破片である。

側道調査区からは、土器や陶磁器以外に鉄製品が出土している。鉄製品のM20は鍬と考えているが、先端の刃の部分を欠損しているの、別のものになるかもしれない。M22～25は釘である。土製品のC23～27は、いずれも中心部に孔のある筒形の土錘である。（福田）

## 第7節 小結

尾崎遺跡に縄文時代以前の遺構は検出されていない。縄文時代の遺物として、草創期に属する神子柴型石斧を含む石器と、後期を主体に前期から晩期にかけての土器が出土している。

弥生時代になると、発掘調査を実施した広大な範囲に散在的な状況で、竪穴住居、土壇、溝、下がりが存在した。側道調査区で検出した竪穴住居2は、平面形が方形の珍しい形態を呈する2本柱のもので、四隅近くに小さな4個の柱穴が認められ、紡錘車の未製品やスクレイパーとともに中期中葉の土器が出土した。本線調査区の南端で検出した竪穴住居3は、平面形が円形で壁体溝に沿って小さな穴が認められ、紡錘車と中期中葉の土器が出土した。国道北側調査区の斜面で検出した竪穴住居1は、地形の低い部分が削平されて残存しなかったが、3点の石鎌と後期前葉の土器が出土した。国道北調査区の土壇1は、断面形が浅い「U」字形で中期中葉の土器が出土した。わずかに痕跡が確認できた溝1と溝2は、中期中葉の時期と思われる。2か所の下がり、どちらも後期前葉の遺構である。遺構に伴わない土器には、中期前葉のものも認められるが、その時期の遺構は検出できなかった。

古墳時代の遺構には竪穴住居がある。竪穴住居4は不整形な形態で壁体溝が認められるが、竪穴住居5は4個の柱穴と中央穴が残存していた。竪穴住居6と竪穴住居7は、平面形が隅丸方形になるであろう。国道北調査区の北端部に存在した数個の石が伴う窪地は、古墳の可能性が考えられた。

古代になると遺構が急激に増加している。その大多数が掘立柱建物で、総柱のものと側柱のものがある。国道北調査区は、北から南に向かって下がる斜面になっていたから、地形の低い部分が削平されて、個々の掘立柱建物の全容を把握することができなかった。本線調査区の国道に面した北側の地点には、12棟もの掘立柱建物が比較的密集した状態で存在し、それらの掘立柱建物の数棟は「L」字状を呈して規則的に並んでいた。出土した古代の遺物には、須恵器や土師器だけでなく、円面硯と石帯の破片や陰刻の花弁宝相華文を描いた緑釉陶器の稜椀も認められた。また国道北調査区では、焼塩に使われた焼塩土器が、掘立柱建物の柱穴内や包含層から出土した。掘立柱建物が検出できなかった地点の炉跡や焼土面が、焼塩を行った場所と考えている。このように、掘立柱建物の規則的な配置が部分的に認められ、特殊な遺物が多く出土したことから、官衙的な様相の一端をうかがい知ることができるのである。国道北調査区の遺構に伴わない遺物には、一見したところ勝間田焼の椀に酷似した須恵器がある。その形態的特徴は、外面の体部下半に沈線または断面形が台形か三角形の突帯を施し、高台の側面をヘラ状工具で削って整形したもので、西播磨地方で9世紀から10世紀にかけて生産された良質の土器である。この須恵器の椀が比較的多く出土しているから、尾崎遺跡では生産地が遠いにもかかわらず搬入して使っていたと考えられる。埋葬に関係した遺構には、2個の甕の口縁部を合わせた小児用の棺である土器棺と、台付きの直口壺が単独で出土した火葬墓がある。

尾崎遺跡の北側に位置する丘陵上には、14世紀前半から15世紀末にかけて機能した小原山王山城跡が所在するから、中世になるとその城に関係した遺構が存在すると考えられたが、検出した掘立柱建物や柱穴列は、築城以前の古い時期のものが多いことが判明した。掘立柱建物には総柱のものと側柱のものがあるが、総柱のものには規模が極めて大きいものも存在した。

近世の時期になると、遺構が極めて少ないだけでなく遺物も少量であった。尾崎遺跡の周辺は耕地としての活用が図られたようで、河岸段丘の全域が水田化されたと思われる。(福田)

## 第7章 中町B遺跡

### 第1節 遺跡の概要

#### 調査区の概要（第313～315図）

旧大原町内を南流する吉野川は、大字下町から今岡付近にかけて、南北約1.5km、東西約500mを測る比較的まとまった規模の平野を形成している。中町B遺跡は、この平野の北端近く、吉野川東岸部に位置する。周辺の丘陵上から丘陵裾部には散布地や古墳の分布が認められ、法隆寺式軒瓦を伴う白鳳寺院として知られる今岡廃寺も、調査地から南へ1kmの地点に所在する。

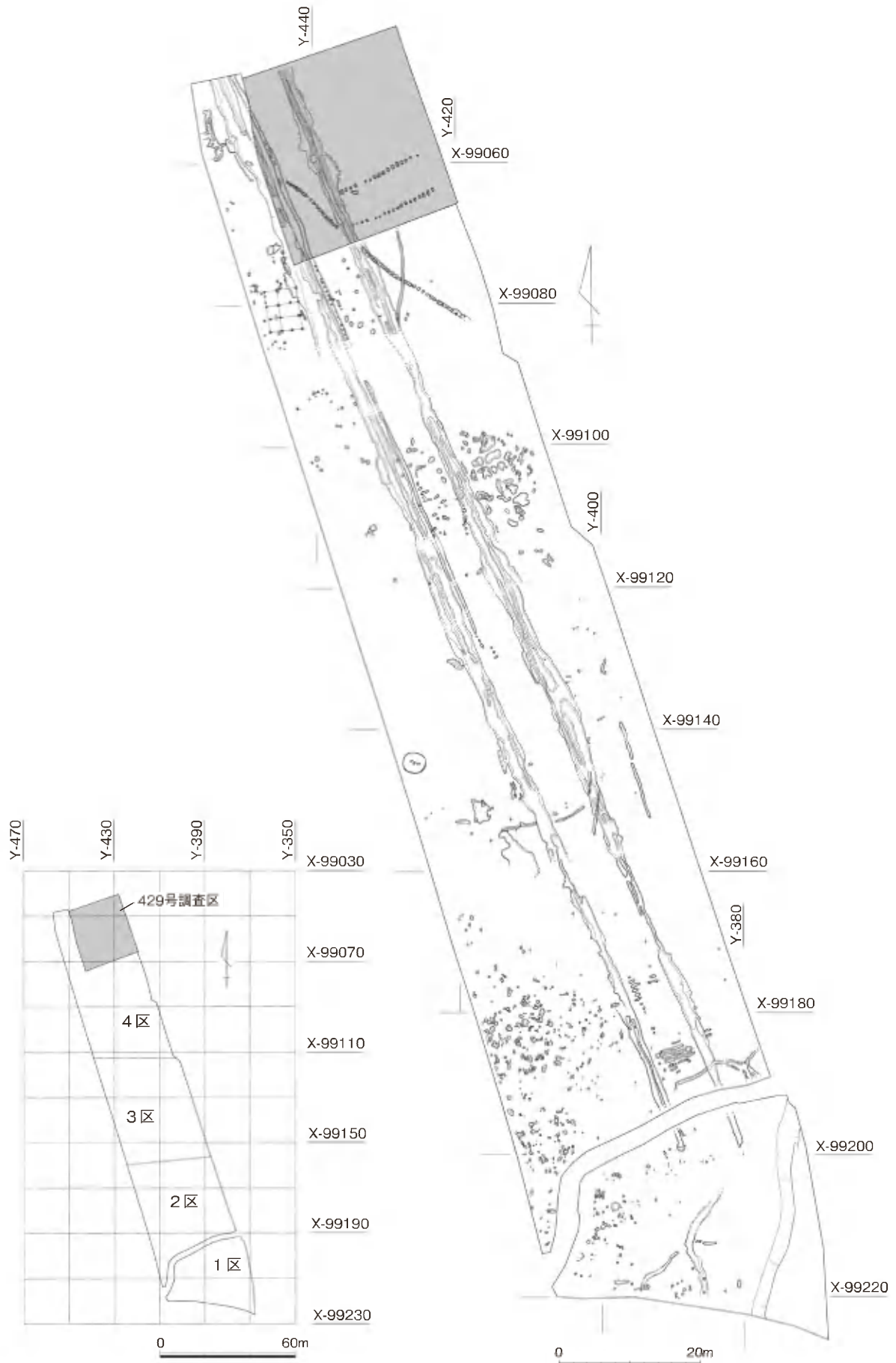
今回の調査地は、想定される遺跡範囲の東端にあたり、現在智頭急行線と道路とが平行に走る丘陵裾部に接する位置にある。なお、これらの路線は近世の街道「因幡往来」のルートに該当するといわれている。

調査は、確認調査の際に遺構が検出されたT1～4の周辺部が対象となった。その結果、縄文時代の土器散布地、弥生時代後期の竪穴住居、古代の官道「因幡道」の遺構、中世の建物や土壌などが検出された。中でも因幡道の発見は特筆される。

なお、調査区北東隅の県有地については国道429号特殊改良事業として別個に施工されるため、今回の調査対象から外れている。この箇所の調査は平成17年度に実施され報告書も既に刊行されているので、本書掲載の遺構配置図等は両者の成果を併せて作成した。



第313図 調査地位置図（1/4,000）

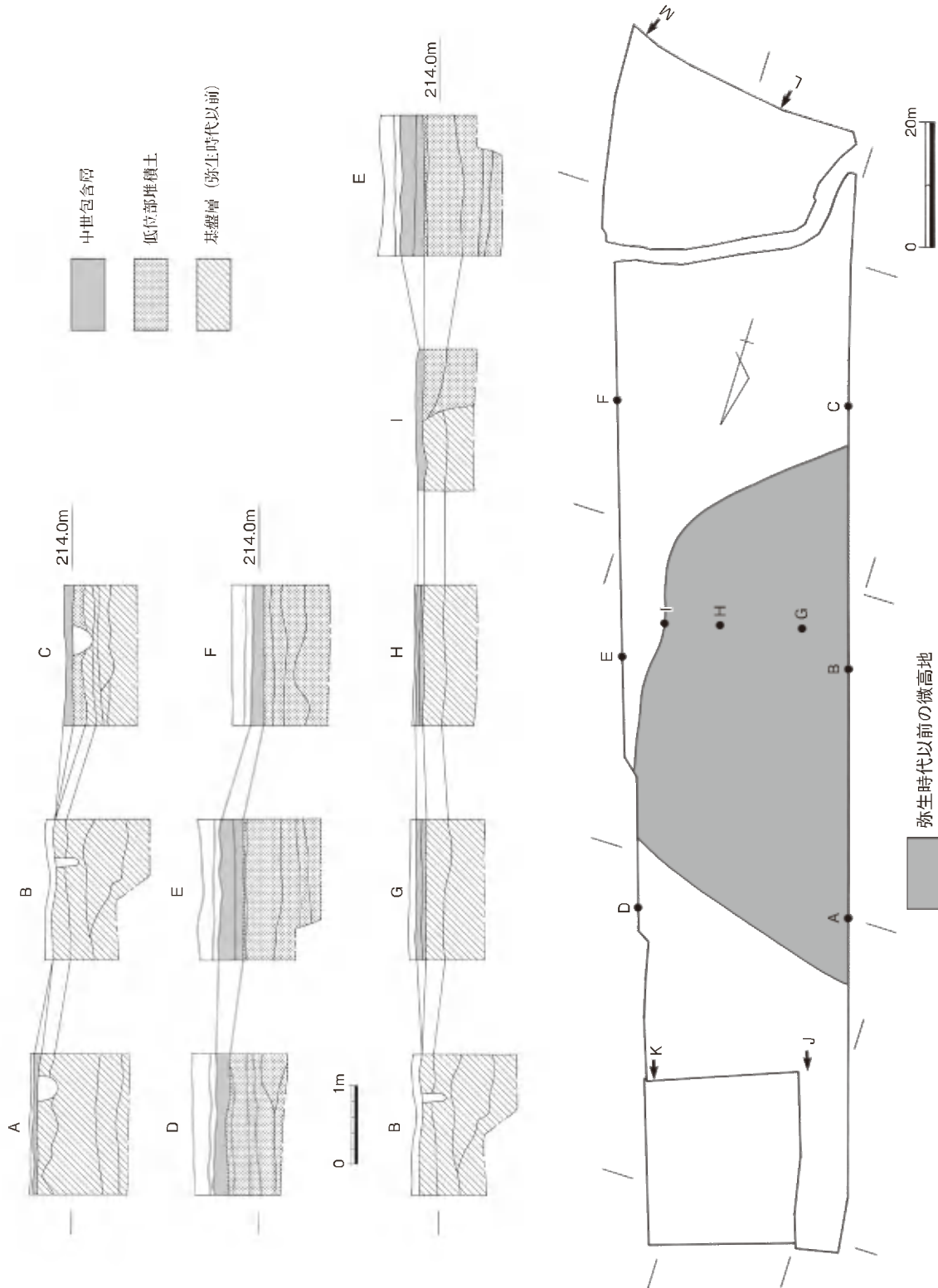


第314図 調査区配置図 (1/2,500)

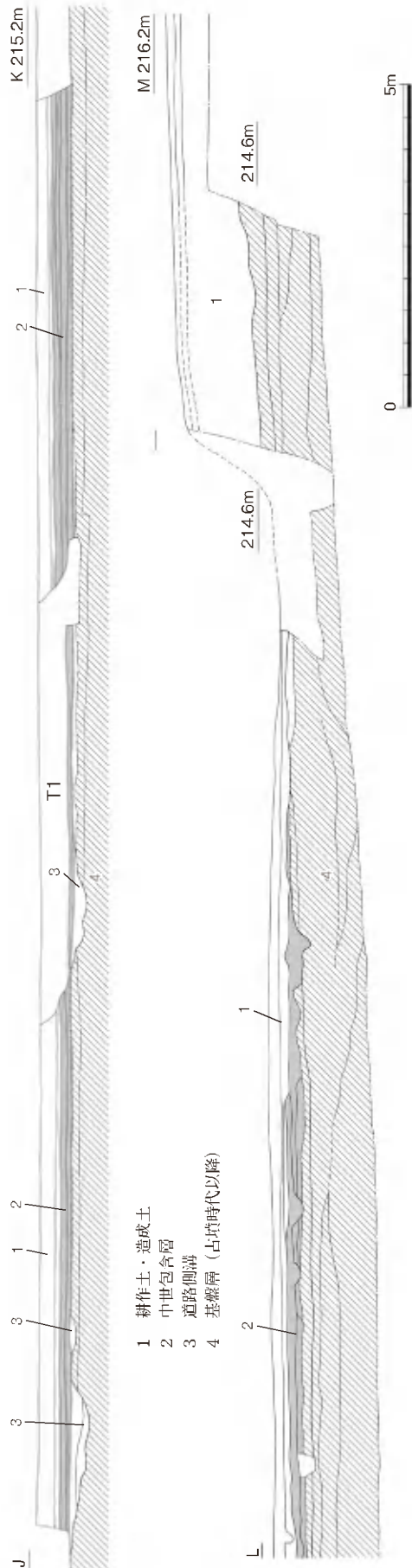
第315図 遺構全体図 (1/800)

調査区内の区分けは、調査対象地南部にある用水路および確認調査時のT2・3を境界として、南から順に1～4区と呼称している。また調査区内のグリッドは、平面直角座標系（通称国土座標、世界測地系）に準拠して20m間隔で設定した。

なお調査中に、遺構分布の南限と想定される1区南端部で複数の遺構が検出されたため、1区とT5の中間にT9を新たに設定・調査したが遺構は確認されなかった。1区よりも南側は旧地形が大きく落ち込み、確認調査時の所見通り遺跡範囲から外れると判断される。（岡本泰）



第316図 調査区土層断面図 (1/80)・地形模式図 (1/1,000)



第317図 調査区土層断面図 (1/100)

層序 (第316・317図)

第316図に示すように、部分的にトレンチ状に深掘りを行い、土層の堆積状況を確認した。その結果、調査区中央部においては半月状に弥生時代の基盤層である黄褐色砂質土層が広がり微高地を形成していることが確認できた。この微高地は今回調査の対象外であった調査区西側の吉野川側に向かって続いている。遺跡東側は現在の智頭急行線に向かって、東に黄褐色土層が下がり、E地点の下層で粘質土が堆積していたことから、弥生時代以前においては微高地東側に湿地が広がっていたものと想定される。

これらの湿地は、湿地を埋めた堆積土中に含まれる木片の放射性炭素年代測定結果から弥生時代以降に埋没したものと考えられる。これら微高地周辺の湿地を埋める形で堆積した暗褐色粘質土層は、調査区中央部の黄褐色砂質土層とともに、中町B遺跡において古墳時代以降の基盤層となっており、調査区付近は比較的平坦な地形を呈するようになったものと思われる。

古墳時代以降の基盤層の上層には、礫混じりの暗灰色砂質土が調査区ほぼ全域にわたって堆積していた。これら礫混じりの暗灰色砂質土は、12～13世紀の土器片を多く含む中世の包含層である。この中世包含層は部分的に、近世以降の耕作により削平を受けていた。今回の調査で検出された古代の道路遺構も基本的には、この古墳時代以降の基盤層から掘り込まれており、上層の中世包含層に覆われるような状態で確認している。また、古墳時代以降の基盤層は北から南へ向かって緩やかに下がっており、現地形も同様に北から南へ緩やかに下がっている状況である。なお、調査区南端部分、L-Mラインについては基盤層や上層の堆積土についても礫混じりの粗い砂質土で形成されていた。この地点は東側の丘陵の谷筋にあたり、谷筋を流れる流水や、土石流等の影響を常に受けていたものと考えられる。(石田)

## 第2節 古墳時代以前の遺構・遺物

### 1 概要

縄文時代から弥生時代の遺構、遺物は少なく、調査区の中央よりやや南側にあたる3区西半で集中的に見出される。こうした分布の偏りは、当時の地形が反映された結果とみられる。

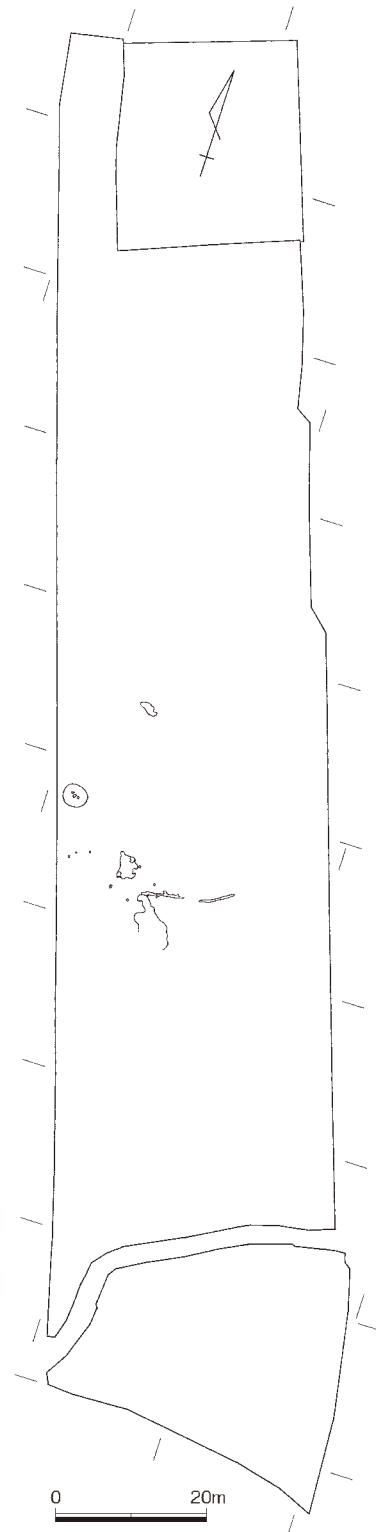
縄文時代の遺構は明確なものがないが、3区の南西部からは後期の土器片が多く出土している。これらの土器片は、出土位置がある程度集中することから、遠方からの流入とは考えにくく、具体的な様相は不明であるが、調査区の周辺に当時の集落が存在する可能性もある。また、1点のみであるが確認調査時に前期初頭の土器片が出土しており、旧大原町内で最古級の縄文土器として注目される。

弥生時代の遺構としては、3区西部で検出された竪穴住居1軒のほか、若干の溝、たわみ等が挙げられる。竪穴住居の埋土中からは、完形に復元される後期初頭の土器が多数出土した。保存状態も良好であり、従来調査例の少ない岡山県北東部にあって貴重な一括資料となった。溝、たわみ等は検出数も少なく、性格も明らかでない。検出状況からみて、当時の集落本体は調査区の西側に存在すると考えられる。

古墳時代については、明確な遺構は検出されておらず、中世の包含層などから須恵器片など若干の遺物が出土した程度であり、集落などの存在は考えがたい。  
(岡本泰)

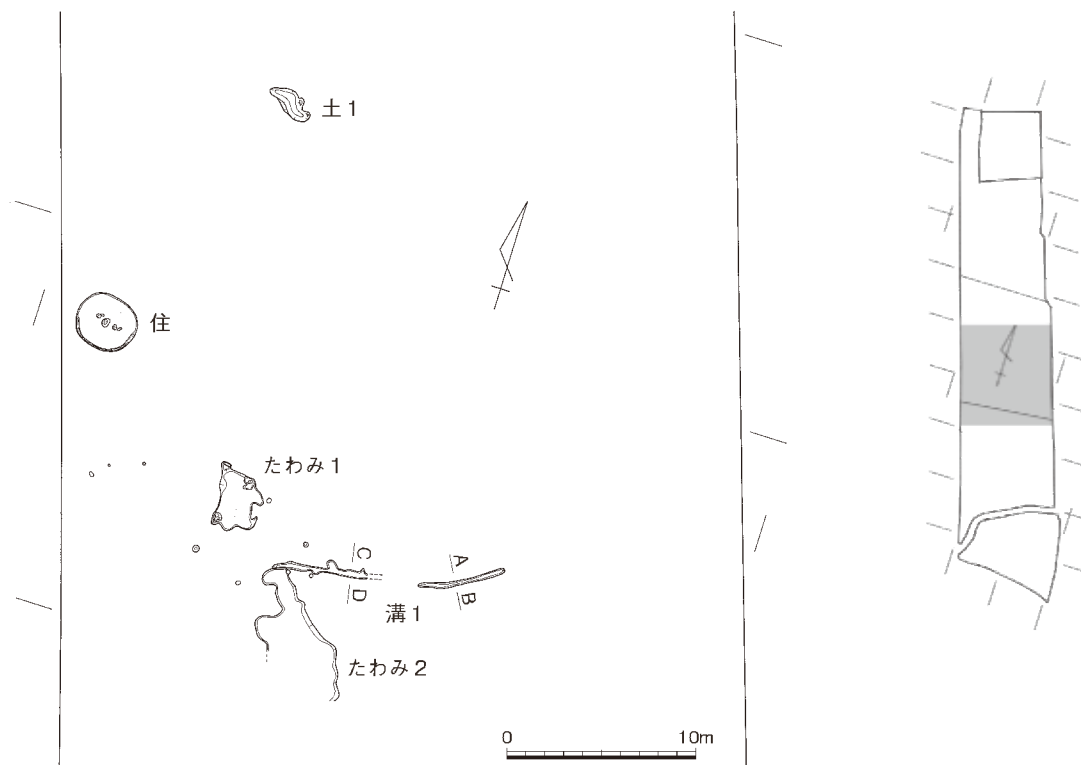


写真29 竪穴住居調査風景 (西から)



第318図 縄文・弥生時代  
遺構全体図 (1/1,000)





第319図 縄文・弥生時代主要遺構部分配置図 (1/400)

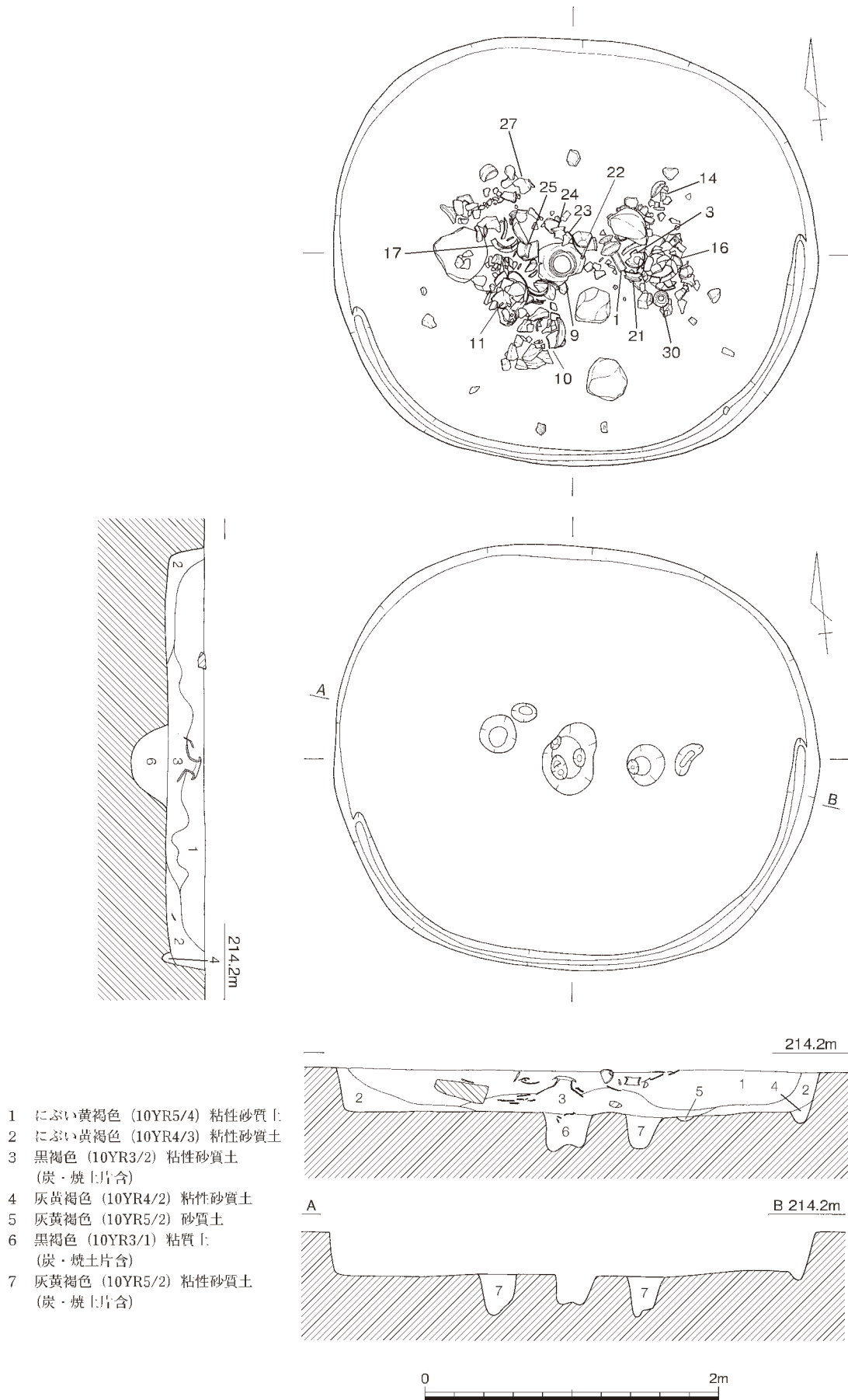
## 2 竪穴住居

竪穴住居 (第319～324・327図、写真29、図版46・47-1・54～57)

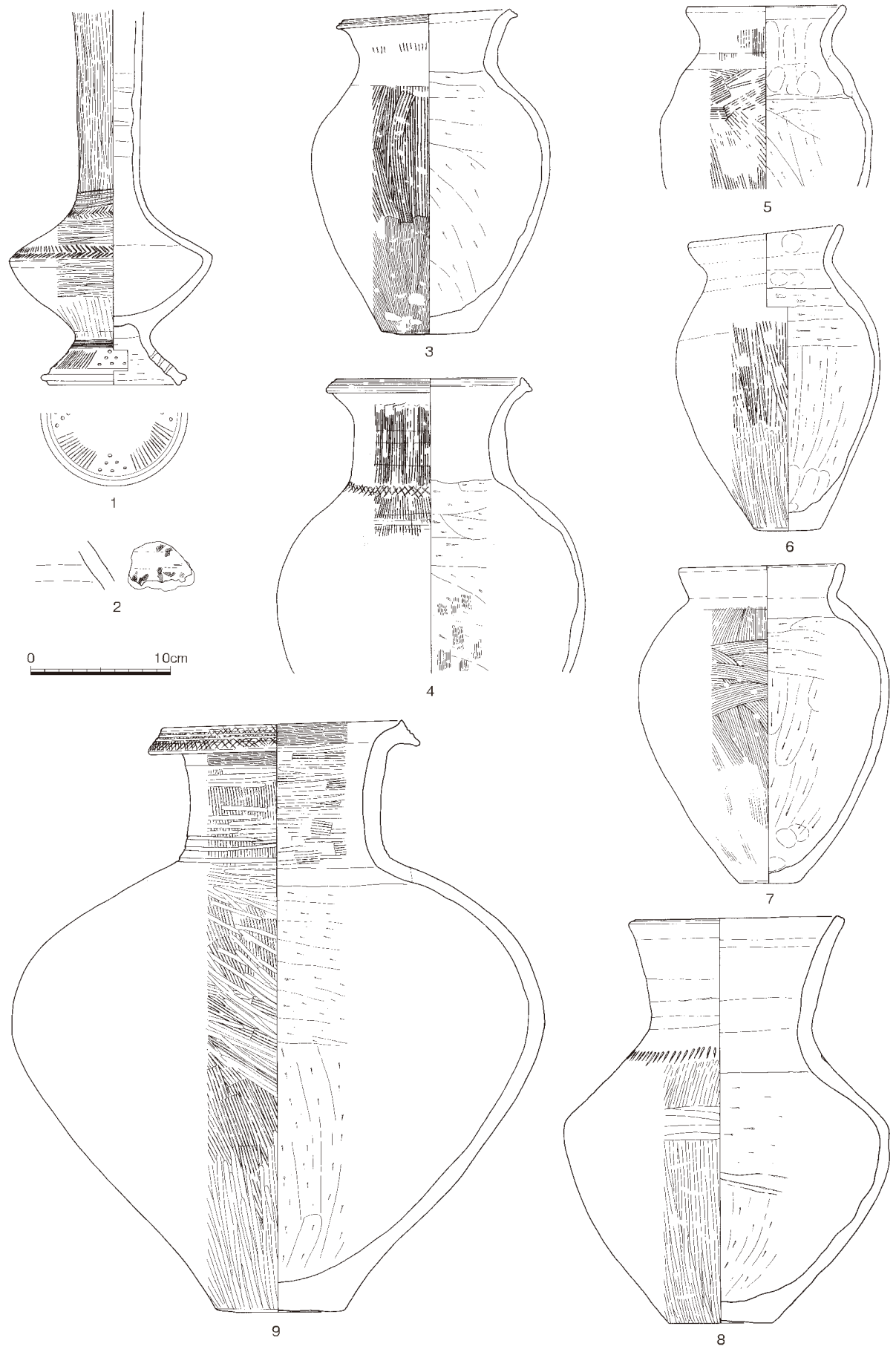
調査区中央部の西端で検出した竪穴住居である。平面形は楕円形を呈し、長径332cm、短径は290cmを測る。住居の残存状況は比較的良好で、検出面から床面までの深さは30cmを測る。主柱穴は2個で、いずれも直径28cm、深さ28cmのものである。主柱穴の間には、長径が50cmで平面不整形を呈し、深さ25cmの断面が鉢状の中央穴が掘られており、炭混じりの黒褐色粘質土で埋まっていた。

壁体溝は住居の南半部のみを巡っていたようで、北半部では検出していない。壁体溝の幅は12cm、深さ10cmであった。なお、住居床面には貼り床等は認められなかった。出土遺物には、土器31個体と石器1点があり、土器は住居の中央付近に、床面から遺構検出面まで積み重なるような状態で出土した。いずれの土器も完形に近いものが多く、住居廃絶時にまとめて廃棄されたものと考えられる。また、床面から浮いた状態で25cmから40cm大の石を検出しており、台石として利用したものを土器とともに投棄している。住居埋土の状況から、住居は廃絶後、短期間の間に埋まったものと想定され、これらの出土遺物の一括性は高いものと考えられる。

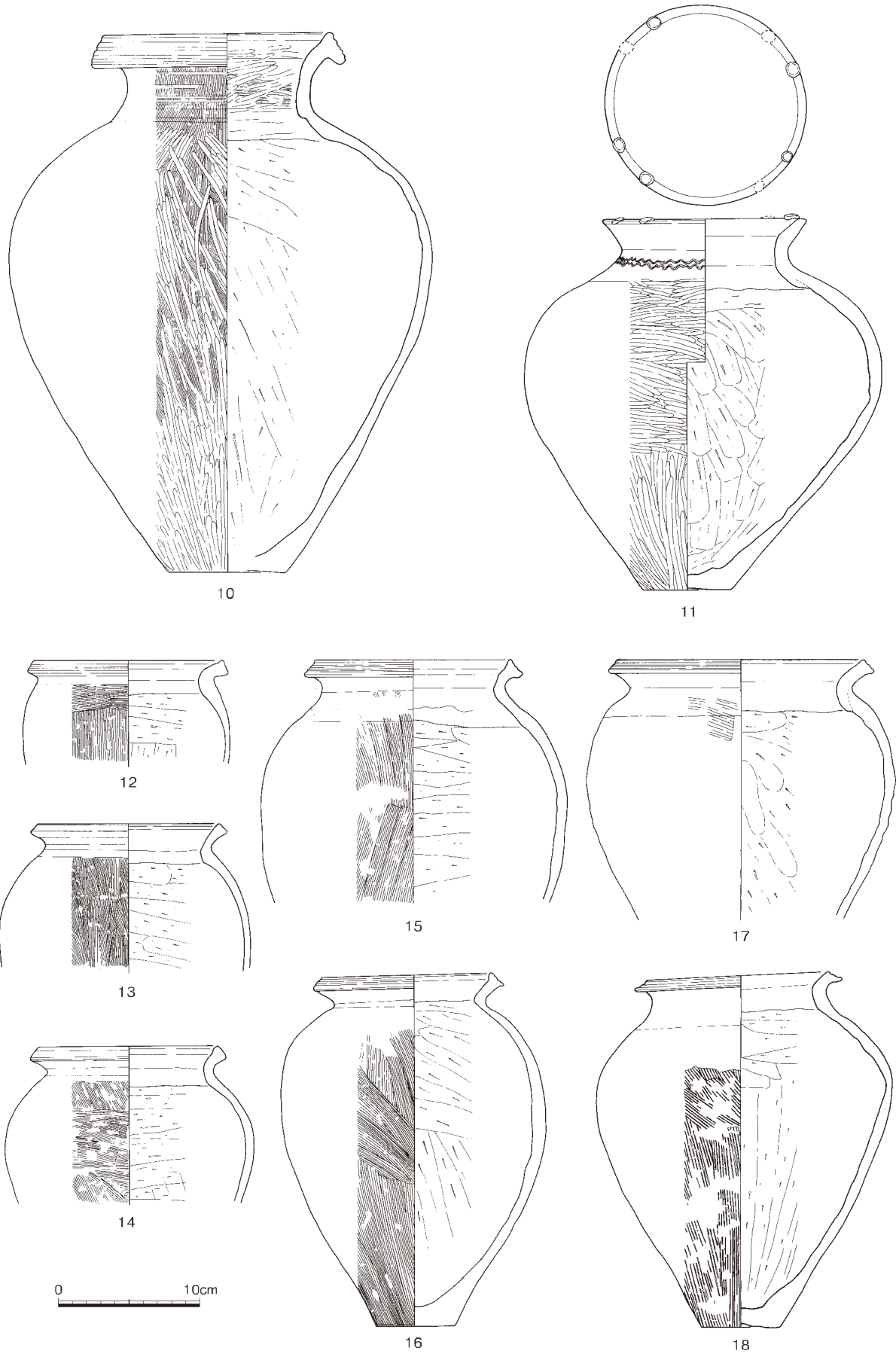
出土した土器は壺1～11、甕12～28、高杯29、鉢30・31からなるが、壺、甕が大多数を占め、高杯の出土は破片で1個体のみであった。1は長頸の台付壺で、算盤玉状の胴部をもち、胴部外面にはへら状工具の小口による綾杉状の刺突文が巡らされているほか、脚部には6個のピラミッド状の穿孔とへら描沈線文が組み合わせられており、装飾性に富む。2は壺の肩部の破片と考えられ、外面に棒状工具の小口による施文が認められる。11は口縁端部に円形浮文、頸部に波状文を施す壺である。器形や文様構成が特異であり、胎土も他の土器とは異なることから、周辺地域からの搬入品あるいは影響



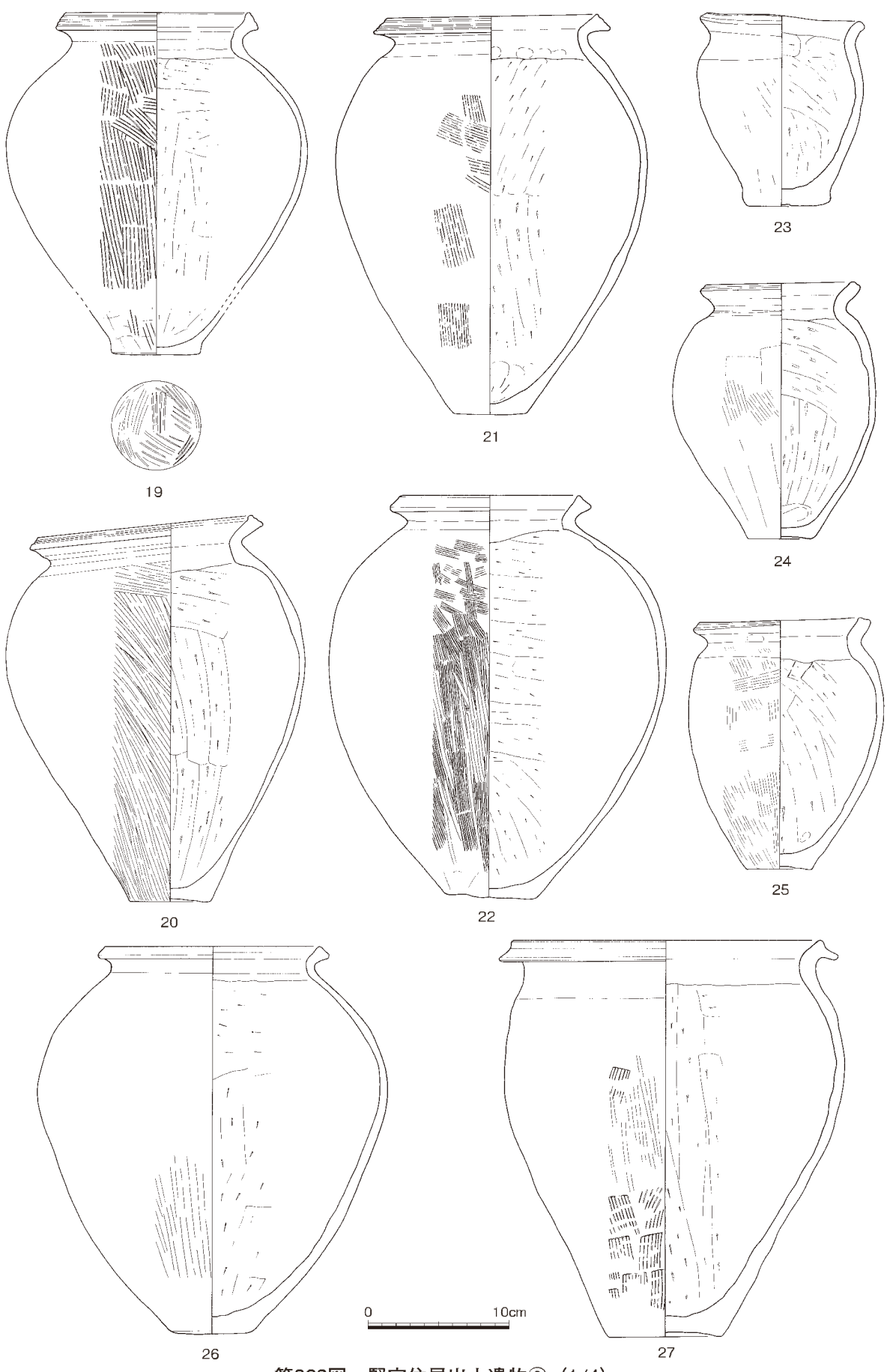
第320図 竪穴住居 (1/40)



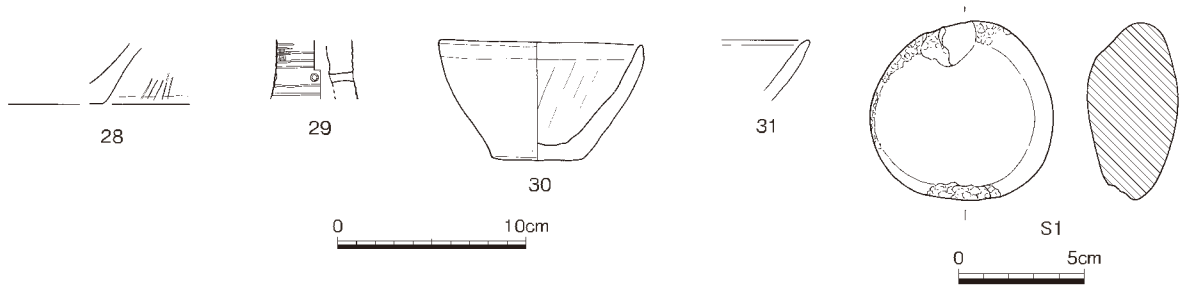
第321図 竪穴住居出土遺物① (1/4)



第322図 竪穴住居出土遺物② (1/4)



第323図 竪穴住居出土遺物③ (1/4)



第324図 竪穴住居出土遺物④ (1/4・1/3)

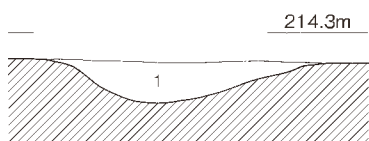
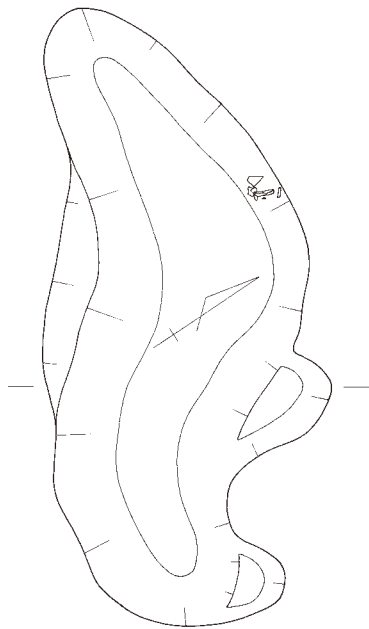
を考える必要がある。甕はいずれも口縁部を肥厚もしくは拡張させている。口縁端部外面には擬凹線文を施すものが多いが、13・14・22・26・27のようにナデのみで仕上げるものもある。内面はいずれの甕も頸部直下までヘラケズリが及んでいる。29は高杯筒部の破片で、外面には螺旋状の沈線を施し、穿孔が少なくとも2か所で確認できる。その他、石錘S1が出土している。

住居の時期は出土した土器から弥生時代後期初頭と考えられる。なお、住居の埋土中に含まれていた炭片の放射性炭素年代(AMS法)測定結果はBP1,880~1,900±30年であった。(石田)

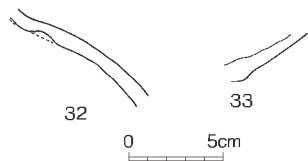
### 3 土壌

#### 土壌1 (第319・325図、図版47-2)

調査区中央部で検出した土壌である。平面形は不整形で長辺250cm、短辺60cmを測る。断面は楕円状を呈し、深さは16cmを測る。土壌の北西隅の肩口付近で弥生土器の壺片32・33が出土している。出土遺物からこの土壌の時期は、弥生時代後期前半と考えられる。(石田)



1 褐色 (10YR4/4) 砂質土 (粗砂多混。マンガング粒状に混じる)



第325図 土壌1 (1/30)・出土遺物 (1/4)

### 4 溝

#### 溝1 (第319・326図)

調査区中央部を東西方向に流れる溝で、検出長は12.4m、幅37cm、深さは4cmを測る。断面形は逆台形状を呈する。出土遺物はなく、時期は不明であるが、埋土の特徴から弥生時代以前のものと考えられる。(石田)



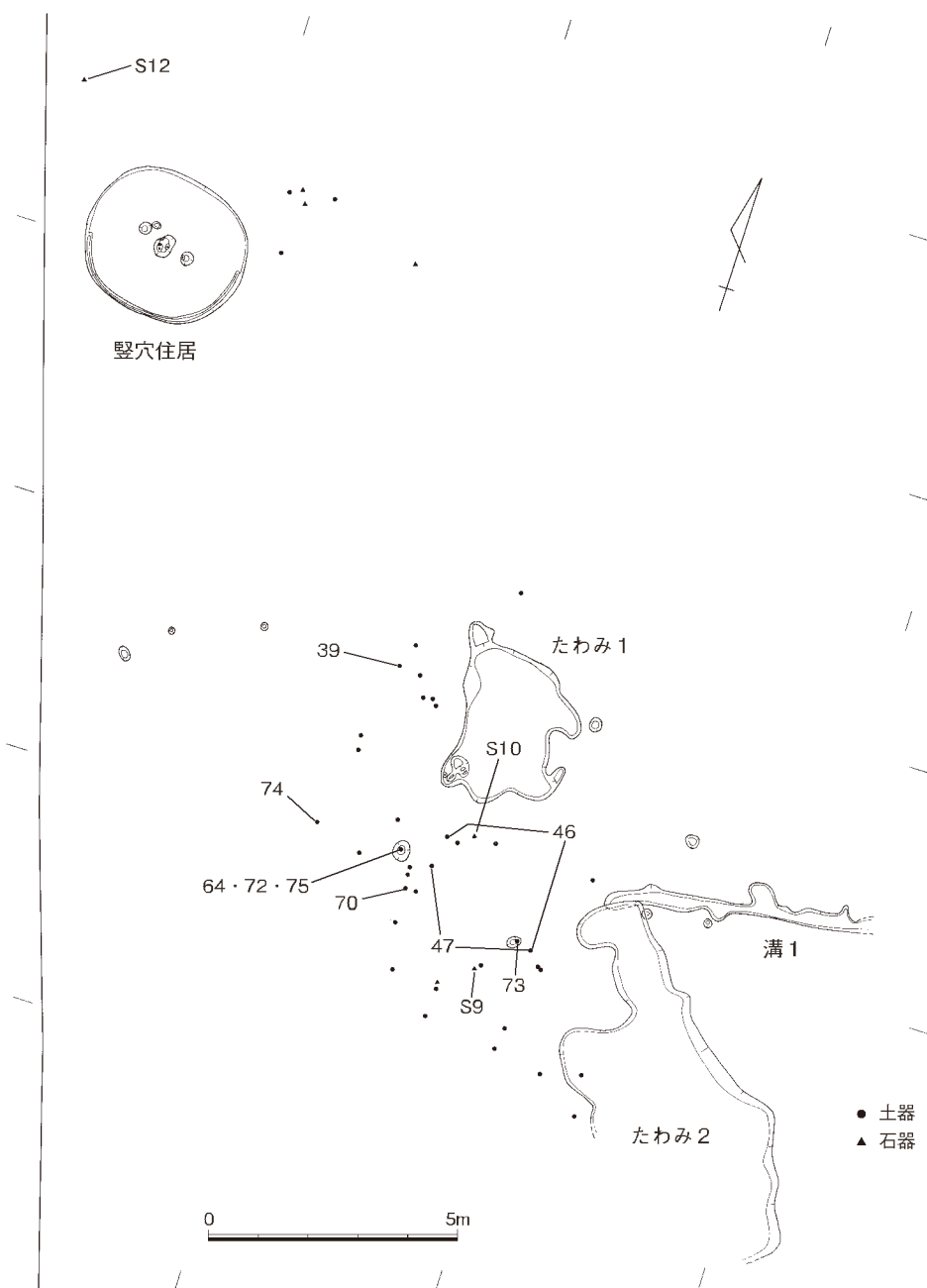
1 黒褐色 (10YR3/2) 砂質土 (粗砂混)

第326図 溝1 (1/30)

5 その他の遺構・遺物

たわみ1 (第319・327・328図、図版47-3)

調査区中央西側で検出した。平面形は不整形で、長辺384cm・短辺174cmを測り、深さは11cmと浅い。南西部には深さ20cm程の不整形のピットが伴っている。出土遺物は土器と石器があり、34・35は縄文時代後期中津式土器である。36は弥生土器片で上部から混入した可能性がある。石器には石鏃S2~4、石錐S5、楔形石器S6があり、石材はいずれもサヌカイトである。大部分が削平を受けており、たわみ状を呈しているが、本来は縄文時代の住居等の遺構であった可能性も考えられる。(石田)



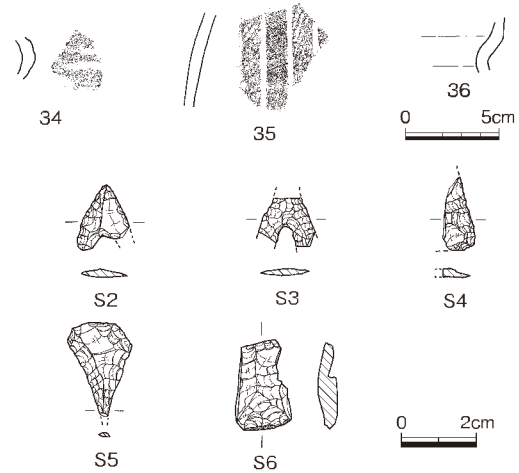
第327図 たわみ1・2、縄文土器散布地 (1/150)

たわみ2 (第319・327図)

たわみ1の南東で検出した。平面形は不整形で、北側部分は溝状に伸びる。長辺780cm、短辺111cmを測る。大部分が削平を受けており、深さは10cm程度しか残存していない。出土した遺物は細片のみで図示できるものはなかった。埋土はたわみ1と同様で、時期も縄文時代に属するものと考えられる。(石田)

縄文土器散布地 (第327・329・330図、図版53)

3区南東部、竪穴住居やたわみ1・2の周辺において、縄文土器の比較的密な出土を確認した。個々

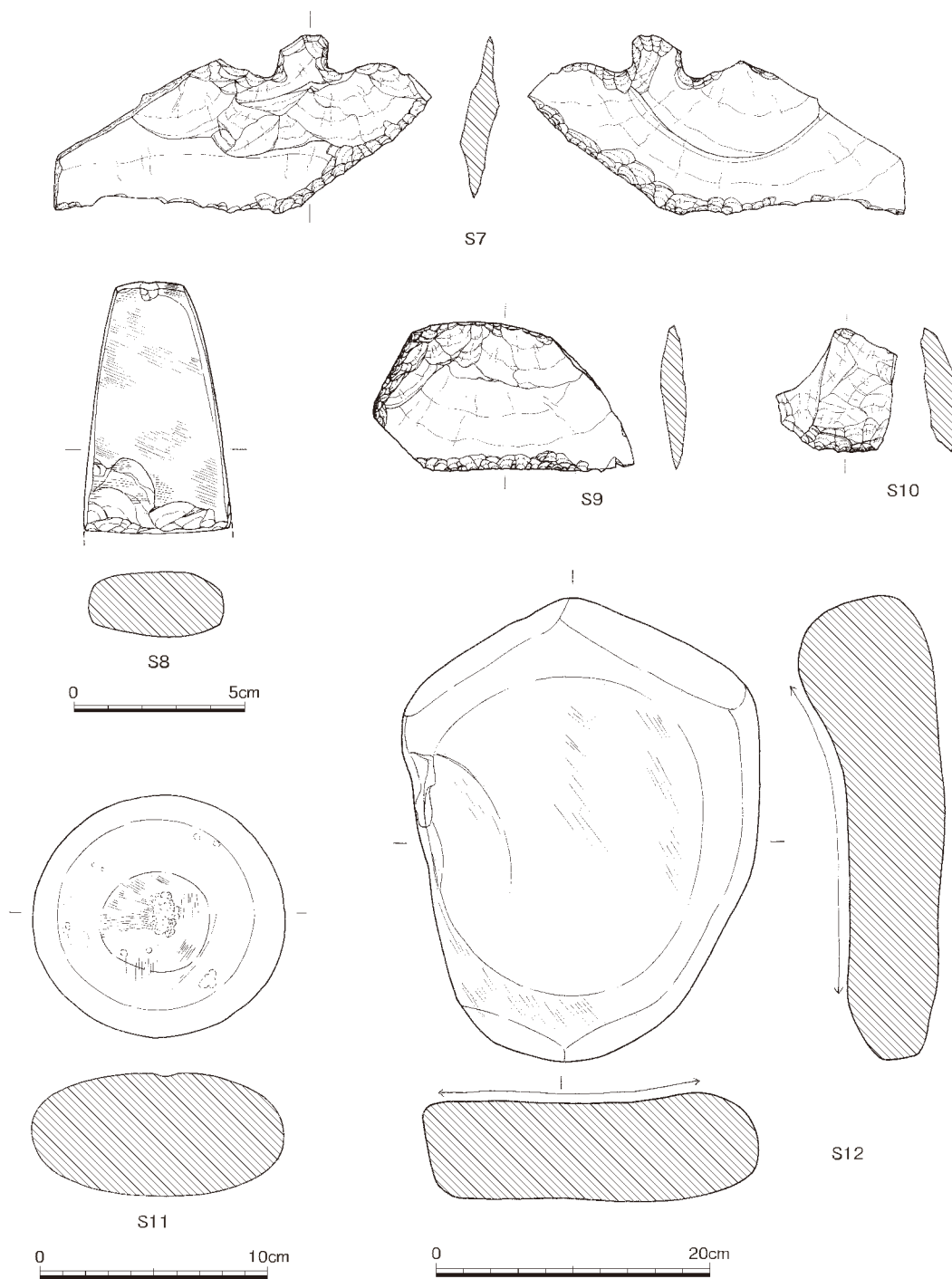


第328図 たわみ1出土遺物 (1/4・1/2)



第329図 縄文土器散布地出土遺物① (1/4)





第330図 縄文土器散布地出土遺物② (1/5・1/3・1/2)

の土器片には地山の黄褐色土にめり込んだ状態のものが多く、遺構の存在を想定して一帯を精査したが検出されなかった。しかし、その集中度からみても単純な流入とは考えにくく、付近が居住の場であった可能性が高いため、散布地ではあるが遺構に準じて扱う。第327図に示した以外に、付近の中世包含層最下部や竪穴住居などから出土した同時期の遺物も、本来的にはこの散布地に由来するものとみなして本項に掲載している。

土器の多くは細片で、特に胴部については、傾きはおろか上下の判別すら困難なものも多く、図の配置方向は便宜的なものである。37～46は、現状で沈線文のみが認められる土器であるが、小片かつ

器表面の摩耗もあって不確実である。47～66は沈線間に磨消縄文を有する、もしくは剥落しているが本来有していたと思われる土器である。47～50は波状口縁を有する深鉢で、器表面を沈線で区画し内部を磨消縄文で充填する。その文様・器形からみて後期初頭の中津式に該当するであろう。47の波頂部から下へは円形の刺突文が縦方向に施される。なお48と胴部片54・55は同一個体の可能性が高い。51～53は平坦な口縁部をもつもの、54～66は胴部の小片である。これらも中津式に属すると思われる。65・66は、垂下する「J」字文の一部が途切れる点からみて中津Ⅱ式と思われる。67・68は、垂下する沈線間に横位の沈線を施して梯子状の文様とし、縦横の沈線が接する部分に穿孔が連続するという特異な文様構成を有し、型式は判然としない。69～71は無文の深鉢と考えられ、69・70の外面には条痕が顕著である。72は道路遺構の側溝1への混入で、保存状態が悪いが口縁端部の特徴などから、中津式に後続する福田KⅡ式あたりに降るものであろうか。73～75は底部で、いずれもほぼ平底を呈する。以上の土器は、小片のため器形や文様構成の把握が困難であるが、縄文土器資料の僅少な当地域における貴重な出土例となった。石器類も各種出土している。石匙S7はサヌカイト製の完形品である。S8は道路遺構の側溝1に混入していた磨製石斧で、刃部を欠損している。S9はスクレイパー、S10は楔形石器である。S11は磨石と思われる。石皿S12は竪穴住居の北側で出土したもので、重量は約13.5kgを測り、上面は使用によって楕円形状に浅く窪んでいる。(岡本泰)

## 6 遺構に伴わない遺物 (第331図)

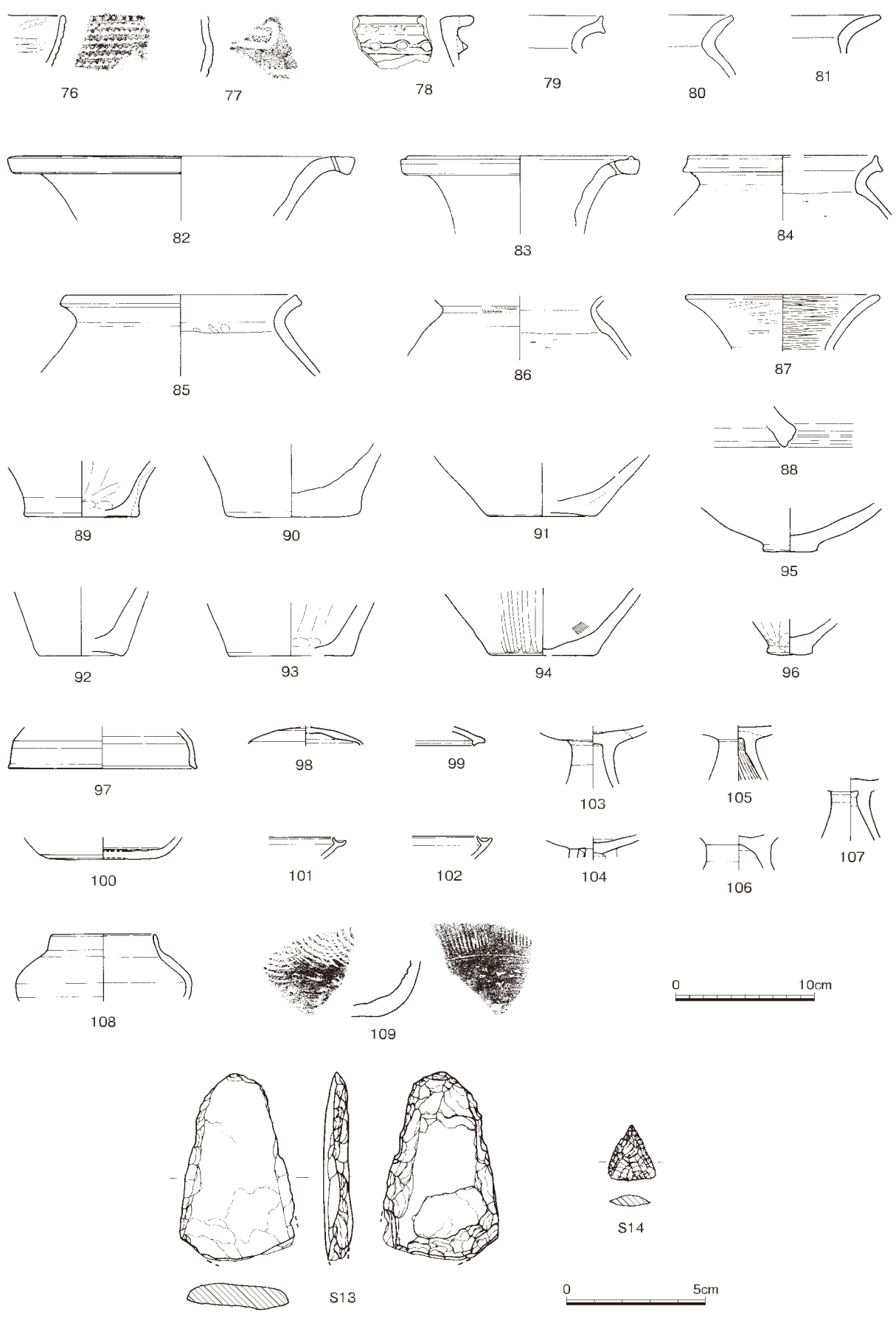
ここでは、縄文時代から古墳時代に属する遺物で、遺構に直接伴わないものを掲載した。遺物の大部分は中世の包含層や表土中から出土した遺物である。

76・77は縄文土器で、76は確認調査のT2から出土した縄文時代前期初頭の羽島下層式土器の破片で、外面は「D」字形爪形文を施し、内面には条痕が残る。77は縄文時代後期初頭の中津式土器の破片で、磨消縄文が認められる。

78～96は弥生土器である。78は弥生時代中期中葉の甕で肩部に貼付突帯を施した後に刺突を施すのが特徴であり、これらの甕は中国地方山間部から山陰地方にかけて類例が認められる。82・83は弥生時代中期の広口壺の口縁部で、いずれも端部に穿孔がみられる。84～86はいずれも弥生時代後期の甕で、内面は頸部直下までヘラケズリを施す。87は小形の鼓形器台の受部で山陰地方からの搬入品と考えられ、内外面ともに細かいヘラミガキを施している。88は高杯の脚端部で肥厚した外面に凹線文を施している。89～96はいずれも壺や甕の底部である。89～94は平底で弥生時代中期から後期までのものを含んでいる。95・96は狭小な平底の底部をもち、弥生時代後期終末のものと考えられる。これらの弥生時代の遺物は、遺跡西側の微高地上や東側の丘陵上に展開する集落の土器を含んでいると考えられ、付近に弥生時代中期中葉以降の集落が営まれていた可能性を示すものであろう。

97～109は古墳時代の須恵器である。97～99は杯蓋、100～102は杯身の破片でいずれも6世紀後半から7世紀前半のものである。103～107は高杯で104には透かし孔が三方向に認められる。また、105の脚部内面にはシボリ痕が認められる。108は短頸壺、109は横瓶の破片で、外面には平行タタキとケズリ調整、内面には同心円状の当て具痕が認められる。これらの古墳時代の遺物については、遺跡東側の丘陵に位置する古墳等から流れ込んだ遺物も一部含んでいるものと考えられる。

その他、縄文時代の打製石鍬S13や、小形でサヌカイト製の石鍬のS14が出土している。(石田)



第331図 遺構に伴わない遺物 (1/4・1/2)

## 第3節 古代の遺構・遺物

### 1 概要

古代の遺構として特筆されるのが、調査区を南北に貫く形で検出された直線状の道路遺構である。道路遺構は、4区北端から1区北端にかけて、総延長約168mにおよぶ2条の平行な溝として検出された。溝は道路の東西側溝と解釈でき、側溝間が路面に相当する。さらに、路面上で道路遺構の指標とされる「波板状凹凸面」を検出したことにより、道路であることは確定したといえる。この道路遺構の続きは、平成17年度に実施された一般国道429号特殊改良に伴う調査でも検出され、そこでは側溝に直交する柱穴列も見出されている。

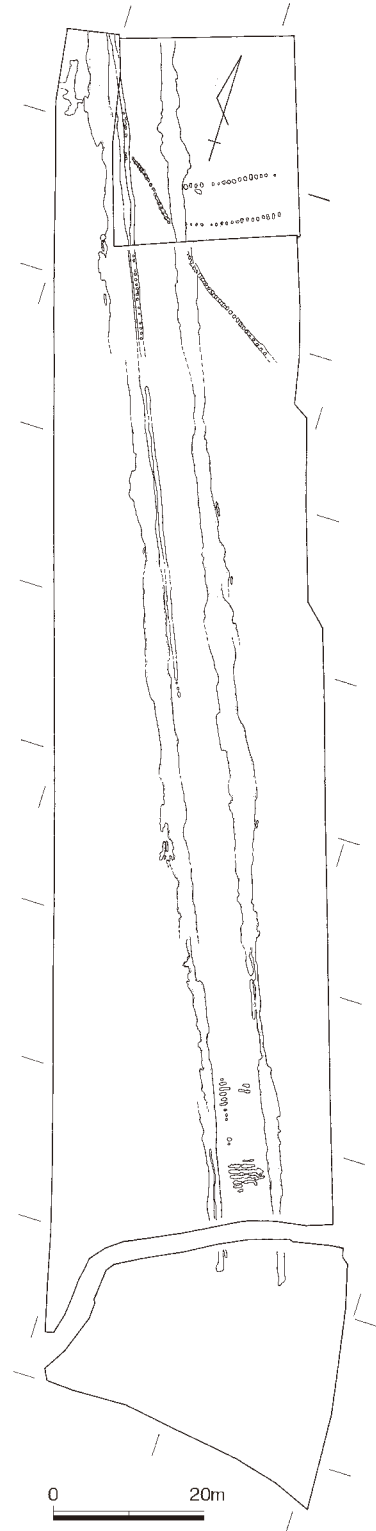
この道路遺構の性格であるが、広い幅員と顕著な直線性は古代官道の特徴に合致し、検出地点が播磨国と因幡国とを結ぶ古代官道「因幡道」の想定ルート上に位置する点からも、検出された道路遺構はこの官道と断定して差し支えない。「因幡道」は、『日本後記』等の記述からその存在が知られる古代官道で、現在の兵庫県佐用町で美作道と分岐し、兵庫・岡山県境の釜坂峠を通過して吉野川沿いに北上、志戸坂峠で鳥取県側に抜けるルートが想定されている。

道路遺構以外には若干の溝などがみられるのみで、他の遺構には積極的に古代に比定可能なものは認められず、この時期には、周囲に集落などは存在しなかった可能性が高い。

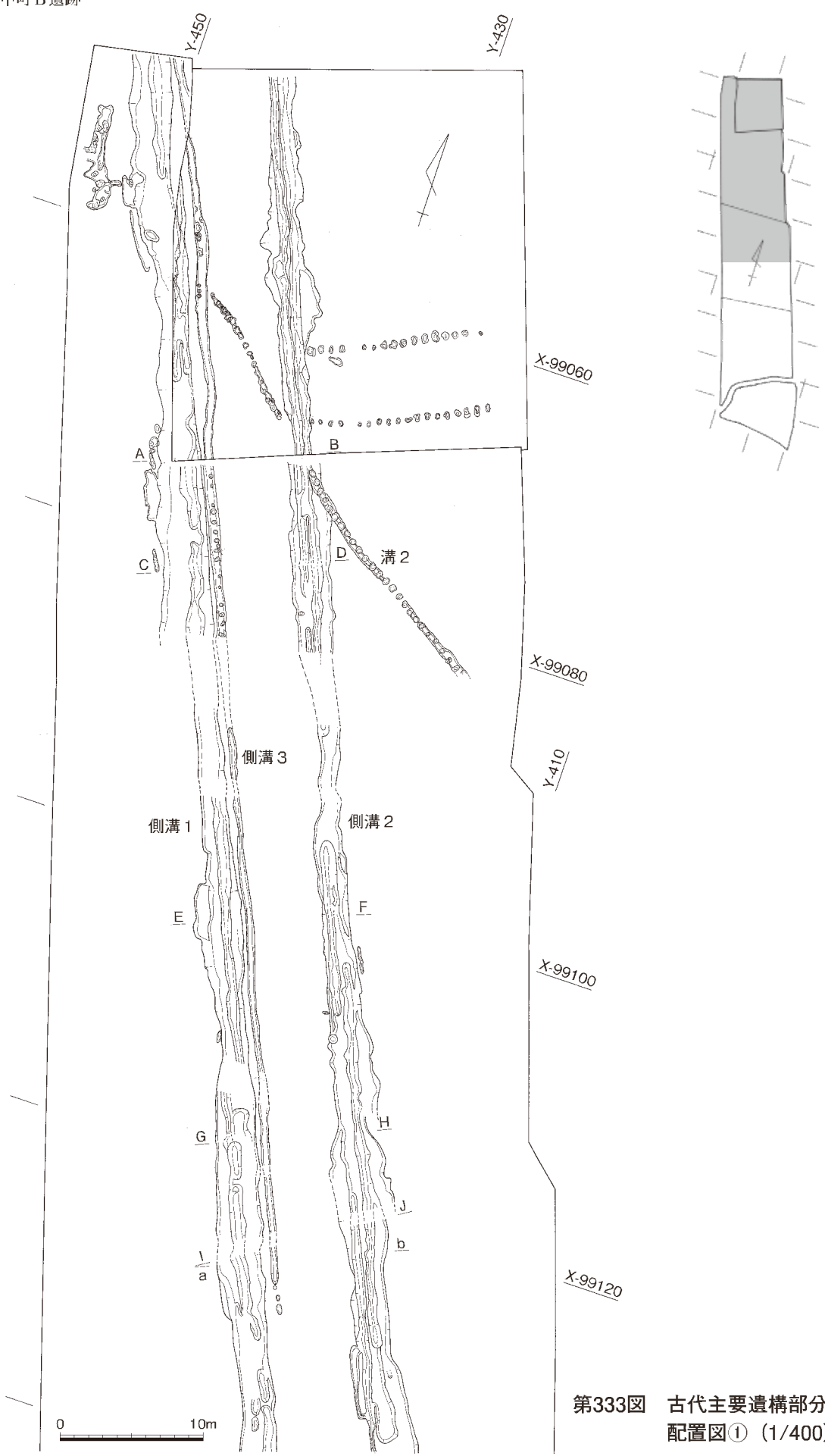
その他、奈良～平安時代の須恵器等が出土した。（岡本泰）



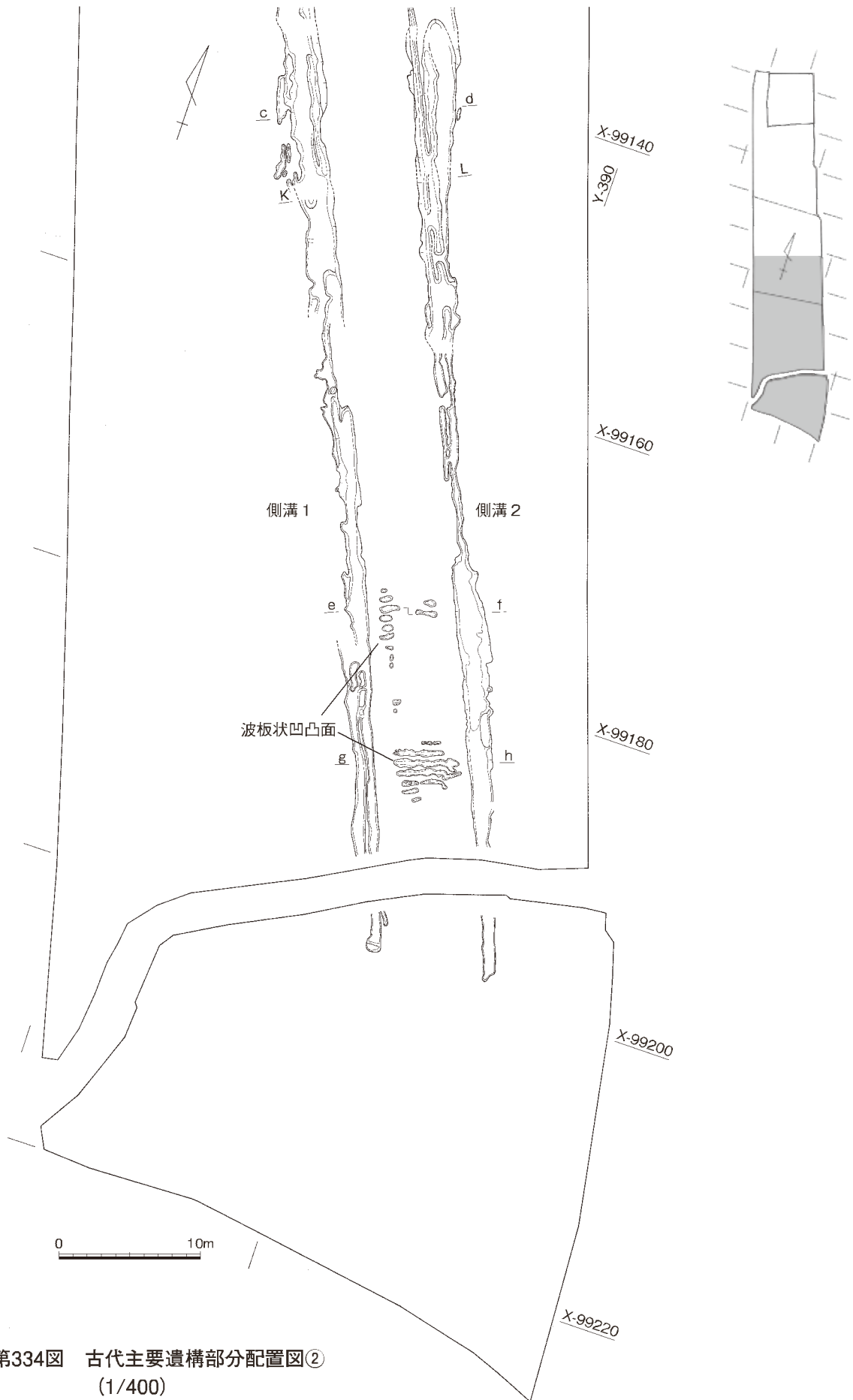
写真30 道路遺構調査風景（南から）



第332図 古代遺構全体図  
(1/1,000)



第333図 古代主要遺構部分  
配置図① (1/400)



第334図 古代主要遺構部分配置図②  
(1/400)

## 2 道路遺構

1区北端から4区北端の調査区中央に全長168mにわたる道路遺構を検出した。道路遺構は側溝1～3の3条の溝と波板状凹凸面から構成されている。側溝1と側溝2は等間隔をあけて平行に延びているが、側溝3は側溝1のすぐ東側に平行して掘削されており、道路遺構の北半部のみで検出した。側溝3は道路遺構に伴うが側溝1・2と比べ規模も小さく構造も異なることから、補助的な機能をもつ溝と考えている。また、調査区南側の2区では側溝に挟まれる形で、溝に対して直交方向に波板状凹凸面を検出している。側溝1・2間の路面にあたる部分では、基盤層を検出しただけで、硬化面や礫面等は確認できず、後世の造作により道路遺構築造当時の路面は削平されたものと思われる。なお、北東隅に隣接する部分については、平成17年度に一般国道429号特殊改良1種に伴う発掘調査（以下、429号調査）を実施し、側溝1～3の続きを同様に検出している。道路遺構は、12～13世紀代の勝間田焼等の土器を含む中世包含層を除去した段階で検出している。また、道路遺構に伴う出土遺物は少なく、今回の鳥取自動車道関連の発掘調査では道路遺構の築造時期を判断できる遺物の出土はなかったが、隣接する429号調査では側溝1・2から古代の遺物が出土しており、道路遺構が古代に築造されたものであることは間違いのないと思われる。そして、上層に堆積した中世包含層との関係から、道路遺構は12世紀頃までは機能していたのではないかと考えられる。道路遺構の規模は、路面にあたる側溝内側肩幅が側溝1～2間で550～600cm、側溝1～2間の心々距離は720～940cmを測る。（石田）

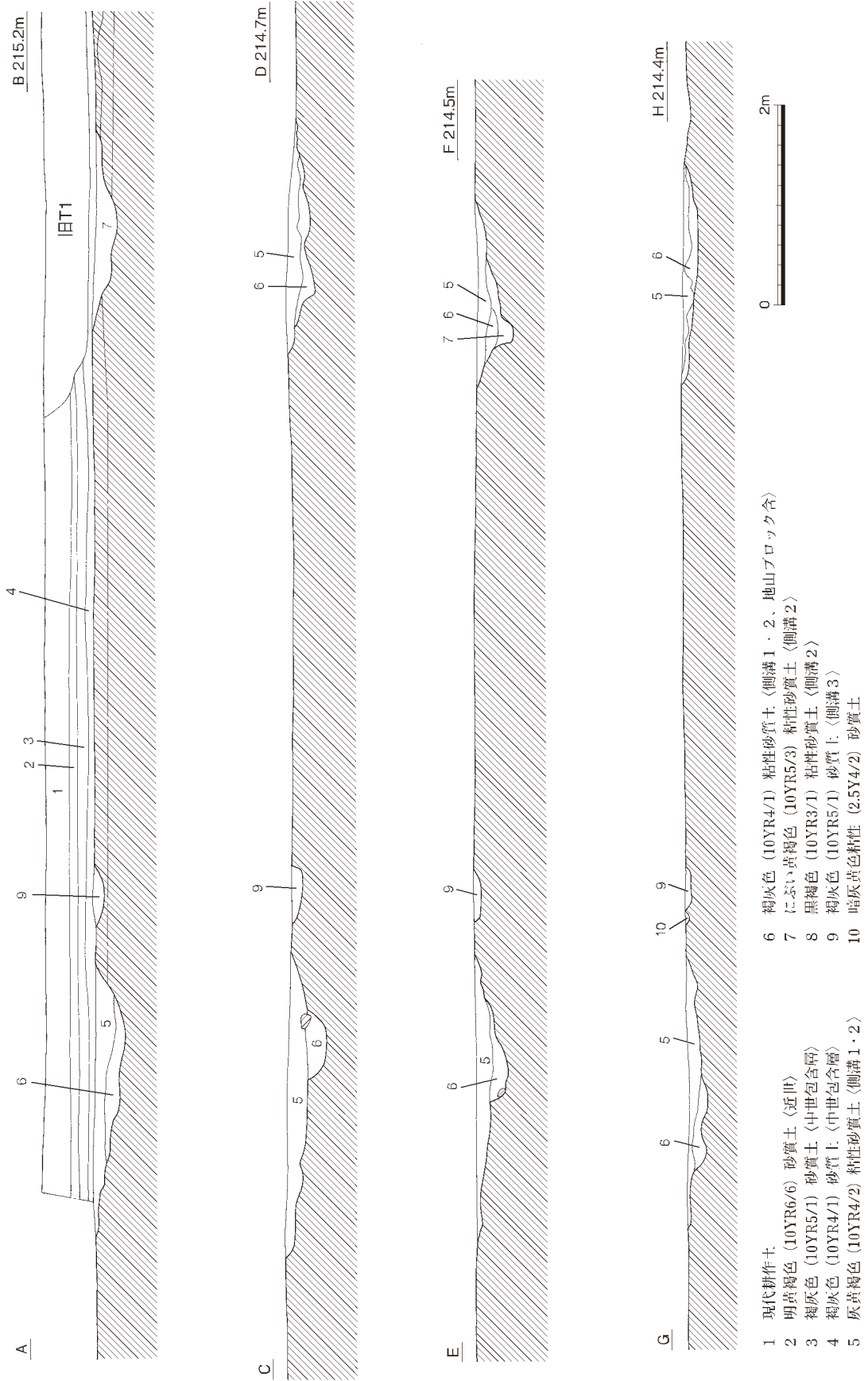
側溝1・2（第333～338図、写真31、図版48・49）

1区北端から4区北端にわたって平行する道路遺構の側溝1・2を検出した。側溝1・2は、いずれも中世包含層を除去した段階で検出している。側溝1は、道路遺構の西側に位置する側溝で検出長165.2m、幅50～400cm、検出面からの深さは最深部で39cmを測る。溝の断面形は、なだらかな椀状を呈する部分が多いが、西側に平坦面をもち、そこから一段深く掘削されている箇所もある。上部は大きく削平を受けており、部分的に幅の狭い箇所もあった。また、溝が2区付近で2条に分かれているが、溝の改修に伴い再掘削が行われた結果と考えられる。溝の埋土は大きく上下の2層に分かれる。上層は灰黄褐色の砂質土で、下層は地山ブロックを含む、褐灰色粘性砂質土で人為的に埋め戻された状況を呈している。



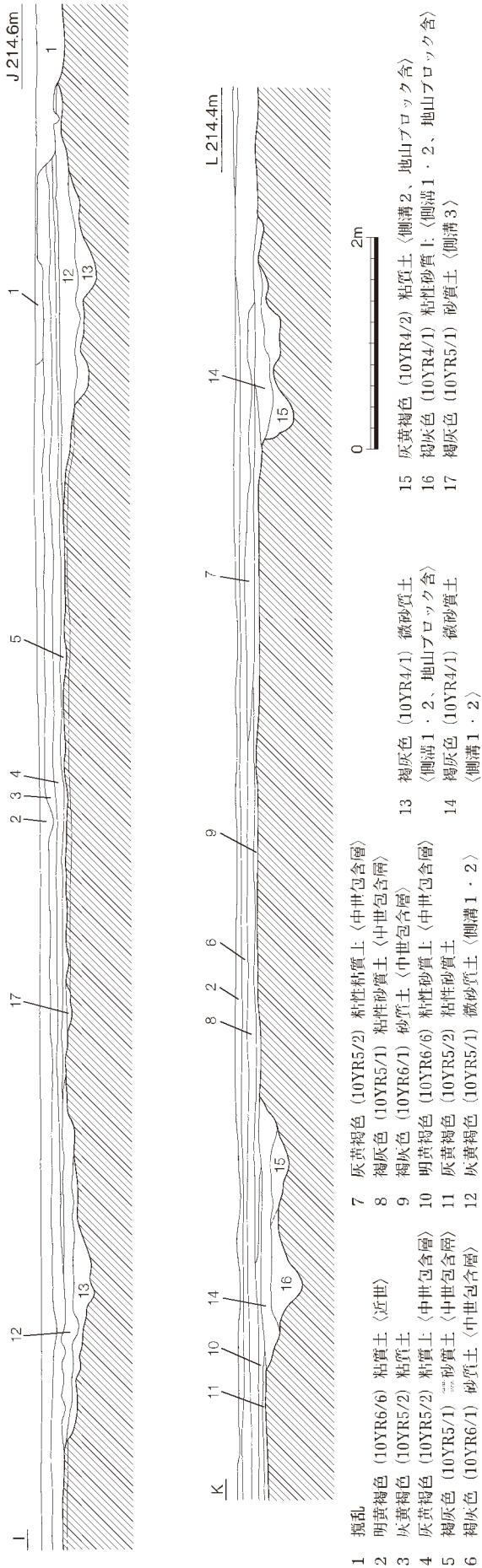
写真31 側溝2検出風景（南から）

側溝2は道路遺構の東側に位置する側溝である。検出長は139.2m、幅50～360cm、検出面からの深さは最深部で36cmを測る。断面形は、なだらかな椀状を呈するが、一部東側に平坦面をもち、そこから一段深く掘削されている箇所もある。部分的に溝が2条に分かれる箇所があるが、側溝1と同様に改修等により溝が再掘削されているためであろう。側溝2の埋土の状況は側溝1と同様で、上下2層からなり下層は地山ブロックを含み人為的に埋め戻さ



第335図 道路遺構断面① (1/60)

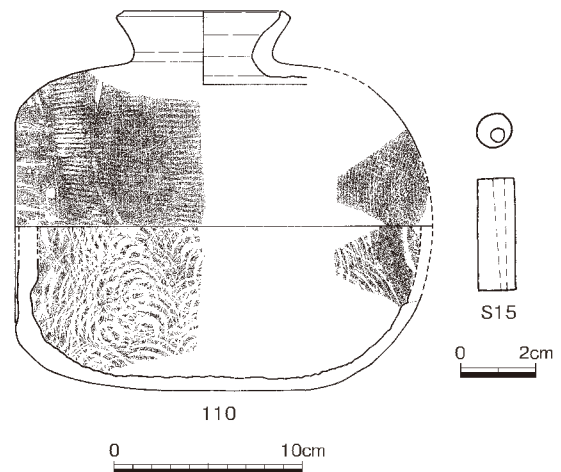




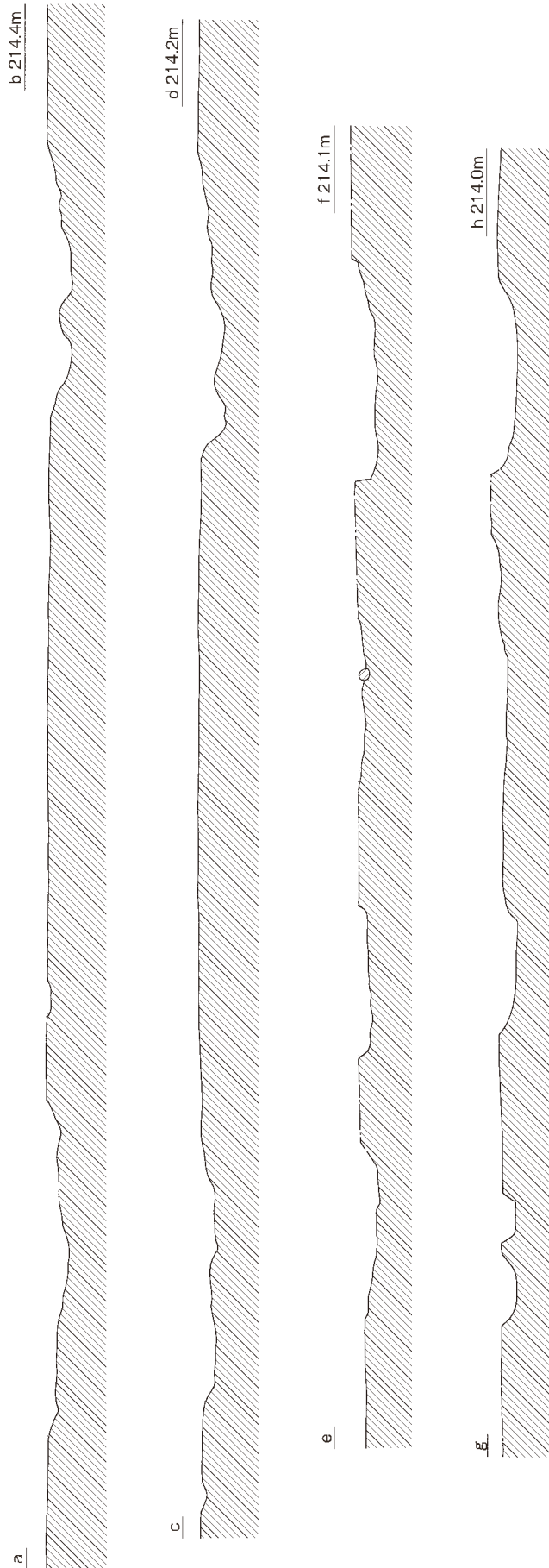
第336図 道路遺構断面② (1/60)

れた状況を呈している。また埋土の状況からは、側溝1・2ともに滞水や流水が認められるような所見はなく、道路機能時において側溝に常時水はなく、降雨時等にのみ水が流れていたのではないかとと思われる。

第336図のI-J、K-L間の道路遺構断面図からも、側溝1・2の埋土は大きく上層・下層の2層に分かれるが下層の断面形をみると、両側溝とも底部に2つのピークがあり、新旧の2条の溝が流走していたと考えられる。また、側溝1では下層の第16層を切る形で第15層が入っていて、側溝をある時期に再掘削した痕跡と捉えられる。この再掘削は両側溝内側肩間の幅、すなわち路面幅を減ずる形で行われており、その後側溝は人為的に埋め戻され、幅広のやや浅い形態でたわみ状に残っていくが、12世紀頃には完全に埋没していたものと思われる。これらの状況から、側溝1・2で構成される道路遺構は3段階にわたって変化していったものと考えられるが、その変化を段階別に以下に整理する。第1段階は最初に側溝が掘削された段階で、側溝1・2の外側のピークに対応する溝である。側溝間の心々距離は880~900cm。第2段階では第1段階の溝を埋め戻し、内側に幅を減ずる形で



第337図 側溝1・2出土遺物 (1/4・1/2)



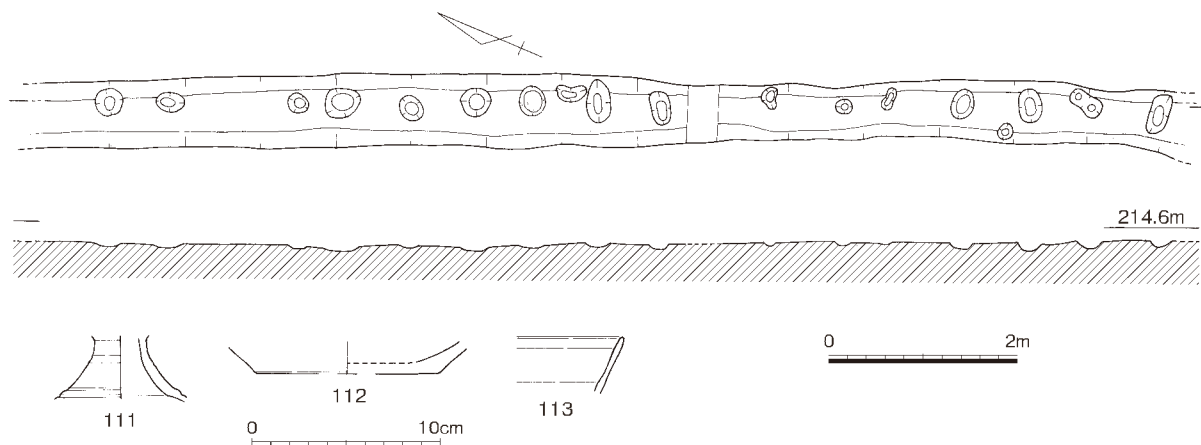
第338図 道路遺構エレベーション (1/60)

再掘削している。心々距離は720~750cm。第3段階では、検出された側溝の下層部分が埋め戻されている状態で、幅広の浅い側溝で構成されている。心々距離は800~940cmとなる。

なお、側溝1・2間の路面にあたる箇所については、いずれの場所でも中世包含層を除去した段階で基盤層を検出しており、硬化部分や礫敷き等の路面上部の構造は残存していなかった。また、側溝1・2の埋土中からも石や礫等は検出されなかった。

側溝より出土した遺物は、道路遺構としての性格を反映してか、ほとんどなかった。側溝1からは、古墳時代中期後半~後期前半の碧玉製の管玉S15と、細片で図示できなかったが、白磁片が出土しており、側溝2からは古墳時代後期の須恵器横瓶110が出土している。管玉や須恵器は、人為的に埋め戻された側溝埋土下層からの出土であり、混入した可能性が高い。一方、白磁片は側溝1の埋土上層から出土しており、側溝の埋没時期を示すものと思われる。

また、道路遺構に沿って並木の植樹がなされていたかを確認するために側溝1・2埋土の花粉分析を行ったが、植栽樹が樹立していたような結果は得られなかった。(石田)



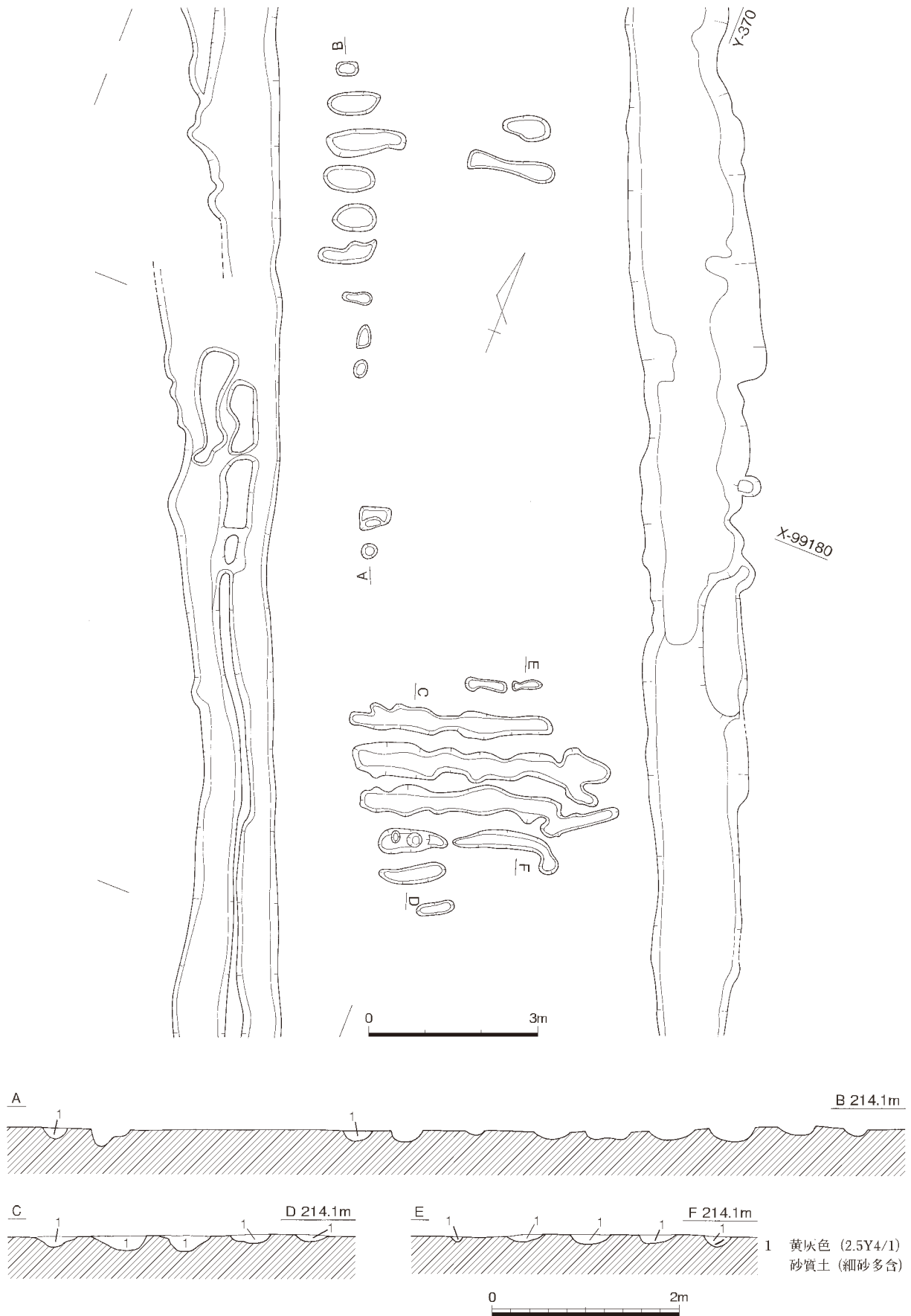
第339図 側溝3 (1/80)・出土遺物 (1/4)

側溝3 (第333～335・339図、図版51-1～3)

側溝1の30～60cm内側をほぼ平行して走る溝である。検出面での幅は30～40cm、深さは最大でも10cmに満たない。断面形は浅い皿状を呈する。埋土は色調の明るい褐灰色粘質土で細かい砂礫を多く含むもので、側溝1・2とは異質でむしろ溝2に類似するが、検出状況から道路遺構に伴うと考えた。また、4区北半部では底面に深さ数cmの浅い円～楕円形の窪みが連なる様子が確認された。窪みは4区内では比較的密に並ぶが、平成17年度調査区では一部に認められるのみである。埋土中から須恵器・土師器の小片が少量出土した。111は須恵器の高杯脚部で、7世紀後半～8世紀前半に属すると思われる。112は土師器の杯、113は勝間田焼の碗と考えられ、おおむね古代末であろうか。側溝3は、側溝1・2に比べ著しく小規模であり、東側に対応する側溝がなく、底面に性格不詳の窪み列が一部のみ設けられるなど不可解な点が多い。側溝1・2より後出すると思われるが、その具体的な性格については不明とせざるをえない。(岡本泰)

波板状凹凸面 (第334・338・340図、図版50)

調査区南側の2区部分、道路遺構の南端部で長さ15.3mの範囲にわたって側溝1・2間に挟まれる形で検出した。途中空開部を挟み、南北の2か所にまとまる形で検出している。南側の一群は9条からなる溝状のもので構成されている。検出時の長さ50～460cm、幅は場所によっては6～54cmあるが、大部分は25cm程度であった。深さは6～18cmを測り、断面形は皿状を呈していた。埋土はいずれも単層で、細砂混じりの黄灰色砂質土であった。断面観察からは丸太等の痕跡や枝葉等の敷設を示す痕跡も認められず出土遺物もなかった。北側の波板状凹凸面は、楕円形や不整円形のものが中心に構成されている。これらは上部が削平され底部付近のみが残存しているものも含まれていると考えられるが、南側の一群とは異なった形態をしている。検出時の長さは30～105cm、幅は15～30cm、深さは9～18cmをそれぞれ測る。埋土は南側で検出された波板状凹凸面と同じく、細砂混じりの黄灰色砂質土で、出土遺物はなかった。これらの波板状凹凸面の底面の高さは、道路側溝1・2底面の高さとはほぼ同じであった。波板状凹凸面を検出した箇所は、基盤層が粘質で水捌けも悪く、調査中も降雨後は地盤がゆるい地点であった。このような状況は道路遺構が機能していた際にも同様であったと考えられ、今回検出した波板状凹凸面は、軟弱な地盤上に構築された道路遺構を補強するためにつくられた施設であると考えられる。そしてその機能としては路面の補強や排水を目的とした路床構造の一部であったと思われる。(石田)

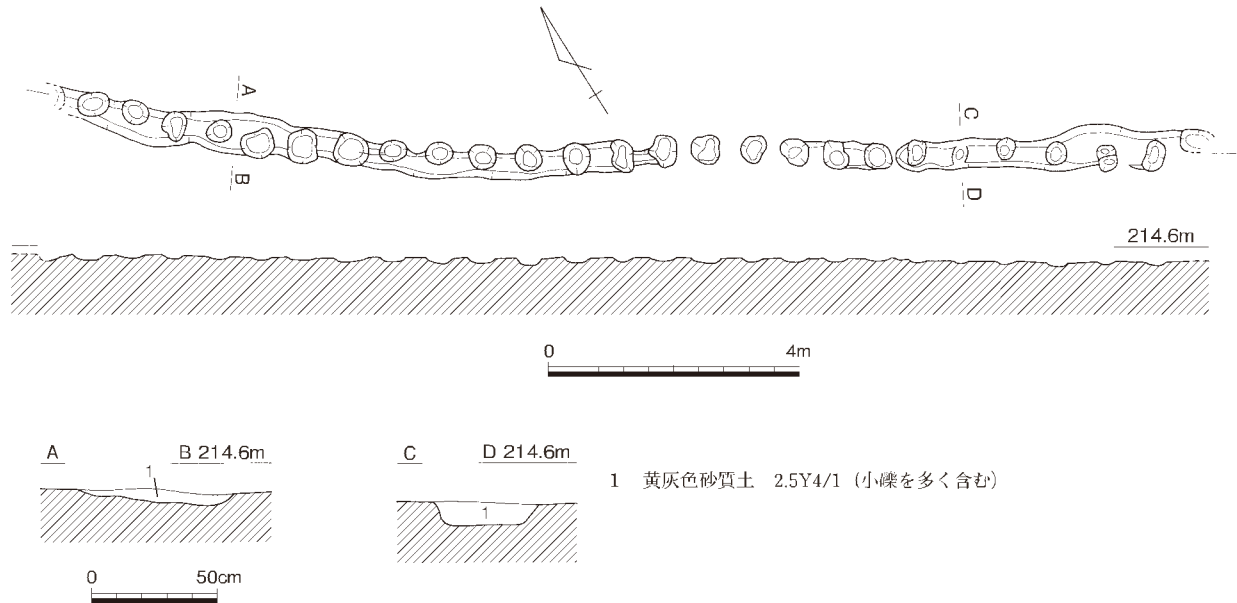


第340図 波板状凹凸面 (1/100・1/60)

### 3 溝

#### 溝2 (第333・341図、図版51-4)

調査区北端近くに位置し、北西から南東に向かって約33mにわたり検出された溝である。図では不鮮明だが、北西端部は道路遺構の側溝1に切られ、側溝に先行することが明らかである。幅は最大69cm、深さは5cmを測る。底面には、心々距離にして約70cm間隔で不整円～楕円形の窪みが連続し、削平を受けた部分では溝が消失して窪みのみが連なる。その構造から、流水を目的とする溝とは考えにくい。遺物はないが、道路側溝に先行することから、大まかに古代の範囲と捉えている。(岡本泰)

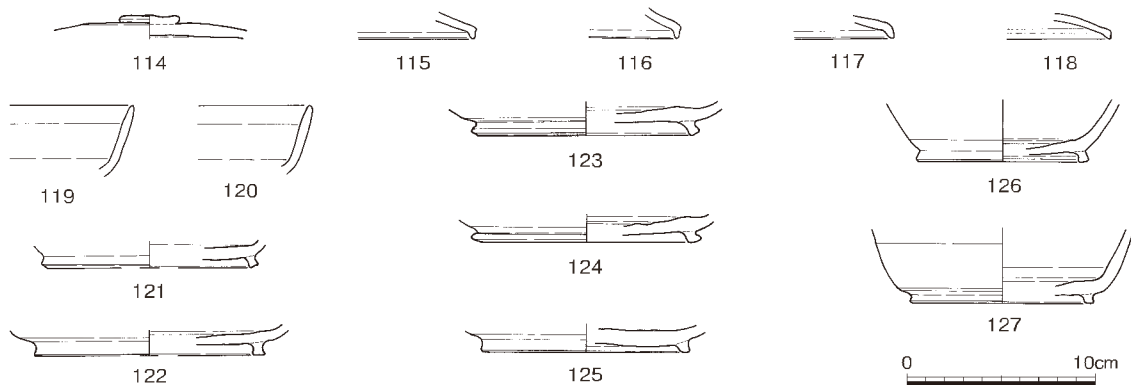


第341図 溝2 (1/120・1/30)

### 4 遺構に伴わない遺物

#### 須恵器 (第342図)

中世包含層の中から、奈良～平安時代の遺物が少量出土した。ここでは奈良時代の須恵器のうち、比較的状態のよいものを図示した。114～118は蓋の破片である。119・120は有台杯の口縁部から体部にかけての破片である。121～127は有台杯の体部から底部にかけての破片である。以上の須恵器は多少の個体差が認められるが、8世紀前葉～中葉にかけての時期と判断される。(福田)



第342図 遺構に伴わない遺物 (1/4)

## 第4節 中・近世の遺構・遺物

### 1 概要

中世に比定した遺構には、掘立柱建物、土壇、溝および柱穴群などがある。遺構の分布は、調査区北部と南部の大きく2群にまとめられ、中央部では希薄である。ただし、2区南西部や4区南東部などに群在するピット、落ち込み類には形態の不定形なものも多く、遺物の出土も稀で、大部分は風倒木痕など遺構以外のものと考えている。図ではこれらの多くを中世に帰属させているが、上記のような問題点の存在を断っておきたい。

以上を踏まえ、改めて確実な遺構に着目すると、主として4区北西部と1区西半部にその分布が認められる。特に4区北西部では、中世の掘立柱建物が1棟検出され、調査区西側には当時期の建物群が存在すると予想される。1区でも、建物は明確でないものの遺物を伴う土壇、柱穴が若干検出され、やはり集落域の一端を検出したとみてよいであろう。

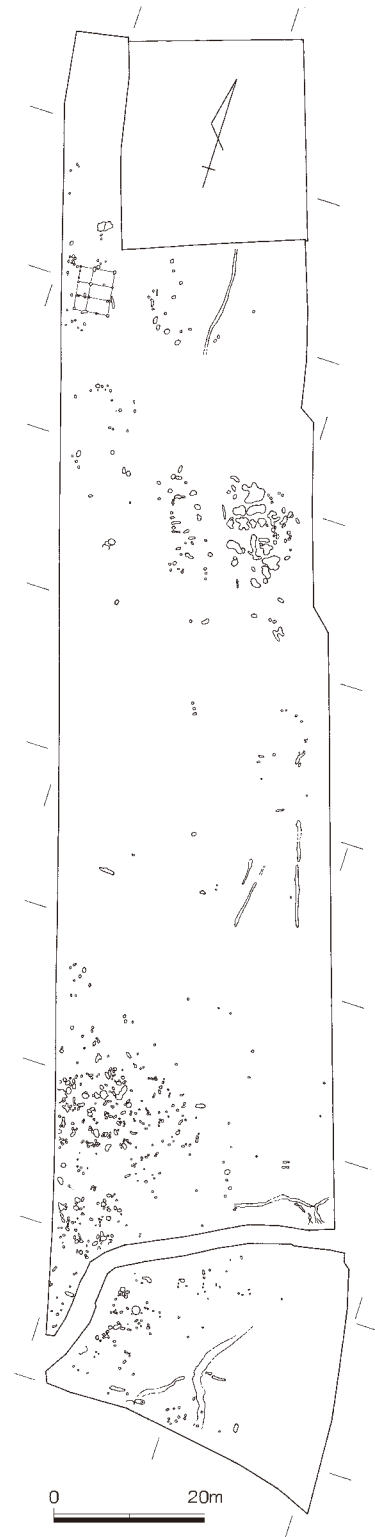
これらの遺構の上面には、調査区内の広範囲にわたって包含層が堆積している。現地での観察によれば、包含層内には耕作による土壌の攪乱がみられることから、集落の廃絶後、周辺の耕地化が進行した様子が窺われる。

近世に至ると遺構は激減し、若干の土壇を検出したのみである。調査地の大部分は水田域となり、現在と同様の景観が広がっていたと考えられる。なお、出土遺物のない土壇や溝については個別の説明を割愛している。

(岡本泰)



写真32 掘立柱建物調査風景 (南西から)



第343図 中・近世遺構全体図  
(1/1,000)



第344図 中・近世主要遺構部分  
配置図① (1/400)



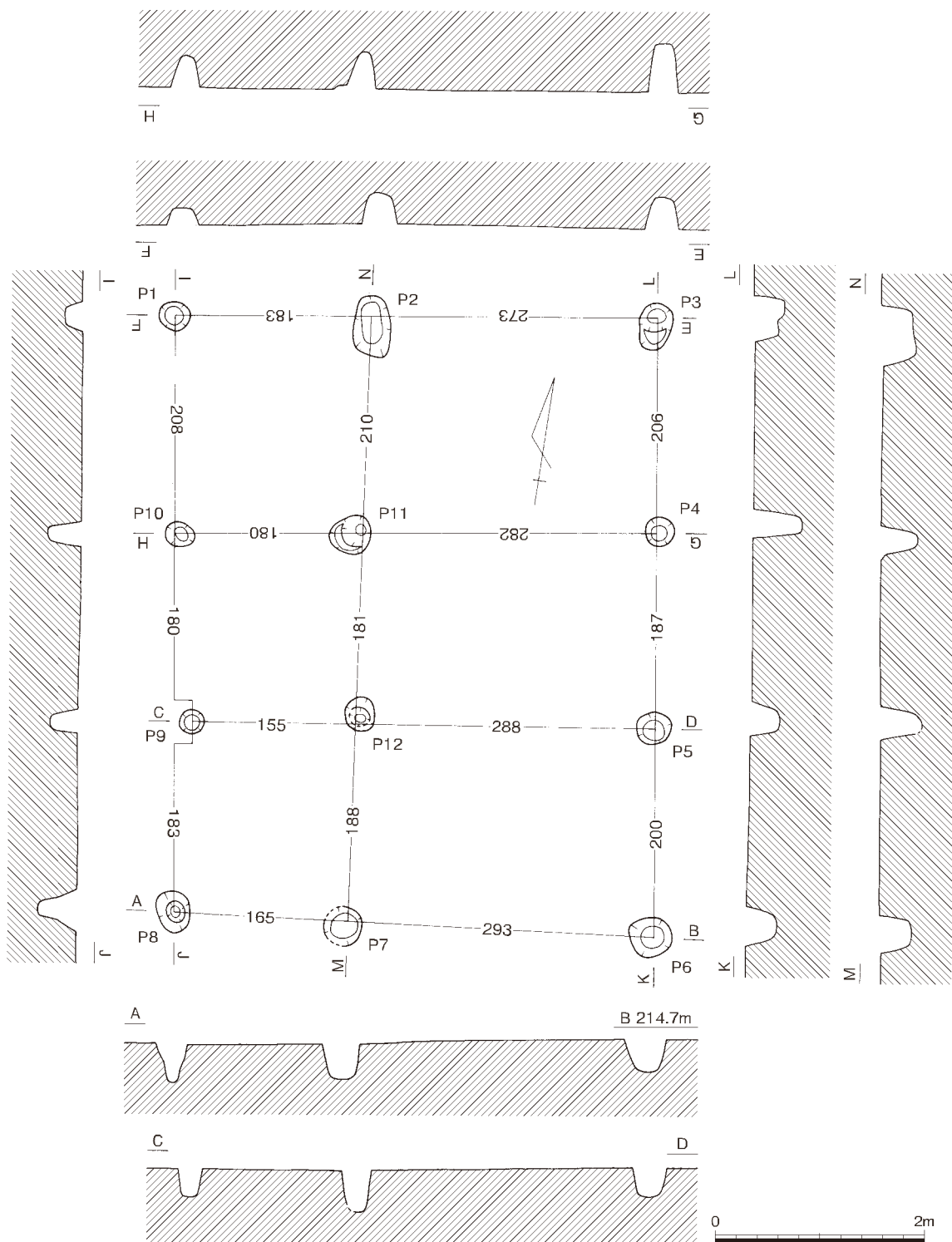
第345図 中・近世主要遺構部分配置図②  
(1/400)



## 2 掘立柱建物

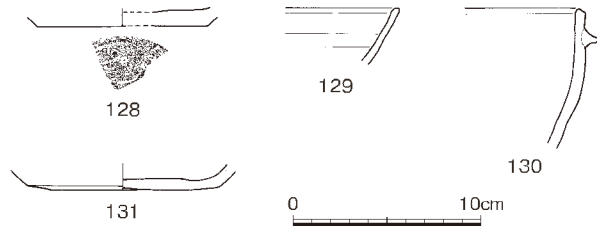
掘立柱建物（第344・346・347図、写真32、図版52-1）

4区の北西部、道路遺構の西側に位置する。周辺に分布する柱穴は、他地点に比べて整った形状を呈し、遺物の出土も多く、この一帯、特に調査区の西側に当時期の建物群が存在したとみられる。掘



第346図 掘立柱建物 (1/60)

立柱建物は、桁行593cm、梁間458cmを測る3×2間の建物であり、面積は26.1㎡である。西側1間分は柱間が狭く、西辺の柱穴はやや規模が小さく並びも不揃いなことから、この部分は庇になる可能性が考えられる。柱穴の深さは最大で45cmに達するものがあるなど残存状態は良好であったが、各



第347図 掘立柱建物出土遺物 (1/4)

柱穴とも柱痕・柱根は確認できなかった。また、底面に根石や礎板を伴うものはみられなかった。各柱穴から土器片等の遺物が出土。図示した130はP 2から出土した瓦質の鍋で、P 4からも同一個体と思われる破片が出土した。出土遺物から建物の時期は13～14世紀代と思われる。(岡本泰)

### 3 土壇

#### 土壇 2 (第345・348図)

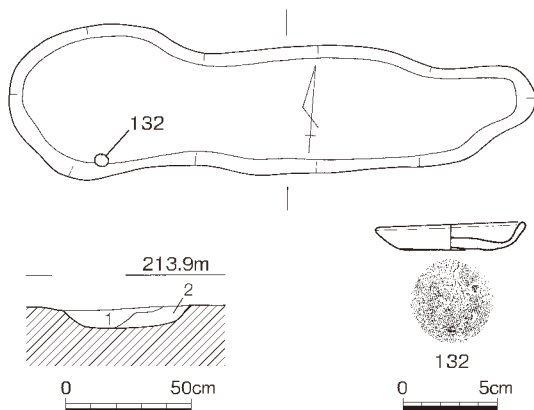
1区の南端付近に位置し、長さ218cm、最大幅66cm、深さ7cmを測る、主軸を東西に向けた浅い溝状の土壇である。削平を受けた溝の底部が残存したものの可能性がある。底面直上から出土した132は完形の勝間田焼の小皿である。土壇の時期は13世紀頃に比定される。(岡本泰)

#### 土壇 3 (第345・349図、図版52-2)

1区の南壁沿いで検出され、土壇 4の西隣に位置する。南半が側溝に切られるため全体の規模、形状は不明である。検出面からの深さは3cmとごく浅い。底面よりも少し浮いた位置に平らな角礫が多数、ほぼ水平に置かれていたが遺物は皆無である。検出状況から中世の遺構と考えられる。(岡本泰)

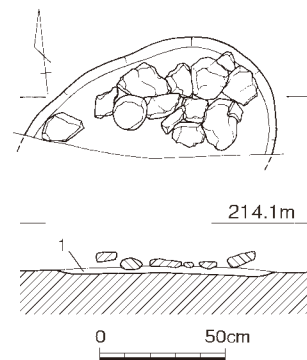
#### 土壇 4 (第345・350図)

土壇 3の東隣に位置する、ややいびつな楕円形の土壇である。長径127cm、短径64cmを測り、検出面からの深さは最大で7cmと浅い。底面に柱穴があるが、本来この土壇に伴うものかは不明である。出土遺物は他の遺構に比べて多く、土師器、勝間田焼、東播系須恵器などが出土している。133～136は土師器の小皿である。137は残りが悪いが、勝間田焼の碗と思われる。138は東播系須恵器の鉢である。139は器形からみて混入品と考えられる土師器の甕である。140～142は土師器の鍋で、いずれも



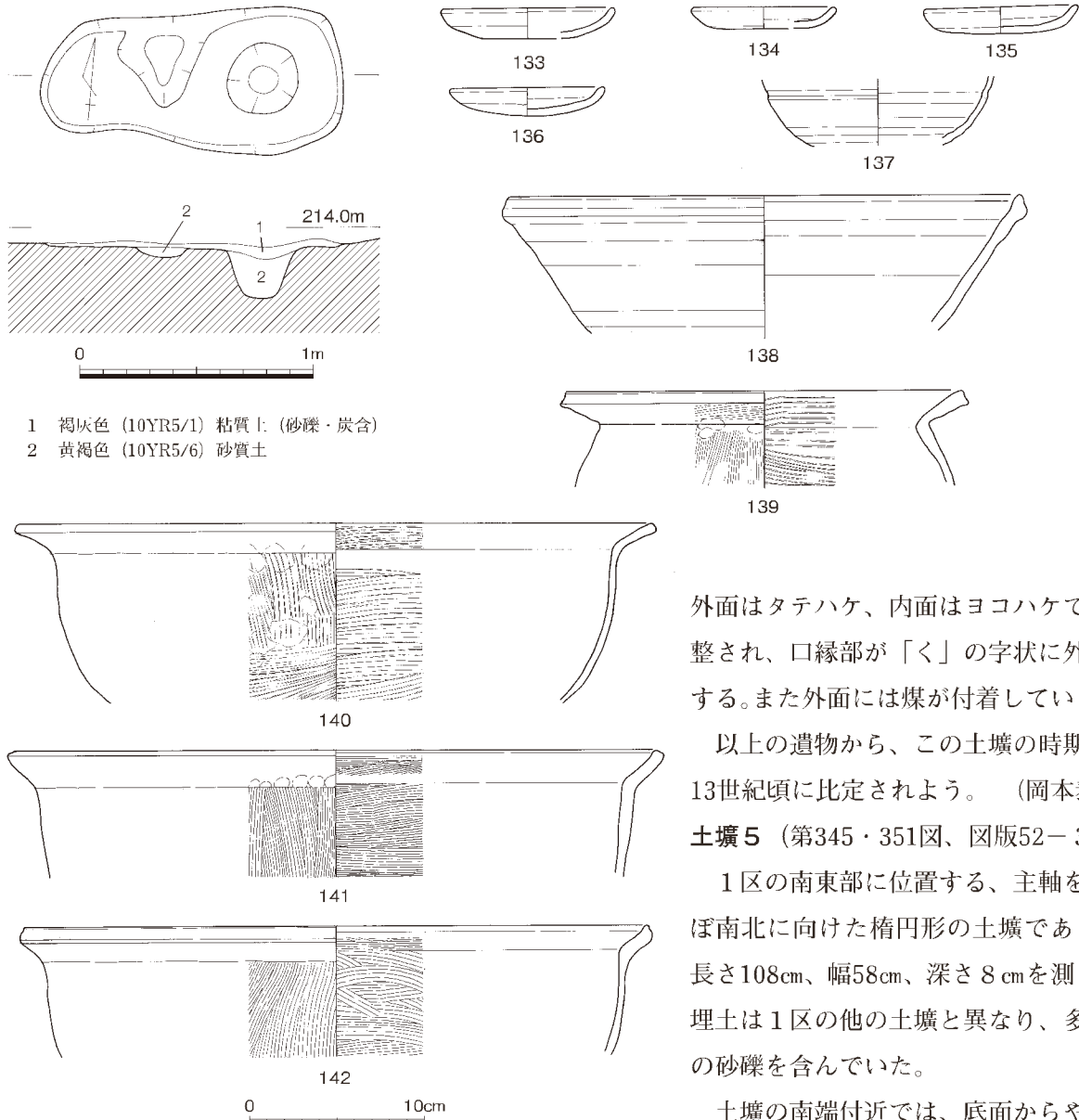
1 にぶい黄褐色 (10YR4/3) 砂質土 2 灰黄褐色 (10YR4/2) 粘性砂質土

第348図 土壇 2 (1/30)・出土遺物 (1/4)



1 褐灰色 (10YR4/1) 粘質土 (礫多含)

第349図 土壇 3 (1/30)



1 褐灰色 (10YR5/1) 粘質土 (砂礫・炭含)  
2 黄褐色 (10YR5/6) 砂質土

第350図 土壌 4 (1/30)・出土遺物 (1/4)

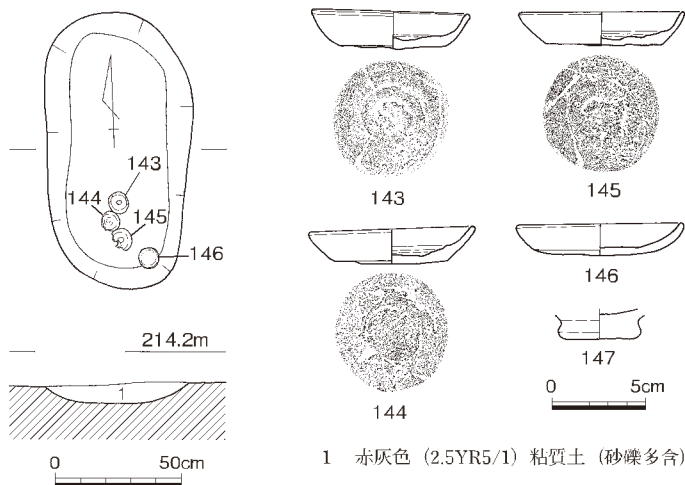
外面はタテハケ、内面はヨコハケで調整され、口縁部が「く」の字状に外反する。また外面には煤が付着している。

以上の遺物から、この土壌の時期は13世紀頃に比定されよう。(岡本泰) 土壌5 (第345・351図、図版52-3)

1区の南東部に位置する、主軸をほぼ南北に向けた楕円形の土壌である。長さ108cm、幅58cm、深さ8cmを測る。埋土は1区の他の土壌と異なり、多量の砂礫を含んでいた。

土壌の南端付近では、底面からやや浮いた位置に、ほぼ完形の土師器の小皿4点が見込みを上に向け、並べられたような状態で出土している。一番南の146は内外面ともナデで指頭圧痕が残るが、他の3点はいずれも外面底部に回転ヘラ切り、内面に強いヨコナデ痕が残る。147は土師器の底部の厚い小皿である。

土壌の時期は、以上の出土遺物により14世紀頃に比定される。土壌の性格としては墓などの可能性も考えられる。(岡本泰)



1 赤灰色 (2.5YR5/1) 粘質土 (砂礫多含)

第351図 土壌 5 (1/30)・出土遺物 (1/4)

#### 4 遺構に伴わない遺物

ここでは、表土・包含層内の出土遺物や側溝掘削時の遊離遺物などをまとめて掲載する。包含層からは多量の遺物が出土し、各器種を幅広く含むことから貴重な資料と考えられる。包含層遺物の時期は12世紀から15世紀代までで、表土内の遺物には江戸時代まで降るものもみられる。(岡本泰)

##### 勝間田焼 (第352・353図)

勝間田焼の生産地である勝田郡勝央町の勝間田平野をとりまく丘陵地帯から近いこともあって、出土した勝間田焼は、いずれも破片であるものの個体数が極めて多い。

148～173は碗の口縁部片で、端部に重ね焼きによる黒色部分があるものが多い。174～208は碗の底部片で、外面に糸切り痕跡が存在する。外面の体部と底部の境目は、器表面が湾曲するだけで明瞭な区分がないものが多く、緩やかに移行するもの206～208も認められる。209～223は貼り付け高台をもつ碗の底部片である。高台は斜め下方に張り出すものが多いが、垂直になるもの214・221、断面形が丸いもの222・223も存在する。224～228は小形の碗である。体部から口縁部にかけての破片224・225は、口縁端部はわずかに外傾して丸く仕上げている。底部片226～228の外面には糸切り痕跡が存在する。これらの小形の碗は、形態や成形手法が碗と同じである。229～234は小皿で、ロクロによって成形を行い、底面には糸切り痕跡が認められる。口縁端部は丸く仕上げられ、内湾するもの229、斜め上方へ直線的に立ち上がるもの230・231・234、わずかに外傾するもの232・233が存在する。これらは大多数が1100～1200年代に属し、一部がその前後に生産されたと思われる。

235～237は壺の口縁部である。口縁端部は、外面に面を有するもの235・236と丸く仕上げるもの237がある。238は甕の口縁部から体部にかけての破片で、頸部から胴部は平行タタキ痕跡が認められる。242は底に近い部分で、外面全体に平行タタキ痕跡を有する。この238と242は平行タタキ痕跡の存在から、初期の時期の製品とみられる。239～241は壺または甕の胴部片である。

243～246は鉢の口縁部と底部である。底部の内面はどちらも全体が平滑で、長期間使用されたことが窺われる。246は大形のものである。(福田)

##### 東播系須恵器 (第354図)

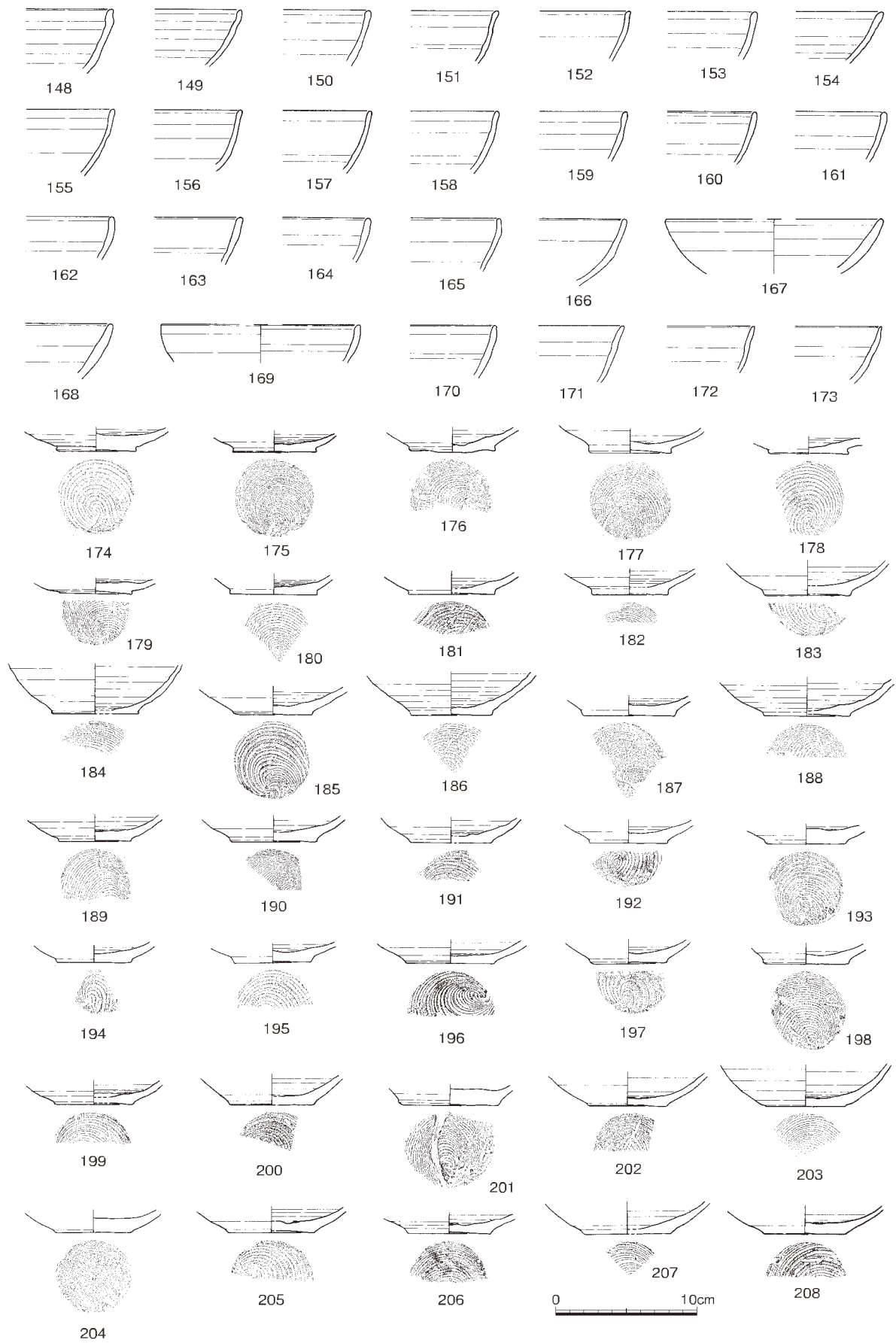
中町B遺跡は、神戸市や明石市と比較的近いこともあり、東播系須恵器が少なからず出土した。

247～260は鉢の口縁部である。口縁端部は、中央部がわずかに窪む面をもつもの247・248、上方へ拡張するもの249～252、上下両方に拡張するもの253～257、肥厚して丸く仕上げるもの258・259、肥厚して「く」の字状に屈曲するもの260が存在する。これらの形態変化は、12世紀前葉～13世紀前葉にかけて認められる。261～263は鉢の底部で、外面底部には藁などが付着した痕跡が残存する。264は甕の口縁部で、端部は器壁が薄くなって張り出し、上位と外側に面が存在する。(福田)

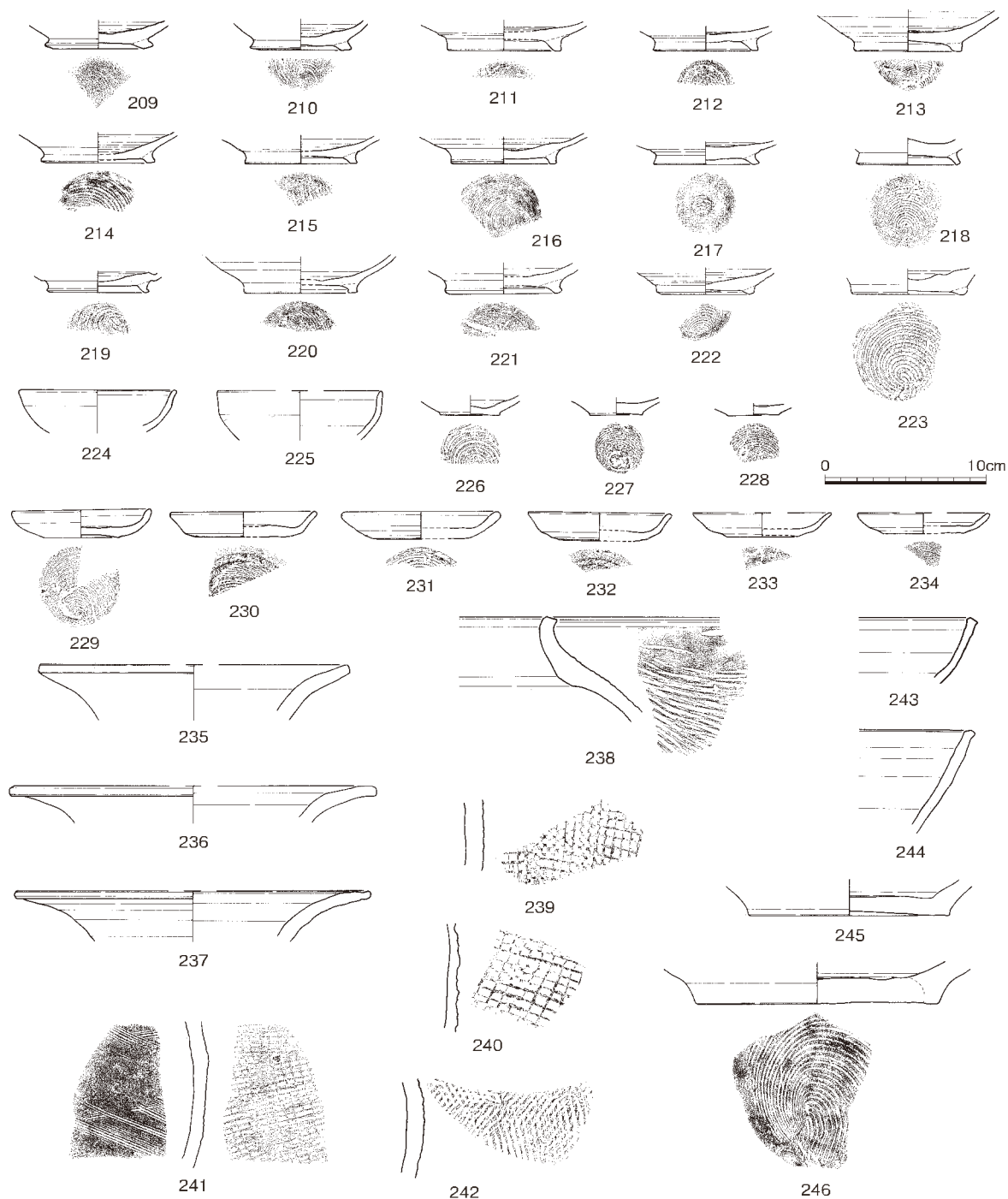
##### 古瀬戸・生産地不明の陶器 (第354図)

265は古瀬戸の卸皿の底部破片である。内面には格子目状のヘラ描沈線が施され、外面には糸切り痕跡が明瞭に認められる。内外面とも煤が付着しているので、全体が黒くなっている。

266の小形台付壺と思われる破片と268の甕の破片は、古代末の須恵器かもしれない。267の杯は、口縁端部の器壁が薄くなって丸く仕上げ、外面底部には糸切り痕跡が認められる。269～271の甕は、「く」の字状に外反した口縁端部に面が存在する。外面の胴部には右下がりの平行タタキ痕跡が認められる。272の鉢の口縁部は、わずかに内湾して斜め上方へ立ち上がり、端部の内側が短く突出するが、



第352図 遺構に伴わない遺物① (1/4)

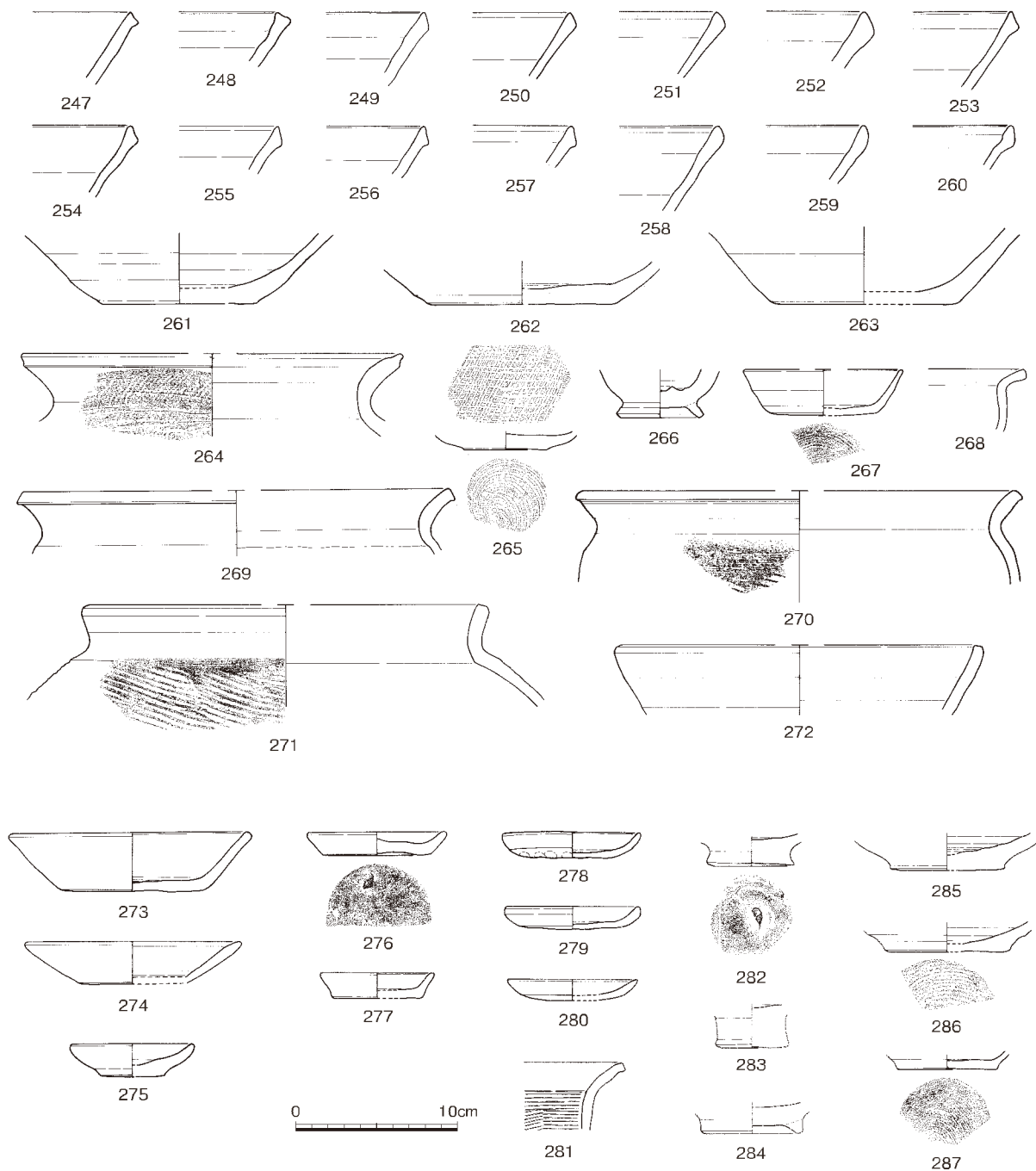


第353図 遺構に伴わない遺物② (1/4)

外側は丸く仕上げる。内外面の器表面は滑らかで、凹凸はほとんど認められない。 (福田)

土師器 (第354図)

中町B遺跡から出土した土師器は少ない。273・274は口径が大きい杯である。外面の底部は回転ヘラ切りの痕跡が存在したと思われる。275～280は小皿である。275の底部には回転ヘラケズリと推定される痕跡がかすかに残存している。276・277は外面の底部が平坦で、どちらも回転ヘラ切り痕跡を有する。278～280の外面底部は、全体が丸くなって指頭圧痕が認められる。282・283は柱状高台の皿である。安定した底部の外面には、回転ヘラ切り痕跡が存在している。



第354図 遺構に伴わない遺物③ (1/4)

284は高台を有する底部破片で、おそらく杯の形態になると考える。内外面とも全体にヨコナデを施し、外面底部に回転ヘラ切り痕跡や糸切り痕跡は認められない。285～287は法量に相違があるものの、いずれも杯と思われる。ロクロを使用して成形を行っており、外面底部に回転ヘラ切り痕跡285と糸切り痕跡286・287が存在する。281は鍋の口縁部から胴部上位にかけての破片である。（福田）

中国産磁器 (第355図)

中国産磁器は、太宰府市教育委員会の分類（山本2000）と上田分類（上田1982）を参考にした。288は青白磁の合子の身で、推定口径4.4cmを測る。外面には外型による小蓮弁状の文様がみられる。

289～297の白磁碗の口縁部は、端部が外側に肥厚して玉縁を有する。290の口縁部は細くて小さい玉縁であるため、Ⅱ-1類かもしれない。291～293の玉縁は、290よりも幅がやや広く、Ⅲ-1類に分類されよう。294～297の口縁端部は、折り返して断面形が三角形に近い玉縁に仕上げているので、Ⅳ-1類に属すると思われる。298の体部外面の下半に釉が認められない点も、Ⅳ-1類の特徴を示している。300～304は白磁碗Ⅳ-1類の底部である。見込みに沈圈線を巡らせるか否かによってさらに細かく分類され、300～302がⅣ-1a類、303・304がⅣ-1b類に属する。305はⅣ-4a類の白磁碗の小破片である。口縁端部を外側に摘み出すタイプで、体部内面の上位に1条の細沈線が巡らされている。306はⅦ-1c類の白磁皿と思われる。見込み部分には沈圈線が巡らされ、平行する櫛描きの文様が施される。307・308は白磁皿Ⅸ-1a類の破片である。口縁端部は斜め上方に張り出し、口禿げである。

309は龍泉窯系の青磁碗Ⅰ-4a類の体部下半である。二又片刀または櫛刀によって内面を5分割し、その中に飛雲文を描いていると思われる。310～312は龍泉窯系青磁碗Ⅱ-b類・上田分類B-Ⅰ類に属し、外面に鎬蓮弁文が認められる。313と314は外面に片彫蓮弁文を描いているが、鎬がないので龍泉窯系青磁碗Ⅱ-a類・上田分類B-Ⅰ'類である。315は体部外面に鎬蓮弁文を有するが、蓮弁文そのものの幅が狭く龍泉窯系青磁碗Ⅲ-2c類・上田分類A-Ⅰ類と考える。316は内面に印花文を有する底部片で、龍泉窯系青磁碗Ⅳ-Ⅰ類・上田分類D-Ⅰ類に属すると思われる。胎土は灰色で粗く、高台の削り出しも粗雑である。317～319は龍泉窯系青磁碗Ⅳ類・上田分類D-Ⅱ類の口縁部から体部にかけての破片で、口縁端部が外反して丸く仕上げている。320は器表面が灰白色なので、白磁碗と錯覚する個体であるが、二次焼成を受けて変色した龍泉窯系青磁碗Ⅳ類・上田分類D-Ⅱ類の破片と考えた。321はやや大形の青磁碗で、上田分類のE類に属する。口縁部はほぼ直立して立ち上がり、端部は丸く仕上げている。322は口縁部が内湾して立ち上がる上田分類のE類の青磁碗である。323・324は龍泉窯系青磁碗Ⅳ類・上田分類D類の底部破片である。325は、龍泉窯系青磁碗Ⅰ類の破片で、高台内部の削りが浅く肉厚の底部である。326は龍泉窯系青磁碗Ⅳ類・上田分類D類の体部から底部にかけての破片である。327は龍泉窯系青磁杯Ⅲ-3a類の底部であろう。外面の体部下位の髙台近くには、浅い1条の沈線が巡らされる。328・329も龍泉窯系青磁杯Ⅲ-3a類の口縁部と底部と思われる。口縁部は斜め上方に屈曲させて上面に窪みを有し、端部は摘み上げて丸く仕上げている。330は同安窯系青磁碗Ⅰ-1b類である。内面の口縁部と体部の境界部分に1条の沈線を巡らせ、その下位に略化した花文を描き、外面の体部には縦方向の細かい櫛目文を施している。

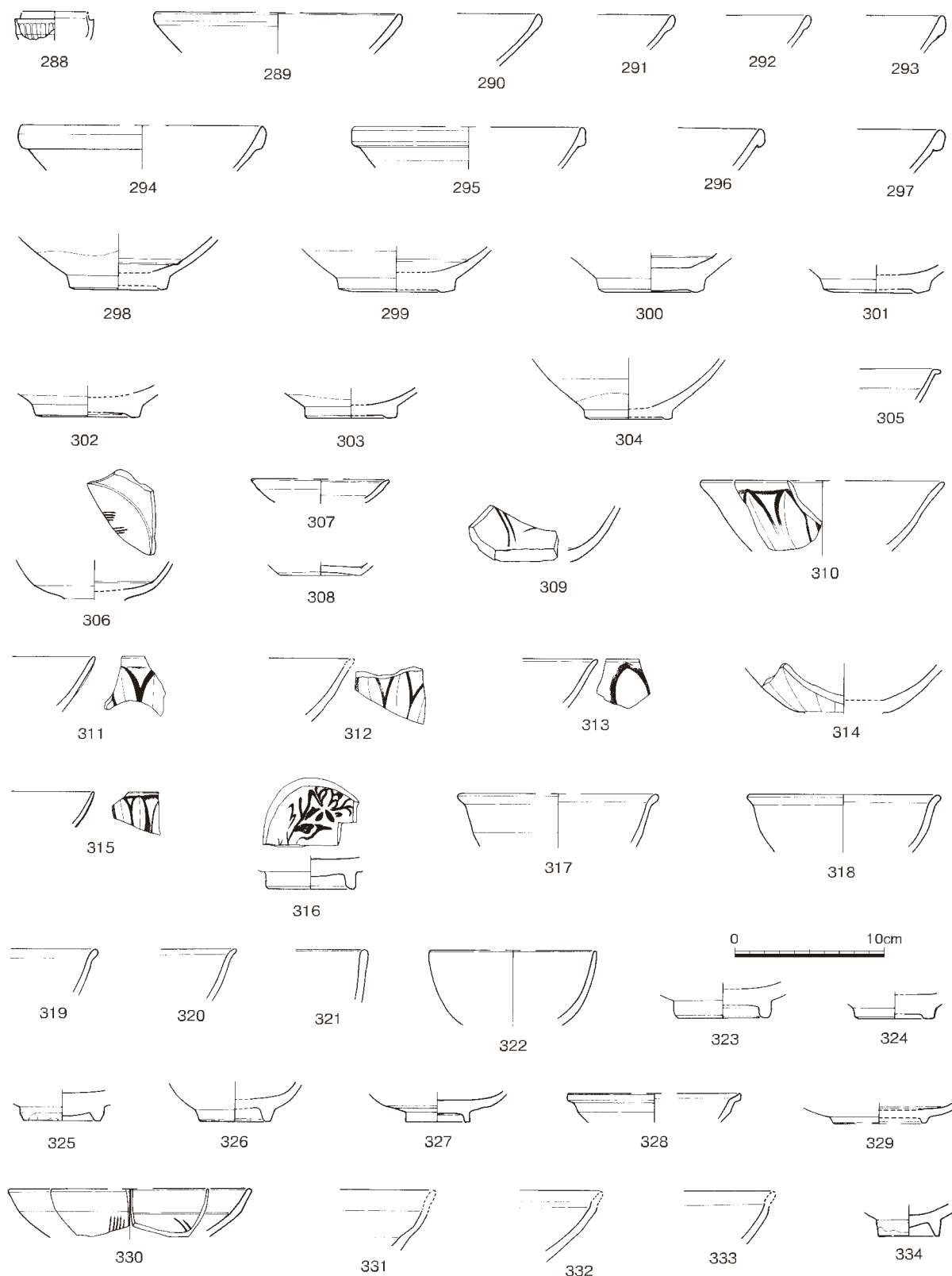
331～333は黒釉磁（天目）碗の口縁部破片である。いずれも口縁端部を欠損しているが、捻り返して斜め上方に立ち上がると思われ、釉色は黒褐色または銹茶色である。334は小形の青磁碗の底部と考える。釉調はこれまでに説明した磁器とは異なって光沢が強く、釉色は明緑灰色である。よってこの個体は、景德鎮窯で生産された新しい時期の磁器ではなかろうか。（福田）

#### 備前焼（第356図）

備前焼については、山崎古窯跡の報告書に掲載されている「消費地出土備前焼型式分類試案」（重根2002）を参考にしながら、間壁編年（間壁1966ほか）と乗岡編年（乗岡2000）を併用した。

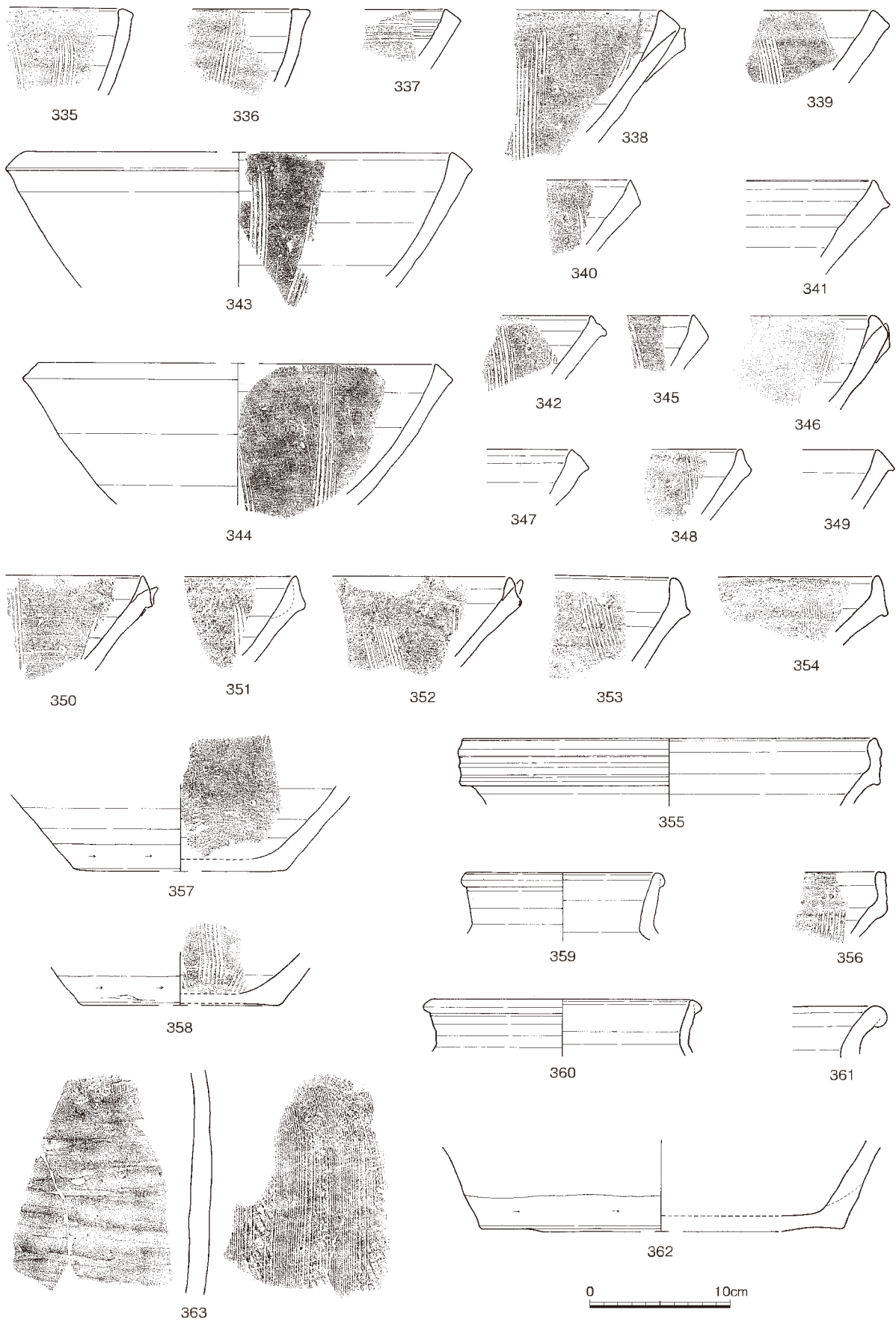
挿鉢はいずれも小破片で、口縁部の傾きは曖昧なままで図示した。335～338の口縁端部上面は平坦であるが、端部の外側がやや丸くなるもの335・336と角を有するもの337・338が認められる。これら4点は、口縁部の断面形が矩形から菱形に変化し、端部が肥厚するようになる段階のもので、色調は灰色または灰褐色が大多数を占める。このような形態や焼成・色調などから、335～338は重根Ⅲ期に属し、





第355図 遺構に伴わない遺物④ (1/4)

間壁Ⅲ期・乗岡中世3 a期の14世紀前葉の時期であろう。339・340の口縁端部は、前述の4点よりも上方へ突出し、より拡張した形態を呈する。これらは重根ⅣA-1期のもので、間壁Ⅲ期・乗岡中世3 a期の14世紀前葉～中葉になる。341～345の口縁端部は、上端にも下端にも短く突出する。



第356図 遺構に伴わない遺物⑤ (1/4)

したがってこれらは重根ⅣA-1期に属し、間壁ⅣA期・乗岡中世3b期の14世紀中葉と考える。**346**~**351**は、端部が上方へ突出して断面形が三角形になる。これらは重根ⅣA-2期になり、間壁ⅣA期・乗岡中世3b期の14世紀後葉と考える。**348**と**349**の口縁端部は、上方のほか下方へも突出し、内面に明瞭な屈曲部を有するもの**350**も存在する。この2点は重根ⅣB-1期に属し、間壁ⅢB期・乗岡中世4a期の15世紀前葉であろう。**352**と**353**の破片は、口縁端部の立ち上がりが顕著になって、内面の屈曲部の位置が下がっている。この形態を有する挿鉢は重根ⅣB-2期のもので、間壁ⅣB期・乗岡中世5a期の15世紀後葉の時期になる。**353**と**354**の口縁部は、均一な器壁の厚さで上方へ立ち上がり、先端部がわずかに尖るもの**353**も出現し、口縁部外面には凹線が認められる。この2点は重根Ⅴ期に属し、間壁Ⅴ期・乗岡中世6a期の16世紀前葉の時期であろう。**357**と**358**は体部下半から底部にかけての破片である。**357**の内面は器表面全体が滑らかで、底部周辺の下部には条線が残存しない。

壺で図示できたのは2片だけである。**359**は口径が小さく葉茶壺と考える。**359**・**360**の口縁端部は小さな玉縁状になり、**360**の断面形は扁平である。**359**は重根ⅣA~ⅣB期で、間壁ⅣB期・乗岡中世4期の14世紀後葉~15世紀前葉と思われる。**360**は重根ⅣB期に属し、間壁Ⅳ期・乗岡中世4~5期の15世紀代の時期が推定されるが、小片であるため詳細なことは不明である。

甕は口縁部・体部・底部の3片だけである。**361**の口縁端部は、折り返されて玉縁状になり、内外面とも全体にヨコナデを施す。重根ⅢA期のもので、間壁Ⅲ期・乗岡中世2b期の14世紀前葉の時期である。**362**は体部下位から底部にかけての破片である。**363**は体部の破片で、外面は格子目タタキ痕跡の上面に縦方向の粗いナデを施し、内面は板状工具による横方向のヘラケズリが行われる。

備前焼で図示できるものは少なく、挿鉢は小破片が多いものの、14世紀前葉から15世紀代にかけて途切れることなく存在することが判明した。備前焼の生産地から遠く離れた中国山地に位置するにもかかわらず、各時期の挿鉢が継続して搬入されたことが知られるのである。(福田)

#### 瓦質土器 (第357図)

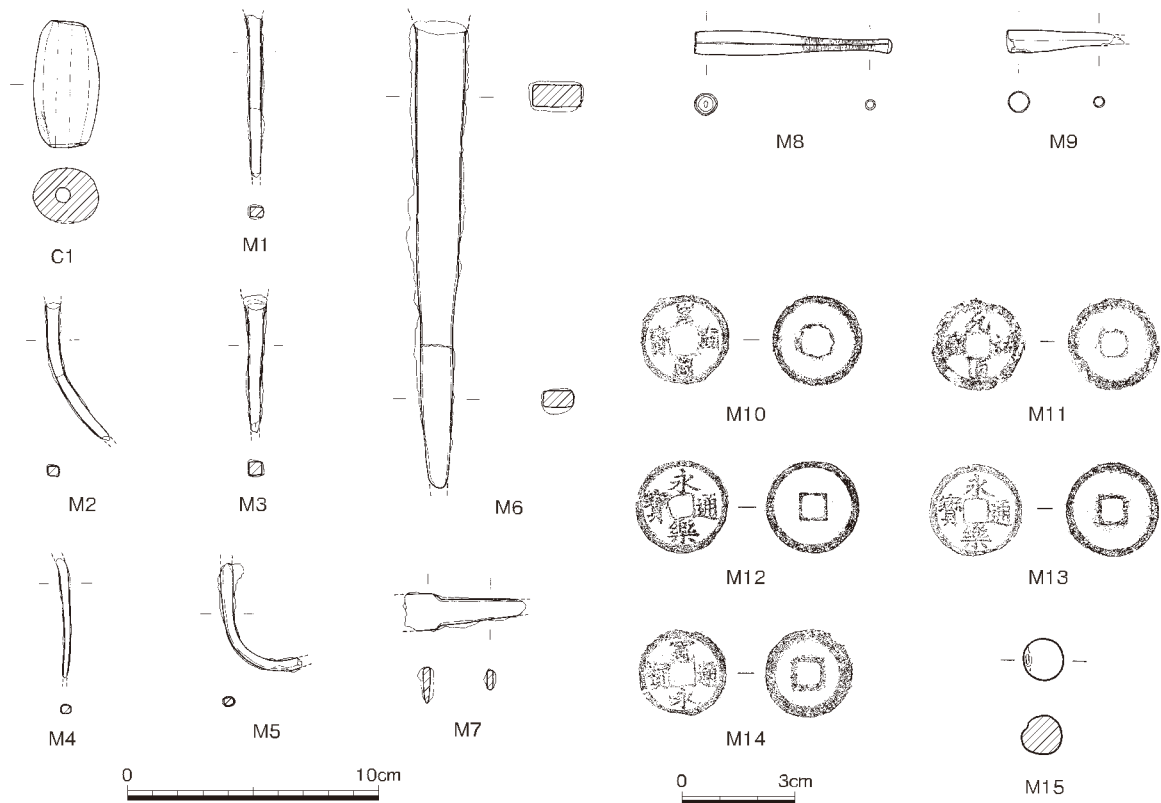
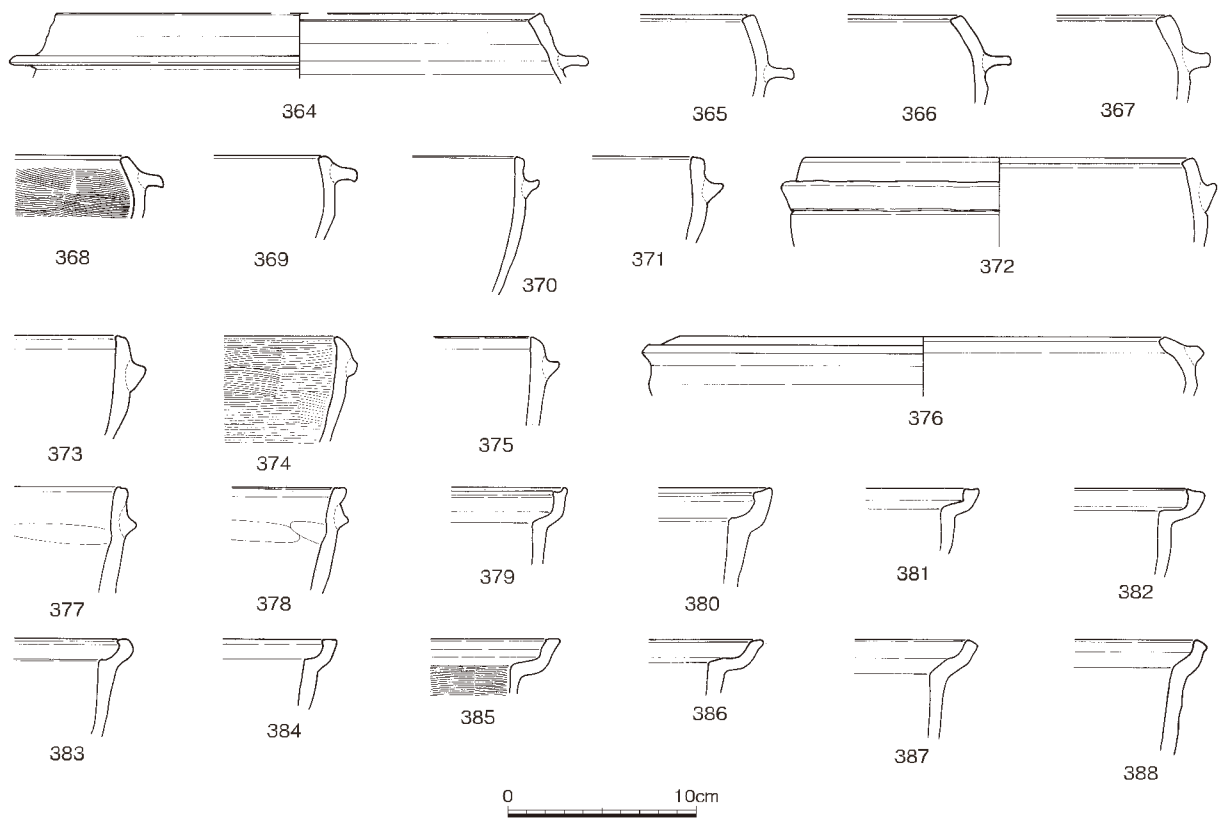
瓦質土器は、いずれも煮炊具の釜と鍋の小破片で、比較的多くの個体数が認められる。

**364**~**369**の外面の口縁部下位には、しっかりした鏝が貼り付けられ、接合部はヨコナデで丁寧に仕上げられるので、釜と思われる。**364**~**367**の口縁部は緩やかに内湾して上方へ立ち上がり、端部の器壁がわずかに肥厚して平坦な面が存在する。また**368**と**369**の口縁部も緩やかに内湾して上方へ立ち上がるが、端部は丸く仕上げられ、鏝が口縁端部に近い位置に貼り付けられている。**370**~**378**にも鏝が存在するが、断面形が三角形に近く突帯状の形態を呈する。また**378**の鏝の端部は斜め上方に張り出し、上位の接合部は滑らかに仕上げるが、下位は貼り付けたままで何も施されず、鏝が形骸化した装飾になっている。したがってこれらは、鍋として使用されたと考える。なお**374**の破片は、その形態的特徴から三足を有するであろう。**379**~**388**は口縁部が屈曲する鍋である。

以上の煮炊具は、外面に煤が付着したものが多く、内面に有機物が付着した破片も認められる。これらが使用された時期は、草戸千軒町遺跡の調査結果から、漠然と15世紀代と考えておく。(福田)

#### 土製品・金属製品 (第357図)

**C1**は土錘である。**M1**~**5**は鉄釘、**M6**は馬鋤の歯、**M7**は刀子の破片であろう。**M8**・**9**は表土内出土の煙管の吸口で、形態から18世紀後半~19世紀代のものか。**M8**の内部には竹製の羅字が残存する。銭貨には、宋銭の皇宋通寶**M10**、元祐通寶**M11**、明銭の永樂通寶**M12**・**13**があり、近世では表土内出土の寛永通寶(古寛永)**M14**がみられる。**M15**はT3から出土した鉛弾である。(岡本泰)



第357図 遺構に伴わない遺物⑥ (1/4・1/3・1/2)

## 第5節 小結

吉野川の東岸に立地する中町B遺跡は、確認調査の成果などに基づき、吉野川の自然堤防にあたる西半部で遺構密度が高く、全面調査の対象となった東半部はやや低位にあるため遺構は希薄になると予測されていた。事実、竪穴住居など集落を構成する遺構は少数で、集落の中心域からは外れていたとみられるが、一方で古代官道の発見に代表される貴重な成果を得ることができた。

縄文時代の遺構は検出されていない。しかし3区の南西部で、地山面直上から比較的状态のよい後期初頭の中津式土器がまとまって出土したことは、近隣に集落の存在を示唆する事象といえよう。また、1点のみであるがT2から前期初頭の羽島下層式土器片が出土した。従来、旧大原町内出土の縄文土器としては、今岡廃寺および川戸古墳群の後・晩期土器が少数知られるのみであり、今回の出土資料は当地域における縄文遺跡の動態を追究するうえでも重要なものといえる。上記2遺跡の成果も含め、縄文後期頃には吉野川沿いに小規模な集落が点々と形成されていた状況が推測できよう。

弥生時代の遺構としては、3区南東部に位置する竪穴住居がある。埋土中から豊富に出土した土器は、調査例の少ない当地域では後期初頭の良好な一括資料であり、また個々の土器についても器形や文様の点で他地域の影響も窺われるなど興味深いものである。この住居以外には明確な遺構は少なく、弥生時代においては集落の中心部は調査区西側に位置するものと考えられる。続く古墳時代の遺構は確認できず、遺物が散発的に出土したのみであった。

古代の中町B遺跡は、調査区内を南北に貫く道路遺構によって特色づけられる。道路は総延長約168mにわたって直線的に検出され、両側に側溝を有し、側溝間の路面幅は約6mにおよぶ。路面上には道路遺構を特色づける波板状凹凸面も認められた。この道路の規模や形状は、集落内ないし集落間の通行路などとは異質な、律令国家による構築と管理がなされた官道との評価がふさわしいものである。本地点は、播磨国佐用郡と因幡国府とを結ぶ古代官道「因幡道」の想定ルート上に位置し、検出された道路はこの官道とみて間違いない。検出された因幡道自体は中世までに廃絶したとみられるが、このルートはその後、近世の因幡往来にも受け継がれ、時代を超えて山陰と山陽、そして畿内との連絡路の役割を担うことになった。

因幡道廃絶後の中世になると、調査区の南端部および北端部で掘立柱建物、土壇等が検出され、集落の形成が認められる。両地点とも遺構は吉野川寄りの西半部に偏り、弥生時代と同様に主たる居住域は調査区の西側に存在するようである。検出遺構の時期は13～14世紀代が中心を占め、近世に至ると集落はなくなり、全域が水田化され現在に至った。(岡本泰)

### 参考文献

- ・ 上田秀夫「14～16世紀の青磁碗の分類について」『貿易陶磁研究』No.2 日本貿易陶磁研究会 1982
- ・ 重根弘和「山崎古窯跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』167 岡山県教育委員会 2002
- ・ 乗岡 実「備前焼播鉢の編年について」『第3回 中近世備前焼研究会資料』中近世備前焼研究会 2000
- ・ 間壁忠彦・間壁葎子「備前焼研究ノート(1～4)」『倉敷考古館研究集報』第1・2・5・18集 倉敷考古館 1966・1966・1968・1984
- ・ 山本信夫「大宰府条坊跡XV—陶磁器分類—」『太宰府市の文化財』第49集 太宰府市教育委員会 2000

## 第8章 穴が途遺跡

### 第1節 遺跡の概要

穴が途遺跡には、次章で報告する比較的大きな穴が途古墳が所在していた。

鳥取自動車道関連遺跡の発掘調査に着手した平成16年4月に、古墳の調査前の現状を把握するため、古墳周辺の立木を伐採したところ、地表面に散在する甕や器台などの弥生土器の破片を発見した。

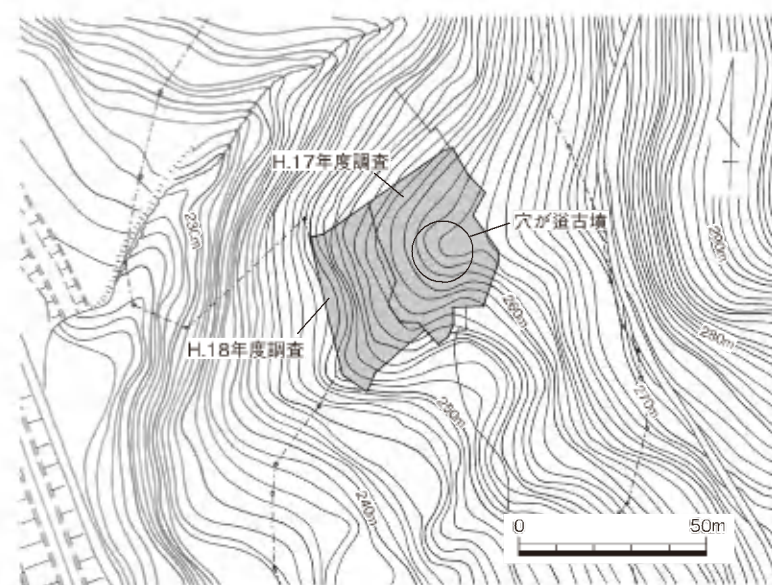
平成17年4月から穴が途古墳の本格的な発掘調査を行ったが、墳丘の盛り土の中や石列の間から、比較的多く

の弥生土器が出土した。また、古墳の埋葬施設である横穴式石室を解体したところ、羨道の床面に弥生時代後期の竪穴住居を確認した。

このような状況から、穴が途古墳の周辺には竪穴住居や段状遺構が数多くあり、丘陵の尾根上から斜面にかけて、弥生時代後期の集落が存在することが確実に予想されたので、実施することが予定されていた遺構の有無を調べる一次調査は、協議によってしないことに決定した。そして、穴が途古墳の調査が終了したら、継続して穴が途遺跡の調査を行うことになった。調査範囲については、現状の地形から遺構が存在するであろう部分を想定し、調査員で判断した。

遺跡の北側は急勾配の傾斜地で、斜面の下位には山間から吉野川へ流入する小川が存在したので、日本道路公団中国支社津山工事事務所（当時）の担当者に実状を説明し、発掘調査による土砂が雨水などによって小川に流れ落ちないように、直線的に伸びる強固な柵を設置してもらった。遺跡の表土除去作業にはバックホウを使用した。道路建設予定地の南側に位置する低丘陵には今岡D遺跡が存在していたから、予定地内を自走して穴が途遺跡に入ることができなかったので、今岡地区の町内会長にお願いして遺跡の東側にある町道を通らせてもらった。

穴が途遺跡の調査は、道路建設工事と調査工程から、平成16年度後半と平成17年度前半に跨るので、当初は尾根上を境に調査範囲を南北に分けて調査を進める計画になっていたが、平成17年度当初に遺跡北側の小川にボックス工事を始めるから、遺跡内に工事用道路を確保しないと工事が実施できないので、計画を変更して調査範囲を東西に分け、地形の高い東側から調査を行った。（福田）



第358図 調査区位置図 (1/2,000)



第359図 遺構全体図 (1/300)

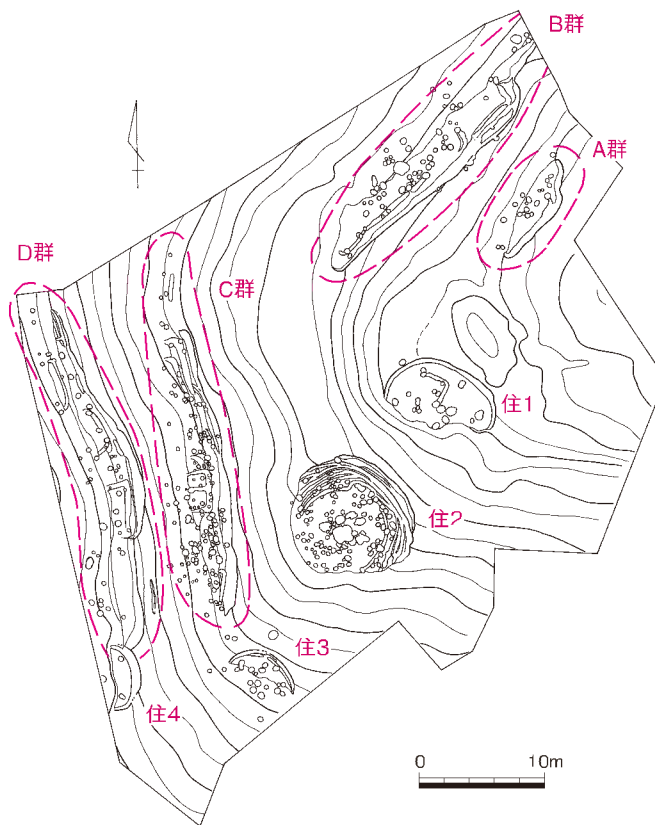
## 第2節 弥生時代の遺構・遺物

### 1 概要

調査区全体に弥生時代後期前葉から中葉にかけての遺構が確認された。竪穴住居15軒、掘立柱建物1棟、段状遺構20面、土壙2基が検出された。この集落は南西方向に張り出す丘陵尾根上に立地する。標高は250～260mで、西側の平地との比高差は45m前後である。集落全体の範囲を周辺の地形から推定すると、南北方向へは谷が入り急傾斜になることから延びていかないが、東西方向へは緩斜面が続くことから調査区外へ広がっていると推定される。特に西側では緩斜面が続いており、今回確認された段状遺構群のような遺構がもう1列ないし2列はありそうである。今回は集落全体のおよそ8割程度が調査できたのではと考えている。

遺構の配置を見てみると、円形の竪穴住居4軒は尾根の稜線とその付近に立地するが、段状遺構は北斜面に2か所と西斜面に2か所、重複しながら列状に見られる。そこでこのような遺構群のまとまりを第360図のようにA～D群に群分けし、以後それに従って記述したい。円形の竪穴住居4軒以外の竪穴住居11軒は方形を呈する小規模なものとして推定され、C群中に位置するため、また、掘立柱建物1棟はD群中に位置しているため、それぞれC群、D群の中で説明する。

遺構の配置だけで見ると、竪穴住居1とA群、竪穴住居2とB群のように、円形の竪穴住居1～4とA～Dの遺構群がそれぞれ対応しているように思われる。竪穴住居の床面の標高とA～Dの遺構群

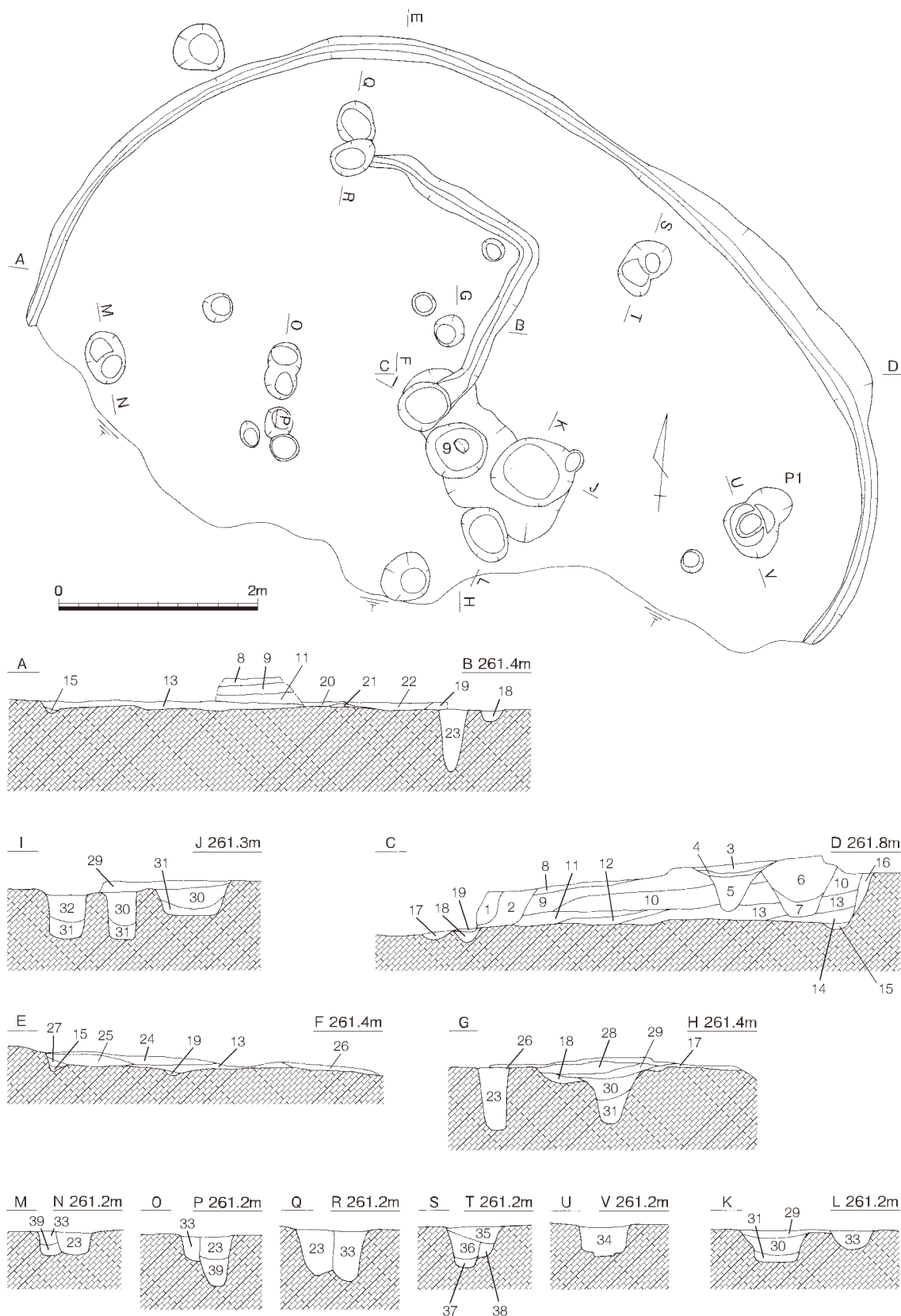


第360図 弥生時代遺構群分け図 (1/600)

底面の標高平均値を比べると、竪穴住居1とA群ではA群のほうが110cm高い。竪穴住居4とD群ではD群のほうが80cm高い。その他も同様で、竪穴住居より遺構群のほうが100cm前後床面が高いという特徴が見られる。遺構の時期を細かく見て、遺構が造られた順番を推定しなければならないが、時期を判断しにくいものが多いのが現状であった。遺物では、土壙2からは類例の見られない変わった形の土器が埋納された状態で出土したほか、焼失した竪穴住居5からは、甕、高杯、器台の一括遺物が検出された。土器以外では、竪穴住居から土製紡錘車、円盤状土製品、石鏃、砥石、鉈か鏃の茎と考えられる鉄器が出土しており、A～Dの遺構群からは板状鉄斧、石包丁、管玉などが出土している。(物部)

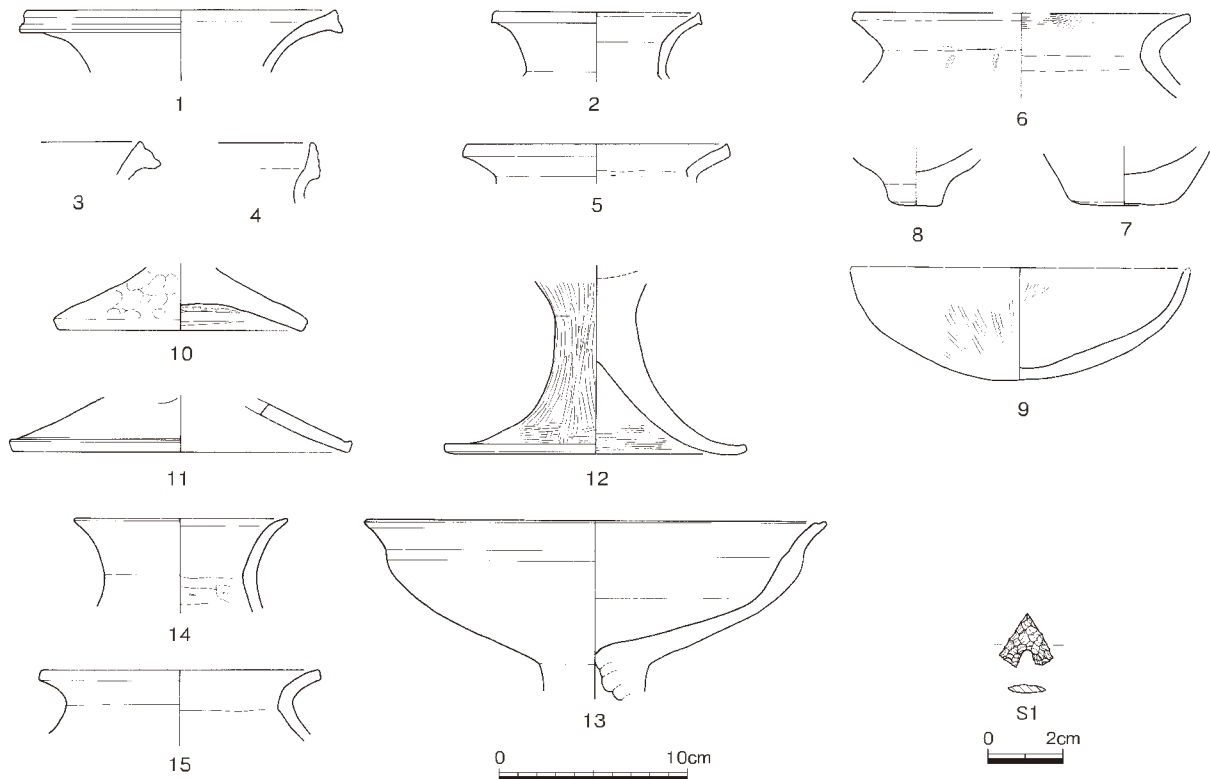


2 円形竪穴住居



第361図 竪穴住居 1 (1/60)

- |                                      |   |
|--------------------------------------|---|
| 1 褐色 (7.5YR4/6) 砂質土 (地山塊多含) (古墳掘り方)  | 21 褐灰色 (10YR4/1) 砂質土 (地山塊多含) (羨道基盤)       |
| 2 黒褐色 (7.5YR3/1) 砂質土 (地山塊多含) (古墳掘り方) | 22 赤褐色 (2.5YR4/8) 砂質土 (地山塊多含) (羨道基盤)      |
| 3 赤褐色 (5YR4/6) 砂質土 (ピット)             | 23 褐色 (10YR4/1) 砂質土                       |
| 4 黒褐色 (10YR3/1) 砂質土 (ピット)            | 24 暗赤褐色 (2.5YR3/3) 砂質土 (地山塊多含) (古墳構築埋め戻し) |
| 5 褐灰色 (10YR4/1) 砂質土 (ピット)            | 25 赤褐色 (2.5YR4/6) 砂質土 (地山塊多含) (古墳構築埋め戻し)  |
| 6 灰黄褐色 (10YR4/2) 砂質土 (ピット)           | 26 赤褐色 (2.5YR4/8) 砂質土 (地山塊多含) (古墳構築埋め戻し)  |
| 7 褐色 (7.5YR4/3) 砂質土 (ピット)            | 27 灰黄褐色 (10YR4/2) 砂質土                     |
| 8 黒色 (10YR2/1) 砂質土                   | 28 灰黄褐色 (10YR4/2) 砂質土                     |
| 9 黒褐色 (10YR3/1) 砂質土                  | 29 にぶい赤褐色 (5YR5/4) 砂質土                    |
| 10 褐色 (7.5YR4/4) 砂質土                 | 30 灰黄褐色 (10YR4/2) 砂質土                     |
| 11 灰褐色 (7.5YR4/2) 砂質土                | 31 にぶい赤褐色 (5YR4/3) 砂質土 (地山埋め戻し、固くしめる)     |
| 12 明褐色 (7.5YR5/6) 砂質土                | 32 黒褐色 (10YR3/1) 砂質土                      |
| 13 灰黄褐色 (10YR4/2) 砂質土                | 33 灰黄褐色 (10YR4/2) 砂質土                     |
| 14 灰褐色 (7.5YR4/2) 砂質土 (地山塊多含)        | 34 赤褐色 (2.5YR4/8) 砂質土                     |
| 15 褐色 (7.5YR4/6) 砂質土                 | 35 にぶい赤褐色 (2.5YR5/4) 砂質土                  |
| 16 暗赤褐色 (5YR3/2) 砂質土 (壁の裏込め?)        | 36 褐灰色 (5YR5/1) 砂質土                       |
| 17 黒褐色 (10YR3/1) 砂質土                 | 37 褐灰色 (10YR4/1) 砂質土                      |
| 18 黒褐色 (10YR3/1) 砂質土                 | 38 灰褐色 (5YR5/2) 砂質土                       |
| 19 褐灰色 (10YR4/1) 砂質土 (地山塊多含) (羨道基盤)  | 39 黒褐色 (10YR3/1) 砂質土                      |
| 20 黒褐色 (10YR3/1) 砂質土 (地山塊多含) (羨道基盤)  |   |

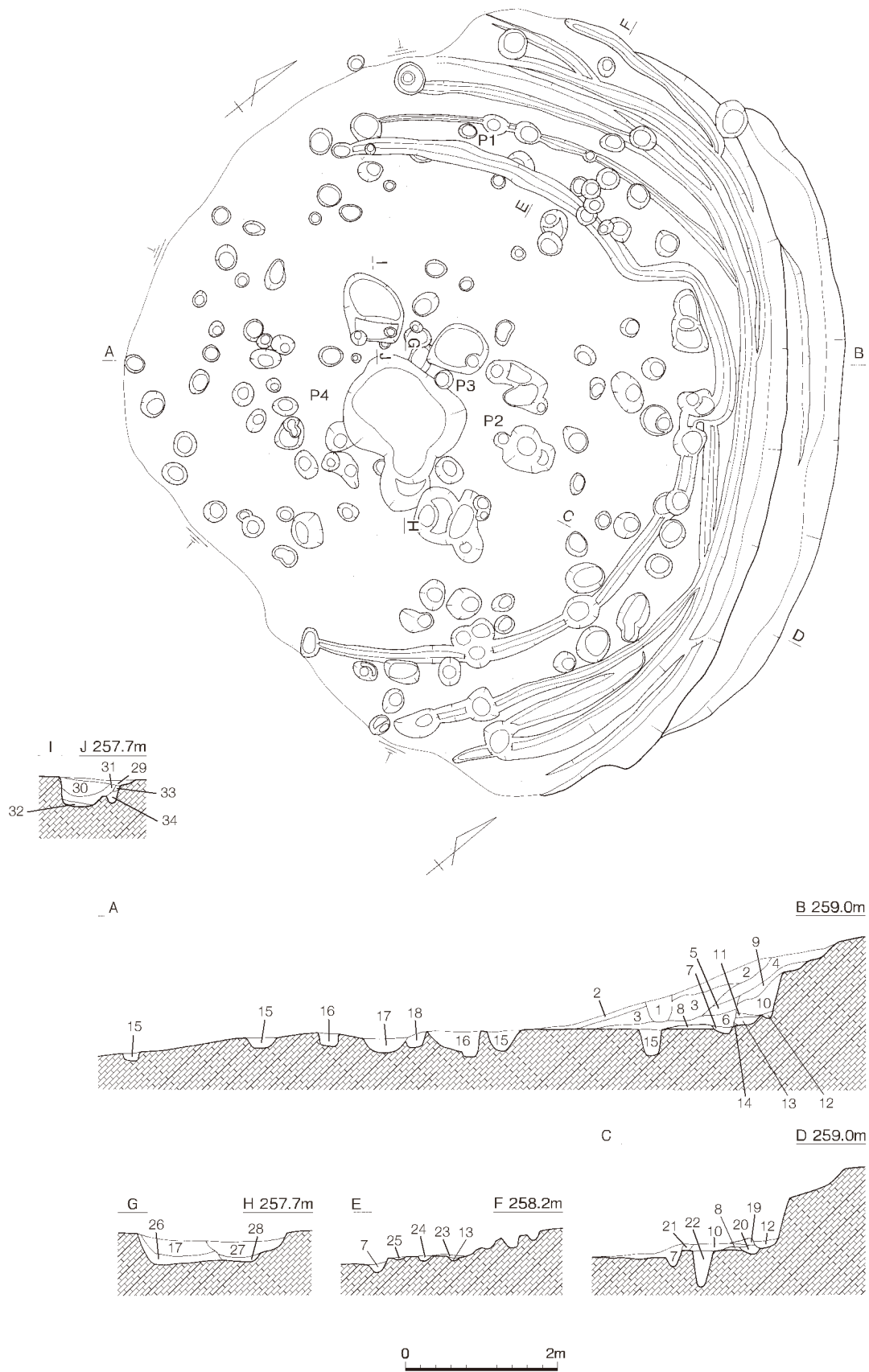


第362図 竪穴住居1出土遺物 (1/4・1/2)

竪穴住居1 (第359~362図、図版61-1・2)

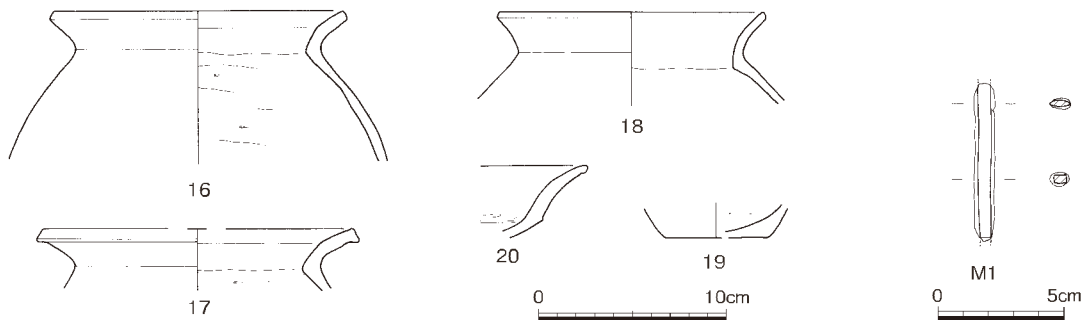
竪穴住居1は穴が透古墳の真下に位置しており、古墳構築時における地山整形で約半分が壊された状態で検出した。直径874cmの円形住居で、残存状態の良好な地点で深さ60cmを測った。柱穴は4か所が残存しており、破壊された部分を考慮に入れると6本柱に復元できる。そのうち3か所では2個の柱穴が重なっていたため、最低でも一度は建て替えを行ったことが分かる。中央部分には4個のピットが検出できたが、深さに統一はない。断面から中央穴群は同時に機能したわけではないことが判断でき、建て替えの結果の基数である。さらに中央穴群を南北で挟むような穴も掘削されていた。

古墳構築時に破壊されたこともあり、遺物の出土量は少ない。弥生土器が出土している。9は中央穴の下層(第31層)で出土した鉢で、被熱により外面は剝離し、黒色化していた。13の高杯も被熱した可能性が高い。S1は穴が透古墳の石室床面直上で出土した。時期は弥生後期中葉と考える。(上掲)



第363図 竪穴住居2 (1/80)

- |   |                            |
|---|----------------------------|
| 1 暗褐色 (10YR3/4) 砂質土 (ピット)                     | 18 灰黄褐色 (10YR4/2) 砂質土      |
| 2 黒褐色 (10YR3/2) 砂質土                           | 19 黄褐色 (10YR5/6) 砂質土 (貼床)  |
| 3 褐色 (10YR4/6) 砂質土                            | 20 灰黄褐色 (10YR4/2) 砂質土      |
| 4 赤褐色 (2.5YR4/6) 砂質土                          | 21 にぶい黄褐色 (10YR5/4) 砂質土    |
| 5 灰黄褐色 (10YR4/2) 砂質土                          | 22 灰赤色 (2.5YR5/2) 砂質土      |
| 6 にぶい黄褐色 (10YR4/3) 砂質土 (にぶい橙色 (7.5YR6/4) 塊多含) | 23 褐灰色 (10YR4/1) 砂質土       |
| 7 灰黄褐色 (10YR5/2) 砂質土 (にぶい橙色 (7.5YR6/4) 塊多含)   | 24 黒褐色 (10YR3/1) 砂質土       |
| 8 灰赤色 (2.5YR4/2) 砂質土 (貼床)                     | 25 黒褐色 (10YR3/1) 砂質土       |
| 9 にぶい赤褐色 (5YR4/3) 砂質土                         | 26 灰黄褐色 (10YR4/2) 砂質土      |
| 10 灰褐色 (7.5YR4/2) 砂質土                         | 27 黒褐色 (10YR3/1) 砂質土 (炭多含) |
| 11 灰褐色 (7.5YR4/2) 砂質土 (にぶい橙色 (7.5YR6/4) 塊多含)  | 28 褐灰色 (7.5YR4/1) 砂質土      |
| 12 黒褐色 (7.5YR3/2) 砂質土                         | 29 黒褐色 (10YR3/1) 砂質土       |
| 13 灰黄褐色 (10YR4/2) 砂質土                         | 30 黄褐色 (2.5Y5/3) 砂質土       |
| 14 にぶい黄褐色 (10YR5/4) 砂質土                       | 31 灰白色 (2.5Y8/2) 砂質土       |
| 15 黄褐色 (2.5Y5/3) 砂質土                          | 32 黒褐色 (7.5YR3/1) 砂質土 (炭含) |
| 16 褐灰色 (10YR4/1) 砂質土                          | 33 灰黄褐色 (10YR4/2) 砂質土      |
| 17 黒褐色 (10YR3/1) 砂質土                          | 34 明褐灰色 (7.5YR7/1) 砂質土     |



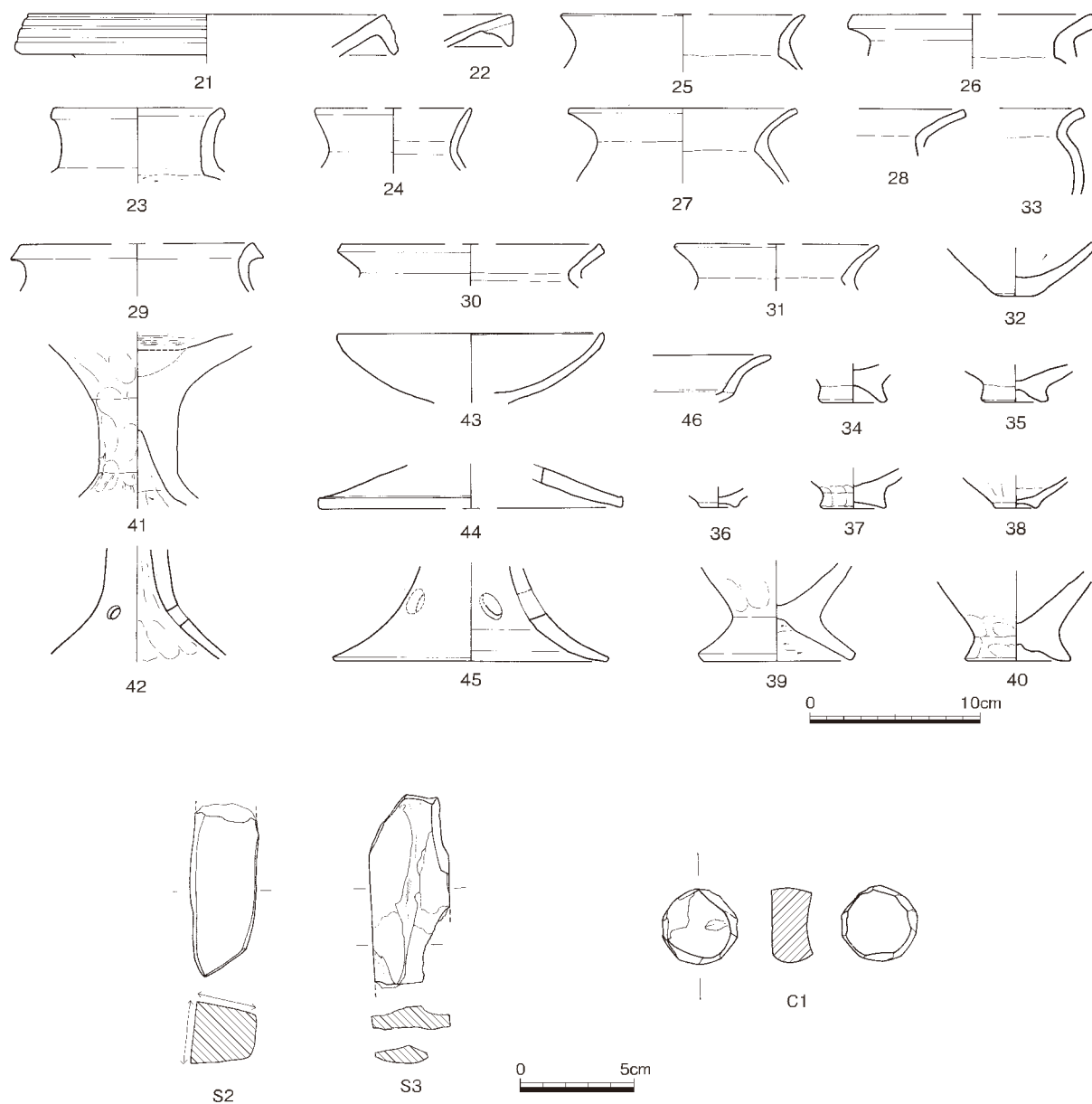
第364図 竪穴住居2柱穴出土遺物 (1/4・1/3)

## 竪穴住居2 (第359・360・363～365図、写真33、図版61-1・3・4)

調査区の南西端部、竪穴住居1と古墳の南西の尾根線上において検出した住居である。尾根線上の緩斜面上部を掘削し、低い部分を埋め立てて床面を造成したものであると考える。立地条件が良かったのか、壁体溝が9条半円形に検出できた。つまり、同じ場所を何度も繰り返し使用したことを示している。拡張したものもあるし、少しずつずらして建て替えたものもある。ただし、埋土の大半が掘削されていたため、新旧関係を追求することは非常に困難であった。それでも第363図断面A-Bに示したように、土層の観察から新旧関係が分かる場合もあった。

住居の平面形は隅丸方形ないし円形で、規模は推定で上場直径690～1,020cm、床面直径650～940cm、壁体溝の幅18～50cm、その床面からの深さ5～18cm、住居壁の高さの最大55cm、床面積は36.2～78.5㎡を測る。当時としては中規模～大規模の大きさである。最も新しい住居は岡山県ではきわめて珍しい幅180cm、奥行き60cmの造出しを掘削している。床面には普通赤く焼土化した所と炭が認められることが多いが、この住居では、炭は若干みられるもののまったく焼土はなかった。最下面の床とわず壁体溝上には9軒分の柱穴と中央穴を検出した。掘り方はおおむね楕円形を呈し、長径10～60cm、短径10～40cm、深さ10～50cmである。中央穴は9個検出したが、切り合いはほとんど確認できず新旧順序を断定することは困難であった。真ん中の中央穴の下層には、きめが細かく粘性を帯びた灰が充填されていた。最下部の住居のものと考えられる壁体溝から50cmほど内側に存在する柱穴を数えてみると、8個あることが判明した。

住居埋土中からは弥生土器が少量と鉄器および石器が出土している。17の甕は口縁部の端部をわずかに押さえて凹面を作る。19は甕片の底部である。20の高杯口縁部小片は典型的な上東Ⅱ式のもので



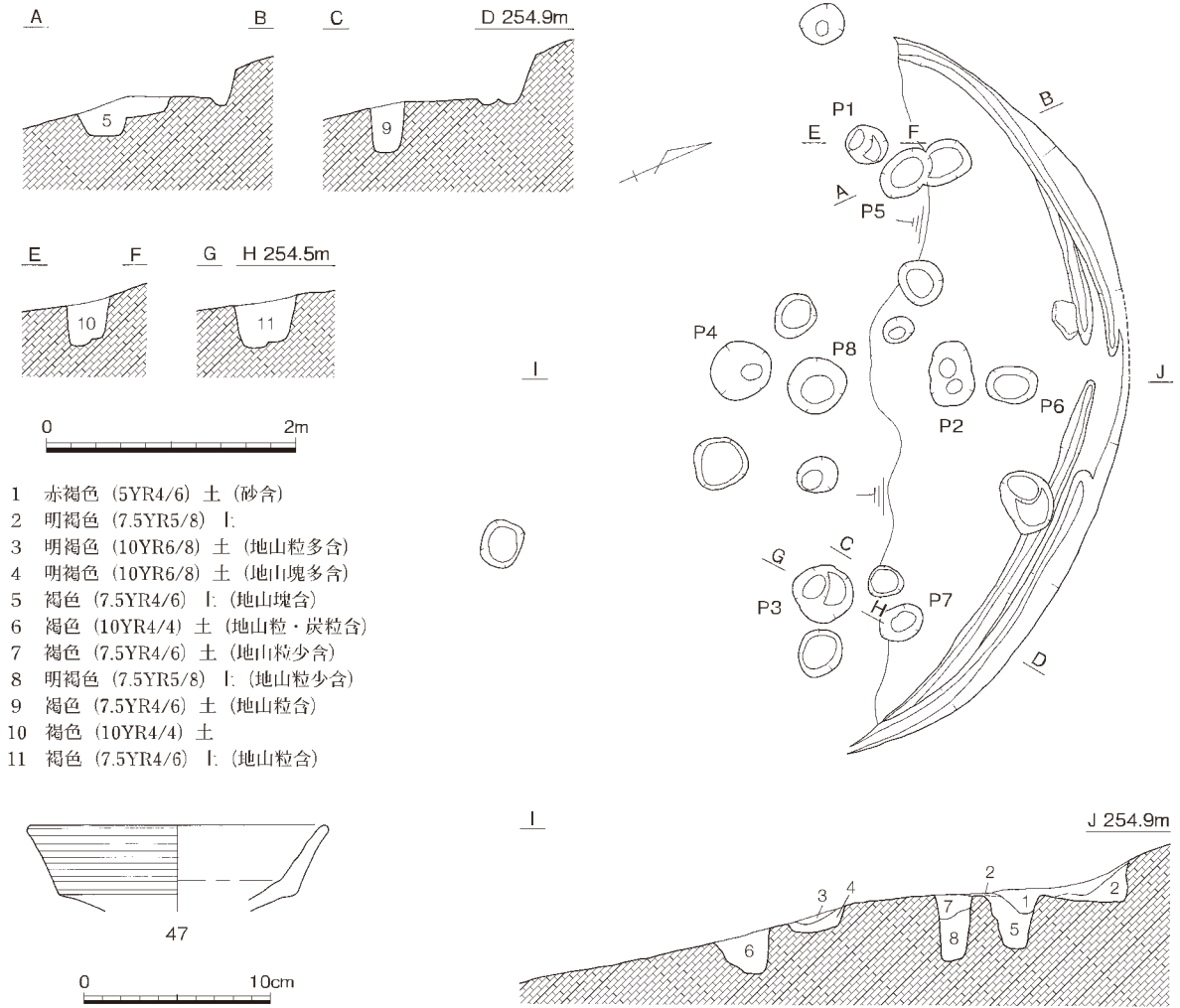
第365図 竪穴住居2埋土出土遺物 (1/4・1/3)



写真33 竪穴住居2壁体溝群 (南西から)

ある。21の壺口縁部は端部を下方に長く垂れ下げ、その外面に3条の凹線文を施している。21～24は壺、25～33は甕、34～40は台付鉢、41～45は高杯の一部である。C1は土器の底部を円形に加工した製品で紡錘車未製品と考える。直径4.5cm、厚さ2.0cmである。S2・3は砥石である。

時期は、住居の形状および供伴土器から弥生時代後期中葉と推定できる。(浅倉)



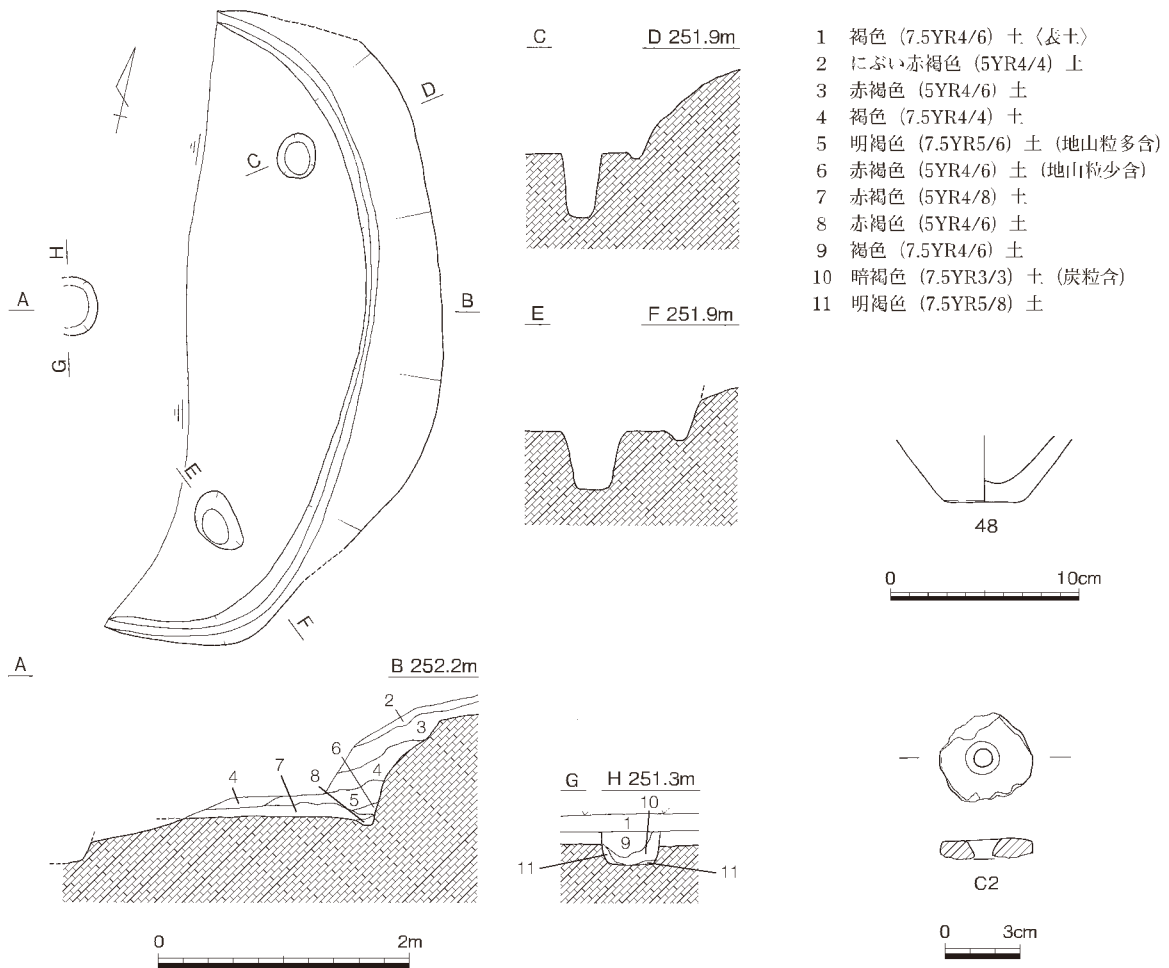
- 1 赤褐色 (5YR4/6) 土 (砂含)
- 2 明褐色 (7.5YR5/8) 土
- 3 明褐色 (10YR6/8) 土 (地山粒多含)
- 4 明褐色 (10YR6/8) 土 (地山塊多含)
- 5 褐色 (7.5YR4/6) 土 (地山塊含)
- 6 褐色 (10YR4/4) 土 (地山粒・炭粒含)
- 7 褐色 (7.5YR4/6) 土 (地山粒少含)
- 8 明褐色 (7.5YR5/8) 土 (地山粒少含)
- 9 褐色 (7.5YR4/6) 土 (地山粒含)
- 10 褐色 (10YR4/4) 土
- 11 褐色 (7.5YR4/6) 土 (地山粒含)

第366図 竪穴住居3 (1/60)・出土遺物 (1/4)

竪穴住居3 (第359・360・366図、図版61-5・63-2)

竪穴住居3は、竪穴住居2から尾根筋を7mほど下った位置で検出した。竪穴住居2と床面での標高差は約3.6mある。

斜面下方に当たる部分は流失しているが、平面形は円形を呈すると推定される。柱穴多数と中央穴2個、壁体溝が2条検出されたことから、少なくとも1回の建て替えが想定できる。古段階の主柱穴はP1～3と考えられ、直径24～30cm、深さ40cm程度を測った。中央穴はP4と考えられ、直径約45cmの円形を呈し、床面からの深さは約60cmと推定され、深い。埋土中に炭粒がわずかに混入している。新段階の主柱穴はP5～7で、直径25～35cm、深さ30～40cmを測る。中央穴はP8と考えられ、古段階と同様に直径約45cmの円形を呈しているが、床面からの深さは28cmとやや浅い。埋土中に炭粒は見られなかった。これら新段階の主柱穴や中央穴は、古段階のものから60cm前後北東方向に移動した位置にある。壁体溝も同様で、移動幅は主柱穴ほどではないが北東方向に約20cm移動している。これらのことから、新段階の竪穴住居は、古段階の竪穴住居の位置から山側へ少しずらして建て替えたもので、平面的な規模はさほど変えていないと推察される。また、P1～3には、切り合いを判別できなかったが、1個ずつ柱穴が切り合っており、もう1回、計2回の建て替えを想定してもいいのかもしれない。



第367図 竪穴住居4 (1/60)・出土遺物 (1/4・1/3)

遺物はわずかで、埋土中から土器片が2片出土した。47は鼓形器台と考えられる。口縁部外面には櫛描き沈線が施される。山陰の土器編年での場式の範疇で捉えられ、このことから竪穴住居3の時期は、弥生時代後期前半と推定される。(物部)

**竪穴住居4** (第359・360・367図、図版62-1・63-2)

竪穴住居4は竪穴住居3の約7m下方で検出した。竪穴住居1～3が立地する尾根筋ではなく、やや北へ回った斜面に立地する。竪穴住居3と床面での標高差は約3.3mある。竪穴住居の西半分は調査区外になる。

竪穴住居の平面形は直径約500cmの円形もしくは楕円形を呈すると考えられ、支柱は4本と推定される。中央穴は西側半分が調査区外となるが、直径45cm前後の円形を呈し、床面からの深さは約45cmと復元できる。埋土下部に炭粒を含む層がみられた。

遺物は埋土中から土器細片が約100片と土製紡錘車C2が1点出土した。48は壺か甕の底部である。この土器の特徴から竪穴住居4の時期は弥生時代後期中葉と考えられる。

竪穴住居1～3は、段状遺構を主体とする遺構群A～C群と離れて立地しているが、竪穴住居4はD群に接している。しかし、後述するが、接しているD群の段状遺構19は出土遺物から竪穴住居4より時期的にやや古いと推定されるので、竪穴住居4の時期には、D群の段状遺構と距離を開けていた可能性が高い。(物部)

3. 方形竪穴住居・掘立柱建物・段状遺構

1 A群 (第360・368・369図、写真34、

図版62-3)

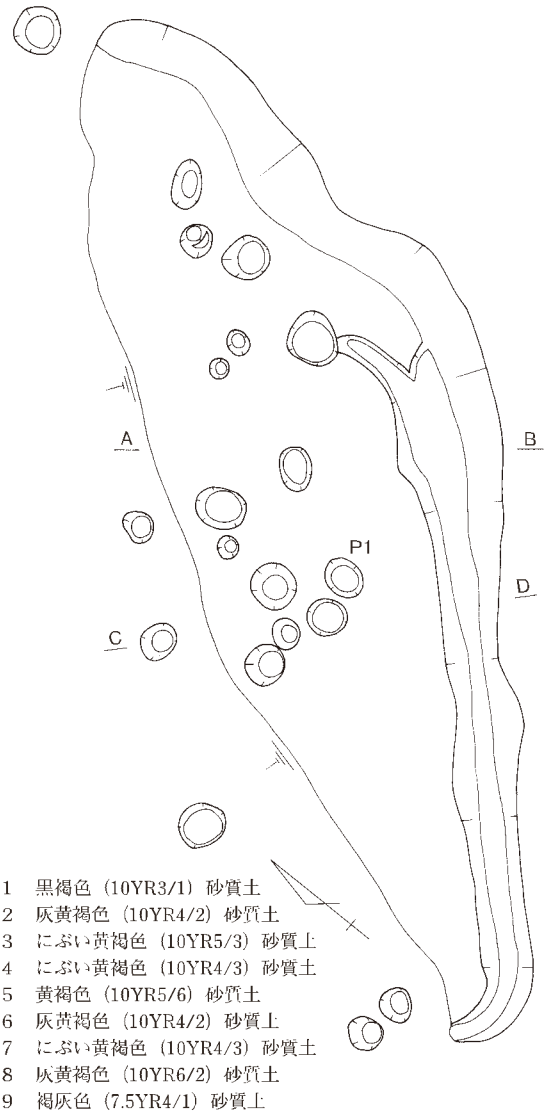
竪穴住居2の北東10mで検出した段状遺構である。西側は削平されているが、現状で長さ858cm、深さ60cmを測る。断面からは、最低3回の建て替えが推測できた。ただ、壁体溝、ピットを検出しているが、どの段階の段状遺構にどのピットが伴うかは、明確にできなかった。壁体溝は、明瞭には1条の検出であるが、北端で2又に分岐していること、断面では2条観察できたことから、ほぼ同じ位置に溝を掘り直したと判断できる。なお、一番西側の段状遺構に伴う壁体溝は検出できなかった。

遺物としては、弥生土器と石包丁が出土した。弥生土器には壺、甕、高杯があるが、いずれも小破片である。49は頸部に刻目突帯を巡らせる壺である。61は、器種不明の小破片で、波状文を施していた。S4は磨製石包丁で、P1の底部で見つかった。半折しているが、紐懸けの孔は認められず、断面「V」字状の溝が刻まれていた。

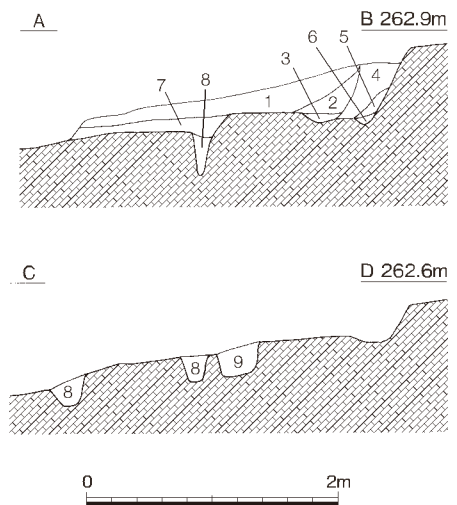
時期は弥生時代後期中葉と考えられる。(上村)



写真34 A群 P1石包丁出土状況(北東から)

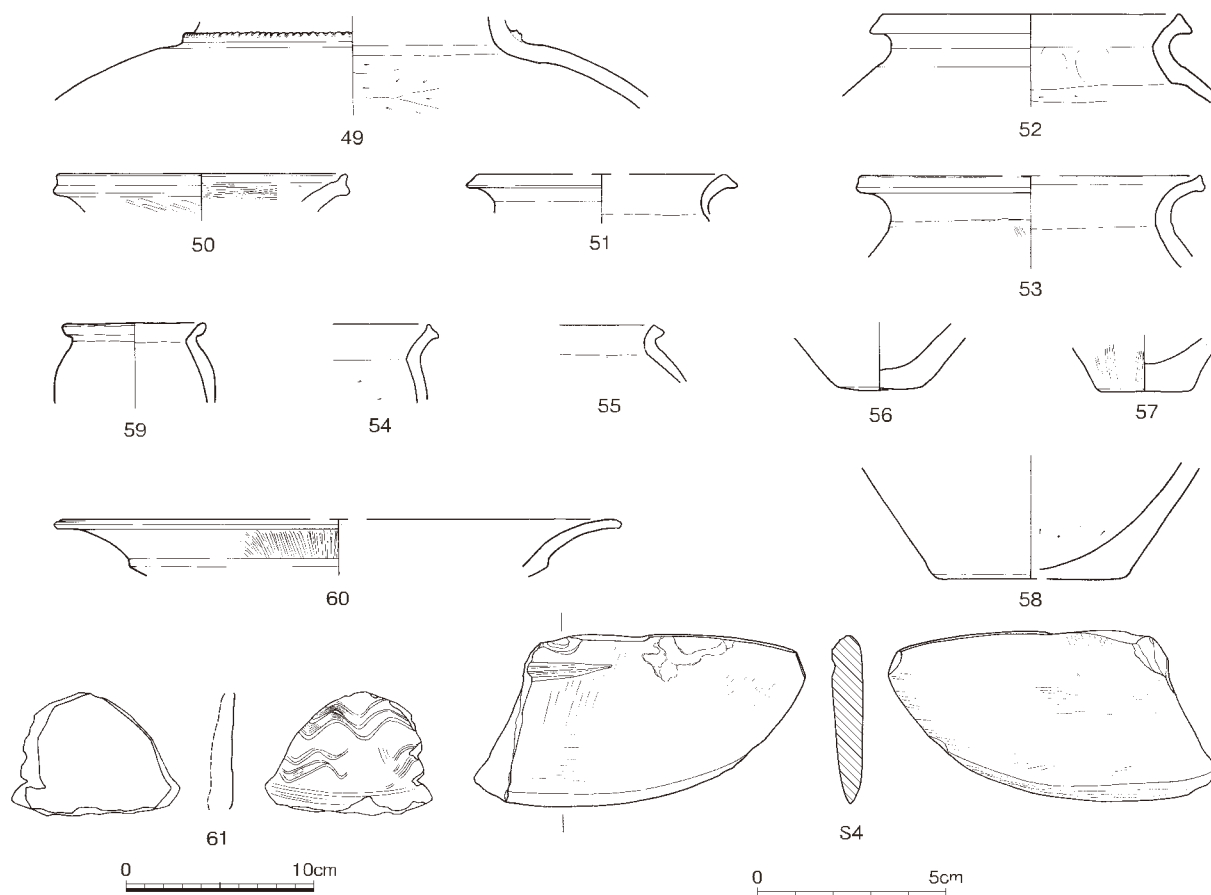


- 1 黒褐色(10YR3/1)砂質土
- 2 灰黄褐色(10YR4/2)砂質土
- 3 にぶい黄褐色(10YR5/3)砂質土
- 4 にぶい黄褐色(10YR4/3)砂質土
- 5 黄褐色(10YR5/6)砂質土
- 6 灰黄褐色(10YR4/2)砂質土
- 7 にぶい黄褐色(10YR4/3)砂質土
- 8 灰黄褐色(10YR6/2)砂質土
- 9 褐灰色(7.5YR4/1)砂質土



第368図 A群 (1/60)





第369図 A群出土遺物 (1/4・1/2)

## 2 B群 (第360・370～372図、写真35、図版62-3～5)

調査区の北東端部、A群の北下方において検出できた段状遺構である。北側の斜面に立地する。上部を掘削し、低い部分を埋め立てて平坦な床面を造成したものである。北斜面ではあるが、周囲に巨木さえなければ日当りは良い方である。しかし、決して条件が良いところではない。壁体溝は1条「コ」の字状に検出できた。この溝は段の下場から約50cm離れて検出した。遺構の平面形は隅丸長方形ではないと判断することができ、規模は上場長さ20.6m、床面長さ19.2m、床面の現存幅は200～300cm、壁体溝の内側幅13.0m、溝幅20～50cm、その床面からの深さ5～18cm、遺構壁の高さ最大100cm、床面積は約47㎡を測る。段状遺構複数面が連なり、重なっていると考えられる。北東側にも別の段状遺構が切り合っているが、これには壁体溝は存在しない。検出した床面の長さは430cm、幅20～130cmである。床面には火所は認められなかった。柱穴が多数検出できた。掘り方はおおむね楕円形を呈し、長径10～45cm、短径10～40cm、深さ10～35cmである。

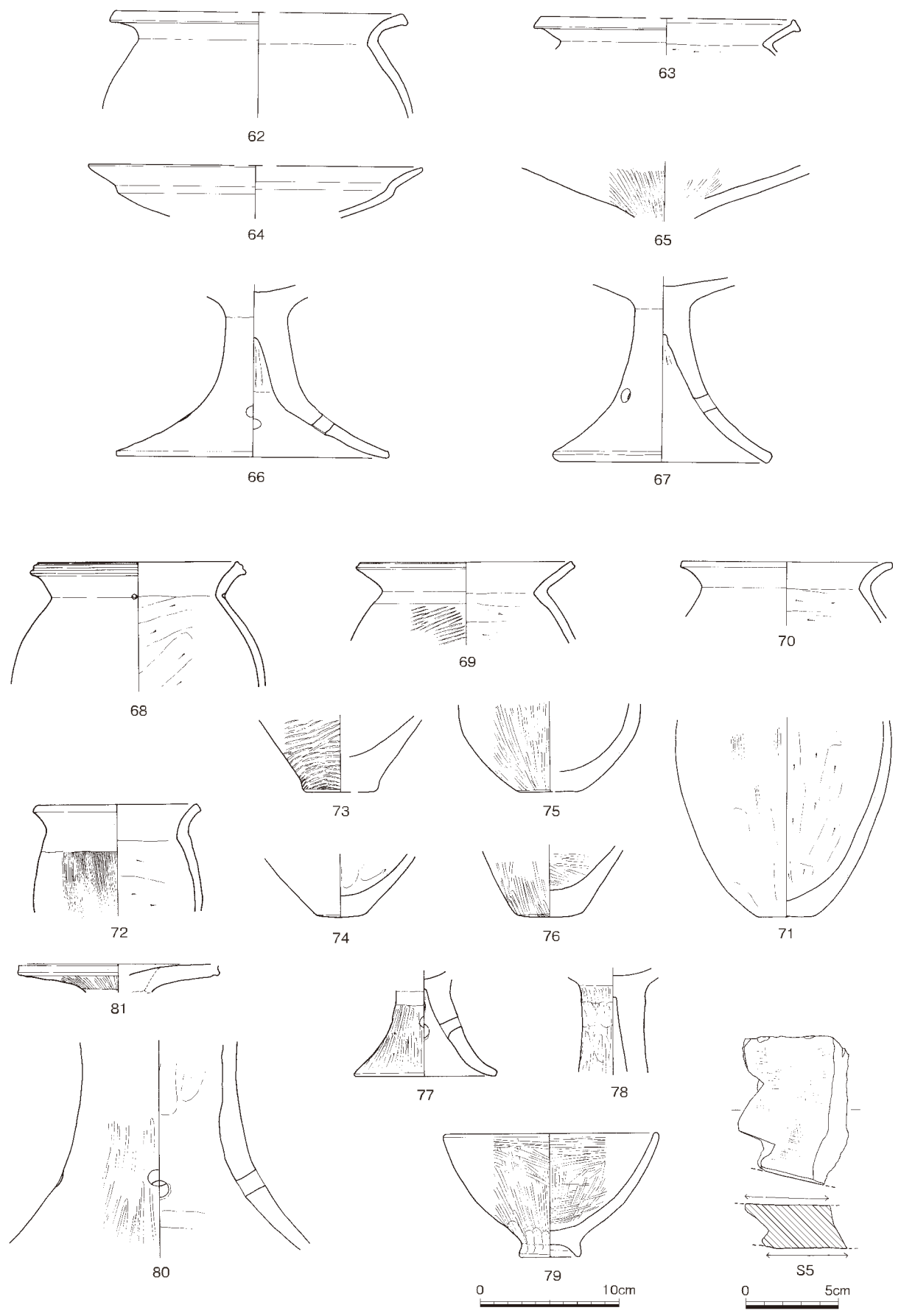
遺構埋土中および床面から弥生土器がまとまって出土し、鉄器、石器、管玉も出ている。62の甕はP1、63の甕はP2から出土し、ヘラケズリは体部内面上端まで行われている。64～67の高杯は床面からの出土である。64は口縁部、65は杯部、66・67は脚部である。68～81の土器とS5の砥石は埋土下層から出たものである。68の甕頸部には小さな刺突文がある。69の甕は体部外面にタタキメが認められる。73もタタキを行っている甕の底部である。71・72の甕は体部外面にハケメ調整が施されている。79は小形の台付鉢で、中世の椀に類似しているが弥生後期によく見られる器形でもある。80は器

台の筒部である。S 5の砥石は長さ8.0cm、幅5.0cm、厚さ2.2cmを測る。82~98の土器とM 2の鉄斧、S 6の砥石、S 7の管玉は埋土上層の遺物である。82~86は甕の口縁部ないし上半部の破片である。



- |                                 |                             |
|---------------------------------|-----------------------------|
| 1 にぶい黄褐色 (10YR4/3) 砂質土          | 7 褐灰色 (10YR4/1) 砂質土         |
| 2 灰黄褐色 (10YR4/2) 砂質土            | 8 灰黄褐色 (10YR6/2) 砂質土        |
| 3 黒褐色 (10YR3/1) 砂質土 (炭、土器多含)    | 9 にぶい黄橙色 (10YR6/3) 砂質土      |
| 4 褐灰色 (10YR4/1) 砂質土             | 10 灰褐色 (7.5YR4/2) 砂質土 (炭多含) |
| 5 にぶい黄褐色 (10YR4/3) 砂質土 (炭、土器多含) | 11 黒褐色 (10YR3/1) 砂質土        |
| 6 灰黄褐色 (10YR4/2) 砂質土 (炭、土器多含)   |                             |

第370図 B群 (1/100)



第371図 B群床面・埋土下層出土遺物 (1/4・1/3)

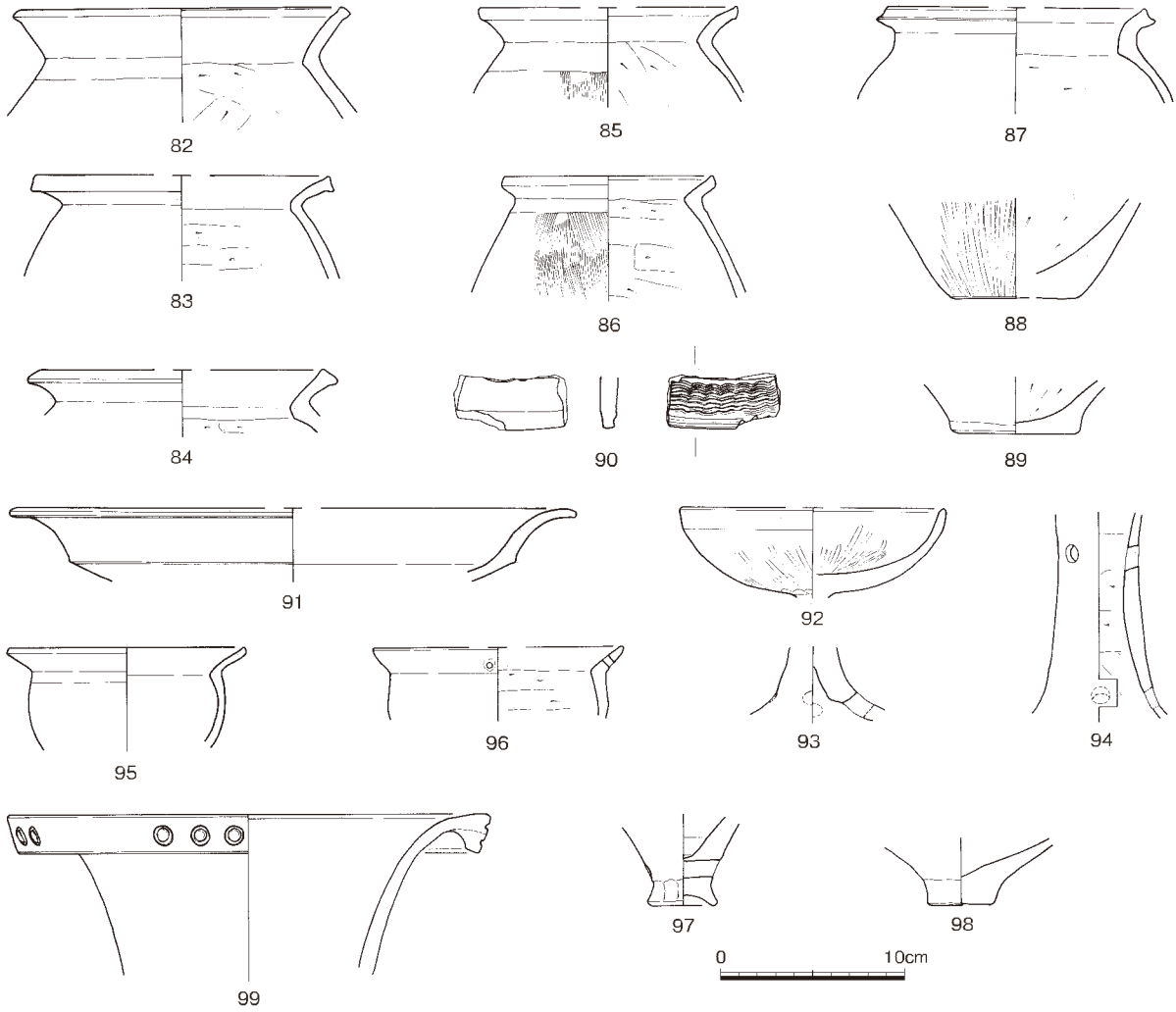
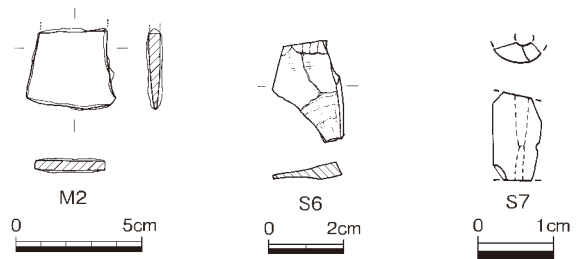


写真35 B群 (北東から)

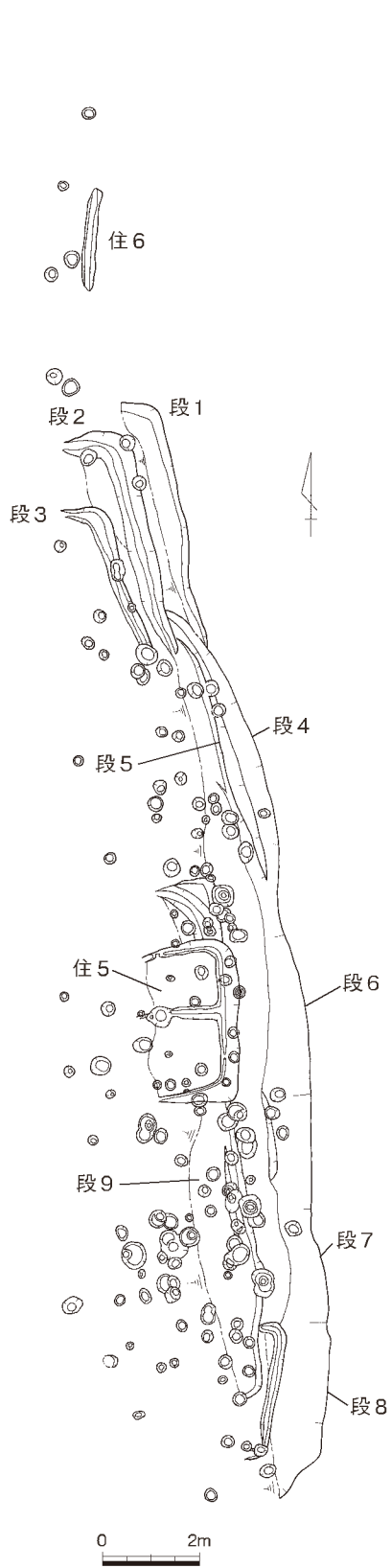


第372図 B群埋土上層出土遺物  
(1/4・1/3・1/2・1/1)

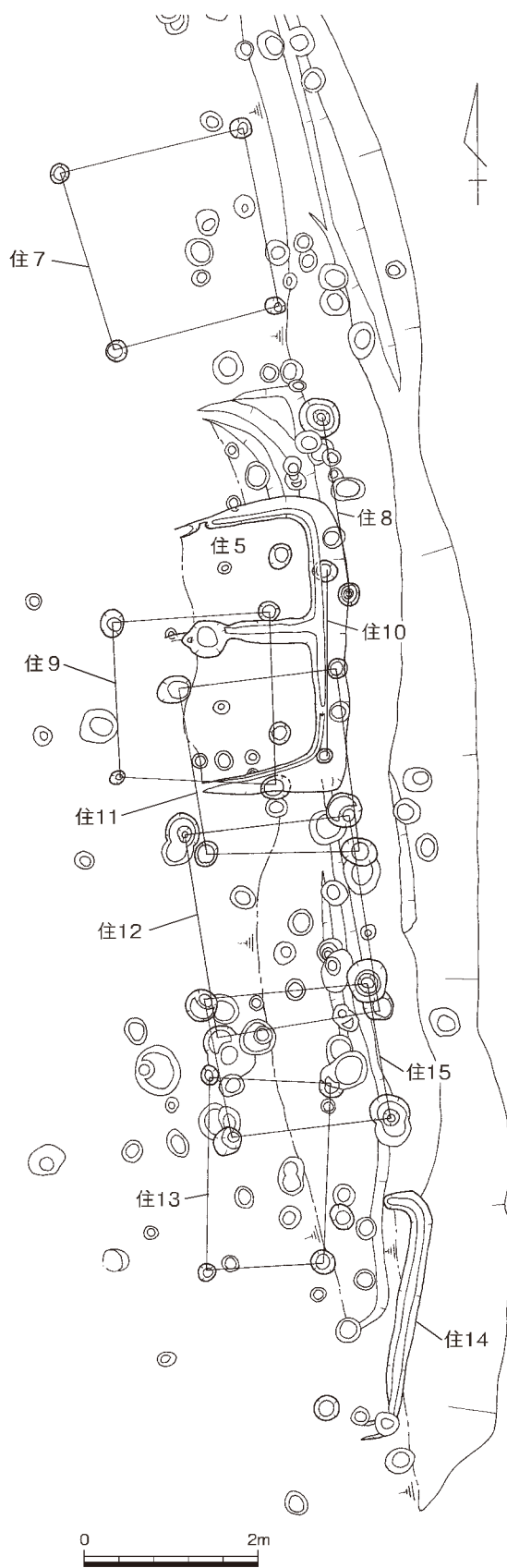
87は壺で、ヘラケズリ調整は体部内面の上端まで行っている。88・89は壺の底部である。90は壺あるいは器台の口縁部端部の垂れ下がり部破片で、細かい波状文が見える。91～94は高杯の破片である。99は生駒西麓産と考えられる搬入土器である。M2は板状鉄斧である。刃部は研磨によりしつらえた両刃である。

時期は、供伴土器から弥生後期中葉としたい。(浅倉)

3 C群 (第360・373図、図版63)



第373図 C群 (1/150)

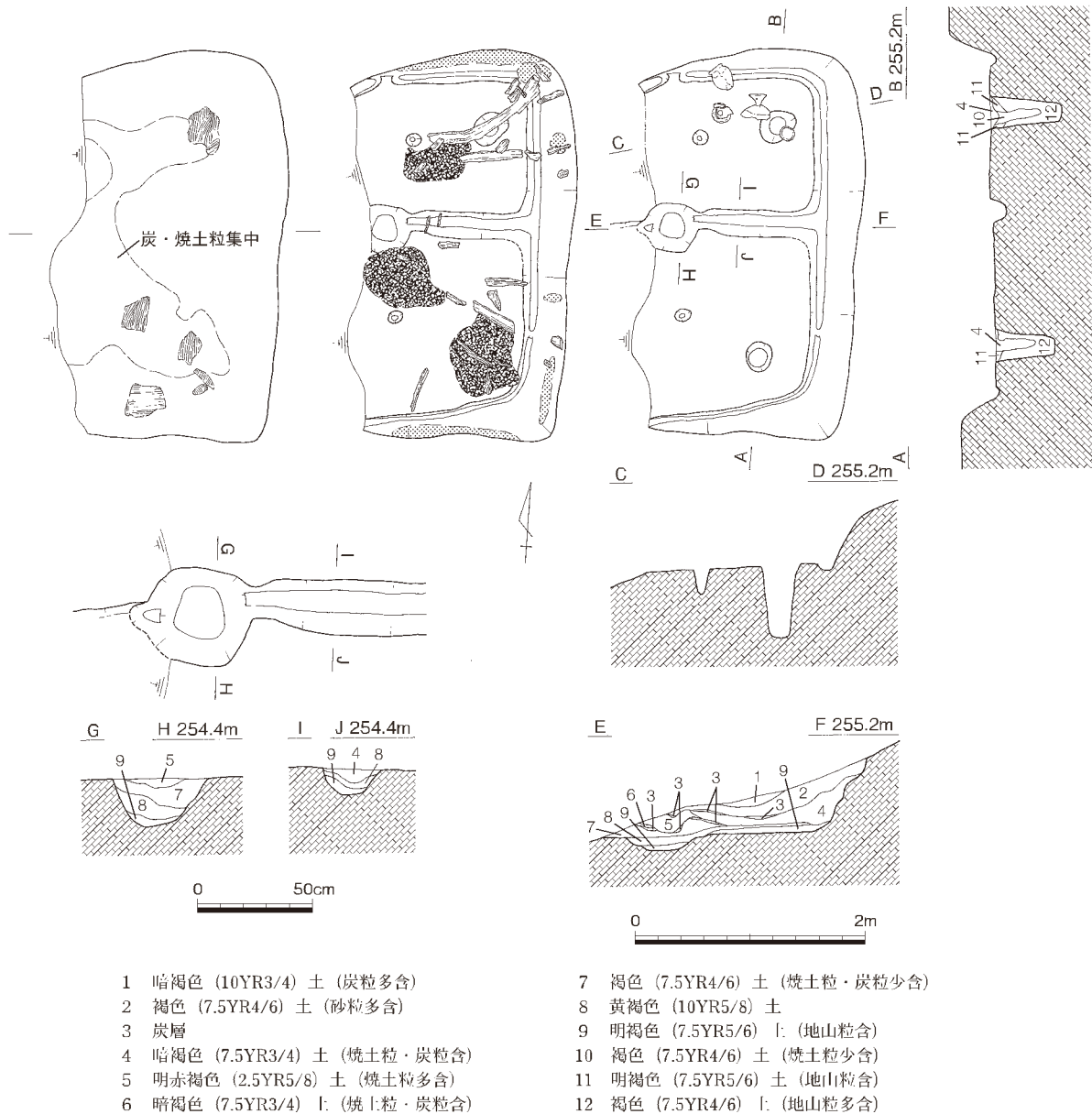


第374図 竪穴住居配置図 (1/80)

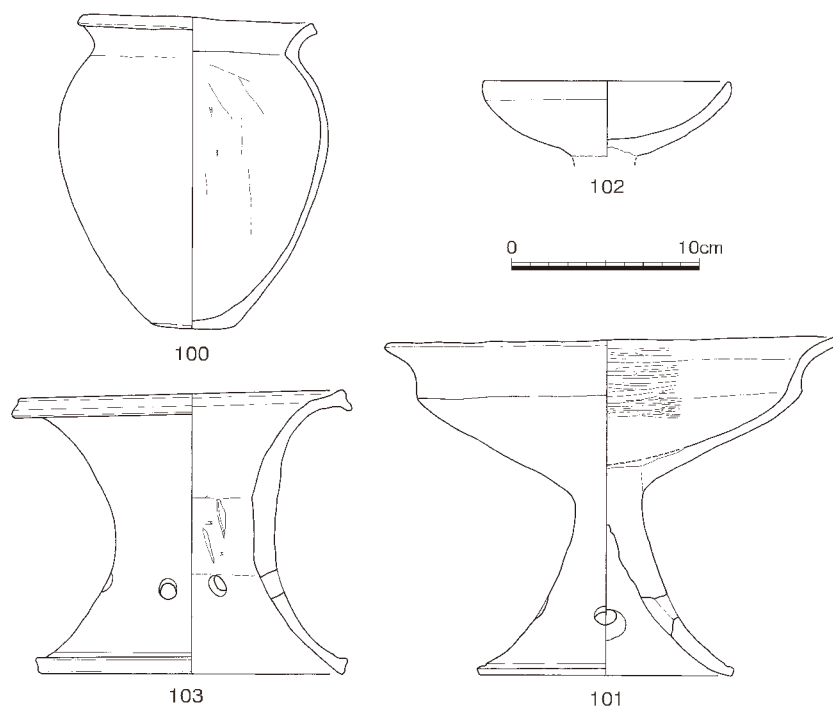
C群は尾根の西側斜面に立地する。遺構は、標高254.5m付近に約30m重複しながら連なっており、  
 竪穴住居11軒、段状遺構9面が識別できた。竪穴住居5は支柱穴、中央穴、壁体溝が確認され、竪穴  
 住居として認識できるが、それ以外の竪穴住居6～15は、4個あるいは2個の柱穴の組み合わせとし  
 て抽出できたものである。調査時において、多数検出される柱穴がどのようなまとまりをもつのか苦  
 慮したが、竪穴住居5の支柱穴2個の規模や配置を参考に4本柱の組み合わせと捉えると、比較的素  
 直にまとまりが見えてきた。このことから4本、2本のまとまりも竪穴住居5のような小形で方形の  
 竪穴住居である可能性が高いと考え、竪穴住居として報告する。 (物部)

竪穴住居5 (第373～376図、図版62-2・65-1)

竪穴住居5はC群の中央やや南寄りで見出された。焼失住居である。検出当初、被熱し赤変した壁  
 が周囲の段状遺構6・9の埋土や竪穴住居8～11の柱穴を切っていることを確認できたので竪穴住居  
 5の時期は、C群の時期幅の中でも比較的新しいと思われる。埋土中には、多量の焼土粒や炭粒が見



第375図 竪穴住居5 (1/60・1/30)



第376図 竪穴住居5出土遺物(1/4)

られた。垂木と茅葺きの茅と推定される炭化材が検出された。分析の結果、前者は「クリ」と同定され、後者は「イネ科」までの同定に留まった。床面には、壁体溝と中央穴、それらを繋ぐ溝が検出された。留意されるのは、これらの溝や中央穴埋土が住居の埋土と一連の焼土粒や炭を多く含む土（第4・5層）で満たされていた点である。細かく見ると、中央穴とそれに繋がる溝の下半部は、通常流土と認識されるきめ細

かな黄色土（第8層）とその下にやや暗い明褐色土（第9層）が堆積している。これらの土層は炭や焼土粒をまったく含んでいないことから焼失時より前に堆積した土と考えられる。以上の点から、中央穴とそれに繋がる溝の上半部、壁体溝は焼失直前には開放状態にあったと推定される。また、それぞれの底面の高さを測ると、水が滞ることなく壁体溝から中央穴へ流れる傾斜を持っており、中央穴から西側へも溝が延びることが確認されていることから、おそらく、排水の機能を持っていたと推定される。この排水の機能は、中央穴やそれに繋がる溝下半部に第8・9層が堆積していることから、どちらかというに一時的な機能であると思われる。

出土遺物には甕100、高杯101・102、器台103がある。一括遺物であると同時に元位置をほぼ保っていると考えられ、注目される。器台103は直立した状態で検出され、北側に転んだ甕100はこの器台の上に乗っていた可能性が高い。また、南向きに転んだ高杯101の上に高杯102の杯部が重ねられていた可能性もある。竪穴住居5の時期は、土器の特徴から弥生時代後期中葉と推定される。さらに炭化材をもとにした放射性炭素年代測定結果は、calAD 2-71であった。（物部）

#### 竪穴住居6（第373・377図）

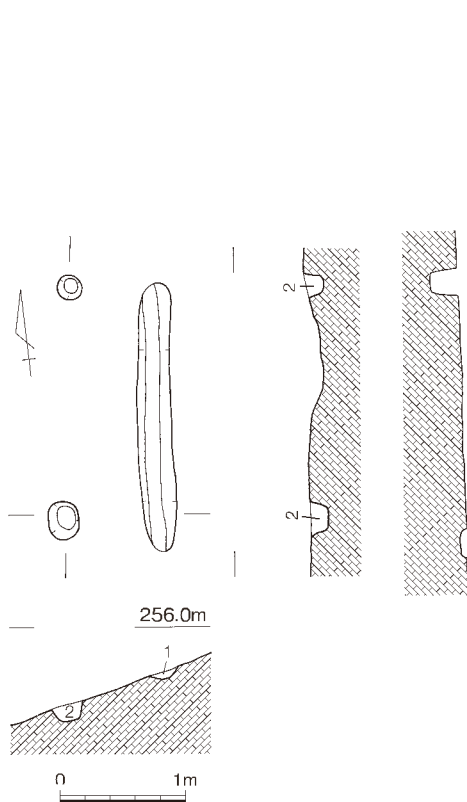
C群北端部に位置する。壁体溝と思われる溝と2個の柱穴を検出した。柱穴間距離は約180cmを測る。遺物の出土はない。時期は弥生時代後期である。（物部）

#### 竪穴住居7（第374・378図）

C群のほぼ中央、段状遺構4～6が重複する地点に位置する。4個の柱穴で構成され、柱間距離は200～210cmである。山側の柱穴は深さ65cmを測る。遺物はなく、時期は弥生時代後期である。（物部）

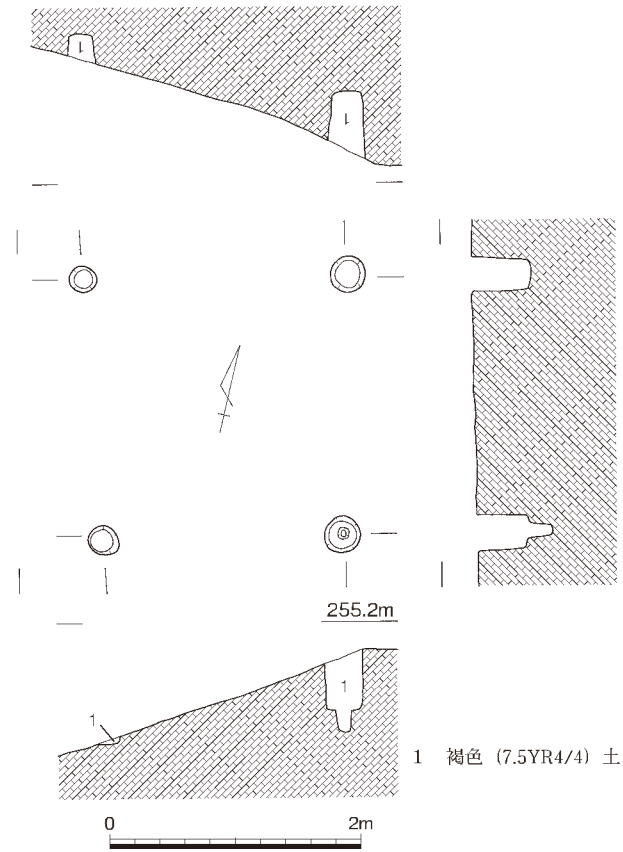
#### 竪穴住居8（第374・379図）

2個の柱穴を検出した。南側の柱穴は竪穴住居5に切られている。柱間距離は約210cm、深さは約70cmを測る。壁体溝は検出されなかった。遺物はなく、時期は弥生時代後期である。（物部）



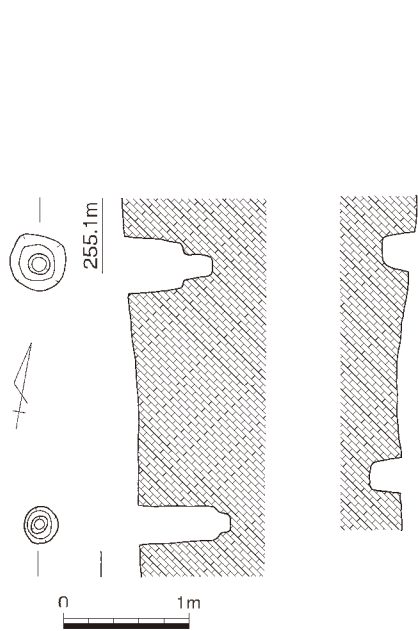
- 1 赤褐色 (5YR4/6) 土 (炭粒少含)
- 2 褐色 (7.5YR4/4) 土

第377図 竪穴住居 6 (1/60)

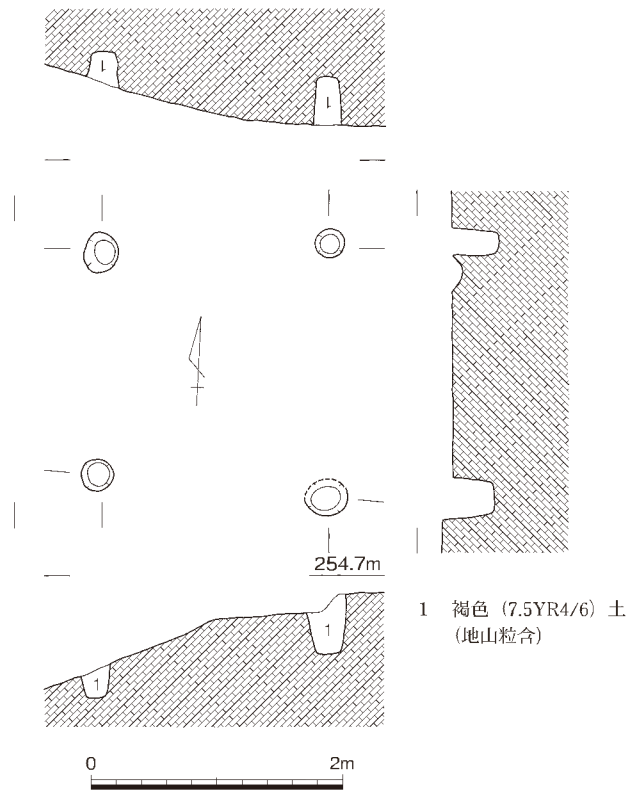


- 1 褐色 (7.5YR4/4) 土

第378図 竪穴住居 7 (1/60)



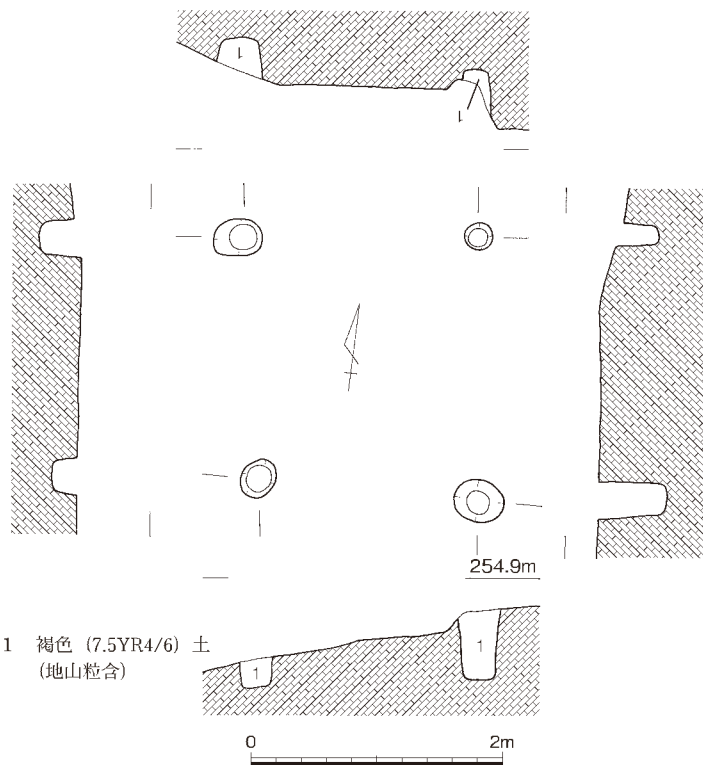
第379図 竪穴住居 8 (1/60)



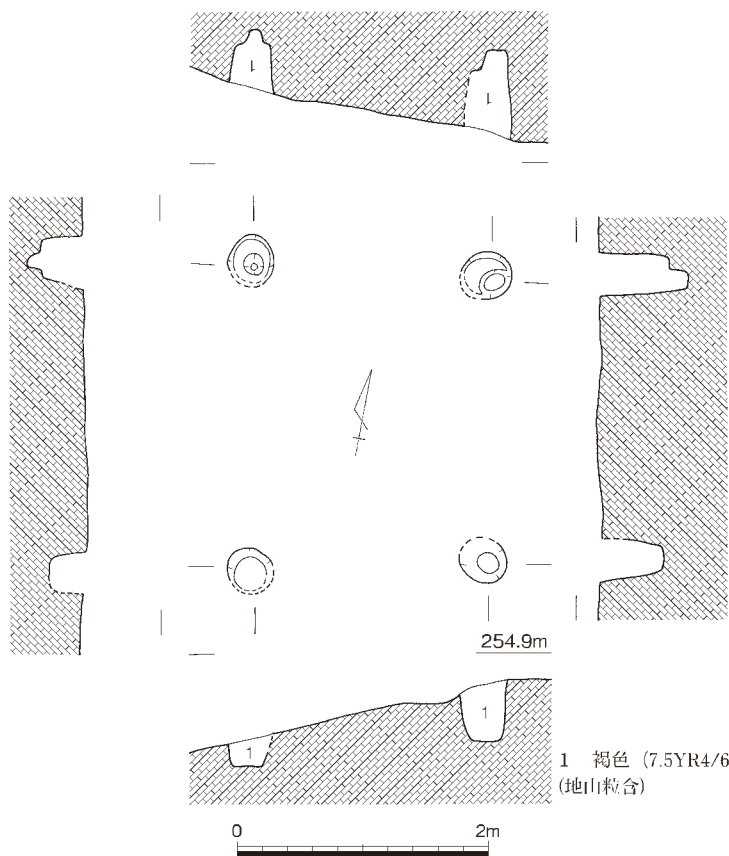
- 1 褐色 (7.5YR4/6) 土 (地山粒含)

第380図 竪穴住居 9 (1/60)

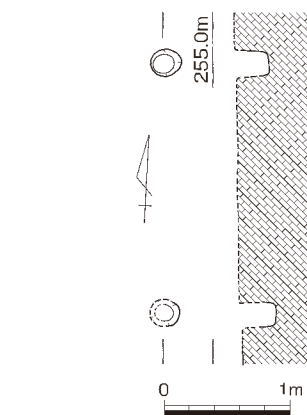




第382図 竪穴住居11 (1/60)



第383図 竪穴住居12 (1/60)



第381図 竪穴住居10 (1/60)

竪穴住居9 (第374・380図)

4個の柱穴である。竪穴住居5の削平を受けている。柱間距離は190~200cmを測る。遺物はなく、時期は弥生時代後期である。(物部)

竪穴住居10 (第374・381図)

柱穴2個である。柱間距離は約200cmを測る。竪穴住居5によって切られている。遺物はなく、時期は弥生時代後期である。(物部)

竪穴住居11 (第374・382図)

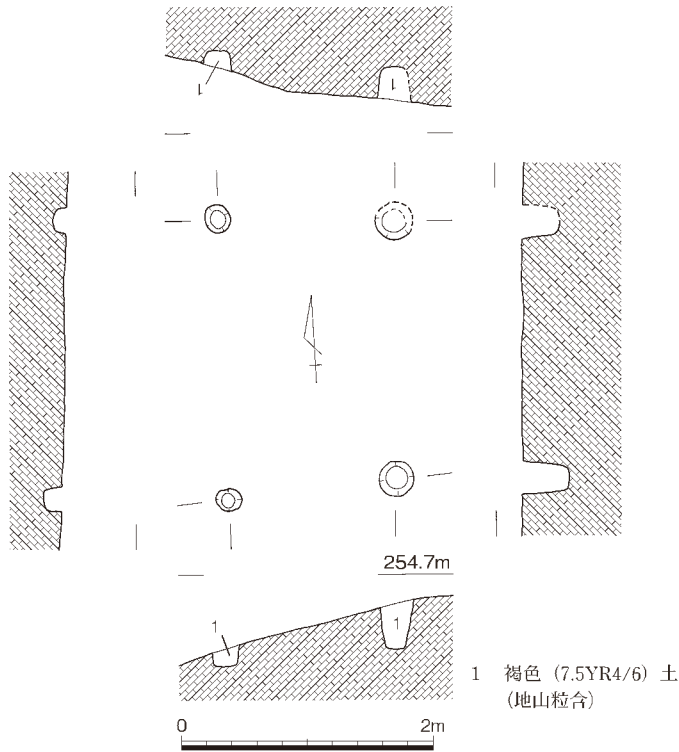
柱穴4個である。柱間距離は170~200cmである。竪穴住居5によって切られている。遺物はなく、時期は弥生時代後期である。(物部)

竪穴住居12 (第374・383図)

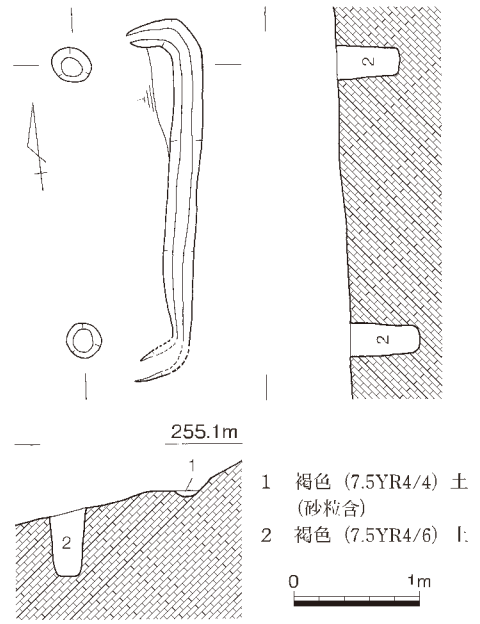
柱穴4個である。柱間距離は南北220~240cm、東西約190cmを測り、南北方向に長軸を持つ長方形の配置である。遺物はなく、時期は弥生時代後期である。(物部)

竪穴住居13 (第374・384図、

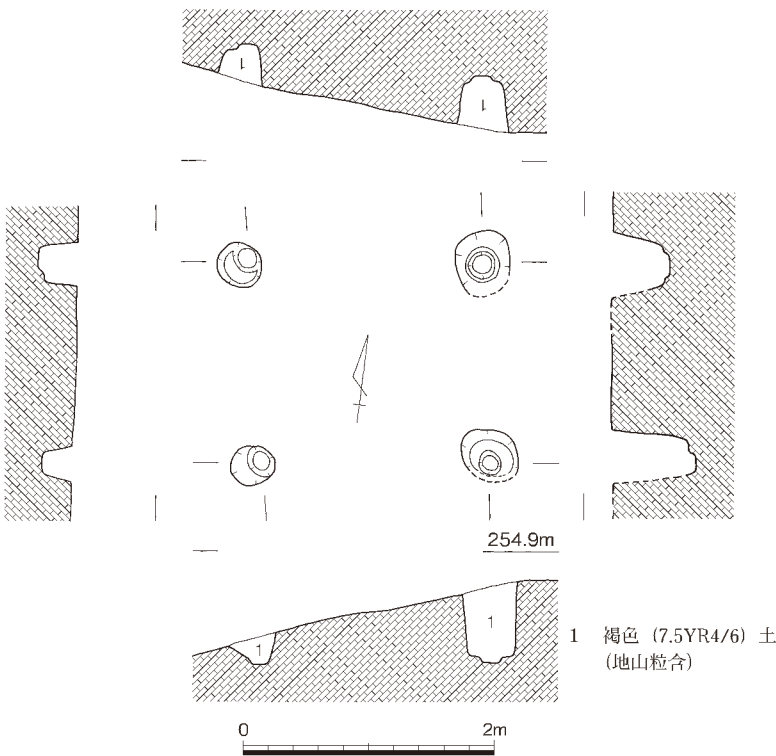
図版64-1)



第384図 竪穴住居13 (1/60)



第385図 竪穴住居14 (1/60)



第386図 竪穴住居15 (1/60)

柱穴4個である。柱穴の直径は30~40cm、柱間距離は南北160cm、東西約180cmを測り、東西方向に長軸を持つ長方形の配置である。時期は弥生時代後期である。(物部) 竪穴住居14 (第374・385図)

柱穴4個である。柱間距離は南北200~220cm、東西約130~140cmを測り、南北方向に長軸を持つ長方形の配置である。遺物はなく、時期は弥生時代後期である。(物部) 竪穴住居15 (第386図、図版64-2)

C群の南端部に位置し、柱穴2個と山側に壁体溝と考えられる溝を検出した。柱間距離は約220cmを測る。遺物はなく、時期は弥生時代後期である。(物部)

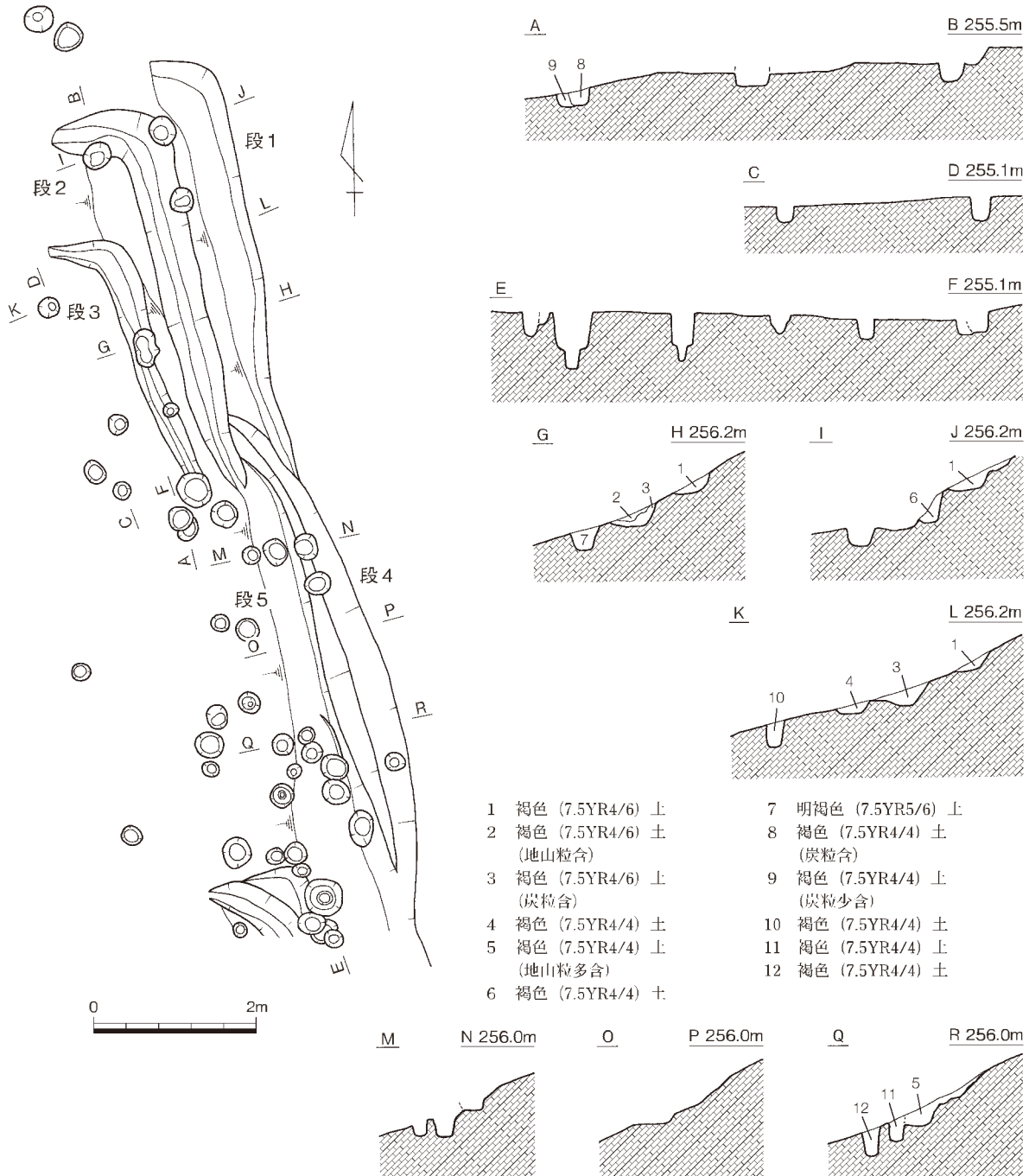
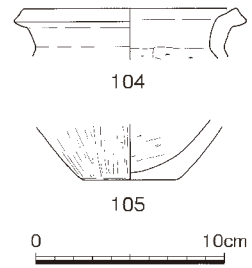
段状遺構1~3 (第373・387図、

図版64-3)

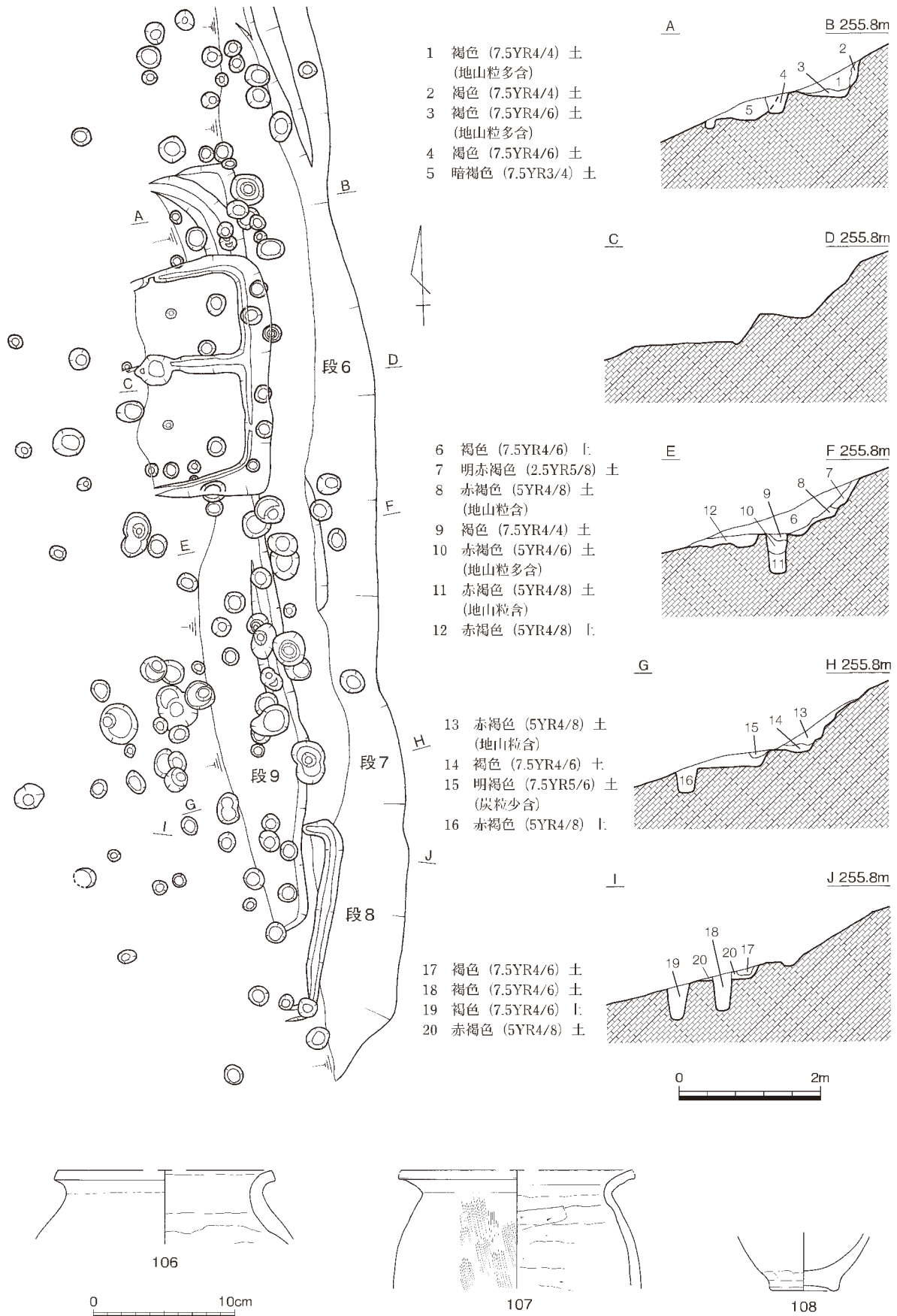
C群北部に位置。等高線に平行する3条の溝を階段状に検出した。溝の北端部は斜面下方に屈曲するが、南端部は不明。溝は上幅約30~40cm、深さ5cmで、広く浅い。雨水を排水するものとする。柱

穴は少ない。それぞれの段状遺構に伴うと考えられるものもあるが、組み合わせは難しい。段状遺構2に伴うと考えられる柱穴が段状遺構3を切っており、段状遺構2が3より新しい。遺物は段状遺構2の溝から甕104・105が出土。段状遺構2の時期は甕105の形態から弥生時代後期中葉と推定され、段状遺構3はそれ以前、段状遺構1も同様な時期と思われる。(物部)段状遺構4・5 (第373・387図)

北部は段状遺構1～3と重複し、南半は段状遺構6と重複するが、切り合い関係は明らかにできなかった。上方に段状遺構4、下方に段状遺構5が



第387図 段状遺構1～5 (1/80)・段状遺構2出土遺物 (1/4)

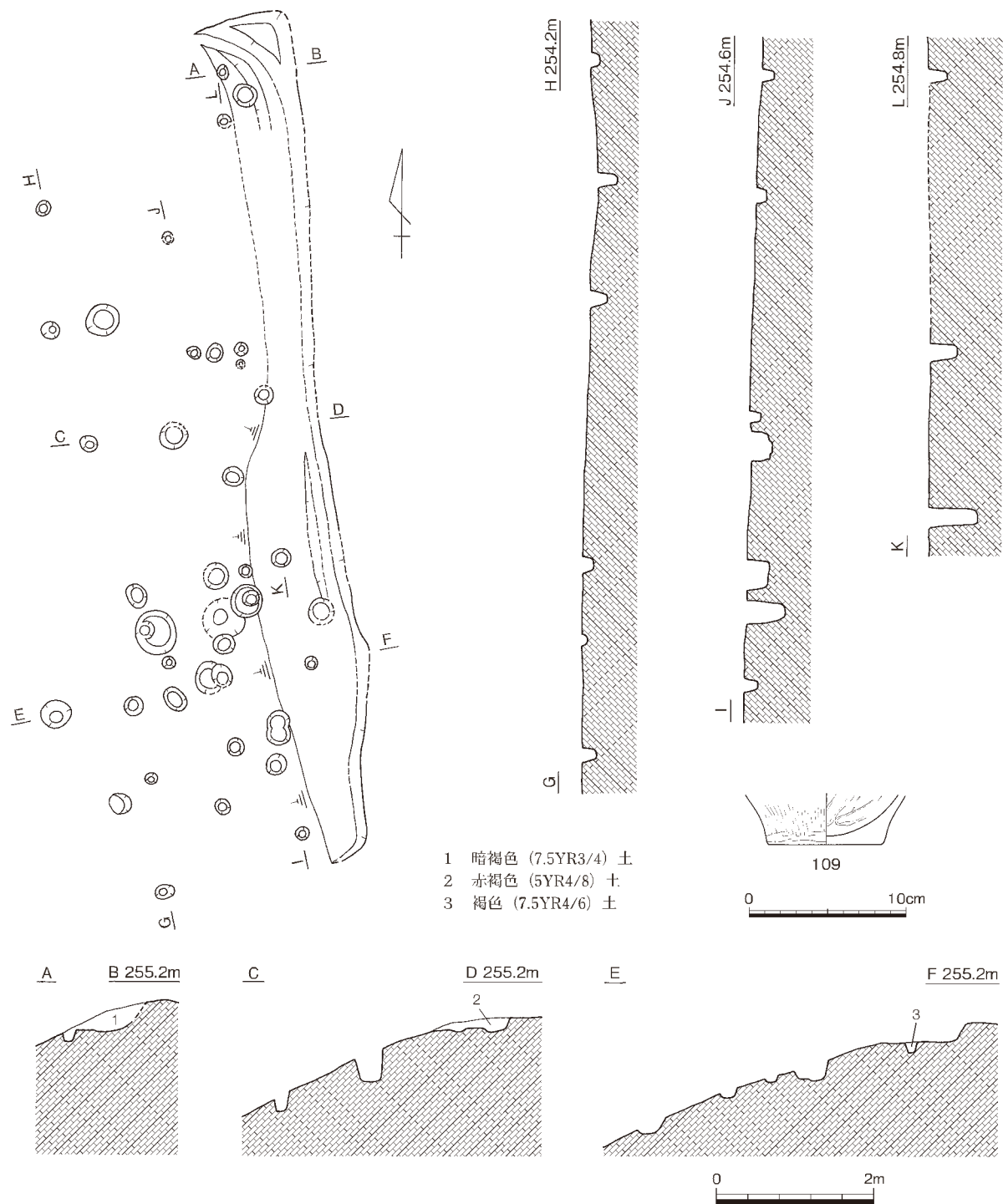


第388図 段状遺構6～8 (1/80)・段状遺構7出土遺物 (1/4)

位置する。段状遺構4は流出が著しく、平坦部が残っていないため、遺構かどうか迷ったが、段状遺構5より上方に位置する柱穴が検出され、段状遺構4に伴うものと考えた。段状遺構5の壁際に溝は検出されなかった。柱穴は比較的多いが、まともは不明である。段状遺構5は竪穴住居7とも重複し、部分的には竪穴住居7に伴う掘削の可能性もあるが判別できない。遺物は土器片がわずかであった。段状遺構4・5の時期は弥生時代後期である。 (物部)

段状遺構6～8 (第373・388図)

段状遺構6～8は、竪穴住居8～15の山側に連なる掘削と平坦部で、掘削の壁面にわずかながら屈



第389図 段状遺構9 (1/80)・出土遺物 (1/4)

曲が認められることから3つに区別した。切り合い関係は不明である。これらの段状遺構は、独自の段状遺構の可能性と、多数の竪穴住居の掘削の結果である可能性、その両方の可能性の3つが考えられる。段状遺構7は竪穴住居13、段状遺構8は竪穴住居14に伴う掘削の可能性はあるが、断定はできなかった。段状遺構6の北部は段状遺構5と重複しているが、前後関係は不明である。遺物は段状遺構7あたりを中心に埋土中から土器小片が40片ほど出土している。甕106・107は埋土上層から、甕108は下層からの出土である。段状遺構7の時期は土器の特徴から弥生時代後期中葉と推定される。(物部)

#### 段状遺構9 (第373・389図)

C群の南半に位置する。南北長は約1,060cmを測る。壁際には幅約30cmの浅い溝が巡る。壁面や床面に明瞭な段差がないことから、1つの遺構と考えた。ただ、北端部で溝と壁が分かれているので、もう1つ重なっている可能性はある。埋土は地山とよく似た土で良く締まっていた。竪穴住居5・8～15や段状遺構6～8に切られており、第389図は竪穴住居の柱穴や深さの浅いものを取り除いたものである。これら残った柱穴のいずれかは段状遺構9に伴うと考えられるが、明確なまとまりは見いだせなかった。

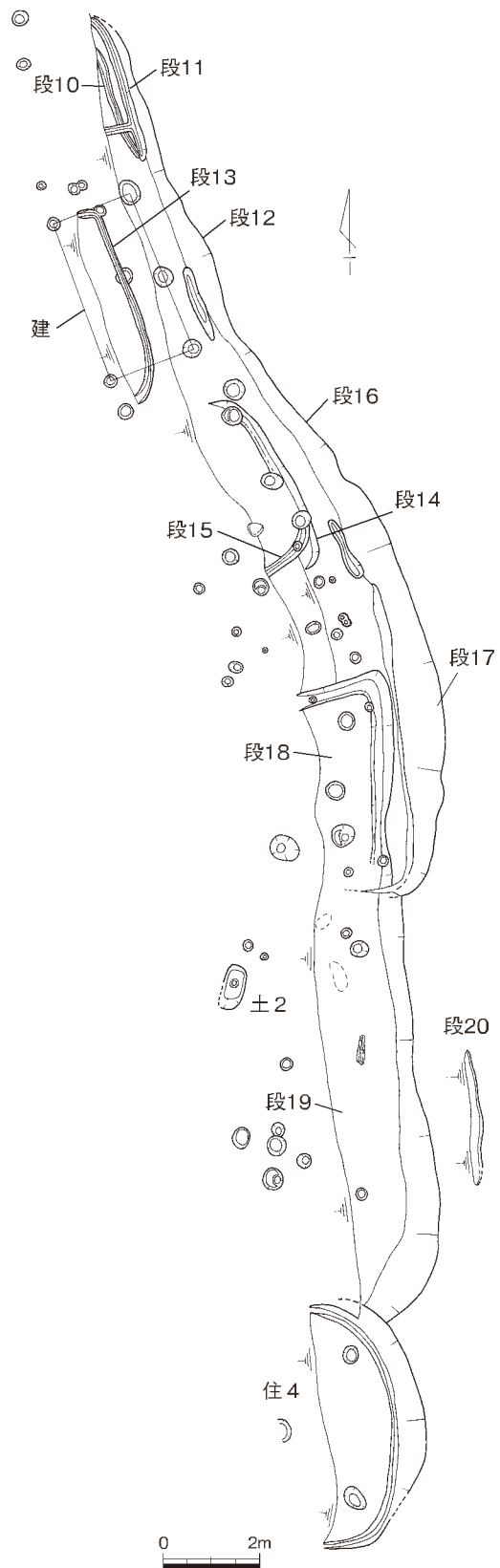
遺物は埋土中から甕109底部が出土した。この他に土器小片が60点ほどあるが、器形の判別がつくものはいずれも古い様相が見られ、段状遺構9の時期は、弥生時代後期前葉と推定される。C群の中で最初に造られた遺構であろう。(物部)

#### 4 D群 (第360・390図、図版63)

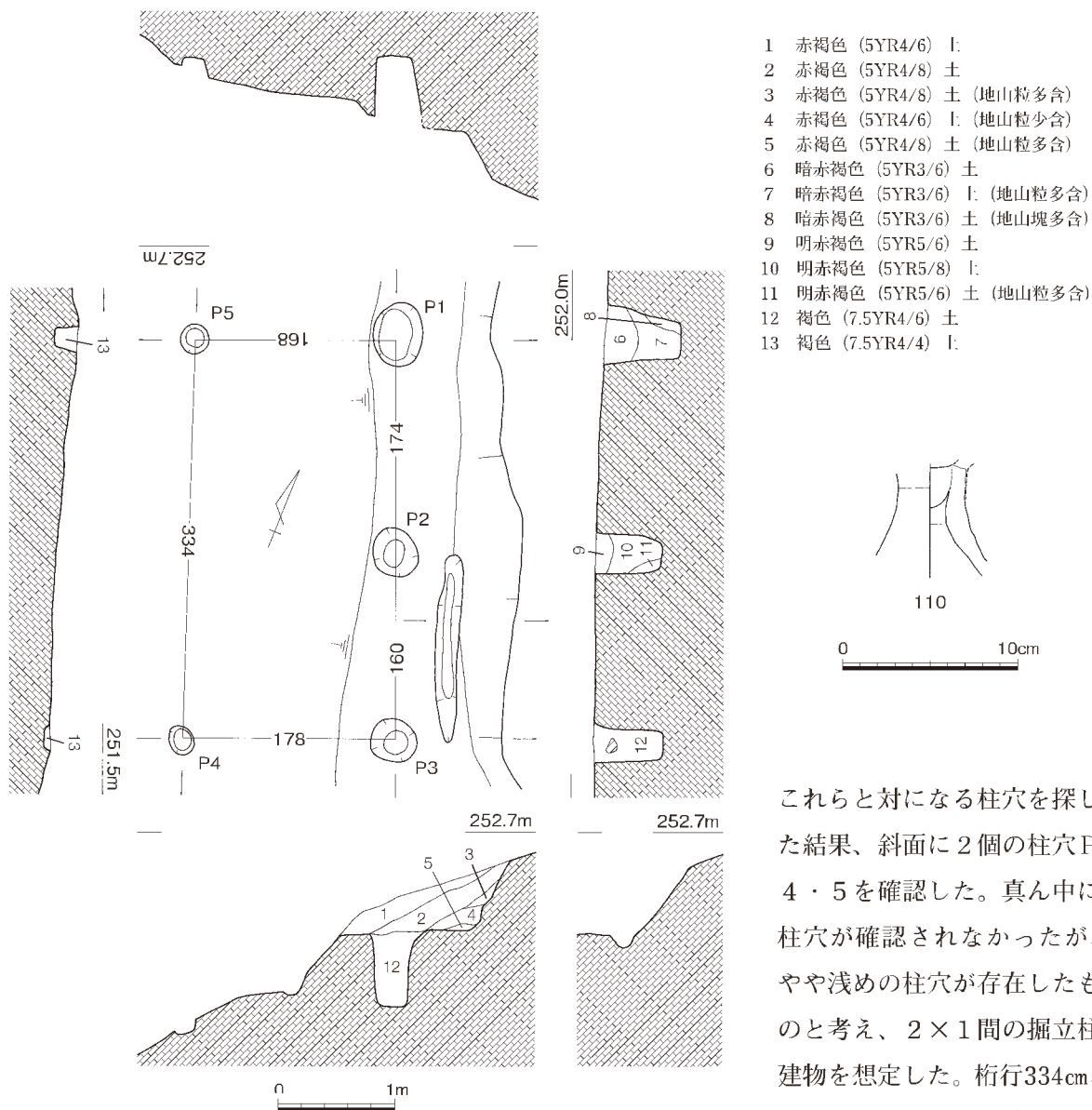
D群はC群の西約3～5m、垂直距離だと約3m下方に位置する。C群と同様に南北に長く連なって、約27mに及ぶ。壁面や床面の形状などから、掘立柱建物1棟、段状遺構11面が抽出される。それらの縦方向の切り合いは確認できたが、横方向の切り合いは把握できなかったものがほとんどである。なお、C群の南端部に竪穴住居4が位置し、後述する土壙2は段状遺構18・19の下方斜面に位置する。(物部)

#### 掘立柱建物 (第390～392図)

D群の北部に位置する。当初、段状遺構12の床面に3個の柱穴P1～3が直線的に並んでいるのが確認できた。柱穴の直径は約35～40cm、深さは60cm前後である。



第390図 D群 (1/150)



第391図 掘立柱建物 (1/60)・出土遺物 (1/4)

に伴う可能性がある。

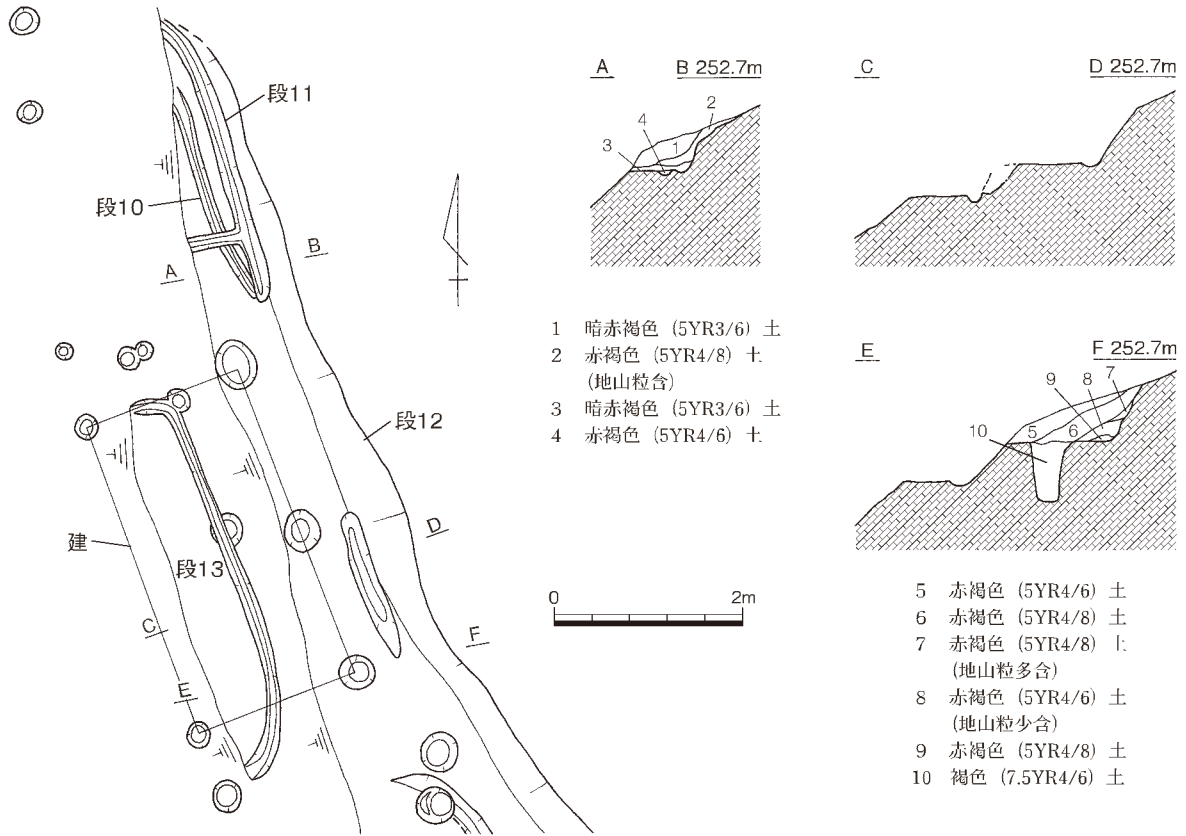
遺物はP1に混入した高杯片110がある。脚柱上部をボタンのような粘土で塞いだもので、掘立柱建物の時期は、土器の特徴から、弥生時代後期中葉と推定される。(物部)

段状遺構10・11 (第390・392・393図)

D群北端部に位置する。壁体溝状の2条の溝が検出された。東側の段状遺構11は幅約20cmで検出長約320cmを測る。西側の段状遺構10は幅約10cm、検出長約240cmを測る。断面で、段状遺構11が段状遺構10を切っていることを確認した。また、段状遺構11の溝から間仕切り状の溝が段状遺構10を切って西に延びている。堅穴住居の可能性もあるが、伴う柱穴が見あたらない。遺物は、段状遺構11埋土中から土器小片が10片ほど出土した。そのうち、111は直口壺と考えられ、112は甕である。段状遺構11の時期は出土土器の特徴から、弥生時代後期中葉、段状遺構10はそれ以前と推定される。(物部)

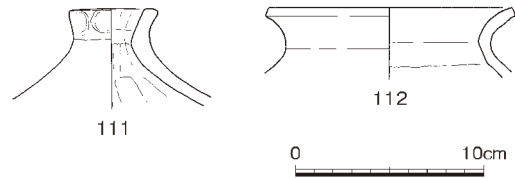
段状遺構12 (第390・392・394図)

段状遺構12は段状遺構10・11の南に隣接する。位置関係から掘立柱建物に伴う造成の可能性が高い



第392図 段状遺構10～13 (1/80)

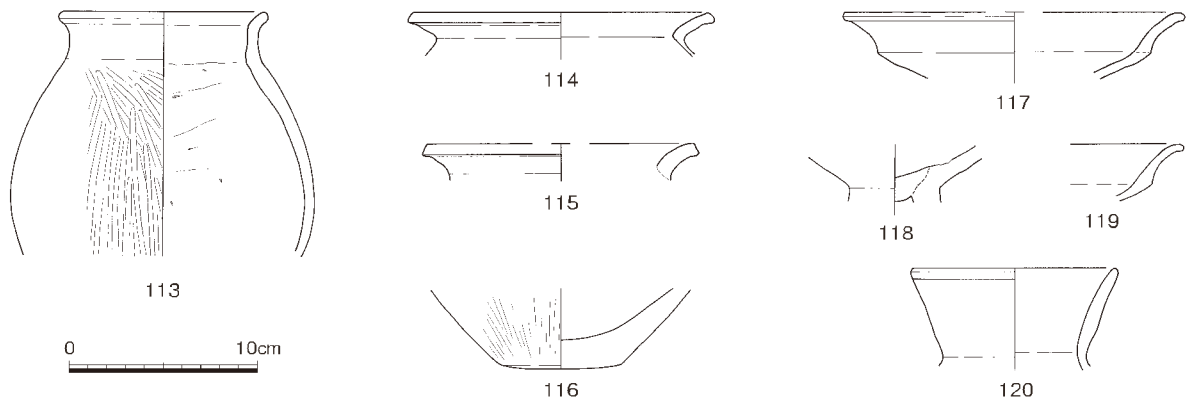
が、掘立柱建物の柱穴とは別の柱穴もあることから、独自の段状遺構が重複しているものかもしれない。壁際に短い溝が検出されたが、本来は壁沿いを巡っていたものと考えられる。周囲の段状遺構との前後関係は明らかにできなかった。遺物は埋土中から土器片が出土した。113～120のうち114～116・118～120は埋土下層から出土した。



第393図 段状遺構11出土遺物 (1/4)

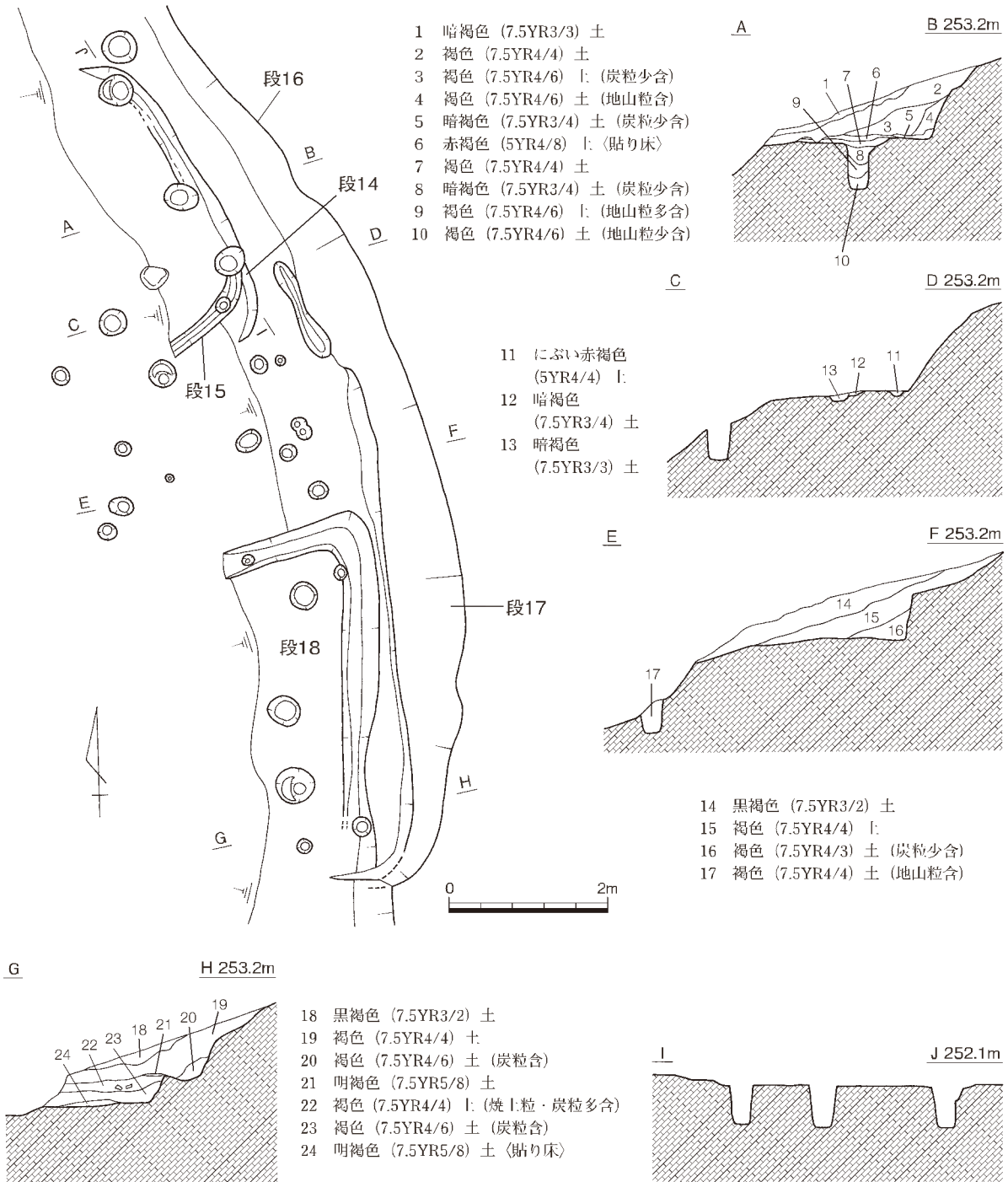
段状遺構12の時期は、土器の特徴から弥生時代後期中葉と考えられる。掘立柱建物と特に時期差はないように思われる。

(物部)



第394図 段状遺構12出土遺物 (1/4)





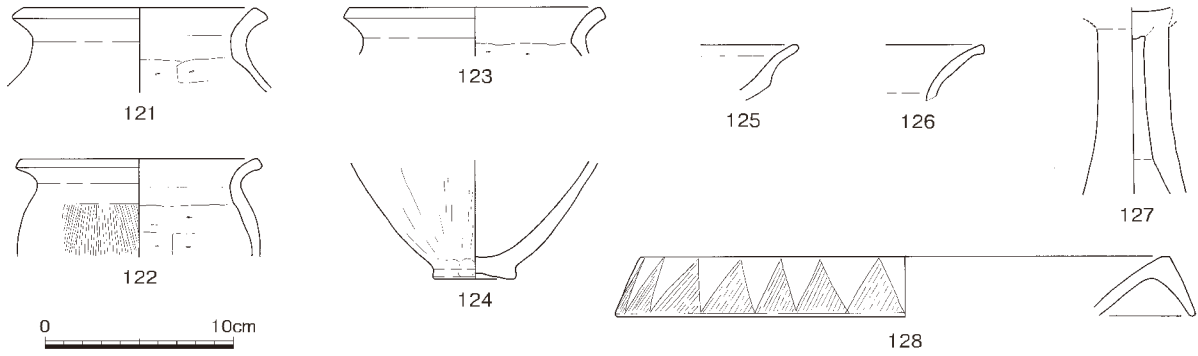
第395図 段状遺構14～18 (1/80)

段状遺構13 (第390・392図)

段状遺構12の西側、斜面下方に位置する。掘立柱建物と重複するが前後関係は不明である。壁体溝状の溝が検出された。溝の北端部は西側に屈曲して、南端は湾曲する。幅は12cmほど、南北長は約420cmを測る。竪穴住居の可能性もあるが、柱穴が定かでない。遺物は土器細片が溝の中から10片ほど出土した。段状遺構13の時期は弥生時代後期である。 (物部)

段状遺構14～16 (第390・395・396図)

段状遺構14～16は、段状遺構12・13の南に位置する。段状遺構12と16とは連続しているようにも思

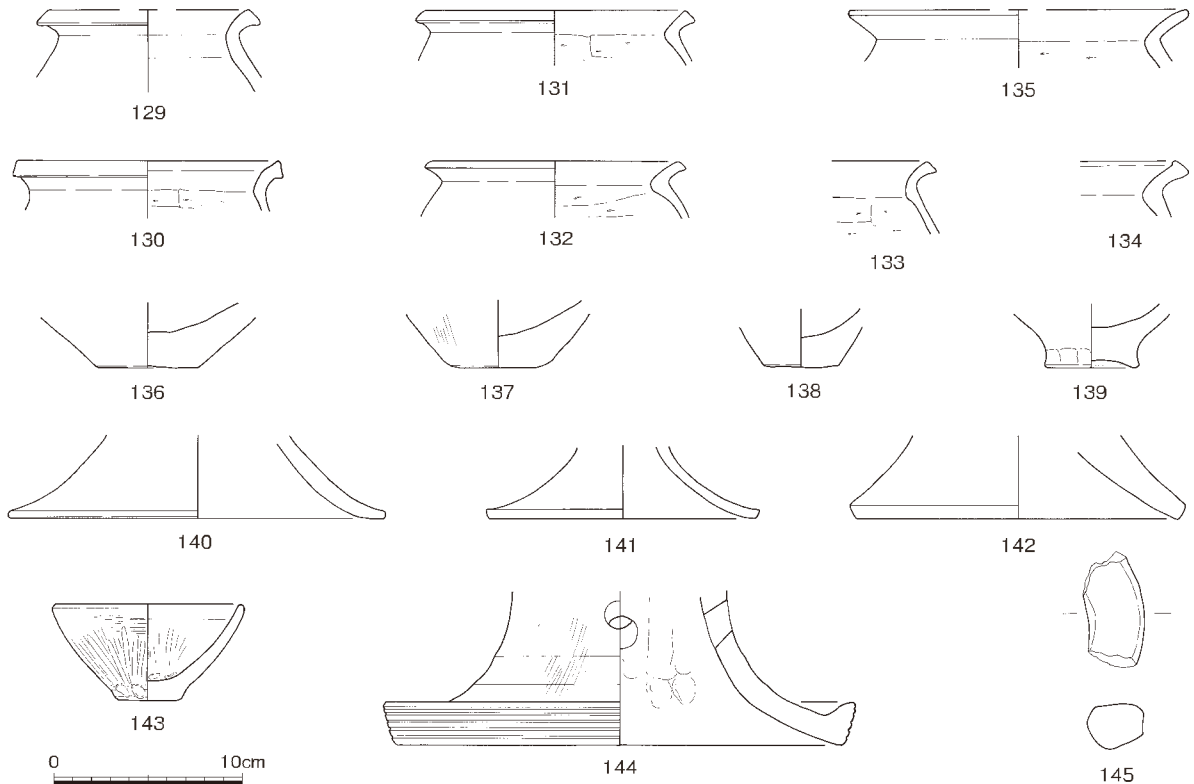


第396図 段状遺構16出土遺物 (1/4)

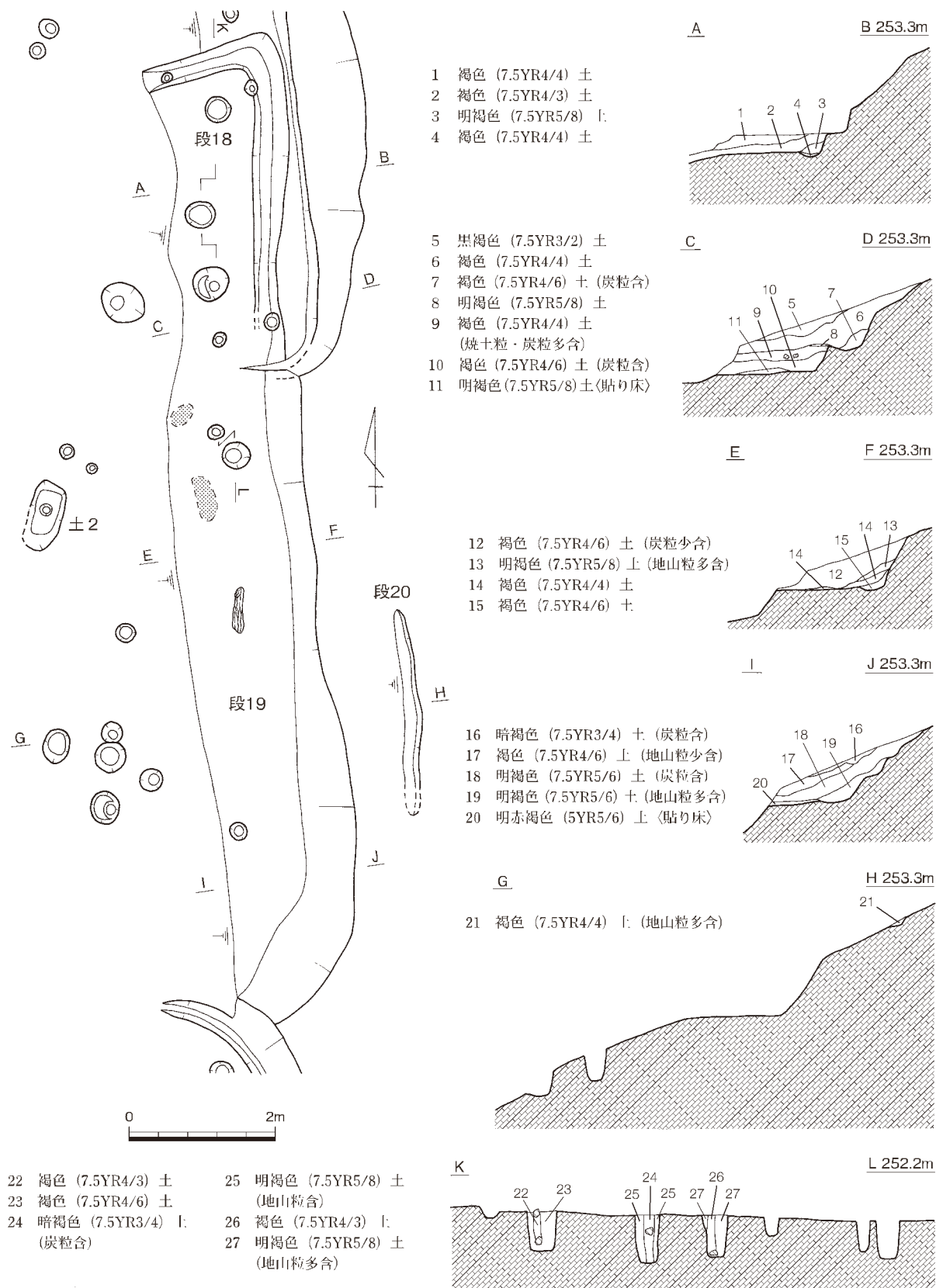
えるが、壁の下場の線が東に曲がってくることから別々の段状遺構と捉えた。切り合いは不明である。また、段状遺構14～16は切り合いが確認され、14→15→16の順で新しい。段状遺構14と段状遺構15はほとんど同一地点で重なっている。段状遺構15は南北端部が西へ湾曲する溝である。南北長約400cmと推定され、竪穴住居とも考えられるが、柱穴が検出されない。段状遺構14は湾曲する段が検出されただけで、規模等は不明である。段状遺構16は壁沿いに短い溝が確認されたが本来は壁沿いを巡っていたと推定される。遺物は、段状遺構16埋土中に土器小片約80片が出土した。掲載した土器は埋土下層出土で、128は器台と推定される。段状遺構16の時期は出土土器の特徴から弥生時代後期中葉と考えられ、段状遺構14・15はそれ以前と推定される。 (物部)

段状遺構17 (第390・395・397図)

段状遺構17はD群の中央部に位置する。壁の下半部は、垂直に近く掘削されており、北側で接する段状遺構16とは区別できたが、切り合い関係は明らかにできなかった。段状遺構17の平坦面は南北長

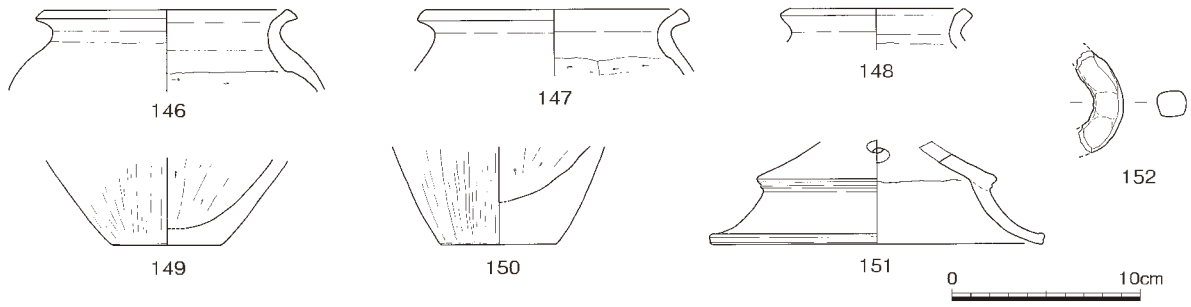


第397図 段状遺構17出土遺物 (1/4)



第398図 段状遺構18~20 (1/80)

約620cmを測る。柱穴もあるが列になるものはない。また、平面的には明瞭ではなかったが、断面を見ると床面が壁際で下がっており、排水用の溝が巡っていたと推定される。遺物は埋土中から約200片の

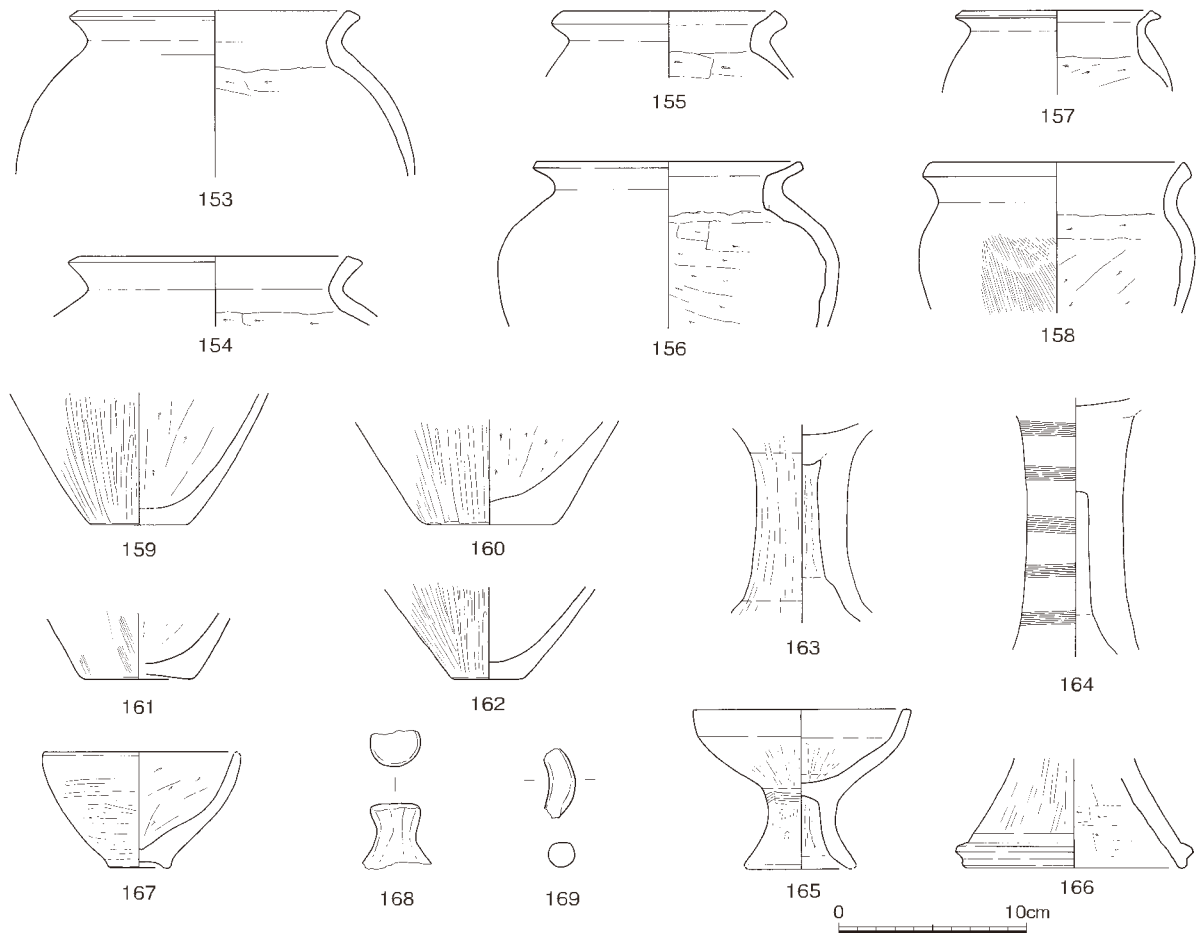


第399図 段状遺構18出土遺物 (1/4)

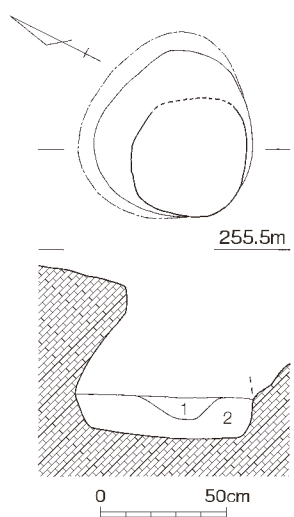
土器小片が出土した。甕は131～135のように、内面に口縁部直下からヘラケズリを施すものが多い。137・138は壺、142は台付鉢の可能性はある。144は器台、145は把手である。段状遺構17の時期は、出土した土器の特徴から弥生時代後期中葉と推定される。(物部)

段状遺構18・19 (第390・398～400図、図版64-4・5)

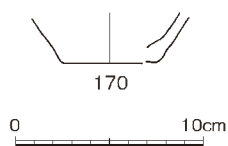
段状遺構18・19はD群南半部に位置し、段状遺構17によって切られている。調査当初、段状遺構18と段状遺構19とは別々のものと考え精査したが、切り合いは見つからなかった。床面の標高は、段状遺構18から段状遺構19にかけて約15cm低くなるが、段差がなく、段状遺構19の方には貼り床が見られる。段状遺構18の壁際には幅30cmの溝が明瞭に認められたが、段状遺構19では不明瞭であった。しかし、2か所の断面土層では溝が確認できるので、段状遺構18と同様に溝が巡っていたものと推定され



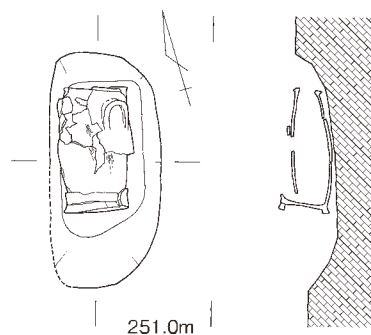
第400図 段状遺構19出土遺物 (1/4)



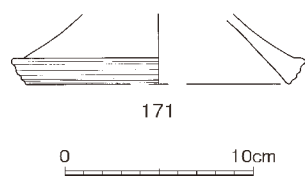
1 褐色 (7.5YR4/6) 弱粘質土  
2 赤褐色 (5YR4/8) 弱粘質土



第401図 土壙 1 (1/30)  
・出土遺物 (1/4)



1 褐色 (7.5YR4/6) 土



第402図 土壙 2 (1/30)  
・出土遺物 (1/4)

る。これらのことから、段状遺構18・19は南北長約1,300cmを測る一連の遺構と捉えたい。段状遺構19南半の平坦面には、精査したにもかかわらず柱穴が見つからず、元々なかったと考えられる。段状遺構中央部の埋土中には焼土粒や炭粒が多く混入し、床面には被熱面2か所と、炭化材が1個検出された。上屋が焼け落ちた痕跡か、生活の痕跡か判別し難い。炭化材は「シキミ」と樹種同定された。遺物は埋土中から土器片が比較的多く出土した。段状遺構18北半部と段状遺構19南半部で時期差はないように思われ、いずれも甕は内面ヘラケズリが頸部よりやや下がった位置まで施されているのが留意される。これらの土器はD群の出土土器の中でもやや古い様相を呈することから、この段状遺構はD群で最初に造られた可能性が高く、弥生時代後期前葉と推定される。(物部)

#### 段状遺構20 (第390・398図)

段状遺構19の東側、斜面上方に位置する。段状遺構19に伴う可能性もあるが、定かでない。時期は埋土より他の遺構と同様に弥生時代後期と考えられる。(物部)

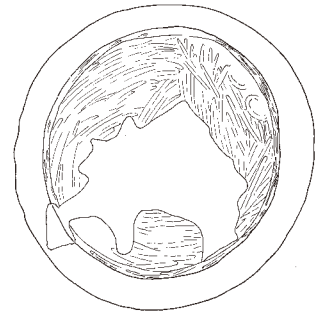
### 4 土壙

#### 土壙 1 (第359・401図、図版64-6)

土壙 1は竪穴住居3の北約1mに位置し、尾根筋に立地する。平面形は円形を呈する。検出面での直径は約45cm、内部の最大径は約70cm、検出面からの深さは約60cmを測り、断面形はフラスコ状を呈することから、袋状土壙と考えられるが、規模は非常に小さい。遺物は、埋土中から甕底部170が1点だけ出土した。土壙 1の時期は、この土器の特徴から弥生時代後期中葉と推定される。(物部)

#### 土壙 2 (第359・390・398・402・403図、写真36、図版64-7・65-2)

土壙 2は西側斜面の下方に位置する。D群とした遺構群の南部にある段状遺構18・19のすぐ西側である。土壙の平面形は、長軸約90cm、短軸約45cmを測る隅丸長方形を呈する。長軸は等高線に平行しているの、地形に沿って掘削されている。この土壙 2の内部から、円筒形をした大形の土器172が検出された。底部があるので容器と考えられるが、横位に納められていた。土器棺墓の可能性があり、内部の土を水洗したが、歯のようなものは見られず、その確証はつかめなかった。土器が壺や甕とは違い、特殊な形なので墓ではない可能性もある。土壙 2の位置関係から、段状遺構18・19との関連



172

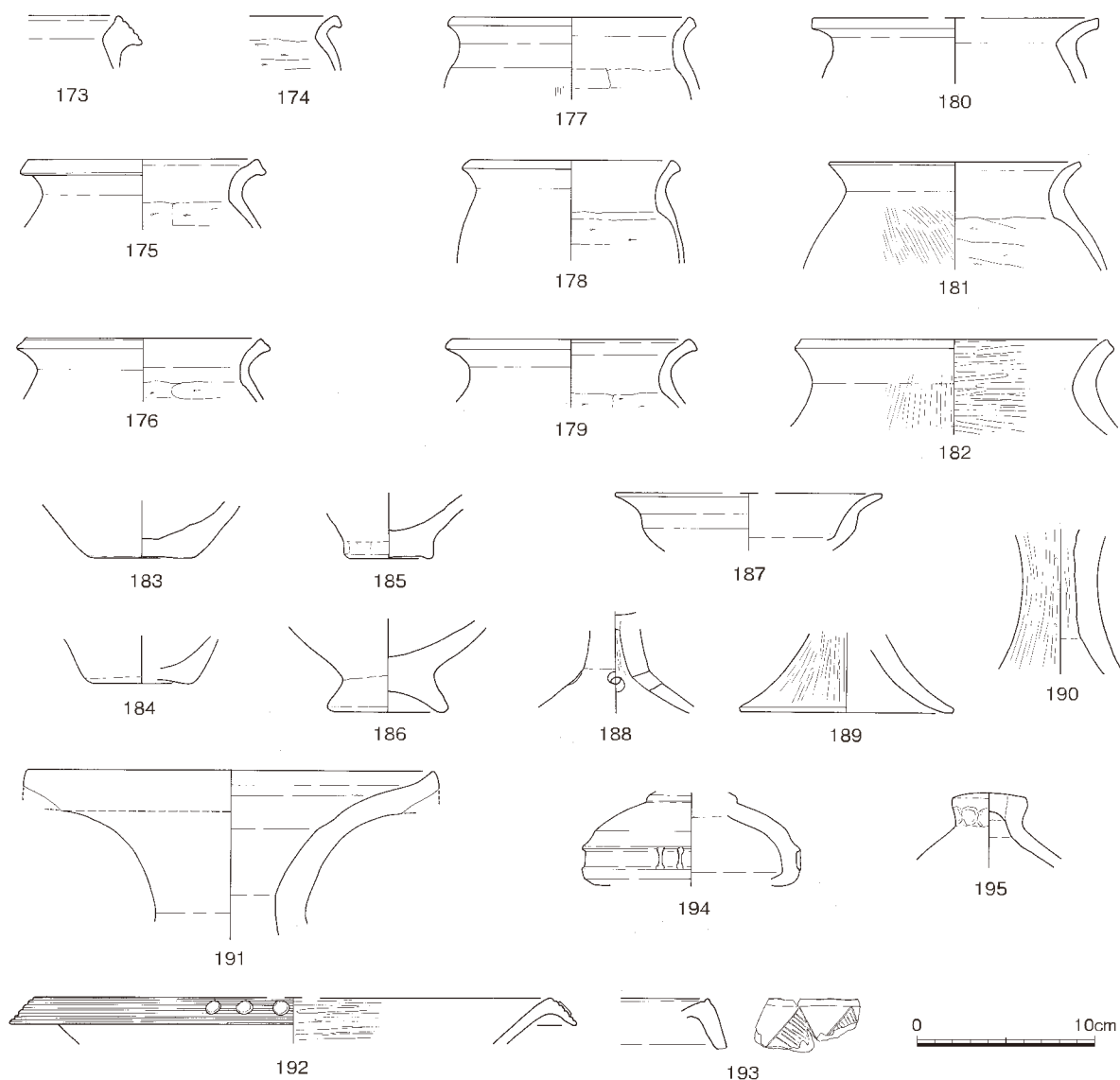
写真36 土器172把手部（内側から）

第403図 土壌2出土遺物（1/6）

性を指摘できるが、土壌2の底面で浅い柱穴を検出し、この柱穴は段状遺構に伴うものと考えられるので、土壌2は段状遺構18・19よりも新しいと推定される。ただ、土器の時期差は見られないことから、土壌2の掘削は段状遺構18・19の機能停止直後、あるいは改修時に行われた可能性がある。

出土した土器は類例を見ないものである。器高約50cm、胴部幅約20cmの大形品で、底部に幅、高さとも2.5cmほどの高台を貼り付けている。外面の調整はハケメの後、ヘラミガキを施すが底部にもヘラミガキが見られる。内面は口縁部までヘラケズリである。「U」字形の把手は胴部に差し込んで固定し

ている。図中の空白部分は、その多くが細かく割れて接合できなかったところである。ただ、米印の空白のみ検出時から穴が開いていて土器片も見られなかったことから、少しいびつな形であるが、土器を埋納する時点で穴を開けたか、開いていた可能性はある。土壇2の時期は、土器の特徴や埋土上部に混入していた高杯171から弥生時代後期前葉と推定される。(物部)

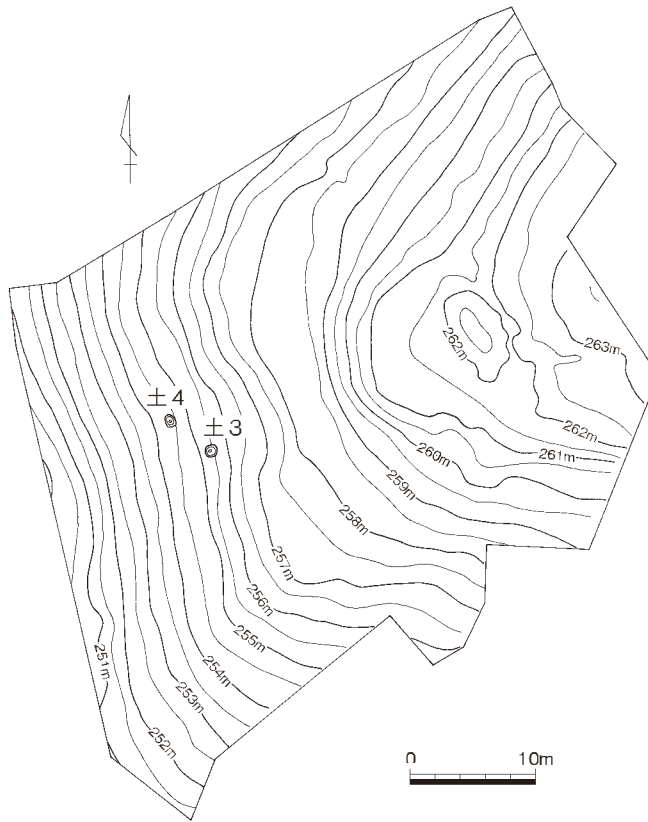


第404図 遺構に伴わない遺物 (1/4)

### 5 遺構に伴わない遺物 (第404図)

流土中から出土した遺物で、遺構の時期と同様に弥生時代後期前葉から中葉にかけての土器である。高杯188はかなり短脚なので、後葉の時期に入るのかもしれない。191～193は器台と思われる。192・193は口縁部が「へ」の字状に垂れ、鋸歯文や円形浮文などの文様を施す。受け部の器壁はかなり薄い。194は小形の装飾壺で、胴部に断面三角形の突帯が2条巡る。下側のは突帯と言うより段と言う方がいいかもしれない。その間に縦方向に2本ずつ粘土を貼り付けている。胴部下半はかなり屈曲して内側に曲り込む特徴がある。195は蓋である。(物部)

### 第3節 その他の時期の遺構・遺物



第405図 その他の時期の遺構配置図 (1/600)

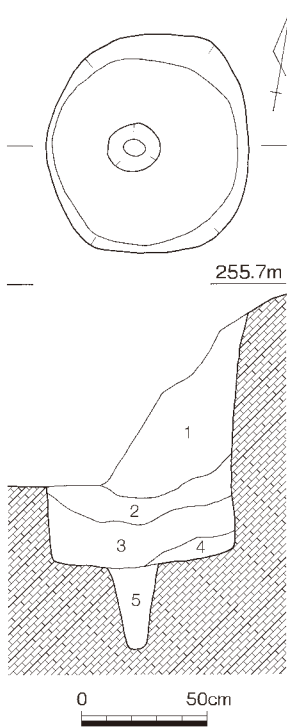
#### 1 概要

落とし穴と考えられる土壌が約3mほど離れて2基検出された。立地は丘陵尾根の平野部に面した西斜面である。平地との比高差は約42mである。また、布目瓦が見つまっている。(物部)

#### 2 土壌

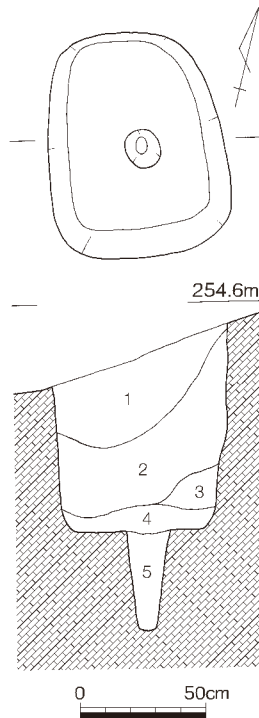
土壌3・4 (第405～407図、図版64-8)

土壌3は直径約80cmの円形で、深さは約100cm。土壌3は段状遺構4・5に切られている。遺物はなく、形態や切り合いから弥生時代中期以前で、縄文時代にかけての落とし穴と推定する。土壌4は長軸約90cm、短軸約70cmの隅丸長方形で、深さは約80cmを測る。底面中央に小穴がある。埋土は地山と類似する。(物部)



- 1 褐色 (7.5YR4/6) 土
- 2 赤褐色 (5YR4/8) 土
- 3 褐色 (7.5YR4/6) 土
- 4 褐色 (7.5YR4/4) 土
- 5 褐色 (7.5YR4/6) 粘質土

第406図 土壌3 (1/30)



- 1 褐色 (10YR4/4) 土
- 2 褐色 (10YR4/6) 土
- 3 褐色 (7.5YR4/6) 土 (地山粒含)
- 4 褐色 (10YR4/4) 土
- 5 にぶい黄褐色 (10YR4/3) 土

第407図 土壌4 (1/30)





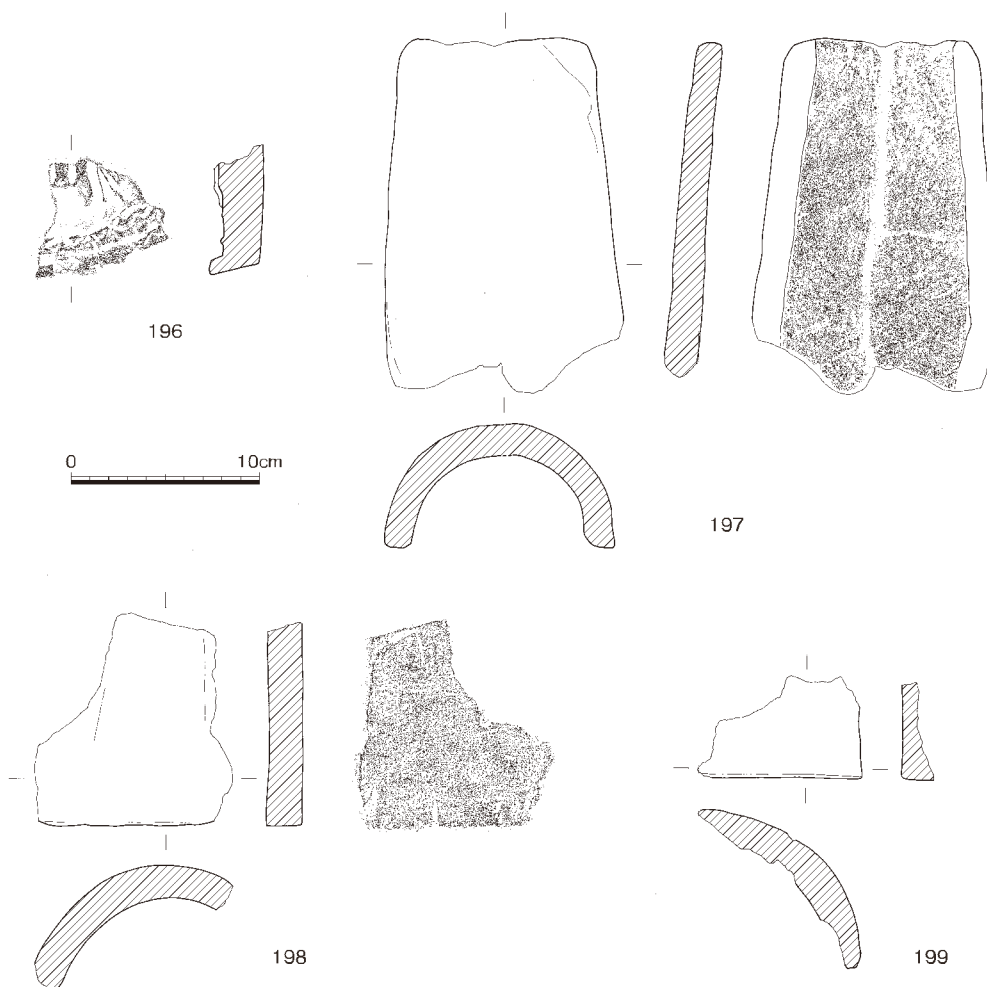
第408図 瓦出土位置図 (1/2,000)

### 3 遺構に伴わない遺物

(第408～410図)

196以外は第408図網掛け部分に集積した状態で出土した。

196は複弁八弁蓮華文軒丸瓦である。今岡廃寺で同種の瓦が出土しているが、196は鋸齒文縁になっているのに対して、今岡廃寺出土瓦は素文縁であり異なる。時期は7世紀第4四半期と考える。197～199は丸瓦である。幅に大小あり、今岡廃寺の丸瓦と同様の傾向を示す。



第409図 その他の時期の遺物① (1/4)



第410図 その他の時期の遺物② (1/4)

200は顎面施文軒平瓦である。顎面部分は厚さ1cmほどの粘土を貼り付け、その後に貼り付け突帯を2条付す。突帯は断面三角形で鋭い。7世紀第4四半期のものとする。201～203は平瓦である。201・203は凹面に布目圧痕が明瞭であるが、202の凹面には幅1.2～1.6cmほどの板状工具によるハケメ痕跡がある。201には模骨痕が観察できる。203の凹面には粘土板糸切り痕が認められた。(上榊)

参考文献 佐藤寛介『今岡廃寺』岡山県大原町教育委員会 2002

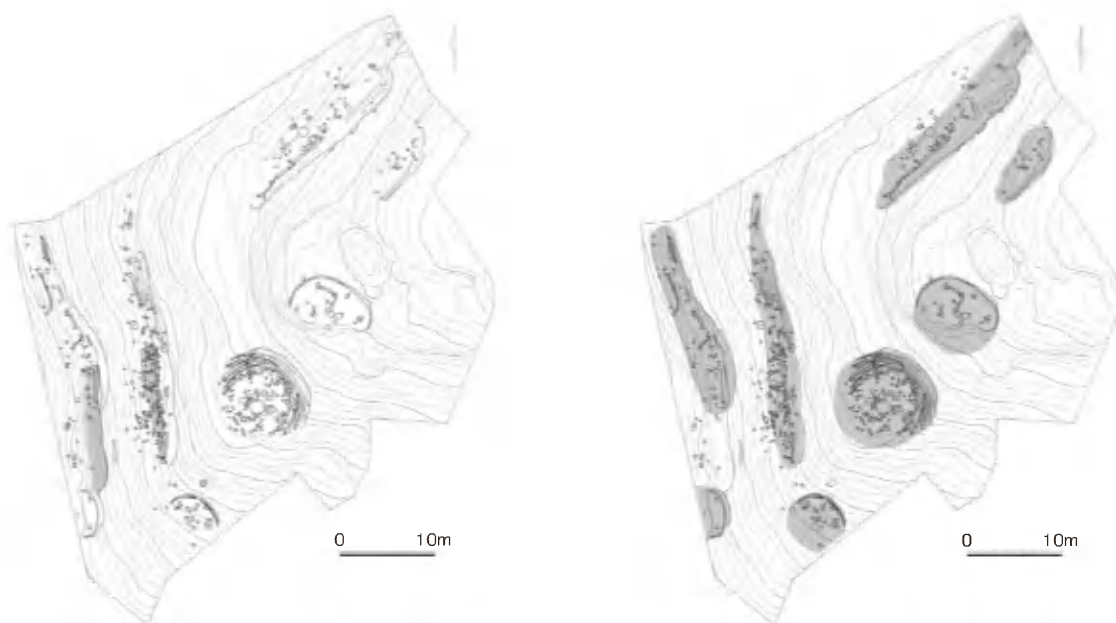
## 第4節 小結

注目されるのは遺構の配置である。尾根筋に立地する円形の竪穴住居4軒と、斜面に立地する段状遺構を主体とする遺構群4か所がそれぞれセットになっているように見える。竪穴住居と遺構群の床面と平坦面の標高を比べると、竪穴住居1～4はそれぞれ300cm前後の高低差があり、AからDの遺構群も300～400cmの高低差がある。そして、竪穴住居1とA群は110cm、2とBは130cm、3とCは60cm、4とDは80cmほど、遺構群の方が竪穴住居より高い位置にあり、取り決めでもあったのではないと思われるような数値である。問題になるのは各遺構の時期である。出土した甕には内面のヘラケズリが頸部のやや下で止まるものと、口縁部直下までくるものが見られ、段状遺構9と段状遺構18・19には前者しか確認できないことから、初期の遺構と推定される。これら以外は前者と後者が混在し、出土遺物も少ないことから細かく時期を見ることが困難であるので、断定はできないが、それほど土器の形態に違いがないことから、円形の竪穴住居や遺構群が同時に機能した可能性もあると思う。真庭市（旧久世町）樋が鼻遺跡でも円形の竪穴住居と小形の竪穴住居や段状遺構群がセットになる状況が見られ、今後注目したい。土壇2から出土した土器172は現在のところ類例を見ない。円筒状容器形土器とでも呼ぶべきか。山陰から北陸にかけて多く出土している木器の桶の一種に、上げ底である点、ややエンタシス状になる点などや、大きさ自体が類似するものがあり、現段階ではその木器の写しの可能性を指摘するに留めたい。竪穴住居3出土の鼓形器台47から山陰との関係がうかがわれる一方、竪穴住居5出土土器は一括遺物と捉えられ、高杯101や器台103の特徴は、兵庫県赤穂市東有年・沖田遺跡竪穴住居1・2出土土器に類似する。また、B群出土の広口壺99は茶褐色の胎土で生駒西麓産の可能性が高い。さらに、竪穴住居2に見られる造り出し部（張り出し部）も、弥生後期には兵庫県南吉田遺跡や川除・藤ノ木遺跡、周世入相遺跡など播磨地方に比較的多く見られるようなので、播磨方面からの影響も同時に推定される。

(物部)

弥生時代後期前葉

弥生時代後期中葉



第411図 穴が途遺跡変遷図 (1/800)

## 第9章 穴が遼古墳

### 第1節 遺跡の概要

穴が遼古墳は、東から西に緩やかに下がりながら延びる尾根に位置する。尾根は標高259.0m付近で傾斜が急になり平野へと下っているが、その傾斜変換点の上方に古墳は存在した。古墳は、吉野川の流れと平野を一望することができる、眺望の良好な場所を選地して築造していた。古墳が位置する尾根の西側には、南北1,500m、東西500mほどの平野が広がっており、その中央を緩やかに蛇行しながら、吉野川が南流する。平野は南北の端部がすぼまる、胃袋に近い形状で、南側に向かい少しずつ傾斜する。古墳の位置する尾根のすぐ西側で測った平野の標高は215.0mで、古墳との比高差は44mである。

古墳は1976年3月に行われた分布調査により正式に認識されたようで、1978年に岡山県教育委員会が発行した『岡山県遺跡地図』（第5分冊）で周知されている。ただし、周辺住民には、それ以前から知られる存在であったらしく、1976年の分布調査の時に作成された遺跡調査カードには、「昭和30年頃 大原中学発掘の計画あり」と記録されている。なお、この計画が実行されたという記録はない。



第412図 穴が遼古墳位置図 (1/4,000)

穴が途古墳の本調査は2005年4月に開始した。調査前年度には、周辺の伐採作業を完了させており、その段階で墳丘が明確に確認できる状態であった。そこで一次調査は行わず、本調査から開始することになった。調査前年度には、周辺の環境整備の後に古墳周辺の地形測量図を作成しており、古墳の平面形や規模を把握した。この段階で、すでに墳頂部で石が確認され、石室の一部が露出している可能性が考えられた。また、測量時には弥生土器を採取しており、弥生時代の集落の存在も想起された。

2005年4月には、前年度に実施した測量の成果をもとに、墳丘部分を中心とした610mを調査範囲として、発掘に着手した。墳頂部には石室のものと思われる石材の一部が露出していたため、それと尾根筋を鑑みて土層観察用の土手を設定した。土手は尾根筋におおよそ直交するように1か所、それに直交するように1か所設け、墳頂部のほぼ中央で交わるようにした。土手の設定後、調査区全体の表土掘削を行った。墳頂部では表土掘削後すぐに石の並びが検出できたため、この並びをもとに石室全体の検出に取り組んだ。その結果、墳頂部は大きく削平されていたこと、石の並びは石室の東側壁であり、主体部は奥側から見て左片袖式の横穴式石室であること、天井部は石室内部に崩落していること、側壁の一部も崩落しており、特に西側壁の破壊が著しいことなどが明らかになった。また、羨道の破壊も著しく、築造当初の高さを復元することは困難であった。羨道には閉塞石が残っていたが、残存する側壁の頂部までは閉塞しておらず、調査以前にすでに開口していたことが分かった。

石室内部には、長さ120～130cmの石が並んで見つかり、崩落した天井石と考えた。石室の幅は230～250cmを測ったため、天井石の大きさと比較して、側壁は持ち送り技法により構築されていたと判断できた。そして、比較的残りが良好な東側壁についても、上部はかなり壊されていることが明白となり、墳頂部の削平を追認した。天井石を除去した後、埋土を掘り下げて床面の検出に取り組んだ。埋土を掘り下げていくと、人頭大の石が散らばった状態で検出されたが、これらは壁体に用いた石材である。その中には薄く平らな石も認められ、棺台の可能性も考えたが、棺を支えるような並びは認められなかった。なお、掘り下げは土層観察用の土手を残して行ったが、木棺などの痕跡は確認できていない。また、鉄釘も出土しておらず、棺については使用の有無も含めて判然としなかった。

床面には1～10cm大の川原石が敷きつめられており、その直上で副葬品が出土した。副葬品は奥壁側と袖部側に分かれて出土したが、袖部側の遺物は原位置を保っておらず、破片しか出土しないものもあった。追葬の可能性もあるが、石室が一時開口していた可能性があることから、盗掘を受けた時に動いたとも考えられる。記録作成の後、遺物を取り上げ、川原石を除去して石室を解体した。

石室の解体と同時に墳丘の調査に取り掛かった。墳丘の調査では土層観察用の土手を再設定して、掘り下げを行った。その結果、墳丘は地山の削り出しと盛り土により構築していることが明らかとなった。石室は地山に掘り方を設けて築造しているが、上半部以上は盛り土を行いながら同時に石室を構築する。盛り土は大きく5段階に分けて行い、石室の築造工程と密接な関連が認められた。盛り土の最初の3段階については、厚さ10cmほどの土層が幾重にも重なっており、入念な工法を採用したことが明白となった。石室築造のための1次墳丘と考えられる。そして、1次墳丘を覆うように2次墳丘を盛る。なお、1次墳丘、2次墳丘ともに、造成時には基礎となる石列を巡らせていた。

盛り土、石列を全て除去し、削り出された地山面まで検出。石室は完全に解体し、掘り方を設けた状態まで調査を進めた。掘り方の壁面、床面の一部には幅10cmほどの筋が認められたが、掘削時の道具の痕跡と考えた。道具痕跡の先端は弧を描いており、U字形鍬鋤先を用いたことが推測できる。

全ての記録を作成して、10月14日に調査を終了した。

(上梅)

## 第2節 墳丘

## 1 墳丘 (第413～415図、図版69)

前述したように、穴が盗古墳の墳頂部は削平を受けていた。また、古墳周辺は、後世に畑地として活用されたが、耕地造成に伴い墳丘斜面も削られており、それは墳丘の西側で顕著である。

また、古墳の周囲には、現在まで活用されていた道が存在する。道幅は1～3mで、東側斜面から古墳に向かい降りてきて、墳丘が盛り上がる部分で2つに分岐していた。分岐点はちょうど周溝と重なる。分岐した道は古墳の南北に延びて、谷地へと下っていく。南側に続く道は、石室の入り口前を通っており、当時の墓道をほぼそのまま踏襲した可能性が高い。

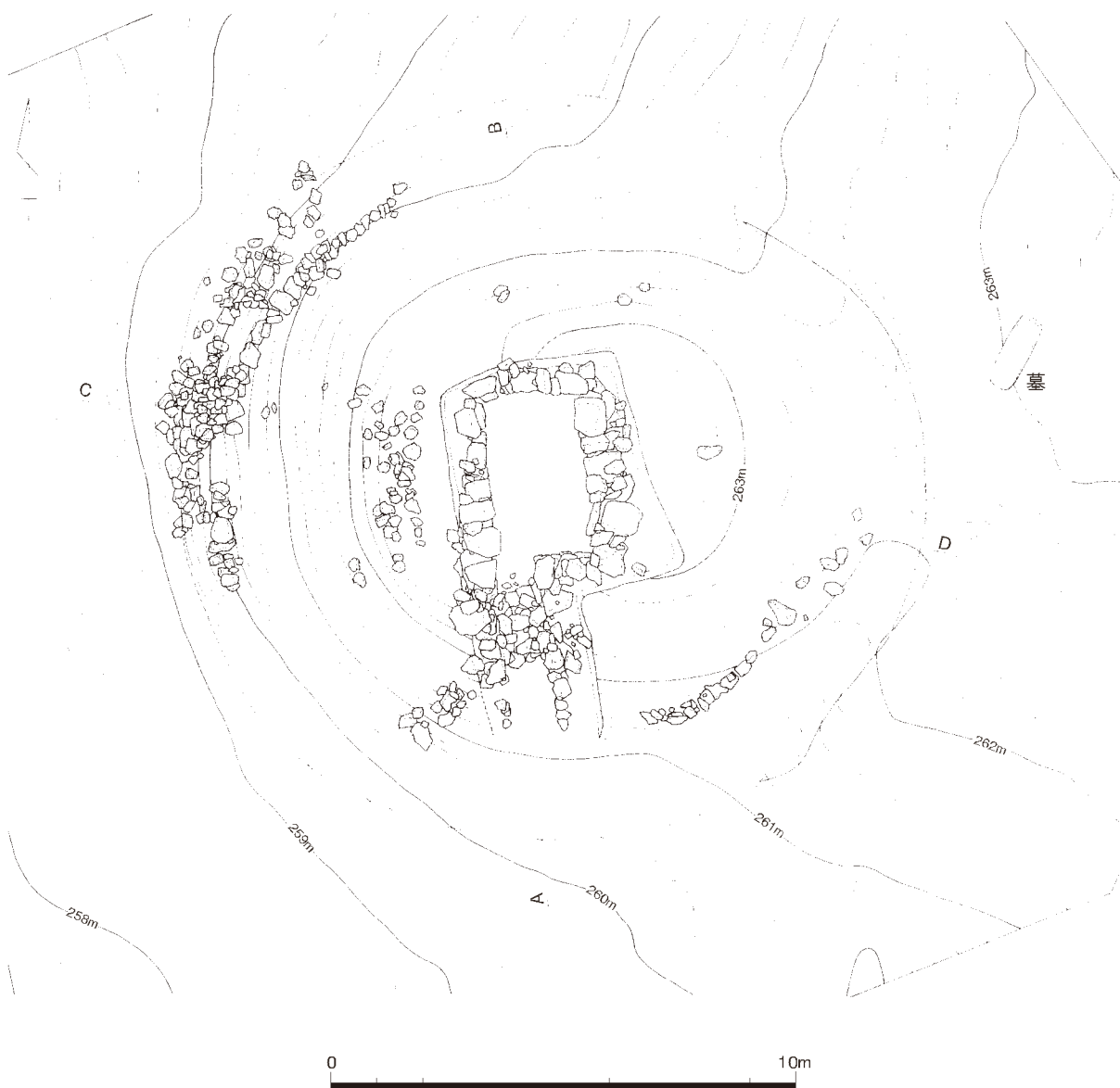


第413図 調査前地形測量図 (1/200)

墳頂部、墳丘斜面ともに後世の改変が認められた。そのため平面的、立面的な規模については、正確な数値が割り出せたわけではない。提示できる墳丘の数値データは、現状での計測値である。穴が途古墳は直径17mほどの円墳で、残存した高さは西側で420cm、東側で120cmを測るが、築造当初の規模は現状より一回り大きかったと考える。古墳の東側には周溝を巡らせており、墳丘を画している。

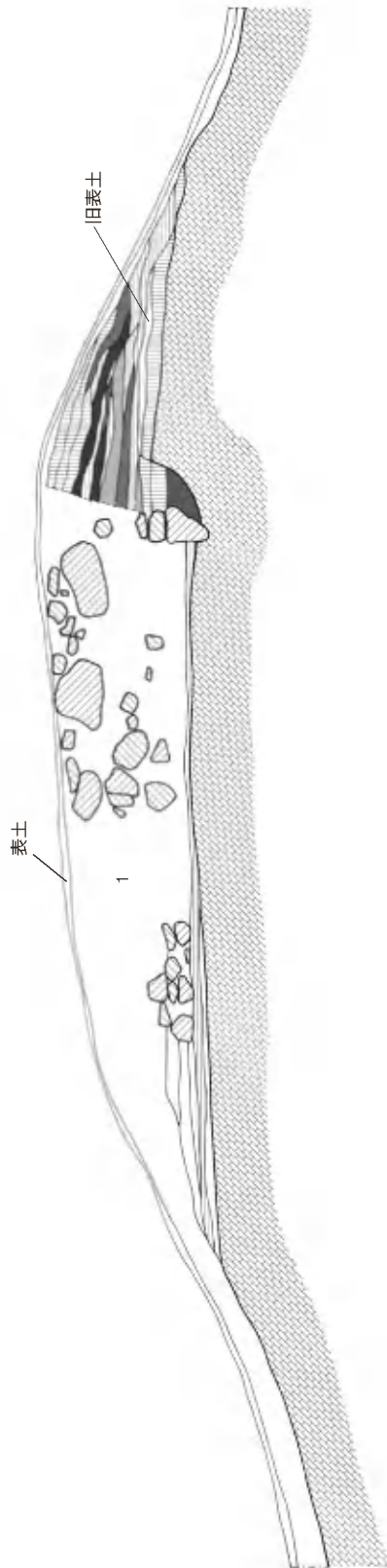
周溝は古墳の東側にもみ掘られており、緩やかに弧を描く平面形を呈する。南北両端部に向かうにつれて、幅、深さともに減じており、底部の標高は徐々に低くなっていく。周溝の幅は60~100cmで、深さは10~45cmを測った。埋没した周溝の窪みは、後世に道として活用されたと考えられる。

古墳は地山削り出しと盛り土により築造する。盛り土は大きく5段階に分けて行ったようで、石室築造の1次墳丘として3段階（第1~3段階）、墳丘造成のための2次墳丘として2段階（第4、5段階）が認められた。1次墳丘は、厚さ10cmほどの盛り土を幾重にも重ねて入念に行う。石室の西側斜面では第3段階盛り土を施しながら、石列を配置していた。石列は石室西側壁に平行するよう配置する。続く2次墳丘では、第4段階盛り土を行いながら東西裾部ともに第5段階盛り土の基礎となる石列を配置していた。石列は第5段階盛り土により覆われ、視覚的効果は期待できない。（上梅）

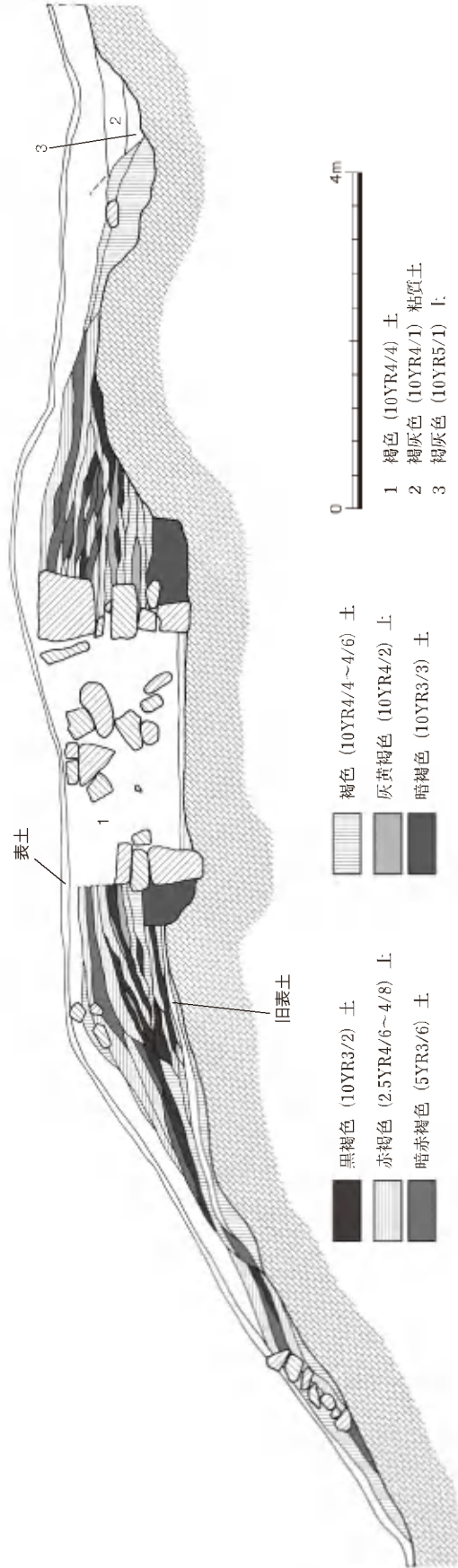


第414図 墳丘測量図 (1/150)

B 264.0m

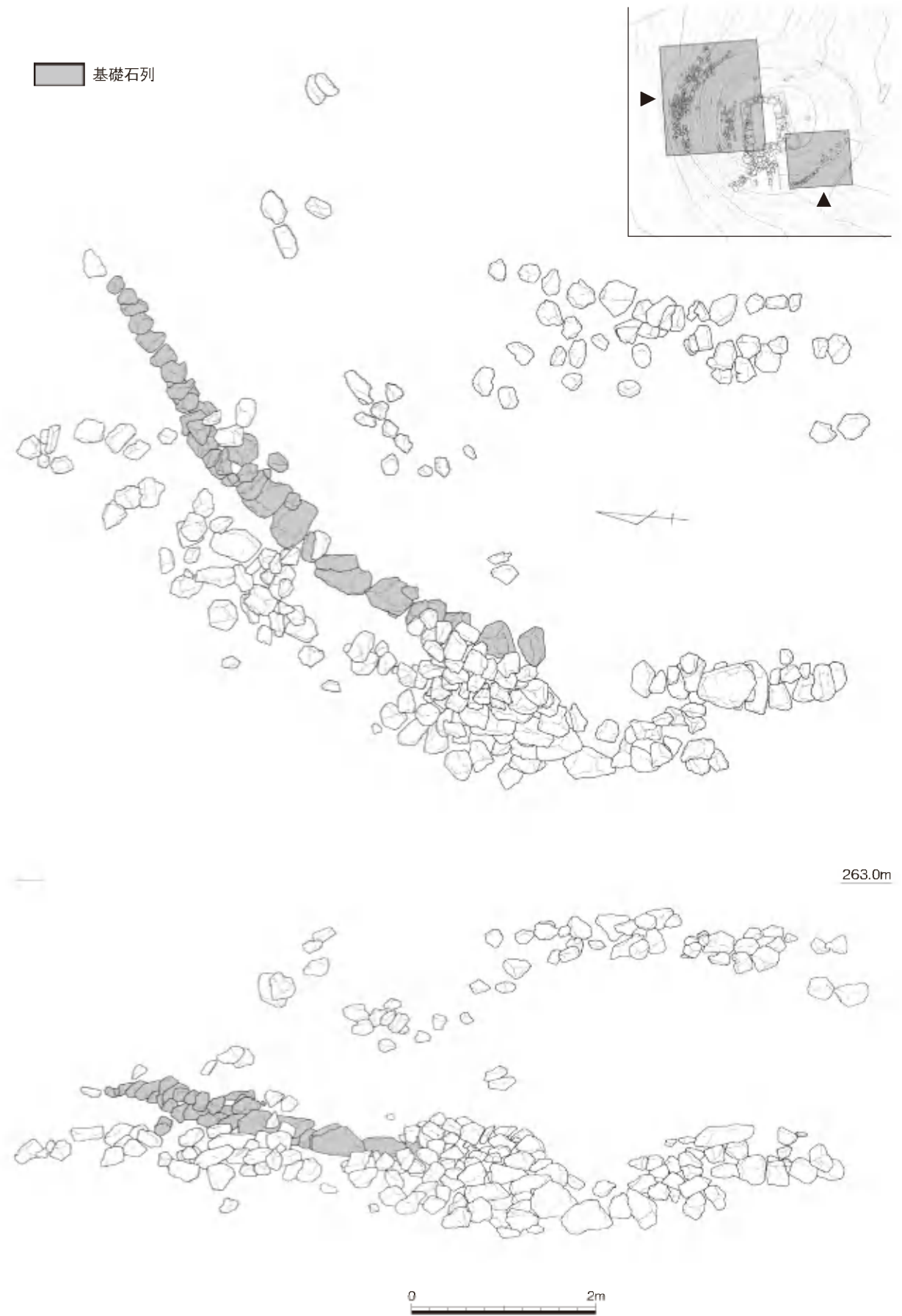


D 264.0m



第415図 墳丘・石室断面図 (1/80)





第416図 西側石列 (1/60)

## 2 石列 (第414~417図、図版70・71)

古墳の東西斜面には石列を巡らせていた。東側石列は、石室の入り口から継続するように、10~70cm大の石材を円弧を描くように配置する。位置としては、ちょうど弥生時代竪穴住居（穴が途遺跡竪穴住居1）の直上に当たる。この部分は、後述するように地山ではなく住居埋土を削り出したため、墳丘の地盤としては脆弱だったのであろう。脆弱な地盤を補強するために、東側石列は配置されたと考える。石列は第4段階盛り土を施す過程で配置しており、第5段階盛り土で完全に覆い隠した。

対する西側は、大きく2か所に石列が配置されていた。まず、現状での墳頂の肩部に、石室西側壁と平行するように20~50cm大の石を並べていた。この石列は第3段階盛り土を施す過程で、内部に組み込まれたものである。もう1か所は、墳丘の裾部である。裾部の石列は、上記の石列や東側石列とは異なり、石垣状にしつらえるという特徴を示す。まず、地山削り出し段階で段を造り出し、そこに石列を巡らせる。これを石垣の基礎とする。そして、この基礎石列の前面に第4段階盛り土を行いながら、石を積み上げて石垣状とした。石垣状石列は、60~70cm大の大形の石材を基底として、墳丘盛り土を施しながら、基底石の上に20~40cm大の石材を積み上げて構築する。所々が抜け落ちており、縦目地も通らないことから、一見すると乱雑な積み方に見えるが、横目地は比較的通っていた。墳丘に向かい内傾するように石を置き、それを固定するように逐一盛り土を施す。このような構築法を採用したため、横目地が通ったと考えられる。西側裾部に配置した石垣状石列も、最終的には盛り土（第5段階）で覆うため、視覚的効果を目的とした施設ではないことは明白である。（上楕）



第417図 東側石列 (1/60)

### 第3節 主体部

#### 1 掘り方 (第418・419図、写真37)

地山を掘削して設けた石室掘り方は、石室と同様に左片袖状の平面形を呈する。このことは、掘削当初から左片袖の横穴式石室を築造する企画が存在し、その企画をもとに作業に入ったことを示す。ただ、袖部に相当する部分は、奥壁側と比較すると必要以上に拡張していた。この拡張部分は、弥生時代の竪穴住居（穴が途遺跡 竪穴住居1）と重複し、当然のことながら、住居の建築段階ですでに地山が掘削されていた場所にあたる。おそらく、掘り方の掘削にあたっては、地山を掘るという共通認識のもと作業を行っていたため、地山がすでに掘削されていた袖部は掘り過ぎてしまったのであろう。同様の状況は掘り方底面でも確認できた。掘り方底面も住居の建築により地山が掘られていたが（第421図第4層）、住居部分だけ奥壁側よりも深く掘り過ぎていた。なお、底面の掘り過ぎ部分は、掘削終了後に地山混じりの土で埋め戻して整地している（第421図第3層）。上の状況から、掘り方の玄室部分は、当初は長方形状を計画していたが、結果として袖部が広がる台形状になったと考える。

掘り方は玄室部で長さ495～500cm、幅は奥側で390cm、袖側で460cmを測った。深さは東側が100cm、西側が60cm。羨道部は長さ290cm、幅250cmで、現状の深さは東側が30～70cm、西側が10～60cmを測る。

掘り方の底面と壁面の一部には、掘削時に使用した道具の痕跡が明瞭に残っていた。道具痕跡は玄室の北東角から東壁の地山面に集中する。石室ではちょうど奥壁と東側壁の裏側にあたる。痕跡は単位が判別できる部分で幅10～12cmを測り、先端は弧を描くような形状を呈していた。先端の形状から、使用した道具はU字形鍬鋤先である可能性が高い。道具の動きとしては、壁面では上から下に向かい、底部では南から北にスライドした様子が認められる。ただし、刃先を嵌めた道具の形状までは判然とせず、鋤と鍬両方の可能性がある。北東角の底面と壁面の境には、細かな整形痕が集中した。この部分は角を造り出すことを意識して、少しずつ削って整形した様子が窺える。（上梅）

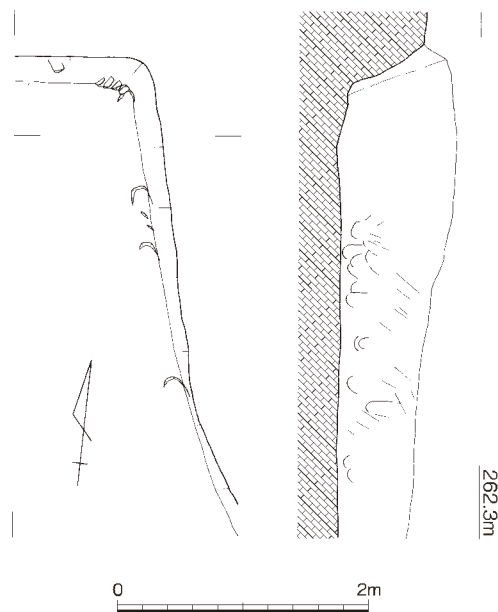
#### 2 閉塞施設 (第420図、図版76)

閉塞施設は、玄門よりちょうど玄門石分だけ羨道に入った所から、長さ130cmほどの範囲で、高さ50～60cm分が残存していた。閉塞では石室石材と同じ石材を使用していた。大きさは5～40cm大と様々であるが、30～40cm大のものが中心を占める。一見、無秩序に積まれたような印象を受けるが、玄室側については羨道側壁と直角になるように並べており、さらに平らな面を玄室側に向ける意図が見受けられた。そして、段を形成させながら積み上げたようで、玄室側については現状でおおよそ3段確認できる。対する入り口側については、後世の攪乱によるのか、積み方に明確な意図を読み取ることは困難であった。閉塞は石材のみではなく、内部には土も詰まっていた。ただし、閉塞施設の外表を覆う粘土などは認められなかった。

閉塞方法を復元する。まず玄門石を基準として設置位置を決め、次に羨道側壁と直角になるよう石を並べる。そして、その石列の裏込めに石と土を盛る。この石、土盛りを土台にして、さらに段を築きながら石を積む。そして、このまま段を形成させつつ石を積み上げて、羨道を完全に封じたのであろう。ただし、閉塞施設の入り口側部分には、玄室側と同様の段は認められなかった。（上梅）



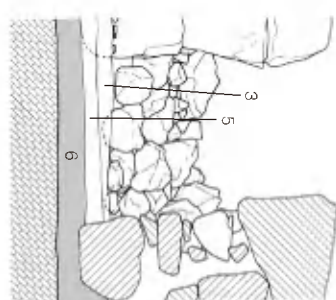
第418図 石室上面・掘り方 (1/60)



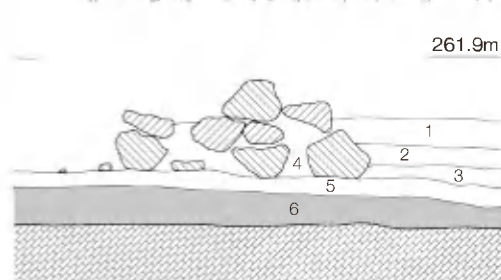
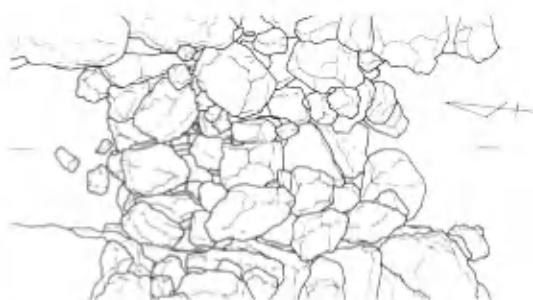
第419図 掘り方掘削道具痕跡 (1/60)



写真37 掘り方掘削道具痕跡 (西から)



- 1 灰黄褐色 (10YR4/2) 土  
(灰白色 (10YR8/2) 土塊多含)
- 2 にぶい黄褐色 (10YR4/3) 土  
(明黄褐色 (10YR7/6) 土塊多含)
- 3 黒褐色 (10YR3/1) 土
- 4 黒褐色 (10YR3/2) 土
- 5 赤褐色 (2.5YR4/8) 土  
(黄棕色 (7.5YR7/8) 土塊多含)
- 6 黒褐色 (5YR3/1) 土  
(穴が溢遺跡 竪穴住居1)



第420図 閉塞石 (1/40)

## 3 横穴式石室（第421図、図版72・73-2・3・77）

穴が途古墳の埋葬施設は、奥側から見て左片袖式の横穴式石室である。石室の主軸はN-6°-Eで、南側に開口する。全長は、現状で700~710cmを測る。天井石は全て失われ、側壁も西側を中心に崩落が著しかった。そのため築造当初の高さについてはまったく情報が無い。現状での最高位は床面から180cmである。天井や側壁の崩落は羨道でも玄室と同様で、入り口の正確な位置などは不明である。

玄室は長さ350~360cm、幅230~240cmを測り、高さ180cm以上で、床面積はおおよそ8.6㎡となる。東側壁はわずかに弓形状に反るように、西側壁はほぼ直線的だが玄門部付近で少し開くように基底石を配置していた。この形状を反映して幅は奥側が230cm、中央部と玄門側が240cmとなる。

奥壁、側壁は、基底石から2~3段目で横目地を通す意図が窺えた。特に奥壁、東側壁は、東側玄門石の高さで目地が通る。西側壁については西側玄門石の高さとは不揃いで、それを基準とした形跡は窺えない。西側壁も東側玄門石の高さを基準として、奥壁からの継続で築造した可能性が想起されるが、西側壁は損壊が激しいためその是非は確認できなかった。奥壁、東側壁の2~3段目より上は、特に縦目地の通りが悪く、奥壁では斜行するような積み方が確認できた。ただ、横方向については標高262.2m付近でおおよそ目地が通り、北東および南東角では両壁に石材を掛け渡していた。基底石から1~2段目までは主として長方形石材を平積みにするが、それより上では不整形の石材を平積み、小口積みなど様々な積み方を採用している。石材の大きさは20×20~80×60cmと様々で、石材同士の隙間には1~5cm大の石を詰める。ただ、おおまかな特徴として、基底石から3段目までの石材は比較的小形のものを使用し、それより上に大形石材を用いる傾向は指摘できる。

側壁は持ち送りを行いながら積み上げる。基底石には下に根固め石を噛ませたものもあり、玄室に平らな面を向けるようにしていた。そして、2、3段目も平らな面をほぼ垂直に積み上げる。持ち送りは東側壁の4段目、ちょうど掘り方の東側肩部の高さから顕著になる。なお、西側壁については、持ち送りの状況は確認できなかった。西側壁も東側と同様の持ち送りをしていると仮定すると、側壁を180cmまで積み上げた段階で石室幅は床面直上より80cm減の150~160cmとなる。天井石の幅は120~130cmを測ることから、東側壁も上部数段は完全に失われて今日に至ったと考えることができる。

袖部は幅140cmを測る。基底部には石材を2個置き、西側のそれが玄門石にあたる。ともに高さ50cmの石材を使用し、石室築造の基準石と考えた。玄門石の幅は80cmで、基底石の中では最大である。

玄室の床面には川原石を敷きつめる。使用石材は1~10cmで、細長い卵形や円形、平坦なものなど形状に統一性はない。ただ、奥側に大形で平らな石を、東西壁際に中形の石を、中央部から玄門部に小形の石を主に用いており、適当にばらまいた状況とは言い難い。基底石の下に潜り込んだ石は認められず、側壁構築後に敷いたことが分かる。なお、川原石の下には厚さ5cmの整地層が認められた。

羨道は長さ350cm、幅90~100cm、高さは西側壁で135cmを測る。玄室の基底部は東側玄門石の高さに揃える傾向が窺えたが、羨道の西側壁は西側玄門石の高さに揃えていた。ただ、それは西側玄門石から2~3石までで、それ以南は横目地は通らず小形の石材を使用する。西側玄門石の上にはその2倍ほどの長さの石材を乗せる。最大の石材は100×65cmを測る。東側壁は、現状では縦、横目地とも通らない。ただ、東側玄門石から2個の基底石は比較的大形の石材を、それ以南は小形石材を使用し、この点では西側壁と同様の状況である。閉塞石の南端は、側壁の基底石が小形の石材に転換する場所であった。なお、閉塞施設から入り口部までの長さは、現状で200cmを測る。 (上梓)



## 4 遺物出土状況 (第422・423図、写真38、図版74・75)

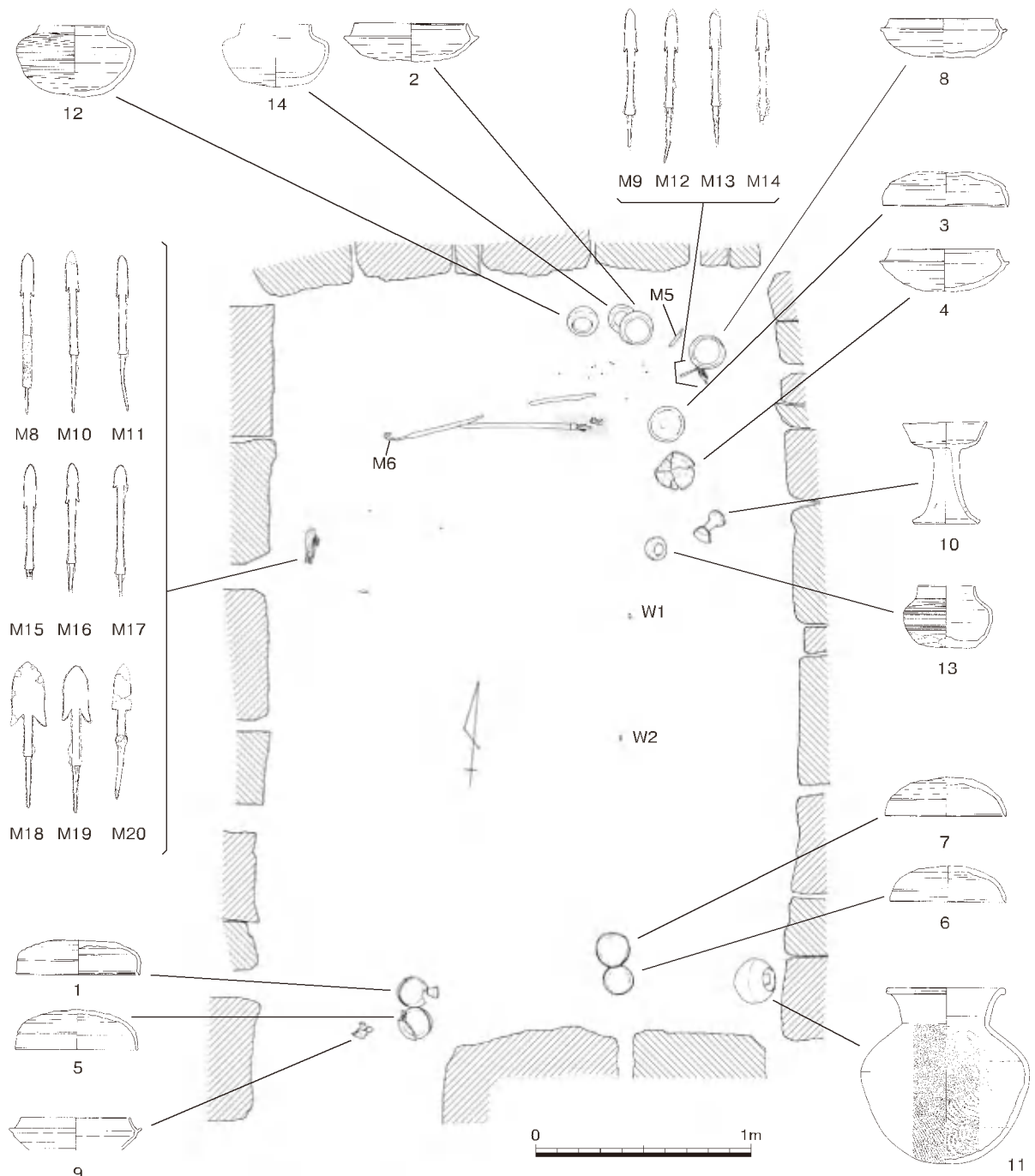
須恵器、金属器、装身具が出土したが、出土位置は玄室の南北に大きく分かれる。出土状況から玄室奥側は原位置をほぼ保った状態だが、南側は袖部の角に位置する壺11以外は、原位置を保っていない。特に、杯身9は1/8程度の残存率で、副葬当初の状況とは言い難い。石室の外部からは、杯身16や鞆の引き手金具M21・22が出土したこと、さらに玄室南側の遺物出土状況も踏まえると、追葬に加えて後世の盗掘の可能性もある。閉塞施設の上部が崩されていたことも、盗掘の可能性を示唆する。

須恵器は大きく玄室の南北に分かれて出土した。北側の玄室奥側については、北東角に8点が集中する。8点のうち杯身、短頸壺が3点ずつ、杯蓋、高杯が1点ずつ出土。側壁の崩落により破損したり動いた形跡が認められるものもあるが、基本的には副葬時の原位置を保つと考える。その中で杯蓋3、杯身4の出土した位置と状況は注目される。3と4は隣接して出土した。3は4の北側にあり、東側壁からの距離はともに60cmほどである。3は天井部を、4は底部を上に向けて置いていることから、棺台もしくは枕として使用した可能性が想起される。

南側の須恵器は、袖部の広口壺11以外は、原位置を保っていない。11は頸部から口縁部の一部が損なわれていた。側壁の石材が崩落して損壊したと考える。また、袖部から玄門部にかけて、杯蓋4点、杯身が1点出土した。杯身9については、前述のように破片であり、玄門部に転がっていることから、原位置から動いたと考える。杯蓋の4点は、いずれも天井部を下に向けていた。杯蓋を杯身のような状態で使用して副葬した可能性も考えられる。これら南側出土の須恵器と北側のそれとの間に、大きな時期差は認められない。特に杯蓋1は、形態や大きさなどから北側の杯身2とセット関係になる公算が高く、出土位置の違いを副葬時期の差と断定することは困難である。

金属器は、玄室奥側に偏る。中でも注目すべきは鉄刀の出土状況であろう。M1は銀装円頭大刀である。刃先を西に向けており、奥壁とほぼ平行するように出土した。柄頭は茎部から3cmほど北側に遊離しており、柄間に巻いた金属線の一部が両者を結ぶように伸びていた。柄頭を人為的に外して、副葬したと考える。M1の刃先の下に重なるようにM2を置く。M2はM1とは異なり、刃先を東に向けていた。奥壁にわずかに斜行する。M2の柄部には装飾は認められなかった。「コ」の字状に曲がった馬具M6は、M2の柄部に接するように出土した。M3はM1の北側15cmに位置する鉄刀で、奥壁とほぼ平行し、刃先を西に向けて置いてある。これら3振の鉄刀は、奥壁に平行するような置き方である。その置き方と出土位置、そして上述の須恵器3・4を棺台もしくは枕として利用した可能性を考慮に入れると、鉄刀の南側に東頭位で一人埋葬した可能性が想定できる。なお、床面の川原石は、M1から北側が平たい大形のものを使用しており、床の状況も埋葬位置と副葬位置で異なることになる。ただし、棺の種類や有無については、土層や遺物から確認できていない。鉄鏃は、北東角で尖根式鉄鏃が4点、西側壁際で1束が見つかった。西側壁際の鉄鏃束は、刃先を北側に向けて西側壁とほぼ平行するように置かれており、尖根式鉄鏃と平根式鉄鏃が混在する。

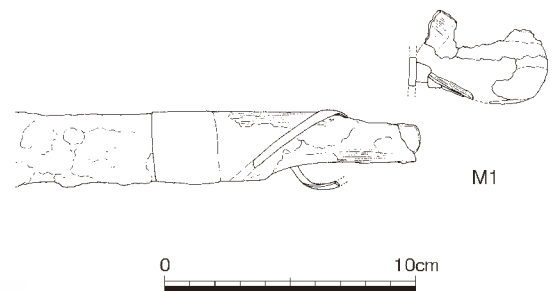
遺体に装着したと考えられる装身具は、ばらばらの状態で出土した。ただ、北東角のM1の北側にガラス小玉10点が集中する。前述したが、遺体の埋葬位置はM1の南側と考えた。しかし、ガラス小玉の集中的な出土状況から、M1の北側にも埋葬を行った可能性がある。ただ、ガラス小玉の出土点数は少なく、またそれぞれが向きを異にして出土したため着装状態は復元できなかった。その他の装身具は個別の状態でも出土したため、盗掘時に落とされた可能性も考えられる。(上梅)



第422図 遺物出土状況 (1/30)



写真38 鉄鏃束出土状況 (北東から)



第423図 銀装円頭大刀 (M1) 出土状況 (1/3)



## 第4節 古墳出土遺物

### 1 須恵器 (第424図、図版78・79)

須恵器は14点出土した。いずれも床面直上ではあるが、前述のように原位置を保っていないと考えられるものも認められた。杯蓋5点、杯身4点、短頸壺3点、高杯1点、広口壺1点が内訳である。

杯蓋は、いずれも天井部を反時計回りのヘラ削りで仕上げ、天井部と口縁部の境に溝を1条巡らせている。溝は、1・3・7が幅2mm前後でシャープであるのに対して、5・6は幅4～5mmで浅い。見込み部は、1・5・7がヨコナデの後に仕上げナデを施しており、3・6は当て具の痕跡を残す。3は仕上げナデを行っていないため、成形段階の粘土紐の単位が明確に残っている部分があった。その部分の粘土紐は、幅1cmほどである。外形は、1のように体部と口縁部の境に明瞭な稜が認められるものと、6・7のように稜がなくドーム状を呈するもの、その中間のような形態の3・5がある。

杯身も、天井部は反時計回りのヘラ削りで統一されている。見込み部には仕上げナデを施すという点も共通する。2・4は口縁端部内側に溝を1条巡らせる。8の口縁端部内側はわずかに窪んでおり、最終調整の段階で内側に力を掛けて押しえつけたような状況になっていた。ただし、溝と呼べるような形状ではない。9の口縁端部内側には溝や窪みを設けず、端部は丸く収める。

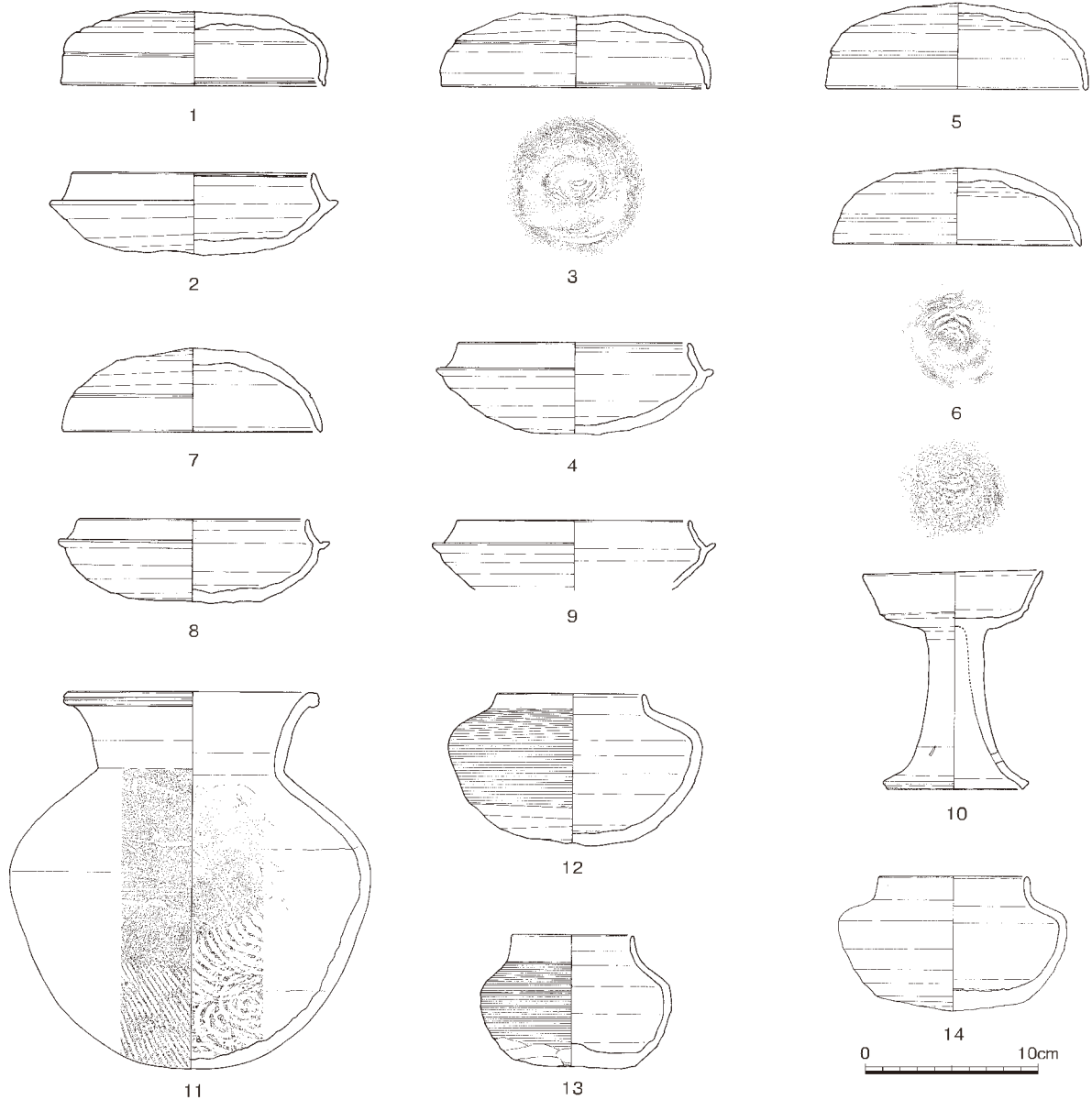
高杯10の杯部の見込みに同心円状の当て具痕が認められた。脚部との接合時に付けられたものであろう。脚部には三角形の透かし孔が、三方に穿たれていた。透かし孔は高さ5.5mm、下辺幅2mm程度で、外側からの穿孔である。脚部の内面には絞りの痕跡が明瞭に認められた。

広口壺11は袖部で出土した。体部外面は底から下半部までが平行タタキの痕跡が明瞭に残り、上半部はタタキ後にナデ消していた。内面は下半部に同心円の当て具痕が明瞭に残り、上半部は当て具の痕跡は認められず、指押さえが確認できる。体部内面には下から4cmの位置と頸部から4cmの位置(肩部)に接合痕があり、この部分で粘土紐の積み上げを一時中断して、乾燥させたと考えられる。このことから体部は大きく3段階に分けて成形し、その後で頸部を付加したと分かる。

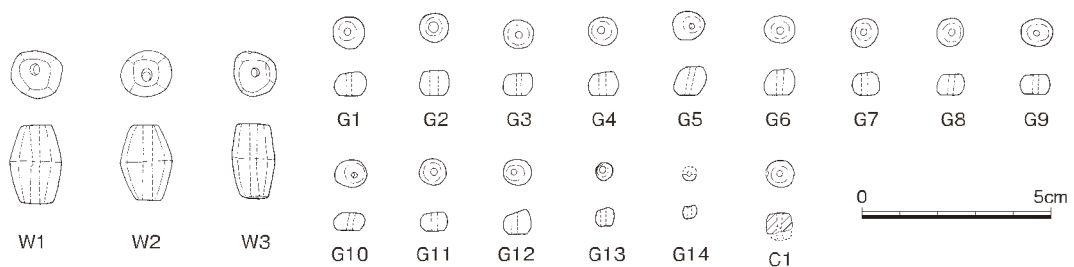
短頸壺は3点が出土。12・14はともに肩が張るような器形で、撫で肩の13とは異なる。ただし、調整方法は異なり、12・13はカキメが認められるが、14はヨコナデである。底部の調整は、12・14はともに回転ヘラ削りだが、回転方向は12が時計回り、14が反時計回りであった。時計回りのヘラ削りは、杯蓋、杯身も含めて12が唯一である。13は不整方向のヘラ削りであるが、ヨコナデは時計回りの回転により12と共通する。見込み部も三者三様で、12は直径2～3cmほどの円形の窪みが数か所あり、14はざらついた質感で仕上げナデは行っていない。13も仕上げナデは不十分で、粘土紐の痕跡が認められた。粘土紐の幅は1cmを測る。なお、13の肩部には蓋を重ね焼きした痕跡が残っていた。(上掲)

### 2 装身具 (第425図、図版82-2)

W1～3は埋木製算盤玉である。丁寧に研磨しており、表面は滑らかで光沢を帯びる。中央は膨らむが、稜は不明瞭で丸みがある。3点とも両側穿孔である。G1～14はガラス小玉である。いずれも、中央の円孔に平行するように気泡が伸びており、白い筋状を呈していた。気泡は、ガラス小玉の小口面同士を結ぶように伸びており、小口面での平面形は楕円形状に歪む。これらのことから、ガラス小



第424図 古墳出土遺物① (1/4)



第425図 古墳出土遺物② (1/2)

玉は、引き延ばし技法によりガラス管を作り出し、それを切断して製作したと考えられる。気泡は小玉中央の円孔ではなく、ガラス小玉の側面に沿うように湾曲している。このことから、ガラス管を分割した後に、小玉として完成させるため加熱調整を行い、熱により球状に変化するガラスに従い気泡も湾曲したと考える。C1は土製の丸玉である。色調は黒茶色で、埋木製算盤玉と近似する。表面は滑らかで、光沢を帯びる。床面直上で採取した埋土中からの出土である。(上梅)

## 3 銀装円頭大刀（第426～430図、写真39、図版80・81）

**M1**は全長72.3cm、刀身部長61.9cm、刀身部最大幅2.8cm、刀身部最大厚0.7cmを測る。やや内湾気味の直刀で、切先は斜めに直線的に切れるカマス切先である。刀身部断面は二等辺三角形で、鑷はなく、平造りと判断できる。なお、切先から10cmほどの部分がやや折れ曲がった状態で出土した。

刀身部には布が付着していた。布は、断片的にはあるが、刃部から背部にかけて確認できるため、副葬時には抜き身で、布で包んだ状態であったと推測する。刀身先端付近がやや折れ曲がった形状であることも鞘に収めずに副葬した可能性を示唆する。ただ、布の残存は刀身でも鍔側から15cmの位置、おおよそ16cmの範囲に集中しており、切先から20cmまでは認められなかった。このことから刀身全体を布で包まなかった可能性も考えられる。布は平織りである。布を織りなす糸本数の密度は、0.5cm平方で11×9本を数えた。ただし、0.5cm平方で糸本数を計測できる部位が限られていること、錆により不明瞭な部分があったことから、糸本数の密度については参考値に留まる。

関部は片関で、斜めに切る斜角関である。深さは0.5cmを測る。

茎部は先端が折損しているが、残存長は10.4cmで、基部幅2.2cm、現状での茎尻の幅が1.5cmと、茎尻に向けてやや幅を狭める形状である。厚さは基部で0.7cm、現状の茎尻で0.4cmを測り、茎尻に向かい徐々に薄くなる。関部から8.2cmの位置に目釘孔が1か所穿たれていた。目釘孔は直径0.3cmほどである。穿孔位置は茎部の中央部ではなく関部側の方に偏っていた。この穿孔位置は柄木を装着した時に、柄のほぼ中央部に相当しそうである（第427図）。

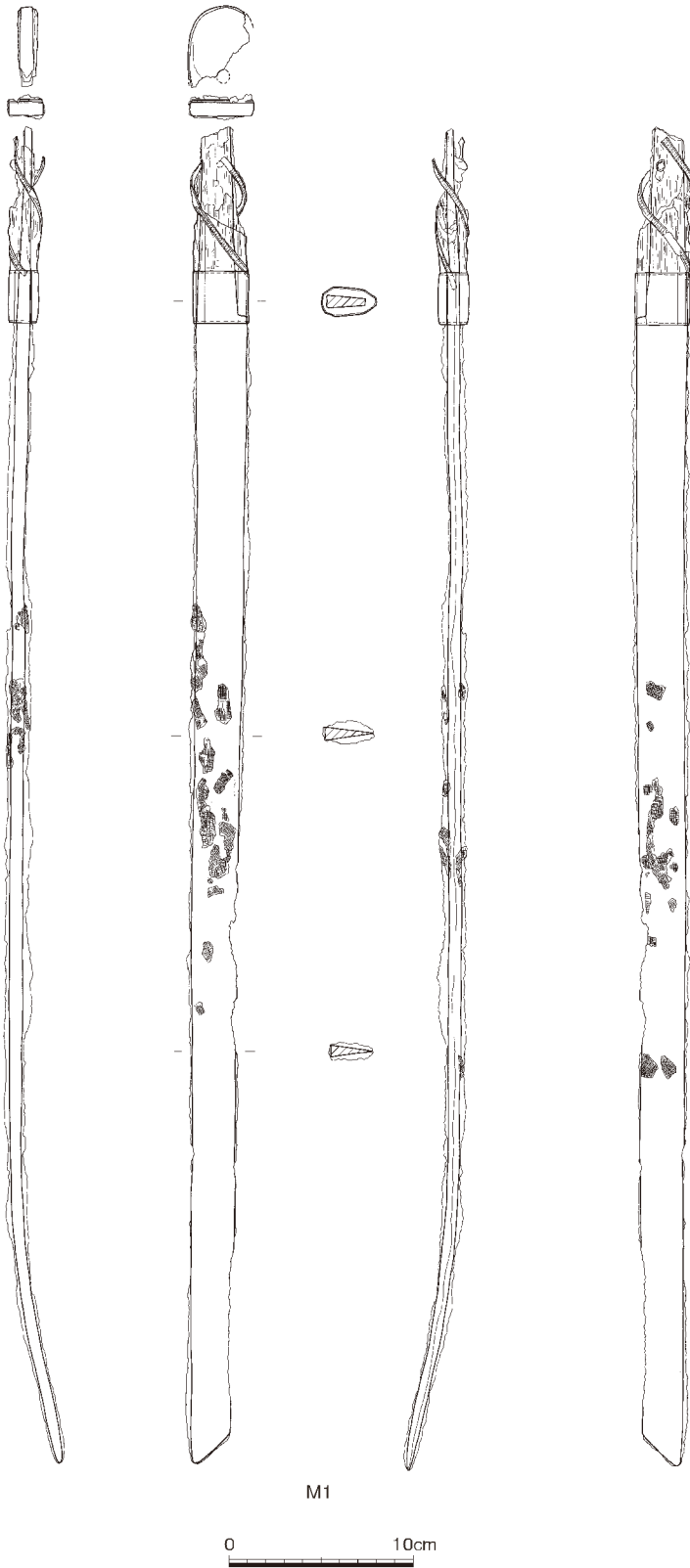
ところで、穴が盗古墳では銀被せ鋌が1点（**M7**）出土しているが、**M1**が銀装大刀であること、目釘孔の位置などから、**M7**を**M1**の飾り鋌として用いた可能性もある。しかしながら、**M7**が埋土中からの出土であるため、**M1**との相関性について断定的な見解を提示することはできない。

残存していた木質の状況から、柄木は幅2.9cm、厚さ1.6cmで、断面形は、鍔とほぼ等しい八角形状を呈することが分かる。ただ、柄木と茎の装着状況や柄木に白木を用いたのか、漆などによる装飾を施したのかなど、柄木自体についての情報はほとんど得られなかった。

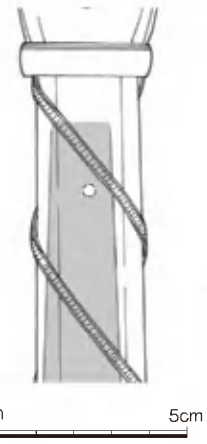
鍔は銀製で、長さ2.8cm、幅3cm、厚さ1.7cmを測る。両端部はそれぞれ1mm程度内側に折り曲げており、断面形は八角形に整えられている。ただし、正八角形ではなく刃部側の辺が0.35cm、棟側の辺が0.6cmをそれぞれ測る。

柄間には銀線を巻く。ただし、厳密な銀線ではなく、幅0.4cm、厚さ0.1cmの革紐に銀板を被せるといった構造である（第428図）。柄巻には同様の構造の銀線を2本使用する。2本の銀線を鍔から右回りに螺旋状に巻く。なお、2本は2.3～2.8cmほどの間隔が開くような巻き方である。刀身側端部は、鍔の下に入れて固定していた（写真39）が、柄頭側端部は折損していたため固定方法は不明である。おそらくは柄頭の責金具で固定したと考える。銀線の端部は斜めに切られており、その部分を鍔の下に入れて固定する。固定位置は刃部側と棟側で、互いに相対する位置に当たる。

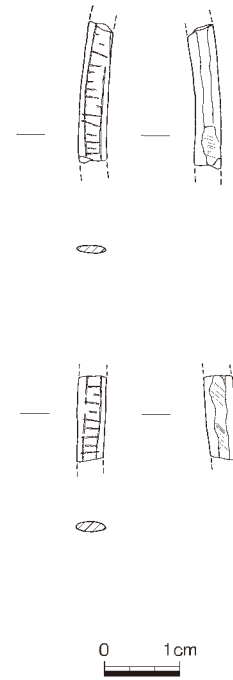
柄巻である銀線の長さは不明であるが、残存長は約9.5cmである。幅は0.4cm、厚さは0.1～0.15cmを測る。なお、銀板の厚さは1～1.5mm程度と薄い。銀線の表面には文様が入れられていた。文様は革紐に銀板を被せた後に施したと考える。端部が角張らずに緩やかな稜となることから、押圧による施文と判断できる。文様は銀線の縁に平行する2条のラインと、その間を充填する刻みから構成される。全体としては、梯子状となる。刻みは長さ1～2.5mmで、1～1.5mmピッチで入れていた。刻み1つ当た



第426図 古墳出土遺物③ (1/4)



第427図 M1 目釘孔の位置  
(網かけは基部) (1/2)



第428図 M1 破片 (1/1)



写真39 M1 金属線装着状況 (X線)

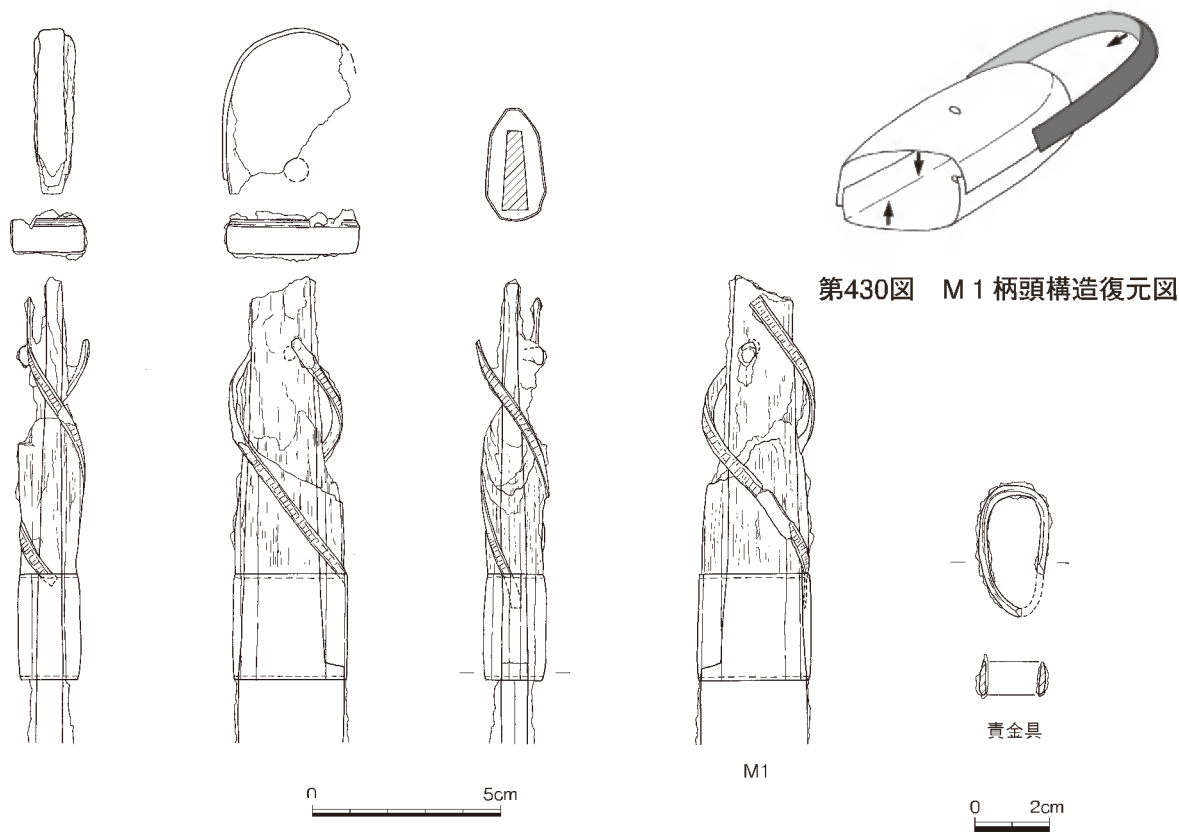
りに鑿を打ち込む回数は1～2回である。線彫りは、肩の状況から「なめくり打ち」〔鈴木2003〕によると推測され、刻みと同じ工具を用いて施文したと推測する。線彫り相互の間隔は2mmほどである。線彫りを施した後に刻みを入れていったと考えるが、線彫りの間に刻みを整然と収めるという意識は高くなかったようで、所々で線彫りに刻みが重なり、はみ出していた。

柄頭は円頭形である。胎となる有機質材に、打ち出しにより匙状に整形した薄い銀板2枚を合わせた構造と考える。銀板の厚さは0.1～0.14mmである。残存長4.2cm、残存幅3.2cmを測る。なお、全体の厚さについては、損壊が著しく判然としない。ただ、先端部の状況から判断すると、やや膨らみを持っていたと考える。推定復元的な数値ではあるが、厚さは2cm程度と考える。匙状銀板の中央やや下寄りに直径6mmほどの懸通孔を穿つ。匙状銀板の合わせ方は、1枚の銀板を別の銀板の内側に嵌め込むような状態であった(第430図)。残存状況の良好な匙状銀板を損壊が著しい匙状銀板の内側に嵌め込んだ状況が観察できる。2枚の銀板を嵌めた後、周囲に革紐を巻く。革紐は幅7.5～8mm、厚さ1mmほどのものを使用。基部の責金具が外れた状態にも関わらず、革紐が離脱していないことから、革紐の装着に際しては何らかの接着剤を用いた可能性も考えられる。

柄頭の基部には責金具を装着していた。責金具は鉄製である。長さ3.5cm、幅1.9cm、厚さ0.2cmである。内側には銀板が付着しており、柄頭との装着状況を示す。責金具の柄頭側には糸状のものを巻いていた。糸状の物質は、現状で3巻き分を確認することができる。(上掲)

参考文献

- ・鈴木 勉「彫金—古墳時代の金工技術(1)」『考古資料大観』7 小学館 2003



第430図 M1 柄頭構造復元図

第429図 M1 柄頭・責金具 (1/2)

## 4 鉄刀・刀子・馬具 (第431図、図版80)

**M2**は**M1**の刀身の下に切先を下にして出土した鉄刀である。全長は43cmを測り、刀身は中程から湾曲していた。刀身部には鞘の木質が遺存する。また、柄の木質も残存していた。柄木と茎部を固定する目釘も半分は完全に残っており、そこから復元した柄の厚さは、2.5cmになる。両関式で、関の幅は刃部の方が狭い。また、刃部は波打つような形状で、先端4cmで急激に幅を狭めていることから、研ぎ減りしている可能性がある。

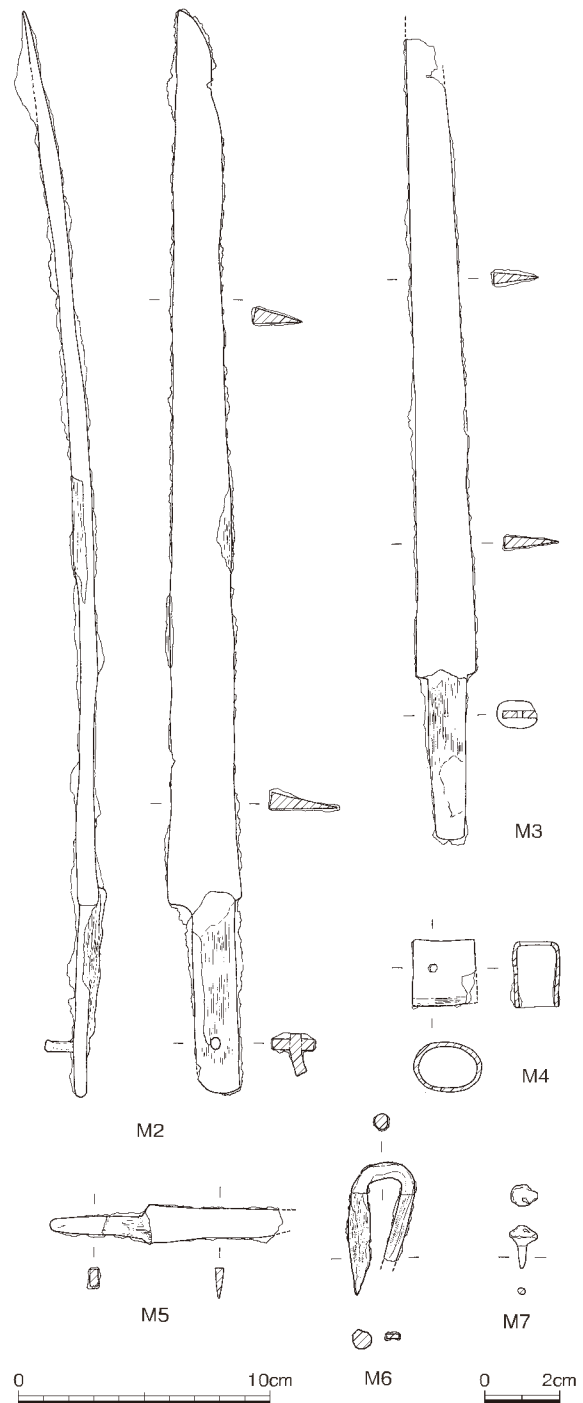
**M3**は**M1**の北側15cmに置かれていた。刀身と切先の向きは**M1**と合致する。基部には木質が残存していた。また、直径2mm程度の目釘穴も確認できた。両関式である。**M2**と異なり、刃と背で関幅に大きな差は認められない。

**M4**は鏝である。断面は楕円形状を呈し、片側の内端部は鉤状に突出する。多角形状の孔が1孔のみ穿たれていた。また、基部には糸状物質を幅3~4mmほど巻く。出土位置は**M1**の切先から20cmほど南側になるが、大きさから**M2**よりは**M3**に装着した可能性が高いと考える。

**M5**は刀子である。先端は折損しており、全長は不明である。基部には木質が残存していた。

**M6**は「コ」の字状に屈曲する棒状の鉄器である。木製の鏡板に打ち付けた立聞用金具の可能性はある。**M2**の基部先端に接して出土した。欠損した側は断面が長方形であるのに対して、他端は円形で先端を尖らせていた。県内で類例を求めると、岡山県一貫西3号墳で1点出土している〔行田編1990〕が、出土例は少ない。一貫西3号墳の築造時期は5世紀末頃に比定されている。

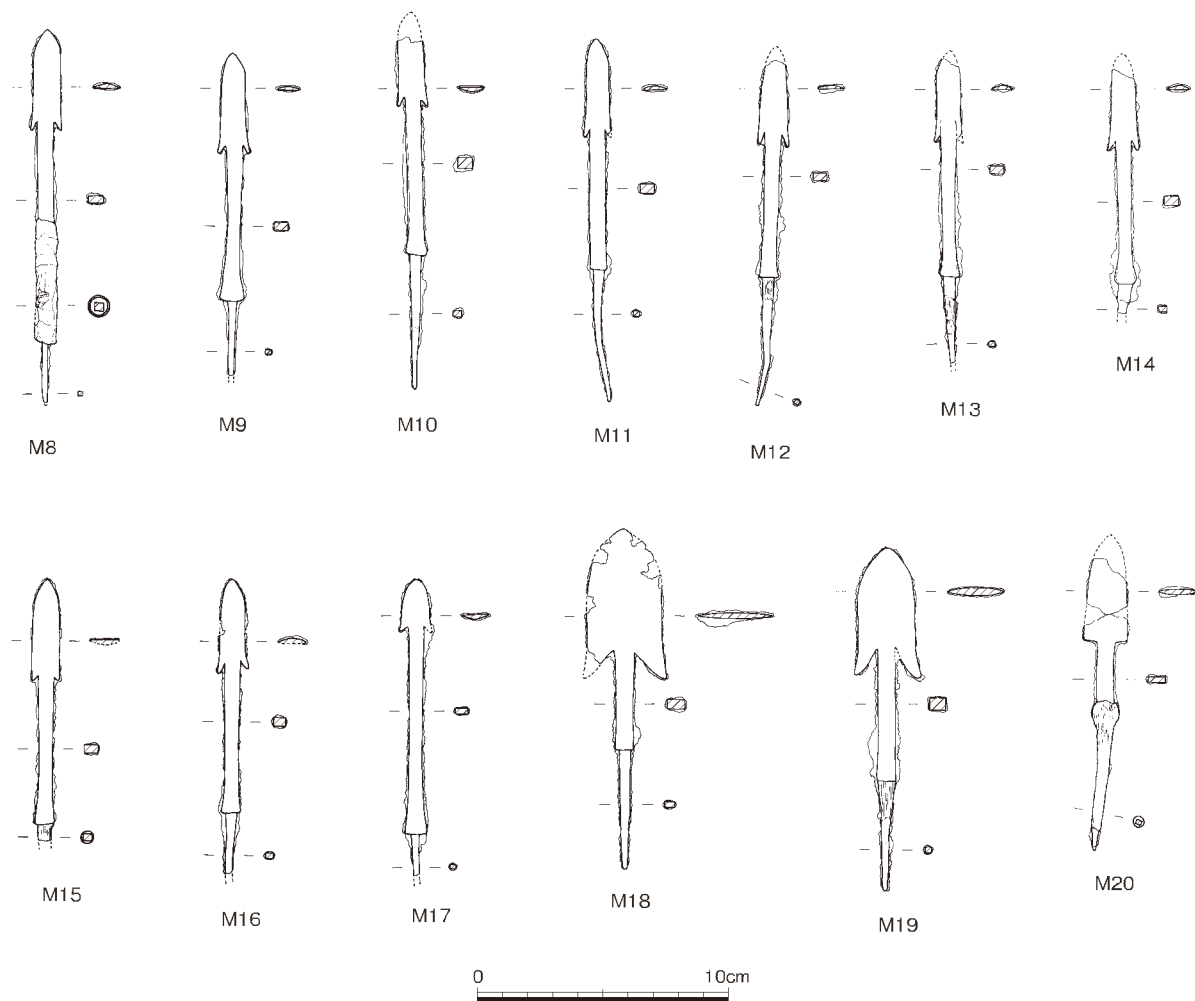
**M7**は鋌である。頭部は直径9mmの円形状を呈するが、その部分に銀の薄膜を被せていた。床面直上の埋土を浚っている時に見つかったため、原位置は押さえられなかったが、おおまかには玄室奥側の埋土中からの出土である。(上梅)



第431図 古墳出土遺物④ (1/3・1/2)

## 参考文献

・行田裕美編『一貫西遺跡』津山市土地開発公社・津山市教育委員会 1990



第432図 古墳出土遺物⑤ (1/3)

## 5 鉄鏃 (第432図、図版82-1)

尖根式鉄鏃10点と平根式鉄鏃3点に大きく分けることができる。

尖根式鉄鏃は、長頸柳葉式で逆刺を持ち、関部はわずかに台形状に開く。刃部は片丸造りのみであるが、刃部の長短で二分できる。M8～16は刃部長4cm前後で、M17は刃部長2.1cmと短い。頸部も刃部の形状差に則して二分でき、長さはM8～16が5.5～6.0cmで、M17が8.2cmを、厚さはM8～16が3.0～4.5mmで、M17が2mmを測った。茎部に木質が遺存するものもあり、特に残存状況が良好なM8では、装着方法の一端が観察できた。M8の茎部は一辺2mm程度で、断面方形状に整える。そこに柄を装着するのだが、詳細な装着状況までは視認できない。ただ、木質の柄を装着した後、その部分に樹皮を巻いて固定する状況は観察できる。

平根式鉄鏃の刃部は柳葉形と三角形で、逆刺を持つM18・19と、逆刺を作り出さないM20が確認できた。また、M18・19も刃部幅の差で二分可能である。頸部については長さ、幅ともに三者三様で、広根式鉄鏃の形状は統一性に乏しい。しかし、関部は3点とも角関状を呈して共通する。

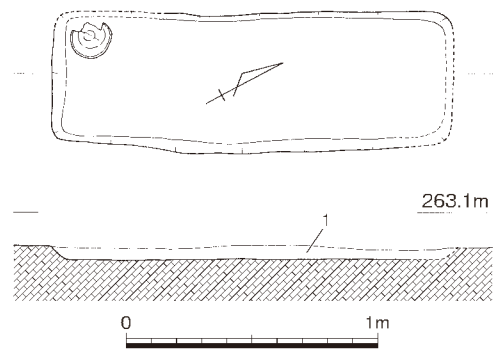
出土状況としては、M9・12～14の4点が近接した位置で単独出土し、それ以外のものは束にまとめられたらしく、鏃着していた。尖根式鉄鏃と平根式鉄鏃をセットにして束ね、副葬した状況が看取できる。いずれも刃先が奥壁側を向いた状態で出土した。(上梅)

## 第5節 土墳墓

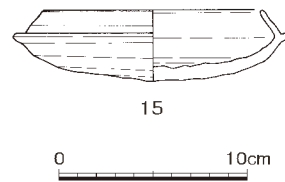
## 土墳墓 (第414・433図)

土墳墓は古墳の東側、周溝から山側3mの位置で検出した。平面形は長形状を呈する。幅は56cm。長さについては、北小口部にあたる部分に礫が埋没しており、はっきりとした端部は確認できなかった。はっきりとした数値は分からないが、復元長は160cmになる。深さは5～7cmと非常に浅いが、上面は削平を受けたと考えられる。形状から土墳墓と推測した。南西角で須恵器杯身15が底部を上にした状態で出土した。ほぼ床面直上での出土で、原位置を保っている可能性が高い。

杯身15は口縁部を内傾させており、全体的に低く作られている。底部のへら削りは、直径12cmにも及ぶ。見込み部には仕上げナデを行っていた。時期は6世紀中葉～後葉である。(上楯)



1 にぶい黄褐色 (10YR4/3) 土



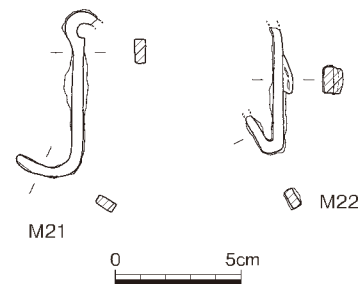
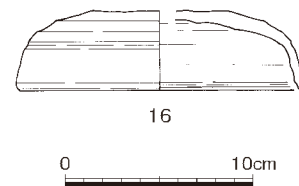
第433図 土墳墓 (1/30)・出土遺物 (1/4)

## 第6節 遺構に伴わない遺物

16、M21・22は古墳の南西下方に位置する、弥生時代後期後葉の竪穴住居（穴が途遺跡 竪穴住居2）の埋土上層で出土した。穴が途古墳が位置する尾根上には、土墳墓1基以外に古墳時代の遺構は認められず、弥生時代集落のみを確認した。状況証拠からではあるが、これらの遺物は古墳から持ち出された副葬品と判断し、本章で報告する。

16の天井部は反時計回りのへら削りを行い、見込み部は仕上げナデを施す。胎土中には1～4mm大の砂礫が目立って粗く、この点は古墳出土の須恵器とやや異なる。

M21・22は馬具と考える。片側端部が輪状を呈し、逆側端部はやや鋭角に屈曲する。屈曲した部分から先はやや薄くなり、幅も狭くなっていた。輪の部分に鉸具を取り付け、逆側は鞍の居木に打ち込む、鞍の足金具と考える。ただ、M21・22ともに木質などの付着は見られなかった。また、鉸具の出土もないため、可能性として提示する。(上楯)



第434図 遺構に伴わない遺物 (1/4・1/3)



## 第7節 小結

穴が途古墳は平野と吉野川の流れを一望できる尾根に位置する。眼下の平野は、近世以降には因幡藩主の参勤交代の要道である「因幡往来」もしくは「因州往来」と呼称された経路が通る。因幡往来は鳥取城下から智頭経由で志戸坂峠を超え、美作市古町を経て釜坂峠から播磨へと抜ける道筋である〔内藤1993〕。本書第7章で報告している中町B遺跡では古代に比定される直線に伸びる道路遺構を検出しており、この平野を古くから重用していたことを示唆する。穴が途古墳は播磨と美作そして因幡を結ぶ交通上重要な場所を選地して築造した古墳と考えられる。

古墳は直径17～18mの円墳で、東側には弧状の周溝を設置していた。墳丘は地山の削り出しと盛り土により構築しており、盛り土の内部には石列状の施設を3か所設置する。埋葬施設は南に開口する横穴式石室である。残存状況が良好な東側壁で玄室の高さは180cmを測った。玄室は奥側から見て左片袖式で、玄室幅指数は68.5、羨道幅指数は41.6となる〔白石1966〕<sup>(1)</sup>。また、奥壁幅を1とした時の長さは1.46となり、岡山県緑山6号墳と近似する〔新納1987〕。側壁は持ち送りにより構築し、北東角、南東角の上半部では石材を両壁に渡す様子が確かめられた。使用石材は20～80cm大と様々だが、40～60cm大の石材が目立つ。玄室床面には川原石を敷きつめており、玄門から羨道は整地土が剥き出しの状態であった。羨道中位には閉塞施設が一部残存していたが、その上部は取り外されており、調査以前にすでに開口していたと考えられる。閉塞施設から南側については、側壁石材に小形のものを使用しており、天井石を乗せて羨道部とするか、当初から天井石を乗せず前庭部としたという2つの可能性が考えられる。

副葬品としては須恵器14点、銀装円頭大刀1振、鉄刀2振、鉄刀子1点、鉄鏃13点、鉄地銀被せ銚1点、立間用金具の1点、埋木算盤玉3点、ガラス小玉14点、土製丸玉1点が出土した。出土位置は、大きく奥側と袖側に分けることが可能である。出土点数が少なく、またガラス小玉や埋木算盤玉などは散在した状態で出土しているため、盗掘を受けた可能性が高い。閉塞施設は上部が取り外されており、石室入り口が開口していた状態で埋没したと考えられたが、そのことも盗掘の可能性を想起させる。また、穴が途遺跡竪穴住居2の埋土からは、鉸具を取り付ける足金具M21・22が出土しており、古墳から馬具が持ち出された状況証拠と判断した。

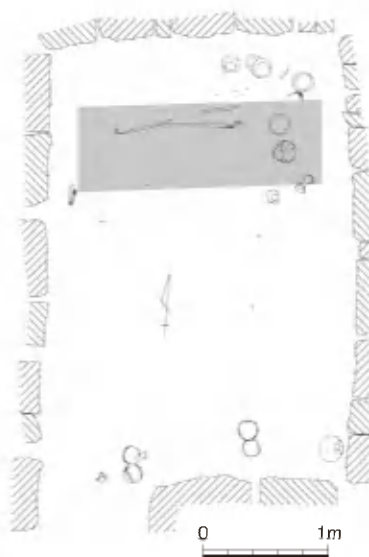
埋葬に用いた棺は、部材や鉄釘が出土していないため詳細は不明である。また、確実に棺台と言える配置状況の石材も認められなかった。須恵器3・4を棺台とした可能性はあるが、それも確証はない。そのため、埋葬位置の特定も困難であった。そこで遺物の出土状況から埋葬位置を推測する。

被葬者に対する副葬品の配置関係を検討した光本順によると、古墳時代後期における刀剣類の副葬では、被葬者の身体付近に配置する傾向が窺える〔光本2001〕。刀剣類は被葬者の身体に平行するように置くが、装飾付大刀の場合は被葬者の右上半身に配置することが多い。対する木装鉄刀の場合、被葬者に対する配置場所に大きな相違は認められず、被葬者の右上半身に配置する程度である。また、装飾付大刀の場合、柄頭や飾り金具といった部分が、被葬者の頭部横に配置される事例がしばしば見受けられる。もっとも、横穴式石室の場合は追葬時の片付けで副葬位置から遊離して出土することが多く、上記の状況はあくまで保存状態が良好な資料で確認できた傾向であると、光本自身も断っている。また、原位置が保たれていても、上記の状況とは合致しない事例もある<sup>(2)</sup>。刀

剣類の配置状況から被葬者の埋葬位置を推測はできるが、絶対的とは言い切れない。このことを前提として穴が盗古墳について検討する。

銀装円頭大刀と鉄刀は、奥壁に平行するような配置で出土した。位置は奥壁から1 mの距離を置く。光本の検討結果から類推すると、被葬者は銀装円頭大刀と平行するように埋葬された可能性が高い。柄頭が東側に配置されることから、被葬者の頭部もそちらを向くと考えたい。そして、被葬者の身体は大刀の南側に想定される。

ガラス小玉は14点出土したが、うち10点が銀装円頭大刀の北側に集中する。古墳時代後期、装身具は装着して副葬する傾向がある。そのことを積極的に評価すると、銀装円頭大刀の北側にも、奥壁と平行するような身体向きで1人埋葬した可能性が想起される。ただし、集中するとはいえ10点のみの出土で状況証拠の域を出ない。盗掘時の取りこぼしの可能性も考えると、北側の被葬者の存在を積極的に主張することは困難であろう。



第435図 埋葬位置推定図  
(1/60)

装身具としてはガラス小玉の他に土製丸玉C 1が1点と埋木製算盤玉W 1～3が出土した。W 1・2は玄室床面直上で出土しているが、相互は60cmほど離れた位置関係であった。

埋木製装身具が出土した古墳は中国地方でも限られ、岡山県赤磐市で4基、島根県、広島県それぞれが1基である（表6）〔深田編2005〕。1基あたりの出土点数は島根県林43号墳の6点が最多で、1～2点が主体であった。種類は岡山県岩田1号墳第1主体のみが切子玉とされていたが、稜は不鮮明で、研磨が不十分である。「切子玉に似て稜のないもの」を算盤玉とした『図解 考古学辞典』〔水野・小林編1959〕に従うと、穴が盗古墳と林43号墳、斎富2号墳出土例は算盤玉、岩田8・14号墳は棗玉と判断できる。なお、岩田1号墳例は研磨が不十分な算盤玉と考える。

大賀克彦による埋木製品は古墳時代後期に出現するようで、畿内地域で生産された可能性があるという〔大賀2002〕。古墳時代の玉作遺跡である奈良県曾我遺跡では埋木製品や剝片などが出土しており、関川尚功は曾我遺跡における埋木製品生産の可能性を指摘した〔関川1985〕。さらに関川は曾我遺跡を畿内政権による直接関与の玉作遺跡と位置付けた。埋木製品の生産、流通問題の検討は、埋木製品を入手して副葬した穴が盗古墳の被葬者像に迫る糸口の1つと考える。今後の課題としたい。

次に副葬された須恵器、中でも杯身、杯蓋の特徴から、古墳の構築時期と追葬の可能性を探る。穴が盗古墳では杯身4点、杯蓋5点が出土した。杯身は、口径13.1～13.9cm、受け部径15.8～16.6cm、器高4.8～5.3cmで、杯蓋は、口径14.2～15.4cm、器高4.3～4.9cmをそれぞれ測る。調整はいずれも粗い反時計回りのヘラケズリを施している。短頸壺でも回転ヘラケズリが認められるが、14は杯身、杯蓋と

表6 埋木製品出土古墳（中国地方）

古墳	所在地	墳形	主体部	点数	色調	時期
斎富2号墳第3主体	岡山県赤磐市	円墳	箱式石棺	1点	黒	6世紀後葉
岩田1号墳第5主体	岡山県赤磐市	円墳	木棺直葬	2点	灰	6世紀後半
岩田8号墳	岡山県赤磐市	橢円墳	横穴式石室	1点	茶	6世紀末～7世紀初頭
岩田14号墳	岡山県赤磐市	円墳	横穴式石室	1点	黒	6世紀末～7世紀初頭
金田2号墳	広島県庄原市口和町	円墳	横穴式石室	1点	暗褐	6世紀末～7世紀初頭
林43号墳	島根県松江市玉湯町	前方後円墳	横穴式石室	6点	黒	古・後

同様に反時計回りで、12は時計回りと異なる。13は手持ちのヘラケズリだが、カキメやヨコナデから時計回りと分かる。また、杯蓋3・6の見込み部には、同心円の当て具痕が明瞭に残る。同様の痕跡は高杯10の見込み部でも確認できる。器形では、杯蓋は天井部が平坦で肩部の稜が明確な1・3・5と、撫で肩で全体的にドーム形を呈する6・7がある。しかし、肩部には溝が巡る点では共通する。杯身も平坦状を呈する2と、やや丸みを帯びる4・8がある。細部では、杯身は口縁端部に溝もしくは緩い面を持つ2・4・8と丸く収める9が、杯蓋も溝もしくは緩い面をもつ1・3と丸く収める5・7がある。

このように杯身、杯蓋には平坦で肩部の稜が明確なものや丸みを帯びたものがある。しかし、外形に差がある製品間でも細部の要素には共通点を見出した。蓋6は丸みを帯びた体部であるが、端部に面を持ち、見込み部には当て具痕を有しており、細部の特徴は平坦な形状の製品のそれと共通する。出土位置や状況も両者混然としており、追葬による差すなわち時期差と判断することを躊躇させる。大熊美穂は、5世紀後半～6世紀前半に比定されている横穴式石室以外の埋葬施設、すなわち追葬の有無を明確に判断できる主体部から出土した須恵器の検討を行った。そして、岡山県北部、特に津山盆地を中心とした地域では、杯蓋で天井部と肩部の境の稜が明確なものや不明確なものが相伴しており、後者の特徴を地域色と考察している〔大熊2002〕。

これらの特徴から、穴が途古墳出土の須恵器は、田辺編年のTK10～MT85型式期〔田辺1966・1981〕、中村編年のⅡ型式2段階〔中村1981〕に近い時期に比定できる。

古墳の東側には土壙墓が1基隣接する。土壙墓からは須恵器の杯身が1点出土したが、その形態的特徴から田辺編年MT85型式期〔田辺1966・1981〕、中村編年のⅡ型式3段階に比定できる。（上掲）

#### 註

- (1) 玄室幅指数＝玄室幅÷玄室長×100                      羨道幅指数＝羨道幅÷玄室幅×100  
 (2) 岡山県大谷1号墳では、玄室内で木棺と陶棺がそれぞれ1個体ずつ確認されている〔近藤・河本編1998〕。いずれも石室の主軸と平行するように、奥壁から80cmほど離して配置していた。しかし、原位置を保った状態で出土した金銅装双竜環頭大刀は、奥壁に平行するように置いてあった。奥壁との距離は10cmと離れていない。また、島根県中村1号墳で出土した銀装大刀は、玄門の袖石に立てかけられた状態で出土している〔原2004〕。未盗掘であるため、出土状況が副葬状況を示す可能性が高いと考えられる。

#### 参考文献

- ・大賀克彦「弥生・古墳時代の玉」『考古資料大観』9 小学館 2002
- ・大熊美穂「須恵器地域色抽出に関する一試論—岡山地域の事例から—」『駒澤大学考古学研究室』第28号 駒澤大学考古学研究室 2002
- ・近藤義郎・河本 清編『大谷1号墳』岡山県北房町教育委員会 1998
- ・白石太一郎「畿内の後期大型群集墳に関する一試論」『古代学研究』第42・43合併号 古代学研究会 1966
- ・関川尚功「古墳時代における畿内の玉生産」『末永先生米寿記念献呈論文集』末永先生米寿記念会 1985
- ・田辺昭三『陶邑古窯址群』Ⅰ 平安学園考古学クラブ 1966
- ・田辺昭三『須恵器大成』角川書店 1981
- ・内藤季義「因幡往来」『因幡往来・因幡道・倉吉往来』岡山県教育委員会 1993
- ・中村 浩『和泉陶邑窯の研究』柏書房 1981
- ・新納 泉「緑山古墳群の築造年代と形成の過程」『緑山古墳群』総社市文化振興財団 1987
- ・原 俊二『中村1号墳』島根県平田市教育委員会 2004
- ・深田 浩編『古代出雲における玉作の研究』Ⅱ 島根県古代文化センター 2005
- ・光本 順「古墳の副葬配置における物と身体の種類及びその論理」『考古学研究』第48巻第1号 考古学研究会 2001
- ・水野清一・小林行雄編『図解 考古学辞典』東京創元社 1959

## 第10章 今岡D遺跡

### 第1節 遺跡の概要

美作市（旧大原町）はその東を兵庫県佐用町と接し、その境は標高400m前後の山並みが南北に連なる。そこより旧大原町中央の平野部に向かって、樹枝状にのびる丘陵の一つに今岡D遺跡は位置する。遺跡の所在する尾根は、いわゆるやせ尾根であるが、尾根の頂部から南斜面にかけて弥生時代から古墳時代の遺構が存在した。遺跡の立地する尾根の頂部は標高250m前後で、水田として利用されていた両側谷部との比高差はおよそ30mほどである。尾根頂部や南斜面は平坦なテラス状を呈し、近現代の墓地として利用されていた。この平坦面は、調査地内の南端部とそこから尾根上との中間にも認められ、段状遺構が存在することから弥生時代の造成と見られる。

丘陵の先端部分は、今回の調査区外となるが、確認調査時のトレンチ3において遺構の存在が認められている。さらに、調査範囲の北側においても、尾根上方においても石包丁が露出していたことから、段状遺構などの存在が想定できる。（弘田）

### 第2節 弥生時代の遺構・遺物

#### 1 概要

弥生時代の遺構としては、竪穴住居7軒、段状遺構9面、掘立柱建物1棟、柱穴列2列、土壇5基や柱穴がある。立地は、尾根上の平坦部から南側斜面部にかけてで、北側斜面部や谷部には認められなかった。

出土遺物は、ごくわずかながらも弥生時代中～後期の土器と石器類がみられる。石器類では、石皿や片岩製の石包丁、サヌカイト製の石鍬やスクレイパーとその剥片がある。サヌカイトの剥片は竪穴住居2から出土している。（弘田）

#### 2 竪穴住居

##### 竪穴住居1（第437～439図、図版84-1）

尾根稜線上の中央やや西よりに位置する竪穴住居である。ほぼ稜線上で、わずかに南に寄って立地している。住居南端部にみえる円形の攪乱は、墓地によるものであった。

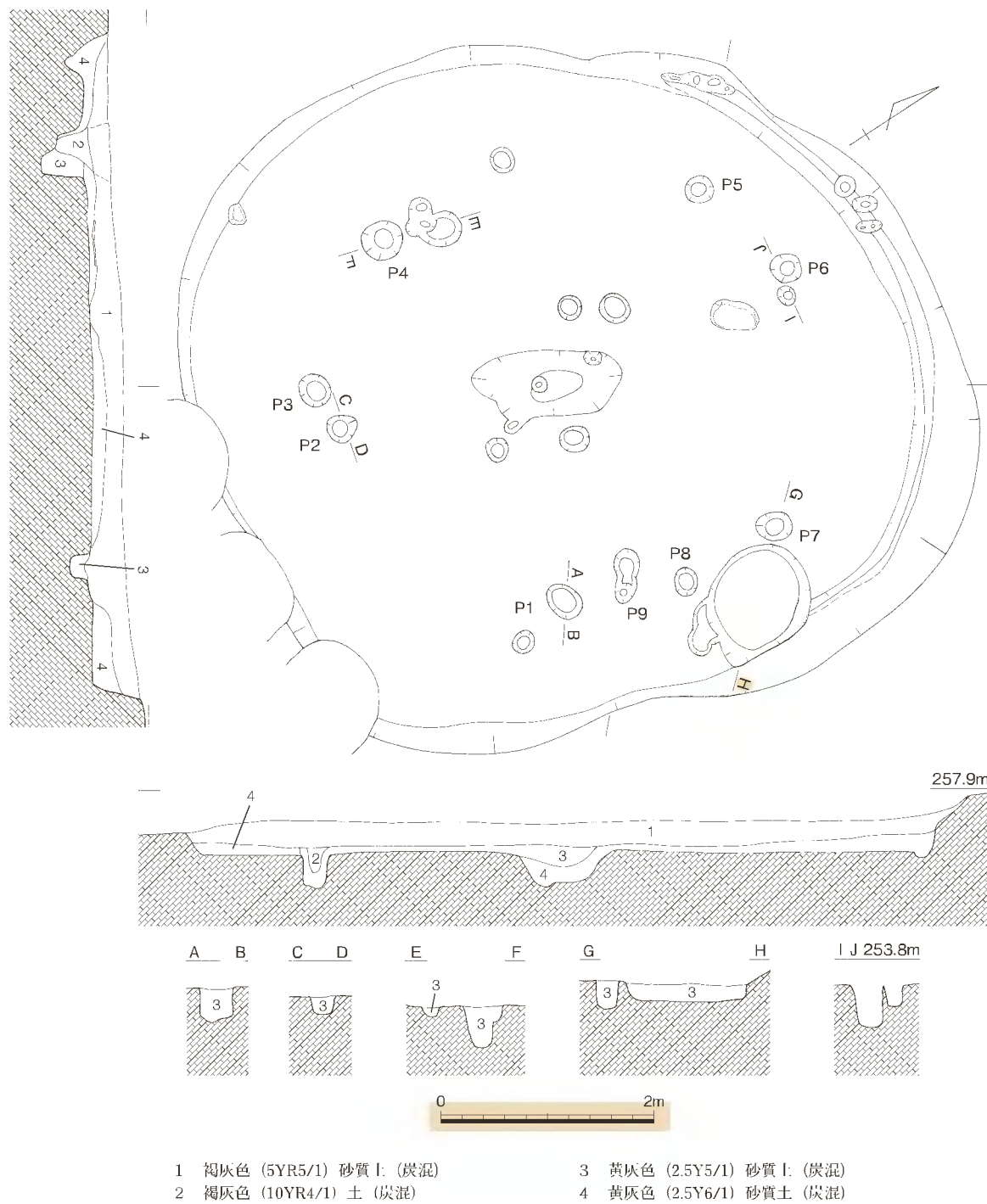
平面形はやや不整な円形を呈し、規模は長軸が745cm、短軸が663cmで、検出面からの深さは52cmである。床面では、中央穴、土壇、柱穴のほか壁体溝が存在した。壁体溝は、周囲の壁全体のうちの北側約1/3に巡る。壁体溝内部には小ピットが検出できたが、7個のみであり、その性格については不明である。壁体溝の一方の途切れる部分には、平面が円形の浅い土壇が存在した。その規模は、長軸130cm、短軸90cm、深さ15cmである。長円形の中央穴には、炭がみられ、短軸と直交する位置の両側



第436図 遺構全体図 (1/400)



第437図 弥生時代遺構全体図 (1/400)



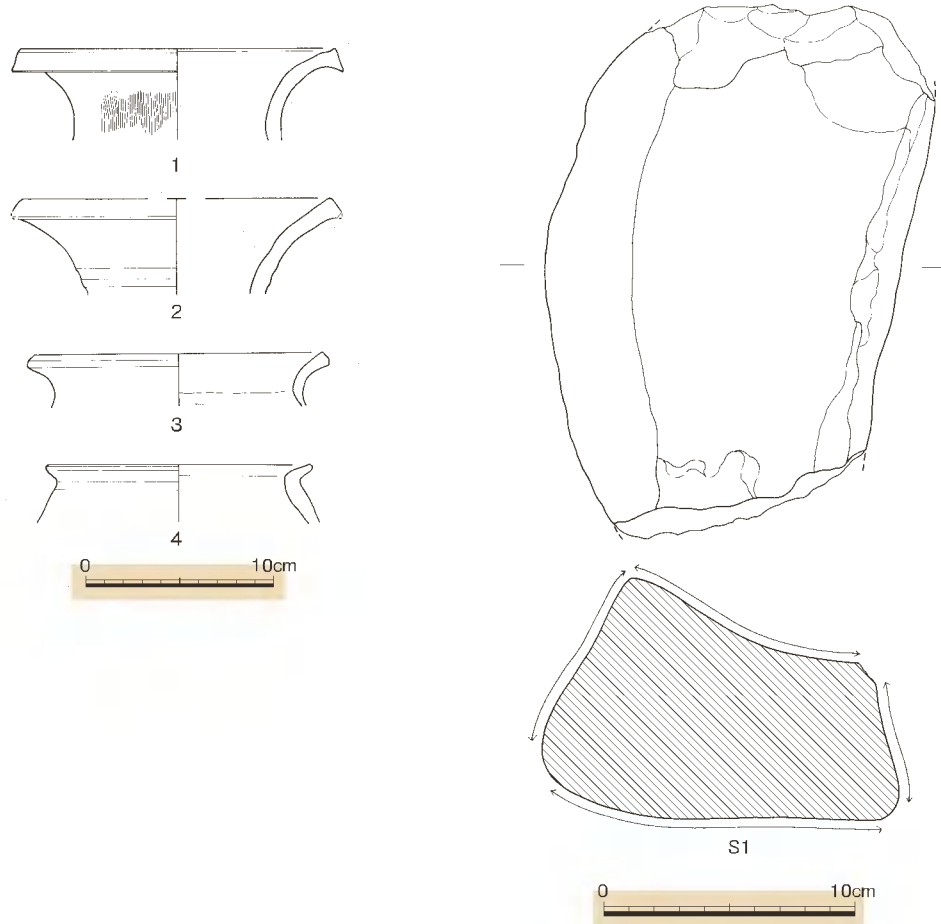
第438図 竪穴住居 1 (1/60)

には小ピットが2対存在した。中央穴の規模は、長軸140cm、短軸61cm、深さ30cmを測る。柱穴もP2とP3、P4とP5、P6とP7、P8とP9、P10とP1が近接していることから、主柱穴は5個で1回の建て替えがあったことを窺わせる。

出土遺物はわずかであったが、広口壺1・2、口縁部が「く」の字に屈曲する甕3・4を図示し得た。石器類では磨石S1のほかにサヌカイト剥片などもみられた。

時期は、弥生時代後期前葉である。

(弘田)



第439図 竪穴住居1出土遺物(1/4・1/3)

## 竪穴住居2(第437・440図、図版84-2)

尾根稜線上の中央やや東寄り、頂部からはやや南に下がったところに位置する竪穴住居である。南側の一部は削平を受けているが、半円形の平面形は当初よりの住居形態であろうか。

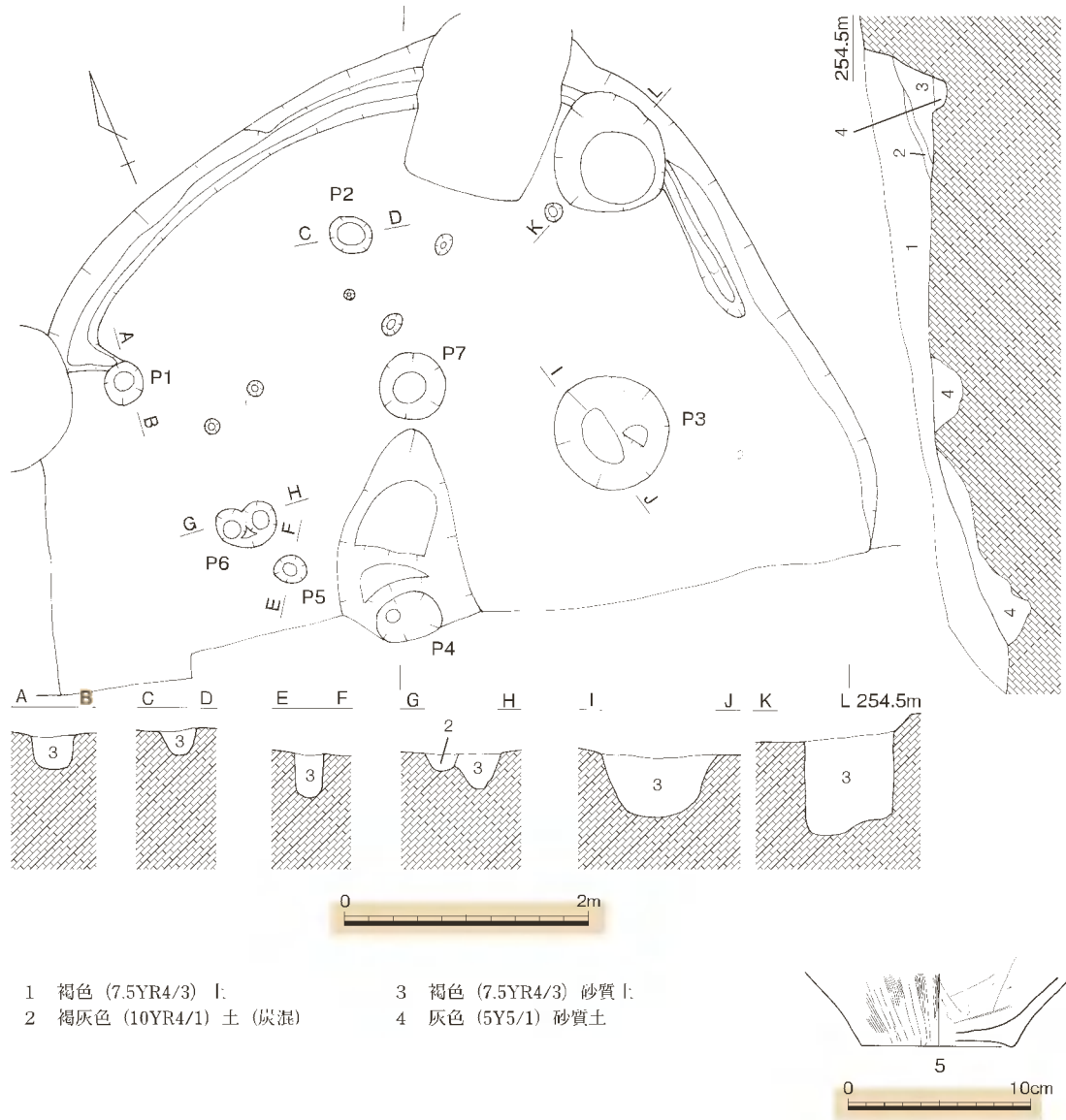
床面では、中央穴、土壇、柱穴のほか壁体溝が存在した。壁体溝は、その両端を結んだ線上に中央穴が存在する。このラインまでは床面が平坦に造成されていること、壁体溝の東側端部が中央穴に向かって屈曲していることから、住居の仕切りや壁が設置されていたのかも知れない。一方、これより南側では床面は緩やかに下っていたが、P4を住居の柱と見るとP1～3とあわせて4本柱とすることもできる。そこでの規模は、東西方向に700cm、南北方向で470cm、検出面からの深さは60cmであった。P4を支柱穴とみると、中央穴はほぼ正円形のP7と判断できる。P7は直径55cmで、検出面からの深さは25cmを測る。中央穴や支柱穴以外にもP6・7のような小ピットも検出できたが、その性格については不明である。P4と重なる位置で見つかった半楕円形状の土壇についても性格はよく分からない。この土壇は、残存長軸175cm、短軸117cm、床面からの深さは80cmを測る。

出土遺物としては、弥生土器の甕底部5を図示している。やや上げ底気味で、外面はハケ後ヘラミガキ、内面にはヘラケズリが認められる。それ以外にも図示はし得なかったが、弥生時代中期中葉から後葉頃の土器片とともにサヌカイトの剥片が床面上より多数出土している。

この竪穴住居の時期は弥生時代中期後葉頃とみられる。

(弘田)



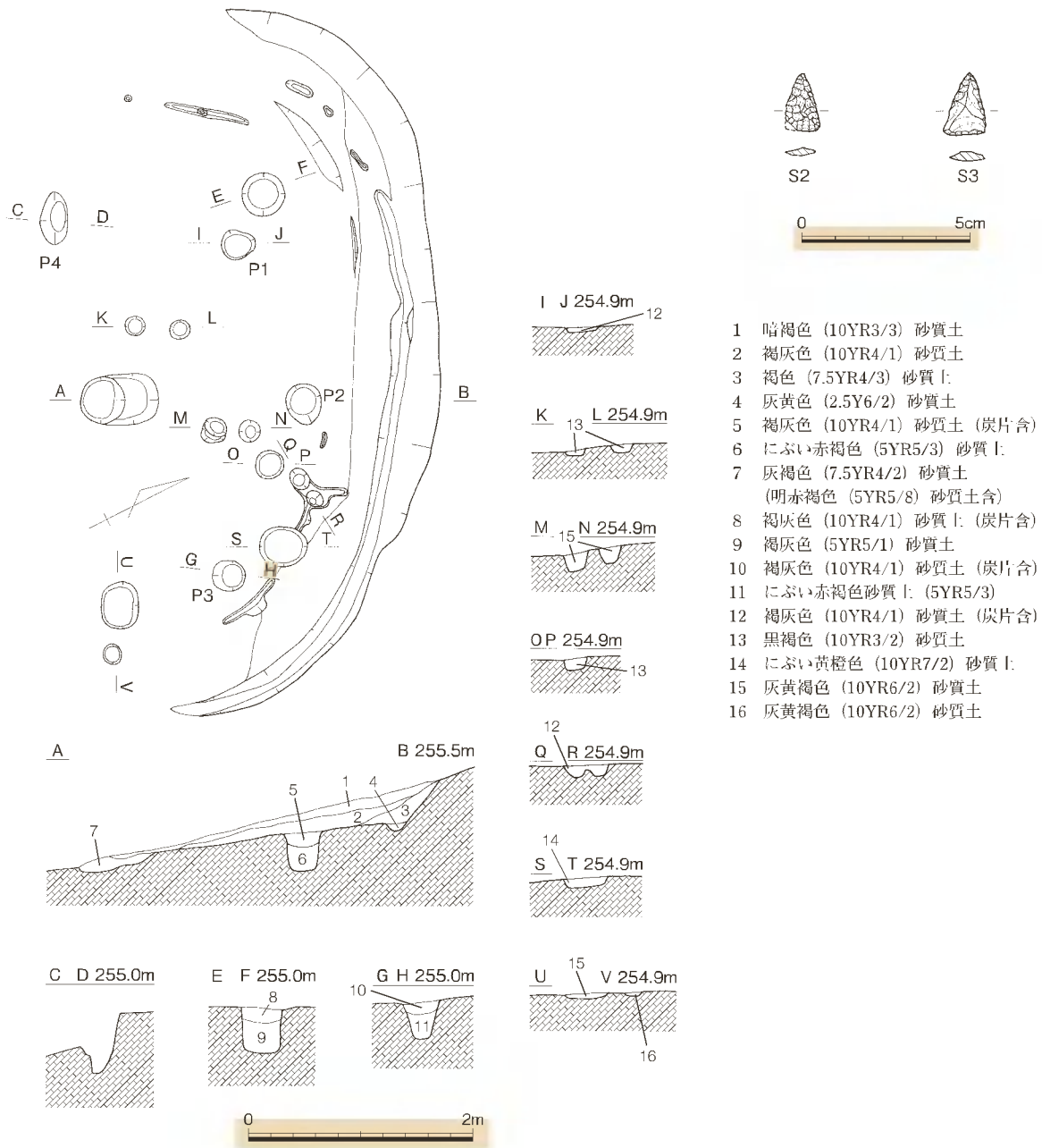


第440図 竪穴住居2 (1/60)・出土遺物 (1/4)

竪穴住居3 (第437・441図、図版85-1)

丘陵頂部の平坦部東側から南斜面側に位置する。平面形は円形と考えられ、規模は東西長633cmであるが、南側と北西側に削平を受けている。断面形は床面から外方に立ち上がり、深さは42cmを測る。底面海拔高は254.9mである。壁面に沿って壁体溝が確認されたが、貼り床は認められなかった。

柱穴は大小15個を確認した。その規模や配置から6本の支柱構造と推測され、このうちの4本分を検出した。柱間距離は172~185cmを測る。支柱穴の直径は30~39cmで、深さは35~40cmである。このほかの11個の柱穴は、直径が20~40cm、深さは5~15cm程度である。床面の状況から壁体溝の内側にも、弧状の溝が検出されており、他の竪穴住居の切り合いや拡張も考えられるが、これらの小柱穴がその竪穴住居の支柱穴となり得るとは考えにくい。床面中央では平面形が楕円形で、長軸68cm、短軸45cm、深さ15cmを測る中央穴が検出された。なお、深さは床面の比高差から、44cm程度と思われる。断面形は底面が2段となっており、下位に炭片が確認された。出土遺物は、甕の小破片や石鏃S2・3やサヌカイトの剥片などが認められた。時期は弥生時代中期後半と思われる。(澤山)



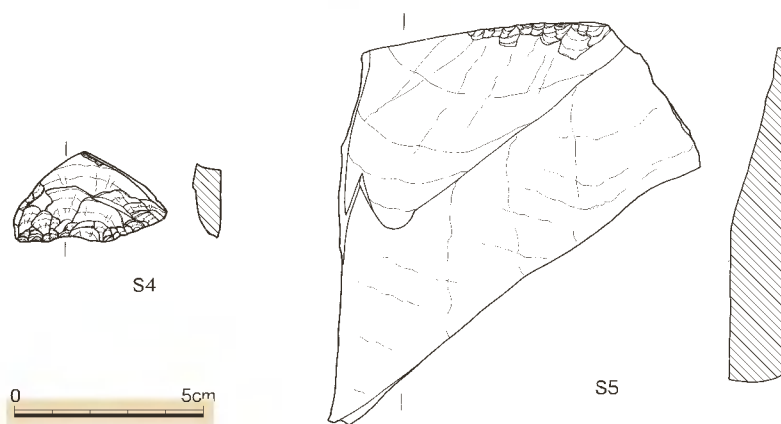
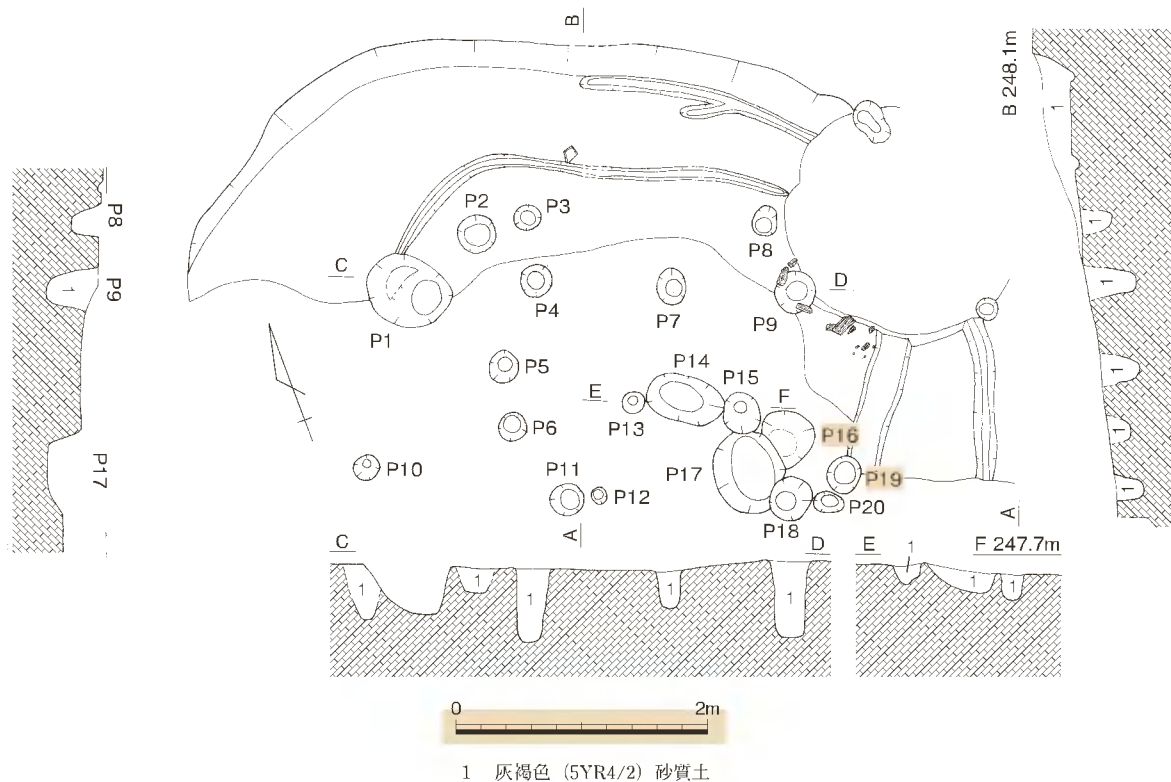
第441図 竪穴住居3 (1/60)・出土遺物 (1/2)

竪穴住居4 (第437・442図、図版86-1)

丘陵南側斜面の中段テラス中央に位置する。隅丸方形に近い住居の北半部が検出されたような状況であるが、南側は後世の造成により急峻な崖面となっていたため、遺構の規模や形状などの全体像は不明確である。床面では、壁体溝2条と柱穴や炭化材を検出している。このうち、P10、P1~3、P8・9、P17が主柱穴とみられる。

出土遺物には弥生土器片のほかに石器類がある。S5はサヌカイトの素材剥片である。この住居からは出土していないが、竪穴住居2からは、サヌカイトの剥片が多く出土しており、石器製作が行われていたとみられる。

住居の時期は、出土遺物や周辺の遺構の状況からみて、弥生時代中期後半であろう。 (弘田)



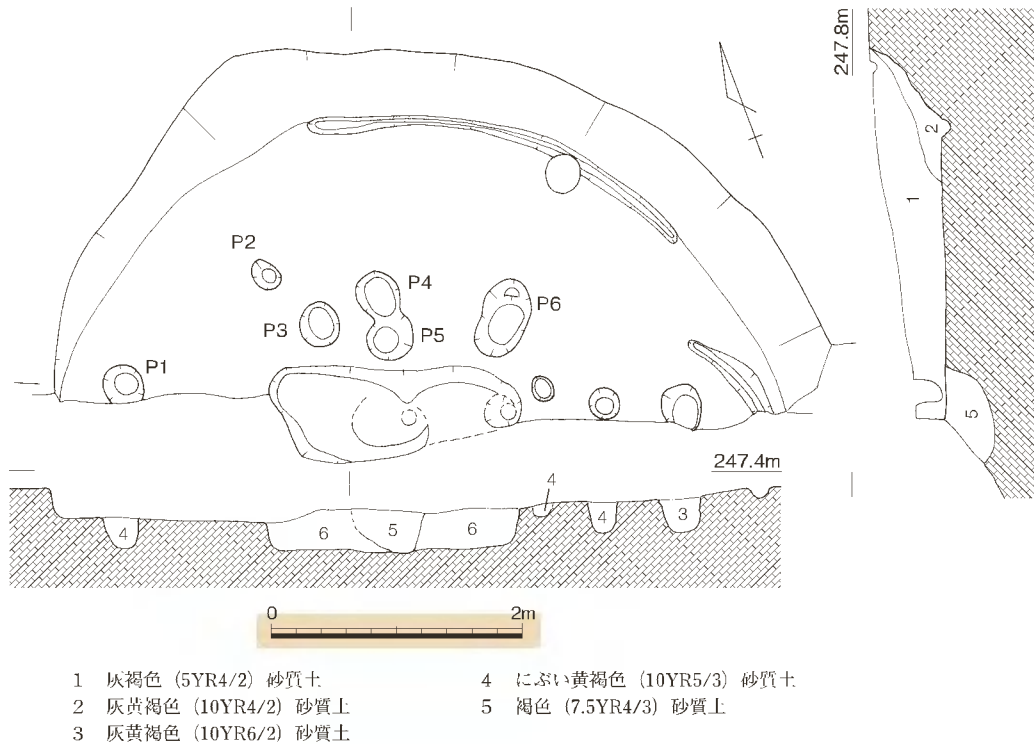
第442図 竪穴住居4 (1/60)・出土遺物 (1/2)

竪穴住居5 (第437・443図、図版86)

竪穴住居4の下層、やや南にずれた位置において検出した竪穴住居である。この住居の南側において等高線が北に入り込んでいる(第437図)のは、今岡12号墳の墳丘構築に際して地山を掘り込んだためと推測できる。

平面が半円形を呈した住居として検出しており、床面では柱穴や土壇、壁体溝を検出している。土壇は住居中央で確認しており、柱穴が周囲を巡るように配置されていた。ただ、土壇内外に焼土面や炭層は認められなかった。

この住居の時期の詳細を特定できるほどの遺物は出土していないが、周辺の遺構の状況からみて、弥生時代中期と考えてよいであろう。(弘田)



第443図 竪穴住居5 (1/60)

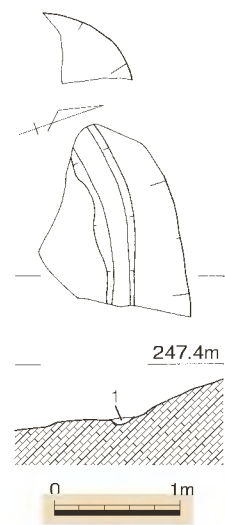
竪穴住居6 (第437・444図)

丘陵南斜面の中央付近に位置している。平面形は隅丸方形と推測されるが、掘り方の大半が削平されている。規模は現状で東西長が267cm以上、南北長が110cm以上を測り、棟方向はN-18°-Wと思われる。断面形は緩く斜めに掘削されたと思われ、深さは24cmを測る。床面はほぼ水平で、底面海拔高は249.27mを測る。貼り床は確認できなかったが、壁体溝が検出された。柱構造は不明である。遺物は出土しなかった。時期は弥生時代後期前半と思われる。(澤山)

竪穴住居7 (第437・445図、図版85-2・87-1)

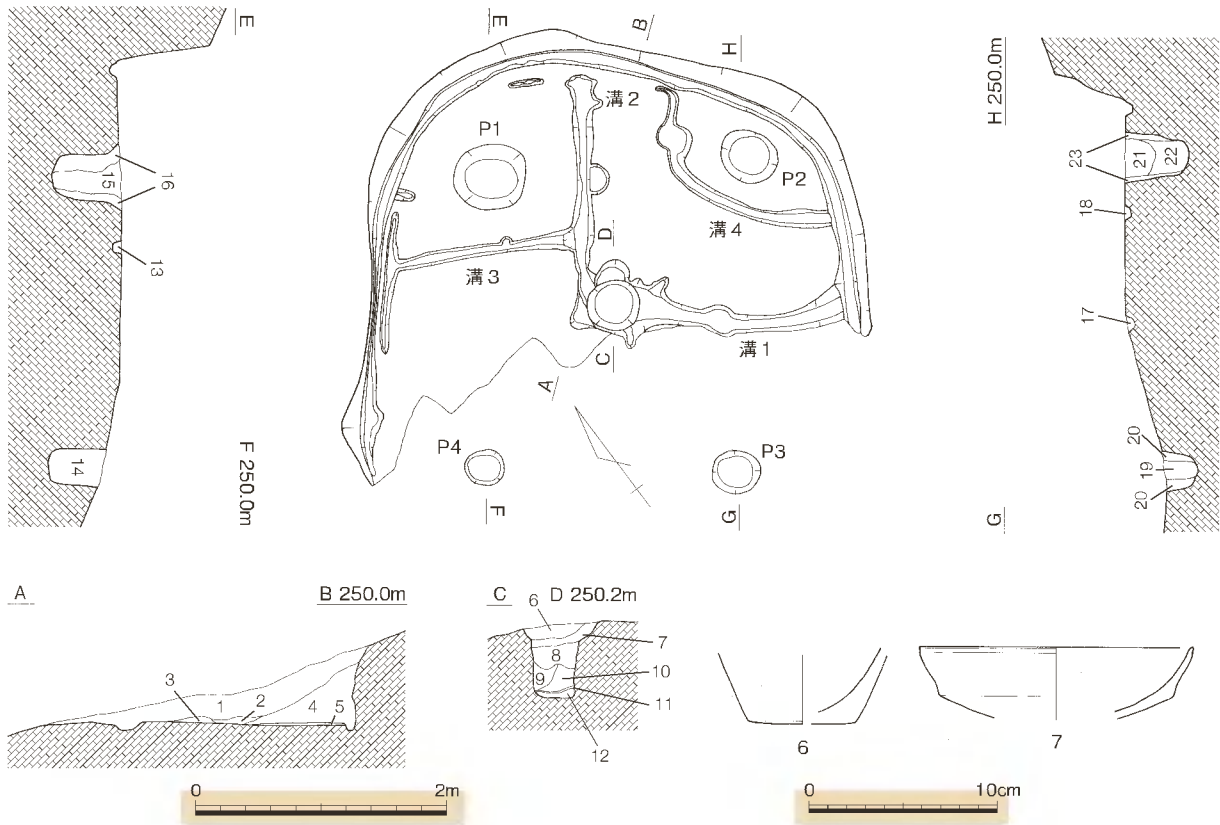
丘陵南斜面の中央付近に位置する。南側は削平を受けているが、隅丸方形と考えられる。棟方向はN-40°-Wである。規模は現状で東西長が397cm、南北長が266cm以上を測り、東西長とほぼ同程度と思われる。断面形は丘陵上方側から「L」字形に掘削されたと思われ、床面からやや外方に立ち上がり、深さは77cmを測る。底面海拔高は249.05mである。部分的には約5cm程度の貼り床が認められ、堅く締まっており、その土層中には炭片や焼土塊が認められた。また、壁面に沿って幅10cm程度の壁体溝が確認された。なお、その内側にも弧状を呈する溝が検出されたが、その他の竪穴住居の切り合いや拡張などの重複関係などは考えにくく、性格ははっきりしない。

柱構造は4個の主柱穴を確認した。柱間距離は197~249cmを測る。主柱穴と側壁の最短距離は北東側が狭い。主柱は円形を呈し、直径は30~55cmで、深さは25~55cmを測る。また、P4を除く柱穴では、柱



1 褐灰色 (5YR4/1) 粘質土

第444図 竪穴住居6 (1/60)



- |   |   |
|---|---|
| <p>1 褐灰色 (5YR5/1) 砂質土<br/>(明赤褐色 (5YR5/6) 砂質土含)</p> <p>2 緑灰色 (5G6/1) 砂質土</p> <p>3 にぶい橙色 (7.5YR6/4) 砂質土<br/>(黄橙色 (7.5YR8/8) 砂質土含)</p> <p>4 灰褐色 (7.5YR4/2) 砂質土 (炭片多含)</p> <p>5 赤褐色 (2.5YR4/6) 砂質土 (炭片・焼土塊含)</p> <p>6 赤色 (10R5/6) 砂質土 (炭片多含)</p> <p>7 灰赤色 (2.5YR5/2) 砂質土 (炭片・焼土粒多含)</p> <p>8 褐灰色 (5YR5/1) 砂質土 (炭片多含)</p> <p>9 赤褐色 (10R4/4) 粘性砂質土</p> <p>10 にぶい棕色 (7.5YR7/4) 砂質土</p> <p>11 黒色 (10YR2/1) 炭層</p> <p>12 浅黄棕色 (10YR8/3) 砂質土<br/>(地山崩土)</p> | <p>13 にぶい棕色 (2.5YR6/4) 砂質土 (炭片含)</p> <p>14 にぶい赤褐色 (2.5YR5/3) 砂質土</p> <p>15 にぶい棕色 (2.5YR6/4) 砂質土</p> <p>16 棕色 (5YR7/6) 砂質土<br/>(赤棕色 (10R6/6) 砂質土、地山崩土ブロック含)</p> <p>17 にぶい棕色 (2.5YR6/4) 砂質土</p> <p>18 にぶい棕色 (2.5YR6/4) 砂質土 (炭片含)</p> <p>19 にぶい赤褐色 (2.5YR5/3) 砂質土 (炭片含)</p> <p>20 棕色 (5YR7/6) 砂質土</p> <p>21 褐灰色 (7.5YR4/1) 砂質土 (炭片含)</p> <p>22 赤棕色 (10R6/6) 砂質土</p> <p>23 棕色 (5YR7/6) 砂質土<br/>(赤棕色 (10R6/6) 砂質土、地山崩土ブロック含)</p> |
|---|---|

第445図 竪穴住居7 (1/60)・出土遺物 (1/4)

痕跡が見てとれ、直径約20cm程度の柱材を使用していたと推測される。床面の中央では、平面形が円形で、規模が長さ55cm、幅40cm、深さ61cmを測る中央穴が検出された。断面形は上部が浅い窪みを有し、下部は筒形を呈する形状である。土層上位は炭片が多く含まれ、中、下位でも炭片ないし炭層が確認された。また、その床面周辺でも炭片や焼土粒の広がりが認められた。

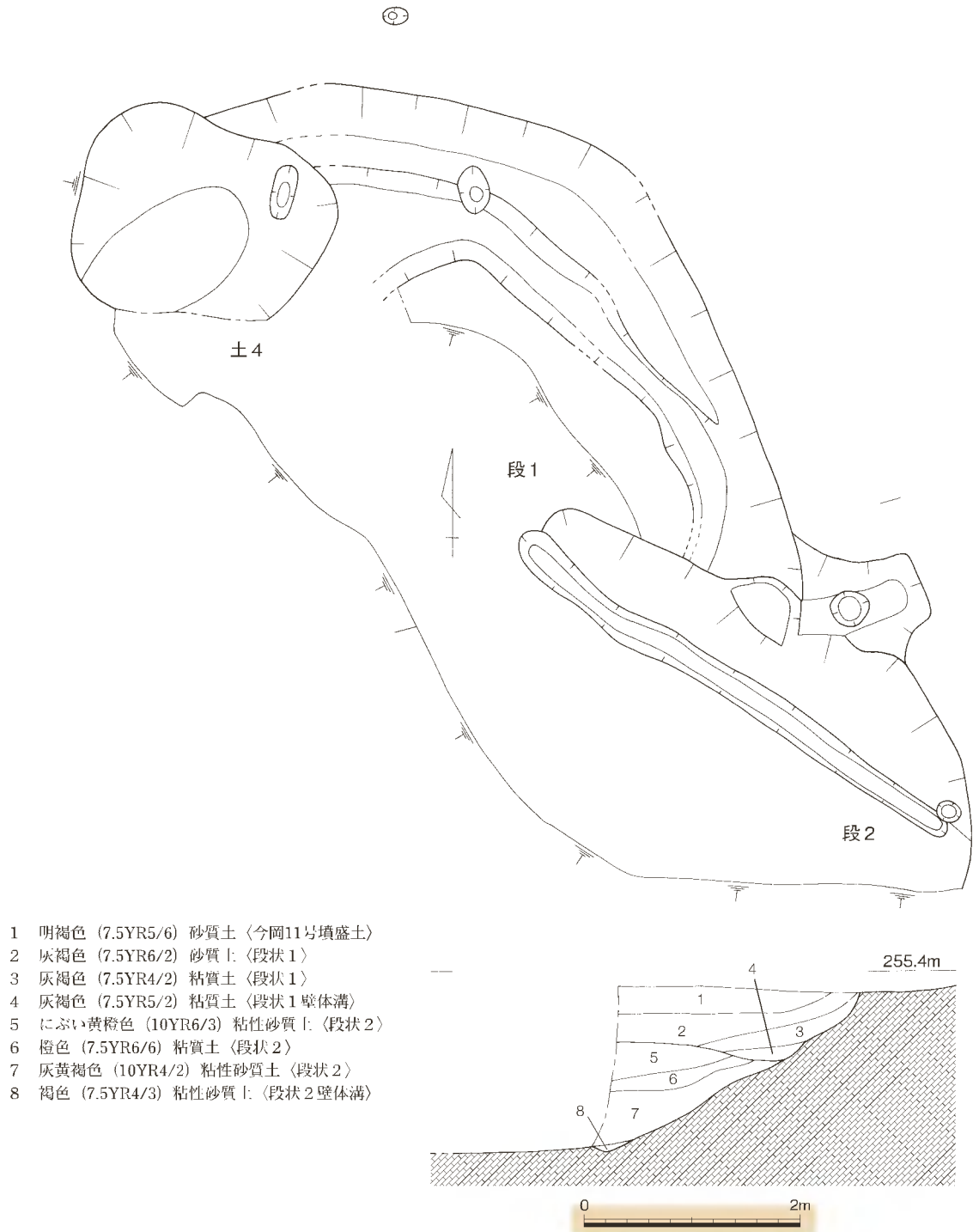
また、床面では中央穴からほぼ直線的に延びる溝1～3とP2を取り囲む円弧状の溝4が検出された。規模は幅が上端部で10～25cm、深さは6～8cm程度を測る。溝の埋土中には炭片が含まれていた。これらが実際にどのような機能があったかは不明である。特に、溝4の性格は検討を要する。

出土遺物としては甕6、高杯7などがみられる。時期は弥生時代後期前半と思われる。(澤山)

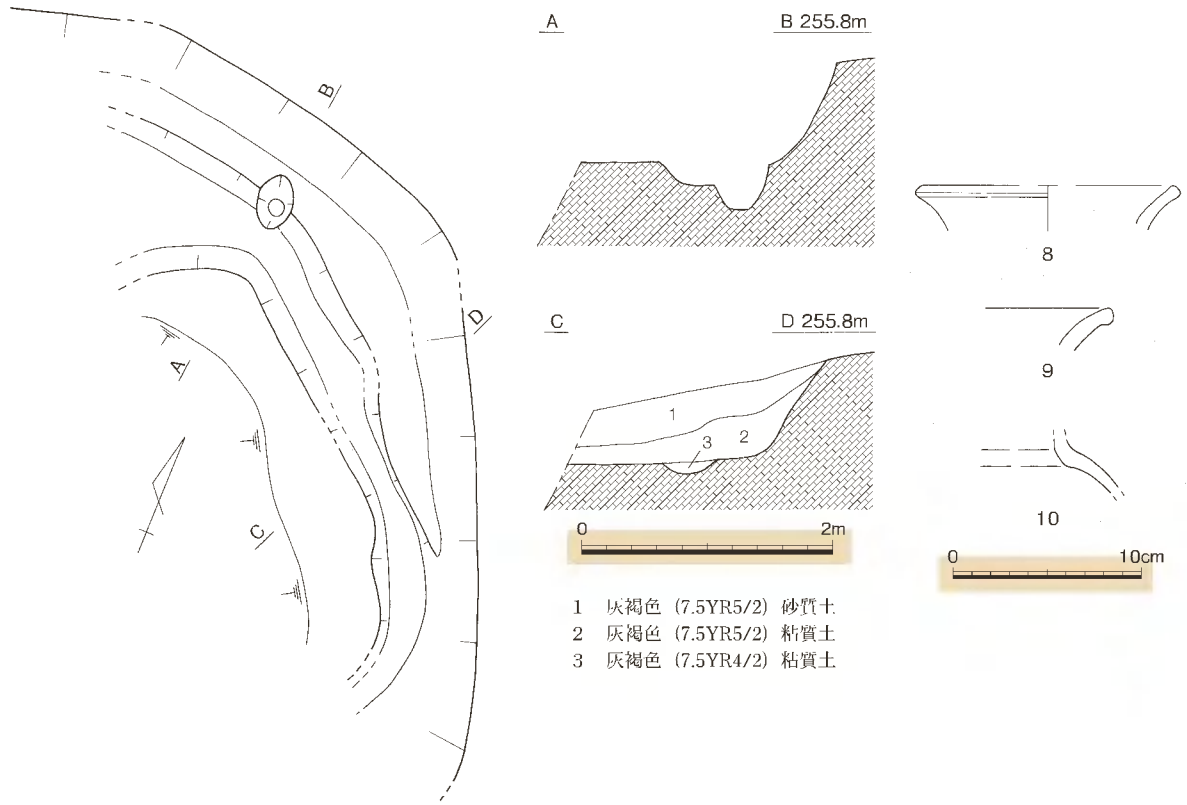
### 3 段状遺構

#### 段状遺構 1 (第437・446・447図、図版87-2)

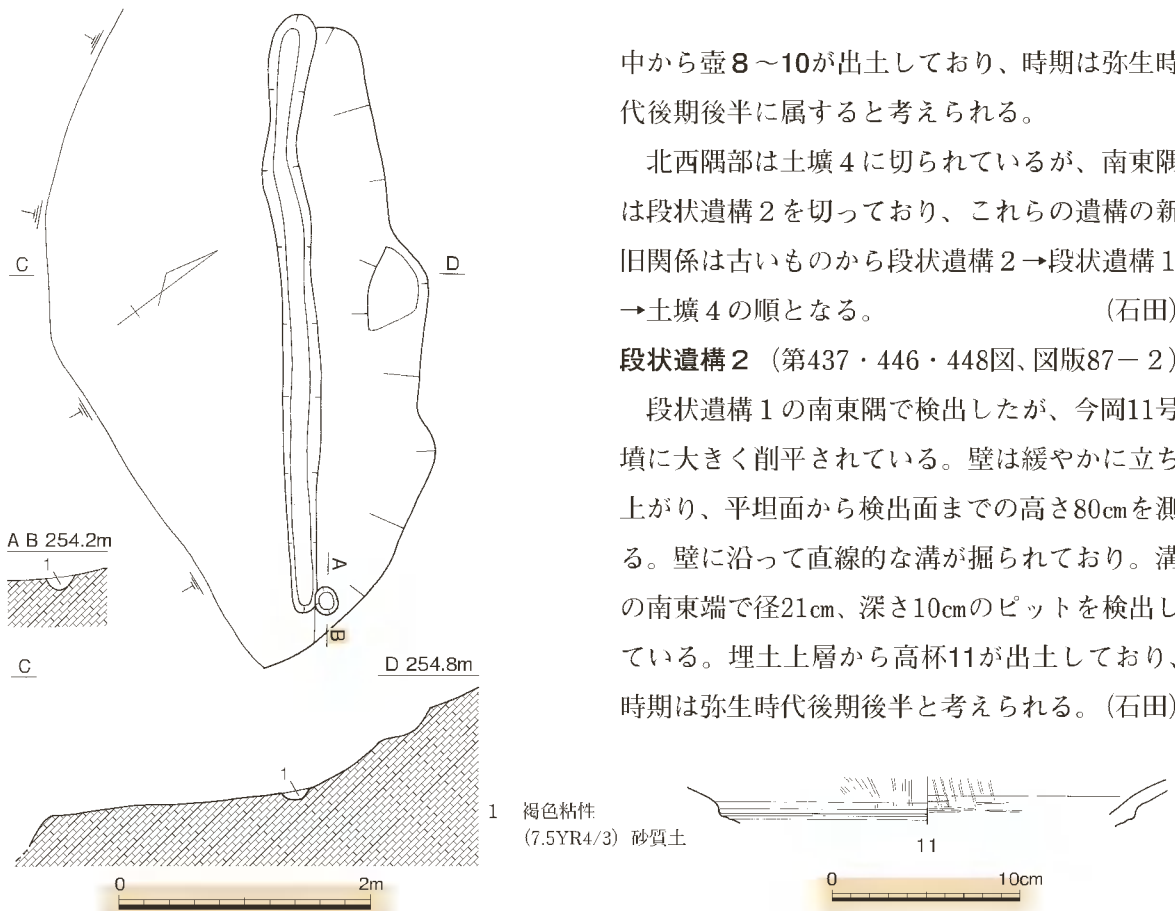
調査区の東端で検出したが、今岡11号墳によってその大部分は削平を受けている。平面形は隅が緩やかに曲がる弧状を呈しており、残存部の長さは704cmを測る。壁は緩やかに立ち上がり、平坦面から検出面までの高さは84cmである。壁に沿って幅30~120cm、深さ10~20cmの溝が巡っている。埋土



第446図 段状遺構 1・2・土壌 4 (1/60)



第447図 段状遺構 1 (1/60)・出土遺物 (1/4)



第448図 段状遺構 2 (1/60)・出土遺物 (1/4)

中から壺8～10が出土しており、時期は弥生時代後期後半に属すると考えられる。

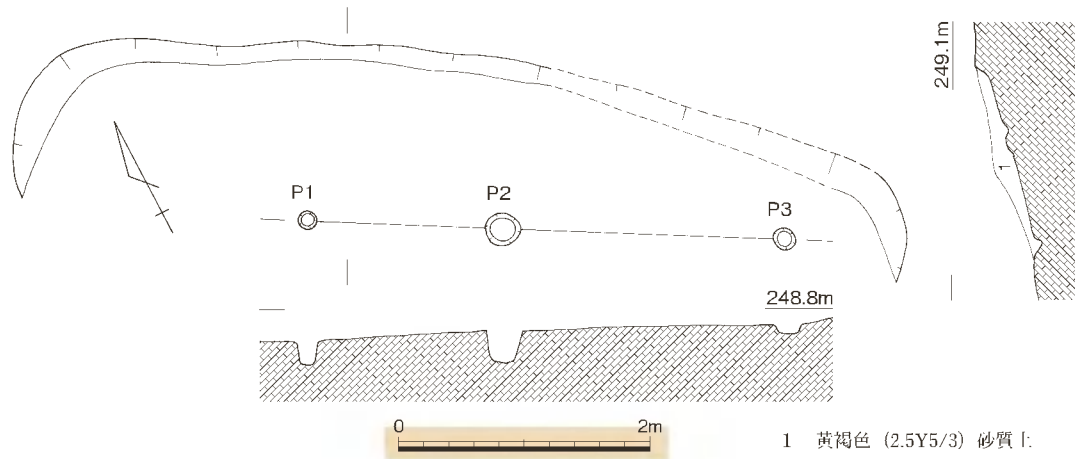
北西隅部は土壌4に切られているが、南東隅は段状遺構2を切っており、これらの遺構の新旧関係は古いものから段状遺構2→段状遺構1→土壌4の順となる。

(石田)

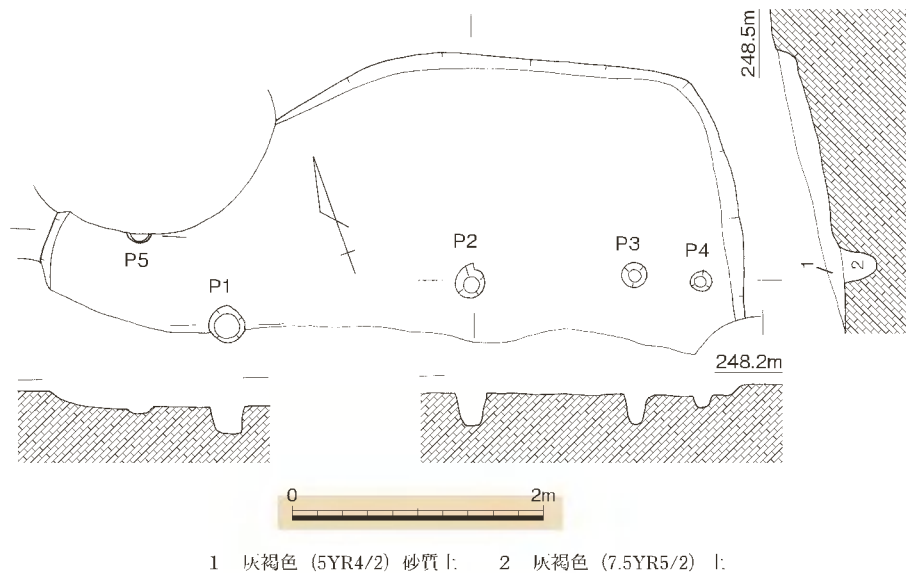
段状遺構2 (第437・446・448図、図版87-2)

段状遺構1の南東隅で検出したが、今岡11号墳に大きく削平されている。壁は緩やかに立ち上がり、平坦面から検出面までの高さ80cmを測る。壁に沿って直線的な溝が掘られており、溝の南東端で径21cm、深さ10cmのピットを検出している。埋土上層から高杯11が出土しており、時期は弥生時代後期後半と考えられる。

(石田)



第449図 段状遺構 3 (1/60)



第450図 段状遺構 4 (1/60)

**段状遺構 3 (第437・449図)**

南斜面の中段中央に位置し、斜面を「コ」の字に造成していた。竪穴住居 7、段状遺構 5～8 の西側に位置した、一連の遺構群である。特に標高249.0mあたりは、竪穴住居 7 とほぼ同一レベルにある。柱穴は 3 個存在したが、壁体溝は見られなかった。時期を特定できるほどの出土遺物は出土しなかったが周囲の竪穴住居、段状遺構から判断して、時期は弥生時代後期の可能性がある。(弘田)

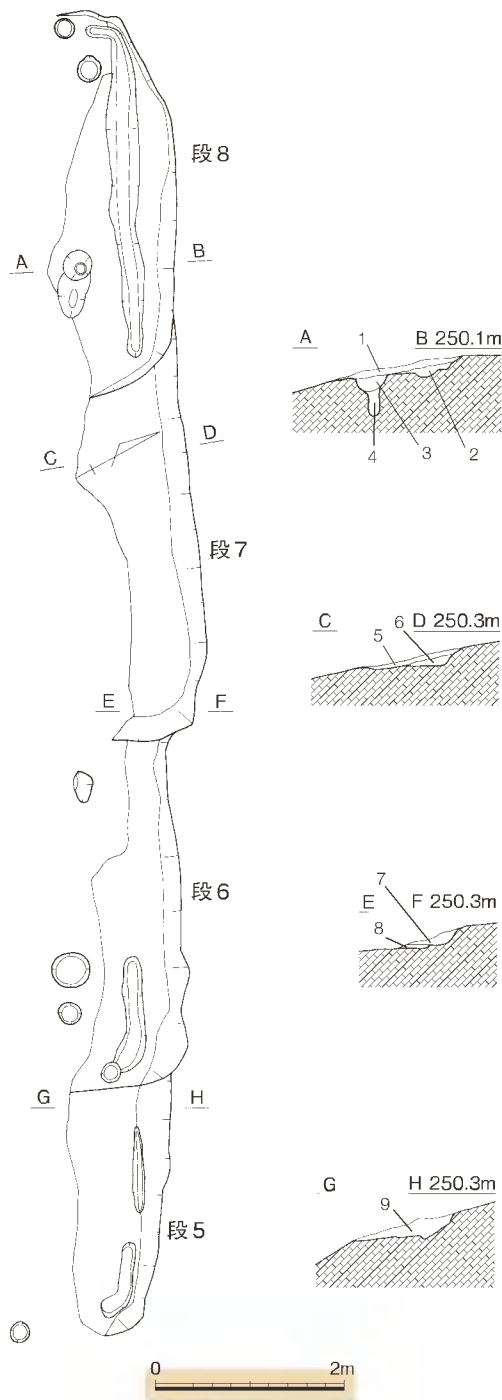
**段状遺構 4 (第437・450図、図版86-1)**

南斜面の中段中央に位置し、段状遺構 3 の南側に接して位置する。段状遺構 3 より後出するとみられ、かつ、この南に存在する竪穴住居 4 によって切られていた。規模が東西で558cm、南北方向に228cmで、平面形が隅丸方形を呈した竪穴住居状の遺構である。壁体溝は見られず、柱穴も 5 個検出しているが、柱列としては認識できなかった。この遺構の時期は、弥生時代後期と考えている。(弘田)

**段状遺構 5 (第437・451・452図)**

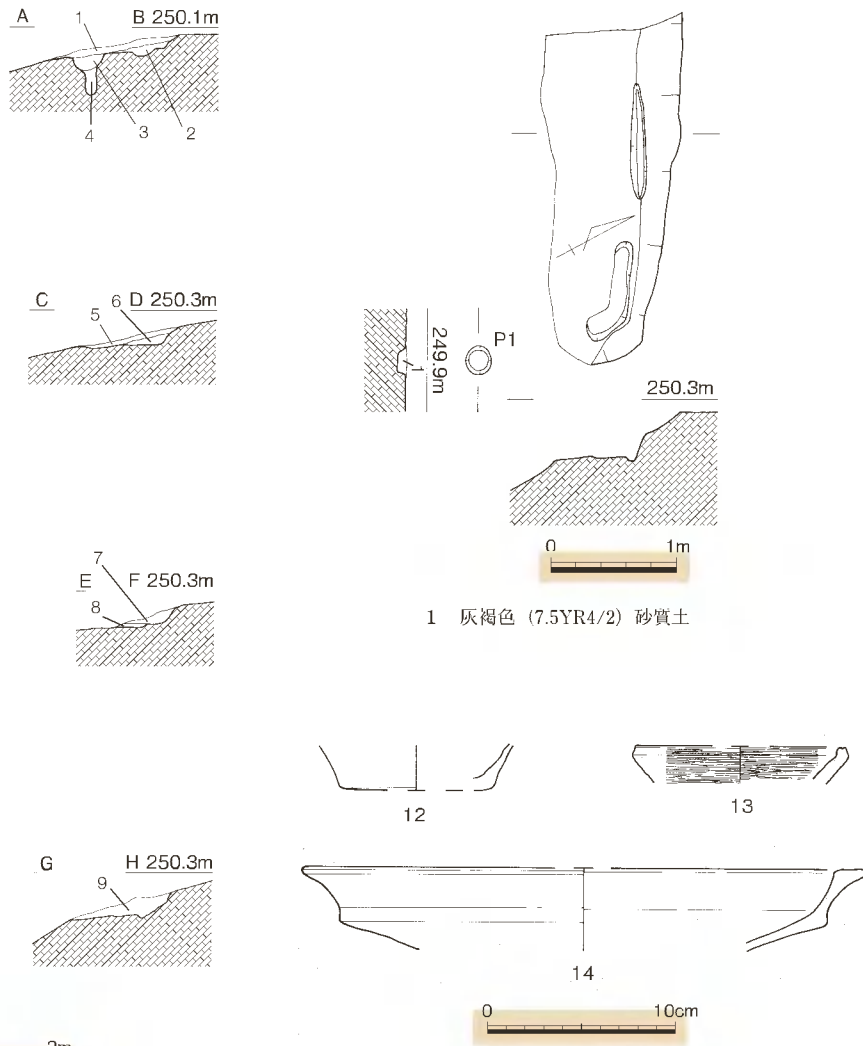
丘陵南斜面の中央に位置し、切り合い関係がある段状遺構 6～8 の中では最も古い。平面形は南側





第451図 段状遺構5～8 (1/80)

- |   |                             |   |                            |
|---|-----------------------------|---|----------------------------|
| 1 | にぶい赤褐色 (5YR4/4) 砂質土         | 6 | 赤褐色 (2.5YR4/6) 砂質土         |
| 2 | 赤褐色 (2.5YR4/6) 砂質土          | 7 | 褐色 (7.5YR4/3) 砂質土          |
| 3 | にぶい赤褐色 (2.5YR4/3) 砂質土       | 8 | 橙色 (2.5YR6/8) 砂質土          |
| 4 | 赤褐色 (2.5YR4/8) 砂質土          | 9 | 褐色 (7.5YR4/4) 砂質土<br>(炭片含) |
| 5 | 赤褐色 (2.5YR4/6) 砂質土<br>(炭片含) |   |                            |

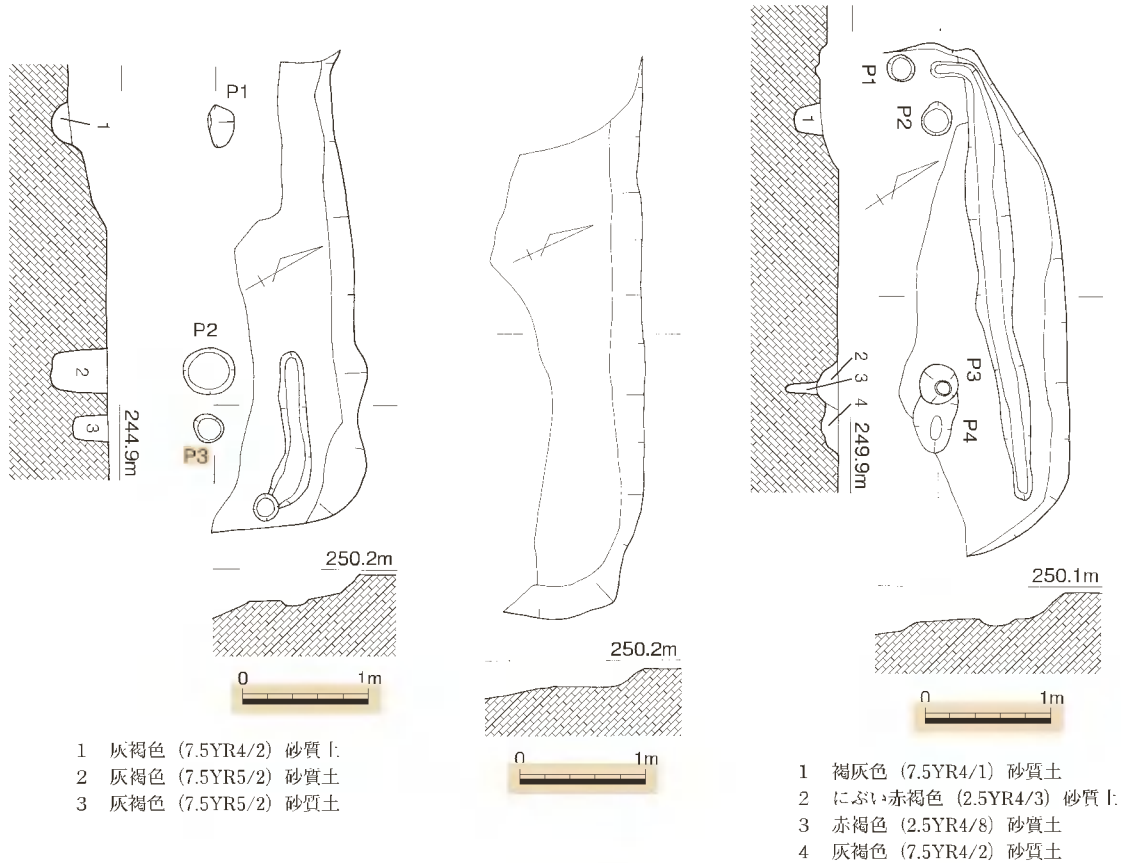


第452図 段状遺構5 (1/60)・出土遺物 (1/4)

に削平を受けるが、隅丸方形と思われる。棟方向はN-27°-Eである。規模は、現状で東西長365cm、南北長109cm以上を測る。深さは35cmを測り、底面海拔高は249.84mである。また部分的に幅10～15cm、深さ4cmの壁体溝が確認されたが、貼り床は見られなかった。柱穴は直径20cm、深さ8cmのP1を確認した。中央穴は検出されていない。遺物は甕12、鉢13、高杯14などが出土した。時期は弥生時代後期前半と思われる。(澤山)

段状遺構6 (第437・451・453図、図版87-1)

丘陵南斜面の中央に位置する。平面形は南側に削平を受けるが、隅丸方形と考えられる。棟方向は



第453図 段状遺構 6 (1/60) 第454図 段状遺構 7 (1/60) 第455図 段状遺構 8 (1/60)

N-27°-Eである。規模は現状で東西長354cm、南北長104cm以上、深さ20cmを測り、底面の海拔高は249.95mである。床面からは柱穴4個や部分的に幅20cm、深さ5cmの壁体溝を確認した。貼り床や中央穴は見られなかった。遺物は甕片が出土した。時期は弥生時代後期前半と思われる。(澤山)

段状遺構 7 (第437・451・454図、図版87-1)

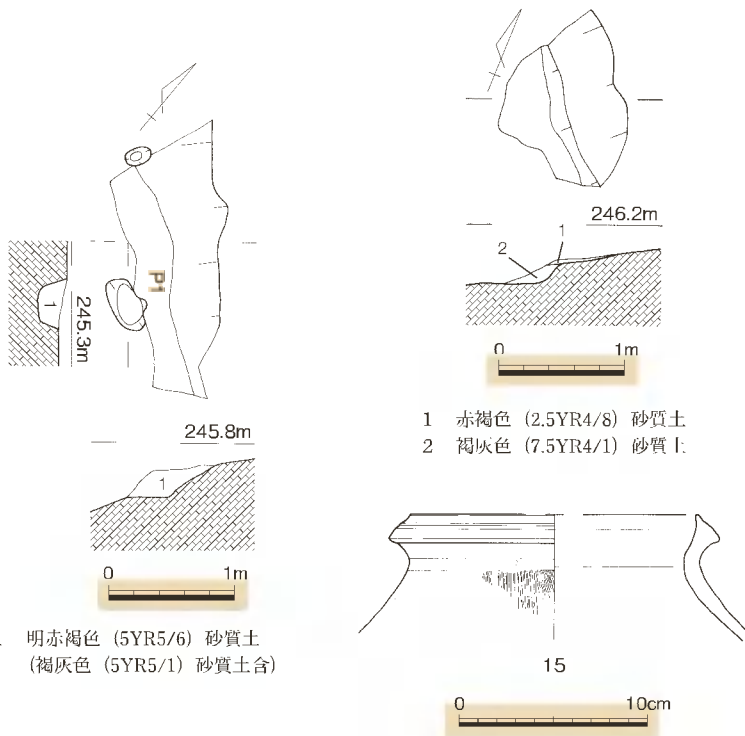
丘陵南斜面の中央に位置する。平面形は南側に削平を受けるが、隅丸方形と考えられる。棟方向はN-27°-Eである。規模は現状で東西長375cm、南北長119cm以上を測る。深さは14cmを測り、底面海拔高は250.0mである。壁体溝や貼り床、柱穴、中央穴は認められなかった。遺物は甕片が出土した。時期は弥生時代後期前半と思われる。(澤山)

段状遺構 8 (第437・451・455図、図版87-1)

丘陵南斜面の中央に位置する。平面形は南側に削平を受けるが、隅丸方形と考えられる。棟方向はN-28°-Eである。規模は現状で東西長403cm、南北長140cm以上、深さ24cmを測り、底面の海拔高は249.8mである。床面からは柱穴4個や幅10~30cm、深さ6cmの壁体溝が確認された。貼り床や中央穴は見られなかった。遺物は甕片が出土した。時期は弥生時代後期前半と思われる。(澤山)

段状遺構 9 (第437・456図)

丘陵南斜面端部の中央に位置し、掘り方の大半が削平されている。平面形は隅丸方形ないし長方形と推測され、規模は現状で東西長162cm以上、南北長82cm以上、深さは28cmを測り、底面海拔高は245.37mである。遺物はP1から甕片が出土している。時期は弥生時代後期前半と思われる。(澤山)



第456図 段状遺構9 (1/60)

第457図 段状遺構10 (1/60)

・出土遺物 (1/4)

段状遺構10 (第437・457図)

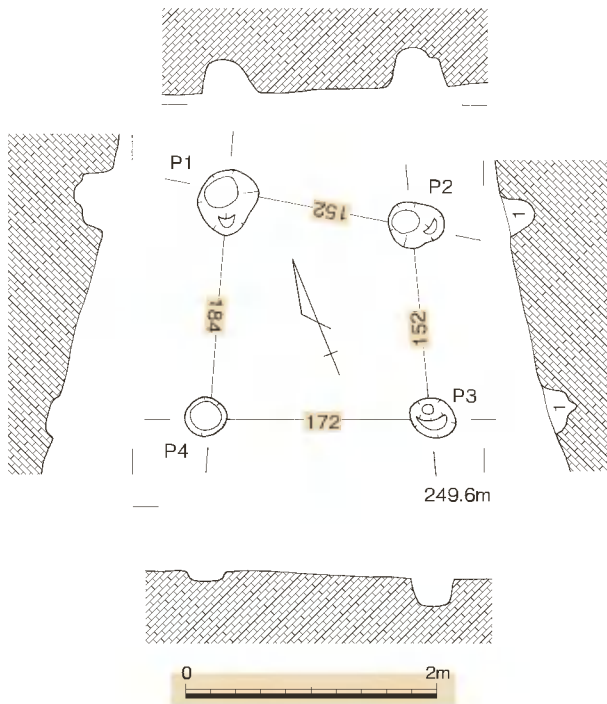
丘陵南斜面端部の中央で検出され、段状遺構9の東約2mに位置する。掘り方の大半が削平されており、平面形態は不明である。規模は現状で東西長140cm以上、南北長99cm以上、深さは25cmを測り、底面海拔高は245.74mである。床面からは、貼り床や壁体溝、柱穴などは検出できなかった。遺物は、甕15が出土している。時期は弥生時代後期前半であろう。(澤山)

4 掘立柱建物

掘立柱建物 (第437・458図、

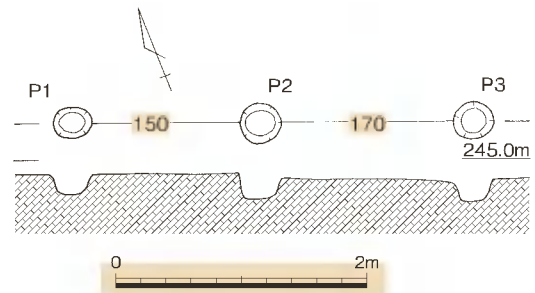
図版87-1)

南斜面中部中段テラスのほぼ中央に位置する、1×1間の掘立柱建物である。南北の柱は検出面において、30~40cmの高低差がある。柱穴は、直径30~50cmほどの円形で、深さが10~40cmほどである。柱間の心々距離は、152~184cmで

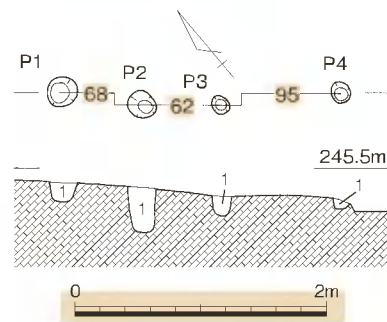


1 褐色 (7.5YR4/3) 土 (明黄褐色 (10YR7/6) 土混)

第458図 掘立柱建物 (1/60)

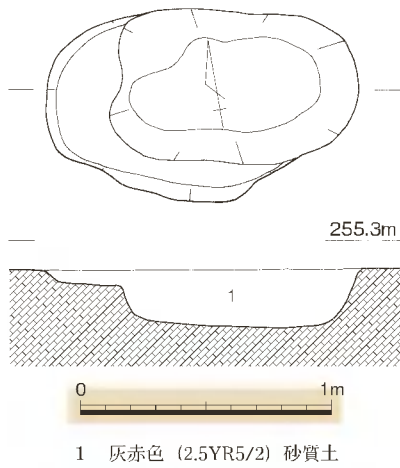


第459図 柱穴列1 (1/60)

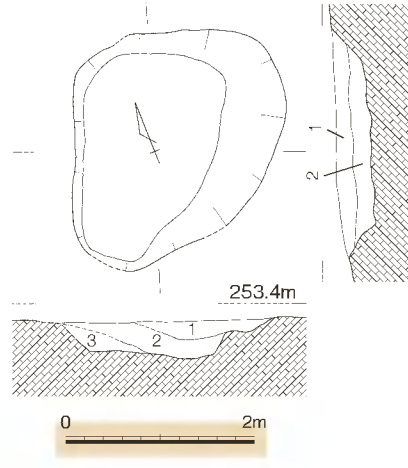


1 褐色 (7.5YR4/4) 砂質土

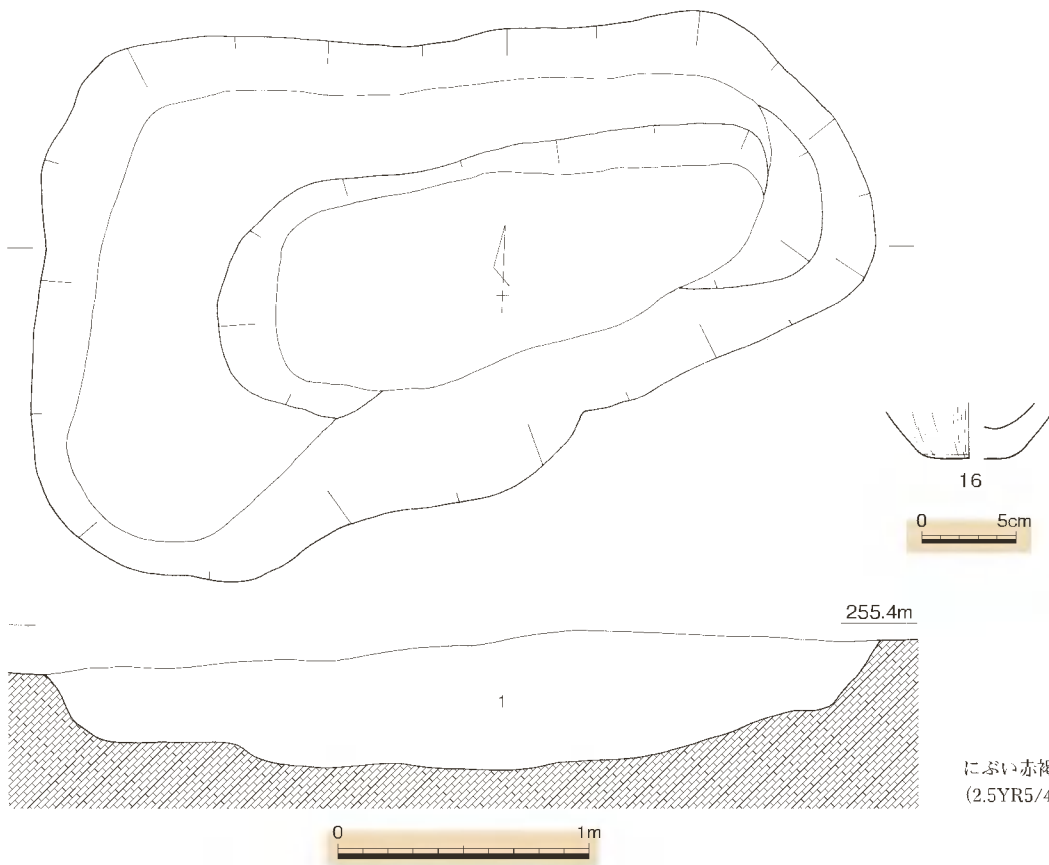
第460図 柱穴列2 (1/60)



第461図 土壌 1 (1/30)



第462図 土壌 2 (1/80)



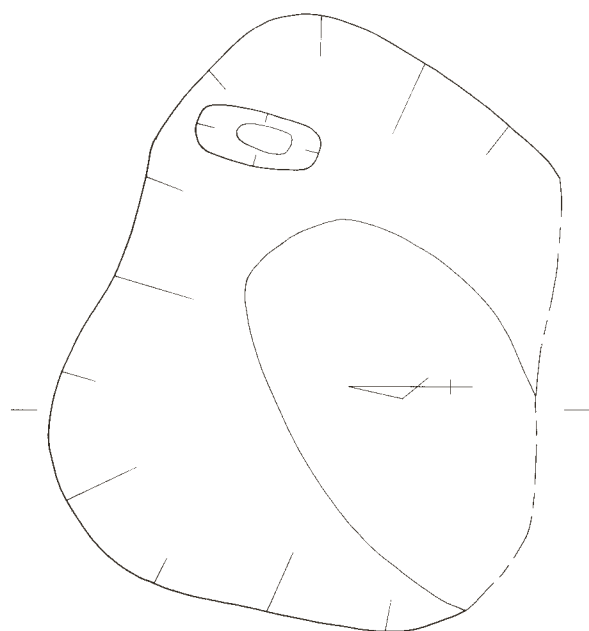
第463図 土壌 3 (1/30)・出土遺物 (1/4)

ある。出土遺物が見られないことから時期は不明確であるが、周辺の遺構から判断すると、弥生時代でも後期ではなかろうか。竪穴住居の痕跡とも考えられる。(弘田)

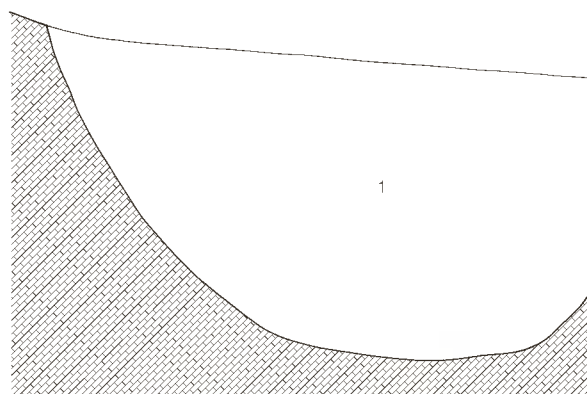
## 5 柱穴列

### 柱穴列 1 (第437・459図)

調査地の南西隅で検出した柱穴3個の列。等高線が北に入り込むように地山が加工され、造成された平坦面で検出した。段状遺構の柱列であった可能性がある。弥生時代後期の可能性がある。(弘田)



255.5m



1 灰黄褐色  
(10YR4/2) 砂質土



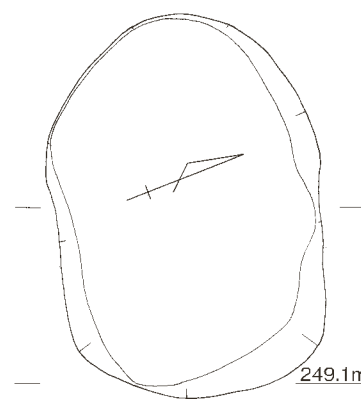
第464図 土壌 4 (1/30)・出土遺物 (1/4)



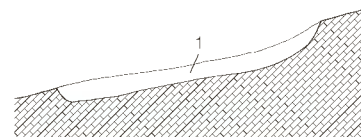
17



18



249.1m



1 灰褐色 (10YR5/2) 土

第465図 土壌 5 (1/30)

## 柱穴列 2 (第437・460図)

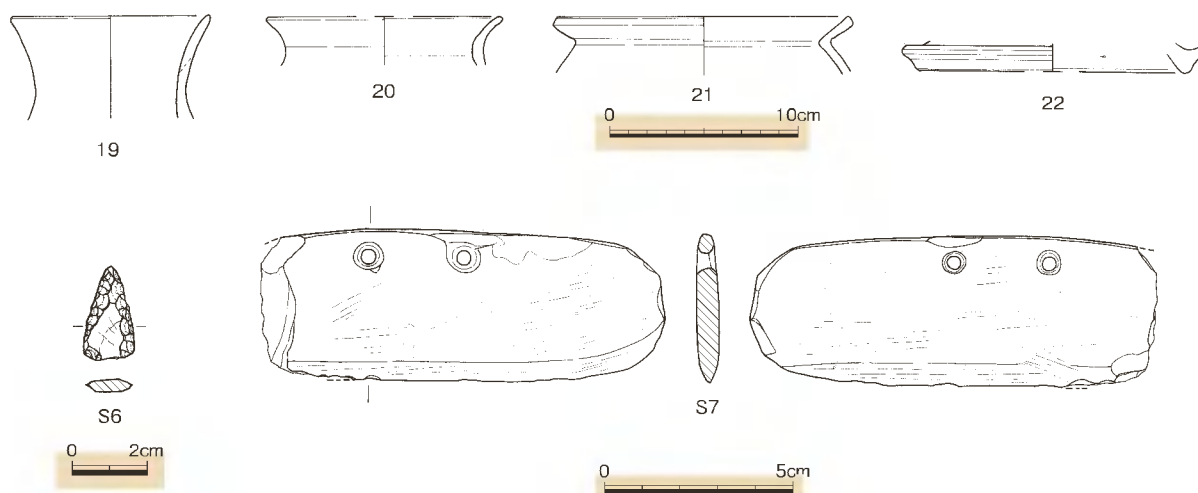
丘陵南斜面端部の中央に位置する。P 1 - P 4 は 225cm で、P 1 - P 2 が 68cm、P 2 - P 3 が 62cm、P 3 - P 4 が 95cm を測る。P 2・3 は列方向に対して、10cm 南西に配される。性格として、段状遺構との関連が考えられる。遺物は甕片が出土した。時期は弥生時代後期後半である。(澤山)

## 6 土壌

### 土壌 1 (第437・461図)

尾根頂部平坦面の西端に近いところに位置する。今岡 9 号墳の周溝とは切り合い関係にあり、9 号墳の周溝と一連の遺構として調査した。平面形は不整形であるが、底面は隅丸長方形を呈し、規模は長軸で 230cm、短軸が 150cm で、深さは 40cm である。(弘田)

### 土壌 2 (第437・462図)



第466図 遺構に伴わない遺物 (1/4・1/2)

丘陵頂部の平坦部中央付近に位置する。平面形は楕円形で、長軸123cm、短軸76cm、深さ22cmを測る。遺物はサヌカイトの剥片が1点出土した。時期は弥生時代後期前半と思われる。(澤山)

#### 土壌3 (第437・463図)

丘陵頂部の平坦部東側付近から北斜面側近くに位置する。平面形は楕円形で、長軸344cm、短軸210cm、深さ45cmを測る。底部には平面形が楕円形で、規模が長軸225cm、短軸80cm、深さ6cmの浅い窪みが認められた。遺物は壺の底部16が出土した。時期は弥生時代後期前半である。(澤山)

#### 土壌4 (第437・446・464図)

東端部の今岡11号墳に近接した地点で検出した土壌である。平面形は不整形を呈し、深さは116cmになっていた。内部には灰黄褐色砂質土が堆積し、高杯の脚部17・18が出土した。(福田)

#### 土壌5 (第437・465図、図版86-1)

丘陵南斜面中段テラスのほぼ中央に位置する土壌である。段状遺構3の床面で検出しており、段状遺構に伴う土壌かもしれない。平面形は楕円形を呈し、長軸が152cm、短軸で106cmを測る。(弘田)

### 7 遺構に伴わない遺物 (第466図)

この遺跡では、表土を掘削した後の地山面で遺構検出を行っており、遺物包含層が存在しなかったことから出土遺物は極端に少ない。南側の谷に比べて、北側の谷部は浅く、遺構は存在しなかったが尾根からの流入した土中にわずかな遺物が存在している。

弥生土器には、19～22がある。19は長頸壺の口縁部である。20・21は短く外反する口縁部を持つ甕である。22は高杯の脚端部である。時期は、弥生時代中期中葉から後期にかけてのものである。

石器類には、サヌカイト製の石鏃S6と緑色片岩製の磨製石包丁S7がある。S6は北側の浅い谷部に入れたトレンチから出土した。S7は、調査区東端外の尾根筋上で露出していたもので、さらに尾根筋の高所に段状遺構などが存在するとみられる。(弘田)

### 第3節 古墳時代以降の遺構・遺物

#### 1 概要

今岡D遺跡では土壇10基、溝1条を検出したが、土壇の中には土壇墓であった可能性のあるものも含む。古墳時代には、集落自体は谷や平野部へ移り、丘陵は墓域となっていたと思われる。(弘田)

#### 2 土壇

##### 土壇6 (第436・467図)

調査区の西端の丘陵頂部平坦面で検出した土壇で、確認調査時にすでに一部が検出されていた。平面形はやや歪な長方形で、底部での規模は長軸が120cm、短軸28cm、深さ24cmである。周辺からは5世紀後半の須恵器が出土しており、時期推定の手がかりとなろうか。土壇墓の可能性もある。(弘田)

##### 土壇7 (第436・468図)

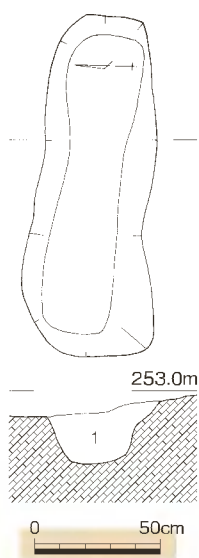
北斜面のほぼ中央で、今岡10号墳のすぐ北に位置する。長方形プランで、10号墳主体部主軸と平行することから、土壇墓の可能性もある。土壇中央の円形に一段深い落ち込みは、別の土壇かもしれない。ともに出土遺物はないが古墳時代としておく。(弘田)

##### 土壇8 (第436・469図)

調査区丘陵頂部の平坦部中央付近に位置する。平面形は楕円形と思われ、現状では長軸138cm、短軸109cm、深さ35cm、底面海拔高は254.65mを測る。また、掘り方の北西付近では、埋土中に長さ24cm、幅34cm、厚さ22cm程度の石が埋没していた。時期は古墳時代中期より古いと思われる。(澤山)

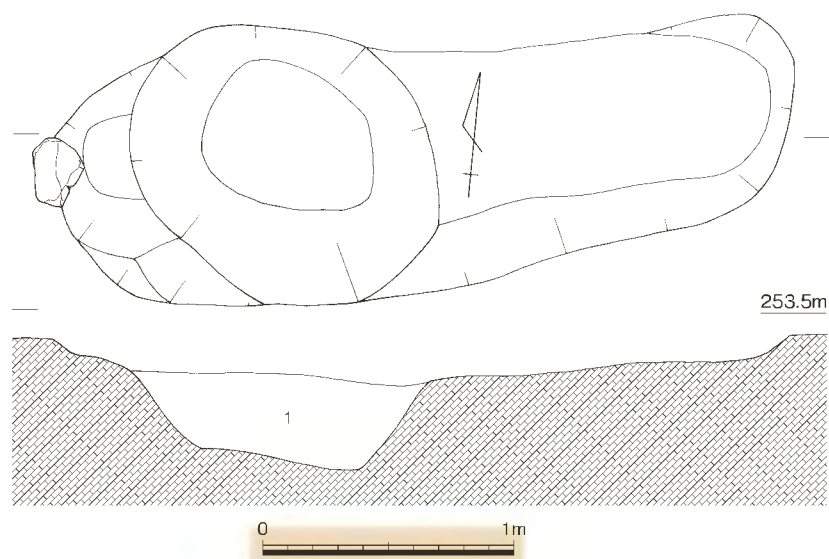
##### 土壇9 (第436・470図)

調査区の北側に位置する丘陵尾根上に、前述した土壇8と重なって検出した土壇で、西側には今岡



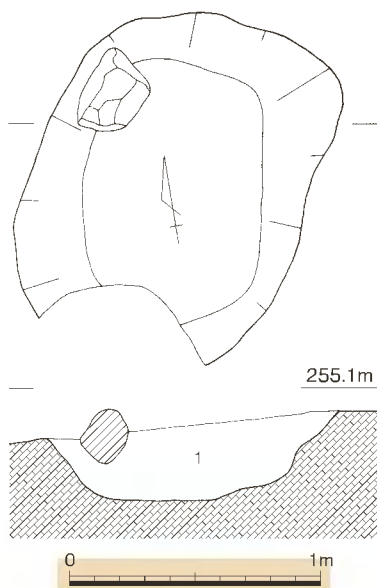
1 褐色 (7.5YR4/6) 土

第467図 土壇6 (1/30)



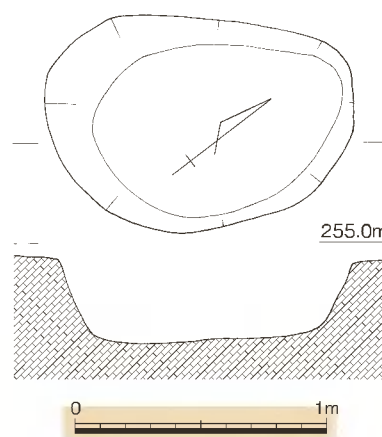
1 褐色 (7.5YR4/3) 土

第468図 土壇7 (1/30)

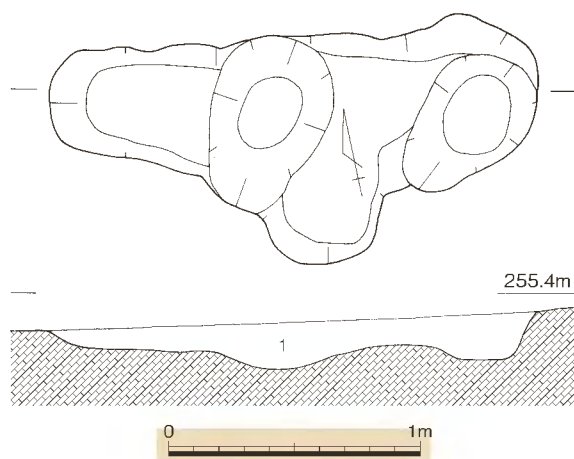


1 にぶい赤褐色 (2.5YR5/4) 砂質土

第469図 土壌8 (1/30)

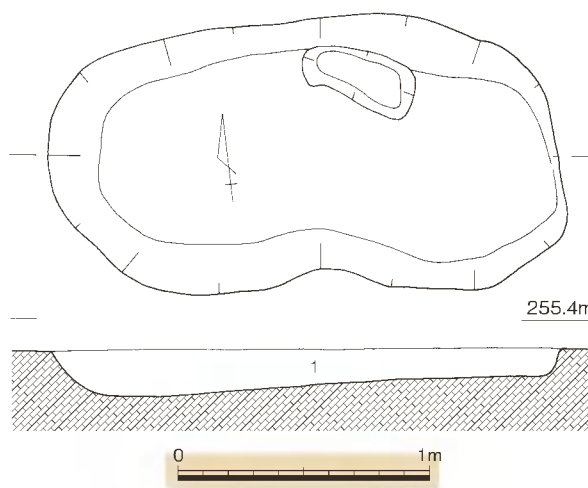


第470図 土壌9 (1/30)



1 にぶい赤褐色 (2.5YR5/3) 砂質土

第471図 土壌10 (1/30)



1 にぶい赤褐色 (2.5YR5/4) 砂質土

第472図 土壌11 (1/30)

10号墳の周溝が存在した。平面形は長径123cm、短径86cmの楕円形を呈し、検出面からの深さは35cmであった。内部には灰褐色砂質土が堆積し、遺物は出土しなかった。(福田)

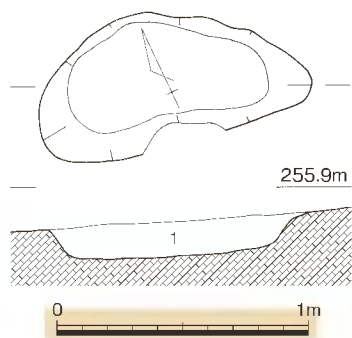
土壌10 (第436・471図)

調査区丘陵頂部の平坦部東側付近に位置する。現状の平面形は不整楕円形状であるが、大小複数の土壌が重複する可能性もある。長軸193cm、短軸92cm、深さ26cm、底面海拔高255.07mを測る。遺物は出土しなかった。時期は古墳時代中期と思われる。(澤山)

土壌11 (第436・472図)

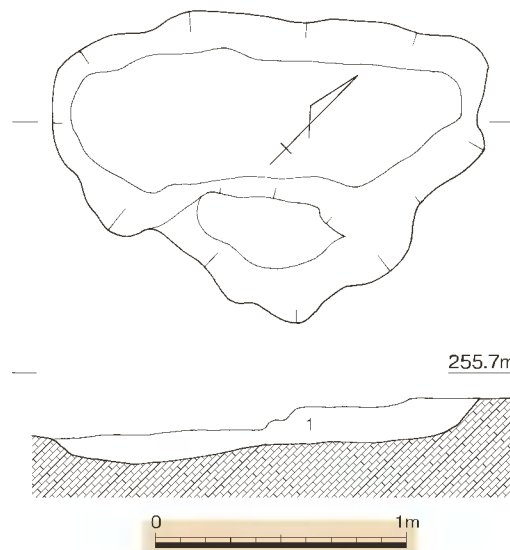
調査区丘陵頂部の平坦部東側付近に位置する。平面形はやや大形の楕円形を呈し、長軸204cm、短軸106cm、深さは24cm、底面海拔高は255.1mを測る。また、掘り方の北端中央付近の床面では浅い楕円形の窪みが認められた。遺物は出土しなかった。時期は古墳時代中期より古いと思われる。(澤山)



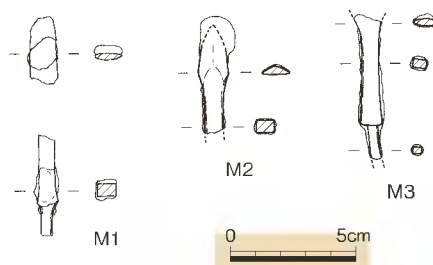


1 にぶい赤褐色 (5YR4/3) 砂質土  
(明赤褐色 (2.5YR5/6) 砂質土含)

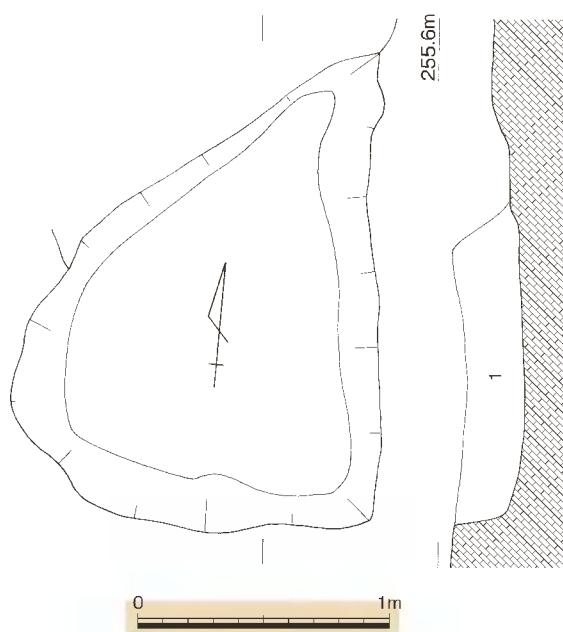
第473図 土壌12 (1/30)



1 灰褐色 (5YR4/2) 砂質土



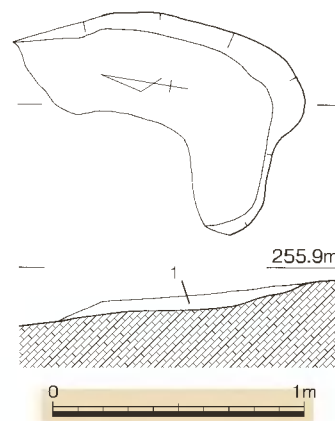
第474図 土壌13 (1/30)・出土遺物 (1/3)



1 灰褐色 (5YR4/2) 砂質土



第475図 土壌14 (1/30)・出土遺物 (1/4)



1 灰褐色 (5YR4/2) 砂質土  
(橙色 (5YR6/8) 砂質土含)

第476図 土壌15 (1/30)

土壌12 (第436・473図)

北東部の丘陵尾根上に検出した土壌で、近接した地点に土壌墓2や土壌墓3が存在した。平面形は長径110cm、短径84cmの楕円形に似た形態を呈し、検出面からの深さは15cmになっていた。内部には明赤褐色砂質土を含むにぶい赤褐色砂質土が堆積し、古墳時代の土壌と推定された。(福田)

土壌13 (第436・474図)

北東部の丘陵尾根上に検出したもので、南側に接して後述する土壌14が存在した。平面形は2基の土壌が重なったような形態を呈し、規模の大きいものは長径170cm、短径80cmの楕円形に似た形で、検出面からの深さは15cmであった。内部には灰褐色砂質土が堆積し、鉄鏃M1～3が出土したので、土壌墓になる可能性も考えられたが、確証が得られなかったため土壌にした。(福田)

土壌14 (第436・475図)

調査区丘陵頂部の平坦部東側から北斜面にかかる付近に位置する。北側は削平を受けているが、平面形は楕円形を呈すると思われ、現状で長軸115cm、短軸84cm、深さ14cm、底面海拔高は255.7mを測る。遺物としては、図示した須恵器片が出土した。これらの出土遺物や近接する土壌墓3と類似する埋土から、時期は古墳時代中期と思われる。(澤山)

土壌15 (第436・476図)

調査区丘陵頂部に平坦部東側付近に位置する。平面形は不整楕円形を呈し、長軸108cm、短軸54cm、深さ21cm、底面海拔高255.49mを測る。遺物は出土しなかったが、近接する土壌墓2と類似する埋土から古墳時代中期と思われる。(澤山)

3 溝

溝 (第436・477図)

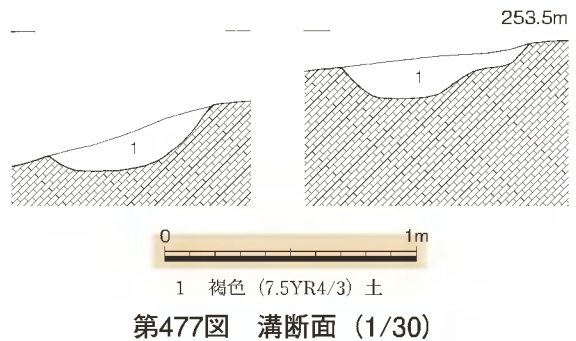
丘陵頂部に存在し、平坦面と南側斜面との傾斜変換点で、等高線と平行に走る溝である。今岡9号墳と10号墳の中間に位置することから、削平された古墳の周溝であった可能性も考えられる。(弘田)

4 遺構に伴わない遺物 (第478図)

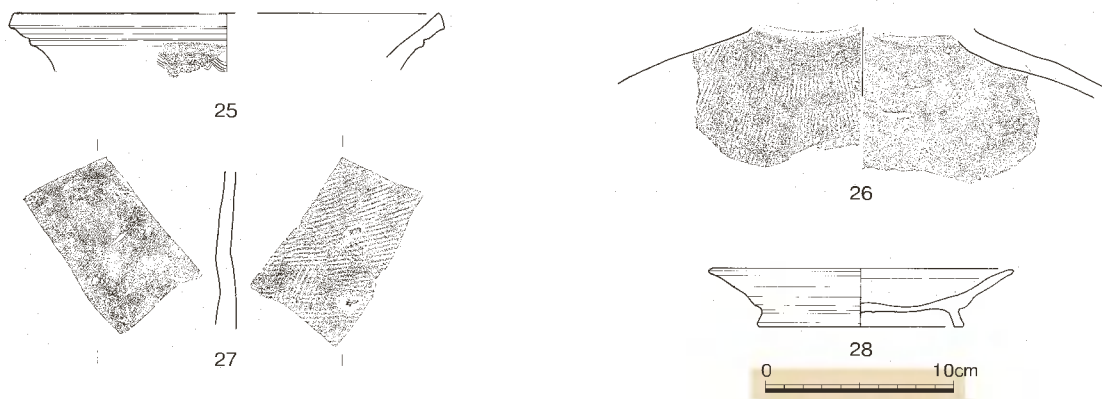
25と27は丘陵平坦面の西端部にある土壌6周辺からの出土であった。これらの時期は、5世紀後半から末葉ごろと考えられる。

26は土壌墓1や土壌7の周辺からの出土である。時期は土壌墓1に近似すると考えられる。

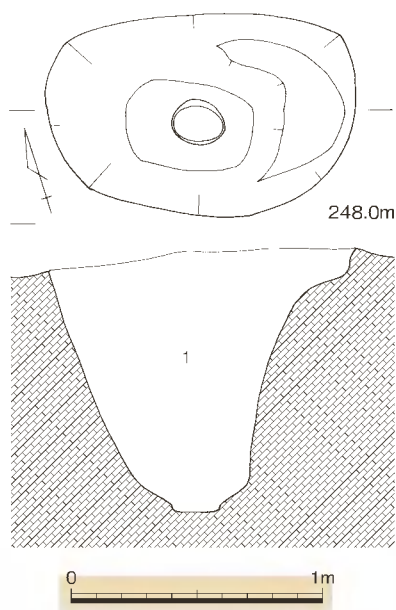
28は平安時代の土師器である。(弘田)



第477図 溝断面 (1/30)

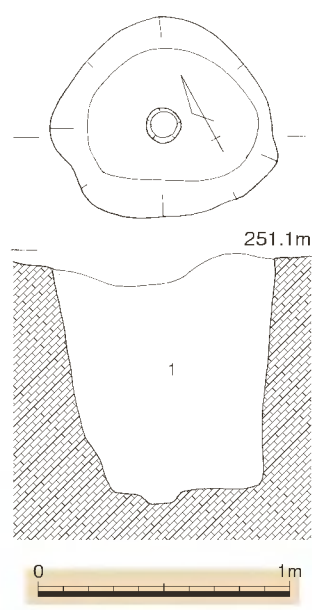


第478図 遺構に伴わない遺物 (1/4)



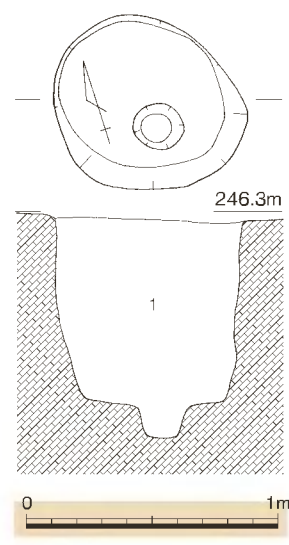
1 灰黄褐色 (10YR5/2) 砂質土

第479図 土壌16 (1/30)



1 灰黄褐色 (10YR4/2) 砂質土

第480図 土壌17 (1/30)



1 灰黄褐色 (10YR4/2) 砂質土

第481図 土壌18 (1/30)

## 第4節 その他の時期の遺構

### 1 土壌

#### 土壌16 (第436・479図)

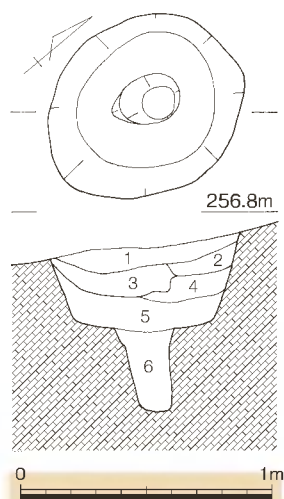
南斜面に検出した土壌で、西側には竪穴住居5が確認されている。平面形は長径123cm、短径81cmの楕円形を呈し、検出面からの深さは103cmであった。底部には柱穴状の浅い窪みが存在し、灰黄褐色砂質土が堆積していた。縄文時代の落とし穴と考える。(福田)

#### 土壌17 (第436・480図)

南西端部の斜面で検出した土壌である。平面形は長径92cm、短径80cmの不整形を呈し、検出面からの深さは86cmであった。底部には小規模な柱穴状の浅い窪みが存在し、灰黄褐色砂質土が堆積していた。この土壌も縄文時代の落とし穴と推定される。(福田)

#### 土壌18 (第436・481図)

北東部に検出した土壌で、平面形は長径78cm、短径66cmの楕円形を呈し、深さは87cmであった。灰黄褐色砂質土が堆積した土壌の底部に柱穴に似た穴があるから、縄文時代の落とし穴であろう。(福田)



- 1 にぶい黄褐色 (10YR7/2) 砂質土 (微砂含)
- 2 灰白色 (10YR8/2) 砂質土
- 3 灰白色 (N8/) 砂質土 (微砂含)
- 4 灰白色 (N8/) 砂質土
- 5 にぶい黄褐色 (10YR7/4) 砂質土
- 6 にぶい黄褐色 (10YR7/4)

第482図 土壌19 (1/30)

#### 土壌19 (第436・482図)

調査区丘陵頂部の平坦部東側から東斜面側にかかる付近に位置する。平面形は円形で長軸86cm、短軸71cm、深さは44cm、底面海拔高は256.32mである。床面の中心付近では、平面形が円形で、規模が長軸24cm、短軸20cm、深さは31cm、底面海拔高は256.01mを測るピットが確認された。(澤山)

## 第5節 小 結

今岡D遺跡は、吉野川が流れる沖積平野に向かって舌状に張り出した丘陵に所在する遺跡である。北方向約140mの地点には、岡山県最古級の横穴式石室が埋葬施設である穴が途古墳や、竪穴住居と段状遺構が検出された弥生時代後期の集落跡である穴が途遺跡が存在した丘陵を望み、南西方向約170mの位置には、2基の古墳や竪穴住居と段状遺構が検出された今岡中山遺跡がある。

一次調査に着手する前に、今岡D遺跡の現地踏査を行った。今岡D遺跡が所在する丘陵は、今岡地区住民の共同墓地になっていたから、墓地移転の作業によっていたる所が掘り返され、所々に大きな穴が認められた。動かされた土砂の表面観察を実施したところ、弥生土器や須恵器の破片を採集した。このような状況から今岡D遺跡は、近接地に所在する穴が途遺跡や今岡中山遺跡と遺跡の立地条件が似ていたため、弥生時代の竪穴住居や段状遺構だけでなく古墳も存在する可能性が高いと思われた。

実際にトレンチを設定して一次調査である遺構の確認調査を行った結果、丘陵尾根上で竪穴住居と古墳を検出し、南側の緩斜面で段状遺構と柱穴を確認した。穴が途遺跡に面した北側斜面は、傾斜が急勾配になっていたから、表土直下が地山で遺構は何も見つけることができなかった。

確認調査の成果に基づいて調査範囲を決定し、全面調査を実施したところ、弥生時代の遺構は確認調査の結果で推定された地点に集中して存在することが明らかになった。すなわち、丘陵の尾根上と尾根から南側にわずかに下がった位置に竪穴住居や土壙が確認され、南側の緩斜面に竪穴住居や段状遺構などが検出されたのである。

今岡D遺跡の所在地は、今岡地区住民の共同墓地になっていたこともあって、これらの弥生時代の遺構は、上面や地形の低い部分が削平されている。竪穴住居や段状遺構の床面を精査すると、数条の壁体溝や多くの柱穴が存在したものがあり、同じ場所で建て替えが行われたと考えられた。遺構の残存状態が悪いので、遺物の出土量は極めて少なかった。その数少ない遺物を観察した結果、形態的特徴や調整手法から、ほとんどのものが弥生時代中期後葉から後期後半の時期と思われた。したがって今岡D遺跡には、竪穴住居や段状遺構が伴う弥生時代中期～後期の集落があったと考えられる。

なお、4個の柱穴で構成される掘立柱建物は、壁体や壁体溝が削平されて残存しない竪穴住居になるのかもしれない。また、調査範囲の東端地点に段状遺構や土壙が検出されたので、弥生時代の遺構が道路建設予定地外の東側にも存在する可能性が高い。

古墳時代の遺構としては、4基の古墳（今岡9～12号墳）と3基の土壙墓（今岡古墳群 土壙墓1～3）以外に、数基の土壙が検出された。このうち土壙13からは鉄鏃が出土している。この鉄鏃を副葬品と見なして、土壙13を土壙墓と規定する可能性もあったが、土壙13の平面形が不整形であることから土壙として取り扱うことにした。なお、今岡9～12号墳および土壙墓1～3については、第12章において詳細に報告する。ここでは、概略のみ記しておく。

9号墳は円墳で、埋葬施設と周溝が残存した。10号墳は方墳で、埋葬施設と周溝が検出された。時期は、5世紀後半と考える。11号墳は横穴式石室の円墳で、7世紀後半と推定される。12号墳は横穴式石室墳で、7世紀前半に属する。土壙墓1は6世紀後半、土壙墓2・3は、5世紀後半と考える。

このように今岡D遺跡には、竪穴住居や段状遺構が伴う弥生時代の集落跡と、5世紀後半から7世紀後半にかけての古墳や土壙墓が形成されていたのである。 (福田)

## 第11章 今岡中山遺跡

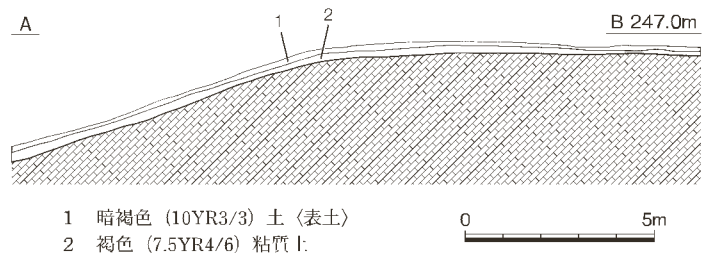
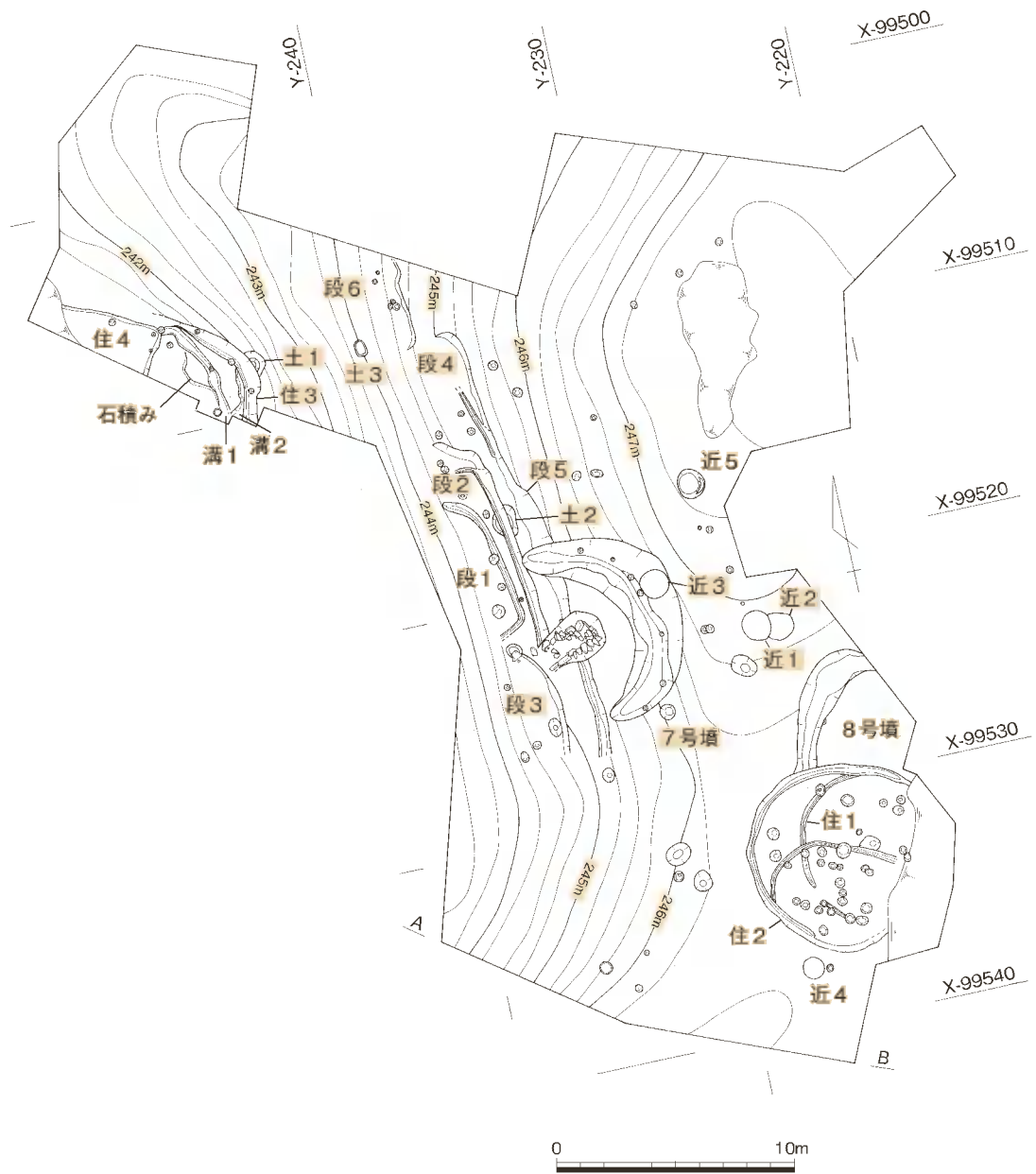
### 第1節 遺跡の概要

今岡中山遺跡は美作市（旧大原町）今岡に所在し、西に延びる低丘陵上に立地する。丘陵先端は歪な「Y」字状に尾根が分かれ、調査地はその北側の尾根上にあたる。調査地は遺跡の実態が不明であったが、同一丘陵には今岡古墳群（2～5号墳）が存在することから、事前に一次調査を行い、遺跡の有無と範囲の確認を行った。その結果、丘陵尾根上で弥生時代後期の竪穴住居、西斜面部で段状遺構を確認し、また弥生土器や須恵器などの遺物が出土したことから、調査地には弥生時代後期を中心とした集落跡が存在することが判明した。

発掘調査は一次調査の成果を受け、平成16年8月30日から11月10日にかけて実施した。調査では、まず重機による表土掘削を行い、人力による遺構の検出と掘り下げ、実測、写真撮影などの記録を随時行った。基本層序は第484図に示したとおりであり、表土と腐植土の直下が地山、つまり遺構検出面となる。調査の結果、弥生時代後期の竪穴住居2軒、段状遺構6面、土壇2基、古墳2基、奈良時代の竪穴住居2軒などを確認した。なかでも段状遺構5では、弥生時代後期前葉の土器溜まりが確認され、播磨の影響を強く受けた大形の壺や器台が出土したことが注目される。また今岡7号墳と命名した古墳を新規に発見したことにより、古墳群が南側の丘陵尾根上だけでなく、北側尾根上にも形成されていることが判明したことも大きな成果となった。なお古墳については第12章で報告する。（米田）



第483図 調査地位置図（1/2,000）



第484図 遺構全体図 (1/300)・断面図 (1/200)

## 第2節 弥生時代の遺構・遺物

### 1 概要

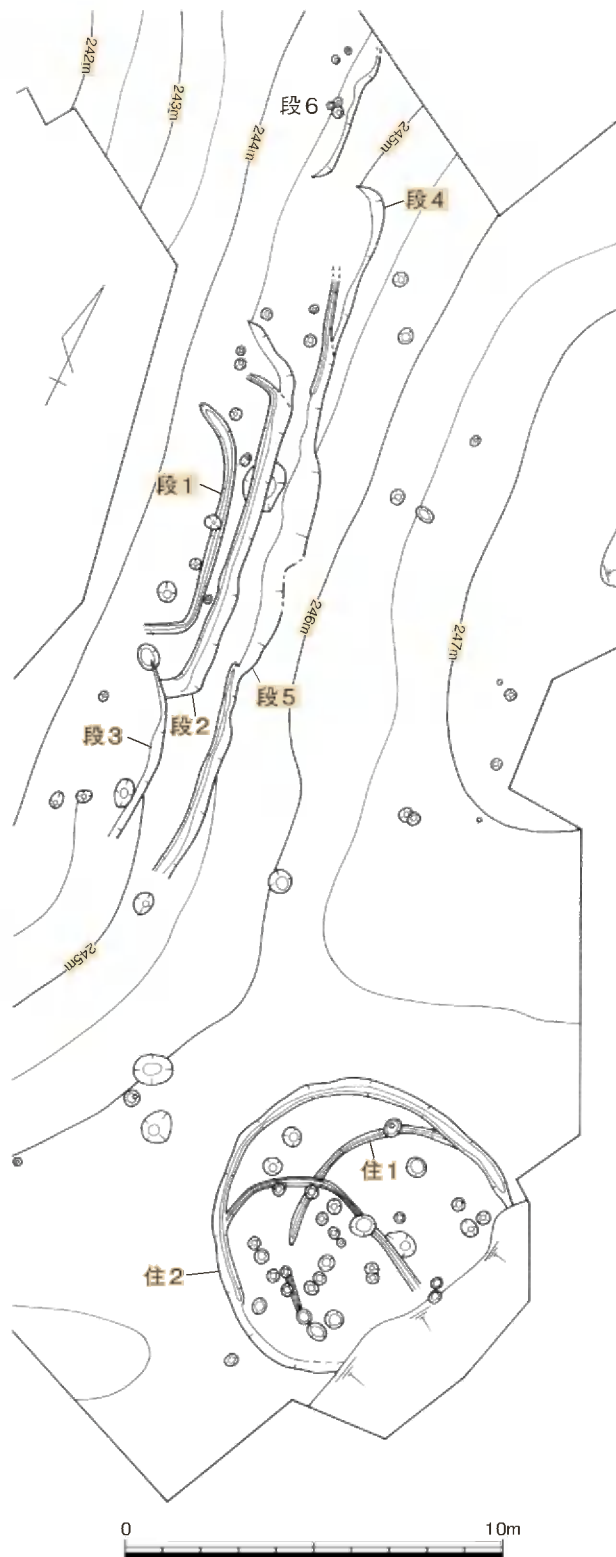
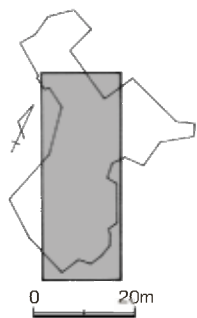
弥生時代の遺構は本遺跡では最も多く、調査区のほぼ全体にわたって検出されている。確認した遺構は、竪穴住居2軒、段状遺構6面、土壇2基、柱穴である。

竪穴住居は調査区南東部の丘陵頂部に配置され、1回拡張されている。段状遺構はいずれも西斜面に位置しており、標高245.0m前後の等高線に平行するように連なっていた。土壇は丘陵頂部から西斜面にかけて散在している。また袋状土壇は未確認である。柱穴も土壇と同様に調査区内に散在するが、掘立柱建物を構成するものではない。(米田)

### 2 竪穴住居

竪穴住居1 (第485～487図、  
図版91-1・2)

調査区南東部の丘陵頂部に位置する。竪穴住居の東側は攪乱を受け、また床面は竪穴住居2に切られているため、壁体溝の一部と柱穴を確認したに過ぎない。したがって竪穴住居の全体像は明らかでないが、平面形は円形を呈し、規模は径約630cmと推定される。壁体溝は現状で幅約20cm、深さは検出面から約5cmを測る。竪穴住居の中央部分には、不整形で長軸87cm、短軸63cm、深さ50cmを測る土壇があり、I-J断面の第1層は焼土と炭、第2層は炭を多く含んでおり、中

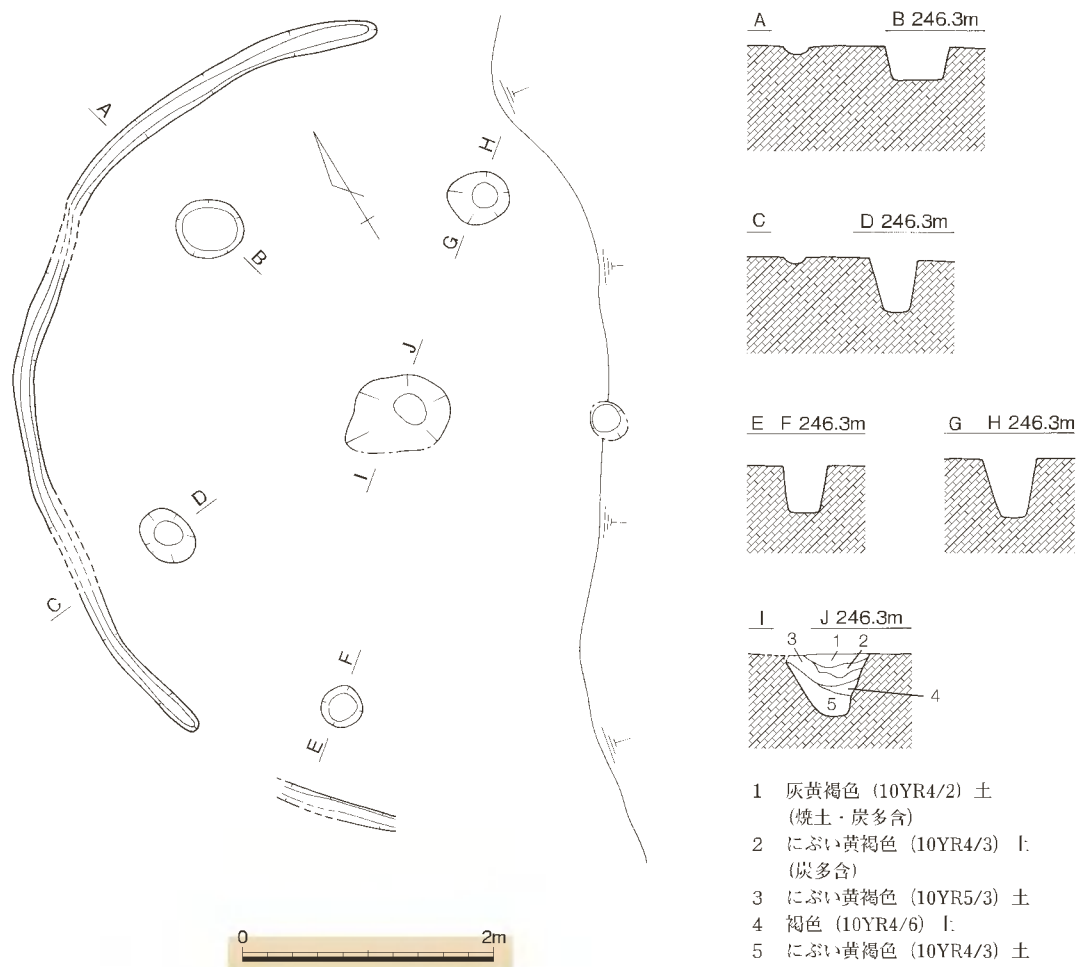


第485図 弥生時代遺構配置図 (1/200)



第486図 竪穴住居1・2 (1/60)





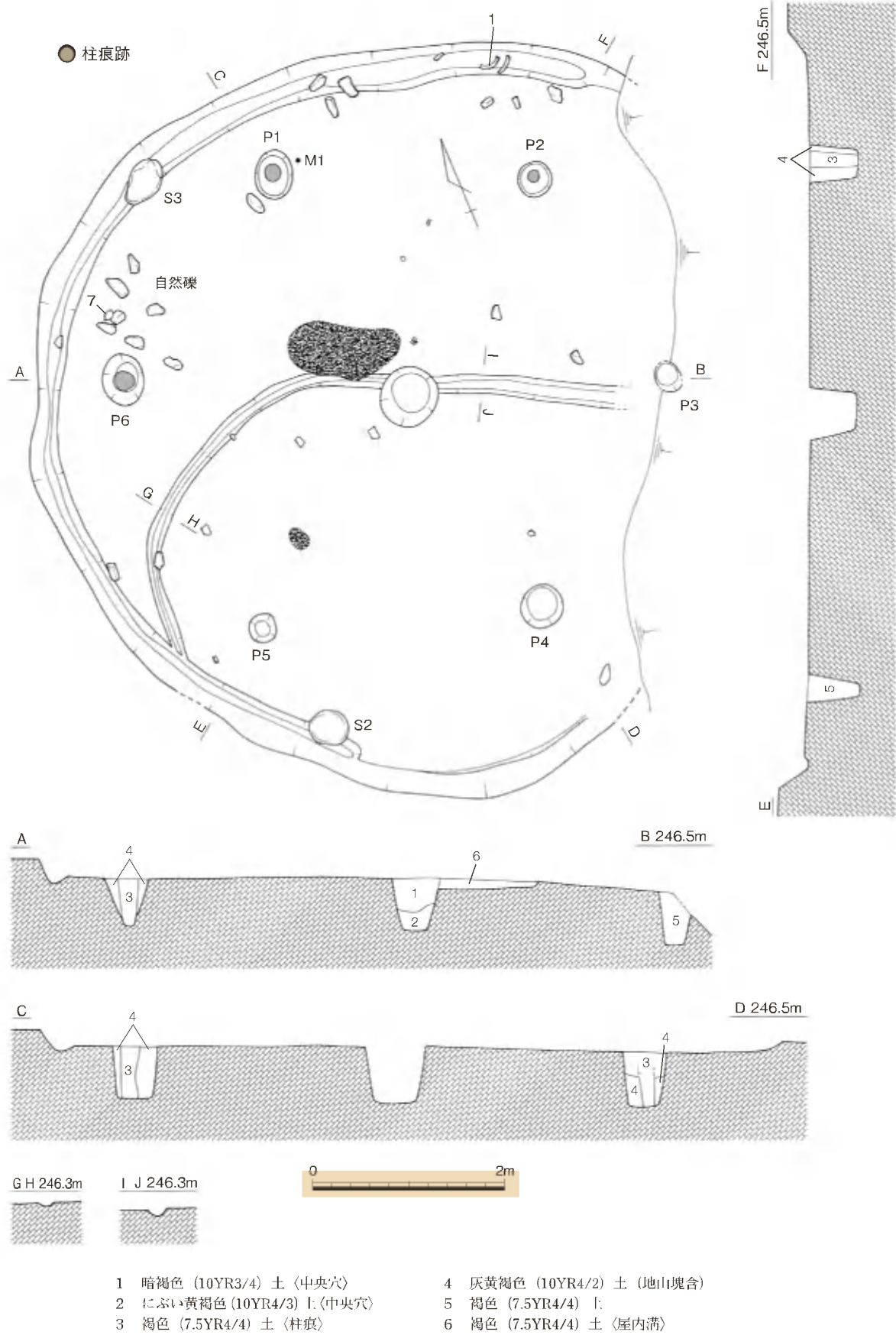
第487図 竪穴住居 1 (1/60)

中央穴と考えられる。後述する竪穴住居 2 と併せて多数の柱穴を確認したが、このうち竪穴住居 1 の主柱穴として想定されるものは 5 個を抽出した。ただその配置状況を勘案すると本来は 6 本柱で構成されていた可能性も否定できない。出土遺物は、竪穴住居 2 に削平されていたために皆無に近く、壁体溝や柱穴から弥生土器の小片がわずかに出土した程度である。

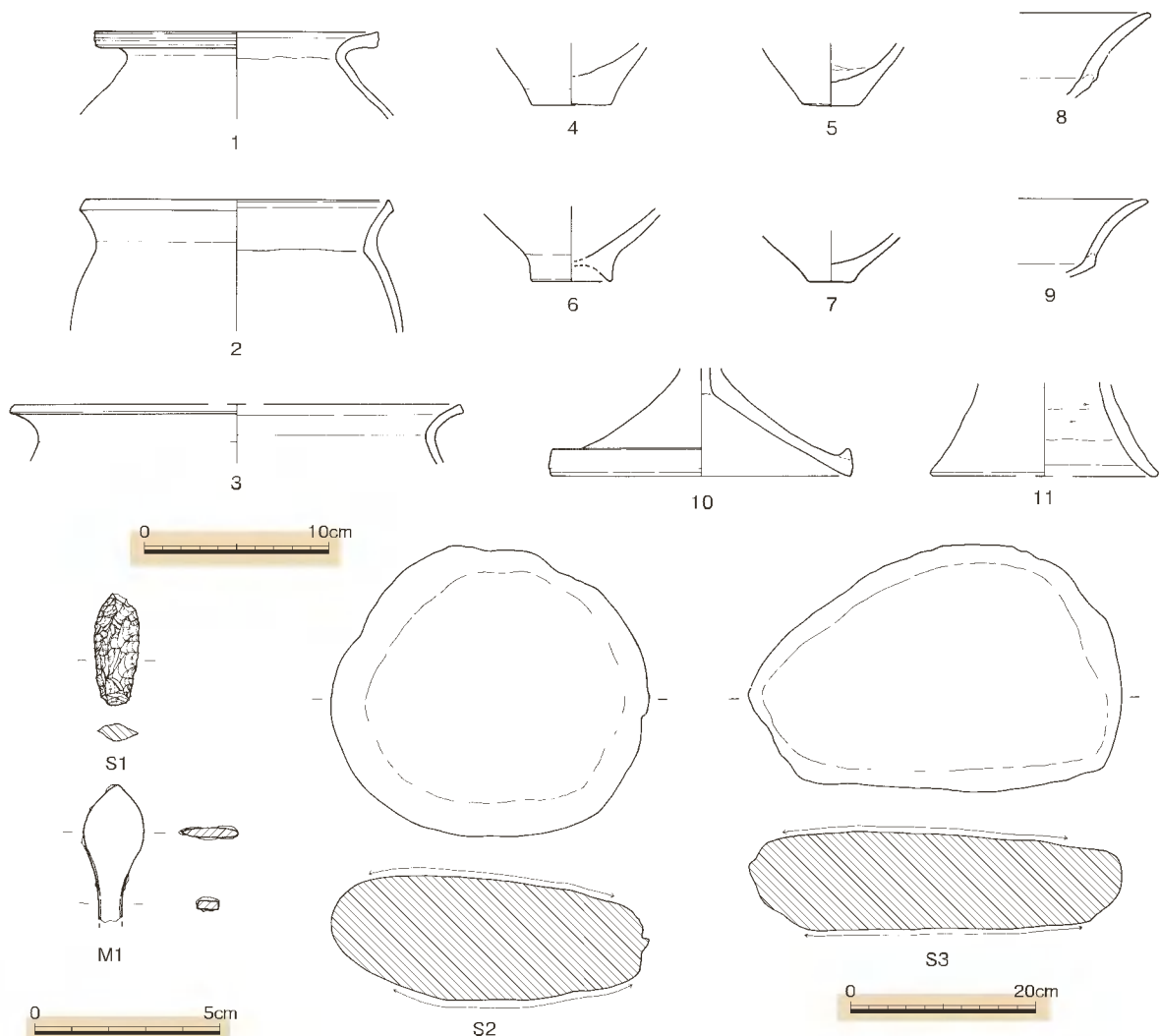
本竪穴住居の時期を決定づける資料が乏しいが、後述する弥生時代後期前葉の竪穴住居 2 より古い、それほど時間差のない時期に廃絶したと考えられる。(米田)

#### 竪穴住居 2 (第485・486・488・489図、図版91-1・3~5・98-1)

調査区南東部の丘陵頂部に位置し、竪穴住居 1 を切る。竪穴住居の東側は攪乱を受けている。平面形は円形を呈し、規模は径740cm、深さ約30cmを測る。西半部の壁面には、幅約40cm、深さ約5cmの壁体溝が巡るが、東半部は途絶えている。床面中央には径62cm、深さ55cmを測る中央穴があり、壁面がほぼ垂直に立ち上がる。南東側の壁体溝からは屋内溝が中央穴に向かって弧状に伸び、中央穴から東側へは直線的に伸びる。屋内溝の東端は攪乱によって削平されているが、おそらく屋外へ続いていくものと考えられる。屋内溝は幅約20cm、深さは10cmを測り、中央穴に切られる。屋内溝の底面高は壁体溝との連結部で246.15m、中央穴との連結部で246.12m、東端で245.97mで、約18cmの高低差がある。また床面の中央穴の北西脇では、炭面が長軸125cm、短軸55cmの範囲に広がっており、屋内溝



第488図 竪穴住居2 (1/60)

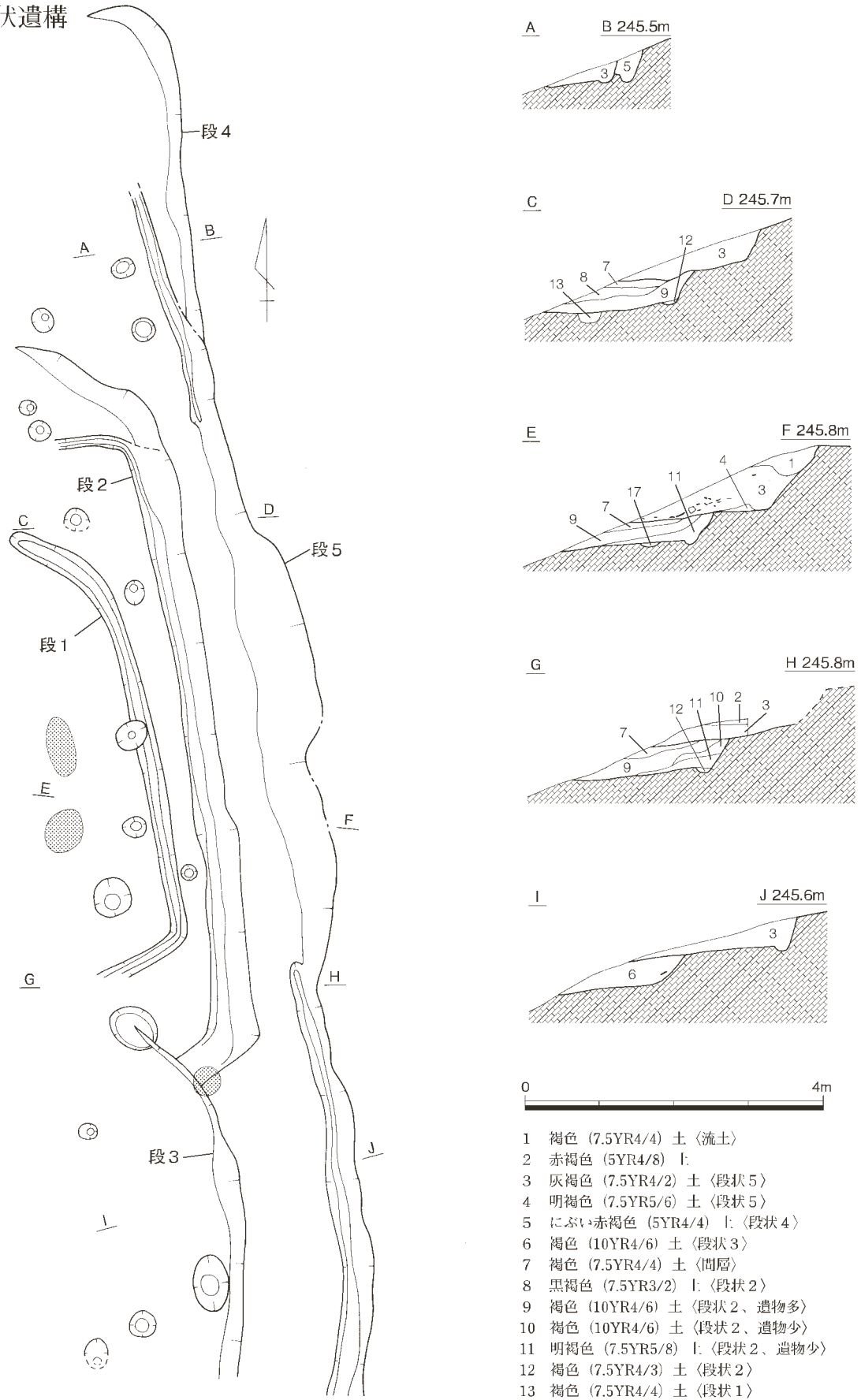


第489図 竪穴住居2出土遺物 (1/8・1/4・1/2)

埋没後に炭面が形成されている。支柱穴は6個で構成され、深さは約50～55cmを測る。柱痕は支柱穴6個のうち3個で確認され、柱痕の径は約12～21cmである。

本竪穴住居内では弥生土器の甕1～7、高杯8～10、土師器の鼓形器台11、サヌカイト石鏃1点（S1）、鉄鏃1点（M1）、台石2点（S2・3）のほか、サヌカイト片3点（総重量1.4g）、玄武岩片12点（総重量203.14g）、円礫7点が覆土から出土した。このうち、弥生土器の甕1は北側壁体溝に偏在していた。甕2は胎土が粗く、雲母を多く含み、他の甕とは胎土を異にする。11は山陰系の鼓形器台で搬入品の可能性が高いが、小形であるために時期的に混入品の可能性がある。また床面の西側壁体溝寄りでは円礫7点が集中しており、その狭間から小形の甕底部7が出土した。これらの円礫は花崗岩を主体とし、石器石材とは異なる。総じて楕円形の自然円礫であり、平均して約1,400gを測る。当初は礫錘の可能性も考慮したが、礫錘にしては重量が2倍近く重いことからその可能性は低く、用途不明の円礫と言わざるを得ない。ただ、住居内の一部に偏在している状況は住居内の空間利用を考える上で興味深い。また石鏃S1はP8、鉄鏃M1は支柱穴P1東脇の床面直上で出土した。台石S2は南側壁体溝上、S3は北西壁体溝上にあり、それぞれ原位置を保つ。以上の出土遺物から、本住居の廃絶は弥生時代後期前葉に比定される。（米田）

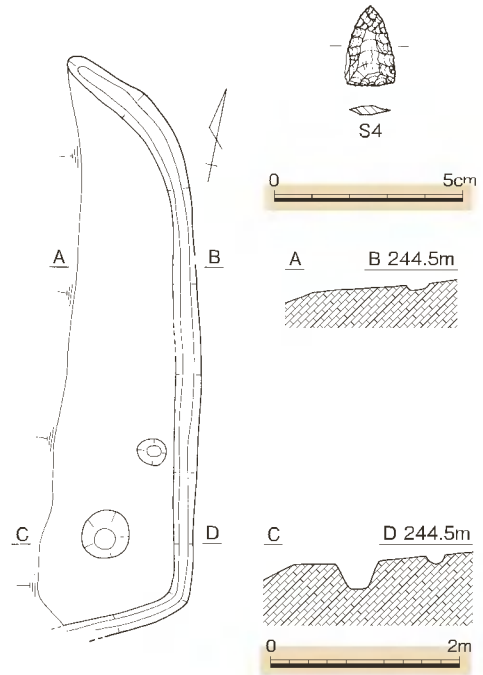
3 段状遺構



第490図 段状遺構 1～5 (1/80)

段状遺構 1～5 (第485・490図)

調査区中央西寄りの比較的急峻な西斜面に位置しており、標高245.0m前後の等高線に平行するように、段状遺構6面が連続して配置されている。段状遺構1～5は切り合っており、段状遺構1→2→3・4→5の順で造成されていると調査時には判断した。第490図は段状遺構1～5の層序を示しており、段状遺構2の埋没後に段状遺構5が構築されているが、C-D断面、E-F断面、G-H断面の第7層のように褐色土が間層として堆積していることから、段状遺構5の構築にあたっては段状遺構2埋没後に意図的に盛り土を行って平坦面を造成したことが考えられる。(米田)

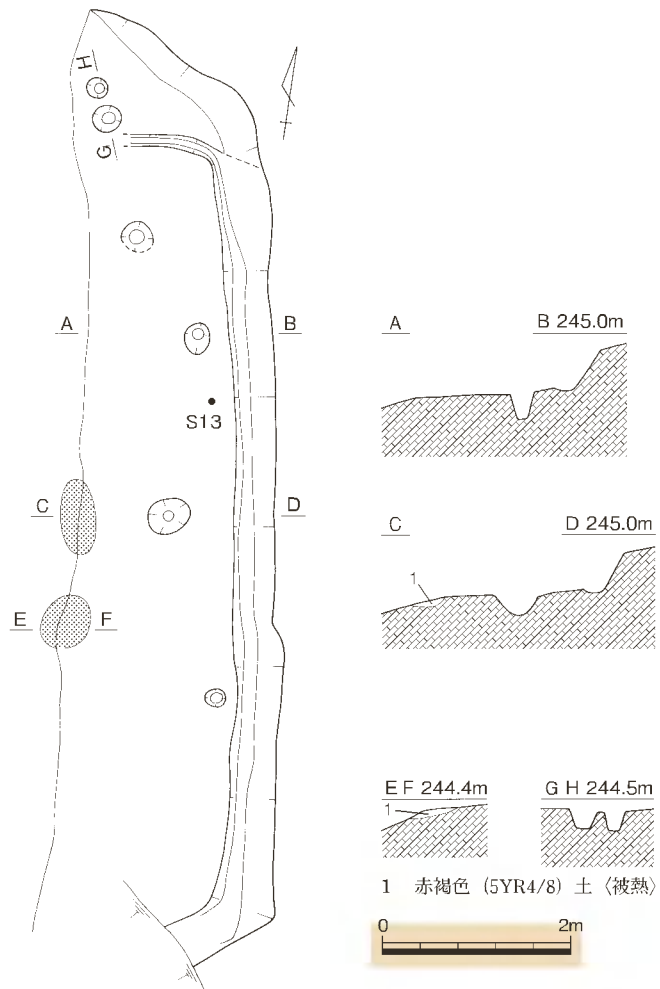


第491図 段状遺構 1 (1/80)  
・出土遺物 (1/2)

段状遺構 1 (第490・491図、

図版92-1・93-2)

調査区中央西寄りの丘陵西斜面に位置し、段状遺構1～5のうち層位的に最も古い。段状遺構2に床面が削平されており、壁際の溝を検出したに過ぎない。平坦面の長辺は直線的で約596cm、残存している短辺は約128cmである。溝は幅約24cm、深さ約8cmを測る。溝の北と南側は隅角部で緩やかに屈曲し、斜面下方に向かってやや開く。平坦面の南端ではピットを2個確認したが、形態や配置状況から掘立柱建物を構成するものではない。出土遺物は弥生土器の小片、サヌカイト製石鏃S4、サヌカイト片1点(0.55g)があり、いずれも溝から出土した。時期を特定する資料に乏しいが、出土遺物や層位の新旧関係から弥生時代後期前葉で、段状遺構2より古い。(米田)

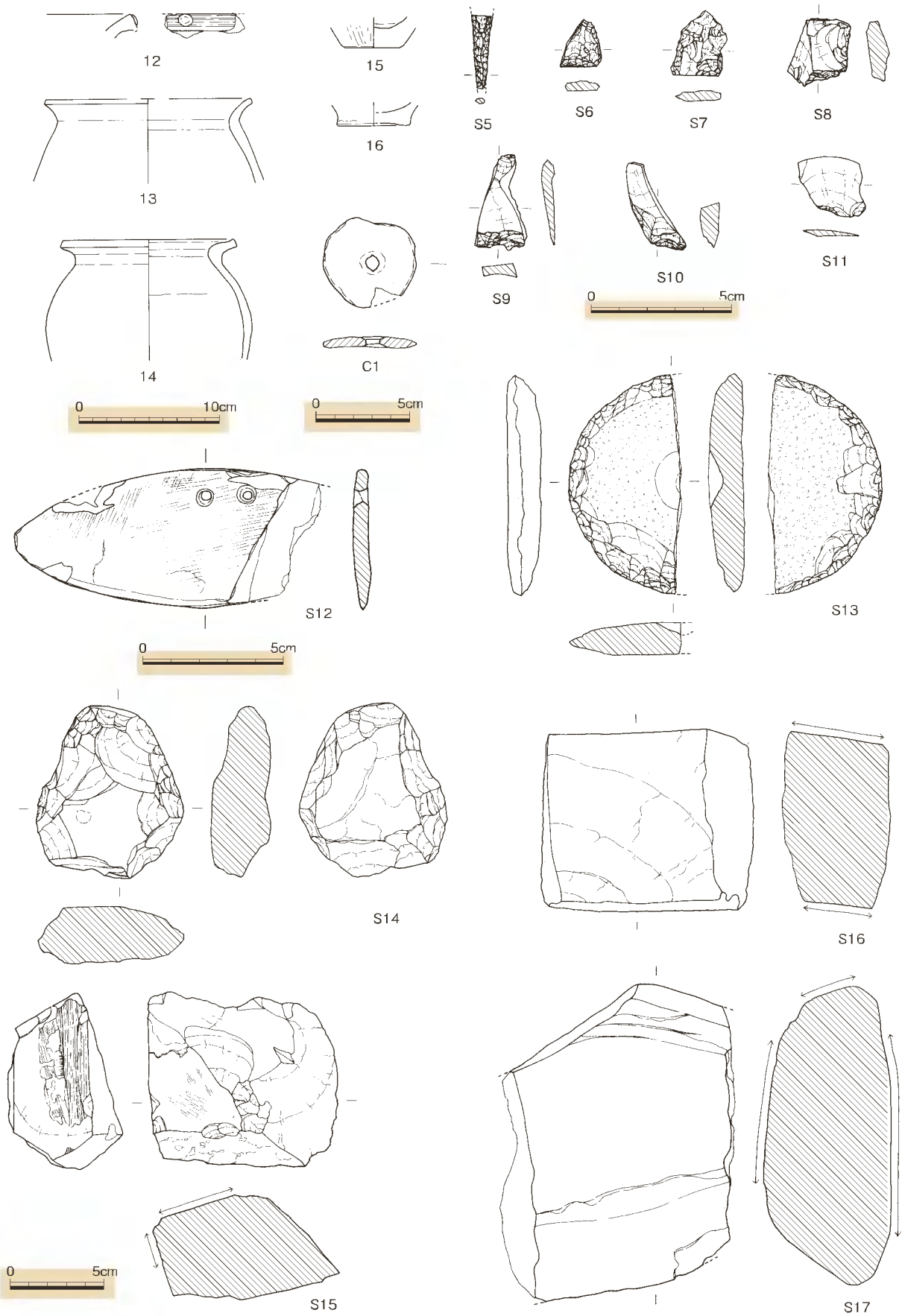


第492図 段状遺構 2 (1/80)

段状遺構 2 (第490・492・493図、

図版92-2・93・98-2)

調査区中央西寄りの丘陵西斜面に位置し、段状遺構1を切り、段状遺構3に切られる。平坦面の規模は長辺約978cm、短辺約186cm測る。深さは検出面



第493図 段状遺構2出土遺物 (1/4・1/3・1/2)

から壁面には幅約54cm、深さ5cmの幅広の溝が巡っており、北側ではほぼ直角に屈曲して隅角部を形成するが、南側は緩やかに曲がる。平坦面ではピットを6個ほど確認したが、整然とした配置ではなく、ピットの規模や深さもまちまちであるため、掘立柱建物を構成するものではないと考える。また長辺中央部ではやや強い熱を受けた面を2か所で確認しており、本段状遺構が床面を利用したものであると考えられる。

遺物は弥生土器の壺12、甕13~16、甕を転用した紡錘車C1、サヌカイト製石錐S5、石鏃未成品S6、調整剥片S7~11、石包丁S12、環状石斧未成品S13、石斧未成品S14、砥石S15・16、磨石S17が出土している。このほか、サヌカイト片51点(26.02g)、玄武岩14点(149.57g)も出土しており、本遺跡で石器石材の剥片が最も多い。S12は粘板岩製石包丁は杏仁形を呈し、一部を欠く。S13は玄武岩製の環状石斧の穿孔工程未成品であり、周縁部は丁寧に二次調整され、後に敲打痕が表裏面に認められ、穿孔途中で欠損している。

時期は出土遺物や層位から弥生時代後期前葉に比定され、段状遺構1より新しい。(米田)

**段状遺構3** (第490・494図、図版92-2・93-1)

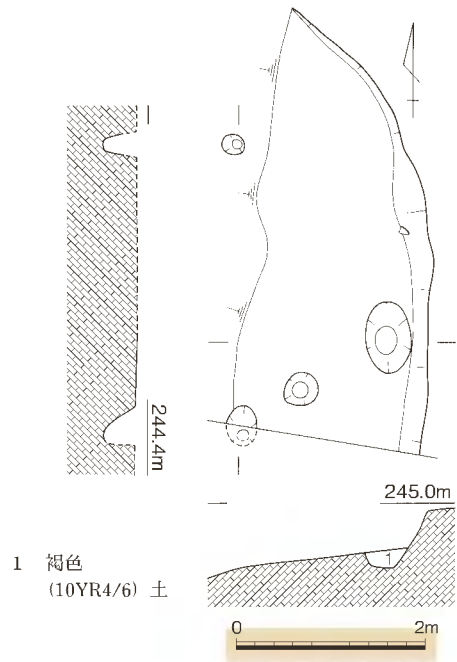
調査区中央西寄りの丘陵西斜面に位置し、段状遺構1、2に南接し、段状遺構5に切られる。壁面は緩やかな弧状を呈し、溝は確認していない。平坦面の南側は2m幅の一次調査トレンチ内で収まると考え

られ、長辺は約444cm、短辺は約184cmほど残存する。深さは検出面から34cmを測る。また平坦面ではピットを4個確認したが、整然と配置されていない。覆土からは弥生土器片や玄武岩片1点(1.71g)が出土した。時期は出土土器、切り合い関係から弥生時代後期前葉の範疇で、段状遺構5より古い。(米田)

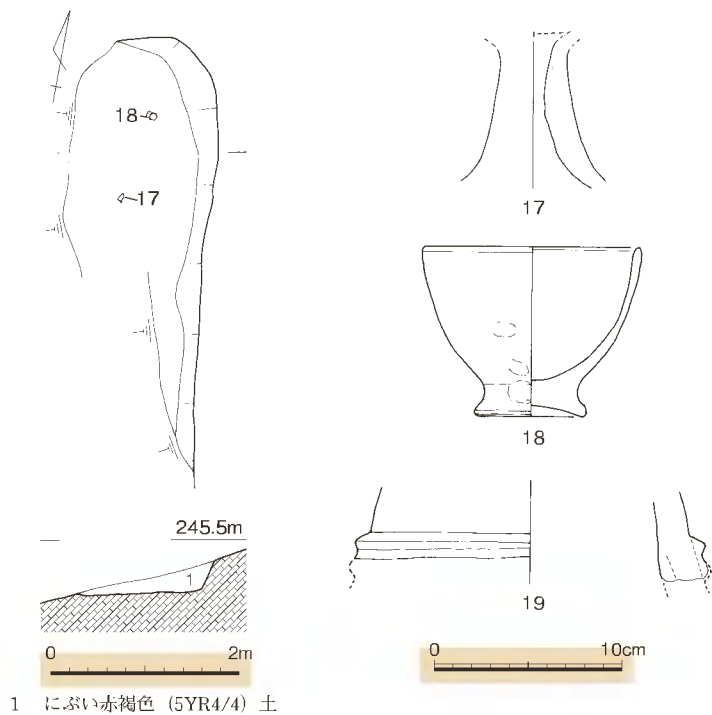
**段状遺構4** (第490・495図、

図版93-1・98-3)

調査区中央西寄りの丘陵西斜面、段状遺構5に北接して切られ、段状遺構6に南隣する。平坦面は長辺約420cm、短辺約136cmほど残存し、南側は段状遺構5に削平されている。



第494図 段状遺構3 (1/80)



第495図 段状遺構4 (1/80)・出土遺物 (1/4)

深さは26cmを測る。遺物は床面直上で弥生土器の高杯17、台付鉢18、覆土から器台の脚柱部19が出土した。時期は出土土器、切り合い関係から弥生時代後期前葉と考えられ、段状遺構5より古い。(米田)

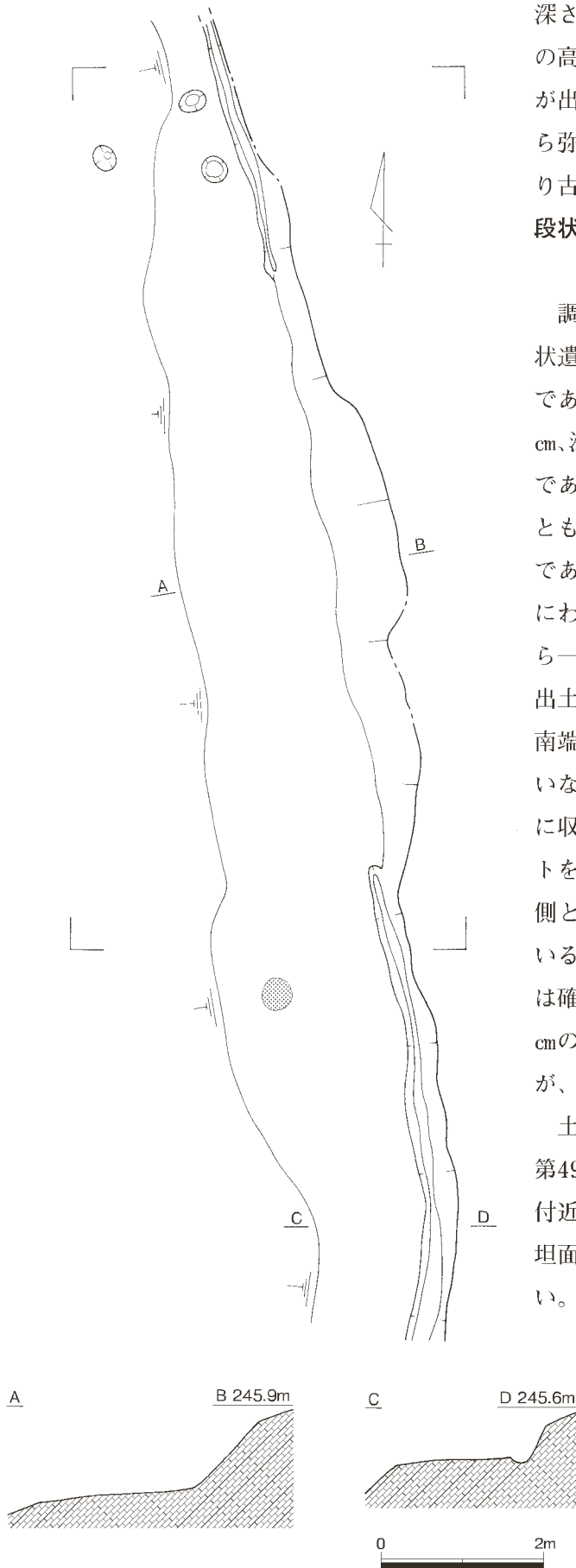
段状遺構5 (第490・496～504図、

図版93～95・98-4・99～102)

調査区中央西寄りの丘陵西斜面に位置し、段状遺構1～5の中で最も新しい段階の段状遺構である。規模は長辺約1,640cm以上、短辺約256cm、深さは最大で104cmを測る。特に長辺が長大であるため、複数の段状遺構が連続していることも想定されたが、平坦面の海拔高がほぼ一定であること、壁面が繋がること、遺物が広範囲にわたって同様の出土状況を示していたことから一面の段状遺構として捉えた。北端は遺物の出土状況から現状付近で収まると考える。また南端は一次調査のトレンチ4南壁では確認していないため、現状で確認した南端から2m以内に収まる可能性が高い。平坦面の北端ではピットを3個確認したが、柱穴とは考えにくい。北側と南側の壁際には幅20～30cmの溝が巡っているが、壁面の残存状況が良好な中央部では溝は確認していない。また平坦面の南側では径38cmの範囲で赤褐色を呈する被熱面が認められたが、硬化はしていない。

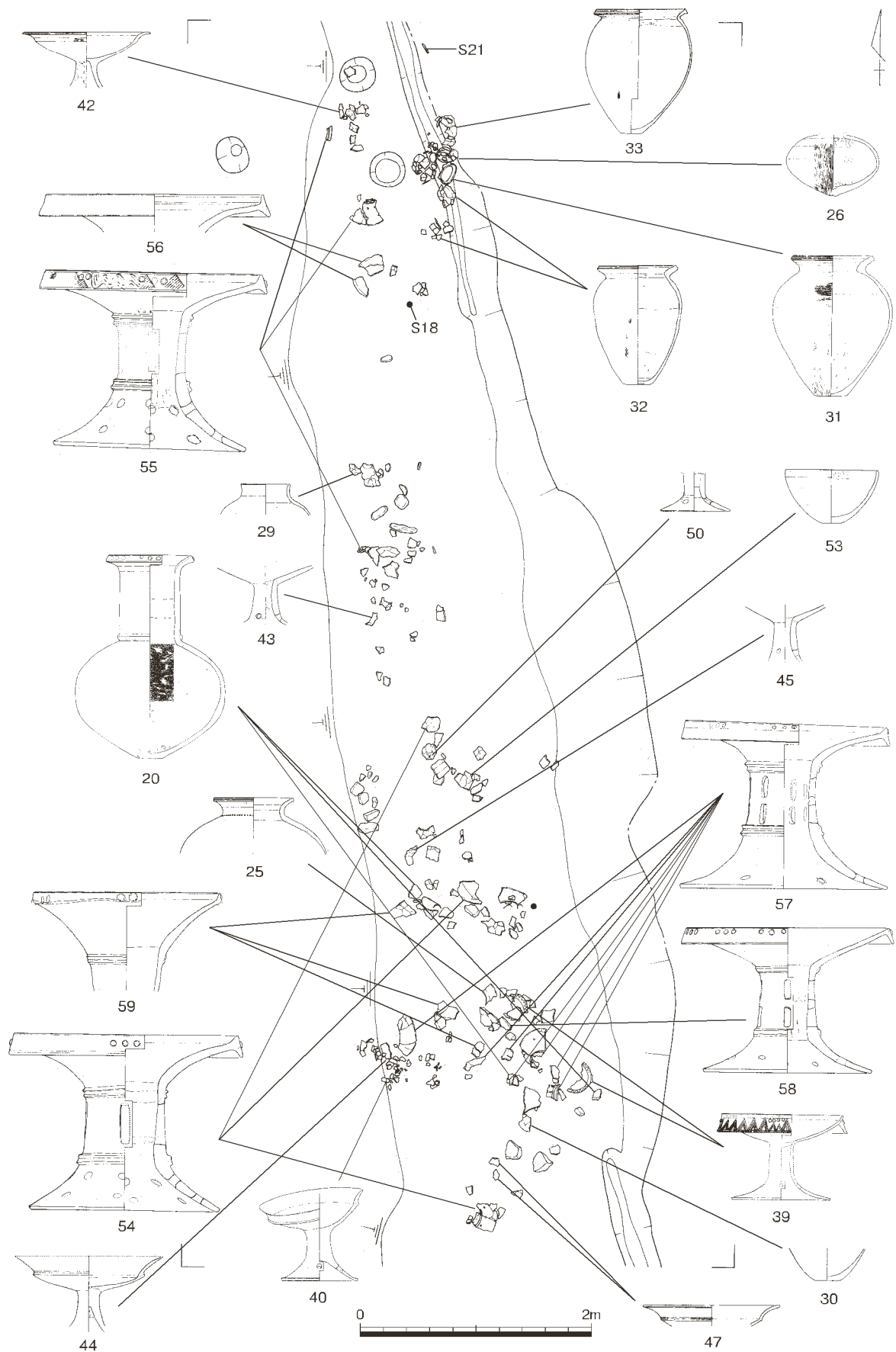
土層断面は重複する段状遺構1～4とともに第490図に掲載している。本遺構の北端、南端付近は、周辺の地形が急斜面になることから平坦面や壁面の流出が著しく、残存状態はよくない。それに対し、中央部(第496図のA-B断面

面付近)は壁面が104cmを測り、極めて良好に遺存しているものと思われる。また本遺構の構築および平坦面の造成は、段状遺構2～4が埋没した後実施されている。特に構築にあたっては、第490図のC-D断面、E-F断面、G-H断面の第7層の

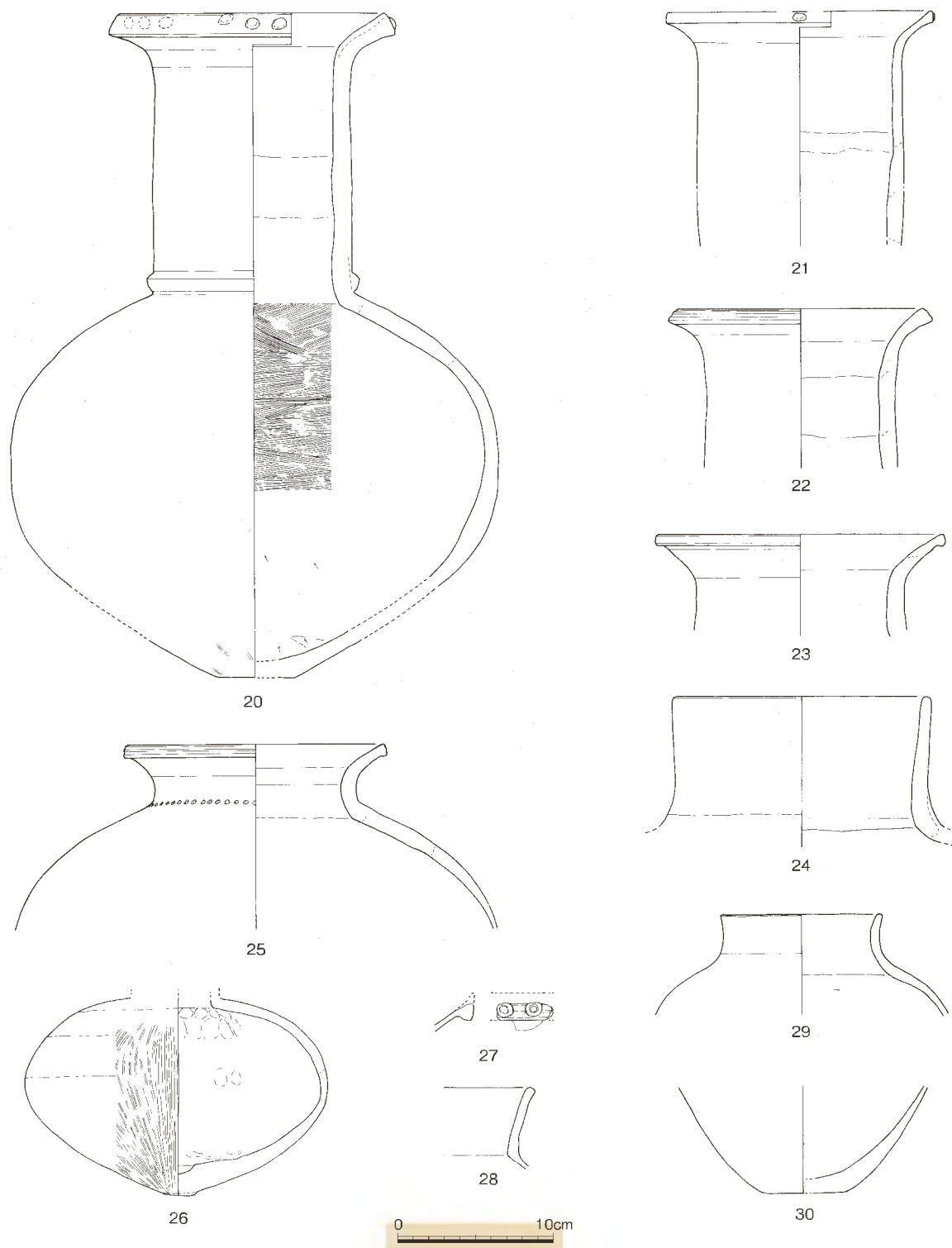


第496図 段状遺構5 (1/80)





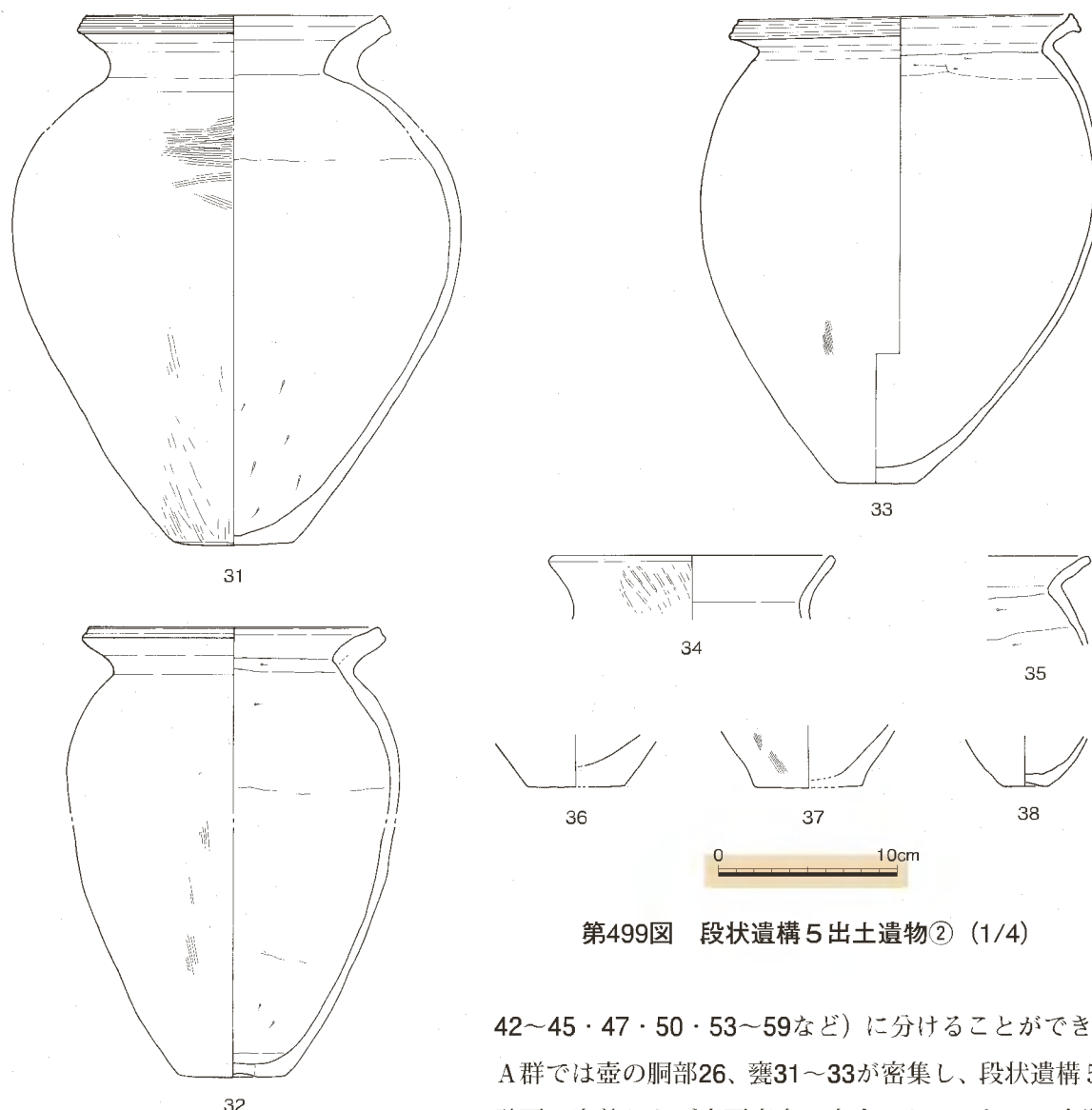
第497図 段状遺構5中央部遺物出土状況 (1/50)



第498図 段状遺構5出土遺物① (1/4)

ように、段状遺構2の埋没後に褐色土を意識的に盛って整地を行うことで段状遺構5の平坦面が造成されている点が注目される。

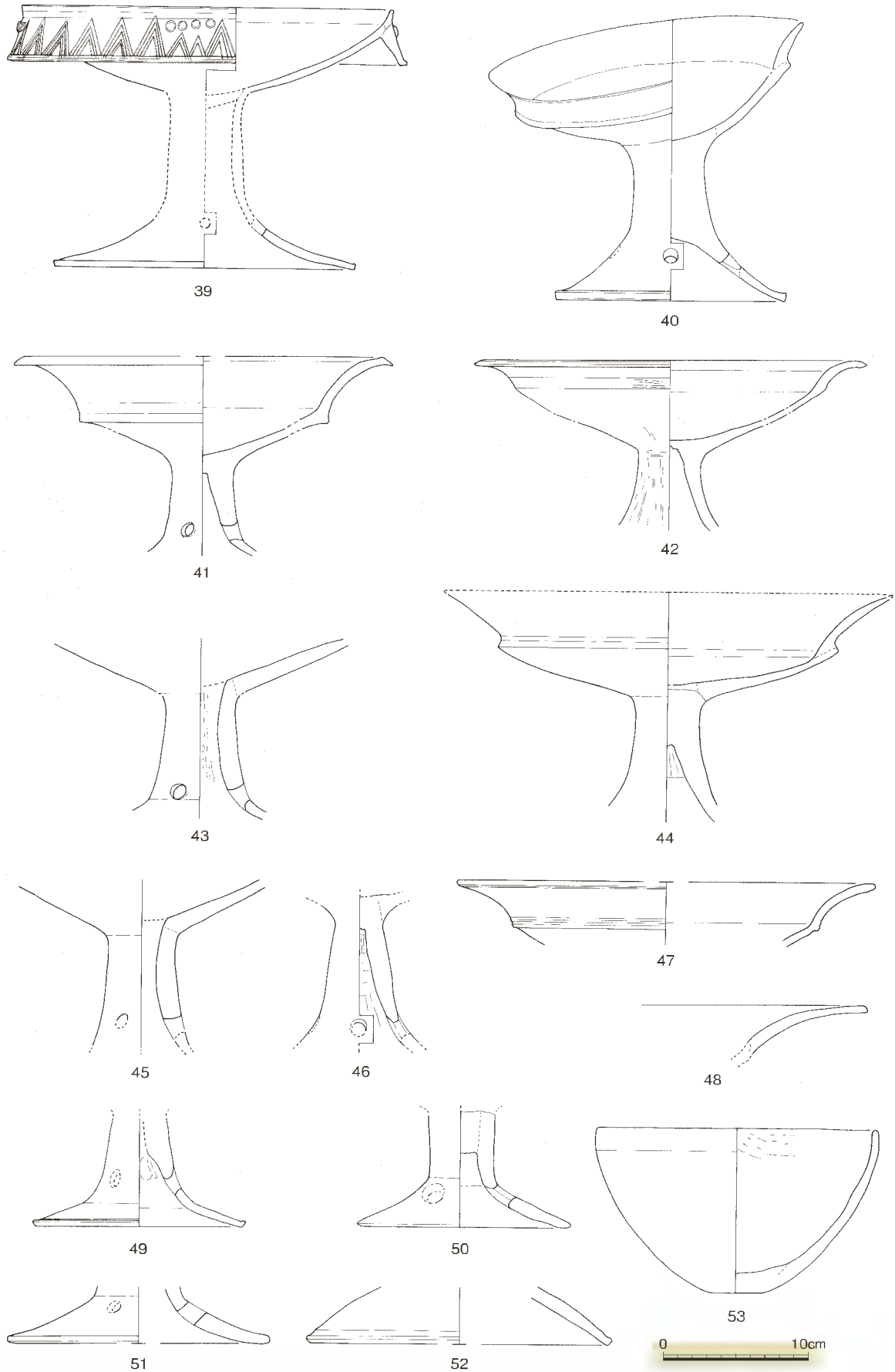
遺物の出土状況を見ると、第497図に示したように平坦面の中央部から北側にかけて弥生土器や石器などの遺物が多く出土している。弥生土器の出土状況は、北側において壁面に密着して出土したA群(26・31~33)と、北側から中央部にかけて土器の破碎が顕著なB群(20・25・29・30・39・40・



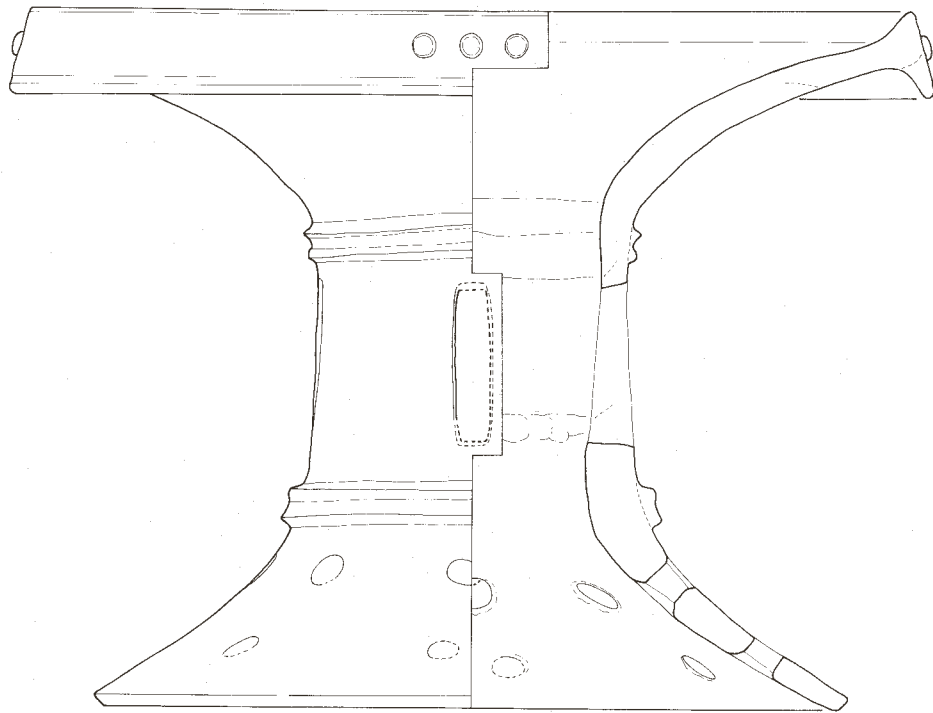
第499図 段状遺構5出土遺物② (1/4)

42～45・47・50・53～59など)に分けることができる。A群では壺の胴部26、甕31～33が密集し、段状遺構5の壁面に密着および床面直上で出土した。これらの土器はいずれも完形に近い状態で出土していることから、B群とは出土状況が異なっていることが指摘でき、段状遺構5が機能していた段階に放置されたように見受けられる。A群は壺26を除き、全てほぼ完形にまで復元できた。一方、B群はいずれも破片で出土しており、土器の接合関係をみても同一個体の土器片が散在して出土している。B群の出土位置をみると、高杯43周辺は床面直上であったが、高杯50以南は床面から5～20cmほど浮いた状態であった。さらにB群は一部の接合に留まり、完形に復元できる土器は皆無であった。これらのことから、B群は意図的に破碎されたものが本遺構廃絶時もしくは廃絶直後に廃棄された可能性があると考えられる。

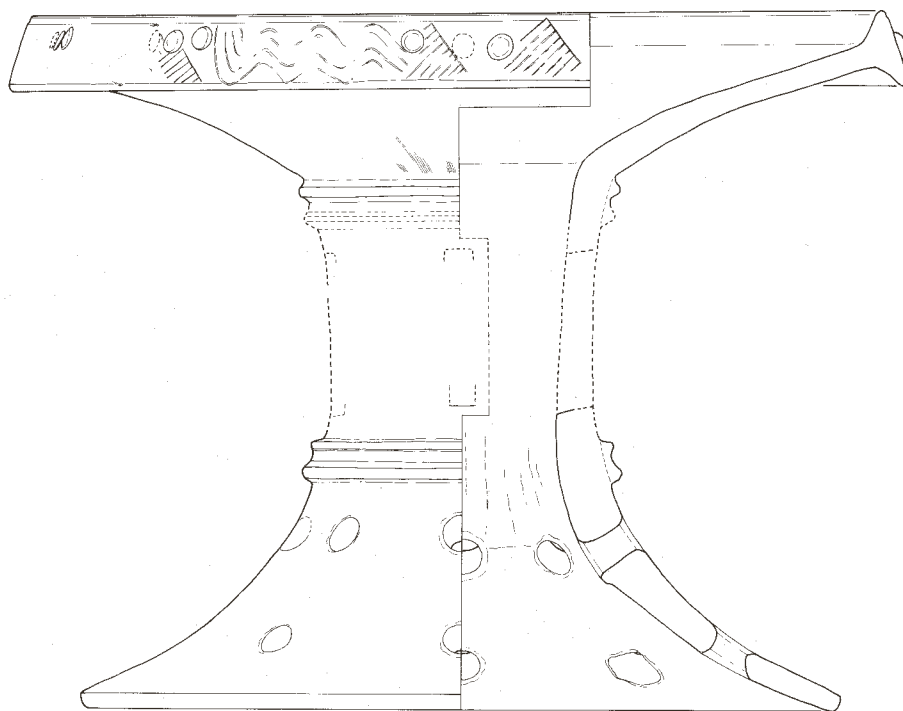
出土遺物は弥生土器の壺20～30、甕31～38、高杯39～52、鉢53、器台54～62、石鏃S18～20、石包丁S21、砥石S22がある。A群・B群の土器は土器溜まり状を呈しており、出土状況からそれぞれ一括性が高い土器群と言える。壺20は長頸壺で、口縁部は直線的に短く外反し、頸部は直立し、胴部は球形に近く、平底を呈する。文様は口縁端部に円形浮文が3個一単位で5ないし6方向に配されるほか、頸部と肩部の接合部分に断面形が三角形を呈する突帯が1条巡る。胎土は54・55・57の器台と酷似する。21～23は直線的な頸部と短く外反する口縁部をもつ長頸壺で、20と同形であるが、口縁端



第500図 段状遺構5出土遺物③ (1/4)



54



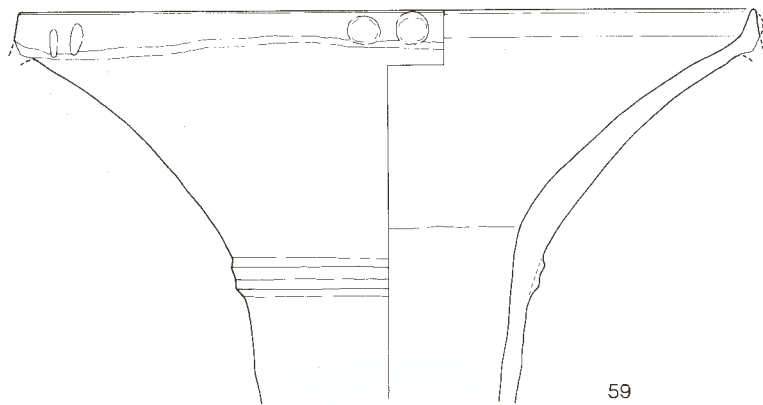
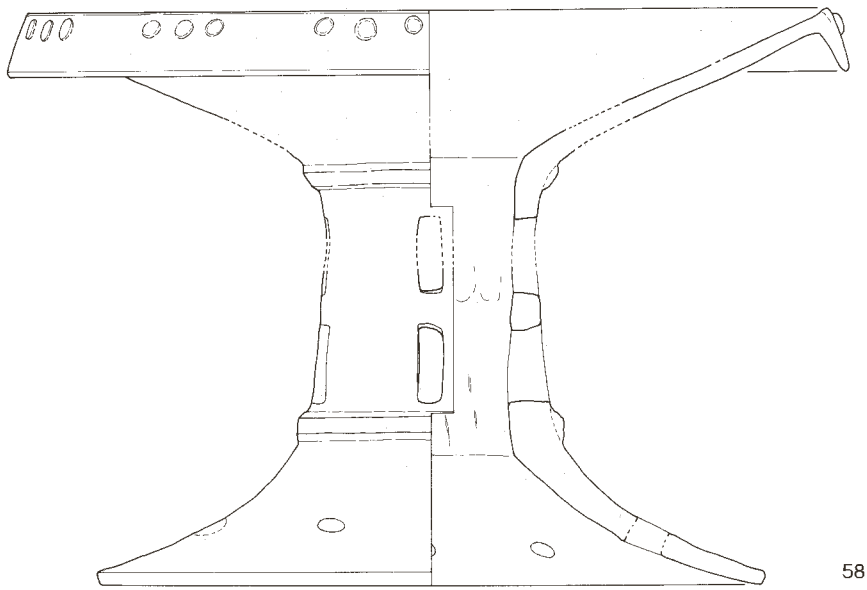
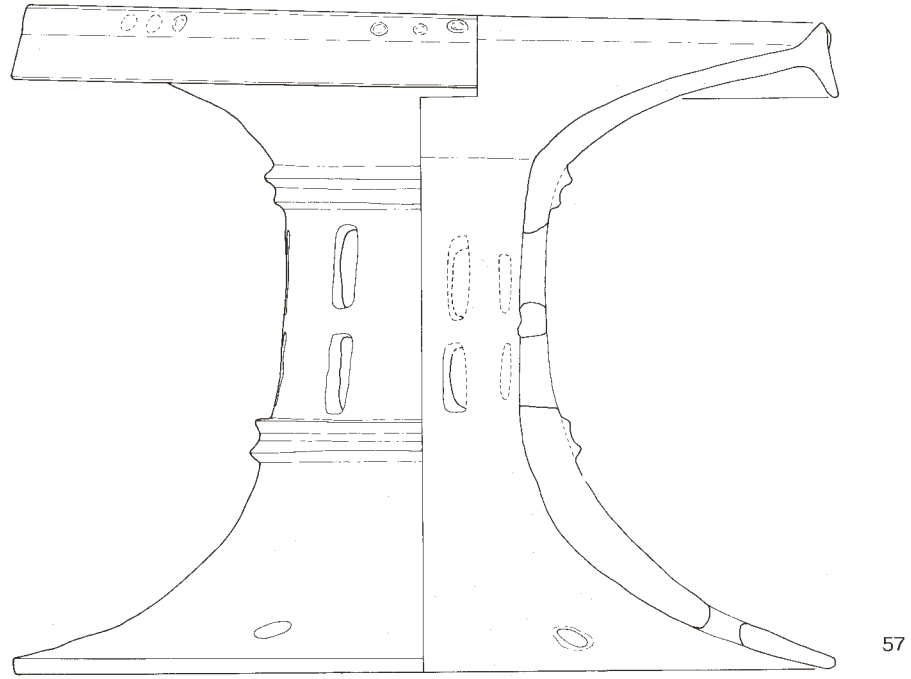
55



56



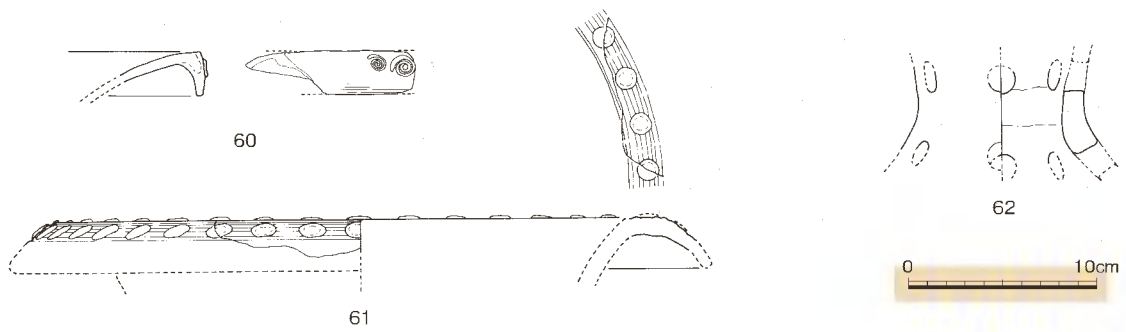
第501図 段状遺構5出土遺物④ (1/4)



0 10cm

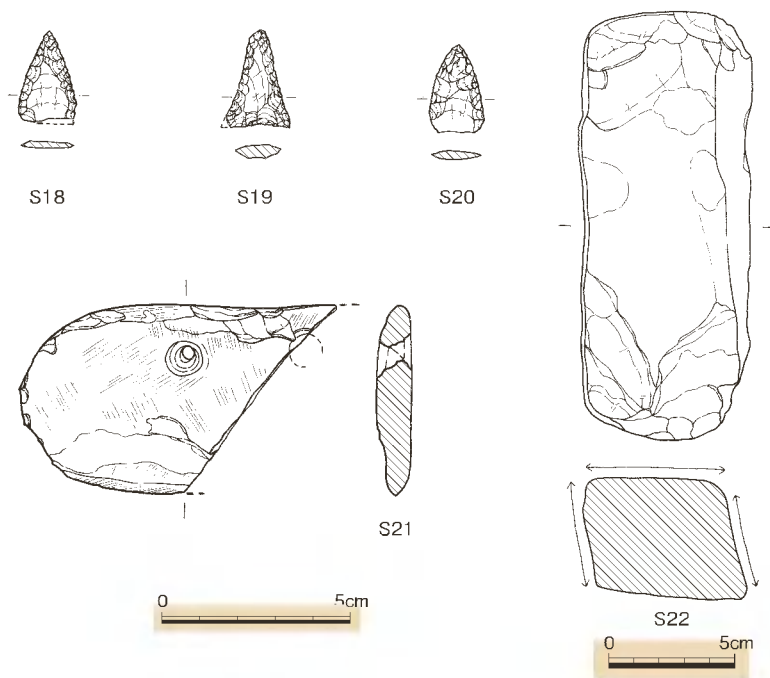
第502図 段状遺構5出土遺物⑤ (1/4)

部の施文はそれぞれ異なり、21は20と同様に円形浮文、22は2条の擬凹線文、23は無文である。23は風化が著しく、器台58の胎土と類似する。24は大形直口壺で、胴部にあたる土器片も出土したが、接合できず、形態は不明である。25の短頸広口壺は口縁端部に2条の擬凹線文が施されている。また頸部下端には列点文が巡る。26は細頸壺で、精製された胎土で赤褐色を呈する。口縁部は復元作業においても一切認められなかった。27は壺の口縁部で、円形浮文が付く。28・29は直口壺で、胴部内面はヘラケズリである。30は壺の底部にあたる。甕31～33はいずれもほぼ完形に近く、外面ハケメ、内面はヘラケズリの調整を基本とするが、31の胴部下半はヘラミガキによって調整されている。また31・32は口縁端部の拡張がなく、31は3条の擬凹線文、32は1条の擬凹線文を施す。33は口縁端部を上下に拡張し、2条の擬凹線文を施文する。34は単純に外反する口縁部をもち、外面にタタキの痕跡が残る。35は「く」の字に屈曲する口縁部をもち、底部36・37は平底、38はやや上げ底である。高杯39は口縁部を下方に拡張し、ヘラ描きによって2～4重の山形文を全周させ、4個一単位で円形浮文を4方向に配する。脚柱部を欠くが、胎土や焼成から受け部と脚部は同一個体である。高杯40～42・44・47は受け部が浅く、口縁部が屈曲して外反する。このうち40は受け部が大きく歪み、脚柱部が中空でない。48は大形高杯で、口径は推定で約50cmに復元できる。52は高杯の脚裾部で、内湾するように裾端部まで延び、端部に擬凹線文が1条巡る。鉢53は平底で、碗形を呈する。54～59は大形の器台である。54・55・57・58の形態をみると、口縁端部は上下に拡張、胴部は直立し、脚部は緩やかに開き、脚端部の拡張はない。なかでも54・55・57はいずれも黄褐色の胎土を呈し、形態・大きさも酷似する。口径は42.0～49.0cm前後と大きいのに対し、脚部径は35.2～43.2cmと総じて口径より小さい。また胴部には口縁部と脚部との境に突帯をそれぞれ巡らす。突帯は幅で幅約2.0～2.5cmを測り、中央に強いヨコナデが施してあり、断面形が波形を呈する。54は口縁端部に3個一単位の円形浮文を4方向に配し、一部に擬凹線文が残る。胴部中央には突帯に挟まれるように長方形の透かし孔が4方向に穿たれる。透かし孔の大きさは復元で長さ8.7cm、幅2.1cmを測り、長大な印象を受ける。脚部は緩やかに開き、円孔が2段にわたって全周し、上段、下段ともに8方向に配される。55は胴部を欠くが、各部位の特徴や透かし孔の形状と配置から、54と同形同大に復元される。口縁部には鋸歯文や波状を呈する文様を交互に施した後、8方向に3個一単位の円形浮文が施されている。このうち波状を呈する文様は明瞭ではないが、鋸歯文とは方向を異にして平行する曲線的な条線が認められる。胴部の上下には幅2cm前後の突帯が全周する。胴部の透かし孔は下端しか残存しておらず、長さは不明であるが、少なくとも幅1.4cm以上を測り、4方向に配置されていることから、57・58に見られるような2段の細い透かし孔ではなく、54のような幅で1段の大きな透かし孔が配されていることが想定される。脚部は55と同様に上下2段に円孔がそれぞれ8方向に配される。56は器台の口縁部で、直接接合することは出来なかったが、出土状況、形態、胎土、残存状況から55と同一個体の可能性がある。57は口縁部に3個一単位の円形浮文を5方向に配する。突帯の間には歪んだ長方形の透かし孔を上下2段にそれぞれ8方向に配置する。脚部は緩やかに開き、裾部に円孔を5方向に穿つ。58は色調が淡橙色を呈し、焼成が弱い。垂下口縁を呈し、口縁端部に3個一単位の円形浮文を8方向に配する。筒部には突帯を巡らし、また上下2段に長方形の透かし孔を4方向に配する。脚裾部には円孔が7方向に配置される。59は器台の口縁部から筒部上半のみが残存する。焼成は58と同様に良くなく、色調が淡橙色を呈する。口縁端部下半には剝離痕があり、端部は上下に拡張されていると考えられる。また2個一単位の円形浮文を4方向に配す。筒部上側には突帯が巡る。透かし孔は残存していない。60は垂下口縁をもち器台で、



第503図 段状遺構5出土遺物⑥ (1/4)

口縁端部に擬凹線文と渦巻き状の浮文が付く。61は弥生時代中期後半の器台で、口縁部上面と端部側面と上面にそれぞれ凹線文を巡らし、円形浮文を全周させる。62は円孔を2段6方向に配し、器台の脚柱部にあたる。



第504図 段状遺構5出土遺物⑦ (1/3・1/2)

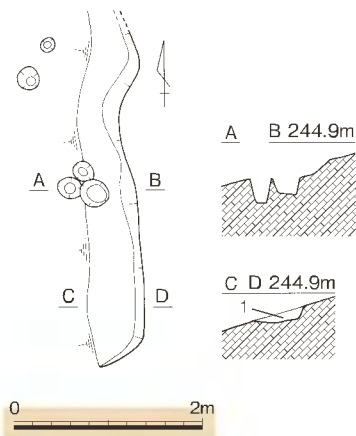
S18~20はサヌカイト製石鏃である。S21は緑色片岩製の磨製石包丁の破片である。出土地点は第497図に示したとおりであり、現状では段状遺構5の上端からやや外れているものの、埋土上位から出土していることや段状遺構5における他の遺物出土状況を考慮して、段状遺構5に伴うものと捉える。S22は砥石で、作業面は3面である。

このほか、サヌカイト片22点 (17.75 g)、玄武岩片8点 (141.87 g) が出土しており、段状遺構2に次いで石器石材片が多い。

これらの出土遺物から段状遺構5の廃絶時期は弥生時代後期前葉に比定される。(米田)

段状遺構6 (第485・505図)

調査区中央西寄りの丘陵西斜面、段状遺構5に南隣する。壁面は歪な直線を描く。北端は調査区外へ延び、規模は長辺約378cm以上、短辺約50cmを測る。深さは12cmで、残存状態はよくな



1 褐色 (7.5YR4/3) 土 (炭多含)

第505図 段状遺構6 (1/80)



い。平坦面および斜面下方でピットを確認したが、整然とした配置ではない。遺物は覆土からわずかな弥生土器の小片、サヌカイト片2点(2.67g)が出土したのみである。時期は、遺構の配置状況、埋土、出土土器から弥生時代後期の範疇で捉えて差し支えない。(米田)

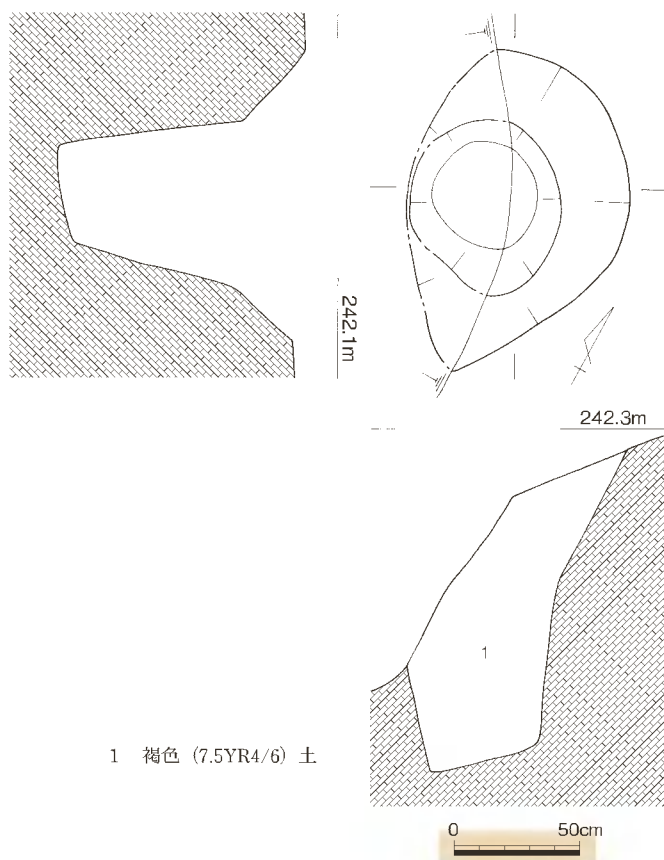
#### 4 土壌

##### 土壌1 (第484・506図、図版97-1)

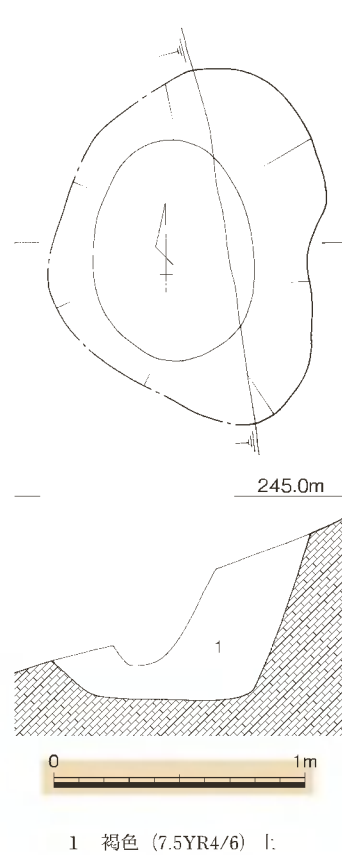
調査区北西部の丘陵西斜面に位置し、土壌の西半部は竪穴住居3に切られる。平面形は、現状で長軸約130cm、短軸約88cmの不整形円形を呈すが、本来は径130cmの円形を呈していたと復元される。断面形をみると、下半はほぼ垂直に壁面が立ち上がり、上半は大きく開く。深さは118cmを測る。埋土は褐色土で、強固にしまり、炭をわずかに含んでいた。遺物は埋土上方から弥生土器の小片が出土した。時期は切り合い関係、出土土器から弥生時代後期以前と考えられ、土壌の形状や埋土から縄文時代の落とし穴の可能性も否定できない。(米田)

##### 土壌2 (第484・507図、図版97-2)

調査区中央西寄りの丘陵西斜面に位置し、段状遺構2に土壌の西半部を切られる。平面形は不整形円形を呈し、長軸約142cm、短軸約103cm、深さ約63cmを測る。埋土は褐色土である。遺物は埋土から弥生土器片がわずかに出土した。時期は、土壌の配置状況や埋土、出土土器から弥生時代後期の範疇と捉えられ、切り合い関係から段状遺構2より古い。(米田)



第506図 土壌1 (1/30)



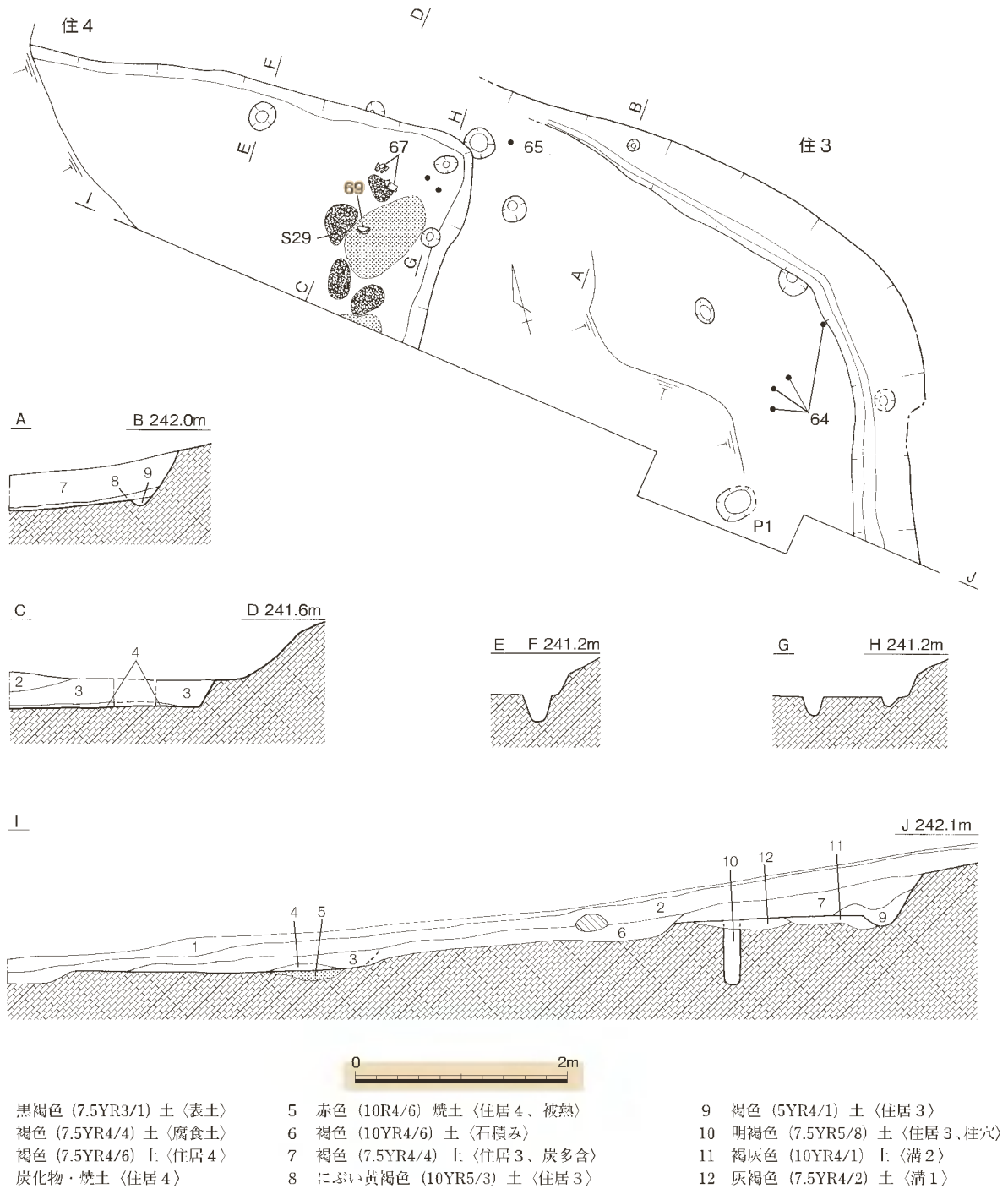
第507図 土壌2 (1/30)

### 第3節 古代以降の遺構・遺物

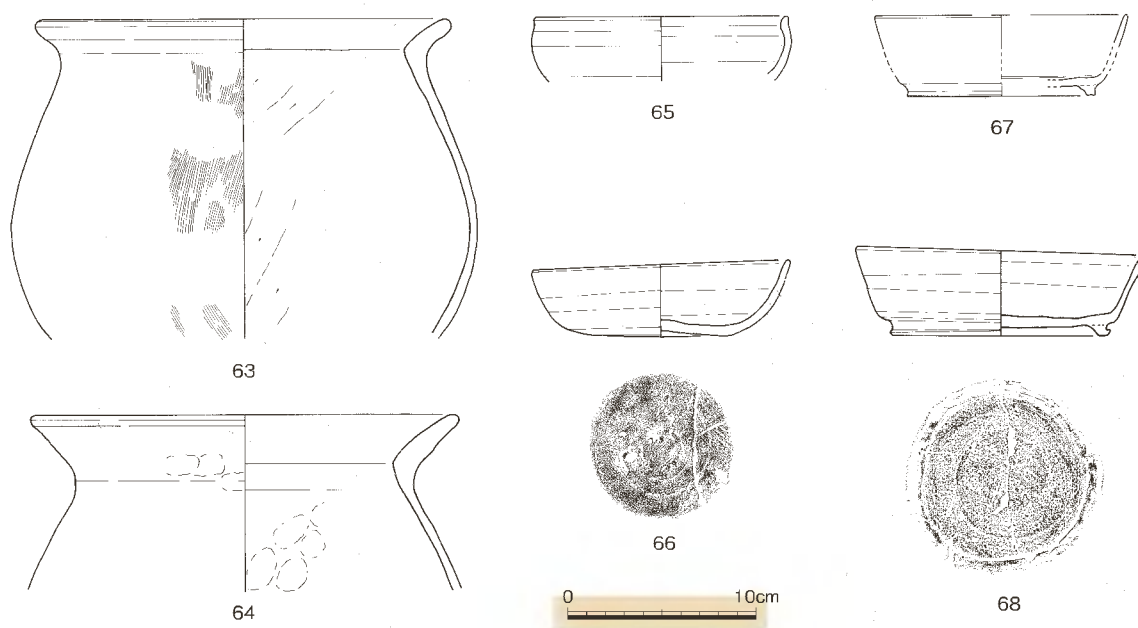
#### 1 竪穴住居

##### 竪穴住居3（第484・508・509・519図、図版96-1）

調査区北西部の谷間南西斜面に位置し、竪穴住居4に切られる。平面形は、隅角部の一部を確認し、



第508図 竪穴住居3・4 (1/60)



第509図 竪穴住居3・4出土遺物(1/4)

その両辺は鈍角に開くことから、五角形ないし六角形の多角形を呈する。深さは最大で約40cmを測り、遺構の残存状況はよくない。壁面には幅30cm、深さ12cmの壁帯溝が巡る。支柱穴は把握し得ないが、P1はその可能性がある。また壁際で小ピットを3個確認している。床面直上の北東側では土師器の甕63、北西側では甕64が出土している。また玄武岩片1点(2.02g)が混入している。時期は出土遺物から8世紀代に位置づけられる。(米田)

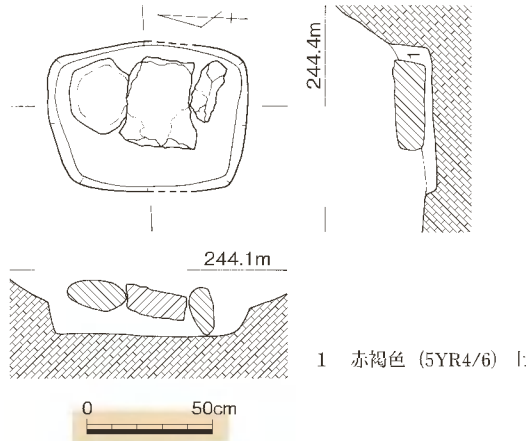
#### 竪穴住居4(第484・508・509・519図、図版96-1~4)

調査区北西部の谷間南西斜面に位置し、竪穴住居3を切る。平面形は一隅角部を確認したのみであるが、方形を呈すると考えられる。規模は一辺430cm以上を測る。深さは検出面から26cmである。覆土は褐色土を基調とするが、床面直上では炭化物や焼土を多く含む土層が厚さ約4cmほど堆積していた。東壁寄りの床面では被熱面2か所や炭面4か所が密集する。被熱は強くない。柱穴は壁面近くで3個確認し、深さは約10~20cmである。いずれも壁面寄りに偏在する点は注目され、壁立ちの構造である可能性がある。遺物は床面直上から須恵器66、覆土から67・68、鉄滓1点(6.05g)が出土した。また65は竪穴住居3・4の覆土からの出土である。鉄滓は希少だが、被熱面の存在と併せて工房の可能性も否定できない。時期は8世紀中頃から後半に比定される。(米田)

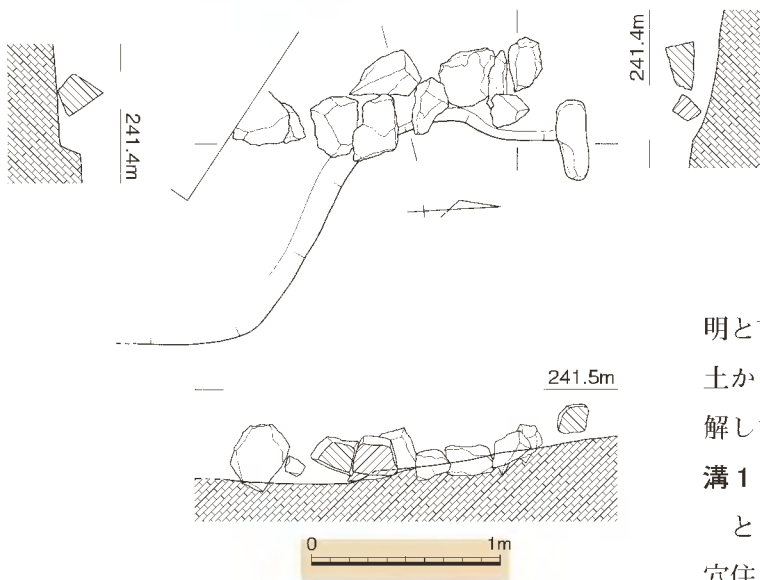
## 2 その他の遺構

### 土壇3(第484・510・519図、図版97-3)

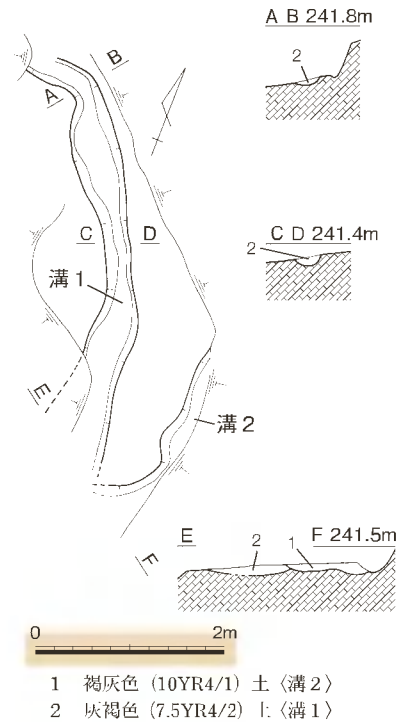
調査区北側の西斜面に単独で位置する。平面形は長軸90cm、短軸59cmの長方形を呈しており、主軸はN-4°-Wで等高線に平行する。断面は逆台形を呈し、壁面はほぼ垂直に立ち上がる。土壇内には30cm前後の石が3個配置され、北側の石2個は底面から6~8cmほど浮いていた。なお、本土壇の機能については、掘り方の形態や配石状況から墓の可能性が示唆される。遺物は皆無であり、時期は不



第510図 土坑 3 (1/30)



第512図 石積み (1/40)



第511図 溝1・2 (1/80)

明と言わざるを得ないが、しまりのない埋土から弥生から古墳時代よりは新しいと理解している。(米田)

溝1・2 (第484・511・519図)

ともに調査区北側の西斜面に位置し、竪穴住居3の床面で検出した。層位的に溝1より溝2が新しい。溝1の幅は最大で72cm、深さは12cmを測る。溝2の幅は86cm以上

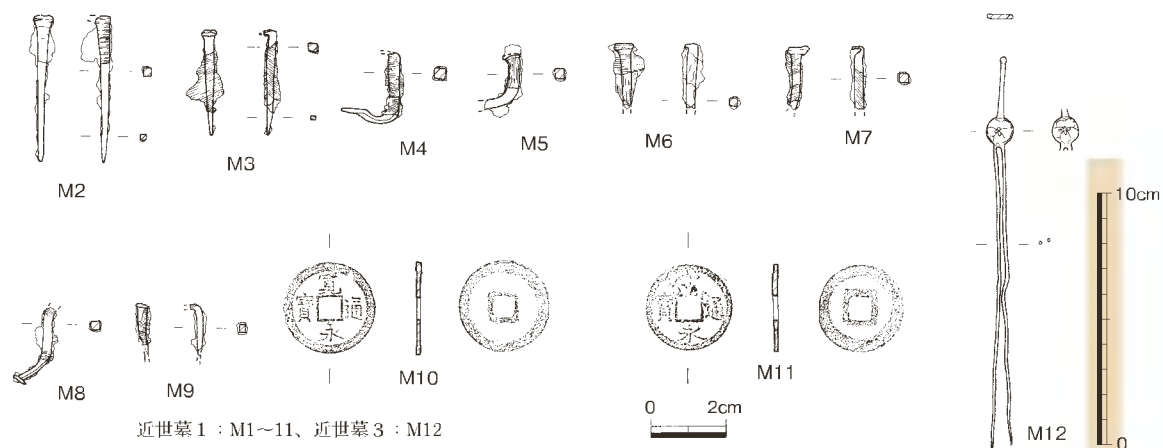
上で、深さは12cmである。溝の配置状況から竪穴住居3に付随する溝状遺構とも捉えられるが、層序関係から別の遺構として判断した。遺物は皆無である。時期は層位的に竪穴住居3の8世紀代より以前であり、古墳時代後期から古代の範疇と理解する。(米田)

石積み (第484・512図、図版96-5)

調査区北側の西斜面に位置し、竪穴住居3の床面で検出し、溝1に西接する。調査時の切り合い関係は竪穴住居3を切ると判断したが、竪穴住居4との新旧関係は判然としなかった。本遺構は、たわみ状の落ち込みに、人頭大の石が等高線に平行するように列をなして配された遺構である。石は角礫が多く、その配置は人為的なものと理解されるが、配置状況は整然としない。遺構の性格については不明な点が多いが、古墳の石室の残痕とは異なる。遺物は皆無であり、時期は層位から判断して古墳時代後期から古代の範疇と理解する。(米田)

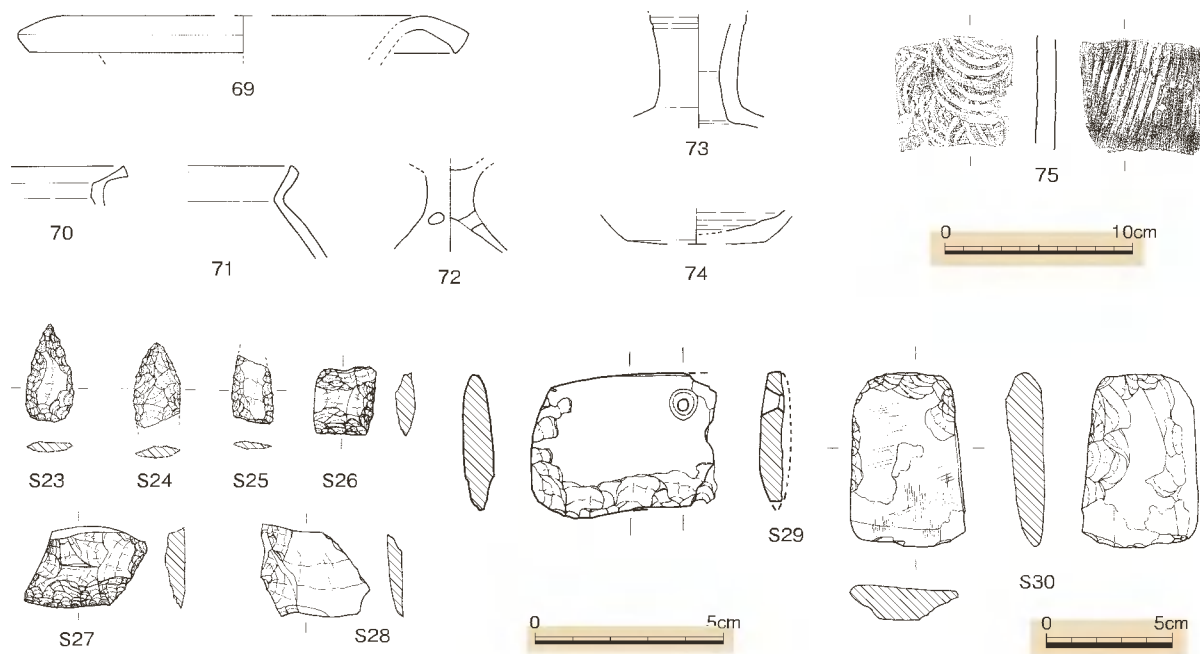
近世墓1～3 (第484・513・519図)

本調査区は調査前まで丘陵頂部を墓地として利用されており、丘陵頂部の南側で近世墓5基、丘陵頂部北側の攪乱部で近現代の墓地が配されていた。副葬品のみを実測図と図版に示す。(米田)



近世墓1：M1～11、近世墓3：M12

第513図 近世墓1・3出土遺物 (1/3・1/2)



第514図 遺構に伴わない遺物 (1/4・1/3・1/2)

### 3 遺構に伴わない遺物 (第514図)

弥生土器は広口壺69、甕70・71、ミニチュア高杯72がある。須恵器は長頸壺の頸部73、底部74、甕片75があり、本来、今岡古墳群（7・8号墳）に伴っていた可能性もあろう。S23～25は石鏃で、周縁部のみ二次調整を施す。S26は楔形石器で、下辺の刃部は階段状に剥離している。S27は調整痕のある剥片で、刃部を形成する。S28はサヌカイトの素材剥片である。S29の緑色片岩による磨製石包丁は竪穴住居4床面付近から出土したが、当該住居には時期的に伴わないと判断し、ここに報告する。S30は扁平片刃石斧で、刃部が摩滅する。このほか、サヌカイト片1点（0.84g）、玄武岩片3点（280.97g）がある。

(米田)

## 第4節 小 結

以上の調査成果により、本遺跡は弥生時代後期の集落跡、古墳時代後期の古墳群、古代の集落跡、近世以降の墓地に利用されていることが判明した。

弥生時代後期の遺構は竪穴住居2軒、段状遺構6面、土壇2基を確認した。いずれの遺構も弥生時代後期前葉の範疇に属すると考えられるが、竪穴住居は1回の拡張、段状遺構は最大で4回の造成が繰り返されており、同時期でありながら若干の時間幅がある。また遺物の中で特に注目されるのが段状遺構5に一括廃棄された土器群である。なかでも器台54～59は一目置く存在と言える。出土した器台は、口縁部に円形浮文、筒部に巡らした突帯の間に長方形の透かし孔を施し、脚端部が丸くおさまるなど、独特の形態と文様を兼ね備えており、吉備地域以外にも播磨の千種川流域で認められる器台の影響を強く受けて成立した可能性が高い。

古墳時代の遺構として、横穴式石室をもつ古墳1基、古墳の周溝の可能性のある溝1条を確認した(詳細は第12章)。これらの古墳の新発見により、今岡古墳群が丘陵全体に形成されていることが明らかになった。特に7号墳は立地や規模、出土遺物からみて、同一丘陵上の今岡古墳群(2～8号墳)のなかでも末期(7世紀後半)に造営されたとみられ、古墳群の展開ならびに当地域の古墳造営の終焉を考える上で重要な位置づけにあると言える。

古代の遺構として、奈良時代の竪穴住居が2軒ある。これらは北側丘陵の谷間で、お互いに重複しており、竪穴住居3は多角形、竪穴住居4は430cm以上の方形を呈する。岡山県内で住居様式が竪穴住居から掘立柱建物に移行する時期は、県南部の百間川原尾島遺跡では7世紀初めであるが、県北部では8世紀まで竪穴住居が存続することが指摘されている(弘田2004)。管見によると県内の奈良時代以降の竪穴住居は、総社市井手見延遺跡の土壇8、新見市横田遺跡の7号住居址、23号住居址、新見市戸谷遺跡の住居址、津山市一貫西遺跡の住居址6、鏡野町大開遺跡の46号土坑、鏡野町九番丁場遺跡の土壇39、鏡野町久田原遺跡の竪穴住居40～44で確認されており、本遺跡出土例を含めると計8遺跡、14例を数える<sup>(1)</sup>。これらの住居の平面形は長方形、隅丸方形、円形、不整楕円形など多様である。また床面に被熱面と炭面が認められる例は本遺跡のほかに井手見延遺跡、九番丁場遺跡、久田原遺跡でも認められる。古代の竪穴住居については形態、規模、柱穴の有無や配置、出土遺物、時期などの基礎的整理が必要であり、それにより竪穴住居の機能や竪穴から掘立柱へ移行する背景にも迫れるのではないかと考える。また本遺跡から南西約500mほど離れた平野部には今岡廃寺(佐藤2002)が造営されており、時期的にも本遺跡の竪穴住居3・4と存続期間が一部重複することから、両者の関連性も興味深い。

(米田)

### 註

(1) 弘田2004による集成のほか、戸谷遺跡(橋本1976)、横田遺跡(岡山県教委1978)を加えた。

### 参考文献

- ・岡田 博ほか「横田遺跡」『岡山県埋蔵文化財調査報告』23 岡山県教育委員会 1978
- ・佐藤寛介「今岡廃寺」『大原町埋蔵文化財発掘調査報告』2 大原町教育委員会 2002
- ・橋本惣司「戸谷遺跡」『岡山県埋蔵文化財調査報告』11 岡山県教育委員会 1976
- ・弘田和司「7～8世紀にかけての集落について」『岡山県埋蔵文化財調査報告』184 岡山県教育委員会 2004

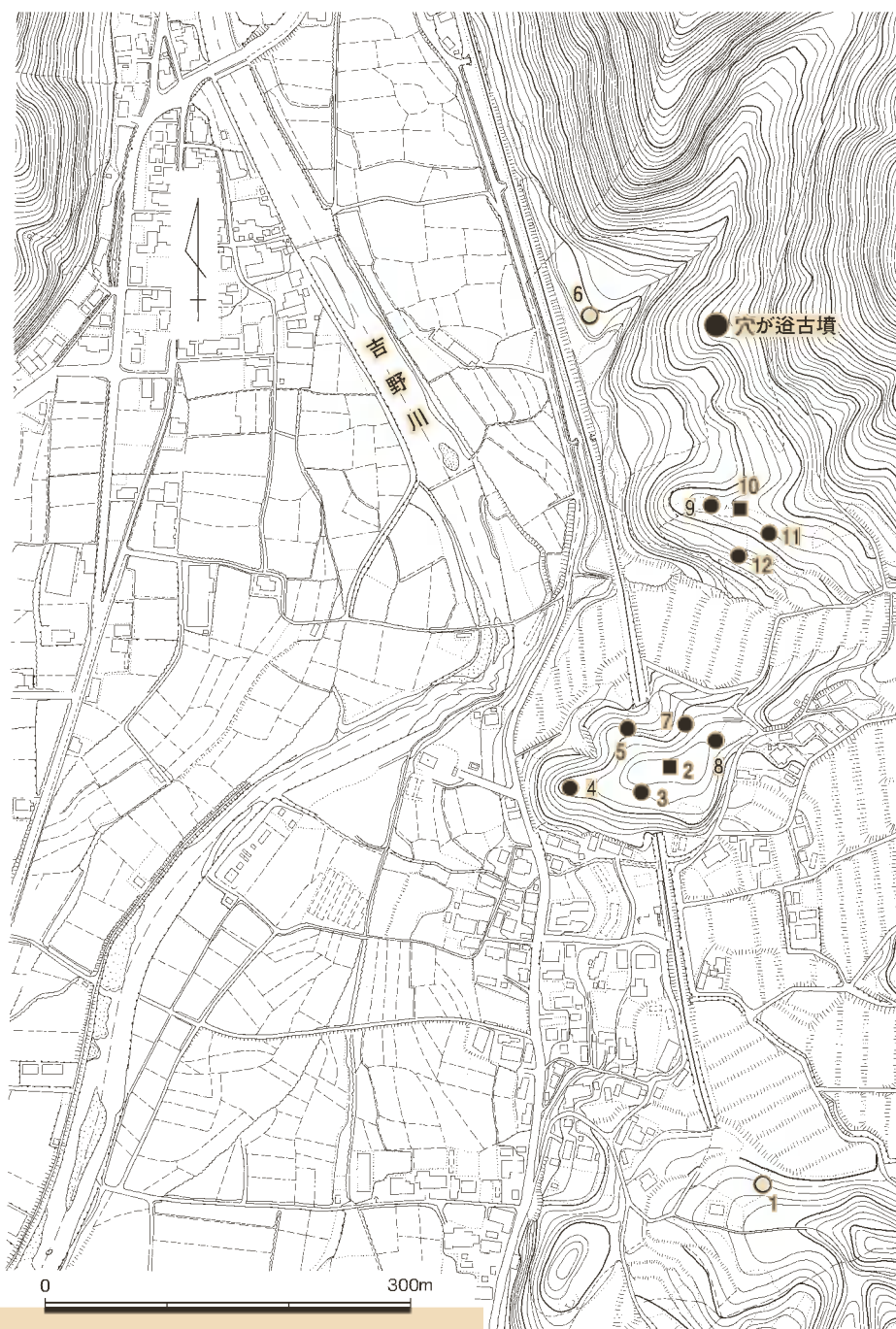
## 第12章 今岡古墳群

### 第1節 遺跡の概要

平成17年3月30日に発行された『大原町史』史料編（上）考古の最新資料によると、今岡地区にかつて所在したが、すでに消滅した古墳や現存している古墳のうちで穴が辻古墳や釜の口1～3号墳と古墳なのか自然地形なのか不明の高岡古墳と称するものを除き、すべての古墳が今岡古墳群に含まれている。そのため今岡古墳群の所在する範囲が、中町B遺跡の東から高岡遺跡の北まで著しく広がって今岡D遺跡や今岡中山遺跡の地点がその範囲内に入ってしまふことになった。

今岡中山遺跡では2基の古墳を検出した。今岡D遺跡では4基の古墳と3基の土壙墓を検出した。

発掘調査が終了した時点では、古墳や土壙墓はそれぞれの遺跡の古墳時代の遺構の項で報告する予定にしていたが、報告書作成の作業を始める段階になっ



● 円墳 ○ 消滅した古墳  
■ 方墳

※図中の数字は今岡古墳群における古墳ナンバーを示す

第515図 今岡古墳群・穴が辻古墳分布図 (1/6,000)



第516図 今岡古墳群分布図 (1/4,000)

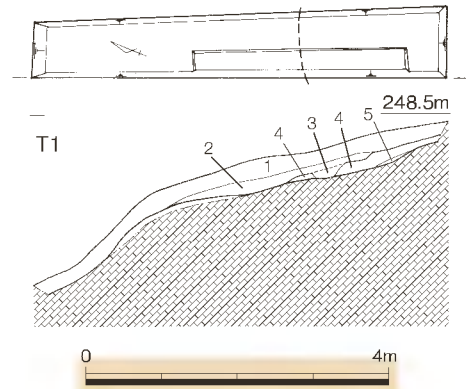
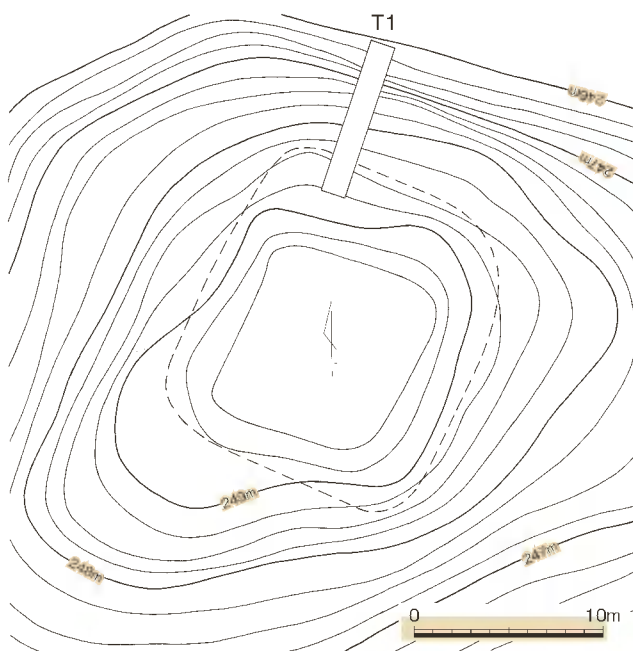
て、今岡中山遺跡と今岡D遺跡で検出した古墳や土壌墓は、今岡古墳群の章を新しく設けて報告することにした。報告に当たっては前者を今岡中山丘陵、後者を今岡D丘陵と称して、節を分けた。

今岡古墳群にはすでに6号墳までその所在が明らかになっていたから、発掘調査によって発見された順番に、今岡中山丘陵の斜面で検出した周溝を有する横穴式石室の古墳を7号墳、丘陵上の周溝だけの古墳を8号墳とした。今岡D丘陵の西側端部の丘陵上に位置する周溝の一部と埋葬施設を確認した古墳を9号墳、中位の丘陵上に地形の高い側の方墳を10号墳、調査区の東端で山道の法面に存在した横穴式石室の古墳を11号墳、南端緩斜面の横穴式石室墳を12号墳とした。

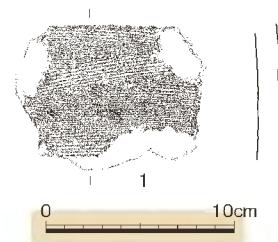
なお、工事用道路の建設に伴って古墳の有無を確認した2号墳と5号墳は、そのまま2号墳と5号墳として調査を行った。これら2基の古墳については、確認調査という節を立てて次節において報告する。 (福田)

## 第2節 確認調査（今岡中山丘陵）

### 1 今岡2号墳 (第515~517図)



- |                     |                          |
|---------------------|--------------------------|
| 1 黄褐色 (2.5Y5/4) 土   | 4 黄褐色 (2.5Y5/4) 土 (墳丘盛土) |
| 2 にぶい黄色 (2.5Y6/4) 土 | 5 明黄褐色 (2.5Y6/6) 土       |
| 3 黄褐色 (10YR5/6) 土   | (墳丘盛土)                   |



第517図 今岡2号墳墳丘測量図 (1/400)・T1平断面図 (1/100)・出土遺物 (1/4)



今岡2号墳は、今岡D遺跡の南西方向約250mの地点の吉野川に向かって舌状に張り出した丘陵上に存在する。この丘陵には今岡2～5・7・8号墳や今岡中山遺跡も認められ、智頭急行線のトンネルが南北方向に貫通している。

この今岡2号墳は、鳥取自動車道の路線計画の段階で路線内に入らないように配慮されていたが、智頭急行線の軌道を避けて建設工事の進入路を敷設するのに、今岡2号墳の北側の墳端が削平される可能性が考えられた。そこで、進入路予定地の斜面にトレンチを設定して確認調査を行った。

調査の結果、第517図のT1平面図に破線で示した位置で今岡2号墳の墳端部と考えられる傾斜を検出し、さらに黒斑のない円筒埴輪の口縁端部に近い破片1が出土した。この調査結果を提示したところ、進入路は北側へ寄せて墳端から約3m離し、掘削する勾配も墳端が崩れないように緩くしてもらった。

今岡2号墳は、径15m、高さ1mの円墳ではないかと考えられていたが、墳頂部は著しく削平されて薬師小社が祭られていた。現状を測量すると、短辺約15m、長辺約17mの方墳に近い形態（第517図）になったが、円墳なのか方墳なのか、埋葬施設も残存しない状態にまで破壊されていたので、断定することができなかった。（福田）

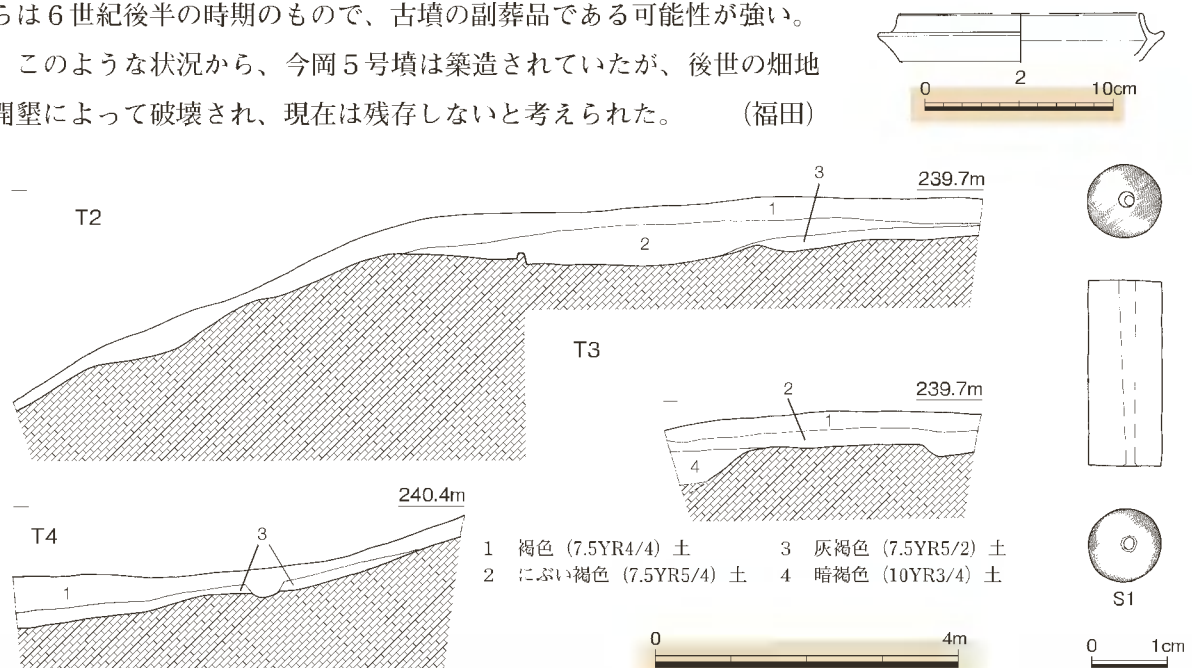
## 2 今岡5号墳（第515・516・518図）

今岡5号墳も今岡2号墳が所在する丘陵の先端部分に位置している。この古墳の周辺には細い竹が繁茂しているが、かつては畑地に利用されていたと思われる。

遺跡地区の概要説明によると、今岡5号墳は径12m、高さ2mの円墳となっていた。進入路の予定地内で、墳丘の頂部に近い地点にトレンチを設定（第516図）して調査を行ったところ、地山の上位に褐色土、にぶい褐色土、灰褐色土が堆積していた（第518図）だけで、古墳の盛り土と推定できるものは何も確認できなかった。地山面も精査したが、埋葬施設と思われる痕跡はなかった。

発掘作業を進めている時に、表土中から須恵器の杯身破片2と管玉の完形品S1が出土した。これらは6世紀後半の時期のもので、古墳の副葬品である可能性が高い。

このような状況から、今岡5号墳は築造されていたが、後世の畑地開墾によって破壊され、現在は残存しないと考えられた。（福田）



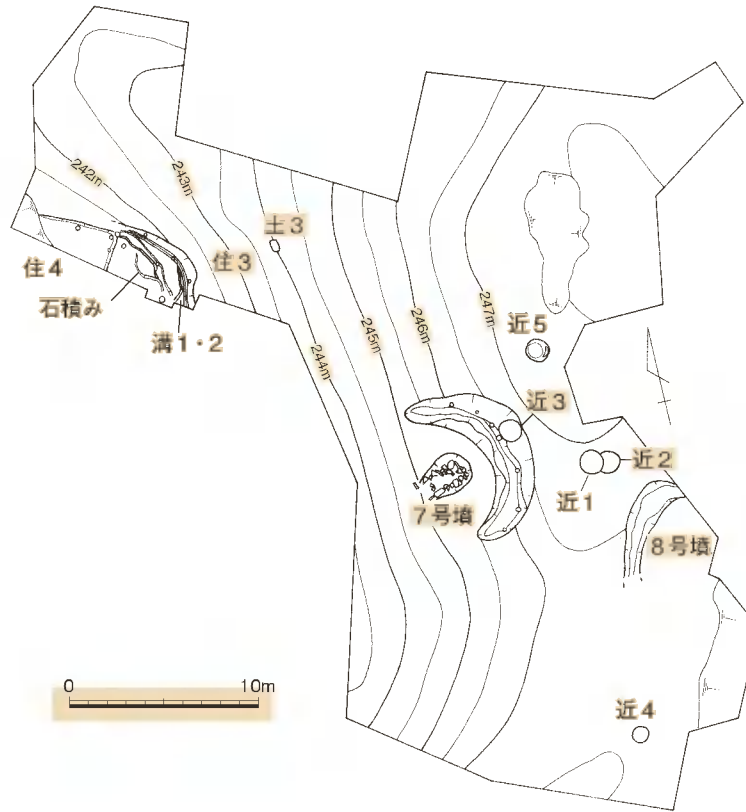
第518図 T2～4（今岡5号墳）断面図（1/100）・出土遺物（1/4・1/1）

### 第3節 今岡中山丘陵

#### 1 概要

古墳時代以降、今岡中山遺跡では古墳2基(今岡7・8号墳)、奈良時代の竪穴住居2軒、古代の可能性のある土壇1基、石積み1基、溝2条、近世墓5基を確認しており、古墳以外の遺構は前章で報告した。今岡7号墳・8号墳と命名した古墳は新規発見である。この発見により、古墳群が南側の丘陵尾根上だけでなく、北側尾根上にも形成されていることが判明した。今岡7号墳では横穴式石室と周溝、8号墳では周溝を検出した。

(米田)



第519図 今岡中山丘陵古墳時代以降遺構配置図 (1/400)

#### 2 今岡7号墳

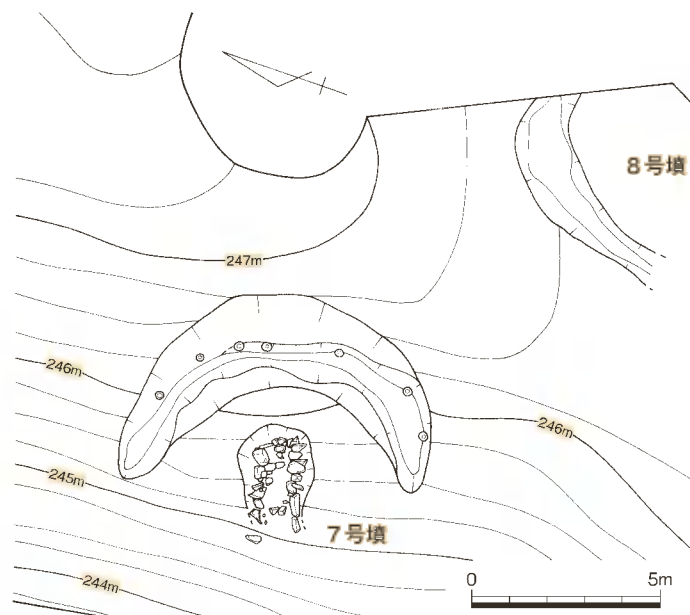
(第516・519～525図、写真40・41、図版105・106-1・116)

##### 調査前の状況

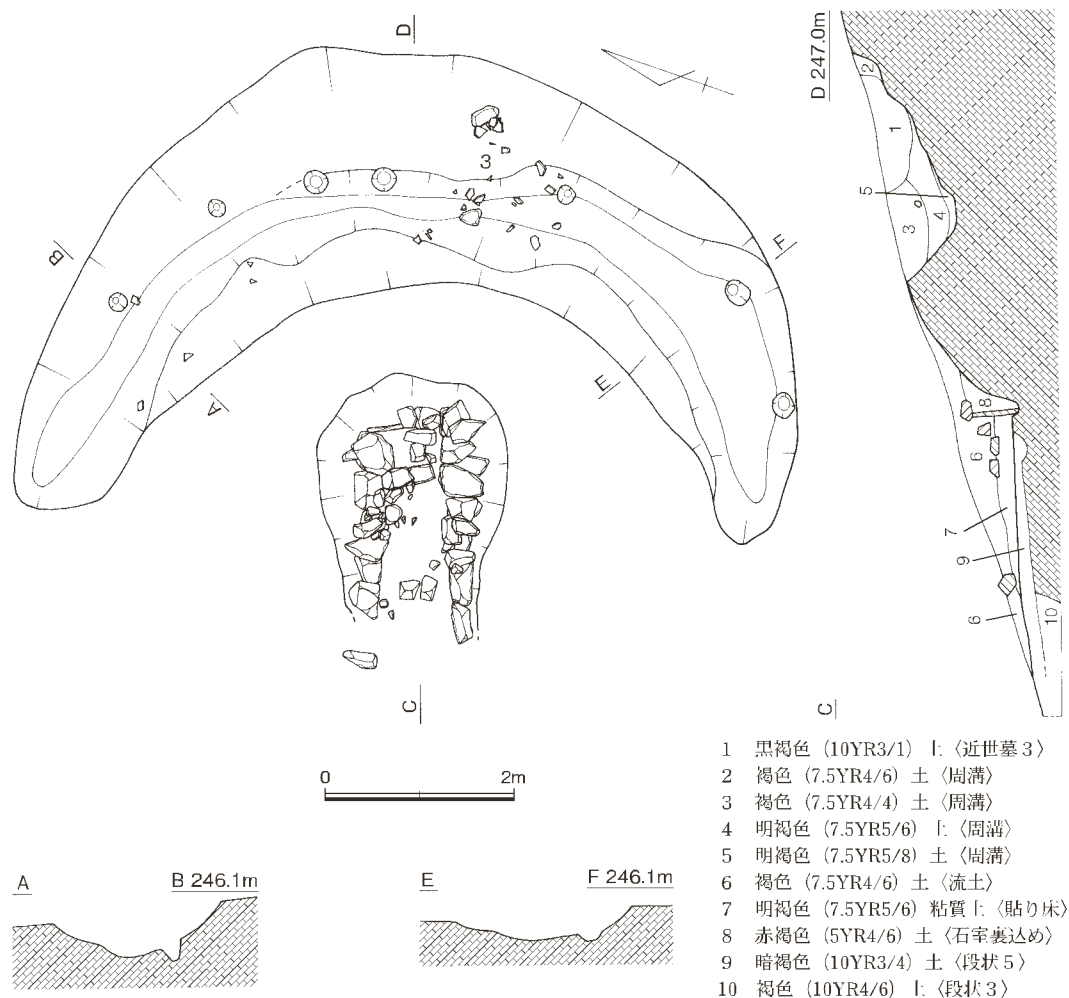
本古墳は分布調査ならびに一次調査においてその存在を確認することができず、本調査において確認された、新規の古墳である。周知の今岡2～5号墳と同一丘陵上に位置するため、「今岡古墳群」の範疇と捉え、今岡7号墳として報告する。立地は吉野川に面した西向きの斜面であるが、丘陵頂部より下がった谷頭に立地する。

##### 墳丘・周溝 (第521・522図)

墳丘は完全に流出しており、



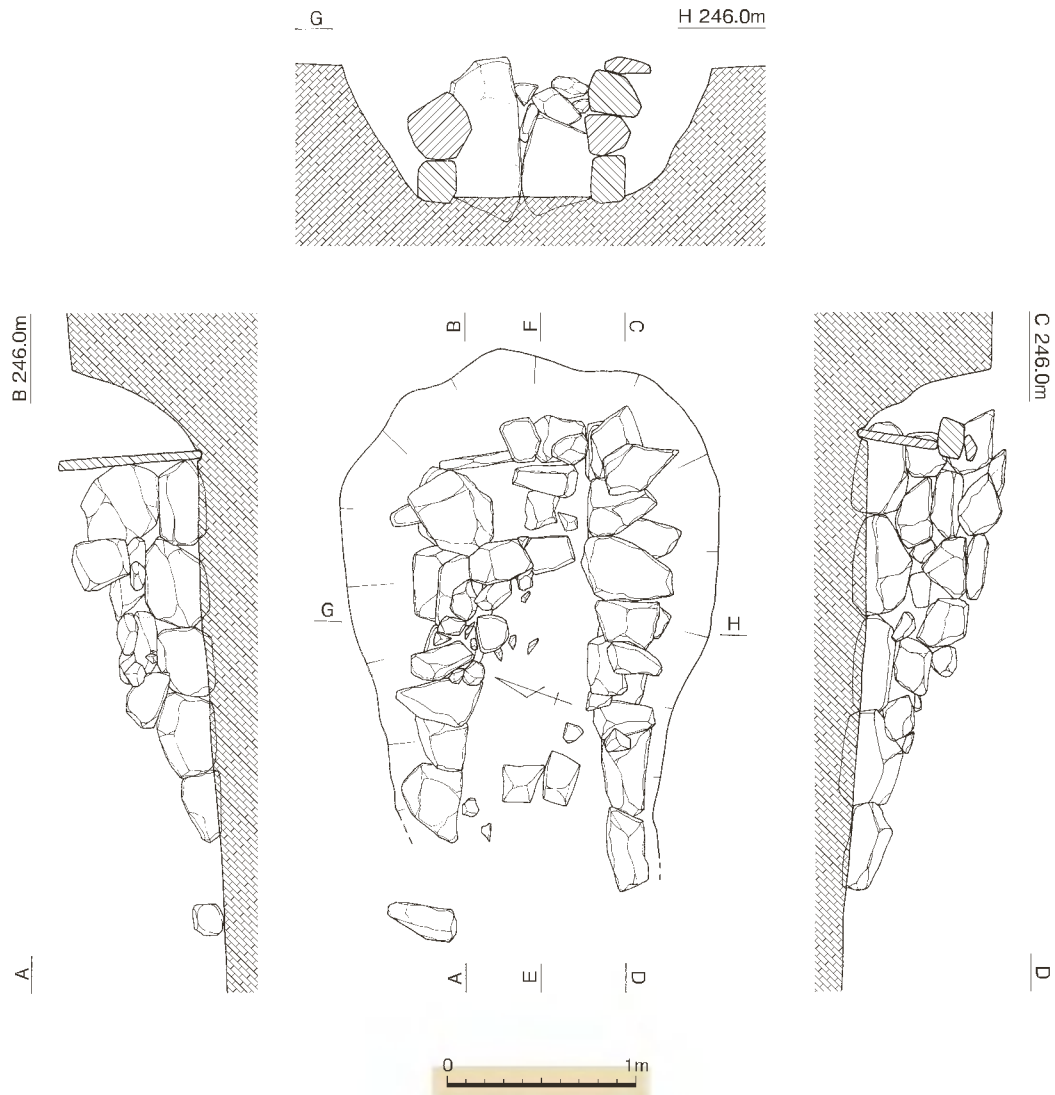
第520図 今岡7号墳・8号墳配置図 (1/200)



第521図 今岡7号墳 (1/80)

周溝のみを確認した。周溝は幅約245cm、深さは最大で74cmを測り、斜面上方のみ残存していた。周溝の断面形は残存状態が良好な部分では「V」字形を呈していた。周溝の内径は約660cmを測り、径7m弱の円墳であったと復元できる。また周溝の底面では径25cm、深さ20cm前後のピットを7個確認し、いずれも底面外側に偏って、一定の間隔を有しながら配置されていた。大半のピットは斜めに掘削されており、ピットの上方は主体部、墳丘の中心に向けられている。これらのピットは周溝を完掘した段階で検出でき、埋土も周溝の下位と大差ない。また配置状況から周溝に伴う可能性が高いと考える。周溝の中央部上面からは破砕された須恵器の甕3、周溝北端では刀子M2が出土した。(米田) 主体部 (第522図)

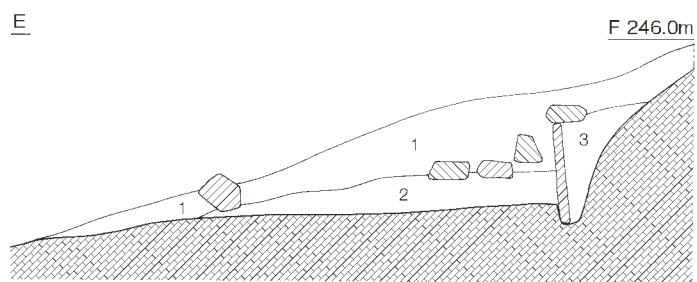
埋葬施設となる石室は、残存する墳丘の中央部分に、上部を大きく欠損した状況で出土している。石室の主軸は、磁北に対しN-71°-Eで、古墳の立地する尾根筋に直交し、南西の方向に開口している。石室は、最下段の基底石を基準として、奥壁部分の幅が72cm、全長(残存長)が250cmを測る。石室の平面形状は、開口部に向かって、裾状に広がる形状をなしている。石室の平面形状には、玄室と羨道部分の境界となる明確な袖部が観察されないことから、無袖式の横穴式石室であると考えられる。石室の構築は、石室の周囲に墓壇を掘り、最下段に基底となる石列を配置する。その後、基底石列の上部に、扁平な石材を使用して小口積みを行い、壁面を構築している状況が窺われた。石室の壁面



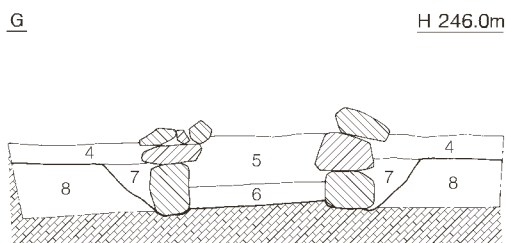
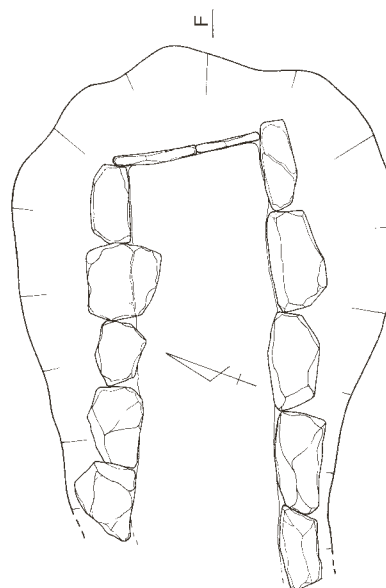
第522図 今岡7号墳石室 (1/40)

は、墓壙や周溝と同様に、東側部分の残りが比較的良いが、残りの良い部分でも3、4段目までしか残っておらず、石室の上部構造の解明には至らなかった。また、奥壁には大きめの板石を2枚使用して壁面を構築している特徴が見られる。

石室内には墳丘流出土が流入し、石室内の上部を大きくかき乱している状況が見てとれる。石室内の底面部分においては、玄室部分の奥壁近くから水平に座った石が2個確認され、双方の石の上面のレベルからやや下がった位置で、きめ細やかな胎土の水平な堆積（第523図上、第2層：明褐色粘質土）が確認された。上記の2個の石と土層の堆積状況からは、前者が棺台で、後者が貼り床となる可能性が示される。以上の内容から、石室内の構築に関しては、地山面まで掘削したのち、その上部に貼り床をし、そして棺台の配置がなされたものと考えられる。推定される石室底面（棺台上面）のレベルは245.34mで、石室底面の地山のレベルは245.14mである。残存する貼り土の厚みは約18cmほどである。墳丘の周囲から検出された周溝のレベル（石室主軸の延長上にあたる周溝底面のレベル）は245.7mであり、双方の値を比較してみると、石室床面と周溝底面との比高差は36cm、石室底面（地山）と周溝底面との比高差は56cmを測る。そのほか石室周囲の墓壙と周溝との間隔は、最も近接する



- 1 褐色 (7.5YR4/6) 土 (流土)
- 2 明褐色 (7.5YR5/6) 粘質土 (貼り床)
- 3 赤褐色 (5YR5/6) 土 (石室裏込め)



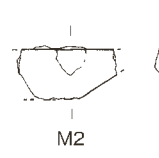
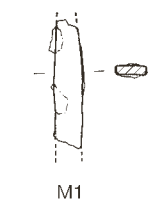
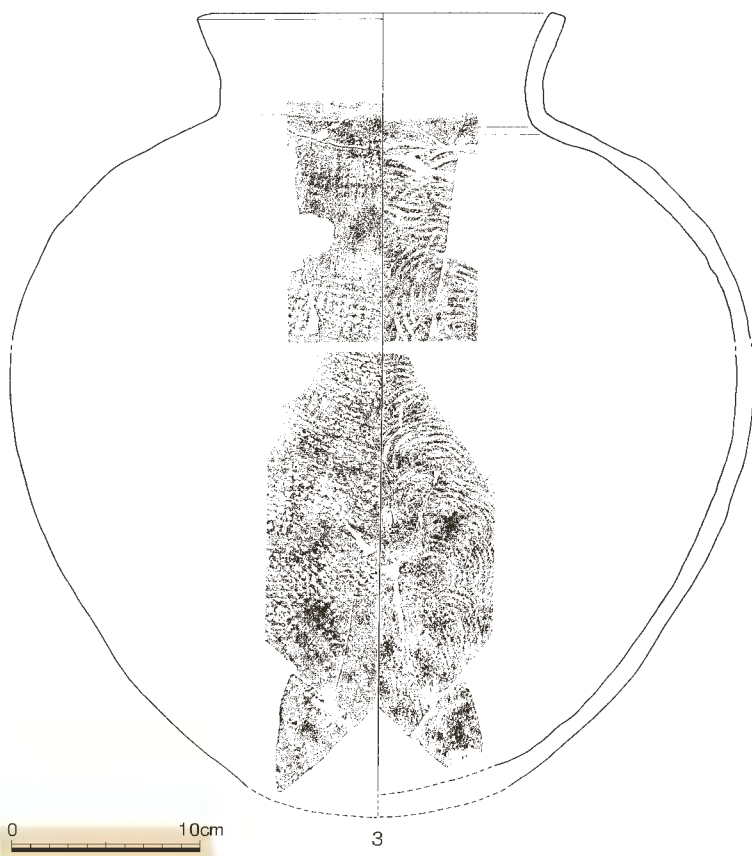
0 1m

- 4 褐色 (7.5YR4/6) 土 (流土)
- 5 褐色 (7.5YR4/6) 土 (流土か堆積土)
- 6 明褐色 (7.5YR5/6) 粘質土 (貼り床)
- 7 赤褐色 (5YR4/6) 土 (石室裏込め)
- 8 暗褐色 (10YR3/4) 土 (段状)

0 1m

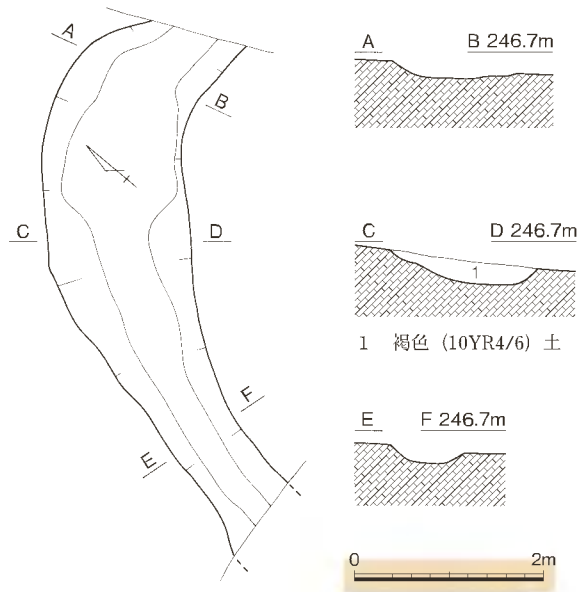
第523図 今岡7号墳石室断面 (1/40)

第524図 今岡7号墳石室基底 (1/40)



0 5cm

第525図 今岡7号墳出土遺物 (1/4・1/3)



第526図 今岡8号墳 (1/80)

位置で約100cm程度の間隔を保つ。

石室内から出土した遺物に関しては、床面近くの流土中から、鉄鏃片M 1が出土したのみで、他に目立った遺物は見られない。また石室周囲の墓壇内からも遺物の出土は見られなかった。調査終了時に際しては、床面および石室底面の地山の掘り下げを行ったが、古墳および石室に関する遺構や遺物等は発見されていない。(山崎)

出土遺物 (第525図、図版116)

石室内から鉄鏃M 1、周溝から須恵器の甕3、刀子M 2が出土した。甕3は単純に外反する口縁部をもち、口縁端部に面を有する。外面は格子目タタキ後にカキメ、内面は同心円当て具痕が残る。M 1は長頸鏃の茎部の破片である。M 2は基部を欠き、刃子の刃部の一部にあたる。(米田)

時期

時期

周溝の上面から出土した須恵器甕3が7世紀後半に比定される。周溝の埋没過程を考慮する必要があるが、古墳の時期を大きく隔てるものではないと考える。(米田)

3 今岡8号墳 (第516・519・520・526図、図版106-3)

調査区の中央部東端に位置する。現状では主体部は確認されず、弧状に巡る溝のみの確認であるが、溝の形態や配置状況、周辺の古墳との関連、竪穴住居2との切り合い関係から、削平が著しい古墳の周溝と判断し、今岡8号墳と命名して報告する。溝は弧状を呈しているが、北、東、南側は近現代の攪乱を受けており、全貌は明らかでない。溝の円弧は内径約788cmと復元でき、この溝が古墳の周溝であるならば、墳丘700cm前後の円墳と想定される。溝の幅はC-D断面で約152cm、深さは24cmを測る。遺物は弥生土器片がわずかに出土したのみであり、古墳の存在や時期を裏付けるものは皆無であった。ただ、今岡古墳群内の古墳の配置状況を見ると、前述した今岡7号墳よりも本墳(溝)は斜面上位の丘陵尾根上に立地するため、今岡7号墳よりは築造が先行する可能性が高い。(米田)



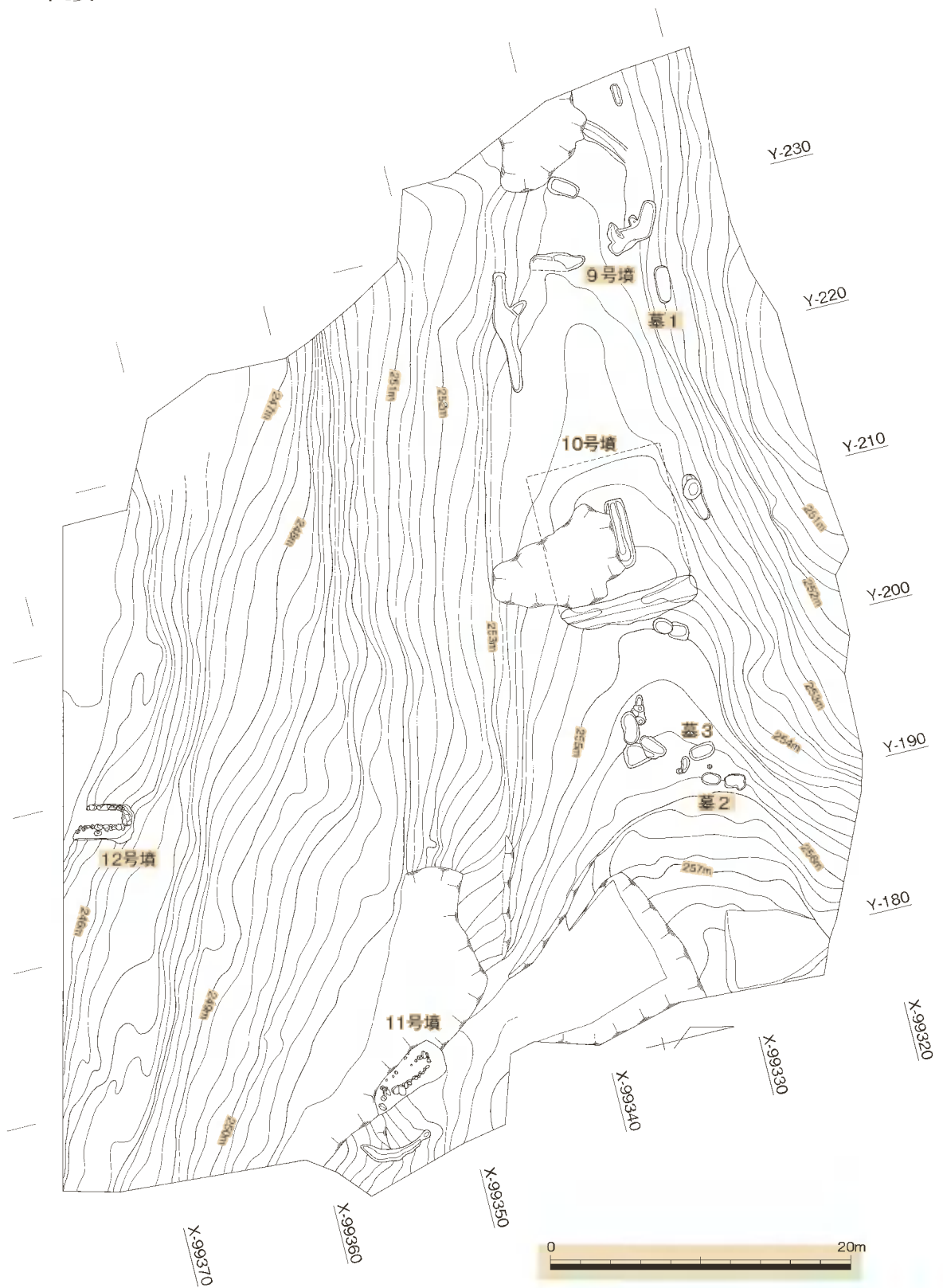
写真40 今岡7号墳調査風景 (南から)



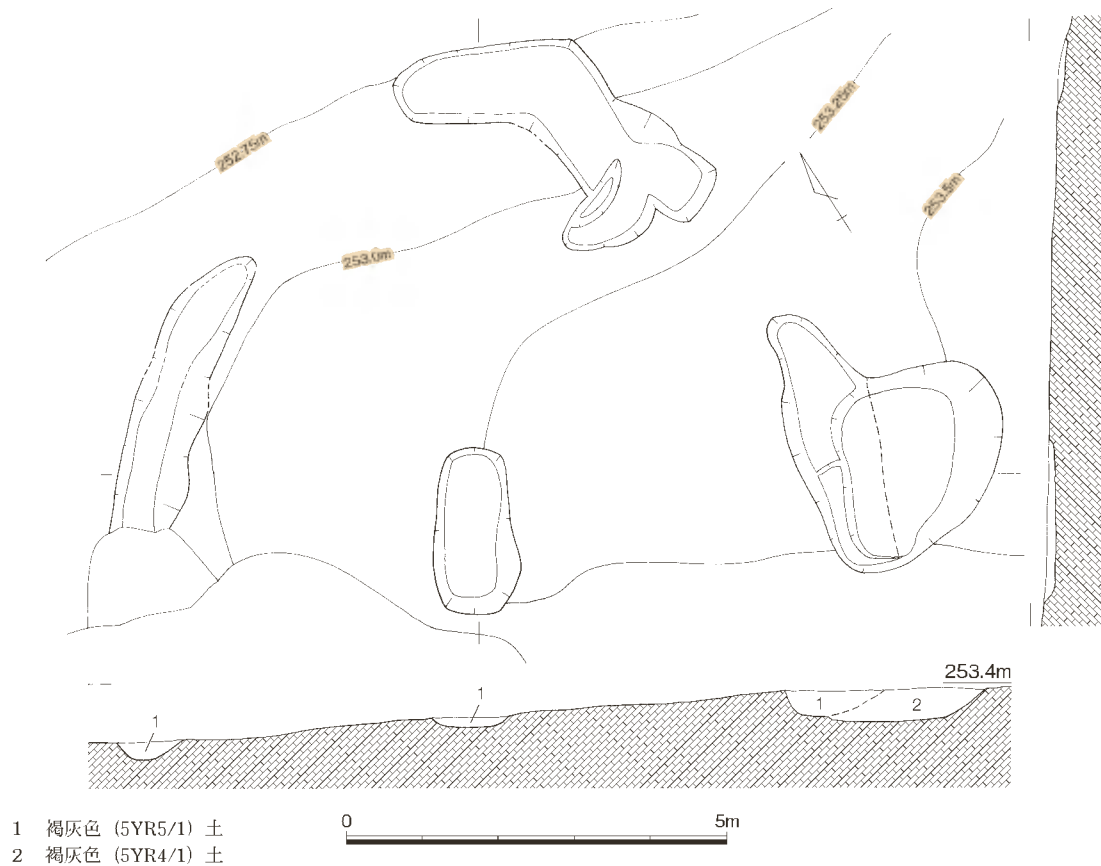
写真41 今岡7号墳調査風景 (南西から)

### 第4節 今岡D丘陵

#### 1 概要



第527図 今岡D丘陵古墳時代全体図 (1/400)



第528図 今岡9号墳 (1/100)

今岡9・10号墳は丘陵頂部に立地し、素掘りの墓壙を内部主体に持つ。北側の尾根に位置する穴が盗古墳は、横穴式石室を埋葬施設にもつ6世紀中葉の古墳であり、今岡9・10号墳はそれに先行する古墳時代中期末葉頃の古墳とみられる。一方、丘陵南斜面に立地する今岡11・12号墳は、内部主体の横穴式石室が南側の谷部に向けて開口する古墳時代後期の古墳で、副葬品から見ても穴が盗古墳に後出する。古墳以外には、丘陵頂部で土壙墓3基を検出した。(弘田)

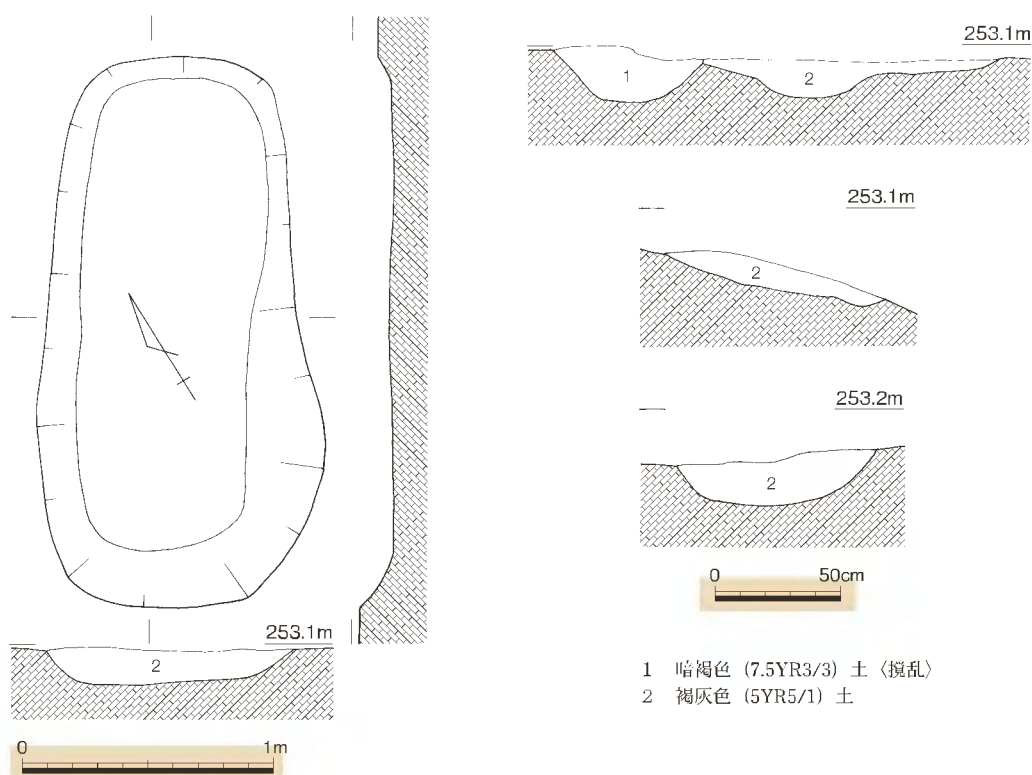
## 2 今岡9号墳 (第516・527～529図、図版107-1・2)

尾根頂部平坦面にあり、かつ調査区の西端に位置している。表土除去作業後、土壙とそれを半円状に取りまく溝が検出できた。土壙の南側は、緩やかに傾斜しており、溝は当初より存在していないと思われる。盛り土は認められなかったが、土壙と溝の位置関係や周辺部の遺構の状況などを勘案して9号墳と呼称し、報告する。

墓壙は、平面形が長方形を呈しており、墓壙底面での規模が、長軸で188cm、幅が72cm、深さは14cmである。溝は完周するのではなく、途中で途切れていた。規模は、上面幅が100cm前後、深さは10～20cmほどであった。古墳の規模は、溝底部の内側で計測して、直径が9mの円墳となる。

墓壙、溝ともに遺物の出土は見られなかったが、周辺に散布していた須恵器片25・27(第10章 353頁)や、この古墳の東に隣接する10号墳の時期などから、穴が盗古墳に先行した、古墳時代中期末葉～後期初頭頃にかけての古墳と考えている。(弘田)





第529図 今岡9号墳主体部・周溝断面 (1/30)

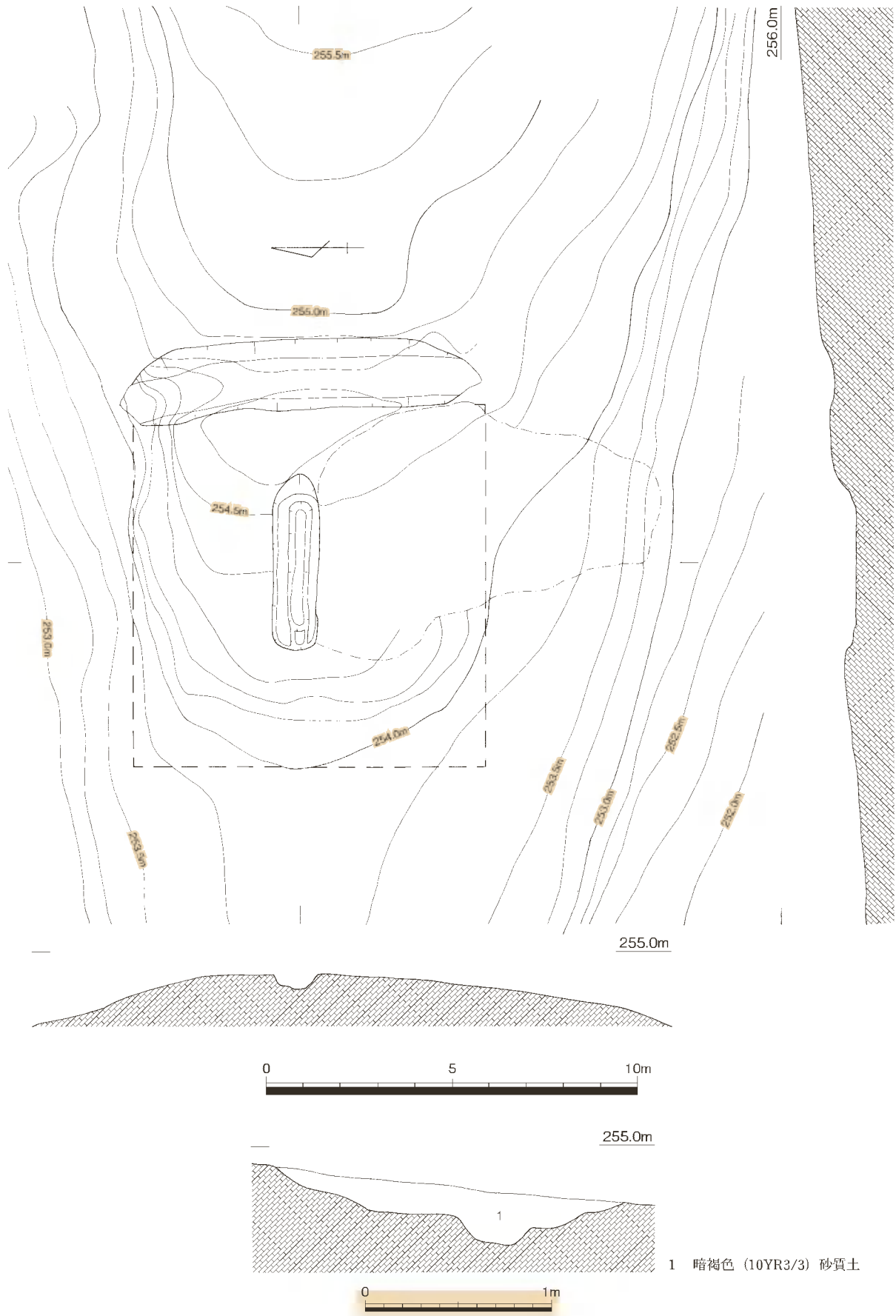
### 3 今岡10号墳 (第516・527・530～532図、図版107-3・108・114)

尾根頂部平坦面のほぼ中央に立地する古墳である。調査前の状況はクヌギ林で、重機による表土掘削を行ったのち、土壇と尾根筋に対して直交する溝を検出した。土壇は、その形状と出土遺物から墓壇であることが判明した。墳丘の盛り土は確認できなかったが、溝は周溝と見られることから、古墳と判断している。

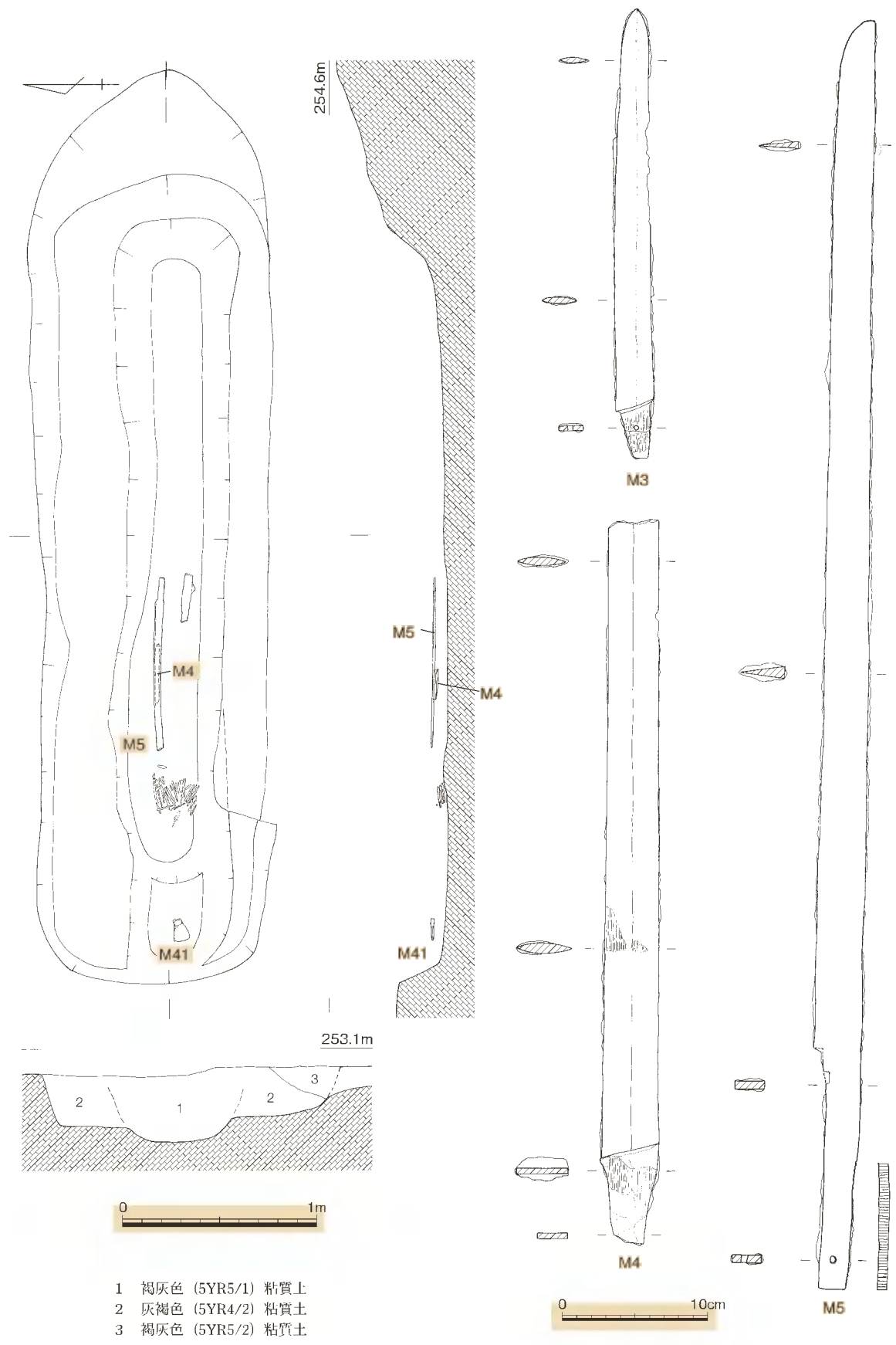
墳形は方墳である。墳端は尾根筋のより高い部分である東側に幅200cm (上面)、深さ40cmの溝を掘ることによって明瞭に裾を区画している。対する西側裾は標高254.0mの等高線が傾斜変換点であり、これをもって墳端とみる。周溝は確認されていないが、調査開始時には地山面まで重機によって掘削していたこと、古墳の西に接する部分には弥生時代の竪穴住居が存在していたことから、周溝を見落としたことも考えられる。墳丘の北側では、標高254.0mの等高線が墳丘東側の周溝北端と接することからこれを墳端ラインとみなす。墳丘の南側も同様である。そこで10号墳の規模は、東西が10m、南北で9.6m、高さは60cmとなる。

墓壇は二段に掘り込まれて底部断面が凹状をなすため割竹形木棺を使用したと考える。規模は上面で長さ420cm、幅120cm、深さ40cmを測る。また、木棺は長さ約300cm、幅50cmに復元できる。

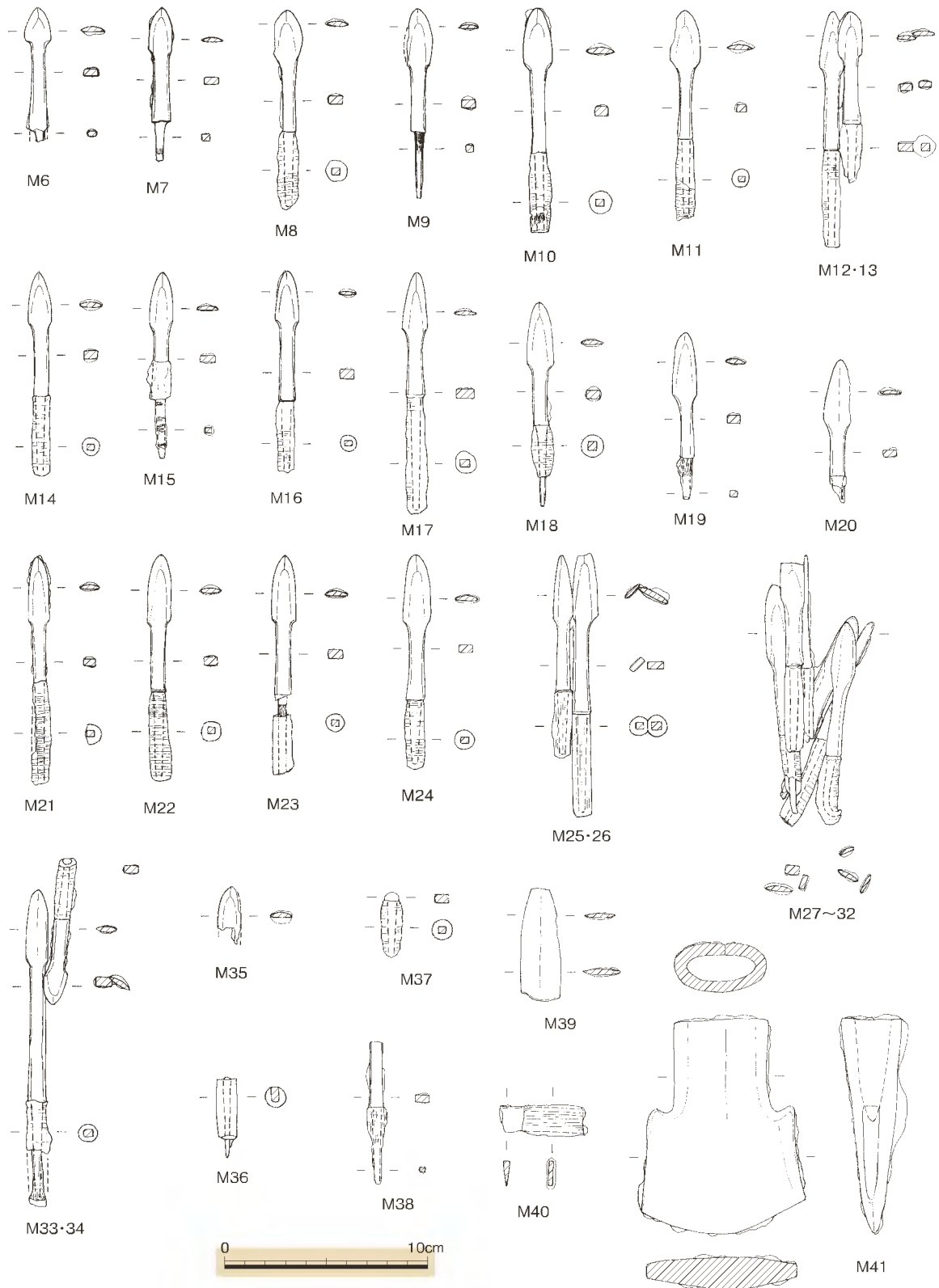
出土遺物には、鉄剣M3・4、鉄刀M5、鉄鏃M6～38、刀子M40、有肩鉄斧M41がある。M39は、大形の鉄鏃か剣の切先とみられる。鉄鏃は刃部の長さによって、M6～9、M10～17、M18～34の三群に分けられる。また、茎部と矢柄を巻き付ける樹皮がよく残っていた。各遺物の出土状況は、ほぼ原位置を保っていると見られる。木棺痕跡の中央やや西寄り鉄刀M5を検出した。切先は西に向けている。鉄剣M4はM5の真下に置かれていた。鉄鏃は東になっており、鏃身が東、茎が西に向



第530図 今岡10号墳墳丘 (1/150)・周溝断面 (1/30)



第531図 今岡10号墳主体部 (1/30)・出土遺物① (1/4)



第532図 今岡10号墳出土遺物② (1/3)

くように置かれていた。鉄斧M41は墓壇の西小口部で刃部を西向きにして出土している。土器類はみられなかった。時期は、古墳時代中期末頃であろう。(弘田)

4 今岡11号墳 (第516・527・533～537図、図版109・110・115-1)

調査前の状況 (第533図)

今岡11号墳は、東西方向に延びる丘陵の南斜面に築造され、調査区の東端、今岡12号墳の北東約24mに位置する。今回の調査で新規に確認された古墳である。調査前は崖面になっており古墳の存在を想定していなかったが、調査開始直後の表土掘削中に、石室が露出し須恵器片を検出した。(石田)

墳丘 (第534・535図)

墳丘は削平や流出によってその大半を失っている。墳形は楕円形に近く、規模は長径8m前後に想定される。墳丘は地山の整形と若干の盛り土で形成されていたと考えられる。周溝はわずかに墳丘南東部分に残存していただけで、周溝の幅は30～85cm、深さは20cm程度であった。(石田)

主体部 (第535・536図)

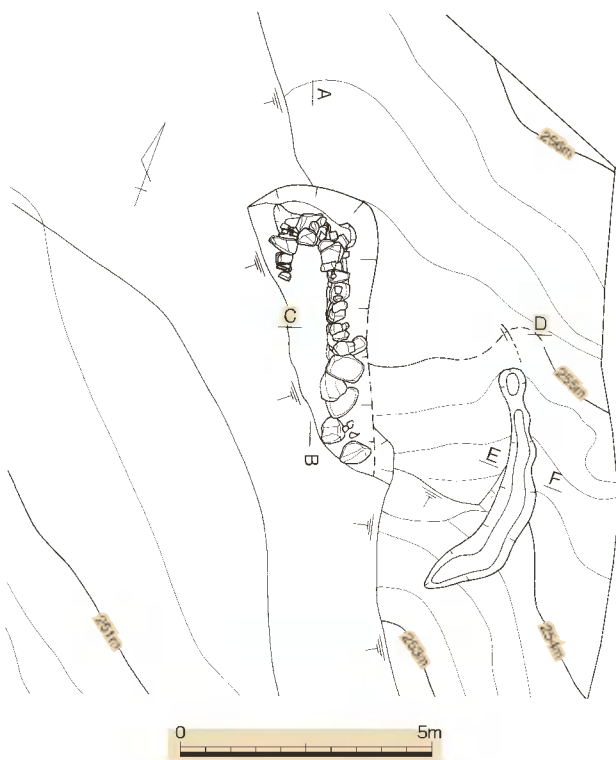
石室は南方向に開口する無袖の横穴式石室で中央部がややふくらむ平面形態である。石室の奥壁と東側壁は残存しているが、西側壁はその大部分が削平や流出により失われており、天井石についても、古墳発見時にはすでに失われており確認できなかった。

石室の規模は基底石を基準にして、全長440cm以上、奥壁幅52cm、石室最大幅75cmを測る。奥壁は現存で3段を数え高さは90cm、基底石には幅58cm、奥行76cm、高さ68cmの大形の石を使用している。東側壁は3～5段が残り、現存高は120cmである。西側壁はそのほとんどが削平、流出により失われていたが1～2段が残り、残存高は52cmであった。なお石室の主軸は、国土座標軸の北方位に対してN-18°-Wである。

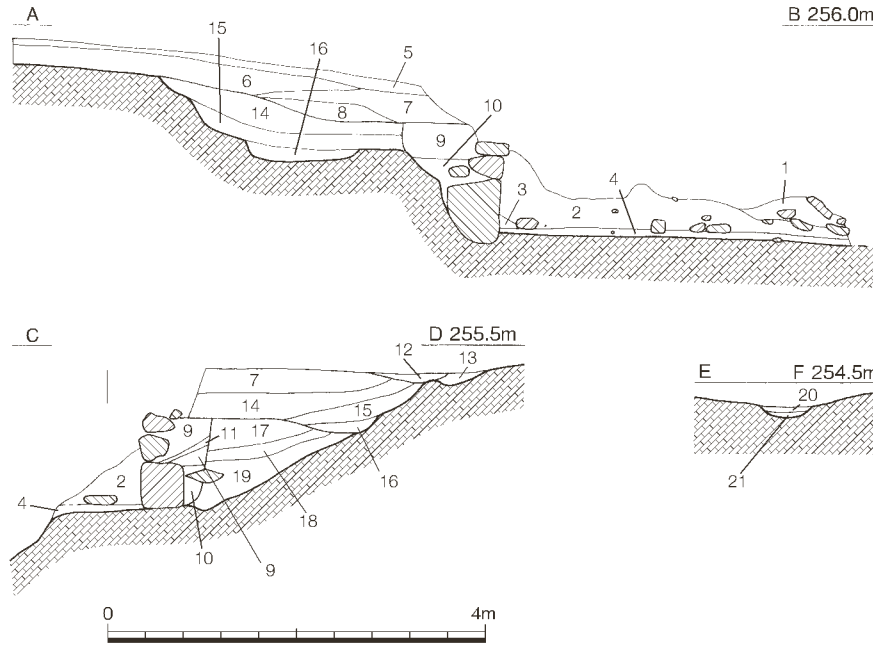
石室内の土層堆積状況は、第535図の第1層～3層が石室内流入土であるが、第4



第533図 今岡11号墳調査前地形測量図 (1/150)



第534図 今岡11号墳 (1/150)



- |                                  |                                 |
|----------------------------------|---------------------------------|
| 1 暗褐色 (7.5YR3/3) 砂質土             | 12 灰白色 (10YR7/1) 粘質土            |
| 2 褐色 (7.5YR4/3) 粘性砂質土            | 13 灰褐色 (7.5YR4/2) 砂質土〈古墳周溝〉     |
| 3 にぶい褐色 (7.5YR5/3) 粘質土           | 14 灰褐色 (7.5YR6/2) 砂質土〈段状1〉      |
| 4 橙色 (7.5YR6/6) 粘性砂質土 (黒色土ブロック含) | 15 灰褐色 (7.5YR5/2) 粘質土〈段状1〉      |
| 5 褐色 (7.5YR4/3) 砂質土〈表土〉          | 16 灰褐色 (7.5YR4/2) 粘質土〈段状1壁体溝〉   |
| 6 明赤褐色 (5YR5/6) 砂質土              | 17 にぶい黄褐色 (10YR6/3) 粘性砂質土〈段状2〉  |
| 7 明褐色 (7.5YR5/6) 砂質土〈古墳墳丘盛土〉     | 18 橙色 (7.5YR6/6) 粘質土〈段状2〉       |
| 8 にぶい橙色 (7.5YR6/4) 粘性砂質土         | 19 灰黄褐色 (10YR4/2) 粘性砂質土〈段状2〉    |
| 9 にぶい黄褐色 (10YR5/3) 粘性砂質土         | 20 にぶい褐色 (7.5YR5/3) 粘性砂質土〈古墳周溝〉 |
| 10 にぶい黄褐色 (10YR5/4) 粘質土 (黒色土含)   | 21 灰褐色 (7.5YR4/2) 砂質土〈古墳周溝〉     |
| 11 明褐色 (7.5YR5/6) 粘性砂質土          |                                 |

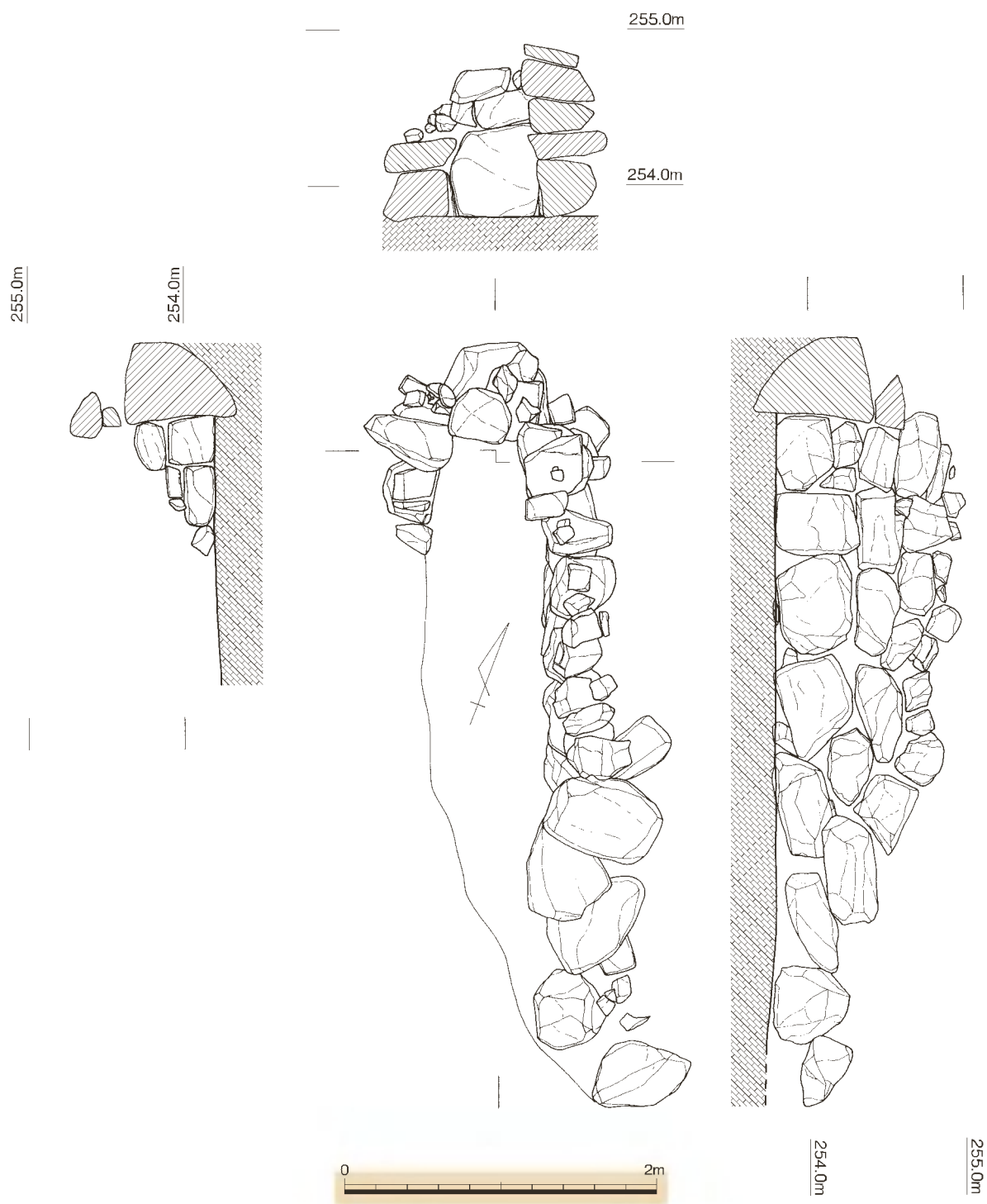
第535図 今岡11号墳墳丘・周溝断面 (1/80)

層は石室床面の整地土で、厚さが6～8cmある。また、石室床面では棺台に使用したと思われる石を奥壁側で2石、石室中央から南側で3石の計5石を検出している。鉄釘等は出土せず、石室内流入土の土層にも痕跡は認められなかったが、棺台には木棺が据置かれていた可能性が高いと思われる。

石室掘り方は、地山および下層の弥生時代の段状遺構の埋土を掘り込んでいる。奥壁側から東側壁側のみを検出しており、西側壁側については不明であるが、平面形は隅丸長方形を呈しているものと考えられる。掘り方の規模は上端の残存長で長さ575cm、幅255cmである。東側壁側では石室石材と掘り方上端の間隔は40cm弱程度しかなく、石室幅に近い狭小なものである。(石田)

遺物出土状況 (第537図)

遺物は石室内より、須恵器杯身4、台付長頸壺5、提瓶6、鉄鏃M42・43がいずれも床面から出土している。杯身4と提瓶5は石室北半部、西側壁側の棺台間で、壺5は開口部近くの東側壁に倒れこむ形で検出された。また奥壁近くの東側壁沿いでは鉄鏃M42が、奥壁側棺台の南側でM43が出土した。なお提瓶7は表土掘削中の石室発見時に出土しており、もとは石室内の遺物と考える。(石田)



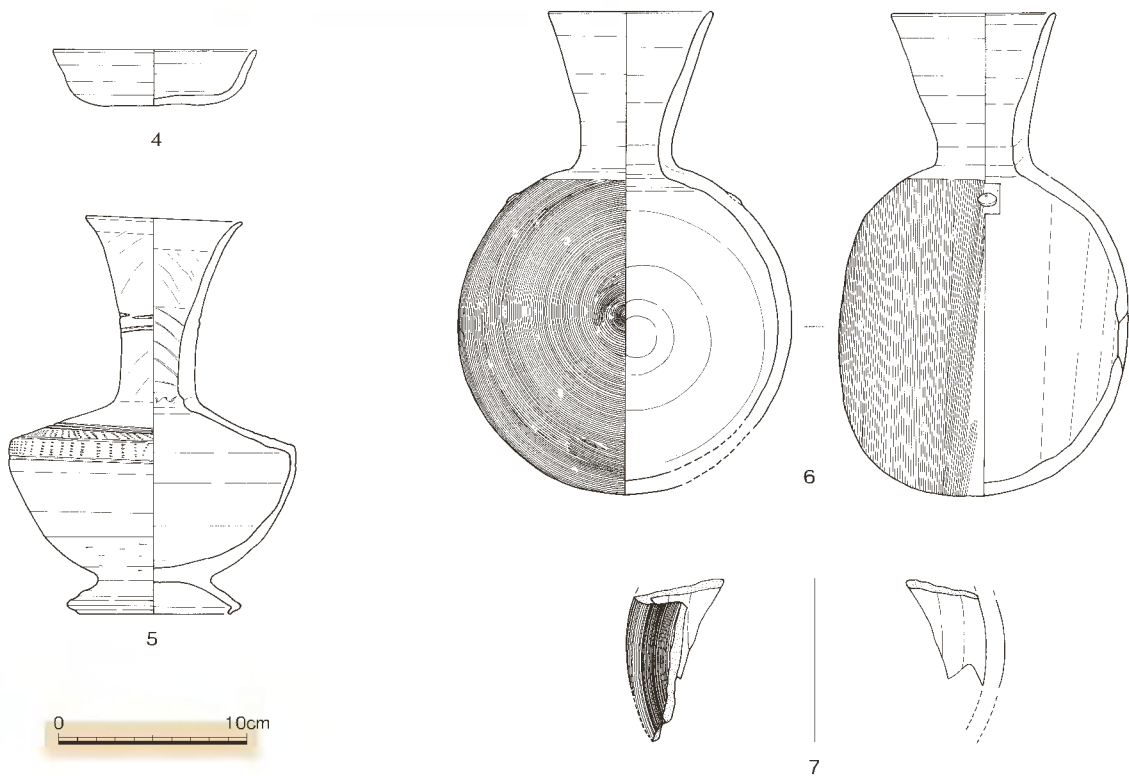
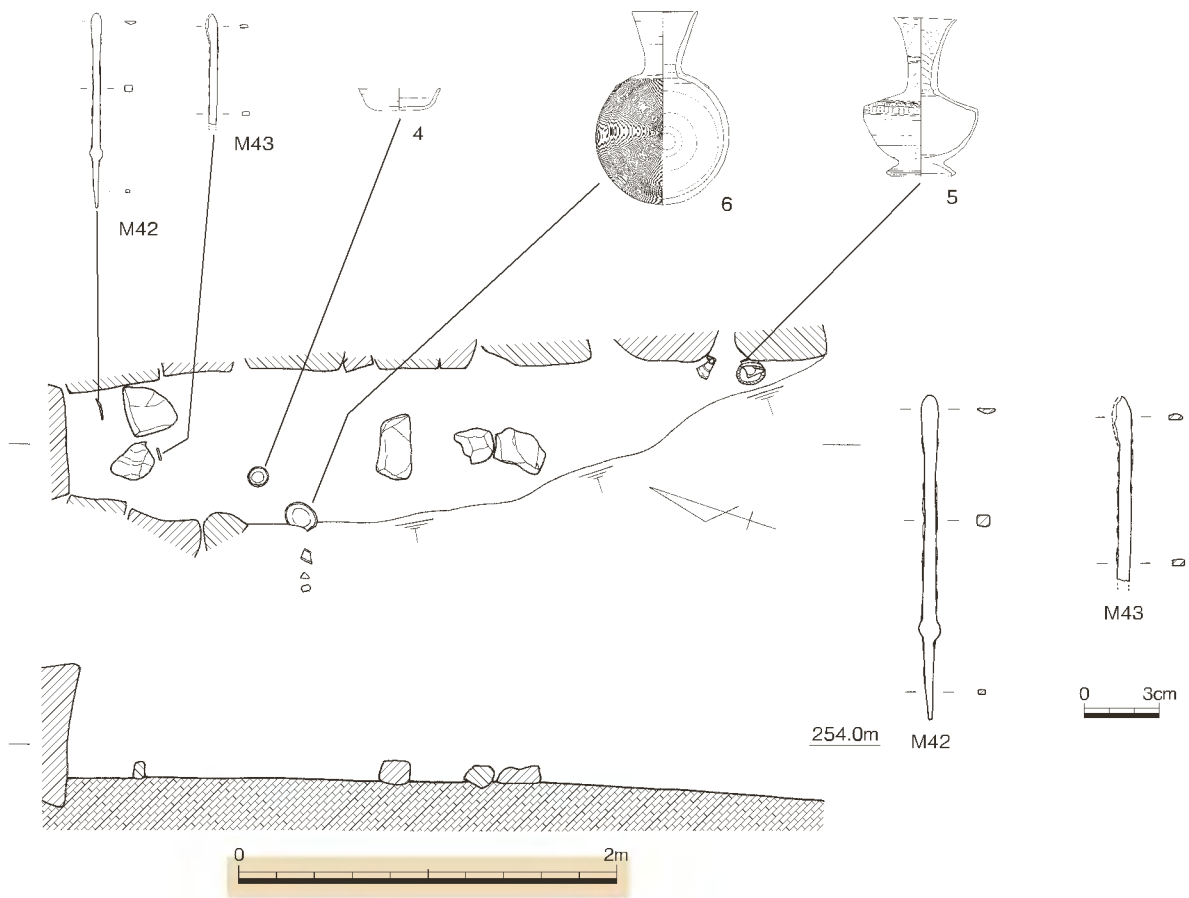
第536図 今岡11号墳石室 (1/40)

出土遺物 (第537図、図版115-1)

杯身4は立ち上がりも低く、口径も10.6cmと小さい。台付長頸壺5は頸部に2条の沈線、肩部に5条の沈線を施し間に2段の刺突文を巡らしている。提瓶6はボタン状の退化した把手が付き、新しい様相を呈している。鉄鏃M42・43はいずれも長頸鏃式のものである。(石田)

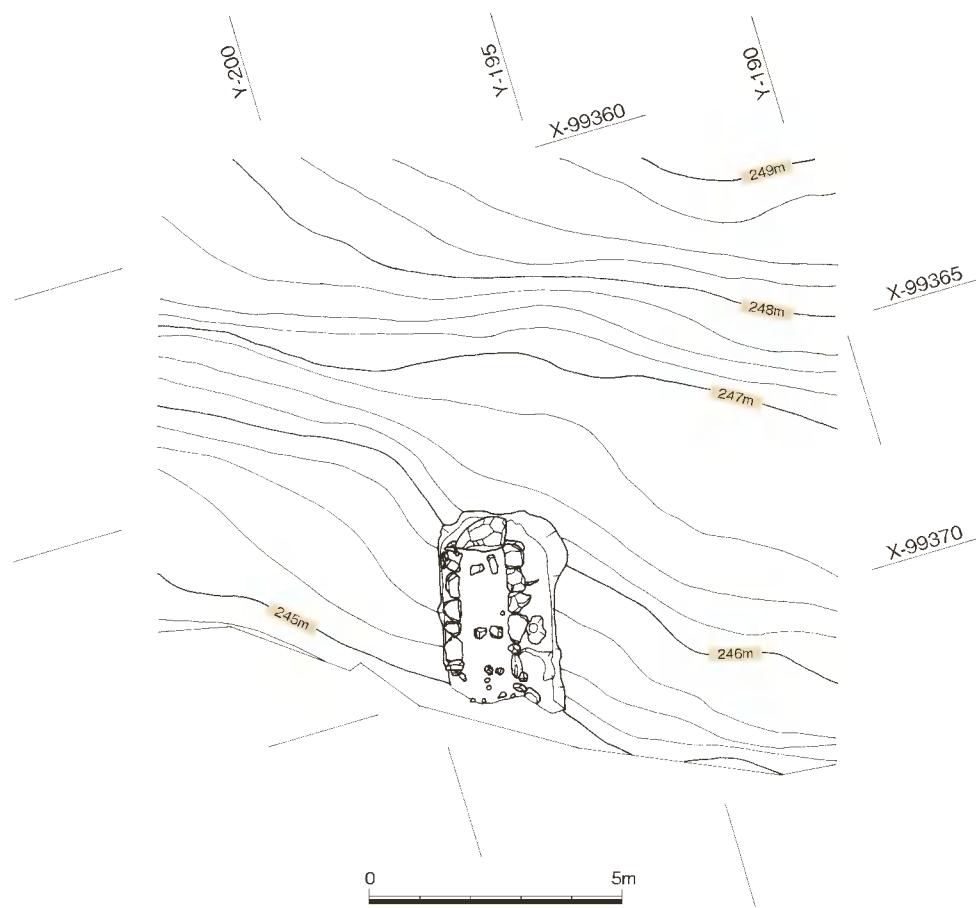
時期

この古墳の時期は、出土遺物がTK217式の新相に併行し、時期は7世紀中葉頃であろう。(石田)



第537図 今岡11号墳遺物出土状況 (1/40)・出土遺物 (1/4・1/3)





第538図 今岡12号墳周辺地形測量図 (1/150)

## 5 今岡12号墳 (第516・527・538～542図、図版109-1・111・112・115-2)

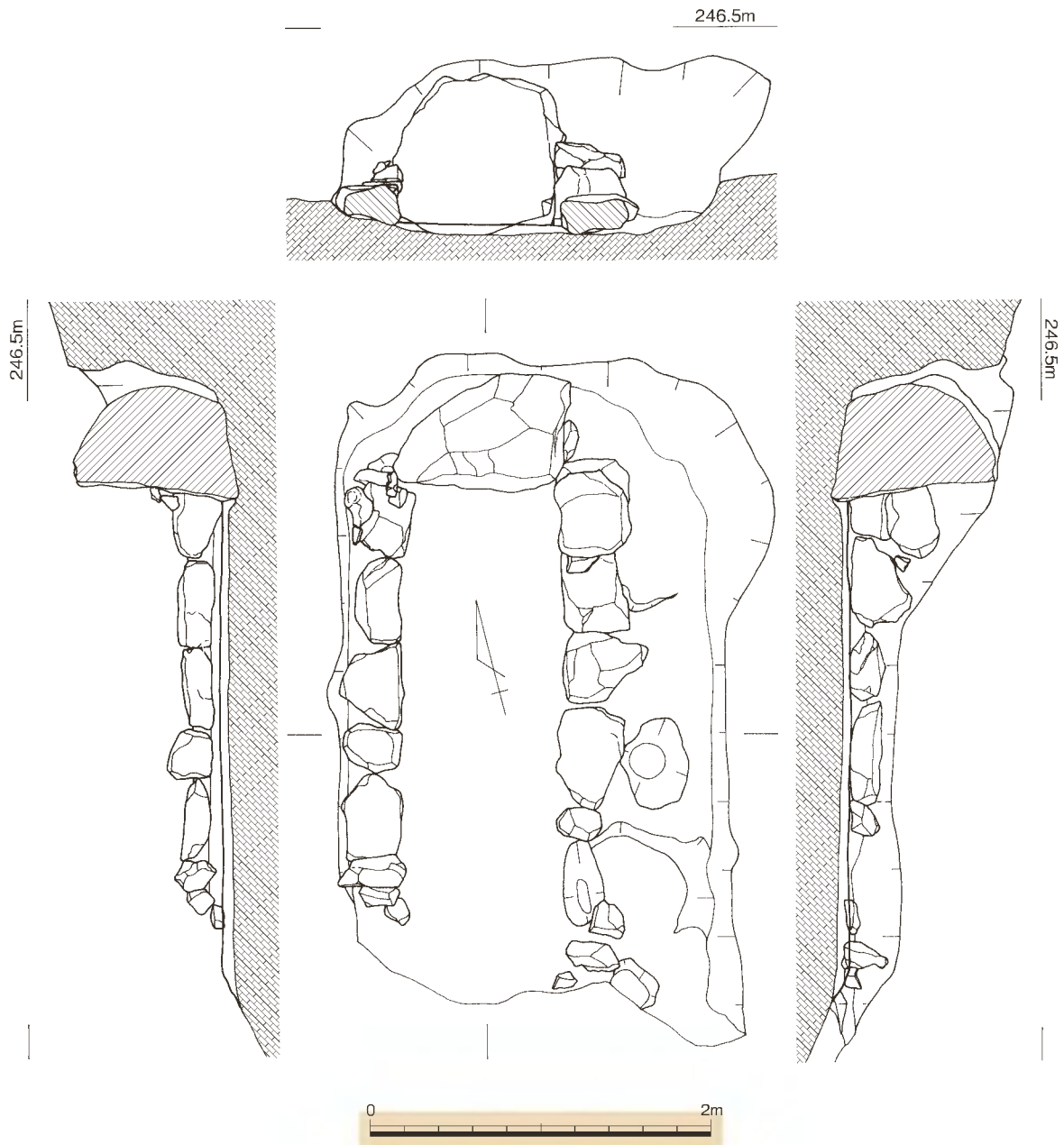
### 調査前の状況 (第538図)

今岡12号墳は東西方向に延びる丘陵の南斜面に築造され、調査区南端の中央付近に位置する。盛り土、主体部上半部および石室開口部に当たる南側斜面部分の大半が削平によって失われ、墳丘や周溝は確認できなかった。ただし、墓壙を北側斜面の上方から深く掘削して、南側斜面部の石室開口部を低く下げることによって、墳丘を大きく見せていたと思われる。(澤山)

### 主体部 (第539・540図)

石室の掘り方は、地山および基盤層から掘り込まれている。平面形態は隅丸長方形で、上端では長さ385cm以上、最大幅256cm、下端では長さ371cm以上、最大幅215cmを測る。断面形態は逆台形状で、深さ最大102cmを測る。床面はほぼ水平であるが、中央付近に比べて西側壁側では5cm程度高くなっていた。床面の標高は245.28～245.33mであった。石室の主体部は、南方向に開口する無袖の横穴式石室である。石室の規模は基底石を基準にして、現状で長さ305cm以上、幅は83～96cm、高さは奥壁部分で88cmを測る。石室の主軸線は、国土座標軸の北方位に対してN-10°-Eである。

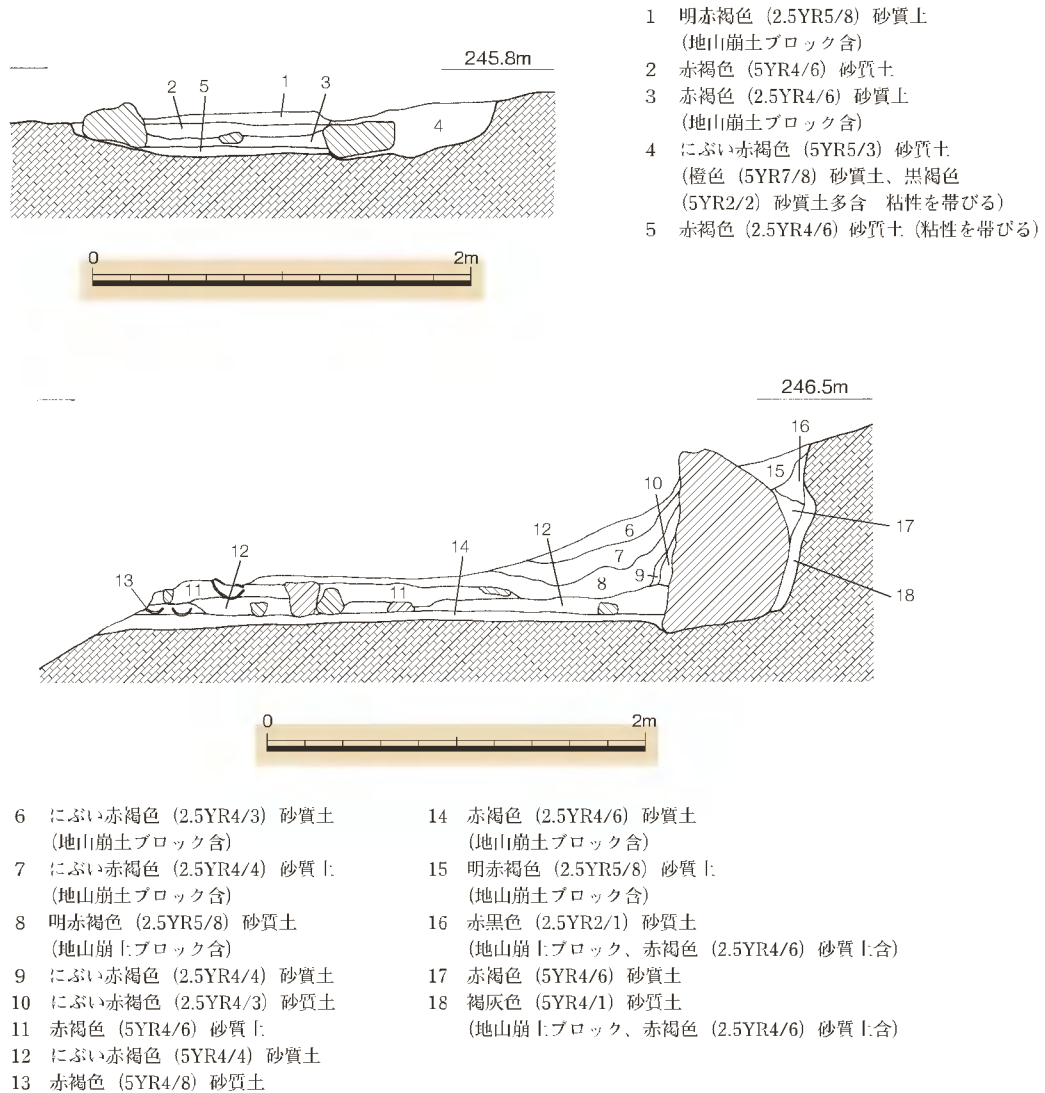
石室内の土層堆積状況をみると、長軸断面図の第1～9層、短軸断面図の第1～3層は、石室内流入土である。長軸断面図の第14層、短軸断面図の第5層は床面の貼り土と考えられ、厚さは4～8cmを測る。なお、平面的に木棺痕跡を確認することはできなかった。



第539図 今岡12号墳石室 (1/40)

石室の残存状況を見ると、奥壁は完存であり、西側壁は南側の削平部分を除く基底石が確認された。東側壁は奥壁側のみ2段目の石材が残存しており、南側の削平部分と一部の攪乱部分を除く箇所では基底石が認められた。天井石は全損しており、石室の上部構造の詳細は不明である。

奥壁は幅102cm、奥行70cm、高さ95cm程度の大形の一枚石を使用している。その配置は、墓壇の北辺中央付近ではなく、北西隅付近に奥壁と掘り方の法面が密着するように置かれている。その結果、石室の中心長軸は墓壇の中心長軸よりも約50cm西側に偏っている。基底石は東、西壁側ともに一直線であるが、石室構築のための作業空間が必要であったからか、東西壁から掘り方の距離は、西壁側が最大幅8cm、東壁側が最大幅85cmを測る。また、西側壁は奥壁前面から順に掘り方の法面に密着させて石材が置かれているのに対し、東側壁は、奥壁側面から順に奥壁幅に規制されるように置かれており、ここから石積みの作業手順が読み取れる。



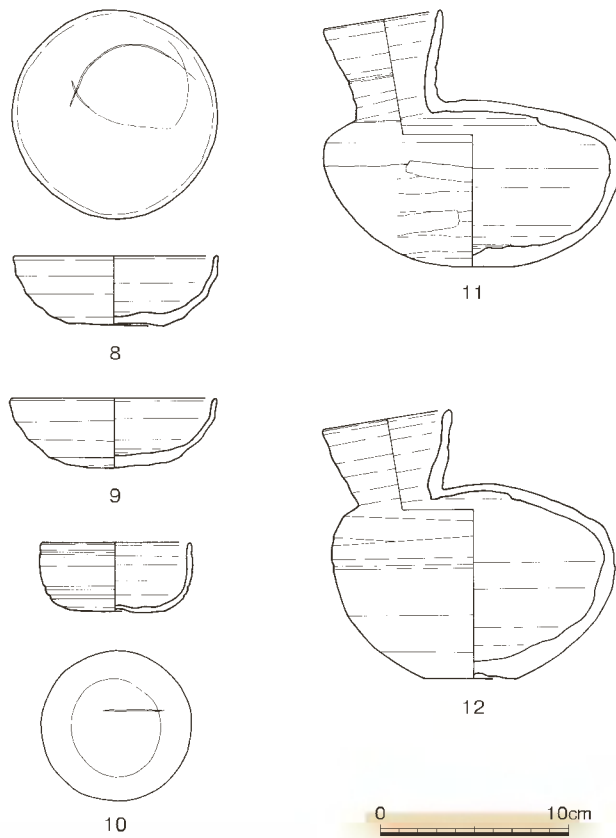
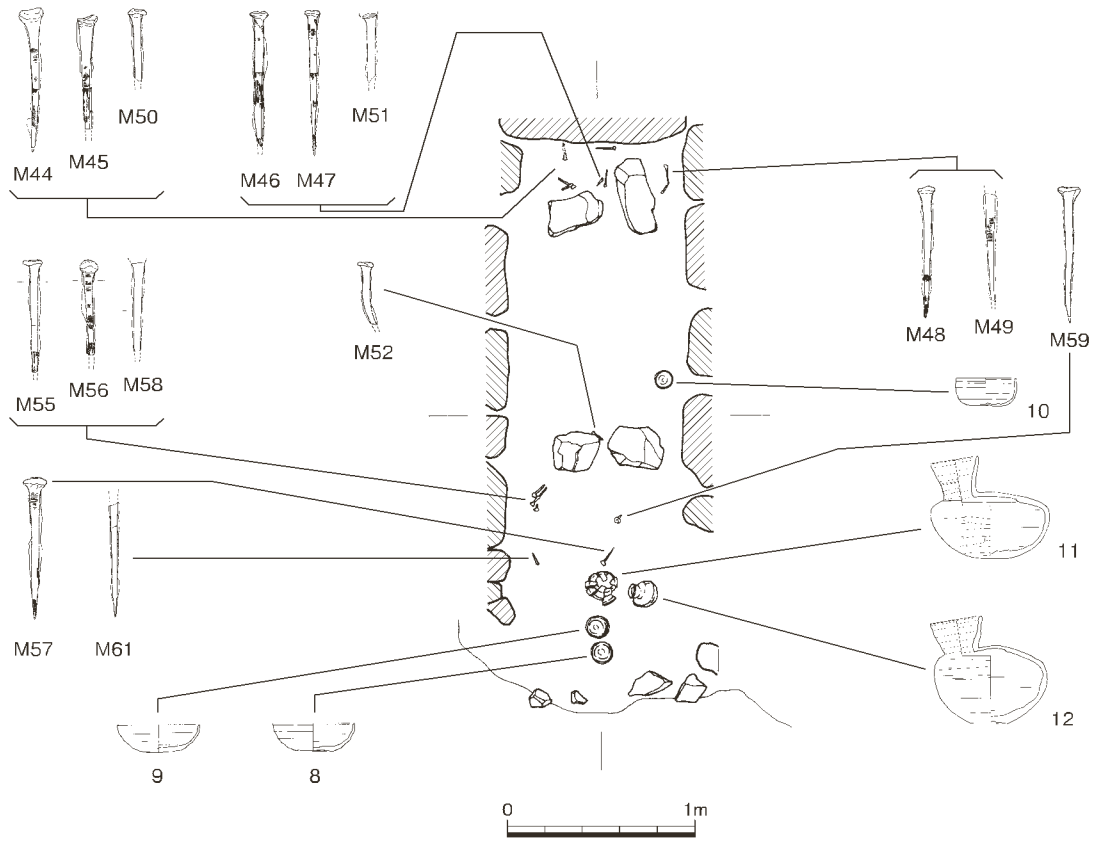
第540図 今岡12号墳石室土層断面 (1/40)

基底石は扁平な石材を横積みを使用している。しかし、西側壁の奥壁から6石目は石材が縦長に置かれ、開口部側は小石材が用いられる。東側壁は判然としないが、開口部側には小石材がみられる。石室の底面では、奥壁前面から約8~32cmと約150~155cmの位置に、2個1対で水平に据えられた棺台を確認した。棺台間は長軸で168cm、短軸で58cm程度を測る。棺台も西側壁の奥壁から6石目より内側に収まっており、この内、外側が埋葬空間の境界であったと思われる。(澤山)

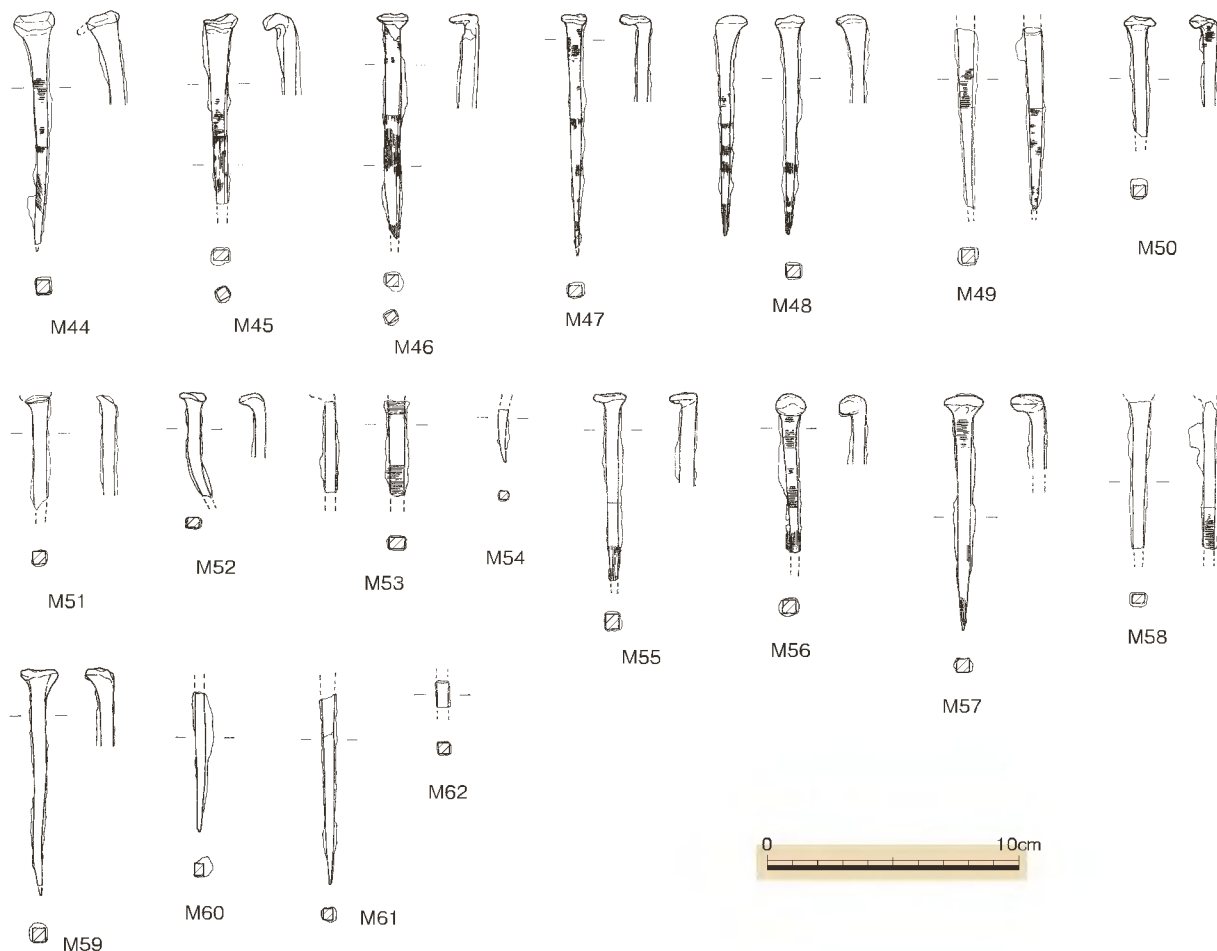
遺物出土状況 (第541図)

石室内からは、完形またはほぼ完形の須恵器杯身8・9、椀10、平瓶11・12の5個体と鉄釘M44~62の19点が出土した。杯身10は想定される木棺の東側板中央付近で確認された。杯身8・9と平瓶11・12は、開口部側の棺台から約55cm外方で出土しており、一部攪乱を受けている平瓶11を除き、それぞれ床面直上で検出した。また、器種差と出土位置から、ある程度の葬送様式が想起される。

鉄釘は北側棺台周辺で11点、南側棺台周辺で8点が出土した。北側では頭部や釘先にまとまりがなく、棺材との関係が判然としない。一方、南側では下段に釘M55、上段に釘M56を用いて西側板と南



第541図 今岡12号墳遺物出土状況 (1/40)・出土遺物① (1/4)



第542図 今岡12号墳出土遺物② (1/3)

小口板を接合し、釘M58を用いて底板と南小口板を下から接合したことが窺えた。また、釘M55、釘M56とほぼ同一方向に釘先が向く釘M57は、東側板と南小口板を接合した可能性が高い。その場合の小口板幅は約50cmと思われる。現状では東西側板と底板を接合した釘は確認できなかった。(澤山) 出土遺物(第541・542図、図版115-2)

すべて石室内から出土している。須恵器杯8の内面には2条の円弧、杯身10の底部には1条の線刻がみられる。鉄釘は棺材として柾目または板目の板を用いたとして、釘表面に認められる木目痕を検討してみる。板の平面から別の板の小口に打ち付けた小口板+側板の場合の木目痕(A類)は、M44~48・55~57があり、板の平面から別の側面に釘を打ち付けた側板+底板の場合の木目痕(B類)は、M49・58がある。板と板の組み合わせがB類の場合と90°ずれる小口板+底板の場合の木目痕(C類)は確認できなかった。このほか、A類またはC類のM50、A~C類の可能性のあるM53、分類不明のM51・59・60がある。なお、M52・54・61・62には木目痕が確認できなかった。こうした結果と先述した釘の出土関係をみると、木棺南西部でその相関性が認められる。なお、A類の木目痕の変換点から頭部までの長さが約3.9cmであることから、棺材の厚さの目安になる。(澤山)

#### 時期

以上の内容を踏まえると、この古墳は7世紀第3四半期頃の時期のものであると思われる。(澤山)

## 6 土墳墓

### 土墳墓 1 (第527・543図、図版113-1)

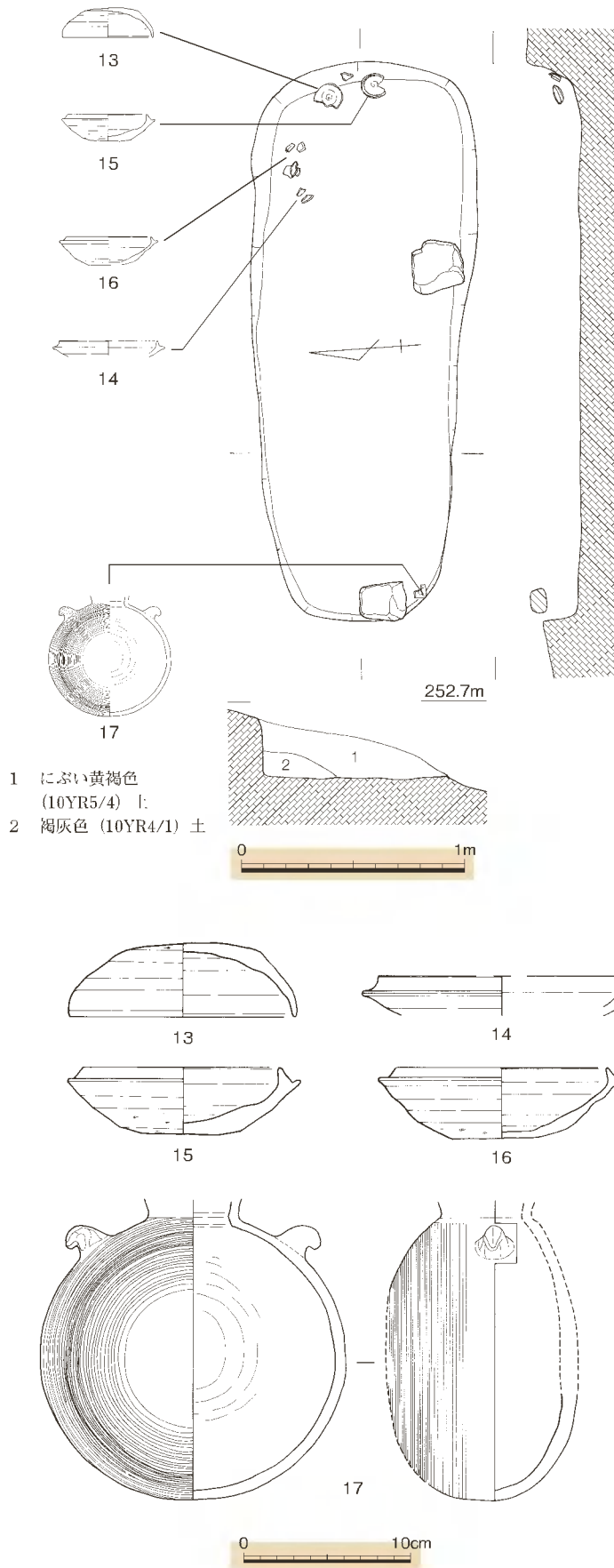
調査区の西寄り尾根の平坦面より北側斜面部にやや下った場所に位置。長軸は、等高線に平行して東西方向を向く。墓墳内には木棺を据え付けるための割り石2個が据えられていた。遺物は杯蓋13と杯身14~16、提瓶17がある。いずれも軟質である。杯類はヘラキリ後に顕著な調整を行わない。杯類が東側小口部に集中することから、東側が頭位であった可能性が考えられる。時期は7世紀前半と考える。(弘田)

### 土墳墓 2 (第527・544図、図版113-2)

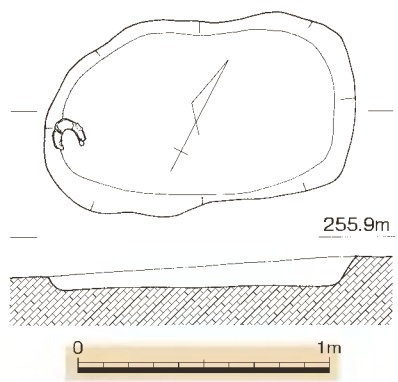
調査区丘陵頂部の平坦部東側から北斜面側にかかる付近に位置する。平面形は楕円形を呈し、断面形は上部が広がる壁面に平らな底部をもつ。遺物は、掘り方の東端床面から比較的残存状態の良い鋤鍬先M63が出土した。刃先の平面形態は「U」字形で、断面形は「Y」字形である。なお、この鉄製品が、遺構を土墳墓として報告する根拠とする。時期は古墳時代中期と思われる。(澤山)

### 土墳墓 3 (第527・545図、図版113-3)

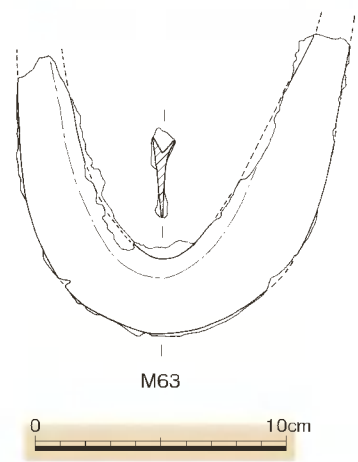
丘陵頂部の東側で、丘陵斜面から平坦部への傾斜変換点に位置している。重機による表土除去の後に鉄刀M64が露出していたことから遺構検出作業を行い、長方形の落ち込みを確認した。ただ、土墳の長軸と直交するようにM64が出土したことから、不明瞭な感はぬぐえない。この土墳の周辺には同規模、同時期と推定できる土墳が数基存在する。時期は古墳時代中期と推測している。(弘田)



第543図 土墳墓 1 (1/30)・出土遺物 (1/4)

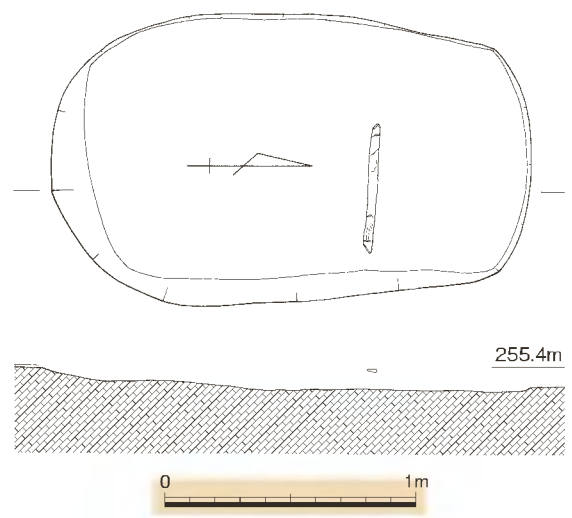


灰褐色 (7.5YR4/2)  
砂質土

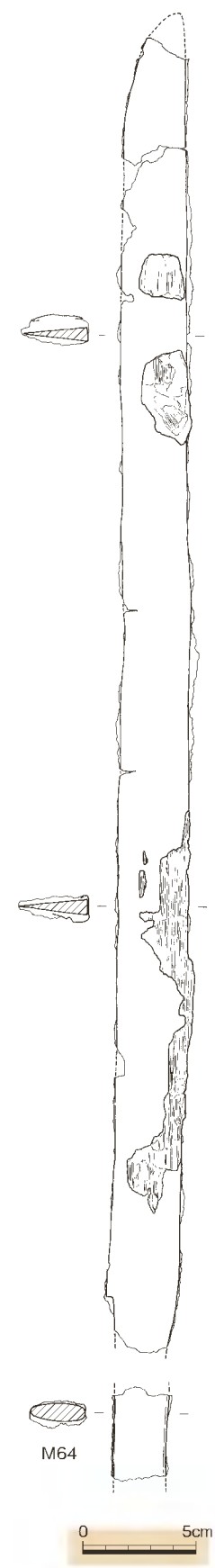


M63

第544図 土壇墓 2 (1/30)・出土遺物 (1/3)



第545図 土壇墓 3 (1/30)・出土遺物 (1/3)



M64

## 第5節 小 結

今岡古墳群には6基の古墳が確認されていたが、鳥取自動車道関連遺跡の発掘調査が実施されて、今岡中山遺跡で2基の古墳（7・8号墳）、今岡D遺跡で4基の古墳（9～12号墳）と3基の土壙墓（土壙墓1～3）が新しく検出された。発掘調査によってその全容が明らかになった古墳や土壙墓を中心に、今岡古墳群を構成する個々の古墳や土壙墓について考えてみたい。

今岡古墳群の古墳で、最も早い段階に築造されたのは10号墳である。今岡D遺跡の丘陵上に検出された古墳で、地形の高い部分に尾根方向と直行する周溝が存在し、巨大な埋葬施設が確認された。埋葬施設は木棺直葬の土壙で、底部の断面形が「U」字形を呈するから、割竹形木棺が使われていたと考える。出土遺物の鉄器は西側に寄せた状態で存在したから、遺体は東側に埋葬されていたと思われる。鉄器の組成や埋葬施設などから、古墳時代中期になるであろう。

進入路の敷設に伴って墳端の確認調査を行った2号墳は、墳丘の中央部が著しく破壊されて円墳なのか方墳なのか判断できなかったが、出土した黒斑のない円筒埴輪の口縁端部に近い破片から、10号墳に近い時期の古墳と推定できる。

同じく進入路の敷設に伴って調査を実施した5号墳は、須恵器の杯身破片と管玉の完形品が出土している。この杯身の破片は、調整手法や形態的特徴から、陶邑編年〔田辺1981〕のMT85型式とTK43型式の中間様相を呈するから、6世紀後半でもやや中葉に近い時期になるであろう。

今岡D遺跡の丘陵尾根上から少し北側へ下がった地点に土壙墓1が存在し、須恵器の提瓶とともに須恵器の杯身と杯蓋が出土した。この須恵器はTK209型式の特徴を有するもので、7世紀前半の時期と考える。

今岡D遺跡の南端部の緩斜面で検出した12号墳は、基底部の石だけが残存した小規模な横穴式石室の古墳である。出土した須恵器は5点で、器種が杯身と平瓶だけであった。杯身の形態には、口縁部が開いて径が大きいものと口縁部が直立して径が小さいものがあるが、同時期の個体差なのか新旧のものが混在しているのか、把握するには至らなかった。2点の平瓶は、どちらも体部が丸くなっている。これらの須恵器は、口縁部が直立して径が小さい杯身を除いて、TK217型式に酷似するから、7世紀中葉の時期に属するであろう。

今岡D遺跡の東端部に存在した11号墳は、片方の壁面が破壊されて残存しないが、袖のない横穴式石室と考える。出土した須恵器は、杯身、高台付長頸壺、提瓶である。杯身は、底部と体部の境が屈曲して器高が低くなっている。高台付長頸壺は、体部の上位が屈曲して肩が張った形態になっている。これらの須恵器の形態的特徴はTK217型式の新相もので、7世紀中葉の時期と思われる。

今岡中山遺跡の斜面に検出した7号墳は、地形の高い部分に深く掘られた周溝が存在した横穴式石室の古墳である。時期を知る遺物は、周溝内から出土した須恵器の甕だけである。この須恵器の甕はあまり見かけない形態で、7世紀代後半の時期と推定されるものの、詳細は不明である。

以上のように今岡古墳群には、5世紀代から7世紀中葉にかけての時期の古墳や土壙墓が存在しているのである。

(福田)

### 参考文献

田辺昭三『須恵器大成』角川書店 1981



## 第13章 高岡遺跡

### 第1節 遺跡の概要

高岡遺跡は、吉野川左岸の山塊から南西に向かって舌状に張り出した丘陵に所在する。丘陵の南側は急峻な斜面で、谷底を宮本川が西流して吉野川に合流している。

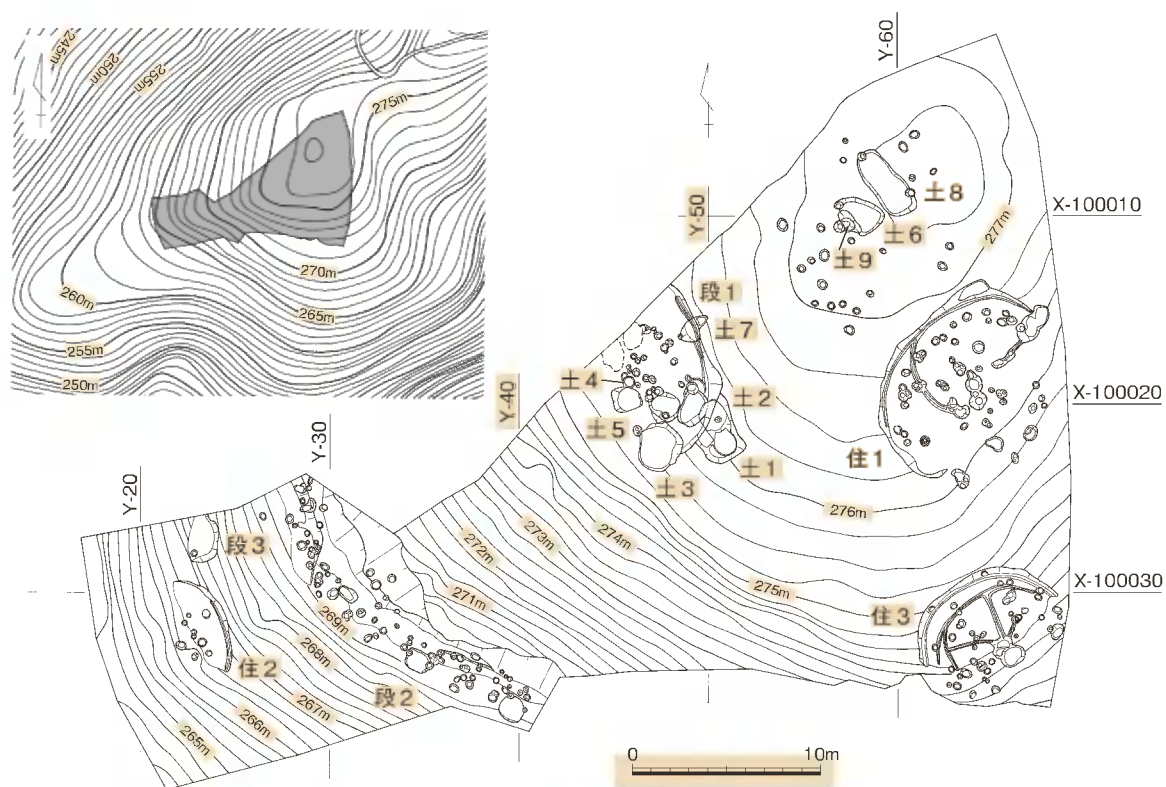
当初は遺跡の存在が知られていなかったが、現地踏査を行ったところ、斜面部の畑地に弥生土器の細片が散布していたので、一次調査を実施して遺構の有無を確認することになった。その結果、丘陵の頂部周辺だけでなく、急勾配の斜面部にも竪穴住居や段状遺構と複数の土壇を検出し、比較的多くの弥生土器が出土したため、丘陵の頂部から斜面にかけての範囲を全面調査することにした。

高岡遺跡の調査範囲の北側には未買収地が残っていたので、発掘調査の実施計画では最終年度の最後に調査を行う予定になっていた。ところが、宮本川や智頭急行線の線路を跨ぐ橋梁工事を急ぐことになり、調査計画を変更して未買収地を除く南側の調査を優先することになった。

当時は新年度に入って間がない時期で、穴が辻古墳と今岡D遺跡の調査に2つの班が分かれて着手していたが、1つの班の男性すべての作業員と3名の調査員を高岡遺跡へ派遣することにした。

未買収地の範囲が不明確だったので線引きをしてもらい、表土除去作業は工事用道路を建設していた業者の重機を使用した。

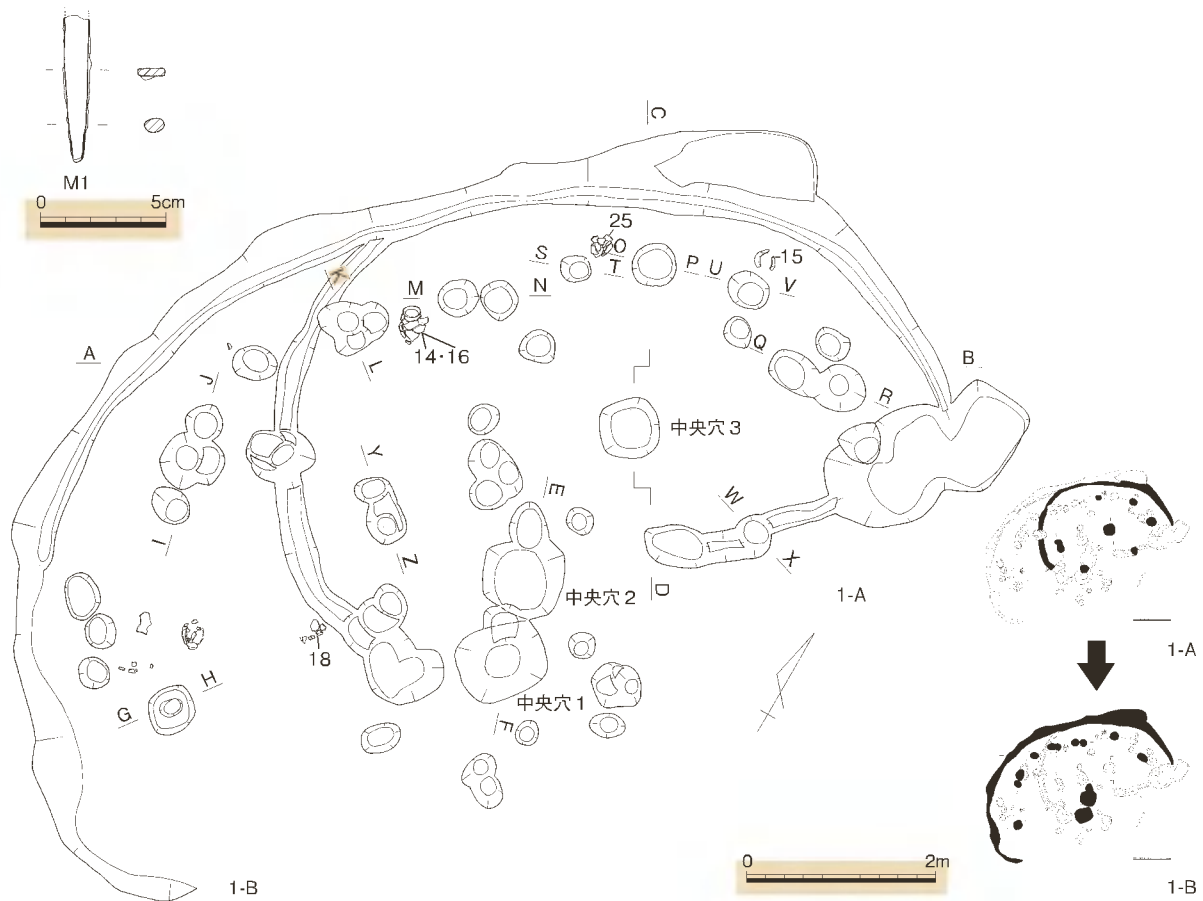
(福田)



第546図 遺構全体図 (1/400)

## 第2節 弥生時代の遺構・遺物

## 1 竪穴住居



第547図 竪穴住居 1 (1/80)・出土遺物 (1/3)

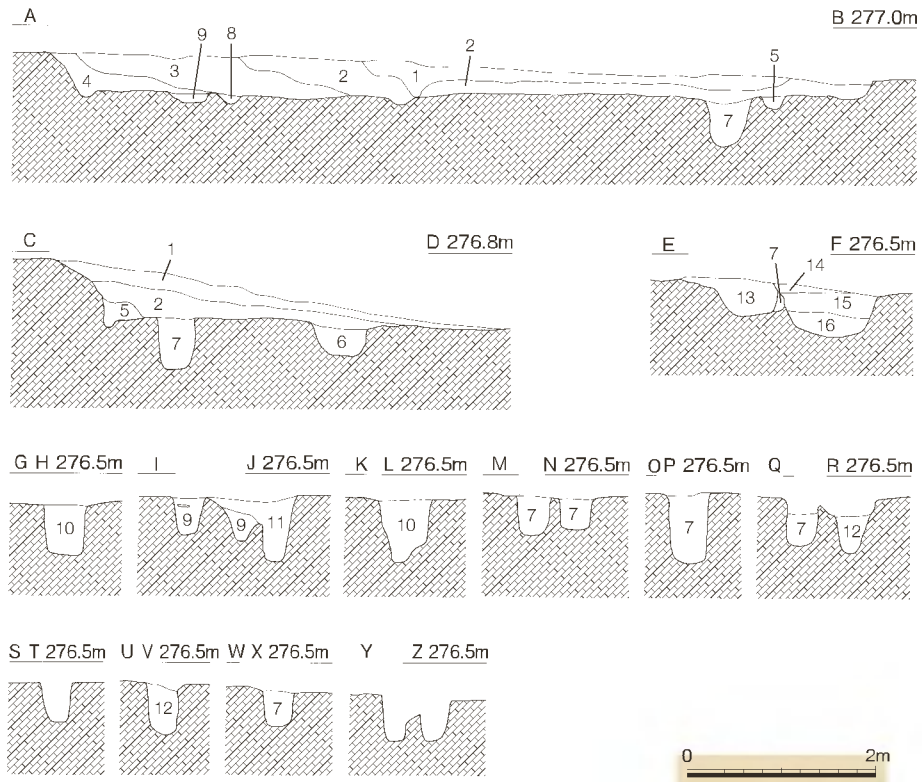
## 竪穴住居 1 (第546～549図、図版117-2・118-1)

調査区北東の尾根頂部はやや平坦な面となり、それより南側は、標高275.0mあたりまでが緩斜面となる。竪穴住居 1 は、その尾根頂部の平坦面からわずかに下がった所に位置する。

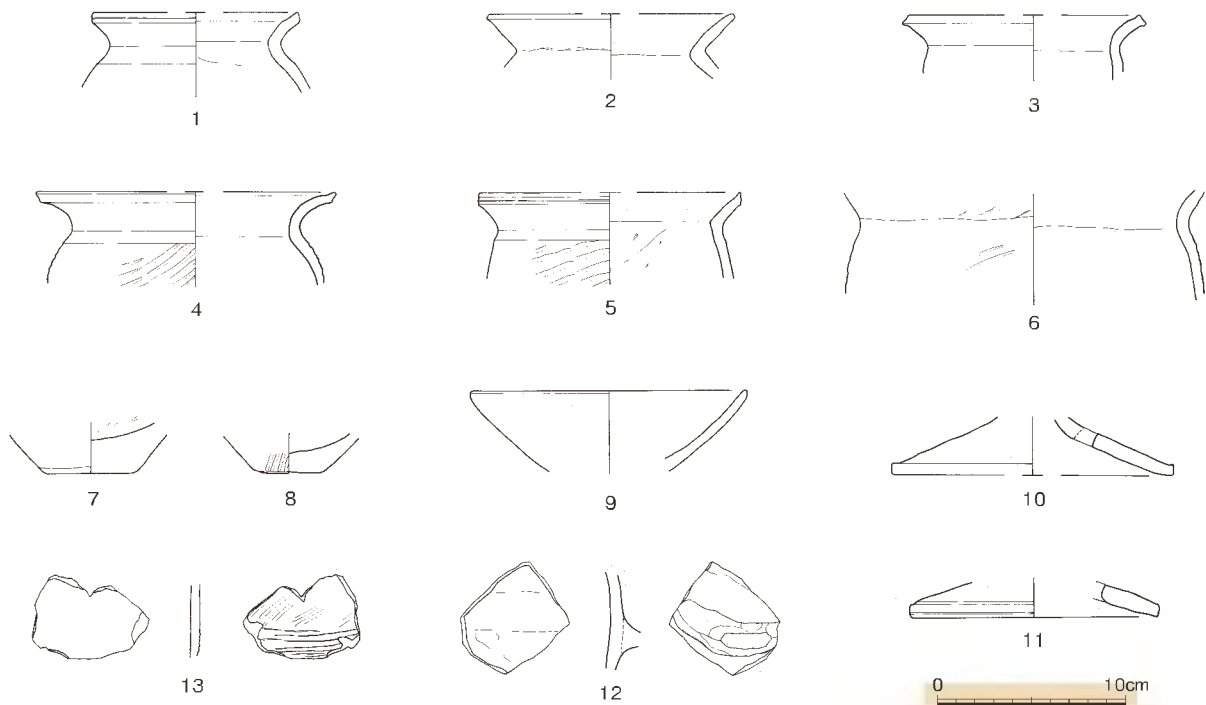
竪穴住居 1 の埋土は、地山の流入とみられる黄灰色とにぶい黄橙色の砂質土であり、地山との判別が難しい状況であった。

この住居は、柱穴の数や配置、2条ある壁体溝からみて、2回以上の建て替えが考えられる。壁体溝によって画された住居輪郭の長軸ライン上には、中央穴1～3が存在する。ここでは新旧2段階に分けて、中央穴3とそれに伴う柱穴、壁体溝を住居1-A（古段階）、中央穴1・2に伴う柱穴、壁体溝を住居1-B（新段階）とする。両住居の床面のレベル差はほとんどなく、ほぼ水平であった。

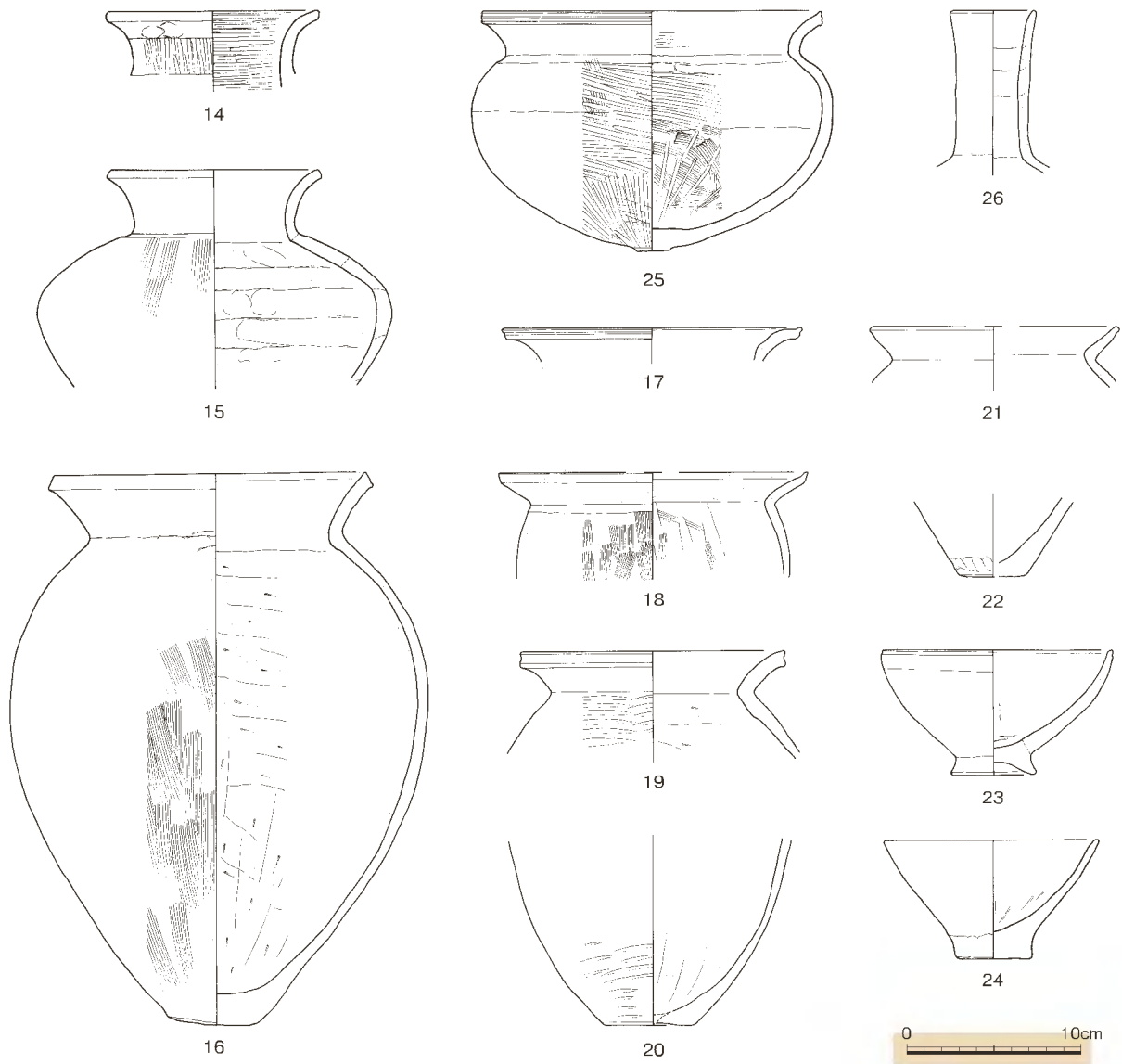
また、ともに平面形は半月形を呈する。これは円形住居の斜面下方部を盛り土によって形成していたものが流出したと考えられるが、当該箇所には柱穴が存在しないことから、当初より平面半月形を呈していたと考えた方がよいであろう。



- |                              |                         |
|------------------------------|-------------------------|
| 1 灰黄褐色 (10YR4/2) 砂質土         | 9 灰黄褐色 (10YR6/2) 砂質土    |
| 2 にぶい黄褐色 (10YR5/3) 砂質土       | 10 灰黄褐色 (10YR5/2) 砂質土   |
| 3 にぶい黄褐色 (10YR6/3) 砂質土       | 11 にぶい黄褐色 (10YR5/3) 砂質土 |
| 4 灰黄褐色 (10YR6/2) 砂質土         | 12 灰褐色 (5YR5/2) 砂質土     |
| 5 にぶい黄褐色 (10YR6/4) 砂質土       | 13 にぶい黄褐色 (10YR4/3) 砂質土 |
| 6 にぶい橙色 (5YR7/4) 砂質土         | 14 褐灰色 (7.5YR5/1) 砂質土   |
| 7 灰黄褐色 (10YR4/2) 砂質土 (地山塊多含) | 15 黄灰色 (2.5Y5/1) 砂質土    |
| 8 褐灰色 (10YR5/1) 砂質土          | 16 暗灰黄色 (2.5Y5/2) 砂質土   |



第548図 竪穴住居1断面 (1/80)・埋土出土遺物 (1/4)

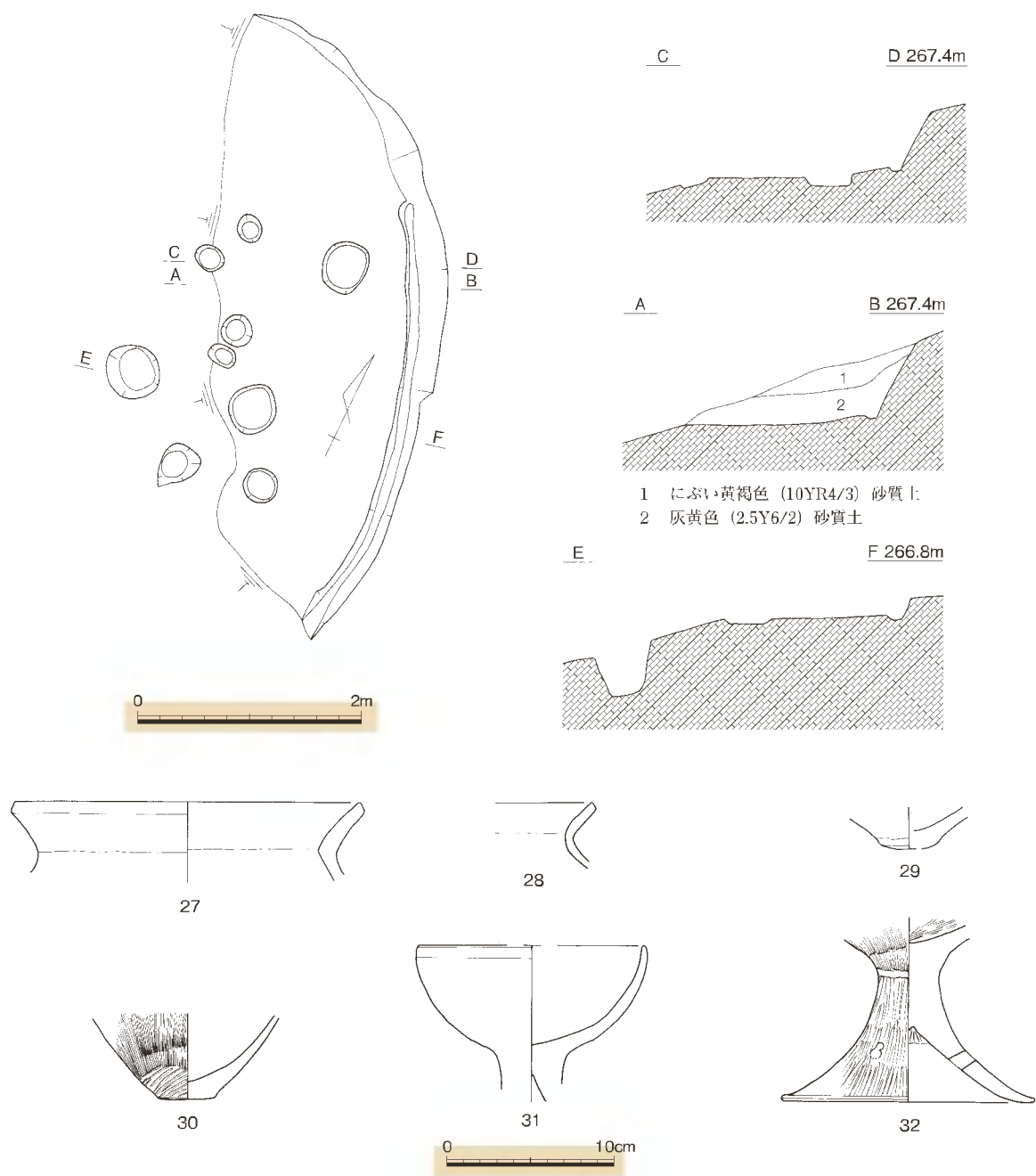


第549図 竪穴住居1床面出土遺物(1/4)

竪穴住居1-Aの規模は、長軸で718cm、短軸方向は掘り方両端を結ぶ線と直交するライン上約400cmを測る。中央穴3は、その内外に炭や焼土面を伴わず、埋土中からは数点の土器片が出土している。この住居の柱穴は、P1～6が考えられる。埋土は灰黄褐色を呈し、1-Bの柱穴より掘り込みは浅い。

竪穴住居1-Bは、長軸1,044cm、短軸560cmを測る。中央穴は1が2を切ってつくられているが、3と同様炭や焼土面を伴わない。中央穴2からは、甕口縁部17、同底部22、小形鉢23が出土しているほか、壺の破片が住居床面から出土した15と接合している。

出土遺物のうち、壺14・15・26、甕16～22、鉢23～25は、住居の床面から、鉢M1は中央穴1からの出土である。また、埋土中より出土した12・13は甌の把手と思われる。播磨地方の影響を受けた土器群とみられる。口縁部の形態的特徴から弥生時代後期後葉の時期と考えたい。(弘田)

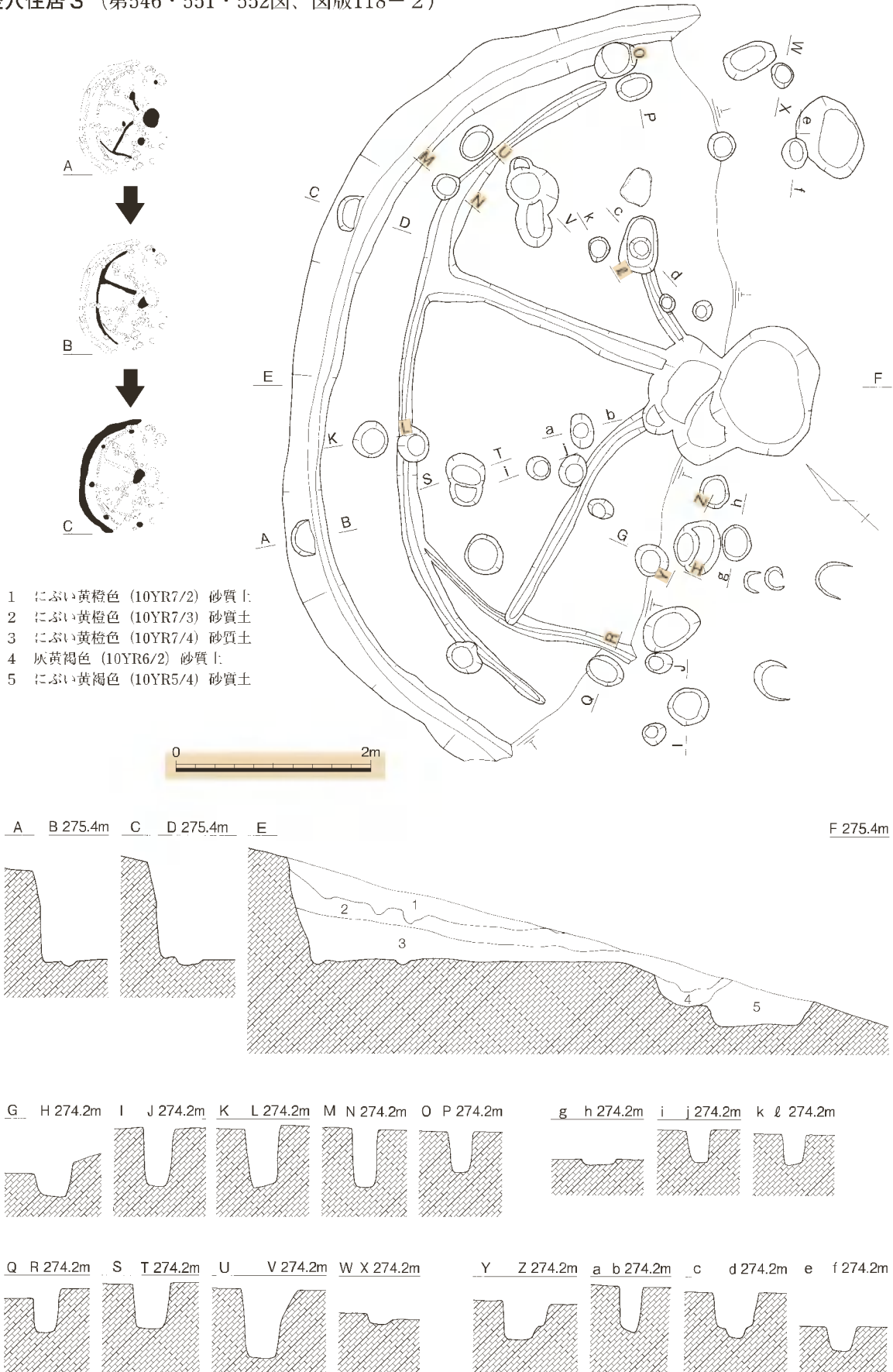


第550図 竪穴住居 2 (1/60)・出土遺物 (1/4)

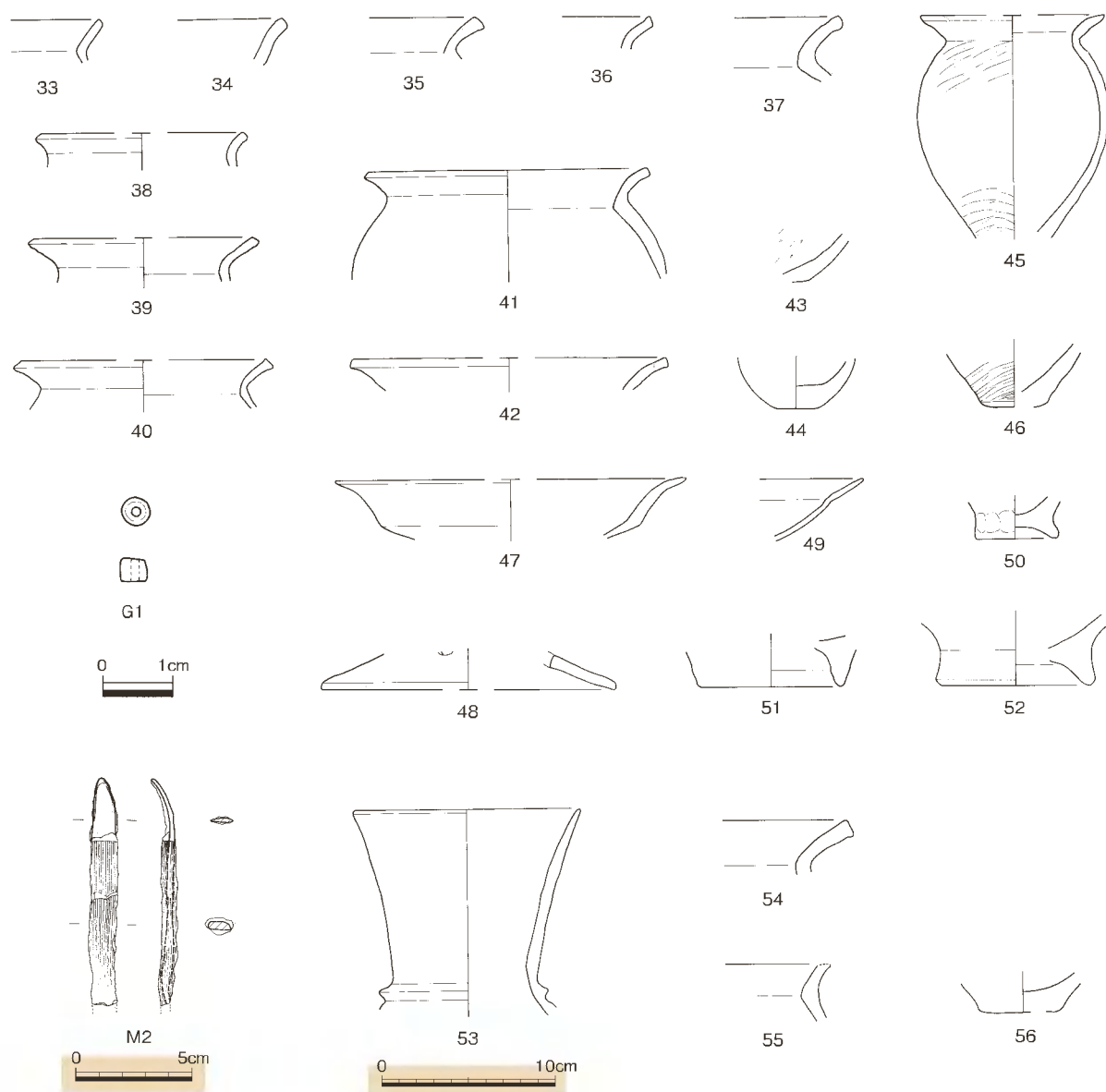
竪穴住居 2 (第546・550図、図版117-3)

調査範囲の南西部に検出した竪穴住居であるが、比較的急な斜面に所在したため、地形の低い西側は削平されて残存しなかった。最も高い壁体は床面から約60cmを測り、南東側には断面が「U」字形を呈する浅い壁体溝が認められた。この竪穴住居は4本柱と推定され、E-F断面の西側には平面形が楕円形に近い形態の中央穴が存在した。その中央穴は本来の床面から約70cmと深く、断面形はほぼ「U」字形になっていた。床面には2個の柱穴を確認したが、平面形は円形または楕円形に似た形態で、柱穴間の距離は約220cmであった。内部にはにぶい黄褐色砂質土と灰黄色砂質土が堆積し、弥生時代後期後葉の時期と思われる甕や高杯の破片27~32が、少量ではあるが出土した。(福田)

竪穴住居3 (第546・551・552図、図版118-2)



第551図 竪穴住居3 (1/60)



第552図 竪穴住居3出土遺物 (1/4・1/3・1/1)

竪穴住居3は調査範囲の南東端部で検出した住居で、急斜面に位置したため、地形の低い南側は削平されて残存しなかった。表土を除去して、地山面で遺構検出作業を行っていたところ、弧状を描いた炭化物を含むにぶい色調の部分が現れ、中央穴と推定される楕円形の穴も確認されたので、この地点は竪穴住居になると判断した。中心部に土層断面観察用の土手（E-F）を設定して内部を掘り下げた結果、3軒の竪穴住居が重なりあって残存することが明らかになり、床面を拡張しながら順番に規模の小さいものから大きいものへと変遷していた。当初に構築された小規模な竪穴住居は、4個の柱穴と西側に壁体溝の一部が残存した。中央穴は底部のレベルが最も低いもので、柱穴や壁体溝を結ぶ2条の溝が認められた。中間規模の竪穴住居は、4個の柱穴と棟持柱の3個の柱穴とともに壁体溝があり、中央穴と壁体溝を結ぶ1条の溝も検出した。大規模で最後に構築された竪穴住居は、5個の柱穴と壁体および壁体溝が確認され、壁体の2か所に柱穴状の穴が存在した。出土遺物はこの竪穴住居に伴うもので、鉈M2とガラス小玉G1を含む弥生時代後期後葉の土器片33~56がある。（福田）

## 2 段状遺構

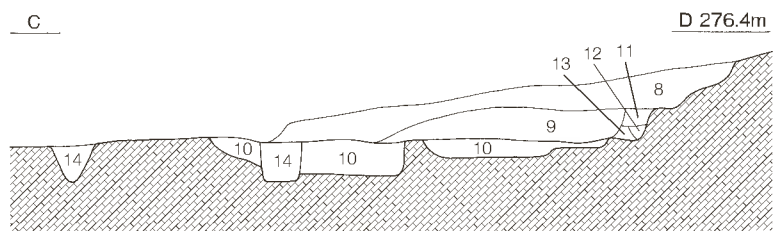
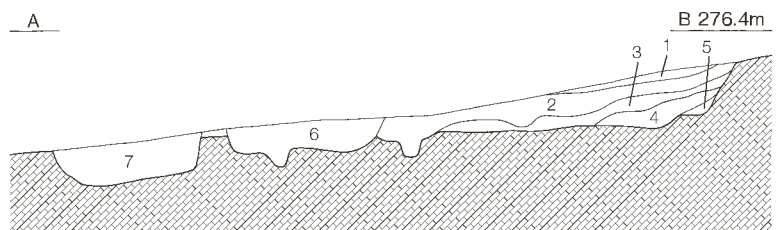
### 段状遺構 1 (第546・553 ・554図、図版119-1)

調査区のほぼ中央付近に位置するが、北側の部分は調査区外になっていたため、調査することができなかった。丘陵上の平坦面から斜面へ移る地点に存在し、周辺には数基の土壌が検出された。

床面には柱穴を確認したが、その配置に規則性がなく、竪穴住居になるとは考えられなかった。

段状遺構1の北東側に面した床面には、少なくとも2条の溝が存在したので、規模の異なる段状遺構が重複すると考える。

周辺の土壌とこの段状遺構の切り合いを精査したところ、段状遺構が土壌1と土壌2を削平していた。土壌7は段状遺構の貼り床を除去して検出した。土壌3～5は、こ

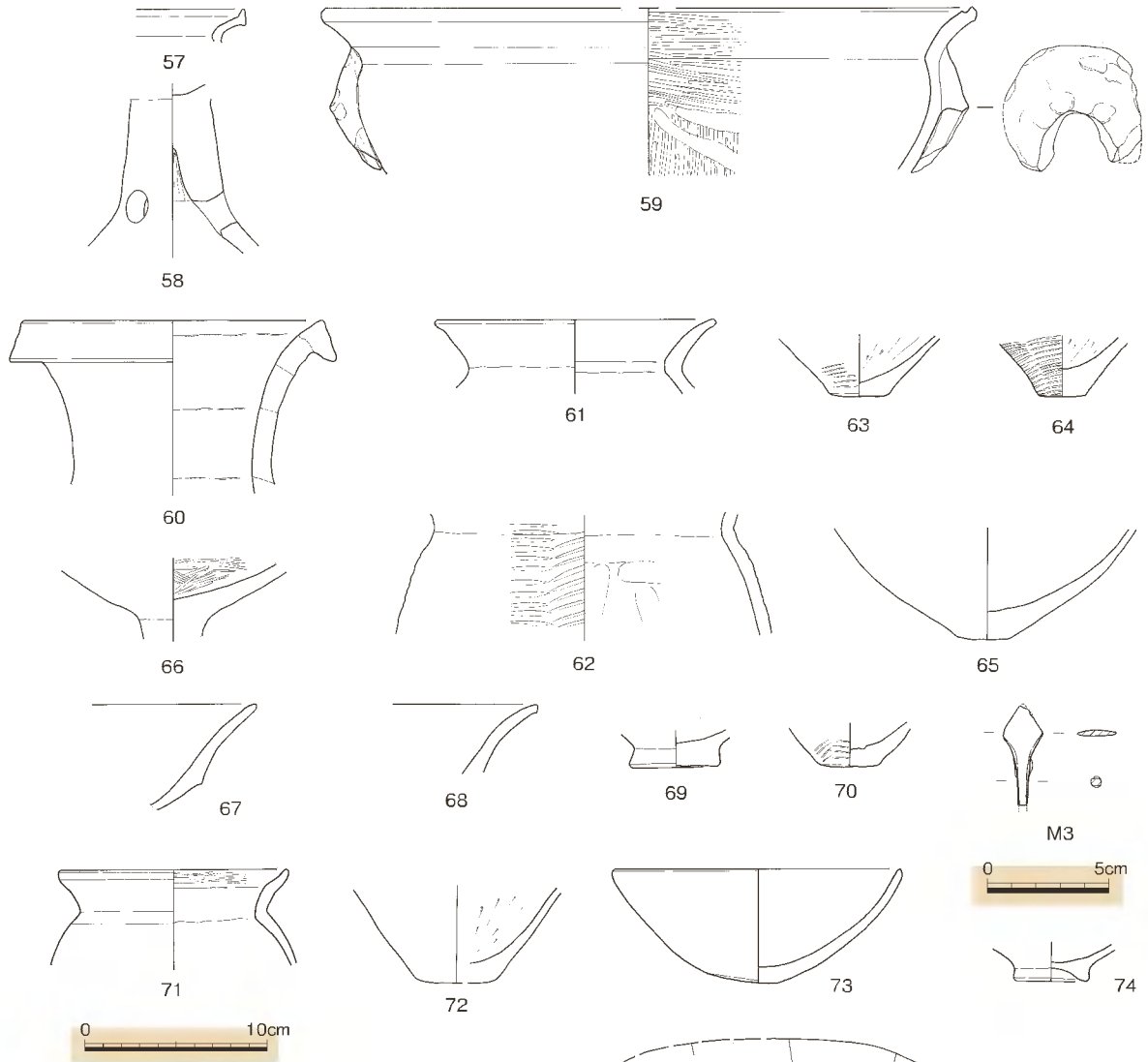


- 1 暗灰黄色 (2.5Y5/2) 砂質土
- 2 灰黄色 (2.5Y6/2) 砂質土
- 3 褐灰色 (7.5YR5/1) 砂質土
- 4 灰褐色 (7.5YR6/2) 砂質土
- 5 灰褐色 (7.5YR5/2) 砂質土
- 6 黄灰色 (2.5Y6/1) 砂質土
- 7 暗褐色 (10YR3/3) 砂質土
- 8 にぶい橙色 (2.5YR6/3) 砂質土
- 9 灰黄色 (2.5Y7/2) 砂質土
- 10 橙色 (5YR7/6) 砂質土
- 11 にぶい橙色 (7.5YR7/4) 砂質土
- 12 灰オリーブ色 (5Y6/2) 砂質土
- 13 オリーブ黄色 (5Y6/3) 砂質土
- 14 にぶい黄褐色 (10YR4/3) 砂質土



第553図 段状遺構 1 (1/60)

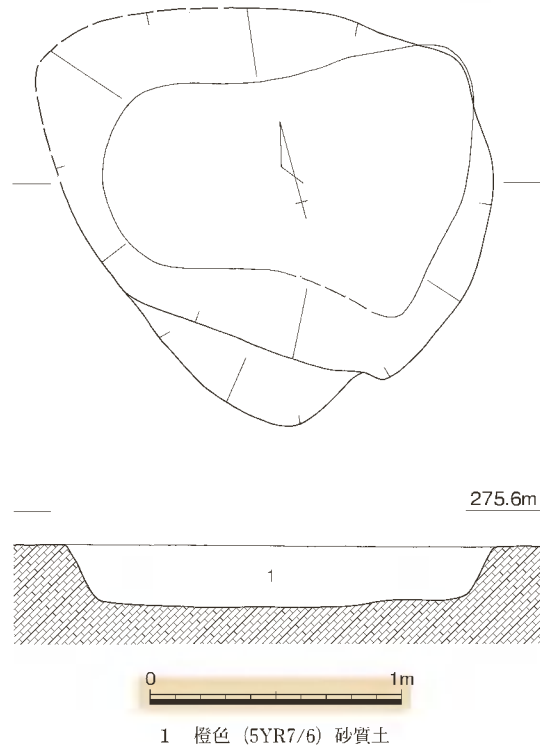




の段状遺構を切っていた。

この段状遺構に伴う土壌は、長径160cm以上で北西側が柱穴状のピットに削平されていた。平面形は不整形で、部分的に袋状を呈していた。底部は中央が緩やかに湾曲し、検出面からの深さは25cmを測り、内部には橙色の砂質土が堆積していた。

段状遺構1から出土した遺物として、器種が豊富で比較的多くの弥生土器と鉄鏃M3がある。これらの土器の調整手法や形態的特徴から、弥生時代後期後葉の時期になると考える。ちなみに外面にタタキ痕跡を有する甕は、播磨地方で多く見かける土器である。(福田)



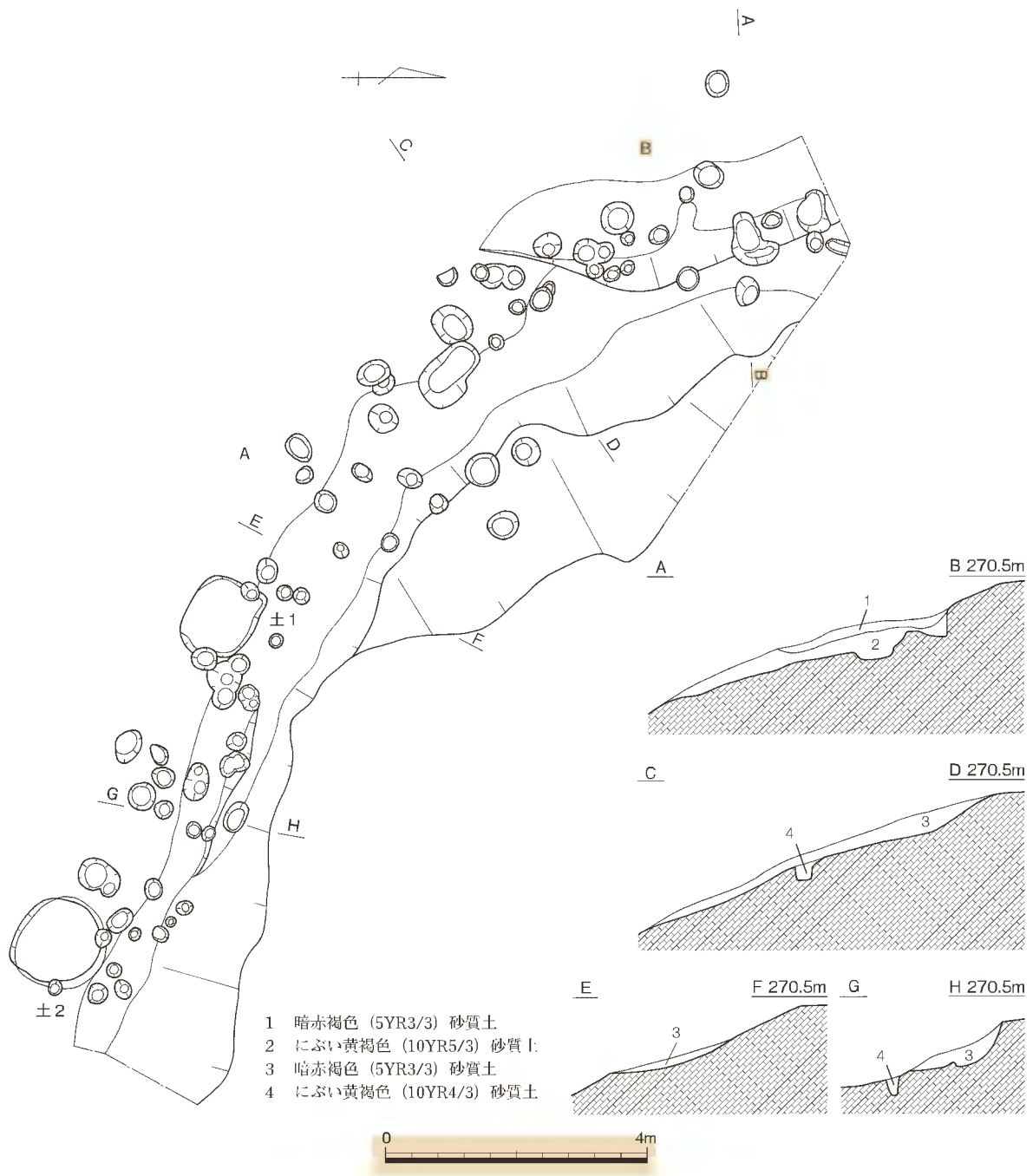
第554図 段状遺構1出土遺物 (1/4・1/3)・土壌 (1/30)

段状遺構 2 (第546・555～558図、図版119-2)

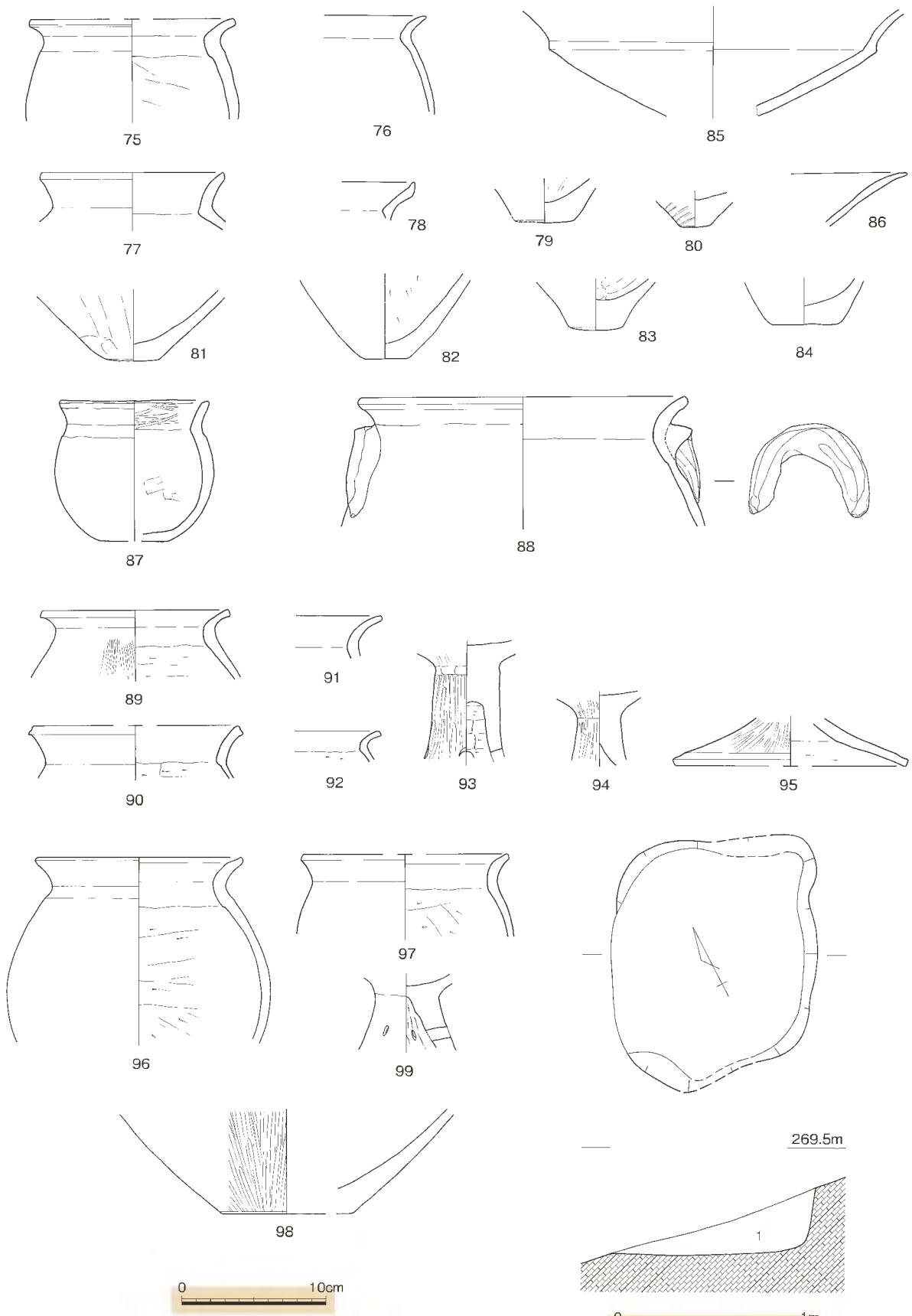
調査区内の丘陵頂部平坦面から南西に延びる尾根筋は、調査区西端部の外においてやや広い平坦面をなす。段状遺構 2はその中間斜面にあり、調査前の地形においても、標高270.0～271.0mの間において緩斜面になっていた箇所で、確認調査時に段状遺構と認識されていた。

調査当初は、東西2面の段状遺構が切り合っていると見て検出作業を行ったが、平面的に切り合いは認められず、全体にわたって同一土層が堆積していることから、1つの遺構としてとらえている。

段の幅は100～150cmで、等高線沿いに長さ18mにわたって検出した。調査区の南側は急峻な崖面になっており、造成時の状況は詳らかではないが、北側は未調査部分に続くと思われる。



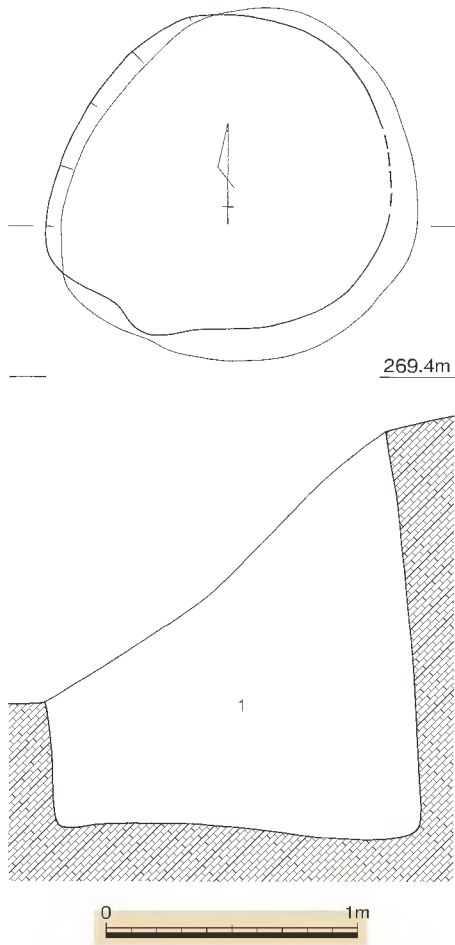
第555図 段状遺構 2 (1/100)



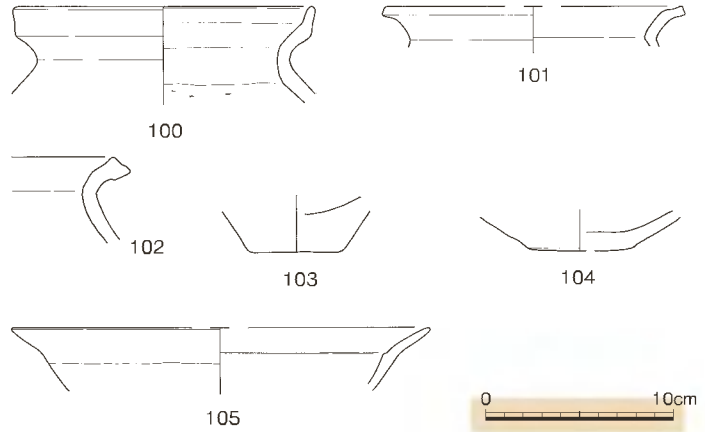
第556図 段状遺構2出土遺物 (1/4)

1 にふい黄褐色 (10YR4/3) 砂質土

第557図 段状遺構2土壌1 (1/30)



第558図 段状遺構2土壇2 (1/30)  
・出土遺物 (1/4)



床面は平坦ではなく、全体に凹凸が見られかつ斜面下方、南に向かって緩やかに傾斜する。壁体溝は存在しなかった。柱穴は、この平坦面に沿って70個ほど検出しているが、柱列としてのまとまりには乏しい。

この平坦面上において、2基の土壇を確認している。土壇1は、平面形が長方形を呈し、壁は垂直に立つ。遺物は、存在しなかった。土壇2は、段状遺構の床面において検出した袋状土壇である。時期は弥生時代後期後葉であり、段状遺構2に先行する可能性もある。

出土遺物には、弥生土器の甕75～84・89～92、高杯85・86・93～95、鉢87・88がある。96～98はピットより出土している。弥生時代後期後葉の時期と思われる土器を含む。

段状遺構の時期自体は、弥生時代後期後葉と思われる。性格は、一般的な段状遺構ではなく、犬走り状あるいは、斜面下方が流出した溝状の様相を呈していた。(弘田)

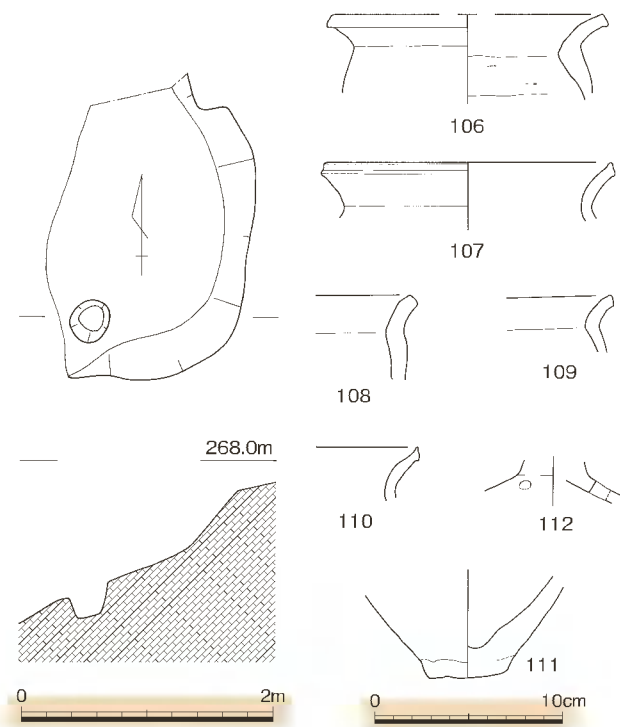
段状遺構3 (第546・559図)

竪穴住居2の北に接する段状遺構で、斜面を「コ」の字状の平坦面に造成している。さらに北側の未調査部分に広がるとみられる。

柱穴が1個検出できているが、壁体溝や焼土面は認められなかった。

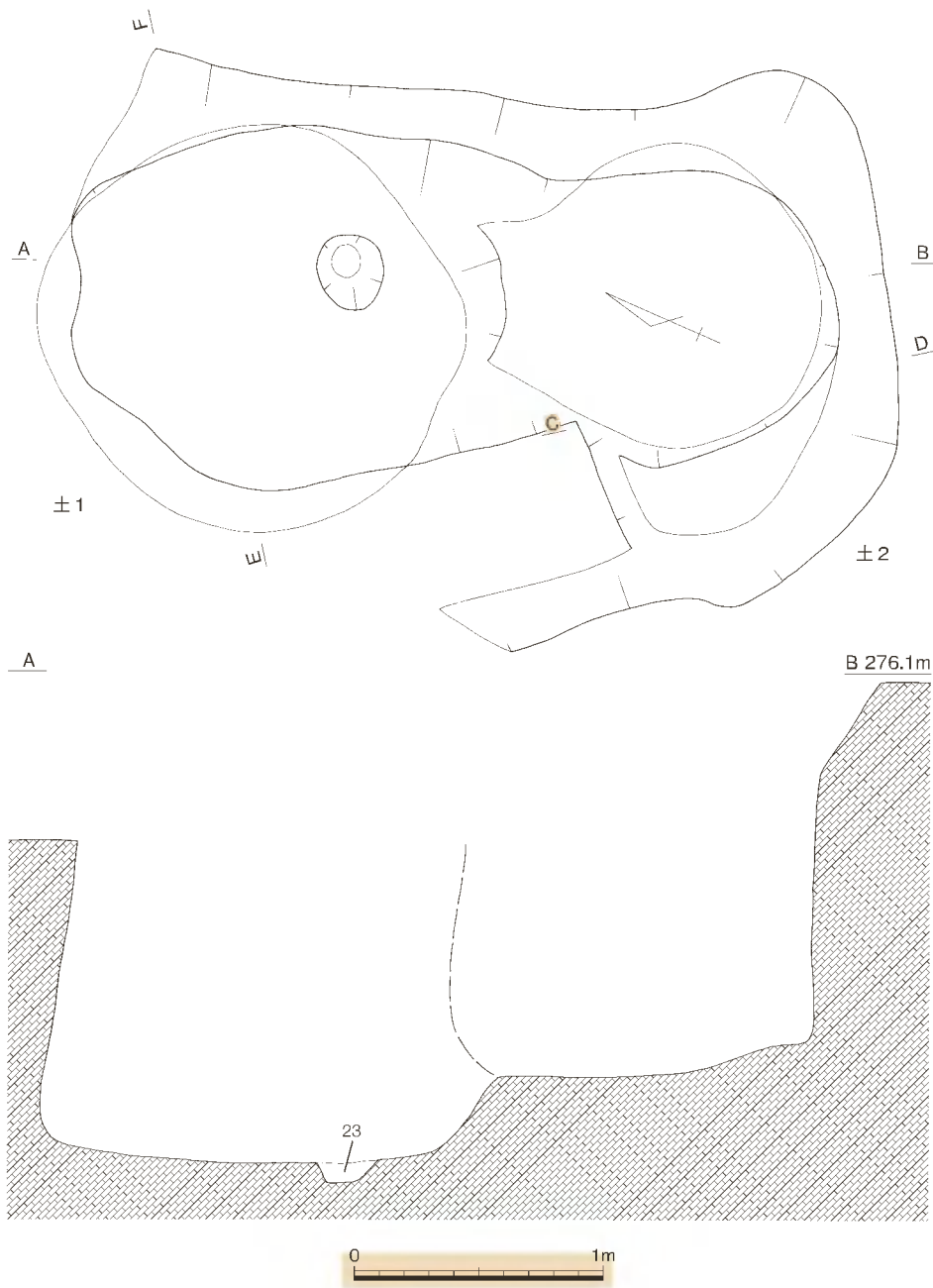
出土遺物には、弥生土器の甕106～111と短脚の高杯112がある。

時期は、弥生時代後期後葉と考える。(弘田)



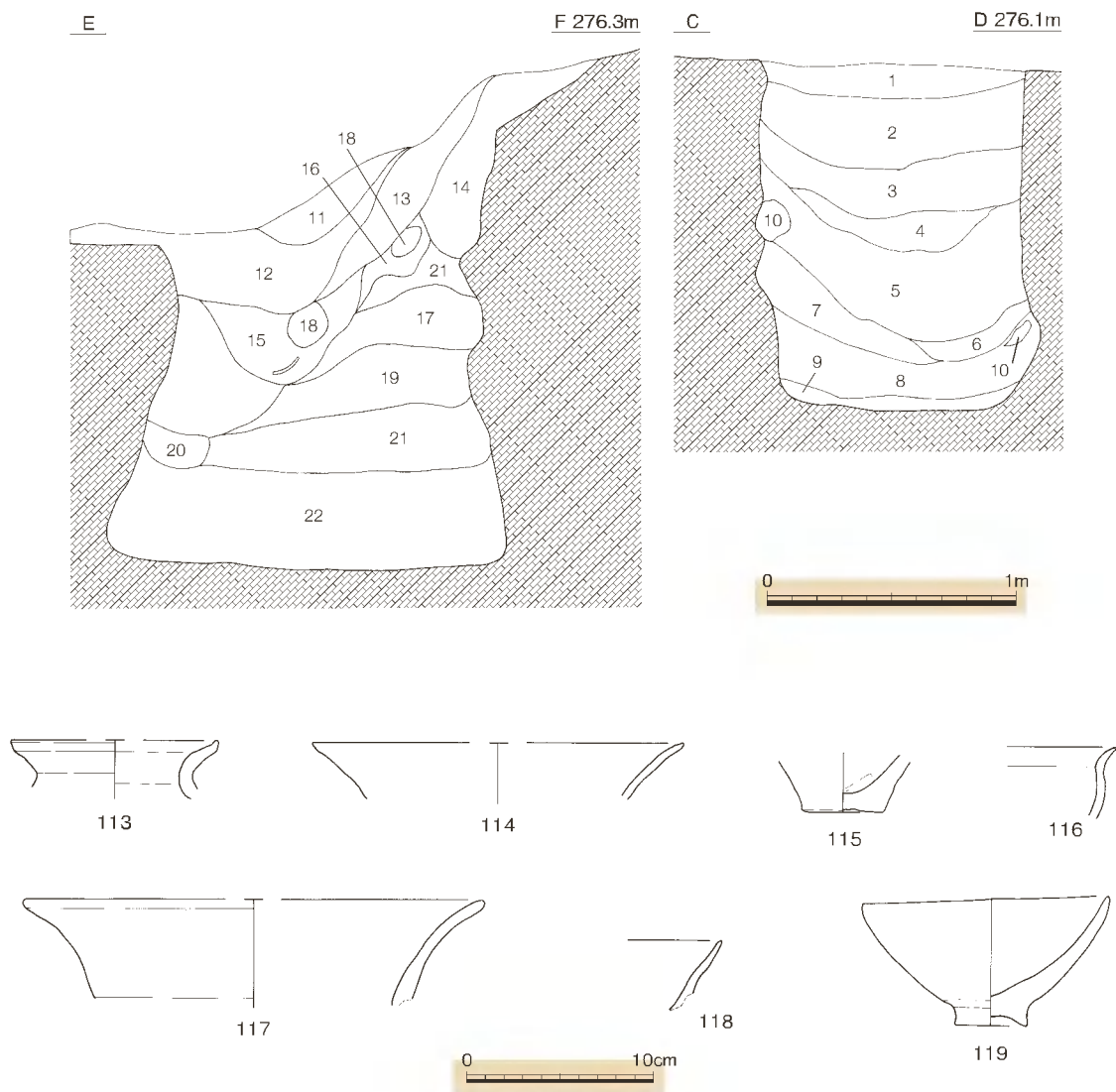
第559図 段状遺構3 (1/60)・出土遺物 (1/4)

3 土壌



- |                                |                                |
|--------------------------------|--------------------------------|
| 1 灰黄褐色 (10YR6/2) 砂質土           | 13 にぶい橙色 (5YR7/4) 砂質土          |
| 2 にぶい黄橙色 (10YR7/3) 砂質土 (炭少含)   | 14 にぶい橙色 (7.5YR7/4) 砂質土 (炭少含)  |
| 3 にぶい黄色 (2.5Y6/3) 砂質土 (炭少含)    | 15 にぶい黄橙色 (10YR7/3) 砂質土 (炭少含)  |
| 4 にぶい黄橙色 (10YR7/2) 砂質土         | 16 にぶい橙色 (7.5YR6/4) 砂質土        |
| 5 灰黄色 (2.5Y7/2) 砂質土            | 17 にぶい橙色 (7.5YR6/3) 砂質土        |
| 6 にぶい橙色 (7.5YR7/4) 砂質土         | 18 にぶい黄橙色 (10YR6/3) 砂質土 (炭極少含) |
| 7 明褐色 (7.5YR7/2) 砂質土           | 19 にぶい橙色 (5YR6/3) 砂質土          |
| 8 浅黄色 (2.5Y7/4) 砂質土            | 20 灰黄褐色 (10YR6/2) 砂質土          |
| 9 にぶい黄橙色 (10YR6/3) 砂質土         | 21 明オリブ灰色 (2.5GY7/1) 砂質土 (地山塊) |
| 10 明オリブ灰色 (2.5GY7/1) 砂質土 (地山塊) | 22 にぶい黄褐色 (10YR5/3) 砂質土        |
| 11 橙色 (5YR8/4) 砂質土             | 23 灰褐色 (5YR6/2) 砂質土            |
| 12 褐色 (7.5YR6/1) 砂質土 (炭、焼土多含)  |                                |

第560図 土壌 1・2 (1/30)



第561図 土壙1・2断面(1/30)・出土遺物(1/4)

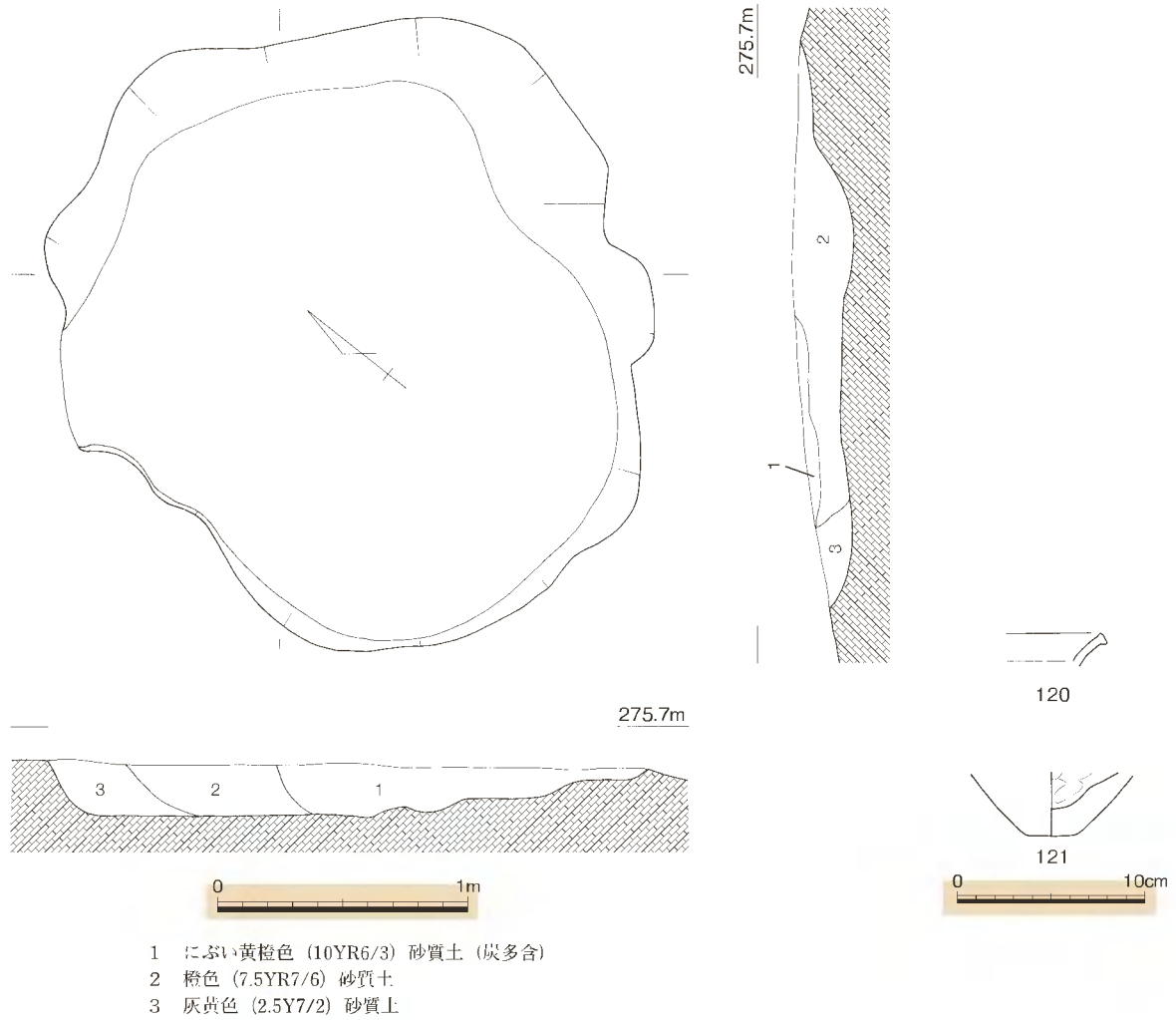
土壙1・2 (第546・560・561図、図版119-3)

調査区のほぼ中央付近に位置する。丘陵上の平坦面から斜面へと移る地点で検出した。段状遺構1掘削時に削平を受ける。検出状況と土層観察から、土壙2が土壙1より新しいと判断した。

土壙1の平面形は長さ172cmを測るやや歪な円形である。断面形は台形であり、いわゆる袋状を呈する。第21層は地山塊を多く含むので底面と一時誤認したが、それを掘り下げると、底面南東寄りの所でピット状の窪みを検出した。検出面からこの底面までの深さが200cm以上を測ることから、階段状の施設を設けた可能性が想定できる。

土壙2も土壙1と同様に平面形はほぼ円形であるが、断面形は異なり、底面から壁面がほぼまっすぐ上に向かう形状となる。検出面から底面までの深さは159cmである。

113~117は土壙1で、118・119は土壙2で確認した。いずれも埋土掘削時に検出したものである。117は風化が著しいが、外面底部付近で煤が観察できた。二次的に火を受けたものと推察する。また、113の外面にも煤が付着していた。これらの土器は弥生時代後期後半に属すると判断した。(重根)



第562図 土壌3 (1/30)・出土遺物 (1/4)

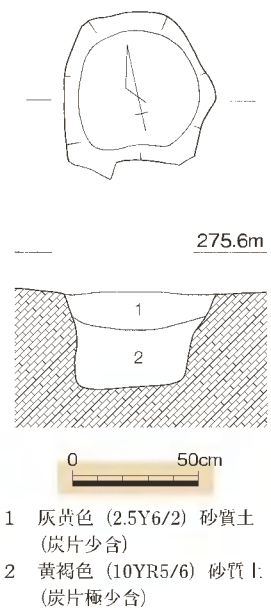
土壌3 (第546・562図)

調査区のほぼ中央付近に位置する。丘陵平坦面から急斜面へと移る地点で検出した。段状遺構1より新しい。平面形は不整形で、底面も平坦ではない。第1層掘り下げ時には炭を多く確認した。長さは253cmで、深さは24cmである。

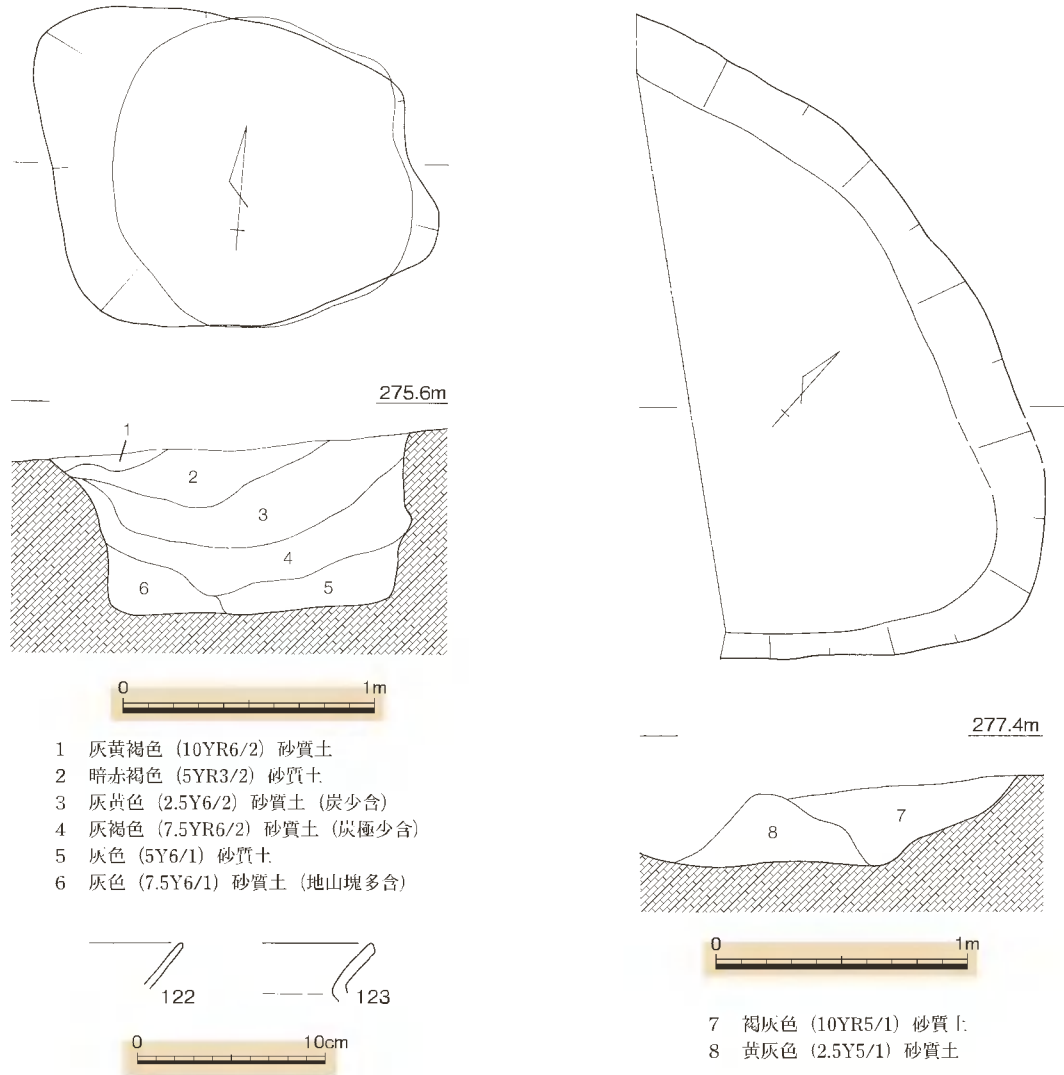
弥生土器120を第3層、121を第2層で検出したため、弥生時代の項目で掲載したが、埋土の様子等から近現代の遺構である可能性が高いと考える。120・121は弥生時代後期後半に属する。(重根)

土壌4 (第546・563図)

調査区のほぼ中央付近に位置する。検出状況から段状遺構1よりは新しく、土壌5よりは古いと判断した。平面形は不整形で長さは61cm、幅は59cm、深さは39cmである。土器等が確認できなかったため、時期については決定しがたいが、埋土や検出状況から他の遺構と大きな時期差はないと考える。(重根)



第563図 土壌4 (1/30)



第564図 土壌5・6 (1/30)・土壌5出土遺物 (1/4)

土壌5 (第546・564図)

調査区のほぼ中央付近に位置する。検出状況と土層観察から、段状遺構1や土壌4よりは新しいと判断した。平面形は不整形で、長さは143cm、幅は123cmである。底面は歪ではあるが、円形に近い形状となる。その底面までの深さは72cmである。

122・123は第3層で確認した。122は高杯、123は甕の口縁部であるが、いずれも細片である。そのため断定しがたいが、それぞれ他の遺構出土土器と同様に、弥生時代後期後半と考える。(重根)

土壌6 (第546・564図)

この土壌の位置する調査地の北東端部は、調査範囲内では最も高く標高が277.25mである。この場所には、土壌6以外に数基のピットといくつかの土壌が存在した。この場所より北へは、鞍部を経て山の頂部へと至る。

土壌の平面形状は不整形で、規模は長軸が257cm、短軸が134cmで、深さは37cmを測る。

出土遺物は見られなかったことから、詳細な時期は不明である。切り合い関係からみると、柱穴→土壌9→土壌6の順に古いことから、この土壌を弥生時代の範疇に入れておきたい。(弘田)

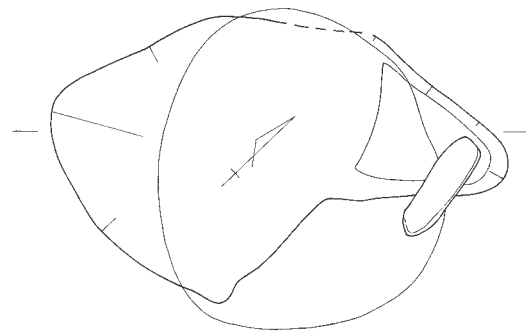


土壌7 (第546・565図、図版119-4)

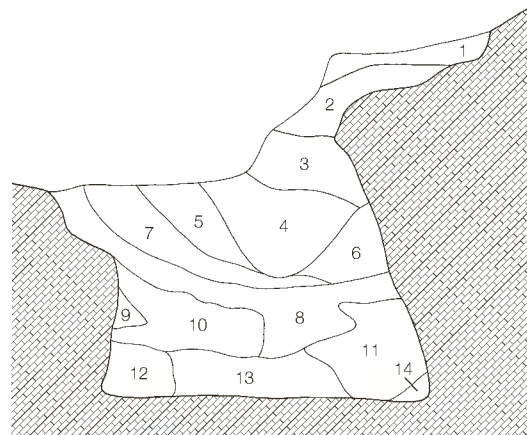
調査区の中央やや東寄りに位置する。段状遺構1の貼り床を除去したのちに検出した。段状遺構1掘削時に西側から削平を受けたものと考えられる。検出時に東側で長さ45cmほどの石を確認したが、この遺構に伴うものかどうかは不明である。平面形は不整形で、長さは181cm、幅は112cmである。断面形は逆台形で、いわゆる袋状と呼ばれる形状の土壌である。西側の壁面はやや崩れており、埋土中にも地山塊を多く含む。

M4、124は埋土上層で、125～128は埋土下層で確認した。鉄鏝M4は茎部分が欠損する。腐食が著しく、表面も錆の影響で変形している。土器はいずれも風化が著しいため、調整の痕跡は認めがたい。しかし、その中で124は外面にハケメが残る。口縁部は上方へ拡張し、その外面には浅い沈線が4条めぐる。128は内面にケズリが観察でき、その頸部には粘土接合痕が明瞭に残る。口縁端部形成時には強いヨコナデを加えたためか、その上面はやや窪んだ形状となる。これらの土器は弥生時代後期後半に属する。

(重根)

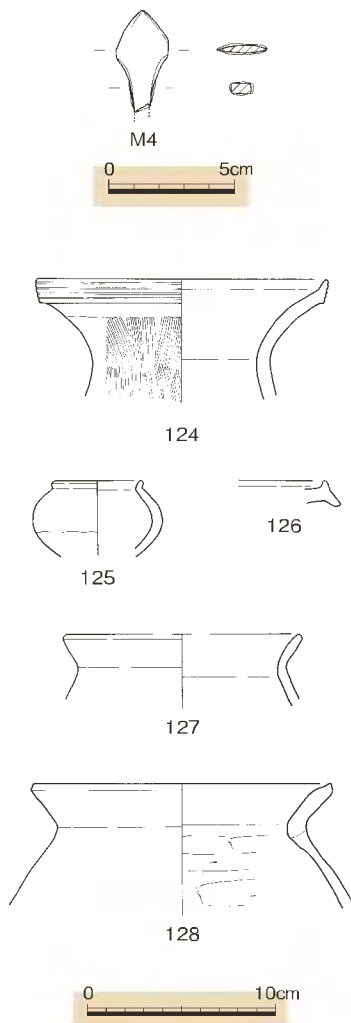


276.4m

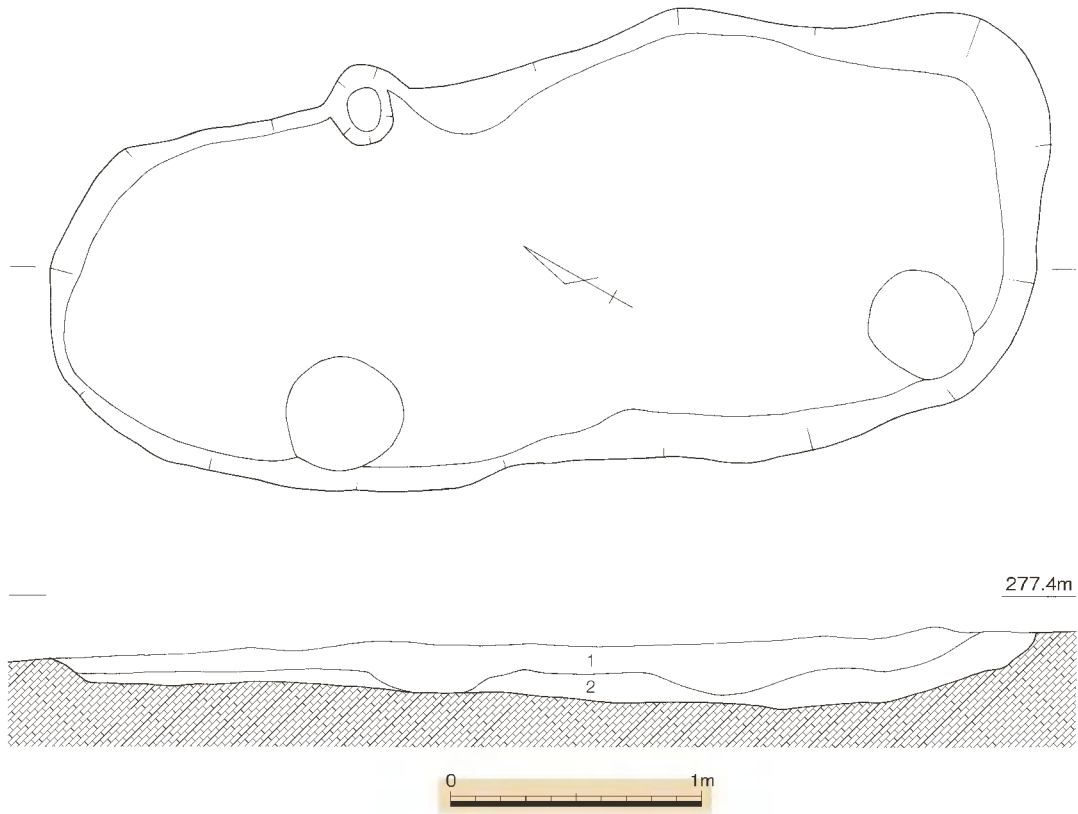


0 1m

- 1 灰白色 (5Y8/2) 砂質土
- 2 浅黄色 (2.5Y7/3) 砂質土
- 3 灰黄色 (2.5Y6/2) 砂質土
- 4 にぶい黄色 (2.5Y6/3) 砂質土 (黄橙色 (10YR8/6) 粘質土塊多、炭片少含)
- 5 灰黄褐色 (10YR6/2) 砂質土
- 6 灰黄色 (2.5Y6/2) 砂質土 (黄橙色 (10YR8/6) 粘質土塊多、炭片極少含)
- 7 にぶい黄褐色 (10YR7/2) 砂質土 (炭極少含)
- 8 にぶい黄褐色 (10YR6/3) 砂質土
- 9 にぶい赤褐色 (7.5R4/3) 砂質土 (地山塊多)
- 10 浅黄褐色 (10YR8/4) 砂質土 (地山塊多)
- 11 灰色 (5Y6/1) 砂質土 (地山塊多)
- 12 暗灰黄色 (2.5Y5/2) 砂質土
- 13 黄褐色 (2.5Y5/3) 砂質土
- 14 黄灰色 (2.5Y6/1) 砂質土



第565図 土壌7 (1/30)・出土遺物 (1/4・1/3)



- 1 褐灰色 (10YR5/1) 砂質土
- 2 黄灰色 (2.5Y5/1) 砂質土 (地山塊多含)

第566図 土壌8 (1/30)

**土壌8** (第546・566図)

調査範囲内では最高所である標高277.25mの位置に存在する土壌である。

平面形は、やや不整の長方形を呈する。長軸は392cm、短軸は178cmで、深さは27cmを測る。

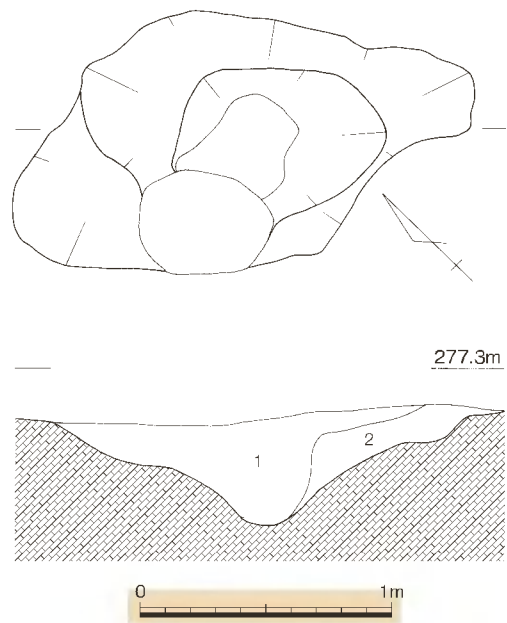
埋土中からは、遺物の出土は見られなかったものの、土壌6と同様の理由によって、弥生時代の遺構としておきたい。(弘田)

**土壌9** (第546・567図)

土壌6を切っており、かつピットに切られている。

平面形は、不整形で、長軸191cm、短軸109cm、深さ45cmを測る。

出土遺物は見られないことから、詳細は不明であるが、調査地内の出土遺物からみると、各遺構間に大きな時期差は考えられないと見られる。この土壌も弥生時代の範疇に入ると考えたい。(弘田)



- 1 褐灰色 (10YR5/1) 砂質土
- 2 黄灰色 (2.5Y5/1) 砂質土 (地山塊多含)

第567図 土壌9 (1/30)

### 第3節 小結

高岡遺跡の調査範囲には未買収地が存在したため、調査を行ったのは南側の部分だけであった。遺跡が所在したのは、吉野川左岸の山塊から南西に向かって舌状に張り出した丘陵で、南側は宮本川が流れる急峻な谷地形になって、遺跡が存在する丘陵の頂部まで50m以上の高さが認められた。北側の約20m下がった山裾には、階段状になった水田が展開している。このような地理的環境に確認された高岡遺跡は、鳥取自動車道関連遺跡のなかで沖積平野から最も高い所に発見された遺跡である。

今回の高岡遺跡の発掘調査で検出した遺構は、竪穴住居3軒、段状遺構3面、土壇8基である。

竪穴住居1は、丘陵の頂部より少し下がった地点に存在し、2回以上の建て替えが行われていた。平面形は半月形の珍しい形態を呈し、弥生土器や鉈が出土した。竪穴住居2は、比較的急な斜面に検出され、地形の低い部分は削平されて残存しなかった。この住居に建て替えが行われた形跡はなく、平面形は円形または楕円形に似た形を呈していた。竪穴住居3も急斜面に存在したので、地形の低い南側が削平されていた。3軒の竪穴住居が重なって検出され、建て替えを行うたびに床面を拡張していた。最も大規模で最後に構築された竪穴住居には、壁体の2か所に柱穴状の穴が認められた。出土遺物には、弥生土器以外に鉈とガラス小玉がある。

段状遺構1は、丘陵上の平坦面から斜面へ移る地点で検出したが、北側の部分は未買収地で調査できなかった。床面に2条の溝が存在したから、規模の異なる段状遺構が重複していると考えられた。周辺には数基の土壇を検出したが、この段状遺構より古いものと新しいものが混在していた。出土遺物には弥生土器と鉄鏃があるが、播磨地方でよく見かけるタタキ痕跡の甕が注目される。段状遺構2は、西側に面した急斜面に存在した。床面には凹凸が認められ、多くの柱穴が検出された。柱穴の大きさは大小様々で、検出面からの深さも異なっていた。柱穴内を掘り下げると、垂直に下がるものと斜め方向に下がるものが混在していた。柱穴の配置に規則性はなく、ただ雑然と存在している感じであった。この急斜面の地点に数多くの柱穴が雑然と存在して、途切れることのない犬走り状の平坦面を有する段状遺構2は、八幡山遺跡や穴が辻遺跡の段状遺構とは異質の遺構であると考えられた。数多くの柱穴は柵が構築されていた痕跡で、防御用の施設があったのではないかと推定された。段状遺構3は、斜面に「コ」の字状の平坦面を造成していたが、調査をしていない北側へ延びると考える。

土壇には深いものと浅いものがある。深い土壇は、丘陵上の平坦面から斜面に移る地点に、段状遺構1と重なった状態で検出された。これらの土壇は、段状遺構1を切った新しいものと、段状遺構1の貼り床を除去して発見した古いものがある。深い土壇の平面形は円形に近い形を呈するが、断面形は袋状になって土砂が複雑に堆積していた。土壇1は、検出面からの深さが200cm以上もあり、発掘作業は著しく困難であった。出土遺物の大多数が弥生土器であるが、鉄鏃も認められた。

高岡遺跡では竪穴住居、段状遺構、土壇を検出したが、それぞれの遺構から出土した土器の調整手法や形態的特徴から、いずれも弥生時代後期後葉の時期になると考えられた。

高岡遺跡の発掘調査は、北側に未買収地が存在して全容が明らかになっていないが、今度の南側の調査結果から推察すると、丘陵の高所に存在する防御用の柵を設けた弥生時代後期後葉の集落跡で、出土した土器の組成は播磨地方の影響を強く受けていると思われた。(福田)

岡山県埋蔵文化財発掘調査報告 213

八幡山遺跡  
八幡山南遺跡  
八幡山円明寺跡  
尾崎遺跡  
中町B遺跡  
穴が途遺跡  
穴が途古墳  
今岡D遺跡  
今岡中山遺跡  
今岡古墳群  
高岡遺跡

中国横断自動車道姫路鳥取線  
(鳥取自動車道)建設に伴う発掘調査  
(第1分冊)

平成20年3月19日 印刷

平成20年3月31日 発行

編集 岡山県古代吉備文化財センター  
岡山市西花尻1325-3

発行 国土交通省岡山国道事務所  
岡山市富町2丁目19-12  
岡山県教育委員会  
岡山市内山下2-4-6

印刷 サンコー印刷株式会社  
岡山県総社市真壁871-2

八 幡 山 遺 跡  
八 幡 山 南 遺 跡  
八 幡 山 円 明 寺 跡  
尾 崎 遺 跡  
中 町 B 遺 跡  
穴 が 盗 遺 跡  
穴 が 盗 古 墳 跡  
今 岡 D 遺 跡  
今 岡 中 山 遺 跡  
今 岡 古 墳 群 跡  
高 岡 遺 跡

中国横断自動車道姫路鳥取線  
(鳥取自動車道)建設に伴う発掘調査

(第2分冊)

2008

国土交通省岡山国道事務所  
岡山県教育委員会

## 第14章 ま と め

## 第1節 大原地区の縄文時代

大原地区（旧大原町）に所在する縄文時代の遺跡は、鳥取自動車道建設に伴う発掘調査が実施されるまでは、わずか2遺跡に過ぎず、それも、後期と晩期の土器が数点出土したにとどまっていた。このため、縄文時代の大原地区の実態については空白と断言していいような状況にあった。

このような中で、鳥取自動車道建設に伴う発掘調査が始まり、中町の中町B遺跡と古町の尾崎遺跡において、縄文時代の遺物がかかりまとまって出土した。また、同じ頃に、下町地区のほ場整備事業に伴って確認調査が実施された龍道寺遺跡でも、縄文時代後期の遺物が出土した〔柴田 2006〕。これらの成果を含めても遺跡数はわずか5遺跡だが、新しく発見された遺跡は、大原地区の主要な平野部に位置し、遺物の年代も草創期から晩期まで幅が広い。土器の中には、一括性が高そうなまとまりもみられ、この地域の土器の実態を考える上で、参考となる資料も含まれているようである。そこで、資料的にはまだまだ十分とは言えないが、一度、大原地区の縄文時代の状況をまとめてみたい。

鳥取自動車道建設に伴う発掘調査の大きな成果の1つとして、尾崎遺跡における縄文時代草創期の石斧（S24）の出土があげられる。大原地区では、これまでの縄文時代後期の土器からはるかに遡り、最古の遺物となる。石斧は全長17.2cm、幅6.1cm、厚さ2.8cmを測り、断面形が三角形ないしは「D」字形を呈し、刃先が円弧を描く丸ノミ形をしている。刃部の研磨は明瞭ではなかったが、裏面の左側面にある剥離面の磨滅が使用によるものかは判然としない。いわゆる神子柴型石斧に類似した形態をもっているが、丁寧な敲打による刃部の整形がみられず、使用

表7 大原地区縄文時代遺跡消長表

時 期	型式名	尾崎遺跡	中町B遺跡	龍道寺遺跡	今岡遺跡	川戸遺跡
草創期	神子柴型	○				
早 期	条痕文土器					
	神宮寺					
	黄島					
	高山寺					
	穂谷					
前 期	織維土器					
	羽島下層	○	○			
	磯の森	○				
	彦崎Z I					
中 期	里木 I					
	船元（古）					
	船元（新）					
	里木 II					
後 期	矢部奥田					
	中津		○			△
	福田K II		○			
	津雲 A		○	○		
	彦崎K I	○				
	彦崎K II	○				
福田K III	○		○			
晩 期	岩田					
	船津原					
	谷尻	○				
	南方前池					○
	沢田	○			○	○

○遺物の出土が確認される。

△出土するが対応型式不明

時にできた可能性もあるが、調整剝離面が明瞭に残っている。このことからすれば、神子柴型系の石斧と表現すべきかもしれない。なお、S 25・26も本来は同一個体であったものが破損し、整形し直した可能性が高く、これについても神子柴型系石斧と考えられる。

神子柴文化は東北地方を中心に、中部地方以東に広くみられる北方系の石器文化で、無文土器を伴うことから縄文時代草創期の文化とされている。局部磨製石斧のほかに、木葉形尖頭器や石刃を加工した搔器・削器などを伴うが、当初の器種の組み合わせで長期間存続することはなく、各地域に由来からあった石器文化の中に吸収され、各要素が分解された形で検出されるという〔稲田 1986〕。尾崎遺跡の石斧も単独の出土で、このような文脈で理解すべきものかと考える。平成18年に、美作岡山道路（国道374号改良）の建設に伴って発掘調査を行った岡山県勝央町の大河内遺跡からも神子柴型石斧が出土したが、この遺跡では有茎尖頭器が多量に出土し〔岡本ほか 2008〕、これも神子柴文化そのものではない。このように美作東部地域では、神子柴型系文化の流入が確実に認められる。

大原地区では縄文時代早期の遺跡はまだ確認されず、次に遺物が現れるのは縄文時代前期に入ってからである。尾崎遺跡で4片、中町B遺跡で1片、前期前葉の羽島下層式土器と山陰系の西川津式土器A類が出土している。これに続いて、尾崎遺跡では前期中葉の磯の森式土器も1片出土している。前期の土器の出土数があまりにも少なく、とくに後期の土器の出土量と比較したとき、その差は歴然である。このことからすれば、前期の段階で定住が始まったとはいえ、尾崎遺跡で編年的に連続する

型式の土器が出土しているとしても、それは回帰遊動行動を示すものと解釈すべきであろう。尾崎遺跡や中町B遺跡が川岸近くの広い緩斜面部に位置していることを考えると、集落の立地条件が前期と後期で大幅に違わない以上、縄文時代前期における定住を想定することは困難であろう。

大原地区の縄文時代において、大きな変化が現れるのは後期に入ってからである。吉野川の東岸にあたる今岡・高岡・宮本に広がる平野部の北端に位置する中町B遺跡から、後期前葉の中津式から津雲A式にかけての土器や石器がまとめて出土している。土器は比較的密集した状態で、地山の黄褐色土にめり込んで検出された。中津式の中でもより新しい中津Ⅱ式が



1 尾崎遺跡 2 中町B遺跡 3 能道寺遺跡 4 今岡遺跡 5 川戸遺跡

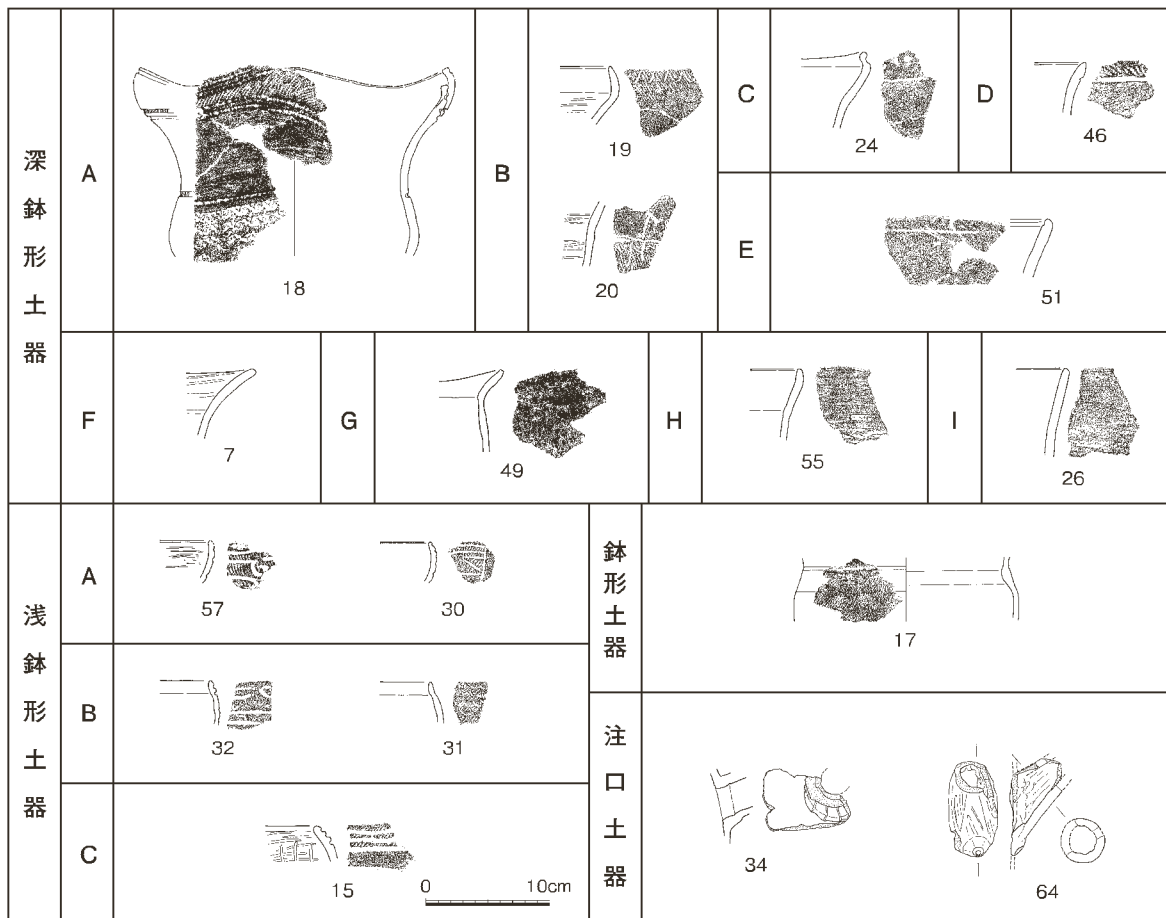
第568図 大原地区縄文時代遺跡分布図 (1/100,000)

始まりのようで、福田KⅡ式が多くを占めるようである。津雲A式は1片にすぎない。石器の中には石皿や磨石が含まれ、打製の石鍬や石包丁形のスクレイパーも出土している。このようなことから判断して、中町B遺跡では定住が始まっていたものと考えられる。石器からみると、植物性食料への関わりが深まっているようにも判断される。

中町B遺跡に続いて、吉野川西岸の下町の平野部北端に位置する龍道寺遺跡から津雲A式の土器片が出土している。確認調査のため、全体像は不明であるが、後期後葉の福田KⅢ式の土器も出土していることから、居住地として認識されていたとみられる。

後期中葉の彦崎KⅠ・Ⅱ式期になると、吉野川と後山川の合流点である古町・中町の平野部の東端に位置する尾崎遺跡において定住が始まる。かなりの土器片が出土しているが、その多くは彦崎KⅡ式期のもので、遺跡の中央部で集中をみせた。結節縄文や沈線内連続刺突が多用されていて、従来の広い意味で彦崎KⅡ式といわれていた土器を新古で3段階に分けた千葉豊の第2段階〔千葉1992〕にまとまることから、ある程度の一括性を示すようである。

第569図にこの中央部から出土した彦崎KⅡ式土器をまとめた器種分類図を掲載した。深鉢形土器は9種あり、A～Eは有文、F～Iは無文土器である。Aは口頸部が大きく外反して内湾する、いわゆるキャリパー形の土器である。Bも類似した器形をもつが、口縁部が屈折的で単純である。Cも同様の器形で、口縁部が短く内折する元住吉山式とみられる。Dは外反する口縁の外面に縄文を施し、その下端に沈線を巡らせる。Eは外傾する口縁の内面に沈線を巡らせる。Fは口頸部が大きく外反す



第569図 尾崎遺跡出土縄文時代後期彦崎KⅡ式土器器種分類図 (1/6)



る。Gは短い口縁部が外折する。Hは外折する口縁部が内湾気味である。Iは長い口頸部が外折する。

浅鉢形土器は3種に分けられる。いずれも文様をもつ。Aは口縁部が直立気味に内湾する。Bは内湾した体部から口縁部が外反気味に直立する。Cは口縁部が内傾する。

鉢形土器は頸部が無文で、縄文を施した胴部との境に沈線を巡らせる。

注口土器の口縁部が出土しているが、全体形状は不明である。口縁部は先細りで、急角度をもつ。

尾崎遺跡出土の石器では、やはり打製の石鍬が6点出土し、石包丁形のスクレイパー（S8）も認められる。植物性食料に関する遺物と考える。

このように、縄文時代後期の前葉から中葉にかけて、居住地が点々と移動しているようにみえるが、調査例の少ない現状では、それが現時点での偶然か、縄文時代での現実かは判断できない。植物性食料に関連した遺物の出土から、焼畑農耕に伴う耕作地の移動を考慮するのも飛躍に過ぎるようで、とりあえずは平野部縁辺部での定住の開始という事実のみを考えたい。3か所の平野部は互いに近接しているため生活領域として三分することに疑問もあるが、後期後葉の福田KⅢ式の土器は龍道寺遺跡と尾崎遺跡で出土していることから、3か所の平野部でともに後期から定住が始まった可能性も考えられる。なお、わずかに1片ではあるが、大原地区南端の平野部にある川戸遺跡でも後期の土器片が出土していて、この平野部にも居住地のあったことが考慮される。

美作地域の山間部といえば、苫田ダムの建設に伴って発掘調査が全域で実施された、旧奥津町（現鏡野町）の南部平野部がある。この地域では縄文時代の前期から定住が始まったようであるが、中期と後期の間にも1つの画期があり、吉井川沿岸の氾濫原にある微高地への集落の進出が認められている。さらに、この集落跡では多量の石鍬や石鎌状のスクレイパーも出土している（岡本 2005）。縄文時代後期における平野低位部への進出は、岡山県南部の津島岡大遺跡（阿部ほか 1994）や百間川沢田遺跡（平井ほか 1993）でも認められた現象であり、全県的な状況と判断される。

縄文時代晩期前葉の土器は確認されていないが、中葉の谷尻式の土器が尾崎遺跡で出土し、後葉の沢田式の土器も尾崎遺跡の南部にみられた。沢田式には岡山県南部では水田稲作が開始されているが、大原地区でも、古町・中町の吉野川・後山川合流点付近、下町・今岡・高岡・宮本の吉野川・宮本川合流点付近、赤田・壬生・沢田・川戸の吉野川・大滝川合流点付近の主要3平野部で、尾崎遺跡・今岡遺跡・川戸遺跡とそれぞれ沢田式の土器を出土する遺跡が存在し、晩期中葉までの状況と違いをみせる。はたして新しい時代の到来を告げるものであろうか。（岡本寛）

#### 参考文献

- ・阿部芳郎ほか「津島岡大遺跡4」『岡山大学構内遺跡発掘調査報告』7 岡山大学埋蔵文化財調査研究センター 1994
- ・稲田孝司「縄文文化の形成」『岩波講座 日本考古学 6文化と両期』岩波書店 1986
- ・岡本寛久「第6章第1節縄文時代」「夏栗遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』194 岡山県教育委員会 2005
- ・岡本泰典ほか「大河内遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』216 岡山県教育委員会 2008
- ・柴田英樹「農地等高度利用促進事業（下町地区）に伴う確認調査」『岡山県埋蔵文化財報告』36 岡山県教育委員会 2006
- ・千葉 豊「西日本縄文後期土器の二三の問題」『古代吉備』第14集 古代吉備研究会 1992
- ・平井 勝ほか「百間川沢田遺跡3」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』84 岡山県教育委員会 1993

## 第2節 弥生時代の集落

大原地区では、たばこ畑の開墾中に弥生時代後期の土器が多量に出土して池が平遺跡〔佐藤2005〕の所在が明らかになったが、1～3軒の竪穴住居の存在が推定されたものの、明確な遺構は確認されていない。大原町教育委員会が圃場整備事業に伴って実施した川戸1～3号墳の発掘調査で、多くの弥生土器とともに突線紐式銅鐸を模した銅鐸形土製品や大型蛤刃石斧の未成品などが出土したが、弥生時代の遺構は検出できなかった〔宇垣1995〕。事前の協議が行われずに圃場整備事業が進められた中町C遺跡では、施工途中の水路工事で立会が行われ、竪穴住居や土壇などが確認されたが<sup>(1)</sup>〔尾上2004〕、工事中の立会調査だから、遺跡の実態がはっきりしないのが残念である。

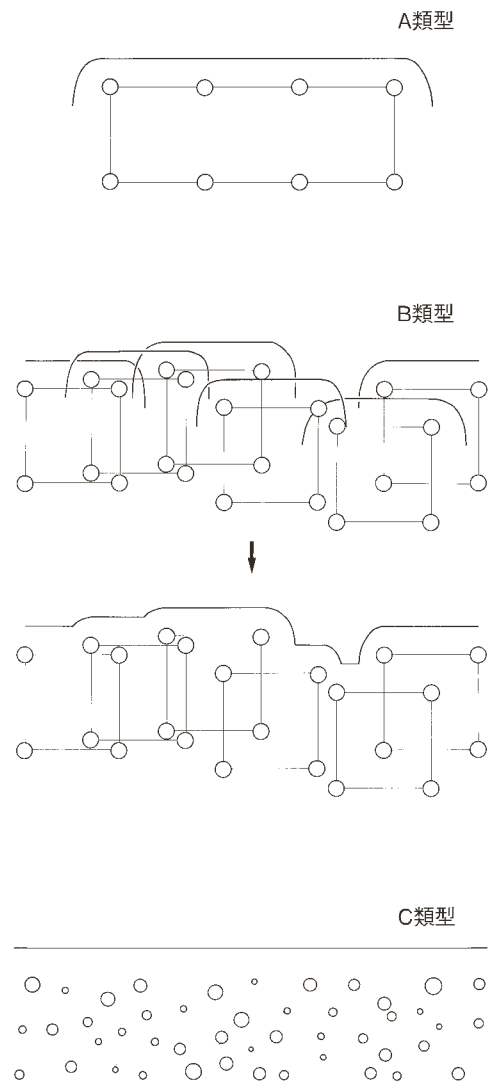
このような状況であったから、鳥取自動車道関連遺跡の発掘調査に着手する以前には、大原地区で弥生時代の遺構はほとんど知られていなかった。

今回の発掘調査で弥生時代の集落が確認されたのは、八幡山遺跡、八幡山南遺跡、穴が谷遺跡、今岡D遺跡、今岡中山遺跡、高岡遺跡の6遺跡である。鳥取自動車道のルートが、吉野川が流れる沖積平野に向かって東西方向に張り出した低丘陵を南北に結ぶように計画されていたから、弥生時代の集落の所在地も丘陵の尾根上や丘陵の斜面が多かった。さらに丘陵の頂部や尾根上には円形の竪穴住居が存在し、丘陵の斜面には等高線に沿うように帯状を呈した段状遺構が認められた。その段状遺構内を丹念に掘り下げて精査したところ、大雑把で3類型に分類できると思われた。

**A類型** 今回の大原地区の発掘調査では明確な遺構を検出していないが、斜面に平坦面を造成して掘立柱建物が構築されたものである。農免農道整備に伴って発掘調査が実施された津山市の山ノ奥遺跡の報告書では、建物として収載されている〔米田・山磨2004〕。このような遺構は、従来から作業場として考えられていたが、石器製作遺跡である八幡山遺跡や山ノ奥遺跡では、石器は円形の竪穴住居内で製作していた。

**B類型** 斜面を造成して、ほぼ同じ場所に竪穴住居を何軒も建て替えたものである。代表的な遺跡として、八幡山遺跡と穴が谷遺跡が挙げられる。なお、A類型とB類型は、混在して確認されることが多い。

**C類型** 急斜面の地点に、途切れることのない犬走り状の平坦面を造成して、検出面からの深さが異なる大小様々な数多くの柱穴が雑然と存在したもので、柱穴内を掘り下げると、垂直に下がるものと斜め方向に下



第570図 弥生時代段状遺構の類型

がるものが混在していた。この遺構は高岡遺跡の段状遺構2だけで、防御用の柵が設置されていたと考えている。構築されたのは、高岡遺跡で明らかになったように、弥生時代後期後葉から終末の時期に限定されるであろう。

集落跡が存在した個々の遺跡の時期を、出土した土器の形態的特徴や調整手法から推定したい。

八幡山遺跡は、弥生時代中期後半から後期末葉または古墳時代初頭の時期で、後期中葉から後期後葉にかけての遺構は確認できなかった。八幡山南遺跡は、後期中葉の時期である。八幡山南遺跡は八幡山遺跡と極めて近い地点に位置するから、八幡山遺跡の住民が八幡山南遺跡へ移動したのかもしれない。穴が途遺跡は、後期前葉から後期中葉にかけての時期である。今岡D遺跡は、出土した土器が少ないので詳細には不明であるが、後期の時期に最も栄えた遺跡と考えられる。今岡中山遺跡は、後期中葉の時期である。高岡遺跡は、後期後葉の時期である。

このように、各遺跡の時期はそれぞれ異なっていた。早い段階に集落が成立して遅くまで同じ場所に継続するものがあれば、短期間に終わっているものもある。

吉野川が流れる沖積平野に向かって舌状に張り出した低丘陵があると、その尾根上や斜面のすべての地点に弥生時代の集落が造られていたわけではない。八幡山遺跡の北側に位置する三味谷遺跡は、トレンチを設定して確認調査を実施したが、表土直下が地山で遺物は何も出土しなかった。八幡山南遺跡の南側には、集落を構えるには八幡山遺跡や八幡山南遺跡の所在地よりも最適地と思われる、山裾から緩やかに傾斜する広い緩斜面が認められたので、短い間隔にトレンチを設定して確認調査を行ったが、遺構は何も検出できなかった。今岡D遺跡と高岡遺跡の中間に所在した低丘陵も、尾根上や斜面にトレンチを設定して確認調査を実施したが、遺構や遺物は何も確認できなかった。

弥生時代の集落が検出された遺跡は、場所の選定にあたってはその地点の地理的な条件が考慮されたと考えるが、意外な立地状況を呈する集落遺跡もある。なお、八幡山遺跡と穴が途遺跡は、両遺跡とも地形の高い東端部が明らかになっただけで、地形の低い調査範囲外の西側にも竪穴住居や段状遺構が延々と続いて存在すると思われた。

中町B遺跡は、吉野川左岸の低位部の遺跡である。2本柱で小規模な竪穴住居が検出され、弥生時代後期前葉の時期の土器が数多く出土した。中町C遺跡は、中町B遺跡に近接した遺跡である。遺跡の実態ははっきりしないが、竪穴住居や土壇が確認されている。したがって、吉野川左岸の低位部である中町B遺跡から中町C遺跡にかけての地点に、集落が存在するのかもしれない。尾崎遺跡の河岸段丘上には、中期中葉に属する2軒の竪穴住居が検出された。また川戸遺跡では、銅鐸形土製品や大型蛤刃石斧の未製品を含む多くの弥生土器が出土している。川戸1～3号墳の発掘調査が目的だったので、弥生時代の遺構の検出は行われていないが、近くに竪穴住居などが存在する可能性が強い。

この沖積平野や河岸段丘の低位部に所在する遺跡については、断片的な情報が得られるだけで全容が把握できていないが、これらの地で人間が生活を営んでいたのは確かである。したがって、弥生時代の生活の拠点は、地形の高い丘陵の尾根上や斜面だけでなく、沖積平野や河岸段丘の低位部も選択されている。つまり集落を形成するのに適地であれば、多少の条件が悪くても竪穴住居などの遺構を構築しているのである。弥生時代の集落を知るための本格的な発掘調査が行われていない大原地区において、鳥取自動車道のルートが吉野川左岸の丘陵地を結ぶように設定されたため、事前の発掘調査が実施されて丘陵部に所在する遺跡の状況がより詳細に明らかになっただけで、沖積平野や河岸段丘の低位部の遺跡については、今後に行われるであろう調査の成果に期待したい。

大原地区に弥生時代の集落が出現するのはいつであろうか。弥生土器で最も古いものは、中期初頭の時期に属すると思われる、口縁部が逆「L」字状を呈して体部上位にクシ状工具による並行沈線を施した甕で、川戸遺跡と尾崎遺跡の本線調査区で確認されているが、遺構は確認していない。中期中葉の時期になると、尾崎遺跡の本線調査区において、竪穴住居2・3と土壙1が検出されている。川戸遺跡には遺構がないが、土器が比較的多く出土している。八幡山遺跡では、尾崎遺跡の竪穴住居2・3や土壙1よりやや遅れて、中期後葉の時期に竪穴住居1・3・5～8、段状遺構3・24・46・51・57・60～63、柱穴列1、土壙7など多くの遺構が確認されている。

このような状況であるから、中期中葉の時期になって竪穴住居や土壙が造られ始め、やや遅れて竪穴住居や段状遺構が爆発的に増加している。前期に属する土器は皆無であるが、中期初頭のものが少数であるものの出土しているから、今後はその時期の遺構が発見されるかもしれない。

弥生時代の集落に伴う竪穴住居で、特殊な形態を呈するものがある。尾崎遺跡の本線調査区で検出した竪穴住居2は、平面形が方形で2本柱を有し、四隅に小さな4個の柱穴が存在した。穴が途遺跡の竪穴住居2で最も新しいものは、平面形が帆立貝式古墳のようになって張り出し部が認められる形であった。

大原地区は中国山地に位置し、瀬戸内海と日本海を結ぶ交通の要衝であるから、竪穴住居や段状遺構などから出土した弥生土器の組成にも、播磨地域と山陰地方の影響が認められる。

八幡山遺跡の後期終末から古墳時代初頭にかけての土器には、山陰地方の複合口縁の甕や鼓形器台が数多く認められるが、播磨地域の外面にタタキ痕跡を有する甕はまったく存在しない。尾崎遺跡の本線調査区では、下がり1にタタキ痕跡を有する甕があって、包含層から複合口縁の甕が出土しているから、播磨地域と山陰地方の要素が混在している。川戸遺跡にもタタキ痕跡を有する甕と複合口縁の甕や鼓形器台が存在するから、尾崎遺跡と同様に播磨地域と山陰地方の土器が認められる。高岡遺跡にはタタキ痕跡を有する甕が数多く存在するだけでなく、壺や高杯も特異な形態を呈しており、播磨地域の土器組成そのもので、山陰地方の影響はないと思われる。

なお、穴が途遺跡の土壙2から出土した円筒形土器とでも呼ぶべき大形の土器172は、後期前葉の時期と考えるが、特殊な形態のもので類例を見つけることはできなかった。穴が途遺跡のB群から出土した壺99は生駒西麓産と思われる。今岡中山遺跡の段状遺構から出土した器台54～59は、吉備地方以外の播磨西北部や摂津などに認められる器台の影響を受けている。(福田)

## 註

(1) 第1章に中町C遺跡の土壙から出土した弥生土器の実測図と写真を掲載している。

## 参考文献

- ・宇垣匡雅『川戸古墳群発掘調査報告書』岡山県大原町教育委員会 1995
- ・尾上元規「大原町中町C遺跡における土木工事」『岡山県埋蔵文化財報告』34 岡山県教育委員会 2004
- ・佐藤寛介「池が平遺跡」『大原町史』史料編(上)考古 大原町 2005
- ・米田克彦・山磨康平「山ノ奥遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』180 岡山県教育委員会 2004

### 第3節 大原地区の弥生土器について

#### 大原地区の土器様相 (第571図、表8)

鳥取自動車道関連の発掘調査により出土した土器は、弥生時代中期前葉から弥生時代後期末葉にかけての時期<sup>(1)</sup>のもので、遺構は弥生時代中期中葉以降のものが検出されている。大原地区全体を見ると、これまでのところ弥生時代前期の土器や遺跡は確認されていない。弥生時代中期前葉には、外面に多条の櫛描沈線を施す甕が出土している。中期中葉には、櫛描文や刺突文を施す壺があり、口縁端部に数条の凹線文を施すものもある。甕の口縁端部は肥厚もしくはつまみ上げている。中期後葉の甕は口縁端部が拡張して凹線文を施すが、多くはつまみ上げて凹線を1条施したものである<sup>(2)</sup>。高杯は鏝状の口縁のものと椀状のものがある。後期前葉には甕の口縁部の凹線は沈線化し、内面のヘラケズリは頸部直下まで施される。また、高杯の口縁は屈曲する。後期中葉は西播磨と類似した外反して湾曲する口縁をもち、脚部に円形透かしを施す高杯(8-101)<sup>(3)</sup>や器台(8-103)が認められる<sup>(4)</sup>。甕は口縁端部に擬凹線文を施すもの、「く」の字状の口縁のものがある。後期後葉～後期末葉になると、ハケ調整の甕の他に、播磨系の外面にタタキ痕跡を残す甕や山陰系の複合口縁をもつ甕が土器組成の中に組み込まれて在地化する。壺や甕の底部は狭小なものがあり、丸底に近づくものがある。

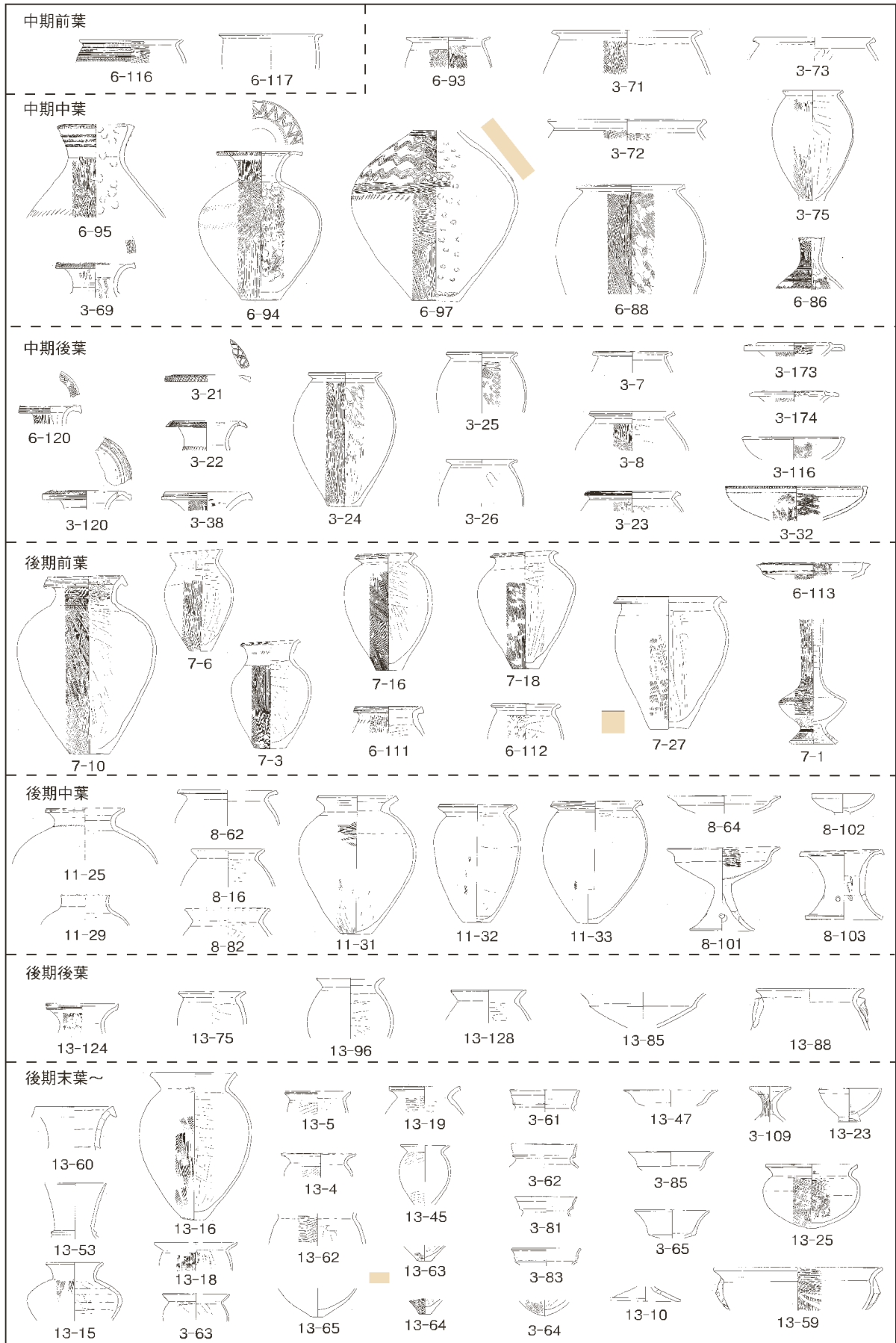
#### 外来系土器について (第572・573図、表8)

今回の調査では近畿や播磨、山陰といった他地域からの搬入もしくは影響を受けた土器が出土しているが、これらの土器を外来系土器<sup>(5)</sup>として以下に挙げる。明確な外来系土器が確認できるのは、弥生時代後期前葉からで、穴が途遺跡では山陰から北陸産の可能性のある円筒形土器(8-172)が、中町B遺跡では隣接する西北播磨地域の壺<sup>(6)</sup>(7-11)が出土している。後期中葉には、穴が途遺跡で生駒西麓産の壺(8-99)や山陰系の鼓形器台(8-47)が確認されている。後期後葉の様相は不明だが、後期末葉になると山陰系や播磨系の甕が当地の土器組成の中に組み込まれ、一部在地化する。山陰系の複合口縁甕が八幡山遺跡・尾崎遺跡・川戸遺跡で、鼓形器台が中町B遺跡、川戸遺跡で出土している。また、播磨系のタタキ甕が尾崎遺跡・中町C遺跡・中町B遺跡・高岡遺跡・川戸遺跡で認められる。以上のような外来系土器の動向をふまえて土器様相を整理すると、弥生時代後期前葉から中葉に

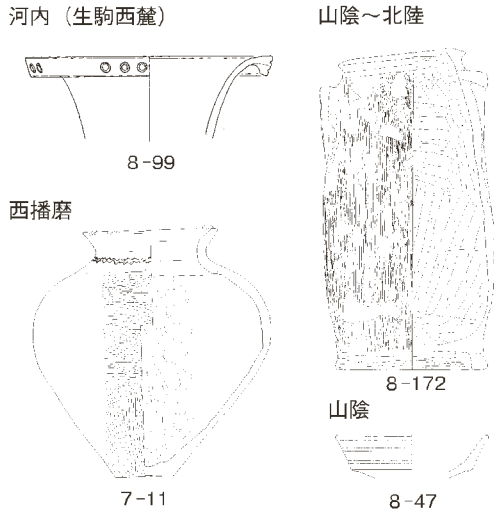
表8 大原地区の弥生遺跡

番号	遺跡名	立地	弥生時代中期			弥生時代後期				外来系土器	備考
			中期前葉	中期中葉	中期後葉	後期前葉	後期中葉	後期後葉	後期末葉～		
1	池が平遺跡	丘陵					■■■■				佐藤 2005
2	八幡山遺跡	丘陵		■■■■	■■■■		■■■■			山陰系	本書第3章
3	八幡山南遺跡	丘陵					■■■■				本書第4章
4	尾崎遺跡	平地	■■■■	■■■■	■■■■	■■■■				山陰系・播磨系	本書第6章
5	中町C遺跡	平地							■■■■	播磨系	尾上 2004
6	中町B遺跡	平地		■■■■	■■■■	■■■■		■■■■	■■■■	山陰系・播磨系	本書第7章
7	穴が途遺跡	丘陵				■■■■				山陰系・播磨系・河内	本書第8章
8	今岡D遺跡	丘陵			■■■■	■■■■	■■■■	■■■■			本書第10章
9	今岡中山遺跡	丘陵					■■■■				本書第11章
10	高岡遺跡	丘陵						■■■■		播磨系	本書第13章
11	川戸遺跡	平地	■■■■	■■■■	■■■■	■■■■	■■■■		■■■■	山陰系・播磨系	宇垣 1995

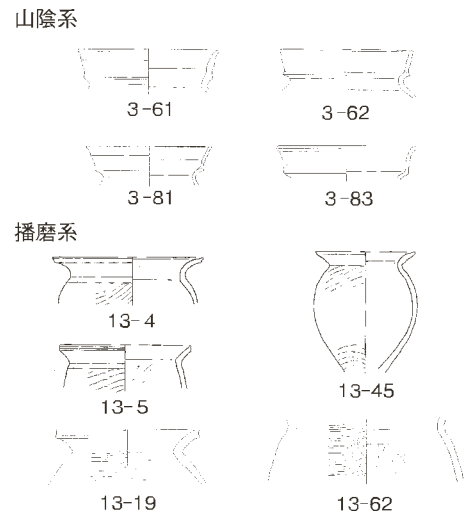
■■■■ 当該期の遺構が認められる ■■■■ 土器が一定量出土



第571図 大原地区の土器様相 (1/12)



第572図 搬入された外来系土器 (1/8)



第573図 在地化した外来系土器 (1/8)

は、日本海側の地域から現在の近畿地方を含む広範な地域の土器が搬入されているが、同時期に今岡中山遺跡では播磨から摂津地域の影響を受けた独自型式の大形器台が成立している。また、他の器台や高杯にも西播磨と共通する点があり、これらの地域との相互的な交流が想定される。後期後半以降には播磨系のタタキ甕や山陰系の複合口縁甕など外来的な要素をもつ土器が、在地の土器様式の中に組み込まれていく。同じ吉野川上流域でも、北の八幡山遺跡のように山陰系の様相が濃い集落と南の高岡遺跡のように播磨系の影響が強い土器様相をもつ集落の二相に分かれる。このことは弥生時代後期後半段階において、漸移的ではあるが小地域の境界が大原地区内において認められことを示唆しており、母体とする集団間の差異を表しているものと理解できる。大原地区は地理的にも山陰と山陽の中間に位置しており、弥生時代にさかのぼっても両地域を結ぶ交通路の要衝であったと推定される。当地の外来系土器の動向や土器様相は交通路をめぐる集団間関係を反映していると思われる。(石田)

註

- (1) 県南東部の百間川遺跡群の時期区分とは、後期前葉が後期Ⅰ、後期中葉が後期Ⅱ、後期後葉が後期Ⅲ、後期末葉が後期Ⅳにそれぞれ対応する。また後期末葉以降については、ここでは一部古墳時代初頭の時期に入るものも含まれる。
- (2) 岡山県南部ではこの時期、口縁端部が大きく拡張し多条の凹線文を施す甕が認められるが、津山市周辺や大原地区に隣接する因幡や西播磨地域〔長友・田中2007〕では、中期後葉段階でも口縁部は大きく拡張しない。因幡地域の資料実見では鳥取県埋蔵文化財センター茶谷満氏、智頭町教育委員会木田真氏、酒井雅代氏にお世話になった。
- (3) 本節で本文中および土器下に示した番号は、一の左が章、右が章中の土器番号を表す。
- (4) 赤穂市東有年・沖田遺跡竪穴住居1・2出土土器〔中田2003〕と類似する。
- (5) ここでいう外来系土器とは、他地域で製作され搬入されたものの他に、他地域の影響を受け当地で製作されたものも含む。
- (6) 兵庫県佐用町(旧上月町)相ノ原遺跡出土土器と類似する。資料実見では、佐用町教育委員会中村剛彰氏にお世話になった。

参考文献

- ・宇垣匡雅『川戸古墳群発掘調査報告書』岡山県大原町教育委員会 1995
- ・尾上元規「大原町中町C遺跡における土木工事」『岡山県埋蔵文化財報告』34 岡山県教育委員会 2004
- ・佐藤寛介『大原町史』史料編(上)考古 大原町 2005
- ・中田宗伯「東有年・沖田遺跡」『赤穂市文化財調査報告書』56 赤穂市教育委員会 2003
- ・長友朋子・田中元浩「西播磨地域の編年」『弥生土器集成と編年—播磨編—』大手前大学史学研究所 2007

## 第4節 今岡中山遺跡の器台について

今岡中山遺跡では弥生時代後期前葉の段状遺構5に土器溜まりが形成されていた。そこに廃棄された器台54～59（第501・502図）は一際目立つ存在感がある。これらは重厚なつくり・大きさもさることながら、一見すると円筒埴輪のタガと見違えるほどの太い突帯が胴部に巡り、文様や脚部の形態、器形などを見渡すと、それらがもつ諸属性の組み合わせは当地域の器台としては違和感があった。そこで本稿では周辺地域の器台と比較し、本遺跡の器台が成立した背景に迫ってみたい。

### 1 今岡中山遺跡出土器台の特徴

本遺跡出土器台は、大きさ・胎土・色調・焼成の差異から、a群：黄褐色を呈し、焼成の良い大形の器台（54～57）と、b群：淡橙色を呈し、焼成の良くない中形の器台（58・59）の2群に大別できる。これらの形態的特徴をみると、口縁部は上下に拡張し、端部に円形浮文を付す。胴部には幅約3cmの太い突帯を2条巡らし、その間帯に長方形の透かし孔を1段4方向、2段4方向ないし2段8方向に配す。脚部には円形の透かし孔が数多く穿たれ、脚端部は拡張することなく丸くおさまる。器形のバランスは、幅広の口縁部に対して脚部がやや小さく華奢な印象を受ける。一般的に当該期の器台は一遺跡内でも個体差が大きい例が指摘されている〔大橋1992〕が、本遺跡では口縁端部の文様、突帯の条数や配置、胴部や脚部の透かし孔の形状、脚部の形態などの諸属性は2つの群に関係なく器台54～58の全てに共通する。その斉一性は本遺跡出土器台の特徴の1つとも言える。

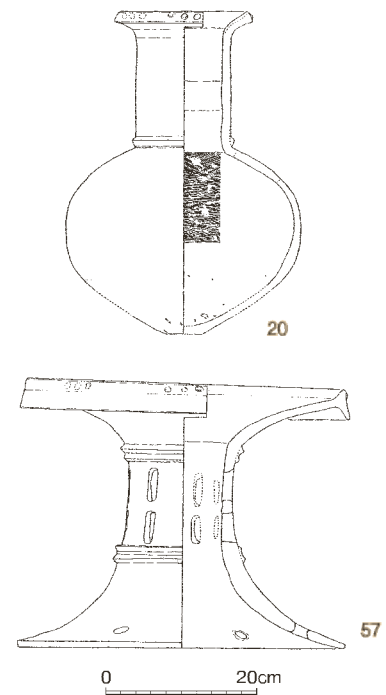
### 2 壺と器台のセット関係

言うまでもなく器台は壺や鉢等と組み合わせて使用される。段状遺構5出土土器のうち、器台との大きさやバランス、胎土・色調・焼成・文様を考慮すると、a群の器台54・55・57に長頸壺20、b群の器台58・59に長頸壺21が伴うと想定する（第574図）。器台とセットをなす長頸壺20は「①口縁部は短く外反して端部に3個一対の円形浮文を付す」「②頸部は直線的に長くのびる」「③体部は球形に近く、頸部との境界に突帯を巡らす」特徴をもつ。これは長頸壺Bに属し、液体収納の機能が想定されている〔宇垣2000〕。

### 3 器台の属性分析

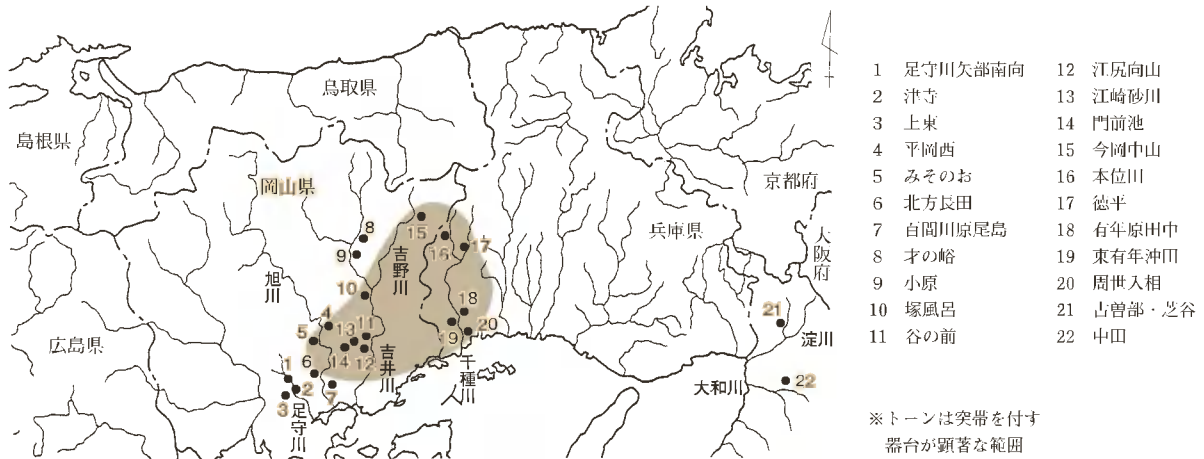
本遺跡の器台が成立した背景を探るため、吉備周辺を対象に弥生時代後期前半を中心とした器台のなかで具体的な特徴が捉えられるものを抽出し、既存の基礎的研究〔大橋1992、福井2001〕を参考にしながら次の検討を行う（第575・576図）。

①口縁部 本遺跡出土器台の口縁部はいずれも端部を上下に拡張する。同形は、吉井川流域では才の峪遺跡や門前池遺跡、



第574図 今岡中山遺跡の壺・器台のセット関係例（1/10）





第575図 吉備周辺における弥生時代後期の器台出土遺跡分布 (1/2,500,000)

播磨の千種川下流域の有年原田中遺跡や東有年沖田遺跡に存在するが、その主体は備中の足守川流域や備前の旭川中～下流域にある。また本遺跡では口縁端部に円形浮文を配する。周辺では千種川流域の本位田遺跡でのみ確認できる。円形浮文は弥生時代中期にしばしば施されるため、本遺跡周辺では前段階の特徴を保持していることが示唆される。

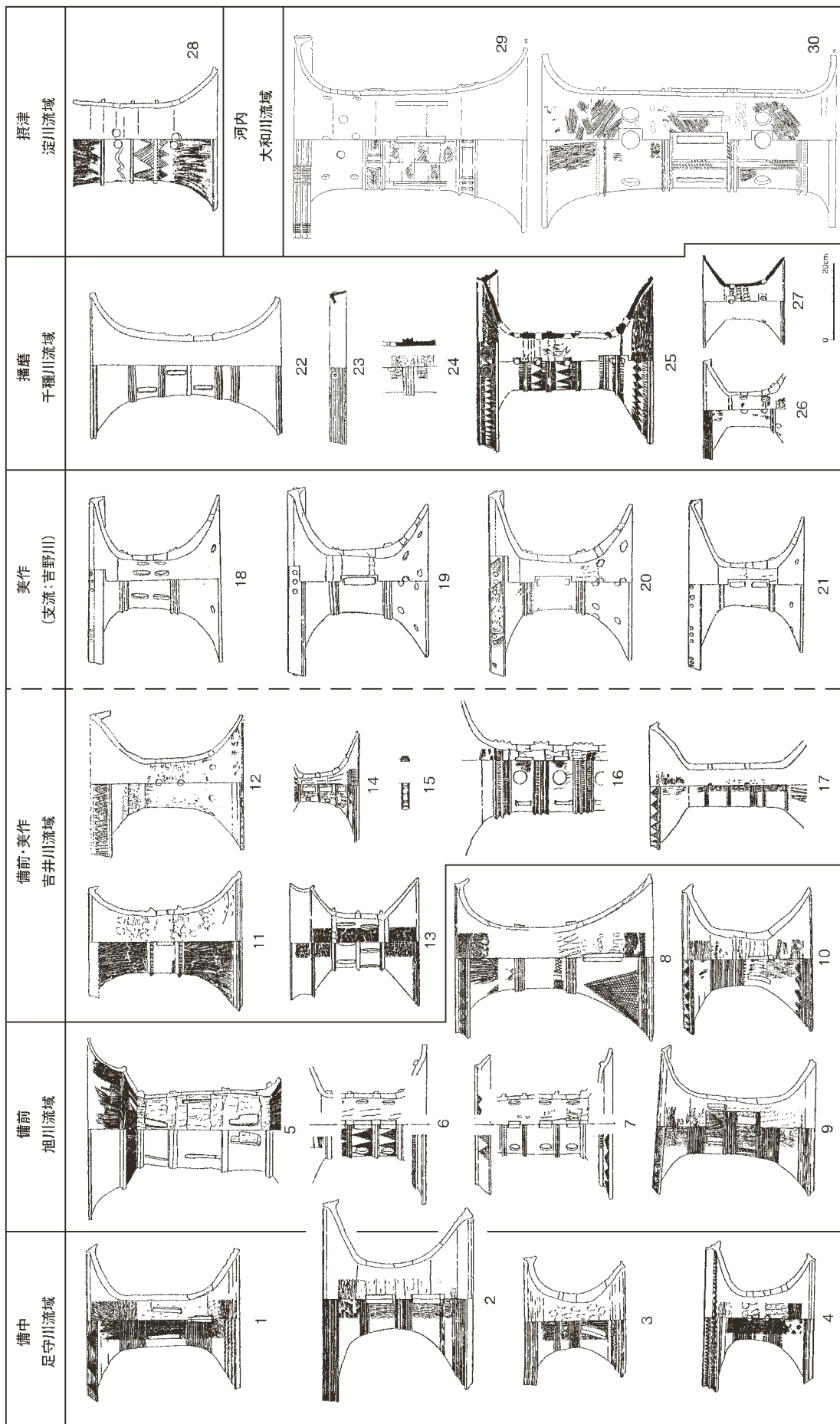
②**胴部** 本遺跡の器台は胴部の上下、つまり口縁部と脚部との境界にそれぞれ突帯を1条ずつ配している。突帯は太いもので幅約3cmを測り、その間帯に長方形の透かし孔を施す。突帯を付す器台は、周辺では備前の旭川中流域や吉井川流域、播磨の千種川流域で顕著に認められ、その分布範囲は備前・美作東部から播磨西端、瀬戸内海沿岸から中国山地山間部まで及ぶ。突帯の条数は3～5条など遺跡ごとに異なる。また摂津の古曽部・芝谷遺跡や河内の中田遺跡でも突帯を付す大形器台が吉備の影響を受けて成立する〔宮崎1996、秋山2002〕。本遺跡のように2条突帯のものは胴部が一定の長さに保たれているため、胴部が長い傾向を示す「装飾器台〔安川2002〕」の多条突帯とは厳密には性格を異にする。本遺跡と同様の類例は周辺では管見に触れないが、脚部との境に突帯を付す東有年沖田遺跡の器台(第576図-26)が全体的な器形を含めて比較的近い例と言える。一方、備中の足守川流域や備前の旭川下流域の吉備中枢部では胴部に突帯を付すことはなく、沈線文を施す器台が主流である。

当該期の器台に施される胴部の透かし孔は長方形と円形がある。本遺跡では長方形の透かし孔のみで構成され、個体によってその単位や配置数は異なる。同様に長方形の透かし孔をもつ器台は広範囲に認められ、特に備前北部・美作・播磨の山間部に顕著である。また円形の透かし孔も広範囲に存在するが、山間部よりも瀬戸内海沿岸に多い。さらに長方形と円形の両者を組み合わせるものは備前の旭川中流域や吉井川下流域に限られるほか、河内の中田遺跡にも点在する。

③**脚部** 本遺跡の脚部は緩やかに裾が広がり、端部を拡張せずに丸くおさめる。同様の形態は吉井川上流域の才の峪遺跡、同中流域の塚風呂遺跡、千種川下流域の東有年沖田遺跡で認められ、個体数は播磨西部に多い。また本遺跡の器台脚部には円孔が1段6方向、2段7方向に配置される。脚部に円孔を施す器台は美作の才の峪遺跡、播磨の東有年沖田遺跡のみで認められるが、孔の数は少ない。

#### 4 今岡中山遺跡における器台の成立

以上の検討から、今岡中山遺跡出土器台は、①上下に拡張する口縁端部は備前の旭川下流域や備中



1 足守川矢部南向、2 津守、3・4 上東、5 平岡西、6・7 みそのお、8 北方長田、9・10 石岡川原尾島、11 小原、12 才の嶮、13 塚風呂、14 谷の前、15 江尻向山、16 江崎砂川、17 門前池、18~21 今岡中山、22 徳平、23・24 木位出、25 有年原田中、26 有年沖田、27 周世入相、28 古宮部・芝谷、29・30 中出 ※18~21は本書第501頁-54・55、第502頁-57・58

第576図 吉備周辺における弥生時代後期の器台 (1/15)

の足守川流域、②口縁端部の円形浮文は弥生時代中期の特徴、③胴部の突帯は備前の旭川中流域や吉井川流域と播磨の千種川流域、④胴部の長方形の透かし孔は備前東部の吉井川流域や播磨の千種川流域、⑤端部が丸くおさまる脚部は播磨の千種川下流域というように、各地域や前段階の影響を受けて成立したことが示唆できる。このほか、胴部に2条の突帯を巡らして口縁部と脚部を区画することや、脚部に数多くの円孔を穿つ特徴は他地域ではあまり認められず、本遺跡の独自性である可能性が高い。突帯を付す器台は弥生時代後期中葉に特殊器台が成立する前段階には存在し、備前の旭川中流域や吉井川流域と播磨の千種川流域の限られた範囲で共有される。本遺跡では弥生時代の遺構のなかで最新段階にあたる段状遺構5の上層から器台等が出土した。これは集落の廃絶時に挙行された祭祀の一端をなすものと考えられ、吉備の特殊器台成立以前の器台祭祀を考える上で好例と言える。本遺跡が所在する美作市大原町は兵庫県や鳥取県との県境に位置し、古代に因幡道（中町B遺跡）や近世に因幡街道が敷設され、古来から瀬戸内海沿岸と日本海沿岸を結ぶ交通の要衝にあたる。よって備前の吉井川流域と播磨の千種川流域の中間地点としての地の利を生かして交流を深めた結果、上記のような各地の特徴を選択し、融合させた独自性の強い器台が成立したと考える。（米田）

#### 参考文献

- ・秋山浩三「他地域との交流」『発掘速報展 大河内展』（財）大阪府文化財調査研究センター 2002
- ・宇垣匡雅「鋸歯文をもつ土器」『考古学研究』第47巻第2号 考古学研究会 2000
- ・大橋雅也「器台形土器」『吉備の考古学的研究』（上）山陽新聞社 1992
- ・岡山県立博物館『土墓を彩る－特殊器台の系譜－』平成13年度特別展図録 2002
- ・福井 優「吉備の弥生器台－器台の展開からみた吉備弥生社会－」『古代吉備』第23集 古代吉備研究会 2001
- ・安川 満「吉備の特殊器台とその拡散」『邪馬台国時代の吉備と大和』資料集 香芝市二上山博物館 2002

#### 挿図出典

- ・浅倉秀昭「谷の前遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』191 岡山県教育委員会 2005
- ・伊藤 晃「塚風呂遺跡」『吉井町史』史料編上 考古編 原始 吉井町 1991
- ・井守徳男「本位田遺跡」『中国縦貫自動車道建設に伴う埋蔵文化財調査報告書（佐用編）』（兵庫県文化財調査報告 第11冊）兵庫県教育委員会 1976
- ・宇垣匡雅「弥生墳丘墓と前方後円墳」『新版 古代の日本』第4巻 角川書店 1992
- ・宇垣匡雅・河田健司「北方長田（水質試験所）遺跡」『岡山市埋蔵文化財調査の概要』岡山市教育委員会 2001
- ・枝川 陽ほか「門前池遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』9 岡山県教育委員会 1975
- ・江見正己・島崎 東ほか「足守川矢部南向遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』94 岡山県教育委員会 1995
- ・小嶋善邦ほか「百間川原尾島遺跡6」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』179 岡山県教育委員会 2004
- ・小林利晴ほか「上東遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』158 岡山県教育委員会 2001
- ・財団法人八尾市文化財調査研究会『財団法人八尾市文化財調査研究会報告』43 1994
- ・瀬戸町誌編纂委員会「江尻向山・下鉄砲山出土土器」『瀬戸町史料集』瀬戸町 1985
- ・高畑知功ほか「津寺遺跡5」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』127 岡山県教育委員会 1998
- ・椿 真治ほか「みそのお遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』87 岡山県教育委員会 1993
- ・兵庫県史編集専門委員会『兵庫県史』考古資料編 1992
- ・中田宗伯「東有年・沖田遺跡」『赤穂市文化財調査報告書』56 赤穂市教育委員会 2003
- ・長谷川 英「平岡西遺跡Ⅰ」『御津町埋蔵文化財発掘調査報告』8 岡山県御津町教育委員会 1992
- ・行田裕美・小郷利幸ほか「小原遺跡」『津山市埋蔵文化財発掘調査報告』第38集 津山市教育委員会 1991
- ・湊 哲夫・中山俊紀「才の峪遺跡」『津山市埋蔵文化財発掘調査報告』第18集 津山市教育委員会 1985
- ・宮崎康雄「突帯の付く器台について」『古曾部・芝谷遺跡』高槻市文化財調査報告書 第20冊 1996
- ・甲斐昭光「周世入相遺跡」『兵庫県文化財調査報告書』第70冊 兵庫県教育委員会 1990
- ・柳瀬昭彦ほか「上東遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』16 岡山県教育委員会 1977
- ・柳瀬昭彦ほか「百間川原尾島遺跡5」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』106 岡山県教育委員会 1996

## 第5節 尾崎遺跡出土の破鏡

### 1 尾崎遺跡出土破鏡の特徴

尾崎遺跡F区では、側溝の掘削中に破鏡（M1）が出土した。側溝掘削後に調査区全体の掘り下げを行ったが、遺構は検出できなかったため、包含層出土遺物として報告した。ただ、本文中ではM1についてあまり触れられなかったため、本節において特徴を記述したい。

M1は長さ19.15mm、幅9.45mm、厚さ3.33mmで、復元鏡径は8.5cmほどである。色調はやや青みがかった黒色を呈しており、鑄上がりは良好である。鏡の外縁部の小破片であるため、鏡種を判定することは困難であった。そこで愛媛大学の田崎博之氏に鑑定を依頼したところ、後漢後半頃の小形連弧文鏡（内行花文鏡）の可能性が高いという御教示を得た。

M1の破断面は3面あり、そのうち2面の実体顕微鏡写真を写真42に示した。また、鏡面、鏡背面の実体顕微鏡写真も掲載した。

A面は研磨を施しており、光沢を帯びる。研磨は面を中心に、角もわずかに削り落としていた。条線はA面のほぼ全面に認められた。条線は鏡面に斜行する方向が多いが、それ以外の方向も観察できる。B面は折損時の皺が認められ、研磨は行っていない。写真を掲載しなかったC面はB面に近い。

研磨は鏡背面にも実施していた。鏡背面の縁端部には幅0.5mm程度の面が形成され、その面に微細な条線が観察できた。条線は異なる2つの方向が観察できることから、最低でも2回は方向を違えて研磨を行ったことが分かる。面取り状の研磨を行い、その端部をさらに研磨して角を落とした状態であった。外縁端部が研磨により2回ほどの面取りされたような状態になっているため、全体的にシャープさが欠けてやや丸みを帯びたような印象が強い。この研磨面に切られる形で、面に直交する方向の条線も見られた。

鏡面の端部にも条線が認められた。鏡面の条線は端部のみにわずかに観察できた。場所はA面側に偏り、B面に近づくにつれて条線は見られなくなる。鏡背面のように面を形成しておらず、わずかに丸みを持たせるに留まる。条線は鏡端部に斜行するような方向であった。

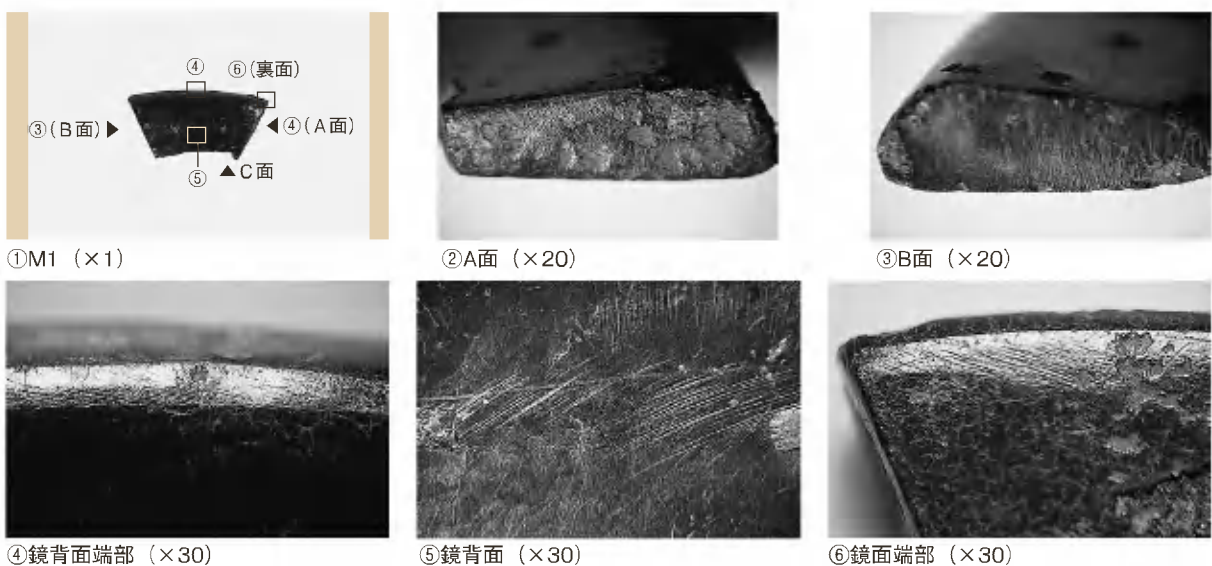


写真42 破鏡（M1）の研磨痕

## 2 岡山県内遺跡出土の破鏡の研磨痕

M1はA面に入念な研磨を施し、鏡背面には外縁端部を面取りするような研磨が施されていた。また、鏡面にも研磨痕が認められた。ところで、研磨という行為には、破損した状態の鏡に一定の価値を認め、それに新たな価値を付加するという意図があると考えたい。このように鏡片に二次加工を施して価値を付加する例としては、穿孔を施した鏡片があげられる。

岡山県出土の穿孔された鏡片としては、岡山市郷境4号墳〔中野編1994〕、鏡野市竹田妙見山古墳〔今井ほか1984〕などがあげられ、いずれも破断面を研磨しているとの報告がある。このうち前者について実見を行った。郷境4号墳鏡は内行花文鏡である。破断面への研磨は、面には行っておらず、条線は認められなかった。外縁部の破断面は角が滑らかになり、光沢を帯びていた。内区は鏡自体が薄いため、面に対する研磨というより、角が取れて全体的に丸くなったような印象がある。鏡背面の外縁端部は光沢が著しく、擦れたような状態を呈していた。ただ、条線は認められなかったため、研磨の具体的な内容は不明である。穿孔を施した鏡片は懸垂しての使用が想定できるため、使用時の擦れも当然考えられる。また、穿孔という再加工を行う時に、破断面に対して角を落とすような加工を行った可能性もある。郷境4号墳出土鏡の破断面に人為的な研磨を施したとしても、M1の研磨とは異なることは確実である。

鏡自体の鑄上がりは良好で、破断面への研磨をほとんど行っていない鏡片も認められた。岡山市津寺遺跡の竪穴住居218出土鏡は内行花文鏡である〔中野編1998〕。三角形状を呈する破片で、鏡背面には丹が付着している。穿孔は行われていない。角は擦れたように摩滅しているが、面全体に対する研磨は施しておらず、この点ではM1とは異なる。

岡山県内出土の鏡片のうち、岡山県古代吉備文化財センター収蔵遺物の実見を行ったが、上記を含めたいずれの資料にもM1と同様の研磨痕は確認できなかった。穿孔を施した鏡片は、破断面の角が摩滅したような状態であったが、条線は認められない。また、津寺遺跡竪穴住居218出土鏡〔中野編1998〕も破断面への研磨はなく、破断面の角が摩滅したような状態であった。他の鏡片でも条痕は確認できず、面取りのような変形も行っていない。M1以外の鏡片については、手擦れの可能性が想起された。

鏡片への研磨には何らかの意図が存在すると考える。弥生時代中期中葉以前段階の集落から出土する青銅器には、転用小形利器がある〔吉田2006〕。転用小形利器は研磨により明確に刃部を削出しているため、加工の意図は明白と言える。また、穿孔が施された鏡片は垂飾品として用いられたことが指摘されている〔正岡1979〕。これらに対して、M1のA面に対する研磨や鏡背面の縁端部に面取りを施す研磨の意図は、現状では不明確と言わざるを得ない。ところで、鏡片には文様を含む破片とM1のように外縁部で文様の認められない場合があるが、両者を同じ価値基準で計ることが果たして妥当であろうか。また、研磨が鏡片に一定の価値を付加する可能性も考えられる。破鏡に施す研磨の意図を探るためには、研磨の有無のみならず研磨痕自体の詳細な観察が不可欠であり、観察データの集積が必要と考える。 (上村)

### 参考文献

- ・今井 堯ほか「竹田墳墓」『竹田遺跡発掘調査報告』第1集 岡山県苫田郡鏡野町教育委員会 1984
- ・中野雅美編「郷境墳墓群」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』89 岡山県教育委員会 1994
- ・中野雅美編「津寺遺跡5」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』127 岡山県居育委員会 1998
- ・正岡陸夫「鏡片副葬について」『古代学研究』第90号 古代学研究会 1979
- ・吉田 広「四国・瀬戸内地域の集落出土青銅器」『日本考古学協会2006年度愛媛大会研究発表資料集』日本考古学協会2006年度愛媛大会実行委員会 2006

## 第6節 穴が辻古墳出土銀装円頭大刀の構造的特質

穴が辻古墳から銀装円頭大刀M1が出土した。M1そのものの特徴については第9章において報告した。抽出した情報を基に作成した復元図が第577図である。

さて、本節では他古墳出土の円頭大刀を中心とした装飾付大刀と比較して、M1の構造的特質を把握することを目的とする。まず、既研究の成果と照合してM1の位置付けを行いたい。

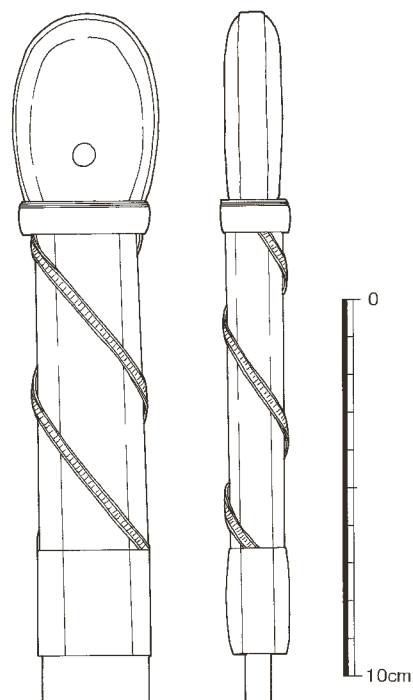
円頭大刀の研究は、高橋健自による定義以降いよいよ深化している〔高橋1911〕。特に瀧瀬芳之〔瀧瀬1984・1986〕、町田章〔町田1987〕の研究は、円頭大刀研究の基礎を構築したものとして評価したい。そこで、まず瀧瀬、町田の研究成果について概述し、その成果と照合してM1を位置付けたい。

円頭大刀、圭頭大刀、方頭大刀の解析を試みた瀧瀬は、柄頭のみならず柄間、鐔、鞘、佩用方法も検討の対象とし、共伴須恵器の編年観から時間的な位置付けを行って、佩用者の性格の解釈も試みた〔瀧瀬1984・1986〕。瀧瀬は、佩用方法と鐔の有無を主な基準として円頭大刀を5分類した。Ⅰ式は無鐔釣手佩用、Ⅱ式は鐔を持つ釣手佩用、Ⅲ式は八窓鐔二足佩用、Ⅳ式、Ⅴ式はともに無窓鐔二足佩用である。Ⅳ式、Ⅴ式の区分は鞘の構造で、前者は鞘全体を金銅板で包むのに対して、後者は鞘中と鞘尻近くに金銅板を巻いただけの準素鞘である。そして、Ⅰ式を5世紀後葉～6世紀中葉に、Ⅱ式、Ⅲ式を6世紀第3四半期に、Ⅳ式を6世紀末～7世紀初頭に、Ⅴ式を7世紀前半にそれぞれ比定した。

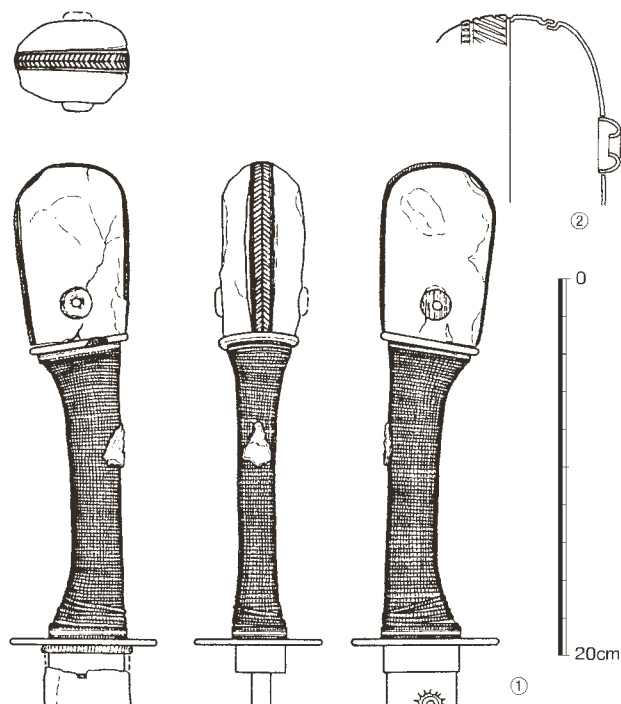
1987年には、町田が島根県岡田山1号墳出土の銀金銅装円頭大刀に対する考察を行った〔町田1987〕。まず、自身が考える儀仗大刀の発展段階について概述し、円頭大刀は第4段階（5世紀第3四半期～6世紀第2四半期）、第5段階（6世紀第3・4四半期）に属すること、柄頭は2種類に分類可能であることを述べた。町田の分類は柄頭の材質、構造を基準としたもので、銀板を打ち出した表裏2枚の匙製品を合わせたものをA型、銀や鉄の板で筒形に作ったものをB型とした。さらに、韓国の伽耶地方から出土する伽耶式円頭大刀と、それを倭（日本）で改作した倭式円頭大刀とに大別し、細部の相違点も考慮に入れて11型式という分類案を示して編年を組み立てた。11型式の特徴については省略する。

さて、瀧瀬、町田の分類案にM1を照合すると、それぞれ瀧瀬分類Ⅰ式（無鐔釣手佩用）、町田分類伽耶式円頭大刀A式となる。瀧瀬Ⅰ式と伽耶式円頭大刀A式の共通点は、柄頭が匙状金属板を合わせた構造であること、鐔を持たないことの2点であり、この条件はM1も満たす。時期は、瀧瀬Ⅰ型式がTK10型式期、伽耶式円頭大刀A式が5世紀後半～6世紀第3四半期で、ともに穴が辻古墳の時期とおおよそ合致する。このことから、瀧瀬Ⅰ式、伽耶式円頭大刀A式にある2つの共通点は、TK10型式期（おおよそ6世紀中葉）における円頭大刀の特徴の1つと考えることができる。

瀧瀬、町田の研究成果と照合してM1を検討した。TK10型式期の円頭大刀に共通する特徴—柄頭が匙状金属板を合わせた



第577図 M1復元図 (1/2)



第578図 島根県上塩冶築山古墳出土円頭大刀 (1/4)  
(大谷1999a)

構造で、鐔を持たないという2点の特徴一は、M1にも認めることができた。その点では時期的な矛盾は示さず、M1の時間軸上での位置付けに大きな問題はない。しかし、M1は瀧瀬や町田が示した円頭大刀の分類基準のみでは捉えきれない構造も有する。そこで次にM1自身に対する構造の属性分析を行い、その特質を明らかにしたい。分析はM1を構成する部品ごとに行い、他の円頭大刀との共通点およびM1の特異点の抽出に努める。

**柄頭** 柄頭は、高橋が装飾付大刀の分類の基準とした部品である〔高橋1911〕。町田が試みたように、円頭大刀の柄頭は金属板を打ち出した表裏2枚の匙製品を合わせるA型と銀や鉄の板で筒形につくったB型に大きく二分できる〔町田1987〕。M1の構造が町田A型であることは、第9章で記述したように判断できる。そこで本稿では、A型柄頭の円頭大刀を検討対象とする。

円頭大刀（A型）の構造を詳細に検討した研究として、まず島根県上塩冶築山古墳の成果について触れる〔大谷1999 a・b〕。上塩冶築山古墳で出土した金銀装円頭大刀は、柄頭が長さ9.3cm、最大幅6.0cm、厚さ4.4cmという大形品である（第578図①）。円頭形を呈する木質の胎を、打ち出しにより匙面を作った2枚の銀板で両側から挟むA型柄頭で、合わせ部は銀製のベルトで留める構造である。匙状銀板の縁は内側に窪むように折り曲げられており、ここに銀製ベルトを引っ掛けて固定する（第578図②）。なお、匙状銀板同士は接していない。柄頭は金銅製の切羽を嵌めて柄に固定する。

上塩冶築山古墳大刀は匙状銀板を合わせるA型で、合わせ目に銀製ベルトを巻くという構造である。さらにベルトを設置するために、匙状銀板の縁部を折り曲げて窪ませるといった工夫も認められた（第578図②）。ベルトの懸け方に工夫を施し、匙状銀板同士が接することがないようにしていたが、このことにより柄頭の厚みを増す効果が期待できる。対するM1の匙状銀板の合わせ方は、片方の匙状銀板にそれよりひとまわり小さくしつらえた匙状銀板を嵌め込む構造である（第430図）。M1の先端は皮革ベルトを巻くが、上塩冶築山古墳の銀製ベルトとは異なり、匙状銀板を留めるという機能は備えていない。柄頭の基部は鉄製の責金具で固定する。上塩冶築山古墳大刀では、金銅製の切羽が同様の役割を果たすと考える。

上記のように、匙状金属板を合わせるA型柄頭は、構造から細分可能である。すなわち、M1のように匙状金属板を嵌め込んで合わせるA1型、上塩冶築山古墳大刀のように匙状金属板の縁同士を合わせるA2型に細分できる。なお、A2型については、上塩冶築山古墳例のように匙状金属板の縁同士は直接触れないタイプ以外に、匙状金属板の縁同士を接するように合わせるタイプが存在する可能性が高い。円頭大刀の柄頭の系譜や構造変化、他型式の装飾付大刀との関わりを追求するうえで、匙状金属板の合わせ方の追求は重要な視点と考える。

**柄間** 柄間については、柄巻である銀線について触れ、柄木に関しては後述する。M1の柄巻は、①銀線相互の間隔が開いていること（2.4～2.8cm）、②2本の銀線を同じ方向に巻くこと、③銀線の構造の3点で特異な特徴を示す。

1点目の特徴については、橋本英将が類例をまとめている〔橋本2006〕。橋本は金属線相互の間隔が開く柄巻を「らせん状柄巻」と仮称して資料の集成を行った。そして、らせん状柄巻を持つ大刀が朝鮮半島南部と日本列島に分布することを指摘し、それぞれの特徴を示した。前者では龍文環頭大刀、素環頭大刀、三墨環頭大刀、円頭刀子などに見られ、やや円頭刀子に多い。時期はおおむね5世紀第4四半期～6世紀第1四半期。対する日本出土例は、現状では円頭大刀、圭頭大刀、方頭大刀の可能性が考えられる大刀に限定される。時期は6世紀第3四半期～7世紀第1四半期。そして、相互比較から、朝鮮半島出土大刀のほうが、柄巻の間隔が比較的広い事例が多いことを指摘した。

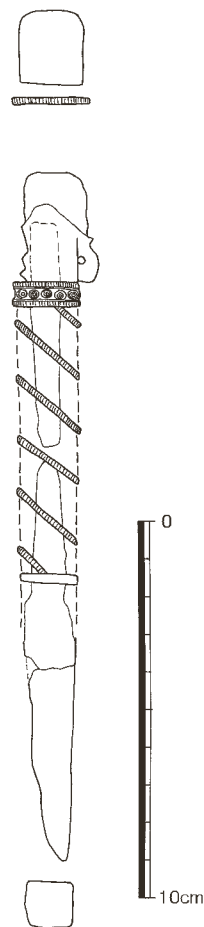
橋本が指摘した、らせん状柄巻における金属線の間隔について、具体的数値を示す。橋本は、論文中において5点のらせん状柄巻を持つ装飾付大刀の実測図を掲載した。その図をもとに金属線間の数値を計測すると、韓国・陝川玉田M3号墳が1.0～1.5cm、日本・島根県下布瀬1号横穴墓が0.5cm、福島県阿弥陀壇古墳が0.8cm、群馬県八幡観音塚古墳が0.2cm、千葉県金鈴塚古墳が0.2cmをそれぞれ測った。計測値で具体化すると、日朝における差が明瞭となる。しかし、M1は現状で認識できた朝鮮半島の事例よりも間隔が広く、そのみを比較対象として生産地の同定を行うことは難しい。

2点目の特徴について。柄間に巻く金属線は1本のみを使用する人が多い。しかし、M1は2本の金属線を同じ方向に巻くという、「二重らせん構造」になっていた。金属線は刃部側、棟側それぞれからちょうど1巻き分だけ延ばし、柄頭の棟側、刃部側に収める。釦（刃部側）から柄頭（刃部側）という固定の方法で、棟側も同様である。

2本の金属線を同じ方向に巻く資料として、韓国・金鈴塚出土の円頭刀子（5世紀後半）（第579図）〔梅原1932〕があげられる。金鈴塚出土の円頭刀子（3振）は二重らせん構造の柄巻きである。柄は刀身の2倍の長さで、釦から貴金具まで金属線を巻く構造であった。刀子の側面中央から延びて側面中央で収めるという点でM1とは異なる。巻く回数は2巻き半で、M1よりも多い。金属線の間隔はM1より狭く、1.0cm前後である。なお、金鈴塚では嵌珠金装鉛筆形繫飾と称された副葬品も出土しているが、この装飾品も二重らせん状に金属線を巻くという構造を示す。

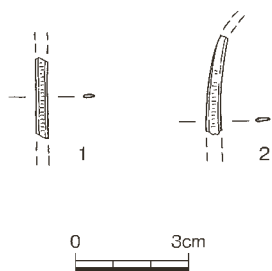
3点目の特徴である金属線自体の構造について記述する。M1の銀線は、幅0.4cm、厚さ0.1cmほどの革紐に銀板を被せるといった構造である。端部は、刀身側端部は釦に入れ、柄頭側端部はおそらく柄頭の貴金具で固定したと推測する。表面には、梯子状の文様が入っている。

M1の柄巻と類似の資料として、破片のため全体構造は不明だが、岡山市西山3号墳出土品がある（第580図）〔福田1996〕。西山3号墳は、奥側から見て左片袖式の横穴式石室を主体部とする円墳で、穴が盗古墳と同時期のTK10型式期に比定できる。刀装具の構造は、幅4mmほどの胎に銀板を被せるもので、表面は梯子状の文様で飾る。報告書では貴金具と報告されているが、柄木に巻く金属線の可



第579図 韓国金鈴塚古墳出土円頭刀子（1/2）（梅原1932を再トレース）





第580図 岡山市西山3号墳  
出土刀装具 (1/2)  
(福田1996を再トレース)

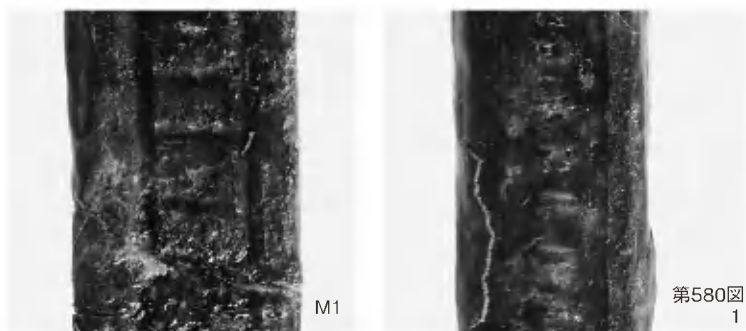


写真43 刀装具文様アップ (左: 穴が辻古墳・右: 西山3号墳)

能性が高い。裏面に付着する木質の筋は金属線の主軸と斜行するが、この特徴もM1と共通する。第580図2は振れるような形状を示すが、M1の柄木側面部分に当たる金属線の形状と合致する。これらのことから第580図の西山3号墳出土刀装具は、大刀の柄間に巻く金属線と判断した。

ただ、穴が辻古墳M1と西山3号墳刀装具(第580図)は、構造と文様モチーフについては共通するが、施文方法は相違していた(写真43)。M1では革紐に銀板を被せた後に刻みを施文しており、窪む文様である。対する西山3号墳例は、施文部分が盛り上がるような状況になっていた。このことは、西山3号墳例では型をあてがったか、文様を打ち込んだ後に銀板を裏返して芯となるものに固定したという2つの可能性が考えられる。

金鈴塚出土刀子の金属線は、幅4mm前後で、表面には長軸に直交する刻みを入れており、おおよそM1と類似した特徴を示す。ただ、具体的な構造や施文方法は判然としない。

柄巻については、橋本が細分を試みている〔橋本2003〕。橋本は、龍鳳環頭大刀を主対象として、柄頭、筒金具、責金具、柄巻、鞘金具それぞれの細分を行い、組み合わせについて検討した。柄巻は、銀線巻きと金銅板巻きに大別し、さらに銀線巻きについては文様と断面形から二細分した。橋本が検討した銀線巻きは、文字通り銀のみを使用したもので、M1のような構造—芯となるものに銀板を被せる—の金属線は穴が辻古墳の調査まで意識されてこなかった。ただ、金属線ではなく責金具には青銅の芯に金属板を巻く構造のものが存在する(島根県上塩冶築山古墳〔大谷1999a〕、長崎県双六古墳〔田中2006〕など)。金属線、責金具ともに類例の把握を行う必要があると考える。

**柄木・鍔** 柄木の遺存状況は良好とはいえず、得られた情報は少ない。長さという基本的な情報は無論のこと、白木のまま用いたのか、漆などにより彩色を施したのか等、不明な点も多い。ただ、断面が八角形であることは確認できた。断面八角形という特徴は鍔にも共通する。

鍔は鉄地銀貼製である。柄木に嵌め込むことにも関わるが、断面は八角形を呈する。ただ、正八角形ではなく、刃部側の辺が幅0.4cmと最も狭く、棟側の辺は1cmを測る。八角形状に成形した鉄の鍔に銀を被せる構造で、銀板の両端は1mmほどを内側に折り曲げている。

**銀装円頭大刀M1の構造的特質** M1を構成する各部品の構造について見てきたが、柄頭と柄間の構造に特徴を見出すことができた。すなわち、柄頭は町田分類のA型であるが、従来確認されてきたような合わせ方(A2型)とは異なる嵌め込み式の合わせ方(A1型)を確認した。柄間は幅広の金属線2本を、間隔を開けて巻く「二重らせん構造」を呈していた。「二重らせん構造」の金属線は、金鈴塚出土の円頭刀子に認められる。また、金属線は純粋なそれではなく、芯となるものに薄い銀板を巻くという構造で、類例は西山3号墳で出土している。

M1から抽出した上記の特徴は、これまでの調査、研究では十分に認識されてこなかった構造である。日本列島内における装飾付大刀の製作は、TK43型式期に定着、本格化することが明らかになっている〔松尾2003・2005〕。そして、列島内資料を中心とした装飾付大刀全般の研究は、TK43型式期以降の資料を主対象として取り組まれてきた。M1はTK10型式期に位置付けられ、列島内での装飾付大刀製作が本格化する前段階に相当する。これらのことは、M1にみた特異な構造が、TK43型式期以降には定着しなかった可能性を示す。さらに、柄巻に見た「二重らせん構造」の類例が韓国の金鈴塚に認められたことから、M1の系譜は朝鮮半島の装飾付大刀に求められる可能性が想起されよう。それはM1が、装飾付大刀の生産が本格化するTK43型式期より古く位置付けられることから示唆される。ただ、その製作地を朝鮮半島に断定することは困難で、朝鮮半島産の大刀を日本列島内の工人が模して製作した可能性も考慮に入れなければならない。

本節ではM1の構造的特質について検討してきたが、穴が盗古墳の被葬者がM1を入手した背景までは追求できなかった。装飾付大刀については中央から分与して地域掌握の道具とする考えや〔町田1976〕、特定装飾付大刀の佩用者を特定氏族と結びつける評価もある〔桐原1969〕。新納泉は装飾付大刀の佩用者を検討する際に、古墳の規模や副葬品の種類、分布の時期的変化など多角的な視点から検討し、兵制との関連で考察を深めた〔新納1983〕。穴が盗古墳の被葬者がM1を入手した背景の追求は、M1の構造が特異であるが故の困難さを伴う。ただ、刀装具ごとの構造分析により、共通構造の部品を持つ装飾付大刀の探索は可能である。高橋の分類基準〔高橋1911〕とは異なる共通性の追求により、M1の類例を把握することは可能ではないだろうか。そのことからM1の系譜や穴が盗古墳の被葬者像にも迫り得るのではないか。今後の検討課題としたい。 (上楯)

#### 参考文献

- ・梅原末治「金鈴塚」『慶州金鈴塚・飾覆塚発掘調査報告』(大正13年度古蹟調査報告 第一冊) 朝鮮総督府京城 1932
- ・大谷晃二「武器・武具」『上塩冶築山古墳の研究』島根県古代文化センター 1999 a
- ・大谷晃二「上塩冶築山古墳出土大刀の時期と系譜」『上塩冶築山古墳の研究』島根県古代文化センター 1999 b
- ・桐原 健「頭椎大刀佩用者の性格—信濃出土の頭椎大刀を中心にして—」『古代学研究』56 古代学研究会 1969
- ・高橋健白『鏡と剣と玉』富書房 1911
- ・瀧瀬芳之「円頭・丰頭・方頭大刀について」『日本古代文化研究』創刊号 古墳文化研究会 1984
- ・瀧瀬芳之「円頭大刀・丰頭大刀の編年と佩用者の性格」『考古学ジャーナル』No.266 ニューサイエンス社 1986
- ・田中総一「双六古墳」『壱岐市文化財調査報告書』第7集 長崎県壱岐市教育委員会 2006
- ・新納 泉「装飾付大刀と古墳時代後期の兵制」『考古学研究』第30巻第3号 考古学研究会 1983
- ・橋本英将「外装からみる装飾大刀」『鉄器研究の方向性を探る』鉄器文化研究会・大手前大学史学研究所 2003
- ・橋本英将「らせん状柄巻をもつ装飾付大刀—中村1号墳出土大刀の検討から—」『出雲市埋蔵文化財発掘調査報告書』第16集 出雲市教育委員会 2006
- ・福田正継「西山古墳群」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』109 岡山県教育委員会 1996
- ・町田 章「環頸の系譜」『研究論集』Ⅲ 奈良国立文化財研究所 1976
- ・町田 章「岡田山1号墳の儀仗大刀についての検討」『出雲岡田山古墳』島根県教育委員会 1987
- ・松尾充晶「装飾付大刀」『考古資料大観』7 小学館 2003
- ・松尾充晶「研究の目的と方法」『装飾付大刀と後期古墳—出雲・上野・東海地域の比較研究—』島根県教育庁古代文化センター・島根県教育庁埋蔵文化財調査センター 2005

## 第7節 穴が辻古墳築造過程の復元

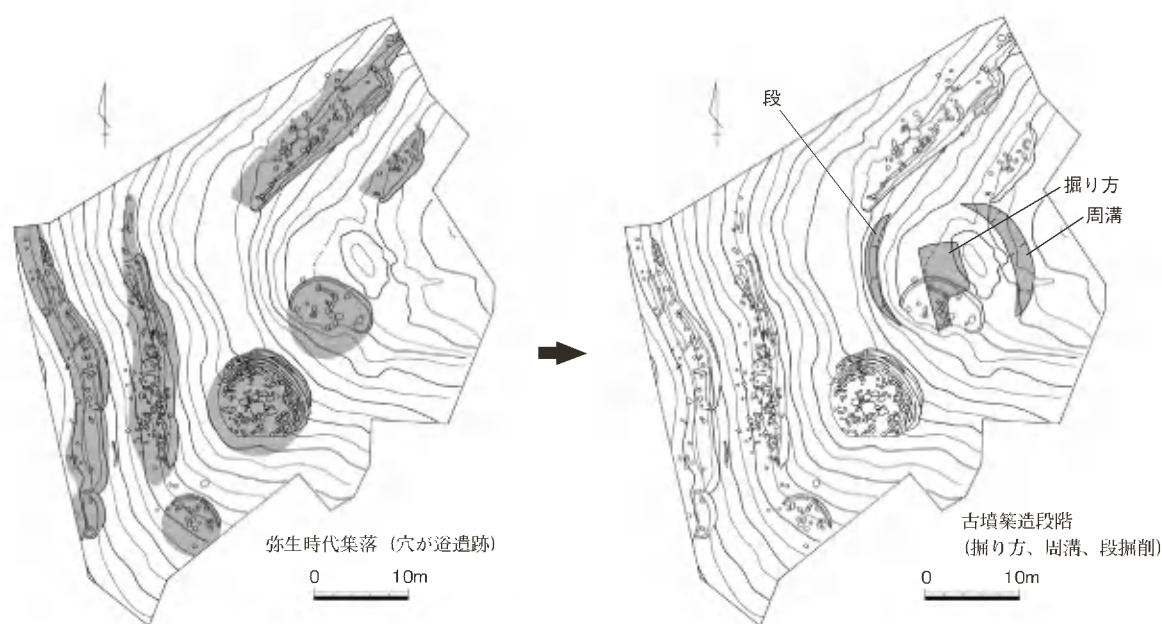
穴が辻古墳は、東から西に緩やかに下がりながら延びる尾根上に位置する。尾根は標高258.0m付近で傾斜が急になり平野へと下っているが、この傾斜変換点が古墳の築造場所として選ばれた。古墳の位置からは、現在、水田が広がる平野とそこを貫流する吉野川が一望できる。

**地形改変** 古墳築造は地形の改変から始まる。そのことは古墳築造以前に廃絶した弥生時代の集落跡から確認できた。穴が辻遺跡と称したこの集落跡は弥生時代後期前葉から中葉に営まれたもので、竪穴住居と段状遺構、土壙から構成されていた。そのうちの1軒、竪穴住居1は古墳の羨道から玄室袖部と重なる位置で検出した。竪穴住居1は直径6mの円形居住であったが、その南半分は削られていた。これは古墳築造時に削られたと考えられる状況であった。

地形改変では、墳丘部分を掘削することで造形を行っていた。それは単に円丘状に削出するのではなく、西側斜面に段を造成するというものである。この段については後述する。また、古墳の東側を画する周溝はこの段階で設置したと考える。ただし、この段階で掘削した溝の幅は完成時のそれより2倍ほど広く、完成時には盛り土で半分ほど埋め戻していた。この段階の作業は、墳丘の「芯」を造り出すことを主目的としたもので、以降はこの地山削り出しの芯を基礎として盛り土を施すことになる。

**整地** 地山を削り整えた後に、盛り土により整地作業を行う。前述したが、古墳は東から西に下がる斜面の傾斜変換点に位置する。そのため、地山を削り出した状態でも西側が低過ぎたらしく、そちら側のみ盛り土を施していた（第582図①）。この盛り土は、厚さ12~22cmで、東側にいくにつれて徐々に薄くなっている。この整地の後に、石室を設置する掘り方の掘削作業に取りかかる。

**掘り方掘削** 掘り方の平面形は、当初から左片袖の石室を築造することを企画して、その形状に則した「片袖形」に整えた。ただし、掘り方の平面形は、石室袖部に当たる部分で拡張する形状を呈しており、長形状である玄室プランと完全には合致しない。拡張部分は、上述の弥生時代竪穴住居1が重なる部分で、住居建築の時に地山が削られた所に相当する。掘り方の掘削時には、地山を掘るとい



第581図 地形改変 (1/800)

う共通認識が浸透していたと考える。ところが、袖部については、弥生時代においてすでに地山が削られていた。地山を掘削するという分かりやすい共通認識のもとに作業を進めた結果、想定外に地山が失われていた部分については、掘り過ぎてしまったと推測する。また、羨道部も埋没した弥生住居を壊すように築造することになったのであるが、住居と重なる部分は、玄室の地山部分よりも掘り過ぎていた。掘り過ぎ部分については、埋め戻しを行い（第421図）、地山部分と高さを揃えていた。

**石室構築** 掘り方の掘削後、石室の構築に取りかかる。横穴式石室の構築は、まず基準となる石材の設置から着手する。奈良県牧野古墳・藤ノ木古墳の石室構造を検討して、構築過程を復元した北垣聡一郎は、一般に石室構築において最初に配石されるのは奥壁石と玄門石としている。その理由として、それらの石材は石室平面の基準（指標）石とみなすことができることを挙げている。この基準石をもとに玄室幅と長さが予定されるという〔北垣1987・1990〕。穴が盗古墳でも玄門石、特に袖部のそれに大形の石材を用いており、やはり基準と考えることができそうである。

基準石の設置後、基底石を並べていく。基底石の並びが、石室の企画そのものとなる。並べる順序を含む築造工程の復元に際して、北垣は調整石である「合石」を重視した〔北垣1987・1990〕。合石とは、企画された幅に石材を並べる時に生じる石材同士の隙間を埋めるための調整用の石材である。牧野古墳の場合、合石が認められない左壁を先に築いて全長を定め、それに長さを揃えるために右壁では最奥に合石となる小形の石材を用いたと復元されている〔北垣1987〕。

穴が盗古墳の石室築造過程を復元する。用いる石材は花崗岩である。石室の築造過程は現状で大きく3段階に分けることが可能で、すでに消失した壁体上部や天井石の配置を考慮に入れると4ないし5段階の工程が推測される。説明の便宜上、省略記号を用いる。省略記号は北垣のそれに習いながら、一部アレンジしたものをを用いる<sup>(1)</sup>。ただし、配石の順序については厳密な復元ができず、推測可能な範囲内に留めた。また、石室は単独構築ではなく、墳丘と平行して作業を進めたことが調査で明らかになった。墳丘築成は現状で5段階にわたることが判明しており、第2・3段階盛り土が石室構築と関連する1次墳丘（第582図②・③）、第4・5段階盛り土は墳丘整形の2次墳丘に相当すると考える（第582図④・⑤）〔角田2005〕。なお、第1段階盛り土（盛り土①）は、掘り方掘削以前にすでに行われるもので、前述した。以下、築造順に従いながら記述を進める。

**第1段階目** まず、東側玄門石（袖①1）を配置する。この石材が、石室構築の基準としての役割を担う。そして、その西側に袖①2を置く。袖①2の設置により袖部の幅が決まる。それと前後する段階で、奥壁の中央石材を設置する。奥①1は東側玄門石（袖①1）の正面にあたり、石室の南北中軸を通る。そして、奥壁では、奥①1だけが小口積みの置き方をしていた。小口を玄室に向けるために、根固め石を噛ませていることから、意図的な行為と考えられ、基準石としての役割を考えた。

同様に、基底石の中で小口を玄室に向ける置き方の石がもう2個あり、どちらも根固め石を入れて、平らな面を垂直に立てるように工夫していた（写真44）。これらも基準石とした可能性が高い。西①1は西側壁の玄門石で、基準石とするのに問題はない。もう1石は、東①1で、三角形の頭部を持ち、東側壁に並ぶ他の



写真44 東①1根固め石（北から）

基底石より高い。この石は石室の東西中軸より北側に位置し、南北中軸を通る奥壁の基準石（奥①1）とは異なる。設置位置の特徴は、この石材から南側では掘り方が拡張することを指摘できる。配置方法の手間を重視して、東①1も基準石の1つと認めたい。

基準石の設置後、それ以外の基底石を並べていく。ただ、奥壁と東側壁の前後関係については、判断できなかった。互いに接する北東角では、どちらも合石のような小振りな石材を使用しており、それぞれで調整を図った痕跡が窺えたためである。奥壁最東の石材（奥①5）と東壁最北の石材の高さがほぼ揃うことから、奥壁と東壁は同時に詰めて調整した可能性を考える。

奥壁は奥①1を置いた後、東西に基底石を配置していく。奥①4・5は小振りな石材を用いており、東側壁との調整を図っている。そして、2段目に取り掛かる。奥壁の東側2石は1段目が低かったため、奥②2の上にもう1石置いており、ここだけ3段となっていた。ただし、奥②3と奥②4の上端がほぼ同じ高さに揃うことから、奥②3も2段目の工程に含めて考えた。奥②3は奥②1の上に、奥②4は奥②2の上にそれぞれ置かれているため、東側から順次並べたことが分かる。

東側壁は袖①2と東①1の間を充填するように3石配置するが、その順序としては北からの配石を考えた。東①4は袖①2の西側に入り込むように置かれており、南側に範囲の制限がない。対する東①2は、東①1に南接するため、北側に制限がある。仮に南から配石した場合、東①2の位置の石材は、厳密な選択、もしくは合石の使用を要する。それらの作業が省けるということから、北から南への順序を考えた。その後、東①1の北側に合石状の石材を充填して、奥壁との調整を図る。

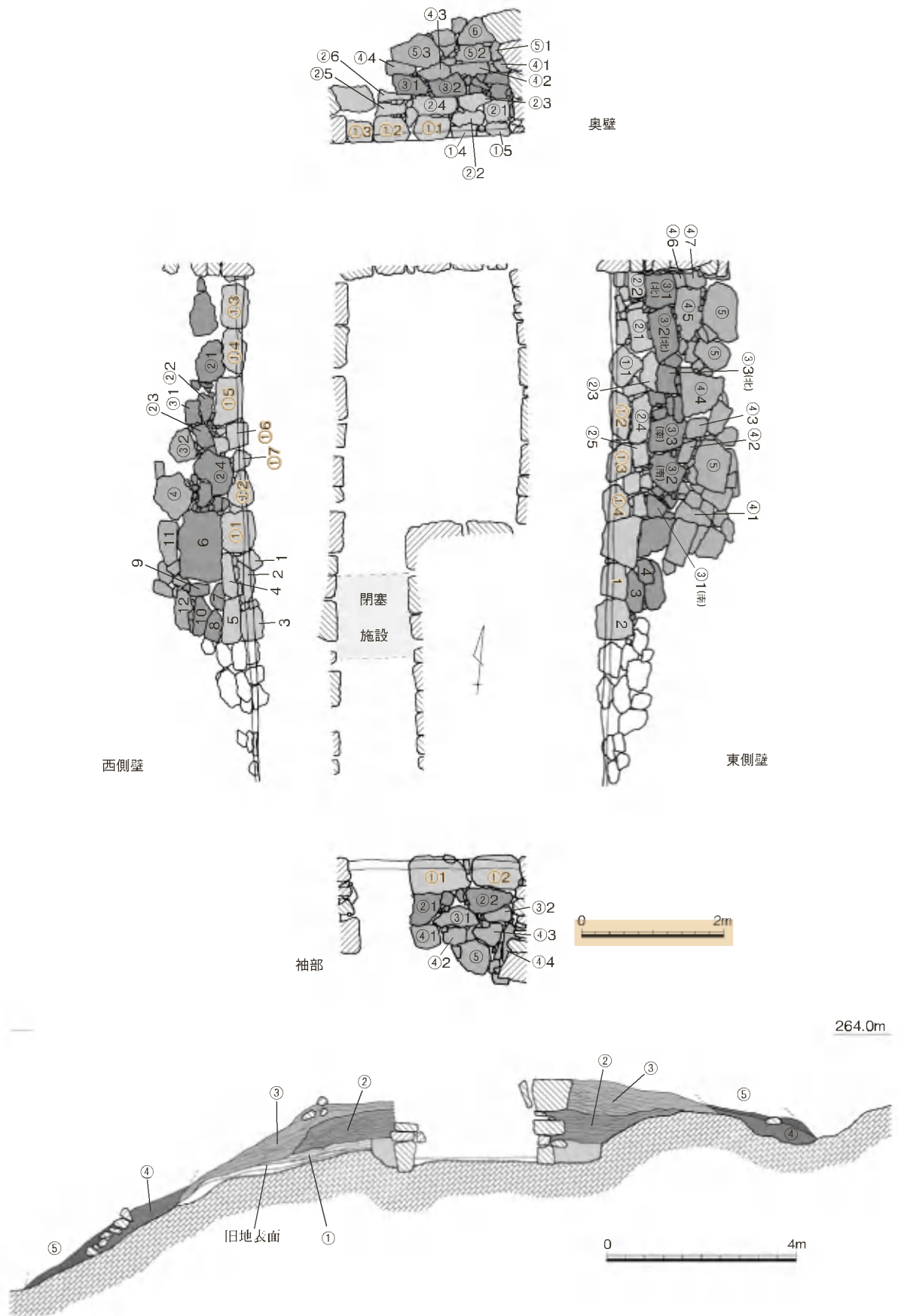
引き続き東側壁も2段目に着手する。2段目は東①1の南北で手順を変えている。北側は東②1・2と北に向けて並べるが、それは東②2が奥②1の横に入ることから推測した。そして、南側は袖部付近で小振りな石材を多用しており、北側から並べて袖部付近で調整を図ったと考えた。

西側壁は崩落が著しく確定的な言及はできない。ただ、西①7がやや小振りであることから、ここで調整を図った可能性が高い。2段目以上は不確定要素が多く、順番を示す番号を付せなかった。

羨道も玄室の構築と同時進行で築く。その根拠は後述する。東側壁は東1、東2と2石並べる。対する西側壁は5石を、2段に分けて配置した。まず、西側玄門石と接する西1を置く。西2は西1に、斜めにかかっており、その前後関係が窺える。そして、西3を置いて、西4・5と続く。

各壁体の基底の状況を見てきた。玄室は袖部が1段目、それ以外が2段目まで、羨道は東側が1段目、西側が2段目まで積み上げた段階である。この段階で掘り方の西側を完全に埋め戻す。埋め戻しは積み上げた石材を安定させるため、石積みと同時に数回に分けて行うと考える。

**第2段階目** 続いて石室構築の2段階目に入る。玄室では、袖部2～3段目が、奥壁3段目が相当する。奥壁3段目は西側から奥③1・2と配置して、それ以东を合石で調節する。西側壁は不明確。東側壁3段目には合石に相当する小石材充填部分が2か所あり、明確な築造順序が定まらない。ここでは北端と南端の石材をともに東③1とし、便宜的に（北）、（南）を付す。東③1（南）は、袖部にもかかっており、「角欠き」の様相を呈する（写真45）。南東角は、これより上を角欠きの状態で構築していた。東③1（南）が角欠きの状況を呈するため、東側壁の南側は、袖部からの流れで構築したと考えられる。この東③1（南）に斜めに乗る形で合石を詰めている。その合石に東③2（南）が斜めに乗るため、東③1（南）との前後関係が窺える。対する東③1（北）と奥壁は明確な角を示し、角欠きの状況ではない。それから南へ東③2（北）、3（北）と並べ、東③3（南）との間に合石を充填して調節を図っていた。



第582図 穴が途古墳構築過程復元図 (1/80・1/120)

羨道では西側壁で特徴的な大形石材を用いていた。西6は西側玄門石（西①1）の2倍の長さで、南側半分は羨道の西4により支えられていた。玄室と羨道を同時に構築すると考えた根拠は、西6の存在である。西6と西②4との間に合石を詰めているが、玄室2段目を北側から配置し、西6と西②4の間で調節を図ったと考えるのが妥当であろう。合石による調節は、当然その両側に石材が存在して初めて可能となる。そのため合石を充填する時には、西6と西②4の存在が前提となる。そして、この合石の上に西④を乗せる。合石の存在なくては玄室西側壁4段目の構築は不可能であるため、羨道も玄室と同時に構築していったと判断した。

さて、石室構築2段階目は盛り土を施しながらの構築になる（盛り土②）。西側壁は盛り土を小円丘状に整える。赤褐色土と暗赤褐色土を厚さ10cm前後で、外側に拡張するように盛り土を施す。一方、東側では、この段階でようやく掘り方を埋め戻した状態である。土質や層の厚さ、外側へ徐々に盛る方法は西側と共通する。また、2段階目の盛り土内では、石室と同質の石材が多く検出された。

**第3段階目** 現状での石室構築の最終段階に取りかかる。この段階では、北東角が特徴的である。2段目の南端は袖部にもかけており、角欠きの構造となっていた（写真45）。北東角でも、3段目で同様の状況が窺えた（写真46）。第582図の奥④1と東④6、奥⑤1と東④7は同一の石材であり、両壁にかかっていることが分かる。また、南東角でも同様の状況を図示しており、袖④4と東④1は同一の石材である。袖④3にかかるように東④1（袖④4）は配置されている。袖部構築からの流れで東壁の構築に移ったのであろう。これ以降は不明確だが、東④2・3に大形の石材を用いており、それらの間を小形の石材で充填するような状況が看取できる。奥壁の構築手順は、角欠きの状況から東側壁構築の継続で東から西に並べていったと考えた。そして、5段目の石積みを重ねる。持ち送りはこの3段階目から著しくなり、角欠きの状況との関わりが考えられる。奈良県の横穴式石室を立体的構造や築造過程という観点から考察した北垣は、角欠きが認められる古墳は構造的には穹窿状を呈すると指摘しており〔北垣1984〕、穴が盗古墳石室の上部構造を示唆する。

また、3段階目ではそれ以前よりも大形石材を使用する傾向が窺え、構造上の矛盾を感じる。これは2段階目盛り土で、掘り方が完全に埋め戻されたことと関わる。つまり、掘り方が完全に埋まったことで、大形石材を牽引して積むことが可能になった。それ以前の段階では、一度掘り方内もしくは



写真45 石室南東隅部角欠き状況（北西から）



写真46 石室北東隅部角欠き状況（南西から）

構築中の壁体上に石材を降ろす必要があり、大形石材の使用が困難な事情があった。掘り方が完全に埋まったことで、大形石材の使用が容易となり、保管していたその利用が可能になったと考える。

石室構築3段階目も墳丘盛り土を伴うもので、赤褐色土と暗赤褐色土を互層に盛り上げている（盛り土③）。この段階には石室の東側も小円丘状に盛り土を施す。盛り土は外側に拡張するように重ねており、石室西側の2段階目盛り土と符合する。なお、上面は削平されており、完成段階の形状や高さは不明であるが、規模は裾部に相当する部分で直径11mを測る。

また、3段階目盛り土の現状で西側の肩部に相当する場所では、人頭大の石材が検出された。後世の改変で多くが散逸しているようであるが、それでも石材は列状に並ぶと判断できる。石列は西側壁とほぼ平行するように並べられており、石室や墳丘との密接な関わりが示唆される。墳丘内石列と石室や墳丘構築との関係については、積極的に評価されている〔小林1999、高橋2002、土生田2005a〕。穴が盗古墳の石列は、これから石室の上部を積み上げて天井石を乗せ、さらに盛り土を行う段階に設置している。同様の状況は岡山県室尾石生谷口古墳でも確認された〔小林編1998〕。室尾石生谷口古墳の墳丘内石列は、天井石を乗せる最終段階の時点から築かれており、石室の保護を目的とした可能性が指摘されている。ただし、穴が盗古墳の石列は、盛り土が高い石室西側にのみ並べられており、石室を挟むように並ぶ室尾石生谷口古墳とは異なる。穴が盗古墳では、石室の保護というよりも墳丘盛り土の流失や崩壊を防ぐことに主眼が置かれたと考えたい。

ここで、羨道の南側部分について触れておく。羨道側壁は、既述のように玄室と同一工程として構築する状況が窺えた。その様子は西側壁において具体的に確かめられる。羨道西側壁2段階目は、西①1の上端と揃えられていた。西①1と西4の上に西6を置いたことも、横目地が通る要因であるが、西6が掛からない西5も高さを揃えており、この部分までは一連の作業として捉えることが可能である。しかし、その南側に続く西側壁にはより小振りの石材を使用して、それ以北まで通していた横目地を無視して構築している。同様の状況は羨道東側壁でも窺えた。そして、側壁石材の積み方を変更した地点と、閉塞施設の南端はほぼ合致する。奈良県の古墳を検討した土生田純之は、羨道が「玄室と一体的な奥半部と、それとは独立して構築された閉塞部」に分割可能であることから、後者を「付加羨道」と仮称して明確な区分を図った。穴が盗古墳でも、側壁に小形の石材を用いた閉塞施設より南側の部分は、羨道奥側部分と一貫した構築とはいえず、土生田が仮称する「付加羨道」と同様の状況を呈すると判断できる〔土生田2005b〕。ただし、築造当初から天井石を持たない、前庭部の可能性もある。

**第4段階目** この後、石室構築では天井石の架構まで1～2工程が考えられる。側壁は、残存した高さ以上まで積み上げた可能性が高い。玄室内に落ち込んでいた天井石と推測される大形石材は、長軸が120～130cmを測る。玄室の幅は床面直上が230～250cmで、側壁3段階目以上での持ち送りを考慮に入れても、現状高での復元幅は150～160cmになり、側壁石材も2～3段は失われたと推測できる。石室構築は、側壁の積み上げと天井石の架構、玄室の床土貼り、礎床設置工程まで行い、終了となる。

**第5段階目** 石室の構築が終了した後、盛り土③により1次墳丘を完成させる。そして、2次墳丘へと工程は進むが、この間に作業を中断しての祭祀行為が想定されている<sup>(2)</sup>。しかし、穴が盗古墳で、は祭祀の実態は確認できなかった。

**第6段階目** 2次墳丘は2段階に分割可能で、各段階（盛り土④・⑤）の間で石列を設置する。盛り土④は、石室の東西で大きく異なる。まず、東側は大きく掘り込んだ周溝の、半分以上を埋め戻す工



程として捉えることができた。そして、開口部から弧を描くような配石を行っている。この部分は弥生時代の竪穴住居1と重なる位置になり、石列配置の意図を示唆する。

一方、西側であるが、盛り土を行う以前に石列の設置作業から取りかかる。西側石列は大きく2工程を経て完成に至る。第1工程では、弧を描くように石を配置する。この石列は地山整形段階で設けた段に並べており、盛り土や第2工程石列の基礎石列と考えられる。そして、地山削り出しの墳丘裾部から盛り土④を施す。盛り土④は水平に盛っていくが、それは第2工程石列と密接な関わりがある。第2工程石列は石垣状に積み上げており、石垣状石列と呼称する。石垣状石列は盛り土④と同時に設置し、基礎石列を覆う所までしつらえていた。そのため、盛り土④は石垣状石列の積み上げに合わせて、水平な層状に施されることになる。なお、石垣状石列の石材は、古墳に向かって下がるような傾きを持たせており、墳丘を堅持させるのに適した構造を呈していた。

そして、最終段階の盛り土⑤を行い、墳形を整えて古墳の完成となる。 (上椿)

## 註

### (1) 省略記号例

玄室 袖部3層目の1番目に配石 袖③1 奥壁1層目の3番目に配石 奥①3  
 東側壁2層目の4番目に配石 東②4  
 羨道 東側1番目に配石 東1 西側3番目に配石 西3

### (2) 金関愨は、山口県岩谷古墳の報告書で、盛り土が石室を完全に覆った段階で一次作業を中断して、須恵器を用いた祭りを行った可能性を説き、この段階までを第1次墳丘とした〔金関・置田1972〕。土生田は古墳築造途上の儀礼として、土器を使用したものと焚火の両者が把握されたとした〔土生田1995〕。また、角田徳幸は島根県大念寺古墳の発掘調査の成果から、同古墳の墳丘は横穴式石室築造と保護に関わる盛り土(1次墳丘)と墳丘の外形を形造る盛り土(2次墳丘)で構成されたとした。そして、1次墳丘築造後の祭祀の可能性を指摘している〔角田2005〕。

## 参考文献

- ・角田徳幸「出雲における後期古墳の墳丘構造」『島根考古学会誌』第22集 島根考古学会 2005
- ・金関 愨・置田雅昭『下関市岩谷古墳発掘調査報告』山口県教育委員会 1972
- ・北垣聰一郎「横穴式石室構築技法の一考察—特に大和を中心として—」『橿原考古学研究所論集』第六 橿原考古学研究所 1984
- ・北垣聰一郎「牧野古墳石室構造の検討」『史跡 牧野古墳』広陵町教育委員会 1987
- ・北垣聰一郎「石室構築」『斑鳩 藤ノ木古墳 第一次調査報告書』奈良県立橿原考古学研究所編 斑鳩町・斑鳩町教育委員会 1990
- ・小林利晴編「室尾石生谷口古墳」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』133 岡山県教育委員会 1998
- ・小林利晴「墳丘内に石列を持つ古墳—岡山県内を中心に—」『古代古備』第21集 古代古備研究会 1999
- ・高橋克壽「古墳の葺石」『文化財論叢』Ⅲ 奈良文化財研究所 2002
- ・土生田純之「古墳構築過程における儀礼—墳丘を中心として—」『古墳文化とその伝統』勉成社 1995
- ・土生田純之「横穴式古墳構築過程の復元」『古墳構築の復元的研究』雄山閣出版 2005a
- ・土生田純之「大和における大型横穴式石室の構築工程について—「付可羨道」の検討—」『古墳構築の復元的研究』雄山閣出版 2005b

## 第8節 大原地区の古代

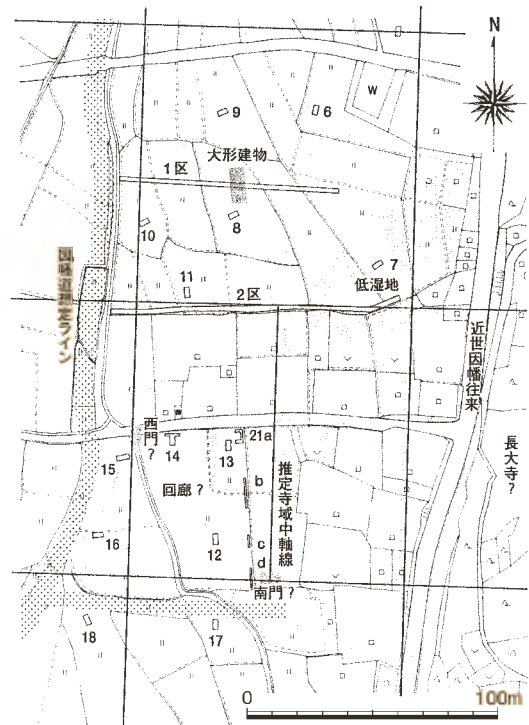
鳥取自動車道関連遺跡の発掘調査によって、中町B遺跡で因幡道が発見され、尾崎遺跡で規則的に並ぶ掘立柱建物群が検出できて、大原地区の古代の様子が、これまで以上に明らかになった。

播磨国（兵庫県西部）と因幡国（鳥取県東部）を結ぶ因幡道は、兵庫県佐用町で美作道との分岐点を確認され（西口・大平ほか1991）て以来、承徳3年（1099）の『時範記』の記録内容と照らし合わせて、そのルートが追求されてきた。大原地区には、兵庫県境の釜坂峠と鳥取県境の志度坂峠に因幡道の道路跡が現存するが、平野部については吉野川の左岸に存在するであろうと推定されていただけで、因幡道そのものの痕跡は見つかっていなかった。

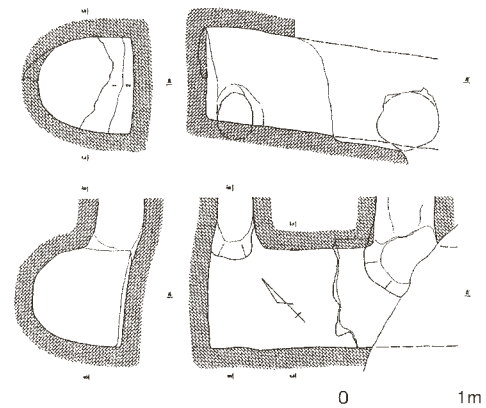
中町B遺跡で直線的に伸びる因幡道が確認されたことにより、北方向は旧大原病院や特別養護老人ホームのやすらぎ荘を経て、智頭急行線の大原トンネル西側山裾に到り、そこで折線グラフのように屈曲して旧大原高等学校に向かうと思われる。南方向には今岡2～5号墳が所在する丘陵や吉野川の蛇行部分があって、因幡道のルートを推定するのは困難である。今岡廃寺の発掘調査報告書（佐藤2002）で、地籍図から吉野川に面した今岡廃寺の西側に因幡道が通るとしているが、中町B遺跡で発見した因幡道の方角や今岡廃寺周辺の現地踏査などから、因幡道は地形の高い今岡廃寺の東側に存在すると考える。

その今岡廃寺（佐藤2002）は、圃場整備事業に伴って発掘調査が実施された。吉野川左岸の丘陵裾部に形成されて、西方向に緩やかに傾斜する河岸段丘に位置する。地形や小字、発掘の調査成果から、寺域の規模は方1町（約108m四方）と考えられる。ただし、元地形や寺域北東部の低湿地に規制され、正確な方形プランではない。寺域の区画施設は築地塀と考えられ、それに伴う溝を南辺、西辺、北辺で確認した。寺院の出入口となる門は未発見である。寺域内については、塔や金堂など主要伽藍は未発見で、その配置も不明である。ただし、寺域中心部で幅約4mの回廊が確認されていることから、主要伽藍はその内部に存在するものと想定される。時期は出土した軒瓦の年代観から、白鳳時代の7世紀後半に創建され、少なくとも平安時代前半の10世紀頃までは存在したと考えられる。

この今岡廃寺は、岡山県内唯一の法隆寺式軒瓦を持



第583図 今岡廃寺の寺域と伽藍配置  
(1/3,000) (佐藤2002を一部改変)



第584図 ナイゲ窯跡平側面図  
(1/60) (亀山1994)

つ白鳳寺院として、極めて重要な存在である。寺院の建立には、莫大な労力と資金、時間が必要であり、この地に強大な権力を持つ有力者がいたことを示している。その背景には、豊富な鉄資源と交通路の掌握が想定される。軒丸瓦の検討から、播磨地域との強い結び付きが指摘されており、古代の政治、経済関係を考えるうえでも興味深い遺跡である。なお、穴が途遺跡では、どういうわけか理解に苦しむが、今岡廃寺の軒丸瓦や平瓦が出土したのである。

今岡遺跡（佐藤2005a）は、今岡廃寺一帯の遺跡確認調査でその存在が明らかになったもので、今岡廃寺の北側に位置する。遺跡全域で遺構、遺物を確認しているが、調査区の制限のため、その実態ははっきりしない。おもな遺構は柱穴、溝、土壇で、その多くが古代のものと考えられる。このうち特筆されるのが、古代の大形柱穴列である。これは大形の掘立柱建物の一部と考えられ、柱穴規模が一辺110×120～130cm、深さ85～90cmを測る。その底面には根石が置かれ、その上に直径32～35cmの檜の柱が遺存していた。柱穴の間隔は568cm（約19尺）で、主軸は磁北にほぼ直交しており、高度な建築技術を窺わせる。出土した遺物の多くは奈良～平安時代前半のもので、今岡廃寺の存続期間と一致する。特筆されるのは円面硯で、識字層の存在が想定される。

この今岡遺跡は、今岡廃寺のすぐ北に位置し、その盛期も一致することから、今岡廃寺と有機的な関係を持つ集落と想定される。特に大形掘立柱建物は、今岡廃寺の付属施設、今岡廃寺を建立した有力者の居宅、英多郡衙の出先機関などの可能性が考えられる。また、古代因幡道がすぐ近くを通過しており、古代の英多郡における拠点の1つとして、極めて重要な遺跡である。

大原地区に隣接する旧作東町山手には大海廃寺（正岡・岡本1978、岡本1979）がある。この遺跡も圃場整備事業に伴って発掘調査が実施された。吉野川右岸の長さ1,000m、幅200mの山裾緩斜面の中央部に位置する。緩斜面は幾筋かの尾根が接続して凹凸をなしており、1つの尾根上に廃寺が建立されていた。確認された遺構は、塔、金堂、南門、築地、塀で、講堂や中門の遺構と推定されるものもある。調査結果に基づいて伽藍配置を復元すると、寺域は東西360尺（1町）（約108m）、南北450尺（約135m）で、縦長の法起寺式伽藍配置が想定される。ただ、注意されるのは、塀と築地の重複と南門の中軸線が金堂の東端をかすめることであり、寺域の変遷や伽藍の再整備等があった可能性が強い。出土遺物は多量である。軒丸瓦6種類、軒平瓦8種類、鴟尾があり、円面硯や水煙片も出土している。最古の軒丸瓦は素弁8弁蓮華文で、白鳳時代初期のものと考えられる。出土数の多い軒丸瓦は素弁16弁蓮華文と複弁8弁蓮華文のもので、それぞれ白鳳時代後半、奈良時代後半と比定される。鴟尾は胴部に複弁蓮華文を飾るもので、類例は播磨国西部に多く分布し、大阪府四天王寺出土品のE類と同範である。

この大海廃寺は、出土した瓦などから英多郡最古の寺院で、創建瓦が古新羅系の素弁瓦だから、朝鮮半島よりやって来た渡来工人が直接関与した可能性が強く、白鳳時代の初期に創建され、白鳳時代の後半には完成したとみられる。そして奈良時代の後半に至って再整備された後、平安時代に廃絶したと考えられる。

大海廃寺から吉野川沿いに約8km南下すると、英多郡の郡衙に推定されている美作道に面して高本遺跡（井上・山磨ほか1975、二宮ほか1985）がある。高本遺跡の北に位置する吉野川の右岸には、江見廃寺（湊1992）が知られている。江見廃寺の軒丸瓦には大海廃寺と同範のものがあり、両廃寺の結びつきが強いことが窺われる。中町B遺跡で因幡道が発見されたこともあって、高本遺跡で美作道から分岐して江見廃寺と大海廃寺を通り、さらに北上して今岡廃寺の近くで因幡道に結びつく古代の道

があると考えられる。その道は発見した因幡道と同じ規模のもので、釜坂峠から西に向かって下った所の、美作市宮本の宮本武蔵の生家とされている家の周辺で、因幡道につながると推定する。なぜならこの地点は、承徳2年（1098）に因幡守である平時範が因幡道を通して任国に赴き、都への帰途に1泊した美作国佐奈保の中枢部で、「佐奈保」は英多郡讚甘郷きのものことだからである。

一方、今岡中山遺跡では、丘陵の斜面で2軒の竪穴住居が検出された。須恵器や土師器の遺物が出土しなければ、弥生時代の竪穴住居と間違える形態である。中国縦貫自動車道の建設に伴って発掘調査を実施した新見市哲西町の横田遺跡（岡田1978）でも、丘陵の斜面に数軒の竪穴住居が確認されている。山陰地域では古代になっても竪穴住居で生活している事例が多いから、中国山地の山陰地域に近い今岡中山遺跡や横田遺跡も、その影響を受けたと考える。

今岡中山遺跡と今岡庵寺の距離は約500mと極めて近い。大原地区では、莫大な労力と資金だけではなく強大な権力を駆使して寺院を建立する者と、伝統的である意味では時代遅れの竪穴住居で生活している人々が、近接した地点で共存している状況が見て取れるのである。

壬生・ナイゲ窯跡（亀山1994）は、林道建設に伴う土砂採掘中に発見された。吉野川左岸の峻険な丘陵山腹に位置し、浅い谷に面した西斜面に築かれている。平野部との比高は約120mを測る。現地調査時、掘削で窯跡の半分以上がすでに消滅しており、全体像がはっきりしない（第584図）。

この壬生・ナイゲ窯跡は、横口付窯跡と呼ばれる、製鉄に用いる木炭を生産する窯と考えられている。横口付窯跡は、中国地方を中心として全国で60遺跡以上発見されており、その年代は古墳時代後半～平安時代前半と想定されている（上村2001）。ナイゲ窯跡で注目されるのは、焼成室奥壁側の横口を煙道としている点である。これは、横口付窯跡の時期変遷の中でも、新しいものの特徴として考えられているから、古代の時期に属すると想定される。古代の大原地区では、鉄生産が盛んに行われていたと考えられる。壬生・ナイゲ窯跡の存在もそのことを示唆するものであり、この地域の経済基盤を考えるうえで極めて貴重な遺跡である。

鳥取自動車道の建設に伴って発掘調査を実施した尾崎遺跡は、北側の丘陵上に小原山王山城跡が知られていたため、中世の遺構が存在することは想定されたが、古代の遺構はないと考えていた。ところが、調査範囲が限定された狭い部分であったにもかかわらず、掘立柱建物や溝などが検出され、比較的多くの珍しい遺物が出土した。掘立柱建物には総柱のものと側柱のものがあり、本線調査区の国道に面した北側の地点には、12棟もの掘立柱建物が比較的密集した状態で存在し、それらの掘立柱建物の数棟は「L」字状を呈して規則的に並んでいた。出土した遺物は、須恵器や土師器だけでなく、円面硯と石帯の破片や陰刻で花文を描いた緑釉陶器の稜椀も認められた。包含層から出土した土師器には、丹塗りを施さない畿内から搬入されたものも存在した。また、国道北調査区では、焼塩土器が掘立柱建物の柱穴や包含層から出土した。掘立柱建物が検出できなかった地点の炉跡や焼土面が、焼塩を行った場所と考えている。国道北調査区の遺構に伴わない遺物には、一見したところ勝間田焼の椀に酷似した須恵器がある。その形態的特徴は、外面の体部下半に沈線または断面形が台形か三角形の突帯を施し、高台の側面をヘラ状工具で削って整形したもので、西播磨地方で9世紀から10世紀にかけて生産された良質の須恵器である。この須恵器の椀が比較的多く出土しているから、尾崎遺跡では生産地が遠いにもかかわらず、搬入して使っていたと考えられる。

尾崎遺跡から出土した須恵器や土師器を検討してみると、7世紀中葉の古いものから12世紀代の新しいものまで、各時期の遺物が認められる。出土量が最も多いのは焼塩土器が伴う時期の物で、過半

数を占めている。これらの須恵器や土師器の形態的特徴や調整手法を丹念に精査すると、平城宮土器Ⅳ式（奈良文化財研究所1991）のものに酷似しており、760年の年代が与えられている。尾崎遺跡では、規則的に配置されて並ぶ掘立柱建物群の施設がこの頃に整備され、緑釉陶器や西播磨産須恵器も出土しているので、9世紀から11世紀にかけてもその施設を継続して使用し、12世紀の後半の時期になってその機能を停止させている。

この地域の経済基盤を考えるうえで欠かせないものに鉄生産がある。特に古代において美作国は調鉄の貢納国であり、平城宮跡からは「英多里鉞」（奈良国立文化財研究所1978）、「美作英多郡大野里鉄一連」（奈良国立文化財研究所1989）の木簡が出土している。このうち後者に記された大野里は、旧大原町川上に比定されている。また『日本霊異記』には、孝謙天皇の代（749～758年）に英多郡の官営鉄山で起きた落盤事故で生き埋めになった役夫が、仏教信仰により奇跡的に救出された説話が記されている。先に記した壬生・ナイゲ窯跡（亀山1994）では、製鉄遺跡に伴う小形の横口付窯跡が検出され、高本遺跡（二宮1985）では、奈良～平安時代の製鉄炉が存在した。今度の発掘調査でも、八幡山南遺跡で製鉄関連遺構が検出されており、砂鉄製錬滓（付編2を参照）が出土した。

このような状況だけでなく、石帯、硯、緑釉陶器などの珍品物が数多く出土し、遺跡の所在地が因幡道に近いことも考慮すれば、尾崎遺跡には識字層が常駐して、鉄製品を管理・掌握する公的組織の出先機関があったと考える。

なお、八幡山遺跡と尾崎遺跡では火葬墓や土器棺を検出し、大原地区の広い範囲で火葬墓に使ったと思われる蔵骨器（佐藤2005b）が発見されている。（福田）

#### 参考文献

- ・井上 弘・山磨康平ほか「高本遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』8 岡山県教育委員会 1975
- ・上村 武「横口付窯跡の基礎的研究」『たたら研究』第41号 たたら研究会 2001
- ・岡田 博「横田遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』23 岡山県教育委員会 1978
- ・岡本寛久「大海庵寺緊急発掘調査報告書Ⅱ」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』33 岡山県教育委員会 1979
- ・亀山行雄「壬生・ナイゲ窯跡」『岡山県埋蔵文化財報告』24 岡山県教育委員会 1994
- ・佐藤寛介「今岡庵寺」『大原町埋蔵文化財発掘調査報告』2 岡山県大原町教育委員会 2002
- ・佐藤寛介「今岡遺跡」『大原町史』史料編（上）考古 大原町 2005 a
- ・佐藤寛介「町内出土の考古資料」『大原町史』史料編（上）考古 大原町 2005 b
- ・奈良国立文化財研究所『平城宮発掘調査出土木簡概報』12 1978
- ・奈良国立文化財研究所『平城宮発掘調査出土木簡概報』21 1989
- ・奈良国立文化財研究所「平城宮土器の大別」『平城宮発掘調査報告』XⅢ 1991
- ・西口和彦・大平 茂ほか「長尾・沖田遺跡（1）」『兵庫県文化財調査報告書』第100冊 兵庫県教育委員会 1991
- ・二宮治夫ほか「高本遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』61 岡山県教育委員会 1985
- ・正岡睦夫・岡本寛久「大海庵寺緊急発掘調査報告書」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』26 岡山県教育委員会 1978
- ・湊 哲夫「美作の白鳳寺院」『津山郷土博物館 特別展図録』第5冊 津山郷土博物館 1992

## 第9節 中町B遺跡で検出された道路遺構について

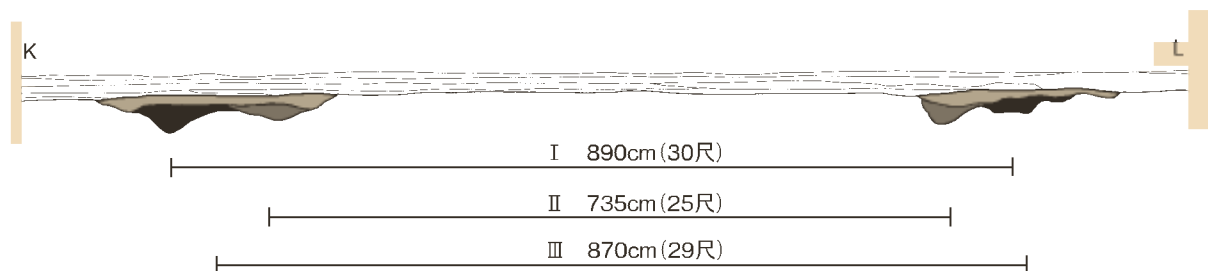
### 道路遺構の構造と性格（第585・586図）

中町B遺跡で検出された道路遺構は2条の側溝からなり、一部には道路遺構に特徴的に見られる波状凹凸面が認められた。全長で168mが検出されており、路面の幅は約6mを測る大規模なものである。北側は山が途切れて平野が一番狭くなった箇所を目指して直線的に築かれており、築造時の計画性が窺われる。また、側溝の観察から、路面幅の増減を伴う改修が行われていることは確実で、側溝間の心々距離の変化から大きくⅠ～Ⅲ期に分けられる。道路遺構の築造時と考えられるⅠ期の側溝間の心々距離は約9mと大きく、30尺（3丈）と尺度に合っている。側溝間の心々距離が3m（1丈）の倍数になる事例が多いことから、古代駅路は丈単位で設定されたという指摘〔木下2001〕にも合致して興味深い。Ⅱ期には道幅を減ずる形で改修が行われ、側溝間の心々距離も25尺と5尺程度狭くなっている。Ⅲ期になると逆に道幅が広がるような形になるが、側溝の下層は埋め戻され、従前のものより浅くて幅広な側溝となる。尺度の適用はもはや厳密ではないようで、側溝自体も周囲との区画を表す程度の痕跡的なものであったと考えられる。

中町B遺跡で検出された道路遺構は、その規模や直線的な構造、立地から考えて、文献等の記述によってその存在が以前から知られている〔中林1974・高橋1995〕、古代因幡道に比定して間違いないと考えられる。因幡道は播磨国と因幡国を結ぶ古代の駅路で、兵庫県佐用町で美作道から分岐して北へ向かい、県境の鎌坂峠を越えて岡山県美作市大原地区に入る。その後、吉野川沿いを北上して志戸坂峠を越え、現在の鳥取県智頭町に至るルートが想定されている。

### 道路遺構の時期

時期決定については、道路遺構に伴う遺物が少なく苦慮した。築造時期に関しては、判断する材料が少なく時期比定は困難である。道路遺構上の包含層中から8世紀前葉～中葉にかけての須恵器が出土しており、これらの土器の年代が道路遺構の機能していた一時期を表していると思われる。道路遺構はⅢ段階の時期に分かれるが、それぞれの対応する時期についても、現状では古代の範疇としか示すことができない。道路遺構の続きを検出した隣接地の429号調査では、側溝中から古代に比定される須恵器および土師器が出土している〔小嶋2007〕。道路遺構の廃絶時期については、上層に堆積する包含層が12世紀代の遺物を中心に含んでいること、側溝1の埋土上層から白磁片が検出されていることから、12世紀後半には道路遺構は完全に廃絶したのであろう。周辺の遺跡に目を向けると、中町B遺跡の南約700mに位置する7世紀第3四半期創建の今岡廃寺も12世紀代には削平を受け、廃絶して



※ 数値は平均値、第336図に対応する

第585図 側溝間の心々距離の変遷

いることが確認されており〔佐藤2002〕、このころ近辺で大規模な土地改変が行われたと想定される。以上のことから総合的に判断すると、中町B遺跡で検出された道路遺構は、奈良時代～平安時代に機能していたと考えられる。

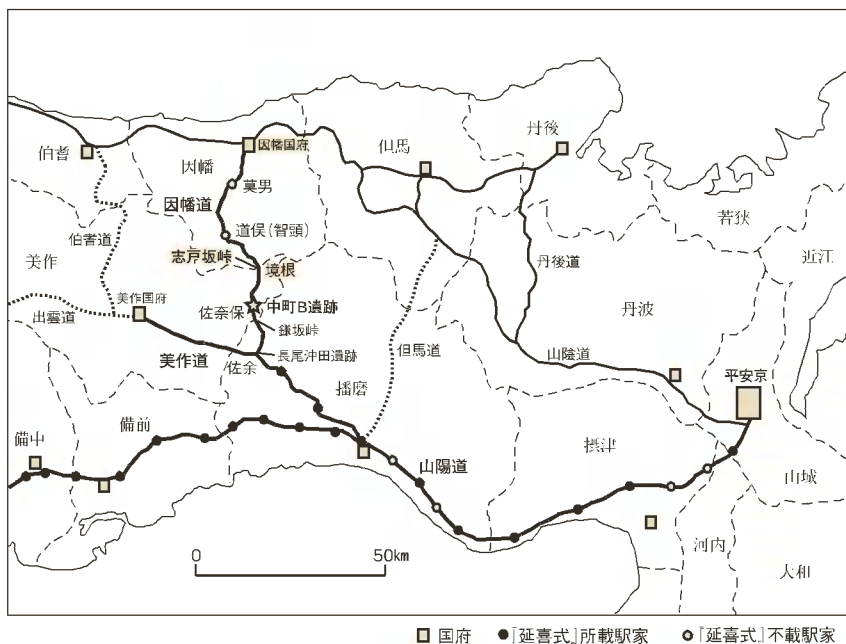
文献史料にみる古代因幡道（第586図）

因幡道について確認できる一番古い史料は、『日本後紀』大同3（808）年6月21日の記述で「因幡国八上郡莫男駅、智頭郡道俣駅<sup>(1)</sup>馬各二疋を省く、大路に縁らず乗用希なるを以てなり」とある。因幡道に存在した莫男駅、道俣駅に関する記述であり、この記事からも分かるように、9世紀初頭には因幡道の利用はかなり少なくなっていたと推定される。10世紀の『延喜式』には、因幡道の駅についての記載がなくなることから、このころには都から丹波・但馬を経て因幡に至る交通路である、山陰道の整備が進んだとの見解もある〔中林1978〕。因幡道が再び文献上に表れるのは平安時代末の11世紀末のことで、承徳3（1099）年に因幡守平時範が美作道、因幡道を経由して任国に赴任した際の日記が『時範記』<sup>(2)</sup>として残っている。その一部を抜粋すると、2月15日「巳剋、智頭郡驛家に至る」とあり、午前10時頃に智頭駅家に到着したことが分かる。また、用務を終えた時範は3月27日に都への帰途につくが、3月28日「辰剋、進發す。鹿跡御坂（志戸坂）を越える。未剋、美作国佐奈保に着く」とある。ここでの「佐奈保」とは「讃甘」<sup>(3)</sup>のことで、今岡廃寺周辺の地名を表しているが、時範がこの地に宿泊したことが分かる。『時範記』を読む限り、『延喜式』で見られなかった智頭駅家についての記載があり、この時まで因幡道は存続していたか、もしくは復活したと推定される。山陰道の諸国の各国府を巡検する巡察使などの場合は山陰道を進むが、山陰道諸国の中の一国を目指す場合は、山陽道側から中国山地を越える連絡通路を行く例が多かったとの指摘〔高橋2007〕もあり、因幡道の陰陽連絡路としての利便性が重視された結果であると考えられる。

今岡廃寺と古代因幡道の駅家（第586図）

中町B遺跡よりも南側の因幡道のルートについては、今岡廃寺の報告の中で、推定寺域の西辺に沿って

湾曲して認められる幅10mほどの細長い地割りを因幡道の痕跡と推定されている〔佐藤2002〕。しかし、道路遺構が発掘調査によって検出されたのではないことと、中町B遺跡で検出された因幡道の直線的構造から考えると、湾曲して今岡廃寺の西側を通るのではなく東側を直線的に通っていたと推定したい。また、



第586図 古代因幡道の位置（高橋1995を元に作成）

表9 岡山県内の古代官道遺跡

旧国	No	遺跡名	所在地	遺構名	路面幅 (m)	構造	時期	道路の性格	文献
美作	1	中町B遺跡	美作市中町	道路遺構	5.5～6	側溝・波板状 凹凸面有り	奈良～平安	因幡道	本書
	2	鍛冶屋遺	美作市上相	古道跡	0.5～1?	切通し・路床 に砂利敷き	平安?	美作道?	中林 1975
	3	小中遺跡	勝田郡勝央町岡	古道①②	0.3～8	切通し・路面 砂利敷き	～中世	美作道?	栗野ほか 1975・ 高畑 1986
	4	日上小深田遺跡	津山市日上	SD1	6	側溝1条確 認	奈良	美作道?	安川ほか 2000
備前	5	馬屋遺跡・馬屋長 田遺跡	赤磐市馬屋	溝-4	10?	側溝1条確 認	奈良～	国分寺と国分尼 寺をつなぐ道路	伊藤ほか 1995
	6	馬屋森向遺跡	赤磐市馬屋	盛土・集 石遺構	3	盛土・集石	平安以前	馬屋遺跡の道路 に直交	県教委 1993
	7	津高古道	岡山市津高	古道	4.5～6	切通し	古代	山陽道?	乗岡 1993
備中	8	矢部堀越遺跡	倉敷市矢部	溝-D 601	5～7	切通し	古代～中世	山陽道?	浅倉 1993・大 橋 2006
	9	備中国分尼寺跡内	総社市上林	古道	6	側溝・路面砂 利敷き	奈良～平安	山陽道	高橋ほか 1986

駅路の成立が郡寺の建立に先行し、全国でも古代寺院が駅路に沿って存在する例が数多いこと〔木本 2000〕を踏まえると、因幡道が今岡廃寺より先に造られた可能性があると思われる。

因幡道に設置された駅家は、因幡国内の道俣（智頭）・莫男の2駅しか記録に残っていない。因幡道が佐用で美作道から分岐して中町B遺跡までの道程は約25里（約13km）あり、ここから道俣駅まではさらに約49里（約26km）の距離となるが、この間の約74里（約39km）には駅家が存在していないことになる。山間部では例外もあるが、厩牧令の規定で駅は駅路に沿って30里（約16km）ごとに配置されることになっており、中町B遺跡の周辺に駅家が存在している可能性は十分に考えられる。また、今岡廃寺は11世紀にその寺院としての性格が変質し、平時範が宿泊できるような機能を兼ね備えていたのではないかと指摘もある〔佐藤2002〕。今岡廃寺のすぐ北側の今岡遺跡では、全容は明らかではないものの8世紀代の大型建物の一部が検出されており、公的な性格を有する施設の存在が推定されている。これは駅家そのものではないにしても、駅家の役割を担うなど複数の機能を併せ持った施設が、今岡廃寺周辺に存在していたことを示すと考えられる。

#### 古代因幡道の類例と岡山県内の古代官道遺跡（表9）

因幡道の類例については、中町B遺跡以外に岡山県内では知られていない。隣接する兵庫県佐用町長尾沖田遺跡では、奈良～平安時代の因幡道と美作道の交差点と推定される道路遺構が検出されている〔西口ほか1991・柏原ほか1993〕。道路の規模については、備中国分尼寺跡内の山陽道と今回検出された因幡道では道幅に差はない。ただ9世紀になると、駅路の道幅を縮小している例が各地で明らかになっていることから<sup>(4)</sup>、備中国分尼寺跡内で検出された道路遺構は、古代でも新しい時期の山陽道とも考えられる。山陽道の支路である美作道の可能性が想定される小中遺跡の古道<sup>(5)</sup>も路面幅が最大で8m近い規模をもつ。因幡道自体は、馬5匹以下の小路クラスであったと思われるが、検出された道路遺構の規模を見る限り、大路である山陽道と比べても遜色ないものであった。古代官道は、官人の移動、物資輸送や情報伝達以外に軍事的な側面も強く、大量の兵員の速やかな移動も想定されている〔木下1991〕。地方においても直線的で大規模な道路が律令国家の指揮の下に整備された可能性は高く、中町B遺跡で検出された道路遺構はその一例と考えられる。



古代因幡道は中世に廃絶後、そのルートを変化させながらも、近世の鳥取藩主の参勤交代路として因幡往来〔内藤1993〕に引き継がれていく。また、現代においても古代因幡道のすぐ脇には京都と鳥取を結ぶ特急が走る智頭急行線があり、陰陽連絡路としての古代因幡道の機能はその形を変えながらも残っている。古代因幡道は現代で言うところの高速道路にあたるが、鳥取自動車道建設に伴う発掘調査によって古代因幡道の道路遺構が検出されたことは、偶然ではなく、山陰と山陽を結ぶ地理的な要衝の大原地区に、交通路が整備されてきた歴史を物語っているものと思われる<sup>(6)</sup>。(石田)

## 註

- (1) 道俣(みちまた)駅は鳥取県智頭町智頭付近が駅位置と想定されている。
- (2) 『時範記』については、〔早川1962・鳥取県1972・隴谷1991・土田1994〕を参考にした。
- (3) 古代の英多郡讚甘(さのも)郷のことで、現在の美作市今岡・宮本近辺に当たる。
- (4) 幅9～12m程度あったものが、6m程度に縮小されている例が各地で知られている〔中村1996・木本2000〕。
- (5) 小中遺跡の古道の状況や出土遺物については、〔高畑1986〕の中で補足されている。
- (6) 本稿の作成に当たっては、調査時に現地指導いただいた(故)高橋美久二氏、木本雅康氏の御教示によるところが大きい。記して感謝申し上げる。

## 参考文献

- ・浅倉秀昭ほか「矢部堀越遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』82 岡山県教育委員会 1993
- ・伊藤 晃ほか「松尾古墳群 斎富古墳群 馬屋遺跡ほか」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』99 岡山県教育委員会 1995
- ・大橋雅也「備前・備中における古代山陽道と駅家」『考古学研究会例会シンポジウム記録』5 2006
- ・岡山県教育委員会『岡山県埋蔵文化財報告』23 1993
- ・隴谷 寿『王朝と貴族』日本の歴史⑥ 集英社 1991
- ・柏原正民ほか『長尾・沖田遺跡(Ⅱ) 岡ノ平遺跡』兵庫県教育委員会 1993
- ・木下 良「古代官道の軍用的性格」『社会科学』47 同志社大学人文科学研究所 1991
- ・木下 良「古代道路研究の現況―「道路調査ハンドブック」特集に寄せて―」『古代交通研究』第10号 2001
- ・木本雅康『古代の道路事情』吉川弘文館 2000
- ・栗野克巳ほか「小中古墳群・小中遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』7 岡山県教育委員会 1975
- ・小嶋善邦ほか「中町B遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』204 岡山県教育委員会 2007
- ・佐藤寛介『今岡廃寺』大原町埋蔵文化財発掘調査報告2 大原町教育委員会 2002
- ・高橋 護ほか「備中」『新修国分寺の研究』第四巻 吉川弘文館 1986
- ・高橋美久二「美作道の駅と駅路」『古代交通の考古地理』大明堂 1995
- ・高橋美久二「都と地方間の交通路政策」『国立歴史民俗博物館研究報告』第134集 2007
- ・高畑知功『山伏塚遺跡』岡山県奈義町教育委員会 1986
- ・土田直鎮『古代の武蔵を読む』吉川弘文館 1994
- ・椿 真治「馬屋森向遺跡ほか」『岡山県埋蔵文化財報告』20 岡山県教育委員会 1990
- ・鳥取県『鳥取県史』第1巻 原始古代 1972
- ・内藤季義「因幡往来」『岡山県歴史の道調査報告書』第五集 岡山県教育委員会 1993
- ・中林 保「古代陰陽連絡路―山陰側を中心とした歴史地理学的考察―」『歴史地理学紀要』16 1974
- ・中林 保「古代美作国の郡家と交通路」『人文地理』第27巻第4号 1975
- ・中林 保「因幡国」『古代日本の交通路』Ⅲ 大明堂 1978
- ・中村太一「山陽道美作支路の復元的研究」『歴史地理学』150 1990
- ・中村太一『日本古代国家と計画道路』吉川弘文館 1996
- ・西口和彦ほか『長尾・沖田遺跡(Ⅰ)』兵庫県教育委員会 1991
- ・乗岡 実「岡山市津高確認の直線道について」『古代交通研究』2 1993
- ・早川庄八「時範記」『書陵部紀要』14号 1962
- ・安川豊史ほか『日上小深田遺跡』津山市教育委員会 2000
- ・安川豊史「美作国」『日本古代道路事典』古代交通研究会編 八木書店 2004

## 第10節 古代の焼塩関連遺構・遺物について

尾崎遺跡の発掘調査において、岡山県北部の山間地域としてはあまり出土例のない焼塩土器が多量に出土し、また、それに関連すると考えられる遺構群も検出された。焼塩関連遺構・遺物が出土したのは、尾崎遺跡の北部、国道429号より北のF・G区である。この地区は、遺跡の北に位置する朝霧山の南裾部分にあたり、とくにG区は緩斜面の地形を呈し、斜面を掘削して形成された平坦面に掘立柱建物などが建てられている。F区は、弥生時代の竪穴住居が検出されたことから、古くから河岸段丘面にあったものと考えられるが、わずかに南へ向かって傾斜が認められる。

焼塩に関連した遺構としては炉と焼土面と炭溜まりがあり、掘立柱建物や柱穴列の柱穴の中に焼塩土器が多量に廃棄されているものが見つかっている。F・G区からは鉄滓はほとんど出土していないため、これらの被熱遺構は焼塩に関連する施設の痕跡と考えられる。第587図によってこれらの遺構の分布状況を見ると、炉・焼土面・炭溜まりはF区の西半部に集中し、焼塩土器を埋土に含む柱穴によって構成される掘立柱建物・柱穴列はG区の南東部にかたまっていた。この柱穴については、柱を



第587図 尾崎遺跡F・G区焼塩関連遺構分布図 (1/300) (着色が関連遺構)

抜き取った後に土器類を廃棄したようで、焼塩作業時に建物のあった可能性が高い。このことから関連遺構の分布状況によって想定すると、F区の西半部に焼塩の作業場があり、火を使うために、そこから20mほど離れたG区の南東部に建物が存在したようである。焼塩土器の散布状況をみるとF区からG区の南東部にかけて広がり、表10にも示したように、G区南東部の包含層でも3割強含まれることから、G区の建物は塩倉と考えたい。建物は緩斜面を掘削して建てられ、尾崎遺跡の中でもっとも高燥な立地をもち、平面形も東西2間のものは方形に近いと想定される。なお、掘立柱建物3については、規模や明瞭な柱痕跡から、焼塩作業が行われなくなってから建てられたものとする。

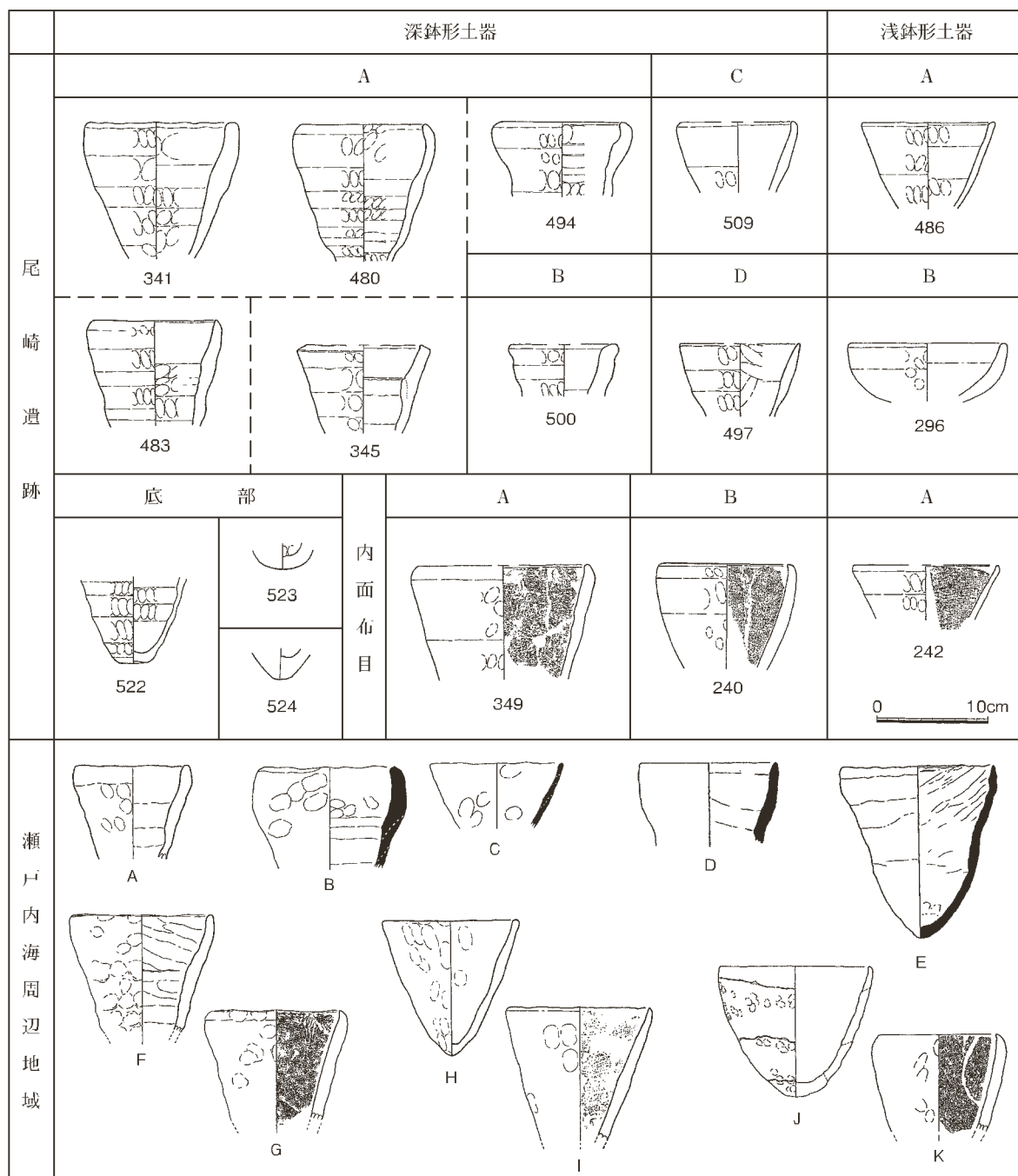
炉と焼土面の違いは被熱の度合いで、硬化面をもつものを炉としている。炉には底面に粘土を貼ったものが認められる。炉はきわめてよく焼けているため、天井のある窯構造をなしていたのではないかという指摘があるが、香川県ナカダ浜遺跡で検出されたような壁体〔近藤1976〕は認められず、また、周辺から炉壁片のようなものは出土していない。炭溜まりはいずれも境界が不明瞭で、土壌の中に埋められたものではなく、作業場の南端の緩い傾斜面に投棄されたものであろう。

焼塩土器を多量に包含していたG区の柱穴は7個で、土器総出土量に占める焼塩土器の割合は表10のとおりである。周辺の包含層から出土した土器についても1単位分を計算した。これによると、ほとんどで61～87%の高率となり、周辺に焼塩土器片の集積があったと想像される。F区から持ち上げるとは考えにくく、F区にも焼塩土器の多く包含された柱穴が1個あった。掘立柱建物を塩倉とすると、焼塩土器の破片は要求に応じて固型塩を取り出す時に破碎されたものと考えられる。第243図341～343は大形破片がG区で土器溜まり状を呈し、焼塩土器の底部破片が少ないことも注意される。

表10 尾崎遺跡G区遺構別焼塩土器出土量比率一覧表

遺 構 名	土器片総出土量	焼塩土器片出土量 (比率)		その他土器片出土量 (比率)	
		布目無	布目有	須恵器	土師器
掘立柱建物 2 P 4	435g	369g (84.8%)		66g (15.2%)	
		369g (100%)	0g (0%)	24g (36.4%)	42g (63.6%)
掘立柱建物 2 P 3	146g	26g (17.8%)		120g (82.2%)	
		26g (100%)	0g (0%)	77g (64.2%)	43g (35.8%)
掘立柱建物 2 P 2	314g	218g (69.4%)		96g (30.6%)	
		218g (100%)	0g (0%)	51g (53.1%)	45g (46.9%)
掘立柱建物 4 P 2	2011g	1222g (60.8%)		789g (39.2%)	
		1043g (85.3%)	179g (14.7%)	264g (33.5%)	525g (66.5%)
掘立柱建物 4 P 3	1807g	1441g (79.7%)		366g (20.3%)	
		1377g (95.6%)	64g (4.4%)	145g (39.6%)	221g (60.4%)
掘立柱建物 4 P 4	1378g	1142g (82.9%)		236g (17.1%)	
		989g (86.6%)	153g (13.4%)	120g (50.8%)	116g (49.2%)
柱穴列 1 P 3	1624g	1418g (87.3%)		206g (12.7%)	
		1348g (95.1%)	70g (4.9%)	35g (17.0%)	171g (83.0%)
G区古代包含層 5段目断面②より東	2621g	946g (36.1%)		1675g (63.9%)	
		919g (97.1%)	27g (2.9%)	1151g (68.7%)	524g (31.3%)

尾崎遺跡から出土した焼塩土器は、器形から深鉢形土器と浅鉢形土器に大きく分けられ、それぞれに内面に布目圧痕のないものとあるものが認められる。布目圧痕のある焼塩土器の割合は、表10の資料で計算すると、焼塩土器全体の7%を占める。後述されるが、焼塩土器の胎土分析によると、蛍光X線分析法では焼塩土器は3群に分けられ、さらに実体顕微鏡による砂粒観察では6種類以上に分類された。この結果と形態や製作技法による違いを加味し、第588図のように型式分類を行った。内面に布目圧痕のないものは深鉢形4類型、浅鉢形2類型、布目圧痕のあるものは深鉢形2類型、浅鉢形1類型に分けられる。



- A 兵庫県佐用町大獅子遺跡 B・C 兵庫県たつの市小犬丸遺跡（布勢駅家跡） D 兵庫県姫路市本町遺跡  
 E 兵庫県明石市赤根川遺跡 F・G 広島県東広島市安芸国分寺跡 H・I 香川県高松市正箱遺跡  
 J・K 徳島県東みよし町中庄東遺跡

出典

- A 藤木 透「大獅子遺跡」『平成6年度埋蔵文化財調査年報』兵庫県佐用郡教育委員会 2004  
 B・C 山下史朗ほか『小犬丸遺跡Ⅱ』兵庫県文化財調査報告第66冊 兵庫県教育委員会 1989  
 D 積山 洋「律令制期の製塩土器と塩の流通」『ヒストリア』第141号 大阪歴史学会 1993  
 E 山下俊郎「赤根川遺跡」『兵庫県埋蔵文化財調査年報 昭和48年度』兵庫県教育委員会 1986  
 F・G 妹尾周二ほか『史跡安芸国分寺跡発掘調査報告書Ⅳ』文化財センター調査報告書第36冊 東広島市教育文化振興事業団 2002  
 H・I 廣瀬常雄ほか『正箱遺跡・薬王寺遺跡』香川県教育委員会 1994  
 J・K 幸泉満夫ほか『中庄東遺跡』徳島県埋蔵文化財センター調査報告書第54集 徳島県教育委員会 2005

第588図 尾崎遺跡出土焼塩土器型式分類および周辺地域出土焼塩土器 (1/6)

内面に布目圧痕のない深鉢形土器A類は体部上半内面に屈折があり、そこから上方へはかなり内湾している。A類が焼塩土器の大半を占めるが、手捏ねの粗製土器だけに形態変化が大きく、破線で区画したように細分できる。494は内面の上半を強く横方向にナデるもの、483は口縁端部を尖り気味におさめるもの、345は口縁端に面をもつものである。B類は小形で、口縁端部を外側へ摘み出す。C・D類は胎土の蛍光X線分析によって他の焼塩土器とはかけ離れた2点で、形態も異なりを見せている。体部上半は直線的で、C類は口縁部を内折させ、D類は口縁端部を尖り気味におさめる。

布目圧痕のない浅鉢形土器は明らかな形態的相違から2類に分かれる。A類は器体の厚さから浅鉢と判断されるが、円錐状を呈するようである。B類は器体上部が内湾し、浅い碗形を呈する。

底部は平底・丸底・尖底の3種類がある。体部上半との繋がりとは不明瞭だが、いずれも布目圧痕のないものの底部と推測され、522は深鉢形土器A類の底部と考えられる。

内面に布目圧痕をもつ深鉢形土器A類の体部上半は直線的で、内面にわずかに屈折をもつ。口縁部は親指と人差指で挟みつけたようで、外面に傾斜面をもち、内面はやや屈折し、口縁端部は尖り気味におさめる。B類の体部上半は内湾し、口縁部はわずかに屈折するが、外面の傾斜面はみられない。

内面に布目圧痕をもつ浅鉢形土器A類は器体が薄く、円錐形の浅鉢と推定される。口縁端部は摘み気味で、外面に幅の狭い傾斜面をもつようである。内面の布目は深鉢形土器よりやや粗い。

尾崎遺跡から出土した焼塩土器はきわめて多様で、胎土分析からも6種類以上に分けられるという。中国山地に位置することからも地元で製作されたとは考えられず、他地域から搬入されたものと考えてよかろう。類例を調べると、岡山県内には見あたらず、もっとも近い例として兵庫県西部、播磨地方の例があげられる。現状では、おもに播磨地方からもたらされたものと考えておきたい。

さて、尾崎遺跡では焼塩土器を使って固型塩を作っていたと考えている。焼塩土器は、海浜部の製塩遺跡で煎熬土器、ないしは容器によって作られた散状塩をこれに詰め替え、焼き固めてニガリをとばし、潮解作用のない固型塩を作る土器で、そのまま運搬容器としても使用された。したがって、尾崎遺跡の焼塩土器もおもに播磨地方から塩が詰められた状態で運ばれてきたものと考えられる。

塩は古代においては徴税の対象物であり、国家の管理下にあったものと考えられているが、積山洋によれば、固型塩は非貢納塩として貢納塩とは異なる流通をし、「土器で運ばれた固型塩には交易を通じて流通したのことが多い」とされる〔積山1993〕。尾崎遺跡は、積山が設定した製塩土器出土遺跡類型の第三類bに該当し、「官衙や在地豪族の居宅、大規模集落群などで認められ」、「内陸交通の主要ルート沿い」にあたる。問題は、尾崎遺跡が官衙か在地豪族居宅かである。

尾崎遺跡は大原地区ではもっとも広い平野部に位置し、古代因幡道に近接している。出土遺物には円面硯や石帯、印刻花文緑釉稜碗があり、遺構としては掘立柱建物のみで構成され、掘立柱建物11と13・14・17というL字形配置がみられる。官衙的な色彩が濃いようにもみられるが、小規模な掘立柱建物も多く、12世紀まで長期にわたって存続していることも気に掛かる。美作国府では異なる製塩土器が出土している。美作の鉄と播磨の塩を交換した場かもしれない、「鮎の加工品を生産するために塩が用いられた」とする考え〔小田1996〕も興味深い。(岡本寛)

#### 参考文献

- ・近藤義郎「土器製塩と焼き塩」『考古学研究』第22巻第3号(通巻87号) 考古学研究会 1976
- ・積山 洋「律令制期の製塩土器と塩の流通」『ヒストリア』141号 大阪歴史学会 1993
- ・小田和利「製塩土器からみた律令期集落の様相」『九州歴史資料館研究論集』21 九州歴史資料館 1996

## 遺構一覧表・遺物観察表凡例

### 遺構一覧表

- ・ 「平面形」は検出面での形状を示した。
- ・ 「長軸」、「短軸」、「桁行」、「梁間」、「面積」の「()」は残存計測値を示した。
- ・ 「長軸」、「短軸」、「深さ」は検出時の最大計測値を示し、「桁行」、「梁間」は検出時の「最小値～最大値」を示した。
- ・ 規模の「()」は遺跡で確認できた柱間数値で、調査区外に延びる可能性がある建物のみを使用した。
- ・ 各欄の「○」は存在することを、「×」は存在しなかったことを示した。
- ・ 各欄の「-」は確認できなかったことを示した。
- ・ 竪穴住居「主柱穴」の「()」は、推測した主柱穴数を示した。

### 遺物観察表

#### 土器観察表

- ・ 「計測値」について、器高の「()」は残存高を示した。「-」は計測不能を示した。
- ・ 「外面色調」は、基本的には『新版 標準土色帖』（農林水産省農林水産技術会議事務局 監修・財団法人日本色彩研究所 色票監修）を使用した。
- ・ 「胎土」について、胎土は砂粒の粒径が2.0mm以上を砂礫、1.0～2.0mmを細砂、0.5～1.0mmを微砂、0.5mm未満を精良と示した。鉱物は石英を「英」、長石を「長」、雲母を「雲」、角閃石を「角」とし、鉱物名称不詳の赤色粒を「赤」、黒色粒を「黒」として表した。なおこれらの識別は肉眼観察による。
- ・ 「状態」については、図上において完形復元が可能であったものについてのみ状態を示した。

#### 土製品観察表

- ・ 「計測値」・「重量」については、現状の最大値を示した。「外面色調」、「胎土」の識別基準は土器観察表に準ずる。

#### 石器観察表

- ・ 「計測値」・「重量」については、現状の最大値を示した。

#### 木器観察表

- ・ 「計測値」・「重量」については、現状の最大値を示した。「色調」の識別基準は土器観察表に準ずる。

#### 金属観察表

- ・ 「計測値」・「重量」については、現状の最大値を示した。

#### ガラス製品観察表

- ・ 「色調」については『新版 色の手帖』（永田泰弘監修 小学館）を使用した。

# 遺構一覽表

## 八幡山遺跡

### 竪穴住居

調査地点	遺構名	平面形	長軸 (cm)	短軸 (cm)	床面積 (㎡)	柱穴	中央穴			焼上面		壁体溝	屋内溝	時期
							平面形	長×短 (cm)	深さ (cm)	面数	長×短 (cm)			
A群 北	竪穴住居 1 A	隅丸方形	(300)	(270)	—	4	—	—	—	×	—	○	○	弥・後
A群 北	竪穴住居 1 B	隅丸方形	496	(327)	—	6	不整形	70×54	32	×	—	全周	×	弥・後
A群	竪穴住居 2	—	—	—	—	4	×	—	—	×	—	×	×	弥生
A群	竪穴住居 3	楕円形	650	550	28	8	不整長方形	62×31	17	1	60×26	全周	×	弥・中
C群	竪穴住居 4	円形	661	(251)	—	(6)	—	—	—	1	35×(24)	全周	×	弥・後
C群	竪穴住居 5	円形	498	(264)	—	(2)	不整形	73×66	17	×	—	全周	○	弥・中
F群	竪穴住居 6	楕円形	550	(327)	—	2	不整形	78×72	25	×	—	○	○	弥・中
H群	竪穴住居 7	隅丸方形	(400)	(142)	—	2	×	—	—	×	—	○	×	弥・中
F群	竪穴住居 8	長方形	(321)	(210)	—	(4)	—	—	—	×	—	全周	×	弥・中
G群	竪穴住居 9	—	—	—	—	4	—	—	—	×	—	—	×	弥生
G群	竪穴住居10	—	—	—	—	4	—	—	—	×	—	—	×	弥・後～古・初
G群	竪穴住居11	—	—	—	—	4	—	—	—	×	—	—	×	弥生
G群	竪穴住居12	—	—	—	—	4	—	—	—	×	—	—	×	弥・後～古・初
G群	竪穴住居13	—	—	—	—	4	—	—	—	×	—	—	×	弥・後～古・初
G群	竪穴住居14	—	—	—	—	4	—	—	—	×	—	—	×	弥・後～古・初

### 段状遺構

調査地点	遺構名	長軸 (cm)	短軸 (cm)	柱穴	焼上面		壁体溝	屋内溝	時期
					面数	長×短 (cm)			
A群	段状遺構 1	(217)	—	○	×	—	○	×	弥・後
A群	段状遺構 2	(405)	—	○	×	—	○	×	弥生
A群	段状遺構 3	445	(139)	○	×	—	×	×	弥・後
B群	段状遺構 4	363	(145)	○	×	—	○	×	弥・後～古・初
B群	段状遺構 5	(600)	(178)	○	×	—	×	×	弥・後～古・初
B群	段状遺構 6	(172)	(125)	○	×	—	○	×	弥・後～古・初
B群	段状遺構 7	(391)	(179)	○	×	—	×	×	弥生
B群	段状遺構 8	(600)	(170)	○	×	—	○	×	弥生
B群	段状遺構 9	(567)	(138)	○	×	—	○	×	弥生
B群	段状遺構10	(227)	(135)	○	×	—	○	×	弥生
B群	段状遺構11	(384)	(112)	×	×	—	○	×	弥生
B群	段状遺構12	(322)	(133)	○	×	—	○	×	弥生
B群	段状遺構13	(322)	(86)	×	×	—	○	×	弥生
B群	段状遺構14	(152)	(50)	×	×	—	○	×	弥生
C群	段状遺構15	(321)	(230)	○	×	—	×	×	弥生
C群	段状遺構16	(383)	(105)	×	×	—	×	×	弥生
D群	段状遺構17	(330)	(252)	○	×	—	○	×	弥生
D群	段状遺構18	(210)	(208)	○	×	—	○	×	弥生
D群	段状遺構19	(150)	(125)	○	×	—	○	×	弥生
D群	段状遺構20	(170)	(75)	○	×	—	○	×	弥生
D群	段状遺構21	(420)	(178)	○	×	—	×	×	弥生
D群	段状遺構22	(221)	(154)	○	×	—	×	×	弥生
D群	段状遺構23	(231)	(75)	○	×	—	○	×	弥生
D群	段状遺構24	(394)	(91)	○	×	—	○	×	弥生
E群	段状遺構25	(489)	(101)	○	×	—	○	×	弥生
E群	段状遺構26	(338)	(140)	○	×	—	○	×	弥・中
E群	段状遺構27	(118)	(102)	○	×	—	×	×	弥生
E群	段状遺構28	(97)	(48)	○	×	—	○	×	弥生
F群	段状遺構29	(308)	(121)	○	×	—	○	×	弥生
E群	段状遺構30	(250)	(62)	○	×	—	×	×	弥・後～古・初
E群	段状遺構31	(222)	(190)	○	×	—	○	×	弥生
E群	段状遺構32	(115)	(35)	×	×	—	×	×	弥生
E群	段状遺構33	(330)	(74)	○	×	—	×	×	弥生
F群	段状遺構34	(422)	(50)	×	×	—	○	×	弥生
E群	段状遺構35	(250)	(52)	×	×	—	○	×	弥生
F群	段状遺構36	(58)	(60)	×	×	—	○	×	弥生
F群	段状遺構37	(275)	(88)	×	×	—	○	×	弥生
F群	段状遺構38	(288)	(68)	○	×	—	○	×	弥生
F群	段状遺構39	(265)	(72)	○	×	—	○	×	弥生
F群	段状遺構40	(392)	(145)	○	×	—	○	×	弥生
F群	段状遺構41	(278)	(72)	×	×	—	○	×	古・初
G群	段状遺構42	(216)	(131)	○	×	—	×	×	弥生
G群	段状遺構43	(218)	(105)	○	×	—	×	×	弥・後～古・初
G群	段状遺構44	(372)	(430)	○	×	—	×	×	弥生
G群	段状遺構45	(457)	(89)	○	×	—	×	×	弥生
G群	段状遺構46	320	(164)	○	×	—	×	×	弥・中
G群	段状遺構47	(166)	(114)	○	×	—	○	×	弥生
G群	段状遺構48	(111)	(52)	×	×	—	○	×	弥生
G群	段状遺構49	(128)	(65)	×	×	—	○	×	弥生
H群	段状遺構50	(376)	(88)	○	×	—	○	×	弥生
H群	段状遺構51	(163)	(66)	×	×	—	○	×	弥・中

調査地点	遺構名	長軸 (cm)	短軸 (cm)	柱穴	焼上面		壁体溝	屋内溝	時期
					面数	長×短 (cm)			
H群	段状遺構52	(255)	(53)	×	×	—	×	×	弥生
H群	段状遺構53	(618)	(132)	○	×	—	×	×	弥生
I群	段状遺構54	(717)	(220)	○	×	—	○	×	弥・後
I群	段状遺構55	(700)	(180)	○	×	—	○	×	弥・後
I群	段状遺構56	(72)	(30)	×	×	—	○	×	弥生
J群	段状遺構57	(180)	(110)	×	×	—	○	×	弥・中
J群	段状遺構58	(700)	(100)	○	×	—	○	×	弥生
K群	段状遺構59	(381)	(156)	○	×	—	○	×	古・初
K群	段状遺構60	(552)	(180)	○	×	—	○	×	弥・中
K群	段状遺構61	748	(122)	○	×	—	○	×	弥・中
K群	段状遺構62	(224)	(75)	○	×	—	○	×	弥生
K群	段状遺構63	(611)	(140)	○	×	—	○	×	弥・中

### 杭列・柱穴列

調査地点	遺構名	柱間	柱間距離 (cm)	棟方向	柱穴掘り方	時期
G群	杭列	6	68 ~ 210	N-80°-E	円形・楕円形	弥生
H群	柱穴列	2	225 ~ 230	N-89°-E	円形・楕円形	弥生

### 火葬墓

遺構名	平面形	断面形	掘り方上面 (cm)		掘り方底 (cm)		深さ (cm)	葺竹器	人骨	時期	備考
			長さ	幅	長さ	幅					
火葬墓	楕円形	箱形	47	38	43	35	28	長頸壺	○	古代	

### 土壌

調査地点	遺構名	平面形	断面形	長軸 (cm)	短軸 (cm)	深さ (cm)	時期	備考
尾根付近	土壌1	不整楕円形	逆合形	120	103	76	縄文	底部中央にビット
尾根付近	土壌2	不整長方形	袋状	111	73	110	縄文	
南斜面	土壌3	楕円形	箱形	101	78	68	縄文	底部中央にビット
C群	土壌4	不整形	楕円形	(310)	(300)	132	弥生	
G群	土壌5	不整形	箱形	38	32	6	弥・後	曜を掘える
G群	土壌6	長方形	箱形	(160)	45	25	弥生	
H群	土壌7	不整形	U字形	94	78	76	弥生	
J群	土壌8	円形	楕円形	78	73	27	弥生	
J群	土壌9	円形	楕円形	83	73	32	弥生	
J群	土壌10	円形	楕円形	78	68	24	弥生	
南斜面	土壌11	隅丸長方形	箱形	79	47	19	古代	
南斜面	土壌12	不整形	楕円形	(205)	194	57	古代	

### 溝

遺構名	上端幅 (cm)	底面幅 (cm)	深さ (cm)	断面形	時期	備考
溝1	127	38	43	V字形	古代	
溝2	110	19	42	V字形	古代	
溝3	52	20	22	楕円形	古代	
溝4	161	28	49	V字形	古代	
溝5	86	22	18	V字形	古代	
溝6	90	41	28	V字形	古代	
溝7	42	30	14	逆合形	古代	

## 八幡山南遺跡

### 段状遺構

調査地点	遺構名	長軸 (cm)	短軸 (cm)	柱穴	焼上面		壁体溝	屋内溝	時期
					面数	長×短 (cm)			
南斜面	段状遺構1	(780)	(96)	×	×	—	○	×	弥・後
南斜面	段状遺構2	(200)	(150)	×	×	—	○	×	弥・後
南斜面	段状遺構3	(170)	(72)	×	×	—	×	×	弥・後
南斜面	段状遺構4	(210)	—	×	×	—	○	×	弥・後
南斜面	段状遺構5	(790)	(212)	○	×	—	○	×	弥・後

### 掘立柱建物

調査地点	遺構名	規模	柱間距離 (cm)		桁行 (cm)	梁間 (cm)	面積 (㎡)	棟方向	柱穴掘り方	時期
			桁	梁						
南斜面上方	掘立柱建物1	2×1	155 ~ 224	150	387	150	5.8	N-60°-E	円	古代
南斜面上方	掘立柱建物2	2×—	197 ~ 211	—	408	—	—	N-57°-E	円	古代



## 製鉄関連遺構

調査地点	遺構名	平面形 長×短 (cm)	焼上面 長×短 (cm)	土層 基数	長×短×深さ (cm)	時期	備考
南斜面傾斜変換点	製鉄関連遺構	294 × (140)	41 × 26	2	60 × 53 × 2 40 × 36 × 11	古代後半 calAD616 ~ 658年	貼り床

## 土壌

調査地点	遺構名	平面形	断面形	長軸 (cm)	短軸 (cm)	深さ (cm)	時期	備考
南斜面	土壌 1	円形	碗形	104	104	66	弥・後	
南斜面	土壌 2	楕円形	逆台形	59	44	46	弥・後	
南斜面	土壌 3	円形	碗形	28	28	13	弥・後	
南斜面	土壌 4	不整形	逆台形	60	60	34	弥・後	

## 八幡山円明寺跡

### 掘立柱建物

調査地点	遺構名	規模	柱間距離 (cm)		桁行 (cm)	梁間 (cm)	面積 (㎡)	棟方向	柱穴掘り方	時期
			桁	梁						
中央部	掘立柱建物	1 × 1	195 ~ 202	190 ~ 195	202	195	3.9	N-14°-E	円	近世

## 土壌

調査地点	遺構名	平面形	断面形	長軸 (cm)	短軸 (cm)	深さ (cm)	時期	備考
南側中央	土壌 1	円形	逆台形	59	59	23	中世	
中央部南寄り	土壌 2	円形	逆台形	74	74	26	中世	
東端中央部	土壌 3	楕円形	皿形	39	36	10	近世	石が充填
中央部	土壌 4	円形	逆台形	41	41	11	近世	埋塞
中央部北寄り	土壌 5	不整形楕円形	楕円形	203	(143)	38	近世	一重土壌 配石

## 池状遺構

調査地点	遺構名	平面形	長×短 (cm)	時期	備考
北側	池状遺構	円形	139 × (139)	近世	標を巡らす

## 溝

調査地点	遺構名	断面形	上端幅 (cm)	底面幅 (cm)	深さ (cm)	時期	備考
南側	溝 1	皿形	150	105	14	近世	
中央部	溝 2	皿形	41	24	9	近世	
南側	溝 3	皿形	42	30	5	近世	
北側	溝 4	皿形	30	16	7	近世	
北側	溝 5	皿形	(190)	82	7	近世	「T」字状 配石

## 集石

調査地点	遺構名	平面形	長×短 (cm)	時期	備考
北側中央	集石	不整形楕円形	180 × 90	近世	部分的に被熱

## 尾崎遺跡

### 竪穴住居

調査地点	遺構名	平面形	長軸 (cm)	短軸 (cm)	床面積 (㎡)	柱穴	中央穴			焼土面		壁体溝	屋内溝	時期
							平面形	長×短 (cm)	深さ (cm)	面数	長×短 (cm)			
G区	竪穴住居 1	方形	425	(150)	—	(4)	×	—	—	×	—	全周	×	弥・後
S 3区	竪穴住居 2	方形	425	400	13.3	6	円形	77×62	52	×	—	全周	×	弥・中
A区	竪穴住居 3	円形	505	(350)	—	(4)	楕円形	83×52	10	×	—	全周	×	弥・中
F区	竪穴住居 4	略方形	450	(300)	—	×	×	—	—	×	—	全周?	×	古・後
E区	竪穴住居 5	—	—	—	—	4	不整形円形	67×62	10	2	85×47 80×40	×	×	古・後
N 1区	竪穴住居 6	方形	(492)	(405)	—	(2)	×	—	—	3	127×60	全周?	×	古・後
A区	竪穴住居 7	方形	450	(232)	—	(2)	×	—	—	×	—	全周?	×	古・後

## 掘立柱建物

調査地点	遺構名	規模	柱間距離 (cm)		桁行 (cm)	梁間 (cm)	面積 (㎡)	棟方向	柱穴掘り方	時期
			桁	梁						
G区	掘立柱建物 1	2 × (2)	237 ~ 241	163 ~ 264	478	(330)	(15.77)	N-12°-W	円・楕円形	古代
G区	掘立柱建物 2	(2) × (1)	186 ~ 239	180	(425)	180	(7.65)	N-68°-E	楕円形	古代
G区	掘立柱建物 3	3 × (2)	218 ~ 222	212 ~ 224	660	(436)	(28.78)	N-89°-W	不整形	古代
G区	掘立柱建物 4	(2) × (1)	181 ~ 186	146	(367)	(146)	(5.36)	N-90°-E	不整形	古代
G区	掘立柱建物 5	2 × (1)	175 ~ 191	172	366	(172)	(6.3)	N-85°-E	円・隅丸長方形	古代
G区	掘立柱建物 6	(1) × (1)	241	230	(241)	(240)	(5.78)	N-84°-E	不整形	古代

調査地点	遺構名	規模	柱間距離 (cm)		桁行 (cm)	梁間 (cm)	面積 (㎡)	棟方向	柱穴掘り方	時期
			桁	梁						
EⅩ	掘立柱建物7	(2)×(1)	176~182	200	(358)	(200)	(7.16)	N-58°-W	不整円形	古代
EⅩ	掘立柱建物8	3×2	182~280	195~222	655	440	28.82	N-56°-E	不整円形・楕円形	古代
EⅩ	掘立柱建物9	(3)×1	138~145	250	(420)	250	(10.5)	N-29°-W	不整円形	古代
EⅩ	掘立柱建物10	(4)×2	96~117	138~186	(428)	324	(13.87)	N-55°-W	不整円形	古代
EⅩ	掘立柱建物11	3×2	153~181	151~197	524	362	18.97	N-58°-W	不整円形	古代
EⅩ	掘立柱建物12	3×2	116~166	124~170	423	302	12.77	N-59°-W	不整円形	古代
DⅩ	掘立柱建物13	4×(2)	121~192	180	644	(400)	(25.76)	N-21°-E	不整方形・円形	古代
DⅩ	掘立柱建物14	4×2	148~181	170~191	672	363	24.39	N-24°-E	円形	古代
DⅩ	掘立柱建物15	(2)×(2)	168~212	135~143	(380)	(278)	(10.56)	N-31°-E	円形	古代
DⅩ	掘立柱建物16	1×1	286~288	214~230	288	230	6.62	N-55°-W	円形	古代
DⅩ	掘立柱建物17	3×2	133~236	131~153	515	289	14.88	N-23°-E	不整方形・円形	古代
DⅩ	掘立柱建物18	3×2	168~215	181~203	579	385	22.29	N-45°-E	不整方形・円形	古代
N1区	掘立柱建物19	(2)×2	176~213	177~194	(390)	371	(14.47)	N-1°-W	円形・楕円形	古代
N2区	掘立柱建物20	1×1	291~300	267~277	300	277	8.31	N-1°-W	円形	古代
N3区	掘立柱建物21	3×2	124~156	128~156	432	288	12.44	N-7°-E	円形・楕円形	古代
N3区	掘立柱建物22	2×2	138~170	135~176	309	311	9.61	N-33°-W	円形・楕円形	古代
BⅩ	掘立柱建物23	(1)×(1)	166~173	162~173	(173)	(173)	(2.99)	N-29°-W	円形・楕円形	古代
AⅩ	掘立柱建物24	(1)×1	237	305	(237)	305	(7.23)	N-7°-E	円形	古代
AⅩ	掘立柱建物25	2×2	178~202	143~194	383	350	13.41	N-7°-W	円形	古代
GⅩ	掘立柱建物26	2×1	80~90	188~192	172	192	3.3	N-55°-W	円形	中世
GⅩ	掘立柱建物27	(3)×(2)	190~214	162~196	(600)	(381)	(22.86)	N-43°-E	円形	中世
GⅩ	掘立柱建物28	(3)×(1)	187~287	195	(677)	(195)	(13.2)	N-34°-E	円形	中世
GⅩ	掘立柱建物29	3×1	189~201	158~198	588	198	11.64	N-54°-E	円形	中世
GⅩ	掘立柱建物30	2×1	302~360	220	694	220	15.27	N-20°-E	円形	中世
GⅩ	掘立柱建物31	2×1	260~310	194	562	194	10.9	N-74°-E	円形	中世
GⅩ	掘立柱建物32	2×1	266~336	192~200	622	200	12.4	N-78°-E	円形・楕円形	中世
EⅩ	掘立柱建物33	(3)×3	297~330	210~264	(963)	710	(68.37)	N-88°-W	円形	中世
CⅩ	掘立柱建物34	5×(3)	233~282	250~291	1313	(791)	(103.86)	N-2°-W	円形	中世
S2区	掘立柱建物35	3×3	235~258	223~260	749	714	53.48	N-1°-W	円形	中世
S3区	掘立柱建物36	3×3	232~252	195~250	736	659	48.5	N-12°-E	円形	中世
S1区	掘立柱建物37	(2)×1	242~260	352	(508)	352	(17.88)	N-85°-W	円形	中世
S3Ⅹ	掘立柱建物38	3×2	265~309	198~210	869	410	35.63	N-13°-E	円形・楕円形	中世
S3Ⅹ	掘立柱建物39	3×3	247~271	212~262	769	728	55.98	N-9°-E	円形・楕円形	中世
S3区	掘立柱建物40	3×3	227~248	182~253	719	709	50.97	N-14°-E	円形・楕円形	中世
S3区	掘立柱建物41	(2)×2	284~290	110~236	(568)	346	(19.65)	N-82°-W	円形・楕円形	中世
S4区	掘立柱建物42	3×2	238~257	230~247	737	477	35.15	N-79°-W	円形	中世
S4Ⅹ	掘立柱建物43	3×2	229~251	275~287	740	565	41.81	N-9°-E	円形	中世
AⅩ	掘立柱建物44	2×(1)	213~237	277~286	450	(286)	(12.87)	N-2°-E	円形	中世

### 柱穴列

調査地点	遺構名	柱間	長さ (cm)	柱間距離 (cm)	主軸	柱穴掘り方	時期
GⅩ	柱穴列1	3	600	198~202	N-60°-E	円形・楕円形	古代
DⅩ	柱穴列2	2	279	113~166	N-41°-E	不整円形	古代
N3区	柱穴列3	3	600	184~221	N-81°-W	円形	古代
GⅩ	柱穴列4	2	289	136~153	N-59°-E	円形・楕円形	中世
GⅩ	柱穴列5	2	384	188~196	N-62°-E	円形・略方形	中世
GⅩ	柱穴列6	2	268	125~143	N-72°-E	不整楕円形	中世
GⅩ	柱穴列7	2	293	146~147	N-59°-E	楕円形	中世
FⅩ	柱穴列8 北	7	1583	161~297	N-89°-E	円形・楕円形	中世
FⅩ	柱穴列8 南	6	1375	156~298	N-89°-E	円形・楕円形	中世
FⅩ	柱穴列9	4	727	154~223	N-74°-E	円形	中世
FⅩ	柱穴列10	2	396	198	N-87°-W	円形・不整方形	中世
FⅩ	柱穴列11	2	470	235	N-78°-E	円形	中世
FⅩ	柱穴列12	3	568	178~202	N-83°-E	円形	中世
FⅩ	柱穴列13	2	492	237~255	N-73°-E	円形	中世
FⅩ	柱穴列14	3	598	197~204	N-80°-E	円形	中世
FⅩ	柱穴列15	2	451	222~229	N-81°-E	円形	中世
EⅩ	柱穴列16	2	514	240~274	N-7°-W	円形	中世
EⅩ	柱穴列17	2	468	219~249	N-2°-W	円形・楕円形	中世
S2区	柱穴列18	(1)	240	240	N-50°-W	多角形	中世

### 古墳

調査区	遺構名	墳形	規模 (m)			墓壇・石室規模 (m)					時期	備考
			直径 (辺長)	高さ	埋葬施設	上面長	上面幅	高さ (深さ)	底面長	底面幅		
G区	古墳	-	-	-	-	-	-	(50)	(260)	(130)	-	

### 火葬墓

調査地点	遺構名	平面形	断面形	掘り方上面 (cm)		掘り方底面 (cm)		深さ (cm)	蔵骨器	人骨	時期	備考
				長さ	幅	長さ	幅					
F区	火葬墓	楕円形	椀形	43	37	38	28	20	短頸壺	×	古代	

## 土器棺

調査地点	遺構名	掘り方平面形	断面形	長軸 (cm)	短軸 (cm)	深さ (cm)	主軸	形態	時期
F区	土器棺1	—	—	—	—	—	N-47°-E	石蓋	古代
F区	土器棺2	—	—	—	—	—	N-36°-W	合わせ口	古代
F区	土器棺3	楕円形	椀形	80	(46)	39	N-81°-W	合わせ口	古代

## 土壇墓

調査区	遺構名	平面形	断面形	掘り方上面 (cm)		掘り方底面 (cm)		深さ (cm)	主軸方向	備考
				長さ	幅	長さ	幅			
S3区	土壇墓	隅丸長方形	逆台形	142	89	127	73	11	N-69°-W	

## 土壇

調査地点	遺構名	平面形	断面形	長軸 (cm)	短軸 (cm)	深さ (cm)	時期	備考
F区	土壇1	楕円形	皿形	328	264	32	弥・中	
F区	土壇2	不整形	2段状	121	96	21	古・後	二重土壇
F区	土壇3	不整長方形	箱形	94	58	48	古代	
F区	土壇4	楕円形	皿形	(82)	(39)	14	古代	底部被熱
D区	土壇5	隅丸長方形	逆台形	57	(53)	16	古代	
D区	土壇6	円形	逆台形	93	88	15	古代	
D区	土壇7	隅丸長方形	皿形	122	(63)	8	古代	
D区	土壇8	楕円形	皿形	87	(52)	10	古代	
A区	土壇9	楕円形	皿形	55	38	6	古代	壁体被熱
G区	土壇10	不整楕円形	皿形	97	88	21	中世	
S4区	土壇11	隅丸長方形	逆台形	(152)	(134)	37	中世	

## 炉

調査地点	遺構名	平面形	長軸 (cm)	短軸 (cm)	時期	備考
F区	炉1	不整長方形	52	34	古代	
F区	炉2	楕円形	(52)	49	古代	
F区	炉3	長方形	(54)	(44)	古代	
F区	炉4	長楕円形	89	56	古代	
F区	炉5	楕円形	46	32	古代	

## 焼土面

調査地点	遺構名	平面形	長軸 (cm)	短軸 (cm)	時期	備考
F区	焼土面1	楕円形	37	21	古代	
F区	焼土面2	不整形	(92)	63	古代	
F区	焼土面3	不整形	83	61	古代	
F区	焼土面4	不整形	72	26	古代	
F区	焼土面5	不整形	62	(28)	古代	

## 炭溜まり

調査地点	遺構名	平面形	長軸 (cm)	短軸 (cm)	時期	備考
F区	炭溜まり1	不整形	97	87	古代	
F区	炭溜まり2	不整形	210	(131)	古代	
A区	炭溜まり3	不整形	72	(52)	古代	

## 土器溜まり

調査地点	遺構名	個体数	時期	備考
E区	土器溜まり	2	古・後	焼土面を伴う

## 溝

調査地点	遺構名	断面形	上縁幅 (cm)	底面幅 (cm)	深さ (cm)	時期	備考
E区	溝1	皿形	43	26	16	弥・中	
C区	溝2	椀形	43	28	16	弥・中	
G区	溝3	段状	115	42	20	古代	建物3の雨落ち溝
F区	溝4	皿形	105	95	10	古代	
B・C区	溝5	逆台形	96	72	18	古代	
F区	溝6	逆台形	68	48	13	中世	
D区	溝7	皿形	136	111	13	中世	
C区	溝8	椀形	25	13	5	中世	
N3区	溝9	皿形	75	52	7	中世	
S1区	溝10	逆台形	103	86	12	中世	
S4区	溝11	皿形	38	29	3	中世	

## たわみ

調査地点	遺構名	平面形	断面形	長軸 (cm)	短軸 (cm)	深さ (cm)	時期	備考
D区	たわみ	不整形	段状	550	270	21	古代	

## 下がり

調査地点	遺構名	断面形	深さ (cm)	時期	備考
F区	下がり1	皿形	20	弥・中～弥・後	
A区	下がり2	碗形	15	弥・後	

## 集石

調査地点	遺構名	平面形	長軸 (cm)	短軸 (cm)	時期	備考
G区	集石1	不整形	150	130	古代	
F区	集石2	不整形	(600)	(260)	古代	

## 石組

調査地点	遺構名	平面形	範囲		時期	備考
			長×短 (cm)			
F区	石組1	長方形	110×75		中世	
F区	石組2	長方形	92×(50)		中世	

## 中町B遺跡

### 竪穴住居

調査地点	遺構名	平面形	長軸 (cm)	短軸 (cm)	床面積 (㎡)	柱穴	中央穴			炕土面		壁体溝	屋内溝	時期
							平面形	長×短 (cm)	深さ (cm)	面数	長×短 (cm)			
3区	竪穴住居	楕円形	332	290	7.55	2	楕円形	50×38	25	×	—	半周	×	弥・後

### 掘立柱建物

地区	遺構名	規模	柱間距離 (cm)		桁行 (cm)	梁間 (cm)	面積 (㎡)	棟方向	柱穴掘り方	時期	備考
			桁	梁							
4区	掘立柱建物	3×2	180～210	155～293	593	458	26.1	N-9°-W	円形・楕円形	中世	西1間分は庇か

### 道路遺構 側溝

遺構名	長さ (m)	上端幅 (cm)	深さ (cm)	断面形	時期	備考
側溝1	(165.2)	400	39	碗形	古代	
側溝2	(139.2)	360	36	碗形	古代	
側溝3	(82.2)	40	9	皿形	古代	

## 土壌

調査地点	遺構名	平面形	断面形	長軸 (cm)	短軸 (cm)	深さ (cm)	時期	備考
3区	土壌1	不整形	掃鉢形	250	60	16	弥・後	
4区	土壌2	不整形	不整形	218	66	7	中世	
4区	土壌3	不整形	不整形	(62)	65	3	中世	
4区	土壌4	円形	逆台形	127	64	7	中世	
2区	土壌5	不整形	皿	108	58	8	中世	

## 溝

遺構名	上端幅 (cm)	底面幅 (cm)	深さ (cm)	断面形	時期	備考
溝1	37	16	4	逆台形	弥生	
溝2	88	70	9	不整形	古代	底面に窪みが連続

## たわみ

調査地点	遺構名	平面形	断面形	長軸 (cm)	短軸 (cm)	深さ (cm)	時期	備考
3区	たわみ1	不整形	皿形	384	174	11	縄・後	
3区	たわみ2	不整形	皿形	780	111	10	縄文	

## 穴が途遺跡

### 竪穴住居

調査地点	遺構名	平面形	長軸 (cm)	短軸 (cm)	床面積 (㎡)	柱穴	中央穴			焼土面		壁体溝	屋内溝	時期
							平面形	長×短 (cm)	深さ (cm)	面数	長×短 (cm)			
尾根上	竪穴住居 1	凹形	874	(537)	—	(4)	凹形 凹形 隅丸方形	50×44 61×56 72×68	43 48 32	×	—	全周	○	弥・後
尾根上	竪穴住居 2	凹形	1000	940	73.8	(8~10)	長方形	122×89	27	×	—	全周	×	弥・後
西斜面	竪穴住居 3	凹形	(550)	(350)	—	(3)	楕円形	83×52	10	×	—	全周	×	弥・後
西斜面	竪穴住居 4	凹形	495	(300)	—	(2)	凹形	46×(21)	27	×	—	全周	×	弥生
C群	竪穴住居 5	方形	333	(186)	—	(2)	不整凹形	44×41	21	×	—	全周	○	弥・後 calAD2-71
C群	竪穴住居 6	—	—	—	—	(2)	—	—	—	×	—	○	×	弥・後
C群	竪穴住居 7	—	—	—	—	4	—	—	—	×	—	—	×	弥・後
C群	竪穴住居 8	—	—	—	—	(2)	—	—	—	×	—	—	×	弥・後
C群	竪穴住居 9	—	—	—	—	4	—	—	—	×	—	—	×	弥・後
C群	竪穴住居 10	—	—	—	—	(2)	—	—	—	×	—	—	×	弥・後
C群	竪穴住居 11	—	—	—	—	4	—	—	—	×	—	—	×	弥・後
C群	竪穴住居 12	—	—	—	—	4	—	—	—	×	—	—	×	弥・後
C群	竪穴住居 13	—	—	—	—	4	—	—	—	×	—	—	×	弥・後
C群	竪穴住居 14	—	—	—	—	(2)	—	—	—	×	—	○	×	弥・後
C群	竪穴住居 15	—	—	—	—	4	—	—	—	×	—	—	×	弥・後

### 掘立柱建物

調査地点	遺構名	規模	柱間距離 (cm)		桁行 (cm)	梁間 (cm)	面積 (㎡)	棟方向	柱穴掘り方	時期
			桁	梁						
西斜面	掘立柱建物	2×1	160~334	168~178	334	180	6.01	N-23°-W	凹形・楕円形	弥・後

### 段状遺構

調査地点	遺構名	長軸 (cm)	短軸 (cm)	柱穴	焼土面		壁体溝	屋内溝	時期
					面数	長×短 (cm)			
北斜面	A群	858	(272)	○	×	—	○	×	弥・後
北斜面	B群	2058	(300)	○	×	—	○	×	弥・後
C群	段状遺構 1	(438)	(76)	○	×	—	×	×	弥生
C群	段状遺構 2	(486)	(124)	○	×	—	○	×	弥・後
C群	段状遺構 3	(312)	(86)	○	×	—	○	×	弥生
C群	段状遺構 4	(664)	(72)	×	×	—	×	×	弥・後
C群	段状遺構 5	(664)	(100)	×	×	—	×	×	弥・後
C群	段状遺構 6	(944)	(146)	○	×	—	×	×	弥生
C群	段状遺構 7	(554)	(134)	○	×	—	×	×	弥・後
C群	段状遺構 8	(252)	(60)	×	×	—	○	×	弥生
C群	段状遺構 9	(1060)	(120)	○	×	—	○	×	弥・後
D群	段状遺構 10	(234)	(44)	×	×	—	○	×	弥生
D群	段状遺構 11	(314)	(74)	×	×	—	○	×	弥・後
D群	段状遺構 12	(640)	(110)	○	×	—	○	×	弥・後
D群	段状遺構 13	414	(80)	×	×	—	○	×	弥・後
D群	段状遺構 14	(392)	(40)	×	×	—	×	×	弥生
D群	段状遺構 15	(300)	(114)	○	×	—	○	×	弥生
D群	段状遺構 16	(280)	(196)	○	×	—	×	×	弥・後
D群	段状遺構 17	(560)	(198)	○	×	—	×	×	弥・後
D群	段状遺構 18	(420)	(194)	○	×	—	○	×	弥・後
D群	段状遺構 19	(880)	(200)	○	2	39×20 60×26	×	×	弥・後
D群	段状遺構 20	(278)	(22)	×	×	—	×	×	弥・後

### 土壌

調査地点	遺構名	平面形	断面形	長軸 (cm)	短軸 (cm)	深さ (cm)	時期	備考
西斜面	土壌 1	楕円形	袋状	72	68	57	弥・後	
西斜面	土壌 2	長方形	逆台形	91	43	13	弥・後	
西斜面	土壌 3	不整凹形	箱形	83	82	100	縄文	底部中央にビット
西斜面	土壌 4	長方形	箱形	88	70	79	縄文	底部中央にビット

## 穴が途古墳

### 古墳

遺構名	墳形	規模 (m)		埋葬施設	墓壇・石室規模 (m)					時期	備考
		直径(母長)	高さ		上面長	上面幅	高さ(深さ)	底面長	底面幅		
穴が途古墳	円	17.0	(4.2)	横穴式石室	—	—	(1.80)	7.9	4.6	古・後	

## 土壌墓

遺構名	平面形	断面形	掘方上面 (cm)		掘方底面 (cm)		深さ (cm)	主軸方向	備考
			長さ	幅	長さ	幅			
土壌墓	長方形	箱形	160	56	150	45	7	N-26° -E	

## 今岡D遺跡

### 竪穴住居

調査地点	遺構名	平面形	長軸 (cm)	短軸 (cm)	床面積 (㎡)	柱穴	中央穴			焼上面		壁体溝	屋内溝	時期
							平面形	長×短 (cm)	深さ (cm)	面数	長×短 (cm)			
尾根上	竪穴住居 1	楕円形	745	663	38.77	6	長楕円形	140×61	30	×	—	半周	×	弥・後
尾根上	竪穴住居 2	楕円形	700	(470)	—	(5)	円形	55×53	24	×	—	半周	×	弥・中
尾根上	竪穴住居 3	隅丸長方形	633	(353)	—	(4)	長方形	68×45	15	×	—	全周	×	弥・中
南斜面	竪穴住居 4	円形	(662)	(374)	—	(4)	円形	46×(21)	27	×	—	二重	×	弥・中
南斜面	竪穴住居 5	円形	603	(324)	—	(5)	不整円形楕円形	126×78 (80)×(60)	33 31	×	—	半周	×	弥・中
南斜面	竪穴住居 6	—	(267)	(110)	—	—	—	—	—	×	—	○	×	弥・後
南斜面	竪穴住居 7	隅丸長方形	397	(266)	—	4	円形	55×40	61	×	—	全周	○	弥・後

### 段状遺構

調査地点	遺構名	長軸 (cm)	短軸 (cm)	柱穴	焼上面		壁体溝	屋内溝	時期
					面数	長×短 (cm)			
南斜面	段状遺構 1	(704)	(196)	×	×	—	○	×	弥・後
南斜面	段状遺構 2	(518)	(295)	×	×	—	○	×	弥・後
南斜面	段状遺構 3	711	(150)	○	×	—	×	×	弥・後
南斜面	段状遺構 4	558	(228)	○	×	—	×	×	弥・後
南斜面	段状遺構 5	(365)	(109)	○	×	—	○	×	弥・後
南斜面	段状遺構 6	(354)	(104)	○	×	—	○	×	弥・後
南斜面	段状遺構 7	(375)	(119)	×	×	—	×	×	弥・後
南斜面	段状遺構 8	403	(140)	○	×	—	○	×	弥・後
南斜面	段状遺構 9	(162)	(82)	○	×	—	○	×	弥・後
西斜面	段状遺構 10	(140)	(99)	×	×	—	○	×	弥・後

### 掘立柱建物

調査地点	遺構名	規模	柱間距離 (cm)		桁行 (cm)	梁間 (cm)	面積 (㎡)	棟方向	柱穴掘り方	時期
			桁	梁						
南斜面	掘立柱建物	1×1	152～184	151～171	184	171	3.15	N-24° - E	円形・楕円形	弥生

### 柱穴列

調査地点	遺構名	柱間	長さ (cm)	柱間距離 (cm)	主軸	柱穴掘り方	時期
南斜面	柱穴列 1	2	320	150～170	N-69° - W	円形・楕円形	弥生
南斜面	柱穴列 2	3	222	61～93	N-40° - W	円形・楕円形	弥・後

## 土壌

調査地点	遺構名	平面形	断面形	長軸 (cm)	短軸 (cm)	深さ (cm)	時期	備考
尾根上	土壌 1	不整円形	逆台形	230	150	40	弥生	
尾根上	土壌 2	隅丸長方形	箱形	123	76	22	弥・後	
尾根上	土壌 3	不整形	段状	344	210	45	弥・後	
南斜面	土壌 4	隅丸長方形	楕円形	229	(196)	116	弥生	
南斜面	土壌 5	不整楕円形	皿形	152	106	8	弥生	
尾根上	土壌 6	長方形	箱形	120	28	24	古墳	
尾根上	土壌 7	長方形	一段状	289	111	35	古墳	
尾根上	土壌 8	不整楕円形	逆台形	(138)	109	35	古墳	
尾根上	土壌 9	楕円形	逆台形	123	86	35	古墳	
尾根上	土壌 10	不整楕円形	不整形	193	92	26	古・中	
尾根上	土壌 11	長楕円形	皿形	204	106	24	古墳	
尾根上	土壌 12	不整形	皿形	110	84	15	古墳	
尾根上	土壌 13	不整形	逆台形	170	80	15	古墳	
尾根上	土壌 14	楕円形	皿形	(115)	(84)	14	古・中	
尾根上	土壌 15	不整楕円形	逆台形	108	54	21	古・中	
南斜面	土壌 16	楕円形	逆台形	123	81	103	不明	底部にビット
南斜面	土壌 17	不整形	箱形	92	80	86	不明	底部にビット
南斜面	土壌 18	楕円形	箱形	78	66	87	不明	底部にビット
南斜面	土壌 19	円形	箱形	86	71	44	不明	底部にビット

## 今岡中山遺跡

### 竪穴住居

調査地点	遺構名	平面形	長軸 (cm)	短軸 (cm)	床面積 (㎡)	柱穴	中央穴			焼上面		壁体溝	屋内溝	時期
							平面形	長×短 (cm)	深さ (cm)	面数	長×短 (cm)			
尾根上	竪穴住居 1	円形	630	(470)	—	5	不整形	87×63	50	×	—	全周	×	弥・後
尾根上	竪穴住居 2	円形	740	(670)	—	6	円形	62×62	55	×	—	半周	○	弥・後
南西斜面	竪穴住居 3	多角形	(600)	(255)	—	4	—	—	—	×	—	全周	×	古代
南西斜面	竪穴住居 4	方形	(430)	(200)	—	3	—	—	—	2	90×54 43×(12)	×	×	古代

### 段状遺構

調査地点	遺構名	長軸 (cm)	短軸 (cm)	柱穴	焼上面		壁体溝	屋内溝	時期
					面数	長×短 (cm)			
西斜面	段状遺構 1	596	(128)	○	×	—	○	×	弥・後
西斜面	段状遺構 2	978	(186)	○	2	78×36 62×46	○	×	弥・後
西斜面	段状遺構 3	(444)	(184)	○	×	—	×	×	弥・後
西斜面	段状遺構 4	(420)	(136)	×	×	—	×	×	弥・後
西斜面	段状遺構 5	(1640)	(256)	○	1	38×38	○	×	弥・後
西斜面	段状遺構 6	(378)	(50)	○	×	—	×	×	弥・後

### 土壌

調査地点	遺構名	平面形	断面形	長軸 (cm)	短軸 (cm)	深さ (cm)	時期	備考
西斜面	土壌 1	不整円形	逆台形	130	(88)	118	不明	
西斜面	土壌 2	不整円形	逆台形	142	103	63	弥・後	
西斜面	土壌 3	長方形	箱形	90	59	13	不明	配石

### 溝

調査地点	遺構名	断面形	上端幅 (cm)	底面幅 (cm)	深さ (cm)	時期	備考
西斜面	溝 1	皿形	72	34	12	古・後～古代	
西斜面	溝 2	皿形	(86)	(70)	12	古・後～古代	

### 石積み

調査地点	遺構名	平面形	範囲 長×短 (cm)	時期	備考
西斜面	石積み	列状	(200) × 50	古・後～古代	等高線に平行

## 今岡古墳群

### 古墳

調査地点	遺構名	墳形	規模 (m)		埋葬施設	墓廬規模 (m)					時期	備考
			直径(辺長)	高さ		上面長	上面幅	高さ(深さ)	底面長	底面幅		
今岡中山遺跡	今岡 7 号墳	円	7.0	—	横穴式石室	(2.88)	(2.0)	(0.81)	(2.5)	0.72	古・後	
今岡中山遺跡	今岡 8 号墳	円	(7.0)	—	—	—	—	—	—	—	—	
今岡 D 遺跡	今岡 9 号墳	円	(9.0)	—	土塋墓	2.18	1.0	(0.16)	1.88	0.72	—	
今岡 D 遺跡	今岡 10 号墳	方	10.0	(0.6)	土塋墓	4.2	1.2	(0.4)	3.08	0.25	古・中	割竹形木棺直葬
今岡 D 遺跡	今岡 11 号墳	円	(8.0)	—	横穴式石室	(5.75)	(2.55)	(1.00)	(4.08)	(1.40)	古・後	棺台
今岡 D 遺跡	今岡 12 号墳	—	—	—	横穴式石室	(3.85)	2.56	(1.02)	(3.71)	2.15	古・後	棺台

### 土塋墓

調査地点	遺構名	平面形	断面形	掘り方上面 (cm)		掘り方下面 (cm)		深さ (cm)	主軸方向	備考
				長さ	幅	長さ	幅			
今岡 D 遺跡	土塋墓 1	長方形	箱形	249.0	97.0	237.0	88.0	25.0	N-85°-W	
今岡 D 遺跡	土塋墓 2	不整長方形	逆台形	123.0	79.0	108.0	64.0	10.0	N-62°-E	
今岡 D 遺跡	土塋墓 3	長方形	皿形	191.0	117.0	174.0	103.0	5.0	N-2°-E	

## 高岡遺跡

### 竪穴住居

調査地点	遺構名	平面形	長軸 (cm)	短軸 (cm)	床面積 (㎡)	柱穴	中央穴			焼上面		壁体溝	屋内溝	時期
							平面形	長×短 (cm)	深さ (cm)	面数	長×短 (cm)			
尾根上	竪穴住居 1-A	円形	718	(400)	—	7	方形	62×62	26	×	—	全周	×	弥・後
尾根上	竪穴住居 1-B	楕円形	1044	(560)	—	(10)	長方形 方形	92×78 81×80	50 38	×	—	半周	×	弥・後
西斜面	竪穴住居 2	楕円形	(558)	(338)	—	(4)	—	—	—	×	—	半周	×	弥・後
尾根上	竪穴住居 3 A	円形	—	—	—	(6)	楕円形	132×103	48	×	—	全周	○	弥・後
尾根上	竪穴住居 3 B	円形	(640)	(350)	—	(6)	不整円形	(70) × (65)	28	×	—	全周	○	弥・後
尾根上	竪穴住居 3 C	円形	(813)	438	—	(8)	不整円形	95×70	20	×	—	全周	×	弥・後

### 段状遺構

調査地点	遺構名	長軸 (cm)	短軸 (cm)	柱穴	鏡上面		壁体溝	屋内溝	時期
					面数	長×短 (cm)			
南斜面	段状遺構 1	(670)	(500)	○	×	—	○	×	弥・後
南斜面	段状遺構 2	(1755)	(535)	○	×	—	×	×	弥・後
南斜面	段状遺構 3	(222)	(158)	○	×	—	×	×	弥・後

### 土壌

調査地点	遺構名	平面形	断面形	長軸 (cm)	短軸 (cm)	深さ (cm)	時期	備考
尾根上	土壌 1	凹形	袋状	172	160	129	弥・後	底部にピット
尾根上	土壌 2	楕円形	箱形	(165)	140	159	弥・後	
尾根上	土壌 3	不整形	皿形	253	230	24	弥・後	
尾根上	土壌 4	不整形	箱形	61	59	39	弥・後	
尾根上	土壌 5	不整形	箱形	143	123	72	弥・後	
尾根上	土壌 6	長方形	逆台	257	134	37	弥生	
尾根上	土壌 7	不整形	袋状	181	112	145	弥・後	
尾根上	土壌 8	長楕円形	皿形	392	178	27	弥生	
尾根上	土壌 9	不整形	掃鉢形	191	109	45	弥生	



# 遺物一覽表

## 土器觀察表

### 八幡山遺跡

掲載番号	遺構名	種別	器種	計測値 (cm)			色調		胎土	残存状況	焼成	形態・手法の特徴など
				口径	底径	器高						
1	竪穴住居 1	弥生	壺	—	—	(8.5)	にぶい褐	7.5YR5/4	細砂：長、英		良好	
2	竪穴住居 1	弥生	高杯	—	—	(3.0)	にぶい橙	7.5YR6/4	細砂：長、英、雲、赤		良好	外面 凹線 4 条残
3	竪穴住居 1	弥生	高杯	—	—	(6.1)	橙	5YR6/6	微砂：長、英、赤		良好	
4	竪穴住居 3	弥生	甕	14.0	—	(2.7)	にぶい黄橙	10YR7/4	微砂：長、英、赤		良好	胴部外面煤付着
5	竪穴住居 3	弥生	甕	17.8	—	(2.5)	にぶい橙	7.5YR6/4	細砂：長、英、赤		良好	
6	竪穴住居 3	弥生	甕	12.1	—	(2.7)	黒褐	10YR3/2	細砂：長、英		良好	胴部外面煤付着
7	竪穴住居 3	弥生	甕	16.4	—	(4.3)	にぶい橙	7.5YR6/4	微砂：長、英、雲、赤、黒		良好	
8	竪穴住居 3	弥生	甕	17.5	—	(8.3)	にぶい橙	7.5YR6/4	細砂：長、英、赤、黒		良好	胴部外面煤付着
9	竪穴住居 3	弥生	甕	—	6.8	(4.5)	にぶい黄橙	10YR6/3	細砂：長、英		良好	
10	竪穴住居 3	弥生	鉢	17.7	—	(5.0)	にぶい褐	7.5YR5/3	微砂：長、英		良好	
11	竪穴住居 4	弥生	甕	10.5	5.9	20.8	明赤褐	5YR5/6	砂礫：長、英		良好	頸部 縦 2 列の竹管文 肩部 凹形浮文 底部のみ黒斑
12	竪穴住居 4	弥生	器台	—	15.5	(16.8)	明赤褐	2.5YR5/6	砂礫：長、英、赤		良好	刺突文・凹形穿孔 縦 4 列 (不規則)
13	竪穴住居 4	弥生	甕	13.7	—	(2.7)	にぶい橙	5YR6/4	細砂：長、英、赤、黒		良好	口縁外面 凹線
14	竪穴住居 4	弥生	甕	—	—	(2.2)	にぶい橙	7.5YR7/4	微砂：長、英、赤		良好	口縁外面 凹線
15	竪穴住居 4	弥生	高杯	24.5	—	(4.8)	橙	7.5YR7/6	細砂：長、英、赤		良好	
16	竪穴住居 4	弥生	鉢	17.8	—	(3.3)	にぶい橙	7.5YR6/4	細砂：長、英、赤		良好	
17	竪穴住居 4	弥生	鉢	13.5	—	(4.5)	にぶい褐	7.5YR5/4	細砂：長、英		良好	
18	竪穴住居 4	弥生	蓋	—	—	(2.2)	にぶい黄橙	10YR6/3	微砂：長、英		良好	
19	竪穴住居 5	弥生	甕	—	—	(6.0)	灰黄橙	10YR6/2	細砂：長、英		良好	
20	竪穴住居 5	弥生	甕	—	5.0	(5.8)	にぶい黄橙	10YR6/4	細砂：長、英		良好	
21	竪穴住居 6	弥生	壺	18.0	—	(1.5)	にぶい橙	7.5YR6/4	微砂：長、英、雲		良好	口縁内外面 櫛描斜格子文
22	竪穴住居 6	弥生	壺	14.2	—	(6.4)	にぶい黄橙	10YR7/3	微砂：長、英、赤、黒		良好	口縁部 凹線 4 条・杯状浮文、穿孔 頸部 貼付突帯
23	竪穴住居 6	弥生	甕	18.6	—	(4.4)	橙	5YR6/8	細砂：長、英		良好	口縁部 凹線 4 条
24	竪穴住居 6	弥生	甕	15.3	7.0	28.7	橙	5YR6/8	砂礫：長、英、赤	1/2 壊	良好	口縁部 凹線 1 条
25	竪穴住居 6	弥生	甕	14.6	2.5	(13.1)	にぶい黄橙	10YR7/4	細砂：長、英		良好	口縁部 凹線 1 条
26	竪穴住居 6	弥生	甕	14.8	—	(10.0)	橙	5YR6/6	砂礫：長、英		良好	
27	竪穴住居 6	弥生	甕	13.8	—	(3.1)	にぶい黄橙	10YR7/4	砂礫：長、英		良好	
28	竪穴住居 6	弥生	甕	24.0	—	(5.7)	明褐	7.5YR5/6	細砂：長、英		良好	
29	竪穴住居 6	弥生	甕	—	5.8	(3.8)	にぶい褐	7.5YR5/4	細砂：長、英		良好	
30	竪穴住居 6	弥生	甕	—	5.1	(3.5)	にぶい橙	7.5YR6/4	砂礫：長、英		良好	
31	竪穴住居 6	弥生	甕	—	5.6	(2.1)	黒褐	10YR3/1	微砂：長、英、雲、赤		良好	底部穿孔
32	竪穴住居 6	弥生	高杯	29.8	—	(7.3)	橙	7.5YR6/6	細砂：長、英、雲		良好	口唇部 刻口
33	竪穴住居 6	弥生	高杯	—	8.2	(6.9)	橙	5YR6/6	砂礫：長、英、赤		良好	
34	竪穴住居 7	弥生	甕	15.7	—	(3.5)	にぶい黄橙	10YR7/4	微砂：長、英		良好	
35	竪穴住居 7	弥生	甕	—	6.0	(3.5)	褐灰	10YR5/1	精良		良好	
36	竪穴住居 7	弥生	高杯	—	—	(2.8)	橙	7.5YR6/6	微砂：長、英、赤		良好	口唇部 刻口
37	段状遺構 1	弥生	蓋	—	—	(4.5)	橙	5YR6/6	砂礫：長、英、角、赤		良好	
38	段状遺構 3	弥生	器台	17.9	—	(3.9)	橙	7.5YR7/6	微砂：長、英		良好	口縁部 凹線 4 条
39	段状遺構 3	弥生	高杯	—	4.4	(9.6)	にぶい橙	7.5YR6/4	細砂：長、英、雲		良好	脚端部 凹線 2 条
40	段状遺構 4 P 2	弥生	壺	14.7	—	(5.2)	明赤褐	5YR5/6	細砂：長、英		良好	
41	段状遺構 5	弥生	甕	—	—	(2.1)	にぶい褐	7.5YR5/4	微砂：長、英		良好	
42	段状遺構 5	弥生	甕	—	—	(2.7)	橙	7.5YR6/6	微砂：長、英、赤		良好	
43	段状遺構 5	弥生	甕	—	—	(2.9)	黒褐	10YR3/1	微砂：長、英		良好	
44	段状遺構 7	弥生	甕	15.4	—	(2.0)	橙	7.5YR6/6	細砂：長、英、赤		良好	
45	段状遺構 7	弥生	甕	—	—	(1.8)	明赤褐	5YR5/6	微砂：長、英、赤		良好	
46	段状遺構 7	弥生	鉢	12.1	—	(5.2)	橙	7.5YR6/6	微砂：長、英、赤		良好	凹線 3 条
47	段状遺構 9 P 3	弥生	甕	—	6.5	(4.2)	にぶい橙	7.5YR6/4	微砂：長、英、赤、黒		良好	
48	段状遺構 10	弥生	甕	—	—	(2.7)	橙	7.5YR6/6	微砂：長、英、赤		良好	
49	段状遺構 18	弥生	甕	18.0	—	(5.9)	にぶい黄橙	10YR7/2	細砂：長、英		良好	口縁部 凹線 3 条 肩部 波条文
50	段状遺構 18	弥生	甕	—	8.0	(2.9)	橙	7.5YR6/6	微砂：長、英		良好	
51	段状遺構 18	弥生	器台	17.2	—	(3.5)	にぶい橙	7.5YR6/4	細砂：長、英		良好	
52	段状遺構 21	弥生	甕	12.8	—	(2.0)	明褐	7.5YR5/6	細砂：長、英		良好	
53	段状遺構 21	弥生	甕	—	—	(1.7)	橙	7.5YR6/6	細砂：長、英		良好	
54	段状遺構 23	弥生	甕	—	—	(2.9)	橙	5YR6/6	微砂：長、赤		良好	
55	段状遺構 24	弥生	高杯	—	—	(2.8)	褐灰	10YR4/1	微砂：長、英		良好	口唇部 刻目
56	P 4	弥生	甕	—	6.0	(4.4)	灰褐	7.5YR4/2	微砂：長、英、雲、赤		良好	
57	段状遺構 27	弥生	高杯	—	—	(6.4)	橙	7.5YR6/6	細砂：長、英		良好	
58	段状遺構 27	弥生	高杯	—	13.2	(2.0)	明赤褐	5YR5/6	細砂：長、英		良好	
59	段状遺構 26 P 5	弥生	甕	—	5.9	(3.5)	浅黄	2.5YR7/3	微砂：長、英、赤		良好	底部 ハケ目
60	段状遺構 27 P 6	弥生	高杯	—	—	(9.3)	橙	7.5YR6/6	細砂：長、英、赤、黒		良好	脚部 凹形穿孔 内外面に赤色顔料付着
61	段状遺構 30	弥生	甕	12.8	—	(5.1)	明赤褐	5YR5/6	微砂：長、英、赤		良好	
62	段状遺構 30	弥生	甕	14.5	—	(4.5)	にぶい黄橙	10YR7/4	微砂：長、英、赤		良好	
63	段状遺構 30	弥生	甕	14.6	—	(5.7)	にぶい黄橙	10YR6/3	微砂：長、英、赤		良好	
64	段状遺構 30	弥生	甕	—	—	(3.4)	にぶい橙	7.5YR7/3	細砂：長、英		良好	
65	段状遺構 30	弥生	高杯	16.0	—	(5.9)	橙	5YR6/6	細砂：長、英、黒		良好	
66	段状遺構 30	弥生	鉢	18.2	—	(6.7)	にぶい黄橙	10YR6/4	細砂：長、英、赤		良好	
67	段状遺構 37	弥生	甕	—	—	(2.2)	橙	7.5YR6/8	細砂：長、英		良好	
68	竪穴住居 8	弥生	壺	25.1	—	(1.6)	橙	7.5YR6/6	微砂：長、英、赤		良好	口縁部 格子状刻目

掲載 番号	遺構名	種別	器種	計測値 (cm)			色調	胎土	残存 状況	焼成	形態・手法の特徴など
				口径	底径	器高					
69	竪穴住居 8	弥生	壺	16.4	—	(7.2)	にぶい黄橙 10YR7/4	微砂：長、英、赤、黒		良好	口縁部 刻目 頸部 凹線 3 条
70	竪穴住居 8	弥生	壺	16.0	—	(5.4)	浅黄 2.5Y7/4	微砂：長、赤、黒		良好	口縁部 凹線 4 条・棒状浮文 頸部 貼付突帯
71	竪穴住居 8	弥生	壺	31.0	—	(9.4)	にぶい黄橙 10YR7/4	細砂：長、英		良好	
72	竪穴住居 8	弥生	壺	32.0	—	(4.5)	橙 5YR6/6	細砂：長、英、赤		良好	
73	竪穴住居 8	弥生	壺	25.0	—	(5.0)	明赤褐 5YR5/6	細砂：長、英		良好	
74	竪穴住居 8	弥生	壺	22.6	—	(8.5)	橙 7.5YR6/6	細砂：長、英		良好	口唇部 刻目
75	竪穴住居 8	弥生	壺	12.5	5.3	23.5	にぶい黄橙 10YR6/4	砂礫：長、英	2/3 残	良好	
76	竪穴住居 8	弥生	壺	—	5.5	(10.3)	にぶい橙 7.5YR6/4	砂礫：長、英、赤		良好	
77	竪穴住居 8	弥生	高杯	—	15.4	(8.0)	にぶい橙 7.5YR6/4	細砂：長、英		良好	三角形透かし
78	段状遺構39	弥生	壺	13.0	—	(4.3)	橙 7.5YR6/6	微砂：長、英、赤		良好	
79	段状遺構39	弥生	壺	—	3.8	(5.0)	にぶい褐 7.5YR5/3	微砂：長、英、赤		良好	
80	段状遺構39	弥生	高杯	27.0	—	(5.8)	にぶい黄橙 10YR7/4	細砂：長、英、赤		良好	
81	段状遺構41	弥生	壺	13.2	—	(4.4)	明赤褐 5YR5/6	砂礫：長、英		良好	
82	段状遺構41	弥生	壺	—	—	(2.8)	にぶい黄橙 10YR6/4	微砂：長、英		良好	
83	竪穴住居13	弥生	壺	14.4	—	(3.8)	橙 7.5YR6/6	細砂：長、英、赤		良好	
84	竪穴住居13	弥生	壺	—	2.9	(3.0)	橙 5YR6/6	砂礫：長、英、赤		良好	
85	竪穴住居13	弥生	高杯	18.0	—	(4.2)	橙 7.5YR6/6	砂礫：長、英、赤		良好	
86	竪穴住居13	弥生	高杯	—	—	(6.0)	橙 5YR6/6	砂礫：長、英		良好	
87	竪穴住居13	弥生	鉢	12.5	4.5	6.7	にぶい橙 7.5YR6/4	細砂：長、英、赤	1/3 残	良好	
88	竪穴住居14	弥生	壺	—	—	(3.1)	にぶい橙 7.5YR6/4	砂礫：長、英、赤		良好	
89	段状遺構43	弥生	壺	12.9	—	(3.5)	にぶい橙 7.5YR6/4	微砂：長、英、赤		良好	
90	段状遺構43	弥生	壺	—	10.8	(6.8)	明赤褐 5YR5/6	砂礫：長、英、赤		良好	
91	段状遺構46	弥生	壺	16.9	—	(1.7)	橙 7.5YR6/6	微砂：長、英、赤、黒		良好	口縁部 凹線 3 条
92	段状遺構46	弥生	高杯	18.0	—	(3.7)	にぶい黄橙 10YR6/3	砂礫：長、英		良好	
93	段状遺構46	弥生	高杯	—	—	(3.3)	橙 7.5YR6/6	砂礫：長、英、赤		良好	口唇部 刻目 貼付突帯 3 条
94	段状遺構51	弥生	壺	—	—	(1.3)	明赤褐 5YR5/6	微砂：長、英、赤		良好	
95	段状遺構51	弥生	壺	—	6.0	(2.0)	にぶい黄橙 10YR6/4	微砂：長、英		良好	底部 穿孔
96	段状遺構51	弥生	壺	—	6.2	(4.6)	橙 7.5YR6/6	微砂：長、英		良好	
97	土壇 7	弥生	壺	—	6.8	(5.5)	にぶい褐 7.5YR5/3	砂礫：長、英、赤		良好	
98	土壇 7	弥生	壺	—	5.5	(5.3)	にぶい橙 7.5YR6/4	砂礫：長、英		良好	
99	柱穴列	弥生	壺	—	7.4	(2.5)	灰黄 2.5Y7/2	微砂：長、英、角、赤		良好	
100	段状遺構54	弥生	壺	—	6.2	(3.8)	明赤褐 5YR5/6	砂礫：長、英		良好	
101	段状遺構54	弥生	高杯	—	—	(2.5)	橙 7.5YR6/6	砂礫：長、英		良好	
102	段状遺構55	弥生	壺	—	6.5	(4.2)	にぶい褐 7.5YR5/4	細砂：長、英、赤		良好	
103	段状遺構57	弥生	壺	—	—	(1.3)	明赤褐 5YR5/6	微砂：長、英		良好	
104	段状遺構57	弥生	高杯	—	—	(4.0)	灰黄 2.5Y7/2	微砂：長、英		良好	三角形透かし
105	P 7	弥生	壺	—	—	(10.0)	橙 7.5YR6/6	砂礫：長、英		良好	洗線 6 条・縹形状へら描洗線
106	P 7	弥生	蓋	11.0	—	(3.4)	明赤褐 5YR5/6	砂礫：長、英、赤	1/3 残	良好	円形穿孔
107	段状遺構59	弥生	壺	—	—	(3.2)	にぶい褐 7.5YR5/3	微砂：長、英、赤		良好	
108	段状遺構59	弥生	壺	—	—	(4.0)	にぶい褐 7.5YR5/4	微砂：長、英、赤		良好	
109	段状遺構59	弥生	罎台	(8.5)	—	(7.5)	橙 5YR6/6	砂礫：長、英、赤		良好	
110	段状遺構60	弥生	壺	—	7.2	(3.8)	にぶい黄橙 10YR6/3	微砂：長、英、赤		良好	
111	段状遺構60	弥生	高杯	—	7.6	(2.3)	にぶい黄橙 10YR7/3	微砂：長、英		良好	脚端部 凹線 1 条
112	段状遺構61	弥生	壺	—	—	(2.1)	橙 7.5YR6/6	微砂：長		良好	口縁部 凹線 3 条 貼付突帯 頸部 貼
113	段状遺構61	弥生	壺	—	—	(3.0)	にぶい橙 7.5YR6/4	微砂：長、赤、黒		良好	
114	段状遺構63	弥生	壺	23.8	—	(2.3)	にぶい橙 7.5YR5/4	砂礫：長、英		良好	口縁部 凹線 1 条
115	段状遺構63	弥生	壺	—	—	(4.5)	にぶい褐 7.5YR5/3	砂礫：長、英		良好	頸部 貼付突帯
116	段状遺構63	弥生	高杯	21.0	—	(4.9)	橙 5YR6/6	砂礫：長、英		良好	
117	段状遺構63	弥生	高杯	—	—	(2.5)	にぶい褐 7.5YR5/3	微砂：長、英		良好	
118	遺構に伴わない遺物	弥生	壺	—	—	(1.8)	にぶい橙 7.5YR6/4	微砂：長、英		良好	口縁部 凹線 3 条・棒状浮文 貼付突帯・凹線 4 条
119	遺構に伴わない遺物	弥生	壺	21.9	—	(3.4)	にぶい黄橙 10YR7/3	砂礫：長、英		良好	口縁部 凹線 3 条・棒状浮文 貼付突帯・凹線 4 条
120	遺構に伴わない遺物	弥生	壺	14.6	—	(4.0)	にぶい黄橙 10YR7/4	砂礫：長、英、赤、黒		良好	口縁部 凹線 3 条・棒状浮文 貼付突帯・凹線 4 条
121	遺構に伴わない遺物	弥生	壺	18.1	—	(1.5)	橙 7.5YR6/6	砂礫：長、英		良好	口縁部 凹線 3 条・棒状浮文 貼付突帯・凹線 4 条
122	遺構に伴わない遺物	弥生	壺	22.9	—	(2.3)	にぶい橙 7.5YR6/4	微砂：長、英、赤		良好	口縁部 凹線 4 条
123	遺構に伴わない遺物	弥生	壺	18.0	—	(2.8)	橙 7.5YR7/6	砂礫：長、英、赤		良好	口縁部 凹線 3 条・棒状浮文 貼付突帯
124	遺構に伴わない遺物	弥生	壺	(22.4)	—	(9.0)	にぶい橙 7.5YR6/4	砂礫：長、英		良好	頸部 貼付突帯
125	遺構に伴わない遺物	弥生	壺	11.8	—	(3.9)	にぶい橙 7.5YR6/4	砂礫：長、英		良好	口縁部 凹線 4 条
126	遺構に伴わない遺物	弥生	壺	14.4	—	(5.0)	明赤褐 5YR5/6	細砂：長、英		良好	
127	遺構に伴わない遺物	弥生	壺	5.0	—	(4.9)	橙 7.5YR6/6	細砂：長、英		良好	
128	遺構に伴わない遺物	弥生	壺	11.6	—	(8.6)	橙 5YR6/8	微砂：長、英		良好	凹線 5 条
129	遺構に伴わない遺物	弥生	壺	30.0	—	(5.1)	橙 5YR6/6	微砂：長、英		良好	
130	遺構に伴わない遺物	弥生	壺	—	—	(2.9)	にぶい橙 7.5YR6/4	微砂：長、英、赤		良好	
131	遺構に伴わない遺物	弥生	壺	—	—	(2.8)	橙 7.5YR6/6	微砂：長、英、赤		良好	
132	遺構に伴わない遺物	弥生	壺	—	—	(2.0)	暗灰黄 2.5Y5/2	微砂：長、英、赤		良好	
133	遺構に伴わない遺物	弥生	壺	13.8	—	(6.5)	橙 5YR6/6	細砂：長、英		良好	
134	遺構に伴わない遺物	弥生	壺	15.3	—	(5.1)	灰黄 2.5Y7/2	微砂：長、英、赤		良好	
135	遺構に伴わない遺物	弥生	壺	16.7	—	(18.7)	にぶい橙 7.5YR6/4	微砂：長、英、赤		良好	
136	遺構に伴わない遺物	弥生	壺	13.1	7.2	(34.0)	にぶい黄橙 10YR6/4	細砂：長、英		良好	
137	遺構に伴わない遺物	弥生	壺	20.8	—	(6.8)	灰黄褐 5YR5/2	砂礫：長、英		良好	口縁部 凹線 2 条・刻目
138	遺構に伴わない遺物	弥生	壺	12.5	—	(5.0)	灰黄 2.5Y7/2	微砂：長、英		良好	
139	遺構に伴わない遺物	弥生	壺	12.5	—	(4.9)	暗灰黄 2.5Y5/2	微砂：長、赤		良好	
140	遺構に伴わない遺物	弥生	壺	24.9	—	(3.5)	橙 5YR6/6	細砂：長、英		良好	口縁部 凹線 3 条・刻目

掲載番号	遺構名	種別	器種	計測値 (cm)			色調		胎土	残存状況	焼成	形態・手法の特徴など	
				口径	底径	器高							
141	遺構に伴わない遺物	弥生	甕	17.9	—	(3.7)	桜	7.5YR6/6	微砂：長、英		良好	口縁部 刻目	
142	遺構に伴わない遺物	弥生	甕	27.0	—	(2.7)	にぶい橙	7.5YR6/4	細砂：長、英		良好	口縁部 凹線2条	
143	遺構に伴わない遺物	弥生	甕	31.9	—	(2.8)	にぶい橙	7.5YR7/4	微砂：長、英、赤、黒		良好	口縁部 刻目	
144	遺構に伴わない遺物	弥生	甕	28.5	—	(8.4)	にぶい黄橙	10YR6/4	微砂：長、英、赤		良好		
145	遺構に伴わない遺物	弥生	甕	20.3	—	(8.2)	明赤褐	5YR5/6	微砂：長、英		良好		
146	遺構に伴わない遺物	弥生	甕	13.9	—	(4.5)	明赤褐	5YR5/6	砂礫：長、英		良好	口縁部 凹線3条	
147	遺構に伴わない遺物	弥生	甕	15.1	—	(16.0)	にぶい赤褐	5YR5/4	砂礫：長、英		良好	口縁部 凹線1条	
148	遺構に伴わない遺物	弥生	甕	13.2	—	(2.6)	橙	5YR6/6	細砂：長、英、赤		良好		
149	遺構に伴わない遺物	弥生	甕	12.0	—	(2.8)	にぶい黄橙	10YR5/3	細砂：長、英		良好		
150	遺構に伴わない遺物	弥生	甕	14.8	—	(3.0)	明赤褐	5YR5/6	微砂：長、英		良好		
151	遺構に伴わない遺物	弥生	甕	—	—	(3.0)	桜	7.5YR6/6	砂礫：長、英、赤		良好		
152	遺構に伴わない遺物	弥生	甕	—	—	(3.0)	にぶい橙	7.5YR7/4	砂礫：長、英、赤		良好		
153	遺構に伴わない遺物	弥生	甕	15.4	—	(5.0)	にぶい黄橙	10YR7/3	微砂：長、赤		良好		
154	遺構に伴わない遺物	弥生	甕	14.7	—	(6.7)	橙	7.5YR6/6	微砂：長、英、赤		良好		
155	遺構に伴わない遺物	弥生	甕	16.8	—	(3.8)	明褐	7.5YR5/6	細砂：長、英		良好		
156	遺構に伴わない遺物	弥生	甕	11.5	—	(3.9)	灰黄	2.5Y7/2	微砂：長、赤		良好		
157	遺構に伴わない遺物	弥生	甕	13.8	—	(3.5)	にぶい橙	7.5YR7/4	微砂：長、英		良好		
158	遺構に伴わない遺物	弥生	甕	14.7	—	(2.9)	明赤褐	5YR5/6	細砂：長、英、赤、黒		良好		
159	遺構に伴わない遺物	弥生	甕	—	9.2	(6.0)	橙	7.5YR6/6	細砂：長、英		良好		
160	遺構に伴わない遺物	弥生	甕	—	13.0	(11.4)	にぶい橙	7.5YR6/4	細砂：長、英		良好		
161	遺構に伴わない遺物	弥生	甕	—	6.4	(10.9)	橙	5YR6/6	細砂：長、英、雲		良好		
162	遺構に伴わない遺物	弥生	甕	—	10.0	(8.1)	灰褐	7.5YR6/2	砂礫：長、英		良好		
163	遺構に伴わない遺物	弥生	甕	—	7.0	(5.3)	橙	7.5YR6/6	砂礫：長、英		良好		
164	遺構に伴わない遺物	弥生	甕	—	8.0	(4.8)	明赤褐	2.5YR5/6	細砂：長、英		良好		
165	遺構に伴わない遺物	弥生	甕	—	5.9	(4.6)	橙	7.5YR6/6	微砂：長、英、赤		良好		
166	遺構に伴わない遺物	弥生	甕	—	7.9	(3.9)	明赤褐	5YR5/6	細砂：長、英		良好		
167	遺構に伴わない遺物	弥生	甕	—	7.4	(2.0)	にぶい橙	5YR6/4	微砂：長、英、雲		良好		
168	遺構に伴わない遺物	弥生	甕	—	6.1	(2.3)	にぶい橙	5YR6/4	微砂：長、英、赤		良好		
169	遺構に伴わない遺物	弥生	甕	—	4.6	(3.9)	にぶい赤褐	5YR5/4	細砂：長、英		良好		
170	遺構に伴わない遺物	弥生	甕	—	4.6	(4.1)	にぶい赤褐	2.5YR5/4	砂礫：長、英		良好		
171	遺構に伴わない遺物	弥生	甕	—	5.6	(3.4)	明赤褐	5YR5/6	砂礫：長、英		良好		
172	遺構に伴わない遺物	弥生	高杯	24.4	—	(3.0)	にぶい褐	7.5YR5/3	微砂：長、英		良好	口唇部 刻目	
173	遺構に伴わない遺物	弥生	高杯	15.3	—	(3.0)	にぶい褐	7.5YR5/4	細砂：長、英		良好		
174	遺構に伴わない遺物	弥生	高杯	13.2	—	(2.4)	にぶい黄橙	10YR7/2	微砂：長、英、赤		良好		
175	遺構に伴わない遺物	弥生	高杯	—	—	(3.4)	にぶい黄橙	10YR7/4	微砂：長、赤		良好		
176	遺構に伴わない遺物	弥生	高杯	—	10.0	(2.2)	にぶい黄橙	10YR5/3	微砂：長、英		良好		
177	遺構に伴わない遺物	弥生	高杯	—	—	(2.3)	桜	5YR6/6	微砂：長、英、赤		良好	脚端部 凹線1条	
178	遺構に伴わない遺物	弥生	高杯	—	11.2	(3.2)	橙	5YR6/6	微砂：長、英		良好	脚端部 凹線1条	
179	遺構に伴わない遺物	弥生	高杯	—	12.2	(3.1)	にぶい橙	7.5YR6/4	微砂：長、英、赤		良好		
180	遺構に伴わない遺物	弥生	高杯	—	12.0	(4.8)	橙	7.5YR6/6	微砂：長、英		良好		
181	遺構に伴わない遺物	弥生	高杯	—	12.6	(7.2)	にぶい黄橙	10YR6/3	微砂：長、英、赤		良好		
182	遺構に伴わない遺物	弥生	高杯	—	—	(7.6)	にぶい黄橙	10YR7/2	砂礫：長、英		良好		
183	遺構に伴わない遺物	弥生	高杯	—	—	(7.6)	にぶい黄橙	10YR7/3	微砂：長、英		良好		
184	遺構に伴わない遺物	弥生	高杯	—	—	(5.5)	にぶい橙	7.5YR6/4	微砂：長、英		良好	沈線3条	
185	遺構に伴わない遺物	弥生	高杯	—	—	(4.5)	橙	7.5YR7/6	微砂：長、英、赤		良好		
186	遺構に伴わない遺物	弥生	高杯	—	—	(3.6)	橙	5YR6/6	微砂：長、英、黒		良好	脚部 凹形穿孔	
187	遺構に伴わない遺物	弥生	鉢	23.0	—	(14.8)	灰白	10YR8/2	微砂：長、英、赤		良好	口唇部 沈線1条 口縁部 凹線3条・刻目	
188	遺構に伴わない遺物	弥生	鉢	12.0	—	(4.2)	にぶい橙	7.5YR6/4	細砂：長、英		良好	凹線6条	
189	遺構に伴わない遺物	弥生	鉢	13.7	—	(6.7)	にぶい褐	7.5YR5/4	砂礫：長、英、雲、黒		良好		
190	遺構に伴わない遺物	弥生	台付鉢	—	7.8	(4.4)	橙	7.5YR6/6	細砂：長、英		良好		
191	遺構に伴わない遺物	弥生	台付鉢	—	3.6	(4.9)	にぶい黄橙	10YR7/4	微砂：長、英		良好		
192	遺構に伴わない遺物	弥生	台付鉢	—	7.0	(2.1)	にぶい橙	7.5YR7/4	微砂：長、英、赤		良好		
193	遺構に伴わない遺物	弥生	台付鉢	—	7.1	(3.3)	桜	5YR6/6	細砂：長、英		良好		
194	遺構に伴わない遺物	弥生	器台	16.0	—	(3.3)	にぶい黄橙	10YR6/4	細砂：長、英、赤		良好		
195	遺構に伴わない遺物	弥生	器台	—	—	(7.5)	明赤褐	5YR5/6	砂礫：長、英		良好	脚部 凹形透かし	
196	遺構に伴わない遺物	弥生	器台	—	—	(4.3)	橙	5YR6/8	細砂：長、英、赤		良好	脚部 凹形透かし	
197	遺構に伴わない遺物	弥生	蓋	11.7	—	(5.8)	にぶい黄橙	10YR7/4	微砂：長、英		良好		
198	遺構に伴わない遺物	弥生	手折ね	4.5	2.5	3.8	にぶい橙	7.5YR6/4	砂礫：長、英、雲		良好		
199	火葬墓	須恵器	蓋	15.6	10.3	(2.6)	灰白	5Y8/1	細砂：長、英		3/4 残	良好	
200	火葬墓	須恵器	長頸壺	—	8.9	(18.6)	灰	N6/	砂礫：長、英		明欠	良好	頸部 打ち欠き
201	溝1	須恵器	壺	—	—	(2.8)	灰	5Y6/1	微砂：長、英		良好	凹線1条	
202	溝4	須恵器	壺	—	—	(2.5)	灰	5Y5/1	微砂：長、英		良好		
203	遺構に伴わない遺物	須恵器	蓋	20.4	—	3.7	灰	5Y6/1	砂礫：長、英		1/4 残	良好	
204	遺構に伴わない遺物	須恵器	杯身	11.3	7.0	3.4	灰白	N7/	細砂：長、英		ほぼ完	良好	
205	遺構に伴わない遺物	須恵器	壺	—	13.2	(4.0)	灰	5Y6/1	微砂：長、英		良好		
206	遺構に伴わない遺物	須恵器	壺	—	7.7	(1.6)	灰白	5Y7/1	精良		良好		
207	遺構に伴わない遺物	土師器	罎	—	—	(4.8)	にぶい橙	7.5YR7/4	細砂：長、英、赤		良好	外面 煤付着	
208	遺構に伴わない遺物	備前焼	搦鉢	32.0	—	(4.5)	灰赤	10R4/2	微砂：長、英		良好		
209	遺構に伴わない遺物	青磁	杯	11.8	—	(2.1)	緑灰	10GY6/1	精良		良好	龍泉窯系 内面削り落としの菊弁文	

### 八幡山南遺跡

掲載番号	遺構名	種別	器種	計測値 (cm)			色調	胎土	残存状況	焼成	形態・手法の特徴など
				口径	底径	器高					
1	段状遺構 4	弥生土器	甕	14.2	—	(2.4)	褐色	7.5YR4/6	細砂:長、英		良好
2	段状遺構 5	弥生土器	甕	19.0	6.6	(22.6)	褐色	5YR6/6	砂礫:長、英、角、赤	完形	良好 外:ハケメ 内:ヘラケズリ
3	段状遺構 5	弥生土器	甕	(13.8)	—	(4.2)	褐色	7.5YR6/6	2mm以下の砂粒		良好 外面 煤付着
4	段状遺構 5	弥生土器	甕	17.2	—	(2.1)	にぶい黄褐色	10YR5/4	細砂:長、英		良好 口縁部 掘門縁文3条
5	段状遺構 5	弥生土器	甕	—	—	(3.4)	褐色	10YR4/4	細砂:長、英、雲		良好
6	段状遺構 5	弥生土器	甕	—	—	(2.8)	褐色	7.5YR4/4	細砂:長、英		良好
7	段状遺構 5	弥生土器	甕	—	—	(3.4)	褐色	7.5YR6/6	細砂:長、英、雲		良好 外面 煤付着
8	段状遺構 5	弥生土器	甕	—	—	(2.7)	明褐色	7.5YR5/6	細砂:長、英、雲		良好
9	段状遺構 5	弥生土器	甕	—	—	(2.7)	褐色	7.5YR6/6	細砂:長、英		良好
10	段状遺構 5	弥生土器	高杯	—	—	(2.6)	明褐色	7.5YR5/6	細砂:長、英、雲		良好
11	段状遺構 5	弥生土器	鉢	19.4	—	(4.1)	明褐色	7.5YR5/6	細砂:長、英、雲、赤		良好
12	土壌 1	弥生土器	鉢	—	—	(5.7)	にぶい黄褐色	10YR7/4	微砂:長、英、雲、赤		良好
13	土壌 2	弥生土器	壺	—	2.8	(7.6)	褐色	7.5YR6/6	細砂:長、英、雲、赤		良好
14	土壌 4	弥生土器	高杯	22.0	—	(13.2)	にぶい黄褐色	10YR7/4	細砂:長、英、雲		良好
15	遺構に伴わない遺物	弥生土器	壺	(8.6)	—	(8.0)	暗灰褐色	2.5Y4/2	砂礫:長、英、雲		良好 第105図E-F断面の第3層
16	P 14	弥生土器	甕	—	—	(2.2)	褐色	7.5YR7/6	細砂:長、英		良好
17	P 5	弥生土器	甕	—	—	(2.7)	褐色	7.5YR6/6	細砂:長、英		良好
18	段状遺構 1~5周辺	弥生土器	高杯	—	—	(5.0)	褐色	7.5YR6/6	砂礫:長、英、赤		良好
19	製鉄関連遺構 P 3・4	須恵器	杯身	—	(8.2)	(2.9)	淡黄	2.5Y8/3	精良		不良
20	遺構に伴わない遺物	土師器	皿	—	(5.0)	(1.0)	褐色	2.5YR6/6	微砂:長、英		良好 第104図A-B断面の第5層
21	遺構に伴わない遺物	膳間口焼	碗	—	(6.0)	(1.1)	灰	N6/	精良		良好 第104図C-D断面の第4層 薬轆は時計回り
22	遺構に伴わない遺物	土師器	杯	(13.0)	—	(3.0)	褐色	2.5YR6/6	精良		良好 第104図A-B断面の第5層
23	遺構に伴わない遺物	青磁	壺	—	(5.4)	(4.0)	灰黄	2.5Y7/2	精良		良好 第104図A-B断面の第5層
24	遺構に伴わない遺物	土師器	鍋	(30.0)	—	(4.0)	褐色	5YR6/6	精良		良好 第104図A-B断面の第5層 煤付着

### 八幡山円明寺跡

掲載番号	遺構名	種別	器種	計測値 (cm)			色調	胎土	残存状況	焼成	形態・手法の特徴など
				口径	底径	器高					
1	土壌 1	土師器	皿	8.8	5.4	2.1	にぶい黄褐色	10YR6/4	微砂:長、英、赤	完形	良好
2	土壌 1	土師器	皿	8.8	5.7	2.2	にぶい黄褐色	10YR6/4	微砂:長、英、赤	完形	良好
3	土壌 1	土師器	皿	7.4	(4.6)	2.7	にぶい黄褐色	10YR6/3	微砂:長、英、赤		良好
4	土壌 1	土師器	皿	7.8	4.6	1.8	にぶい黄褐色	10YR6/4	微砂:長、英、赤、雲		良好
5	土壌 2	土師器	皿	—	4.2	(1.9)	褐色	7.5YR6/6	細砂:長、英、雲、赤		良好
6	P 1	備前焼	搦鉢	—	—	(3.8)	灰褐色	7.5YR4/2	精良		堅緻
7	土壌 4	丹波焼	甕	24.5	16.2	28.4	黄灰	2.5Y6/1	砂礫:長、英、黒	完形	堅緻 内外面 灰釉 外面 灰釉の上に3方向のとびかけ
8	土壌 5	磁器	杯	7.0	—	(3.5)	灰白	10Y8/1	精良		堅緻 外面 染め付け
9	池状遺構周辺	備前焼	搦鉢	—	—	(6.0)	にぶい赤褐色	2.5YR5/4	精良		堅緻
10	池状遺構周辺	備前焼	搦鉢	—	—	(6.4)	赤	10R5/6	微砂:長、英、黒		堅緻
11	溝 5	備前焼	搦鉢	—	—	(4.8)	赤	10R5/6	精良		堅緻
12	P 23	青磁	碗	—	—	(3.3)	にぶい黄褐色	10YR7/2	精良		堅緻 外面 釉
13	遺構に伴わない遺物	須恵器	有蓋高杯	12.6	—	(3.5)	オリーフ黒	10Y3/1	精良		堅緻
14	遺構に伴わない遺物	須恵器	杯蓋	—	—	(1.7)	灰	N6/	精良		堅緻 外面 自然釉
15	遺構に伴わない遺物	須恵器	壺	—	—	(5.2)	灰	N6/	精良		堅緻
16	遺構に伴わない遺物	須恵器	甕	—	—	(13.6)	灰	N6/	細砂:長、英、黒		堅緻
17	遺構に伴わない遺物	土師器	皿	8.2	4.0	2.6	にぶい褐色	7.5YR7/4	細砂:長、英、赤		良好
18	遺構に伴わない遺物	土師器	皿	—	(4.0)	(1.7)	にぶい褐色	7.5YR7/4	細砂:長、英、赤		良好
19	遺構に伴わない遺物	土師器	杯	—	—	(3.4)	にぶい褐色	5YR7/4	細砂:長、英、赤		良好
20	遺構に伴わない遺物	備前焼	搦鉢	—	—	(7.8)	赤褐色	10R5/3	砂礫:長、英		堅緻
21	遺構に伴わない遺物	備前焼	搦鉢	—	—	(5.9)	灰赤	10R5/2	砂礫		堅緻
22	遺構に伴わない遺物	陶器	壺	—	—	(6.1)	灰褐色	7.5YR5/2	精良		堅緻 外面 自然釉
23	遺構に伴わない遺物	陶磁器	仏具	—	(5.4)	(4.0)	灰オリーフ	5Y6/2	精良		堅緻 外面 釉
24	遺構に伴わない遺物	磁器	杯	7.8	—	(2.5)	灰白	10Y8/1	精良		堅緻 外面 染め付け
25	遺構に伴わない遺物	土師器	火鉢	—	—	(2.9)	褐色	7.5YR7/6	精良		良好 外面 亀甲状の文様
26	遺構に伴わない遺物	瓦	平瓦	27.6	(15.9)	1.8	オリーフ黒	5Y3/1	緻密		良好
27	遺構に伴わない遺物	瓦	平瓦	(11.0)	(22.3)	1.7	オリーフ黒	5Y3/1	細砂		良好

### 尾崎遺跡

掲載番号	遺構名	種別	器種	計測値 (cm)			色調	胎土	残存状況	焼成	形態・手法の特徴など
				口径	底径	器高					
1	S 1区 包含層	縄文	深鉢	—	—	(2.8)	にぶい褐色	7.5YR6/4	微砂:長、英、雲、角		良好 爪形文
2	S 1区 P 24	縄文	深鉢	—	—	(1.6)	にぶい褐色	7.5YR5/3	砂礫:長、英		良好
3	包含層	縄文	深鉢	—	—	(2.4)	にぶい黄褐色	10YR6/3	微砂:長、英、雲、角		良好 磨消縄文
4	N 1区 包含層	縄文	深鉢	—	—	(3.2)	黒褐色	10YR3/1	微砂:長		良好 波状口縁 磨消縄文 (R.L.)
5	N 3区 土器 A	縄文	深鉢	—	—	(2.7)	にぶい黄褐色	10YR7/4	微砂:長、英、雲、角		良好 沈線・磨消縄文 (I.R.)
6	包含層	縄文	深鉢	—	—	(2.4)	暗灰黄	2.5Y5/2	微砂:長、角		良好 裏「J」字文
7	N 3区 包含層	縄文	深鉢	—	—	(5.5)	灰黄褐色	10YR4/2	微砂:長、英、雲		良好 波状口縁
8	N 3区 包含層	縄文	深鉢	—	—	(4.3)	にぶい黄褐色	10YR7/3	細砂:長、英、雲、赤		良好 波状口縁

掲載番号	遺構名	種別	器種	計測値 (cm)			色調		胎土	残存状況	焼成	形態・手法の特徴など
				口径	底径	器高						
9	N3区包含層	縄文	深鉢	—	—	(4.1)	灰白	10YR8/2	微砂：長、英、雲	良好	洗線・刺突文	
10	N1区包含層	縄文	深鉢	—	—	(5.0)	にぶい黄橙	10YR7/2	微砂：長、赤、黒	良好	洗線・磨消縄文 (L R)	
11	N3区 P 7	縄文	深鉢	—	—	(3.4)	にぶい黄橙	10YR7/3	微砂：長、雲	良好	洗線・二枚貝条痕・縄文	
12	N1区包含層	縄文	深鉢	—	—	(2.5)	にぶい黄橙	10YR7/4	微砂：長、英、雲、角、赤	良好	縄文 (R L)	
13	S5区包含層	縄文	深鉢	—	—	(3.1)	黒褐	10YR3/2	微砂：長、英、雲、赤	良好	縄文 (L R)	
14	N3区 P 2	縄文	深鉢	—	—	(3.9)	灰黄褐	10YR4/2	微砂：長、雲	良好	縄文 (R L) 外面 煤付着	
15	N3区包含層	縄文	浅鉢	—	—	(2.7)	灰黄	2.5Y7/2	微砂：長、英、雲	良好	洗線・磨消縄文 (L R)	
16	N3区包含層	縄文	浅鉢	—	—	(2.4)	にぶい黄橙	10YR7/3	微砂：長、雲	良好	洗線・磨消縄文 (L R)	
17	N3区包含層	縄文	深鉢	—	—	(5.1)	にぶい黄橙	10YR7/2	細砂：長、英、雲	良好	縄文 (L R)	
18	S1区包含層	縄文	深鉢	—	—	(15.1)	にぶい褐	7.5YR5/3	細砂：長、英、雲	良好	波状口縁・洗線・凹形連続刺突・縄文 (L R)・巻貝条痕・結接縄文	
19	S1区 P 19	縄文	深鉢	—	—	(4.6)	にぶい褐	7.5YR5/3	細砂：長、英	良好	結接縄文 (R L)	
20	S1区包含層	縄文	深鉢	—	—	(5.2)	にぶい褐	7.5YR5/3	細砂：長、英	良好	結接縄文 (R L)	
21	S1区 P 14	縄文	深鉢	—	—	(2.3)	にぶい褐	7.5YR5/3	細砂：長、英	良好	縄文 (R L)	
22	S1区包含層	縄文	深鉢	—	—	(2.9)	にぶい黄橙	10YR7/3	微砂：長、英、雲、赤	良好	波状口縁・洗線・磨消縄文	
23	S1区 P 7	縄文	深鉢	—	—	(4.0)	灰褐	7.5YR4/2	砂礫：長、英	良好	洗線・巻貝条痕	
24	S1区 P 3	縄文	深鉢	—	—	(6.0)	にぶい橙	5YR6/4	細砂：長、英、黒	良好	波状口縁・凹形刺突	
25	S1区 P 5	縄文	深鉢	—	—	(3.5)	にぶい黄橙	10YR5/3	微砂：長、英	良好	洗線	
26	S1区 P 23	縄文	深鉢	—	—	(7.0)	灰黄褐	10YR6/2	砂礫：長、英	良好	外面 煤付着	
27	S1区包含層	縄文	深鉢	—	—	(4.3)	黄灰	2.5Y4/1	微砂：長、英、雲	良好	巻貝条痕	
28	S1区 P 4	縄文	深鉢	—	—	(3.5)	明赤褐	5YR5/6	微砂：長、英	良好	巻貝条痕	
29	S1区包含層	縄文	浅鉢	19.4	—	(2.1)	にぶい黄橙	10YR7/3	微砂：長、英、雲、角	良好	洗線・磨消縄文 (R L)	
30	S1区包含層	縄文	浅鉢	—	—	(3.2)	にぶい黄橙	10YR7/4	微砂：長、英、雲、角	良好	洗線・磨消縄文 (L R)	
31	S1区包含層	縄文	浅鉢	—	—	(3.2)	にぶい黄橙	10YR6/3	微砂：長、英、雲	良好	結接縄文 (L R)	
32	S1区包含層	縄文	浅鉢	—	—	(3.6)	明黄褐	10YR6/6	微砂：長、英、雲、角	良好	洗線・結接縄文 (L R)	
33	S1区 P 9	縄文	浅鉢	—	—	(4.6)	にぶい黄橙	10YR7/3	微砂：長、英	良好	洗線・磨消縄文 (L R)	
34	S1区包含層	縄文	注口	—	—	(5.6)	灰黄	2.5Y6/2	微砂：長、雲、角	良好	突帯	
35	N3区包含層	縄文	深鉢	—	—	(4.4)	にぶい橙	7.5YR6/4	微砂：長、英、雲	良好	口唇部 刻目 条痕	
36	N2区 P 14	縄文	深鉢	—	—	(4.9)	にぶい黄橙	10YR6/3	微砂：長、英、雲	良好		
37	N1区 P 6	縄文	深鉢	—	—	(2.4)	にぶい橙	7.5YR5/4	微砂：長、英、雲	良好	二枚貝条痕	
38	N1区 P 6	縄文	深鉢	—	—	(3.2)	にぶい橙	7.5YR6/4	細砂：長、英、雲	良好	二枚貝条痕	
39	N3区包含層	縄文	深鉢	—	—	(2.4)	黄灰	2.5Y4/1	微砂：長、英、雲	良好	洗線・二枚貝条痕	
40	E区包含層	縄文	深鉢	—	—	(3.1)	黒褐	10YR3/2	細砂：長、雲	良好	爪形文	
41	E区包含層	縄文	深鉢	—	—	(3.5)	明赤褐	5YR5/6	微砂：長、英、雲	良好	洗線・押し刺突文	
42	D区包含層	縄文	深鉢	—	—	(4.3)	にぶい黄橙	10YR6/3	微砂：長、英	良好	押し洗線文	
43	E区包含層	縄文	深鉢	—	—	(4.7)	にぶい黄橙	10YR5/3	微砂：長、英、角	良好	貝殻刺突文・貼付突帯・二枚貝条痕	
44	F区包含層	縄文	深鉢	—	—	(7.5)	にぶい黄橙	10YR6/4	微砂：長、英、雲	良好	溝文洗線・磨消縄文 (R L)	
45	C区包含層	縄文	深鉢	—	—	(4.7)	灰褐	7.5YR6/2	砂礫：長、英	良好	洗線・連続刺突文	
46	C区包含層	縄文	深鉢	—	—	(4.2)	にぶい橙	5YR6/4	細砂：長、英	良好	洗線・縄文 (R L)	
47	B区包含層	縄文	深鉢	—	—	(4.2)	にぶい黄橙	10YR7/2	細砂：長、英	良好	洗線・条痕	
48	B区包含層	縄文	深鉢	—	—	(3.2)	にぶい黄橙	10YR6/3	細砂：長、英	良好	洗線・縄文	
49	C区包含層	縄文	深鉢	—	—	(6.6)	黒褐	10YR3/2	砂礫	良好	波状口縁 外面 煤付着	
50	F区包含層	縄文	深鉢	—	—	(3.2)	褐灰	10YR5/1	微砂：長、英、角	良好	口唇部 刻目	
51	E区包含層	縄文	深鉢	—	—	(4.6)	暗灰黄	2.5Y5/2	細砂：長、英、雲	良好	洗線1条	
52	C区包含層	縄文	深鉢	—	—	(3.5)	橙	7.5YR6/6	細砂：長、英、雲	良好	刺突・縄文 (R L)	
53	B区包含層	縄文	深鉢	—	—	(4.0)	にぶい黄橙	10YR7/2	細砂：長、英、赤	良好	洗線・縄文 (L R)	
54	C区包含層	縄文	深鉢	—	—	(2.5)	明赤褐	5YR5/6	砂礫	良好	縄文 (R L)	
55	C区包含層	縄文	深鉢	—	—	(5.6)	にぶい黄橙	10YR7/3	微砂：長、英、雲	良好	巻貝条痕	
56	C区包含層	縄文	深鉢	—	—	(5.5)	灰黄褐	10YR5/2	微砂：長、英、雲	良好		
57	C区包含層	縄文	浅鉢	—	—	(3.3)	にぶい橙	7.5YR7/4	微砂：長、英	良好	洗線・縄文 (R L)	
58	A区包含層	縄文	浅鉢	—	—	(3.8)	にぶい赤褐	5YR5/4	微砂：長、英、雲	良好	洗線・連続刺突文・磨消縄文 (R L)	
59	D区包含層	縄文	浅鉢	—	—	(4.7)	灰褐	7.5YR4/2	細砂：長、英	良好	洗線	
60	D区包含層	縄文	浅鉢	—	—	(2.5)	黒褐	7.5YR3/1	細砂：長、英	良好	洗線・縄文 (R L)	
61	E区包含層	縄文	浅鉢	—	—	(2.7)	にぶい黄橙	10YR6/3	微砂：長、英、雲	良好	洗線・磨消縄文 (R L)	
62	C区包含層	縄文	鉢	—	—	(4.3)	にぶい黄橙	10YR6/4	微砂：長、英、雲	良好	洗線・縄文 (R L)	
63	E区包含層	縄文	鉢	—	—	(5.9)	黒褐	10YR3/2	微砂：長、英、雲	良好	羽状縄文	
64	B区包含層	縄文	注口	—	—	(7.5)	灰褐	7.5YR6/2	細砂：長、英	良好		
65	F区包含層	縄文	深鉢	—	—	(3.1)	にぶい黄橙	10YR6/3	砂礫：長、英	良好	凹線2条	
66	E区包含層	縄文	深鉢	—	—	(5.4)	にぶい黄橙	10YR5/3	微砂：長、英、雲	良好	凹線・巻貝ナデ	
67	E区包含層	縄文	深鉢	—	—	(4.3)	灰黄褐	10YR4/2	微砂：長、英、雲	良好	凹線・巻貝ナデ	
68	E区包含層	縄文	深鉢	—	—	(3.9)	灰黄褐	10YR5/2	微砂：長、英	良好	凹線	
69	A区包含層	縄文	深鉢	—	—	(6.0)	橙	5YR6/6	砂礫：長、英	良好	波状口縁 刻目・爪形文	
70	A区包含層	縄文	深鉢	—	—	(5.0)	にぶい橙	5YR6/4	砂礫：長、英	良好	口唇部 刻目 二枚貝条痕	
71	E区包含層	縄文	深鉢	—	—	(4.7)	にぶい橙	7.5YR7/4	微砂：長、英、雲	良好	爪形文	
72	G区包含層	縄文	深鉢	—	—	(3.0)	明褐	7.5YR5/6	細砂：長、英	良好	条痕	
73	G区包含層	縄文	深鉢	—	—	(3.2)	にぶい黄橙	10YR7/2	砂礫：長、英	良好	二枚貝条痕	
74	F区包含層	縄文	浅鉢	22.0	—	(5.7)	黒褐	10YR3/2	微砂：長、英、雲	良好		
75	F区包含層	縄文	浅鉢	—	—	(3.7)	にぶい橙	7.5YR6/4	細砂：長、英	良好		
76	A区包含層	縄文	深鉢	—	—	(2.7)	にぶい褐	7.5YR5/4	砂礫：長、英	良好	貼付突帯・刻目	
77	A区包含層	縄文	深鉢	—	—	(5.0)	にぶい褐	7.5YR5/4	砂礫：長、英	良好	貼付突帯・刻目	
78	竪穴住居1	弥生	壺	9.8	—	(4.5)	橙	5YR6/6	細砂：長、英、雲	良好		
79	竪穴住居1	弥生	甕	14.8	—	(4.6)	橙	5YR6/6	細砂：長、英、雲、赤	良好		
80	竪穴住居1	弥生	甕	17.6	—	(3.4)	橙	7.5YR6/6	細砂：長、英、赤	良好		
81	竪穴住居1	弥生	甕	16.0	—	(3.7)	橙	7.5YR6/6	細砂：長、英、赤	良好		
82	竪穴住居1	弥生	甕	—	—	(2.6)	赤褐	5YR4/6	細砂：長、英、雲	良好		

掲載番号	遺構名	種別	器種	計測値 (cm)			色調	胎土	残存状況	焼成	形態・手法の特徴など
				口径	底径	器高					
83	竪穴住居 1	弥生	壺	9.2	—	(2.4)	にぶい黄粉 10YR7/4	微砂:長、英		良好	口縁部 黒色変化
84	竪穴住居 2	弥生	壺	14.6	—	(1.4)	灰白 10YR8/2	微砂:長、英、雲、赤		良好	口縁部 柵溝斜格子文・凹形浮文・刻目
85	竪穴住居 2	弥生	壺	—	—	—	褐色 7.5YR4/3	微砂:長、英、雲		良好	貼付突帯
86	竪穴住居 2	弥生	壺	5.4	—	(11.0)	にぶい褐色 7.5YR5/3	微砂:長、英		良好	波状文・沈線文
87	竪穴住居 2	弥生	壺	—	—	(5.8)	にぶい黄粉 10YR7/2	微砂:長、英、雲		良好	
88	竪穴住居 2	弥生	壺	22.8	—	(23.2)	にぶい黄粉 10YR6/3	細砂:長、英、雲		良好	口縁部 沈線1条 外面 煤付着
89	竪穴住居 2	弥生	壺	—	8.2	(3.2)	灰黄褐色 10YR4/2	微砂:長、英、雲		良好	外面 煤付着
90	竪穴住居 2	弥生	壺	—	7.2	(4.3)	にぶい褐色 5YR6/4	微砂:長、英、雲		良好	外面 煤付着
91	竪穴住居 2	弥生	壺	—	6.2	(7.1)	にぶい褐色 7.5YR5/4	微砂:長、英、雲		良好	
92	竪穴住居 3	弥生	壺	—	—	(26.8)	にぶい褐色 10YR5/3	微砂:長、英、雲		良好	刺突文・斜格子文
93	竪穴住居 3	弥生	壺	17.4	—	(6.7)	にぶい黄粉 10YR6/3	微砂:長、英、雲		良好	
94	土壇 1	弥生	壺	18.1	8.1	31.8	淡黄 2.5Y7/3	細砂:長、英、雲	1/3 炭	良好	柵溝沈線文・凹孔・刻目・列点文
95	土壇 1	弥生	壺	13.4	—	(20.1)	淡黄 2.5Y8/3	砂礫:長、英		良好	刻目・貼付突帯・刺突
96	土壇 1	弥生	壺	—	9.9	(18.5)	淡黄 2.5Y8/3	砂礫:長、英、赤		良好	95と同一個体か
97	土壇 1	弥生	壺	—	10.2	(36.1)	灰白 10YR7/1	細砂:長、英、雲、赤		良好	沈線文・波状文・凹形浮文
98	溝 1	弥生	壺	—	—	—	褐色 5YR6/6	微砂:英		良好	波状文
99	溝 2	弥生	壺	16	—	(4.0)	にぶい黄粉 10YR7/2	微砂:長、英、雲、赤		良好	
100	溝 2	弥生	壺	—	5.8	(4.4)	にぶい黄粉 10YR6/3	微砂:長、英、雲		良好	外面:ガキ、内面 指頭土痕、ナメ
101	下がり 1	弥生	壺	22.0	—	(4.4)	灰黄 2.5Y7/2	微砂:長、英、雲		良好	内外面 ヨコナデ 口縁部波状文・刺突文
102	下がり 1	弥生	壺	15.2	—	(3.5)	にぶい褐色 7.5YR6/4	細砂:長、英、雲、赤		良好	口縁部 凹線1条
103	下がり 1	弥生	壺	17.2	—	(3.7)	褐色 7.5YR7/6	細砂:長、英		良好	口縁部 凹線3条
104	下がり 1	弥生	壺	18.5	—	(3.9)	にぶい黄粉 10YR5/3	微砂:長、英、雲、角		良好	口縁部 凹線2条
105	下がり 1	弥生	高杯	—	6.6	(6.3)	にぶい黄粉 10YR7/3	微砂:長、英、雲		良好	凹孔・沈線 外面 赤色顔料付着
106	下がり 1	弥生	高杯	—	—	(3.8)	灰白 2.5Y8/2	細砂:長、英、赤、黒		良好	
107	下がり 1	弥生	壺	—	—	—	にぶい褐色 7.5YR6/4	砂礫:長、英、黒		良好	外面・底面 タタキ
108	下がり 1	弥生	把手	—	—	—	にぶい黄粉 10YR7/3	微砂:長、英、角		良好	
109	下がり 1	弥生	台付鉢	—	7.2	(3.2)	灰黄褐色 10YR5/2	微砂:長、英、赤		良好	
110	下がり 1	弥生	器台	—	—	(7.2)	赤褐色 5YR4/6	細砂:長、英、赤		良好	
111	下がり 2	弥生	壺	14.0	—	(6.3)	にぶい黄粉 10YR7/3	細砂:長、英、角		良好	口縁部 凹線3条
112	下がり 2	弥生	壺	13.7	—	(7.6)	明赤褐色 5YR5/6	細砂:長、英、角		良好	外面 煤付着
113	下がり 2	弥生	高杯	21.6	—	(3.4)	明赤褐色 5YR5/6	細砂:長、英、雲、角		良好	口縁部 凹線3条上
114	B区包含層	弥生	壺	9.7	—	(4.4)	褐色 5YR6/6	微砂:長、英		良好	沈線5条
115	B区包含層	弥生	壺	13.8	—	(2.3)	褐色 5YR6/6	微砂:長、英		良好	
116	A～C区包含層	弥生	壺	22.0	—	(5.1)	明赤褐色 2.5YR5/6	砂礫:長、英		良好	沈線・波状文
117	A～C区包含層	弥生	壺	22.0	—	(7.5)	明赤褐色 5YR5/8	砂礫:長、英		良好	
118	C区包含層	弥生	鉢	15.0	—	(6.0)	にぶい褐色 7.5YR6.4	細砂:長、英		良好	口縁部 刻目
119	G区包含層	弥生	壺	17.0	—	(4.7)	にぶい黄粉 10YR7/4	砂礫:長、英、赤		良好	口縁部 凹形浮文 貼付突帯・刻目
120	F区包含層	弥生	壺	12.5	—	(4.4)	にぶい褐色 7.5YR7/4	微砂:長、英		良好	口縁部 波状文・凹線
121	F区包含層	弥生	壺	12.0	—	(5.0)	にぶい褐色 7.5YR5/4	砂礫:長、英		良好	
122	F区包含層	弥生	壺	—	—	(6.0)	にぶい褐色 7.5YR6.4	細砂:長、英、雲		良好	口縁部 凹形浮文・刺突文・凹線
123	G区包含層	弥生	壺	5.3	—	(4.8)	にぶい黄粉 10YR7/4	細砂:長、英、雲		良好	口縁部 凹線2条 凹孔
124	F区包含層	弥生	壺	—	—	(10.7)	にぶい褐色 7.5YR6/4	細砂:長、英、赤		良好	
125	G区包含層	弥生	壺	14.8	—	(4.6)	褐色 5YR6/6	細砂:長、英、赤		良好	
126	G区包含層	弥生	壺	17.0	—	(4.1)	明赤褐色 5YR5/6	微砂:長、英、雲		良好	口縁部 凹線2条
127	G区包含層	弥生	壺	14.2	—	(2.3)	にぶい褐色 7.5YR5/4	微砂:長、英、雲、赤		良好	口縁部 凹線3条 外面 黒色変化
128	F区包含層	弥生	壺	15.4	—	(4.5)	褐色 7.5YR6/6	細砂:長、英、雲、赤		良好	口縁部 凹線3条
129	G区包含層	弥生	壺	18.4	—	(3.0)	にぶい黄粉 10YR6/4	微砂:長、英		良好	
130	F区包含層	弥生	壺	18.3	—	(2.9)	にぶい褐色 7.5YR6/4	砂礫:長、英、赤		良好	口縁部 凹線3状
131	F区包含層	弥生	壺	—	—	—	にぶい褐色 7.5YR6/4	微砂:長、英		良好	外面 線刻
132	F区包含層	弥生	壺	24.0	—	(5.7)	にぶい褐色 5YR6.4	砂礫:長、英		良好	口縁部 凹線3条
133	F区包含層	弥生	壺	16.2	—	(4.0)	にぶい褐色 7.5YR5/4	微砂:長、英		良好	
134	F区包含層	弥生	壺	14.6	—	(3.9)	褐色 7.5YR6/6	細砂:長、英		良好	
135	F区包含層	弥生	壺	—	5.5	(6.2)	にぶい黄粉 10YR5/3	細砂:長、英		良好	
136	G区包含層	弥生	壺	—	5.2	(4.5)	明赤褐色 5YR5/6	細砂:長、英、雲、赤		良好	底部 穿孔
137	F区包含層	弥生	高杯	—	—	(12.4)	褐色 7.5YR6/6	砂礫:長、英		良好	二次焼成 沈線文・凹孔
138	F区包含層	弥生	高杯	—	12.2	(3.2)	明赤褐色 2.5YR5/8	微砂:長、英、雲		良好	脚部 凹形透かし 凹線2条
139	F区包含層	弥生	台付鉢	—	5.0	(4.2)	にぶい黄粉 10YR5/4	微砂:長、英、雲		良好	
140	F区包含層	弥生	器台	—	20.2	(6.7)	褐色 7.5YR6/6	砂礫:長、英、赤		良好	方形透かし 凹線7条
141	S3区包含層	弥生	壺	—	—	(4.5)	にぶい褐色 7.5YR6/4	微砂:長、英		良好	貼付突帯
142	S2区包含層	弥生	壺	19.6	—	(1.4)	褐色 7.5YR6/6	微砂:長、雲、角		良好	口縁部 刻目
143	S5区包含層	弥生	壺	19.2	—	(1.4)	にぶい褐色 7.5YR5/4	精良		良好	口縁部 凹線2条・刻目
144	S5区包含層	弥生	壺	10.4	—	(4.3)	にぶい褐色 7.5YR6/4	微砂:長、英		良好	口縁部 凹線2条・凹孔
145	S4区包含層	弥生	壺	14.2	—	(7.3)	にぶい黄粉 10YR7/4	微砂:長、英、雲		良好	外面 煤付着
146	S5区包含層	弥生	壺	12.6	—	(2.9)	にぶい褐色 7.5YR6/4	微砂:長、英		良好	
147	S5区包含層	弥生	壺	14.8	—	(2.5)	にぶい褐色 7.5YR6/4	細砂:長		良好	
148	S5区包含層	弥生	壺	16.0	—	(2.9)	にぶい褐色 7.5YR6/4	微砂:長、英		良好	口縁部 凹形浮文・刻目
149	S5区包含層	弥生	壺	17.9	—	(3.4)	にぶい褐色 7.5YR5/4	微砂:長、英		良好	口縁部 凹形浮文
150	S5区包含層	弥生	壺	17.9	—	(2.2)	灰黄褐色 10YR5/2	精良		良好	口縁部 凹線4条 外面 煤付着
151	S3区包含層	弥生	壺	15.6	—	(2.3)	にぶい褐色 7.5YR6/3	微砂:長、英		良好	口縁部 凹線1条
152	S5区包含層	弥生	壺	—	6.8	(6.3)	灰黄 2.5Y7/2	微砂:長、英		良好	内面 炭化物付着
153	S5区包含層	弥生	高杯	—	—	(3.1)	灰褐色 5YR4/2	精良		良好	口縁部 刻目
154	S5区包含層	弥生	高杯	—	11.4	(2.1)	にぶい褐色 7.5YR6/4	精良		良好	外面 赤色顔料付着

掲載番号	遺構名	種別	器種	計測値 (cm)			色調		胎土	残存状況	焼成	形態・手法の特徴など
				口径	底径	器高	色	調				
155	S 5区包含層	甌	鉢	15.8	4.9	(17.0)	にぶい褐	7.5YR6/3	精良		良好	外面 煤付着
156	堅穴住居 4	須恵器	杯蓋	12.8	—	4.3	灰	N6/	砂礫：長	完形	良好	
157	堅穴住居 4	須恵器	高杯	12.5	8.4	6.5	灰白	2.5 YR8/2	砂礫：長、英	完形	良好	
158	堅穴住居 4	土師器	高杯	19.6	—	(3.9)	にぶい黄褐	10YR6/3	微砂：長、英、雲		良好	
159	堅穴住居 4	土師器	高杯	—	17.6	(3.0)	橙	7.5YR7/6	微砂：長、英、赤		良好	脚部 凹形歪かし・赤色顔料付着
160	堅穴住居 6	須恵器	杯蓋	—	10.7	3.6	灰白	2.5YR7/1	細砂：長、英	1/4 残	良好	
161	堅穴住居 6	須恵器	杯身	—	—	(1.9)	灰	5Y5/1	微砂		良好	
162	堅穴住居 6	須恵器	杯身	—	—	(2.8)	灰	N4/	微砂		良好	
163	堅穴住居 6	須恵器	杯身	9.5	6.0	3.6	灰白	5Y7/1	微砂：長、英	ほぼ完形	良好	
164	堅穴住居 6	土師器	甕	—	—	(3.4)	にぶい橙	2.5 YR6/4	微砂：長、英、赤		良好	
165	堅穴住居 6	土師器	甕	21.8	—	(3.1)	にぶい黄粉	10YR7/4	微砂：長、英、赤		良好	
166	堅穴住居 6	土師器	甕	15.4	—	(14.3)	にぶい橙	5YR6/4	砂礫：長、英		良好	
167	堅穴住居 6	土師器	甕	—	—	(3.8)	にぶい橙	7.5YR6/4	微砂：長、英、雲		良好	
168	堅穴住居 6	土師器	甕	15.2	—	14.9	橙	5YR6/6	細砂：長、英	1/2 残	良好	
169	堅穴住居 6	土師器	甕	—	—	(8.9)	橙	5YR6/6	微砂：長、英		良好	
170	堅穴住居 6	土師器	甕	—	—	(7.4)	にぶい褐	7.5YR5/3	微砂：長、英		良好	
171	堅穴住居 6	土師器	甕	—	14.2	(18.8)	にぶい橙	7.5YR6/4	微砂：長、英、雲		良好	凹孔
172	堅穴住居 7	土師器	甕	21.6	—	(6.0)	灰黄褐	10YR4/2	細砂：長、雲、赤		良好	
173	土城 2	土師器	高杯	16.2	—	(5.6)	にぶい褐	7.5YR5/4	細砂：長、英、雲、角		良好	
174	土城 2	土師器	高杯	—	—	(4.6)	橙	7.5YR6/6	細砂：長、英		良好	
175	土器溜まり	須恵器	高杯	11.6	—	(6.0)	灰白	2.5Y8/2	微砂：長		良好	
176	土器溜まり	土師器	鉢	35.2	—	(11.3)	明赤褐	5YR5/6	微砂：長、英、雲	1/2 残	良好	
177	D区包含層	須恵器	杯蓋	—	8.8	(1.6)	灰	N5/	微砂：長		良好	
178	D区包含層	須恵器	杯蓋	—	9.0	(1.4)	灰白	10YR6/1	精良		良好	
179	S 5区包含層	須恵器	杯身	12.4	—	(1.9)	にぶい橙	7.5YR7/3	精良		良好	
180	N 4区包含層	須恵器	杯身	10.0	—	(1.6)	灰	N6/	微砂：長		良好	
181	D区包含層	須恵器	高杯	—	—	(8.0)	灰白	N7/	精良		良好	
182	F区包含層	須恵器	高杯	—	—	(6.5)	灰	5Y5/1	微砂：長、雲		良好	
183	B区包含層	須恵器	高杯	—	—	(4.7)	灰	5Y5/1	微砂：長、英、黒		良好	
184	B区包含層	須恵器	高杯	—	—	(4.5)	灰	7.5Y5/1	精良		良好	凹縁 1 条
185	F区包含層	須恵器	壺	12.8	—	(5.1)	黒褐	2.5Y3/1	微砂：長		良好	
186	S 4区包含層	須恵器	壺	12.7	—	(3.9)	灰白	2.5YR7/1	微砂：長、黒		良好	
187	B区包含層	須恵器	壺	14.0	—	(5.0)	灰	5Y6/1	微砂：長		良好	
188	F区包含層	須恵器	壺	10.8	—	(7.6)	灰白	5Y7/1	微砂：長		良好	
189	E区包含層	須恵器	壺	—	—	(4.8)	灰	N6/	細砂：長		良好	外面 絨毛
190	N 5区包含層	須恵器	壺	—	—	(5.5)	灰	5Y5/1	細砂：長、英		良好	
191	A区包含層	須恵器	提瓶	—	—	(7.9)	灰	N6/	砂礫：長、英		良好	外面 凹縁 貼付把子
192	F区包含層	須恵器	提瓶	—	—	(7.8)	黒褐	7.5YR3/1	細砂：長		良好	外面 凹縁 2 条 凹形浮文
193	F区包含層	須恵器	壺	10.3	—	(10.8)	灰白	5Y7/1	微砂：長、英		良好	
194	N 5区包含層	須恵器	甕	17.8	—	(5.3)	黒褐	10YR3/1	微砂：長		良好	
195	D区包含層	須恵器	甕	24.2	—	(4.3)	灰	5Y6/1	微砂：長、黒		良好	
196	G区包含層	須恵器	甕	23.8	—	(3.2)	灰白	5Y7/1	微砂：長、英		良好	
197	D区包含層	須恵器	甕	—	—	—	灰	N6/	精良		良好	波状文・凹縁
198	E区包含層	須恵器	甕	—	—	—	灰	N6/	精良		良好	波状文・凹縁
199	S 4区包含層	須恵器	甕	—	—	—	灰白	N7/	細砂：長		良好	波状文・凹縁
200	D区包含層	須恵器	甕	—	—	—	灰	N5/	微砂：長、英		良好	外面線刻
201	S 4区包含層	須恵器	甕	33.8	—	(4.0)	灰白	2.5YR7/1	細砂：長、英		良好	波状文
202	E区包含層	須恵器	甗台	—	—	(5.5)	灰白	N7/	微砂：長、英		良好	
203	E区包含層	土師器	甕	13.0	—	(4.2)	橙	5YR6/6	微砂：長、英		良好	
204	掘立柱建物 1 P 5	須恵器	杯蓋	—	—	(1.5)	灰	N6/	微砂：長		良好	
205	掘立柱建物 1 P 2	須恵器	杯身	12.8	8.8	3.0	灰白	2.5Y8/1	砂礫：長		不良	
206	掘立柱建物 2 P 3	須恵器	杯蓋	16.2	—	(2.1)	黄灰	2.5Y6/1	微砂：長		良好	内面 摩滅 転用罫の可能性
207	掘立柱建物 2 P 4	須恵器	杯身	15.0	11.2	2.9	灰白	2.5Y8/1	微砂：黒		良好	
208	掘立柱建物 2 P 4	須恵器	皿	22.0	16.0	(2.5)	黄灰	2.5Y6/1	砂礫：長		良好	
209	掘立柱建物 2 P 4	土師器	甕	17.8	—	(4.0)	橙	5YR7/6	微砂：長、英、赤		良好	
210	掘立柱建物 2 P 4	土師器	甕	18.6	—	(3.5)	橙	5YR6/6	微砂：長、英、雲		良好	
211	掘立柱建物 2 P 4	焼塩土器	鉢	11.6	—	(7.9)	灰白	10YR8/2	砂礫：長		良好	二次焼成
212	掘立柱建物 2 P 4	焼塩土器	鉢	11.0	—	(6.2)	にぶい橙	7.5YR6/4	砂礫：長、英		良好	一次焼成
213	掘立柱建物 2 P 3	焼塩土器	鉢	10.0	—	(6.8)	灰黄褐	10YR4/2	砂礫：長、英		良好	一次焼成
214	掘立柱建物 3 P 3	須恵器	杯蓋	17.6	—	(1.7)	灰白	2.5Y7/1	微砂：長、英		不良	
215	掘立柱建物 3 P 1	須恵器	杯身	14.8	10.2	3.5	灰	N6/	微砂：長		良好	
216	掘立柱建物 3 P 3	須恵器	杯身	17.2	—	(3.9)	灰	N6/	細砂：長		良好	
217	掘立柱建物 3 P 3	須恵器	杯身	—	11.0	(1.7)	灰	N6/	微砂：長		良好	
218	掘立柱建物 3 P 5	須恵器	杯身	17.2	—	(3.9)	灰	N6/	細砂：長		良好	
219	掘立柱建物 3 P 5	須恵器	杯身	15.4	—	2.6	灰白	2.5Y8/1	細砂：長、英		良好	
220	掘立柱建物 3 P 3	須恵器	平瓶	—	22.0	(7.1)	灰	N6/	砂礫：長、英		良好	
221	掘立柱建物 3 P 7	土師器	甕	34	—	(4.6)	褐	7.5YR6/6	微砂：長、英、赤		良好	
222	掘立柱建物 3 溝	須恵器	壺蓋	—	—	(2.1)	黄灰	2.5Y6/1	微砂：長		良好	溝 3
223	掘立柱建物 3 溝	黒色土器	碗	15.4	—	(2.2)	にぶい黄橙	10YR7/4	微砂：英		良好	溝 3
224	掘立柱建物 4 P 3	須恵器	杯蓋	15.0	—	(2.0)	灰白	N7/	微砂：長		良好	
225	掘立柱建物 4 P 2	須恵器	杯蓋	16.0	—	(1.9)	灰白	N7/	微砂：長		良好	
226	掘立柱建物 4 P 2	須恵器	杯蓋	17.0	—	(1.8)	灰白	N7/	微砂：長		良好	
227	掘立柱建物 4 P 3	須恵器	杯蓋	17.2	—	(1.8)	灰白	2.5Y8/1	微砂：長		良好	
228	掘立柱建物 4 P 2	須恵器	杯蓋	19.4	—	(2.0)	灰白	N7/	微砂：長		良好	
229	掘立柱建物 4 P 2	須恵器	杯身	10.0	9.2	4.7	灰白	N7/	微砂：長、英	1/3 残	良好	
230	掘立柱建物 4 P 3	須恵器	杯身	—	11.4	(1.9)	灰白	2.5Y8/1	微砂：長、英		不良	

掲載番号	遺構名	種別	器種	計測値 (cm)			色調		胎土	残存状況	焼成	形態・手法の特徴など
				口径	底径	器高						
231	掘立柱建物 4 P 3	須恵器	杯身	—	12.0	(1.6)	灰白	2.5Y8/1	微砂：長、英		不良	
232	掘立柱建物 4 P 2	須恵器	杯身	—	13.0	(4.7)	灰白	5Y7/1	微砂：長		良好	
233	掘立柱建物 4 P 2	須恵器	杯身	12.2	8.0	3.2	灰白	N7/	微砂：長		良好	
234	掘立柱建物 4 P 2	須恵器	杯身	15.6	11.0	3.4	黒褐	2.5Y3/1	微砂：長、雲		不良	
235	掘立柱建物 4 P 4	須恵器	杯身	15.3	11.0	3.5	灰白	N7/	細砂：長		良好	
236	掘立柱建物 4 P 4	土師器	甗	—	—	(3.1)	にぶい粉	7.5YR6/4	微砂：長、英		良好	
237	掘立柱建物 4 P 2	土師器	甗	—	—	(2.5)	橙	5YR6/6	微砂：長、英、雲		良好	
238	掘立柱建物 4 P 2	焼塩土器	鉢	11.2	—	(9.6)	橙	7.5YR6/6	細砂：長、英		良好	二次焼成 内面 布目汗痕
239	掘立柱建物 4 P 2	焼塩土器	鉢	11.0	—	(8.9)	にぶい褐	7.5YR5/4	細砂：長、英、雲		良好	二次焼成 内面 布目汗痕
240	掘立柱建物 4 P 2	焼塩土器	鉢	13.0	—	(5.0)	にぶい黄橙	10YR7/3	細砂：長、英		良好	二次焼成 内面 布目汗痕
241	掘立柱建物 4 P 2	焼塩土器	鉢	—	—	(4.7)	灰白	10YR8/2	微砂：長、英		良好	二次焼成 内面 布目汗痕
242	掘立柱建物 4 P 3	焼塩土器	鉢	—	—	(3.0)	黄灰	2.5Y4/1	細砂：長、英		良好	二次焼成 内面 布目汗痕
243	掘立柱建物 4 P 2	焼塩土器	鉢	—	—	(3.1)	灰黄	2.5Y6/2	細砂：長、英		良好	二次焼成 内面 布目汗痕
244	掘立柱建物 4 P 3	焼塩土器	鉢	—	—	(2.5)	灰白	10YR8/1	細砂：長、英		良好	二次焼成 内面 布目汗痕
245	掘立柱建物 4 P 3	焼塩土器	鉢	12.0	—	(6.7)	にぶい橙	7.5YR6/4	微砂：長、英		良好	二次焼成
246	掘立柱建物 4 P 2	焼塩土器	鉢	10.4	—	(5.9)	にぶい黄橙	10YR5/4	微砂：長、英		良好	二次焼成
247	掘立柱建物 4 P 2	焼塩土器	鉢	13.0	—	(8.0)	浅黄橙	10YR8/4	細砂：長、英、雲		良好	二次焼成
248	掘立柱建物 5 P 3	須恵器	杯蓋	17.0	—	(1.7)	灰	5Y6/1	微砂：黒		良好	
249	掘立柱建物 5 P 2	須恵器	杯身	28.4	12.8	7.1	灰	N6/	細砂：長	1/3 残	良好	
250	掘立柱建物 6 P 2	須恵器	杯蓋	14.0	—	(1.3)	灰白	N7/	微砂：長		良好	
251	掘立柱建物 6 P 1	須恵器	杯身	—	13.0	(2.1)	灰	5Y6/1	微砂：長		良好	
252	掘立柱建物 6 P 2	須恵器	杯身	—	12.8	(2.1)	灰白	2.5Y8/1	微砂：英		不良	
253	掘立柱建物 6 P 3	須恵器	短頸甗	9.4	—	(2.4)	灰	N6/	微砂：長		良好	
254	掘立柱建物 6 P 2	土師器	甗	—	—	(2.8)	にぶい橙	7.5YR6/4	微砂：長、英、雲		良好	
255	掘立柱建物 6 P 1	土師器	甗	33.2	—	(4.2)	にぶい黄褐	10YR5/3	砂礫：長、英、雲		良好	
256	掘立柱建物 8 P 3	土師器	甗	18.0	—	(3.8)	にぶい橙	5YR6/4	微砂：長、英、雲		良好	
257	掘立柱建物 10 P 4	土師器	甗	19.4	—	(5.4)	粉	7.5YR6.6	微砂：長、英、雲		良好	
258	掘立柱建物 11 P 4	須恵器	杯身	11.0	—	(2.9)	灰	N5/	微砂：長、英		良好	
259	掘立柱建物 11 P 3	須恵器	杯身	—	7.2	(0.8)	灰白	2.5Y8/2	砂礫：長、英		良好	
260	掘立柱建物 11 P 4	須恵器	高杯	—	—	(2.2)	灰白	2.5Y8/2	微砂：英		良好	
261	掘立柱建物 11 P 3	須恵器	壺	—	—	(8.0)	灰白	N7/	細砂：長、英		良好	洗線 1 条
262	掘立柱建物 11 P 4	土師器	甗	20.9	—	(4.5)	にぶい粉	7.5YR6/4	微砂：長、英、雲、角		良好	
263	掘立柱建物 11 P 4	土師器	甗	—	—	(2.7)	にぶい黄橙	10YR7/3	微砂：長、英、雲		良好	
264	掘立柱建物 11 P 4	土師器	把手	—	—	(3.4)	明赤褐	5YR5/6	細砂：長、英、雲		良好	
265	掘立柱建物 12 P 3	須恵器	杯身	12.0	—	(1.9)	灰	N5/	微砂：長		良好	
266	掘立柱建物 12 P 6	須恵器	高杯	—	8.0	(2.0)	灰	N5/	微砂：長		良好	
267	掘立柱建物 12	土師器	甗	16.6	—	(2.0)	にぶい粉	7.5YR6/4	微砂：長、英、雲		良好	
268	掘立柱建物 12 P 1	土師器	甗	19.4	—	(3.7)	にぶい黄橙	10YR7/4	微砂：長、英、雲		良好	
269	掘立柱建物 12 P 2	土師器	甗	—	—	(4.3)	にぶい黄橙	10YR6/4	微砂：長、英、雲		良好	
270	掘立柱建物 14 P 4	須恵器	杯蓋	15.8	—	(1.2)	灰黄	2.5Y7/2	細砂：長、英		良好	
271	掘立柱建物 15 P 2	須恵器	碗	—	6.5	(2.1)	暗灰黄	2.5Y5/2	微砂：長、英、雲		不良	
272	掘立柱建物 17 P 10	土師器	杯	21.2	—	(3.5)	にぶい黄橙	10YR6/4	微砂：長、英、雲		良好	内外面 赤色顔料染布 内面 暗文
273	掘立柱建物 18 P 1	須恵器	高杯	—	—	(2.5)	灰黄	2.5Y7/2	微砂：長、英		良好	
274	掘立柱建物 18 P 1	須恵器	甗	—	—	—	灰黄	2.5Y7/2	微砂：長、英		良好	
275	掘立柱建物 19 P 1	須恵器	壺	13.0	—	(4.0)	灰白	5Y7/2	微砂：長、雲		良好	
276	柱穴列 1 P 3	須恵器	杯蓋	15.0	—	(1.7)	灰白	N7/	微砂：英		良好	
277	柱穴列 1 P 3	焼塩土器	鉢	—	—	—	にぶい黄褐	10YR5/3	細砂：長、英、雲		良好	二次焼成 内面 布目汗痕
278	柱穴列 1 P 3	焼塩土器	鉢	—	—	—	暗灰黄	2.5Y5/2	細砂：長、英		良好	二次焼成 内面 布目汗痕
279	柱穴列 1 P 3	焼塩土器	鉢	10.2	—	(7.9)	にぶい黄橙	10YR7/4	細砂：長、英		良好	二次焼成
280	柱穴列 1 P 3	焼塩土器	鉢	12.0	—	(7.85)	にぶい黄橙	10YR7/4	砂礫：長、英		良好	二次焼成
281	柱穴列 1 P 3	焼塩土器	鉢	—	4.2	(2.3)	灰黄	2.5Y6/2	微砂：長		良好	二次焼成
282	柱穴列 1 P 3	焼塩土器	鉢	—	—	(2.0)	にぶい黄橙	10YR7/4	細砂：長、英		良好	二次焼成
283	火葬墓	須恵器	短頸甗	11.0	10.5	15.2	灰	N6/	細砂：長、英、黒		良好	
284	土器棺 1	土師器	甗	22.6	—	(27.7)	にぶい黄橙	10YR7/4	細砂：長、英、雲		良好	
285	土器棺 2	土師器	甗	22.6	—	29.4	にぶい黄褐	10YR4/3	細砂：長、英、雲	1/2 残	良好	
286	土器棺 2	土師器	甗	22.8	—	(21.9)	にぶい黄橙	10YR7/3	砂礫：長、英、雲		良好	
287	土器棺 3	土師器	甗	22.7	—	(27.8)	にぶい黄橙	10YR7/3	砂礫：長、英、雲	1/2 残	良好	
288	土器棺 3	土師器	甗	23.0	—	27.0	にぶい粉	7.5YR6/4	細砂：長、英、雲、角	1/2 残	良好	
289	土壇 3	須恵器	壺	—	—	(10.4)	灰白	N7/	砂礫：長、雲		良好	
290	土壇 4	須恵器	杯身	—	—	(2.5)	灰白	2.5Y8/2	微砂：長、英		良好	
291	土壇 6	須恵器	高杯	10.6	—	(3.2)	灰白	N7/	微砂：長、英		良好	
292	土壇 6	土師器	甗	19.6	—	(5.1)	にぶい橙	7.5YR6/4	砂礫：長、英、雲、角		良好	
293	土壇 8	須恵器	杯身	—	5.6	(2.1)	灰	N5/	微砂：長、英、雲		良好	
294	溝 1	須恵器	杯蓋	—	—	(1.6)	灰	5Y6/1	微砂：長		良好	
295	溝 1	須恵器	杯身	—	12.0	(1.6)	灰白	N7/	微砂：長、英		良好	
296	焼土面 1 周辺	焼塩土器	鉢	14.0	—	(5.4)	にぶい黄橙	10YR7/4	砂礫：長、英		良好	二次焼成
297	焼土面 1 周辺	焼塩土器	鉢	14.4	—	(4.1)	橙	5YR6/6	細砂：長、英、雲		良好	二次焼成
298	焼土面 2	須恵器	杯蓋	—	—	(1.6)	灰	7.5Y5/1	微砂：長		良好	
299	焼土面 2	須恵器	杯身	14.2	8.8	4.2	灰	N6/	微砂：長		良好	
300	炭溜まり 2	須恵器	杯身	—	12.0	(1.6)	灰白	N7/	微砂：長、英		良好	
301	炭溜まり 2	須恵器	杯身	—	12.4	(4.8)	灰白	5Y7/1	微砂：長、英		良好	
302	溝 4	須恵器	杯蓋	15.8	—	(2.2)	灰	N6/	微砂：長、英		良好	
303	溝 4	須恵器	杯蓋	15.4	—	(2.8)	灰	N6/	微砂：長		良好	
304	溝 4	須恵器	杯身	—	11.0	(1.6)	灰白	2.5Y7/1	細砂：長、英、雲		良好	
305	溝 4	須恵器	杯身	—	11.0	(1.4)	灰	7.5Y5/1	微砂：長、英		良好	
306	溝 4	須恵器	杯身	15.0	—	(3.2)	灰白	2.5Y7/1	微砂：長、英		良好	



掲載番号	遺構名	種別	器種	計測値 (cm)			色調	胎土	残存状況	焼成	形態・手法の特徴など	
				口径	底径	器高						
307	溝4	焼埴土器	鉢	14.4	—	(7.0)	にぶい黄橙	10YR6/3	砂礫:長、英、赤、赤		良好	二次焼成
308	溝4	土師器	甕	33.8	—	(5.5)	灰黄緑	10YR6/2	砂礫:長、英、雲		良好	
309	溝5	須恵器	高杯	—	10.6	(0.6)	灰白	N7/	微砂:長		良好	
310	溝5	土師器	甕	25.4	—	(3.8)	赤褐	5YR4/6	微砂:長、英、雲		良好	
311	溝5	土師器	甕	17.6	—	(5.0)	にぶい褐	7.5YR5/4	細砂:長、英、雲		良好	
312	たわみ	須恵器	杯身	12.5	6.3	4.7	灰	N6/	細砂:英	完形	良好	
313	たわみ	須恵器	杯身	13.6	5.6	4.6	灰黄	2.5Y7/2	微砂:長、英	完形	良好	
314	集石1	須恵器	杯蓋	17.2	—	(4.0)	灰	N6/	砂礫:長、英	厚ぼろ完形	良好	
315	集石2	須恵器	杯身	—	9.6	(1.1)	黄灰	2.5Y6/1	微砂:長、英		良好	
316	集石2	須恵器	杯身	—	12.0	(1.9)	黄灰	2.5Y6/1	微砂:長、英		良好	
317	集石2	須恵器	杯身	—	12.8	(1.8)	黄灰	2.5Y6/1	微砂:長、英		良好	
318	集石2	須恵器	杯身	—	13.0	(1.6)	灰	N6/	細砂:長、英		良好	
319	集石2	須恵器	高台付壺	—	16.4	(2.7)	灰	N6/	微砂:長		良好	
320	集石2	須恵器	杯蓋	14.0	—	(1.2)	灰	5Y6/1	微砂:長		良好	
321	集石2	須恵器	杯身	12.2	8.2	3.6	灰	7.5Y5/1	微砂:長		良好	
322	集石2	須恵器	杯身	14.0	9.8	2.8	灰白	7.5Y7/1	微砂:長		良好	
323	集石2	須恵器	杯身	14.6	10.2	3.7	灰	N6/	微砂:長、英、角	2/3 残	良好	
324	集石2	須恵器	杯身	16.2	—	(4.2)	灰白	N7/	微砂:長		良好	
325	集石2	須恵器	杯身	16.0	—	(3.0)	灰白	N7/	微砂:長		良好	
326	集石2	須恵器	高杯	—	9.2	(4.8)	灰白	N7/	微砂:長、英、黒		良好	
327	集石2	須恵器	広口壺	24.2	—	(4.0)	灰白	N7/	微砂:長		良好	
328	集石2	須恵器	壺	22.4	—	(8.7)	灰白	N7/	微砂:長		良好	
329	集石2	焼埴土器	鉢	9.6	—	(4.5)	明赤褐	5YR5/6	細砂:長、英、雲		良好	二次焼成
330	集石2	土師器	甕	—	—	(3.1)	にぶい橙	7.5YR6/4	細砂:長、英、雲		良好	
331	集石2	土師器	甕	23.2	—	(6.9)	にぶい黄橙	10YR6/3	微砂:長		良好	
332	F区 柱穴	須恵器	杯身	10.0	—	(3.8)	灰黄	2.5Y7/2	微砂:長		良好	
333	E区 柱穴	須恵器	杯身	—	7.0	(3.4)	灰	10Y5/1	微砂:長		良好	
334	E区 柱穴	須恵器	杯身	12.0	—	(1.9)	灰白	N7/	微砂:長、英		良好	
335	F区 柱穴	須恵器	杯身	14.0	—	(2.1)	灰黄	2.5Y7/2	微砂:長、黒		良好	
336	F区 柱穴	須恵器	杯身	14.4	11.1	3.0	灰	5Y6/1	微砂:長		良好	
337	G区 柱穴	須恵器	杯蓋	16.6	—	(2.5)	灰白	7.5Y7/1	微砂:長		不良	
338	G区 柱穴	土師器	甕	16.3	—	(6.4)	明赤褐	2.5YR5/6	微砂:長、英、黒		良好	
339	E区 柱穴	土師器	甕	13.3	—	(3.2)	にぶい黄橙	10YR7/3	微砂:長、英、黒		良好	
340	E区 柱穴	土師器	甕	—	—	(4.6)	橙	7.5YR6/6	砂礫:長、英、雲		良好	
341	G区 柱穴	焼埴土器	鉢	11.0	—	(9.0)	にぶい褐	7.5YR5/4	砂礫:長		良好	二次焼成
342	G区 土器溜まり	焼埴土器	鉢	15.0	—	(12.4)	橙	7.5YR6/6	砂礫:長、英		良好	二次焼成
343	G区 土器溜まり	焼埴土器	鉢	13.0	—	(9.4)	明赤褐	5YR5/6	砂礫:長、英		良好	二次焼成
344	G区 土器溜まり	焼埴土器	鉢	11.6	—	(9.2)	橙	2.5YR6/6	細砂:長		良好	二次焼成
345	G区 柱穴	焼埴土器	鉢	10.4	—	(8.0)	にぶい橙	7.5YR7/4	砂礫:長、英、赤		良好	二次焼成
346	G区 柱穴	焼埴土器	鉢	11.0	—	(10.4)	にぶい黄橙	10YR6/4	砂礫:長、英、雲		良好	二次焼成
347	F区 柱穴	焼埴土器	鉢	10.4	—	(8.0)	にぶい黄橙	10YR7/3	細砂:長、英		良好	二次焼成
348	F区 柱穴	焼埴土器	鉢	13.2	—	(10.4)	赤褐	2.5YR4/6	砂礫:長、英、雲		良好	二次焼成 内面 布目圧痕
349	F区 柱穴	焼埴土器	鉢	14.0	—	(8.0)	橙	7.5YR6/6	砂礫:長、英、雲、角		良好	二次焼成 内面 布目圧痕
350	F区包含層	須恵器	杯身	12.8	6.2	4.6	灰白	10YR8/2	微砂:長		良好	
351	F区包含層	須恵器	杯身	12.8	6.8	4.0	灰白	5Y7/1	細砂:長、英	1/6 残	良好	
352	F区包含層	須恵器	杯身	14.4	9.6	4.3	灰白	5Y7/1	微砂:長		良好	
353	F区包含層	須恵器	杯身	12.0	6.0	3.9	灰	N5/	微砂:長		良好	
354	G区包含層	須恵器	杯身	11.0	6.0	3.8	褐灰	10YR5/1	微砂:長、英		良好	
355	G区包含層	須恵器	杯身	12.8	6.4	3.5	灰白	2.5Y7/1	微砂:長	1/3 残	良好	
356	F区包含層	須恵器	杯身	14.0	9.8	3.8	灰白	7.5Y8/1	微砂:長、英		良好	
357	F区包含層	須恵器	杯身	13.5	8.0	3.9	灰白	2.5Y7/1	微砂:長、英		良好	
358	G区包含層	須恵器	杯身	12.0	—	(3.7)	灰	5Y6/1	微砂:長、英		良好	
259	F区包含層	須恵器	杯身	13.4	8.8	3.8	灰白	2.5Y7/1	細砂:長、英		良好	
360	F区包含層	須恵器	杯身	12.6	7.0	3.5	灰	5Y6/1	微砂:長	1/3 残	良好	
361	F区包含層	須恵器	杯身	13.4	9.0	3.7	暗灰	N3/	微砂:長、英	1/3 残	良好	
362	F区包含層	須恵器	杯身	13.0	6.8	3.5	灰	7.5Y6/1	細砂:長		良好	
363	F区包含層	須恵器	杯身	14.4	8.6	3.5	灰	5Y5/1	微砂:長、英		良好	
364	F区包含層	須恵器	杯身	15.4	8.4	4.2	灰白	2.5Y8/2	微砂:長、英		良好	
365	F区包含層	須恵器	杯身	12.4	10.0	3.1	灰白	2.5Y8/2	微砂:長、英、雲	1/2 残	良好	
366	F区包含層	須恵器	杯身	13.6	10.8	3.1	灰	7.5Y5/1	微砂:長、雲	1/3 残	良好	
367	F区包含層	須恵器	杯身	14.4	10.4	3.3	灰白	5Y7/1	微砂:長、英		良好	
368	G区包含層	須恵器	杯身	14.6	10.8	3.5	灰黄	2.5Y7/2	細砂:長、英	1/2 残	良好	
369	F区包含層	須恵器	杯身	13.6	10.0	3.4	灰	5Y6/1	細砂:長、英		良好	
370	G区包含層	須恵器	杯身	14.6	9.6	3.6	灰	N6/	微砂:長、英、雲		良好	
371	F区包含層	須恵器	杯身	14.4	10.4	3.6	灰白	2.5Y7/1	微砂:長、英、雲		良好	
372	F区包含層	須恵器	杯身	14.0	11.1	3.3	灰白	2.5Y7/1	微砂:長、角	1/2 残	良好	
373	G区包含層	須恵器	杯身	14.0	9.8	3.2	灰白	5Y7/1	細砂:長、英	1/6 残	良好	
374	G区包含層	須恵器	杯身	15.0	11.0	4.0	灰白	10YR7/1	微砂:長	1/4 残	良好	
375	F区包含層	須恵器	杯身	15.0	11.0	3.8	灰	N6/	細砂:長	1/2 残	良好	
376	F区包含層	須恵器	杯身	14.2	10.8	3.8	灰白	5Y7/1	微砂:長		良好	
377	F区包含層	須恵器	皿	15.0	11.2	3.3	灰白	2.5Y8/1	微砂		良好	
378	F区包含層	須恵器	皿	16.0	10.6	3.3	黄灰	2.5Y6/1	微砂:長、英	1/6 残	良好	
379	G区包含層	須恵器	皿	15.0	10.8	3.3	灰黄	2.5Y7/2	微砂:長		良好	
380	F区包含層	須恵器	皿	15.0	10.2	3.1	灰	5Y6/1	微砂:長、英		良好	
381	F区包含層	須恵器	皿	14.0	9.9	3.1	灰黄	2.5Y7/2	微砂:長、英	1/6 残	良好	
382	F区包含層	須恵器	皿	15.0	11.0	3.2	灰白	5Y7/1	微砂:長、英		良好	

掲載番号	遺構名	種別	器種	計測値 (cm)			色調		胎土	残存状況	焼成	形態・手法の特徴など
				口径	底径	器高						
383	F区包含層	須恵器	皿	15.0	10.1	3.0	灰白	2.5Y8/1	微砂：長、英	1/4 残	良好	
384	G区包含層	須恵器	皿	15.0	10.6	3.1	灰白	5Y7/1	微砂：長、英		良好	
385	F区包含層	須恵器	皿	14.8	3.0	11.0	にぶい黄橙	10YR7/2	微砂：長、雲	ほぼ完形	良好	
386	F区包含層	須恵器	皿	15.2	11.8	2.4	にぶい黄	2.5Y6/3	微砂：長、雲		良好	
387	G区包含層	須恵器	皿	17.0	13.0	2.2	灰白	2.5Y8/2	微砂：長、英		良好	
388	F区包含層	須恵器	皿	15.2	12.1	11.9	灰白	2.5Y8/2	微砂：長、雲、角	1/2 残	不良	
389	F区包含層	須恵器	杯蓋	14.7	—	3.1	灰	N6/	細砂：長、英、雲	1/3 残	良好	
390	G区包含層	須恵器	杯蓋	—	—	(1.7)	黄灰	2.5Y5/1	微砂：長		良好	
391	F区包含層	須恵器	杯蓋	14.4	—	2.1	灰	N5/	微砂：長	1/4 残	良好	
392	F区包含層	須恵器	杯蓋	16.0	—	1.6	灰	N5/	細砂：長、英	1/4 残	良好	
393	F区包含層	須恵器	杯蓋	16.8	—	2.2	黄灰	2.5Y5/1	微砂：長、英	1/8 残	良好	
394	G区包含層	須恵器	杯蓋	—	—	(1.6)	灰	5Y6/1	微砂：長、英、雲		良好	
395	G区包含層	須恵器	杯蓋	11.0	—	(1.6)	灰	5Y6/1	微砂：長		良好	
396	F区包含層	須恵器	杯蓋	14.0	—	(2.3)	黄灰	2.5Y6/1	微砂：長		良好	
397	F区包含層	須恵器	杯蓋	15.4	—	(1.7)	黄灰	2.5Y6/1	微砂：長、英		良好	
398	G区包含層	須恵器	杯蓋	14.6	—	(2.1)	灰	5Y4/1	細砂：長		良好	
399	G区包含層	須恵器	杯蓋	14.6	—	(2.7)	灰	5Y6/1	微砂：長		良好	
400	F区包含層	須恵器	杯蓋	15.0	—	(1.8)	灰白	2.5Y8/1	微砂：長、英、雲		良好	
401	G区包含層	須恵器	杯蓋	16.0	—	(2.5)	灰	5Y6/1	細砂：長、英		良好	
402	G区包含層	須恵器	杯蓋	17.6	—	(1.9)	灰白	N7/	微砂：長、英		良好	
403	G区包含層	須恵器	杯蓋	17.0	—	(1.7)	灰白	2.5Y8/2	微砂：長		良好	
404	G区包含層	須恵器	杯蓋	20.0	—	(1.5)	灰	N6/	微砂：長、雲		良好	
405	G区包含層	須恵器	杯蓋	21.0	—	(2.1)	灰	N5/	微砂：長		良好	
406	G区包含層	須恵器	杯蓋	22.0	—	(1.3)	灰	N6/	微砂：長		良好	
407	F区包含層	須恵器	杯蓋	—	—	(2.3)	灰	N6/	微砂：長		良好	
408	F区包含層	須恵器	壺蓋	7.6	—	(1.8)	灰白	N7/	微砂：長		良好	
409	G区包含層	須恵器	杯蓋	—	—	(1.1)	黄灰	2.5Y6/1	微砂：長		良好	
410	F区包含層	須恵器	杯蓋	—	—	(1.0)	灰白	2.5Y7/1	微砂：長		良好	
411	G区包含層	須恵器	杯蓋	—	—	(1.6)	灰白	5Y7/1	微砂：長		良好	
412	F区包含層	須恵器	杯蓋	—	—	(1.9)	灰白	7.5Y7/1	微砂：長		良好	
413	F区包含層	須恵器	杯蓋	—	—	(1.0)	灰	5Y6/1	微砂：長		良好	
414	F区包含層	須恵器	杯蓋	—	—	(2.0)	黄灰	2.5Y6/1	微砂：長、英、雲		良好	
415	F区包含層	須恵器	杯蓋	—	—	(1.5)	灰	5Y6/1	微砂：長、英、雲		良好	
416	F区包含層	須恵器	杯蓋	—	—	(1.3)	黄灰	2.5Y6/1	微砂：長、英		良好	
417	F区包含層	須恵器	杯蓋	—	—	(1.3)	灰	7.5Y6/1	微砂：長、英、雲		良好	
418	F区包含層	須恵器	杯身	15.2	11.8	2.4	にぶい黄	2.5Y6/3	微砂：長、英		良好	
419	F区包含層	須恵器	杯身	13.4	9.6	4.5	灰	5Y5/1	微砂：長、英	1/8 残	良好	線刻
420	F区包含層	須恵器	杯身	10.0	7.3	3.5	灰	N6/	微砂：長、英	1/4 残	良好	
421	F区包含層	須恵器	杯身	12.0	7.2	4.5	灰白	7.5Y7/1	微砂：長、英		良好	
422	F区包含層	須恵器	杯身	16.0	—	(5.8)	灰白	N7/	微砂：長、英、雲		良好	
423	G区包含層	須恵器	杯身	15.6	—	(5.0)	暗灰黄	2.5Y5/2	微砂：長		良好	
424	F区包含層	須恵器	杯身	18.0	—	(5.0)	灰	5Y5/1	微砂：長		良好	
425	F区包含層	須恵器	杯身	—	9.3	(4.1)	灰白	10YR8/1	微砂：長、英、雲		良好	
426	F区包含層	須恵器	杯身	—	13.0	(3.4)	灰白	5Y8/1	微砂：長		良好	
427	F区包含層	須恵器	杯身	14.6	11.2	4.0	灰白	2.5Y7/1	細砂：長		良好	
428	F区包含層	須恵器	杯身	14.0	13.0	3.7	灰	10Y4/1	微砂：長		良好	
429	G区包含層	須恵器	杯身	13.0	9.8	3.8	灰白	2.5Y7/1	微砂：長		良好	
430	F区包含層	須恵器	杯身	13.0	8.4	3.5	灰白	5Y7/1	細砂：長		良好	
431	G区包含層	須恵器	杯身	—	10.0	(2.6)	灰	N6/	微砂：長		良好	
432	G区包含層	須恵器	杯身	—	9.0	(2.4)	灰	N6/	微砂：長、英		良好	
433	F区包含層	須恵器	杯身	—	9.0	(2.4)	黄灰	2.5Y6/1	微砂：長		良好	
434	G区包含層	須恵器	杯身	—	10.0	(1.8)	灰白	2.5Y7/1	微砂：長		良好	
435	G区包含層	須恵器	杯身	—	11.0	(1.8)	灰白	2.5Y7/1	微砂：長		良好	
436	F区包含層	須恵器	杯身	—	12.4	(1.9)	灰	5Y6/1	微砂：長		良好	
437	G区包含層	須恵器	杯身	—	13.0	(1.8)	灰白	10YR8/2	精製		良好	
438	F区包含層	須恵器	杯身	—	13.0	(1.6)	灰白	N7/	微砂：長		良好	
439	F区包含層	須恵器	杯身	—	13.3	(2.2)	灰白	N7/	細砂：長		良好	
440	F区包含層	須恵器	杯身	—	13.0	(1.8)	灰	5Y5/1	微砂：長、英		良好	
441	F区包含層	須恵器	杯身	—	15.0	(2.5)	灰	N5/	微砂：長、英		良好	
442	F区包含層	須恵器	壺	—	11.0	(6.3)	黄灰	2.5Y6/1	微砂：長		良好	
443	F区包含層	須恵器	壺	—	15.4	(7.3)	灰	N6/	微砂：長、英		良好	
444	F区包含層	須恵器	壺	26.4	—	(3.1)	灰	7.5Y4/1	微砂：長		良好	
445	F区包含層	須恵器	不明	—	—	(3.8)	灰白	2.5Y7/1	微砂：長、雲		良好	転用硯
446	F区包含層	須恵器	甗	—	16.0	(4.2)	灰黄	2.5Y7/2	微砂：長、英		良好	
447	F区包含層	須恵器	甗	—	18.0	(5.5)	暗灰黄	2.5Y5/2	微砂：長、英、雲		良好	
448	F区包含層	須恵器	甗	—	16.0	(4.2)	灰黄	2.5Y7/2	微砂：長、英		良好	
449	F区包含層	須恵器	高杯	—	9.8	(7.7)	灰白	2.5Y7/1	微砂：長、英、雲		良好	
450	F区包含層	須恵器	高杯	—	9.0	(3.0)	灰	N4/	微砂：長		良好	
451	G区包含層	須恵器	高杯	—	7.2	(0.9)	灰	N6/	微砂：長		良好	
452	G区包含層	須恵器	杯身	—	7.0	(4.4)	灰	5Y5/1	微砂：長、雲		良好	
453	G区包含層	須恵器	杯身	—	8.0	(3.5)	灰白	5Y8/1	微砂：長		良好	
454	F区包含層	須恵器	甗	—	—	(1.4)	橙	5YR6/6	微砂：長、英		良好	
455	F区包含層	土師器	碗	11.6	—	3.8	橙	5YR6/6	微砂：長、英	1/4 残	良好	
456	F区包含層	土師器	杯	12.8	8.2	3.2	橙	7.5YR7/6	微砂：長、英	1/5 残	良好	赤色の料塗布
457	G区包含層	土師器	杯	14.0	9.6	4.0	赤褐	5YR4/6	細砂：長	1/6 残	良好	赤色の料塗布
458	F区包含層	土師器	杯	12.4	7.6	4.0	明赤褐	2.5YR5/8	砂礫：長、英、雲		良好	

掲載番号	遺構名	種別	器種	計測値 (cm)			色調		胎土	残存状況	焼成	形態・手法の特徴など
				口径	底径	器高						
459	F区包含層	土師器	杯	13.0	10.2	4.2	明赤褐	2.5YR5/8	細砂：長、英、雲、角	1/4 壊	良好	
460	F区包含層	土師器	杯	12.6	9.6	3.4	明赤褐	2.5YR5/8	砂礫：長、英、雲		良好	
461	F区包含層	土師器	杯	—	9.0	(2.2)	にぶい橙	7.5YR6/4	細砂：長、英、雲		良好	
462	F区包含層	土師器	杯蓋	—	—	(1.9)	灰黄褐	10YR6/2	細砂：長、英		良好	
463	G区包含層	土師器	杯	—	—	(2.5)	赤褐	2.5Y4/6	微砂：長		良好	赤色顔料塗布
464	G区包含層	土師器	杯	—	—	(2.2)	にぶい黄橙	10YR7/4	微砂：長		良好	赤色顔料塗布
465	F区包含層	土師器	壺	39.6	—	(3.6)	明赤褐	5YR5/6	細砂：長、英		良好	
466	F区包含層	土師器	壺	34.0	—	(7.5)	橙	7.5YR6/6	細砂：長、英		良好	
467	F区包含層	土師器	壺	15.0	—	(3.5)	明赤褐	5YR5/6	微砂：長、英、雲		良好	
468	F区包含層	土師器	壺	22.8	—	(3.8)	にぶい橙	7.5YR7/4	細砂：長、英		良好	
469	G区包含層	土師器	壺	27.7	—	(4.1)	にぶい橙	7.5YR5/4	細砂：長、英		良好	
470	G区包含層	土師器	壺	22.8	—	(5.8)	にぶい橙	7.5YR6/4	砂礫：長、英、雲		良好	
471	F区包含層	土師器	壺	30.0	—	(6.2)	明赤褐	5YR5/6	細砂：長、英、雲		良好	
472	G区包含層	土師器	壺	23.8	—	(4.2)	にぶい橙	7.5YR4/1	微砂：長、英		良好	
473	G区包含層	土師器	壺	29.6	—	(6.3)	にぶい橙	7.5YR6/4	細砂：長、英、雲		良好	
474	G区包含層	土師器	壺	26.0	—	(6.5)	にぶい黄橙	10YR7/4	微砂：長、英、雲		良好	
475	G区包含層	土師器	壺	27.6	—	(3.6)	にぶい橙	7.5YR6/4	細砂：長、英		良好	
476	G区包含層	土師器	壺	20.0	—	(3.7)	橙	5YR6/6	微砂：長、英、雲		良好	
477	F区包含層	土師器	壺	18.6	—	(4.4)	にぶい赤褐	2.5YR5/4	細砂：長、英		良好	
478	F区包含層	土師器	甗	29.5	—	(13.8)	橙	5YR6/6	細砂：長、英		良好	
479	F区包含層	焼塩土器	鉢	11.0	—	(13.0)	淡黄	2.5Y8/3	細砂：長、英		良好	二次焼成
480	G区包含層	焼塩土器	鉢	11.0	—	(12.5)	にぶい黄橙	10YR7/4	細砂：長、英		良好	一次焼成
481	F区包含層	焼塩土器	鉢	10.0	—	(10.1)	褐	7.5YR4/4	砂礫：長、英		良好	一次焼成
482	G区包含層	焼塩土器	鉢	9.0	—	(10.4)	にぶい褐	7.5YR5/4	細砂：長、英、雲		良好	二次焼成
483	F区包含層	焼塩土器	鉢	11.0	—	(9.7)	にぶい黄橙	10YR6/4	細砂：長、英		良好	二次焼成
484	F区包含層	焼塩土器	鉢	11.0	—	(9.3)	橙	7.5YR7/6	細砂：長、英		良好	二次焼成
485	F区包含層	焼塩土器	鉢	10.0	—	(8.6)	赤褐	5YR4/6	砂礫：長、英、雲		良好	一次焼成
486	F区包含層	焼塩土器	鉢	12.0	—	(7.7)	にぶい黄橙	10YR5/4	細砂：長、英、雲		良好	二次焼成
487	G区包含層	焼塩土器	鉢	10.0	—	(8.1)	灰	5Y5/1	微砂：長、英		良好	二次焼成
488	F区包含層	焼塩土器	鉢	11.0	—	(9.4)	にぶい黄橙	10YR7/3	細砂：長、英、雲		良好	二次焼成
489	F区包含層	焼塩土器	鉢	11.0	—	(8.0)	にぶい黄橙	10YR6/4	砂礫：長、英		良好	二次焼成
490	G区包含層	焼塩土器	鉢	11.0	—	(7.5)	黒褐	10YR3/2	細砂：長、英		良好	一次焼成
491	F区包含層	焼塩土器	鉢	11.2	—	(7.5)	にぶい黄橙	10YR6/4	細砂：長、英		良好	二次焼成
492	G区包含層	焼塩土器	鉢	11.0	—	(7.5)	にぶい黄橙	10YR7/4	細砂：長、英		良好	二次焼成
493	G区包含層	焼塩土器	鉢	11.0	—	(6.4)	浅黄	2.5Y7/3	砂礫：長、英		良好	二次焼成
494	F区包含層	焼塩土器	鉢	11.2	—	(7.5)	にぶい黄橙	10YR6/4	細砂：長、英		良好	二次焼成
495	F区包含層	焼塩土器	鉢	12.0	—	(7.2)	赤褐	5YR4/6	微砂：長、英、雲		良好	一次焼成
496	F区包含層	焼塩土器	鉢	10.0	—	(7.0)	にぶい黄橙	10YR7/2	砂礫：長、英		良好	一次焼成
497	F区包含層	焼塩土器	鉢	10.8	—	(6.9)	にぶい黄橙	10YR6/4	微砂：長		良好	二次焼成
498	F区包含層	焼塩土器	鉢	11.0	—	(6.9)	灰黄	2.5Y7/2	砂礫：長、英		良好	二次焼成
499	F区包含層	焼塩土器	鉢	11.0	—	(4.4)	浅黄	2.5Y7/3	細砂：長、英		良好	二次焼成
500	F区包含層	焼塩土器	鉢	8.6	—	(4.9)	にぶい黄橙	10YR7/3	細砂：長、英		良好	一次焼成
501	F区包含層	焼塩土器	鉢	10.8	—	(6.9)	にぶい黄橙	10YR6/4	微砂：長		良好	一次焼成
502	G区包含層	焼塩土器	鉢	10.0	—	(6.7)	浅黄	2.5Y7/3	細砂：長、英		良好	二次焼成
503	F区包含層	焼塩土器	鉢	9.6	—	(6.4)	褐	7.5YR4/3	細砂：長、英		良好	二次焼成
504	G区包含層	焼塩土器	鉢	11.0	—	(6.4)	橙	5YR6/6	細砂：長、英		良好	二次焼成
505	G区包含層	焼塩土器	鉢	11.0	—	(6.2)	橙	7.5YR6/6	砂礫：長、英		良好	二次焼成
506	F区包含層	焼塩土器	鉢	11.0	—	(5.2)	暗灰黄	2.5Y5/2	細砂：長、英		良好	一次焼成
507	F区包含層	焼塩土器	鉢	11.0	—	(5.1)	浅黄褐	7.5YR8/6	細砂：長、英		良好	一次焼成
508	F区包含層	焼塩土器	鉢	14.2	—	(5.3)	にぶい褐	7.5YR5/4	細砂：長、英		良好	二次焼成
509	F区包含層	焼塩土器	鉢	10.0	—	(6.4)	にぶい黄褐	10YR5/4	細砂：長、英		良好	二次焼成
510	G区包含層	焼塩土器	鉢	10.0	—	(7.8)	にぶい黄橙	10YR6/4	細砂：長、英、雲		良好	二次焼成
511	F区包含層	焼塩土器	鉢	11.4	—	(6.1)	浅黄	2.5Y7/4	細砂：長、英		良好	一次焼成
512	F区包含層	焼塩土器	鉢	11.0	—	(6.6)	にぶい黄橙	10YR7/4	細砂：長、英		良好	二次焼成
513	F区包含層	焼塩土器	鉢	10.2	—	(6.4)	にぶい黄橙	10YR7/3	細砂：長、英		良好	二次焼成
514	G区包含層	焼塩土器	鉢	13.0	—	(6.3)	浅黄橙	10YR8/3	砂礫：長、英、雲		良好	二次焼成
515	F区包含層	焼塩土器	鉢	—	—	(7.4)	黒褐	7.5YR3/2	微砂：長、英、雲		良好	二次焼成 内面 布目汗痕
516	F区包含層	焼塩土器	鉢	—	—	(7.7)	明赤褐	5YR5/6	微砂：長、英		良好	二次焼成 内面 布目汗痕
517	G区包含層	焼塩土器	鉢	—	—	(4.3)	橙	7.5YR7/6	砂礫：長、英		良好	一次焼成 内面 布目汗痕
518	F区包含層	焼塩土器	鉢	—	—	(3.4)	明赤褐	5YR5/6	微砂：長、英、雲		良好	二次焼成 内面 布目汗痕
519	F区包含層	焼塩土器	鉢	—	—	(3.9)	明赤褐	5YR5/6	微砂：長、英、雲		良好	二次焼成 内面 布目汗痕
520	G区包含層	焼塩土器	鉢	—	—	(3.8)	にぶい黄橙	10YR5/4	微砂：長、英		良好	二次焼成 内面 布目汗痕
521	F区包含層	焼塩土器	鉢	—	—	(2.9)	明赤褐	5YR5/6	微砂：長、英		良好	一次焼成 内面 布目汗痕
522	F区包含層	焼塩土器	鉢	—	2.0	(7.9)	にぶい黄橙	10YR7/4	微砂：長、英		良好	一次焼成
523	G区包含層	焼塩土器	鉢	—	—	(2.4)	にぶい黄橙	10YR7/4	微砂：長、英		良好	二次焼成
524	F区包含層	焼塩土器	鉢	—	—	(2.8)	橙	7.5YR7/6	砂礫：長、英		良好	二次焼成
525	G区包含層	焼塩土器	鉢	—	—	(1.9)	橙	7.5YR6/6	微砂：長、英		良好	二次焼成
526	G区包含層	焼塩土器	鉢	—	—	(3.1)	明褐	7.5YR5/6	微砂：長、英、雲		良好	一次焼成
527	E区包含層	須恵器	碗	12.0	4.2	4.1	灰	N4/	微砂：長、英		良好	
528	E区包含層	須恵器	杯身	12.0	6.6	3.8	灰白	7.5Y7/1	微砂：長、英		良好	
529	E区包含層	須恵器	杯身	10.4	5.6	3.3	灰	5Y6/1	精製		良好	
530	E区包含層	須恵器	杯身	—	7.0	(1.6)	灰	N6/	微砂：長		良好	
531	D区包含層	須恵器	杯身	—	8.0	(1.5)	灰白	2.5Y7/1	微砂：長、英		良好	内面 漆付着
532	D区包含層	須恵器	杯身	16.0	12.0	3.5	灰白	10Y7/1	微砂：長		良好	
533	E区包含層	須恵器	杯身	16.0	—	(3.4)	灰	N4/	精製		良好	
534	D区包含層	須恵器	杯身	16.0	—	(3.4)	灰	N4/	精製		良好	

掲載番号	遺構名	種別	器種	計測値 (cm)			色調		胎土	残存状況	焼成	形態・手法の特徴など
				口径	底径	器高						
535	EⅠ区包含層	須恵器	碗	10.0	—	(3.6)	灰	5Y6/1	微砂：長、英		良好	
536	EⅠ区包含層	須恵器	碗	16.0	—	(3.7)	灰	5Y5/1	微砂：長、英		良好	
537	EⅠ区包含層	須恵器	杯蓋	—	—	(1.8)	灰白	5Y7/1	微砂：長、英		良好	
538	DⅠ区包含層	須恵器	杯蓋	—	—	(2.5)	灰白	2.5Y7/1	微砂：長、英		良好	
539	FⅠ区包含層	須恵器	杯蓋	—	—	(1.6)	灰白	7.5Y7/1	精製		良好	
540	EⅠ区包含層	須恵器	杯蓋	—	—	(1.1)	灰白	5Y7/1	精製		良好	
541	EⅠ区包含層	須恵器	杯身	—	10.0	(1.2)	灰	5Y6/1	精製		良好	
542	EⅠ区包含層	須恵器	杯身	—	12.0	(1.8)	灰白	5Y7/1	精製		良好	
543	EⅠ区包含層	須恵器	杯身	—	9.0	(1.4)	灰白	5Y7/1	微砂：長、英		良好	線刻
544	DⅠ区包含層	須恵器	長頸壺	—	—	(8.2)	灰	N6/	微砂：長、英		良好	
545	FⅠ区包含層	須恵器	短頸壺	8.0	—	(2.3)	灰白	7.5Y7/1	精製		良好	
546	EⅠ区包含層	須恵器	壺	—	9.0	(2.0)	灰	N4/	微砂：長		良好	
547	EⅠ区包含層	須恵器	壺	—	11.0	(2.0)	灰白	2.5Y8/1	精製		良好	
548	EⅠ区包含層	須恵器	壺	—	11.0	(3.5)	灰白	5Y7/1	精製		良好	
549	EⅠ区包含層	須恵器	壺	—	11.0	(3.1)	灰白	5Y7/1	砂漚		良好	
550	FⅠ区包含層	須恵器	壺	—	11.4	(1.7)	灰白	5Y7/1	微砂：長、英		良好	
551	EⅠ区包含層	須恵器	皿	22.0	—	(1.9)	灰	N6/	精製		良好	
552	EⅠ区包含層	須恵器	高杯	—	—	(7.9)	浅黄	2.5Y7/3	微砂：長		良好	
553	EⅠ区包含層	須恵器	高杯	—	—	(5.9)	灰	N5/	微砂：長、英		良好	
554	EⅠ区包含層	須恵器	高杯	—	—	(4.6)	灰白	10Y7/1	精製		良好	
555	FⅠ区包含層	須恵器	高杯	—	8.6	(4.0)	黄灰	2.5Y5/1	微砂：長、英		良好	
556	DⅠ区包含層	須恵器	高杯	—	4.8	(7.6)	灰	N5/	微砂：長、英、雲		良好	
557	EⅠ区包含層	土師器	甕	21.7	—	(3.8)	にぶい橙	7.5YR6/4	細砂：長、英		良好	
558	EⅠ区包含層	土師器	甕	—	—	(3.3)	明褐	7.5YR5/6	微砂：長、英		良好	
559	EⅠ区包含層	土師器	甕	—	—	(4.0)	にぶい橙	7.5YR6/4	細砂：長、英		良好	
560	FⅠ区包含層	瓦	平瓦	(7.5)	—	(6.8)	浅黄橙	10YR8/3	砂漚：長、英		良好	外面 平行タタキ 内面 布目
561	BⅠ区包含層	須恵器	杯身	—	8.0	(2.2)	灰	5Y5/1	砂漚：長		良好	
562	BⅠ区包含層	須恵器	杯身	—	7.0	(1.6)	黄灰	2.5Y5/1	微砂：長、英		良好	内面 漆付着
563	BⅠ区包含層	須恵器	杯身	—	10.0	(3.1)	灰	10Y5/1	精製		良好	
564	BⅠ区包含層	須恵器	杯身	—	9.2	(1.7)	灰	N6/	微砂：長、英		良好	
565	BⅠ区包含層	須恵器	杯身	—	—	(2.2)	灰	N6/	微砂：長		良好	
566	BⅠ区包含層	須恵器	杯身	—	11.0	(1.7)	灰白	2.5Y8/2	細砂：長、英		良好	
567	BⅠ区包含層	須恵器	壺	—	—	(3.4)	灰	N5/	精製		良好	凹線1条
568	BⅠ区包含層	須恵器	高杯	—	10.2	(4.3)	灰	N6/	精製		良好	凹線2条
569	N3区包含層	須恵器	杯身	12.4	5.0	4.8	灰	5Y6/1	砂漚：長、英	1/5 残	良好	
570	N3区包含層	須恵器	杯身	11.3	7.0	3.2	灰黄	2.5Y7/2	細砂：長、英		良好	
571	N3区包含層	須恵器	杯身	13.2	6.6	3.9	褐灰	10YR5/1	細砂：長、英		良好	
572	S3区包含層	須恵器	杯身	9.6	6.2	3.4	灰白	5Y7/1	微砂：雲		良好	
573	S4区包含層	須恵器	杯身	13.6	11.0	3.3	灰	N5/	精製		良好	
574	S4区包含層	須恵器	杯蓋	—	—	(2.6)	黄灰	2.5Y6/1	微砂：長		良好	
575	N3区包含層	須恵器	杯蓋	—	—	(1.9)	灰	5Y5/1	細砂：長、英		良好	
576	N3区包含層	須恵器	杯蓋	13.0	—	2.8	灰白	2.5Y7/1	細砂：長、英	1/8 残	良好	
577	N3区包含層	須恵器	杯蓋	19.0	—	2.3	灰	N6/	細砂：長、英	1/6 残	良好	
578	N3区包含層	須恵器	杯身	14.4	9.1	4.4	灰	5Y6/1	微砂：長、英	1/3 残	良好	
579	N3区包含層	須恵器	杯身	15.5	11.4	4.8	灰	N6/	細砂：長、英	1/3 残	良好	
580	N1区包含層	須恵器	杯身	—	11.0	(1.7)	灰	N6/	細砂：長、英		良好	
581	N3区包含層	須恵器	杯身	—	10.0	(1.8)	灰	5Y6/1	微砂：長、英		良好	
582	N1区包含層	須恵器	杯身	—	9.0	(2.3)	灰白	N7/	微砂：長		良好	
583	S1区包含層	須恵器	杯身	—	9.5	(1.9)	灰	N6/	微砂：長		良好	
584	S4区包含層	須恵器	杯身	—	11.8	(1.8)	灰	7.5Y6/1	微砂：長		良好	
585	S3区包含層	須恵器	杯身	—	5.8	(1.9)	灰白	2.5Y7/1	微砂：長		良好	
586	N1区包含層	須恵器	杯身	—	12.9	(3.3)	暗緑灰	10GY4/1	砂漚：長		良好	
587	N3区包含層	須恵器	杯身	—	9.6	(1.6)	にぶい黄橙	10YR7/3	微砂：長、英		良好	
588	N3区包含層	須恵器	壺	—	8.9	(10.2)	オリーフ灰	2.5GY5/1	微砂：長		良好	沈線4条・刻口
589	N1区包含層	須恵器	壺	—	—	(3.9)	灰	N5/	微砂：長		良好	沈線1条・刻口
590	N3区包含層	須恵器	壺	—	—	(3.1)	灰白	7.5Y7/1	微砂：長		良好	沈線1条
591	N3区包含層	須恵器	壺	—	15.6	(1.5)	にぶい黄橙	10YR7/2	細砂：長、英		良好	
592	S5区包含層	須恵器	壺	—	—	(13.0)	黄灰	2.5Y5/1	微砂：長、英		良好	転用硯
593	S2区包含層	須恵器	甕	—	—	(13.5)	灰	N5/	微砂：長、英		良好	転用硯
594	N3区包含層	土師器	甕	22	—	(3.6)	にぶい黄橙	10YR7/2	微砂：長、英、雲		良好	
595	N3区包含層	土師器	甕	—	—	(3.7)	にぶい黄橙	10YR5/3	微砂：長、英、雲		良好	
596	N3区包含層	土師器	甕	22.6	—	(4.3)	にぶい黄橙	10YR5/3	微砂：長、英、雲		良好	
597	N1区包含層	土師器	甕	32.1	—	(9.1)	橙	5YR6/6	微砂：長、英		良好	
598	CⅠ区包含層	須恵器	碗	15.8	5.0	5.7	灰白	N7/	微砂：長、英、雲	1/3 残	良好	西插磨産
599	FⅠ区包含層	須恵器	碗	16.0	5.0	5.8	灰	5Y6/1	微砂：長		良好	西插磨産
600	CⅠ区包含層	須恵器	碗	16.0	—	(4.2)	灰	7.5Y6/1	精製		良好	凹線1条 西插磨産
601	GⅠ区包含層	須恵器	碗	15.0	—	(2.9)	灰	5Y6/1	微砂：長		良好	西插磨産
602	CⅠ区包含層	須恵器	碗	16.0	—	(3.8)	灰白	5Y7/1	微砂：長		良好	西插磨産
603	FⅠ区包含層	須恵器	碗	16.0	—	(5.0)	灰白	N7/	微砂：長		良好	西插磨産
604	CⅠ区包含層	須恵器	碗	—	5.4	(2.5)	灰黄	2.5Y7/2	微砂：長、英		良好	西插磨産
605	AⅠ区包含層	須恵器	碗	—	5.2	(2.0)	灰白	2.5Y7/1	微砂：長、英		良好	西插磨産
606	CⅠ区包含層	須恵器	碗	—	5.8	(3.0)	淡黄	2.5Y8/3	微砂：長、雲		良好	凹線1条
607	FⅠ区包含層	須恵器	碗	—	6.7	(1.8)	灰白	7.5Y7/1	微砂：長		良好	西插磨産
608	CⅠ区包含層	須恵器	碗	—	6.2	(1.4)	灰白	5Y7/1	微砂：長、英		良好	西插磨産
609	CⅠ区包含層	須恵器	碗	—	6.1	(2.1)	灰黄	2.5Y7/2	微砂：長、英		良好	西插磨産
610	CⅠ区包含層	須恵器	碗	—	6.4	(2.7)	灰	7.5Y5/1	細砂：長、英		良好	西插磨産

掲載番号	遺構名	種別	器種	計測値 (cm)			色調		胎土	残存状況	焼成	形態・手法の特徴など
				口径	底径	器高						
611	C区包含層	須恵器	碗	—	5.6	(1.2)	灰白	10Y7/1	精製		良好	西播磨産
612	C区包含層	須恵器	碗	—	6.2	(2.1)	灰白	7.5Y7/1	微砂：長、英		良好	西播磨産
613	F区包含層	須恵器	碗	—	6.0	(1.4)	灰白	5Y7/1	微砂：長、英		良好	西播磨産
614	A区包含層	須恵器	碗	—	6.0	(2.0)	灰	5Y6/1	微砂：長、英		良好	西播磨産
615	C区包含層	須恵器	碗	—	6.4	(2.9)	灰	10Y6/1	微砂：長、英		良好	西播磨産
616	D区包含層	須恵器	碗	—	6.0	(1.7)	灰	10Y5/1	精製		良好	西播磨産
617	D区包含層	須恵器	碗	—	5.0	(1.3)	灰	N6/	精製		良好	西播磨産
618	C区包含層	須恵器	碗	—	6.0	(2.4)	灰白	5Y7/1	微砂：長、英		良好	西播磨産
619	A区包含層	須恵器	碗	—	6.0	(2.0)	灰	N5/	微砂：長		良好	西播磨産
620	F区包含層	須恵器	碗	—	5.2	(1.9)	灰	N6/	微砂：長、英		良好	西播磨産
621	F区包含層	須恵器	碗	—	6.0	(2.0)	灰	5Y6/1	精製		良好	西播磨産
622	F区包含層	須恵器	碗	—	5.4	(1.6)	灰黄	2.5Y7/2	微砂：長、英		良好	西播磨産
623	F区包含層	須恵器	碗	—	5.2	(2.4)	灰	7.5Y6/1	微砂：長		良好	西播磨産
624	A区包含層	須恵器	碗	—	6.0	(2.1)	灰白	N7/	微砂：長、英		良好	西播磨産
625	F区包含層	須恵器	碗	—	5.4	(2.4)	灰	7.5Y6/1	微砂：長		良好	西播磨産
626	D区包含層	須恵器	碗	—	6.4	(3.1)	灰	N6/	微砂：長		良好	西播磨産
627	F区包含層	須恵器	碗	—	5.2	(1.6)	灰黄	2.5Y7/2	精製		良好	西播磨産
628	F区包含層	須恵器	碗	—	6.0	(1.4)	灰白	5Y7/1	微砂：長、英		良好	西播磨産
629	F区包含層	須恵器	碗	—	6.0	(1.6)	灰白	10Y7/1	微砂：長、英		良好	西播磨産
630	F区包含層	須恵器	碗	—	6.4	(4.2)	灰白	7.5Y7/1	微砂：英		良好	西播磨産
631	D区包含層	須恵器	碗	—	6.2	(2.1)	灰	N6/	精製		良好	西播磨産
632	B区包含層	須恵器	碗	—	6.0	(3.1)	灰	5Y6/1	微砂：長、英		良好	西播磨産
633	F区包含層	須恵器	碗	—	6.0	(2.5)	灰白	7.5Y7/1	細砂：長、英		良好	西播磨産
634	F区包含層	須恵器	碗	—	6.6	(4.4)	灰	7.5Y6/1	微砂：長、英		良好	西播磨産 内線1条
635	F区包含層	須恵器	碗	—	6.1	(4.6)	灰白	2.5Y7/1	微砂：長		良好	突帯1条 西播磨産
636	A区包含層	須恵器	碗	—	6.8	(4.8)	灰	N6/	微砂：長		良好	西播磨産
637	F区包含層	須恵器	碗	—	7.0	(3.3)	灰	7.5Y6/1	微砂：長、英		良好	西播磨産
638	E区包含層	須恵器	碗	—	6.0	(1.5)	灰白	5Y7/1	微砂：長		良好	西播磨産
639	A区包含層	須恵器	碗	—	6.2	(2.2)	灰	5Y6/1	微砂：長		良好	西播磨産
640	D区包含層	須恵器	碗	—	6.8	(2.6)	灰	N6/	微砂：長		良好	西播磨産
641	N4区包含層	須恵器	片面碗	19.0	—	(3.9)	灰	N6/	微砂：長、英、雲		良好	長方形透かし
642	E区包含層	須恵器	片面碗	—	29.0	(4.6)	灰	5Y5/1	微砂：長、英		良好	線刻
643	E区包含層	須恵器	片面碗	—	—	(3.9)	灰黄褐	10YR5/2	微砂：長、英		良好	線刻
644	E区包含層	須恵器	片面碗	—	—	(3.4)	灰	5Y6/1	微砂：長、英		良好	長方形透かし
645	F区包含層	須恵器	片面碗	—	—	(1.5)	灰	5Y5/1	微砂：長、英		良好	長方形透かし
646	D区包含層	須恵器	片面碗	—	—	(3.2)	灰	5Y6/1	微砂：長		良好	
647	E区包含層	須恵器	片面碗	—	—	(2.2)	灰	10Y6/1	精製		良好	
648	N4区包含層	須恵器	片面碗	—	29.6	(3.2)	灰	5Y6/1	細砂：長、英		良好	長方形透かし
649	D区包含層	須恵器	杯身	—	10.0	(1.3)	灰	5Y6/1	微砂：長、英		良好	線刻
650	D区包含層	須恵器	杯身	—	10.0	(1.3)	灰	5Y6/1	細砂：長、英		良好	線刻
651	F区包含層	緑釉陶器	碗	—	8.4	(2.3)	灰白	7.5Y8/1	精製		良好	施釉（浅黄 7.5Y7/3） 洛北窯
652	E区包含層	緑釉陶器	碗	—	7.8	(2.2)	灰白	10Y7/1	精製		良好	施釉（灰白 10Y7/2） 内面 胎土目 洛北窯
653	E区包含層	緑釉陶器	碗	—	8.4	(1.7)	灰白	5Y7/1	精製		良好	施釉（灰白 5Y7/2） 洛北窯
654	D区包含層	緑釉陶器	碗	—	—	(3.0)	灰	7.5Y6/1	精製		良好	施釉（オリーブ灰 7.5Y6/3） 内面 花卉文 猿投窯
655	F区包含層	緑釉陶器	移模	—	7.9	(1.4)	灰白	5Y7/1	精製		良好	施釉（オリーブ灰 7.5Y6/3） 二又トナリ跡 内面 花卉文 猿投窯
656	N3区包含層	緑釉陶器	碗	—	—	(3.1)	灰白	N7/	精製		良好	施釉（灰白 10Y7/1） 洛北窯
657	F区包含層	灰釉陶器	碗	14.9	—	(4.2)	灰白	7.5Y7/1	精製		良好	施釉（灰白 7.5Y7/2）
658	D区包含層	灰釉陶器	碗	—	—	(2.1)	にぶい黄橙	10YR7/2	精製		良好	施釉（にぶい黄褐 10YR5/4）
659	掘立柱建物27	P4	土師器	小皿	7.6	—	1.5	橙	7.5YR6/6	微砂：長、英、雲	良好	
660	掘立柱建物28	P2	土師器	皿	13.8	6.4	2.4	にぶい橙	7.5YR7/4	微砂：長、英、雲	良好	
661	掘立柱建物29	P10	土師器	小皿	—	3.8	(1.2)	にぶい黄橙	10YR6/4	微砂：長、英、雲	良好	
662	掘立柱建物34	P12	土師器	碗	—	6.4	(2.1)	灰	N6/	微砂：長	良好	
663	掘立柱建物35	P1	土師器	碗	—	6.2	(2.5)	にぶい橙	7.5YR7/4	微砂：長、英	良好	
664	掘立柱建物35	P4	土師器	壺	—	—	(4.0)	にぶい赤褐	10YR4/3	細砂：長、英	良好	
665	掘立柱建物35	P3	土師器	壺	—	—	(3.2)	にぶい赤褐	5YR4/3	細砂：長、英	良好	
666	掘立柱建物36	P10	土師器	碗	14.4	—	(5.1)	灰	N6/	微砂：長	良好	
667	掘立柱建物36	P10	土師器	碗	12.8	—	(2.9)	灰白	N7/	微砂	良好	
668	掘立柱建物36	P2	土師器	小皿	6.6	—	(2.2)	灰	N5/	微砂：長	良好	
669	掘立柱建物36	P7	土師器	小皿	—	—	(1.2)	灰	7.5Y6/1	微砂：長	良好	
670	掘立柱建物36	P2	土師器	杯	13.4	—	(2.6)	にぶい黄橙	10YR6/4	微砂：長、英、雲、角	良好	
671	掘立柱建物36	P2	土師器	杯	—	—	(2.6)	にぶい黄橙	10YR7/4	微砂	良好	
672	掘立柱建物36	P2	土師器	杯	—	—	(2.1)	にぶい黄橙	10YR7/3	微砂：長、英、雲	良好	
673	掘立柱建物36	P7	土師器	高台付杯	—	6.8	(3.3)	にぶい黄橙	10YR7/3	細砂：長、英	良好	
674	掘立柱建物36	P12	土師器	小皿	9.0	8.1	1.7	灰黄褐	10YR6/2	微砂：長、英、雲	良好	
675	掘立柱建物36	P16	土師器	小皿	8.8	—	(1.6)	にぶい橙	7.5YR7/4	微砂：長、英、角	良好	
676	掘立柱建物38	P1	土師器	小皿	—	5.0	(0.9)	淡黄	2.5Y8/3	細砂：長、英	良好	
677	掘立柱建物39	P3	土師器	碗	16.0	4.9	6.2	灰	N6/	細砂：長、英	良好	
678	掘立柱建物39	P1	土師器	碗	14.0	—	(3.9)	青灰	5B5/1	微砂：長、英	良好	
679	掘立柱建物39	P14	土師器	杯	14.8	6.6	4.5	にぶい黄橙	10YR7/3	細砂：長、英、雲、角	良好	
680	掘立柱建物39	P3	土師器	碗	—	6.0	(2.6)	にぶい黄橙	10YR7/4	微砂：長、英	良好	
681	掘立柱建物39	P1	土師器	杯	14.9	—	(3.4)	にぶい黄橙	10YR7/2	微砂：長、英	良好	
682	掘立柱建物39	P14	土師器	杯	—	6.6	(2.3)	灰黄	2.5Y7/2	微砂：長、英	良好	
683	掘立柱建物39	P14	土師器	杯	15.5	—	(3.2)	にぶい黄橙	10YR7/3	微砂：長、雲	良好	内面 炭化物付着

掲載番号	遺構名	種別	器種	計測値 (cm)			色調	胎土	残存状況	焼成	形態・手法の特徴など
				口径	底径	器高					
684	掘立柱建物39 P14	土師器	杯	15.5	—	(3.2)	にぶい黄粉 10YR7.3	微砂：長、赤		良好	
685	掘立柱建物39 P14	土師器	杯	14.0	—	(3.0)	にぶい黄粉 10YR7/3	微砂：長、赤		良好	
686	掘立柱建物39 P14	土師器	小皿	7.5	4.9	1.3	にぶい黄粉 10YR7/3	微砂：長、赤、雲		良好	
687	掘立柱建物39 P16	土師器	小皿	7.7	6.3	1.5	黄灰 2.5Y5/1	微砂：長、赤、赤		良好	
688	掘立柱建物39 P8	土師器	小皿	7.9	5.0	1.7	灰黄 2.5Y7/2	微砂：長、赤、赤、角		良好	
689	掘立柱建物39 P8	土師器	小皿	7.9	4.9	1.7	灰黄 2.5Y7/2	微砂：長、赤、赤、角		良好	
690	掘立柱建物39 P11	土師器	小皿	7.8	5.0	1.25	焼 5YR6/6	微砂：長、赤、角		良好	
691	掘立柱建物39 P8	土師器	小皿	—	4.9	(1.0)	にぶい黄粉 10YR6/3	細砂：長、赤、赤、角		良好	
692	掘立柱建物39 P15	土師器	小皿	—	6.1	(1.1)	焼 7.5YR6/6	細砂：長、赤、赤、角		良好	
693	掘立柱建物40 P16	勝間出焼	碗	—	7.8	(1.9)	にぶい黄粉 10YR7/3	微砂：長、赤		良好	
694	掘立柱建物40 P3	勝間田焼	碗	15.4	—	(5.5)	灰白 N7/	微砂：長、赤		良好	
695	掘立柱建物40 P2	勝間田焼	碗	—	6.2	(2.2)	浅黄粉 10YR8/3	微砂：長、赤、角		良好	
696	掘立柱建物40 P8	勝間田焼	小皿	7.7	3.9	2.0	灰 N5/	細砂：長、赤	完形	良好	
697	掘立柱建物40 P3	土師器	杯	8.0	7.0	1.7	にぶい黄粉 10YR6/3	微砂：長、赤		良好	
698	掘立柱建物40 P2	土師器	小皿	8.1	7.3	1.4	にぶい黄粉 10YR7/3	微砂：長、赤、赤	ほぼ完形	良好	
699	掘立柱建物40 P5	土師器	小皿	7.5	6.6	1.3	にぶい黄粉 10YR6/4	微砂：長、赤、赤	1/2 残	良好	
700	掘立柱建物40 P13	土師器	小皿	—	6.1	(1.5)	にぶい粉 7.5YR6/4	微砂：長、赤、赤		良好	
701	掘立柱建物40 P16	土師器	杯	—	—	(2.5)	灰白 N7/	微砂：長		良好	
702	掘立柱建物42 P12	土師器	杯	14.1	—	(2.9)	焼灰 7.5YR4/1	微砂：長、赤、赤		良好	
703	掘立柱建物42 P10	土師器	小皿	7.8	6.3	1.5	にぶい粉 7.5YR6/4	微砂：長、赤、赤	1/2 残	良好	
704	掘立柱建物42 P8	土師器	小皿	7.8	5.6	1.4	にぶい粉 7.5YR6/4	微砂：長、赤		良好	
705	掘立柱建物44 P6	土師器	小皿	8.9	4.2	2.0	にぶい黄粉 10YR7/3	微砂：長、赤、赤	完形	良好	
706	柱穴列18	土師器	小皿	—	4.8	(1.7)	にぶい粉 7.5YR6/4	微砂：長、赤、角		良好	
707	土壇墓	土師器	高台付杯	—	8.4	(2.3)	にぶい黄粉 10YR7/3	微砂：長、赤		良好	
708	土壇墓	土師器	小皿	8.3	5.0	1.3	にぶい黄粉 10YR7/3	微砂：長、赤、赤、角	1/3 残	良好	
709	土壇墓	土師器	小皿	7.9	7.1	1.5	にぶい黄粉 10YR7/3	微砂：長、赤、角	1/3 残	良好	
710	土壇墓	土師器	小皿	8.1	5.8	1.4	にぶい黄粉 10YR7/4	微砂：長、赤、赤	1/2 残	良好	
711	土壇墓	土師器	小皿	7.6	5.7	1.2	灰黄粉 10YR5/2	微砂：長、赤、赤		良好	
712	土壇墓	土師器	小皿	—	5.0	(1.9)	にぶい黄粉 10YR7/3	微砂：長、赤		良好	
713	土壇11	勝間田焼	碗	15.4	5.6	5.5	灰 N6/	微砂	ほぼ完形	良好	
714	土壇11	勝間田焼	碗	—	5.8	(4.7)	灰 N5/	微砂		良好	
715	土壇11	勝間田焼	碗	—	5.0	(1.4)	灰 N6/	微砂		良好	
716	土壇11	勝間田焼	碗	—	6.0	(1.6)	灰白 N7/	細砂		良好	
717	土壇11	勝間田焼	碗	13.8	—	(2.6)	灰白 2.5Y7/1	微砂		不良	
718	土壇11	勝間田焼	碗	14.8	—	(2.2)	黄灰 2.5Y6/1	細砂		良好	
719	土壇11	勝間田焼	碗	14.0	—	(3.7)	灰白 10YR8/2	微砂		不良	
720	土壇11	勝間田焼	碗	14.8	—	(2.2)	灰 N6/	微砂：赤		良好	
721	土壇11	勝間田焼	碗	15.4	—	(2.4)	灰白 2.5Y8/1	微砂：赤		良好	
722	土壇11	勝間田焼	碗	15.0	—	(2.9)	灰白 N7/	細砂		良好	
723	土壇11	土師器	杯	—	—	(2.4)	灰白 10YR8/2	細砂：長、赤、赤		良好	
724	土壇11	土師器	杯	—	6.4	(1.6)	灰白 2.5Y8/2	細砂：長、赤、赤		良好	
725	土壇11	土師器	杯	—	6.0	(1.6)	にぶい粉 7.5YR6/3	微砂：長、赤、赤		良好	
726	土壇11	土師器	杯	—	6.5	(0.9)	灰白 10YR7/1	微砂：長、赤、赤		良好	
727	土壇11	土師器	小皿	7.9	6.4	1.7	灰粉 7.5YR5/2	微砂：長、赤、赤	1/4 残	良好	
728	土壇11	土師器	小皿	8.1	6.1	1.2	にぶい粉 7.5YR7/4	微砂：長、赤、赤	ほぼ完形	良好	
729	土壇11	土師器	小皿	8.1	6.5	1.3	にぶい粉 7.5YR6/4	微砂：長、赤、赤	ほぼ完形	良好	
730	土壇11	土師器	小皿	8.3	7.2	1.3	にぶい黄粉 10YR5/3	微砂：長、赤、赤	1/2 残	良好	
731	土壇11	土師器	小皿	7.6	5.8	1.4	にぶい粉 7.5YR6/4	微砂：長、赤、赤		良好	
732	土壇11	土師器	小皿	—	5.2	(0.9)	にぶい黄粉 10YR7/2	微砂：長、赤、赤		良好	
733	土壇11	土師器	小皿	7.8	6.0	1.5	にぶい粉 7.5YR6/4	微砂：長、赤、赤	1/2 残	良好	
734	土壇11	土師器	小皿	—	—	(1.3)	灰黄粉 10YR6/2	微砂：長、赤、赤		良好	
735	土壇11	土師器	盃	—	—	(2.2)	にぶい黄粉 10YR7/2	微砂：長、赤、赤		良好	
736	土壇11	土師器	盃	—	—	(1.8)	黒粉 10YR3/1	細砂：長、赤、赤		良好	
737	土壇11	土師器	盃	38.0	—	(2.6)	粉 7.5YR4/4	微砂：長、赤、赤		良好	
738	土壇11	白磁	碗	17.0	—	(4.1)	灰白 10Y8/1	微砂		良好	施釉
739	溝6	肥前	皿	15.0	—	(2.5)	にぶい黄粉 10YR6/4	微砂：長		良好	施釉
740	溝7	勝間田焼	碗	16.0	—	(4.5)	灰白 N7/	微砂：長、赤、赤		良好	
741	溝7	勝間田焼	碗	15.6	—	(4.9)	灰白 5Y7/1	細砂：長、赤、赤		良好	
742	溝10	須恵器	壺	—	7.95	(1.4)	灰白 N7/	微砂：長		良好	
743	溝11	勝間田焼	碗	15.2	—	(4.4)	灰 N6/	細砂		良好	
744	溝11	勝間田焼	碗	—	6.0	(1.3)	灰白 N7/	微砂		良好	
745	溝11	勝間田焼	碗	—	6.0	(1.2)	灰 N5/	微砂		良好	
746	溝11	土師器	台付杯	—	—	(1.4)	黄灰 2.5Y5/1	細砂：長、赤、赤		良好	
747	溝11	土師器	小皿	7.8	6.4	0.9	にぶい黄粉 10YR7/3	微砂：長、赤、赤		良好	
748	溝11	土師器	小皿	7.6	5.4	1.3	にぶい粉 7.5YR7/4	微砂：長、赤、赤		良好	
749	F区 柱穴	勝間田焼	碗	16.0	—	(4.6)	灰 N5/	微砂：長、赤		良好	
750	F区 柱穴	土師器	小形杯	8.1	4.2	2.6	にぶい粉 7.5YR7/4	細砂：長、赤、角	ほぼ完形	良好	
751	F区 柱穴	土師器	小形杯	8.2	4.3	2.7	にぶい粉 7.5YR6/4	微砂：長、赤、赤	3/4 残	良好	
752	F区 柱穴	土師器	小皿	7.7	3.2	1.9	粉 7.5YR6/6	微砂：長、赤、角	3/4 残	良好	
753	F区 柱穴	土師器	小皿	8.0	4.8	1.9	にぶい黄粉 10YR7/4	微砂：長、赤	完形	良好	
754	F区 柱穴	土師器	小皿	7.7	3.6	2.0	にぶい粉 7.5YR7/4	微砂：長、赤、角		良好	
755	F区 柱穴	灰釉陶器	皿	11.2	—	(2.1)	にぶい粉 7.5YR7/4	微砂：長		良好	施釉
756	F区 柱穴	備前焼	搦鉢	—	—	(9.2)	粉灰 7.5YR5/1	細砂：長、赤		良好	凹線2条

掲載番号	遺構名	種別	器種	計測値 (cm)			色調		胎土	残存状況	焼成	形態・手法の特徴など	
				口径	底径	器高							
757	FⅩ 柱穴	天目	碗	—	4.0	(3.4)	灰白	2.5Y7/1	精製		良好	施釉	
758	FⅩ 柱穴	土師器	甕	14.3	—	(4.5)	椀	7.5YR7/6	微砂：長、英		良好	挿丹型甕 外面 煤付着	
759	FⅩ 区包含層	勝間田焼	碗	—	6.0	(2.9)	灰	7.5Y6/1	微砂：長、英		良好		
760	GⅩ 区包含層	土師器	皿	7.0	5.2	1.5	にぶい黄橙	10YR7/4	微砂：長、英		1/4 残	良好	
761	FⅩ 区包含層	土師器	小形杯	10.4	6.0	2.8	にぶい黄橙	10YR7/4	微砂：長、英		4/5 残	良好	
762	FⅩ 区包含層	土師器	小形杯	9.4	5.7	2.3	にぶい黄橙	10YR7/4	砂礫：長、英		1/4 残	良好	
763	GⅩ 区包含層	土師器	小形杯	9.0	6.1	2.4	にぶい黄橙	10YR6/3	細砂：長			良好	
764	GⅩ 区包含層	土師器	小形杯	7.6	6.1	1.8	にぶい黄橙	10YR6/4	微砂：長、英			良好	
765	FⅩ 区包含層	土師器	小形杯	7.2	5.1	2.6	椀	7.5YR6/6	微砂：長、英			良好	
766	GⅩ 区包含層	土師器	小形杯	8.0	3.4	2.1	にぶい黄橙	10YR6/3	微砂：長、英			良好	
767	GⅩ 区包含層	土師器	小形杯	8.0	3.5	2.1	にぶい黄橙	10YR6/4	微砂：長、英		ほぼ完形	良好	
768	GⅩ 区包含層	土師器	小皿	8.0	2.1	1.3	にぶい椀	7.5YR6/4	微砂：長、英、雲		良好	底部 挿頭圧痕	
769	FⅩ 区包含層	束掃系	捏針	26.0	—	(5.0)	灰	N5/	微砂：長、英		良好		
770	FⅩ 区包含層	束掃系	捏針	26.0	—	(5.5)	灰	7.5Y6/1	微砂：長、英		良好		
771	FⅩ 区包含層	瓦質土器	鍋	24.0	—	(4.2)	灰	7.5Y5/1	微砂：長、英		良好	外面 煤付着	
772	GⅩ 区包含層	瓦質土器	鍋	22.6	—	(6.1)	オリーブ黒	5Y3/1	微砂：長		良好	外面 煤付着	
773	FⅩ 区包含層	瓦質土器	釜	24.6	—	(3.5)	椀	5YR6/6	微砂：長、英		良好	外面 煤付着	
774	GⅩ 区包含層	瓦質土器	釜	17.0	—	(5.2)	灰	5Y5/1	微砂：長、英		良好	外面 煤付着	
775	FⅩ 区包含層	瓦質土器	釜	26.0	—	(4.5)	灰	N5/	微砂：長、英		良好	外面 煤付着	
776	GⅩ 区包含層	瓦質土器	釜	20.2	—	(4.1)	灰	7.5Y5/1	微砂：長、英		良好	外面 煤付着	
777	FⅩ 区包含層	瓦質土器	釜	26.0	—	(5.5)	灰	5Y4/1	微砂：長、英		良好	外面 煤付着	
778	GⅩ 区包含層	瓦質土器	釜	23.0	—	(3.1)	黒褐	10YR3/1	微砂		良好	外面 煤付着	
779	GⅩ 区包含層	土師器	甕	19.0	—	(6.5)	にぶい椀	7.5YR6/4	精良		良好	挿丹型甕 外面 煤付着	
780	FⅩ 区包含層	備前焼	搦針	—	—	(13.7)	灰	5Y5/1	細砂：長		良好		
781	GⅩ 区包含層	備前焼	搦針	—	—	(5.4)	黒褐	10YR3/2	細砂：長、英、雲		良好		
782	GⅩ 区包含層	青磁	皿	11.0	4.5	2.3	灰オリーブ	7.5Y6/2	堅緻		1/3 残	良好	施釉 同安樂系 見込み部 備描文
783	GⅩ 区包含層	天目	碗	—	—	(2.7)	にぶい黄橙	10YR7/2	微砂		良好	施釉	
784	FⅩ 区包含層	天目	碗	—	—	(3.4)	灰白	5Y7/1	微砂		良好	施釉	
785	EⅩ 区包含層	勝間田焼	碗	—	5.9	(2.0)	灰	7.5Y6/1	精良		良好		
786	EⅩ 区包含層	勝間田焼	碗	—	6.0	(1.7)	灰	N5/	精良		良好		
787	DⅩ 区包含層	勝間田焼	碗	—	5.4	(1.9)	灰白	N7/	精良		良好		
788	DⅩ 区包含層	勝間田焼	碗	—	6.0	(1.3)	灰	N6/	精良		良好		
789	DⅩ 区包含層	勝間田焼	小皿	10.0	5.4	2.1	灰白	10Y7/1	微砂：長		良好		
790	EⅩ 区包含層	須恵器	甕	21.0	—	(3.3)	灰	N4/	微砂：長		良好		
791	EⅩ 区包含層	須恵器	捏針	25.0	—	(4.2)	灰	N4/	精良		良好		
792	DⅩ 区包含層	束掃系	捏針	26.0	—	(2.9)	灰	N6/	精良		良好		
793	DⅩ 区包含層	瓦質土器	鍋	—	—	(2.2)	灰白	2.5Y7/1	微砂：長、英		良好		
794	EⅩ 区包含層	瓦質土器	釜	24.0	—	(5.6)	灰	N6/	精良		良好		
795	DⅩ 区包含層	瓦質土器	釜	—	—	(6.2)	黒	N2/	微砂：長		良好		
796	EⅩ 区包含層	備前焼	搦針	—	—	(5.4)	灰赤	2.5YR4/2	細砂：長、英		良好		
797	DⅩ 区包含層	白磁	碗	17.0	—	(2.6)	灰白	7.5Y7/1	精良		堅緻	施釉	
798	FⅩ 区包含層	白磁	碗	16.8	—	(2.1)	灰白	5Y8/1	精良		堅緻	施釉	
799	EⅩ 区包含層	白磁	碗	16.0	—	(5.5)	灰白	7.5Y7/1	精良		堅緻	施釉	
800	EⅩ 区包含層	白磁	碗	—	6.4	(2.8)	灰白	5Y7/1	精良		堅緻	施釉	
801	DⅩ 区包含層	白磁	皿	12.8	—	(2.1)	灰白	10Y8/1	精良		堅緻	施釉	
802	BⅩ 区包含層	勝間田焼	碗	—	6.0	(1.9)	灰白	N7/	微砂：長		良好	墨書	
803	AⅩ 区包含層	勝間田焼	碗	—	6.2	(1.8)	灰	N6/	精良				
804	BⅩ 区包含層	勝間田焼	碗	—	6.2	(1.3)	灰	N5/	微砂：長、英		良好		
805	AⅩ 区包含層	勝間田焼	碗	—	5.4	(1.1)	灰	7.5Y6/1	精良		良好		
806	AⅩ 区包含層	勝間田焼	碗	—	6.0	(1.3)	灰	5Y6/1	精良		良好		
807	AⅩ 区包含層	勝間田焼	碗	—	5.0	(1.7)	灰	5Y6/1	微砂：長		良好		
808	BⅩ 区包含層	勝間田焼	碗	—	5.0	(1.8)	灰白	N7/	精良		良好		
809	BⅩ 区包含層	勝間田焼	小形碗	—	3.6	(1.8)	灰	10Y5/1	精良				
810	CⅩ 区包含層	土師器	小形杯	9.3	5.5	2.4	明赤褐	5YR5/6	砂礫：長、英、雲		1/3 残	良好	
811	BⅩ 区包含層	土師器	甕	27.0	—	(4.4)	灰	5Y4/1	微砂：長		良好	挿丹型甕	
812	BⅩ 区包含層	瓦質土器	鍋	22.0	—	(2.1)	黒	10YR2/1	微砂：長、英		良好		
813	BⅩ 区包含層	瓦質土器	釜	26.0	—	(3.9)	黒	7.5Y2/1	微砂：長		良好		
814	BⅩ 区包含層	備前焼	甕	—	—	(4.5)	黄灰	2.5Y6/1	細砂：長、英		良好		
815	BⅩ 区包含層	備前焼	搦針	—	—	(4.5)	灰	7.5Y6/1	微砂：長		良好		
816	BⅩ 区包含層	備前焼	搦針	—	—	(6.3)	濁灰	10YR6/1	微砂：長、英		良好		
817	BⅩ 区包含層	備前焼	搦針	—	—	(7.3)	灰褐	7.5YR6/2	砂礫：長、英		良好		
818	BⅩ 区包含層	備前焼	搦針	28.0	—	(6.2)	灰	N6/	砂礫：長		良好		
819	BⅩ 区包含層	白磁	碗	14.0	—	(3.3)	灰白	5Y8/1	堅緻		良好	施釉	
820	BⅩ 区包含層	青磁	碗	—	—	(2.3)	灰オリーブ	7.5Y5/2	堅緻		良好	施釉 龍泉窯系	
821	CⅩ 区包含層	青磁	碗	—	6.1	(1.8)	灰オリーブ	7.5Y6/2	堅緻		良好	施釉 龍泉窯系	
822	S4区包含層	勝間田焼	碗	15.0	5.9	4.9	灰白	N7/	微砂：長		良好		
823	S1区包含層	勝間田焼	碗	14.9	—	(4.2)	灰黄	2.5Y7/2	微砂：長		良好		
824	S3区包含層	勝間田焼	碗	14.0	—	(4.7)	灰白	N7/	微砂		良好		
825	S3区包含層	勝間田焼	碗	14.8	—	(4.1)	灰黄	2.5Y7/2	微砂：長		良好		
826	S3区包含層	勝間田焼	碗	15.2	—	(2.2)	灰	N6/	微砂：長		良好		
827	S3区包含層	勝間田焼	碗	15.0	—	(3.2)	灰白	N7/	微砂		良好		
828	S3区包含層	勝間田焼	碗	15.8	—	(3.3)	灰	N5/	微砂：長		良好		
829	N1区包含層	勝間田焼	碗	13.8	—	(2.6)	灰白	N7/	微砂：長		良好		
830	S3区包含層	勝間田焼	碗	16.0	—	(4.0)	灰	N5/	微砂		良好		
831	S3区包含層	勝間田焼	碗	13.8	—	(3.8)	灰	N5/	微砂		良好		

掲載番号	遺構名	種別	器種	計測値 (cm)			色調		胎土	残存状況	焼成	形態・手法の特徴など
				口径	底径	器高						
832	S 3区包含層	勝間田焼	碗	14.9	—	(2.6)	灰	N5/	精良		良好	
833	S 4区包含層	勝間田焼	碗	14.8	—	(3.2)	灰	N6/	精良：長		良好	
834	S 4区包含層	勝間田焼	碗	—	—	(3.2)	にぶい黄橙	10YR7/2	微砂：長、英		良好	
835	S 4区包含層	勝間田焼	碗	13.6	—	(1.9)	灰白	N7/	精良：長		良好	
836	S 3区包含層	勝間田焼	碗	—	5.1	(2.3)	灰白	2.5Y7/1	細砂：長、英		良好	
837	S 3区包含層	勝間田焼	碗	—	5.8	(2.3)	灰白	N7/	精良：長		良好	
838	S 2区包含層	勝間田焼	碗	—	5.7	(2.2)	灰白	5Y7/1	砂礫：長、雲		良好	
839	S 3区包含層	勝間田焼	碗	—	6.2	(4.3)	灰白	2.5Y7/1	微砂：長、雲		良好	
840	S 4区包含層	勝間田焼	碗	—	5.8	(1.8)	灰白	N7/	精良		良好	
841	S 3区包含層	勝間田焼	碗	—	4.7	(1.2)	灰	N5/	砂礫：長、英		良好	
842	S 2区包含層	勝間田焼	碗	—	6.0	(1.7)	灰白	N7/	砂礫：長、英、雲		良好	
843	S 3区包含層	勝間田焼	碗	—	5.5	(1.2)	灰	N6/	微砂：長、英		良好	
844	S 4区包含層	勝間田焼	碗	—	5.7	(1.8)	灰白	N7/	精良：長		良好	
845	N 1区包含層	勝間田焼	碗	—	5.3	(1.4)	灰白	N7/	精良：長		良好	
846	N 3区包含層	勝間田焼	碗	—	—	(1.8)	青灰	5B6/1	精良：長		良好	
847	S 4区包含層	勝間田焼	碗	—	4.6	(1.7)	灰	N6/	微砂：長		良好	
848	S 3区包含層	勝間田焼	碗	—	6.6	(1.7)	灰	N6/	微砂：雲		良好	
849	S 3区包含層	勝間田焼	小形碗	—	1.8	(0.9)	灰	N6/	細砂：長、英		良好	
850	S 3区包含層	勝間田焼	小皿	7.9	6.3	1.2	灰	N5/	細砂：長、英		良好	
851	S 4区包含層	土師器	杯	—	7.0	(2.0)	褐色	10YR4/1	微砂：長、角			
852	S 3区包含層	土師器	杯	—	—	(3.3)	にぶい橙	7.5YR6/4	精良：長、雲、角		良好	
853	S 2区包含層	土師器	杯	—	—	(3.9)	橙	5YR6/8	細砂：長、英		良好	
854	S 3区包含層	土師器	杯	14.0	—	(3.4)	にぶい橙	7.5YR7/3	砂礫：長、英		不良	
855	S 3区包含層	土師器	杯	16.0	—	(1.6)	にぶい橙	7.5YR6/4	微砂：長、英		良好	
856	S 3区包含層	土師器	小皿	8.2	7.0	1.3	灰黄	2.5Y7/2	砂礫：長、英	3/4 残	良好	
857	S 3区包含層	土師器	小皿	7.8	5.5	1.5	にぶい橙	7.5YR7/4	細砂：長、英		良好	
858	S 4区包含層	土師器	小皿	7.4	5.4	1.5	にぶい橙	7.5YR7/4	精良：長、雲		良好	
859	S 3区包含層	土師器	小皿	7.8	6.7	1.2	黄灰	2.5Y5/1	微砂：長、英、雲		良好	
860	S 3区包含層	土師器	小皿	—	—	(2.2)	灰黄	2.5Y7/2	精良：長、英、雲		良好	
861	N 3区包含層	束掃系	捏鉢	—	—	(3.6)	黄灰	2.5Y6/1	微砂：長、英		良好	
862	S 5区包含層	束掃系	捏鉢	32.4	—	(4.7)	灰白	7.5Y7/1	精良		良好	
863	N 2区包含層	束掃系	捏鉢	32.0	—	(2.3)	浅黄	2.5Y7/3	精良：長、英、雲		良好	
864	N 1区包含層	束掃系	捏鉢	23.0	—	(3.9)	橙	5YR6/6	微砂：長		良好	
865	S 3区包含層	土師器	甕	19.0	—	(3.3)	にぶい橙	7.5YR6/4	微砂：長、英		良好	播丹型甕
866	S 3区包含層	土師器	鍋	34.0	—	(6.6)	黒褐	7.5YR3/1	細砂：長、英		良好	
867	S 4区包含層	瓦質土器	鉢	—	—	(4.2)	灰白	5Y7/1	微砂：長、英		良好	
868	S 4区包含層	瓦質土器	鍋	—	—	(3.3)	にぶい黄褐	10YR5/4	微砂：長、英		良好	
869	S 3区包含層	瓦質土器	鍋	—	—	(3.3)	灰白	2.5Y7/1	細砂：長、英		良好	
870	S 3区包含層	瓦質土器	釜	28.2	—	(4.5)	灰白	2.5Y7/1	微砂：長、英		良好	
871	S 4区包含層	瓦質土器	釜	—	—	(6.0)	灰黄	2.5Y6/2	微砂：雲		良好	
872	S 4区包含層	勝間田焼	甕	28.0	—	(27.1)	灰	N6/	砂礫：長		良好	
873	S 3区包含層	勝間田焼	甕	27.9	—	(12.9)	灰	N6/	砂礫：長、英		良好	
874	S 3区包含層	勝間田焼	鉢	32.2	—	(4.7)	灰白	N7/	精良：長		良好	
875	S 3区包含層	勝間田焼	鉢	—	16.0	(4.7)	灰白	N7/	微砂：長、英、雲		良好	
876	S 3区包含層	備前焼	甕	—	—	(3.1)	灰白	2.5Y7/1	細砂：長、英、雲		良好	
877	N 1区包含層	備前焼	拵鉢	—	—	(5.7)	灰	N5/	細砂：長、英		良好	
878	S 3区包含層	備前焼	拵鉢	—	—	(6.2)	灰赤	2.5YR4/2	細砂：長、英、雲		良好	
879	S 2区包含層	備前焼	拵鉢	—	—	(4.6)	黄灰	2.5Y6/1	精良：長		良好	
880	S 5区包含層	青磁	碗	—	—	(2.9)	灰オリーブ	7.5Y5/2	精良		堅緻	龍泉窯系
881	N 1区包含層	青磁	碗	15.9	—	(3.1)	灰白	N7/	精良		堅緻	龍泉窯系
882	S 3区包含層	白磁	碗	17.2	—	(2.9)	灰白	5Y7/1	精良		堅緻	施釉
883	S 4区包含層	白磁	碗	17.0	—	(1.9)	浅黄	2.5Y7/3	精良		堅緻	施釉
884	S 4区包含層	白磁	碗	16.0	—	(1.5)	灰黄	2.5Y7/2	精良		堅緻	施釉
885	S 1区包含層	白磁	碗	14.6	—	(2.6)	灰白	5Y8/1	精良		堅緻	施釉
886	S 4区包含層	白磁	碗	17.0	—	(2.4)	灰白	10Y7/1	精良		堅緻	施釉
887	S 3区包含層	白磁	碗	—	7.2	(2.0)	灰白	N8/	精良		堅緻	施釉
888	S 3区包含層	白磁	小皿	10.3	3.9	1.7	灰白	5Y7/2	精良		堅緻	施釉
889	S 3区包含層	白磁	小皿	10.4	—	(2.4)	灰白	7.5Y7/1	精良		堅緻	施釉
890	S 4区包含層	白磁	小皿	10.4	—	(1.5)	灰黄	2.5Y7/2	精良		堅緻	施釉
891	S 4区包含層	白磁	小皿	9.8	—	(1.3)	灰白	7.5Y7/1	精良		堅緻	施釉
892	S 5区包含層	犬口	碗	—	—	(1.3)	黒	N2/	精良		堅緻	施釉

### 中町B遺跡

掲載番号	遺構名	種別	器種	計測値 (cm)			色調		胎土	残存状況	焼成	形態・手法の特徴など
				口径	底径	器高						
1	竪穴住居 1	弥生	付付長頸壺	—	9.2	(26.4)	橙	2.5YR6/6	微砂：長、英、雲	1/3 残	良好	へら描洗線・綫彩文・刺突文・洗線・門孔
2	竪穴住居 1	弥生	壺	—	—	(3.5)	灰白	2.5Y8/2	細砂：長、英、雲、赤、黒		良好	
3	竪穴住居 1	弥生	壺	11.9	6.8	23.1	にぶい黄橙	10YR7/3	砂礫：長、英、赤	5/6 残	良好	口縁部 掘凹線 2 条
4	竪穴住居 1	弥生	壺	13.2	—	(21.0)	にぶい橙	7.5YR7/4	砂礫：長、英、赤		良好	口縁部 凹線 3 条 斜孔子文
5	竪穴住居 1	弥生	壺	11	—	(12.9)	にぶい橙	7.5YR6/4	砂礫：長、英		良好	外面 煤付着
6	竪穴住居 1	弥生	壺	10.7	4.8	21.8	にぶい黄橙	10YR7/3	細砂：長、英、赤	ほぼ完形	良好	外面 煤付着
7	竪穴住居 1	弥生	壺	11.2	4	22.8	浅黄粉	10YR8/3	砂礫：長、英、雲、赤	1/5 残	良好	内面 黒斑
8	竪穴住居 1	弥生	壺	14.4	7.5	20.9	橙	5YR6/8	砂礫：長、英		良好	頸部 粘土接合痕明瞭



掲載番号	遺構名	種別	器種	計測値 (cm)			色調		胎土	残存状況	焼成	形態・手法の特徴など
				口径	底径	器高						
9	竪穴住居 1	弥生	壺	16.9	9.2	42.2	にぶい粉	7.5YR7/4	細砂：長、英、赤	4/5 残	良好	外面 煤付着
10	竪穴住居 1	弥生	壺	15.3	8.2	37.8	にぶい橙	7.5YR7/4	細砂：長、英、雲、赤	ほぼ元形	良好	口縁部 擬凹線 4 条
11	竪穴住居 1	弥生	壺	14.1	6.1	26.5	にぶい黄橙	10YR7/4	細砂：長、英、雲	ほぼ元形	良好	口縁部 凹形浮文 波状文
12	竪穴住居 1	弥生	甕	13.2	—	(7.3)	にぶい褐	7.5YR5/4	細砂：長、英		良好	口縁部 擬凹線 2 条
13	竪穴住居 1	弥生	甕	12.8	—	(10.4)	にぶい橙	7.5YR6/4	微砂：長、英		良好	
14	竪穴住居 1	弥生	甕	12.5	—	(11.0)	粉	5YR6/6	微砂：長、英、赤		良好	外面 煤付着
15	竪穴住居 1	弥生	甕	13.6	—	(17.1)	橙	7.5YR6/6	細砂：長、英、赤		良好	口縁部 擬凹線 3 条 外面 煤付着
16	竪穴住居 1	弥生	甕	11.8	5.4	24.9	浅黄橙	10YR8/3	細砂：長、英、雲、赤		良好	口縁部 擬凹線 2 条
17	竪穴住居 1	弥生	甕	17.2	—	(18.3)	にぶい黄橙	10YR6/3	細砂：長、英、赤		良好	口縁部 擬凹線 2 条
18	竪穴住居 1	弥生	甕	12.7	5.6	25.0	にぶい黄橙	10YR7/3	細砂：長、英、赤	3/4 残	良好	口縁部 擬凹線 3 条 外面 煤付着
19	竪穴住居 1	弥生	甕	12.8	6.1	(24.0)	にぶい橙	7.5YR6/4	細砂：長、英、雲、赤、黒		良好	口縁部 洗線 3 条・赤色顔料付着 外面 煤付着
20	竪穴住居 1	弥生	甕	14.9	5.7	27.4	橙	7.5YR6/6	細砂：長、英	ほぼ元形	良好	口縁部 擬凹線 2 条 外面 煤付着
21	竪穴住居 1	弥生	甕	14.8	5	22.0	にぶい黄橙	10YR7/3	細砂：長、英、赤	ほぼ元形	良好	口縁部 擬凹線 3 条 外面 煤付着
22	竪穴住居 1	弥生	甕	10.7	4.6	13.6	灰黄	2.5Y6/2	細砂：長、英、雲、赤	5/6 残	良好	
23	竪穴住居 1	弥生	甕	—	(5.4)	(4.0)	灰オリーブ	5Y6/2	精良		良好	外面 釉
24	竪穴住居 1	弥生	甕	10.3	4.4	18.2	にぶい橙	7.5YR7/4	細砂：長、英、雲、赤	ほぼ元形	良好	外面 煤付着
25	竪穴住居 1	弥生	甕	11.3	4.6	17.9	灰褐	7.5YR6/2	細砂：長、英、赤	3/4 残	良好	
26	竪穴住居 1	弥生	甕	14.9	5.6	27.4	にぶい褐	7.5YR5/4	細砂：長、英、雲、赤、黒	1/6 残	良好	
27	竪穴住居 1	弥生	甕	21.6	8	28.1	にぶい橙	7.5YR6/4	細砂：長、英、赤	1/3 残	良好	外面 煤付着
28	竪穴住居 1	弥生	甕	—	—	(3.2)	にぶい黄橙	10YR6/3	細砂：長、英、赤		良好	
29	竪穴住居 1	弥生	高杯	—	—	(3.2)	にぶい黄橙	10YR6/3	細砂：長、英、赤		良好	洗線 凹孔
30	竪穴住居 1	弥生	鉢	10.6	2.8	6.4	浅黄	2.5Y7/3	細砂：長、英、赤		良好	
31	竪穴住居 1	弥生	鉢	—	—	(3.2)	黄灰	2.5YR6/2	細砂：長、英、赤		良好	
32	土壌 1	弥生	壺	—	—	(4.9)	にぶい橙	5YR6/4	微砂：長、英、雲、赤		良好	
33	土壌 1	弥生	壺	—	—	(2.6)	オリーブ黒	5Y3/1	微砂：長、英、赤		良好	
34	たわみ 1	縄文	深鉢	—	—	(2.2)	橙	7.5YR6/6	細砂：長、英、赤		良好	
35	たわみ 1	縄文	深鉢	—	—	(5.9)	灰黄褐	10YR5/2	細砂：長、英		良好	磨消縄文
36	たわみ 1	弥生	壺	—	—	(2.8)	灰黄褐	10YR5/2	細砂：長、英、角、赤		良好	
37	散布地	縄文	深鉢	—	—	(1.8)	灰黄褐	10YR6/2	微砂：長、赤		不良	洗線
38	散布地	縄文	深鉢	—	—	(3.2)	にぶい褐	7.5YR5/4	細砂：長、英		不良	洗線
39	散布地	縄文	深鉢	—	—	(2.6)	橙	5YR6/6	微砂：長、英、黒		不良	洗線 内面 炭化物付着
40	散布地	縄文	深鉢	—	—	(2.4)	にぶい黄橙	10YR7/4	微砂：長、英、赤		不良	洗線
41	散布地	縄文	深鉢	—	—	(1.5)	浅黄	2.5Y7/3	微砂：長、英、赤		良好	洗線
42	散布地	縄文	深鉢	—	—	(3.8)	黒褐	2.5Y3/2	細砂：長、英		不良	洗線
43	散布地	縄文	深鉢	—	—	(2.2)	黒褐	10YR3/1	細砂：長、英		良好	洗線
44	散布地	縄文	深鉢	—	—	(2.9)	にぶい黄橙	10YR6/4	細砂：長、英、角、赤		良好	洗線
45	散布地	縄文	深鉢	—	—	(1.9)	灰白	10YR7/1	微砂：長、英、赤		良好	洗線
46	散布地	縄文	深鉢	—	—	(4.8)	橙	7.5YR6/6	微砂：長、英、雲、黒		良好	洗線
47	散布地	縄文	深鉢	—	—	(6.1)	褐灰	10YR4/1	微砂：長、英		不良	波状口縁 洗線・縄文 (R.L)
48	散布地	縄文	深鉢	—	—	(2.3)	橙	5YR6/6	微砂：長、英、赤		不良	洗線・縄文 (R.L)
49	散布地	縄文	深鉢	—	—	(4.1)	にぶい黄橙	10YR7/3	細砂：長、英、赤		不良	洗線
50	散布地	縄文	深鉢	—	—	(2.7)	にぶい黄粉	10YR7/4	微砂：長、英、角		不良	波状口縁 洗線・縄文 (R.L)
51	散布地	縄文	深鉢	—	—	(4.3)	褐	7.5YR4/3	細砂：長、英		良好	洗線・縄文 (R.L)
52	散布地	縄文	深鉢	—	—	(2.9)	にぶい褐	7.5YR5/4	細砂：長、英、角、赤		良好	洗線・縄文 (R.L)
53	散布地	縄文	深鉢	—	—	(3.4)	灰黄褐	10YR5/2	細砂：長、英		不良	洗線・縄文 (R.L)
54	散布地	縄文	深鉢	—	—	(4.2)	橙	5YR7/6	細砂：長、英、赤		不良	洗線・縄文 (R.L)
55	散布地	縄文	深鉢	—	—	(3.1)	粉	5YR7/6	微砂：長、英、赤		不良	洗線・縄文 (R.L)
56	散布地	縄文	深鉢	—	—	(3.7)	灰黄褐	10YR6/2	微砂：長、英		不良	洗線・縄文 (R.L)
57	散布地	縄文	深鉢	—	—	(5.3)	灰黄褐	10YR6/2	細砂：長、英、雲		不良	洗線・縄文 (R.L)
58	散布地	縄文	深鉢	—	—	(4.1)	灰黄褐	10YR4/2	細砂：長、英、赤		良好	洗線・縄文 (R.L)
59	散布地	縄文	深鉢	—	—	(3.4)	にぶい褐	7.5YR5/4	微砂：長、英、雲、赤		不良	洗線・縄文 (R.L)
60	散布地	縄文	深鉢	—	—	(3.6)	にぶい褐	7.5YR5/4	微砂：長、英、赤		不良	洗線・縄文 (R.L)
61	散布地	縄文	深鉢	—	—	(2.5)	にぶい褐	7.5YR5/4	微砂：長、英、赤		良好	洗線
62	散布地	縄文	深鉢	—	—	(1.6)	黄橙	10YR6/3	微砂：長、英、赤		良好	洗線・縄文
63	散布地	縄文	深鉢	—	—	(4.9)	灰黄褐	10YR5/2	微砂：長、英		不良	洗線・縄文
64	散布地	縄文	深鉢	—	—	(1.5)	灰黄褐	10YR5/2	微砂：長		良好	洗線・縄文
65	散布地	縄文	深鉢	—	—	(3.4)	灰黄褐	10YR6/2	細砂：長、英		不良	刺突文・洗線
66	散布地	縄文	深鉢	—	—	(3.7)	にぶい黄橙	10YR6/3	微砂：長、英、赤		不良	洗線
67	散布地	縄文	深鉢	—	—	(6.7)	にぶい黄橙	10YR6/3	微砂：長、英		不良	洗線
68	散布地	縄文	深鉢	—	—	(4.2)	灰黄褐	10YR5/2	微砂：長、英		良好	洗線・縄文 (L.R)
69	散布地	縄文	深鉢	—	—	(3.5)	にぶい橙	7.5YR6/4	細砂：長、英		不良	条痕
70	散布地	縄文	深鉢	—	—	(3.6)	にぶい黄橙	10YR6/4	細砂：長、英		良好	条痕
71	散布地	縄文	深鉢	—	—	(5.9)	灰黄褐	10YR6/2	細砂：長、英、赤		良好	
72	散布地	縄文	深鉢	—	—	(3.3)	明褐	7.5YR5/6	細砂：長、英、雲		良好	
73	散布地	縄文	深鉢	—	8.5	(3.1)	にぶい橙	7.5YR6/4	細砂：長、英		良好	
74	散布地	縄文	深鉢	—	9.8	(1.9)	灰黄褐	10YR6/2	細砂：長、英		良好	
75	散布地	縄文	深鉢	—	—	(2.2)	灰白	10YR7/1	細砂：長、英、赤		良好	
76	遺構に伴わない遺物	縄文	深鉢	—	—	(3.8)	灰黄褐	10YR4/2	細砂：長、英、雲		不良	爪形文
77	遺構に伴わない遺物	縄文	深鉢	—	—	(4.3)	明赤褐	5YR5/6	細砂：長、英、赤		不良	洗線・条痕
78	遺構に伴わない遺物	弥生	壺	—	—	(3.8)	にぶい黄橙	10YR7/2	微砂：長、英、赤		不良	貼付突帯

掲載番号	遺構名	種別	器種	計測値 (cm)			色調		胎土	残存状況	焼成	形態・手法の特徴など
				口径	底径	器高						
79	遺構に伴わない遺物	弥生	甕	—	—	(2.8)	粉	5YR6/6	細砂：長、英、赤		良好	
80	遺構に伴わない遺物	弥生	甕	—	—	(4.3)	にぶい黄橙	10YR7/4	砂礫：長、英、赤		良好	
81	遺構に伴わない遺物	弥生	甕	—	—	(4.2)	にぶい橙	5YR7/4	砂礫：長、英、赤		良好	
82	遺構に伴わない遺物	弥生	壺	14.4	—	(10.2)	浅黄橙	10YR8/3	砂礫：長、英、赤		不良	口縁部 凹線
83	遺構に伴わない遺物	弥生	壺	16.9	—	(5.6)	にぶい黄橙	10YR7/3	砂礫：長、英、赤		良好	口縁部 凹線
84	遺構に伴わない遺物	弥生	甕	—	—	(4.3)	粉	5YR6/6	砂礫：長、英、赤		不良	
85	遺構に伴わない遺物	弥生	甕	16.5	—	(5.9)	にぶい黄橙	10YR7/4	砂礫：長、英、赤		良好	
86	遺構に伴わない遺物	弥生	甕	—	—	(4.6)	橙	7.5YR7/6	細砂：長、英、雲、赤		良好	
87	遺構に伴わない遺物	弥生	鼓形器台	14	—	(5.5)	にぶい橙	7.5YR6/4	精良：長、英、黒		良好	
88	遺構に伴わない遺物	弥生	高杯	—	—	(3.4)	明褐	7.5YR5/6	細砂：長、英		不良	端部 凹線2条
89	遺構に伴わない遺物	弥生	甕	—	7.8	(4.0)	浅黄粉	10YR8/4	細砂：長、英、赤		不良	
90	遺構に伴わない遺物	弥生	甕	—	9.9	(5.3)	粉	7.5YR6/6	砂礫：長、英、赤		良好	
91	遺構に伴わない遺物	弥生	甕	—	7.9	(4.4)	浅黄橙	10YR8/3	細砂：長、英		不良	
92	遺構に伴わない遺物	弥生	甕	—	6.2	(4.9)	にぶい黄橙	10YR7/2	微砂：長、英、赤		不良	
93	遺構に伴わない遺物	弥生	甕	—	8.8	(3.9)	灰黄	2.5Y7/2	微砂：長、英、雲、赤		良好	
94	遺構に伴わない遺物	弥生	甕	—	7.6	(4.4)	灰黄	2.5Y7/2	細砂：長、英		良好	
95	遺構に伴わない遺物	弥生	甕	—	3.8	(3.2)	灰白	10YR8/2	砂礫：長、英、赤		良好	
96	遺構に伴わない遺物	弥生	甕	—	3.5	(2.6)	黒褐	2.5Y3/1	砂礫：長、英、赤		良好	
97	遺構に伴わない遺物	須恵器	杯蓋	13.4	—	(2.9)	灰	N6/	精良：長		良好	
98	遺構に伴わない遺物	須恵器	杯蓋	—	—	(1.3)	灰	10Y6/1	精良：長		良好	
99	遺構に伴わない遺物	須恵器	杯蓋	—	—	(1.9)	灰	10Y6/1	精良		良好	
100	遺構に伴わない遺物	須恵器	杯身	—	8	(1.6)	灰白	N7/	細砂：長、英		良好	
101	遺構に伴わない遺物	須恵器	杯身	—	—	(1.7)	灰白	5Y7/1	精良		良好	
102	遺構に伴わない遺物	須恵器	杯身	—	—	(1.6)	灰	N5/	精良		良好	
103	遺構に伴わない遺物	須恵器	高杯	—	—	(4.5)	青灰	5PB6/1	精良		良好	
104	遺構に伴わない遺物	須恵器	高杯	—	—	(1.8)	灰	7.5Y6/1	精良		良好	透かし
105	遺構に伴わない遺物	須恵器	高杯	—	—	(3.9)	灰	10Y6/1	精良		良好	
106	遺構に伴わない遺物	須恵器	高杯	—	—	(2.5)	灰	N6/	細砂：長		良好	
107	遺構に伴わない遺物	須恵器	高杯	—	—	(4.4)	灰白	N7/	精良		良好	
108	遺構に伴わない遺物	須恵器	短頸壺	7.4	—	(4.3)	灰白	N7/	精良		良好	
109	遺構に伴わない遺物	須恵器	横瓶	—	—	(4.1)	灰	N6/	精良		良好	
110	側溝2	須恵器	横瓶	8.3	—	20.1	灰白	N7/	微砂：長、赤、黒		良好	
111	側溝3	須恵器	高杯	—	—	(3.3)	灰白	2.5Y7/1	砂礫：長		良好	沈線1条
112	側溝3	土師器	皿	—	9.6	(1.7)	浅黄橙	10YR8/4	砂礫：長		良好	
113	側溝3	須恵器	杯身	—	—	(2.7)	にぶい黄橙	10YR7/2	精良		良好	
114	遺構に伴わない遺物	須恵器	杯蓋	—	—	(1.3)	灰白	N7/	精良		良好	
115	遺構に伴わない遺物	須恵器	杯蓋	—	—	(1.4)	灰白	N7/	精良		良好	
116	遺構に伴わない遺物	須恵器	杯蓋	—	—	(1.6)	灰	N5/	精良		良好	
117	遺構に伴わない遺物	須恵器	杯蓋	—	—	(1.2)	灰白	N7/	精良		良好	
118	遺構に伴わない遺物	須恵器	杯蓋	—	—	(1.4)	灰	N6/	精良		良好	
119	遺構に伴わない遺物	須恵器	杯身	—	—	(3.8)	灰	N5/	精良		良好	
120	遺構に伴わない遺物	須恵器	杯身	—	—	(3.6)	灰	N5/	精良		良好	
121	遺構に伴わない遺物	須恵器	杯身	—	10.6	(1.4)	灰	N6/	精良		良好	
122	遺構に伴わない遺物	須恵器	杯身	—	11.7	(1.7)	灰白	N7/	精良		良好	
123	遺構に伴わない遺物	須恵器	杯身	—	11.2	(1.8)	灰	N6/	精良		良好	
124	遺構に伴わない遺物	須恵器	杯身	—	11.2	(1.5)	灰	N6/	精良		良好	
125	遺構に伴わない遺物	須恵器	杯身	—	10.8	(1.5)	灰白	N7/	精良		良好	
126	遺構に伴わない遺物	須恵器	杯身	—	9.4	(3.3)	灰	N4/	精良		良好	
127	遺構に伴わない遺物	須恵器	杯身	—	9.5	(4.0)	灰	N6/	精良		良好	
128	掘立柱建物 P 7	土師器	碗	—	9	(1.0)	にぶい黄橙	10YR7/3	微砂：長、英、赤		良好	
129	掘立柱建物 P 2	勝間田焼	碗	—	—	(3.0)	灰	N6/	微砂：長、英		良好	
130	掘立柱建物 P 2	瓦質土器	釜	—	—	(7.5)	褐灰	10YR4/1	砂礫：長、英、赤		良好	
131	掘立柱建物 P 11	瓦質土器	鍋	—	10.2	(13.0)	灰白	5Y8/1	砂礫：長、赤		良好	
132	土壌2	勝間田焼	小皿	7.6	4.4	1.5	灰	N6/1	精良		摩蝕	
133	土壌4	土師器	小皿	9.6	5.2	1.8	にぶい橙	7.5YR7/4	砂礫：長、英、赤		良好	
134	土壌4	土師器	小皿	8.0	4.7	(1.0)	にぶい黄橙	10YR7/3	微砂：長、英、雲		良好	
135	土壌4	土師器	小皿	8.5	4.1	1.6	にぶい黄橙	10YR7/4	微砂：長、英、赤、黒	1/3 残	良好	
136	土壌4	土師器	小皿	8.6	3.0	1.7	にぶい橙	7.5YR6/4	微砂：長、英、赤	2/3 残	良好	
137	土壌4	勝間田焼	碗	—	—	(3.8)	灰	7.5Y5/1	精良		良好	
138	土壌4	東播系	鉢	29.2	—	(7.7)	灰	N6/	精良		良好	
139	土壌4	土師器	甕	22.5	—	(5.3)	にぶい黄褐	10YR4/3	細砂：長、英、雲		良好	
140	土壌4	土師器	鍋	36.6	—	(10.2)	にぶい黄褐	10YR5/3	細砂：英、雲、赤		良好	
141	土壌4	土師器	鍋	37.4	—	(7.2)	灰黄褐	10YR5/2	砂礫：長、英、赤		良好	
142	土壌4	土師器	鍋	35.4	—	(7.3)	にぶい黄橙	10YR7/4	微砂：長、英、赤		良好	口縁部 凹線2条
143	土壌5	土師器	小皿	8.2	5.6	2.1	にぶい橙	7.5YR7/4	精良		良好	ほぼ完形
144	土壌5	土師器	小皿	8.6	6.0	2.0	浅黄橙	10YR8/4	精良：長、英、赤、黒		良好	ほぼ完形
145	土壌5	土師器	小皿	8.6	6.1	1.8	浅黄橙	10YR8/3	微砂：長、英、赤、黒		良好	ほぼ完形
146	土壌5	土師器	小皿	8.8	6.6	1.8	にぶい黄粉	10YR7/3	精良		良好	完形
147	土壌5	土師器	小皿	—	3.6	(1.6)	褐	7.5YR4/3	微砂：長、英、雲		良好	柱状高台
148	遺構に伴わない遺物	勝間田焼	碗	—	—	(4.1)	灰白	N7/	精良		良好	
149	遺構に伴わない遺物	勝間田焼	碗	—	—	(4.1)	灰	N6/	精良		良好	
150	遺構に伴わない遺物	勝間田焼	碗	—	—	(3.9)	灰白	7.5Y7/1	精良		良好	
151	遺構に伴わない遺物	勝間田焼	碗	—	—	(3.7)	灰	N6/	精良		良好	
152	遺構に伴わない遺物	勝間田焼	碗	—	—	(3.5)	灰白	7.5Y7/1	精良		良好	

掲載番号	遺構名	種別	器種	計測値 (cm)			色調	胎土	残存状況	焼成	形態・手法の特徴など
				口径	底径	器高					
153	遺構に伴わない遺物	勝岡田焼	碗	—	—	(3.4)	灰白	N7/	精良		良好
154	遺構に伴わない遺物	勝岡田焼	碗	—	—	(3.7)	灰白	N7/	精良		良好
155	遺構に伴わない遺物	勝岡田焼	碗	—	—	(4.6)	灰	7.5Y6/1	精良		良好
156	遺構に伴わない遺物	勝岡田焼	碗	—	—	(4.3)	黄灰	2.5Y6/1	精良		良好
157	遺構に伴わない遺物	勝岡田焼	碗	—	—	(4.4)	灰	10Y6/1	精良		良好
158	遺構に伴わない遺物	勝岡田焼	碗	—	—	(4.3)	灰	7.5Y6/1	精良		良好
159	遺構に伴わない遺物	勝岡田焼	碗	—	—	(3.5)	灰	7.5Y6/1	精良		良好
160	遺構に伴わない遺物	勝岡田焼	碗	—	—	(3.7)	灰	N6/	精良		良好
161	遺構に伴わない遺物	勝岡田焼	碗	—	—	(3.5)	灰白	N7/	精良		良好
162	遺構に伴わない遺物	勝岡田焼	碗	—	—	(3.0)	灰	N6/	精良		良好
163	遺構に伴わない遺物	勝岡田焼	碗	—	—	(3.3)	灰白	N7/	精良		良好
164	遺構に伴わない遺物	勝岡田焼	碗	—	—	(3.1)	灰	N6/	精良		良好
165	遺構に伴わない遺物	勝岡田焼	碗	—	—	(3.7)	灰	N6/	精良		良好
166	遺構に伴わない遺物	勝岡田焼	碗	—	—	(4.2)	灰白	N7/	精良		良好
167	遺構に伴わない遺物	勝岡田焼	碗	15.0	—	(5.8)	灰白	N7/	精良		良好
168	遺構に伴わない遺物	勝岡田焼	碗	—	—	(3.9)	灰白	N7/	精良		良好
169	遺構に伴わない遺物	勝岡田焼	碗	13.7	—	(2.7)	灰	N6/	精良		良好
170	遺構に伴わない遺物	勝岡田焼	碗	—	—	(3.7)	灰白	N7/	精良		良好
171	遺構に伴わない遺物	勝岡田焼	碗	—	—	(4.0)	灰白	N7/	精良		良好
172	遺構に伴わない遺物	勝岡田焼	碗	—	—	(3.3)	灰	N5/	精良		良好
173	遺構に伴わない遺物	勝岡田焼	碗	—	—	(4.0)	灰白	5Y7/1	精良		良好
174	遺構に伴わない遺物	勝岡田焼	碗	—	5.4	(1.7)	灰白	2.5Y8/2	精良		良好
175	遺構に伴わない遺物	勝岡田焼	碗	—	5.8	(1.4)	灰	N5/	精良		良好
176	遺構に伴わない遺物	勝岡田焼	碗	—	6.1	(1.7)	灰	N6/	精良		良好
177	遺構に伴わない遺物	勝岡田焼	碗	—	5.9	(2.0)	褐灰	7.5YR6/1	微砂：長、赤		良好
178	遺構に伴わない遺物	勝岡田焼	碗	—	5.4	(1.1)	灰	N5/	精良		良好
179	遺構に伴わない遺物	勝岡田焼	碗	—	5.0	(0.9)	灰	N6/	精良		良好
180	遺構に伴わない遺物	勝岡田焼	碗	—	5.8	(1.4)	灰	N6/	精良		良好
181	遺構に伴わない遺物	勝岡田焼	碗	—	6.0	(1.6)	灰	N5/	精良		良好
182	遺構に伴わない遺物	勝岡田焼	碗	—	5.2	(1.9)	青灰	5PB6/1	精良		良好
183	遺構に伴わない遺物	勝岡田焼	碗	—	6.0	(2.3)	灰白	N7/	精良		良好
184	遺構に伴わない遺物	勝岡田焼	碗	—	6.1	(3.5)	灰	N6/	微砂：長、英		良好
185	遺構に伴わない遺物	勝岡田焼	碗	—	5.6	(2.0)	灰白	7.5Y8/1	精良		良好
186	遺構に伴わない遺物	勝岡田焼	碗	—	5.4	(3.0)	灰白	N7/	精良		良好
187	遺構に伴わない遺物	勝岡田焼	碗	—	6.4	(1.4)	灰白	N7/	精良		良好
188	遺構に伴わない遺物	勝岡田焼	碗	—	6.0	(2.2)	灰白	N7/	精良		良好
189	遺構に伴わない遺物	勝岡田焼	碗	—	5.0	(1.8)	灰	N6/	精良		良好
190	遺構に伴わない遺物	勝岡田焼	碗	—	6.0	(1.9)	灰白	N7/	精良		良好
191	遺構に伴わない遺物	勝岡田焼	碗	—	5.6	(1.7)	明青灰	5PB7/1	精良		良好
192	遺構に伴わない遺物	勝岡田焼	碗	—	5.4	(1.5)	灰	N5/	精良		良好
193	遺構に伴わない遺物	勝岡田焼	碗	—	5.4	(1.3)	灰白	N7/	精良：長		良好
194	遺構に伴わない遺物	勝岡田焼	碗	—	5.2	(1.5)	灰白	N7/	精良		良好
195	遺構に伴わない遺物	勝岡田焼	碗	—	5.4	(1.4)	灰	N6/	精良		良好
196	遺構に伴わない遺物	勝岡田焼	碗	—	6.0	(1.7)	灰白	N7/	精良		良好
197	遺構に伴わない遺物	勝岡田焼	碗	—	5.4	(1.7)	灰	N6/	微砂：長		良好
198	遺構に伴わない遺物	勝岡田焼	碗	—	6.0	(1.4)	灰白	N7/	微砂：長、英		良好
199	遺構に伴わない遺物	勝岡田焼	碗	—	5.4	(1.7)	灰	N6/	精良		良好
200	遺構に伴わない遺物	勝岡田焼	碗	—	6.0	(2.1)	灰	7.5Y6/1	精良		良好
201	遺構に伴わない遺物	勝岡田焼	碗	—	6.7	(1.5)	灰白	2.5Y8/2	精良		良好
202	遺構に伴わない遺物	勝岡田焼	碗	—	5.4	(2.4)	灰	N6/	微砂：長		良好
203	遺構に伴わない遺物	勝岡田焼	碗	—	5.6	(3.0)	灰白	N7/	精良		良好
204	遺構に伴わない遺物	勝岡田焼	碗	—	5.2	(1.6)	灰白	2.5Y8/2	細砂：長、赤		良好
205	遺構に伴わない遺物	勝岡田焼	碗	—	6.0	(1.8)	灰白	N7/	精良		良好
206	遺構に伴わない遺物	勝岡田焼	碗	—	5.8	(1.4)	灰白	N7/	精良		良好
207	遺構に伴わない遺物	勝岡田焼	碗	—	6.0	(2.3)	灰	7.5Y6/1	精良		良好
208	遺構に伴わない遺物	勝岡田焼	碗	—	5.6	(2.0)	灰	10Y6/1	精良		良好
209	遺構に伴わない遺物	勝岡田焼	碗	—	6.6	(1.7)	灰白	2.5Y7/1	精良		良好
210	遺構に伴わない遺物	勝岡田焼	碗	—	6.2	(1.8)	灰白	10YR7/1	精良		良好
211	遺構に伴わない遺物	勝岡田焼	碗	—	6.8	(1.8)	灰白	N7/	精良		良好
212	遺構に伴わない遺物	勝岡田焼	碗	—	6.4	(1.5)	灰白	N7/	精良		良好
213	遺構に伴わない遺物	勝岡田焼	碗	—	7.6	(2.5)	灰	N5/	精良		良好
214	遺構に伴わない遺物	勝岡田焼	碗	—	7.0	(1.9)	灰	N6/	精良		良好
215	遺構に伴わない遺物	勝岡田焼	碗	—	6.9	(1.7)	灰	N6/	精良		良好
216	遺構に伴わない遺物	勝岡田焼	碗	—	6.5	(1.7)	灰	N5/	精良		良好
217	遺構に伴わない遺物	勝岡田焼	碗	—	6.6	(1.4)	灰	N6/	精良		良好
218	遺構に伴わない遺物	勝岡田焼	碗	—	6.4	(1.6)	灰白	N7/	精良		良好
219	遺構に伴わない遺物	勝岡田焼	碗	—	5.8	(1.3)	灰	N5/	精良		良好
220	遺構に伴わない遺物	勝岡田焼	碗	—	7.0	(2.4)	灰	N5/	精良		良好
221	遺構に伴わない遺物	勝岡田焼	碗	—	7.2	(1.5)	灰	N6/	精良		良好
222	遺構に伴わない遺物	勝岡田焼	碗	—	6.0	(1.6)	灰	N6/	精良		良好
223	遺構に伴わない遺物	勝岡田焼	碗	—	6.9	(1.7)	青灰	5PB6/1	精良		良好
224	遺構に伴わない遺物	勝岡田焼	碗	9.5	—	(2.6)	灰	N6/	細砂：長		良好
225	遺構に伴わない遺物	勝岡田焼	碗	10.0	—	(3.1)	灰白	N7/	微砂：長		良好
226	遺構に伴わない遺物	勝岡田焼	碗	—	3.4	(1.2)	褐灰	7.5YR6/1	微砂：長		良好
227	遺構に伴わない遺物	勝岡田焼	碗	—	3.2	(1.0)	灰	N6/	細砂：長		良好
228	遺構に伴わない遺物	勝岡田焼	碗	—	3.1	(0.7)	青灰	5PB6/1	精良		良好

掲載番号	遺構名	種別	器種	計測値 (cm)			色調		胎土	残存状況	焼成	形態・手法の特徴など
				口径	底径	器高						
229	遺構に伴わない遺物	勝岡田焼	小皿	8.4	4.6	1.8	灰	5Y6/1	精良		良好	
230	遺構に伴わない遺物	勝岡田焼	小皿	8.8	6.0	1.6	灰	N6/	精良		良好	
231	遺構に伴わない遺物	勝岡田焼	小皿	9.4	6.0	1.7	灰	N6/	精良		良好	
232	遺構に伴わない遺物	勝岡田焼	小皿	8.4	4.6	1.7	灰	N6/	微砂：赤		良好	
233	遺構に伴わない遺物	勝岡田焼	小皿	8.4	4.2	1.5	灰白	N7/	精良		良好	
234	遺構に伴わない遺物	勝岡田焼	小皿	8.0	5.1	1.3	灰	N6/	微砂：黒		良好	
235	遺構に伴わない遺物	勝岡田焼	壺	18.8	—	(3.4)	灰赤	2.5YR5/2	精良		良好	
236	遺構に伴わない遺物	勝岡田焼	壺	21.8	—	(2.3)	灰	N5/	精良		良好	
237	遺構に伴わない遺物	勝岡田焼	壺	21.6	—	(3.2)	灰	N5/	精良		良好	
238	遺構に伴わない遺物	勝岡田焼	壺	—	—	(6.4)	灰	7.5Y4/1	微砂：長、赤		良好	
239	遺構に伴わない遺物	勝岡田焼	壺	—	—	(3.2)	灰	N5/	精良		良好	
240	遺構に伴わない遺物	勝岡田焼	壺	—	—	(6.8)	灰	N5/	精良		良好	
241	遺構に伴わない遺物	勝岡田焼	壺	—	—	(9.0)	灰	N6/	砂礫：長、英		良好	
242	遺構に伴わない遺物	勝岡田焼	壺	—	—	(5.1)	灰白	N7/	砂礫：長、英		良好	
243	遺構に伴わない遺物	勝岡田焼	鉢	—	—	(4.1)	灰	N5/	微砂：長		良好	
244	遺構に伴わない遺物	勝岡田焼	鉢	—	—	(6.5)	灰白	2.5Y8/1	砂礫：長		良好	
245	遺構に伴わない遺物	勝岡田焼	鉢	—	8.4	(2.2)	灰	N6/	精良		良好	
246	遺構に伴わない遺物	勝岡田焼	鉢	—	15.0	(2.6)	灰	N5/	精良		良好	外面 自然釉付着
247	遺構に伴わない遺物	東播系	鉢	—	—	(4.6)	灰	N6/	微砂：長、英		良好	
248	遺構に伴わない遺物	東播系	鉢	—	—	(3.2)	灰	N6/	細砂：長		良好	
249	遺構に伴わない遺物	東播系	鉢	—	—	(4.8)	灰白	N7/	微砂：長、英		良好	
250	遺構に伴わない遺物	東播系	鉢	—	—	(4.0)	灰	N6/	精良		良好	
251	遺構に伴わない遺物	東播系	鉢	—	—	(4.0)	灰	N6/	精良：黒		良好	
252	遺構に伴わない遺物	東播系	鉢	—	—	(3.4)	灰白	N7/	細砂：英		良好	
253	遺構に伴わない遺物	東播系	鉢	—	—	(5.0)	灰	N6/	細砂：英、赤		良好	
254	遺構に伴わない遺物	東播系	鉢	—	—	(4.2)	灰白	N7/	細砂：長、英		良好	
255	遺構に伴わない遺物	東播系	鉢	—	—	(2.9)	灰	N5/	精良		良好	
256	遺構に伴わない遺物	東播系	鉢	—	—	(3.3)	灰白	N7/	微砂：長		良好	
257	遺構に伴わない遺物	東播系	鉢	—	—	(2.5)	灰	5Y6/1	精良		良好	
258	遺構に伴わない遺物	東播系	鉢	—	—	(5.3)	灰	5Y4/1	細砂		良好	
259	遺構に伴わない遺物	東播系	鉢	—	—	(3.9)	灰	N6/	微砂：長		良好	
260	遺構に伴わない遺物	東播系	鉢	—	—	(2.8)	灰	N6/	砂礫：長、赤		良好	
261	遺構に伴わない遺物	東播系	鉢	—	9.6	(4.3)	灰	N6/	砂礫：長、赤		良好	
262	遺構に伴わない遺物	東播系	鉢	—	11.6	(2.7)	黄灰	2.5Y6/1	細砂：長		良好	
263	遺構に伴わない遺物	東播系	鉢	—	13.6	(4.8)	黄灰	2.5Y6/1	砂礫：長、英		良好	
264	遺構に伴わない遺物	東播系	壺	23.0	—	(5.1)	灰	N5/	精良		良好	
265	遺構に伴わない遺物	瀬戸	卸皿	—	5.0	1.1	灰白	N7/	微砂：長、英		良好	
266	遺構に伴わない遺物	須恵器	台付壺	—	4.8	(3.0)	灰	N4/	精良		良好	
267	遺構に伴わない遺物	須恵器	杯身	9.6	6.6	2.9	褐灰	7.5YR6/1	細砂：長、英		良好	
268	遺構に伴わない遺物	須恵器	壺	—	—	(3.9)	灰	N5/	精良		良好	
269	遺構に伴わない遺物	土師器	壺	26.0	—	(4.0)	淡橙	5YR8/4	砂礫：長、英		良好	
270	遺構に伴わない遺物	須恵器	壺	26.3	—	(5.8)	褐灰	10YR6/1	砂礫		良好	
271	遺構に伴わない遺物	須恵器	壺	23.5	—	(5.9)	にぶい橙	5YR7/4	砂礫：長、英、赤		良好	
272	遺構に伴わない遺物	須恵器	鉢	21.6	—	(4.3)	褐灰	10YR6/1	微砂：長、英、赤		良好	
273	遺構に伴わない遺物	土師器	杯	14.4	8.6	3.7	にぶい黄橙	10YR7/3	砂礫：長、英、赤		良好	
274	遺構に伴わない遺物	土師器	杯	13.0	6.6	2.5	灰黄褐	10YR6/2	精良		良好	
275	遺構に伴わない遺物	土師器	小皿	7.3	3.9	2.0	灰白	10YR8/2	微砂：長、英、黒		良好	
276	遺構に伴わない遺物	土師器	小皿	8.2	6.6	1.4	浅黄橙	10YR8/4	砂礫：長、英、赤		良好	
277	遺構に伴わない遺物	土師器	小皿	6.8	5.2	1.7	にぶい橙	7.5YR7/4	微砂：長、英		良好	
278	遺構に伴わない遺物	土師器	小皿	8.6	7.5	1.8	にぶい橙	5YR7/4	砂礫：長、英、赤		良好	
279	遺構に伴わない遺物	土師器	小皿	8.0	5.3	1.4	橙	2.5YR6/6	砂礫：長、英、赤		良好	
280	遺構に伴わない遺物	土師器	小皿	7.2	3.1	1.8	浅黄橙	7.5YR8/3	砂礫		良好	
281	遺構に伴わない遺物	土師器	鉢	—	—	(3.5)	にぶい黄橙	10YR7/2	微砂：長、赤		良好	
282	遺構に伴わない遺物	土師器	皿	—	5.4	(2.0)	灰白	7.5YR8/2	精良		良好	
283	遺構に伴わない遺物	土師器	皿	—	4.5	(2.6)	にぶい橙	7.5YR7/4	細砂：長、英、赤		良好	柱状高台
284	遺構に伴わない遺物	土師器	杯	—	5.6	(1.9)	にぶい黄橙	10YR7/3	砂礫：長、英		良好	
285	遺構に伴わない遺物	土師器	杯	—	7.0	(2.3)	にぶい橙	5YR6/4	砂礫：長、英、赤		良好	
286	遺構に伴わない遺物	土師器	杯	—	7.2	(1.8)	にぶい橙	5YR7/4	砂礫：長、英、赤		良好	
287	遺構に伴わない遺物	土師器	杯	—	6.1	(1.1)	にぶい黄橙	10YR7/2	砂礫：長、英、赤		良好	
288	遺構に伴わない遺物	青白磁	合子	4.3	—	(1.7)	明緑灰	7.5GY8/1	精良		良好	
289	遺構に伴わない遺物	白磁	碗	16.2	—	(2.7)	灰白	7.5Y8/1	精良		良好	
290	遺構に伴わない遺物	白磁	碗	—	—	(3.5)	灰白	5Y7/2	精良		良好	
291	遺構に伴わない遺物	白磁	碗	—	—	(2.6)	灰白	10Y7/1	精良		良好	
292	遺構に伴わない遺物	白磁	碗	—	—	(2.3)	灰白	N8/	精良		良好	
293	遺構に伴わない遺物	白磁	碗	—	—	(2.5)	灰白	7.5Y7/1	精良		良好	
294	遺構に伴わない遺物	白磁	碗	16.0	—	(3.0)	灰白	N8/	精良		良好	
295	遺構に伴わない遺物	白磁	碗	15.2	—	(2.8)	灰白	10Y8/1	精良		良好	
296	遺構に伴わない遺物	白磁	碗	—	—	(2.8)	灰	N6/	精良		良好	
297	遺構に伴わない遺物	白磁	碗	—	—	(2.9)	灰	N6/	精良		良好	
298	遺構に伴わない遺物	白磁	碗	—	6.6	(3.7)	灰白	7.5YR7/1	精良		良好	
299	遺構に伴わない遺物	白磁	碗	—	6.0	(3.1)	灰白	10Y8/1	精良		良好	
300	遺構に伴わない遺物	白磁	碗	—	6.0	(2.6)	灰白	10YR8/2	精良		良好	
301	遺構に伴わない遺物	白磁	碗	—	5.4	(1.9)	灰	7.5Y6/1	精良		良好	
302	遺構に伴わない遺物	白磁	碗	—	6.0	(2.2)	灰白	N8/	精良		良好	
303	遺構に伴わない遺物	白磁	碗	—	6.0	(2.0)	灰白	10Y7/1	精良		良好	
304	遺構に伴わない遺物	白磁	碗	—	5.8	(4.1)	灰白	5Y8/1	精良		良好	

掲載番号	遺構名	種別	器種	計測値 (cm)			色調		胎土	残存状況	焼成	形態・手法の特徴など
				口径	底径	器高						
305	遺構に伴わない遺物	白磁	碗	—	—	(2.3)	灰オリーブ	5Y6/2	精良		良好	内面 沈線1条
306	遺構に伴わない遺物	白磁	皿	—	—	(2.6)	灰	N6/	精良		良好	
307	遺構に伴わない遺物	青磁	皿	9.0	—	(1.6)	灰	N6/	精良		良好	
308	遺構に伴わない遺物	白磁	皿	—	5.4	(0.9)	灰白	10Y8/1	精良		良好	
309	遺構に伴わない遺物	青磁	碗	—	—	(3.8)	オリーブ灰	7.5Y5/2	精良		良好	龍泉窯系
310	遺構に伴わない遺物	青磁	碗	16.0	—	(4.8)	オリーブ灰	5GY5/1	精良		良好	外面 鑄蓮弁文 龍泉窯系
311	遺構に伴わない遺物	青磁	碗	—	—	(3.9)	オリーブ灰	5GY6/1	精良		良好	外面 鑄蓮弁文 龍泉窯系
312	遺構に伴わない遺物	青磁	碗	—	—	(3.8)	灰オリーブ	5Y5/2	精良		良好	外面 鑄蓮弁文 龍泉窯系
313	遺構に伴わない遺物	青磁	碗	—	—	3.3	灰オリーブ	7.5Y5/2	精良		良好	龍泉窯系
314	遺構に伴わない遺物	青磁	碗	—	—	(3.5)	オリーブ灰	10Y6/2	精良		良好	龍泉窯系
315	遺構に伴わない遺物	青磁	碗	—	—	(2.6)	緑灰	7.5GY6/1	精良		良好	外面 鑄蓮弁文 龍泉窯系
316	遺構に伴わない遺物	青磁	碗	—	5.6	(2.2)	オリーブ灰	10Y5/2	精良		良好	龍泉窯系
317	遺構に伴わない遺物	青磁	碗	13.0	—	(3.6)	灰オリーブ	7.5Y5/2	精良		良好	龍泉窯系
318	遺構に伴わない遺物	青磁	碗	12.4	—	(3.9)	灰オリーブ	7.5Y5/2	精良		良好	見込み 沈線 龍泉窯系
319	遺構に伴わない遺物	青磁	碗	—	—	(3.1)	オリーブ灰	2.5GY6/1	精良		良好	龍泉窯系
320	遺構に伴わない遺物	青磁	碗	—	—	(3.5)	灰白	7.5Y7/1	精良		良好	龍泉窯系
321	遺構に伴わない遺物	青磁	碗	—	—	(3.6)	オリーブ灰	10Y6/2	精良		良好	
322	遺構に伴わない遺物	青磁	碗	11.0	—	(5.0)	オリーブ灰	2.5GY6/1	精良		良好	
323	遺構に伴わない遺物	青磁	碗	—	6.0	(2.4)	灰白	5Y8/1	精良		良好	外面 鑄蓮弁文 龍泉窯系
324	遺構に伴わない遺物	青磁	碗	—	5.0	(1.7)	明オリーブ灰	5GY7/1	精良		良好	
325	遺構に伴わない遺物	青磁	碗	—	5.2	(2.1)	オリーブ灰	10Y5/2	精良		良好	龍泉窯系
326	遺構に伴わない遺物	青磁	碗	—	4.6	(2.7)	灰白	10Y7/1	精良		良好	龍泉窯系
327	遺構に伴わない遺物	青磁	杯	—	4.2	(2.0)	オリーブ灰	5GY6/1	精良		良好	龍泉窯系
328	遺構に伴わない遺物	青磁	杯	11.4	—	(1.9)	灰白	5Y7/2	精良		良好	龍泉窯系
329	遺構に伴わない遺物	青磁	杯	—	6.0	(1.4)	灰白	10Y7/1	精良		良好	龍泉窯系
330	遺構に伴わない遺物	青磁	碗	16.0	—	(3.2)	オリーブ黄	7.5Y6/3	精良		良好	同安窯系
331	遺構に伴わない遺物	天目	碗	—	—	(2.9)	灰オリーブ	7.5Y5/2	精良		良好	
332	遺構に伴わない遺物	天目	碗	—	—	(4.5)	黒褐	2.5Y3/1	精良		良好	
333	遺構に伴わない遺物	天目	碗	—	—	(2.9)	褐	7.5YR4/3	精良		良好	
334	遺構に伴わない遺物	青磁	碗	—	4.0	(2.2)	明緑灰	5G7/1	精良		良好	景德鎮窯系
335	遺構に伴わない遺物	備前焼	拵鉢	—	—	(6.1)	褐灰	10YR4/1	精良		良好	
336	遺構に伴わない遺物	備前焼	拵鉢	—	—	(5.4)	褐灰	10YR5/1	細砂：長、英		良好	
337	遺構に伴わない遺物	備前焼	拵鉢	—	—	(4.1)	褐灰	10YR5/1	精良		良好	
338	遺構に伴わない遺物	備前焼	拵鉢	—	—	(9.3)	灰	N5/	砂礫：長、英		良好	
339	遺構に伴わない遺物	備前焼	拵鉢	—	—	(3.9)	褐灰	7.5YR5/1	砂礫：長、英		良好	
340	遺構に伴わない遺物	備前焼	拵鉢	—	—	(5.0)	灰赤	10R4/2	微砂：長、英		良好	
341	遺構に伴わない遺物	備前焼	拵鉢	—	—	(6.7)	褐灰	10YR6/1	砂礫：長		良好	
342	遺構に伴わない遺物	備前焼	拵鉢	—	—	(4.5)	灰	7.5Y4/1	砂礫：長		良好	
343	遺構に伴わない遺物	備前焼	拵鉢	32.0	—	(9.6)	灰褐	7.5YR5/2	砂礫：長		良好	
344	遺構に伴わない遺物	備前焼	拵鉢	28.0	—	(10.0)	にぶい橙	5YR6/3	砂礫：長、英		良好	
345	遺構に伴わない遺物	備前焼	拵鉢	—	—	(3.5)	褐灰	7.5YR4/1	精良		良好	
346	遺構に伴わない遺物	備前焼	拵鉢	—	—	(7.1)	灰	N5/	細砂		良好	
347	遺構に伴わない遺物	備前焼	拵鉢	—	—	(4.0)	赤灰	2.5YR5/1	細砂：長、赤		良好	
348	遺構に伴わない遺物	備前焼	拵鉢	—	—	(4.4)	灰	N5/	精良		良好	
349	遺構に伴わない遺物	備前焼	拵鉢	—	—	(3.9)	灰	N5/	精良		良好	
350	遺構に伴わない遺物	備前焼	拵鉢	—	—	(6.7)	にぶい赤褐	5YR5/3	砂礫：長、英、赤		良好	
351	遺構に伴わない遺物	備前焼	拵鉢	—	—	(6.4)	褐灰	7.5YR5/1	精良		良好	
352	遺構に伴わない遺物	備前焼	拵鉢	—	—	(6.2)	黒褐	10YR3/1	細砂：長、英		良好	
353	遺構に伴わない遺物	備前焼	拵鉢	—	—	(6.5)	灰白	N7/	細砂		良好	
354	遺構に伴わない遺物	備前焼	拵鉢	—	—	(4.7)	灰	N6/	精良		良好	
355	遺構に伴わない遺物	備前焼	拵鉢	29.6	—	(4.2)	褐灰	5YR4/1	細砂：長		良好	
356	遺構に伴わない遺物	備前焼	拵鉢	—	—	(4.6)	褐灰	10YR5/1	精良		良好	
357	遺構に伴わない遺物	備前焼	拵鉢	—	15.0	(6.1)	灰赤	10R5/2	砂礫：長、英		良好	
358	遺構に伴わない遺物	備前焼	拵鉢	—	13.9	(3.8)	灰	5Y5/1	精良		良好	
359	遺構に伴わない遺物	備前焼	壺	13.6	—	(4.3)	紫灰	5P6/1	精良		良好	
360	遺構に伴わない遺物	備前焼	壺	13.4	—	(4.0)	褐灰	7.5YR4/1	精良		良好	
361	遺構に伴わない遺物	備前焼	甕	—	—	(3.2)	灰	5Y6/1	細砂：黒		良好	
362	遺構に伴わない遺物	備前焼	甕	—	26.0	(6.4)	褐灰	10YR4/1	砂礫：長、英、赤		良好	
363	遺構に伴わない遺物	備前焼	甕	—	—	(15.9)	灰	N6/	砂礫：長、英、赤		良好	
364	遺構に伴わない遺物	瓦質土器	釜	25.4	—	(3.8)	灰	N5/	砂礫：長、英		良好	
365	遺構に伴わない遺物	瓦質土器	釜	—	—	(4.7)	灰	N6/	微砂：長、英		良好	
366	遺構に伴わない遺物	瓦質土器	釜	—	—	(3.5)	にぶい黄橙	10YR7/2	微砂：長		良好	
367	遺構に伴わない遺物	瓦質土器	釜	—	—	(4.7)	明黄褐	10YR7/6	砂礫：長、英		良好	内外面 煤付着
368	遺構に伴わない遺物	瓦質土器	釜	—	—	(3.3)	暗灰	N3/	微砂：長、英		良好	内外面 煤付着
369	遺構に伴わない遺物	瓦質土器	釜	—	—	(4.2)	灰	N4/	精良		良好	外面 煤付着
370	遺構に伴わない遺物	瓦質土器	釜	—	—	(7.3)	灰黄褐	10YR6/2	微砂：長、英		良好	
371	遺構に伴わない遺物	瓦質土器	釜	—	—	(4.6)	灰白	2.5Y8/1	細砂：長、赤		不良	
372	遺構に伴わない遺物	瓦質土器	釜	20.5	—	(4.7)	灰	N4/	砂礫：長		良好	
373	遺構に伴わない遺物	瓦質土器	釜	—	—	(5.4)	灰	10Y6/1	精良		良好	外面 煤付着
374	遺構に伴わない遺物	瓦質土器	釜	—	—	(5.2)	にぶい黄橙	10YR7/2	精良		良好	外面 煤付着
375	遺構に伴わない遺物	瓦質土器	釜	—	—	(4.5)	灰	N4/	微砂：長、英、雲		良好	
376	遺構に伴わない遺物	瓦質土器	釜	25.6	—	(3.2)	褐灰	10YR6/1	微砂：長		良好	外面 煤付着
377	遺構に伴わない遺物	瓦質土器	釜	—	—	(5.6)	暗灰	N3/	微砂：長、赤		良好	外面 煤付着
378	遺構に伴わない遺物	瓦質土器	釜	—	—	(5.6)	黄灰	2.5Y5/1	精良		良好	
379	遺構に伴わない遺物	瓦質土器	鍋	—	—	(3.2)	灰黄	2.5Y6/2	微砂：長、雲		良好	内外面 煤付着
380	遺構に伴わない遺物	瓦質土器	鍋	—	—	(5.2)	暗灰	N3/	微砂：長、英、角		良好	

掲載番号	遺構名	種別	器種	計測値 (cm)			色調		胎土	残存状況	焼成	形態・手法の特徴など
				口径	底径	器高						
381	遺構に伴わない遺物	瓦質土器	鍋	—	—	(3.5)	灰白	5Y7/1	微砂：長、赤、黒		良好	
382	遺構に伴わない遺物	瓦質土器	鍋	—	—	(4.8)	黒	N2/	砂礫：長、英		良好	外面 煤付着
383	遺構に伴わない遺物	瓦質土器	鍋	—	—	(6.2)	灰	N4/	微砂：長、赤		良好	外面 煤付着
384	遺構に伴わない遺物	瓦質土器	鍋	—	—	(3.8)	黄褐色	2.5Y5/3	微砂：長、英		良好	外面 煤付着
385	遺構に伴わない遺物	瓦質土器	鍋	—	—	(2.9)	オリーブ黒	5Y3/1	精良		良好	外面 煤付着 口縁部内面 煤付着
386	遺構に伴わない遺物	瓦質土器	鍋	—	—	(3.0)	灰	5Y6/1	微砂：長、英		良好	
387	遺構に伴わない遺物	瓦質土器	鍋	—	—	(4.0)	灰	N5/	微砂：長、英、赤、黒		良好	外面 煤付着
388	遺構に伴わない遺物	瓦質土器	鍋	—	—	(6.1)	赤褐色	5YR4/6	微砂：長、英、赤		良好	

## 穴が遺跡

掲載番号	遺構名	種別	器種	計測値 (cm)			色調		胎土	残存状況	焼成	形態・手法の特徴など
				口径	底径	器高						
1	竪穴住居 1	弥生	壺	16.3	—	(3.4)	橙	5YR6/6	細砂：長、英		良好	
2	竪穴住居 1	弥生	壺	10.8	—	(3.6)	にぶい黄褐色	10YR5/3	細砂：長、英		良好	
3	竪穴住居 1	弥生	壺	—	—	(2.0)	橙	5YR6/6	細砂：長、英		良好	
4	竪穴住居 1	弥生	甕	—	—	(3.3)	明赤褐色	5YR5/6	細砂：長、英		良好	
5	竪穴住居 1	弥生	甕	13.8	—	(2.1)	橙	7.5YR6/6	細砂：長、英		良好	
6	竪穴住居 1	弥生	甕	17.7	—	(4.5)	橙	7.5YR6/6	細砂：長、英、赤		良好	
7	竪穴住居 1	弥生	甕	—	5.6	(3.1)	にぶい橙	7.5YR7/4	細砂：長、英、赤		良好	
8	竪穴住居 1	弥生	鉢	—	2.9	(3.1)	橙	5YR6/6	砂礫：長、英		良好	
9	竪穴住居 1 中央穴	弥生	鉢	(17.8)	—	(6.0)	灰黄褐色	10YR6/2	細砂：長、英、赤		良好	被熱のため外面剥離・黒色化
10	竪穴住居 1	弥生	台付鉢	—	12.8	(3.4)	にぶい橙	7.5YR7/4	微砂：長、英		良好	
11	竪穴住居 1	弥生	高杯	—	17.8	(2.9)	橙	5YR6/8	細砂：長、英		良好	脚部 円形透かし
12	竪穴住居 1	弥生	高杯	—	16.1	(9.8)	橙	7.5YR6/6	砂礫：長、英		良好	
13	竪穴住居 1 P 1	弥生	高杯	24.3	—	(9.5)	橙	7.5YR6/6	砂礫：長、英		良好	脚接合部 粘土積み痕跡明瞭
14	竪穴住居 1 P 1	弥生	壺	11.2	—	(5.0)	にぶい黄褐色	10YR6/4	砂礫：長、英		良好	
15	竪穴住居 1 P 1	弥生	甕	14.6	—	(3.8)	にぶい黄褐色	10YR6/4	細砂：長、英、赤		良好	外面 煤付着
16	竪穴住居 2 1' 2	弥生	甕	15.4	—	(8.0)	明赤褐色	5YR5/6	砂礫：長、英		良好	
17	竪穴住居 2 P 3	弥生	甕	14.0	—	(4.9)	橙	7.5YR6/6	砂礫：長、英		良好	
18	竪穴住居 2 P 2	弥生	甕	16.3	—	(3.3)	明赤褐色	5YR5/6	砂礫：長、英、赤		良好	外面 煤付着
19	竪穴住居 2 P 1	弥生	壺	—	5.4	(1.8)	にぶい赤褐色	5YR5/4	細砂：長、英		良好	
20	竪穴住居 2 P 4	弥生	高杯	—	—	(3.8)	にぶい黄褐色	10YR6/3	細砂：長、英		良好	
21	竪穴住居 2	弥生	壺	20.8	—	(2.5)	明赤褐色	5YR5/6	砂礫：長、英		良好	
22	竪穴住居 2	弥生	壺	—	—	(1.9)	にぶい黄褐色	10YR6/4	砂礫：長、英、赤		良好	
23	竪穴住居 2	弥生	壺	9.8	—	(4.3)	にぶい橙	7.5YR6/4	細砂：長、英、赤		良好	
24	竪穴住居 2	弥生	壺	9.1	—	(3.6)	にぶい黄褐色	10YR6/4	微砂：長、赤		良好	
25	竪穴住居 2	弥生	甕	14.2	—	(3.2)	橙	7.5YR6/6	砂礫：長、英、赤		良好	
26	竪穴住居 2	弥生	甕	14.0	—	(2.9)	橙	7.5YR7/6	微砂：長、英		良好	
27	竪穴住居 2	弥生	甕	13.4	—	(4.4)	にぶい黄褐色	10YR6/4	砂礫：長、英、赤		良好	
28	竪穴住居 2	弥生	甕	—	—	(2.9)	橙	7.5YR7/6	微砂：長		良好	
29	竪穴住居 2	弥生	壺	13.5	—	(2.9)	にぶい橙	7.5YR6/4	細砂：長、英、赤		良好	
30	竪穴住居 2	弥生	壺	15.2	—	(2.5)	橙	7.5YR6/6	微砂：長		良好	
31	竪穴住居 2	弥生	甕	11.9	—	(2.7)	灰黄褐色	10YR6/2	細砂：長、英、赤		良好	
32	竪穴住居 2	弥生	甕	—	2.5	(3.2)	にぶい橙	7.5YR7/4	微砂：長		良好	
33	竪穴住居 2	弥生	甕	—	—	(5.1)	にぶい黄褐色	10YR6/4	微砂：長、赤		良好	
34	竪穴住居 2	弥生	台付鉢	—	3.6	(2.2)	明赤褐色	5YR5/6	細砂：長、英、赤		良好	
35	竪穴住居 2	弥生	台付鉢	—	3.9	(2.2)	橙	7.5YR6/6	細砂：長、英、赤		良好	
36	竪穴住居 2	弥生	台付鉢	—	2.1	(1.1)	にぶい黄褐色	10YR6/4	微砂：長、赤		良好	
37	竪穴住居 2	弥生	台付鉢	—	3.5	(2.4)	にぶい黄褐色	10YR7/4	砂礫：長、英、赤		良好	
38	竪穴住居 2	弥生	台付鉢	—	2.4	(1.9)	橙	7.5YR7/6	細砂：長、英、赤		良好	
39	竪穴住居 2	弥生	台付鉢	—	8.6	(5.8)	橙	7.5YR7/6	砂礫：長、英、赤		良好	
40	竪穴住居 2	弥生	台付鉢	—	6.1	(5.3)	橙	5YR6/6	砂礫：長、英、赤		良好	
41	竪穴住居 2	弥生	高杯	—	—	(10.1)	橙	5YR6/6	砂礫：長、英、赤、黒		良好	
42	竪穴住居 2	弥生	高杯	—	—	(6.5)	明黄褐色	10YR7/6	砂礫：長、英、赤		良好	脚部 円形透かし
43	竪穴住居 2	弥生	高杯	15.6	—	(4.2)	にぶい黄褐色	10YR5/4	細砂：長、英		良好	
44	竪穴住居 2	弥生	高杯	—	17.6	(2.6)	橙	7.5YR6/6	細砂：長、英、赤		良好	
45	竪穴住居 2	弥生	高杯	—	16.0	(5.6)	にぶい黄褐色	10YR7/4	砂礫：長、英、赤		良好	脚部 円形透かし
46	竪穴住居 2	弥生	高杯	—	—	(2.8)	橙	7.5YR6/6	微砂：長、赤		良好	
47	竪穴住居 3	弥生	鼓形器台	15.8	—	(4.6)	にぶい橙	7.5YR6/4	微砂：長、英		良好	櫛摺平行文 10 条
48	竪穴住居 4	弥生	甕	—	4.2	(3.4)	黄灰	2.5Y5/1	細砂：長、英、赤		良好	
49	A 群	弥生	壺	—	—	(5.0)	黒褐色	10YR3/1	砂礫：長、英、赤		良好	貼付突帯・刻目
50	A 群	弥生	壺	15.2	—	(2.0)	灰黄褐色	10YR5/2	精良		良好	
51	A 群	弥生	甕	11.0	—	(2.5)	明赤褐色	10YR5/6	細砂：長、英、赤		良好	
52	A 群	弥生	甕	15.7	—	(4.7)	橙	7.5YR6/6	細砂：長、英		良好	
53	A 群	弥生	甕	18.0	—	(5.0)	にぶい橙	7.5YR6/4	微砂：長、英、赤		良好	外面 煤付着
54	A 群	弥生	甕	—	—	(4.2)	にぶい黄褐色	10YR7/3	微砂：長		良好	
55	A 群	弥生	壺	—	—	(3.0)	黒褐色	10YR3/1	微砂：長、英		良好	
56	A 群 P1	弥生	甕	—	4.6	(3.4)	橙	5YR6/6	細砂：長、英、赤		良好	
57	A 群	弥生	甕	—	4.6	(2.8)	にぶい黄褐色	10YR7/2	微砂：長、雲		良好	
58	A 群	弥生	甕	—	9.5	(6.2)	明黄褐色	10YR6/6	砂礫：長、英		良好	
59	A 群	弥生	壺	7.2	—	(4.3)	明赤褐色	5YR5/6	細砂：長、英		良好	
60	A 群	弥生	高杯	29.5	—	(5.0)	橙	5YR6/8	細砂：長、英		良好	
61	A 群	弥生	不明	—	—	(6.5)	黄褐色	10YR8/6	微砂：長、雲		良好	外面 波状文
62	B 群 P 1	弥生	甕	22.6	—	(7.5)	橙	5YR7/8	微砂：長		良好	外面 煤付着 内面黒色化

掲載番号	遺構名	種別	器種	計測値 (cm)			色調		胎土	残存状況	焼成	形態・手法の特徴など
				口径	底径	器高						
63	B群 P2	弥生	壺	18.2	—	(2.6)	粉	7.5YR7/6	細砂:長、英、赤		良好	
64	B群 床面	弥生	高杯	24.0	—	(3.7)	明赤褐	10YR7/6	砂礫:長、英、赤		良好	
65	B群 床面	弥生	高杯	—	—	(4.1)	にぶい橙	7.5YR6/4	細砂:長、英、赤		良好	
66	B群 床面	弥生	高杯	—	19.4	(12.4)	にぶい黄橙	10YR7/3	砂礫:長		良好	脚部 凹形透かし
67	B群 床面	弥生	高林	—	14.9	(13.3)	にぶい橙	7.5YR6/4	砂礫:長、英、赤		良好	脚部 凹形透かし
68	B群 埋土下層	弥生	壺	14.3	—	(9.0)	にぶい粉	7.5YR6/4	細砂:長、英、赤		良好	外面 煤付着 未完通の円孔
69	B群 埋土下層	弥生	壺	15.0	—	(5.9)	にぶい橙	7.5YR6/4	微砂:長、英、赤		良好	外面 タタキ
70	B群 埋土下層	弥生	壺	15.0	—	(4.4)	橙	7.5YR6/6	細砂:長、英、赤		良好	
71	B群 埋土下層	弥生	壺	—	4.1	(14.2)	にぶい橙	7.5YR6/4	砂礫:長、英、赤		良好	
72	B群 埋土下層	弥生	壺	11.4	—	(7.8)	にぶい黄橙	10YR7/4	微砂:長、英、赤		良好	
73	B群 埋土下層	弥生	壺	—	4.9	(5.5)	にぶい粉	7.5YR6/4	細砂:長、英		良好	外面 タタキ
74	B群 埋土下層	弥生	壺	—	3.5	(4.5)	にぶい橙	7.5YR6/4	細砂:長、英、赤		良好	
75	B群 埋土下層	弥生	壺	—	4.2	(6.3)	にぶい橙	7.5YR6/4	砂礫:長、英		良好	
76	B群 埋土下層	弥生	壺	—	4.7	(5.1)	にぶい黄橙	10YR6/3	細砂:長、英、赤		良好	
77	B群 埋土下層	弥生	高杯	—	10.2	(7.6)	橙	5YR7/8	微砂:長		良好	脚部 凹形透かし
78	B群 埋土下層	弥生	高杯	—	—	(7.8)	にぶい橙	7.5YR6/4	砂礫:長、英、赤		良好	
79	B群 埋土下層	弥生	台付鉢	15.2	4.2	8.9	にぶい褐	7.5YR5/3	微砂:長、英、赤		良好	外面 煤付着
80	B群 埋土下層	弥生	器台	—	—	(15.3)	明赤褐	5YR5/6	砂礫:長、英、赤		良好	脚部 凹形透かし
81	B群 埋土下層	弥生	高杯	—	13.9	(2.0)	にぶい黄橙	10YR6/4	砂礫:長、英、赤		良好	外面 煤付着
82	B群 埋土下層	弥生	壺	17.4	—	(6.0)	橙	7.5YR6/6	砂礫:長、英、赤		良好	
83	B群 埋土下層	弥生	壺	15.8	—	(5.5)	橙	5YR6/8	細砂:長、英、赤		良好	
84	B群 埋土下層	弥生	壺	15.1	—	(3.4)	粉	7.5YR6/6	細砂:長、英		良好	
85	B群 埋土下層	弥生	壺	13.8	—	(5.1)	浅黄橙	7.5YR8/6	微砂:長、英		良好	
86	B群 埋土下層	弥生	壺	11.2	—	(6.7)	橙	7.5YR6/6	細砂:長、英		良好	
87	B群 埋土下層	弥生	壺	13.8	—	(5.0)	橙	2.5YR6/8	細砂:長、英		良好	
88	B群 埋土下層	弥生	壺	—	6.5	(5.4)	にぶい橙	7.5YR6/4	細砂:長、英		良好	
89	B群 埋土下層	弥生	壺	—	7.0	(3.0)	粉	7.5YR6/6	砂礫:長、英		良好	
90	B群 埋土下層	弥生	壺	—	—	(2.9)	にぶい橙	7.5YR6/4	細砂:長、英		良好	波状文・凹線1条
91	B群 埋土下層	弥生	高杯	30.6	—	(4.0)	黄橙	7.5YR7/8	微砂:長、英		良好	
92	B群 埋土下層	弥生	高杯	14.1	—	(4.9)	にぶい橙	7.5YR6/4	微砂:長、英、赤		良好	
93	B群 埋土下層	弥生	高林	—	—	(4.0)	にぶい黄橙	10YR7/4	微砂:長		良好	脚部 凹形透かし
94	B群 埋土下層	弥生	高杯	—	—	(11.2)	にぶい粉	7.5YR6/4	微砂:長、英、赤		良好	脚部 凹形透かし
95	B群 埋土下層	弥生	鉢	12.8	—	(5.5)	明赤褐	5YR5/6	砂礫:長、英		良好	
96	B群 埋土下層	弥生	鉢	13.4	—	(3.9)	橙	7.5YR7/6	砂礫:長、英、赤		良好	凹形穿孔
97	B群 埋土下層	弥生	鉢	—	—	(3.4)	にぶい橙	7.5YR7/4	微砂:長、英、赤		良好	
98	B群 埋土下層	弥生	鉢	—	—	(3.4)	橙	7.5YR7/6	微砂:長		良好	
99	B群 埋土下層	弥生	壺	25.8	—	(8.7)	灰黄褐	10YR4/2	微砂:長、英		良好	口縁部 竹管文
100	竪穴住居5	弥生	壺	12.1	4.4	16.7	浅黄	2.5Y7/4	細砂:長、英、赤		良好	
101	竪穴住居5	弥生	高杯	23.6	13.4	17.9	にぶい赤褐	5YR5/4	細砂:長、英		良好	脚部 凹形透かし
102	竪穴住居5	弥生	高杯	12.9	—	(4.0)	にぶい黄橙	10YR7/3	細砂:長、英		良好	
103	竪穴住居5	弥生	器台	17.2	15.9	15.0	橙	5YR6/6	砂礫:長、英、赤		良好	凹形透かし
104	段状遺構2	弥生	壺	11.2	—	(2.6)	粉	7.5YR7/6	細砂:長、英		良好	
105	段状遺構2	弥生	壺	—	5.0	(3.0)	明赤褐	5YR5/6	細砂:長、英		良好	
106	段状遺構7	弥生	壺	15.0	—	(5.2)	にぶい橙	7.5YR6/4	細砂:長、英、赤		良好	
107	段状遺構7	弥生	壺	16.3	—	(8.3)	にぶい黄橙	10YR6/3	微砂:長、英、赤		良好	
108	段状遺構7	弥生	壺	—	6.4	(2.7)	赤褐	5YR4/6	細砂:長、英		良好	
109	段状遺構9	弥生	壺	—	7.3	(3.3)	橙	5YR6/6	細砂:長、英		良好	
110	掘立柱建物	弥生	高杯	—	—	(6.3)	にぶい橙	7.5YR6/4	細砂:長、英、赤		良好	
111	段状遺構11	弥生	壺	4.65	—	(5.2)	にぶい橙	7.5YR6/4	細砂:長、英、赤		良好	
112	段状遺構11	弥生	壺	13.0	—	(3.7)	浅黄	2.5Y7/3	微砂:長、英、赤		良好	
113	段状遺構12	弥生	壺	10.7	—	(13.0)	橙	7.5YR7/6	砂礫:長、英、赤		良好	
114	段状遺構12	弥生	壺	15.5	—	(2.4)	橙	7.5YR6/6	砂礫:長、英		良好	
115	段状遺構12	弥生	壺	14.0	—	(2.0)	黒	10YR2/1	微砂:長、英		良好	
116	段状遺構12	弥生	壺	—	6.3	(4.2)	橙	7.5YR6/6	砂礫:長、英		良好	
117	段状遺構12	弥生	高杯	17.9	—	(3.6)	にぶい橙	7.5YR6/4	微砂:長、英、赤		良好	
118	段状遺構12	弥生	高杯	—	—	(3.0)	にぶい褐	7.5YR5/4	砂礫:長、英、赤		良好	
119	段状遺構12	弥生	高林	—	—	(3.0)	明赤褐	5YR5/6	微砂:長、英、赤		良好	
120	段状遺構12	弥生	壺	10.8	—	(5.5)	にぶい黄橙	10YR6/4	細砂:長、英、赤		良好	
121	段状遺構16	弥生	壺	12.0	—	(4.5)	にぶい橙	7.5YR6/4	細砂:長、英、赤		良好	
122	段状遺構16	弥生	壺	12.4	—	(5.2)	にぶい橙	7.5YR6/4	砂礫:長、英、赤		良好	
123	段状遺構16	弥生	壺	13.2	—	(2.6)	にぶい橙	7.5YR6/4	砂礫:長、英		良好	
124	段状遺構16	弥生	壺	—	4.2	(6.3)	橙	7.5YR6/6	砂礫:長、英		良好	
125	段状遺構16	弥生	高杯	—	—	(3.0)	粉	7.5YR7/6	細砂:長、英		良好	
126	段状遺構16	弥生	高杯	—	—	(3.0)	橙	7.5YR6/6	砂礫:長、英		良好	
127	段状遺構16	弥生	高杯	—	—	(9.9)	橙	5YR6/8	砂礫:長、英		良好	
128	段状遺構16	弥生	器台	28.0	—	(5.2)	橙	7.5YR7/6	細砂:長、英、赤		良好	口縁部 鋸歯文
129	段状遺構17	弥生	壺	10.5	—	(4.4)	橙	5YR6/6	細砂:長、英、赤		良好	
130	段状遺構17	弥生	壺	13.8	—	(2.7)	粉	5YR6/6	細砂:長、英、赤		良好	
131	段状遺構17	弥生	壺	13.6	—	(3.0)	浅黄橙	7.5YR8/3	砂礫:長、英、赤		良好	
132	段状遺構17	弥生	壺	13.0	—	(3.0)	にぶい褐	7.5YR5/4	細砂:長、英、角		良好	
133	段状遺構17	弥生	壺	—	—	(3.9)	明赤褐	5YR5/6	砂礫:長、英		良好	
134	段状遺構17	弥生	壺	—	—	(3.0)	橙	5YR6/6	砂礫:長、英		良好	
135	段状遺構17	弥生	壺	17.8	—	(3.1)	粉	7.5YR6/6	細砂:長、英		良好	
136	段状遺構17	弥生	壺	—	5.4	(3.4)	にぶい黄橙	10YR7/4	細砂:長、英、赤		良好	
137	段状遺構17	弥生	壺	—	4.9	(3.6)	にぶい黄橙	10YR5/3	砂礫:長、英、黒		良好	
138	段状遺構17	弥生	壺	—	3.9	(3.1)	橙	5YR6/6	砂礫:長、英		良好	

掲載番号	遺構名	種別	器種	計測値 (cm)			色調	胎土	残存状況	焼成	形態・手法の特徴など
				口径	底径	器高					
139	段状遺構 17	弥生	甕	—	4.7	(3.4)	にぶい黄粉	10YR6/3	砂礫：長、英、赤、黒		良好
140	段状遺構 17	弥生	高杯	—	19.8	(4.4)	橙	7.5YR6/6	砂礫：長、英、雲		良好
141	段状遺構 17	弥生	高杯	—	14.0	(3.9)	橙	7.5YR6/6	細砂：長、英、赤		良好
142	段状遺構 17	弥生	台付鉢	—	17.0	(4.4)	橙	7.5YR6/6	砂礫：長、英		良好
143	段状遺構 17	弥生	鉢	9.8	3.4	5.1	橙	5YR6/6	細砂：長、英		良好
144	段状遺構 17	弥生	器台	—	23.6	(8.2)	粉	5YR6/6	砂礫：長、英、赤		良好 円形透かし 脚端部 凹線 5条
145	段状遺構 17	弥生	把手	—	—	(6.2)	にぶい黄粉	10YR6/4	微砂：長、英、赤		良好
146	段状遺構 18	弥生	甕	13.3	—	(4.5)	にぶい橙	7.5YR6/4	微砂：長、英、赤		良好
147	段状遺構 18	弥生	甕	13.4	—	(3.5)	にぶい褐	7.5YR6/3	砂礫：長、英		良好
148	段状遺構 18	弥生	甕	9.2	—	(2.2)	明赤褐	5YR5/6	細砂：長、英、雲		良好
149	段状遺構 18	弥生	甕	—	6.0	(5.2)	にぶい褐	7.5YR5/3	砂礫：長、英		良好
150	段状遺構 18	弥生	甕	—	5.8	(4.6)	明褐	7.5YR5/6	砂礫：長、英、赤		良好
151	段状遺構 18	弥生	高杯	—	17.4	(5.4)	にぶい橙	7.5YR6/4	微砂：長、英、赤		良好 脚部 円形透かし
152	段状遺構 18	弥生	把手	—	—	(5.4)	明赤褐	2.5YR5/6	細砂：長、英		良好
153	段状遺構 19	弥生	甕	14.2	—	(8.8)	橙	5YR6/6	砂礫：長、英、赤		良好
154	段状遺構 19	弥生	甕	14.0	—	(3.7)	橙	5YR6/6	砂礫：長、英、角		良好
155	段状遺構 19	弥生	甕	11.2	—	(3.5)	粉	7.5YR6/6	細砂：長、英		良好
156	段状遺構 19	弥生	甕	13.8	—	(8.8)	にぶい橙	7.5YR6/4	細砂：長、英、赤		良好
157	段状遺構 19	弥生	甕	9.9	—	(4.4)	橙	5YR6/6	細砂：長、英		良好 円形透かし
158	段状遺構 19	弥生	甕	13.2	—	(8.0)	明赤褐	2.5YR5/6	砂礫：長、英		良好
159	段状遺構 19	弥生	甕	—	5.1	(7.0)	橙	7.5YR6/6	砂礫：長、英、雲		良好
160	段状遺構 19	弥生	甕	—	6.7	(5.5)	明赤褐	5YR5/6	砂礫：長、英		良好
161	段状遺構 19	弥生	甕	—	3.8	(4.9)	明赤褐	5YR5/6	細砂：長、英		良好
162	段状遺構 19	弥生	甕	—	5.6	(4.5)	橙	5YR6/6	微砂：長、英		良好
163	段状遺構 19	弥生	高杯	—	—	(10.5)	橙	7.5YR6/6	砂礫：長、英、赤		良好
164	段状遺構 19	弥生	高杯	—	—	(13.6)	にぶい黄粉	10YR7/3	微砂：長、英、赤		良好 櫛掻沈線文 (8条) 5本
165	段状遺構 19	弥生	高杯	11.4	5.5	8.5	にぶい橙	7.5YR6/4	細砂：長、英		良好
166	段状遺構 19	弥生	高杯	—	11.4	(5.8)	にぶい黄粉	10YR7/4	微砂：長、英、赤		良好
167	段状遺構 19	弥生	鉢	10.2	3.2	6.2	橙	5YR6/8	砂礫：長、英		良好
168	段状遺構 19	弥生	蓋	—	—	(3.2)	明赤褐	5YR5/6	細砂：長、英		良好
169	段状遺構 19	弥生	把手	—	—	(3.7)	にぶい褐	7.5YR5/3	細砂：長、英		良好
170	土塚 1	弥生	甕	—	6.4	(2.7)	赤褐	5YR4/6	細砂：長、英		良好
171	土塚 2	弥生	高杯	—	13.8	(4.7)	橙	7.5YR7/6	砂礫：長、英		良好 脚端部 凹線 3条
172	土塚 2	弥生	円筒形土器	19.6	23.2	49.3	橙	7.5YR7/6	砂礫：長、英、雲	ほぼ完	良好 貼付高台・把手
173	遺構に伴わない遺物	弥生	甕	—	—	(2.9)	にぶい褐	7.5YR5/4	細砂：長、英		良好 口縁部 凹線 4条
174	遺構に伴わない遺物	弥生	甕	—	—	(3.0)	にぶい褐	7.5YR5/3	細砂：長、英		良好
175	遺構に伴わない遺物	弥生	甕	12.8	—	(3.9)	粉	5YR6/6	細砂：長、英		良好
176	遺構に伴わない遺物	弥生	甕	13.2	—	(3.5)	明赤褐	5YR5/6	細砂：長、英		良好
177	遺構に伴わない遺物	弥生	甕	13.2	—	(5.6)	にぶい黄粉	10YR6/4	微砂：長、英、赤		良好
178	遺構に伴わない遺物	弥生	甕	11.2	—	(5.7)	橙	5YR6/6	細砂：長、英		良好
179	遺構に伴わない遺物	弥生	甕	13.1	—	(3.8)	橙	7.5YR6/6	砂礫：長、英		良好
180	遺構に伴わない遺物	弥生	甕	15.9	—	(3.6)	にぶい粉	7.5YR6/4	細砂：長、英		良好
181	遺構に伴わない遺物	弥生	甕	14.0	—	(6.0)	橙	7.5YR7/6	細砂：長、英		良好
182	遺構に伴わない遺物	弥生	甕	17.0	—	(5.4)	橙	7.5YR6/6	砂礫：長、英、角		良好
183	遺構に伴わない遺物	弥生	甕	—	6.0	(3.2)	にぶい黄粉	10YR7/3	細砂：長、英		良好
184	遺構に伴わない遺物	弥生	甕	—	5.4	(2.7)	黄灰	2.5Y4/1	細砂：長、英		良好
185	遺構に伴わない遺物	弥生	甕	—	5.5	(3.6)	にぶい橙	7.5YR6/4	砂礫：長、英、赤		良好
186	遺構に伴わない遺物	弥生	甕	—	6.0	(5.2)	にぶい黄粉	10YR7/4	砂礫：長、英、赤		良好
187	遺構に伴わない遺物	弥生	高杯	15.0	—	(3.2)	橙	5YR6/6	細砂：長、英		良好
188	遺構に伴わない遺物	弥生	高杯	—	—	(5.5)	橙	7.5YR6/6	砂礫：長、英、赤		良好 脚部 円形透かし
189	遺構に伴わない遺物	弥生	高杯	—	11.8	(4.5)	橙	7.5YR6/6	砂礫：長、英		良好
190	遺構に伴わない遺物	弥生	高杯	—	—	(8.2)	にぶい橙	7.5YR6/4	砂礫：長、英、赤		良好
191	遺構に伴わない遺物	弥生	器台	22.6	—	(9.3)	粉	7.5YR6/6	砂礫：長、英		良好
192	遺構に伴わない遺物	弥生	器台	28.8	—	(2.6)	橙	7.5YR6/6	細砂：長、英		良好 口縁部 凹線 5条・円形浮文
193	遺構に伴わない遺物	弥生	器台	—	—	(3.9)	黒褐	10YR3/1	微砂：長、英		良好 口縁部 鋸歯文
194	遺構に伴わない遺物	弥生	蓋	—	—	(5.4)	橙	7.5YR7/6	砂礫：長、英		良好 胴部 突帯 2条・棒状浮文
195	遺構に伴わない遺物	弥生	蓋	—	—	(4.2)	橙	2.5YR6/8	砂礫：長、英		良好
196	遺構に伴わない遺物	瓦	軒丸瓦	(180)	(180)	(6.3)	暗灰黄	2.5Y5/2	砂礫：長石、石英		良好 視弁八弁蓮華文
197	遺構に伴わない遺物	瓦	丸瓦	(186)	122	(18.0)	橙	7.5YR6/6	細砂：長石、石英		良好
198	遺構に伴わない遺物	瓦	丸瓦	(112)	(105)	(10.9)	灰	5Y6/1	砂礫：長石、石英		良好
199	遺構に伴わない遺物	瓦	丸瓦	(54)	(88)	(5.2)	黄灰	2.5Y6/1	細砂：長石、石英		良好
200	遺構に伴わない遺物	瓦	軒平瓦	(104)	(116)	(10.0)	にぶい黄粉	10YR7/2	細砂：長石、石英		良好 頭面施文
201	遺構に伴わない遺物	瓦	平瓦	(97)	(76)	(9.9)	にぶい粉	7.5YR6/4	細砂：長石、石英		良好
202	遺構に伴わない遺物	瓦	平瓦	(100)	(142)	(10.0)	にぶい黄粉	10YR7/2	砂礫：長石、石英		良好
203	遺構に伴わない遺物	瓦	平瓦	(231)	265	(21.6)	灰褐	7.5YR6/2	細砂：長石、石英		良好

### 穴が古墳

掲載番号	遺構名	種別	器種	計測値 (cm)			色調	胎土	残存状況	焼成	形態・手法の特徴など
				口径	底径	器高					
1	石室玄門部	須恵器	杯蓋	15.3	—	4.6	黄灰	2.5Y6/1	細砂：長、英		完形 堅緻
2	石室奥壁側	須恵器	杯身	13.9	—	4.8	灰	N5/	細砂：長、英		完形 堅緻
3	石室東壁寄り	須恵器	杯蓋	15.4	—	4.3	灰	5Y6/1	細砂：長、英		完形 堅緻 内側 当て具痕
4	石室東壁寄り	須恵器	杯身	13.2	—	5.3	黄灰	2.5Y6/1	砂礫：長、英		完形 良好
5	石室玄門部	須恵器	杯蓋	15	—	4.9	灰	N6/	細砂：長、英		完形 堅緻



掲載番号	遺構名	種別	器種	計測値 (cm)			色調		胎土	残存状況	焼成	形態・手法の特徴など
				口径	底径	器高						
6	石室袖部	須恵器	杯蓋	14.2	—	4.5	灰	5Y6/1	砂礫：長、英	完形	堅緻	内側 当て具痕
7	石室袖部	須恵器	杯蓋	14.8	—	4.9	黄灰	2.5Y5/1	砂礫：長、英	完形	堅緻	
8	石室奥壁側	須恵器	杯身	13.1	—	4.9	灰	5Y6/1	砂礫：長、英、黒	完形	堅緻	
9	石室玄門部	須恵器	杯身	13.4	—	—	灰	N5/	微砂：長、英		堅緻	
10	石室東壁寄り	須恵器	高林	10.4	7.8	12.7	灰	N6/	細砂：長、英	完形	堅緻	凹形透かし 見込み部 当て具痕
11	石室袖部	須恵器	広口壺	14.2	—	21.8	灰	N5/	砂礫：長、英	ほぼ完	堅緻	
12	石室奥壁側	須恵器	短頸壺	8.5	6.3	8.8	灰	N5/	細砂：長、英	完形	堅緻	穿孔 見込み部 窪み
13	石室東壁寄り	須恵器	短頸壺	6.9	7.1	7.8	灰	N5/	砂礫：長、英	ほぼ完	堅緻	
14	石室奥壁側	須恵器	短頸壺	8.5	8.7	7.8	灰	N6/	細砂：長、英	完形	堅緻	
15	土壌幕	須恵器	杯身	11.6	—	3.8	灰	7.5Y4/1	細砂：長、英	ほぼ完	堅緻	
16	遺構に伴わない遺物	須恵器	杯蓋	15.0	—	4.2	灰	5Y6/1	砂礫：長、英		良好	

### 今岡D遺跡

掲載番号	遺構名	種別	器種	計測値 (cm)				色調		胎土	残存状況	焼成	形態・手法の特徴など
				口径	底径	器高	最大径						
1	竪穴住居 1	弥生	壺	16.6	—	(4.9)	—	にぶい橙	7.5YR6/4	細砂：長、英		良好	
2	竪穴住居 1	弥生	壺	16.2	—	(5.1)	—	にぶい赤褐	5YR4/4	細砂：長、英		良好	頸部 凹線 2条
3	竪穴住居 1	弥生	甕	15.2	—	(2.9)	—	明黄褐	10YR7/6	砂礫：長、英、赤		良好	
4	竪穴住居 1	弥生	甕	14.0	—	(3.1)	—	明黄褐	10YR7/6	微砂：長、英、雲		良好	
5	竪穴住居 2	弥生	甕	—	8.4	(4.0)	—	褐灰	10YR5/1	微砂：長、英、雲		良好	
6	竪穴住居 7	弥生	甕	—	5.7	(3.7)	—	橙	7.5YR6/6	細砂：長		良好	
7	竪穴住居 7	弥生	高杯	14.3	—	(3.8)	—	橙	7.5YR6/6	細砂：長、英		良好	
8	段状遺構 1	弥生	壺	13.2	—	(2.4)	—	橙	7.5YR6/6	細砂：長、英		良好	
9	段状遺構 1	弥生	壺	—	—	(2.2)	—	にぶい黄褐	10YR5/4	細砂：長、英		良好	
10	段状遺構 1	弥生	壺	—	—	(2.8)	—	橙	7.5YR6/6	細砂：長、英		良好	
11	段状遺構 2	弥生	高杯	—	17.8	(2.9)	—	橙	5YR6/8	細砂：長、英、雲、赤		良好	
12	段状遺構 5	弥生	甕	—	8.0	(2.5)	—	にぶい黄褐	10YR5/4	細砂：長、英		良好	
13	段状遺構 5	弥生	鉢	11.0	—	(2.0)	—	灰黄褐	10YR5/2	細砂：長、英、雲、角		良好	
14	段状遺構 5	弥生	高杯	29.2	—	(4.4)	—	にぶい黄橙	10YR7/4	微砂：長、英		良好	
15	段状遺構 10	弥生	甕	15.0	—	(6.7)	—	橙	5YR6/8	砂礫：長、英、雲、角		良好	
16	土壌 3	弥生	壺	—	5.2	(3.0)	—	にぶい褐	7.5YR5/4	微砂：長、英		良好	
17	土壌 4	弥生	高杯	—	—	(7.2)	—	にぶい黄橙	10YR7/3	砂礫：長、英、赤		良好	
18	土壌 4	弥生	高杯	—	—	(1.8)	—	橙	7.5YR7/6	細砂：長、英、赤		良好	
19	遺構に伴わない遺物	弥生	壺	10.4	—	(5.5)	—	にぶい橙	7.5YR6/4	砂礫：長、英		良好	
20	遺構に伴わない遺物	弥生	甕	12.2	—	(2.6)	—	橙	7.5YR7/6	微砂：長、英、雲		良好	外面 煤付首
21	遺構に伴わない遺物	弥生	甕	15.4	—	(3.1)	—	にぶい黄橙	10YR7/4	細砂：長、英、赤		良好	
22	遺構に伴わない遺物	弥生	高杯	—	14.0	(1.5)	—	明赤褐	5YR5/6	微砂：長、英、雲		良好	
23	土壌 13	須恵器		—	—	(3.1)	12.7	灰白	2.5Y7/1	微砂：長		良好	外面 凹線 2条・波状文
24	土壌 13	須恵器	甕	—	—	(9.8)	—	青灰	5B5/1	微砂：長、英		良好	
25	遺構に伴わない遺物	須恵器	壺	22.2	—	(3.2)	—	褐灰	7.5YR6/1	微砂：長		良好	外面 凹線 1条・波状文
26	遺構に伴わない遺物	須恵器	壺	—	—	(3.6)	—	赤灰	7.5R5/1	砂礫：長		良好	
27	遺構に伴わない遺物	須恵器	甕	—	—	(8.6)	—	灰	N6/	精良	1/8 残	良好	
28	遺構に伴わない遺物	須恵器	台付皿	15.8	10.8	3.1	—	灰	N6/	微砂：長		良好	

### 今岡中山遺跡

掲載番号	遺構名	種別	器種	計測値 (cm)			色調		胎土	残存状況	焼成	形態・手法の特徴など	
				口径	底径	器高							
1	竪穴住居 2	弥生	甕	15.2	—	(4.7)	—	にぶい黄橙	10YR7/4	砂礫：長、英、赤		良好	口縁部 掘凹線 2条 外面 煤付首
2	竪穴住居 2	弥生	甕	16.4	—	(7.1)	—	暗赤褐	2.5YR3/2	細砂：長、英、雲		良好	
3	竪穴住居 2	弥生	甕	24.0	—	(3.2)	—	明黄褐	10YR6/6	砂礫：長、英、雲		良好	
4	竪穴住居 2	弥生	甕	—	4.2	(3.4)	—	橙	7.5YR6/6	細砂：長、英、雲		良好	
5	竪穴住居 2	弥生	甕	—	3.0	(3.9)	—	にぶい褐	7.5YR6/3	砂礫：長、英、赤		良好	
6	竪穴住居 2	弥生	壺	—	4.2	(4.0)	—	明黄褐	10YR7/6	砂礫：長、英、赤		良好	
7	竪穴住居 2	弥生	甕	—	2.2	(2.8)	—	明褐	7.5YR5/6	細砂：長、英、赤		良好	
8	竪穴住居 2	弥生	高杯	—	—	(4.6)	—	橙	7.5YR6/6	精良：赤		良好	
9	竪穴住居 2	弥生	高杯	—	—	(4.2)	—	橙	7.5YR7/6	砂礫：長、英、赤		良好	
10	竪穴住居 2	弥生	高杯	—	16.0	(5.8)	—	橙	5YR6/6	砂礫：長、英、赤		良好	内面 黒斑
11	竪穴住居 2	弥生	鼓形器台	—	12.0	(5.4)	—	浅黄橙	10YR8/4	砂礫：長、英、赤		良好	
12	段状遺構 2	弥生	壺	—	—	(1.7)	—	にぶい黄褐	10YR5/3	砂礫：長、英、赤		良好	
13	段状遺構 2	弥生	甕	(14.4)	—	(6.0)	—	橙	7.5YR6/6	砂礫：長、英、赤		良好	
14	段状遺構 2	弥生	甕	12.0	—	(8.6)	—	橙	7.5YR7/6	砂礫：長、英、雲、赤		良好	
15	段状遺構 2	弥生	甕	—	4.2	(2.2)	—	暗灰	N3/	砂礫：長、英、赤		良好	
16	段状遺構 2	弥生	壺	—	5.0	(1.7)	—	灰褐	7.5YR5/2	細砂：長、英、赤		良好	
17	段状遺構 4	弥生	高杯	—	—	(7.9)	—	浅黄	2.5Y7/3	砂礫：長、英、雲、赤		良好	
18	段状遺構 4	弥生	台付鉢	11.2	—	8.0	—	明黄褐	10YR6/6	砂礫：長、英、雲、赤	1/6 残	良好	
19	段状遺構 4	弥生	器台	—	—	(4.9)	—	にぶい橙	7.5YR7/4	砂礫：長、英、赤		良好	貼付突起 2条
20	段状遺構 5	弥生	長頸壺	16.8	5.0	42.5	—	にぶい橙	7.5YR7/4	砂礫：長、英、赤	1/3 残	良好	口縁内側 凹形浮文
21	段状遺構 5	弥生	長頸壺	15.8	—	(15.0)	—	橙	5YR7/6	砂礫：長、赤		良好	口縁内側 凹形浮文
22	段状遺構 5	弥生	長頸壺	15.6	—	(10.3)	—	橙	7.5YR6/6	砂礫：長、英、赤		良好	口縁部 掘凹線 2条 赤色顔料付首
23	段状遺構 5	弥生	長頸壺	18.2	—	(6.6)	—	浅黄橙	10YR8/3	砂礫：長、英		良好	
24	段状遺構 5	弥生	直口壺	16.0	—	(9.4)	—	橙	7.5YR6/6	砂礫：長、英、赤		良好	

掲載番号	遺構名	種別	器種	計測値 (cm)			色調	胎土	残存状況	焼成	形態・手法の特徴など	
				口径	底径	器高						
25	段状遺構 5	弥生	壺	16.3	—	(11.9)	にぶい黄粉	10YR6/4	砂礫：長、英、赤		良好	刺突文
26	段状遺構 5	弥生	壺	—	2.0	(12.7)	明赤褐	2.5YR5/8	砂礫：長、英、赤		良好	
27	段状遺構 5	弥生	壺	—	—	(1.8)	黒	10YR2/1	細砂：長、英、赤		良好	口縁部 凹形浮文・竹管文
28	段状遺構 5	弥生	直口壺	—	—	(5.3)	にぶい黄粉	10YR7/4	砂礫：長、英、赤		良好	
29	段状遺構 5	弥生	直口壺	—	—	(6.4)	橙	7.5YR6/6	砂礫：長、英、赤		良好	
30	段状遺構 5	弥生	壺	—	5.4	(6.9)	灰黄褐	10YR5/2	砂礫：長、英		良好	
31	段状遺構 5	弥生	甕	16.6	6.6	30.0	橙	7.5YR6/6	砂礫：長、英、赤	1/2 残	良好	口縁部 擬凹線 3 条 外面 煤付着
32	段状遺構 5	弥生	甕	16.0	6.0	25	にぶい黄粉	7.5YR6/4	砂礫：長、英、赤	1/2 残	良好	口縁部 擬凹線 1 条 外面 煤付着
33	段状遺構 5	弥生	甕	18.9	4.5	26.5	にぶい粉	7.5YR6/4	砂礫：長、英、赤	ほぼ 完形	良好	口縁部 擬凹線 2 条 外面 煤付着
34	段状遺構 5	弥生	甕	15.4	—	(3.5)	にぶい黄粉	10YR6/4	砂礫：長、英		良好	外面 タタキ
35	段状遺構 5	弥生	甕	—	—	(5.0)	粉	5YR6/6	砂礫		良好	
36	段状遺構 5	弥生	甕	—	5.4	(2.9)	明赤褐	2.5YR5/8	砂礫：長、英、赤		良好	外面 赤色顔料付着
37	段状遺構 5	弥生	甕	—	6.0	(3.5)	にぶい粉	7.5YR6/3	砂礫：長、英、赤		良好	
38	段状遺構 5	弥生	甕	—	2.4	(2.8)	橙	5YR6/6	砂礫：長、英		良好	
39	段状遺構 5	弥生	高杯	25.2	20.4	17.9	橙	5YR6/6	砂礫	3/4 残	良好	口縁部 鋸歯文・竹管文 脚部 凹形透かし
40	段状遺構 5	弥生	高杯	22.0	15.5	18.7	橙	7.5YR6/6	砂礫：長、英、赤	1/3 残	良好	脚部 凹形透かし
41	段状遺構 5	弥生	高杯	24.4	—	(13.8)	にぶい黄粉	10YR7/4	細砂：長、英、赤		良好	脚部 凹形透かし
42	段状遺構 5	弥生	高杯	25.2	—	(11.7)	明赤褐	7.5YR5/6	砂礫：長、英、赤		良好	
43	段状遺構 5	弥生	高杯	—	—	(12.5)	にぶい黄粉	10YR7/4	砂礫：長、英、赤		良好	脚部 凹形透かし
44	段状遺構 5	弥生	高杯	30.2	—	(14.5)	にぶい粉	7.5YR6/4	砂礫：長、英、赤		良好	
45	段状遺構 5	弥生	高杯	—	—	(11.6)	にぶい粉	10YR7/4	砂礫：長、英		良好	脚部 凹形透かし
46	段状遺構 5	弥生	高杯	—	—	(10.3)	にぶい粉	7.5YR6/4	砂礫：長、英、赤		良好	脚部 凹形透かし
47	段状遺構 5	弥生	高杯	28.0	—	(4.4)	橙	5YR6/6	砂礫：長、英、赤		良好	擬凹線 2 条 外面 赤色顔料付着
48	段状遺構 5	弥生	高杯	—	—	(3.4)	橙	5YR6/6	砂礫		良好	
49	段状遺構 5	弥生	高杯	—	(14.0)	(7.5)	にぶい黄粉	10YR7/3	砂礫：長、英、赤		良好	脚部 凹形透かし
50	段状遺構 5	弥生	高杯	—	13.7	(8.0)	橙	5YR7/6	砂礫：長、英、赤		良好	脚部 凹形透かし
51	段状遺構 5	弥生	高杯	—	16.8	(3.9)	にぶい黄粉	10YR5/4	砂礫：長、英、赤		良好	脚部 凹形透かし
52	段状遺構 5	弥生	高杯	—	—	(4.0)	橙	7.5YR6/6	精良		良好	
53	段状遺構 5	弥生	鉢	17.0	3.4	11.3	暗灰黄	2.5Y4/2	細砂：長、英、赤	1/4 残	良好	
54	段状遺構 5	弥生	器台	46.4	39.0	36.7	橙	7.5YR7/6	砂礫：長、英、赤	1/4 残	良好	口縁内側 凹形浮文 脚部 長方形透かし・貼付突帯 脚部 凹形透かし
55	段状遺構 5	弥生	器台	45.0	39.4	36.8	にぶい黄粉	10YR5/4	砂礫：長、英、赤	1/4 残	良好	口縁部 凹形浮文・鋸歯文・波 状文 脚部 長方形透かし・ 貼付突帯 脚部 凹形透かし
56	段状遺構 5	弥生	器台	45.2	—	(8.0)	にぶい黄粉	10YR6/3	砂礫：長、英、赤		良好	
57	段状遺構 5	弥生	器台	41.9	42.9	35.3	明黄褐	10YR7/6	砂礫：長、英、赤	1/3 残	良好	口縁部 凹形浮文 脚部 長方形透かし・貼付突帯 脚部 凹形透かし
58	段状遺構 5	弥生	器台	42.0	34.8	30.5	にぶい黄粉	10YR7/4	砂礫：長、英、赤	1/3 残	良好	口縁部 凹形浮文 脚部 長方形透かし・貼付突帯 脚部 凹形透かし
59	段状遺構 5	弥生	器台	38.8	—	(20.5)	浅黄粉	10YR8/4	砂礫：長、英、赤		良好	口縁部 凹形浮文 脚部 貼付突帯
60	段状遺構 5	弥生	器台	—	—	(2.3)	橙	5YR6/6	精良		良好	口縁部 渦巻状浮文
61	段状遺構 5	弥生	器台	32.2	—	(1.8)	にぶい黄粉	10YR7/4	細砂：長、英、赤		良好	口縁部 凹線 3 条・凹形浮文
62	段状遺構 5	弥生	器台	—	—	(5.2)	橙	7.5YR6/6	砂礫：長、英、赤		良好	凹形透かし
63	竪穴住居 3	土師器	甕	21.4	—	(17.0)	にぶい粉	7.5YR6/4	砂礫：長、英、赤		良好	
64	竪穴住居 3	土師器	甕	22.0	—	(9.4)	褐灰	7.5YR4/1	微砂：長、英、赤		良好	
65	竪穴住居 3・4	須恵器	杯身	12.2	—	(3.5)	黄灰	2.5Y5/1	精良		良好	外面 自然釉
66	竪穴住居 4	須恵器	杯身	13.6	7.6	4.1	暗灰	N3/	砂礫：長、英	ほぼ 完形	良好	
67	竪穴住居 4	須恵器	杯身	13.3	10.0	(3.1)	灰白	N7/	精良		良好	
68	竪穴住居 4	須恵器	杯身	15.2	11.3	4.8	灰	10Y5/1	砂礫：長、英、赤	ほぼ 完形	良好	貼付高台
69	遺構に伴わない遺物	弥生	壺	19.2	—	(2.0)	黒粉	2.5Y3/2	細砂：長、英、赤		良好	
70	遺構に伴わない遺物	弥生	甕	—	—	(2.1)	橙	7.5YR6/6	細砂：長、英		良好	
71	遺構に伴わない遺物	弥生	甕	—	—	(4.9)	にぶい粉	7.5YR6/3	砂礫：長、英、赤		良好	外面 煤付着
72	遺構に伴わない遺物	弥生	高杯	—	—	(4.6)	橙	7.5YR6/6	砂礫：長、英、赤		良好	脚部 凹形透かし
73	遺構に伴わない遺物	須恵器	壺	—	—	(6.0)	暗灰	N3/	精良		良好	内面 自然釉
74	遺構に伴わない遺物	須恵器	壺	—	7.4	(1.9)	黄灰	2.5Y6/1	精良		良好	内外面 自然釉
75	遺構に伴わない遺物	須恵器	甕	—	—	(6.2)	灰	N4/	精良		良好	

### 今岡古墳群

掲載番号	遺構名	種別	器種	計測値 (cm)				色調	胎土	残存状況	焼成	形態・手法の特徴など	
				口径	底径	器高	最大径						
1	今岡 2 号墳	埴輪	凹高埴輪	—	—	(6.8)	—	橙	5YR7/6	粗砂：長、英、赤		良好	
2	今岡 5 号墳	須恵器	杯身	12.8	—	(2.5)	15.2	灰	N4/	精良		良好	
3	今岡 7 号墳 周溝	須恵器	甕	18.0	—	17.2	—	灰	N6/	精良		良好	
4	今岡 11 号墳	須恵器	杯身	10.6	8.6	3.0	—	灰	5Y6/1	細砂：長、英		完形	堅緻
5	今岡 11 号墳	須恵器	長頸壺	8.2	7.9	21.2	15.0	灰	5Y6/1	微砂：長、英	ほぼ 完形	堅緻	頸部 沈線 2 条 肩部 沈線 3 条・刺突文
6	今岡 11 号墳	須恵器	提瓶	8.6	—	25.7	17.2	オリーブ灰	2.5GY6/1	砂礫：長、英	ほぼ 完形	堅緻	浮文状の把手
7	今岡 11 号墳	須恵器	提瓶	—	—	(8.7)	(20.0)	灰	N5/	砂礫：長、英		堅緻	

掲載番号	遺構名	種別	器種	計測値 (cm)				色調	胎土	残存状況	焼成	形態・手法の特徴など	
				口径	底径	器高	最大径						
8	今岡12号墳	須恵器	杯身	10.8	5.1	3.7	—	灰	N6/	砂礫:長、英	完形	堅緻	見込み 線刻
9	今岡12号墳	須恵器	杯身	10.8	5.3	3.7	—	灰白	2.5Y7/1	精良	完形	堅緻	
10	今岡12号墳	須恵器	椀	7.8	6.0	3.7	—	灰	N6/	細砂:長、英	完形	堅緻	底部 線刻
11	今岡12号墳	須恵器	半瓶	6.2	—	13.6	15.8	灰	N6/	微砂:長、英	ほぼ完形	堅緻	
12	今岡12号墳	須恵器	半瓶	6.7	—	14.3	15.0	灰	7.5Y5/1	砂礫:長、英	ほぼ完形	堅緻	
13	土城墓1	須恵器	杯蓋	13.4	—	4.4	—	にぶい褐	7.5YR5/4	砂礫:長、英、赤	ほぼ完形	不良	
14	土城墓1	須恵器	杯身	11.7	—	4.1	13.9	にぶい褐	7.5YR6/3	砂礫:長、英、赤		良好	
15	土城墓1	須恵器	杯身	14.6	—	(2.35)	16.7	緑灰	7.5GY6/1	微砂:長、英黒		良好	
16	土城墓1	須恵器	杯身	12.6	—	4.3	14.7	明黄褐	10YR6/6	砂礫:長、英	4/5 残	不良	
17	土城墓1	須恵器	提瓶	—	—	(17.9)	18.2	灰白	2.5Y7/1	細砂:長、英		良好	貼付把手

### 高岡遺跡

掲載番号	遺構名	種別	器種	計測値 (cm)				色調	胎土	残存状況	焼成	形態・手法の特徴など	
				口径	底径	器高	最大径						
1	竪穴住居1	弥生	甕	10.8	—	(4.3)	—	にぶい橙	7.5YR6/4	微砂:長、英、赤		良好	口縁部 沈線1条
2	竪穴住居1	弥生	甕	13.0	—	(3.5)	—	にぶい黄橙	10YR7/4	砂礫:長、英、赤		良好	
3	竪穴住居1	弥生	甕	11.2	—	(3.5)	—	にぶい橙	7.5YR6/4	砂礫:長、英、赤		良好	外面 煤付着
4	竪穴住居1	弥生	甕	14.8	—	(5.0)	—	にぶい黄橙	10YR7/3	砂礫:長、英、赤		良好	外面 タタキ 赤色顔料付着 煤付着
5	竪穴住居1	弥生	甕	12.8	—	(4.5)	—	にぶい黄橙	10YR6/3	砂礫:長、英、赤		良好	口縁部 凹線2条 外面 タタキ
6	竪穴住居1	弥生	甕	—	—	(5.9)	—	にぶい黄橙	10YR7/4	細砂:長、英、赤		良好	外面 タタキ 煤付着
7	竪穴住居1	弥生	甕	—	5.3	(2.7)	—	灰黄褐	10YR5/2	細砂:長、英、赤		良好	
8	竪穴住居1	弥生	甕	—	3.7	(2.1)	—	にぶい黄橙	10YR6/3	砂礫:長、英、赤		良好	外面 タタキ
9	竪穴住居1	弥生	鉢	14.4	—	(4.3)	—	橙	7.5YR7/6	細砂:長、英		良好	
10	竪穴住居1	弥生	高杯	—	14.8	(3.1)	—	明褐	7.5YR5/6	微砂:長、英、赤		良好	脚部 円形透かし
11	竪穴住居1	弥生	高杯	—	13.0	(1.9)	—	橙	5YR6/8	微砂:長、赤		良好	脚部 円形透かし
12	竪穴住居1	弥生	不明	—	—	(6.0)	—	橙	7.5YR6/6	微砂:長、英		良好	貼付突帯
13	竪穴住居1	弥生	不明	—	—	(4.0)	—	橙	7.5YR6/6	精良		良好	襷描沈線文
14	竪穴住居1 床面	弥生	壺	11.9	—	(4.4)	—	にぶい橙	7.5YR7/4	細砂:長、英、赤		良好	
15	竪穴住居1 床面	弥生	壺	11.9	—	(12.4)	—	にぶい黄橙	10YR7/4	砂礫:長、英、赤		良好	
16	竪穴住居1 床面	弥生	甕	17.8	5.0	31.7	24.2	にぶい黄橙	10YR7/3	砂礫:長、英、赤	ほぼ完形	良好	外面 煤付着
17	竪穴住居1 床面	弥生	甕	17.0	—	(2.0)	—	橙	5YR6/6	微砂:長、英、赤		良好	口縁部 凹線1条
18	竪穴住居1 床面	弥生	甕	17.5	—	(6.1)	—	にぶい橙	7.5YR6/4	微砂:長、英、赤		良好	外面 煤付着
19	竪穴住居1 床面	弥生	甕	15.0	—	(6.2)	—	橙	5YR6/6	微砂:長、雲		良好	外面 タタキ
20	竪穴住居1 床面	弥生	甕	—	5.1	(10.7)	—	明赤褐	5YR5/6	微砂:長、英		良好	外面 タタキ 底部 穿孔
21	竪穴住居1 床面	弥生	甕	14.0	—	(3.6)	—	にぶい赤褐	5YR5/4	微砂:長、英		良好	
22	竪穴住居1 床面	弥生	甕	—	3.9	(4.4)	—	にぶい赤褐	5YR5/4	精良		良好	内面 炭化物付着
23	竪穴住居1 床面	弥生	鉢	13.1	4.7	7.3	—	にぶい黄橙	10YR5/3	微砂:長、英、赤	1/5 残	良好	
24	竪穴住居1 床面	弥生	鉢	12.1	4.4	7.0	—	にぶい黄橙	10YR7/4	微砂:長、英、赤		良好	
25	竪穴住居1 床面	弥生	鉢	19.2	1.8	13.7	—	にぶい橙	7.5YR7/4	微砂:長、英、赤	2/3 残	良好	外面 煤付着
26	竪穴住居1 床面	弥生	直口壺	4.6	—	(9.3)	—	にぶい橙	7.5YR6/4	微砂:長、英、赤		良好	
27	竪穴住居2	弥生	甕	20.5	—	(4.7)	—	にぶい橙	7.5YR6/4	細砂:長、英、赤		良好	
28	竪穴住居2	弥生	甕	—	—	(4.0)	—	にぶい黄橙	10YR7/3	砂礫:長、英		良好	
29	竪穴住居2	弥生	甕	—	3.3	(2.5)	—	にぶい橙	7.5YR6/4	細砂:長、英、赤		良好	内面 炭化物付着
30	竪穴住居2	弥生	甕	—	3.3	(5.0)	—	にぶい黄橙	10YR6/4	微砂:長、英、赤		良好	外面 タタキ
31	竪穴住居2	弥生	高杯	13.3	—	(9.3)	—	にぶい黄橙	10YR6/3	細砂:長、英、赤		良好	
32	竪穴住居2	弥生	高杯	—	14.8	(10.5)	—	にぶい橙	7.5YR7/4	微砂:長、英、赤		良好	脚部 円形透かし
33	竪穴住居3	弥生	甕	—	—	(2.5)	—	橙	5YR6/6	微砂:長		良好	
34	竪穴住居3	弥生	甕	—	—	(2.7)	—	橙	7.5YR6/6	微砂:長		良好	
35	竪穴住居3	弥生	甕	—	—	(3.4)	—	黄橙	10YR8/6	細砂:長、英		良好	
36	竪穴住居3	弥生	甕	—	—	(1.9)	—	橙	5YR7/6	微砂:長		良好	
37	竪穴住居3	弥生	甕	—	—	(3.7)	—	橙	5YR6/8	微砂:長、雲		良好	
38	竪穴住居3	弥生	甕	11.6	—	(2.0)	—	明赤褐	5YR5/6	微砂:長		良好	
39	竪穴住居3	弥生	甕	12.4	—	(2.6)	—	橙	7.5YR7/6	砂礫:長、英		良好	
40	竪穴住居3	弥生	甕	14.0	—	(2.7)	—	橙	5YR6/8	微砂:長		良好	
41	竪穴住居3	弥生	甕	16.0	—	(6.4)	—	橙	5YR6/8	微砂:長		良好	
42	竪穴住居3	弥生	甕	18.0	—	(1.8)	—	橙	5YR6/8	微砂:長、雲		良好	
43	竪穴住居3	弥生	甕	—	—	(2.6)	—	にぶい橙	7.5YR6/4	微砂:長		良好	
44	竪穴住居3	弥生	甕	—	2.4	(2.9)	—	浅黄橙	10YR8/4	細砂:長、英		良好	
45	竪穴住居3	弥生	甕	10.6	—	(12.8)	—	明赤褐	5YR5/6	微砂:長		良好	外面 タタキ 煤付着
46	竪穴住居3	弥生	甕	—	3.8	(3.6)	—	橙	7.5YR7/6	微砂:長、雲		良好	外面 タタキ
47	竪穴住居3	弥生	高杯	20.2	—	(3.4)	—	橙	7.5YR7/6	細砂:長、英		良好	
48	竪穴住居3	弥生	高杯	—	16.8	(2.1)	—	浅黄橙	10YR8/4	細砂:長、英		良好	脚部 円形透かし
49	竪穴住居3	弥生	高杯	—	—	(3.6)	—	黄橙	7.5YR8/8	砂礫:長、英		良好	
50	竪穴住居3	弥生	台付鉢	—	4.6	(2.4)	—	浅黄橙	10YR8/3	細砂:長、英		良好	
51	竪穴住居3	弥生	台付鉢	—	8.0	(2.9)	—	明黄褐	10YR7/6	砂礫:長		良好	
52	竪穴住居3	弥生	台付鉢	—	8.6	(4.0)	—	黄橙	10YR8/6	細砂:長、英		良好	
53	竪穴住居3	弥生	直口壺	13.0	—	(11.9)	—	橙	7.5YR6/8	砂礫:長、英		良好	貼付突帯
54	竪穴住居3	弥生	甕	—	—	(3.3)	—	橙	7.5YR6/8	微砂:長、英		良好	
55	竪穴住居3	弥生	甕	—	—	(3.3)	—	橙	7.5YR7/6	微砂:長、雲		良好	
56	竪穴住居3	弥生	甕	—	4.7	(2.3)	—	橙	2.5YR6/6	細砂:長、英		良好	

掲載番号	遺構名	種別	器種	計測値 (cm)				色調	胎土	残存状況	焼成	形態・手法の特徴など	
				口径	底径	器高	最大径						
57	段状遺構1 上層	弥生	壺	—	—	(1.9)	—	にぶい黄橙	10YR6/3	精良		良好	内外面 赤色顔料付着
58	段状遺構1 上層	弥生	高杯	—	—	(9.2)	—	にぶい黄橙	10YR6/4	砂礫：長、英、赤		良好	脚部 円形透かし
59	段状遺構1 上層	弥生	鉢	35.3	—	(9.0)	—	にぶい褐	7.5YR5/3	細砂：長、英		良好	貼付の把手
60	段状遺構1 下層	弥生	壺	16.2	—	(9.5)	—	にぶい黄橙	10YR6/4	細砂：長、英、赤		良好	
61	段状遺構1 下層	弥生	甕	8.1	—	(4.0)	—	にぶい橙	7.5YR6/4	細砂：長、英、赤		良好	
62	段状遺構1 下層	弥生	壺	—	—	(6.7)	—	にぶい橙	7.5YR6/4	細砂：長、英、赤		良好	外面 タタキ
63	段状遺構1 下層	弥生	壺	—	3.3	(3.3)	—	にぶい黄褐	10YR5/3	砂礫：長、英、赤		良好	外面 タタキ
64	段状遺構1 下層	弥生	甕	—	2.6	(3.3)	—	にぶい褐	7.5YR5/4	微砂：長、英、赤		良好	外面 タタキ
65	段状遺構1 下層	弥生	甕	—	2.9	(6.0)	—	明黄褐	10YR7/6	砂礫：長、英、赤		良好	
66	段状遺構1 下層	弥生	高杯	—	—	(4.1)	—	にぶい黄橙	10YR6/4	細砂：長、英、赤		良好	
67	段状遺構1 下層	弥生	高杯	—	—	(5.8)	—	橙	7.5YR6/6	砂礫：長、英、赤		良好	
68	段状遺構1 下層	弥生	高杯	—	—	(3.9)	—	にぶい黄橙	10YR6/4	砂礫：長、英、赤		良好	
69	段状遺構1 下層	弥生	鉢	—	4.5	(2.0)	—	橙	2.5YR6/8	砂礫：長、英、赤		良好	
70	段状遺構1 下層	弥生	鉢	—	3.3	(2.5)	—	にぶい橙	7.5YR6/4	砂礫：長、英、赤		良好	外面 タタキ
71	段状遺構1 床面	弥生	壺	12.4	—	(5.3)	—	にぶい黄橙	10YR6/3	砂礫：長、英、赤		良好	
72	段状遺構1 床面	弥生	壺	—	4.3	(5.2)	—	にぶい赤褐	5YR5/4	細砂：長、英、赤		良好	
73	段状遺構1 床面	弥生	鉢	15.7	3.8	6.2	—	にぶい黄橙	10YR7/4	砂礫：長、英、赤	1/2 残	良好	
74	段状遺構1 床面	弥生	鉢	—	3.9	(2.1)	—	にぶい黄褐	10YR5/3	砂礫：長、英、赤		良好	
75	段状遺構2 A	弥生	甕	14.0	—	(7.0)	—	にぶい黄褐	10YR7/4	細砂：長、英、赤		良好	
76	段状遺構2 A	弥生	甕	—	—	(6.7)	—	橙	7.5YR6/6	細砂：長、英、雲		良好	
77	段状遺構2 A	弥生	壺	12.5	—	(4.0)	—	にぶい黄橙	10YR6/4	細砂：長、英、赤		良好	
78	段状遺構2 A	弥生	壺	—	—	(2.7)	—	橙	7.5YR6/8	細砂：長、雲		良好	
79	段状遺構2 A	弥生	甕	—	3.6	(5.0)	—	にぶい黄橙	10YR6/4	微砂：長、英、赤		良好	
80	段状遺構2 A	弥生	甕	—	3.2	(5.8)	—	橙	7.5YR6/6	砂礫：長、英		良好	
81	段状遺構2 A	弥生	甕	—	4.2	(2.9)	—	にぶい黄橙	10YR6/3	細砂：長、英、赤		良好	外面 煤付着
82	段状遺構2 A	弥生	甕	—	2.0	(2.4)	—	橙	7.5YR6/6	微砂：長、英、赤		良好	外面 タタキ
83	段状遺構2 A	弥生	壺	—	3.6	(3.6)	—	にぶい黄橙	10YR6/4	微砂：長、赤、黒		良好	
84	段状遺構2 A	弥生	壺	—	4.6	(3.3)	—	浅黄橙	10YR8/3	細砂：長、雲		良好	
85	段状遺構2 A	弥生	高杯	—	—	(7.4)	—	にぶい褐	7.5YR5/4	細砂：長、英、赤		良好	
86	段状遺構2 A	弥生	高杯	—	—	(3.6)	—	黄褐	2.5Y5/3	細砂：長、英、赤、黒		良好	
87	段状遺構2 A	弥生	鉢	10.2	4.8	9.8	11.0	浅黄橙	10YR8/4	微砂：長、雲	1/6 残	良好	
88	段状遺構2 A	弥生	鉢	22.4	—	(9.0)	—	にぶい橙	7.5YR6/4	細砂：長、英、赤		良好	貼付の把手
89	段状遺構2 B	弥生	壺	12.8	—	(4.8)	—	橙	7.5YR6/6	砂礫：長、英		良好	
90	段状遺構2 B	弥生	甕	14.1	—	(3.6)	—	橙	7.5YR6/6	細砂：長、英		良好	
91	段状遺構2 B	弥生	甕	—	—	(3.0)	—	にぶい褐	7.5YR6/3	細砂：長、英		良好	
92	段状遺構2 B	弥生	壺	—	—	(2.1)	—	にぶい橙	7.5YR6/4	細砂：長、英、赤		良好	外面 煤付着
93	段状遺構2 B	弥生	高杯	—	—	(8.3)	—	にぶい橙	7.5YR6/4	微砂：長、英、赤		良好	脚部 円形透かし
94	段状遺構2 B	弥生	高杯	—	—	(4.8)	—	にぶい黄橙	10YR6/4	微砂：長、英		良好	
95	段状遺構2 B	弥生	高杯	—	15.9	(5.7)	—	にぶい黄橙	10YR7/4	砂礫：長、英		良好	
96	段状遺構2 B 柱穴	弥生	壺	14.0	—	(12.9)	18.2	橙	7.5YR6/6	砂礫：長、英、赤		良好	
97	段状遺構2 B 柱穴	弥生	壺	14.2	—	(5.7)	—	にぶい黄橙	10YR7/4	砂礫：長、英		良好	
98	段状遺構2 B 柱穴	弥生	甕	—	9.0	(7.2)	—	明赤褐	5YR5/6	砂礫：長、英、赤		良好	
99	段状遺構2 B 柱穴	弥生	高杯	—	—	(5.2)	—	橙	5YR6/6	細砂：長、英、赤		良好	脚部 円形透かし
100	段状遺構2 I.壊2	弥生	甕	15.7	—	(5.1)	—	橙	5YR6/6	細砂：長、英		良好	
101	段状遺構2 I.壊2	弥生	壺	15.6	—	(2.0)	—	にぶい橙	7.5YR6/4	細砂：長、英		良好	
102	段状遺構2 I.壊2	弥生	壺	—	—	(4.6)	—	にぶい橙	7.5YR6/4	細砂：長、英		良好	
103	段状遺構2 土壊2	弥生	壺	—	4.9	(3.0)	—	橙	2.5YR6/8	砂礫：長、英、赤		良好	
104	段状遺構2 土壊2	弥生	壺	—	5.6	(2.1)	—	橙	7.5YR7/6	砂礫：長、英		良好	脚部 円形透かし
105	段状遺構2 I.壊2	弥生	高杯	22.0	—	(3.0)	—	橙	7.5YR6/6	砂礫：長、英、赤		良好	
106	段状遺構3	弥生	甕	14.2	—	(4.5)	—	橙	5YR6/8	細砂：長、雲		良好	
107	段状遺構3	弥生	壺	15.0	—	(3.1)	—	橙	5YR6/8	細砂：長、英		良好	口縁部 凹線1条
108	段状遺構3	弥生	壺	—	—	(4.5)	—	橙	7.5YR7/6	微砂：長、英		良好	外面 煤付着
109	段状遺構3	弥生	壺	—	—	(3.1)	—	橙	5YR6/8	細砂：長、雲		良好	
110	段状遺構3	弥生	壺	—	—	(3.1)	—	橙	5YR6/8	微砂：長、英		良好	
111	段状遺構3	弥生	壺	—	4.1	(6.4)	—	浅黄橙	7.5YR8/6	細砂：長		良好	
112	段状遺構3	弥生	高杯	—	—	(2.4)	—	橙	7.5YR7/6	微砂：長、赤		良好	脚部 円形透かし
113	土壊1	弥生	壺	11.0	—	(3.1)	—	黄橙	10YR8/6	微砂：長、英		良好	外面 煤付着
114	土壊1	弥生	高杯	19.8	—	(3.0)	—	黄橙	10YR8/6	微砂：長、雲		良好	
115	土壊1	弥生	壺	—	4.4	(3.1)	—	にぶい黄橙	10YR7/4	微砂：長		良好	
116	土壊1	弥生	鉢	—	—	(3.7)	—	明黄橙	10YR7/6	細砂：長、英		良好	
117	土壊1	弥生	高杯	24.4	—	(5.7)	—	橙	7.5YR6/8	微砂：長、雲、赤	3/4 残	良好	
118	土壊2	弥生	高杯	—	—	(3.8)	—	橙	7.5YR7/6	細砂：長、英		良好	
119	土壊2	弥生	鉢	13.0	3.9	7.0	—	浅黄橙	7.5YR8/6	細砂：長、雲		良好	外面 煤付着
120	土壊3	弥生	壺	—	—	(1.7)	—	橙	5YR6/8	砂礫：長、英、赤		良好	
121	土壊3	弥生	壺	—	3.4	(2.6)	—	橙	5YR6/6	細砂：長、英		良好	
122	土壊5	弥生	高杯	—	—	(3.1)	—	橙	7.5YR6/6	細砂：長、英		良好	
123	土壊5	弥生	壺	—	—	(2.5)	—	橙	7.5YR7/6	細砂：長、英、赤		良好	
124	土壊7	弥生	壺	15.5	—	(6.4)	—	橙	7.5YR6/6	砂礫：長、英		良好	口縁部 凹線4条
125	土壊7	弥生	壺	4.6	—	(4.1)	5.0	橙	5YR6/6	微砂：長、英		良好	
126	土壊7	弥生	壺	—	—	(2.0)	—	橙	5YR6/6	微砂：長、英		良好	
127	土壊7	弥生	壺	12.4	—	(3.8)	—	橙	5YR6/8	細砂：長、英		良好	
128	土壊7	弥生	壺	15.8	—	(7.8)	—	橙	7.5YR6/8	細砂：長、英		良好	

石器観察表

八幡山遺跡

掲載番号	遺構名	器種	材質	計測値 (mm)				重量 (g)	時期	備考
				長さ	幅	厚さ	孔径			
S 1	竪穴住居 1	斧	粘板岩状緑色岩	42.5	29.0	5.0	—	9.03	弥・中	扁平片刃
S 2	竪穴住居 1	石包丁	粘板岩状緑色岩	(89.0)	(43.5)	8.0	5.5	33.28	弥・中	孔3個
S 3	竪穴住居 1	鎌	サヌカイト	(37.0)	16.5	4.0	—	2.4	弥・中	
S 4	竪穴住居 1	鎌	サヌカイト	18.2	10.5	3.4	—	0.63	弥・中	
S 5	竪穴住居 1	鎌	サヌカイト	17.0	13.0	4.0	—	1.02	弥・中	
S 6	竪穴住居 1	鎌	サヌカイト	(16.5)	11.5	2.7	—	0.54	弥・中	
S 7	竪穴住居 1	鎌	サヌカイト	25.0	11.5	6.0	—	1.48	弥・中	
S 8	竪穴住居 3	鎌	サヌカイト	30.5	12.5	5.0	—	1.45	弥・中	
S 9	竪穴住居 3	鎌	サヌカイト	16.3	13.0	2.9	—	0.67	弥・中	
S10	竪穴住居 3	鎌	サヌカイト	(12.5)	10.0	2.0	—	0.31	弥・中	
S11	竪穴住居 3	鎌	サヌカイト	17.0	10.0	4.0	—	0.63	弥・中	
S12	竪穴住居 3	鎌	サヌカイト	26.5	11.5	4.8	—	1.3	弥・中	
S13	竪穴住居 3	鎌	サヌカイト	24.0	11.5	4.0	—	1.03	弥・中	
S14	竪穴住居 3	鎌	サヌカイト	37.5	14.0	6.5	—	2.71	弥・中	
S15	竪穴住居 3	鎌	サヌカイト	32.0	12.0	7.0	—	2.53	弥・中	
S16	竪穴住居 3	鎌	サヌカイト	24.5	10.0	5.0	—	1.2	弥・中	
S17	竪穴住居 3	砥石	流紋岩	43.0	27.5	9.8	—	11.14	弥・中	全面使用面
S18	竪穴住居 4	砥石	流紋岩	73.5	43.0	12.5	—	60.84	弥・後	全面使用面
S19	竪穴住居 4	原石	安山岩	305.0	(211.5)	70.0	—	7950.0	弥・後	
S20	竪穴住居 5	鎌	サヌカイト	(17.0)	8.5	2.5	—	0.39	弥生	
S21	竪穴住居 5	斧	流紋岩	120.0	53.0	20.0	—	188.6	弥生	扁平片刃
S22	竪穴住居 6	斧	粘板岩	69.0	25.0	9.0	—	24.49	弥・中	扁平片刃?
S23	段状遺構 3	石包丁	粘板岩状緑色岩	112.0	63.0	7.0	—	66.47	弥・後	未製品
S24	P 1	鎌	サヌカイト	(25.0)	18.0	5.0	—	1.84	弥生	
S25	段状遺構 15	石包丁	粘板岩状緑色岩	(95.0)	53.0	6.3	3.0	51.04	弥生	
S26	段状遺構 18	石包丁	塩基性凝灰岩	(145.0)	(46.0)	8.5	—	69.3	弥・中	未製品
S27	段状遺構 24	鎌	サヌカイト	24.0	14.0	2.7	—	0.69	弥・中	
S28	段状遺構 24	鎌	サヌカイト	112.0	39.0	10.0	—	50.83	弥・中	
S29	段状遺構 25	環状石斧	安山岩	120.5	120.5	36.0	—	709.14	弥・中	未製品
S30	段状遺構 25	環状石斧	安山岩	126.0	126.0	21.5	—	476.64	弥・中	未製品
S31	竪穴住居 8	鎌	サヌカイト	22.0	12.0	3.7	—	0.97	弥・中	
S32	竪穴住居 8	斧	玄武岩	126.0	68.0	42.0	—	595.86	弥・中	大型蛤刃石斧破損品の再利用
S33	杭列	鎌	サヌカイト	(24.0)	19.0	3.5	—	1.92	弥生	
S34	土壇 5	台石	安山岩	308.0	290.0	92.7	—	15260.0	弥・後	
S35	段状遺構 63	剥片	黒曜石	20.3	13.0	3.3	—	0.65	弥・中	
S36	遺構に伴わない遺物	鎌	サヌカイト	23.5	15.5	2.3	—	0.79	弥生	
S37	遺構に伴わない遺物	鎌	サヌカイト	(23.0)	16.0	6.8	—	1.44	弥生	
S38	遺構に伴わない遺物	鎌	サヌカイト	20.5	15.0	3.3	—	0.85	弥生	
S39	遺構に伴わない遺物	鎌	サヌカイト	26.0	15.0	4.0	—	1.02	弥生	
S40	遺構に伴わない遺物	鎌	サヌカイト	21.5	12.5	3.5	—	0.96	弥生	
S41	遺構に伴わない遺物	鎌	サヌカイト	26.0	16.0	2.5	—	1.17	弥生	
S42	遺構に伴わない遺物	鎌	サヌカイト	25.0	13.8	3.2	—	1.18	弥生	
S43	遺構に伴わない遺物	鎌	サヌカイト	21.0	13.0	3.0	—	0.75	弥生	
S44	遺構に伴わない遺物	鎌	サヌカイト	25.3	13.0	4.2	—	1.16	弥生	
S45	遺構に伴わない遺物	鎌	サヌカイト	24.5	9.5	5.6	—	1.04	弥生	
S46	遺構に伴わない遺物	鎌	サヌカイト	26.5	10.0	3.5	—	0.96	弥生	
S47	遺構に伴わない遺物	石包丁	片麻岩	(50.0)	43.0	5.5	5.2	15.12	弥生	
S48	遺構に伴わない遺物	石包丁	粘板岩状緑色岩	(56.5)	35.0	7.5	5.5	15.38	弥生	
S49	遺構に伴わない遺物	石包丁	流紋岩	(42.5)	36.0	8.0	—	14.61	弥生	
S50	遺構に伴わない遺物	砥石	粘板岩	135.5	20.0	21.0	—	60.98	弥生	
S51	遺構に伴わない遺物	斧	安山岩	145.0	66.5	50.0	—	767.85	弥生	大型蛤刃石斧破損品の再利用
S52	遺構に伴わない遺物	環状石斧	安山岩	108.0	(5.4)	24.5	26.5	178.41	弥生	
S53	遺構に伴わない遺物	斧	砂岩	54.0	40.5	15.0	—	43.85	弥生	扁平片刃に類似
S54	遺構に伴わない遺物	剥片	黒曜石	25.0	15.0	6.0	—	1.64	弥生	
S55	遺構に伴わない遺物	剥片	安山岩	80.3	85.3	18.1	—	171.3	弥生	
S56	遺構に伴わない遺物	剥片	安山岩	68.1	97.3	14.1	—	102.9	弥生	
S57	遺構に伴わない遺物	剥片	安山岩	70.3	107.3	18.6	—	140.6	弥生	
S58	遺構に伴わない遺物	剥片	安山岩	45.5	68.0	11.1	—	41.1	弥生	
S59	遺構に伴わない遺物	剥片	安山岩	73.7	106.3	20.4	—	237.8	弥生	
S60	遺構に伴わない遺物	剥片	安山岩	71.7	80.7	11.3	—	101.4	弥生	

尾崎遺跡

掲載番号	遺構名	器種	材質	計測値 (mm)				重量 (g)	時期	備考
				長さ	幅	厚さ	孔径			
S 1	S 5区包含層	鎌	サヌカイト	15.5	13.5	2.3	—	0.43	縄文	
S 2	C区包含層	鎌	サヌカイト	21.3	13.5	3.0	—	0.8	縄文	
S 3	S 5区包含層	鎌	サヌカイト	(16.5)	15.0	4.0	—	0.9	縄文	
S 4	S 4区包含層	鎌	サヌカイト	(14.0)	16.5	3.0	—	0.55	縄文	
S 5	G区包含層	鎌	サヌカイト	(24.0)	10.5	3.0	—	0.63	縄文	
S 6	E区包含層	鎌	サヌカイト	23.0	18.0	6.0	—	2.06	縄文	
S 7	G区包含層	スクレイパー	サヌカイト	58.0	39.0	9.5	—	19.36	縄文	
S 8	C区包含層	スクレイパー	サヌカイト	72.5	51.0	9.0	—	40.55	縄文	

掲載番号	遺構名	器種	材質	計測値 (mm)				重量 (g)	時期	備考
				長さ	幅	厚さ	孔径			
S9	S4区包含層	スクレイパー	サヌカイト	31.5	27.0	9.0	—	4.96	縄文	
S10	S5区包含層	スクレイパー	サヌカイト	35.0	37.0	8.0	—	9.69	縄文	
S11	S1区包含層	スクレイパー	流紋岩	58.0	57.0	6.5	—	27.7	縄文	
S12	E区包含層	スクレイパー	流紋岩	83.0	69.5	12.0	—	72.41	縄文	
S13	S1区包含層	スクレイパー	安山岩	59.5	53.0	8.0	—	31.06	縄文	
S14	D区包含層	スクレイパー	泥質粘板岩	62.0	45.0	11.5	—	45.14	縄文	
S15	D区包含層	鏝	流紋岩	61.0	23.0	20.0	—	26.73	縄文	切り目
S16	C区包含層	鏝	千枚岩状緑色岩	104.0	57.0	19.0	—	114.74	縄文	
S17	D区包含層	鏝	石英安山岩	116.0	63.5	16.5	—	134.89	縄文	
S18	A区包含層	鏝	粘板岩状緑色岩	109.0	61.5	22.5	—	189.22	縄文	
S19	A区包含層	鏝	寸岩	92.0	47.0	12.0	—	77.63	縄文	
S20	C区包含層	鏝	粘板岩状緑色岩	90.0	63.5	10.0	—	55.66	縄文	
S21	A区包含層	鏝	泥質片岩	82.0	42.0	14.0	—	71.55	縄文	
S22	C区包含層	斧	塩基性凝灰岩	90.0	68.3	20.8	—	185.95	縄文	
S23	A区包含層	斧	閃緑岩	96.0	42.5	28.5	—	178.68	縄文	
S24	D区包含層	斧	玄武岩	172.1	61.2	28.0	—	382.4	縄・草	神子柴型
S25	F区包含層	斧	安山岩	(50.4)	49.0	18.4	—	60.89	縄・草	
S26	F区包含層	斧	安山岩	83.1	50.7	23.8	—	146.57	縄・草	
S27	竪穴住居1	鏝	サヌカイト	32.0	12.5	3.5	—	1.27	弥・後	
S28	竪穴住居1	鏝	サヌカイト	14.5	10.0	2.4	—	0.32	弥・後	
S29	竪穴住居1	鏝	サヌカイト	21.0	9.0	3.0	—	0.41	弥・後	
S30	竪穴住居2	スクレイパー	サヌカイト	90.5	43.0	10.5	—	38.07	弥・中	
S31	A区包含層	鏝	サヌカイト	49.5	20.7	7.5	—	6.32	弥生	
S32	C区包含層	斧	流紋岩	(46.0)	39.0	17.0	—	47.19	弥生	
S33	D区包含層	斧	安山岩	85.0	36.0	25.5	—	139.13	弥生	柱状片刃
S34	B区包含層	石包丁	安山岩	108.0	48.0	9.5	—	68.99	弥生	未製品
S35	F区包含層	スクレイパー	サヌカイト	84.0	50.5	6.5	—	28.56	弥生	
S36	F区包含層	石包丁	泥質片岩	116.0	55.0	14.0	—	119.66	弥生	未製品
S37	F区包含層	石包丁	粘板岩状緑色岩	(54.0)	36.5	5.0	—	15.85	弥生	
S38	S5区包含層	鏝	サヌカイト	18.0	12.5	2.5	—	0.58	弥生	
S39	S4区包含層	鏝	サヌカイト	(20.0)	12.0	3.3	—	0.86	弥生	
S40	S3区包含層	スクレイパー	サヌカイト	77.5	51.0	8.8	—	25.95	弥生	
S41	G区 柱穴	石帯	粘板岩	32.0	17.5	5.7	2	5.86	古代	
S42	掘立建物物31	硯	輝緑凝灰岩	83.0	45.0	14.0	—	88.15	中世	赤間硯 線刻
S43	溝6	砥石	流紋岩	(110.0)	68.5	51.5	—	381.14	中世	被熱
S44	F区 柱穴	砥石	流紋岩	(66.0)	41.0	22.0	—	90.35	中世	
S45	F区包含層	砥石	流紋岩	88.0	34.0	27.0	—	130.68	中世	
S46	F区包含層	砥石	流紋岩	54.5	34.5	16.0	—	51.67	中世	
S47	F区包含層	砥石	流紋岩	(51.0)	31.0	6.5	—	11.27	中世	
S48	F区包含層	砥石	流紋岩	(41.0)	(30.0)	14.0	—	17.75	中世	

## 中町B遺跡

掲載番号	遺構名	器種	材質	計測値 (mm)				重量 (g)	時期	備考
				長さ	幅	厚さ	孔径			
S1	竪穴住居	鏝	花崗岩	71.0	72.5	37.0	—	259.27	弥・後	
S2	たわみ1	鏝	サヌカイト	17.0	14.0	2.5	—	0.41	縄・後	
S3	たわみ1	鏝	サヌカイト	(12.5)	15.0	2.0	—	0.33	縄・後	
S4	たわみ1	鏝	サヌカイト	(19.0)	(8.5)	2.3	—	0.28	縄・後	
S5	たわみ1	鏝	サヌカイト	(25.0)	17.0	3.5	—	0.98	縄・後	
S6	たわみ1	楔形石器	サヌカイト	(23.5)	14.5	5.5	—	2.09	縄・後	
S7	散布地	石匙	サヌカイト	110.0	52.0	11.0	—	36.5	縄文	
S8	散布地	斧	粘板岩	(73.5)	43.0	19.0	—	97.31	縄文	
S9	散布地	スクレイパー	流紋岩	75.5	44.0	7.5	—	28.31	縄文	
S10	散布地	楔形石器	サヌカイト	36.0	35.5	11.5	—	13.18	縄文	
S11	散布地	磨石	安山岩	115.0	105.5	53.0	—	901.65	縄文	
S12	散布地	石皿	安山岩	335.0	261.0	107.0	—	13500.0	縄文	
S13	遺構に伴わない遺物	鏝	千枚岩状緑色岩	(67.0)	41.0	10.5	—	38.16	縄文	
S14	遺構に伴わない遺物	鏝	サヌカイト	20.0	17.0	4.0	—	0.91	弥生	
S15	側溝1	管玉	碧玉	19.8	6.5	6.5	2.3	1.29	古・後	

## 穴が辻遺跡

掲載番号	遺構名	器種	材質	計測値 (mm)				重量 (g)	時期	備考
				長さ	幅	厚さ	孔径			
S1	竪穴住居1	鏝	サヌカイト	14.0	14.0	2.3	—	0.26	弥・後	
S2	竪穴住居2	砥石	流紋岩	76.0	31.5	30.0	—	94.6	弥・後	
S3	竪穴住居2	砥石	粘板岩	84.5	35.0	12.5	—	36.8	弥・後	
S4	A群 P1	石包丁	粘板岩状緑色岩	87.5	45.0	8.0	—	49.78	弥・後	
S5	B群 埋上1層	砥石	流紋岩	80.5	60.0	25.5	—	164.71	弥・後	
S6	B群 埋上1層	剥片	サヌカイト	27.0	18.5	4.8	—	1.84	弥・後	
S7	B群 埋上1層	管玉	緑色凝灰岩	11.5	6.5	6.5	1.5	0.16	弥・後	

今岡D遺跡

掲載番号	遺構名	器種	材質	計測値 (mm)				重量 (g)	時期	備考
				長さ	幅	厚さ	孔径			
S 1	竪穴住居 1	磨石	流紋岩	215.0	155.0	99.0	—	4070.0	弥・後	
S 2	竪穴住居 2	鏝	サヌカイト	17.0	10.0	2.5	—	0.38	弥・中	
S 3	竪穴住居 2	鏝	サヌカイト	18.5	12.5	3.4	—	0.61	弥・中	
S 4	竪穴住居 4	R.F.	サヌカイト	41.0	24.0	7.5	—	6.69	弥・中	
S 5	竪穴住居 4	板状剥片	サヌカイト	98.5	108.0	17.0	—	196.29	弥・中	素材
S 6	遺構に伴わない遺物	鏝	サヌカイト	25.0	13.5	3.6	—	1.26	弥生	
S 7	遺構に伴わない遺物	石包丁	緑色片岩	108.0	40.5	6.5	3.5	52.35	弥生	

今岡中山遺跡

掲載番号	遺構名	器種	材質	計測値 (mm)				重量 (g)	時期	備考
				長さ	幅	厚さ	孔径			
S 1	竪穴住居 2	鏝	サヌカイト	(30.0)	12.0	5.0	1.75	弥・後		
S 2	竪穴住居 2	台石	—	313.0	340.0	134.0	—	弥・後		
S 3	竪穴住居 2	台石	—	267.0	350.0	105.0	—	弥・後		
S 4	段状遺構 1	鏝	サヌカイト	21.0	13.5	2.8	0.84	弥・後		
S 5	段状遺構 2	鏝	サヌカイト	(25.8)	7.5	4.0	0.63	弥・後		
S 6	段状遺構 2	鏝	サヌカイト	(16.5)	14.5	4.0	0.99	弥・後	未製品	
S 7	段状遺構 2	R.F.	サヌカイト	23.0	20.0	5.0	2.19	弥・後		
S 8	段状遺構 2	R.F.	サヌカイト	22.0	24.0	8.0	3.58	弥・後		
S 9	段状遺構 2	R.F.	サヌカイト	34.0	18.0	6.5	2.73	弥・後		
S 10	段状遺構 2	R.F.	サヌカイト	30.0	21.5	6.5	3.12	弥・後		
S 11	段状遺構 2	R.F.	サヌカイト	21.0	24.0	3.5	1.47	弥・後		
S 12	段状遺構 2	石包丁	緑色片岩	50.0	(107.0)	5.5	41.69	弥・後	磨製 孔径 3.0mm	
S 13	段状遺構 2	環状石斧	玄武岩	117.0	(60.0)	18.0	162.10	弥・後	未製品	
S 14	段状遺構 2	斧	玄武岩	92.5	78.0	31.5	304.04	弥・後	未製品	
S 15	段状遺構 2	砥石	流紋岩	100.0	94.0	61.0	613.96	弥・後		
S 16	段状遺構 2	砥石	玄武岩	113.0	97.0	72.0	1344.72	弥・後		
S 17	段状遺構 2	磨石	安山岩	(125.0)	169.0	69.0	2400.0	弥・後		
S 18	段状遺構 5	鏝	サヌカイト	24.0	15.5	3.3	0.89	弥・後		
S 19	段状遺構 5	鏝	サヌカイト	26.0	17.0	4.0	1.37	弥・後		
S 20	段状遺構 5	鏝	サヌカイト	23.5	14.5	2.8	0.82	弥・後		
S 21	段状遺構 5	石包丁	緑色片岩	50.5	(84.0)	9.3	51.5	弥・後	磨製 孔径 2.5mm	
S 22	段状遺構 5	砥石	閃緑岩	170.5	68.5	49.5	1120.03	弥・後		
S 23	遺構に伴わない遺物	鏝	サヌカイト	26.0	12.5	3.5	1.05	弥生		
S 24	遺構に伴わない遺物	鏝	サヌカイト	(22.5)	12.0	3.0	0.9	弥生		
S 25	遺構に伴わない遺物	鏝	サヌカイト	(18.0)	11.0	2.0	0.47	弥生		
S 26	遺構に伴わない遺物	稜形石器	サヌカイト	18.0	16.0	5.5	1.99	弥生		
S 27	遺構に伴わない遺物	R.F.	サヌカイト	32.0	21.5	6.5	4.70	弥生		
S 28	遺構に伴わない遺物	剥片	サヌカイト	28.5	24.5	4.0	3.16	弥生		
S 29	遺構に伴わない遺物	石包丁	緑色片岩	38.0	(49.0)	8.0	21.07	弥生	磨製 孔径 2.0mm 竪穴住居 3 床面	
S 30	遺構に伴わない遺物	斧	泥質片岩	69.0	46.0	15.0	65.53	弥生	扁平片刃	

今岡古墳群

掲載番号	遺構名	器種	材質	計測値 (mm)				重量 (g)	時期	備考
				長さ	幅	厚さ	孔径			
S 1	今岡 5号墳	管玉	碧玉	24.5	9.9	9.9	2.0	4.56	古・後	片面穿孔

金属器観察表

八幡山遺跡

掲載番号	遺構名	器種	計測値 (mm)			重量 (g)	材質	時期	備考
			最大長さ	最大幅	最大厚				
M 1	遺構に伴わない遺物	斧	(31.0)	26.0	8.0	21.5	鉄	弥生	鈎造鉄斧の再加工品
M 2	溝 1	鉄滓	59.0	39.5	30.5	88.87	鉄滓	古代	鍛錬鉄滓
M 3	溝 7	鉄滓	71.5	58	38.3	162.71	鉄滓	古代	砂鉄製鉄滓
M 4	溝 7	鉄滓	29.5	21.0	19.5	21.3	鉄滓	古代	砂鉄製鉄滓
M 5	遺構に伴わない遺物	銭貨	13.0	—	0.8	0.89	青銅	近世	寛永通寶
M 6	遺構に伴わない遺物	鏝	99.0	36.0	21.0	153.63	鉄	古代以降	
M 7	遺構に伴わない遺物	楔	36.0	26.0	5.0	15.67	鉄	古代以降	
M 8	遺構に伴わない遺物	釘	(40.2)	6.0	5.5	3.35	鉄	古代以降	
M 9	遺構に伴わない遺物	釘	(44.0)	6.0	5.5	5.27	鉄	古代以降	
M 10	遺構に伴わない遺物	釘	(39.0)	5.5	5.5	2.21	鉄	古代以降	
M 11	遺構に伴わない遺物	釘	(20.0)	5.0	5.0	1.38	鉄	古代以降	
M 12	遺構に伴わない遺物	釘	(26.0)	6.0	5.5	1.58	鉄	古代以降	
M 13	遺構に伴わない遺物	釘	(30.5)	2.8	2.8	1.54	鉄	古代以降	
M 14	遺構に伴わない遺物	弾丸	10.94	—	10.25	7.03	鉛	近世以降	
M 15	遺構に伴わない遺物	弾丸	12.54	—	11.66	9.29	鉛	近世以降	

## 八幡山南遺跡

掲載番号	遺構名	器種	計測値 (mm)			重量 (g)	材質	時期	備考
			最大長	最大幅	最大厚				
M1	段状遺構 5	鍬	(45.8)	14.0	12.9	(8.26)	鉄	弥・後	鑄造鉄斧の再加工作品

## 八幡山門明寺跡

掲載番号	遺構名	器種	計測値 (mm)			重量 (g)	材質	時期	備考
			最大長	最大幅	最大厚				
M1	土城 1	釘	(29.0)	7.0	4.5	(2.80)	鉄	中世	
M2	土城 1	釘	(37.0)	5.0	3.5	(1.63)	鉄	中世	木質付着
M3	土城 1	釘	(23.0)	3.0	3.0	(0.73)	鉄	中世	
M4	土城 1	銭貨	58.0	4.5	4.3	2.29	銅	中世	平造元寶
M5	掘立柱建物 P 4	釘	(28.0)	4.0	4.0	(1.08)	鉄	近世以降	
M6	P 7	釘	(23.0)	5.0	2.5	(0.63)	鉄	近世以降	木質付着
M7	P 12	釘	(29.0)	6.0	4.0	(1.48)	鉄	近世以降	
M8	P 20	釘	(48.0)	5.0	5.0	(4.27)	鉄	近世以降	
M9	P 20	釘	(25.0)	5.0	3.5	(0.63)	鉄	近世以降	
M10	遺構に伴わない遺物	釘	(58.0)	7.0	4.0	(5.26)	鉄	近世以降	
M11	遺構に伴わない遺物	釘	(50.0)	6.0	6.0	(4.07)	鉄	近世以降	
M12	遺構に伴わない遺物	槌	(56.0)	16.0	5.0	(15.73)	鉄	近世以降	
M13	遺構に伴わない遺物	鎌	(226.0)	45.0	3.0	(90.29)	鉄	近世以降	
M14	遺構に伴わない遺物	筒形品	(23.0)	(20.0)	3.0	(3.24)	青銅	近世以降	
M15	遺構に伴わない遺物	銭貨	23.0	16.0	2.0	5.44	銅	近世	一分銀銭の横銭

## 尾崎遺跡

掲載番号	遺構名	器種	計測値 (mm)			重量 (g)	材質	時期	備考
			最大長	最大幅	最大厚				
M1	F区包含層	破鏡	19.15	9.45	3.33	2.75	青銅	弥・後	復元鏡径 8.5cm
M2	竪穴住居 6	鍬	(97.11)	16.56	13.92	12.45	鉄	古・後	木質残存
M3	掘立柱建物 5 P 1	鋳	173.0	12.0	8.0	73.68	鉄	古代	
M4	掘立柱建物 5 P 2	鉄塊	36.0	22.0	16.0	11.22	鉄	古代	
M5	C区包含層	袋状斧	(74.0)	40.0	10.0	59.67	鉄	不詳	袋部厚さ 3.0mm
M6	掘立柱建物 39 P 5	釘	(32.2)	5.04	4.67	1.16	鉄	中世	
M7	掘立柱建物 39 P 6	棒状鉄器	(64.52)	5.51	4.53	3.25	鉄	中世	
M8	掘立柱建物 39 P 6	不明鉄器	(32.5)	10.56	9.54	5.86	鉄	中世	
M9	I土城基	釘	(65.99)	7.05	4.63	5.03	鉄	中世	
M10	F区柱穴	釘	(33.0)	4.5	4.5	3.39	鉄	中世	木質残存
M11	F区柱穴	釘	(33.0)	6.5	6.0	3.04	鉄	中世	
M12	F区柱穴	釘	(98.0)	8.0	5.0	7.89	鉄	中世	
M13	F区柱穴	銭貨	24.0	24.0	1.23	2.06	青銅	中世	永楽通寶
M14	F区柱穴	銭貨	24.0	(18.0)	1.44	1.02	青銅	中世	永楽通寶
M15	F区包含層	鎌	(63.0)	26.0	8.0	12.76	鉄	中世	
M16	F区包含層	筒形品	(49.0)	15.0	2.0	18.58	鉄	中世	
M17	F区包含層	鉈	(92.0)	30.0	9.0	40.63	鉄	中世	
M18	F区包含層	足金具	66.5	17.0	8.0	7.37	鉄	中世	
M19	F区包含層	釘	(42.5)	6.0	5.0	3.83	鉄	中世	
M20	S 4区包含層	鎌	(54.3)	11.4	11.1	10.13	鉄	中世	
M21	S 3区包含層	刀子	(169.0)	21.3	6.1	23.69	鉄	中世	
M22	S 4区包含層	釘	(35.4)	6.7	6.3	3.01	鉄	中世	
M23	S 2区包含層	釘	(30.3)	6.0	4.9	1.92	鉄	中世	
M24	S 3区包含層	釘	(32.2)	5.0	4.7	1.16	鉄	中世	
M25	S 4区包含層	釘	(48.4)	6.0	6.2	2.81	鉄	中世	

## 中町B遺跡

掲載番号	遺構名	器種	計測値 (mm)			重量 (g)	材質	時期	備考
			最大長	最大幅	最大厚				
M1	遺構に伴わない遺物	釘	(64.0)	5.6	4.2	4.21	鉄		
M2	遺構に伴わない遺物	釘	(55.3)	5.0	5.0	3.45	鉄		
M3	遺構に伴わない遺物	釘	(54.4)	6.6	6.0	7.01	鉄		
M4	遺構に伴わない遺物	釘	(47.3)	4.2	4.1	1.33	鉄		
M5	遺構に伴わない遺物	釘	(43.3)	5.2	5.2	5.23	鉄		
M6	遺構に伴わない遺物	馬鋸刀	(185.0)	20.0	10.5	131.38	鉄		
M7	遺構に伴わない遺物	刀子	15.2	(48.6)	3.2	4.38	鉄		
M8	遺構に伴わない遺物	煙管	78.3	9.5	1.5	11.62	青銅		
M9	遺構に伴わない遺物	煙管	(46.8)	9.4	0.7	2.5	青銅		
M10	遺構に伴わない遺物	銭貨	24.8	—	1.06	1.83	青銅		早瀬通寶
M11	遺構に伴わない遺物	銭貨	24.9	—	1.25	2.0	青銅		元祐通寶
M12	遺構に伴わない遺物	銭貨	25.0	—	1.56	3.28	青銅		永楽通寶
M13	遺構に伴わない遺物	銭貨	25.0	—	1.45	2.85	青銅		永楽通寶
M14	遺構に伴わない遺物	銭貨	24.1	—	1.07	1.77	青銅		寛永通寶
M15	遺構に伴わない遺物	弾丸	11.6	—	—	7.79	鉛		



## 穴が道遺跡

掲載番号	遺構名	器種	計測値 (mm)			重量 (g)	材質	時期	備考
			最大長	最大幅	最大厚				
M 1	竪穴住居 2	棒状品	62.5	8.5	4.5	6.01	鉄	弥・後	
M 2	B群 埋土層	斧	33.0	36.0	5.0	15.76	鉄	弥・後	板状両刃

## 穴が道古墳

掲載番号	遺構名	器種	計測値 (mm)			重量 (g)	材質	時期	備考
			最大長	最大幅	最大厚				
M 1	石室奥壁側	銀装出頭人刀	723.0	28.0	7.0	(525.73)	鉄・銀	古・後	
M 2	石室奥壁側	刀	430.0	29.0	7.0	180.96	鉄	古・後	目釘残存 刀身が屈曲
M 3	石室奥壁側	短刀	(319.0)	24.0	5.0	117.86	鉄	古・後	両閃式 木質残存
M 4	石室奥壁側	鉏	27.0	27.0	1.5	9.01	鉄	古・後	孔径 3.0mm 基部に糸状物質を巻く
M 5	石室奥壁側	刀子	(93.0)	12.0	4.2	10.4	鉄	古・後	木質残存
M 6	石室奥壁側	馬具	53.0	8.0	7.5	9.07	鉄	古・後	
M 7	石室	鉞	12.0	9.0	8.5	0.32	鉄・銀	古・後	銀被せ
M 8	石室西壁寄り	鎌	148.0	12.5	7.0	12.05	鉄	古・後	
M 9	石室奥壁側	鎌	(128.0)	13.0	3.0	7.4	鉄	古・後	
M10	石室西壁寄り	鎌	(141.0)	11.0	4.5	13.4	鉄	古・後	
M11	石室西壁寄り	鎌	145.0	10.5	4.0	12.05	鉄	古・後	
M12	石室奥壁側	鎌	(137.5)	6.0	0.35	9.85	鉄	古・後	樹皮残存
M13	石室西壁寄り	鎌	(121.0)	34.0	3.0	9.7	鉄	古・後	
M14	石室奥壁側	鎌	(98.0)	8.0	3.5	8.94	鉄	古・後	
M15	石室西壁寄り	鎌	(145.0)	1.1	0.4	8.22	鉄	古・後	
M16	石室西壁寄り	鎌	(117.0)	14.0	4.0	8.22	鉄	古・後	
M17	石室西壁寄り	鎌	(118.0)	13.0	5.5	8.22	鉄	古・後	
M18	石室西壁寄り	鎌	(136.0)	30.0	4.0	12.85	鉄	古・後	
M19	石室西壁寄り	鎌	138.0	27.0	5.5	13.47	鉄	古・後	
M20	石室西壁寄り	鎌	(116.0)	17.0	2.0	9.22	鉄	古・後	
M21	遺構に伴わない遺物	足金具	65.5	13.5	4.5	13.74	鉄	古・後	鞍金具
M22	遺構に伴わない遺物	足金具	(50.0)	10.0	4.2	8.48	鉄	古・後	鞍金具

## 今岡D遺跡

掲載番号	遺構名	器種	計測値 (mm)			重量 (g)	材質	時期	備考
			最大長	最大幅	最大厚				
M 1	土壇 13	鎌	(69.0)	11.0	5.0	8.25	鉄	古墳	
M 2	土壇 13	鎌	(48.0)	12.5	5.0	6.48	鉄	古墳	
M 3	土壇 13	鎌	58.5	(11.0)	4.0	8.92	鉄	古墳	

## 今岡中山遺跡

掲載番号	遺構名	器種	計測値 (mm)			重量 (g)	材質	時期	備考
			最大長	最大幅	最大厚				
M 1	竪穴住居 2	鎌	(36.8)	16.0	2.3	(2.72)	鉄	弥・後	
M 2	近世墓 1	釘	58.0	4.5	4.3	2.29	鉄	近世	木質付着
M 3	近世墓 1	釘	42.0	3.3	3.5	1.56	鉄	近世	木質付着
M 4	近世墓 1	釘	44.0	5.0	4.5	(1.85)	鉄	近世	木質付着
M 5	近世墓 1	釘	(28.0)	4.0	4.0	(1.64)	鉄	近世	木質付着
M 6	近世墓 1	釘	(26.5)	4.0	4.0	(1.85)	鉄	近世	木質付着
M 7	近世墓 1	釘	(25.0)	3.5	4.0	(1.30)	鉄	近世	木質付着
M 8	近世墓 1	釘	(39.0)	3.4	3.5	(1.18)	鉄	近世	木質付着
M 9	近世墓 1	釘	(21.4)	4.0	2.4	(0.54)	鉄	近世	木質付着
M10	近世墓 1	銭貨	24.6	24.7	1.2	3.10	銅	近世	寛永通寶
M11	近世墓 1	銭貨	23.3	23.3	1.0	2.42	銅	近世	寛永通寶
M12	近世墓 3	簪	15.8	10.6	2.0	4.15	青銅	近世	線刻

## 今岡古墳群

掲載番号	遺構名	器種	計測値 (mm)			重量 (g)	材質	時期	備考
			最大長	最大幅	最大厚				
M 1	今岡7号墳 石室	鎌	(34.0)	7.5	2.9	2.27	鉄	古・後	
M 2	今岡7号墳 周溝	刀子	(40.0)	19.5	3.0	5.53	鉄	古・後	
M 3	今岡10号墳	剣	307.0	25.5	4.5	83.47	鉄	古・中	目釘孔 径 3.0mm 柄の木質残存
M 4	今岡10号墳	剣	(501.0)	38.5	7.0	338.16	鉄	古・中	柄の木質残存
M 5	今岡10号墳	刀	873.5	32.5	8.0	480.95	鉄	古・中	基部 糸巻きの痕跡・方形の挟り
M 6	今岡10号墳	鎌	(65.5)	13.0	5.0	7.0	鉄	古・中	
M 7	今岡10号墳	鎌	(75.0)	11.0	4.5	6.45	鉄	古・中	
M 8	今岡10号墳	鎌	(99.0)	15.0	4.0	10.96	鉄	古・中	柄固定のための樹皮巻き残存
M 9	今岡10号墳	鎌	(94.0)	(15.0)	4.0	3.78	鉄	古・中	柄の木質残存
M10	今岡10号墳	鎌	110.5	14.0	5.0	12.74	鉄	古・中	柄固定のための樹皮巻き残存
M11	今岡10号墳	鎌	103.0	15.0	4.0	11.19	鉄	古・中	柄固定のための樹皮巻き残存

掲載番号	遺構名	器種	計測値 (mm)			重量 (g)	材質	時期	備考
			最大長	最大幅	最大厚				
M12	今岡10号墳	鍔	115.5	13.0	4.5	18.77	鉄	古・中	柄固定のための樹皮巻き残存
M13	今岡10号墳	鍔	(84.0)	12.0	4.0		鉄	古・中	柄固定のための樹皮巻き残存
M14	今岡10号墳	鍔	101.0	11.5	4.2	10.73	鉄	古・中	柄固定のための樹皮巻き残存
M15	今岡10号墳	鍔	(92.0)	11.5	3.5	8.48	鉄	古・中	柄の木質残存
M16	今岡10号墳	鍔	(100.0)	12.0	5.0	10.91	鉄	古・中	柄固定のための樹皮巻き残存
M17	今岡10号墳	鍔	119.0	13.0	5.0	10.75	鉄	古・中	柄固定のための樹皮巻き残存
M18	今岡10号墳	鍔	(101.0)	13.0	4.5	9.64	鉄	古・中	柄固定のための樹皮巻き残存
M19	今岡10号墳	鍔	(82.5)	12.5	4.5	6.22	鉄	古・中	柄の木質残存
M20	今岡10号墳	鍔	(71.0)	13.0	3.5	5.74	鉄	古・中	柄の木質残存
M21	今岡10号墳	鍔	113.0	10.5	3.2	10.62	鉄	古・中	柄固定のための樹皮巻き残存
M22	今岡10号墳	鍔	113.0	11.0	5.0	10.79	鉄	古・中	柄固定のための樹皮巻き残存
M23	今岡10号墳	鍔	109.0	12.0	4.5	9.87	鉄	古・中	柄固定のための樹皮巻き残存
M24	今岡10号墳	鍔	106.5	14.0	4.1	11.05	鉄	古・中	柄固定のための樹皮巻き残存
M25	今岡10号墳	鍔	101.0	12.5	4.2	23.9	鉄	古・中	柄固定のための樹皮巻き残存
M26	今岡10号墳	鍔	(131.0)	16.0	4.2		鉄	古・中	柄固定のための樹皮巻き残存
M27	今岡10号墳	鍔	116.0	14.0	5.0	69.08	鉄	古・中	柄固定のための樹皮巻き残存
M28	今岡10号墳	鍔	(98.0)	13.0	5.0		鉄	古・中	柄固定のための樹皮巻き残存
M29	今岡10号墳	鍔	95.5	13.0	4.5		鉄	古・中	柄固定のための樹皮巻き残存
M30	今岡10号墳	鍔	99.0	13.0	4.5		鉄	古・中	柄固定のための樹皮巻き残存
M31	今岡10号墳	鍔	112.0	13.0	5.0	鉄	古・中	柄固定のための樹皮巻き残存	
M32	今岡10号墳	鍔	105.0	13.0	5.0	22.29	鉄	古・中	柄固定のための樹皮巻き残存
M33	今岡10号墳	鍔	157.0	11.0	4.5		鉄	古・中	柄固定のための樹皮巻き残存
M34	今岡10号墳	鍔	98.0	13.0	4.5	鉄	古・中	柄固定のための樹皮巻き残存	
M35	今岡10号墳	鍔	(29.5)	11.0	3.0	2.06	鉄	古・中	
M36	今岡10号墳	鍔	(40.5)	10.0	4.0	4.61	鉄	古・中	柄固定のための樹皮巻き残存
M37	今岡10号墳	鍔	(33.0)	7.0	4.5	4.26	鉄	古・中	柄固定のための樹皮巻き残存
M38	今岡10号墳	鍔	(71.0)	7.0	4.0	4.92	鉄	古・中	柄の木質残存
M39	今岡10号墳	剣	(56.5)	20.0	3.1	8.91	鉄	古・中	
M40	今岡10号墳	刀子	(44.0)	16.0	3.0	3.89	鉄	古・中	柄の木質残存
M41	今岡10号墳	斧	106.0	80.2	17.0	348.95	鉄	古・中	有肩鉄斧
M42	今岡11号墳	鍔	129.82	4.85	3.86	5.75	鉄	古・後	
M43	今岡11号墳	鍔	(74.23)	4.92	3.15	3.01	鉄	古・後	
M44	今岡12号墳	釘	(92.0)	5.5	5.5	9.77	鉄	古・後	棺材錆着
M45	今岡12号墳	釘	(76.0)	6.0	4.0	8.68	鉄	古・後	棺材錆着
M46	今岡12号墳	釘	(89.0)	5.0	5.0	8.69	鉄	古・後	棺材錆着
M47	今岡12号墳	釘	(93.0)	5.5	5.0	5.78	鉄	古・後	棺材錆着
M48	今岡12号墳	釘	87.0	5.5	5.0	6.63	鉄	古・後	棺材錆着
M49	今岡12号墳	釘	(73.0)	5.5	5.5	7.52	鉄	古・後	棺材錆着
M50	今岡12号墳	釘	(48.0)	5.0	5.0	4.62	鉄	古・後	棺材錆着
M51	今岡12号墳	釘	(45.0)	5.0	5.0	3.01	鉄	古・後	
M52	今岡12号墳	釘	(42.0)	5.0	4.0	3.66	鉄	古・後	
M53	今岡12号墳	釘	(38.0)	6.5	4.5	4.23	鉄	古・後	棺材錆着
M54	今岡12号墳	釘	(21.0)	4.0	3.5	0.69	鉄	古・後	
M55	今岡12号墳	釘	(75.0)	5.5	6.5	6.76	鉄	古・後	棺材錆着
M56	今岡12号墳	釘	(63.0)	5.5	6.0	6.01	鉄	古・後	棺材錆着
M57	今岡12号墳	釘	95.0	5.0	5.5	10.67	鉄	古・後	棺材錆着
M58	今岡12号墳	釘	(59.0)	5.5	4.0	5.7	鉄	古・後	棺材錆着
M59	今岡12号墳	釘	(86.0)	5.5	5.5	6.88	鉄	古・後	
M60	今岡12号墳	釘	(56.0)	4.0	5.0	3.38	鉄	古・後	
M61	今岡12号墳	釘	(76.0)	4.0	5.0	4.28	鉄	古・後	
M62	今岡12号墳	釘	(11.0)	4.0	4.5	0.58	鉄	古・後	
M63	土壌墓2	鍔御先	121.0	131.0	4.0	60.66	鉄	古墳	U字形
M64	土壌墓3	刀	(587.0)	31.0	8.5	412.41	鉄	古墳	鞘の木質残存

### 高岡遺跡

掲載番号	遺構名	器種	計測値 (mm)			重量 (g)	材質	時期	備考
			最大長	最大幅	最大厚				
M 1	竪穴住居 1 中央穴 1	鍔	(59.0)	10.5	5.8	5.35	鉄	弥・後	
M 2	竪穴住居 3	鍔	(98.8)	12.0	7.0	11.8	鉄	弥・後	柄の木質残存
M 3	段状遺構 1	鍔	(41.0)	15.5	4.1	3.02	鉄	弥・後	有茎三角形式
M 4	土壌 7	鍔	(41.0)	20.8	4.5	4.96	鉄	弥・後	有茎三角形式

### 土製品観察表

#### 八幡山遺跡

掲載番号	遺構名	器種	計測値 (cm)			重量 (g)	色調	時期	備考	
			長さ	幅	厚さ					
C 1	竪穴住居 3	紡錘車	5.0	4.9	0.7	14.59	にぶい赤褐	5YR5/3	弥・中	土器片転用 孔径 6.5mm
C 2	竪穴住居 3	紡錘車	4.4	(2.8)	0.52	7.47	にぶい褐	7.5YR5/4	弥・中	土器片転用 孔径 5.0mm
C 3	竪穴住居 3	紡錘車	4.4	4.1	0.5	10.58	橙	7.5YR6/6	弥・中	土器片転用 孔径 5.0mm
C 4	竪穴住居 5	焼土塊	14.3	12.5	5.9	770.68	にぶい橙	7.5YR6/4	弥生	堅根材か
C 5	竪穴住居 6	紡錘車	5.0	4.7	0.6	13.41	橙	7.5YR6/6	弥・中	土器片転用 孔径 6.0mm
C 6	竪穴住居 8	分銅形土製品	(2.8)	(3.1)	0.8	5.82	灰白	10YR7/1	弥・中	
C 7	遺構に伴わない遺物	円盤状土製品	7.6	7.3	0.8	56.65	にぶい黄橙	10YR6/4	弥生	土器片転用

掲載番号	遺構名	器種	計測値 (cm)			重量 (g)	色調		時期	備考
			長さ	幅	厚さ					
C 8	遺構に伴わない遺物	円盤状土製品	5.3	5.1	0.7	22.68	にぶい粉	7.5YR6/4	弥生	土器片転用

### 八幡山南遺跡

掲載番号	遺構名	器種	計測値 (cm)			重量 (g)	色調		時期	備考
			長さ	幅	厚さ					
C 1	段状遺構 5	円盤状土製品	4.8	4.4	4.0	10.2	灰黄褐色	10YR4/2	弥・後	土器片転用
C 2	製鉄関連遺構	炉壁	10.6	7.6	4.2	—	明赤褐色	2.5YR5/8	古代	スサ含む

### 八幡山円明寺跡

掲載番号	遺構名	器種	計測値 (cm)			重量 (g)	色調		時期	備考
			長さ	幅	厚さ					
C 1	遺構に伴わない遺物	土鍾	2.7	1.0	0.5	29.3	にぶい赤褐色	5YR5/4	中世	

### 尾崎遺跡

掲載番号	遺構名	器種	計測値 (cm)			重量 (g)	色調		時期	備考
			長さ	幅	厚さ					
C 1	竪穴住居 2	紡錘車	5.0	(3.0)	0.5	7.51	にぶい黄褐色	10YR6/3	弥・中	土器片転用 未製品
C 2	竪穴住居 3	紡錘車	4.6	4.4	0.6	11.3	灰黄褐色	10YR4/2	弥・中	土器片転用 孔径 2.5mm
C 3	竪穴住居 6	円盤状土製品	11.0	10.5	0.9	117.93	にぶい黄褐色	10YR6/3	古・後	
C 4	掘立柱建物 3 P 6	土鍾	5.1	2.3	2.2	20.56	灰白	10YR8/2	古代	孔径 8.4mm
C 5	掘立柱建物 3 P 6	土鍾	5.9	2.3	2.2	26	にぶい黄褐色	10YR7/2	古代	孔径 8.4mm
C 6	D区包含層	支脚	(6.4)	2.6	1.8	33.84	黄灰	2.5Y6/1	古代	
C 7	掘立柱建物 39 P 6	土鍾	3.3	1.3	1.3	3.8	浅黄	2.5Y7/3	中世	孔径 4.6mm
C 8	掘立柱建物 39 P 6	土鍾	3.5	1.2	1.1	3.23	浅黄	2.5Y7/3	中世	孔径 3.4mm
C 9	掘立柱建物 39 P 6	土鍾	3.4	1.2	1.2	3.94	浅黄	2.5Y7/3	中世	孔径 3.4mm
C 10	掘立柱建物 39 P 6	土鍾	3.6	1.2	1.2	3.49	灰黄	2.5Y6/2	中世	孔径 3.0mm
C 11	掘立柱建物 39 P 6	土鍾	3.5	1.4	1.4	5.59	灰黄	2.5Y7/2	中世	孔径 3.0mm
C 12	掘立柱建物 39 P 6	土鍾	3.7	1.2	1.2	4.01	灰黄	2.5Y6/2	中世	孔径 4.5mm
C 13	掘立柱建物 39 P 6	土鍾	3.7	1.3	1.2	5.64	浅黄	2.5Y7/3	中世	孔径 4.3mm
C 14	掘立柱建物 39 P 6	土鍾	3.7	1.4	(0.9)	7.05	黒褐色	2.5Y3/1	中世	孔径 2.7mm
C 15	掘立柱建物 39 P 6	土鍾	4.0	1.3	1.3	5.64	浅黄	2.5Y7/3	中世	孔径 4.3mm
C 16	掘立柱建物 39 P 6	土鍾	(2.3)	1.2	1.2	2.69	黒褐色	2.5Y3/1	中世	孔径 4.2mm
C 17	掘立柱建物 39 P 6	土鍾	3.4	1.1	1.0	4.54	にぶい黄褐色	10YR7/3	中世	孔径 2.8mm
C 18	掘立柱建物 39 P 6	土鍾	3.9	1.1	1.1	4.2	にぶい黄褐色	10YR7/3	中世	孔径 3.0mm
C 19	掘立柱建物 39 P 6	土鍾	4.4	1.0	0.9	3.49	灰黄	2.5Y6/2	中世	孔径 3.0mm
C 20	掘立柱建物 39 P 6	土鍾	5.5	1.1	1.1	5.52	浅黄	2.5Y7/3	中世	孔径 3.8mm
C 21	掘立柱建物 39 P 6	土鍾	5.3	1.2	1.1	6	にぶい黄褐色	10YR6/4	中世	孔径 3.9mm
C 22	掘立柱建物 39 P 6	土鍾	5.1	1.1	1.1	5.67	にぶい黄褐色	10YR6/3	中世	孔径 3.8mm
C 23	S 5区包含層	土鍾	(6.0)	2.3	1.8	19.24	灰黄褐色	10YR6/2	中世	孔径 5.1mm
C 24	S 4区包含層	土鍾	5.0	1.6	1.5	8.17	灰黄褐色	10YR5/2	中世	孔径 6.2mm
C 25	N 3区包含層	土鍾	4.1	1.2	1.3	5.62	にぶい黄褐色	10YR7/3	中世	孔径 4.4mm
C 26	S 3区包含層	土鍾	3.7	1.2	1.2	4.3	にぶい黄褐色	10YR7/3	中世	孔径 4.4mm
C 27	S 3区包含層	土鍾	(4.1)	1.2	1.1	5.58	灰黄	2.5Y7/2	中世	孔径 3.9mm
C 28	S 3区包含層	土鍾	(3.1)	1.2	1.1	3.46	にぶい黄褐色	10YR7/3	中世	孔径 3.7mm

### 中町 B 遺跡

掲載番号	遺構名	器種	計測値 (cm)			重量 (g)	色調		時期	備考
			長さ	幅	厚さ					
C 1	遺構に伴わない遺物	土鍾	50.0	26.0	1.1	27.56	にぶい橙	7.5YR7/3	中世	孔径 5.5mm

### 穴が辻遺跡

掲載番号	遺構名	器種	計測値 (cm)			重量 (g)	色調		時期	備考
			長さ	幅	厚さ					
C 1	竪穴住居 2	円盤状土製品	3.3	3.3	1.8	21.25	灰黄褐色	10YR5/2	弥・後	土器片転用
C 2	竪穴住居 4	紡錘車	3.7	3.3	0.5	8.92	灰黄褐色	10YR5/2	弥・後	孔径 72 ~ 128mm

### 今岡中山遺跡

掲載番号	遺構名	器種	計測値 (cm)			重量 (g)	色調		時期	備考
			長さ	幅	厚さ					
C 1	段状遺構 2	紡錘車	4.8	5.0	0.5	9.52	明褐色	7.5YR5/6		土器片転用 孔径 8.0mm

## 木器観察表

### 尾崎遺跡

掲載番号	遺構名	器種	樹種	横断面形	底部縦断面形	計測値 (cm)			時期	備考
						長さ	幅 (径)	厚み		
W 1	柱穴列 8 P 1	柱	クリ	円	平	(445)	163	155	古代	calAD 1528-1791
W 2	柱穴列 8 P 2	柱	クリ	円	平	(372)	185	178	古代	calAD 1525-1662
W 3	柱穴列 8 P 4	柱	クリ	円	平	(556)	211	170	古代	calAD 1527-1662
W 4	柱穴列 8 P 6	柱	クリ	円	平	(567)	180	163	古代	calAD 1524-1661
W 5	柱穴列 8 P 8	柱	クリ	円	V字	(534)	143	132	古代	calAD 1525-1662

## ガラス観察表

### 八幡山遺跡

掲載番号	遺構名	器種	計測値 (mm)			重量 (g)	色調		時期
			最大長	最大厚	孔径				
G 1	竪穴住居 4	小玉	5.32	3.63	2.0	0.13	アクアマリン	7B4.5/6	弥・後
G 2	竪穴住居 4	小玉	5.05	3.58	1.9	0.09	アクアマリン	7B4.5/6	弥・後
G 3	竪穴住居 4	小玉	5.02	3.33	2.2	0.08	アクアマリン	7B4.5/6	弥・後
G 4	竪穴住居 4	小玉	4.00	3.46	1.9	0.03	アクアマリン	7B4.5/6	弥・後
G 5	柱穴列	小玉	4.60	3.48	1.8	0.1	セルリアンブルー	9B4.5/9	弥生

### 高岡遺跡

掲載番号	遺構名	器種	計測値 (mm)			重量 (g)	色調		時期
			最大長	最大厚	孔径				
G 1	竪穴住居 3	小玉	4.0	3.3	1.2	0.08	アクアマリン	7B4.5/6	弥・後

## 装身具観察表

### 穴が辻古墳

掲載番号	遺構名	器種	計測値 (mm)				重量 (g)	色調		時期	備考
			最大長	最大幅	最大厚	孔径					
W 1	石室奥壁側	算盤玉	21.0	14.0	13.0	3.0	2.49	黒	2.5Y2/1	古・後	
W 2	石室中央付近	算盤玉	20.0	13.5	12.0	3.0	2.10	黒	2.5Y2/1	古・後	
W 3	石室埋土中	算盤玉	19.8	11.8	12.0	2.5	1.96	黒	2.5Y2/1	古・後	
G 1	石室埋土中	小玉	9.0	8.5	6.0	1.6	0.64	インジゴ	2.5PB2.5/5	古・後	
G 2	石室奥壁側	小玉	8.0	7.9	7.0	2.8	0.53	インジゴ	2.5PB2.5/5	古・後	
G 3	石室奥壁側	小玉	7.2	7.0	5.0	1.7	0.36	インジゴ	2.5PB2.5/5	古・後	
G 4	石室奥壁側	小玉	7.8	7.5	6.1	1.0	0.5	インジゴ	2.5PB2.5/5	古・後	
G 5	石室奥壁側	小玉	8.5	8.3	7.4	1.5	0.68	インジゴ	2.5PB2.5/5	古・後	
G 6	石室奥壁側	小玉	8.0	7.0	7.0	1.6	0.59	インジゴ	2.5PB2.5/5	古・後	
G 7	石室奥壁側	小玉	7.5	7.3	6.2	1.4	0.48	インジゴ	2.5PB2.5/5	古・後	
G 8	石室奥壁側	小玉	7.5	7.5	5.5	1.8	0.45	インジゴ	2.5PB2.5/5	古・後	
G 9	石室奥壁側	小玉	8.5	7.0	5.2	1.8	0.48	インジゴ	2.5PB2.5/5	古・後	
G 10	石室奥壁側	小玉	8.3	7.0	4.8	1.7	0.43	インジゴ	2.5PB2.5/5	古・後	
G 11	石室奥壁側	小玉	7.2	7.0	5.0	1.7	0.36	インジゴ	2.5PB2.5/5	古・後	
G 12	石室奥壁側	小玉	7.2	7.0	6.3	1.7	0.47	インジゴ	2.5PB2.5/5	古・後	
G 13	石室埋土中	小玉	5.0	4.8	4.8	1.7	0.15	インジゴ	2.5PB2.5/5	古・後	
G 14	石室奥壁側	小玉	3.8	(2.0)	3.5	0.03	5.32	インジゴ	2.5PB2.5/5	古・後	
C 1	石室埋土中	練玉	7.0	7.0	7.5	1.5	0.32	黒褐	2.5Y3/2	古・後	

# 新旧遺構対照表

## 八幡山遺跡

掲載遺構名	旧遺構名
竪穴住居 1	竪穴住居68
竪穴住居 2	竪穴住居67
竪穴住居 3	竪穴住居67
竪穴住居 4	竪穴住居 1
竪穴住居 5	竪穴住居87
竪穴住居 6	竪穴住居100
竪穴住居 7	竪穴住居35
竪穴住居 8	竪穴住居14
竪穴住居 9	竪穴住居109
竪穴住居10	竪穴住居111
竪穴住居11	竪穴住居105
竪穴住居12	竪穴住居106
竪穴住居13	竪穴住居28
竪穴住居14	竪穴住居29
段状遺構 1	段状遺構79
段状遺構 2	段状遺構73
段状遺構 3	段状遺構70
段状遺構 4	段状遺構86
段状遺構 5	段状遺構77
段状遺構 6	段状遺構85
段状遺構 7	段状遺構78
段状遺構 8	段状遺構80
段状遺構 9	段状遺構83
段状遺構10	段状遺構81
段状遺構11	段状遺構88
段状遺構12	段状遺構82
段状遺構13	段状遺構84
段状遺構14	段状遺構91
段状遺構15	段状遺構94
段状遺構16	段状遺構89
段状遺構17	段状遺構 9
段状遺構18	段状遺構 9
段状遺構19	段状遺構38
段状遺構20	段状遺構32
段状遺構21	段状遺構 5
段状遺構22	段状遺構24
段状遺構23	段状遺構 8
段状遺構24	段状遺構 7
段状遺構25	段状遺構19
段状遺構26	段状遺構20
段状遺構27	段状遺構23
段状遺構28	段状遺構37
段状遺構29	段状遺構21
段状遺構30	段状遺構39
段状遺構31	段状遺構96
段状遺構32	段状遺構97
段状遺構33	段状遺構95
段状遺構34	段状遺構98
段状遺構35	段状遺構99
段状遺構36	段状遺構46
段状遺構37	段状遺構38
段状遺構38	段状遺構15
段状遺構39	段状遺構17
段状遺構40	段状遺構18
段状遺構41	段状遺構101
段状遺構42	段状遺構110
段状遺構43	段状遺構26
段状遺構44	段状遺構47
段状遺構45	段状遺構53
段状遺構46	段状遺構27
段状遺構47	段状遺構54
段状遺構48	段状遺構103
段状遺構49	段状遺構104
段状遺構50	段状遺構34
段状遺構51	段状遺構66
段状遺構52	段状遺構113
段状遺構53	段状遺構33
段状遺構54	段状遺構30西
段状遺構55	段状遺構30東
段状遺構56	—
段状遺構57	段状遺構60
段状遺構58	段状遺構42
段状遺構59	段状遺構43

## 八幡山遺跡

掲載遺構名	旧遺構名
段状遺構60	段状遺構62
段状遺構61	段状遺構61
段状遺構62	段状遺構65
段状遺構63	段状遺構63・64
柱穴列 1	柱穴列112
瓦列	柱穴列107
火葬墓	火葬墓11
土壇 1	土壇69
土壇 2	土壇76
土壇 3	土壇56
土壇 4	土壇92・93
土壇 5	—
土壇 6	土壇48
土壇 7	土壇41
土壇 8	土壇46
土壇 9	土壇57
土壇10	土壇58
土壇11	土壇16
土壇12	土壇13
溝 1	溝71
溝 2	溝72
溝 3	溝75
溝 4	溝 4
溝 5	溝114
溝 6	溝90
溝 7	溝49

## 八幡山南遺跡

掲載遺構名	旧遺構名
段状遺構 1	段状遺構 1
段状遺構 2	段状遺構 4
段状遺構 3	段状遺構 5
段状遺構 4	段状遺構 3
段状遺構 5	段状遺構 2
掘立柱建物 1	P 16・P 17 ほか
掘立柱建物 2	P 6・8・12
製鉄関連遺跡	段状遺構
土壇 1	土壇 1
土壇 2	土壇 5 新
土壇 3	土壇 5 古
土壇 4	土壇 6

## 八幡山円明寺跡

掲載遺構名	旧遺構名
掘立柱建物	P 7・18 ほか
土壇 1	土壇 1
土壇 2	土壇 5
土壇 3	P 6
土壇 4	土壇 4
土壇 5	土壇 2
池状遺構	池状遺構 1
溝 1	溝
溝 2	溝
溝 3	溝
溝 4	溝
溝 5	溝 1
集石	集石遺構

## 尾崎遺跡

掲載遺構名	調査区	旧遺構名
竪穴住居 1	G 区	竪穴住居 3
竪穴住居 2	S 3 区	竪穴住居 1
竪穴住居 3	A 区	竪穴住居 8
竪穴住居 4	F 1 区	竪穴住居 8
竪穴住居 5	E 区	竪穴住居 8
竪穴住居 6	N 3 区	竪穴住居 2
竪穴住居 7	A 区	竪穴住居 4

## 尾崎遺跡

掲載遺構名	旧調査区	旧遺構名
掘立柱建物1	G区	掘立柱建物12
掘立柱建物2	G区	掘立柱建物19
掘立柱建物3	G区	掘立柱建物17
掘立柱建物4	G区	掘立柱建物20
掘立柱建物5	G区	掘立柱建物13
掘立柱建物6	G区	掘立柱建物18
掘立柱建物7	E区	掘立柱建物16
掘立柱建物8	F区	掘立柱建物20
掘立柱建物9	E区	掘立柱建物17
掘立柱建物10	E区	掘立柱建物14
掘立柱建物11	E区	掘立柱建物10
掘立柱建物12	E区	掘立柱建物11
掘立柱建物13	D区	掘立柱建物3
掘立柱建物14	D区	掘立柱建物2
掘立柱建物15	D区	掘立柱建物10
掘立柱建物16	D区	掘立柱建物12
掘立柱建物17	D区	掘立柱建物7
掘立柱建物18	D区	掘立柱建物6
掘立柱建物19	N3区	掘立柱建物1
掘立柱建物20	N4区	掘立柱建物2
掘立柱建物21	N5区	掘立柱建物3
掘立柱建物22	N5区	掘立柱建物4
掘立柱建物23	B区	掘立柱建物1
掘立柱建物24	A区	掘立柱建物1
掘立柱建物25	A区	掘立柱建物25
掘立柱建物26	G区	掘立柱建物2
掘立柱建物27	G区	掘立柱建物5
掘立柱建物28	G区	掘立柱建物9
掘立柱建物29	G区	掘立柱建物4
掘立柱建物30	G区	掘立柱建物24
掘立柱建物31	G区	掘立柱建物25
掘立柱建物32	G区	掘立柱建物26
掘立柱建物33	E区	掘立柱建物2
掘立柱建物34	C区	掘立柱建物3
掘立柱建物35	S2区	掘立柱建物6
掘立柱建物36	S3区	掘立柱建物7
掘立柱建物37	S1区	掘立柱建物5
掘立柱建物38	S3区	掘立柱建物10
掘立柱建物39	S3区	掘立柱建物8
掘立柱建物40	S3区	掘立柱建物9
掘立柱建物41	S3区	掘立柱建物11
掘立柱建物42	S4区	掘立柱建物12
掘立柱建物43	S4区	掘立柱建物13
掘立柱建物44	A区	掘立柱建物3
柱穴列1	G区	柱穴列23
柱穴列2	D区	柱穴列8
柱穴列3	N5区	柱穴列1
柱穴列4	G区	柱穴列6
柱穴列5	G区	柱穴列8
柱穴列6	G区	柱穴列27
柱穴列7	G区	柱穴列28
柱穴列8	F1区	柱穴列5
柱穴列9	F3区	—
柱穴列10	F3区	—
柱穴列11	F3区	—
柱穴列12	F3区	—
柱穴列13	F3区	—
柱穴列14	F3区	—
柱穴列15	F3区	—
柱穴列16	E区	柱穴列3
柱穴列17	E区	柱穴列4
柱穴列18	S2区	柱穴列2
土壇墓	S3区	土壇墓7
火葬墓	F2区	火葬墓1
土器棺1	F2区	土器棺11
土器棺2	F3区	土器棺2
土器棺3	F3区	土器棺12
土壇1	F1区	竪穴住居7
土壇2	F2区	土壇2
土壇3	F2区	土壇7
土壇4	F2区	土壇5
土壇5	D区	土壇11
土壇6	D区	土壇9
土壇7	D区	焼土壇5
土壇8	D区	土壇13
土壇9	A区	焼土壇7

## 尾崎遺跡

掲載遺構名	旧調査区	旧遺構名
土壇10	G区	土壇14
土壇11	S4区	土壇6
古墳	G区	古墳11
土器溜まり	E区	—
炉1	F3区	炉15
炉2	F3区	炉9
炉3	F3区	炉3
炉4	F3区	炉14
炉5	F3区	炉16
焼上面1	F1区	被熱面6
焼上面2	F2区	焼上面9
焼上面3	F3区	焼上面18
焼上面4	F3区	焼上面11
焼上面5	F3区	焼上面10
炭溜まり1	F3区	炭溜まり6
炭溜まり2	F3区	炭溜まり7
炭溜まり3	A区	炭溜まり5
溝1	E区	溝7
溝2	C区	溝1
溝3	F3区	—
溝4	F3区	溝13
溝5	B区	溝5
溝6	F1区	溝2
溝7	C区	溝2
溝8	C区	溝4
溝9	N5区	溝5
溝10	S1区	溝4
溝11	S4区	溝3
石組1	F3区	石組4
石組2	F2区	石組3
集石1	G区	集石16
集石2	F2区	集石10
下がり1	F3区	溝13
下がり2	A区	溝9
たわみ	D区	たわみ4

## 中町B遺跡

掲載遺構名	旧調査区	旧遺構名
竪穴住居	3区	竪穴住居3
掘立柱建物	4区	掘立柱建物13
土壇1	3区	土壇13
土壇2	4区	土壇9
土壇3	4区	土壇10
土壇4	4区	土壇8
土壇5	2区	土壇3
土壇6	2区	土壇4
土壇7	1区	土壇8
土壇8	1区	土壇9
土壇9	1区	土壇10
土壇10	1区	土壇4
土壇11	1区	土壇5
土壇12	1区	土壇6
溝1	3区	溝6
溝2	4区	溝11
溝3	4区	溝5
溝4	4区	溝4
溝5	3区	溝15
溝6	3区	溝10
溝7	3区	溝5
溝8	3区	溝4
溝9	3区	溝14
溝10	2区	溝6
溝11	1区	溝14
たわみ1	3区	たわみ12
たわみ2	3区	たわみ11
縄文土器散布地	3区	—
側溝1	1区	溝7
側溝2	2区	溝14
側溝3	3区	溝2
側溝4	4区	溝14
側溝5	1区	溝2・3
側溝6	2区	溝5
側溝7	3区	溝2
側溝8	4区	溝2

### 中町B遺跡

掲載遺構名	旧調査区	旧遺構名
側溝3	3区	溝7
側溝3	4区	溝3
波板状凹凸面	2区	溝群2

### 穴が谷遺跡

掲載遺構名	旧遺構名
竪穴住居1	竪穴住居3
竪穴住居2	竪穴住居4
竪穴住居3	竪穴住居24
竪穴住居4	竪穴住居34
竪穴住居5	竪穴住居21
竪穴住居6	竪穴住居26
竪穴住居7	竪穴住居60
竪穴住居8	竪穴住居59
竪穴住居9	竪穴住居57
竪穴住居10	竪穴住居58
竪穴住居11	竪穴住居56
竪穴住居12	竪穴住居53
竪穴住居13	-
竪穴住居14	竪穴住居61
竪穴住居15	竪穴住居22
竪穴住居15	竪穴住居22
A群	段状遺構1
B群	段状遺構2
段状遺構1	段状遺構27
段状遺構2	段状遺構28
段状遺構3	段状遺構29
段状遺構4	段状遺構33
段状遺構5	段状遺構30
段状遺構6	段状遺構51
段状遺構7	段状遺構23
段状遺構8	竪穴住居22
段状遺構9	段状遺構50
段状遺構10	段状遺構43
段状遺構11	段状遺構42
段状遺構12	段状遺構38
段状遺構13	段状遺構44
段状遺構14	段状遺構41
段状遺構15	段状遺構40
段状遺構16	段状遺構37・45
段状遺構17	段状遺構36
段状遺構18	段状遺構39
段状遺構19	段状遺構35
段状遺構20	段状遺構49
土壇1	土壇20
土壇2	土壇48
土壇3	土壇47
土壇4	土壇32

### 今岡D遺跡

掲載遺構名	旧遺構名
竪穴住居1	竪穴住居7
竪穴住居2	竪穴住居3
竪穴住居3	竪穴住居2
竪穴住居4	竪穴住居3
竪穴住居4	竪穴住居44
竪穴住居5	竪穴住居45
竪穴住居6	竪穴住居16
竪穴住居7	竪穴住居13
段状遺構1	段状遺構31
段状遺構2	段状遺構54
段状遺構3	段状遺構39
段状遺構4	竪穴住居43
段状遺構5	段状遺構17
段状遺構6	段状遺構18
段状遺構7	段状遺構19
段状遺構8	段状遺構20
段状遺構9	段状遺構56
段状遺構10	段状遺構57
掘立柱建物	掘立柱建物23
柱穴列1	柱穴列51
柱穴列2	柱穴列55
土壇1	土壇6
土壇2	土壇33

### 今岡D遺跡

掲載遺構名	旧遺構名
土壇3	土壇52
土壇4	土壇58
土壇5	土壇37
土壇6	土壇8
土壇7	土壇22
土壇8	土壇50
土壇9	土壇38
土壇10	土壇30
土壇11	土壇47
土壇12	土壇4
土壇13	土壇29
土壇14	土壇34
土壇15	土壇28
土壇16	土壇40
土壇17	土壇46
土壇18	土壇48
土壇19	土壇49
土壇20	
溝1	溝9

### 今岡中山遺跡

掲載遺構名	旧遺構名
竪穴住居1	竪穴住居1古
竪穴住居2	竪穴住居1新
竪穴住居3	竪穴住居2
竪穴住居4	竪穴住居3
段状遺構1	段状遺構7
段状遺構2	段状遺構4
段状遺構3	段状遺構6
段状遺構4	段状遺構5
段状遺構5	段状遺構1・3
段状遺構6	段状遺構2
土壇1	土壇
土壇2	土壇
土壇3	土壇
溝1	溝
溝2	溝
近世墓1	近世墓
近世墓2	近世墓
近世墓3	近世墓
石積み	石積み遺構

### 今岡古墳群

掲載遺構名	旧調査区	旧遺構名
今岡7号墳	今岡中山遺跡	今岡7号墳
今岡8号墳	今岡中山遺跡	溝
今岡9号墳	今岡D遺跡	古墳12
今岡10号墳	今岡D遺跡	古墳1
今岡11号墳	今岡D遺跡	古墳21
今岡12号墳	今岡D遺跡	古墳53
土壇墓1	今岡D遺跡	土壇墓10
土壇墓2	今岡D遺跡	土壇5
土壇墓3	今岡D遺跡	土壇32

### 高岡遺跡

掲載遺構名	旧遺構名
竪穴住居1	竪穴住居6
竪穴住居2	竪穴住居17
竪穴住居3	竪穴住居8
段状遺構1	段状遺構1
段状遺構2	段状遺構15
段状遺構3	段状遺構18
土壇1	土壇13
土壇2	土壇11
土壇3	土壇14
土壇4	土壇12
土壇5	土壇9
土壇6	土壇4
土壇7	土壇10
土壇8	土壇5
土壇9	土壇2

## 付載1 八幡山遺跡出土鉄滓の金属学的調査

九州テクノリサーチ・TACセンター

大澤正己・鈴木瑞穂

### 1. いきさつ

八幡山遺跡は岡山県美作市古町（旧大原町）に所在する。溝跡から複数の鉄滓（総重量600g強）が出土しているため、これら出土鉄滓の性状を調査する目的から、金属学的調査を行う運びとなった。

### 2. 調査方法

#### 2-1. 供試材

Table1に示す。鉄滓3点の調査を行った。

#### 2-2. 調査項目

##### (1) 肉眼観察

遺物の外観上の観察所見を記載した。これらをもとに分析試料採取位置を決定している。

##### (2) 顕微鏡組織

鉄滓の鉱物組成や微小金属部の調査を目的とする。

試料観察面を設定・切り出し後、試験片は樹脂に埋込み、エメリー研磨紙の#150、#240、#320、#600、#1000、及びダイヤモンド粒子の3 $\mu$ と1 $\mu$ で鏡面研磨した。

また観察には金属反射顕微鏡を用い、特徴的・代表的な視野を選択して、写真撮影を行った（100～400倍）。なお金属鉄部の調査では、5%ナイトル（硝酸アルコール液）を腐食（Etching）に用いた。

##### (3) ビッカース断面硬度

ビッカース断面硬度計（Vickers Hardness Tester）を用いて硬さの測定を行った。試験は鏡面研磨した試料に136°の頂角をもったダイヤモンドを押し込み、その時に生じた窪みの面積をもって、その荷重を除いた商を硬度値としている。試料は顕微鏡用を併用した。荷重は100gfないし200gfで測定している。

##### (4) 化学組成分析

供試材の分析は次の方法で実施した。

全鉄分（Total Fe）、金属鉄（Metallic Fe）、酸化第一鉄（FeO）：容量法。

炭素（C）、硫黄（S）：燃焼容量法、燃焼赤外吸収法。

二酸化硅素（SiO<sub>2</sub>）、酸化アルミニウム（Al<sub>2</sub>O<sub>3</sub>）、酸化カルシウム（CaO）、酸化マグネシウム（MgO）、酸化カリウム（K<sub>2</sub>O）、酸化ナトリウム（Na<sub>2</sub>O）、酸化マンガン（MnO）、二酸化チタン（TiO<sub>2</sub>）、酸化クロム（Cr<sub>2</sub>O<sub>3</sub>）、五酸化燐（P<sub>2</sub>O<sub>5</sub>）、バナジウム（V）、銅（Cu）、二酸化ジルコニウム（ZrO<sub>2</sub>）：ICP（Inductively Coupled Plasma Emission Spectrometer）法：誘導結合プラズマ発光分光分析。

### 3. 調査結果



## M 2：鍛冶滓

(1) 肉眼観察：楕形鍛冶滓の小破片と推測される。滓の色調は黒灰色である。上下面は資料本来の表面で、側面は全面破面である。上面には大型の気孔がみられ、下面は細かい木炭痕による凹凸が著しい。破面には中小の気孔が点在するが、比較的緻密な滓である。磁着は強い。

(2) 顕微鏡組織：Photo.1①～③に示す。①中央は、滓中の微細な金属鉄粒である。5%ナイトルで腐食した組織を示している。白色多角形状のフェライト (Ferrite:  $\alpha$  鉄) 素地に、少量黒色層状のパーライト (Pearlite) が析出する亜共析組織 (<0.77% C) であった。パーライトの面積率から、炭素含有量は0.2%以下の軟鉄と推定される。

②③は滓部である。白色粒状結晶ウスタイト (Wustite:  $\text{FeO}$ )、暗褐色多角形結晶ヘーシナイト (Hercynite:  $\text{FeO} \cdot \text{Al}_2\text{O}_3$ )、淡灰色盤状結晶ファイヤライト (Fayalite:  $2\text{FeO} \cdot \text{SiO}_2$ ) が晶出する。鉄チタン酸化物の影響がほとんどない、鍛冶滓によくみられる鉱物組成である。

(3) ビッカース断面硬度：Photo.1③の淡灰色盤状結晶の硬度を測定した。硬度値は632Hvであった。ファイヤライトの文献硬度値<sup>(1)</sup> 600～700Hvの範囲内であり、ファイヤライトに同定される。

(4) 化学組成分析：Table2に示す。全鉄分 (Total Fe) 49.56%に対して、金属鉄 (Metallic Fe) 0.54%、酸化第1鉄 ( $\text{FeO}$ ) 48.43%、酸化第2鉄 ( $\text{Fe}_2\text{O}_3$ ) 16.26%の割合であった。造滓成分 ( $\text{SiO}_2 + \text{Al}_2\text{O}_3 + \text{CaO} + \text{MgO} + \text{K}_2\text{O} + \text{Na}_2\text{O}$ ) 31.36%で、このうち塩基性成分 ( $\text{CaO} + \text{MgO}$ ) は3.09%と低めである。砂鉄起源の二酸化チタン ( $\text{TiO}_2$ ) は0.43%、バナジウム (V) が0.01%と低値であった。また酸化マンガン ( $\text{MnO}$ ) 0.14%、酸化クロム ( $\text{Cr}_2\text{O}_3$ ) も0.09%と、当遺跡出土鉄滓 (M 3、4) と比較すると低めである。銅 (Cu) は0.01%であった。

砂鉄起源の脈石成分 ( $\text{TiO}_2$ 、V、 $\text{MnO}$ ) の低減傾向が顕著であり、鉄チタン酸化物の影響がほとんどないことから、当資料は砂鉄を始発原料とする鍛錬鍛冶滓と推定される。

なお塊鉱石 (磁鉄鉱) を始発原料とする製錬滓～鍛冶滓の可能性も考慮する必要があるが、通常鉱石系製錬滓に多く含まれる、塩基性成分 ( $\text{CaO} + \text{MgO}$ ) の値が高くないこと。他の出土鉄滓 (M 3、4) が高チタン砂鉄製錬滓であることを考えると、砂鉄系鍛錬鍛冶滓の可能性が高いと考えられる。

## M 3：炉内滓 (製錬滓)

(1) 肉眼観察：隣り合う側面2面に、灰褐色の炉床粘土が固着する、炉内滓破片である。炉壁粘土には、ごく短く切ったスサが多量に混和されている。滓部は暗黒色で、表面は弱い流動状を呈する。また最大長さ20mm弱の木炭痕も散在する。やや軽い質感で、粘土溶融物 (ガラス質滓) の割合が高いものと推測される。

(2) 顕微鏡組織：Photo.1④～⑥に示す。淡茶褐色多角形結晶ウルボスピネル (Ulvöspinel:  $2\text{FeO} \cdot \text{TiO}_2$ )、白色針状結晶イルミナイト (Ilmenite:  $\text{FeO} \cdot \text{TiO}_2$ )、淡褐色片状結晶シュードブルーカイト (Pseudobrookite:  $\text{Fe}_2\text{O}_3 \cdot \text{TiO}_2$ ) が晶出する。高温下で生じた砂鉄製錬滓の晶癖<sup>(2)</sup> である

(3) ビッカース断面硬度：Photo.1⑥の淡褐色片状結晶の硬度を測定した。硬度値は773Hvであった。チタン ( $\text{TiO}_2$ ) の割合の高い結晶であるため、非常に硬質の値を示す。シュードブルーカイトと推定される。

(4) 化学組成分析：Table2に示す。全鉄分 (Total Fe) は15.79%と低値であった。このうち金属鉄 (Metallic Fe) は0.11%、酸化第1鉄 ( $\text{FeO}$ ) 8.77%、酸化第2鉄 ( $\text{Fe}_2\text{O}_3$ ) 12.67%の割合である。造滓成

分 ( $\text{SiO}_2 + \text{Al}_2\text{O}_3 + \text{CaO} + \text{MgO} + \text{K}_2\text{O} + \text{Na}_2\text{O}$ ) 70.37%と高値で、塩基性成分 ( $\text{CaO} + \text{MgO}$ ) も6.70%と高めである。また製鉄原料の砂鉄起源の二酸化チタン ( $\text{TiO}_2$ ) 5.68%、バナジウム (V) 0.08%であった。さらに酸化マンガン ( $\text{MnO}$ ) は0.51%、酸化クロム ( $\text{Cr}_2\text{O}_3$ ) も0.16%、銅 (Cu) 0.02%とやや高めである。

以上の鉱物・化学組成から、当試料は粘土溶融物や木炭灰起源の溶融物〔造滓成分 ( $\text{SiO}_2 + \text{Al}_2\text{O}_3 + \text{CaO} + \text{MgO} + \text{K}_2\text{O} + \text{Na}_2\text{O}$ )〕の割合が高く二酸化チタン ( $\text{TiO}_2$ ) が6.0%台と低めにあるが、砂鉄製錬滓と判断される。

#### M 4：炉内滓（製錬滓）

(1)肉眼観察：非常に小型の炉内滓破片と推定される。滓の色調は黒灰色である。表面はほぼ全面破面で、ごく細かい気孔が散在するが、緻密な滓である。

(2)顕微鏡組織：Photo.1⑦に示す。発達した淡茶褐色多角形結晶ウルボスピネル、ごく微細な白色針状結晶イルミナイトが晶出する。砂鉄製錬滓の晶癖である

(3)ピッカース断面硬度：紙面の構成上、硬度を測定した圧痕の写真を割愛したが、淡茶褐色多角形結晶の調査を実施した。硬度値は597Hvであった。ウルボスピネル (Ulvöspinel： $2\text{FeO} \cdot \text{TiO}_2$ ) としては若干軟質の値である。このため、ウルボスピネルとマグネタイト (Magnetite： $\text{FeO} \cdot \text{Fe}_2\text{O}_3$ ) の中間のチタノマグネタイトの可能性が考えられる<sup>(3)</sup>。

(4)化学組成分析：Table2に示す。全鉄分 (Total Fe) 38.69%に対して、金属鉄 (Metallic Fe) 0.09%、酸化第1鉄 ( $\text{FeO}$ ) 49.36%、酸化第2鉄 ( $\text{Fe}_2\text{O}_3$ ) 0.33%の割合であった。造滓成分 ( $\text{SiO}_2 + \text{Al}_2\text{O}_3 + \text{CaO} + \text{MgO} + \text{K}_2\text{O} + \text{Na}_2\text{O}$ ) 15.52%で、このうち塩基性成分 ( $\text{CaO} + \text{MgO}$ ) は4.21%である。製鉄原料の砂鉄起源の二酸化チタン ( $\text{TiO}_2$ ) は29.73%、バナジウム (V) が0.28%と高値傾向が著しい。また酸化マンガン ( $\text{MnO}$ ) も2.10%、酸化クロム ( $\text{Cr}_2\text{O}_3$ ) 0.13%と高めである。銅 (Cu) は0.01%であった。

以上の鉱物・化学組成から、当試料は苦鉄質の火山岩起源の高チタン砂鉄 ( $\text{TiO}_2$ ) を原料とした、製錬滓と推定される。

## 4. まとめ

八幡山遺跡から出土した鉄滓3点を分析調査した結果、次の点が明らかになった。

〈1〉分析調査を実施した鉄滓のうち、2点 (M 3、4) は砂鉄製錬滓に分類される。近接地域で砂鉄製錬が行われたことを示すものである。

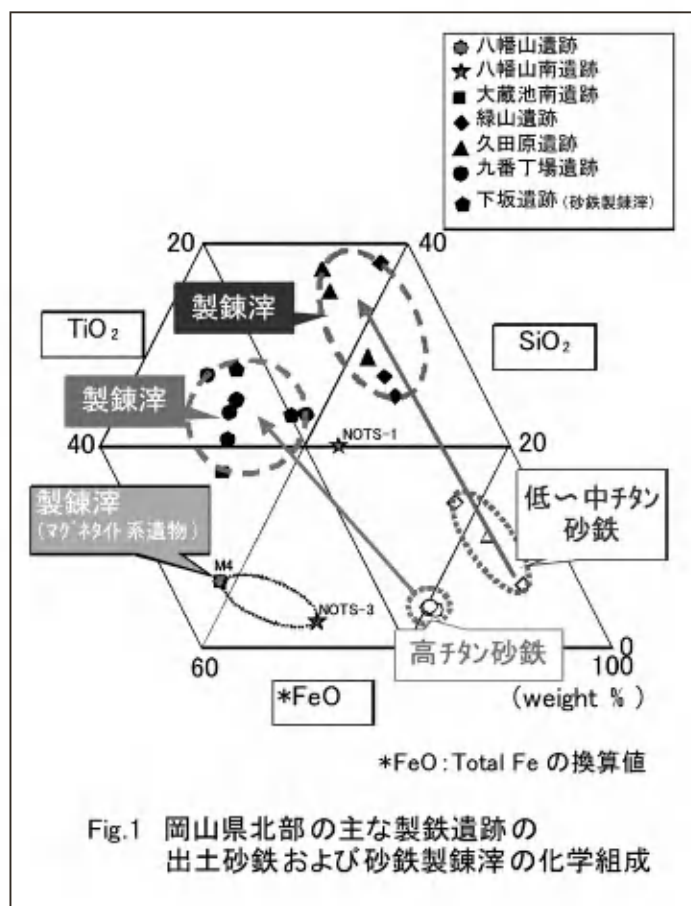
鉄滓中の鉱物・化学組成から、苦鉄質の火山岩起源の高チタン ( $\text{TiO}_2$ ) 砂鉄が製鉄原料であったと判断される。岡山県北地域で砂鉄製錬が行われた、古代の製鉄遺跡の分析調査結果 [Fig.1 (\*造滓成分主体の製錬滓M 3は除く)<sup>(4)</sup>] と比較しても、当遺跡および八幡山南遺跡からは、チタン含有率の非常に高い製錬滓が出土している。これは地域の地質を反映したものと考えられる。

酸化クロム ( $\text{Cr}_2\text{O}_3$ ) の高値傾向がみられることも、大きな特徴である。これらから当遺跡周辺では、少なくとも一部、三郡帯中の超マフィック (苦鉄質) 岩類<sup>(5)</sup> 起源の砂鉄を含むものが、製鉄に用いられた可能性が高いと考えられる<sup>(6)</sup>。なお、M 3は炉材溶融物主体であるため、相対的にチタン含有率が低値となったものと推測される。ただし、鳥取県境付近には、山陰帯の花崗岩類が分布しており<sup>(7)</sup>、当地域でも、磁鉄鉱系列の花崗岩起源の低チタン砂鉄を製鉄に利用した可能性は今後検討し

ていく必要がある<sup>(8)</sup>。

〈2〉また残る鉄滓1点(M2)は、砂鉄を始発原料とする、鍛錬鍛冶滓と推定される。近接地域で製鉄～鍛冶の一連の作業が行われていた可能性が考えられる。

ただし、今回分析調査を実施した鉄滓は、明瞭な鉄生産関連遺構に伴うものではないため、作業工程の推定には慎重を要する。今後、周辺地域の分析調査事例の蓄積が待たれる。



註

- (1) 日刊工業新聞社『焼結鉱組織写真および識別法』1968  
 ウスタイトは450～500Hv、マグネタイトは500～600Hv、ファイヤライトは600～700Hvの範囲が提示されている。ウルボスピネルの硬度値範囲の明記はないが、マグネタイトにチタン (Ti) を固溶するので、600Hv以上であればウルボスピネルと同定している。それにアルミナ (Al) が加わり、ウルボスピネルとヘーシナイトを端成分とする固溶体となると更に硬度値は上昇する。このため700Hvを超える値では、ウルボスピネルとヘーシナイトの固溶体の可能性が考えられる。
- (2) J.B.Mac chesney and A. Murau : American Mineralogist, 46 (1961), 572  
 [イルミナイト (Ilmenite :  $\text{FeO} \cdot \text{TiO}_2$ )、シュードブルーカイト (Pseudobrookite :  $\text{Fe}_2\text{O}_3 \cdot \text{TiO}_2$ )、ルチル (Rutile :  $\text{TiO}_2$ ) の晶出はFe-TiO<sub>2</sub>二元平衡状態図から高温化操業が推定される。]
- (3) 黒田吉益・諏訪兼位『偏光顕微鏡と造岩鉱物 [第2版]』共立出版株式会社 1983  
 第5章 鉱物各論 E. 磁鉄鉱 (magnetite)  
 磁鉄鉱は広義のスピネル類に属し、 $\text{FeO} \cdot \text{Fe}_2\text{O}_3$ の理想組成をもっているが、多くの場合Tiをかなり含んでいる。(中略) ウルボスピネル (ulvöspinel) と連続固溶体をつくり、この中間組成のものをチタン磁鉄鉱 (titanomagnetite) とよぶ。
- (4) 比較資料として、以下の報告書に記載された分析調査結果を利用した。
  - ①「大蔵池南遺跡」『日本列島における初期製鉄・鍛冶技術に関する実証的研究』愛媛大学法文学部 2006
  - ②『緑山遺跡』津山市教育委員会 1986

- ③『久田原遺跡・久田原古墳群』岡山県文化財保護協会 2004
- ④「九番丁場遺跡」『一般国道179号線道路改築工事に伴う発掘調査』岡山県教育委員会 2002
- ⑤「下坂遺跡」(未発表資料、2008年度刊行予定)
- (5) 久代育夫・荒牧重雄・青木謙一郎『日本の火成岩』岩波書店 1989
- (6) 井澤英二「日本の古代製鉄で利用された鉱石」『ふえらむ』Vol.10 No.5 2005
- (7) 猪木幸男・村上充英・人久保雅弘『日本の地質7 中国地方』共立出版(株)
- (8) 高木哲一「中国地方の花崗岩」『第四回たたらサミット実行委員会』2003

Table1 供試材の履歴と調査項目

符号	遺跡名	出土位置	遺物名称	推定年代	計測値		メタル度	調査項目							備考
					大きさ (mm)	重量 (g)		マクロ組織	顕微鏡組織	ビッカース断面硬度	X線回折	EPMA	化学分析	耐火度	
M2	八幡山	溝4	鍛冶滓	古代以降?	58×40×30	88.87	なし		○	○			○		
M3		溝7	炉内滓(製錬滓)		72×60×39	162.71	なし		○	○			○		
M4			炉内滓(製錬滓)		29.5×20.5×20	21.30	なし		○	○			○		

\*M4は全量分析

Table2 供試材の化学組成

符号	遺跡名	出土位置	遺物名称	推定年代	* * * * *								
					全鉄分 (TotalFe)	全屑鉄 (MetallicFe)	酸化第1鉄 (FeO)	酸化第2鉄 (Fe <sub>2</sub> O <sub>3</sub> )	二酸化珪素 (SiO <sub>2</sub> )	酸化アルミニウム (Al <sub>2</sub> O <sub>3</sub> )	酸化カルシウム (CaO)	酸化マグネシウム (MgO)	酸化カリウム (K <sub>2</sub> O)
M2	八幡山	溝4	鍛冶滓	古代以降?	49.56	0.54	48.43	16.26	21.14	5.95	1.24	1.85	0.95
M3		溝7	炉内滓(製錬滓)		15.79	0.11	8.77	12.67	42.05	20.48	3.26	3.44	0.83
M4			炉内滓(製錬滓)		38.69	0.09	49.36	0.33	5.73	4.94	2.08	2.13	0.57

符号	* * * * *											Σ*		注
	酸化ナトリウム (Na <sub>2</sub> O)	酸化マンガン (MnO)	二酸化チタン (TiO <sub>2</sub> )	酸化クロム (Cr <sub>2</sub> O <sub>3</sub> )	硫黄 (S)	五酸化燐 (P <sub>2</sub> O <sub>5</sub> )	炭素 (C)	バナジウム (V)	銅 (Cu)	二酸化ジルコニウム (ZrO <sub>2</sub> )	渣滓成分	Total Fe	TiO <sub>2</sub> / Total Fe	
M2	0.23	0.14	0.43	0.09	0.023	0.12	0.10	0.01	0.01	<0.01	31.36	0.633	0.009	
M3	0.31	0.51	5.68	0.16	0.003	0.18	0.09	0.08	0.02	0.02	70.37	4.457	0.360	
M4	0.07	2.10	29.73	0.13	0.016	0.14	0.04	0.28	0.01	0.02	15.52	0.401	0.758	

Table3 出土遺物の調査結果のまとめ

符号	遺跡名	出土位置	遺物名称	推定年代	顕微鏡組織	化学組成 (%)							所見	
						Total Fe	Fe <sub>2</sub> O <sub>3</sub>	塩基性成分	TiO <sub>2</sub>	V	MnO	ガラス質成分		Cu
M2	八幡山	溝4	鍛冶滓	古代以降?	微小金属鉄粒・亜共析組織、滓部:W+F	49.56	16.26	3.09	0.43	0.01	0.14	31.36	0.01	鍛錬鍛冶滓(始発原料:砂鉄)の可能性が高い
M3		溝7	炉内滓(製錬滓)		滓部:U+H+Ps	15.79	12.67	6.70	5.68	0.08	0.51	70.37	0.02	製錬滓(原料:砂鉄、材材溶融物主体)
M4			炉内滓(製錬滓)		滓部:U+I	38.69	0.33	4.21	29.73	0.28	2.10	15.52	0.01	製錬滓(火山岩起源の高タン砂鉄)

W:Wustite (FeO)、F:Fayalite (2FeO · SiO<sub>2</sub>)、U:Ulvöspinel (2FeO · TiO<sub>2</sub>)、I:Ilmenite (FeO · TiO<sub>2</sub>)、Ps:Pseudobrookite (Fe<sub>2</sub>O<sub>3</sub> · TiO<sub>2</sub>)

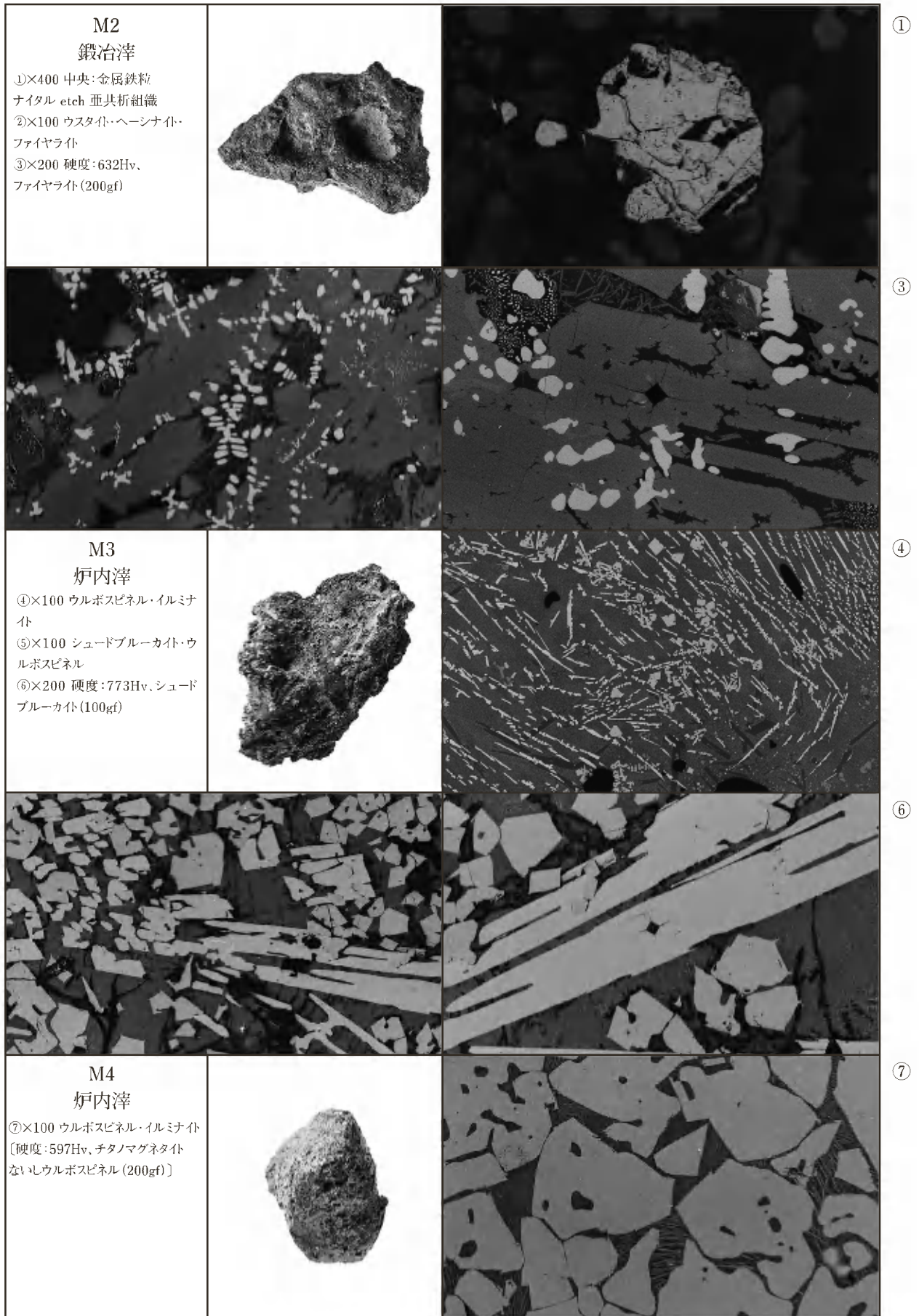


Photo.1 鍛冶滓・炉内滓（製錬滓）の顕微鏡組織

## 付載 2 八幡山南遺跡出土鉄滓の金属学的調査

九州テクノリサーチ・TACセンター

大澤正己・鈴木瑞穂

### 1. いきさつ

八幡山南遺跡は、岡山県美作市古町（旧大原町）に所在する。遺跡内では、被熱面を2箇所伴う段状遺構が検出された。またこの段状遺構からは、鉄滓が総計1638.06g出土している。何らかの鉄生産に伴う遺構の可能性が考えられるが、炉跡としては鉄滓の出土量が少なく、二次的に廃棄された可能性も指摘されている。

このため、出土鉄滓の性状を確認して、遺跡周辺での鉄生産の実態を検討する目的から、金属学的調査を行う運びとなった。

### 2. 調査方法

#### 2-1. 供試材

Table1に示す。鉄滓3点の調査を行った。

#### 2-2. 調査項目

##### (1) 肉眼観察

遺物の外観上の観察所見を記載した。これらをもとに分析試料採取位置を決定している。

##### (2) 顕微鏡組織

鉄滓の鉱物組成や微小金属部の調査を目的とする。

試料観察面を設定・切り出し後、試験片は樹脂に埋込み、エメリー研磨紙の#150、#240、#320、#600、#1000、及びダイヤモンド粒子の $3\mu$ と $1\mu$ で鏡面研磨した。

また観察には金属反射顕微鏡を用い、特徴的・代表的な視野を選択して、写真撮影を行った（50～400倍）。

##### (3) ビッカース断面硬度

ビッカース断面硬度計（Vickers Hardness Tester）を用いて硬さの測定を行った。試験は鏡面研磨した試料に $136^\circ$ の頂角をもったダイヤモンドを押し込み、その時に生じた窪みの面積をもって、その荷重を除いた商を硬度値としている。試料は顕微鏡用を併用した。また荷重は200gfで測定した。

##### (4) 化学組成分析

供試材の分析は次の方法で実施した。

全鉄分（Total Fe）、金属鉄（Metallic Fe）、酸化第一鉄（FeO）：容量法。

炭素（C）、硫黄（S）：燃烧容量法、燃烧赤外吸収法。

二酸化硅素（ $\text{SiO}_2$ ）、酸化アルミニウム（ $\text{Al}_2\text{O}_3$ ）、酸化カルシウム（ $\text{CaO}$ ）、酸化マグネシウム（ $\text{MgO}$ ）、酸化カリウム（ $\text{K}_2\text{O}$ ）、酸化ナトリウム（ $\text{Na}_2\text{O}$ ）、酸化マンガン（ $\text{MnO}$ ）、二酸化チタン（ $\text{TiO}_2$ ）、酸化クロム（ $\text{Cr}_2\text{O}_3$ ）、五酸化燐（ $\text{P}_2\text{O}_5$ ）、バナジウム（V）、銅（Cu）、二酸化ジルコニウム（ $\text{ZrO}_2$ ）：ICP

(Inductively Coupled Plasma Emission Spectrometer) 法：誘導結合プラズマ発光分光分析。

### 3. 調査結果

#### 3-1. 八幡山南遺跡出土鉄滓

NOTS-1：炉内滓（製錬滓）

(1) 肉眼観察：約108gとごく小型の炉内滓破片と推測される。滓の色調は黒灰色である。上下面は資料本来の表面で、側面5面は全面破面である。上面は比較的平滑で、一部木炭痕が残る。下面には灰褐色の炉床土が点々と固着する。内部には中小の気孔が多数散在する。

(2) 顕微鏡組織：Photo.1①～③に示す。①中央の不定形灰褐色部は被熱砂鉄である。内部には縞状の離溶組織がみられ、含チタン鉄鉱<sup>(1)</sup>と推定される。

また②③は滓部である。淡茶褐色多角形結晶ウルボスピネル (Ulvöspinel： $2\text{FeO} \cdot \text{TiO}_2$ )、淡灰色柱状結晶ファイヤライト (Fayalite： $2\text{FeO} \cdot \text{SiO}_2$ ) が晶出する。砂鉄製錬滓の晶癖である。

(3) ビッカース断面硬度：Photo.1③の淡茶褐色多角形結晶の硬度を測定した。硬度値は692Hvであった。ウルボスピネルに同定される<sup>(2)</sup>。

(4) 化学組成分析：Table2に示す。全鉄分 (Total Fe) 40.53%に対して、金属鉄 (Metallic Fe) 0.11%、酸化第1鉄 (FeO) 45.41%、酸化第2鉄 ( $\text{Fe}_2\text{O}_3$ ) 7.32%の割合であった。造滓成分 ( $\text{SiO}_2 + \text{Al}_2\text{O}_3 + \text{CaO} + \text{MgO} + \text{K}_2\text{O} + \text{Na}_2\text{O}$ ) 29.71%で、このうち塩基性成分 ( $\text{CaO} + \text{MgO}$ ) 4.66%とやや低めである。製鉄原料の砂鉄起源の二酸化チタン ( $\text{TiO}_2$ ) は13.47%、バナジウム (V) が0.14%と高値であった。また酸化マンガン (MnO) は0.82%、酸化クロム ( $\text{Cr}_2\text{O}_3$ ) も0.12%と高値傾向を示す。さらに銅 (Cu) も0.05%と高値である。

以上の鉱物・化学組成から、当試料は苦鉄質の火山岩起源の高チタン砂鉄 ( $\text{TiO}_2$ ) を原料とした、製錬滓に分類できる。

NOTS-2：流出孔滓（製錬滓）

(1) 肉眼観察：77gとごく小型の流出孔滓と推測される。滓の色調は暗灰色～黒灰色である。側面端部片側が破面で、それ以外はほぼ資料本来の表面である。上面は中央がややくぼみ、細かい凹凸がみられる。側面から下面にかけては、灰褐色の炉壁粘土粉が点々と固着する。また表面、破面の気孔は少ないが、やや軽い質感で、粘土溶融物の割合の高い滓と推定される。

(2) 顕微鏡組織：Photo.1④に示す。中央は被熱砂鉄で、格子状の離溶組織が残存する、含チタン鉄鉱である。また周囲には、淡茶褐色多角形結晶ウルボスピネル、白色針状結晶イルミナイト (Ilmenite： $\text{FeO} \cdot \text{TiO}_2$ ) が晶出する。比較的高温下で生じた、砂鉄製錬滓に分類される<sup>(3)</sup>。

(3) ビッカース断面硬度：紙面の構成上、硬度を測定した圧痕の写真を割愛したが、淡茶褐色多角形結晶の調査を実施した。硬度値は647Hvであった。ウルボスピネルと推定される。

(4) 化学組成分析：Table2に示す。全鉄分 (Total Fe) は13.81%と低値であった。このうち金属鉄 (Metallic Fe) は0.08%、酸化第1鉄 (FeO) 14.01%、酸化第2鉄 ( $\text{Fe}_2\text{O}_3$ ) 4.06%の割合である。造滓成分 ( $\text{SiO}_2 + \text{Al}_2\text{O}_3 + \text{CaO} + \text{MgO} + \text{K}_2\text{O} + \text{Na}_2\text{O}$ ) は72.85%と高値で、塩基性成分 ( $\text{CaO} + \text{MgO}$ ) も12.87%と高めであった。これは酸化カリウム ( $\text{K}_2\text{O}$ ) も1.89%と、高値傾向を示すことから、木炭灰の影響を受けた値と推測される。また製鉄原料の砂鉄起源の二酸化チタン ( $\text{TiO}_2$ ) は5.63%、バナジウム (V) が0.07%と低めであった。さらに酸化マンガン (MnO) は0.58%、酸化クロム ( $\text{Cr}_2\text{O}_3$ ) が0.18%、銅

(Cu) 0.02%と高値傾向を示した。

以上の鉱物・化学組成から、当資料は粘土溶融物や木炭灰起源の溶融物〔造滓成分 ( $\text{SiO}_2 + \text{Al}_2\text{O}_3 + \text{CaO} + \text{MgO} + \text{K}_2\text{O} + \text{Na}_2\text{O}$ )〕の割合が高い、砂鉄製錬滓と判断される。また製鉄原料は炉内滓 (NOTS-1) と同様、火山岩起源の高チタン砂鉄 ( $\text{TiO}_2$ ) であろう。

NOTS-3：製錬滓 (炉内滓)

(1) 肉眼観察：60gとごく小型の炉内滓破片と推測される。滓の色調は暗灰色～黒灰色である。上面に一部流動状の表面が残る。他は全面強い光沢を持ち、中小の気孔が散在する破面である。全体に磁着が強く、重量感のある滓である。

(2) 顕微鏡組織：Photo.1⑤～⑦に示す。⑤は淡茶褐色多角形結晶ウルボスピネル、白色針状結晶イルミナイトが晶出する。また⑥⑦では、大型の淡茶褐色多角形結晶ウルボスピネルが凝集気味に晶出する。やはり砂鉄製錬滓の晶癖である。

(3) ビッカース断面硬度：Photo.1⑦の淡茶褐色多角形結晶の硬度を測定した。硬度値は635Hvであった。ウルボスピネルに同定される。

(4) 化学組成分析：Table2に示す。全鉄分 (Total Fe) 47.59%に対して、金属鉄 (Metallic Fe) 0.07%、酸化第1鉄 ( $\text{FeO}$ ) 46.49%、酸化第2鉄 ( $\text{Fe}_2\text{O}_3$ ) 16.28%の割合であった。造滓成分 ( $\text{SiO}_2 + \text{Al}_2\text{O}_3 + \text{CaO} + \text{MgO} + \text{K}_2\text{O} + \text{Na}_2\text{O}$ ) は8.33%と低めで、塩基性成分 ( $\text{CaO} + \text{MgO}$ ) は2.49%である。製鉄原料の砂鉄起源の二酸化チタン ( $\text{TiO}_2$ ) は23.81%、バナジウム (V) 0.61%と非常に高値であった。また酸化マンガン ( $\text{MnO}$ ) も1.47%、酸化クロム ( $\text{Cr}_2\text{O}_3$ ) 0.32%と高値傾向が著しい。銅 (Cu) は0.01%であった。

以上の鉱物・化学組成から、当試料も苦鉄質の火山岩起源の高チタン砂鉄 ( $\text{TiO}_2$ ) を原料とした、製錬滓である。

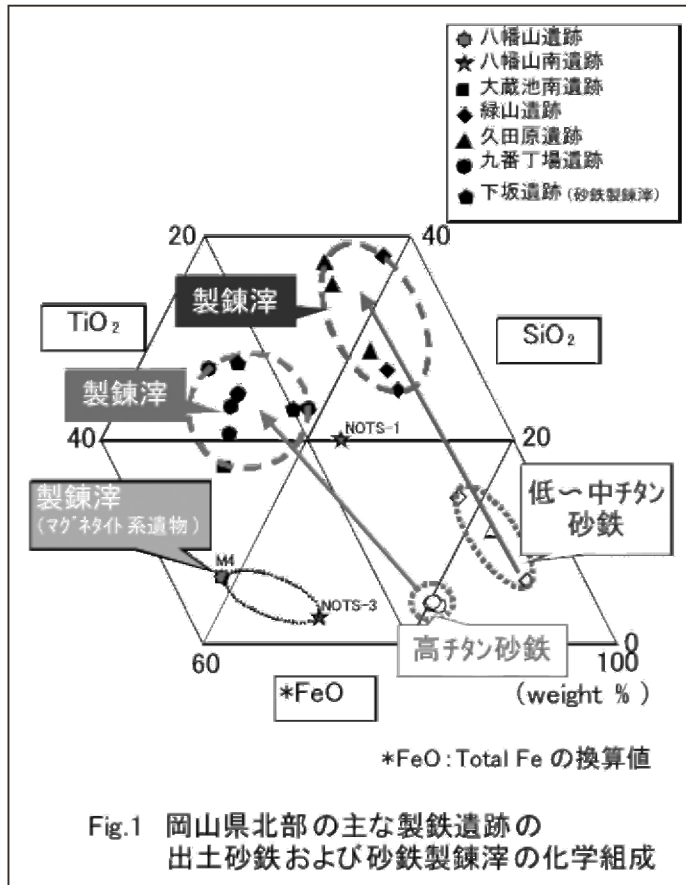
#### 4. まとめ

分析調査を実施した、八幡山南遺跡出土鉄滓3点は、いずれも砂鉄製錬滓に分類される。近接地域で鉄製錬が行われていたことを示す遺物といえる。

また鉄滓中の被熱砂鉄が含チタン鉄鉱であることや、化学分析値から、苦鉄質の火山岩起源の高チタン ( $\text{TiO}_2$ ) 砂鉄が製鉄原料であったと判断される。岡山県北地域で砂鉄製錬が行われた、古代の製鉄遺跡の分析調査結果 [Fig.1 (\*造滓成分主体の製錬滓NOTS-2は除く)<sup>(4)</sup>] と比較しても、当遺跡および近接する八幡山遺跡からは、チタン含有率の非常に高い製錬滓が出土している。これは地域の地質を反映したものと考えられる。

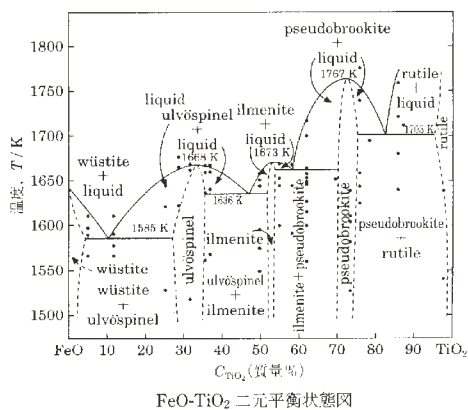
さらに酸化クロム ( $\text{Cr}_2\text{O}_3$ ) の高値傾向が著しい点も、大きな特徴といえる。これらから、当遺跡周辺では少なくとも一部、三郡帯中の超マフィック (苦鉄質) 岩類<sup>(5)</sup> 起源の砂鉄を含むものが、製鉄に用いられた可能性が高いと考えられる<sup>(6)</sup>。NOTS-2は炉材溶融物主体の製錬であったため、相対的にチタン含有率が低くなったものと推定される。ただし、鳥取県境付近には一部山陰帯の磁鉄鉱系列の花崗岩類が分布しており<sup>(7)</sup>、当地域で花崗岩起源の低チタン砂鉄を利用した可能性は今後検討していく必要がある。なお、隣接する兵庫県側では、遺跡によって低チタン砂鉄と高チタン砂鉄を原料とするものの二系統が存在することが確認されている<sup>(8)</sup>。原料砂鉄の利用状況の詳細を検討するためにも、今後の調査事例の蓄積が待たれる。





註

- (1) 木下亀城・小川留太郎『岩石鉱物』保育社 1995  
チタン鉄鉱は赤鉄鉱とあらゆる割合に混じりあった固溶体をつくる。(中略) チタン鉄鉱と赤鉄鉱の固溶体には、チタン鉄鉱あるいは赤鉄鉱の結晶をなし、全体が完全に均質なものと、チタン鉄鉱と赤鉄鉱が平行にならんで規則正しい縞状構造を示すものがある。  
チタン鉄鉱は磁鉄鉱とも固溶体をつくり、これにも均質なものと、縞状のものがある。(中略) このようなチタン鉄鉱と赤鉄鉱、または磁鉄鉱との固溶体を含チタン鉄鉱Titaniferous iron oreという。
- (2) 日刊工業新聞社『焼結鉱組織写真および識別法』1968  
ウスタイトは450~500Hv、マグネタイトは500~600Hv、ファイヤライトは600~700Hvの範囲が提示されている。ウルボスピネルの硬度値範囲の明記はないが、マグネタイトにチタン (Ti) を固溶するので、600Hv以上であればウルボスピネルと同定している。それにアルミナ (Al) が加わり、ウルボスピネルとヘーシナイトを端成分とする固溶体となると更に硬度値は上昇する。このため700Hvを超える値では、ウルボスピネルとヘーシナイトの固溶体の可能性が考えられる。
- (3) J.B.Mac chesney and A. Murau : American Mineralogist, 46 (1961), 572  
〔イルミナイト (Ilmenite :  $\text{FeO} \cdot \text{TiO}_2$ )、シュードブルーカイト (Pseudobrookite :  $\text{Fe}_2\text{O}_3 \cdot \text{TiO}_2$ )、ルチル (Rutile :  $\text{TiO}_2$ ) の晶出はFe-TiO<sub>2</sub>二元平衡状態図から高温化操業が推定される。〕



(4) 比較資料として、以下の報告書に記載された分析調査結果を利用した。

①「大蔵池南遺跡」『日本列島における初期製鉄・鍛冶技術に関する実証的研究』愛媛大学法文学部 2006

②『緑山遺跡』津山市教育委員会 1986

③『久田原遺跡・久田原古墳群』岡山県文化財保護協会 2004

④「九番丁場遺跡」『一般国道179号線道路改築工事に伴う発掘調査』岡山県教育委員会 2002

⑤「下坂遺跡」(未発表資料、2008年度刊行予定)

(5) 久代育夫・荒牧重雄・青木謙一郎『日本の火成岩』岩波書店 1989

(6) 井澤英二「日本の古代製鉄で利用された鉱石」『ふえらむ』Vol.10 No.5 2005

(7) 高木哲一「中国地方の花崗岩」『第四回たたらサミット報告書』たたらサミット実行委員会 2005

(8) 大澤正己「生栖遺跡出土鍛冶関連遺物の金属学的調査」『生栖遺跡』兵庫県教育委員会 2005

Table1 供試材の履歴と調査項目

符号	遺跡名	出土位置	遺物名称	推定年代	計測値		メタル度	調査項目							備考	
					大きさ (mm)	重量 (g)		マクロ組織	顕微鏡組織	ビッカース断面硬度	X線回折	EPMA	化学分析	耐火度		カロリ
NOTS-1	八幡山南	段状東-2	炉内滓 (製錬滓)	古代	49×43×40	107.55	なし		○	○			○			
NOTS-2		段状西-5	流出孔滓 (製錬滓)		65×42.5×34.5	76.85	なし		○	○			○			
NOTS-3		西並張第5層	炉内滓 (製錬滓)		35×30×36	59.69	なし		○	○			○			

Table2 供試材の化学組成

符号	遺跡名	出土位置	遺物名称	推定年代	* * * * *									
					全鉄分 (TotalFe)	金属鉄 (MetallicFe)	酸化第1鉄 (FeO)	酸化第2鉄 (Fe <sub>2</sub> O <sub>3</sub> )	酸化珪素 (SiO <sub>2</sub> )	酸化アルミニウム (Al <sub>2</sub> O <sub>3</sub> )	酸化カルシウム (CaO)	酸化マグネシウム (MgO)	酸化カリウム (K <sub>2</sub> O)	
NOTS-1	八幡山南	段状東-2	炉内滓 (製錬滓)	古代	40.53	0.11	45.41	7.32	16.51	7.68	2.82	1.84	0.62	
NOTS-2		段状西-5	流出孔滓 (製錬滓)		13.81	0.08	14.01	4.06	36.04	21.77	9.05	3.82	1.89	
NOTS-3		西並張第5層	炉内滓 (製錬滓)		47.59	0.07	46.49	16.28	2.32	3.34	1.06	1.43	0.14	

符号	* * *										注		
	酸化ナトリウム (Na <sub>2</sub> O)	酸化マンガン (MnO)	酸化チタン (TiO <sub>2</sub> )	酸化クロム (Cr <sub>2</sub> O <sub>3</sub> )	硫黄 (S)	酸化リン (P <sub>2</sub> O <sub>5</sub> )	炭素 (C)	バナジウム (V)	銅 (Cu)	酸化ジルコニウム (Zr <sub>2</sub> O <sub>2</sub> )		造滓成分	Total Fe
NOTS-1	0.24	0.82	13.47	0.12	0.049	0.16	0.06	0.14	0.05	0.01	29.71	0.733	0.332
NOTS-2	0.28	0.58	5.63	0.18	0.040	0.33	0.04	0.07	0.02	-0.01	72.85	5.275	0.408
NOTS-3	0.04	1.47	23.81	0.32	0.003	0.07	0.03	0.61	0.01	0.01	8.33	0.175	0.500

Table3 出土遺物の調査結果のまとめ

符号	遺跡名	出土位置	遺物名称	推定年代	顕微鏡組織	化学組成 (%)								所見
						Total Fe	Fe <sub>2</sub> O <sub>3</sub>	塩基性成分	TiO <sub>2</sub>	V	MnO	ガラス員成分	Cu	
NOTS-1	八幡山南	段状東-2	炉内滓 (製錬滓)	古代	被熱砂鉄:合鉄鉄鉱、滓部:U+F	40.53	7.32	4.66	13.47	0.14	0.82	29.71	0.05	製錬滓 (火山岩起源の高鉄砂鉄)
NOTS-2		段状西-5	流出孔滓 (製錬滓)		被熱砂鉄:合鉄鉄鉱、滓部:U+I	13.81	4.06	12.87	5.63	0.07	0.58	72.85	0.02	製錬滓 (原料:砂鉄、炉材溶融物主体)
NOTS-3		西並張第5層	炉内滓 (製錬滓)		滓部:U+I	47.59	16.28	2.49	23.81	0.61	1.47	8.33	0.01	製錬滓 (火山岩起源の高鉄砂鉄)

U:Ulvöspinel (2FeO·TiO<sub>2</sub>)、F:Fayalite (2FeO·SiO<sub>2</sub>)、I:Ilmenite (FeO·TiO<sub>2</sub>)

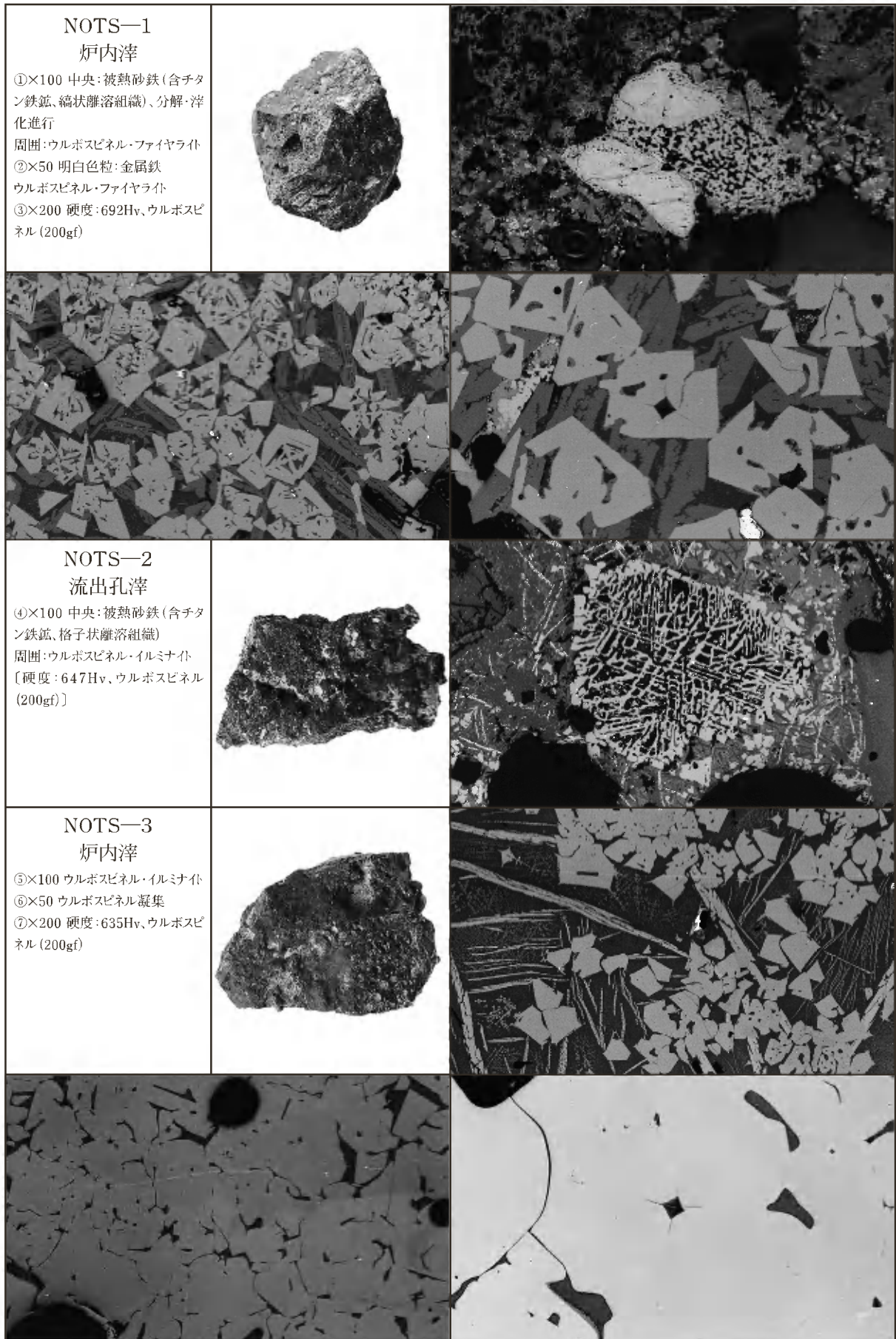


Photo.1 炉内滓・流出孔滓（製錬滓）の顕微鏡組織

## 付載3 岡山県美作市八幡山遺跡出土の平安時代火葬骨

松下孝幸\*

【キーワード】：岡山県、平安時代人骨、火葬骨、蔵骨器、のどぼとけ、第二頸椎

### はじめに

岡山県美作市古町（旧英田郡大原町古町）に所在する八幡山遺跡の発掘調査が、鳥取自動車道建設に伴って、2006年度（平成18年度）におこなわれた。この遺跡は吉野川右岸に位置する丘陵尾根上から南斜面にかけて立地する弥生時代後半期の集落跡であるが、この調査区内から8世紀末から9世紀前半に製作されたとみられる須恵器の長頸壺が発見され、中から火葬骨が検出された。

奈良・平安時代人骨の出土例は少なく、筆者がおこなった奈良時代の火葬骨の鑑定は4例しかない。初例は山口県長門市の上藤中横穴から出土した火葬骨で（松下、1999a）、8世紀前半に属する。2例目は岡山県苫田郡鏡野町（旧奥津町）の久田原遺跡（松下、2004a）、3例目は同じく鏡野町（旧奥津町）の夏栗遺跡（松下、2005a）で、4例目も同じく勝北町の山ノ奥遺跡（松下、2004b）で、いずれも8世紀に属する火葬骨である。山ノ奥遺跡から出土した蔵骨器には、14歳前後の小児と壮年女性の2体分の遺骨が納められていた。この他に奈良時代の火葬骨としては、出雲市の光明寺3号墓（井上、2000）や鳥取県倉吉市長谷遺跡（井上、1992）の例があるにすぎないようである。また、平安時代の火葬骨例は著しく少なく、熊本市大江（学苑）遺跡群（松下、2006）と同市の江津湖遺跡群から出土しているにすぎない。

本例は重量にして約350gで、夏栗の約20gよりは多いが、久田原の約560g、山ノ奥の約870gに比べれば、火葬骨の残存量としてはやや少ない方である。残存人骨を解剖学的、人類学的に精査し、「のどぼとけ」と俗称される第二頸椎を検出するなど興味ある所見を得たので、その結果を報告しておきたい。

### 資料および所見

残存していたのはすべて火葬骨で、重量にして約350gで、骨には火葬骨特有のウロコ状の亀裂や捻れがみられる。残存していたのは頭蓋と四肢骨の破片で、そのほかに躯幹骨（椎骨、肋骨）がごく少量確認できたにすぎない。また、下顎骨と歯は残存していなかった。

頭蓋片は重量にして約80gで、左右の頭頂骨と前頭骨の一部（プレグマ付近）、左側側頭骨の一部、右側頬骨弓を同定できたにすぎない。矢状縫合と冠状縫合のプレグマ付近の観察ができた。両縫合とも内板は完全に癒合していたが、外板は開離していた。

四肢骨については、右側上腕骨の遠位端、左右の大腿骨体の一部、左側脛骨体の一部などが残存していた。また、左右の舟状骨、左右不明の踵骨の一部が1片、中足骨の頭部1片も残存していた。

躯幹骨（椎骨、肋骨）のうち、肋骨は、第1肋骨の一部を1片同定することができたにすぎない。

---

\* Takayuki MATSUSHITA

The Doigahama Site Anthropological Museum [土井ヶ浜遺跡・人類学ミュージアム]

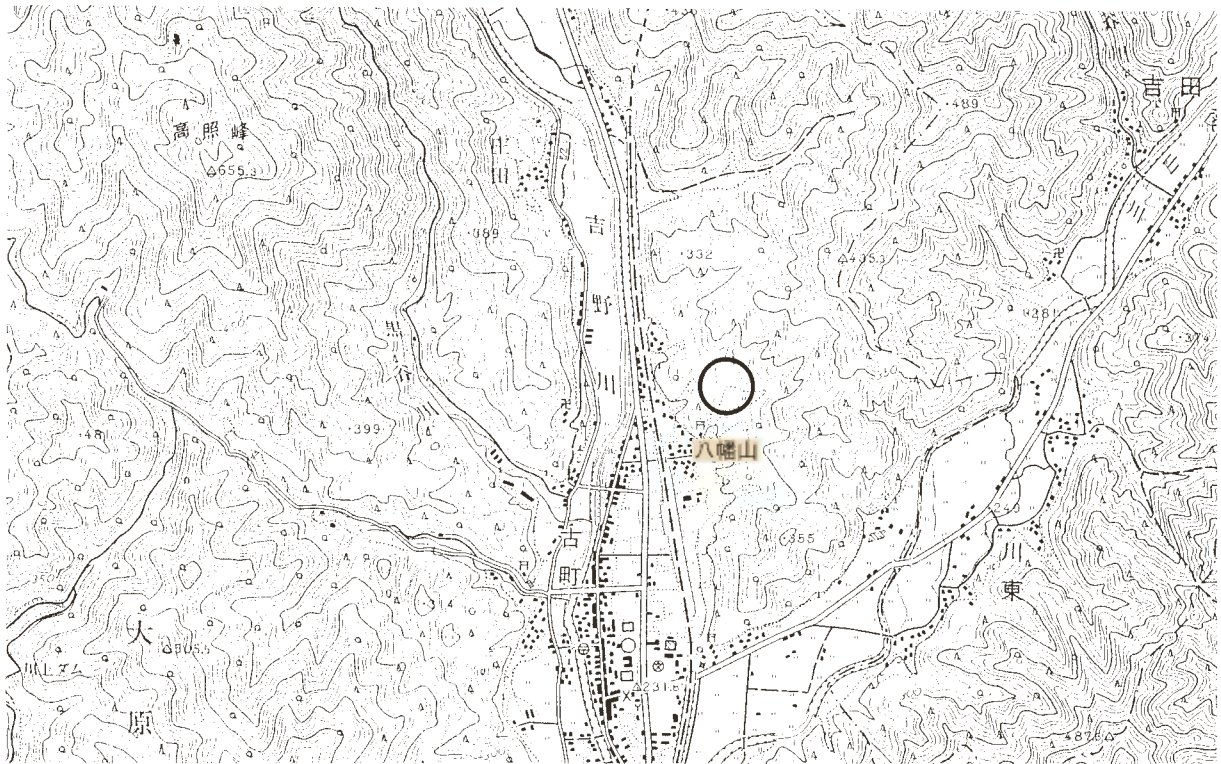
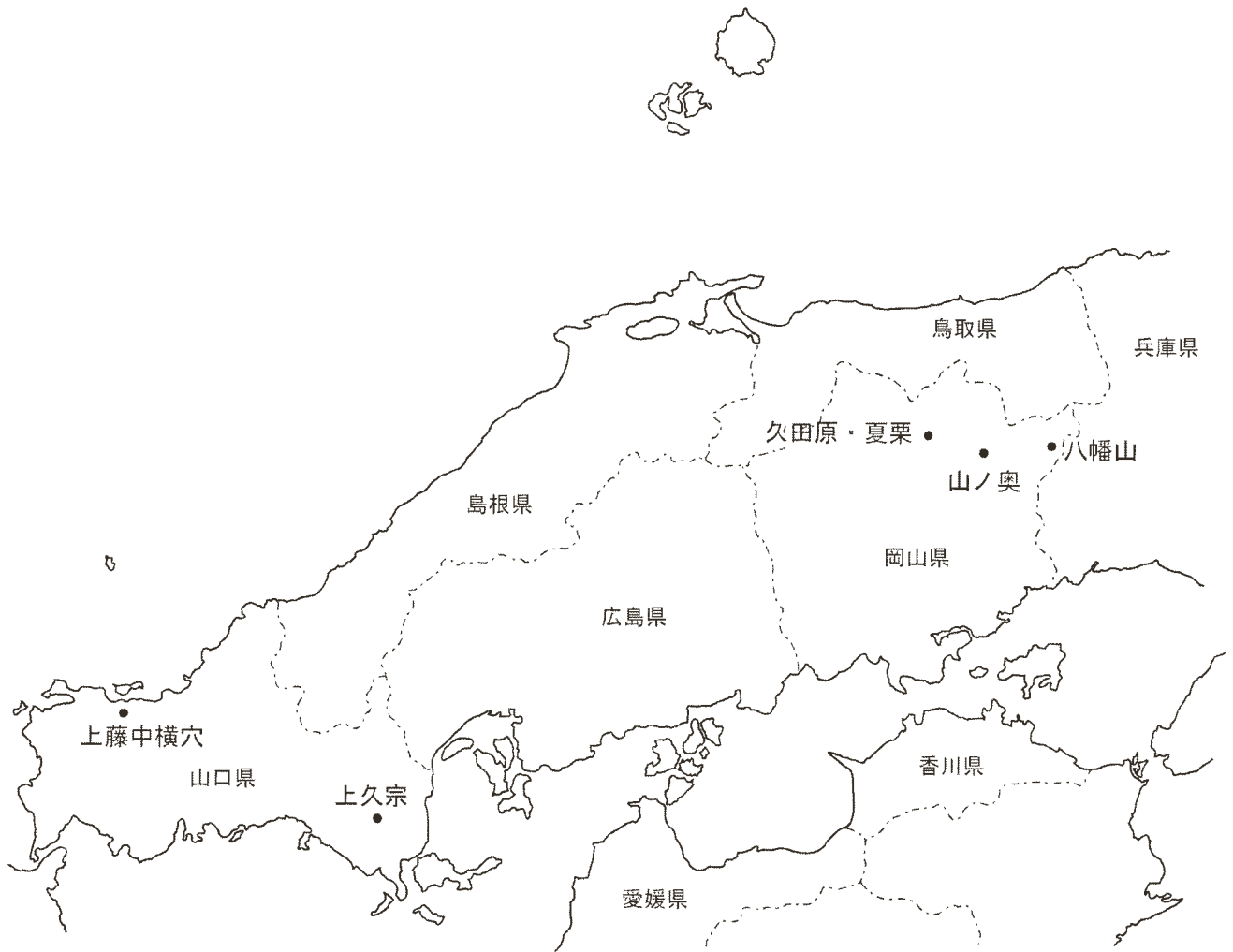


図1 遺跡の位置 (1/25,000) (Fig.1 Location of the Yayoi site, Mimasaka City, Okayama Prefecture)

椎骨片は3片みられた。そのうち1片は第二頸椎の歯突から椎体部分である。残り2片は上部頸椎の椎弓の破片である。観察したところ、この第二頸椎の径はかなり小さい。

蔵骨器として用いられたのは、須恵器の長頸壺で、8世紀末から9世紀前半頃に製作されたとみられていることから、本火葬骨は平安時代前半の火葬骨と推測される。

年齢を縫合の癒合程度から推測した。観察できた縫合は、矢状縫合と冠状縫合の一部である。両縫合とも内板は完全に癒合し、外板は開離していたことから、熟年と推定した。性別については、寛骨の大坐骨切痕部などが残存していなかったため、骨の大きさから推測することにした。第二頸椎の径が著しく小さいので、この点だけから推測するとすれば、性別は女性ということになる。なお、年齢区分は表1のとおりである。

表1 年齢区分 (Table 1. Division of age)

	年齢区分	年	齢
未成人	乳児	1歳未満	
	幼児	1歳～5歳 (第一大臼歯萌出直前まで)	
	小児	6歳～15歳 (第一大臼歯萌出から第二大臼歯歯根完成まで)	
	成年	16歳～20歳 (蝶後頭軟骨結合癒合まで)	
成人	壮年	21歳～39歳 (40歳未満)	
	熟年	40歳～59歳 (60歳未満)	
	老年	60歳以上	

注) 成年という用語については土井ヶ浜遺跡第14次発掘調査報告書(1996)を参照されたい。

## 要 約

岡山県美作市古町<sup>みまさか</sup>(旧英田郡大原町古町<sup>あいだ</sup>)に所在する八幡山遺跡の発掘調査が、鳥取自動車道建設に伴って、2006年度(平成18年度)におこなわれ、蔵骨器が1基検出された。中には火葬骨が埋納されており、この火葬骨を解剖学的、人類学的に精査し、次の結果を得た。

1. 蔵骨器から検出された火葬骨は重量にして約350gで、そのうち頭蓋は約80gである。
2. 蔵骨器として須恵器の長頸壺が用いられていた。
3. 本火葬骨は8世紀末から9世紀前半の火葬骨である。
4. 蔵骨器から検出された火葬骨は、熟年の女性骨と思われる。
5. 残存していたのは、頭蓋、四肢骨、軀幹骨のそれぞれ一部で、下顎骨と歯は残存していなかった。
6. 本蔵骨器には「のどぼとけ」と俗称される第二頸椎が埋納されていた。頸椎片は3片しかなく、この中に第二頸椎が認められたことは、第二頸椎が意識的に納められた可能性が強い。筆者はこれまでこの第二頸椎が蔵骨器にいつ頃から埋納されるようになったかを追究してきた。筆者が鑑定等をおこなった遺跡では、第二頸椎が埋納された遺跡としては、10世紀の山口県周東町上久宗遺跡(松下、1995)と9世紀の熊本市大江(学苑)遺跡群(松下、2006)しかない。本例は8世紀末から9世紀前半と推測されているので、本例が「意識的な第二頸椎埋納」の最古の例ということになる。

## 《謝辞》

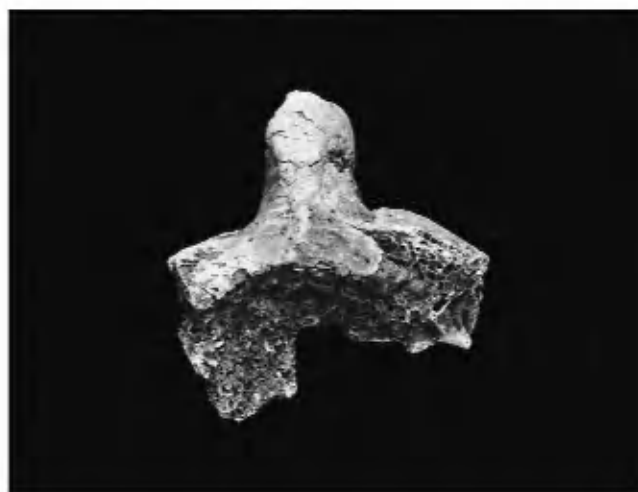
擱筆するにあたり、本研究と発表の機会を与えていただいた岡山県古代吉備文化財センターの皆様方に感謝致します。

## 参考文献

1. 井上晃孝、1992：3区古墓の火葬骨。長谷遺跡発掘調査報告書（倉吉市文化財調査報告書第76集）：106-109.
2. 井上晃孝、2000：出雲市上塩冶町光明寺3号墓火葬骨。光明寺3号墓・4号墳（斐伊川放水路建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅱ）：54-63.
3. 松下孝幸、1980a：茶屋原遺跡出土の中世人骨。茶屋原遺跡（北九州文化財調査報告書37）：58-61.
4. 松下孝幸、1980b：霊仙寺跡出土の中世人骨。霊仙寺跡（東脊振村文化財調査報告書4）：108-113.
5. 松下孝幸・他、1987：山口県下松市梅ノ木原遺跡出土の火葬骨。梅ノ木原遺跡（山口県埋蔵文化財調査報告第98集）：107-112.
6. 松下孝幸、1995：山口県周東町上久宗遺跡出土の火葬骨。山口県埋蔵文化財調査報告第174集：25-30.
7. 松下孝幸、1997：広島県豊平町地徳古墓出土の中世人骨。国営広島北部土地改良事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書（広島県埋蔵文化財調査センター調査報告書第152集）：51-59.
8. 松下孝幸、1999a：長門市上藤中横穴出土の奈良時代火葬骨。上藤中横穴墓群（長門市埋蔵文化財調査報告第3集）：15-18.
9. 松下孝幸、1999b：山口県豊浦町吉永遺跡出土の中世火葬人骨。吉永遺跡（Ⅲ－東地区）－平成10年度県営ほ場整備事業に伴う発掘調査報告－（山口県埋蔵文化財調査センター報告第10集）：51-54.
10. 松下孝幸、2002b：山口県下関市吉母堂の下遺跡出土の中世火葬骨。吉母堂の下遺跡（下関市埋蔵文化財調査報告書61）：10-11.
11. 松下孝幸、2002c：山口県菊川町竜王南遺跡出土の中世火葬骨。竜王南遺跡（山口県埋蔵文化財センター調査報告第31集）：69-74.
12. 松下孝幸、2004a：岡山県奥津町久田原遺跡出土の奈良時代火葬骨。久田原遺跡・久田原古墳群（岡山県埋蔵文化財調査報告184）：759-764.
13. 松下孝幸、2004b：岡山県勝北町山ノ奥遺跡出土の奈良時代火葬骨。山ノ奥遺跡 池東・湍田遺跡（岡山県埋蔵文化財調査報告180）：121-129.
14. 松下孝幸、2005a：岡山県奥津町夏栗遺跡出土の奈良時代火葬骨。夏栗遺跡（苫田ダム建設に伴う発掘調査）（岡山県埋蔵文化財発掘調査報告194）：651-652.
15. 松下孝幸、2005b：岡山県奥津町夏栗遺跡出土の中世火葬骨。夏栗遺跡（苫田ダム建設に伴う発掘調査）（岡山県埋蔵文化財発掘調査報告194）：653-658.
16. 松下孝幸、2006：熊本市大江（学苑）遺跡群出土の平安時代火葬骨。大江遺跡群Ⅱ（熊本県文化財調査報告第231集）：80-84.

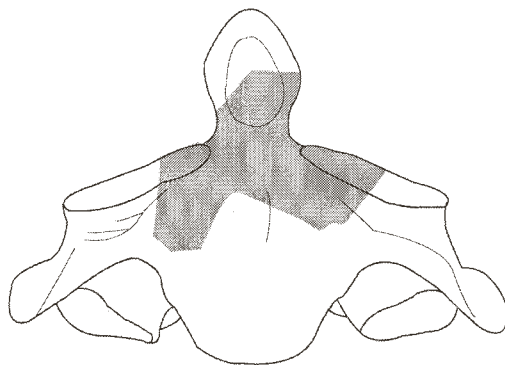


八幡山遺跡出土火葬骨  
(The cremated bones excavated the Yawatayama site)

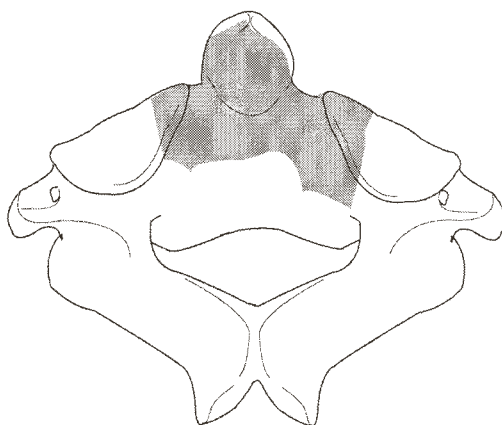


第二頸椎 (軸椎) (Axis)





第二頸椎（軸椎）・前面



第二頸椎（軸椎）・上後面

図2-1 人骨の残存図（アミかけ部分）

(Fig.2-1 Regions of preservation of the skeleton. Shaded areas are preserved.)

## 付載4 中国横断自動車道姫路鳥取線関連遺跡出土土器の胎土分析

岡山理科大学自然科学研究所

白石 純

### 1. 分析目的

この分析では、中国横断自動車道姫路鳥取線関連遺跡の中町B遺跡、高岡遺跡、尾崎遺跡、穴が辻遺跡、穴が辻古墳、今岡古墳群から出土した弥生時代から中世にかけての土器について理化学的な胎土分析を実施し、以下の事柄について検討した。

(1) 中町B遺跡出土の弥生時代後期の土器は考古学的（形態・技法など）な検討から他地域で生産された土器が搬入していると考えられている。そこで分析により胎土に差があるかどうか。また同遺跡から出土している中世須恵器（小皿・碗・鉢・壺・甕）は、考古学的（形態・技法など）に勝間田焼と東播系（神出・魚住窯跡群）に分類されている。この分類が胎土分析ではどのように分類されるか検討した。

(2) 穴が辻遺跡、高岡遺跡、尾崎遺跡から出土している弥生時代後期終末の土器には、外面にタタキ技法が施された甕がある。この甕が在地で生産されたものか、あるいは搬入されたものか検討した。また兵庫県佐用町本位田遺跡出土土器<sup>(1)</sup>とも比較した。

(3) 穴が辻遺跡出土（住居・土壇・段状遺構）の弥生時代後期前半の土器で考古学的（形態・技法など）検討によると他地域からの影響がみられるものがある。これらの土器が胎土分析でどのように分類されるか。

(4) 穴が辻古墳（石室内）、今岡古墳群（11号、12号墳）、尾崎遺跡（住居内ほか）より出土している古墳時代の須恵器（杯・高杯・壺）が器種などで胎土に違いがみられるか。また今岡古墳群で採集された埴輪と津山市内の古墳出土埴輪との胎土を比較した。

(5) 尾崎遺跡では古代の焼塩土器が多量に出土している。この焼塩土器が胎土分析でどのように分類されるか。

(6) 尾崎遺跡出土の古代須恵器（杯蓋・杯身）は、どの生産地から持ち込まれたものかはっきりしないが胎土分析ではどのように分類されるか。

(7) 尾崎遺跡出土の中世須恵器（小皿・碗・鉢・壺・甕）は、考古学的（形態・技法など）な検討で勝間田焼、相生・龍野窯跡群、東播系（神出・魚住窯跡群）の3つの生産地に分類されている。この分類が胎土分析でどのように分類されるか。

### 2. 分析試料

分析に供した試料は、第1表～第3表に示した姫路鳥取線関連遺跡出土の弥生時代から中世の土器201点である。また比較試料として兵庫県相生・龍野窯跡群（緑ヶ丘窯跡・乳母ヶ懐窯跡群・大陣原窯跡群）<sup>(2)</sup>と同じく兵庫県佐用町本位田遺跡出土土器<sup>(1)</sup>も比較試料として分析した。

### 3. 分析結果

分析は蛍光X線分析法で実施した。この方法は、試料に含まれる成分（元素）量を測定するもので、その成分量の違いから胎土の差を推定する方法である。また蛍光X線分析装置の特徴は、分析試料の作製が簡単

で、測定も短時間のため多量に試料を分析するのに有効である。しかし、測定試料は均質性が求められることから、分析試料を2gほど粉末にする必要があり、一部破壊分析である。

測定装置は、エネルギー分散型蛍光X線分析装置（セイコーインスツルメンツ社製SEA2010L）を使用し、 $\text{SiO}_2 \cdot \text{TiO}_2 \cdot \text{Al}_2\text{O}_3 \cdot \text{Fe}_2\text{O}_3 \cdot \text{MnO} \cdot \text{MgO} \cdot \text{CaO} \cdot \text{Na}_2\text{O} \cdot \text{K}_2\text{O} \cdot \text{P}_2\text{O}_5 \cdot \text{Rb} \cdot \text{Sr} \cdot \text{Zr}$ の13元素を測定した。表1の出土試料分析値一覧表から $\text{TiO}_2$ （チタン）、 $\text{CaO}$ （カルシウム）、 $\text{K}_2\text{O}$ （カリウム）、 $\text{Rb}$ （ルビジウム）、 $\text{Sr}$ （ストロンチウム）の各元素に顕著な違いがみられる。そこで、これらの元素のXY散布図を作成し、胎土の比較を行った。

また実体顕微鏡観察法によっても胎土の差異を検討した。この方法では土器の表面に観察される砂粒（岩石・鉱物）の種類、大きさ、形、大まかな含有量を調べた。

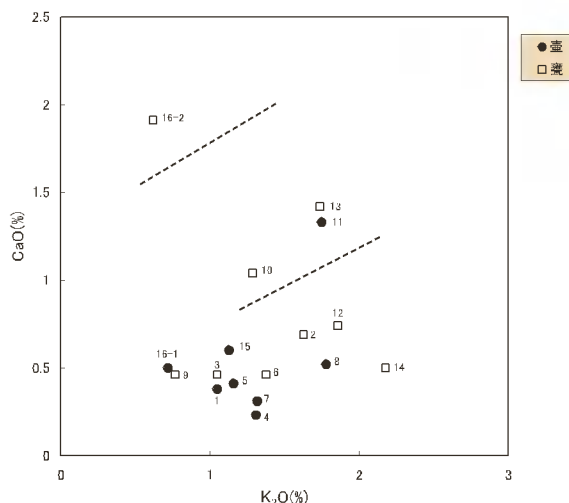
### 蛍光X線分析および実体顕微鏡観察結果

(1)中町B町遺跡出土弥生時代後期の土器のなかに他地域で生産された土器（搬入品）があるかかどうか。また中世須恵器の生産地推定を胎土分析により検討した。

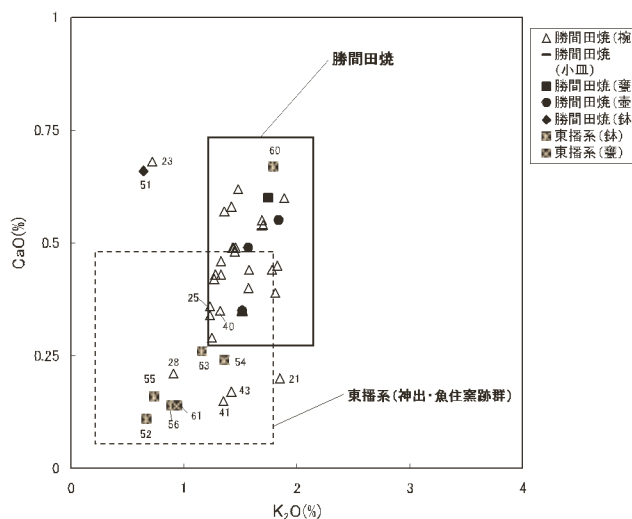
第1図 $\text{K}_2\text{O}-\text{CaO}$ 散布図で胎土を比較した。すると、 $\text{CaO}$ 量により数点の土器に胎土の違いがあった。それは、試料番号16-2（甕）・10（甕）・11（壺）・13（甕）の4点である。このうち、16-2が特に胎土が異なっていた。なお搬入品と考えられている4と5は、その他の土器が分布する領域に入り、胎土的な差はなかった。

実体顕微鏡による砂粒観察では、16-2（第16図写真1）に他の土器に比べて長石が多く含まれていた。また10（第16図写真2）・11・13の土器は、他の土器と比べて特に目立った砂粒の違いはみられなかったが雲母がやや多い傾向にあった。

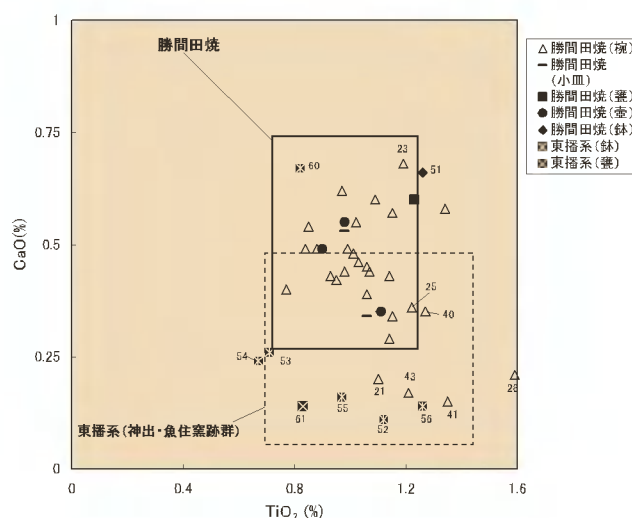
第2図 $\text{K}_2\text{O}-\text{CaO}$ 、第3図 $\text{TiO}_2-\text{CaO}$ 、第4図 $\text{Rb}-\text{Sr}$ の各散布図から、中町B遺跡出土の



第1図 中町B遺跡出土弥生土器の比較 ( $\text{K}_2\text{O}-\text{CaO}$ 散布図)



第2図 中町B遺跡出土中世須恵器の産地推定 ( $\text{K}_2\text{O}-\text{CaO}$ 散布図)



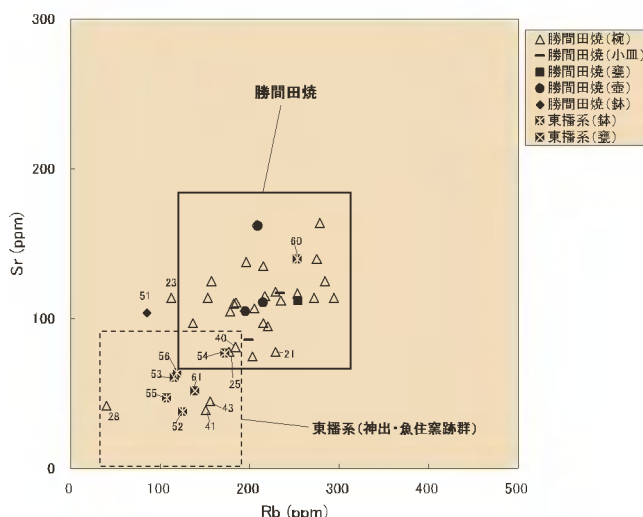
第3図 中町B遺跡出土中世須恵器の産地推定 ( $\text{TiO}_2-\text{CaO}$ 散布図)

中世須恵器(小皿・椀・鉢・壺・甕)は、勝間田か東播系(神出・魚住窯跡群)か検討した。その結果、考古学的(形態・技法など)検討で勝間田に分類されている椀(21・28・41・43)は東播系に推定された。また東播系に分類されている甕(60)は勝間田に推定された。それ以外の須恵器は、考古学的に検討された分類結果と同じであった。なお、椀(25・40)は勝間田と東播系の両方の領域に入り、産地が判別できなかった。椀(23)と鉢(51)は、産地がはっきりしなかった。

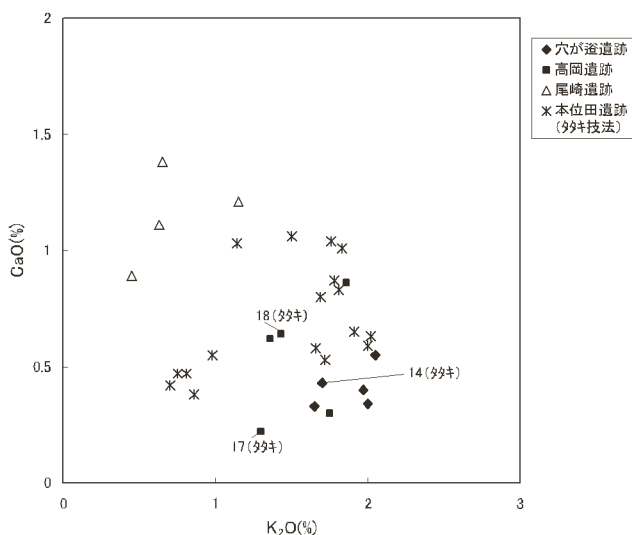
実体顕微鏡による砂粒観察では、生産地である勝間田には火山ガラス(第16図写真3)、東播系にはチャート(第16図写真4)がそれぞれ含まれ特徴がみられた。そこで中町B遺跡出土の須恵器を観察した結果、勝間田に分類されているもので椀(21・28・41・43)には火山ガラスおよびチャートが観察できないことから、両方の産地に推定できなかった。また東播系に分類されているもので甕(60)(第16図写真5)は火山ガラスが含まれており勝間田と推定される。椀(23・25・40)(第16図写真6)と鉢(51)(第17図写真7)には火山ガラスが含まれており勝間田と推定される。それ以外は、考古学的な産地結果と同じであった。

(2) 穴が辻遺跡、高岡遺跡、尾崎遺跡から出土している弥生時代後期終末の外面にタタキ技法が施された甕があり、この甕が在地で生産されたものか、あるいは搬入されたものか検討した。また兵庫県佐用町本位田遺跡出土土器とも比較した。

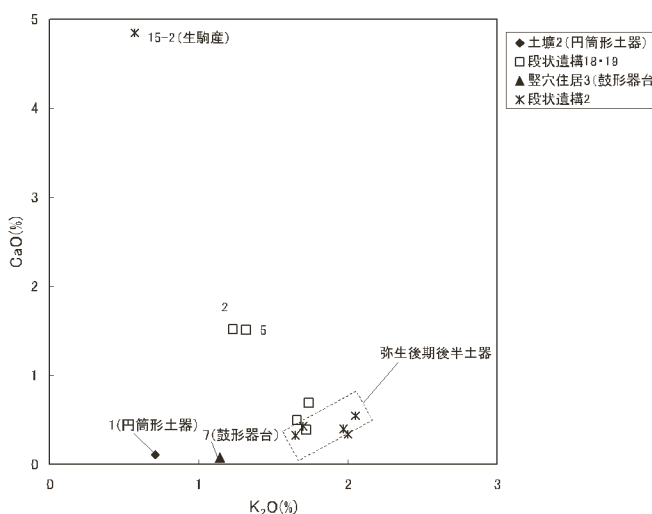
分析の結果、第5図K<sub>2</sub>O-CaO散布図では各遺跡の土器とも遺跡ごとにまとまる傾向にあった。また、兵庫県佐用町本位田遺跡の外表面タタキの甕との比較では、穴が辻遺跡、尾崎遺跡のものは、胎土が異なり、高岡遺跡と本位田遺跡のものが一部類似し



第4図 中町B遺跡出土中世須恵器の産地推定 (Rb-Sr散布図)



第5図 各遺跡別出土弥生土器(タタキ成形)の比較 (K<sub>2</sub>O-CaO散布図)



第6図 穴が辻遺跡出土弥生土器の比較 (K<sub>2</sub>O-CaO散布図)

ていた。

実体顕微鏡による砂粒観察では、砂粒構成にほとんど差はみられなかった。

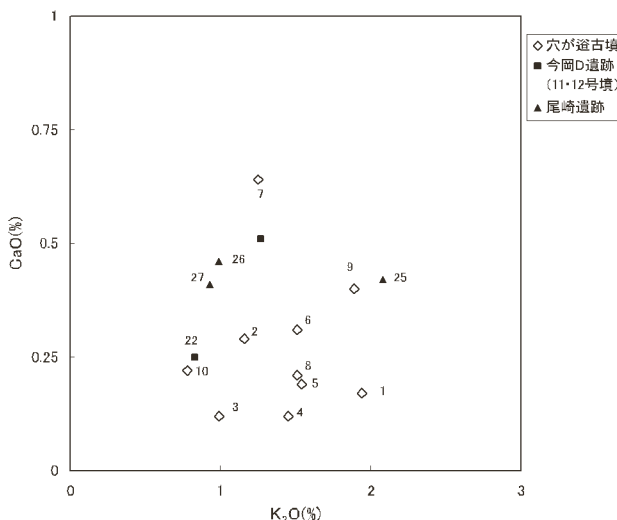
(3) 穴が途遺跡出土(住居・土壇・段状遺構)の弥生時代後期前半の土器には他地域からの影響がみられるものがある。これらの土器が胎土分析でどのように分類されるか検討した。

その結果、第6図K<sub>2</sub>O-CaO散布図より他地域の影響があると想定されていた円筒形土器(1)と鼓形器台(7)は在地で生産されたと考えられている土器(2~6)と胎土が異なっていた。また段状遺構2出土の大阪府生駒産と推測される壺(15-2)も他の土器に比べ明らかに胎土が異なっていた。そして在地产と思われる土器も二つの胎土に分類された。それは甕(2・5)と甕(3・4)、高杯(6)である。前者はCaO量が他の土器より多く含まれていた。なお、同じ遺跡出土の弥生後期後半の土器と比較したところ後半の土器は、甕(3・4)、高杯(6)などのCaO量が少ないところに分布した。このことからこの分布域が、穴が途遺跡の弥生後期の在地产分布域と考えられる(第6図の弥生後期後半の点線で囲んだ範囲)。

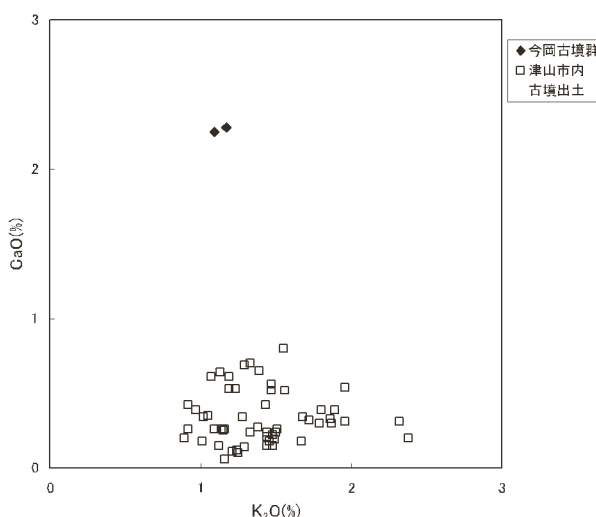
実体顕微鏡による砂粒観察では、円筒形土器(1)と鼓形器台(7)には、石英が多く含まれているが、他の鉱物(長石・雲母など)が少ない(第17図写真8・9)。甕(2・5)は甕(3・4)、高杯(6)に比べると長石がやや多く含まれる傾向にある(第17図写真10)。また生駒産と推測される壺(15-2)には角閃石および閃緑岩などが含まれていた(第17図写真11)。

(4) 穴が途古墳(石室内)、今岡古墳群(11号、12号墳)、尾崎遺跡(住居内ほか)より出土している古墳時代の須恵器(杯・高杯・壺)が器種などで胎土に違いがみられるか検討した。

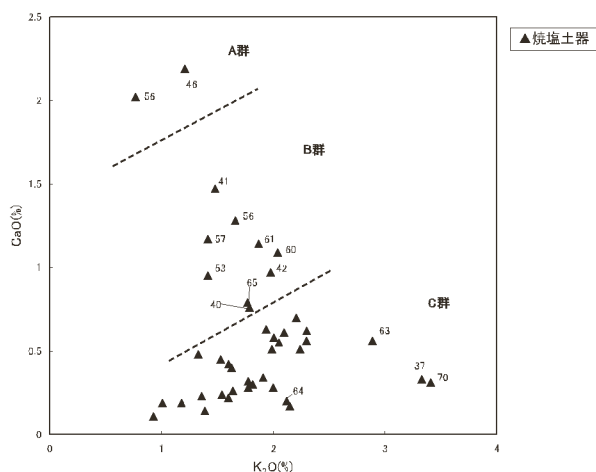
その結果、第7図K<sub>2</sub>O-CaO散布図より穴が途古墳出土の須恵器は、杯蓋(7)以外はほぼ



第7図 各遺跡出土古墳時代須恵器の比較 (K<sub>2</sub>O-CaO散布図)



第8図 今岡古墳群と津山市内古墳出土埴輪の比較 (K<sub>2</sub>O-CaO散布図)



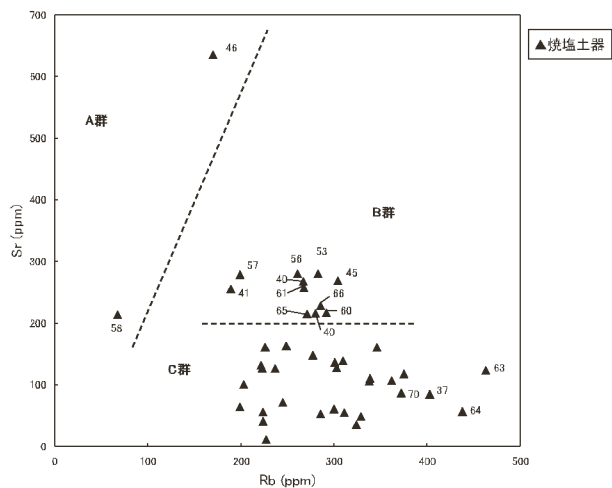
第9図 尾崎遺跡出土焼塩土器の比較 (K<sub>2</sub>O-CaO散布図)

まとめ、器種や出土地点で胎土が異なることはなかった。またその他の今岡古墳群、尾崎遺跡の須恵器も穴が盗古墳と大きく胎土が異なることはなかったものの、遺跡ごとでまとまる傾向がみられた。今岡古墳群出土の埴輪の分析では、津山市内古墳出土の埴輪と比較した。その結果、第8図K<sub>2</sub>O-CaO散布図のように、津山市内の埴輪とは明らかに胎土が異なることがわかった。

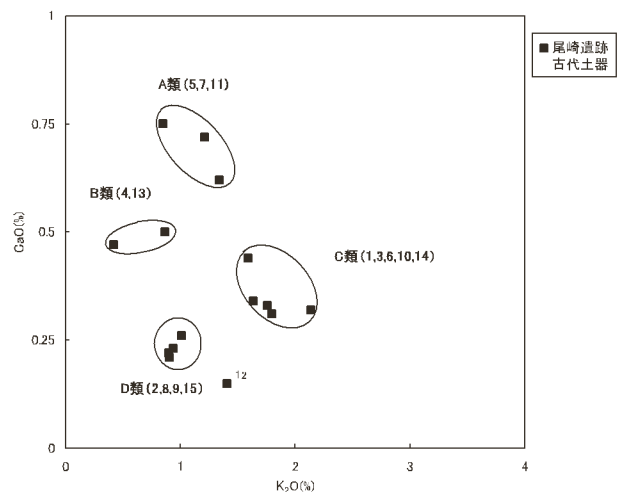
(5)尾崎遺跡から出土している古代焼塩土器が胎土分析によりどのように分類されるか検討した。

第9図K<sub>2</sub>O-CaO、第10図Rb-Srの散布図から焼塩土器は、CaOとSrの含有量の違いにより胎土に顕著な差があり、大きくA・B・Cの3群に分類された。A群には46・58、B群には40・41・42・53・56・57・60・61・65、C群はそれ以外の焼塩土器が分類された。なおA群の46と58はSr量の含有量が異なり分類できた。

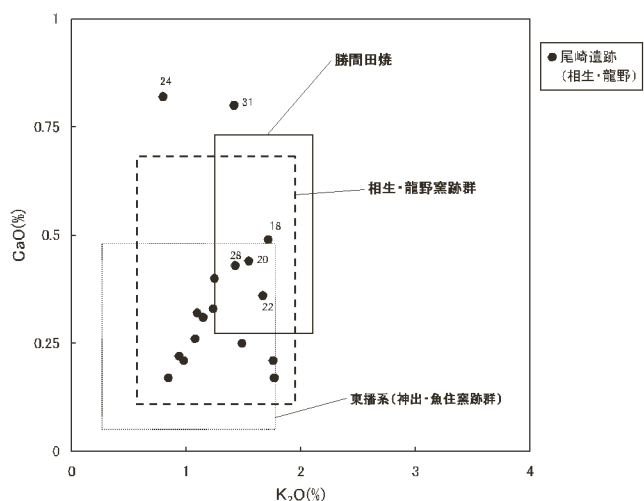
実体顕微鏡による砂粒観察では、蛍光X線分析法の3群に分類されなかった。A群の58(第17図写真12)には石英・長石・雲母以外に多量の角閃石を含んでいた。また46(第18図写真13)は石英が多く観察される以外は、特徴ある鉱物などは含まれていなかった。B群では石英・長石・雲母以外に特徴ある鉱物は含まれてはいないが、このB群に含まれるものでも石英・長石・雲母の大きさや素地土が異なるし、胎土分析値が類似していても砂粒の大きさ、素地土が異なることから、生産地が違うことが推測される。蛍光X線分析ではC群に分類された焼塩土器が一番多かったが、このC群も砂粒および素地土で複数の生産地に分類された。それは、粒径の揃った石英(1mm以下)が非常に多く含まれているもの(第18図写真14)、石英でもいろいろな大きさのものが含まれており、円礫となっているもの(第18図写真15)、雲母が多く含まれているもの(第18図写真16)、赤色粒が含まれているもの(第18図写真17)、片



第10図 尾崎遺跡出土焼塩土器の胎土比較 (Rb-Sr散布図)



第11図 尾崎遺跡出土古代土器の産地推定 (K<sub>2</sub>O-CaO散布図)



第12図 尾崎遺跡出土中世須恵器の産地推定 (K<sub>2</sub>O-CaO散布図)

岩がふくまれているもの（第18図写真18）など最低でも5種類の胎土に分類できた。

（6）尾崎遺跡出土の古代須恵器（杯蓋・杯身）は、生産地がはっきりしないが胎土分析ではどのように分類されるか検討した。

第11図 $K_2O$ - $CaO$ 散布図では、 $CaO$ と $K_2O$ の含有量の違いでA・B・C・Dの4つの胎土に分類された。A類には5・7・11、B類には4・13、C類には1・3・6・10・14、D類には2・8・9・15がそれぞれまとまった。

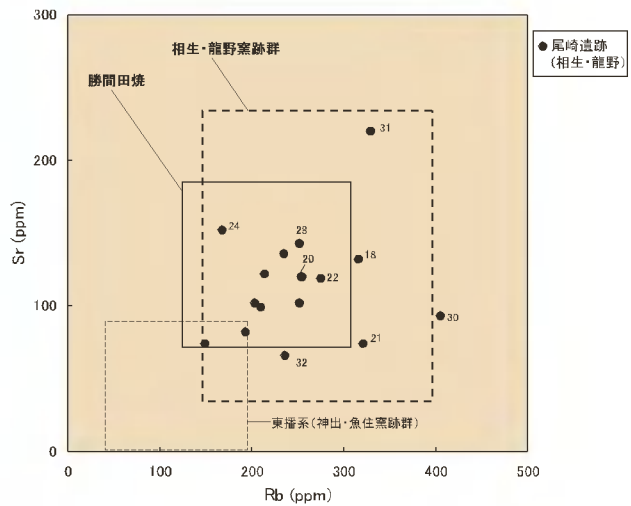
（7）尾崎遺跡出土の中世須恵器（小皿・碗・鉢）は考古学的（形態・技法など）検討で勝間田と相生・龍野窯跡群と東播系に分類されている。この分類が胎土分析ではどのように分類されるか検討した。

第12図 $K_2O$ - $CaO$ 散布図では、24・31は勝間田、相生・龍野、東播系のどの領域にも入らないが、18・20・22・28が勝間田と相生・龍野が重複する領域に、またそれ以外のは相生・龍野と東播系が重複する領域にそれぞれ分布した。

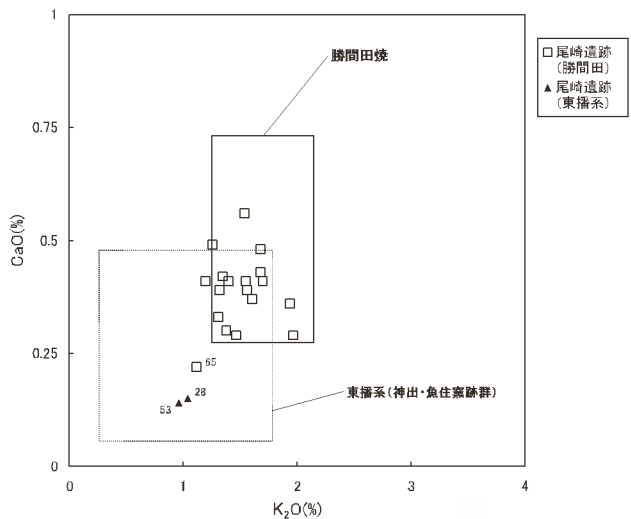
第13図 $Rb$ - $Sr$ の散布図では、18・21・30・31・32が相生・龍野領域に、それ以外のは勝間田と相生・龍野が重複する領域に分布した。したがって、20・22・28は勝間田と相生・龍野のどちらかの生産地であるが、それ以外は相生・龍野の生産地に推定された。

第14図 $K_2O$ - $CaO$ 、第15図 $Rb$ - $Sr$ の散布図では、東播系と考えられている鉢（28・53）は、東播系の分布域に、勝間田と考えられている碗・小皿は勝間田の分布域に入った。ただ碗（65）のみは東播系に推定された。

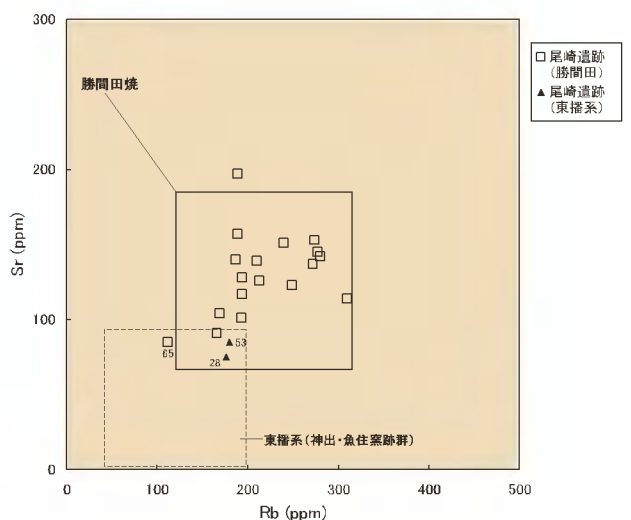
実体顕微鏡による砂粒観察では、東播系と考えられている鉢（28・53）にはチャートなどの岩石片が含まれており（第19図写真19）、それ以外の碗・小皿には火山ガラスが含まれる（第19図写真20・21）、碗（65）にも火山ガラスが含まれていた（第19図写真22）。



第13図 尾崎遺跡出土中世須恵器の産地推定 ( $Rb$ - $Sr$ 散布図)



第14図 尾崎遺跡出土中世須恵器の産地推定 ( $K_2O$ - $CaO$ 散布図)



第15図 尾崎遺跡出土中世須恵器の産地推定 ( $Rb$ - $Sr$ 散布図)

#### 4. まとめ

中町B遺跡、今岡古墳群、高岡遺跡、尾崎遺跡、穴が辻遺跡、穴が辻古墳から出土した弥生時代から中世にかけての土器について、理化学的な胎土分析（蛍光X線分析法、実体顕微鏡観察法）を実施したところ、以下のことが明らかになった。

(1) 中町B遺跡出土弥生時代後期の土器のなかに他地域で生産された土器（搬入品）があるかどうかの検討では試料番号16-2（甕）・10（甕）・11（壺）・13（甕）の4点が他の土器と胎土が異なっていた。とくに16-2は他の土器に比べて異なっており搬入品と考えられる。

中町B遺跡出土の中世須恵器（小皿・碗・鉢・壺・甕）の産地推定では蛍光X線分析法と実体顕微鏡観察法の両方で分析し総合的に産地を推定した。その結果、ほとんどの須恵器に関して産地推定が可能であった。ただ、一部の試料に関しては、推定が困難なものがあった。今後の課題である。

(2) 穴が辻遺跡、高岡遺跡、尾崎遺跡から出土している弥生時代後期終末の外面にタタキ技法がある土器では、各遺跡でまとまる傾向にあった。また、兵庫県佐用町本位田遺跡の外表面タタキの甕との比較では、穴が辻遺跡、尾崎遺跡のものは胎土が異なっていた。したがって今回の胎土比較では遺跡ごとに土器生産が行われていたことが推定される。

(3) 穴が辻遺跡出土（住居・土壇・段上遺構）の弥生時代後期前半の土器で他地域からの影響がある土器の胎土分析では、円筒形土器（1）と鼓形器台（7）は他地域で生産されたと推定される。大阪府生駒産と推測される壺（15-2）も分析値、砂粒観察とも在りとは異なり、今回の分析では生駒産土器と比較していないが砂粒観察（角閃石・閃緑岩）からおそらく畿内からの搬入品と推定される。

(4) 穴が辻古墳（石室内）、今岡古墳群（11号、12号墳）、尾崎遺跡（住居内ほか）より出土している古墳時代の須恵器（杯・高杯・壺）の分析では、穴が辻古墳出土の須恵器杯蓋（7）以外はほぼまとまり、器種や出土地点で胎土が異なることはなかった。またその他の今岡古墳群、尾崎遺跡の須恵器も穴が辻古墳と大きく胎土がことなることはないが、遺跡ごとにまとまる傾向がみられた。ただ、試料点数が少ないこともあり、今後試料を増やすことで結果が変わる場合がある。今後の課題である。

また、今岡古墳群出土の埴輪の分析では、津山市内出土埴輪と比較したところ明確に胎土が異なっていた。他地域との埴輪と比較し再検討する必要がある。

(5) 尾崎遺跡から出土している焼塩土器の胎土分析では、蛍光X線分析法で3群に、実体顕微鏡による砂粒観察では、6種類以上に分類された。つまり、蛍光X線分析法ではCaO量に胎土差があったがこれは、胎土に含まれる長石の含有量の違いが考えられる。また砂粒観察では、砂粒の種類、大きさ、形状（角礫か円礫か）、含有量などの違いを調べた結果、6種類以上の胎土に分類が可能であった。以上の分析結果より焼塩土器は、いろいろな地域から持ち込まれていることが推定された。

(6) 尾崎遺跡出土の古代須恵器（杯蓋・杯身）はCaOとK<sub>2</sub>Oの含有量の違いで4つの胎土に分類されたが、この時期の生産地試料がないため比較が困難であった。今後の課題としたい。

(7) 尾崎遺跡出土の中世須恵器（小皿・碗・鉢）は考古学的（形態・技法など）検討で勝間田と相生・龍野窯跡群と東播系に分類されているものが理化学的な産地推定では、ほとんどの試料に関して産地を推定することができた。また、今回の胎土分析の成果として、実体顕微鏡による砂粒観察での産地推定として、ある程度可能であることがわかった。それは勝間田には火山ガラス、東播系にはチャートなどの岩石片が、相生・龍野には石英（透明）（第19図写真23・24）が含まれていることが観察できた。従来、須恵器の場合1100度以上の高温で焼成されるため、石英以外の鉱物などは溶解してなくなるた



め、この砂粒観察を実施しても分類が難しい場合が考えられていた。しかし、今回の場合、火山ガラス、チャート、石英など特徴あるものが含まれており、顕微鏡観察による産地推定に有効であった。

この分析の機会を与えていただいた、福田正継氏、岡本寛久氏、物部茂樹氏、石田為成氏、米田克彦氏、上梶武氏および岡山県古代吉備文化財センターの職員の方にはお世話になった。また分析試料ほかでは森内秀造氏、大久保徹也氏にご教示、ご指導いただいた。末筆ではありますが、記して感謝いたします。

註

- (1) 兵庫県教育委員会「本位田遺跡」兵庫県文化財調査報告第11冊 1976
- (2) 森内秀造「兵庫県相生古窯址群について」『日本史論叢』第10巻 1983  
兵庫県教育委員会『相生市・緑ヶ丘窯址群Ⅱ』1995

第1表 中町B遺跡出土の分析一覧表 (%) ただし、Rb・Sr・Zrはppm.

単位: SiO<sub>2</sub>~P<sub>2</sub>O<sub>5</sub> (%), Rb~Zr (ppm)

試料番号	掲載番号	種別	器種	出土地点	SiO <sub>2</sub>	TiO <sub>2</sub>	Al <sub>2</sub> O <sub>3</sub>	Fe <sub>2</sub> O <sub>3</sub>	MnO	MgO	CaO	Na <sub>2</sub> O	K <sub>2</sub> O	P <sub>2</sub> O <sub>5</sub>	Rb	Sr	Zr	備考
1	8	弥生土器	壺	堅穴住居	62.79	1.31	22.11	7.74	0.11	1.70	0.38	2.39	1.05	0.21	125	96	430	
2	16	弥生土器	壺	堅穴住居	59.21	1.07	20.52	12.59	0.13	1.75	0.69	2.04	1.63	0.02	219	128	353	
3	20	弥生土器	壺	堅穴住居	60.45	1.52	23.36	8.90	0.09	1.93	0.46	1.96	1.05	0.10	141	123	316	
4	7	弥生土器	壺	堅穴住居	65.64	1.17	22.98	4.78	0.03	1.79	0.23	1.85	1.31	0.01	118	51	539	撥入?
5	11	弥生土器	壺	堅穴住居	65.10	1.31	22.67	5.09	0.05	1.74	0.41	2.11	1.16	0.13	131	76	438	撥入?
6	18	弥生土器	壺	堅穴住居	67.54	1.07	20.94	4.51	0.07	1.88	0.46	1.96	1.38	0.04	151	87	347	
7	6	弥生土器	壺	堅穴住居	66.39	1.07	21.29	5.00	0.04	1.84	0.31	2.43	1.32	0.13	113	50	485	
8	10	弥生土器	壺	堅穴住居	65.28	1.04	20.60	6.39	0.07	1.93	0.52	2.10	1.78	0.02	189	130	389	
9	12	弥生土器	壺	堅穴住居	62.19	1.45	21.65	8.51	0.09	1.81	0.46	2.78	0.77	0.11	106	133	338	
10	22	弥生土器	壺	堅穴住居	63.96	1.13	21.18	6.89	0.11	1.92	1.04	2.28	1.29	0.02	150	205	373	
11	3	弥生土器	壺	堅穴住居	61.17	0.95	23.01	6.38	0.09	2.15	1.33	2.90	1.75	0.02	196	236	392	
12	23	弥生土器	壺	堅穴住居	63.89	0.95	22.72	5.46	0.06	1.87	0.74	2.23	1.86	0.02	176	145	410	
13	25	弥生土器	壺	堅穴住居	63.56	0.92	21.42	7.17	0.39	1.88	1.42	1.31	1.74	0.05	201	198	305	
14	21	弥生土器	壺	堅穴住居	66.55	1.10	21.48	3.50	0.04	1.82	0.50	2.55	2.18	0.09	168	140	401	
15	9	弥生土器	壺	堅穴住居	66.84	1.12	20.92	4.55	0.13	1.86	0.60	1.36	1.13	1.31	115	98	350	
16-1	4	弥生土器	壺	堅穴住居	62.98	1.45	21.57	8.29	0.09	1.90	0.50	2.19	0.72	0.08	83	130	340	
16-2	26	弥生土器	壺	堅穴住居	50.60	0.68	26.54	13.76	0.25	2.43	1.91	3.01	0.62	0.00	98	180	270	
17	168	勝岡田焼	碗	包含層	68.46	1.03	18.59	4.88	0.07	2.00	0.46	2.94	1.33	0.08	178	105	380	
18	169	勝岡田焼	碗	包含層	67.43	0.95	19.10	5.65	0.07	2.04	0.42	2.72	1.27	0.09	205	107	382	
19	175	勝岡田焼	碗	包含層	60.22	0.97	24.18	7.03	0.10	2.19	0.62	2.92	1.48	0.11	278	164	331	
20	178	勝岡田焼	碗	包含層	61.65	0.84	23.76	7.10	0.08	2.02	0.49	2.39	1.46	0.02	253	117	340	
21	198	勝岡田焼	碗	包含層	65.57	1.10	21.11	5.12	0.06	2.05	0.20	2.66	1.85	0.06	229	78	345	
22	174	勝岡田焼	碗	包含層	65.98	1.15	21.30	4.14	0.04	2.01	0.57	3.18	1.36	0.08	153	114	410	
23	197	勝岡田焼	碗	包含層	64.27	1.19	20.43	7.74	0.08	2.12	0.68	2.50	0.72	0.08	112	114	278	
24	186	勝岡田焼	碗	包含層	66.14	1.09	22.00	4.19	0.06	1.95	0.60	1.72	1.89	0.16	217	115	271	
25	205	勝岡田焼	碗	包含層	66.67	1.22	20.41	5.20	0.07	1.96	0.36	2.55	1.23	0.10	177	78	347	
26	185	勝岡田焼	碗	包含層	69.16	1.15	19.16	4.56	0.06	1.83	0.34	2.30	1.23	0.07	137	97	368	
27	203	勝岡田焼	碗	包含層	67.73	1.06	19.07	5.32	0.08	1.87	0.45	2.23	1.83	0.14	229	118	362	
28	204	勝岡田焼	碗	包含層	60.45	1.59	25.63	6.61	0.07	2.03	0.21	2.27	0.91	0.08	40	42	317	
29	188	勝岡田焼	碗	包含層	62.02	0.88	20.79	6.01	0.08	2.76	0.49	5.28	1.43	0.08	215	97	322	
30	185	勝岡田焼	碗	包含層	66.85	1.01	20.00	4.82	0.08	2.05	0.48	2.95	1.45	0.11	215	135	381	
31	208	勝岡田焼	碗	包含層	65.43	0.93	18.91	3.91	0.06	2.67	0.43	6.09	1.28	0.09	185	111	359	
32	223	勝岡田焼	碗	包含層	59.41	0.98	24.40	4.66	0.07	2.72	0.44	5.48	1.58	0.07	235	112	288	
33	201	勝岡田焼	碗	包含層	60.56	1.34	23.26	6.09	0.11	2.16	0.58	2.36	1.42	1.92	157	125	368	
34	177	勝岡田焼	碗	包含層	67.88	0.77	19.61	5.44	0.08	1.72	0.40	2.21	1.57	0.13	220	95	372	
35	176	勝岡田焼	碗	包含層	62.57	1.02	23.55	5.32	0.09	2.09	0.55	2.91	1.69	0.04	275	140	327	
36	216	勝岡田焼	碗	包含層	62.63	1.07	24.85	5.04	0.06	2.05	0.44	1.80	1.78	0.09	294	114	329	高台あり
37	213	勝岡田焼	碗	包含層	69.33	0.99	17.51	5.10	0.07	1.82	0.49	2.95	1.44	0.09	196	138	413	高台あり
38	220	勝岡田焼	碗	包含層	61.34	0.85	22.91	4.54	0.06	2.71	0.54	5.06	1.70	0.06	284	125	291	高台あり
39	214	勝岡田焼	碗	包含層	62.79	1.06	24.32	4.53	0.06	2.20	0.39	2.54	1.81	0.08	272	114	320	高台あり
40	212	勝岡田焼	碗	包含層	68.08	1.27	19.35	4.24	0.07	1.91	0.35	3.15	1.32	0.10	184	81	358	高台あり
41	209	勝岡田焼	碗	包含層	66.64	1.35	22.30	4.30	0.06	1.84	0.15	1.70	1.35	0.13	151	39	413	高台あり
42	217	勝岡田焼	碗	包含層	65.96	1.14	20.88	5.81	0.07	1.98	0.29	2.32	1.25	0.08	203	75	372	高台あり
43	210	勝岡田焼	碗	包含層	65.72	1.21	21.94	4.32	0.04	2.11	0.17	2.86	1.42	0.07	156	45	394	
44	227	勝岡田焼	碗	包含層	67.91	1.14	19.34	5.18	0.07	1.88	0.43	2.42	1.33	0.13	182	110	342	
45	230	勝岡田焼	小皿	包含層	62.91	0.98	23.21	5.22	0.08	2.05	0.53	2.95	1.69	0.12	234	117	327	
46	229	勝岡田焼	小皿	包含層	69.06	1.06	18.90	4.48	0.03	1.94	0.34	2.36	1.52	0.16	199	86	383	
47	238	勝岡田焼	壺	包含層	69.25	1.23	18.68	3.98	0.05	1.96	0.60	2.05	1.75	0.13	254	112	392	平行タタキ
48	235	勝岡田焼	壺	包含層	69.80	1.11	18.21	4.88	0.05	1.74	0.35	2.09	1.52	0.10	195	105	397	
49	236	勝岡田焼	壺	包含層	64.61	0.90	19.97	4.22	0.08	2.69	0.49	5.20	1.57	0.09	215	111	311	
50	237	勝岡田焼	壺	包含層	66.32	0.98	19.33	5.55	0.08	1.95	0.55	3.06	1.84	0.10	209	162	355	
51	246	勝岡田焼	鉢	包含層	66.00	1.26	21.48	6.46	0.09	1.93	0.66	1.17	0.64	0.14	85	104	279	
52	253	束桶系	鉢	包含層	71.86	1.12	16.55	5.08	0.06	1.84	0.11	2.41	0.67	0.15	125	38	405	
53	258	束桶系	鉢	包含層	73.65	0.71	15.70	4.33	0.04	1.68	0.26	2.16	1.16	0.16	116	61	355	
54	249	束桶系	鉢	包含層	72.17	0.67	16.37	4.68	0.05	1.82	0.24	2.33	1.36	0.14	172	77	311	
55	138	束桶系	鉢	土塙11	73.21	0.97	15.05	5.85	0.07	1.71	0.16	2.02	0.74	0.13	107	47	381	
56	263	束桶系	鉢	包含層	70.70	1.26	16.57	6.16	0.06	1.86	0.14	2.08	0.89	0.11	119	64	465	
60	271	須恵器	鉢	包含層	65.93	0.82	20.48	5.73	0.06	1.97	0.67	2.30	1.79	0.11	253	140	332	
57	269	上御器	壺	包含層	69.23	0.46	18.07	5.14	0.05	1.68	0.45	2.57	1.96	0.11	200	123	343	平行タタキ
58	270	須恵器	壺	包含層	70.39	0.51	17.78	4.32	0.04	1.73	0.50	2.57	1.80	0.13	194	124	364	
59	272	須恵器	鉢	包含層	70.89	0.54	18.35	4.65	0.05	1.56	0.51	1.61	1.58	0.11	173	123	387	平行タタキ
61	264	束桶系	壺	包含層	72.45	0.83	17.12	4.31	0.03	1.89	0.14	1.98	0.94	0.16	139	52	338	
62	266	須恵器	台付壺	包含層	65.47	1.06	17.82	8.88	0.09	1.89	0.37	2.66	1.52	0.03	223	69	391	古代末?
63	268	須恵器	壺	包含層	65.08	1.18	20.86	6.57	0.07	1.96	0.40	2.18	1.39	0.12	194	86	360	古代末?
64	267	須恵器	杯身	包含層	72.61	0.56	16.23	3.40	0.05	1.77	0.88	2.34	1.81	0.14	229	153	308	

第2表 穴が途・高岡・今岡D・尾崎遺跡胎土分析試料一覧

単位：SiO<sub>2</sub>~P<sub>2</sub>O<sub>5</sub> (%), Rb ~ Zr (ppm)

試料番号	遺跡名	実測番号	種別	器種	遺構・土層	SiO <sub>2</sub>	TiO <sub>2</sub>	Al <sub>2</sub> O <sub>3</sub>	Fe <sub>2</sub> O <sub>3</sub>	MnO	MgO	CaO	Na <sub>2</sub> O	K <sub>2</sub> O	P <sub>2</sub> O <sub>5</sub>	Rb	Sr	Zr	備考
1	穴が途遺跡	172	弥生土器	陶甕	土蔵2	63.05	1.53	23.13	6.53	0.07	1.82	0.11	2.88	0.71	0.04	130	63	494	
2	穴が途遺跡	146	弥生土器	甕	段状遺構18	55.45	1.35	23.29	12.62	0.15	1.64	1.52	2.55	1.23	0.01	206	370	418	
3	穴が途遺跡	147	弥生土器	甕	段状遺構18	67.36	0.94	20.90	3.90	0.06	1.39	0.69	2.73	1.74	0.08	190	263	547	
4	穴が途遺跡	149	弥生土器	甕	段状遺構18	70.06	0.97	18.74	4.22	0.06	1.41	0.50	1.96	1.66	0.22	217	182	492	
5	穴が途遺跡	159	弥生土器	甕	段状遺構19	55.39	1.50	24.00	12.72	0.16	1.24	1.51	1.86	1.32	0.02	192	435	469	
6	穴が途遺跡	166	弥生土器	高林	段状遺構19	69.73	1.06	17.41	5.58	0.05	1.46	0.39	2.27	1.72	0.05	240	168	607	
7	穴が途遺跡	47	弥生土器	甕	堅穴住居3	67.39	1.15	21.22	5.13	0.05	1.59	0.08	2.03	1.14	0.05	144	58	682	
11	穴が途遺跡	86	弥生土器	甕	B群	65.12	0.89	19.89	7.48	0.09	1.62	0.40	2.14	1.97	0.19	255	181	386	
12	穴が途遺跡	72	弥生土器	甕	B群	69.12	1.27	19.56	4.60	0.05	1.31	0.34	1.55	2.00	0.05	323	129	526	
13	穴が途遺跡	82	弥生土器	甕	B群	64.11	0.93	21.49	7.12	0.08	1.55	0.55	1.83	2.05	0.05	247	202	427	
14	穴が途遺跡	73	弥生土器	甕	B群	62.15	1.13	20.97	8.15	0.11	1.64	0.43	3.45	1.70	0.07	267	237	407	タタキ甕
15-1	穴が途遺跡	71	弥生土器	甕	B群	66.16	1.16	19.58	6.04	0.08	1.65	0.33	2.99	1.65	0.11	256	94	521	
15-2	穴が途遺跡	99	弥生土器	甕	B群	46.34	1.81	23.45	17.85	0.32	2.24	4.85	2.31	0.57	0.00	97	510	469	生駒産土器
1	穴が途遺跡	14	須恵器	短頸壺	石室奥壁側	68.68	0.96	18.47	6.39	0.07	1.44	0.17	1.55	1.94	0.10	339	94	388	
2	穴が途遺跡	8	須恵器	鉢	石室奥壁側	68.85	1.02	18.08	6.10	0.06	1.85	0.29	2.35	1.16	0.06	222	101	468	
3	穴が途遺跡	4	須恵器	鉢	石室東壁寄り	66.60	1.11	20.31	5.77	0.07	1.69	0.12	3.04	0.99	0.09	188	62	449	
4	穴が途遺跡	10	須恵器	高林	石室東壁寄り	69.50	0.73	18.11	5.96	0.07	1.57	0.12	2.26	1.45	0.05	253	92	229	
5	穴が途遺跡	7	須恵器	鉢	石室奥壁側	67.52	0.98	18.55	6.32	0.07	1.85	0.19	2.71	1.54	0.08	306	109	387	
6	穴が途遺跡	6	須恵器	鉢	石室奥壁側	64.34	0.74	19.83	6.59	0.07	1.88	0.31	4.41	1.51	0.01	200	143	585	
7	穴が途遺跡	1	須恵器	鉢	石室奥壁側	71.16	0.77	17.48	5.44	0.07	1.40	0.64	1.57	1.25	0.05	278	186	417	
8	穴が途遺跡	5	須恵器	鉢	石室奥壁側	68.12	0.73	19.13	5.98	0.07	1.64	0.21	2.24	1.51	0.07	193	101	636	
9	穴が途遺跡	9	須恵器	鉢	石室奥壁側	67.36	1.19	18.38	5.73	0.07	1.83	0.40	2.26	1.89	0.01	345	129	425	
10	穴が途遺跡	16	須恵器	鉢	土蔵裏	60.13	1.12	20.59	12.26	0.15	1.62	0.22	2.85	0.78	0.05	176	224	534	
16	高岡遺跡	15	弥生土器	壺	堅穴住居1	64.07	1.24	22.01	6.71	0.06	1.38	0.30	2.28	1.75	0.03	250	142	526	
17	高岡遺跡	14	弥生土器	壺	堅穴住居1	67.90	1.39	19.52	5.92	0.07	1.46	0.22	1.96	1.30	0.06	168	133	544	
18	高岡遺跡	19	弥生土器	壺	堅穴住居1	58.46	1.13	20.48	13.60	0.16	1.76	0.64	2.15	1.43	0.01	303	167	497	タタキ甕
19	高岡遺跡	20	弥生土器	壺	堅穴住居1	59.11	1.18	21.38	11.89	0.13	1.82	0.62	2.23	1.36	0.05	329	186	408	タタキ甕
20	高岡遺跡	18	弥生土器	壺	堅穴住居1	67.87	1.38	18.81	6.52	0.09	1.14	0.86	1.16	1.86	0.10	210	249	548	
1	今岡遺跡	1	埴輪	埴輪	2号埴	60.74	1.16	20.14	10.24	0.19	1.76	2.25	2.16	1.09	0.06	169	254	292	
21	今岡遺跡	11	須恵器	平皿	12号埴	66.49	1.06	20.26	4.84	0.04	1.65	0.51	3.56	1.27	0.09	274	191	402	
22	今岡遺跡	6	須恵器	埴輪	11号埴	70.06	1.13	16.63	6.42	0.08	1.74	0.25	2.50	0.83	0.07	204	99	510	
23	尾崎遺跡	88	弥生土器	壺	堅穴住居2	55.53	1.18	24.91	6.65	0.09	2.58	1.11	7.15	0.63	0.00	108	190	295	
24	尾崎遺跡	168	土師器	甕	堅穴住居6	62.75	0.93	20.07	8.39	0.12	1.87	1.21	3.07	1.15	0.23	233	178	315	
25	尾崎遺跡	275	須恵器	壺	竈立住居9 P1	67.10	0.96	20.21	5.86	0.05	1.50	0.42	1.53	2.08	0.11	211	181	409	焼き悪い
26	尾崎遺跡	161	須恵器	鉢	堅穴住居6	65.11	1.17	19.96	8.33	0.11	1.53	0.41	2.20	0.93	0.06	136	86	460	
27	尾崎遺跡	588	須恵器	壺	N3区包含層	59.38	1.38	21.10	10.85	0.18	1.87	0.46	3.50	0.99	0.03	160	177	449	
28	尾崎遺跡	862	東播磨	鉢	S5区側溝	72.70	0.63	16.73	5.07	0.05	1.62	0.15	1.78	1.04	0.09	230	85	392	
29	尾崎遺跡	854	勝間田焼	甕	S3区土層	67.98	0.94	19.84	3.65	0.05	1.69	0.36	2.64	1.94	0.72	243	101	554	焼き悪い
30	尾崎遺跡	873	須恵器	甕	S3区包含層	64.53	0.86	22.35	6.12	0.09	1.69	0.74	2.03	1.21	0.10	266	200	427	焼成失敗品?
31	尾崎遺跡	833	勝間田焼	甕	S4区包含層	60.34	0.66	21.01	4.21	0.09	2.85	0.41	8.87	1.20	0.08	247	128	357	
32	尾崎遺跡	822	勝間田焼	甕	S4区包含層	67.07	0.97	18.76	5.39	0.08	1.83	0.41	3.38	1.70	0.07	336	142	439	
33	尾崎遺跡	584	須恵器	鉢	S4区包含層	59.80	0.85	20.22	7.11	0.10	3.01	0.66	7.19	0.86	0.04	132	117	298	
34	尾崎遺跡	872	須恵器	甕	S4区包含層	58.91	0.75	22.69	5.04	0.07	2.86	0.57	7.83	1.03	0.08	194	144	323	焼成失敗品?
35	尾崎遺跡	-	勝間田焼	甕	S4区包含層	70.20	1.03	17.10	5.29	0.07	1.63	0.30	2.69	1.38	0.08	244	117	487	
36	尾崎遺跡	-	勝間田焼	甕	S4区包含層	68.86	1.05	17.81	5.56	0.09	1.81	0.39	2.58	1.56	0.13	260	139	467	
37	尾崎遺跡	-	勝間田焼	甕	S3区包含層	65.69	0.94	18.70	7.57	0.11	1.63	0.37	3.05	1.61	0.13	322	137	458	
38	尾崎遺跡	-	勝間田焼	甕	S4区包含層	66.29	0.80	20.24	5.56	0.06	1.79	0.56	2.89	1.54	0.08	239	197	349	
39	尾崎遺跡	-	勝間田焼	甕	S4区包含層	63.55	0.98	22.03	6.43	0.09	1.91	0.39	3.04	1.32	0.06	263	126	458	焼き悪い
40	尾崎遺跡	-	勝間田焼	小皿	S4区包含層	61.96	0.92	20.51	4.55	0.08	2.69	0.41	7.22	1.40	0.09	237	140	350	
41	尾崎遺跡	-	勝間田焼	甕	S4区包含層	68.74	1.21	19.93	4.49	0.07	1.72	0.32	2.12	1.13	0.06	251	152	504	焼き悪い
42	尾崎遺跡	-	勝間田焼	甕	S4区包含層	64.02	1.12	21.48	6.31	0.06	1.67	0.60	2.94	1.40	0.17	300	189	453	
43	尾崎遺跡	-	勝間田焼	甕	S5区包含層	69.42	0.89	16.61	6.39	0.09	1.80	0.61	2.45	1.42	0.11	247	187	407	
44	尾崎遺跡	-	土師器	皿	S4区包含層	68.27	1.18	18.85	5.74	0.07	1.79	0.36	2.34	1.22	0.04	204	138	456	
45	尾崎遺跡	-	須恵器	蓋	N2区包含層	65.58	1.05	21.57	4.46	0.05	1.72	0.41	2.83	2.00	0.06	343	120	467	
46	尾崎遺跡	-	須恵器	鉢	N3区包含層	67.55	1.17	20.84	4.17	0.04	1.73	0.23	2.87	1.13	0.10	225	88	475	
47	尾崎遺跡	-	須恵器	鉢	N3区包含層	66.49	1.20	20.35	6.24	0.10	1.59	0.58	1.63	1.41	0.10	192	207	449	
48	尾崎遺跡	-	弥生土器	甕	S4区包含層	59.25	1.33	24.23	9.10	0.12	1.61	1.38	2.13	0.65	0.00	85	228	399	
49	尾崎遺跡	-	弥生土器	甕	S5区包含層	53.08	1.21	25.39	7.90	0.11	2.89	0.89	7.87	0.45	0.01	79	149	292	
51	尾崎遺跡	580	須恵器	鉢	N1区包含層	66.66	1.14	20.94	5.80	0.07	1.56	0.74	1.73	1.09	0.09	186	194	478	
52	尾崎遺跡	570	須恵器	鉢	N3区包含層	67.83	1.13	19.89	4.91	0.07	1.46	0.41	2.42	1.53	0.12	252	112	485	
53	尾崎遺跡	862	東播磨	鉢	S5区包含層	72.41	0.67	16.62	5.04	0.05	1.53	0.14	2.32	0.96	0.15	216	75	388	
54	尾崎遺跡	842	勝間田焼	甕	S2区包含層	70.28	0.89	17.69	5.24	0.11	1.43	0.49	2.27	1.26	0.15	238	157	417	
55	尾崎遺跡	858	土師器	小皿	S4区包含層	68.50	0.87	20.33	2.41	0.02	1.55	0.71	2.44	2.14	0.85	196	228	479	
56	尾崎遺跡	832	勝間田焼	甕	S3区包含層	62.76	1.17	18.58	8.29	0.14	1.60	1.27	2.73	1.05	2.18	161	330	428	
57	尾崎遺跡	839	勝間田焼	甕	S3区包含層	67.17	1.03	19.63	5.34	0.11	1.72	0.41	2.62	1.55	0.16	289	123	464	
58	尾崎遺跡	828	勝間田焼	甕	S3区包含層	66.99	0.95	20.71	5.22	0.06	1.61	0.48	1.91	1.68	0.14	317	145	417	
59	尾崎遺跡	836	勝間田焼	甕	S3区包含層	62.80	1.08	21.46	8.39	0.14	1.85	0.29	2.27	1.47	0.08	216	91	490	
60	尾崎遺跡	843	勝間田焼	甕	S3区包含層	64.41	1.13	21.06	7.04	0.11	1.95	0.33	2.35	1.31	0.15	218	104	463	
61	尾崎遺跡	841	勝間田焼	甕	S3区包含層	66.89	1.27	18.31	6.83	0.08	1.53	0.29	2.57	1.97	0.06	360	114	575	
62	尾崎遺跡	831	勝																

第3表 尾崎遺跡出土土器分析値一覧表

単位：SiO<sub>2</sub>～P<sub>2</sub>O<sub>5</sub>（％）

番号	遺跡名	掲載番号	種別	器種	層位	SiO <sub>2</sub>	TiO <sub>2</sub>	Al <sub>2</sub> O <sub>3</sub>	Fe <sub>2</sub> O <sub>3</sub>	MnO	MgO	CaO	Na <sub>2</sub> O	K <sub>2</sub> O	P <sub>2</sub> O <sub>5</sub>	Rb	Sr	Zr
1	尾崎遺跡	389	須恵器	杯蓋	F区包含層	66.05	1.12	21.55	4.87	0.95	1.79	0.31	2.15	1.80	0.05	322	97	444
2	尾崎遺跡	392	須恵器	杯蓋	F区包含層	66.82	1.17	19.87	7.53	0.98	1.52	0.23	1.58	0.94	0.10	190	85	481
3	尾崎遺跡	391	須恵器	杯蓋	F区包含層	66.63	1.07	21.18	4.57	0.97	1.66	0.33	2.47	1.76	0.09	275	143	467
4	尾崎遺跡	398	須恵器	杯蓋	G区包含層	63.07	0.99	18.12	13.17	0.16	1.52	0.47	1.77	0.42	0.10	86	90	271
5	尾崎遺跡	401	須恵器	杯蓋	G区包含層	66.86	1.15	19.57	6.50	0.97	1.78	0.75	2.18	0.85	0.12	137	120	339
6	尾崎遺跡	419	須恵器	杯身	F区包含層	66.29	1.22	21.66	4.43	0.97	1.60	0.32	2.00	2.14	0.09	343	101	482
7	尾崎遺跡	422	須恵器	杯身	F区包含層	70.63	1.05	17.81	4.38	0.97	1.67	0.62	2.13	1.34	0.08	232	138	481
8	尾崎遺跡	427	須恵器	杯身	F区包含層	64.58	1.08	20.35	7.05	0.10	1.76	0.22	3.63	0.90	0.11	151	84	399
9	尾崎遺跡	430	須恵器	杯身	F区包含層	66.99	1.18	19.55	7.55	0.10	1.40	0.21	1.81	0.91	0.07	176	105	467
10	尾崎遺跡	439	須恵器	杯身	F区包含層	63.90	0.53	19.04	3.95	0.04	2.51	0.34	7.67	1.64	0.13	253	94	371
11	尾崎遺跡	350	須恵器	杯身	F区包含層	69.88	1.07	19.15	4.40	0.96	1.45	0.72	1.75	1.21	0.13	197	176	452
12	尾崎遺跡	351	須恵器	杯身	F区包含層	68.81	0.70	19.51	4.84	0.05	1.64	0.15	2.52	1.41	0.17	290	73	414
13	尾崎遺跡	361	須恵器	杯身	F区包含層	68.50	1.28	17.20	8.89	0.14	1.18	0.50	1.19	0.87	0.06	134	119	517
14	尾崎遺跡	364	須恵器	杯身	F区包含層	64.77	1.25	22.50	4.98	0.96	1.65	0.44	1.82	1.59	0.72	226	141	475
15	尾崎遺跡	384	須恵器	皿	F区包含層	68.32	1.23	20.11	5.61	0.05	1.58	0.26	1.64	1.01	0.04	189	102	519
16	尾崎遺跡	635	須恵器	椀	F区包含層	71.06	0.82	18.96	3.22	0.95	1.63	0.40	2.33	1.25	0.11	235	136	428
17	尾崎遺跡	598	須恵器	椀	C区包含層	68.73	0.85	20.23	4.47	0.05	1.59	0.26	2.47	1.08	0.12	214	122	374
18	尾崎遺跡	599	須恵器	椀	F区包含層	68.54	1.06	19.60	4.30	0.05	1.64	0.49	2.26	1.72	0.11	316	132	462
19	尾崎遺跡	630	須恵器	椀	F区包含層	71.82	0.83	18.96	3.04	0.05	1.62	0.33	1.68	1.24	0.16	255	120	416
20	尾崎遺跡	634	須恵器	椀	F区包含層	69.34	0.98	18.44	4.25	0.05	1.68	0.44	2.75	1.55	0.15	254	120	431
21	尾崎遺跡	607	須恵器	椀	F区包含層	70.80	0.73	19.11	3.58	0.94	1.43	0.17	2.05	1.77	0.15	321	74	306
22	尾崎遺跡	637	須恵器	椀	F区包含層	67.85	0.66	18.19	5.53	0.08	1.65	0.36	3.57	1.67	0.18	275	119	445
23	尾崎遺跡	616	須恵器	椀	D区包含層	60.47	0.68	21.17	5.23	0.99	2.60	0.32	3.10	1.10	0.07	252	102	348
24	尾崎遺跡	626	須恵器	椀	D区包含層	64.10	1.07	19.73	8.11	0.12	2.14	0.82	2.81	0.80	0.07	168	152	336
25	尾崎遺跡	612	須恵器	椀	C区包含層	65.52	0.72	20.68	3.45	0.05	2.58	0.17	5.75	0.85	0.07	149	74	440
26	尾崎遺跡	604	須恵器	椀	C区包含層	70.30	0.88	20.46	2.76	0.93	1.67	0.21	2.41	0.98	0.11	203	102	462
27	尾崎遺跡	618	須恵器	椀	C区包含層	61.60	1.03	21.01	3.93	0.05	2.82	0.31	7.87	1.15	0.07	193	82	351
28	尾崎遺跡	610	須恵器	椀	C区包含層	66.57	0.97	18.95	7.02	0.07	1.72	0.43	2.58	1.43	0.10	252	143	421
29	尾崎遺跡	605	須恵器	椀	A区包含層	71.07	0.86	19.64	2.85	0.96	1.68	0.22	2.35	0.94	0.17	210	99	473
30	尾崎遺跡	624	須恵器	椀	A区包含層	67.59	0.87	20.25	4.70	0.05	1.68	0.21	2.59	1.76	0.08	405	93	381
31	尾崎遺跡	636	須恵器	椀	A区包含層	64.39	0.78	20.73	6.96	0.14	1.61	0.80	2.82	1.42	0.10	329	220	408
32	尾崎遺跡	-	須恵器	椀	包含層	67.69	1.08	19.36	5.38	0.09	1.60	0.25	2.70	1.49	0.13	236	66	503
33	尾崎遺跡	482	灰土器	椀	G区包含層	60.67	0.98	21.28	9.87	0.16	1.74	0.32	2.84	1.78	0.09	300	61	411
34	尾崎遺跡	490	灰土器	椀	G区包含層	57.01	1.33	22.42	12.95	0.19	1.69	0.23	2.55	1.36	0.09	311	55	308
35	尾崎遺跡	487	灰土器	椀	G区包含層	59.08	1.18	21.42	11.96	0.18	1.65	0.22	2.35	1.60	0.10	329	49	331
36	尾崎遺跡	510	灰土器	椀	G区包含層	60.30	1.14	21.19	10.18	0.22	1.83	0.42	2.41	1.60	0.48	301	137	487
37	尾崎遺跡	492	灰土器	椀	G区包含層	69.73	0.41	17.63	3.31	0.93	1.65	0.33	3.05	3.33	0.14	403	85	350
40	尾崎遺跡	502	灰土器	椀	G区包含層	66.28	0.89	18.64	7.86	0.11	1.57	0.76	1.79	1.79	0.10	267	268	434
41	尾崎遺跡	505	灰土器	椀	G区包含層	62.71	0.92	19.18	8.92	0.14	1.63	1.47	2.75	1.48	0.65	189	256	214
42	尾崎遺跡	504	灰土器	椀	G区包含層	67.56	0.64	18.77	5.02	0.07	1.48	0.97	3.03	1.98	0.24	280	216	430
43	尾崎遺跡	501	灰土器	椀	F区包含層	67.61	0.87	17.11	7.17	0.12	1.75	0.26	2.99	1.64	0.28	222	132	311
45	尾崎遺跡	488	灰土器	椀	F区包含層	68.66	0.77	18.72	5.59	0.09	1.31	0.62	9.00	2.30	1.61	304	269	415
46	尾崎遺跡	497	灰土器	椀	F区包含層	60.59	0.78	19.43	10.55	0.16	1.59	2.19	1.80	1.21	1.27	170	636	242
47	尾崎遺跡	491	灰土器	椀	F区包含層	65.09	0.83	18.15	8.25	0.18	1.73	0.70	2.37	2.21	0.31	310	139	403
48	尾崎遺跡	507	灰土器	椀	F区包含層	62.74	0.86	21.93	8.22	0.11	1.79	0.17	1.76	2.15	0.10	324	36	424
49	尾崎遺跡	483	灰土器	椀	F区包含層	62.25	0.92	21.40	10.02	0.16	1.37	0.19	2.20	1.18	0.02	224	56	1087
50	尾崎遺跡	479	灰土器	椀	F区包含層	68.11	0.76	19.16	5.46	0.96	1.58	0.24	2.75	1.54	0.13	286	53	369
51	尾崎遺跡	494	灰土器	椀	F区包含層	64.88	0.77	19.14	8.04	0.10	1.87	0.28	2.50	2.00	0.19	339	111	328
52	尾崎遺跡	500	灰土器	椀	F区包含層	72.30	0.47	16.03	3.42	0.96	1.59	0.51	2.48	2.24	0.48	277	148	337
53	尾崎遺跡	486	灰土器	椀	F区包含層	57.09	0.95	22.41	11.88	0.13	1.59	0.95	2.53	1.42	0.85	283	281	348
54	尾崎遺跡	484	灰土器	椀	F区包含層	67.98	0.83	17.13	7.09	0.11	1.53	0.30	2.85	1.82	0.21	237	127	323
55	尾崎遺跡	511	灰土器	椀	F区包含層	67.67	0.85	17.76	8.01	0.11	1.40	0.28	1.49	1.78	0.44	249	163	370
56	尾崎遺跡	489	灰土器	椀	F区包含層	66.90	0.55	19.17	6.11	0.09	1.47	1.28	2.43	1.66	0.11	261	281	445
57	尾崎遺跡	512	灰土器	椀	F区包含層	65.93	0.72	18.86	6.86	0.98	1.67	1.17	2.58	1.42	0.46	199	279	277
58	尾崎遺跡	509	灰土器	椀	F区包含層	52.22	1.18	21.36	11.71	0.22	2.71	2.02	7.02	0.77	0.57	68	214	295
59	尾崎遺跡	481	灰土器	椀	F区包含層	60.96	0.44	19.38	0.51	0.10	2.63	0.45	7.17	1.53	0.69	245	72	222
60	尾崎遺跡	499	灰土器	椀	F区包含層	67.92	0.49	18.67	3.94	0.96	1.63	1.09	2.99	2.04	0.81	292	217	351
61	尾崎遺跡	498	灰土器	椀	F区包含層	66.10	0.54	19.10	4.26	0.96	1.46	1.14	3.31	1.87	1.85	268	258	394
62	尾崎遺跡	485	灰土器	椀	F区包含層	59.29	0.89	21.09	10.08	0.17	1.48	0.61	1.87	2.10	2.22	346	161	356
63	尾崎遺跡	506	灰土器	椀	F区包含層	69.20	0.61	18.48	4.49	0.98	1.43	0.56	2.01	2.89	0.09	463	124	283
64	尾崎遺跡	503	灰土器	椀	F区包含層	60.48	0.81	22.35	9.52	0.15	1.63	0.20	2.55	2.12	0.00	438	57	321
65	尾崎遺跡	513	灰土器	椀	F区包含層	65.04	0.73	20.88	5.62	0.09	1.56	0.79	2.83	1.77	0.46	271	215	248
66	尾崎遺跡	496	灰土器	椀	F区包含層	68.68	0.74	17.49	4.92	0.07	1.48	0.63	2.07	1.94	1.82	286	229	400
67	尾崎遺跡	508	灰土器	椀	F区包含層	59.36	0.53	21.63	6.94	0.10	2.71	0.14	6.99	1.39	0.07	224	41	265
68	尾崎遺跡	296	灰土器	灰土面1		69.82	0.84	16.85	7.72	0.09	1.27	0.55	0.34	2.05	0.31	226	161	587
69	尾崎遺跡	297	灰土器	灰土面1		66.66	0.94	18.44	7.19	0.11	1.52	0.40	2.21	1.63	0.71	223	127	541
70	尾崎遺跡	282	灰土器	柱穴列1 P3		70.59	0.42	17.36	3.22	0.93	1.49	0.31	2.67	3.41	0.15	372	87	363
71	尾崎遺跡	281	灰土器	柱穴列1 P3		67.23	0.69	19.17	7.17	0.11	1.40	0.48	2.08	1.33	0.15	203	101	318
72	尾崎遺跡	243	灰土器	掘立柱建物4		67.09	0.56	21.54	4.07	0.96	1.55	0.51	2.26	1.99	0.15	362	107	313
73	尾崎遺跡	240	灰土器	掘立柱建物4		66.77	0.59	20.83	4.14	0.05	1.43	0.58	2.63	2.01	0.66	303	128	293
74	尾崎遺跡	241	灰土器	掘立柱建物4		66.95	0.53	20.60	4.38	0.96	1.50	0.56	2.62	2.30	0.13	375	118	316
75	尾崎遺跡	278	灰土器	柱穴列1 P3		56.79	1.06	22.90	12.46	0.16	2.06	1.19						

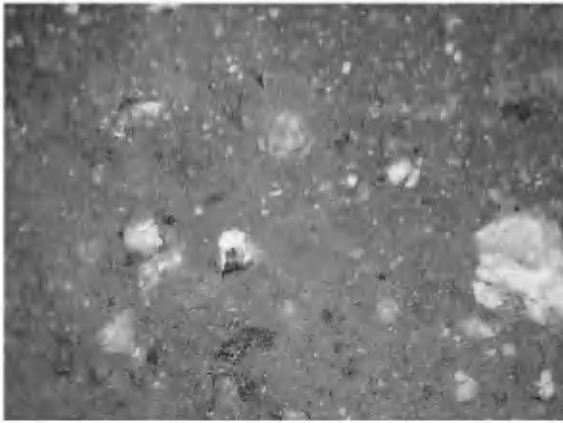


写真1. 中町B遺跡 (弥生土器16-2)

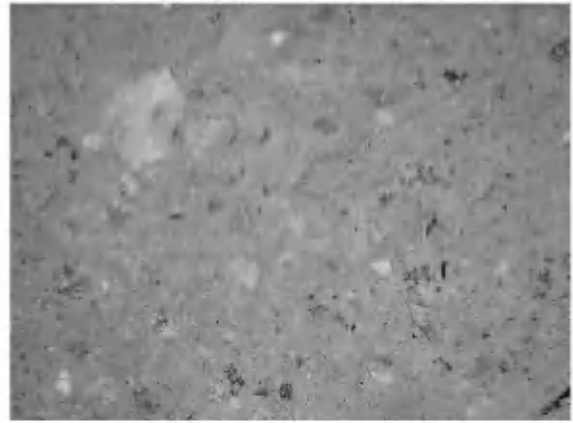


写真2. 中町B遺跡 (弥生土器10)



写真3. 勝間田焼 (椀)



写真4. 東播系須恵器 (鉢)



写真5. 中町B遺跡 (中世須恵器・甕60)

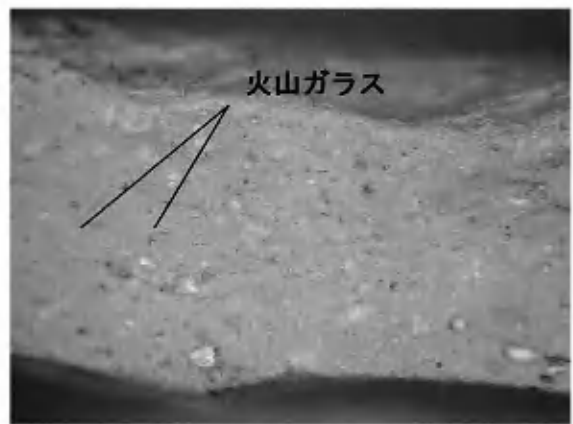


写真6. 中町B遺跡 (中世須恵器・椀23)



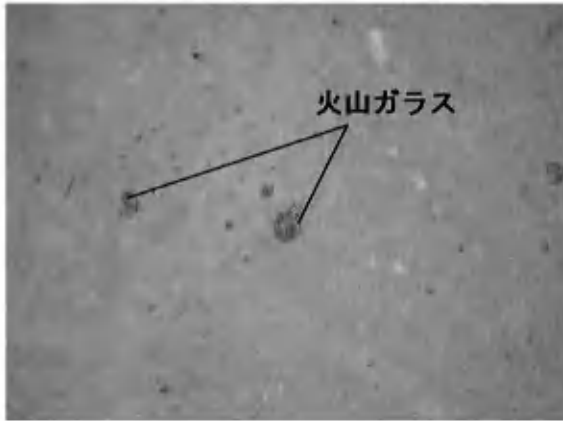


写真7. 中町B遺跡 (中世須恵器・鉢51)



写真8. 穴が途遺跡 (弥生土器・円筒形土器1)

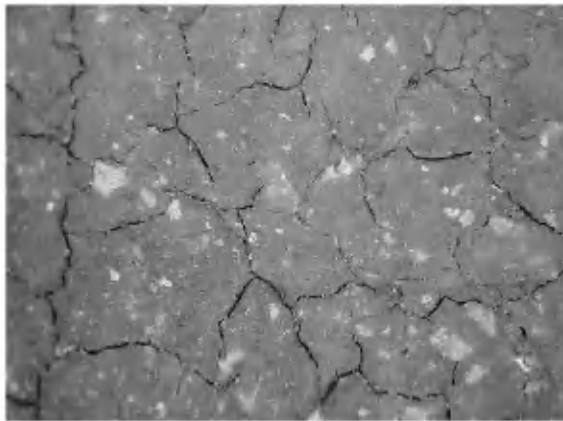


写真9. 穴が途遺跡 (弥生土器・鼓形器台7)



写真10. 穴が途遺跡 (弥生土器・甕5)

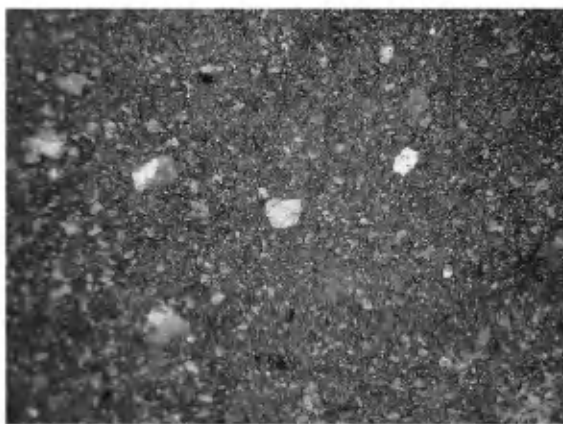


写真11. 穴が途遺跡 (生駒産壺15-2)

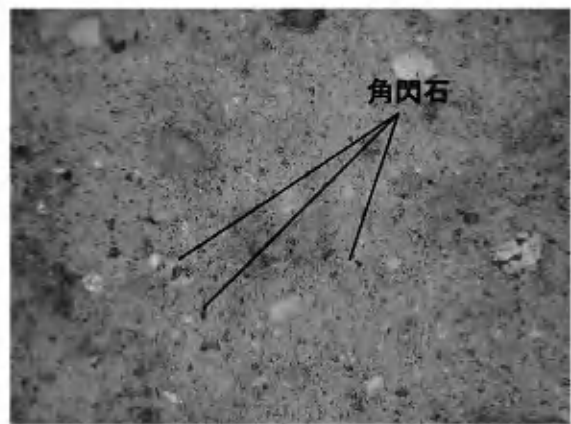


写真12. 尾崎遺跡 (焼塩土器58)

0 2mm

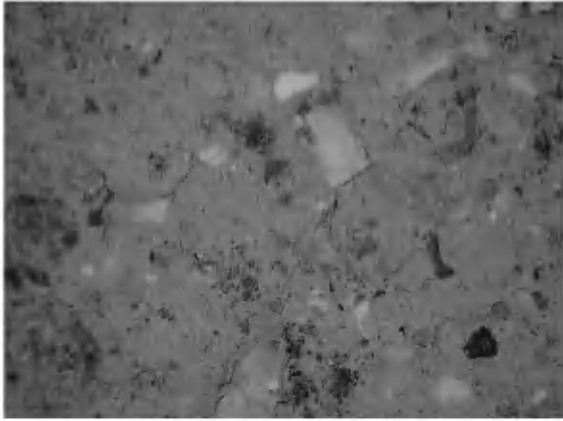


写真13. 尾崎遺跡 (焼塩土器46)

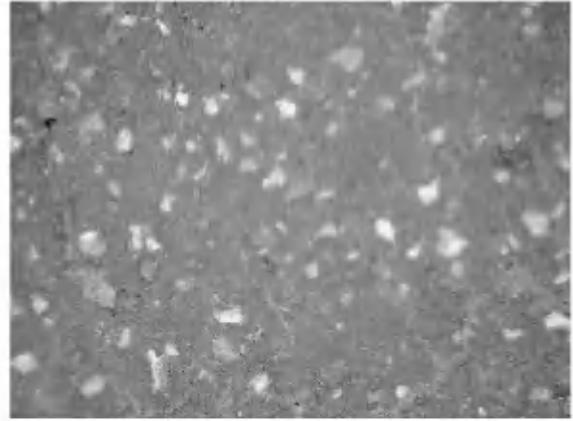


写真14. 尾崎遺跡 (焼塩土器34)

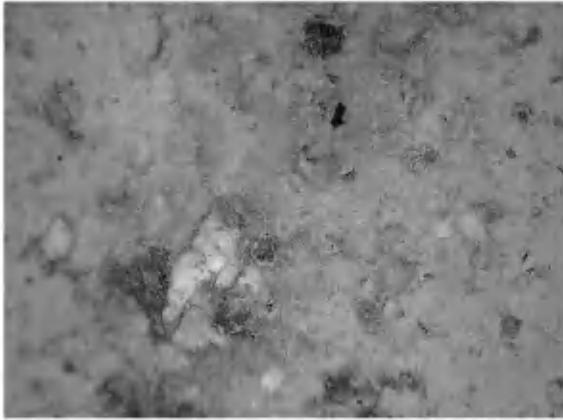


写真15. 尾崎遺跡 (焼塩土器41)

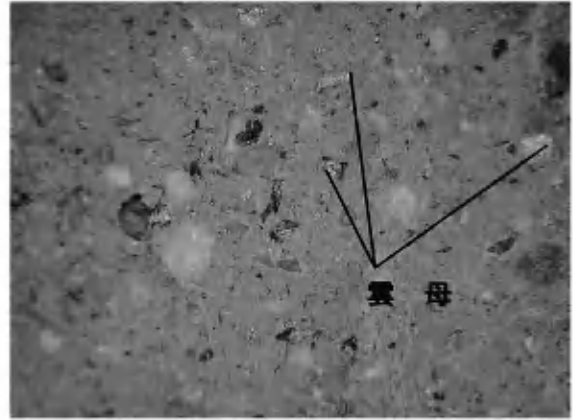


写真16. 尾崎遺跡 (焼塩土器64)

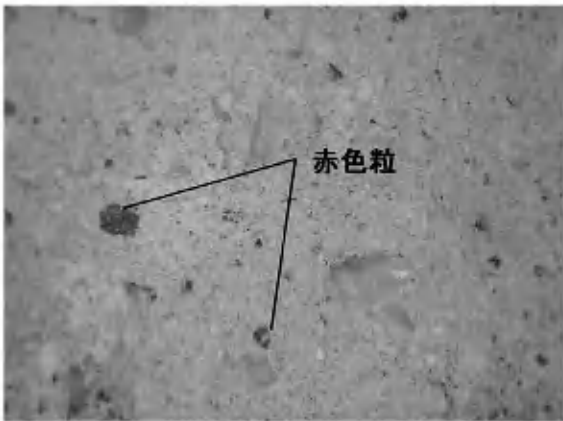


写真17. 尾崎遺跡 (焼塩土器41)

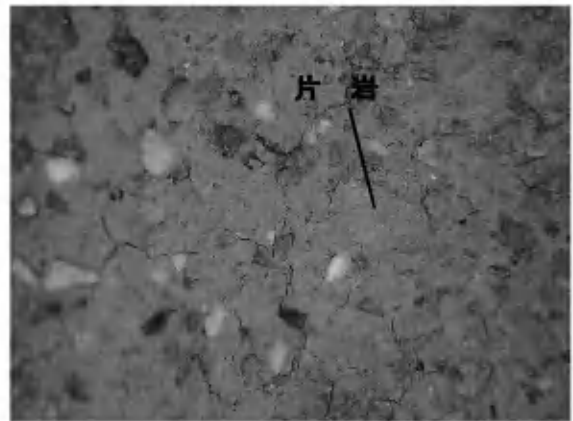


写真18. 尾崎遺跡 (焼塩土器64)



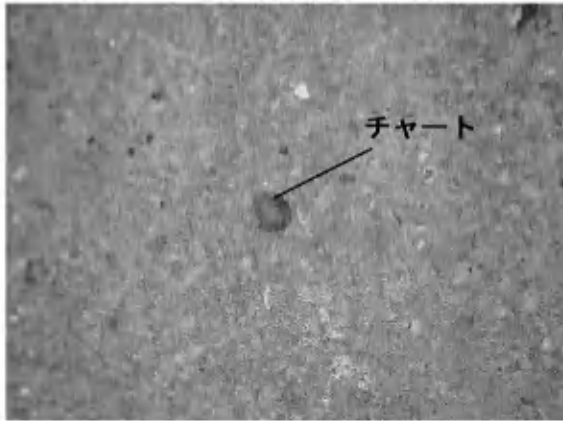


写真19. 尾崎遺跡 (中世須恵器53)

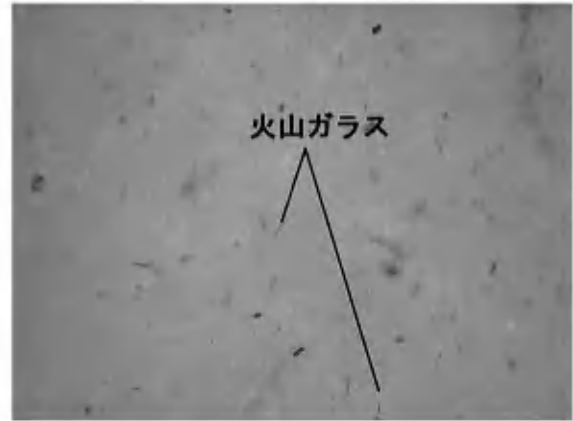


写真20. 尾崎遺跡 (中世須恵器38)

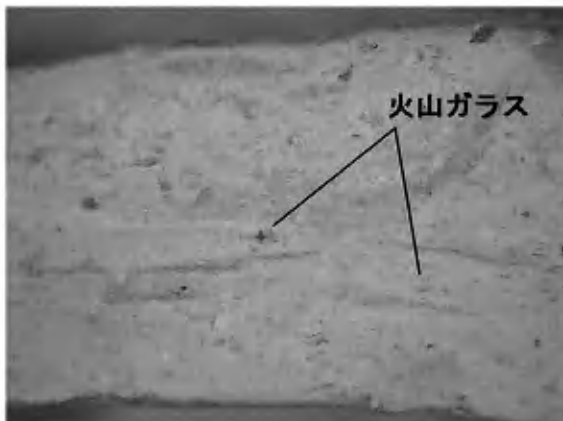


写真21. 尾崎遺跡 (中世須恵器39)



写真22. 尾崎遺跡 (中世須恵器65)

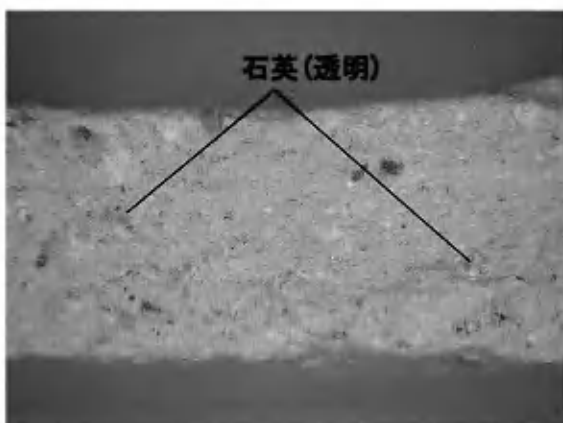
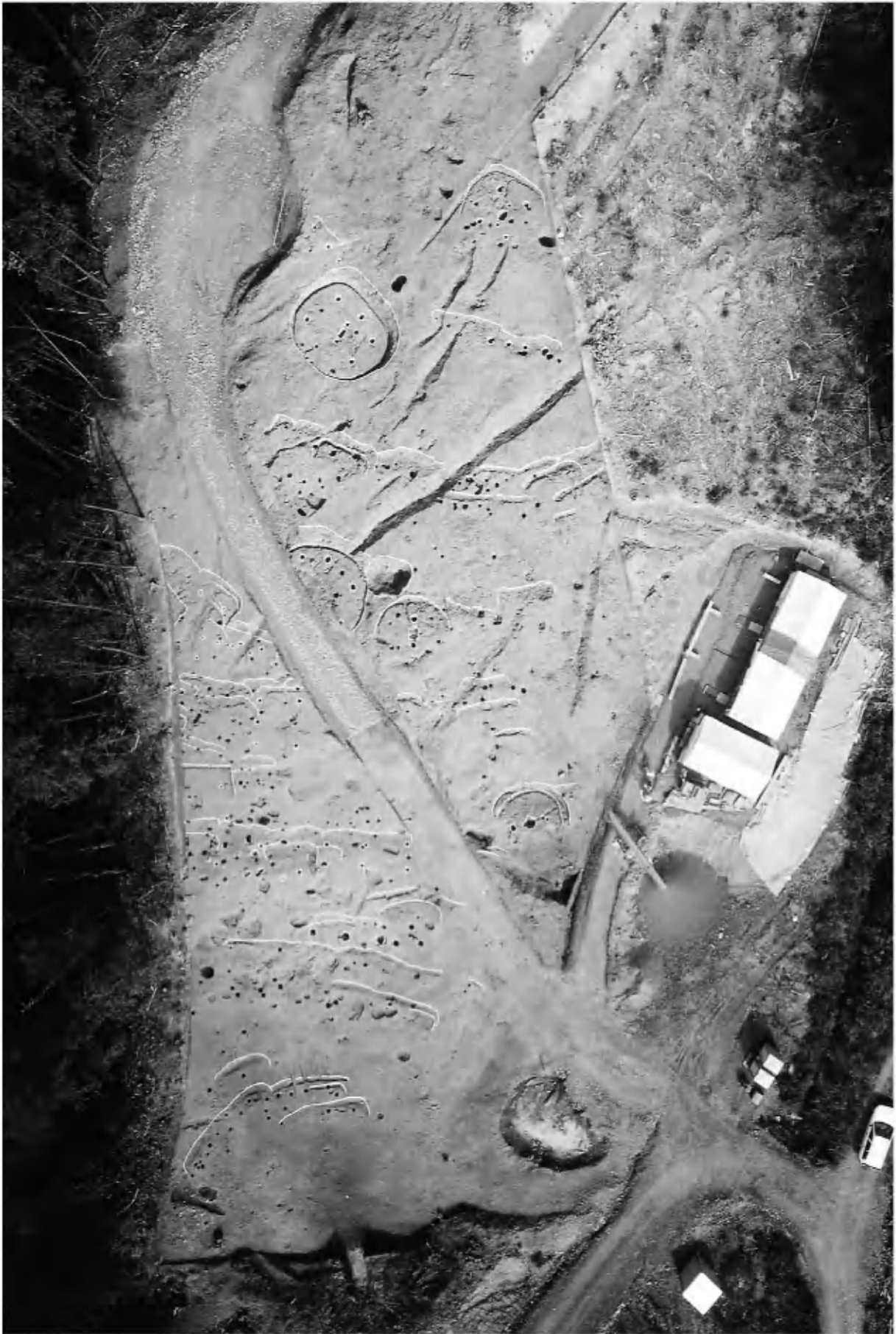


写真23. 相生・龍野窯跡群



写真24. 相生・龍野窯跡群





1 調査地全景（上空から、上が北）（1区・2区の写真を合成）

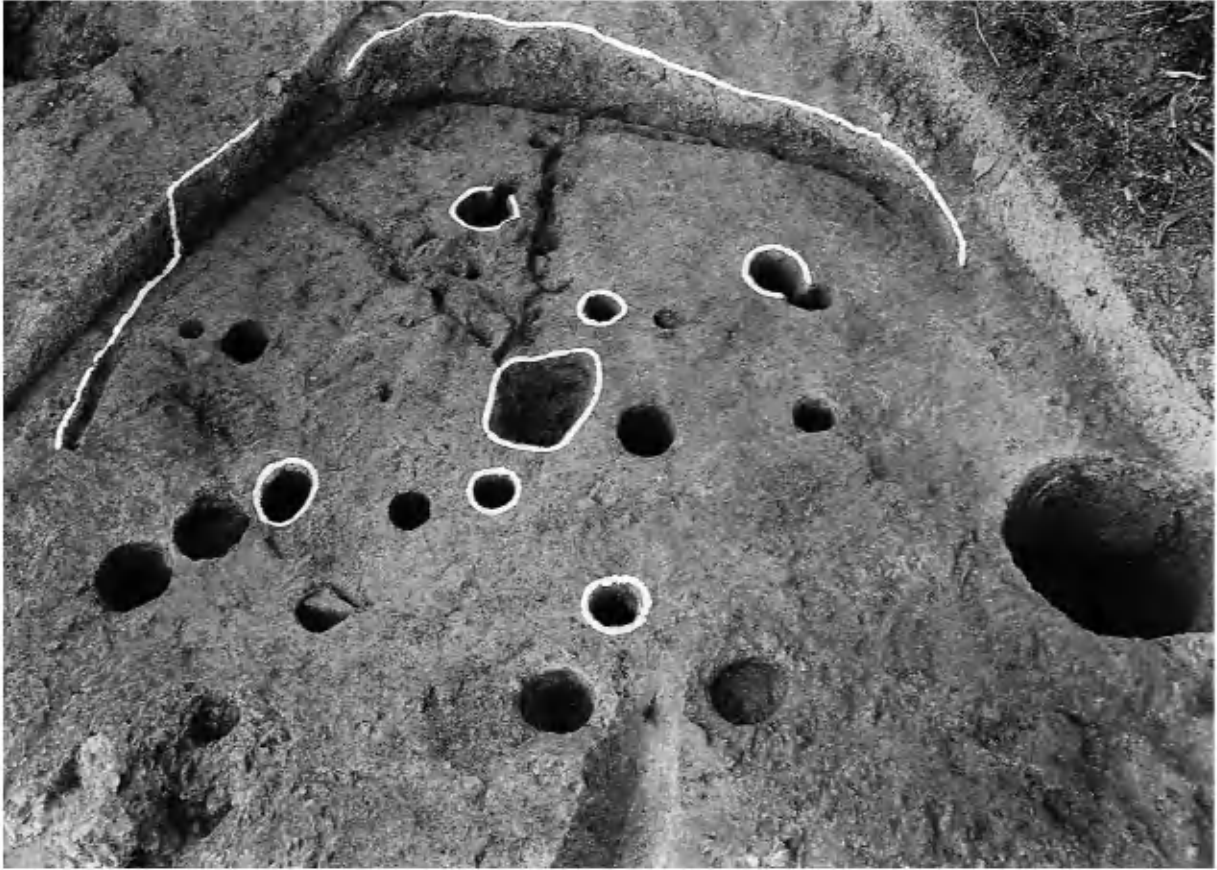




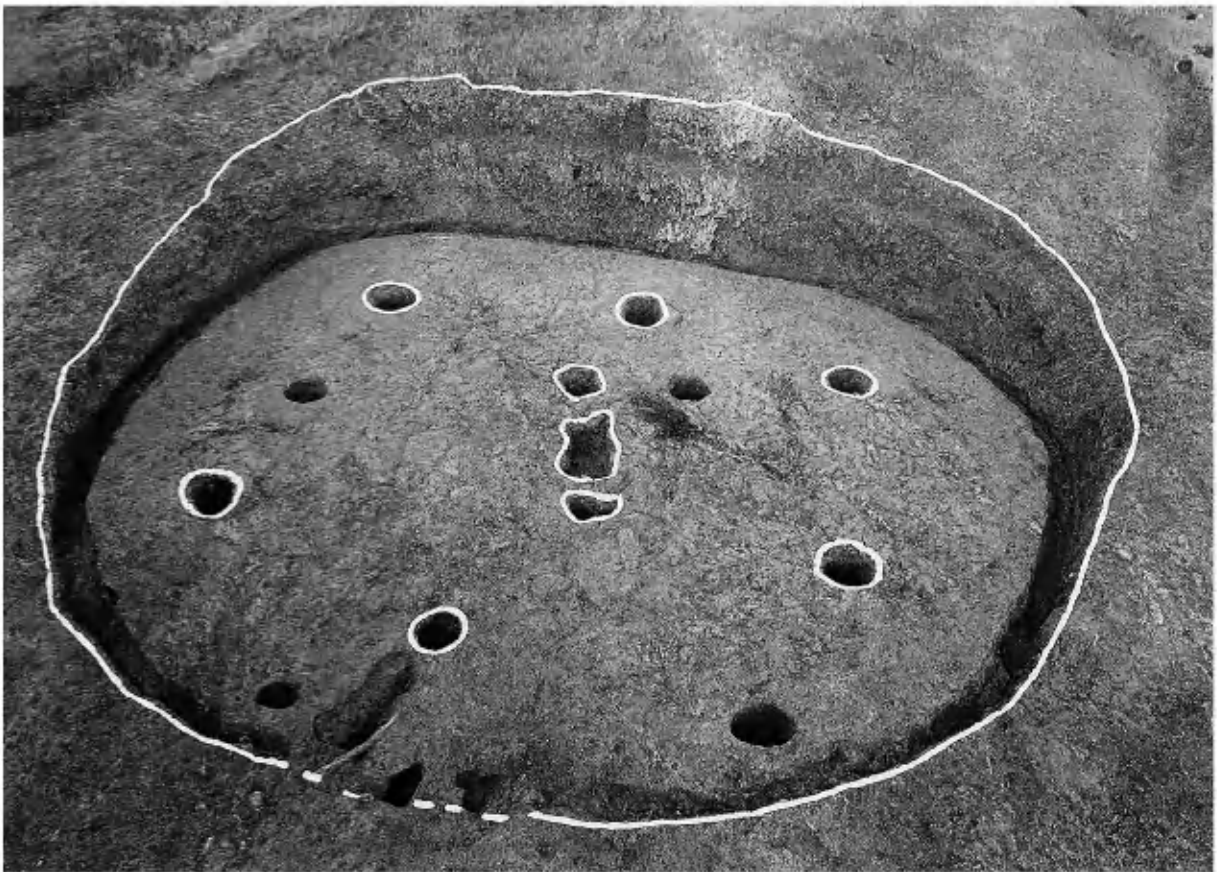
1 遺跡遠景（北東上空から）



2 北半部の遺構（南から）



1 豎穴住居 1 (南西から)



2 豎穴住居 3 (南西から)



1 竪穴住居3 埋土断面 (南東から)



2 竪穴住居3 サヌカイト剥片出土状況(南西から)



3 竪穴住居4 (南西から)



4 竪穴住居4 壁体検出状況 (南から)



5 竪穴住居4 土器出土状況 (南西から)



1 豎穴住居 5 (南から)



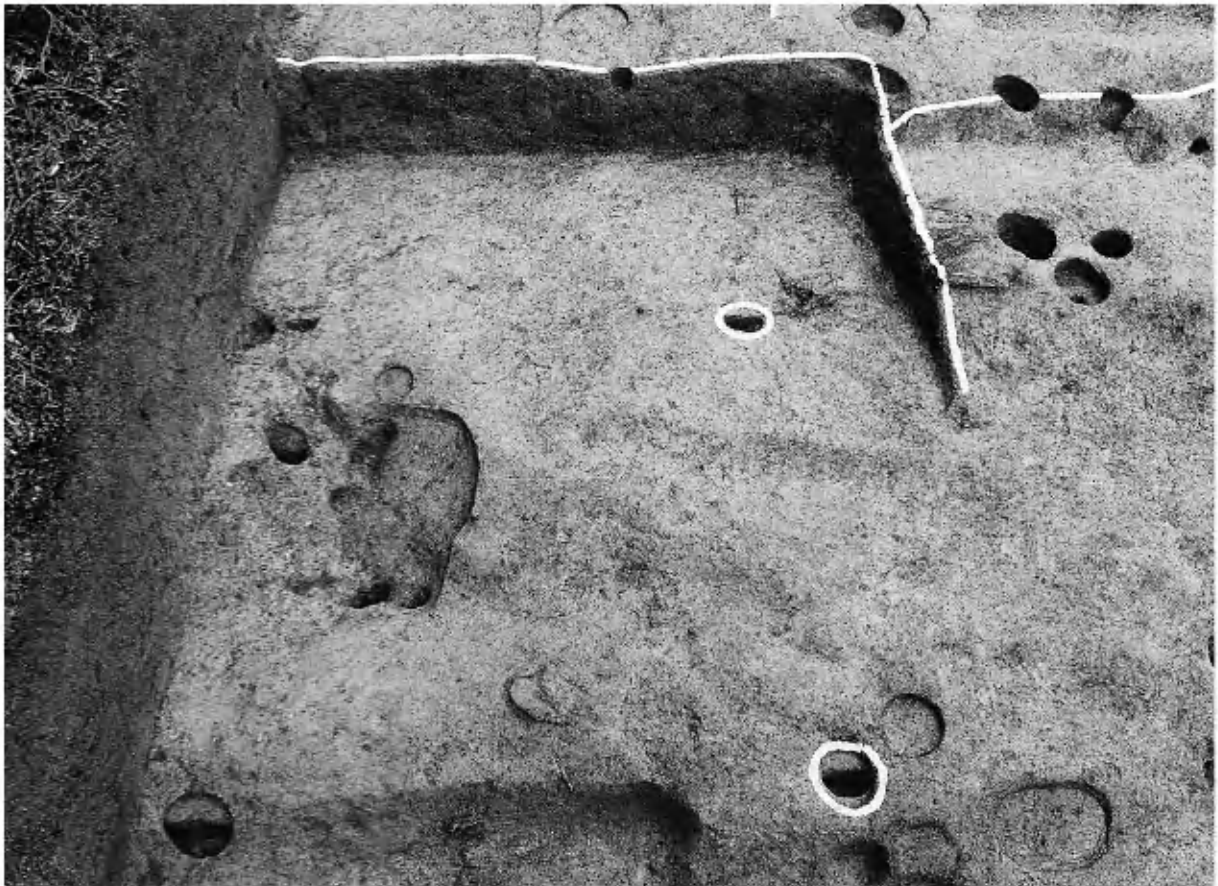
2 豎穴住居 6 (南東から)



1 竪穴住居6 中央穴断面 (西から)



2 竪穴住居6 柱穴 (南から)



3 竪穴住居8 (南から)



4 竪穴住居8 断面 (南東から)



5 調査区西半 (北から)



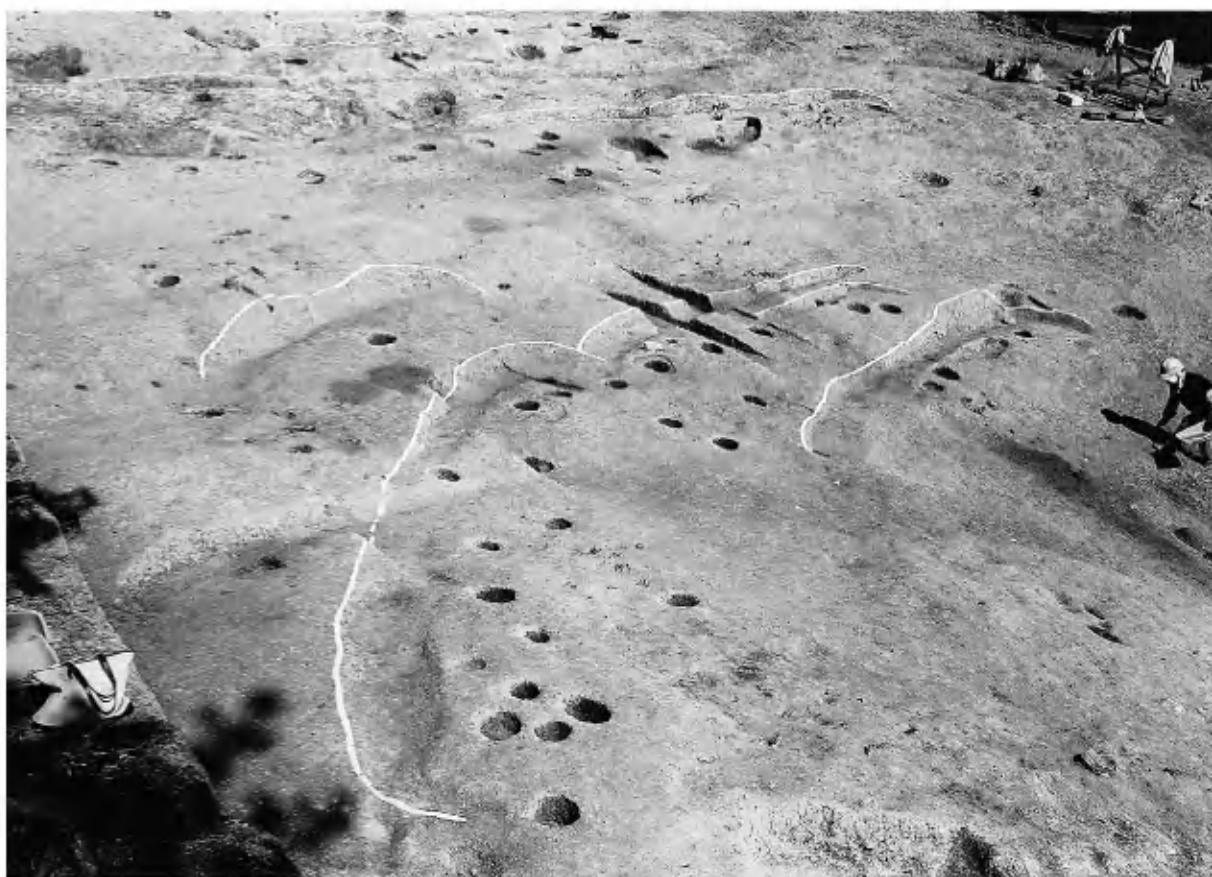
1 D～H群 (南東から)



2 D～F群 (南から)



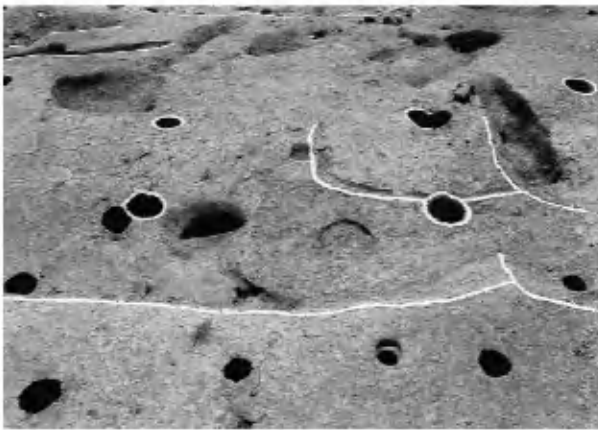
1 H～J群 (北から)



2 K群 (南西から)



1 B・C群 (東から)



2 竪穴住居 13 (北から)



3 柱穴群 1 (南から)



4 柱穴列 (南から)



5 段状遺構 2 (南東から)





1 段状遺構25 環状石斧S29・30出土状況(南東から)



2 土壌5 (南東から)



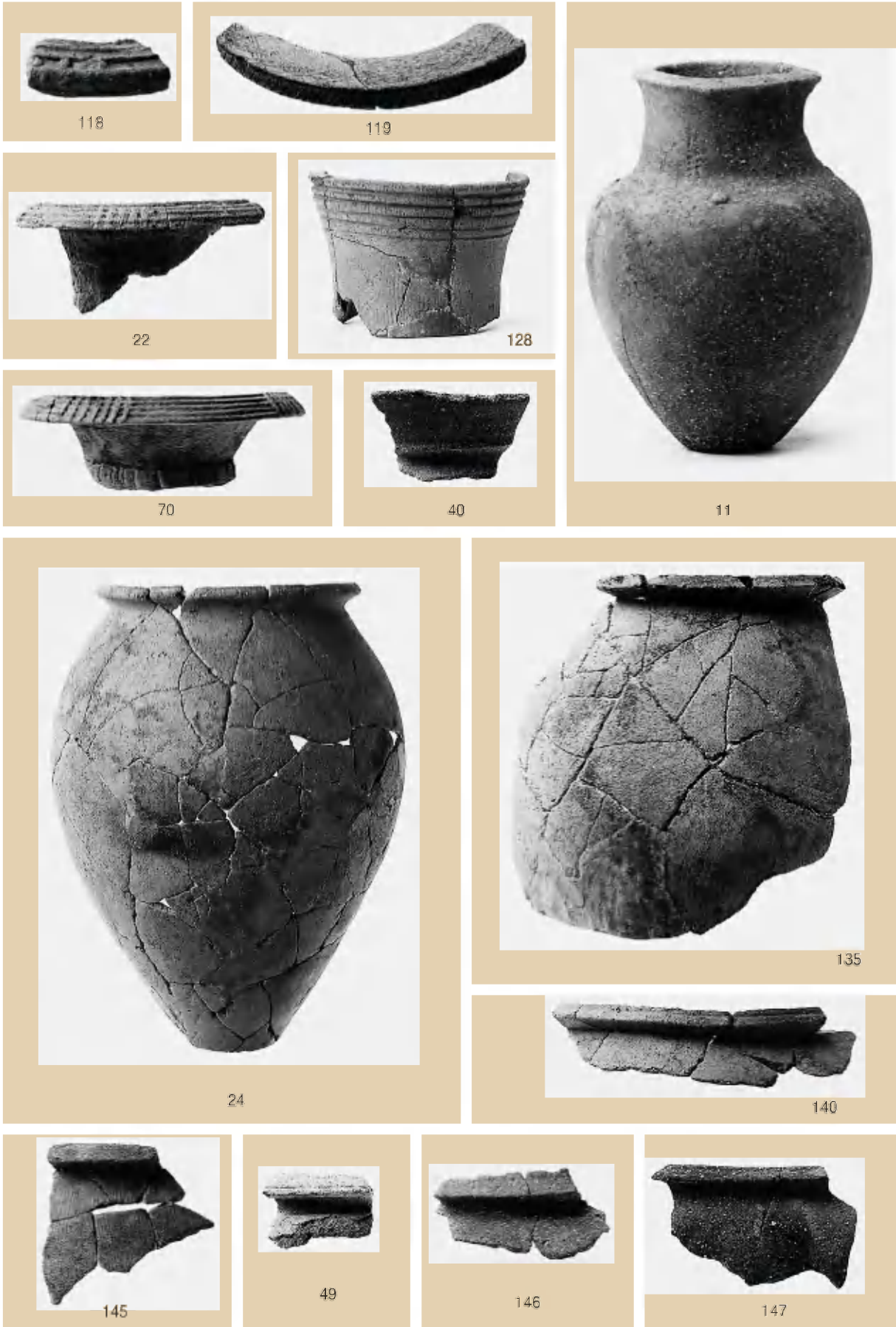
3 火葬墓 (西から)



4 土壌3 (南西から)



5 谷堆積土断面 (南東から)



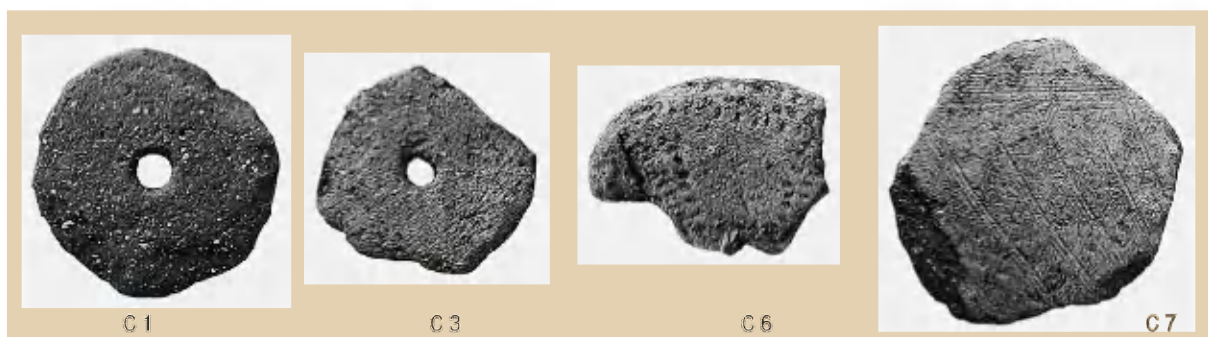
弥生土器・土師器（壺・甕）



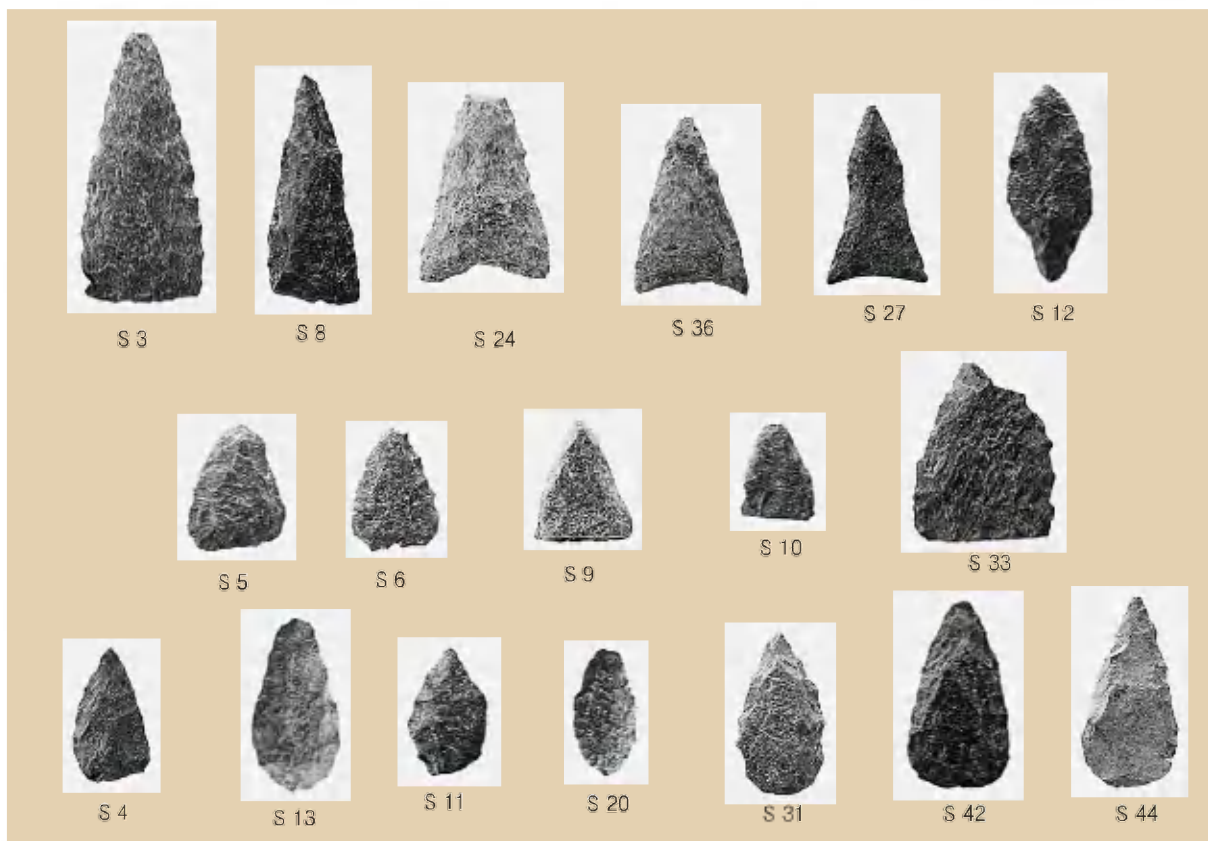
弥生土器・土師器 (高杯・鉢・蓋)



1 弥生土器・土師器（器台）



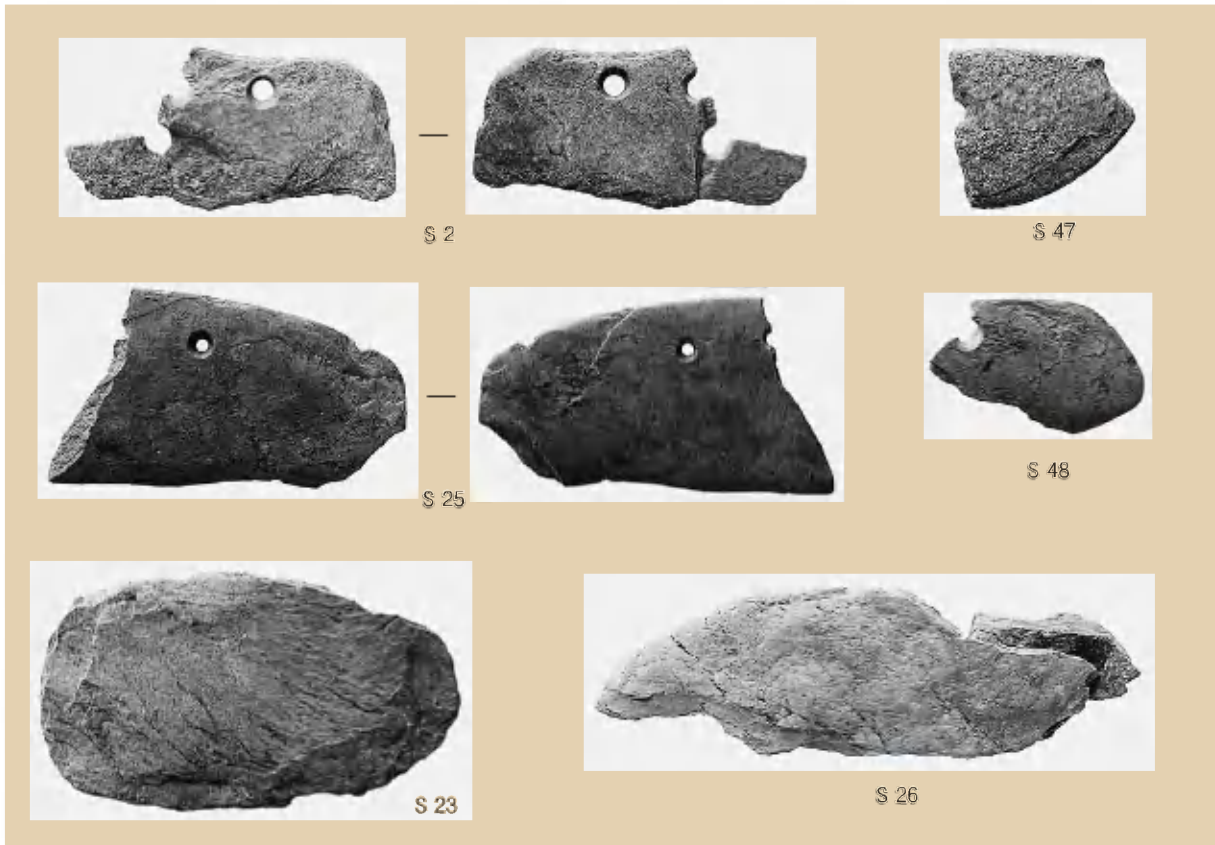
2 土製品



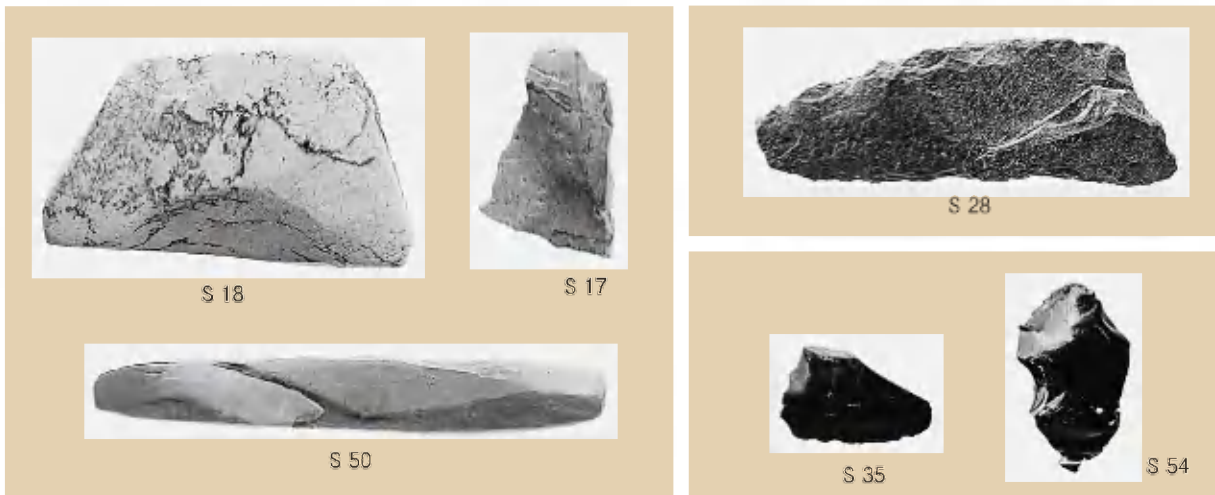
3 石鏃



石斧・石錐



1 磨製石包丁・未製品

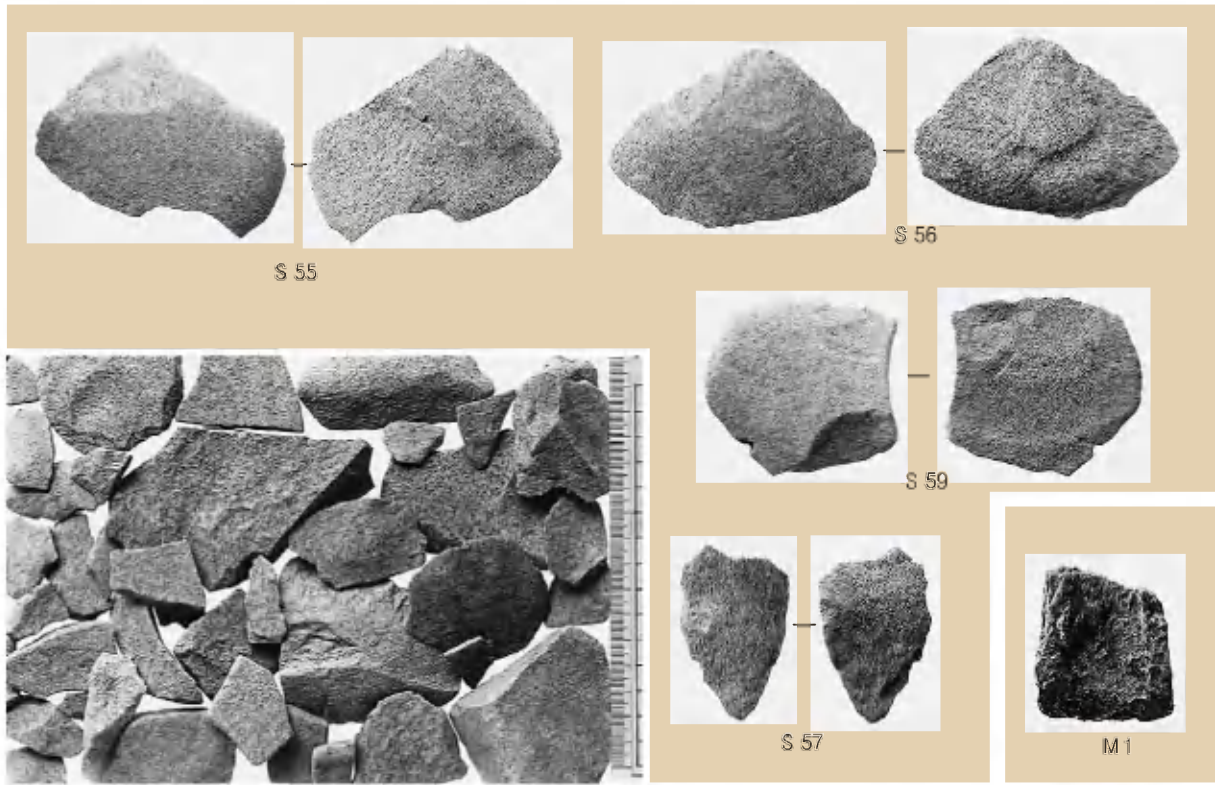


2 砥石

3 石鎌・黒曜石剝片

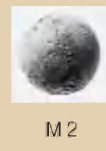
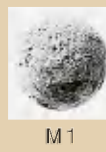


4 原石?



1 安山岩剥片

2 鉄斧



5 鉛玉

3 焼土塊



4 須恵器

1 北側調査区  
調査前近景  
(南西から)



2 南側調査区全景  
(北西から)



3 段状遺構 1～5・  
製鉄関連遺構  
(西から)







1 段状遺構 1～5 (南東から)



2 段状遺構 5 遺物出土状況 (南東から)



1 製鉄関連遺構  
(南東から)



2 製鉄関連遺構  
(南西から)



3 被熱箇所・炉壁、  
鉄滓集積箇所  
(東から)



1 炉壁、鉄滓集積箇所検出状況  
(東から)



2 炉壁、鉄滓集積箇所 G-H 断面  
(東から)



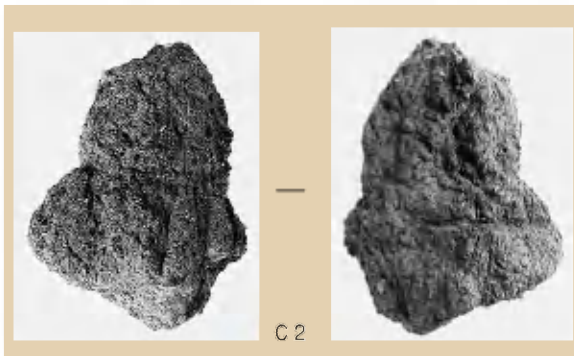
3 鉄滓集積箇所  
(南西から)



1 段状遺構5出土遺物



2 P 3出土遺物



3 製鉄関連遺物 (炉壁・鉄滓)



1 調査地遠景  
(南から:竹山城跡より)



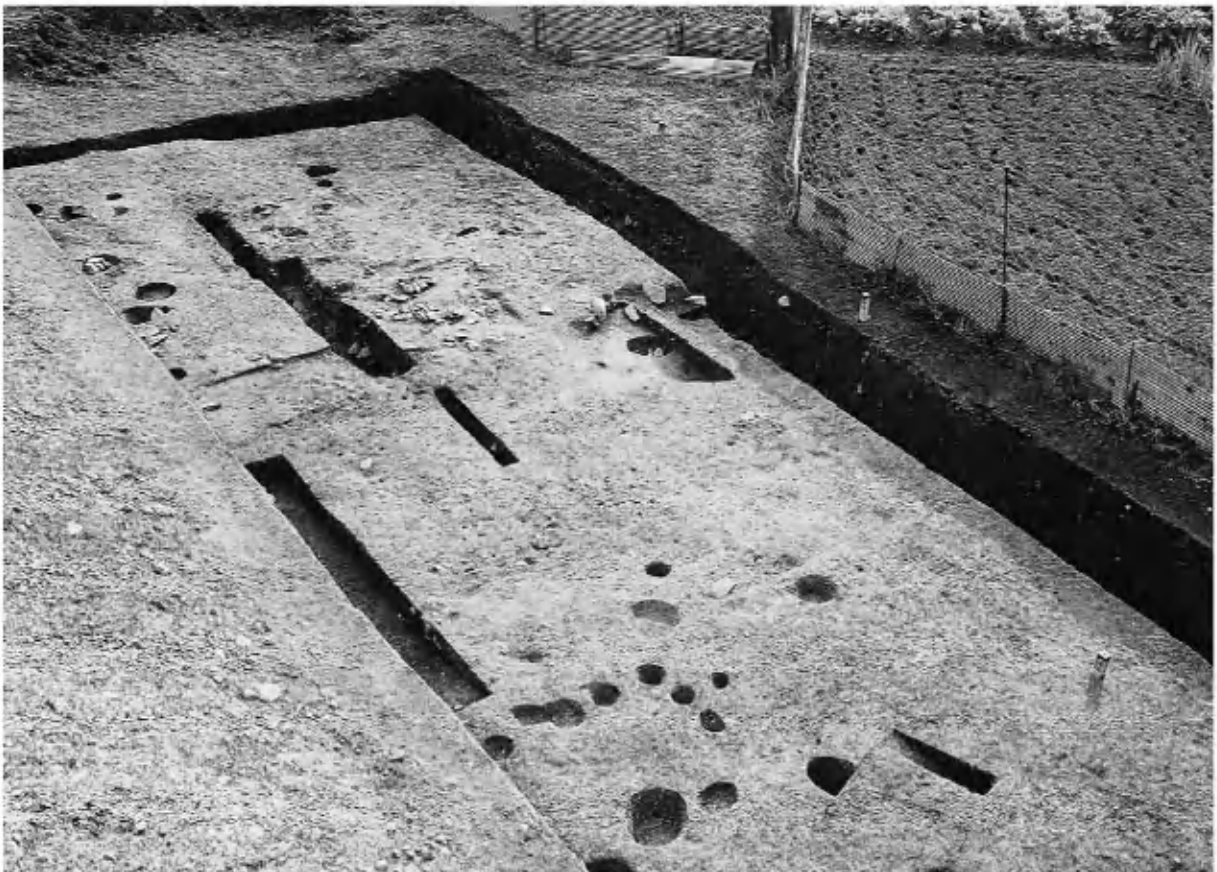
2 調査地近景  
(南東から)



3 調査区南半全景  
(南東から)



1 調査区南半全景（北から）



2 調査区北半全景（北から）



1 土壇1 (東から)



2 土壇3 (南から)



3 土壇4 (南から)



4 池状遺構 (南東から)



5 溝5南端 (北東から)



6 集石 (西から)



7 瓦出土状況 (北西から)



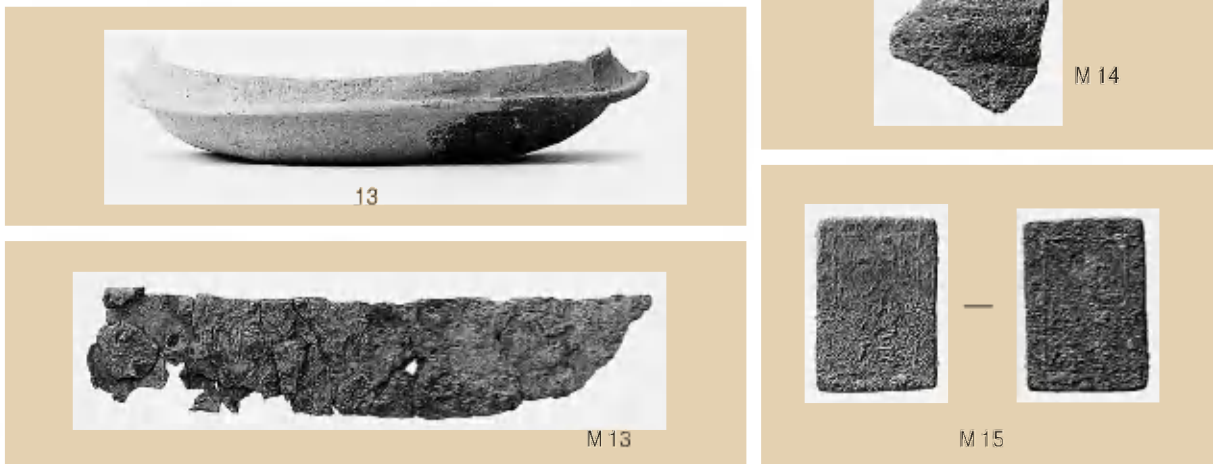
8 鉄鎌 (M13) 出土状況 (北西から)



1 土壙 1 出土遺物



2 土壙 4 出土遺物



3 遺構に伴わない遺物





1 調査地遠景（南西から：竹山城跡より）



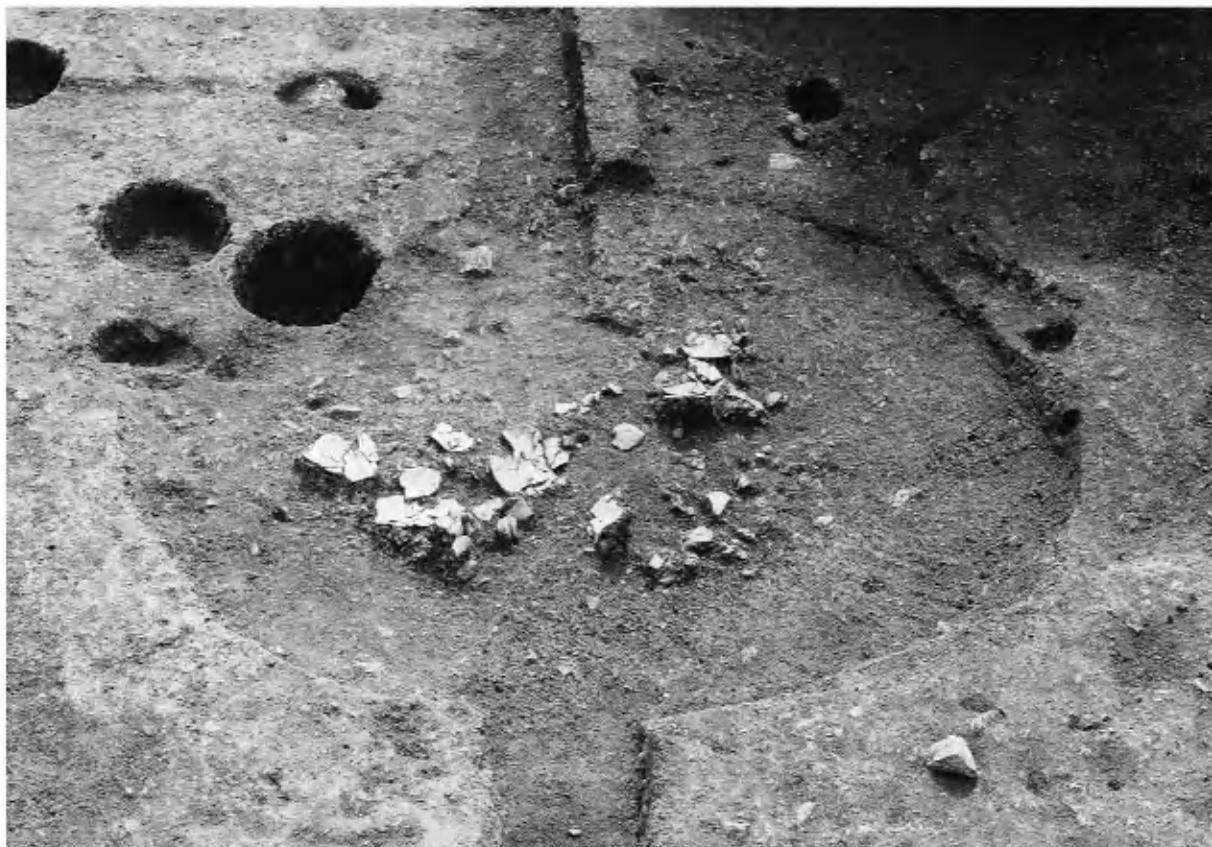
2 調査地近景（南から）



1 豎穴住居 1 (G区) (南から)



2 豎穴住居 2 (S3区) (西から)



1 土壙 1 (F区) (北から)



2 土壙 1 弥生土器出土状況 (南から)



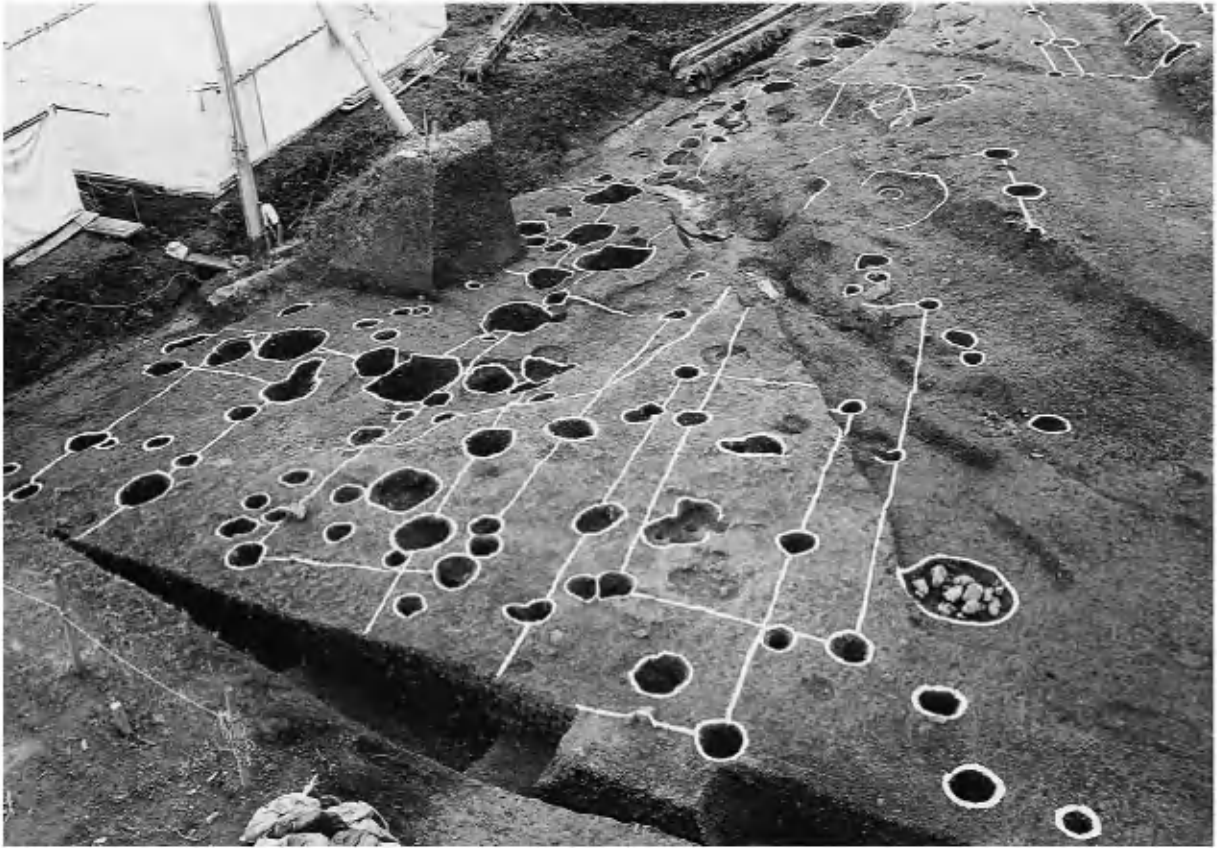
3 竪穴住居 6 (N1区) (南から)



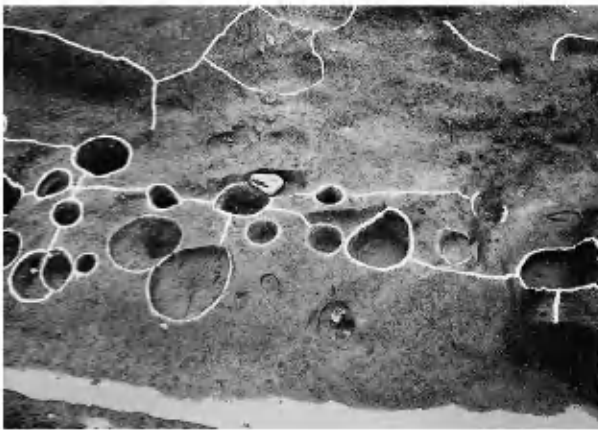
4 土器溜まり (E区) (南から)



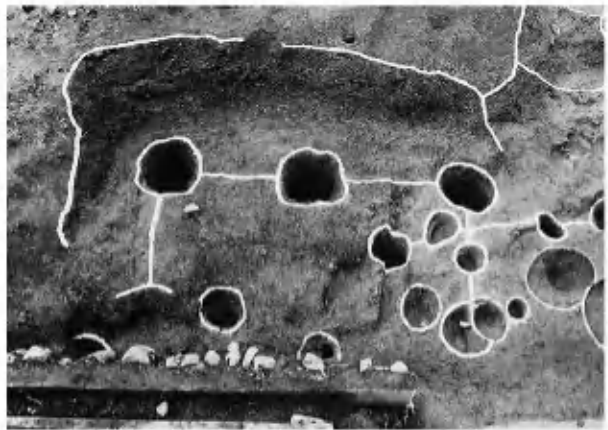
5 古墳 (G区) (東から)



1 古代・中世建物群 (G区) (東から)



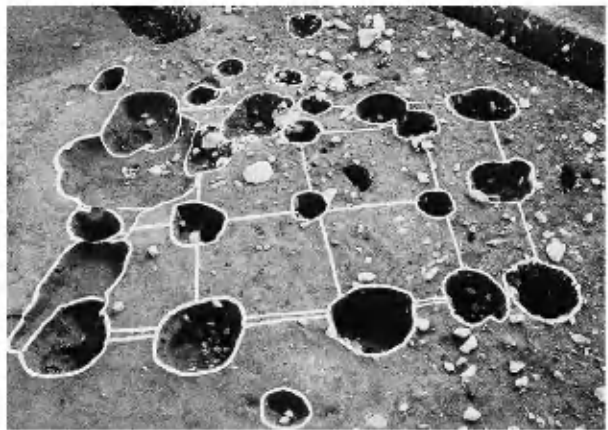
2 掘立柱建物4 (G区) (南から)



3 掘立柱建物5 (G区) (南から)



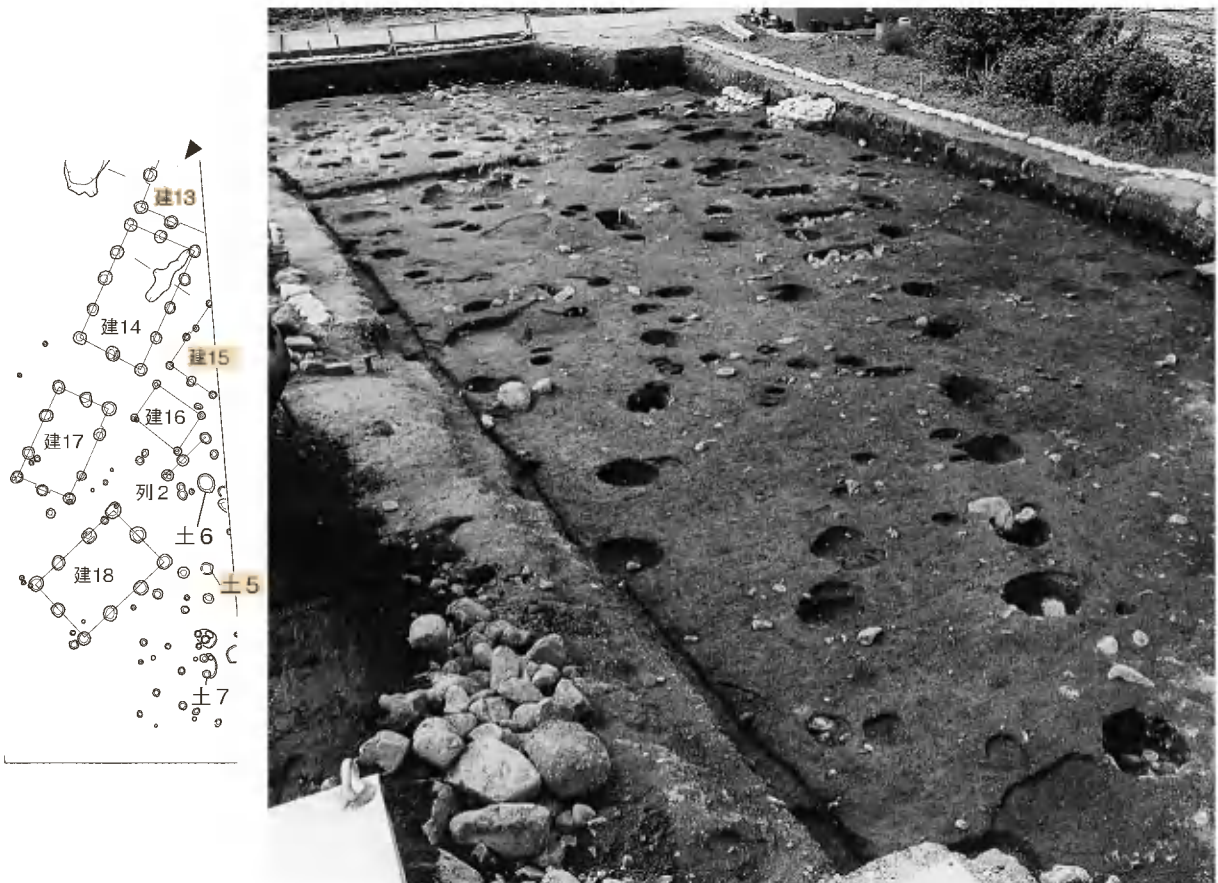
4 掘立柱建物8・10・11 (E区) (南から)



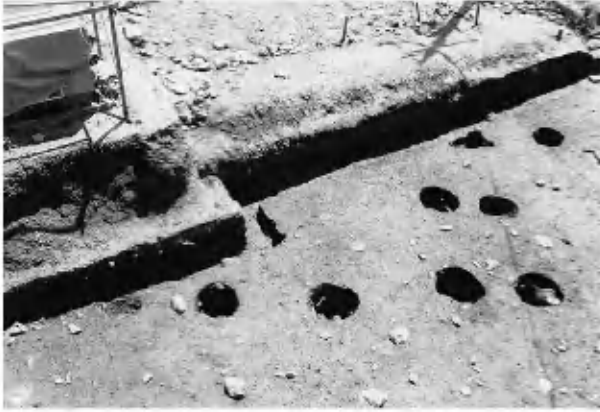
5 掘立柱建物11・12 (E区) (南から)



1 古代建物群 (D・E区) (西上空から)



2 古代建物群 (D区) (北から)



1 掘立柱建物 13 (D区) (西から)



2 掘立柱建物 17 (D区) (北から)



3 掘立柱建物 18 (D区) (北から)



4 掘立柱建物 25 (A区) (北東から)



5 火葬墓 (F区) (東から)



6 土器棺 1 (F区) (南東から)



7 土器棺 2 (F区) (南西から)



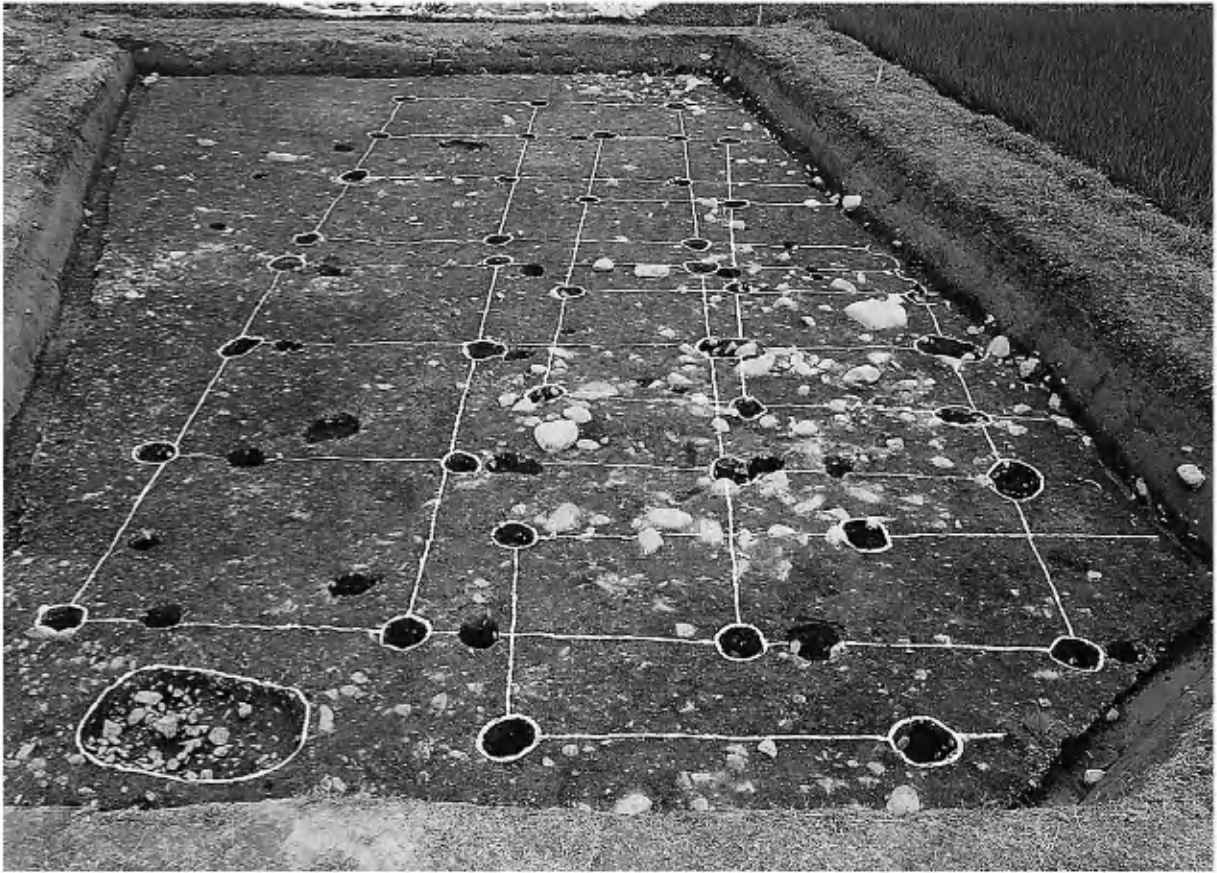
8 土器棺 3 (F区) (南から)



1 掘立柱建物 26～29 (G区) (東から)



2 掘立柱建物 34 (C区) (北東から)

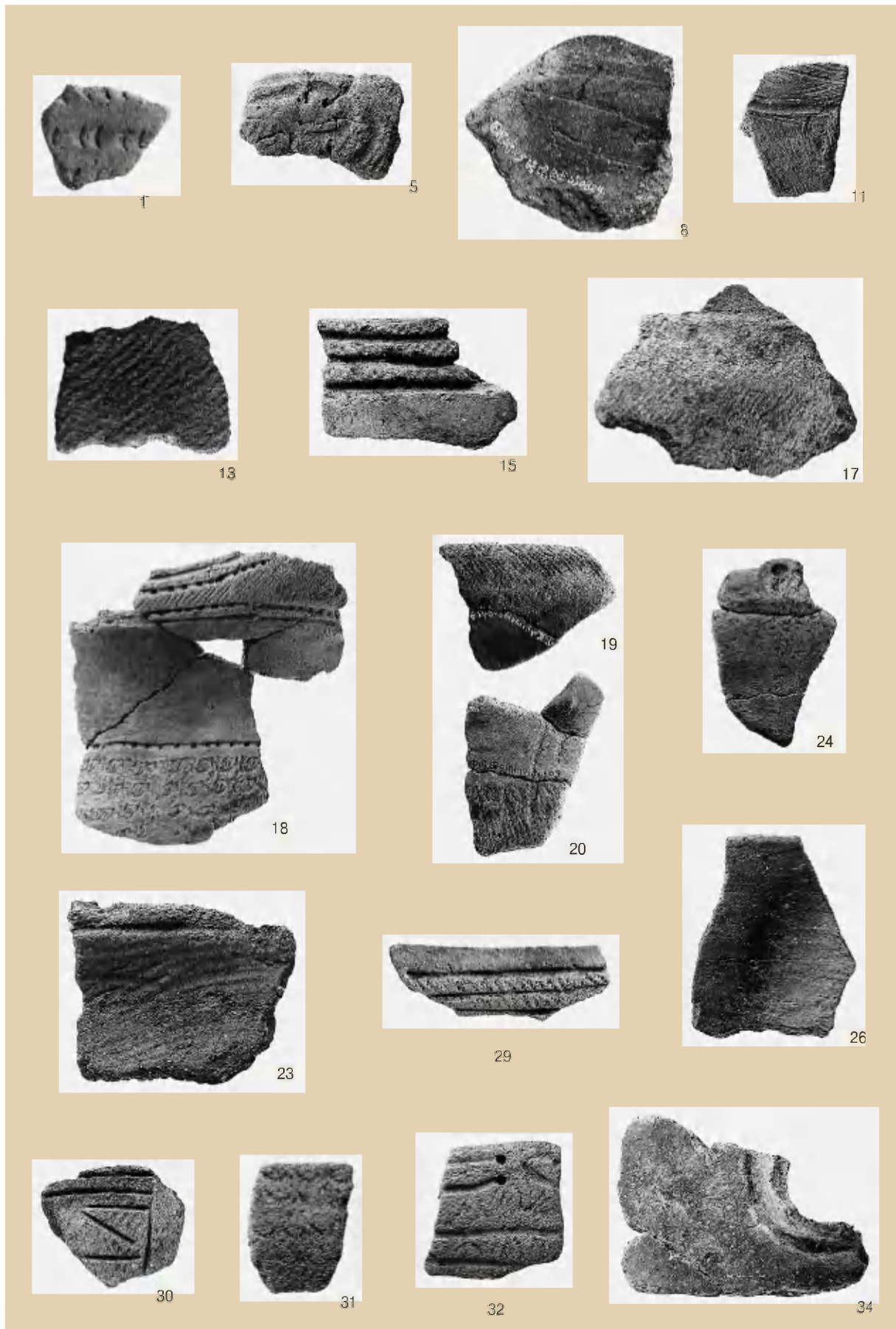


1 掘立柱建物 36～41・土壇墓 (S3区) (南から)



2 土壇墓 (S3区) (南から)





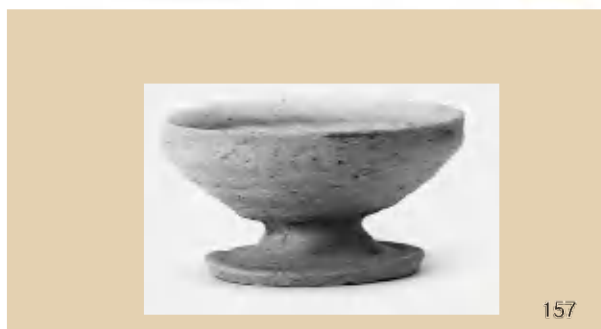
縄文土器（側道調査区）



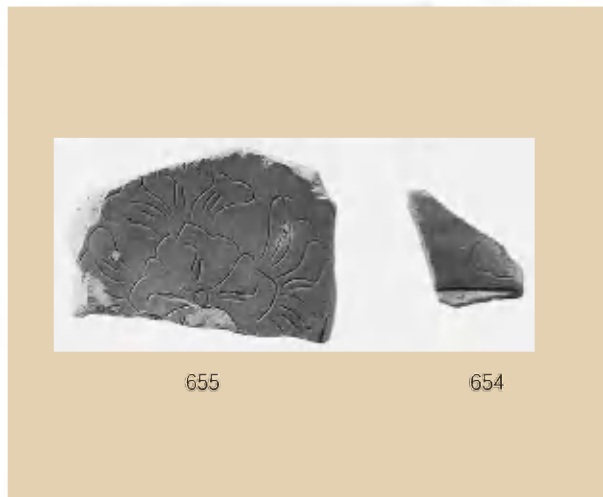
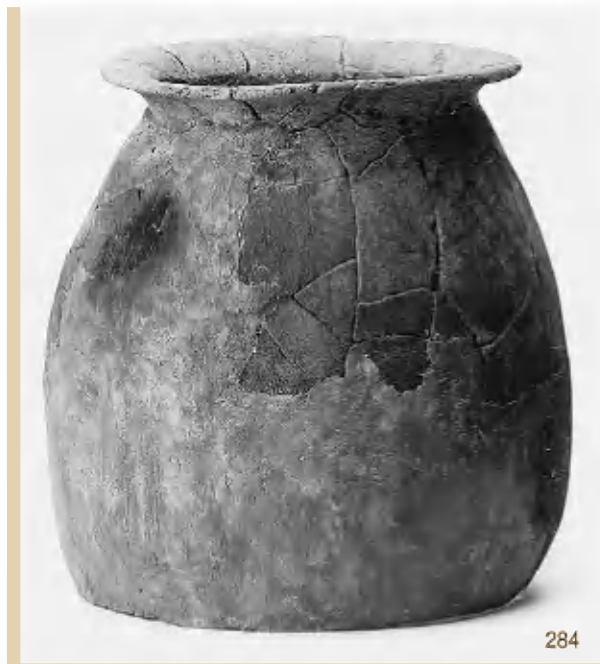
縄文土器（本線調査区）



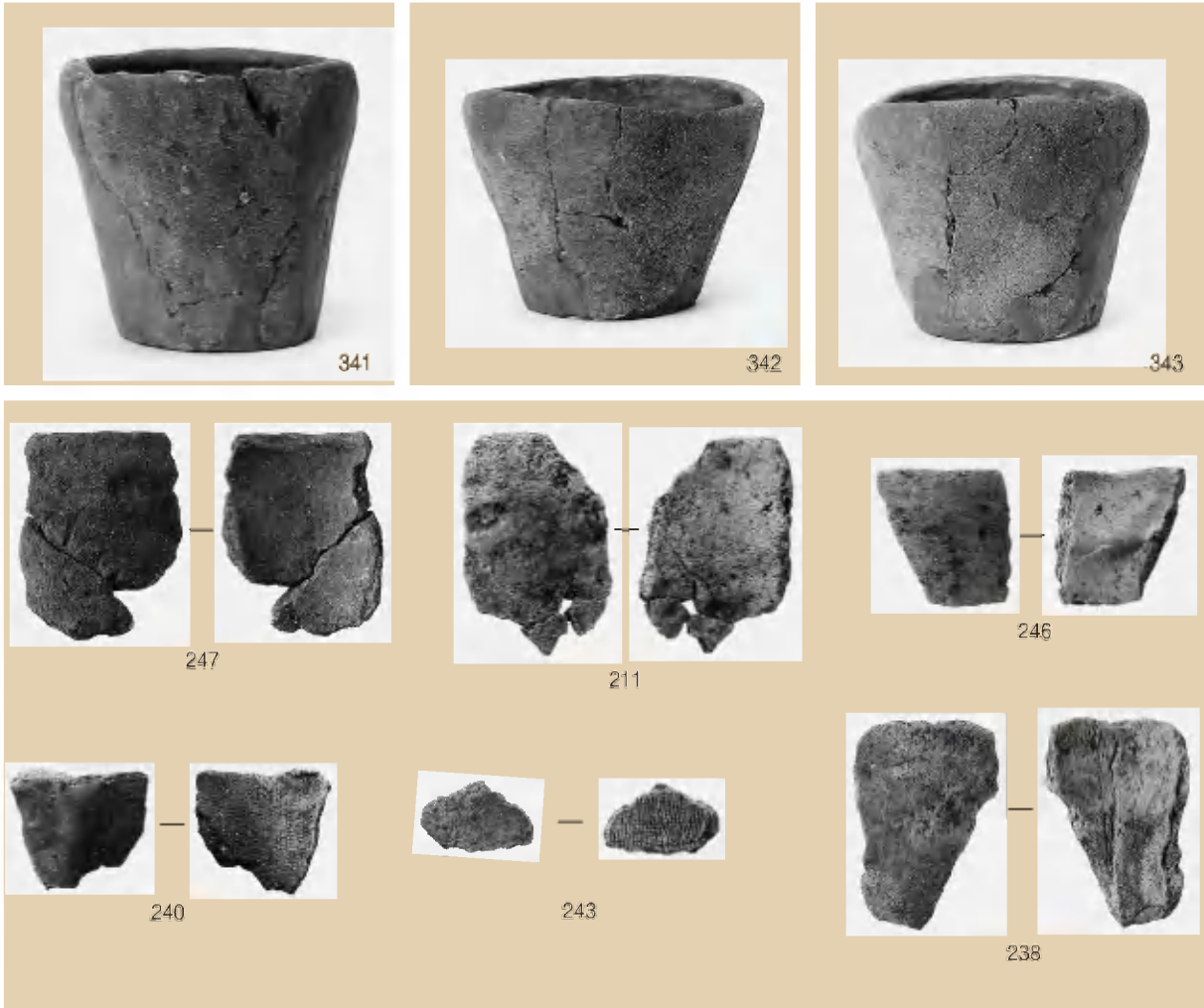
弥生土器 (壺・甕)



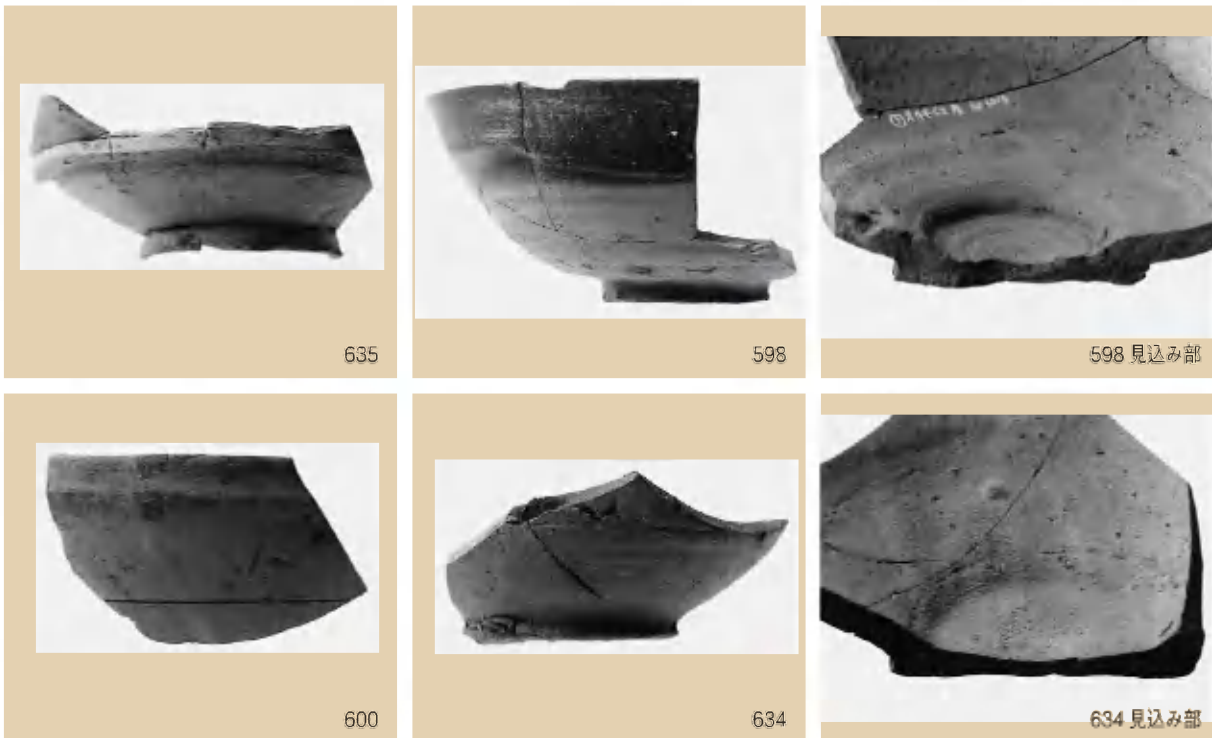
須恵器（杯蓋・杯身・壺）



土師器 (甕)・緑釉陶器 (椀)



1 焼塩土器



2 西播磨産須恵器



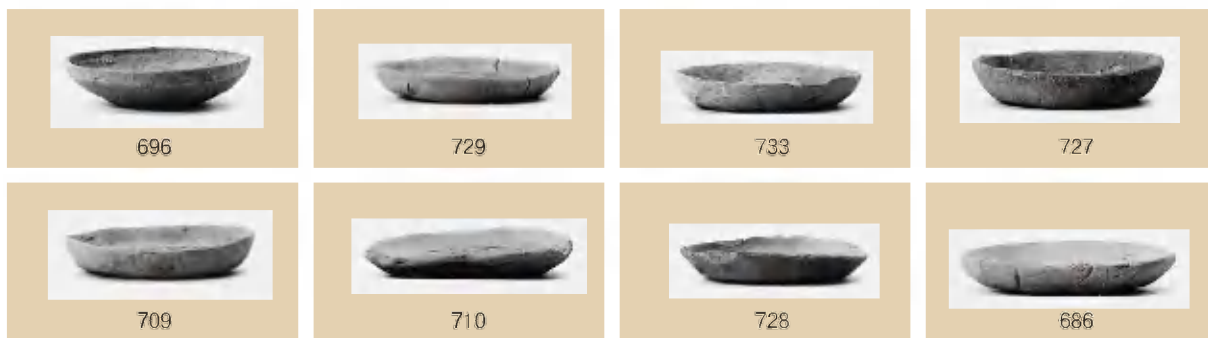
1 円面硯

2 線刻須恵器

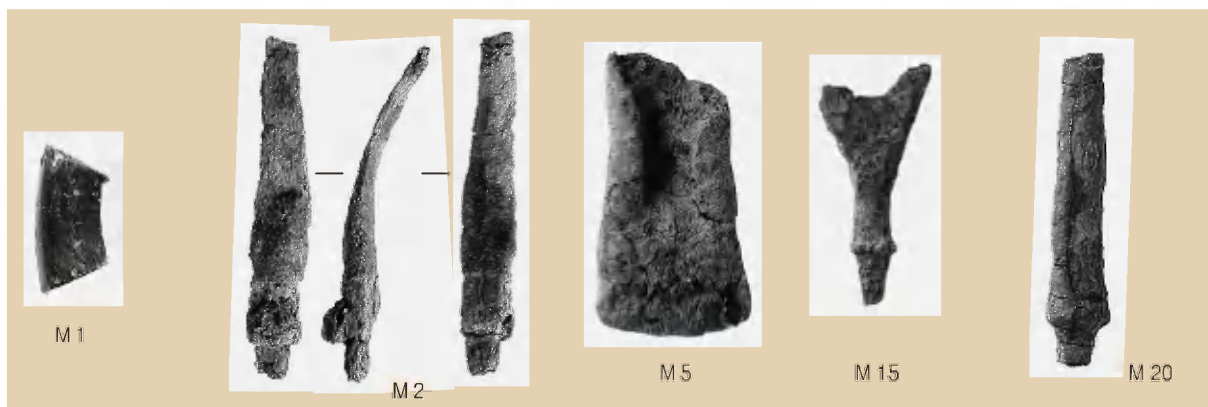


3 転用硯

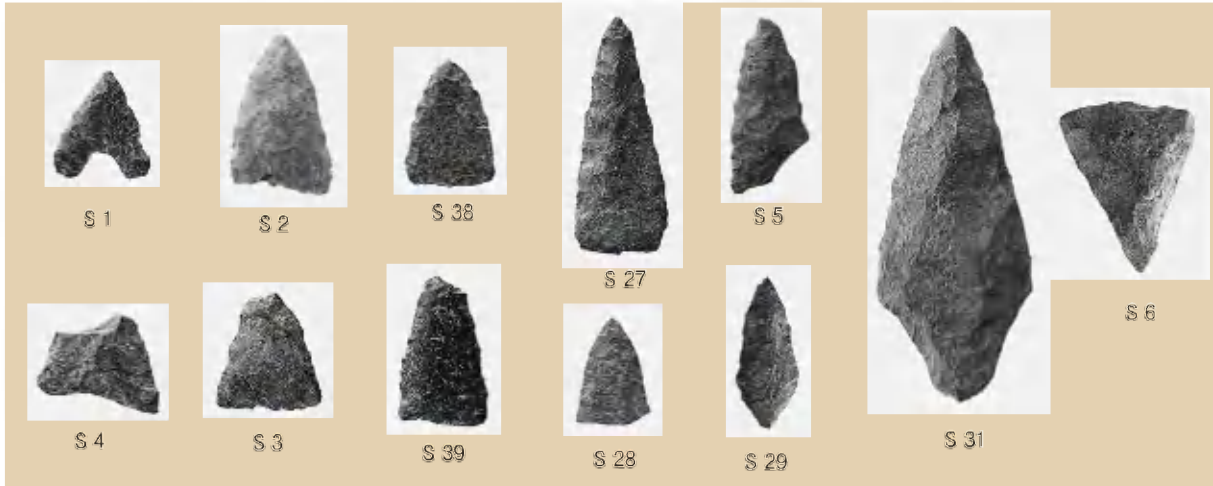
4 平瓦



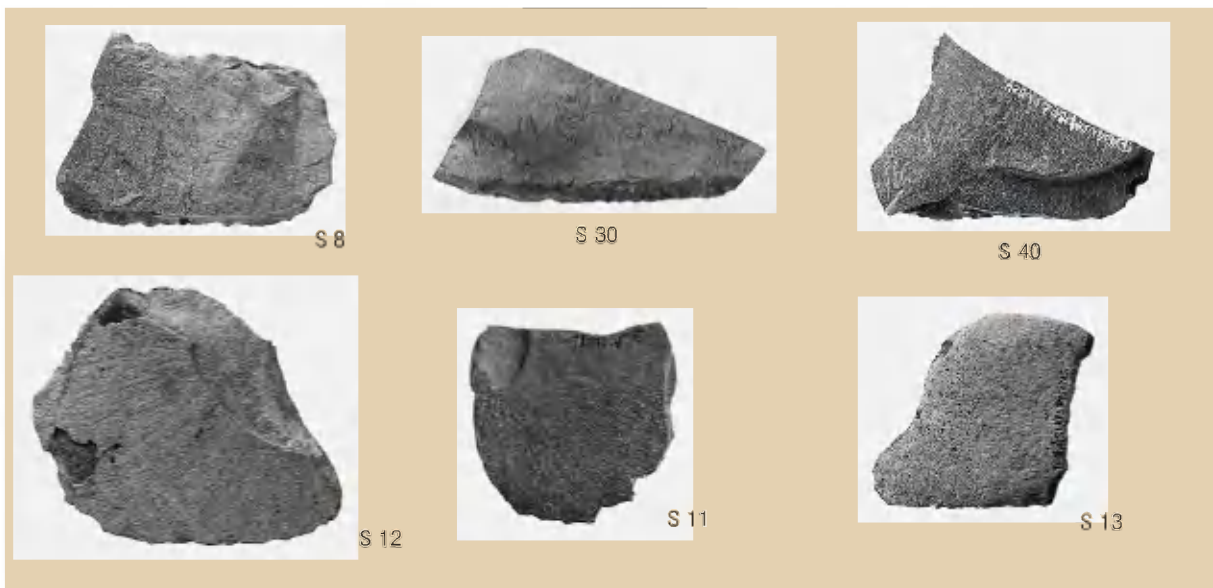
5 勝間田焼・土師器・青磁（椀・小皿）



6 金属器（破鏡・鉈・鉄斧・鉄鏃）



1 石鏃・石錐



2 スクレイパー



3 石包丁

4 石錘



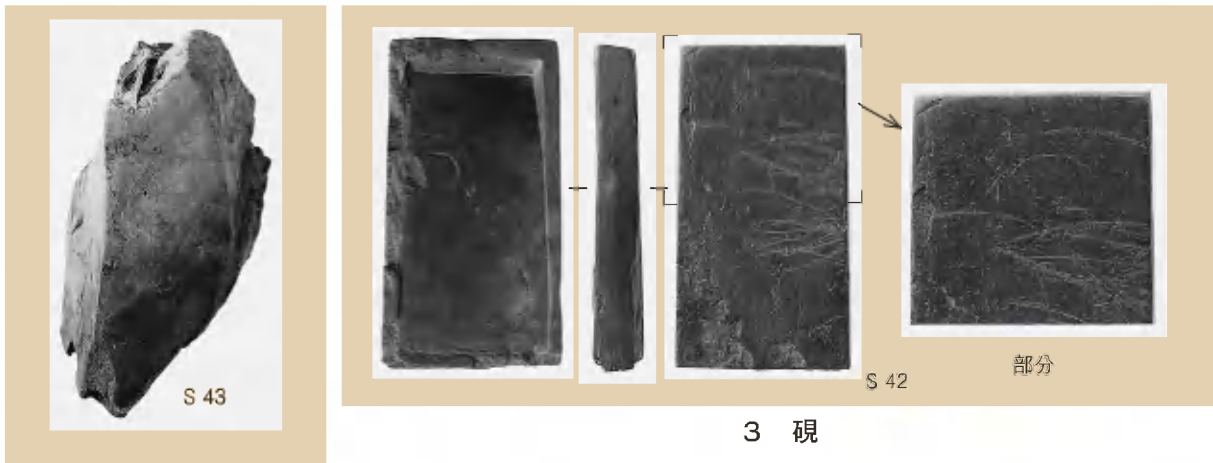


石斧

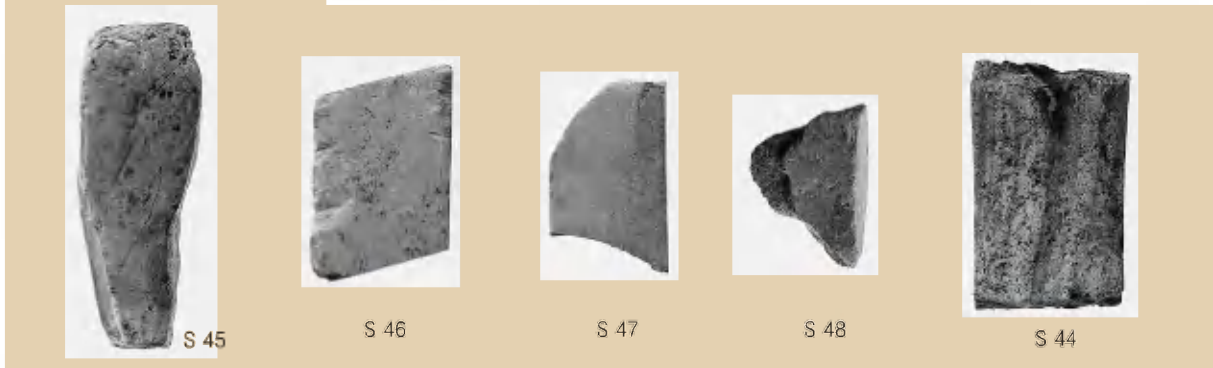


1 石鋏

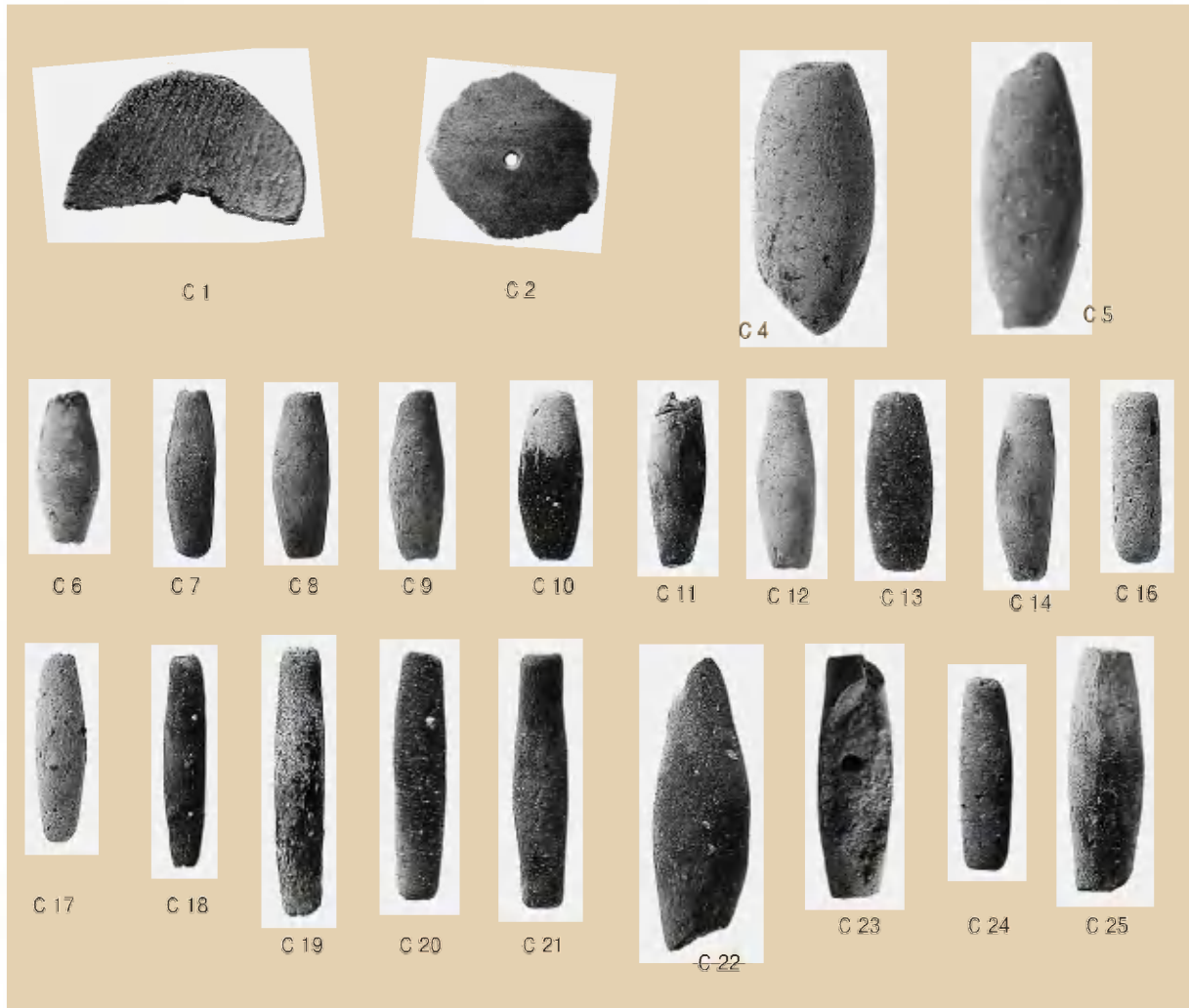
2 石帯



3 硯



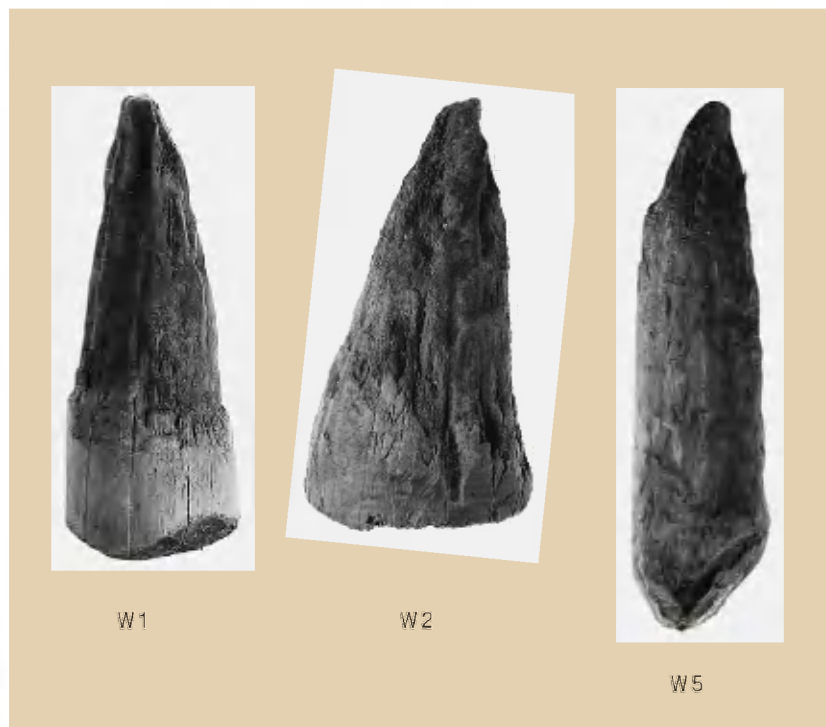
4 砥石



1 紡錘車・土錘



2 支脚



3 柱材



1 調査地遠景（南から）



2 調査地遠景（北から）



1 竪穴住居  
検出状況 (南から)



2 竪穴住居 土器出土状況 (北から)



3 竪穴住居 断面 (南から)

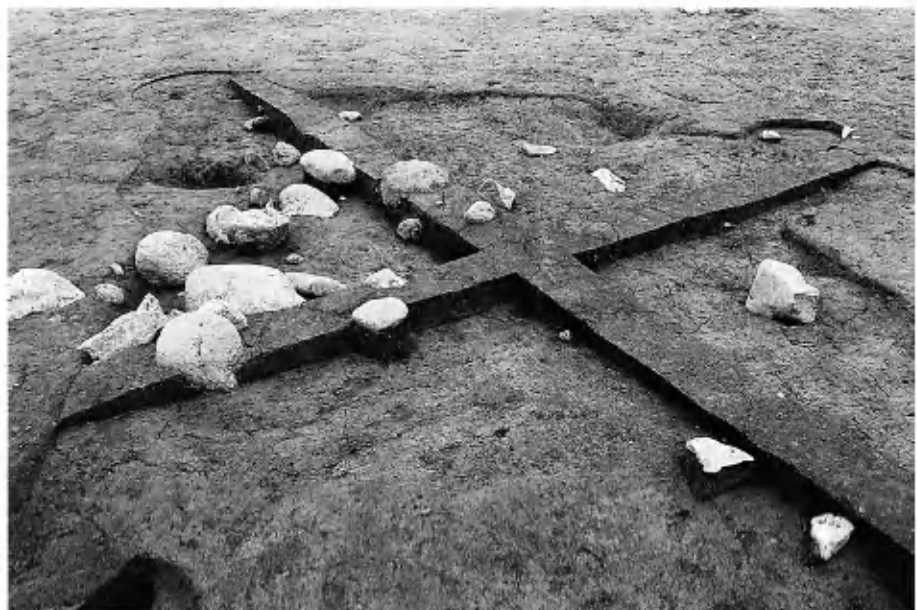
1 竪穴住居  
(北から)

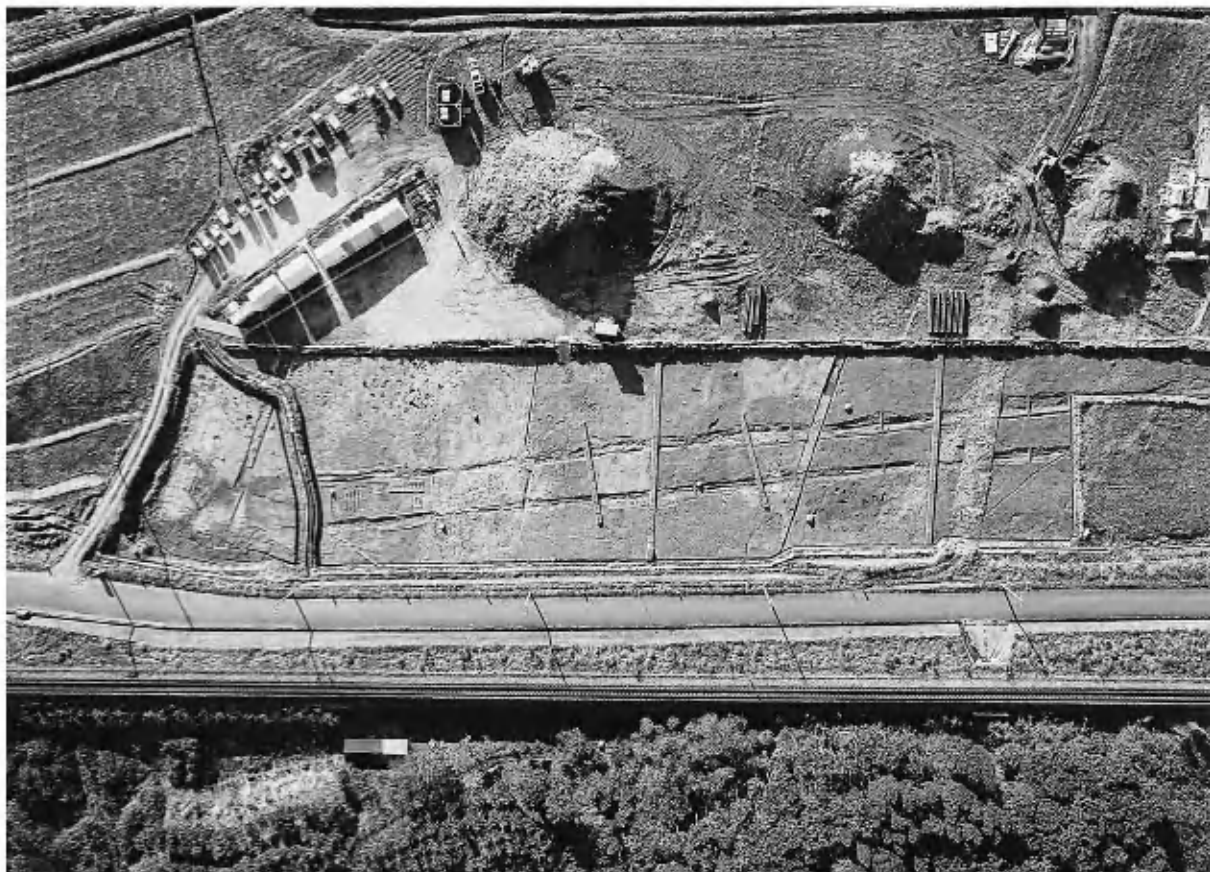


2 土壇 1 (南西から)



3 たわみ 1  
(南西から)

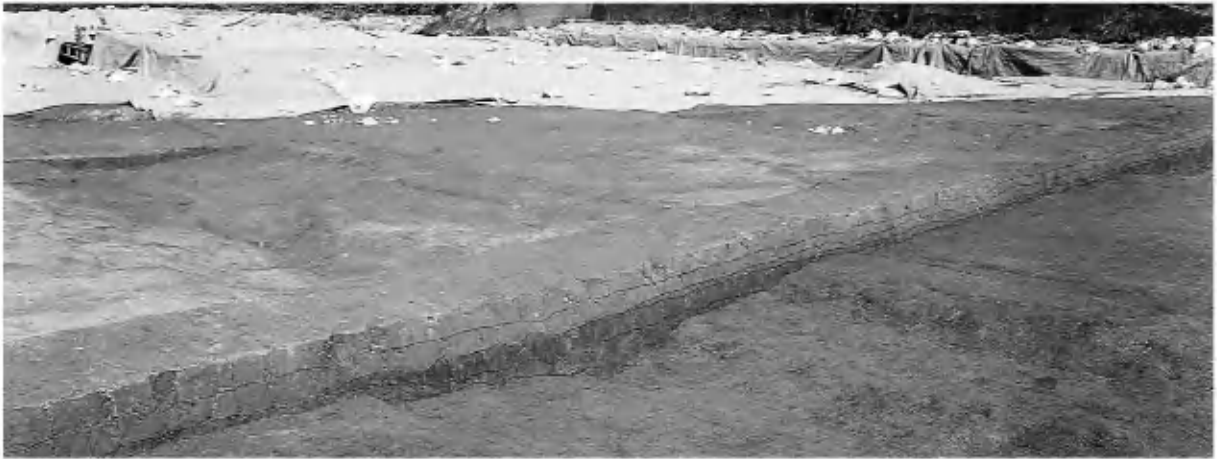




1 道路遺構全景（上空から、上が西）



2 道路遺構全景（南から）

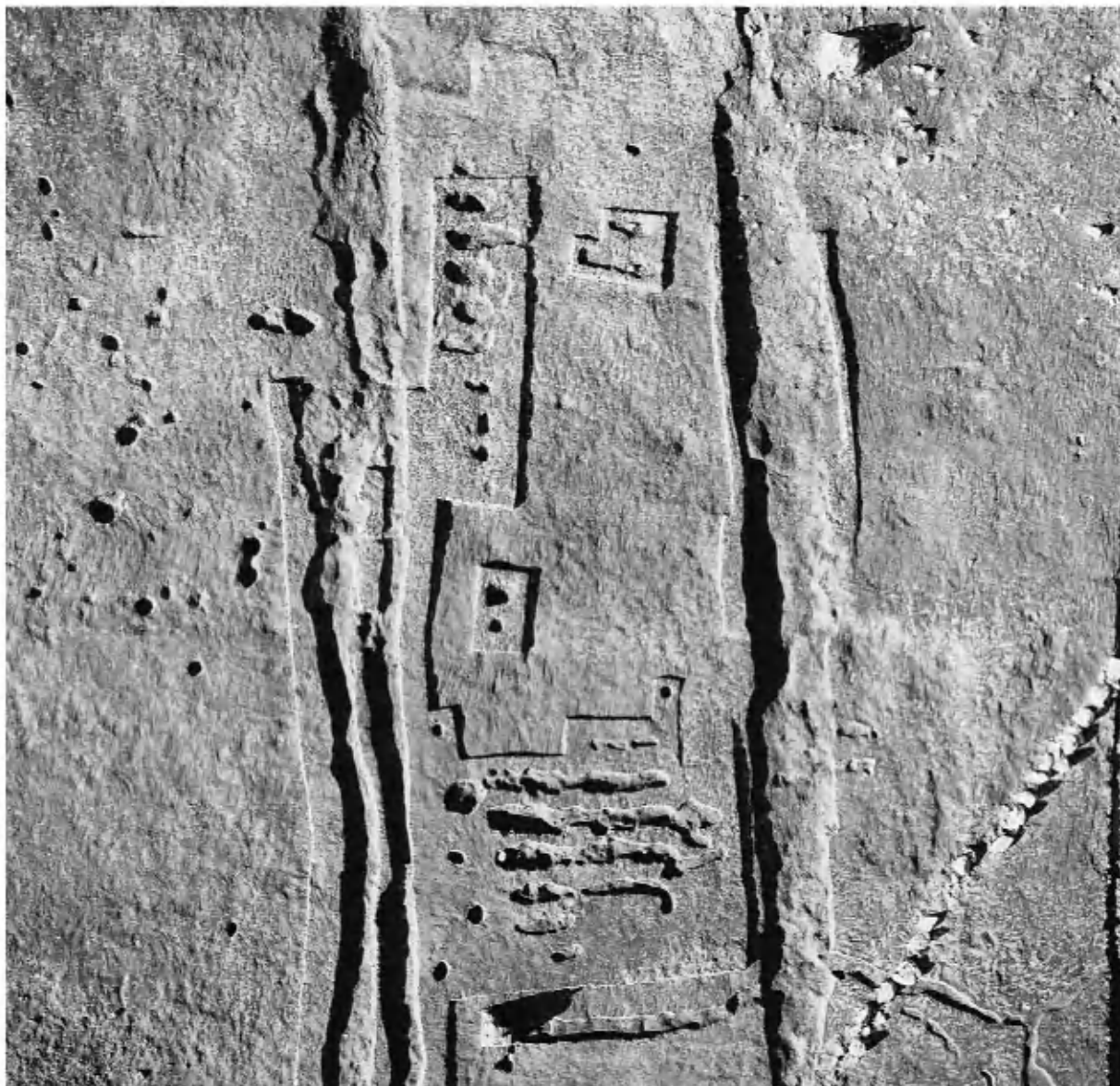


1 道路遺構 I - J 断面 (南西および南から)



2 道路遺構 K - L 断面 (南西および南から)





1 波板状凹凸面（上空から、上が北）



2 波板状凹凸面断面  
（西から）



1 側溝 3 (北西から)



2 側溝 3 柱穴検出状況 (北から)



3 側溝 3 遺物出土状況 (南から)



4 溝 2 (北西から)



1 掘立柱建物  
(南西から)



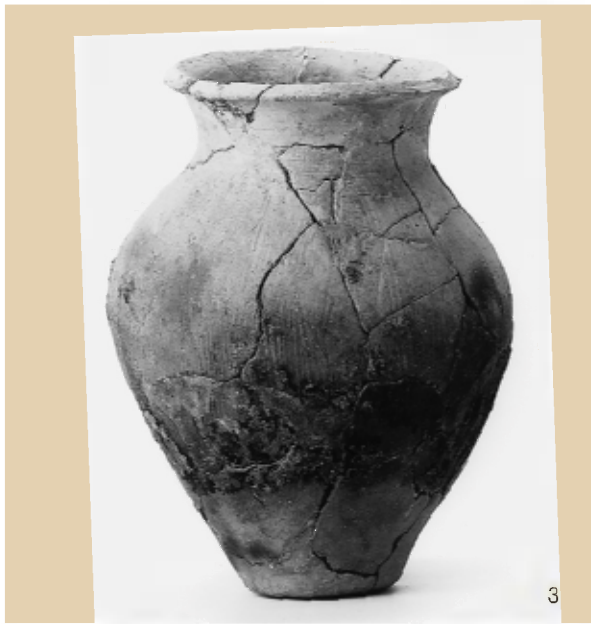
2 土壇 3 (南から)



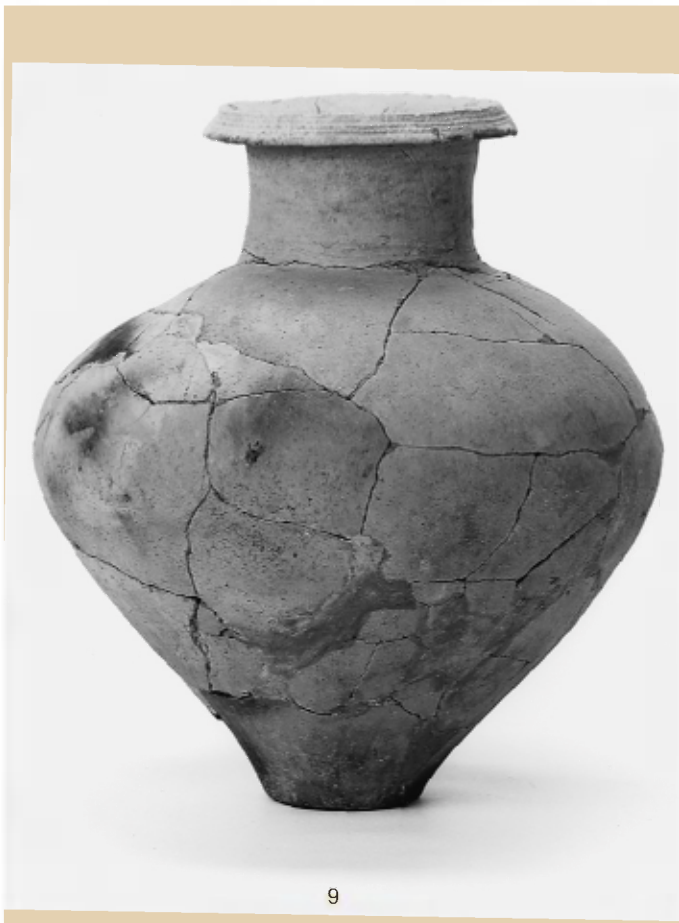
3 土壇 5 (東から)



散布地出土縄文土器



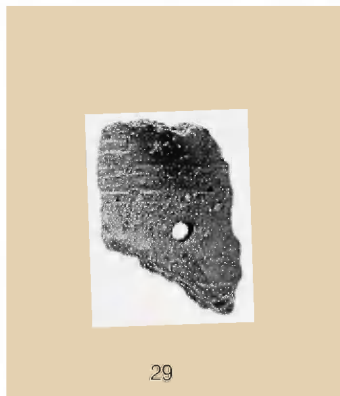
竪穴住居出土弥生土器（壺）



豎穴住居出土弥生土器（壺）



豎穴住居出土弥生土器 (甕)

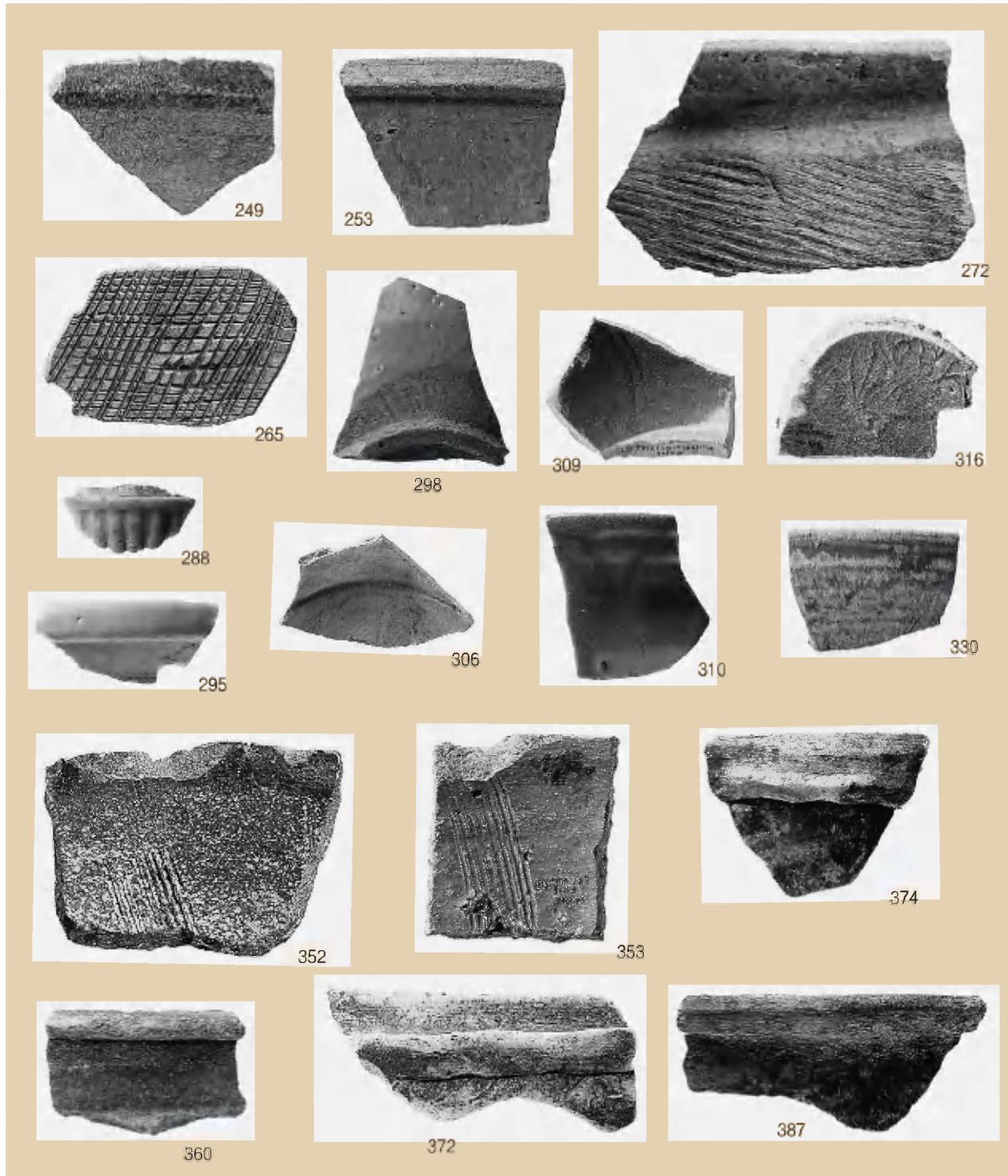


竪穴住居出土弥生土器 (甕・鉢)

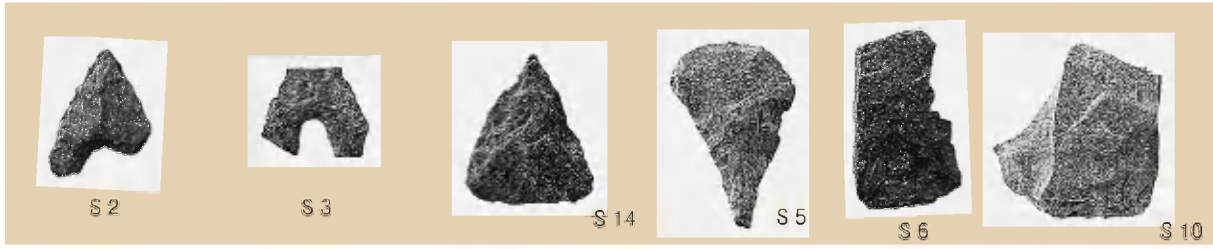




1 勝間田焼・土師器 (小皿)



2 包含層出土遺物



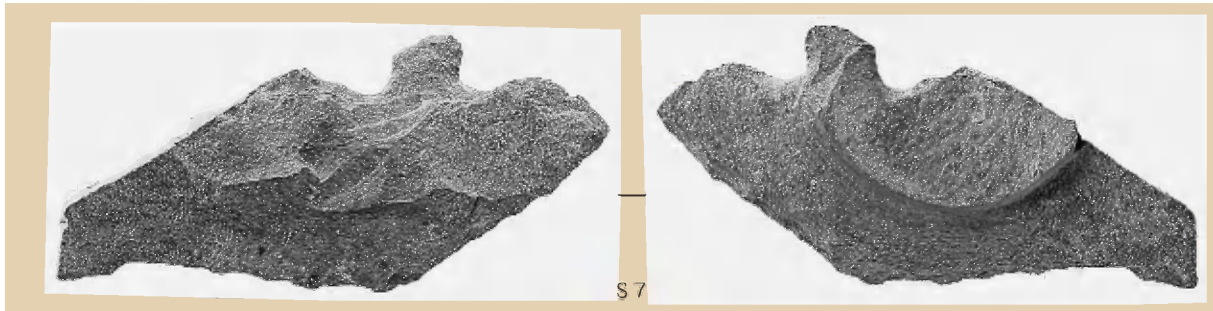
1 石鏃・石錐



2 石斧

3 石鋤

4 石錘



5 石匙



8 石皿

9 石皿と磨石



1 遺跡遠景（北東上空から）



1 竪穴住居 1・2 (北東から)



2 竪穴住居 1 中央穴 (南から)



3 竪穴住居 2 (南から)



4 竪穴住居 2 埋土断面 (北西から)



5 竪穴住居 3 (南から)



1 豎穴住居4 (西から)



2 豎穴住居5 (西から)



3 A・B群 (北から)



4 B群 埋土断面 (西から)



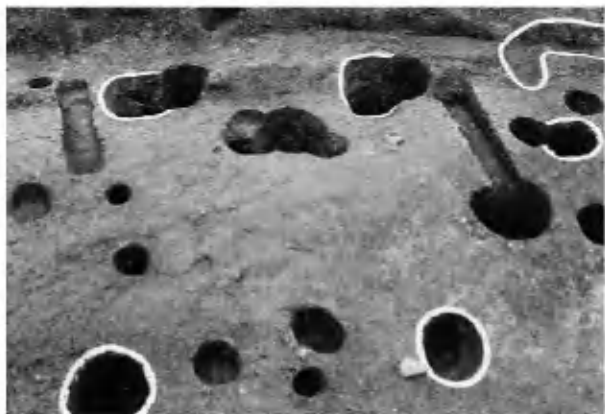
5 B群 土器出土状況 (北から)



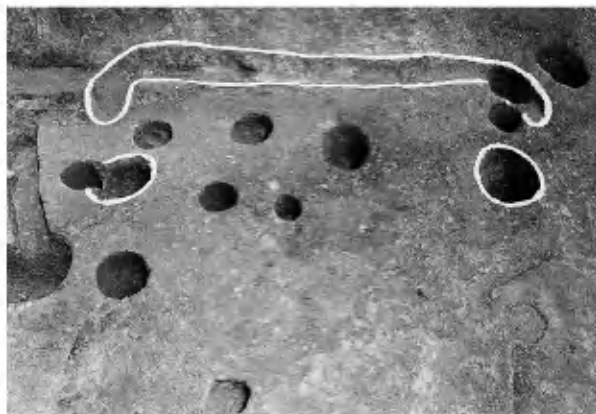
1 C・D群 (南から)



2 竪穴住居3・4・C・D群 (上空から、上が東)



1 竪穴住居 13 (西から)



2 竪穴住居 15 (西から)



3 段状遺構 1~3 (南西から)



4 段状遺構 19 埋土断面 (南から)



5 段状遺構 19 炭化材出土状況 (西から)



6 土壇 1 (南から)



7 土壇 2 (南東から)



8 土壇 3 (西から)



1 豎穴住居 5 出土弥生土器



2 土壇 2 出土弥生土器





弥生土器（壺・甕・高杯）



1 弥生土器 (高杯・鉢・器台)



2 瓦



203



197

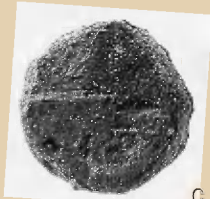


202

1 瓦



S1



C1



C2

2 土製品



M1



S4



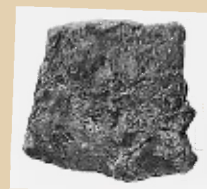
S2



S3



S5



M2

3 石器 (鏃・石包丁・砥石)

4 鉄器



1 調査地全景（北上空から）



2 古墳全景（南東から）



1 墳丘内石列（南西から）



2 東側石列（南東から）



1 西側石垣状石列（北西から）



2 西側基礎石列（北西から）



石室調査過程（北東から）



1 石室床面検出状況 (西から)



2 東側壁持ち送り状況 (南から)



3 東側壁持ち送り状況 (北から)





1 遺物出土状況（西から）



2 奥壁側遺物出土状況（西から）



3 遺物出土状況（西から）



1 北東角遺物出土状況（南西から）



2 袖部遺物出土状況（北西から）



1 閉塞施設（南から）



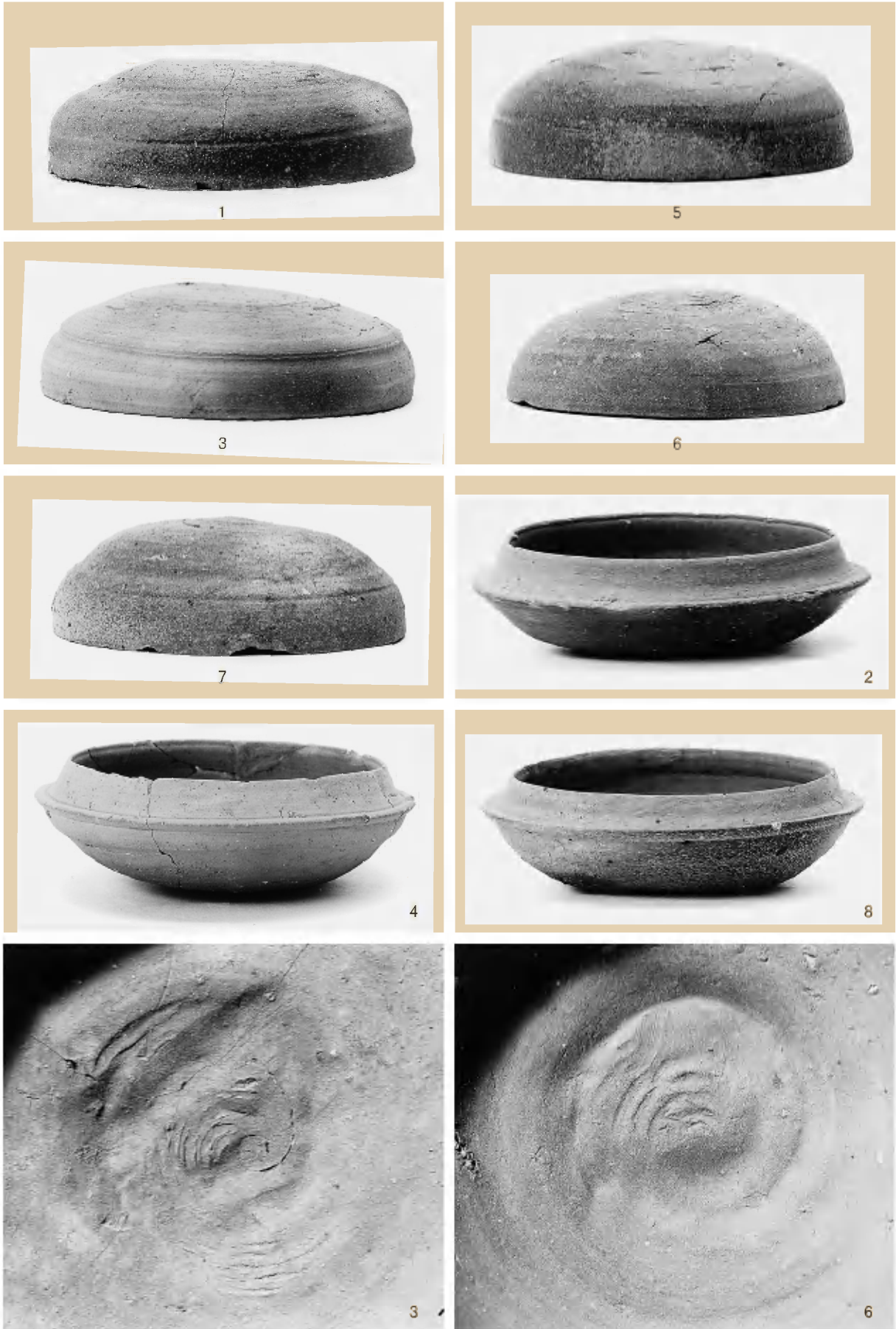
2 閉塞施設（北から）



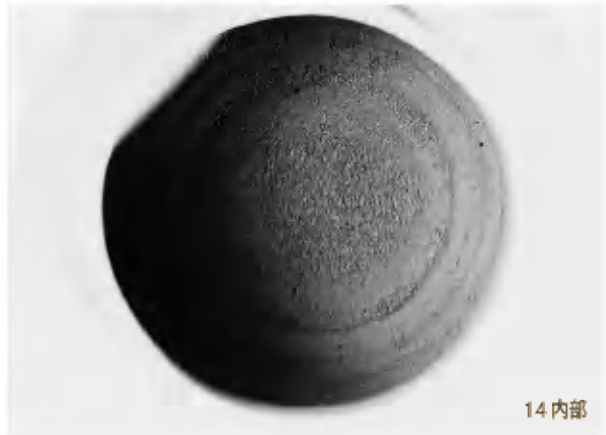
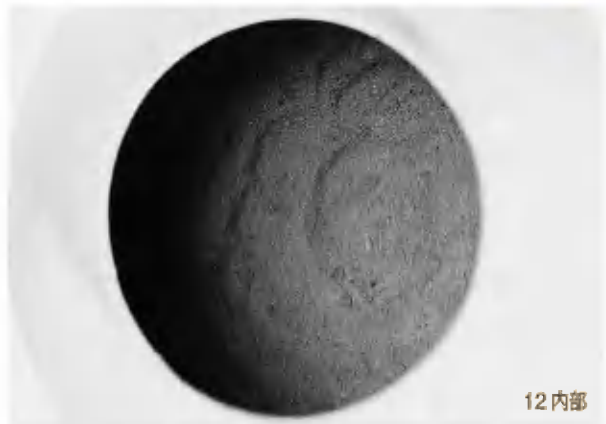
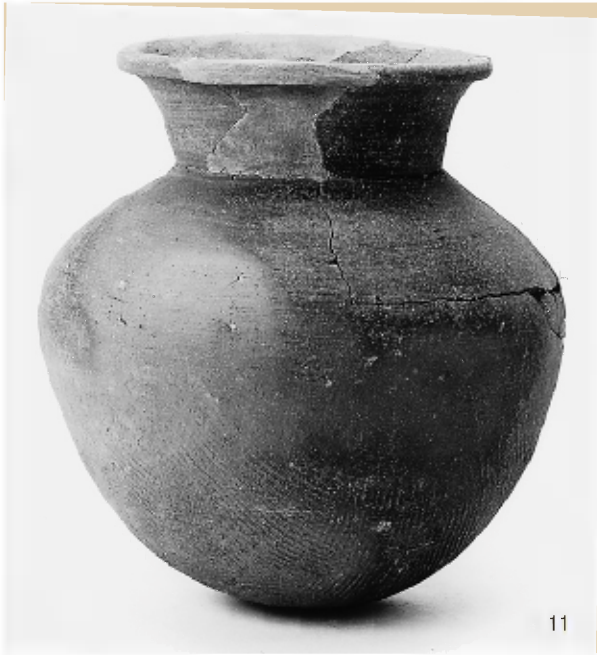
1 羨道部（南から）



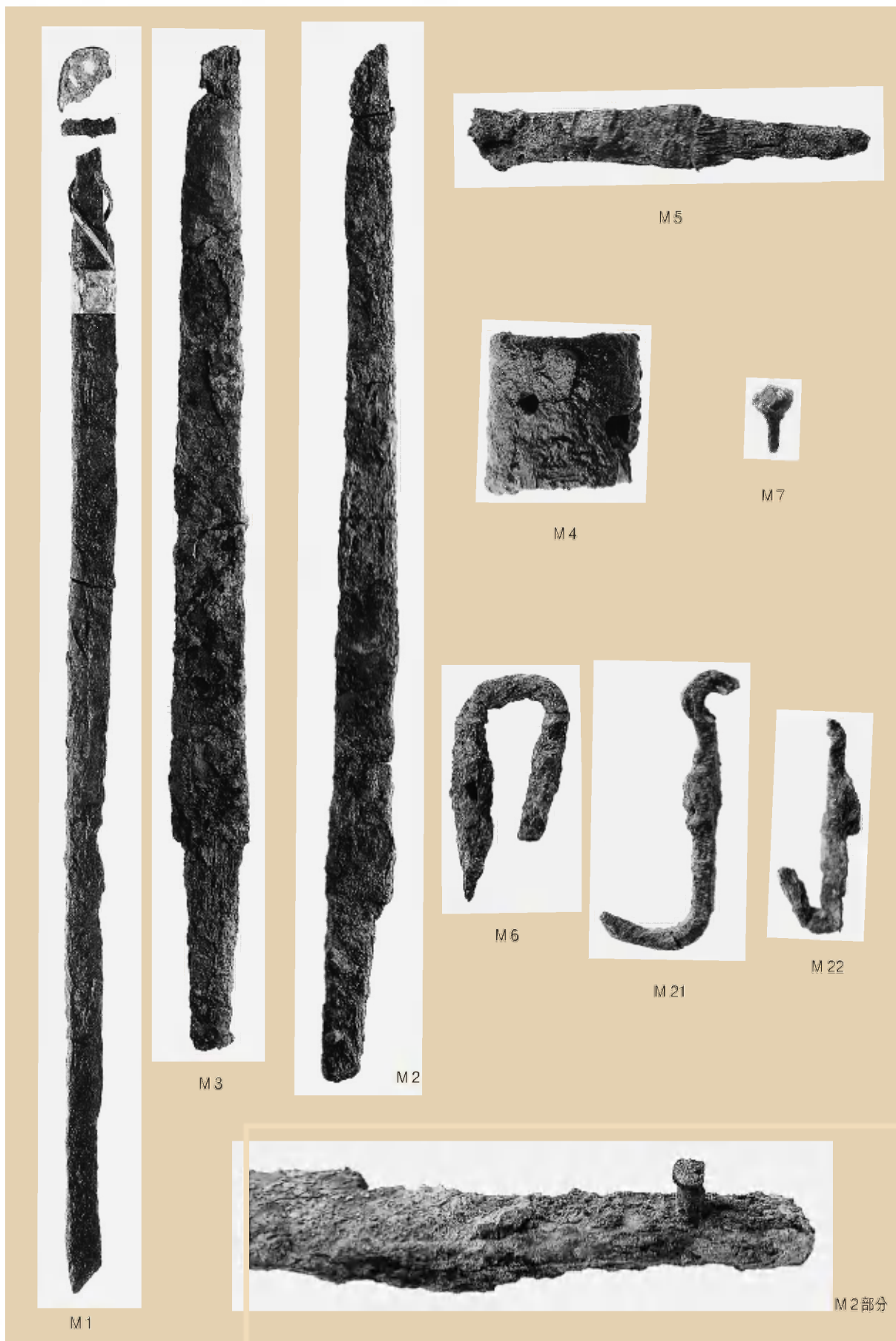
2 羨道部（北から）



須恵器 (杯身・杯蓋)



須恵器 (広口壺・短頸壺・高杯)



鉄器 (大刀・刀子・鋤・鋌・馬具)



M1

1 銀装円頭大刀柄部



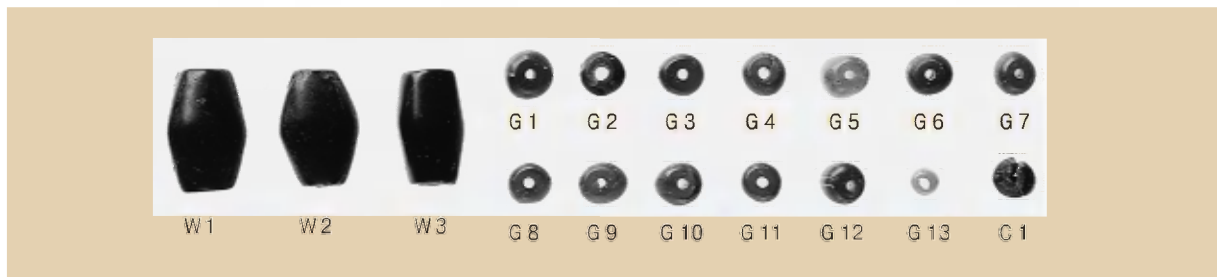
M1

2 銀装円頭大刀柄部





1 鉄鏃



2 装身具



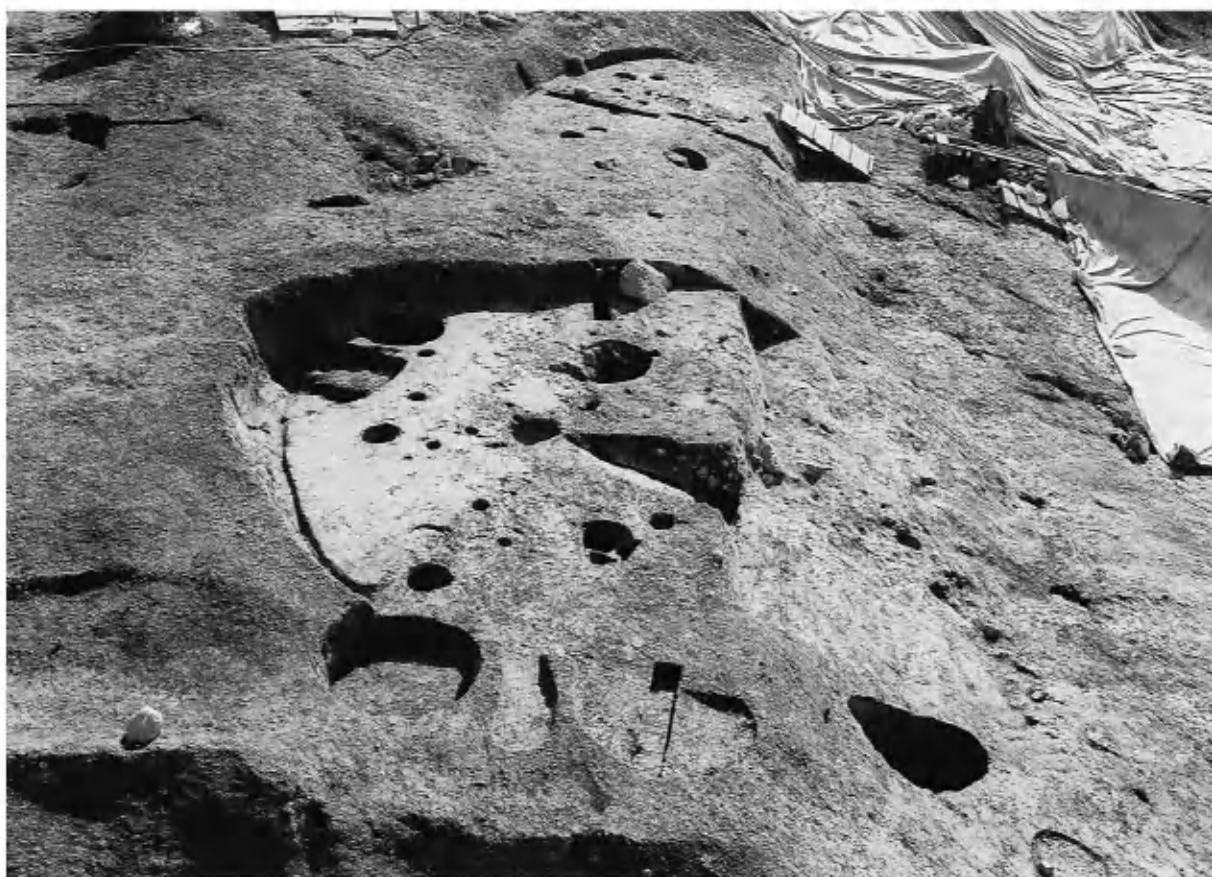
1 調査地遠景（南東上空から）



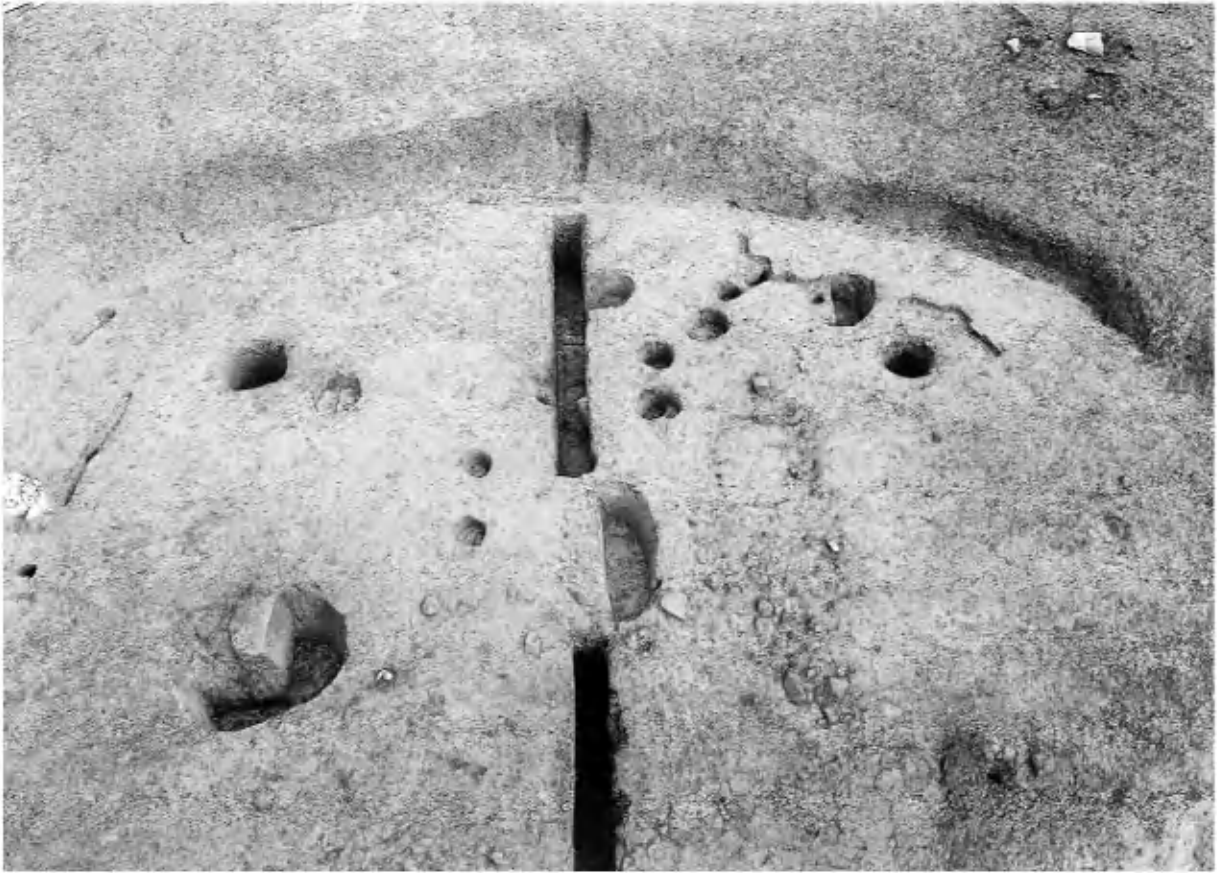
2 調査地全景（上空から、上が北）



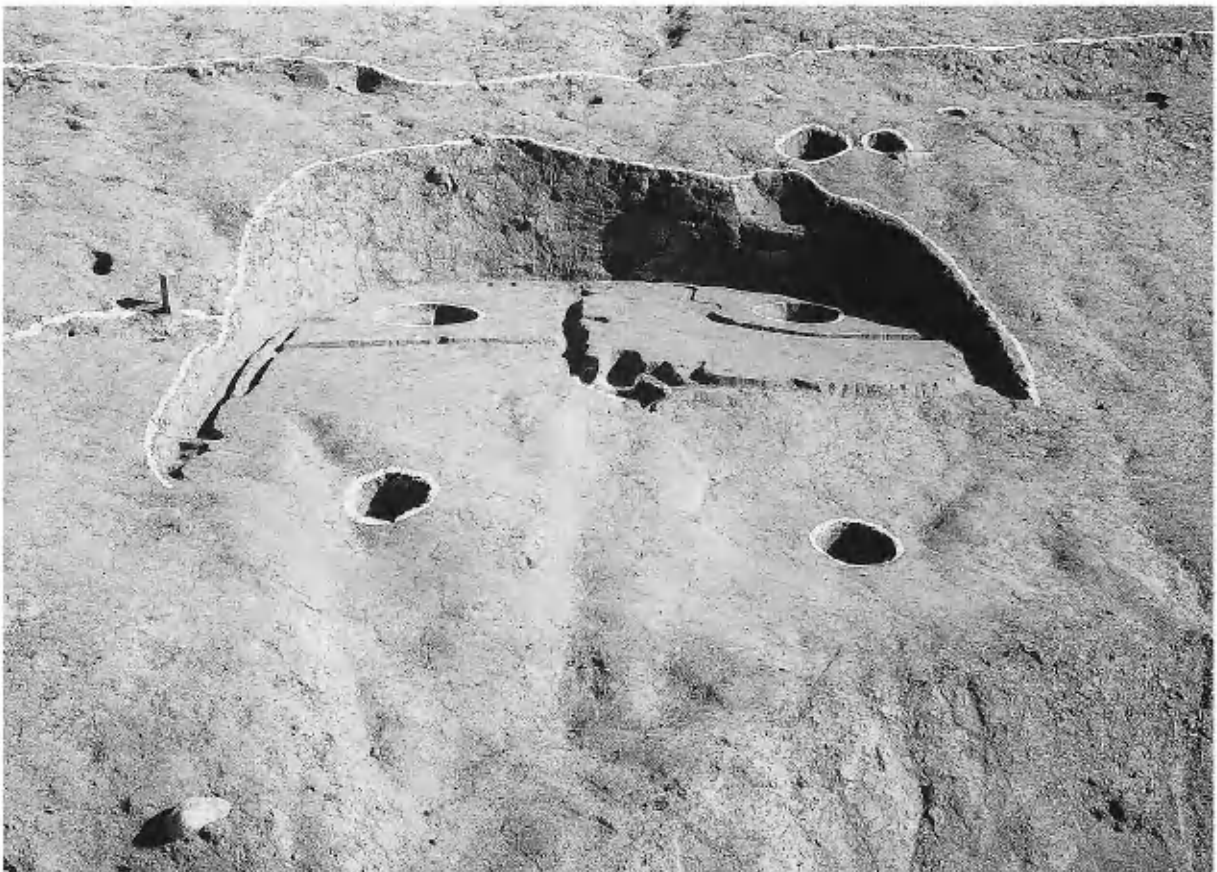
1 豎穴住居 1 (西から)



2 豎穴住居 2 (西から)



1 竪穴住居 3 (南から)



2 竪穴住居 7 (南から)



1 豎穴住居4・5・段状遺構4・土壇5（南から）



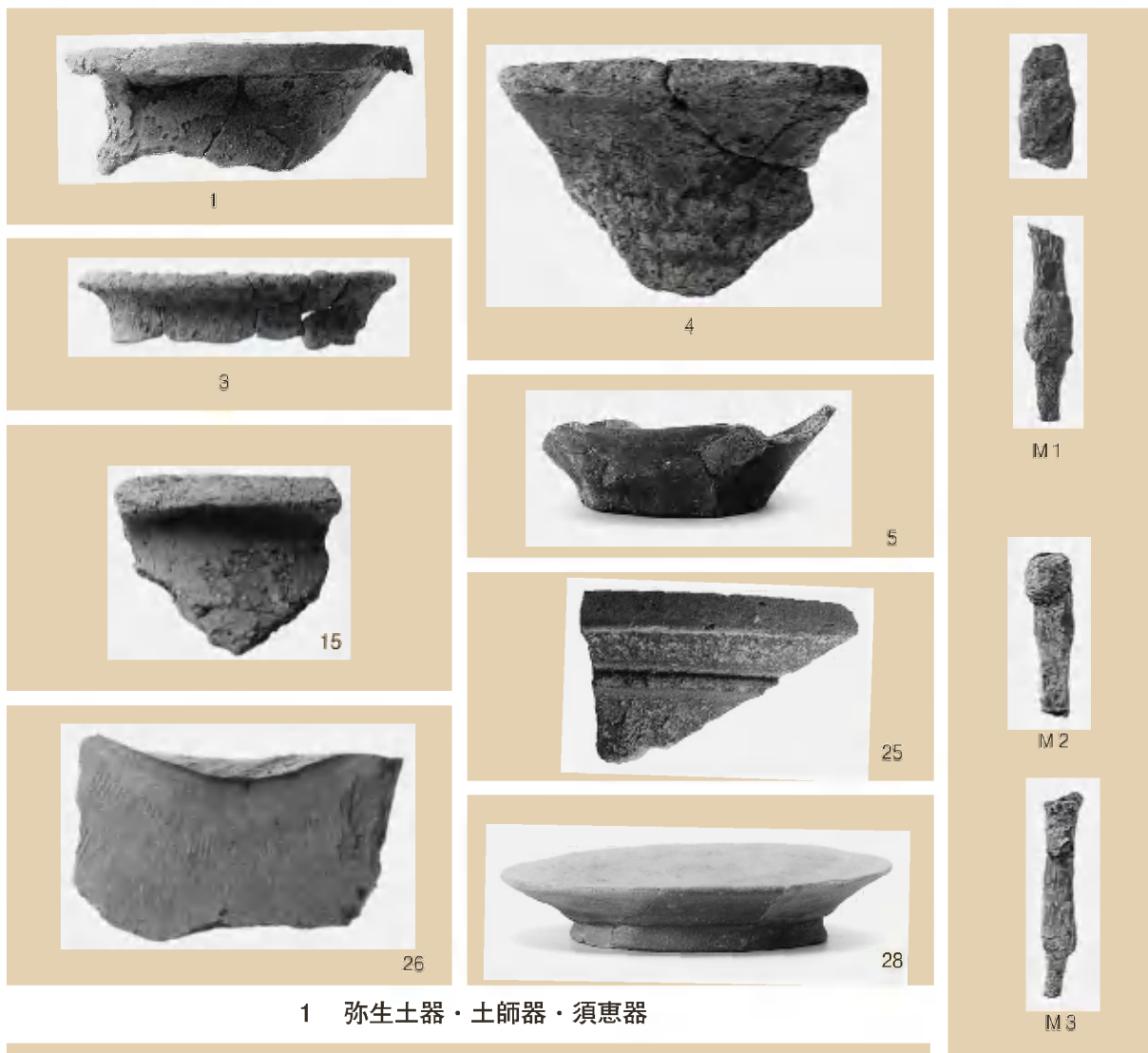
2 豎穴住居5（南から）



1 竪穴住居7・段状遺構6~8・掘立柱建物（西から）

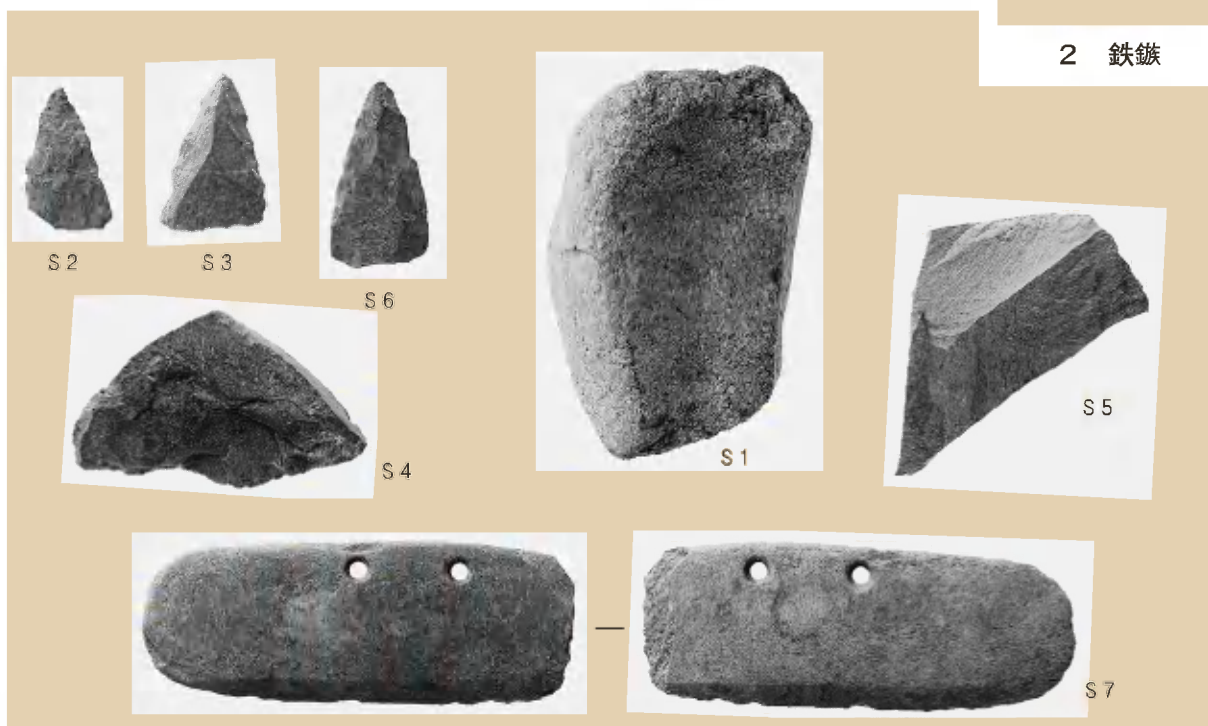


2 段状遺構1・2（西から）



1 弥生土器・土師器・須恵器

2 鉄鏃



3 石器 (鏃・台石・石包丁)

1 調査地全景  
(北西から  
：竹山城跡より)



2 調査地近景  
(南東から)







1 調査区全景  
(南から)



2 調査区南半全景 (北から)



1 竪穴住居 1・2 (南西から)



2 竪穴住居 1 中央穴 I-J 断面 (南東から)



3 竪穴住居 2 P1 断面 (東から)



4 竪穴住居 2 遺物出土状況 (北西から)



5 竪穴住居 2 鉄鏃出土状況 (南東から)



1 段状遺構 1 (南西から)



2 段状遺構 2・3 (南西から)



1 段状遺構 2～5  
(北から)



2 段状遺構 1・2・5  
E－F断面  
(北から)



1 段状遺構 5 遺物出土状況 (南西から)



2 段状遺構 5 遺物出土状況 (北西から)



1 段状遺構5 中央部遺物出土状況 (西から)



2 段状遺構5 北端部遺物出土状況 (北西から)



1 竪穴住居 3・4 (南西から)



2 竪穴住居 4 (南西から)



3 竪穴住居 4 遺物出土状況 (南東から)



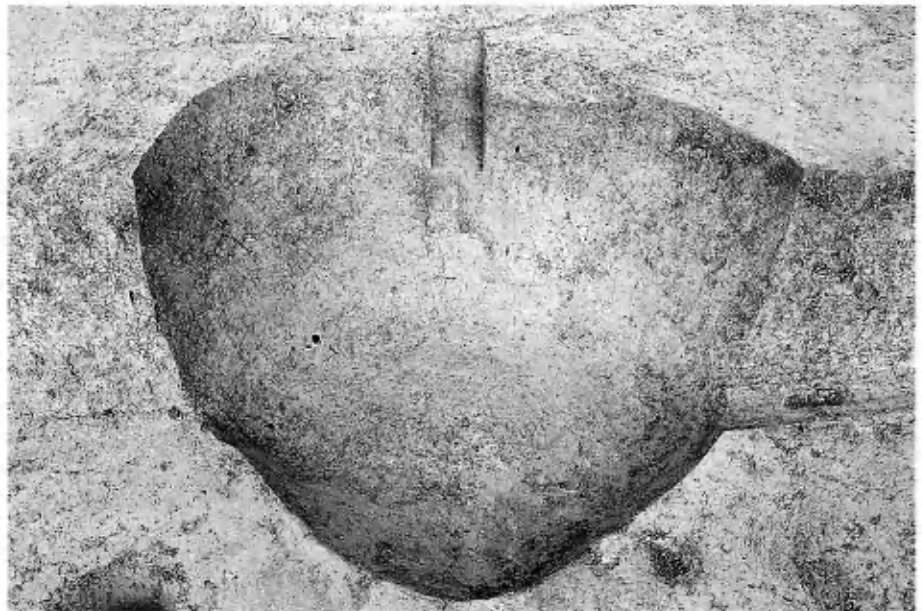
4 竪穴住居 4 (南西から)



5 石積み (南東から)



1 土壇 1 (西から)



2 土壇 2 (西から)



3 土壇 3 (西から)





1



13



2



14



10

1 豎穴住居 2 出土遺物 (弥生土器)

2 段状遺構 2 出土遺物 (弥生土器)



18

3 段状遺構 4 出土遺物 (弥生土器)

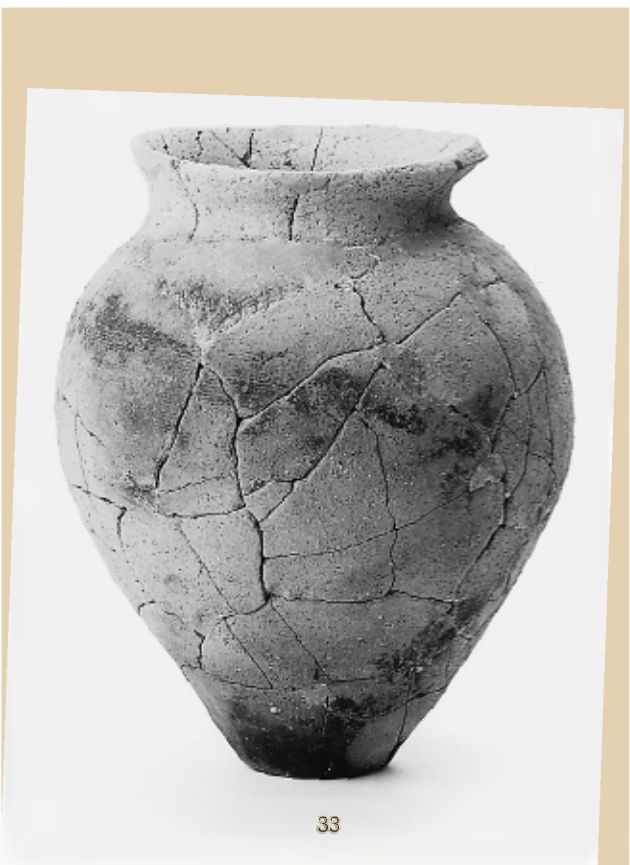


20

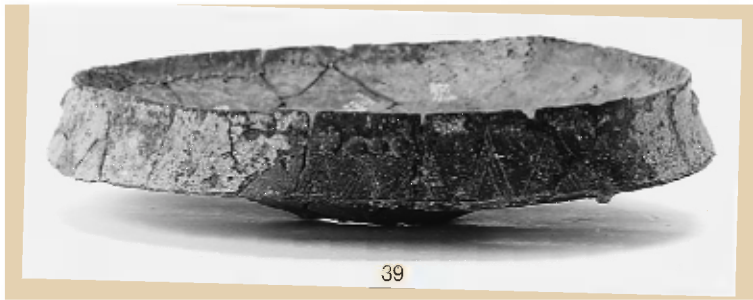


21

4 段状遺構 5 出土遺物① (弥生土器)



段状遺構 5 出土遺物② (弥生土器)



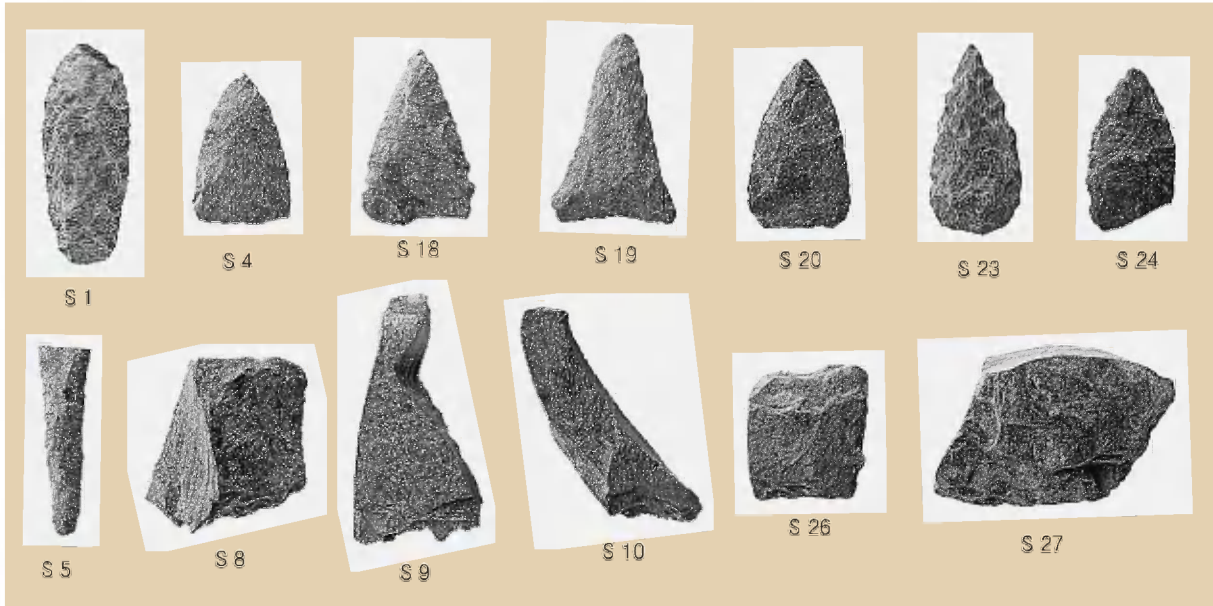
段状遺構 5 出土遺物③ (弥生土器)



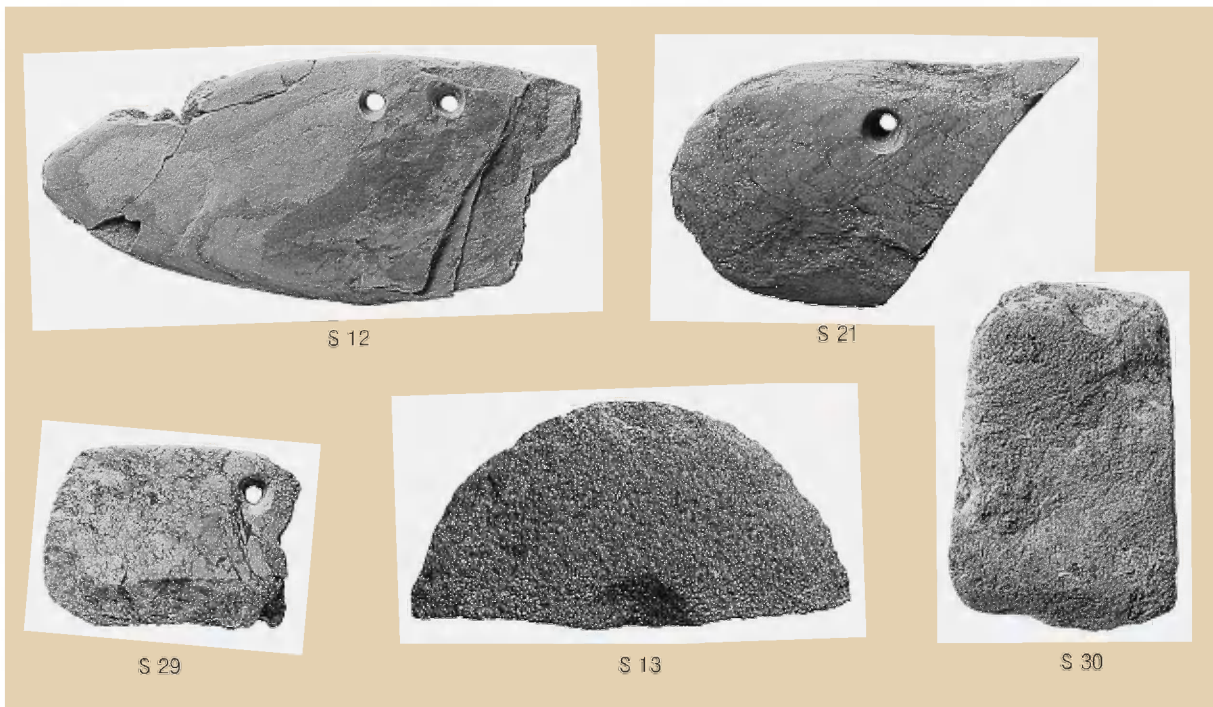
段状遺構 5 出土遺物④ (弥生土器)



段状遺構 5 出土遺物⑤ (弥生土器)



1 打製石器 (鏃・錐)



2 磨製石器 (石包丁・斧)



3 砥石

4 鉄鏃



1 豎穴住居 3・4 出土遺物 (土師器・須恵器)



2 近世墓出土遺物 (簪・錢貨・鉄釘)



1 今岡7号墳（西から）

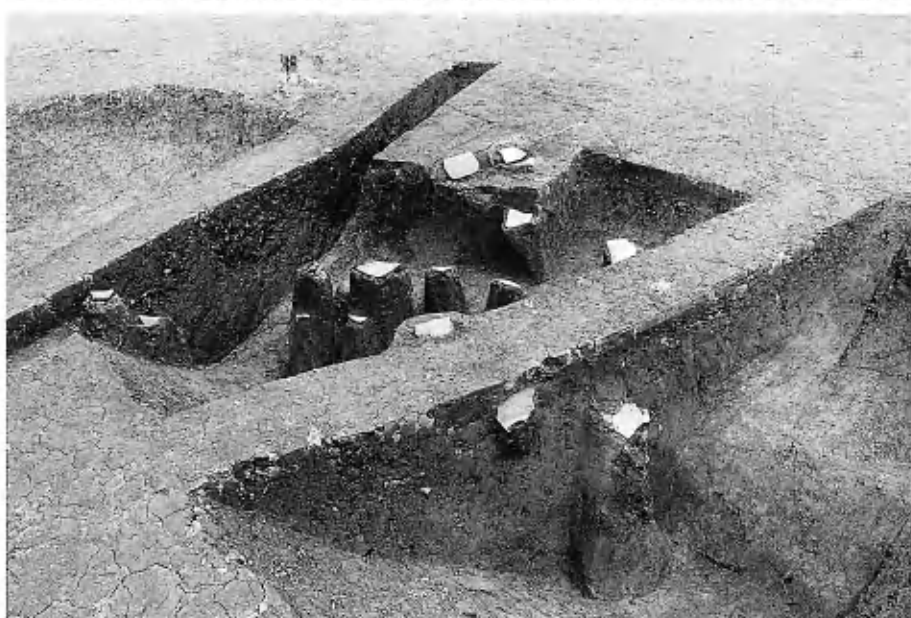


2 今岡7号墳（北西から）





1 今岡7号墳  
石室基底部  
(西から)



2 今岡7号墳  
周溝遺物出土状況  
(南東から)



3 今岡8号墳 周溝  
(西から)

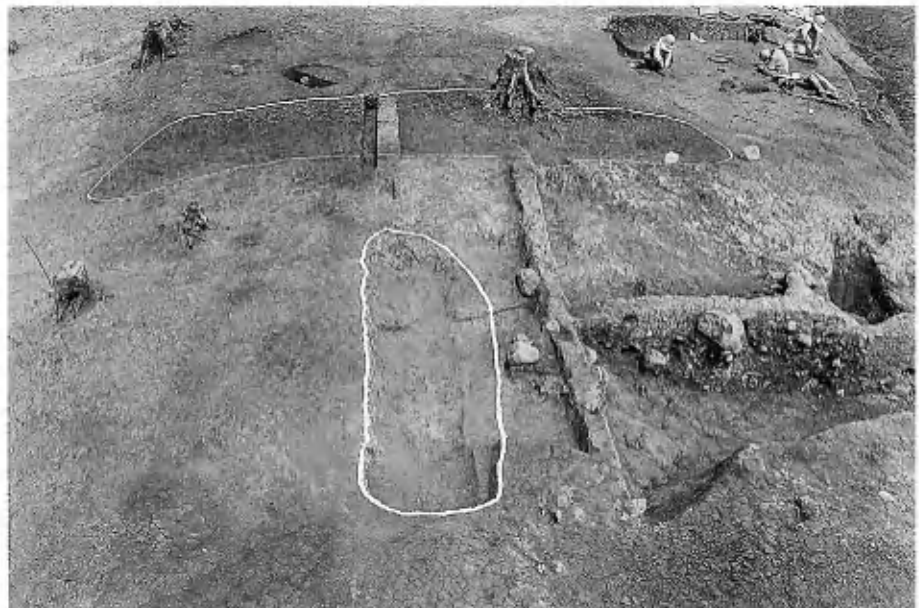
1 今岡9号墳  
(東から)



2 今岡9号墳 主体部  
(北から)



3 今岡10号墳  
(西から)

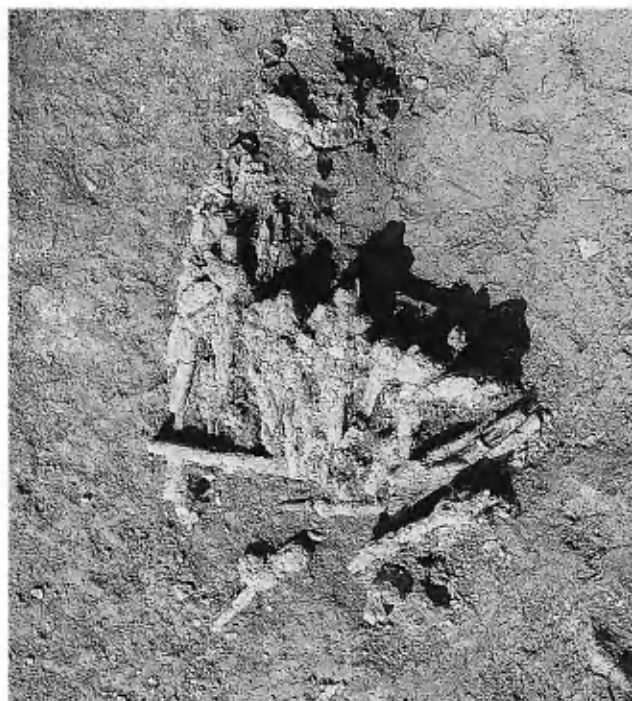




1 今岡 10 号墳 主体部 (東から)



2 今岡 10 号墳 遺物出土状況 (東から)



3 今岡 10 号墳 鉄鏃出土状況 (西から)



1 今岡 11・12 号墳 (南西から)



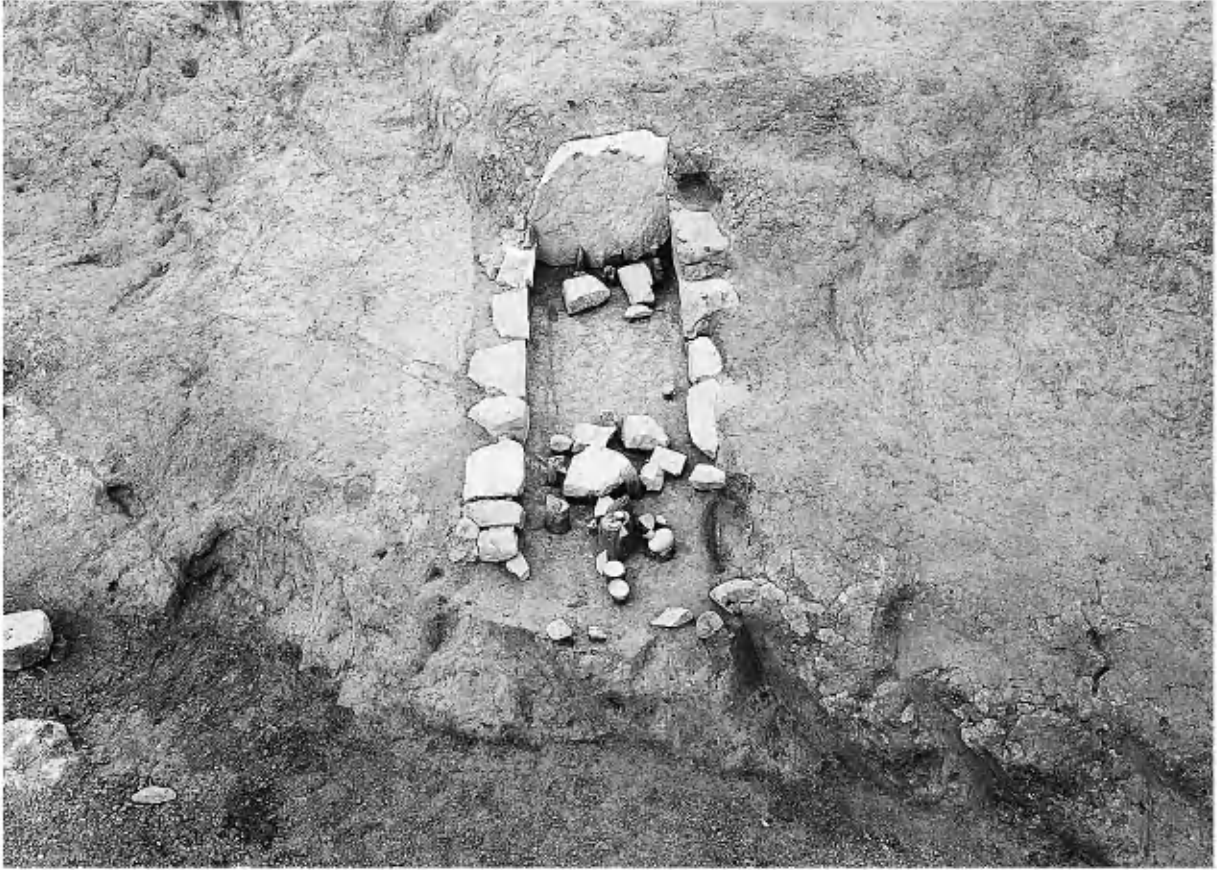
2 今岡 11 号墳 (南から)



1 今岡 11 号墳 (南から)



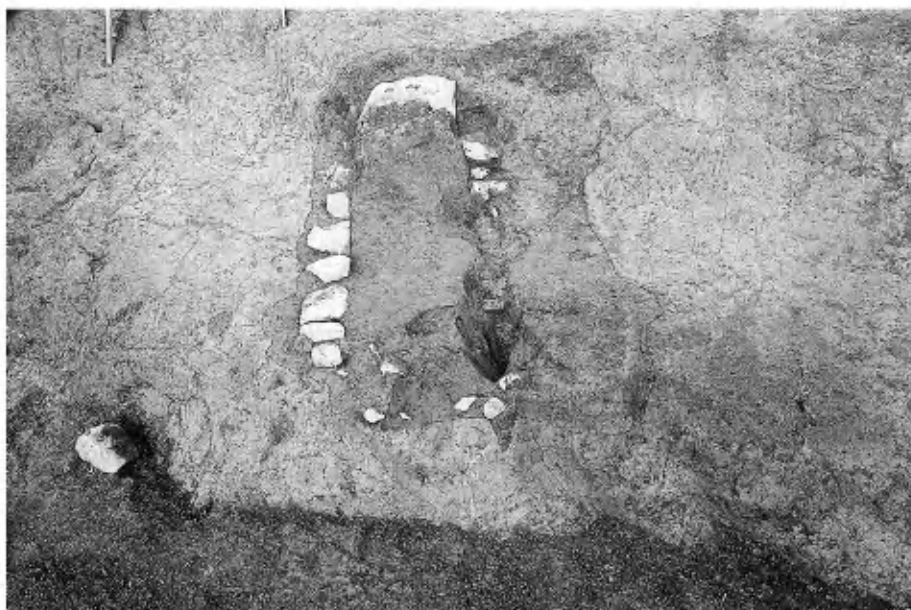
2 今岡 11 号墳 (西から)



1 今岡 12 号墳 (南から)



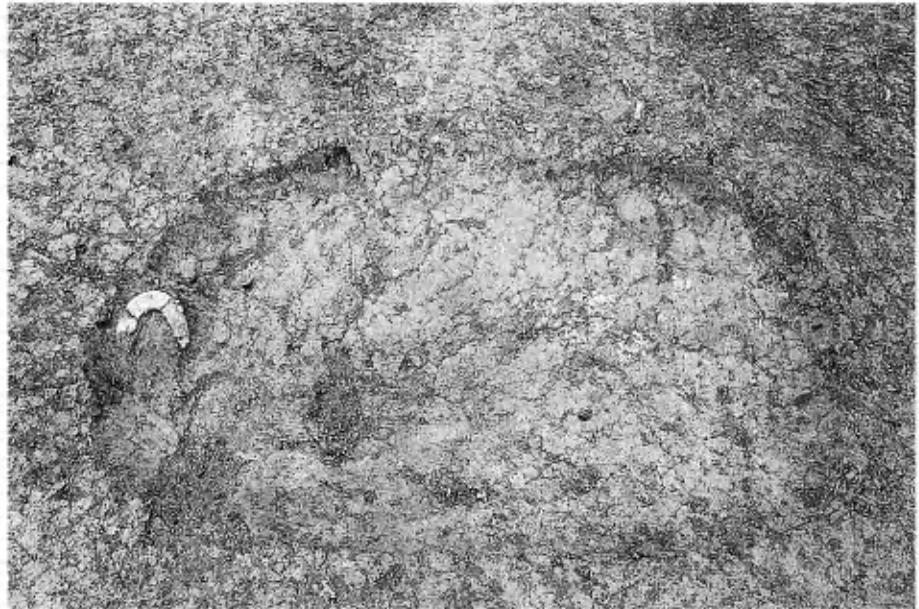
2 今岡 12 号墳 (南から)



今岡 12 号墳  
調査過程 (南から)



1 土墳墓 1 (西から)



2 土墳墓 2  
(南東から)

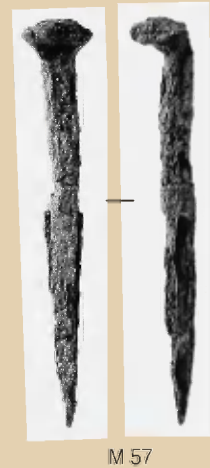
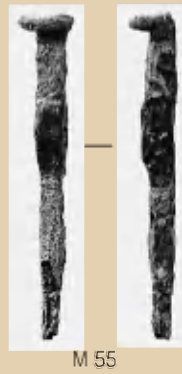
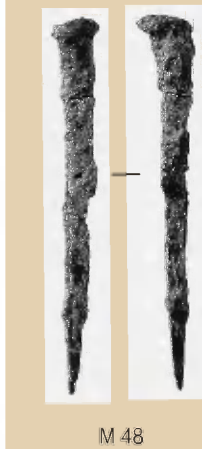
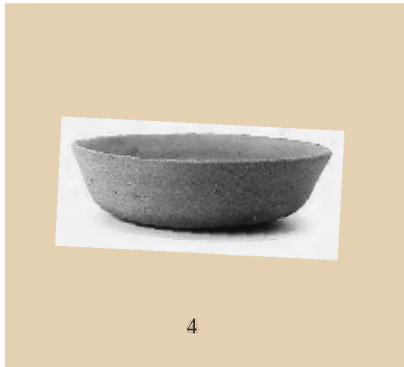
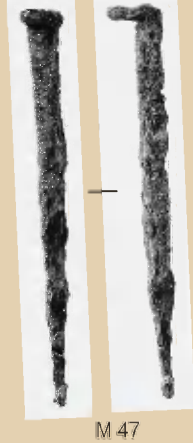
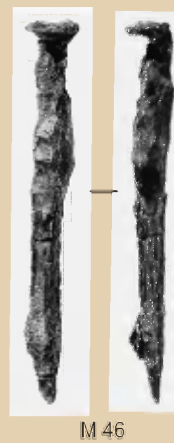
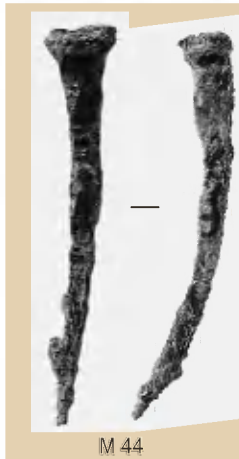


3 土墳墓 3 (東から)





今岡 10 号墳出土遺物（鉄剣・鉄刀・鉄鏃・鉄斧）



1 今岡 11 号墳出土遺物 (須恵器・鉄鏃)

2 今岡 12 号墳出土遺物 (須恵器・鉄釘)



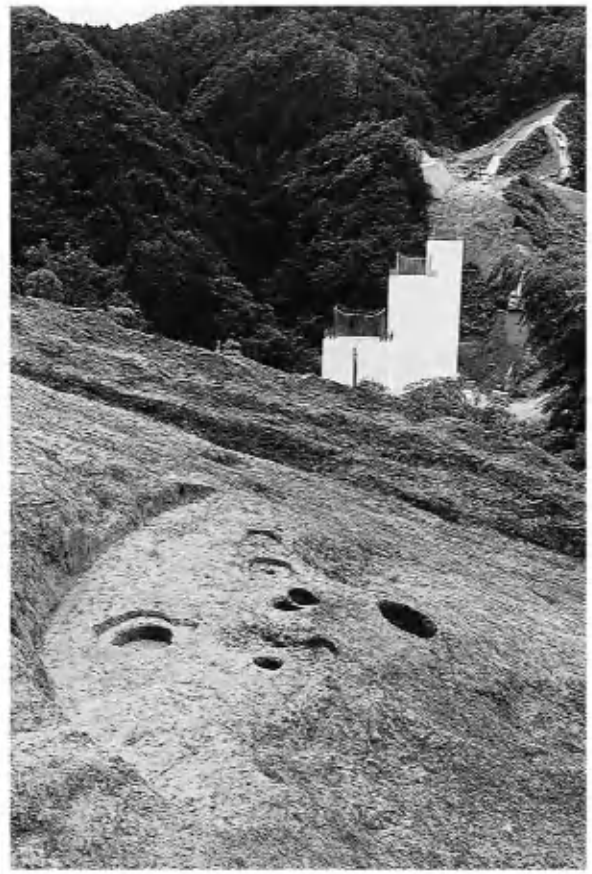
今岡7号墳・土墳墓1～3出土遺物（須恵器・管玉・鉄鋤先・鉄刀）



1 調査地遠景（南上空から）



2 竪穴住居 1（北から）



3 竪穴住居 2（北西から）



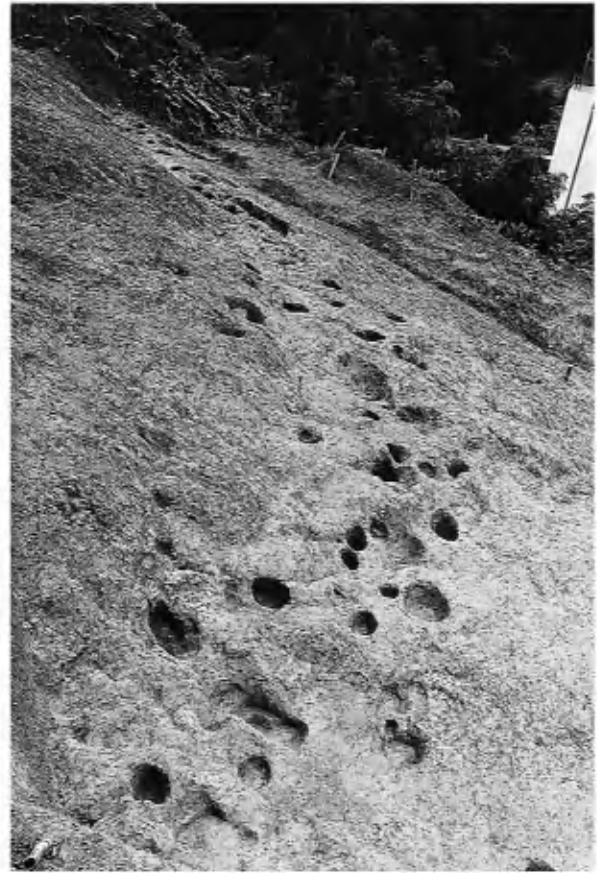
1 豎穴住居 1 (南から)



2 豎穴住居 3 (南から)



1 段状遺構 1 (北東から)



2 段状遺構 2 (北西から)



3 土壇 1・2 (南から)



4 土壇 7 (南東から)



1 弥生土器 (壺・甕・鉢)

2 鉄器 (鉋)・ガラス小玉

# 報告書抄録

ふりがな	やわたやまいせき	やわたやまみなみいせき	やわたさんえんみょうじあと	おききいせき	なかもろBいせき	あながさこいせき	あながさこふん
書名	八幡山遺跡	八幡山南遺跡	八幡山門明寺跡	尾崎遺跡	中町B遺跡	穴が途遺跡	穴が途古墳
ふりがな	いまおかDいせき	いまおかけうざんいせき	いまおかこふんぐん	たかおかいせき			
書名	今岡D遺跡	今岡中山遺跡	今岡古墳群	高岡遺跡			
副書名	中国横断自動車道姫路鳥取線（鳥取自動車道）建設に伴う発掘調査						
シリーズ名	岡山県埋蔵文化財発掘調査報告						
シリーズ番号	213						
著者名	上椋 武・福田正継・平井泰男・浅倉秀昭・岡本寛久・内藤善史・弘田和司・澤山孝之・氏平昭則・物部茂樹 小嶋善邦・岡本泰典・重根弘和・米田克彦・石田爲成・山崎孝盛・上西高登						
編集機関	岡山県古代吉備文化財調査センター						
所在地	〒701-0136 岡山市西花尻1325- 3 TEL.086-293-3211 <a href="http://www.pref.okayama.jp/kyoiku/kodai/kodaik.htm">http://www.pref.okayama.jp/kyoiku/kodai/kodaik.htm</a>						
発行機関	国土交通省岡山国道事務所 岡山県教育委員会						
所在地	〒700-8539 岡山市富町2丁目19-12 TEL.086-214-2220 〒700-8570 岡山市内山下2-4-6 TEL.086-224-2111						
発行年月日	西暦2008年3月31日						

所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 (m <sup>2</sup> )	調査原因
	おかもやまけんみまさかし 岡山県美作市	市町村	遺跡番号					
やわたやまいせき 八幡山遺跡	ふるまち 古町	33215	-	35° 7' 42"	134° 19' 50"	2006. 7. 1 ~ 2006.11.30	2,300	中国横断自動車道姫路鳥取線（鳥取自動車道）建設
やわたやまみなみいせき 八幡山南遺跡	ふるまち 古町		-	35° 7' 41"	134° 19' 50"	2004.12. 2 ~ 2004.12.16	375	
やわたさんえんみょうじあと 八幡山門明寺跡	ふるまち 古町		332150014	35° 7' 40"	134° 19' 46"	2004.11. 1 ~ 2004.12.27	400	
おききいせき 尾崎遺跡	ふるまち 古町		332150018	35° 7' 6"	134° 20' 3"	2005. 4. 18 ~ 2005.9.30	6,220	
						2006. 4. 7 ~ 2006.12.27		
なかもろBいせき 中町B遺跡	いまおか 今岡		332150029	35° 6' 28"	134° 19' 40"	2004. 4. 8 ~ 2004.12.24	6,100	
あながさこいせき 穴が途遺跡	いまおか 今岡		-	35° 6' 21"	134° 19' 53"	2005.10. 1 ~ 2005.12.27	1,900	
						2006. 4. 7 ~ 2006. 5.31		
あながさこふん 穴が途古墳	いまおか 今岡		332150037	35° 6' 21"	134° 19' 53"	2005. 4. 8 ~ 2005.10.14	610	
いまおかDいせき 今岡D遺跡	いまおか 今岡		332150055	35° 6' 17"	134° 19' 55"	2005. 4. 7 ~ 2005.12.27	2,700	
いまおかけうざんいせき 今岡中山遺跡	いまおか 今岡		-	35° 6' 12"	134° 19' 55"	2004. 8. 30 ~ 2005.11.10	940	
いまおかこふんぐん 今岡古墳群	いまおか 今岡		332150050	35° 6' 12"	134° 19' 55"	2004. 8. 30 ~ 2005.11.10	300	
		35° 6' 17"		134° 19' 55"	2005. 4. 7 ~ 2005.12.27			
たかおかいせき 高岡遺跡	みやもと 宮本	-	35° 5' 53"	134° 20' 13"	2005. 6. 1 ~ 2006. 8.31	1,000		



所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
八幡山遺跡	集落	弥生時代	竪穴住居・段状遺構	弥生土器・石製品・玉類	
		奈良時代	火葬墓・溝	須恵器・鉄滓	
八幡山南遺跡	集落	奈良時代	掘立柱建物・土壌製鉄関連遺構	須恵器・鉄製品・鉄滓	
八幡山円明寺跡	寺院	室町・江戸時代	掘立柱建物・溝池状遺構・土壌	弥生土器・須恵器・丹波焼石製品・金属製品	
尾崎遺跡	集落	弥生時代・古墳時代	竪穴住居・土壌	弥生土器・土師器・須恵器 石製品・金属製品・土製品	破鏡
		奈良・平安時代	掘立柱建物・火葬墓 土器棺・炉・焼土面	土師器・須恵器・緑釉陶器 硯・焼塩土器・石製品	石帯・焼塩土器
		鎌倉時代	掘立柱建物・土壌墓 柱穴列・土壌	土師器・須恵器・青磁・白磁 勝間田焼・石製品・土製品	赤間硯
中町 B 遺跡	集落	弥生時代	竪穴住居	弥生土器・石製品	
	道路	奈良時代	道路遺構		
穴が谷遺跡	集落	弥生時代	竪穴住居・段状遺構	弥生土器・石製品・土製品	円筒形土器
穴が谷古墳	古墳	古墳時代	横穴式石室・土壌墓	須恵器・金属製品・玉類	銀装円頭大刀・埴木玉
今岡 D 遺跡	集落	弥生時代	竪穴住居・段状遺構	弥生土器・石製品	
今岡中山遺跡	集落	弥生時代	竪穴住居・段状遺構	弥生土器・石製品・金属製品	
今岡古墳群	古墳	古墳時代	横穴式石室・土壌墓 木棺直葬	須恵器・金属製品	
高岡遺跡	集落	弥生時代	竪穴住居・段状遺構 土壌	弥生土器・金属製品・玉類	

要 約	八幡山遺跡	丘陵尾根上に立地する弥生時代中期後半から古墳時代初頭の集落遺跡である。集落は円形・方形竪穴住居、段状遺構から構成されていた。また、火葬墓や溝など古代の遺構も見つかっている。
	八幡山南遺跡	弥生時代の集落跡、古代の製鉄遺跡が見つかった。弥生時代の遺構は段状遺構、土壌のみである。古代では製鉄関連遺構や掘立柱建物が検出されており、砂鉄製錬滓が出土している。
	八幡山円明寺跡	掘立柱建物、池状遺構、土壌、溝などが見つかかり、絵図や平面図との対比や石像仏の存在などから、1867年に焼失した円明寺に比定された。
	尾崎遺跡	縄文時代から近世におよぶ複合遺跡で、集落の形成は弥生時代以降である。集落規模は古代以降に拡大する。古代には規則的配位の掘立柱建物や火葬墓、土器棺、炉跡などが見つかかり、丹塗土師器、緑釉陶器、西播磨産須恵器、円面硯、転用硯、焼塩土器、石帯が出土した。公的機関の存在が示唆される。
	中町 B 遺跡	弥生時代の集落と古代の道路遺構、中世の集落が見つかった。古代道路遺構は播磨国佐用郡と因幡国府を結ぶ「因幡道」に比定された。中世には道路遺構は廃絶し、集落が形成された。
	穴が谷遺跡	尾根筋の竪穴住居と斜面の竪穴住居、段状遺構、土壌から構成された弥生時代の集落跡である。土壌からは円筒形土器が出土。また、播磨地方や西生駒産の土器も搬入されていた。
	穴が谷古墳	左片袖式の横穴式石室を内部主体とする円墳である。須恵器や鉄製武器、馬具、装身具類が出土しており、石室や出土遺物から6世紀中頃に比定される。鉄製武器には銀装円頭大刀1振が含まれる。
	今岡 D 遺跡	舌状丘陵に立地する弥生時代後期の集落跡である。集落は竪穴住居や段状遺構、土壌から構成されていた。また、古墳時代の土壌も存在する。なお、古墳時代には古墳や土壌墓が築造されていた。
	今岡中山遺跡	弥生時代後期の集落、古代の集落を確認した。弥生時代の集落は竪穴住居、段状遺構、土壌から構成される。古代遺構でも竪穴住居が見つかった。なお、古墳時代には古墳が築かれていた。
	今岡古墳群	12基からなる古墳群のうち8基が調査対象で、5基の主体部が明らかとなった。10号墳は割竹形木棺を用いた方墳と判明した。鉄刀や鉄剣、鉄鏃、鉄斧が出土した。5世紀代と考える。7・11・12号墳は横穴式石室を内部主体とする。須恵器や鉄器が出土し、いずれも7世紀代に比定される。周辺では土壌墓も検出された。
高岡遺跡	丘陵上に立地し、南側平地からは比高差50m以上を測る。弥生時代後期の集落跡で、竪穴住居や段状遺構、袋状土壌が見つかった。弥生土器や鉄器、ガラス小玉が出土したが、石器は出土していない。	

岡山県埋蔵文化財発掘調査報告 213

八幡山遺跡  
八幡山南遺跡  
八幡山円明寺跡  
尾崎遺跡  
中町B遺跡  
穴が途遺跡  
穴が途古墳  
今岡D遺跡  
今岡中山遺跡  
今岡古墳群  
高岡遺跡

中国横断自動車道姫路鳥取線  
(鳥取自動車道) 建設に伴う発掘調査  
(第2分冊)

平成20年3月19日 印刷

平成20年3月31日 発行

編集 岡山県古代吉備文化財センター  
岡山市西花尻1325-3

発行 国土交通省岡山国道事務所  
岡山市富町2丁目19-12  
岡山県教育委員会  
岡山市内山下2-4-6

印刷 サンコー印刷株式会社  
岡山県総社市真壁871-2